續々群書類從

第十四

續々群書類從第十四

例言

一本篇には歌文部の首卷として、風葉和歌集以下十七種を收む、

一風葉和歌集二十卷　古き物語の歌を、勅撰集の躰に、類聚したるものにして、龜山天皇文永八年に成れる事、序文に見えたり、但引用したる物語中、既に散逸して、今傳らざるものあれども、幸本書によりて其書の一斑を知り得らるれば、文學上價値尠からざるものといふべし、丹鶴叢書本を底本として、黑川眞道氏藏村田春門校合寫本を以て校訂す、

一新撰六帖題和歌六卷　本書は或は略して、單に新撰六帖ともいふ、衣笠内大臣家良、前大納言爲家、九條入道三位知家、前左京權大夫行家、(信實)入道左大辨光俊の五歌人、各古今六帖の題によりて

詠出し、互に評點を加へたるものにして、後嵯峨天皇寛元二年に成れり、流布板本を底本として、黑川氏藏狩野望之、清水光房の校合本を參酌して採收す、

一千五百番歌合二十卷　本書は土御門天皇建仁元年、後鳥羽上皇を初め奉り、後京極攝政良經、內大臣通親、權大納言忠良、其他俊成、定家、家隆、雅經、慈圓、顯昭等の歌人、總て三十人、各一百首の和歌を詠出し、千五百番歌合を催し、また後鳥羽上皇、後京極攝政、內大臣通親、俊成、定家等凡て十人、判者となりて部を分ちて各判詞を加へたるものなり、古來歌合中の歌數の多きものなり、流布板本を底本とし、圖書寮藏寫本を以て校訂す、

一集外三十六歌仙一卷　本書は二十一代集の載せざる歌人、三十六人を、後水尾上皇の撰ばせ給ひて、東福門院の御屏風の色紙に、押させ給ひしものといふ、寛政九年板を底本とし、黑川氏藏屋代

弘賢校本により校訂す、

一慶長千首一巻　本書は慶長十年禁裏御會の歌にして、後陽成天皇を初め奉り、八條宮智仁親王、近衞信尹、中院通勝、烏丸光廣、三條西實條等三十七人の歌、千首を集めたるものなり、黑川氏藏寫本を採收す、

一沙彌惠空百首一巻　惠空は九條植通の法名なり、本書は天正十八年八十四歳の作にして、巻末に春日若宮に奉れる願書は、歴史上參考となるものなり、但公の法名は公卿補任、諸家知譜拙記等に、行空に作れど、後に惠空と改められたる事、諸家傳幷に本書に據りて知るべし、黑川氏所藏影寫本を採收す、

一天正十六年正月聚樂亭御會御歌一巻　本書は豐臣秀吉聚樂亭落成せしにより、一條內基、二條昭實、近衞信輔、菊亭晴季、細川玄旨、前田玄以、法橋紹巴等二十人を招きて、歌合を催したる時の歌を

集めたるものなり、黑川氏藏本を採收す、

一文祿三年吉野山御會御歌一卷　本書は文祿三年二月、豐太閤吉野山に於て觀櫻會を催し、太閤自詠の歌及席に侍せし秀次、菊亭晴季、浮田秀家、前田利家、伊達政宗、織田常眞、細川玄旨、其他人々詠出せし歌を集めたるものなり、太閤記所載のものとは、異なる點あり、高臺寺藏板本を採收す、

一後柏原院御日次結題一卷　本書は後柏原天皇、侍臣と共に永正六年九月九日より、同年十二月二十日まで、日課の御歌千六百首を揭げたるものなり、本書は正德六年板にして、山崎弓束氏所藏、田中大秀の遺書なり、大秀の本書を得たりしことは、奧書に記されたるが如し、

一後水尾院御集一卷　御集の類本、二三にとゞまらず、されば其內御歌の最も多き本を收めまゐらすることゝし、黑川氏藏寫本を

採收す、

一後十輪院内大臣詠草一卷　中院通村の詠草なり、公は也足軒通勝の子にして、和歌を以て後水尾上皇の寵遇を蒙る、出家して後十輪院と稱す、本書内閣文庫所藏の寫本を底本とし、文學博士本村正辭氏藏本を以て校訂採收す、

一爲兼卿家集補遺一卷　爲兼卿集は、續群書類從第四百三十二に二種採收せり、こゝには北川眞顔の編輯せる、文政元年板の爲兼卿家集の内、補遺を採收す、

一惺窩先生倭謌集五卷　藤原惺窩の和歌を集めたるものにして、卷尾に君臣之事、父子之事、兄弟之事、朋友之事、嫡子幷庶子之事、女子之事、妾婦之事、交隣國之事、隱居之事等の九條の論文を添へたり、こは後陽成天皇の勅問に對して、奉答せしものなる事、與書に記せり、本書板本を採收す、

一衆妙集一巻　細川玄旨法印の詠歌を、曾孫丹後守行孝の集めたる者、法印は武門に生れ、亂世に人となりたれど、斯道に熱心にして、古今傳授を受け、朝野景慕する處たり、卷尾に飛鳥井雅章の寛文十一年の奥書ありて、衆妙集の書名は後水尾法皇より賜はりたる由を記せり、但卷末に九州道の記、及東國陳道記あれど、正編類從第三百卅八、第三百卅九に收めたるを以て省きたり、本書彌富濱雄氏所藏寫本を底本とし、中山速男藏本を以て校訂して採收す、

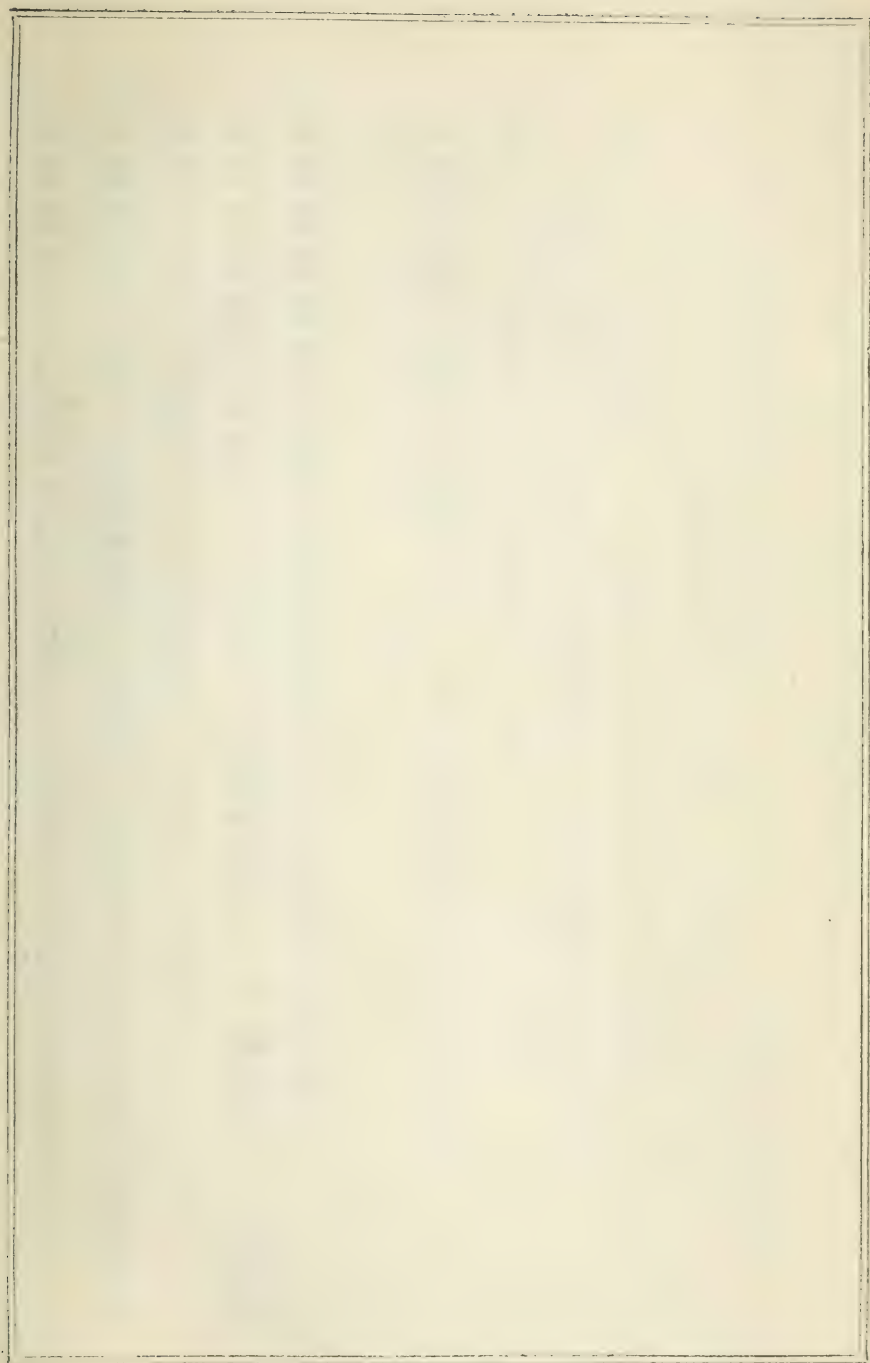
一草山和歌集一巻　深草の元政の和歌を集めたるもの、元政は彦根侯の士、年廿五にして出家し、日蓮宗の僧となり、深草に住す佛乘は更なり、和漢の學に通じ、世に渇仰せらる、寛文八年寂す、本書は寛文十二年板を採收す、

一梶の葉三巻　京都祇園の梶女の歌集なり、梶女は茶店の女にし

て、寶永中の人、詠歌を以て名あり、本書寶永四年板を採收す、

一佐遊李葉三卷　京都祇園の百合女の歌集なり、百合女は梶女の養女にして、亦名高し、本書享保十二年板を採收す、

本編は畠山健氏監修の下に成り又彌富濱雄氏は、秘藏の本を貸與し、或は材料選擇に就きて補助せられたり、茲に之を謝す、

明治四十年五月

續々群書類從第十四歌文部一

目錄

續々群書類從第十四歌文部一目錄終

續々群書類從第十四

歌文部 一

風葉和歌集

やまとうたはやくもたついつもやへかきにはしまりならのはの名におふ宮にあつめられしよりことのはしのたのもりのちえよりもしけくえらはるゝこともうらのはまゆふたひかさなりぬるにつくりものかたりのうたといふものなむいつはりなれたる人のいひ出たることにのみなりてまめなる所にはほにいたすへきにもあらさめれはわかのうらのいそかくれにかきすつるもくつむなしくつもりさか山のたにかけにときしらぬうもれ木くちはてぬへくなりにたりそのこゝろを思へはかゝるへくもなむあらぬ世の中にある人なすことしけきものなれはみるにもあかすきくにもあまることをさたかにその人とはなけれとのちの世にいひつたへてよきをしたひあしきをいましむるたよりになりぬるはかりしるしおけるなりけれはひたふるにそらことゝいひはてむもことの心たかひぬへくやなかにも歌のさまを思ふに花の色にへたつる霞をうらみおなしみかきに鳥のねをまちあやめくさをひきてうきねをかこちなてしこをみて露けきをそへふるさとのをきの葉を思ひて夕風にことつけ雲ゐをわたるかりのねにともをしたひ霜かれゆく草のはらにとふへきかたをうしなひをしほ山の雪にふかきあとをたつねみねのあさひに千世をちきりうつせかひのむなしきからをなけくこゝろこと葉おほくはそへうたのすかたにかなひてうたのおやなるなにはつのなかれにかよへれはほかにはあさき言葉をあらはして花鳥のいろをもねをもすてすうちにはふかきこゝろをこめてをとこ女のこひもうらみもしらせんとよめるなり夏ころもたゝひとへならむよりもうたかたのあはれなるこゝろそひてやあらんかゝるにいまわか君あめのしたのくにのはゝとあふかれましま

してはたとせあまりいつかへりになりぬるにもゝしきのはるのえた〳〵さきつゝく色にたのしひはこその山の秋の月かなしさゝそふひかりをもてあそひましますひまにもろ〳〵のことをすてたまはぬあまりいにしへ今のものかたりのなかよりかきあつめられにける歌を入しれぬみ山かくれにしのひてかよふ秋かせのふきおくれるにおとろけはこれをもとゝしてさらにえらひそへまきをわかちことはをとゝのへてたてまつるへきおほせことになんありけるあら小田のかへす〳〵もかたいとのおもひよらぬをいなふねのいなともはたかしこけれはかりのつらのかきつらねぬるなるへしうくひすの初音をきくよりはしめて神山のあふひをかさし玄かのねにふかきあはれをしりよはのしくれをおもひやるにいたるまてまた神佛のちかひわかれたひのこゝろあしたの露ゆふへの雲に世をかなしひちとせの鶴ふたはのまつに君をいはひなみたの色を袖にしのひつらさにそへてうきをなけきいとたけの聲におもひをのへおやこのみちに心をまとはしむるは長歌物の名をり句れんかなとやうのくさ〳〵のすかたまてすへてちうたあまりをあつめてはた巻とせりかのむくさのはしめによせて風葉和歌集といふさてもうつほのなすこそ神もいへるうたは拾遺集にいり（拾遺集戀五此集戀二思ふ事なすこそ神もかたからめしはしわするゝ心つけなん）すみよしのこれを入あひの連歌とは小一條院の御歌とかきこゆ（住吉物語あかつきのかねいおとこそきこゆなれこれを入あひとおもはましかは後拾遺集雑二云女いもとにてあかつきかれな聞て小一條院）かゝるたくひおほかれといつれもものかたりやさきならむとてもるへきならねは今これをのそかぬなるへしこのものかたりなからのはしのふるくつくれるもあしかきのちかき世にいてくるもはまのまさこ數つもりしきのはねかきかきあへぬまゝによもきかしまにあらねとなのみをきゝてもとめえぬもおほく花のそのにいりなからたをりつくさぬ木すゑもあれは身のあやまりをのこし人のそしりをおはむことのいかるゝかたなく思ひしるものからかくこのたひあつめえらはれてよし野のたきのたえすみつかきのひさしきよにとまれらはものかたりをつくれる人はかくれてもあらはれてもこのことのときにあへるをなんよろこひいまの世にみおよひてきゝつたへむ人もはしめてなきあとをおこされぬれはしきしまのみちのさかゆくことを思ひて大空の月日のかけも

のとかにめくりよものうみのなみのおともしつかな
らんことをねかはさらめやふみなかしといふとしの
やとせふりみふらすみしくるゝころこれをたてまつ
りぬるとなり

風葉和歌集巻第一

春上

はるたちける日よませたまひける
　　　　　　　　　　　なみのしめゆふみかとの御歌

たちかはる春のしるしにけふよりは初鶯よこゑなをしみそ

冷泉院行幸ありて御あそひともはへりけるついてによま
せさせたまひける　　　　　源氏の朱雀院のおほむ歌

少女
こゝのへなかすみへたつるすみかにも春とつけくる鶯のこゑ

左のおほいまうちきみかすかにまうてゝこれかれうたよ
み侍けるにあしたの霞といふことをよめる
　　　　　　　　　　　うつほの右少将仲頼

梅花上
鶯の羽風をさむみかすか山かすみの衣けさはたつらむ

大納言たゝよけの七十賀なむすめのし侍ける屏風の歌
　　　　　　　　　　　よみ人しらす　おちくほ

物語下
あさほらけかすみてみゆるよし野山春やよのまに越てきぬらん

たいしらす　　　　　　よみひとしらすまよふ笛のね

うちきらしさえし雪たに立かへりのとかに霞む春の空かな
　　　　　　　　　　　いせをの一條院女三宮

はるなからまたふるとしのつらゝのみむすほゝれたる谷の下水

をのといふところにすみ給けるころ子日に雪のふり侍け
れは　　　　　　　　　はしたかの女院

小松原かすみはかりやたなひかむ雪かきわくる人しなけれは

子日に中宮のおほむかたよりひわりこなとたてまつるとて五葉の枝にうつる鶯に　源氏のあかしのうへ

（初音）とし月をまつにひかれてふる人にけふうくひすの初音聞せよ

御かへし　中宮

（同上）引わかれとしはふれともうくひすのすたちし松のねを忘れめや

子日に野にいてゝよみ侍ける　しのふもちすりの右大臣

君か世ないとゝものへにひく松はねさへそふかきためし也ける

たいしらす　しくれの源大納言家宰相

きみか爲春のおほいなしめたれは千世のかたみにめつる若なそ

山さとにすみける比いとあやしき女とものわかなつむをみて　はまゆふの兵衛

霞たつのへの心もはつかしく何いまさらにわかなつむらん

右大將なかたゝうちにさふらひけるにふちつほの女御しろかねのひさけにわかなのあつものいれてくろはうをふたにおほひてとるところに女のわかなつみたるかたつくりたるをつかはし侍けるにかきつけ侍る　うつほのそわうのきみ

（藏開中）君か爲春日の野への雪わけてけふのわかなをひとりつみつる

うきふねのかたへわかなつかはしけるに　源しのなのゝ尼

（手習）山さとの雪まのわかなつみはやし猶おひさきのたのまるゝ哉

うきふねのきみ

（同上）雪深き野へのわかなも今よりは君か爲にそとしもつむへき

かすかの歌のなかに　うつほの左の少將かすさね

（梅花笠）みわたせは雪ふる山もある物を野への若なの老にける哉

右大將なかたゝ

（同上）雪とくる春のわらひのもゆれはやのへの草木のけふりいつらむ

六條院にわたり給へるに雪ふりける日心みたるゝけさのあわ雪ときこえさせ給へりけるに　源氏の二品内親王

（若菜上）はかなくてうはの空にそきえぬへき風にたゝよふはるのあわ雪

よそなからたにけちかきさまならはと思ふ人につかはしける　ひいこかしつくの頭中將

霞たにへたてさりせは春の色をよそにみつゝもなくさめてまし

こゝろならすなのにすみけるころをとこの久しくおとつれ侍らさりけれはてならひに　うきなみの藤中納言女

かた／＼におほつかなさもはれやらて霞こめたる春の山さと

にほふ兵部卿のみこはつせまうてのかへさに宇治にとゝまりて侍けるにものゝねともおひかせにふきくるをきゝてかをる大將のはへりけるにつかはしける　源氏の八宮

（椎本）（拾遺　百番歌合四番）山風に霞ふきとくこゑはあれとへたてゝみゆる遠の白浪

春のころ女のもとよりかへりてつかはしける　さゝわけしあさの關白

立いつる山ちをたにもみるへきにつらきは春の霞也けり

かへし　藤宰相のむすめ

おしなへて春の山への空よりもうき身にかかりを霞こめなん

春宮女御宣耀殿にすみ侍けるにつかはさせ給ひける

すゑはの露の皇后宮

九重のおなしみかきのうちなからかすみこめたる鶯のこゑ

むつきのころさとに侍けるにうちよりねくらをこひぬ時のまそなきとのたまはせて侍ける御かへし

あたりさらぬ麗景殿女御

花の枝にねくらうつろふ鶯は思ひもいてしこそのふるすを

たいしらす

はかたゐの侍従

花のえにはやもなかなん鶯の聲につけてそ春もしらるゝ

雲ゐの月の女二のみこ

梅のはなたゝかはかりも匂はなんたにのうくひす今やきなくと

右大将紅梅のをかしきあけほのを見侍けるにうくひすもひとこゑなきたるに　ひちぬいしまの女三宮の中納言

なる人のあたりににほふ梅かゝをあかすとやなくうくひすの聲

右のおほいまうちきみのきちかき紅梅のいとおもしろきをみてまつうくひすのときこえけるかへし

にほふ兵部卿のみこ

紅梅 花のかにさそはれぬへき身なりせは風の便をすくさましやは

六條院のたきものあはせはてゝ御あそひありけるに梅かえなといたしたりけれは

ほたる兵部卿のみこ

梅枝 鶯のこゑにやいとゝあくかれん心しめつる花のあたりに

もろこしにて梅木おほかる山を行て見侍けるにまことにこと木ましらすひとたひにさきわたりけれは

はま松の中納言

物語 白妙にふりつむ雪とみえつるは梅咲山のとほめ也けり

むすめのことを左大将にほのめかし侍とて

女すゝみのさきの右大臣

しる人にこゝろへき色にあられともみせはや宿の梅の梢を

かへし

なりしらぬ心やいとゝまとひなん木たかきやとの梅の匂ひに

女のもとにてのきちかき梅をゝりて

ひちぬいしまの關白

さき匂ふかをなつかしみ梅花ちとせの春を君とこそみめ

かへし

中務卿のむすめ

風ふけはさそはれぬへき梅花たゝかはかりのえにこそ有けれ

玉かつらの内侍のかみまうて侍けるによませ給ひける

源氏の冷泉院御歌

梅枝 拾 百番歌合二番 九重に霞へたては梅のはなたゝかはかりもにほひこしとや

梅の花のしろきくれなゐあはせ侍けるに紅のかたにてよめる

梅つほの宮君

やへさけとにほひはそはす梅の花紅ふかき色そまされる

女に梅花をゝりてみせ侍とて　あふにかふる三位中将

紅に匂にさりせは梅花ふかき心をよそへましやは

人のもとへたきものつかはすとて紅梅のえたにつけられける

あさくらの皇后宮

なれしふの袖の匂ひによそへつゝなれは露けき宿の梅かえ

御かへし

皇后宮大納言

よそへつゝなりたる梅の花みれは過にし春そいとゝ戀しき
　關白のきちかく梅を見侍ていにしへは先そ戀しきと申侍
　けれは　　しのふくさの入道一品宮
としをへてかはらぬ梅の匂ひにも猶いにしへの春そ戀しき
　梅のはの花のいろこき枝につけて東三條院女御につかは
　させ給ける　　はきにやとかるの中將
梅花雲ゐになるゝ色よりもともにみしよの春そこひしき
　御かへし
なかむらん雲ゐの花に思ひやれみしよ戀しきもとの梢を
　後夜におかたてまつるとてつまちかき紅梅を折らすれは
　かことかましくちるにあかさりし匂ひも思ひいて侍けれ
　は　　うきふねの君
手習　百番歌合九十二番
袖ふれし人こそみえね花のかのそれかと匂ふ春の明ほの
　こその春もろともに月を御らんしける女のもとに又のと
　しつかはされ侍ける　はきにやとかるの御門の御うた
月やあらぬ春やみしよのそれなから詠めしのみや忘れはつらん
　中宮さとにおはしましける比たてまつらせ給ける
　　おやこの中のみかとの御歌
なかむともおなし心にたれかみむ思ひくまなき春のよの月
　御かへし
なかむれと心ははれす春のよのつきせす物を思ふ身なれは
　たいしらす　　いまとりかへはやの太政大臣四君
物語
春のよもみる我からの月なれは心つくしのかけとなりけり
　　あまのもしほひの大僧都

てりもせぬ春のならひのいとゝまたくもり果ぬる袖の月影
　女のもとよりかへりてつかはしける　　なんなすゝみの右大將
心さへやかてそくらす春霞かすみわけつる明ほのゝそら
　もの思ひけるころあけほのゝ空をなかめて　　ねさめの前關白中君
物語
いつとたにうき身に思ひわかれぬにみしにかはらぬ春の明ほの
　よし野の山におこなはせ給ひける比よませたまひける
　　風につれなきよしのゝ院御歌
ふりにけるむかしをみるも哀也よし野の宮の春の明ほの
　かすかの歌の中にかりのつらといふ心を
　　うつほの源のおほきおほいまうち君
梅花笠
ふるさとにともに殘らすゆく雁はこゝにて雲をすくさゝらめや
　また御らんせられんこともかたかりける女のもとよりい
　ておはしますにかへるかりのなくをきかせ給ひて
　　よその思ひのみかとの御歌
いまはとてこし路にかへる雁かねも猶あき霧の空をまつらん
　源氏の大將と申ける時つの國すまといふところにこもり
　おはしましけるにちしのおとゝ宰相中將に侍りける時た
　づねまゐりてかへり侍けるあさほらけのそらに雁のつれ
　てわたるによませ給ける　　六條院御歌
須磨　拾　百番歌合[illegible]番
ふる郷をいつれの春か行てみむうらやましきはかへる雁かね
　玉かつらの尚侍ひけくろの關白のもとにわたりてのちあ
　めいたうふる日つかはさせ給ける

新拾 かきたれてのとけきころの春雨にふる郷人をいかにしのふや

よみ人しらすまよふきんのね

わかのうらの柳をよめる

きしちかみ霞も浪もたちよれはみたれすみゆる青柳の糸

あらはあふよの内大臣

人のかたらへりける女をしのひてとりこめて侍けるころ
にはに柳のうちなひくをみて

つねよりもいとゝみたるゝ青柳はもとみし人に心よるらし

四季ものかたりの中に　　あなやきのみや

あたにちる花に契をむすひ置て果はみたるゝ青柳の糸

風葉和歌集巻第二

春下

左のおほいまうち君春日にまうてゝこれかれ歌よみ侍け
るに花をいさなふといふ心を　　うつほの中務卿親王

わか宿にうつしてしかなのへに出てみれともあかぬ花の匂ひを

春のころ山さとにて見そめて侍ける女を思ひやりて

かはきりの内大臣

たちかくす霞はとほくへたつれと花のありかに心をそやる

中宮清涼殿の花御覧しける明ほのを見たてまつりて

あまのかるもの權大納言

拾 百番歌合九十八番
九重の霞のまより花をみて哀こゝろのみたれそめぬる

心にもあらぬことのそのよになりにけれとことにいそき
たゝれすなかめ侍て　　しのふくさの關白

春風はおもはぬかたに吹よれと心うつらぬはなのいろかな

右のおほいまうちきみのもとにおひすみ侍ける北關白の
かたの花のさかりをもろともにみてたつとてよみはへり
ける　　さゝわけしあさの中納言

のとかにそきみはみるへき春霞たつ空もなき花のあたりを

春の除目にかすより外の權大納言になりたる人のまてきこ
こ侍けるに　　ひちぬいしまの式部卿のみこ

春をたにしらて過ぬるわか宿に匂ひまされる花をみる哉

花のさかりにちゝおとゝよはひはふりぬなと申侍けるに

心ありて風ものとけきやとからや花も盛ににほふなるらん

たゝえのゐまの皇太后宮

法皇六十御賀白河院にておこなはれ侍けるによせたま
ひける　　いはてしのふの嵯峨院御歌

君かすむなかれひさしき白河の花ものとけき匂ひ也けり

法皇の御歌

春をへてかひある花の光とはふりにし物たゝら河の水

みかとの御うた

山さくら木たかき峰に咲のみやふるにかひあるみゆきなるらん

弘徽殿の御まへにうゑられて侍けるさくらの咲はしめた
るに宴せさせ給ひけるによみ侍ける

かくれみのゝ二のみこ

君か世ののとけき春に咲そむる花のときはゝ今そみるへき

左衛門督

花にあかて何なけきけん君か世ののとけき櫻有ける物を

大納言たゝよりの七十賀の屏風にさくらのちるをあふき（おちくほ）
てたてる人かけるところ　　よみ人しらす

物語三
さくら花ちるてふことはことしより忘れて匂へちよのためしに

南殿のさくらを一枝大将のもとにつかはさせ給ふとて
ゆくへしらぬのみかとの御歌

九重の花のさかりを見にくやとをしき匂ひをしるへにそやる

この花を御らんして　　白河院御歌

われのみそ有しにもあらす成にける花はみしよに變らさりけり

参りて奏し侍ける　　左大将

百敷はたと〳〵しくもあられとも花のしるへはうれしかりけり

はるの院のいそちの御賀に行幸侍けるにうへに御かはら
け参らすとて　　みかきかはらの入道式部卿親王

さくら花匂ふは春ときゝしかとかゝるみゆきのけふはなかりき

とらせ給ふに　　後はるの院の御歌

こゝそこのよろつよふへき春ことの櫻をかさす花のみゆきよ

南殿のさくらのさかりに東宮二のみこなと花をりてとの
たまはせけるに奉り侍けるをみかとふきくる風もうらめ
しきになさけなしやとの給はせけれは奏しける

みたらしかはの内大臣

ゆくへなき風たにちらす花なれは君か為にはならさらめやは

堀河院東宮におはしましける時櫻につけてうゑおきし人
こなけれはさき匂ふ春のみやまの花もかひなしとの給は
せたりける御かへし

風につれなきの宇治入道關白太政大臣

萬代と祈おきてしはゐる山の花さきそへむ末をこそまて

しら河院の花御らんしに行幸侍けるにあるしの院花みす
はけふのみゆきにおはましやときこえ給ひけれは

行へしられぬのみかとの御歌

花故とあさくや人の思ふらんあるしからなるけふのみゆきを

白河の院おりゐさせたまひてのちこゝのへの花を人のた
てまつれるを御らむして　　雲ゐの月のおほきさいの宮

思ひきやみねの霞も立へたてゝ雲ゐの櫻つてにみむとは

すまにてわかきのさくらほのかに咲そめたるを御らんす

るに一とせの花のえんなとおほしいてられけれは

六條院御歌

新撰 百番歌合九十五番
いつとなく大宮人のこひしきにさくらかさしゝけふもきにけり

にほふ兵部卿宮はつせまうてのかへさにうちにとゝまりて侍けるにおもしろき花の枝をゝりて山のさくらにほふあたりにたつねきておなしかさしをなりてける哉」と侍けれは

宇治の中君

拾本
かさしなる花のたよりに山かつのかきねを過ぬ春の旅人

ふるさとの花おほしいてゝ一條院の中宮にさかきにつけてきこえ侍ける

さころもの齋院

物語四上
時しらぬさかきの枝になりかへてよそにも花を思ひやる哉

女院一條院におはしましける頃南殿の櫻一枝たてまつらせたまひて

いはてしのふのさかの院御歌

九重のにほひはかひもなかりけり雲ゐの櫻君かみぬまは

女院御心とめさせ給ひけるさくらの枝をゝりて院にうつりわたり結ひてのちしのひてたてまつりける

おなし一條院内大臣

思ひいつる人もあらしなふる郷にわすれぬ花の色そ露けき

ひろさはにすみ侍りけるころあさほらけのけしきにもみしよのほと思ひ出られけれは

ねさめのひろさはの准后

拾 百番歌合三番
さき匂ふ花も霞もろともに見しなからなる春の曙

山さとにこゝろほそくて侍けるころ花をみてよめる

けふりにむせふの姫君新宰相

しる人もなき山さとにともとみる花におくれぬ命ともかな

なとこのさくらを一えたおこせて侍けるに

あふきなかしの新中納言（源一本）

あたにのみちりぬへけれは櫻花風につけても物をこそ思へ

返し

宰相中將

あたなりとなにかはなけく色深くのとけき春のかたみとなみよ

有のおほいまうちきみさくらの枝をおこせて侍けるかへりことに

ゆめちにまとふ大納言女

なるからに色やかはらむ山さくらあたにうつろふ花のにほひそ

としのほとなともにけなからむとおほすをんなをかいまみさせたまひて

さころものみかとの御歌

物語四上
をりみはやくちきの櫻行すりにあかぬ匂ひはさかりなりやと

またとしわかゝりける女に給はせける

こゝろたかさの後冷泉院御歌

拾 百番歌合七十四番
花のいろを思ひもわかぬうくひすにかすめわひぬる春にも有哉

せちに思ひける女のあたりにたゝ大かたにてまかり侍けるに花のこすゑに鶯のなくをきゝて

ねさめの關白

物語
わかことや花のあたりにうくひすの聲も涙も忍ひわひぬる

つれなき女のもとにて花のおもしろかりけるをみて

うつほの中納言されたゝ

藤原君
さくら花匂ひこほるゝ木かくれも猶うくひすはなく／＼そみる

をんなのもとよりかへりてつかはしける

なたゝのぬまの右大臣

あかすみる花のあたりは鶯かれのかへる空にもねのみなかれて

　歸鴈を聞てよめる　　うつほの中納言

かへりゆく鴈のは風にちる花をおのかたむけの錦とやみむ

　すゝしの卿のふさあけの家にまかりて人々あそひ侍ける

　に野にいてゝ花をみるとて　　おなし參議良峰のゆきまさ

吹上ノ上
花ちらすかせも心あり駒なへてわかみるのへにしはしよきなん

　修行し侍けるにふきこしといふところの花おもしろかり

　けれは　　あまのもしほ火の大僧都

のこらしなみねのあらしの吹こしにけふは櫻の花と見るとも

　六條院中將と申ける時わらはやみにわつらひ給ひてたつ

　ねおはしましたりけるに　　源氏の北山の上人

若紫
おく山のむろのとほそをまれにあけてまたみぬ花の色をみる哉

　北山にて紫のうへはつかに御らんしそめて歸り給て又の

　日遣されける　　六條院御歌

同上
おもかけは身をもはなれす山櫻心のかきりとめてこしかと

　御かへしまたなにはつをたにはかゝしうつゝけ侍らぬ

　ほとなれはかひなくてなんとて　　按察大納言北方

同上
あらし吹をのへのさくらちらぬまを心とめけるほとのはかなさ

　花のちるころ人のまうてきたりけるに

　　　花さくらなる中將

濱中納物語
ちる花ををしみとめても君なくはたれにかみせんやとの櫻を

　關白中將に侍けるとき左大臣のかつらの山莊の花見にた

　ち入侍けるにともなひてあるしは朝に侍けれはつかはし

　ける　　かつらの兵衞佐

よそ人もうつろふ花を惜む宿にいかにめかるゝあるしなるらん

　　　しのふくさの關白

　のきのさくらを人のをりてみせ侍けれは

かきりありてちるたにをしき花の色を心つからもたをる君哉

　かへし　　中納言

大空の風にまかせてちるよりはをりとめてこそみるへかりけれ

　春のすゑつかた山さとにすみける女のもとよりかへり侍

　けるみちすから引とゝめらるゝこゝちし侍けれは　　河きりの内大臣

ちりまかふ花に心はうつりつゝ家路をさへも忘れぬる哉

　にほふ兵部卿のみこしらかはの院に侍けるに花見にまか

　りてよみ侍ける　　かをる右大將

ちりちらすみてこそゆかめ山櫻ふる郷人はわれをまつとも

　白河の花見ありき侍けるにふる郷の花もゆかしといそき

　歸るとてよめる　　あさつゆのあま

われなから思ひさたむるかたもなしとまらぬ花にうつる心は

　六條院にて池に舟うけて女房あそひ侍ける

　中に　　よみ人しらす源氏

胡蝶
春の日のうらゝにさして行舟はさをのしつくに花そちりける

　ふきあけのはやしの院にて色をいくせる花風にきほひて

　ちりかひこきわたるをふねもひとつにつゝきてみえけれ

　は　　うつほの右少將なかより

吹上ノ上
ゆく舟の花にまかふははる風のふきたのにまたこゝに出けり

花のころ宇治に侍ける女のもとよりみやこにいつとてよめる

つまこひかぬる三位中將

山さくらあかぬにほひをとゝめ置て心にゆかぬ道の空かな

世をのかれ侍らんとて内にまゐりて南殿の櫻のさかりなるをみて大納言にまうし侍ける

ふたはのまつの中納言

ちりぬとも又こむ春は思ひ出よ心とゝめしはなの匂ひを

たいしらす

よみ人しらす　すみやまかくれ

散花はのちの春をもまつものを人のこゝろそなこりたになき

よし野よりいてゝ侍りける比花のちるをみて

はまゝつの飾宮中宮

權中納言この雫のきえさらんにとたのめて侍けるもむなしくて花のころになりてはへりけれは

うきなみの藤中納言の女

きえぬまとたのめし人の名殘とやにはの花にも人をまつへき

わかのうらにて花のちるをよめる

よみ人しらす　すさとふきんのね

咲にほふきしのさくらはうら風にちりても花の淚とこそなれ

四季ものかたりの中に

はるこまの中納言

昔か世のすゑはるかなる春の野につきせすおさゐつゐふちの駒

玉鬘の內侍のかみひけくろの關白のもとにうつろひてのちすみ侍けるかたにわたりたまひて山吹のさかりなるを御らんして

六條院御歌

胡蝶

思にすにゐての中みちへたつともいはてそこふる山吹のはな

前齋院に山吹のえならぬ枝につけてきこえはへりける

ふくらすゝめの左大臣

くちなしのこはえもいはぬ色なれとさしてもいかゝやま吹の花

やまふきのさかりなるところにたちとまりて侍けるにうちわたりにて見侍ける女のもとなりけれによめる

やまふきの三位中將

いはれともやへの山ふき九重になりしよりこゝより思ひそめてき

一條院御くらゐのときほのかに御らんせさせ給てやへ山吹のひらけさして心もとなきをゝりて色まさるらむとのたまはせ侍ける御かへし

あたりさらぬの女院

かすならぬみきはにゝほふ山吹はやへにひとへをないかゝ重ねん

藤の花のえむに侍けるに六條院いまた宰相中將と申ける時きこえ侍ける

源氏の二條院のおほきおほいまうち君

花宴

わかやとの花しなへての色ならは何かはさらに君をまたまし

わかのうらにおはしましけるとき右大將ときこえけるときふちなみのたちかへるへきこゝちこそせねと申侍けれは

まよふきんのねの春宮

日をへつゝたちかへらすは藤浪のまことにふかき色とこりなむ

夕きりの左大臣藤のさかりに致仕のおとゝの家にてあそひなと侍けるに

源氏柏木の權大納言

藤裏葉

たをやめの袖にまかへる藤の花みる人からや色もまさらん

女二のみこにさたまりてのちかのすみ侍けるふちつほの

花のえんせさせ給ひけるに御かさしなりて

かなる大将

宿木
すへらきのかさしになると藤花およはぬ枝に袖かけてけり

みかとの御歌

同上
萬世をかけて匂はん花なれはけふをもわかぬ色とこそみれ

ふきあけにて人々うたよみ侍けるにふちの花を

うつほの紀伊權守

吹上ノ上
藤花かゝれるまつのふかみとりひとつ色もてそむる春雨

四季ものかたりの中に

つくしの木工頭

あかねさす入日の影に色はえてみるもかゝやく岩つゝし哉

かすみの女御

立かへる道もわすれぬ春霞花ちるほとの心つくしに

さかにすみ侍けるにやよひのつこもりころ關白たつねまうてきて惜閑消永日なとうちすし侍けるに

しのふくさの中納言御息所

花もちり春もくれなん古郷になかむる人の心をやしる

やよひの晦の日ふきあけにて春をゝしむ心を人々よみ侍ける

うつほの在原時蔭

吹上ノ上
いつかたに行ともみえぬ春故にをしむ心の空にも有哉

きよはらのまつかた

同上
ゆく春はとむへきかたもなかりけり今夜なからにちらは過なむ

風葉和歌集巻第三

夏

やよひのつこもりのよ右大將御とのいして侍けるをあけはてゝいとまも給はすとてよませ給ひける

よその思ひの御門の御歌

かされつる袖のなこりもとまらしなけふたちかふる蟬のは衣

冷泉院御息所いまたまゐり侍らさりけるにうつきのついたちころに申つかはしける

源氏宰相中將

竹川
花なみて春はくらしつけふよりや花さなけきのしたにまとはん

關白のもとにまかれりけるに右大將のなさなく侍けるをみてにはの櫻のひとむらのこれるをおし折てよめる

しのふくさの宮の中將

さくら花梢に殘るひとむらや過にし春のかたみなるらむ

四季ものかたりのなかに　ほとゝきすのみかとの御歌

立かへりみれともあかす山賤のかきねに浪をかくるうのはな

うの花の女御

御かへし

にほひなきうの花垣の梢には人のこゝろのなみやこゆらむ

大納言たゝよりの七十賀屏風に子規をまてるところ

よみひとしらす

物語二
ほとゝきす待つる宵の忍ひ音はまとろまれともおとろかれけり　おちくほ

夏のはしめつかた夜ふけて中宮のたいはん所にたちより

たりけるに女房のこゑともしけれはよめる

ふせこの頭中将

ねさめする人もあらなん郭公しのひかねたることとかたらはむ

かへし　侍従内侍

しのひねはさてこそあらめ時鳥なへての空にいかゝかたらむ

題しらす　なかれてはやきあすか川の春宮

わひ人の心をやしろ郭公空にともなふしのひねのこゑ

女のもとにひさしくまからて思ひたち侍けるにほとゝきすのほのかになけは

うきなみの權中納言

尋來ぬ我をうしとやしのひねに鳴てまちける郭公哉

こゝろならすみやつかへにたちいてゝ侍けるころ時鳥のなくをきゝて

みれともあかぬの中将

思はすにみ山をいつるほとゝきすいつさと馴し心なるらん

これをたちきゝて　關白

思はすにみやま出しも時鳥かくかたはらん契となしれ

まつりの日近衛つかさの齋院にまゐるをうらやましくみおくらせ給ひてよませ給ひける

さころものみかとの御歌

物語四下 百番歌合九十八番
引つれてけふはかさしゝあふひくさ思ひもかけぬしめの外哉

あふひてふ名をかけてみせなんと申て侍ける女の返し

みかはにさける前關白

拾 百番歌合四十三番
もろ人になへてあふひのなを惜みかけしやけふのかさしなり共

祭の日さきの齋院にきこえ侍ける

しのふくさの中納言

今まてもよそにやはみむ諸葉草そのかみ山になれしかさしを

かへし

もろかつらしめのほかにはなりなから同しかさしを我や掛へき

藤典侍まつりの女つかひし侍けるにつかはしける

夕霧左大臣

藤衣宗
なにとかやけふのかさしよかつみつゝおほめく迄も成にける哉

まつりのころ大將うちへまゐりて侍ける車の中にしのひていれさせ侍ける

宇治の川なみの藤中納言女

名をたにもきかて年ふるくさなれと心にけふはなほそかけつる

あけゆく空にほとゝきすのほのかになくをきかせたまひて

さころものみかとの御歌

物語一上 百番歌合五十五番
よもすからものや思へる郭公あまの岩戸を明かたになく

ほとゝきすのしのひねあらはれてかたらひゐたるこゑも

夏山にあられとうらめしうて　みかきかはらの内大臣

心あらはなのらて過よほとゝきす物思ふとはわれもしられと

ひさしくとはさりける女をたつねてそのなる處にまかれりけるに時鳥のなくを聞て

うきなみの權大納言

なくさむや又もよほすや時鳥物思ふやとにきなく一こゑ

返し　藤中納言女

忍ひあまるこゑをきくにも郭公なくねに誰もおとりやはする

しのひたる女のもとにてほとゝきすの鳴けれは

はまゝつの中納言

物語三
時鳥はなたちはなに木かくれてかゝるしのひのねたに絶しな

とほき所へ思ひたちける女にもの申ていてけるあかつき

まちかきたちはなにほとゝきすのなくを聞て
いはかきぬまの頭中將
ほとゝきす花たちはなのかはかりも今ひとこゑはいつか聞へき
たいしらす
いせをの左大臣
一こゑやなきて過ぬる郭公花たちはなのにほふあたりを
ゆくへしらすなして侍ける女をたつねいてゝ盧橘をとり
て
なるとの中納言
しろへする花たちはなのなかりせは昔の袖をいかてしらまし
みかといまたたゝ人におはしましけるとき五月四日の夕
つかたうちよりまかて給ひける道にのきのあやめをひき
おとしてさしきよりいたし侍ける
狹衣の中務卿のみこの家小宰相
物語一に 百番歌合十一番
しらぬまの菖蒲はそれとみえすとも蓬か本はすきすもあらなん
五月五日女のもとにつかはしける
いはし水の社の大將
物語上
思ひつゝ岩かきぬまに袖ぬれてひけるあやめのねのみなかるゝ
かへしむすめにかはりて
兵部卿のみこ
同上
ぬまことにけふは引なるあやめ草なへての袖もしなれやはせぬ
たいしらす
み山かくれの式部卿のみこの女
長きねをかくるにしりぬあやめくさ我身のうきにおふる物とは
ものはたみの登華殿御息所
ともすれは思ご入江のあやめ草うきねをかくる身こそつらけれ
あしやへふきの按察大納言女
ひかてたにやみなましかは菖蒲草袖にうきねはかゝらさらまし

宰少將
なかれてのためしにひける菖蒲草君かよとのはいつかかれせむ
院姫宮の根合のうた
よみ人しらす
君か世にひきくらへたるあやめ草これをそ永きためしとはする
あやめ草かゝるたもとのせはき哉またしらぬまの深きねなれは
さつき五日いみしうなかきねを皇后宮にたらせ給とて
あさくらの三條院御歌
あやめ草深き入江をたつねつゝ長きためしにけふはひく哉
玉かつらの尙侍のもとにためしにもひきいてつへきねに
つけてつかはしける
ほたるの兵部卿のみこ
螢 百番歌合廿番
けふさへや引人もなきみかくれにおふる菖蒲のねのみなかれん
むすめのもとにしのひて侍けるふみをみて
らゝの左大臣
返事してかけれは又たちかへしつかはしける
はゝたかの關白
しのひしにこゑあらはれて時鳥けふはあやめいはにそたてつる
五月ほとゝきすをきゝて
あらはあふよの姫宮の中宮
つれよりもぬれそふ袖は時鳥空になくねいかゝる也けり
山さとに住はへりける頃おほきおほいまうちきみたつね
まうてきてつれ〳〵にかたらふ人もそはぬ身をと申侍け
れは
袖ぬらすの准后
かたらはむさとにきなかて郭公み山かくれをなにかたつぬる
きふねにこもりて侍けるにほとゝきすのなくをきゝてと
なりのつほねにつかはしける
あはれとも君はきかすや郭公たひねの空をなきてすく也

時鳥下
もろこしにてむら雨うちそゝきたるよひのまに時鳥のこゑのかはらぬをきゝて　松浦宮參議氏忠

郭公なれをそたのむ村雨のふる郷人はとひもこぬよに

中河のほとすき給ふとてひとめ御らんしける女の家を見いれたまふにほとゝきすなきてわたるもよほしきこえかほなれは　六條院御歌

花散里
なをちかへりえそしのはれぬ郭公ほのかたらひし宿の垣ねに

御かへし　よみ人しらす

同上
ほとゝきすかたらふ聲はそれなからあなおほつかな五月雨の空

中納言きこえたゝなを左大臣になすへきよし申侍けるにさみたれになりにけりと申けれは　うつほの源太政大臣

祭使
子規なくねひさしくなりぬるにさみたれなからいくよふれはそ

たいしらす　ふる郷たつねるの權大納言

はるくへき方こそなけれつれ／＼となかめくらせる五月雨の空

みれともあかぬの關白

さみたれの空とおほゆる心かないつの雲まにはれんとすらむ

五月雨のころ女の許につかはしける　心たかきの右大臣

かきくらしふれはなみたのそふものを只五月雨と人やみるらん

女につかはしける　うつほの彈正尹親王

祭使
なかめする五月雨よりもなけきつゝ月日をふるそ袖はぬれける

さつきはかり女のもとにまかりてかへらんとしけるあかつき郭公のなきけれは　くもゐの月の左大臣

五月雨にぬれてやまなく時鳥あかぬなこりの袖にたくへて

さつきのころ女のもとにつかはしける　かくれみのゝ左大臣 一本

よとゝもになくさみたれの郭公しつくの山は我身なりけり

かへし　中納言家宰相

名はかりやしつのゝ山の時鳥涙ならねはぬれしとそ思ふ

題しらす　しのふの新大納言

つれもなき命のほとをなけく身そかたらひてゆけ山ほとゝきす

はきに宿かるの院女御のはゝ

思ひ出て昔をこふるわれにしも哀ともなくほとゝきすかな

ふちつほの女御のかたのすのこにゐてあやしうあかしかねたるに郭公のあまたゝひなくを聞てなくひとこゑにといふものをと人のいひけれは　うつほの侍從なかすみ

藤原君
一こゑにあくなる物を郭公こゝらなくねにくらきしのゝめ

女にいさゝかもの申侍けるにほとゝきすのなきけれは　やなかはのゑもんのすけ

時鳥ことかたらはむほとたにもなくて明ぬる夏のよはかな

六條院わたり給へるにくひなのはしめてなきけれは　化ちるさとのきみ

冷泉
くひなたにおとろかさすはいかにして荒たる宿に月をいれまし

御かへし

同上
おしなへてたゝく水鷄におとろかはうはの空なる月もこそいれ

あすかゐのやとりに御車ひきいれたるにかやり火さへけふりてわりなけれは　さころものみかとの御歌

物語一上　百番歌合十二番
わか心かねて空にやみちぬらんゆくかたしらぬやとのかやり火

なてしこにつけて女につかはしける

朝倉式部卿のみこ

露けさな思ひやらなんなけきつゝ獨おきゐる床夏の花

ゆくへしらすなりにけるむすめをとし月有てきゝ出たり
けるになてしこにつけてつかはしける

いはしみつの中關白

物語上
たねとこそうゑし垣ねのあれしより涙露けき床夏の花

冷泉院うまれさせ給ひてのち前栽のなかにとこ夏のはな
やんにさきたるをゝらせ給て王命婦につかはせ給ける

六條院御歌

紅葉賀
よそへつゝみるに心はなくさまて露けさまさるなてしこの花

御かへし

薄雲女院

同上拾　百番歌合四十八番
袖ぬるゝ露のゆかりと思ふにも猶うとまれぬやまと撫子

むすめを□
うかりける□いかてかしらんなてしこの花

藤つほの女御いまたまゐり侍らさりけるころつかはしけ
る

うつほの兵部卿の宮

祭使
よそにのみ思ひける哉夏山のしけきなけきは身にこそ有けれ

たいしらす

袖ぬらすおほきおほいまうち君

もろこゑになきあはせたるうつせみも果は空しく成こそはせめ

六條院御歌

幻　拾　百番歌合七十一番
よるをしる螢をみてもかなしきは時そともなき思ひ也けり

玉かつらの尚侍のもとにたちよりて侍けるに六條院几帳
のかたひらに螢をつゝみ置給てうちかけたまへはにはか
にひかるをほとなくまきらはしかくしけれは

ほたるの兵部卿のみこ

螢
なくこゑもきこえぬ蟲の思ひたに人のけつには消る物かは

かへし

尚侍のかみ

同上
聲はせて身をのみこかす螢こそいふにもまさる思ひなるらめ

ものおもほしけるころよもすからもえあかす螢のひかり
もあけゆけはきえぬるをうらやましく御覽せられて

なかれてはやきあすか川の院御歌

身をこかすたくひにみゆる夏蟲もあくれは消る思ひ也けり

こゝちこそなひて侍けるかすこしおこたりて池にはちす
の花の咲わたれるに露の玉のやうなるをみ出して

むらさきのうへ

若菜下
きえとまる程やはふへきたまさかにはちすの露のかゝる計を

延命寺くやうし侍けるときはすの葉にかきつけ侍ける

うつほの左大臣

としふれとすまぬ入江の濁には清きはちすのいかておふらん

あつき日つり殿にすゝみて式部卿のみこに遣はしける

なるとの中務卿のみこのむすめ

祭使
枝しけみ露たにもらぬ木がくれに人まつかせのはやく吹哉

みな月のつこもりにはらへしに河原にいて侍て

まよふきんのれの東宮

みそきするけふは河せのしら浪も大ぬさにこそ立わたりけれ

わかのうらにてみな月はらへし給とて

神もみなけふはなこしと聞物を猶あら磯は浪さわきけり

その夜更て風のおともすゝしくなりにけれは

手なれつるあふきも今は夏過て露よりさきにおかれぬる哉

風葉和歌集巻第四

秋上

ふ月のはしめつかた風すゝしく吹出たる夕へによませ給けるを　こつほの朱雀院の御歌

新秋上
めつらしく吹いつる風のすゝしきはけふ初秋とつくるなるへし

わかのうらにおはしましける頃よませ給ひける　まよふきんのれの春宮

みきはなるあしのうら葉のおときけは一夜の程に秋そきにける

もしほやく烟ひまなきわかのうらに霧の立そふ秋もきにけり

たいしらす　女すゝみの前右大臣の三の君

ほしわふる袖より外におきそへて世さへ露けき秋はきにけり

左大将まのゝうらにこもりゐて侍けるころつかはさせ給ひける　おなしき中宮

吹すくるおとにつけてもいかならんまのゝうらわの秋の初かせ

女のもとにまかれりけるになきふく風のこゝろあわたゝしきまて聞えけれは　心たかきの右のおほいまうち君

拾　百番歌合八十二番
いとゝしく荻の上風ふきみたり心まとはす秋の夕くれ

七月七日のゆふへなきのかせになひくなきゝて　いせなの前関白中君

つねよりも心してふけたなはたのつまゝつゆふへの荻の上風

七月七日かはらにいてゝこれかれ歌よみ侍けるに

うつほの中務卿のみこの北方

菊の宴
秋なるさみもみちもちらぬ天の川なになはしにてあひ渡るらん

藤つほの女御

同上
たなはたのあふよの露を秋ことにわかかす糸の玉とみるかな

しのひ音のみかとの御歌

ないしのかみつれなきさまにみえ奉けれは七日宣はせける

けふさへやたゝにくらさんたなはたの逢夜は雲のよそに聞つゝ

道心すゝむる右大臣

心にかけて侍ける人のふみを七日よそなからみてよみ侍ける

ゆきあひの空迄をこそかけさらめふみたにみはやかさゝきの橋

心たかきの後冷泉院御歌

宣旨さとに侍けるに給はせける

よとゝもにあかぬ別を身にしれは行あひの空も哀なるかな

のちくゆるのみかとの御歌

みこにおはしましける時大将の女御に給はせける

思ひきやまれにあひみる棚機に契おとれるなけきせんとは

ゆるきのみかとの御歌

梅つほの女御心ならすえまゐり侍らさりけるに七日つかはさせ給ける

たなはたのあはぬなけきを身につみてけふの契を我にかさなん

さゝわけしあさの八條院御歌

おなし日いとせちにおほしめしける女につかはさせ給ける

わかれてのあすをはかけし棚機のけふの心を我にかさなん

御心ならす一條院の一品宮にわたり給ふへき由聞え侍ける頃女二の宮にきかせ給ふこと侍らんをなとかとて

さころものみかとの御歌

物語三中
をれかへりおきふしわふる下荻の末こす風を人のとへかし

嵯峨院の女二のみこ

この御ふみのかたはらに

同三中 百番歌合十五番
下をきの露きえわひしよなよなもとふへき物とまたれやはせし

同三中 同歌合十一番
うき身には秋そしらるゝ荻原や末こす風の音ならねとも

ねさめのひろさはの准后

しのひてしらかはの院に侍けるにもの思ふ秋はあまたありしかといとかうはあらさりきかしとなかめわひて

拾 百番歌合九番
しをれわひわかふるさとの荻のはにみたるとつけよ秋の夕風

かたる大将

一品宮に綸とも奉るなかにせりかはの大将のとをきみの女一宮思ひかけたる秋の夕へかきたるに思ひよせらるゝことや有けんかきてそへまほしかりける

蜻蛉
をきのはに露ふきむすふ秋風も夕へはわきて身にそしみける

風につれなきの太政大臣

人のわつらひけるとふらひにまかりてむかし思ひ出らることや有けん荻の上風のわたるにしたかひてほろほろとこほるゝ露になみたもさそはれぬるこゝちして

秋風やむかしをかけてさそふらん荻の上葉の露もなみたも

冷泉院一宮

かくわたれるよしきこえけれは

うしとのみ思ひはてにし秋風にそよめく荻のおとそかなしき

源氏のさかの院御歌

のわきたちたるゆふへきりつほの更衣のはゝの許につかはさせ給ひける

桐壺 百番歌合五十六番
宮きのゝ露ふきむすふ風のおとにこ萩か本を思ひこそやれ

關白すゝみわたりていち皇太后宮にあからさまにまゐりて侍けるあしたかの宮より露そこほるゝあき萩の花との給はせて侍ける御返し　　あさくらの皇太后宮大納言

宮城野のこはきか花の露みれはしかたちなれし秋そ戀しき

四季もの語のなかに　　月のみかとの御歌

しの原や露分衣袖ぬれてうつりにけりな萩か花すり

一條院のみやす所なのにすみ侍けるにまかりて侍けるを心あるさまに思てしなるゝ野へをいつくとて申て侍けれは　　夕きりの左大臣

夕霧
秋のゝのくさのしけみをわけしかとかりねの枕むすひやはせし

をみなへしをよませ給ひける　　うつほの朱雀院御歌

初秋一
うすくこく色つく野へのをみなへしうゑてやみまし露の心を

さかの院に行幸ありけるに野の花のさかりなるなかに女郎花の霧のたえまもわりなけなるを御らんして

さころものみかとの御歌

物語四下
立かへりならて過うき女郎花はなのさかり（なほやすらはんきりのまかきに物語）を誰にみせまし

（脱文あるか）とりてなやむをきゝて　　内大臣

あさつゆにしなれはすとも女郎花おほろけならぬ人にならすな

うちわたりにてつれかりける女のあらぬさまにいひなしてほかに侍けるうしろてをあやしう見しこゝちするものかなとて　　よその思ひの右大將

をみなへしいかなる野への草葉にてよそふる袖に露こほるらん

野分のあしたにふちはかまにつけて女につかはしける

うつせみしらぬの宰相中將

藤はかましなるゝ色によそへても物思ふ袖の露やまさらむ

四季ものかたりの中に　　あきゝりの中將

たちこむる霧のまかきの藤はかま露の爲とてしめし色かは

前栽の中にをはなのまたほにいてさしたるも露をつらぬきとむる玉のをはかなけにうちなひきたる夕へ　　にほふ兵部卿のみこ

宿木　拾　百番歌合八十二番
ほにいてぬもの思ふらしゑのすゝきまねく袂の露しけくして

ものまうてのところにていさゝか見て侍ける女に遣にかきてつかはしける　　こゆみの大納言

花すゝきほのかにみつる秋よりもいかに忍ひにむすひてしかな

あれたる家にをはないなれかへりまねくをみてよみ侍ける　　うつほのおほきおほいまうち君

俊蔭上
ふく風のまねくなるへし花薄われよふ人の袖とみつるは

せんさいのかるかやのにはかにふきすくる風にみたれてうれへかほになひくを御らんして　　かやかしたなれの嵯峨院中宮

露けさは秋のならひをかるかやのわきてしもなとみたれ初けん

六條院御息所のもとより出させ給けるあしたせんさいの色々みたれたるを過かてにやすらひ給に中將の御もとにまゐるをしはし引すゑさせ給て　　六條院御歌

夕顔
さく花にうつるてふ名はつゝめともならて過うきけさの朝貌

あさかほの咲わたれる明ほのをもろともにみ侍ける人のたちかへりてこひしさまさる朝かほの花と申て侍ける返し　　あさくらの皇太后宮大納言

おく露にたちそひつる朝がほの花はいづれのあかつきかみむ

御賀にまゐりたるとしらかはの院などみゆき侍けるにかへま

せ給ける　ゝかきか原の嵯峨院御歌

君とてはいくよのあきの野への花露の光もこよひこそみれ

左大將おほうち山にすみ侍けるころこれかれたづねまか

りてあそび侍けるついでに　みつからくゆるの源宰相

聞しよりみてこそいとゝまさりけれ大内山の秋のけしきは

宰相中將

いかで君いまゝてかゝる山さとの秋のさかりをひとりみつらん

八月ばかり女のもとにたゝずみて[illegible]侍ける

露わけわぶる右大將

思ひしる人にみせばやあさぢふの露わけわぶる袖のけしきを

こたかゝりのついでにまできたる人のまたなき原の露に

まとひぬといひけるかへし　けんじのなのあま

手習 秋の野の露わけきたるかり衣むぐらしげれるやどにかこつな

[illegible]侍け[illegible]

露もそでのうへにたぐひてみえければ

なくら山たづぬるの女院大納言

吾袖にみだれにけりな[illegible]白露

たいしらず　けふはの露の右大臣

いかにせんあさぢか原に風ふきて涙の玉の露もとまらず

たのにすみ侍けるに秋の夕ぐれ思ひ出る事おほくて

うきふねの君

手習 拾 百番歌合廿五番 心には秋の夕へとわかねとも詠る袖に露ぞこぼるゝ

冷泉院の后の宮の御かたにて春秋いづかたに御心よせ侍

[illegible]申させ給に[illegible]

きこしゆゑこそとの給はせければ

六條院御うた

藤裏葉 百番歌合八番 君こそは哀をかはせ人しれずわが身にしむる秋の夕かぜ

にほふ兵部卿のみこ夕ぎりのおとゞのもとにわたりぬる

のちよろづ思ひみだれてのどかに吹くる松風のおともあ

らましかりし山おろしにはおとりて思ひくらべられけれ

ば　うちの中君

宿木 百番歌合十七番 おく山の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

のわきのあしたによめる　あかしのうへ

野分 百番歌合廿一番 大かたの荻のはすぐる風の音もうき身ひとつにしむ心ちして

中宮のさとにおはしましける比しのびかたき秋のゆふべ

に奉らせ給ひける　よその思ひのみかどの御歌

身にぞしむたゞ夕ぐれの秋の風大かたにとは思ひなせども

もろこしにてかへりなんとし侍けるころ河陽縣のきさき

の女王のきみのもとにまかりけるに見もしらぬかほにこ

たへ侍ければ　はま松の中納言

浜松一 百番歌合[illegible] 哀しる人こそ更になかりけれ今はと思ふあきの[illegible]

物おもはしき心のうちをもかたらはむとて右大將のもと

にまかれりけるに爰にも夕への空をながめ侍ければ

いはでしのぶの左衛門督

詠めつる心よいかに我ならぬ人もあやしき秋の夕ぐれ

かへし

大かたになかむる秋の夕へならし心にかへてあはれしとやみる

秋の夕へ吉野の宮にてよませ給ける

風につれなきのよしのゝ院御歌

なほふりしちさとの外の雲のよそにふる網とほき秋の哀は

風あらゝかにふき時雨したる夕へけふのあはれはみしる

らんとおほす人のもとにつかはさせ給ひける

六條院御歌

自讃歌合七十六番

わきてこのくれこそ袖に露けゝれ物思ふ秋はあまたへぬれと

もの思ひける秋のこゝろ袖を風のふきかへすに

水おとめの承香殿女御

夕されはいとゝ露けき衣手に何こゝろもする風のけしきそ

なくろうの麗景殿女御

かはかりと身のうき程をしらさりし秋の夕へも涙なりした

おふにかふる梅壺の女御

物思ふ袖の涙にうちそへていたくなおきそよはの白露

おふきなかしの源中納言

いとゝしくあれたる宿に秋のよに物思ふ袖そ露けかりける

うき舟の君なのに住けるころ月いてゝなかしき程にたち

よりて侍におくふかく入にけれは

源氏のむかしのむこの中將

手習

山里の秋のよ深き哀なら物思ふ人は思ひこそしれ

女のもとにまかりてひとりあかしてよめる

おちこの中の内大臣

しるらめや片敷袖なしほりつゝあかしわつらふ秋のよなよな

法輪にすみ侍けるころ月なみて

雲のうちの梅つほの女御

草の庵にひかりさしいる月なのみ友にてあかす秋のよなよな

たいしらす

夢のかよひちの中將

いつもかく秋は露けき袖なれと月みる程そしなり侘ぬる

たいへの按察大納言家少大輔

おとに聞こそなに捨る月ならんみるにつけても物ゝ悲しき

水のこらなみの冷泉院御歌

物思ふ涙にかけやくもるらんひかりもかはるあきのよの月

うちより涙にくもる月かけはやとゝめてもやぬるゝかほ

なるいかやうにてか只今は御覽するらんなと聞えさせ給

へる御かへし

さころもの齋院

物語四下　百番歌合六番

哀そふ秋の月かけ袖ならて大かたにのみなかめやはする

八月はかりしやうのことにしのひてかきならし侍ける

ちゝにくたくる按察御息所

月影もなかむるからの秋の空心つくしの風そ身にしむ

かものいつきおり給て後帝御たいめん有けるに月さし出

てなかしき程なりけれはみかきかはらの一品宮

今夜こそ君か光なさしそへて神世もしらぬ月はすみけれ

皇后宮内にいらせ給て出させ給けるに

おなし中宮

諸ともにかけならへぬ雲のうへはすむ空もなし秋のよの月

御位おりさせ給て八月十五夜六條院に聞えさせ給ける

源氏冷泉院御歌

鈴虫 雲のうへをかけはなれたるすみかにも物忘れせぬ秋のよの月

八月十五夜月くまなきにさかの院にまゐりて

わか身にたとるの宮大將

まつそ思ふみやこの秋の月みても君すむやとの松かせのこゑ

おなし夜女御更衣まうのほらせて御あそひ侍けるついて

によませ給ける　　岩うつ浪の朱雀院御うた

あまたとし秋の今宵はみしかともまたかゝかりの月はなかりき

宰　相　更　衣

笛の音もやへのうき雲吹はらひ常よりことにすめるよの月

大僧都いまたわらはに侍けるとき八月十五夜にゆるし給

はせたりけるをもてなしあそひ侍けるさかつきのついて

に　　あまのもしほ火の仁和寺の親王

いつもみる秋の半の空に猶ひかりそへたるよはのさかつき

さかの院のきさいの宮の六十賀の屏風に八月十五夜かり

飛る處　　うつほの侍從なかすみ

菊宴 秋毎にこよひの月をゝしむとて初雁かねを聞ならしつる

風葉和歌集卷第五

秋下

たいしらす　　風につれなきのおほきおほいまうち君

物語 雲ゐ行雁のねにさへいかなれは物思ふ袖はかゝるなみたそ

夕霧の左大臣

少女 拾 百番歌合七十四番 さよなかに友よひわたる雁かねにうたて吹そふをきのうは風

おやこの中の内大臣

かきくらしわかこと物や思ふらんかりのねさめのこゑ聞ゆ也

はきにやとかる大將

物思ひの今はかきりの夕まくれ雲ゐに雁のつけてすくなる

大内山にこれかれまうてきてかへる程に雁の鳴てわたる

によみ侍ける　　みつからくゆる左大將

立とまれ雲ゐにわたる雁かねよやへたつ霧のはれまゝつ程

たいしらす　　袖ぬらすの准后

拾 百番歌合六十八番 蟲のねもあはれそまさる淺ち原なかは過行秋と思へは

女のもとのいたくあれたるをわけいるとて

うつほの右大臣

俊蔭上 むしたにもあまた聲せぬ淺ちふに獨すむらん人をこそ思へ

帝たゝ人にておはしましける時一條院一品宮にわたり給

へるあしたに女二の宮にむくらの宿をゆきすきてと聞え

給へる御かへし

さころもの嵯峨の院御歌

物語三中 ふる郷は淺ちか原と成はてゝ虫のねしけき秋にやあらまし

はやうすみ侍けるところのあれにけるをとしころありて
みてよめる　　せれうの中納言

吾宿はうつら鳴野とあれ果てあるしかほなるむしの聲々

あはれしられぬへき夕くれあれたる所にすむ女のもとに
つかはしける　　もとのしつくの大將

詠らむあさちか原のむしのねを物思ふ人の心となしれ

かへし　　おほきおほいまうち君のむすめ

置露のしけきあさちに鳴虫はなへての秋のさかとこそきけ

一かたならすもの思ひけるころむしのねを聞て
おやこの中の内大臣

思ふことちくさにしけく虫のねにみたれまされるわか心かな

身の有さまをゑにかきたりけるに夕へなかめたる所にか
きつけ侍ける　　淺ちか露の侗侍

夕くれはよもきかもとの下露に誰とふへしとまつ虫の聲

きりつほの更衣のはゝのもとに御つかひにてまかてたる
に風いとすゝしく草むらのむしのこゑ／＼もよほしかほ
なれは　　源氏のゆけひの命婦

桐壺 拾 百番歌合五十一番 すゝむしのこゑの限をつくしても長き夜あかすふる涙かな

秋のころ女につかはしける
うつほの中納言まさあきら

凝碧府 秋のよのさむきまに／＼きり／＼す露をうらみぬ曉そなき

たいしらす　　かいはみの右大將

秋のよの長き思ひもきり／＼すいつまてともにならんとすらむ

山さとに物思ひける人を思ひやりてつかはしける
にほふ兵部卿のみこ

椎本 なしかなく秋の山さといかならんこ萩の露のかゝる夕くれ

をとこのおろかなるさまにみえ侍けれは山さとにわたり
て侍けるにしかのなくをきゝて
みつあさみの右大臣中君

つまこふるおなし音にこそあられともしかなきくらす秋の夕暮

家の辨

しらさりし都のほかのすまひしてしか諸共にねこそなかるれ

石山にこもり給へるに鹿のいとあはれになきけれは
風につれなきの一品宮

里とほき深山のおくの鹿たにも秋の哀はしのはさりけり

女二宮

かくはかりふかくはいまたしらさりき鹿の鳴音に秋の哀れを

さかに住侍けるに鹿のなくを聞てわれもしかこそねをつ
くしけれと人のいひけれは
はつねのしかまの太政大臣女

をくら山うき身に秋はしられつゝしかはかりこそ聲もをしまれ

たいしらす　　しくれの源大納言のむすめ

人しれぬ袖のしくれもひまなきにおなし心に鹿もなく也

霧ふかきあしたに女につかはしける
にほふ兵部卿宮

椎本 あさ霧に友まとはせる鹿の音を大かたにやは哀ともきく

宇治にまかれりけるに霧いとふかくたちわたりてみれの

ゆへくら思ひやるへたておほくあはれなりければ

かなる大将

拾遺　百番歌合
朝ぼらけ宗師もみさす峰こしまきのな山は霧こめてけり

六條御息所齋宮にくしきこえてくたり侍ける日霧いたう
ふりてたゝならぬ朝ぼらけにひとりこたせ給ひける

六條院のおほむうた

異本
ゆくかたなかめもやらんこの秋にあふ坂山を霧なへたてそ

一條のみやす所なのにすみ侍けるに尋いりて女二のみこ
のかたにて霧のたゝ此軒のもと迄立わたれるにまかてむ
かたもみえすなりゆくはいかゝすへきとて

夕きりの左大臣

夕霧　拾　百番歌合六十二番
山さとの哀をそふる夕霧にたち出ん空もなき心ちして

女二宮

夕霧
やまさとのまかきをこめて立霧も心空なる人はとゝめす

あほのもとにいでゝやかてたちかへりけるになきのうは
風あらいかにふきまよふに

末葉の露の東宮宣旨

夕霧に道やまとはむ荻のはのそよめくやとに心とまりて

みこにおはしましける時きくのえんせさせ給に前中宮いま
たさとにおはしましける御まへのきく關白にめされけ
ればひともと奉れりけるのちにさしおかせ給へりける

あたなみの院の御歌

一本菊物語上
わか心君かまかきにうつろふは猶やのこれるしら菊の花

ものおほしける比きくの花を御らむして

六條院御歌

𤇆　百番歌合六十四番　ゐ物語百
もろともにおきふしきくの朝露もひとり袂にかゝる秋かな

右大臣の女御きさきにたち給てのちみかと菊のえたのお
もしろきを給はせたりければ　みもあはぬの后宮の輩

朝夕に露分わびししら菊も秋のみやこの光とやみし

みかとみこと申ける時きくの枝をみかとて給はせたりけ
れは

のちくゆる大将の女御

うつりぬる色はうくとも朝霜のおきてやみまし白ききくの花

長月はかりのあかしたる明ほのにきくをなりて人の見せ
侍ければ

うつほのふちつほの女御

嵯峨
露ならぬ人さへおきてきくの花うつろふ色をまつもみる哉

冷泉院の行幸侍けるにきくをならせ給てむかしの青海
波のなはをおほいでゝ

六條院御歌

藤大　百番歌合九十八番
色まさるまかきの菊もをり／＼に袖うちかけし秋をこふらし

九月十三夜内にまゐりてよめる

まよふきとんのはの按察大納言

すへらきのよも長月の月みればのとかにのみそすみわりける

中納言

雲のうへほすみまさりけり古郷によなへてみつる秋の夜の月

おなし夜一條院にて御あそび侍けるついでによめる

いせをの右衛門督

秋のよのくまなき空の月影もたゝやとからにすむとこそみれ

よし野にて月を御らむして

吉野山の中宮

かへりてもわすられしかし秋深きよし野の山にすめる月影

世をそむきてふしみにすみ侍けるに權大納言夜ふかき月

にたつねまてきて侍ければ

みかきかはらのさきの大臣の三君

身のうきをなけかぬ人も尋ねけりふしみのさとの秋のよの月

かつらにすみ侍けるころ月を見て

かつらの關白北方

秋はなほかつらの里のさびしさを人こそとはね月はすみけり

うちにおはしましける頃月を御らんじてよませ給ひける

よその思ひの中宮

さとの名もわか身ひとつの秋かせをうれへかねたる月の色かな

おなしころうちの御返事に

みし秋の月も雲ゐの空なからよなうち山のかけそかはれる

朱雀院の御時うすくもの女院内にいらせ給へるに月はなやかなるにむかしのことおほし出られけれはこゝのへに霧やへたつると聞え給へる御かへし

六條院御うた

賢木
月かけはみしよの秋にかはらぬをへたつる霧のつらくも有かな

九月はかり山へのほるとておほたけといふ所にてやすみ侍けるに月かけに鹿のこゑあはれに聞え侍けれは

風につれなきの關白

月のすむみねをはるかにたつぬれとうき世をおくる鹿の音哉

右大臣

きくそうき秋をしのはぬさをしかのみ山の奥の月になくこゑ

四季ものかたりの中に

月のみかとの御歌

山のはにかたふく月のなになれは哀はかはるすゝむしの聲

御かへし

すゝむしの少將

君たにもともに有明のかけならはなにかはむしの聲のわるへき

なか月の末つかた嵐ふきすさみけるに

いはてしのふの關白

行秋の露に涙をおきかへて袖を草葉にやとる月影

かいはみの右大將

いつとても有明の月にみしかとも心にとまる秋の空かな

太政大臣のむすめ

しらさりき秋の空をはみしかともかゝる有明の心つくしは

秋悲不倒貴人心といふこゝろを

道心すゝむる右おほいまうち君

あきのゝも御らんしかてら雲林院におはしましけるころ紫のうへにつかはさせ給ひける

六條院御歌

賢木 百番歌合十三番
あさちふの露のやとりに君をおきてよもの嵐そしつ心なき

かへし

賢木 拾 百番歌合八十一番
風ふけはまつそみたるゝ色かはる淺ちか露にかゝるさゝかに

うつほの兵部卿のみこ

手習
おく露に萩のした葉は色つけと衣うつへき人のなきかな

有明の月のまたよふかきにうちへまかりけるにおらましき風のきほひにほろ〳〵とおちみたるゝ木の葉の露ちりかゝるもいとひやゝかに人やりならすぬれて

かをる大將

橋姫 拾 百番歌合六十六番
山おろしにたへぬ木のはの露よりもあやなくもろき我涙かな

風あらくふきけるあした人につかはしける

玉もにあそふ關白

ふきはらふ風にみたるゝ白露も物思ふ袖に似たるけふかな

ふちつほの女御いまた參り侍らさりける比給はせける

うつほのみかとの御歌

嵯峨院
いつとてもたのむものから秋風のふく夕くれはいふかたそなき

おなし女御のもとにとかく申こと侍て

右大將仲忠

初秋一
秋かせのはきの下葉を吹ことに人まつ宿はとこやしくらむ

さかの院のきさいの宮の六十御賀の屏風にもみちみる人
山邊にあらたかりつめる所

參議さねより

菊宴
おりしける秋のにしきに圓居してかりつむ稲をよそにこそみれ

いかなるをりにか秋のけしきもしらすかほに青き枝のか
たえいとこくもみちたるを女につかはすとて

かをる大將

總角
おなしえをわきて染ける山姫にいつれか深き色とゝはゝや

かへし

うちのあねきみ

同上
山ひめの染る心はわかねともうつるふかたや深きなるらん

むらさきのうへ春に心よせ侍けるに長月はかりはこのふ
たに色々の花もみちをこきませてつかはさるとて

冷泉院后宮

少女
心から春まつそのはわかやとのもみちを風のつてにたにみよ

物おほして御らんし出したるにきゝの梢もいろつきわた
るころなりけれはよませ給ける

さころものみかとの御歌

物語一下
せく袖にもりて涙や染つらむ梢色ますあきの夕くれ

しかにこもりて出侍とて色こき紅葉を折て

右大將なかたゝ

菊宴
山つとをみすへき人はなけれともわかなる枝に風もよきなん

思ふ事侍りてはつせにまうてゝなるへきさまの夢見侍て
まかてける道にてよめる

しつのをた卷の左近府生

さこえ山のもみちの錦たちいてゝしるしを深くみるよしもかな

右のおほいまうち君こゝろおくかれたるさまなりける比
てならひにして侍ける

心たかき後冷泉院宣旨

拾 百番歌合八十一番
秋ふかきあを葉の山のこきませにいろ／＼物を思ふ比かな

これを見て

右大臣

いろ／＼に人の心そうつるらしあをはの山は秋もしらぬに

秋の末つかた大ゐ川にてせうえうしてかへり侍けるにし
くれに袖のぬれけれは

みふねのおほきおほいまうち君

やよ時雨もみちにあかぬ色そとやことそともなき袖ぬらすらん

きさいの宮さとにおはしましける比うちしくれたる夕に
たてまつらせ給ける

みかきかはらの春院御歌

そむれとも木のはゝ風にさそひけり袖の色こそしくれわひぬれ

御かへし

皇太后宮

秋ふかきかことはかりの袖の色にまたきしくれの空なうらみそ

みかとみこと申けるときかれ／＼にならせ給へりけれは
長月はかりによめる

のちくゆる大將の女御

風さむみ人まつむしのこゑたてゝなきもしぬへき秋の暮哉

たいしらす　風につれなきのよしのゝ院御歌

むしの音も秋はてかたの草の原かれはの露はわかなみたかも

わたらぬ中の承香殿女御

わかことくなきよわり行虫の音はあきはつる身や悲しかるらん

おやこのなかの中宮母

下くさにあるかなきかになく虫のよをあきはつる聲のかなしさ

秋のくれにほうりんにまうてゝもみちの水になかるゝを

みて　秋のよなかむる少將

散つもるもみちをなかす水にこそとふへかりけれ秋の行へは

神無月にまゐるへしときこえける人に秋のくれにたまは

せける　風につれなきのよしのゝ院御歌

物語
くれぬへき秋をや人はをしむらんさもあらぬ露のかゝる袖哉

九月つこもりつれなかりける女の許にまかりてよめる

たゆみなきの中將

いてゝみよさこそつらさはつきすとも今夜に限る秋のけしきを

風葉和歌集卷第六

冬

神無月のついたちに「たくひなくうきわかれちの袖のうへ

にいとゝふりそふ初しくれ哉」といへる人のかへし

たゆみなきのふちつほの女御

たくひなく物思ふ人の袖のうへにけさをわきける時雨ともみす

たいしらす　あさくらの皇后宮内侍

いつとなくしくるゝ袖に神無月空さへいとゝはれぬころかな

女のもとよりかへりてあしたにつかはしける

かいはみの右大將

神無月しくれさりせはから衣けさの袂をいかにしらまし（いは一本）

まのゝうらにこもりゐて侍けるころしくれかちなるそら

の氣しき思ひのこすことなくて

なんなすゝみの左大將

ふりふらす時そともなき時雨哉うき世の中にあきはてしより

神無月ついたちころうちにてせうえうし侍けるに八宮の

すみ侍ける處の梢ことにおもしろうとほめさへすゝろな

るに　にほふ兵部卿のみこ

總角
秋はてゝさひしさまさる木のもとをふきなすくしそ峰の松風

右衛門督

いつくより秋はゆきけん山里の紅葉のかけはすきうき物を

たいしらす　　とりかへはやのみてものゝひしり
秋はてゝよもの嵐にさそはるゝこのはにたくふ我身ともかな
なけく事侍ける比もみちのちるを見て
　　おほやとりの太宰権帥重康
こからしにちらすくたくるもみちはゝ物思ふ人の心なりけり
四季ものかたりの中に　　しくれの式部卿のみこ
色深くそめしもみちは散ぬるを何と世にふる時雨なるらん
かみな月はかりしくれいたうする日女につかはしける
　　とりかへはやのさきの左大臣
物思ふ心も空にみたれつゝしくれにそふる我なみたかな
いとせちにおもふこと侍けるころうちくもりしくれけれは
　　うもれ木の少将
はれまなき心や空にまかふらん泪しくるゝ袖のうへかな
たゝ人におはしましける時さかの院の皇太后宮れいならてさとにおはする比わたり給へるにはかにくもりしくるにはよませ給ひける
　　さころものみかとの御歌
新拾 人しれすおさふる袖もしほるゝ迄時雨と共にふる涙かな
式部卿のみこさかにこもりゐて侍けるころしくれかきくらす夕につかはせ給ひける
　　なか月のわかれのみかとの御歌
思ひくらす夕への空やいかならんさもあらぬ袖もかゝる時雨に
山さとにすみける女のもとにつれよりもしくれあかしたるあしたにつかはしける
　　ねさめの関白
物語二 つらけれと思ひやる哉山さとのよはのしくれのおとはいかにと

たいしらす　　おもかけこふる三位中将
もの思ふ心のうちなしりかほにたえぬ時雨のおとそかなしき
みかとみこと申ける時ひさしうおとつれさせ給はさりけるころしくれのおとまとほにきゝなされさせ給ひて
　　うたゝねのきさいの宮
おとたえぬしくれにつけて思ふ哉契りし人のかゝらましかは
をとこのたえにけるころしくれを聞あかして
　　な[illegible]女
音つれのたえぬなさけのしくれにもなとかく袖のぬれ増るらん
もの思ひけるころ月のにはかにかきくもりてしくるゝを見て
　　あひせみくるしき権大納言三君
なくさめに詠る月もかきくもりいとゝ時雨にぬるゝ袖かな
しのひたる女のもとにまかりてたゝにてかへり侍ける道に月をみて
　　みふねの太政大臣
かけとめし露のやとりも霜さえてうはの空にもめくる月哉
左大将みなせにすみ侍ける冬のころつかはしける
　　みなせ河の新中納言
聞なれしみねのあらしもいかならん都もかはる風のけしきに
少将なかこもりみつのたにこもりゐて侍けるに「松風のさむきまに／＼年をへてひとりふすらんきみをこそ思へ」と申て侍けれは
　　うつほの修理太夫忠章女
ひとりぬるよさむも今やこけなうすみ霜おく山の嵐をそ思ふ
女のゆくへおほつかなくおもほしなやみける比をはなかもとのくさも霜もふかくなり行を御らんして

さころものみかとの御歌
物語二上　百番歌合三番
たつぬへきくさの原さへ霜かれて誰にとはまし道芝の露

四季ものかたりのなかに　はきの内侍のかみ
花のうへにむすひし露は夢なれや萩のふるはをうつむ朝霜

女のもとよりかへりたる人にかはりてあしたにつかはしける　冬河にきゝゐるゝ関白
拾　百番歌合四十二番
あさしものおくれはくるゝ冬の日もけふこそ長き物としりぬれ

かへし　女院のみくしけ
冬の日のくるゝもしらす消かへるあしたの霜に身をたくへはや

嵯峨院のきさいのみやの御賀の屏風におもしろある河に舟ともこきうけたる所　うつほの權中納言忠能
新宴
こきつられひをはこふとて網代木におほくの舟をみなれぬる哉

うちにてよみ侍ける　かなる大将
綺内　百番歌合七十六番
霜さゆるみきはの千鳥うちわひて鳴音なかなしき朝ほらけ哉

かへし　うちの中君
お係　百番歌合九十六番
あかつきの霜うちはらひなくちとり物思ふ人の心をやしる

女のゆくへしらてなけきけるころ千鳥のなくを聞て　しくれの中将これさけ
さよちとり友まとはせるこゑす也おなし心に物やかなしき

物思ひけるころ水鳥のこゑをあはれに聞て　もにすむゝしの權中納言
かたしきの袖さへ氷る冬のよはをしのうきねをよそにやは聞

うらむること有てあひ侍らさりける女いひとりあかして池の水鳥のつかひはなれぬをうらやましく見て　おやこの中の内大臣
水のうへに氷とちたるをしたにもつかひはなれておかす物かは

池に水鳥とものあそふを御らんしいてゝしたやすからさらむほとおほしられけれは　うたゝねのみかとの御歌
水のうへに鴨のうきよをいつ迄かしたくるしくて過んとすらん

女二のみやのすみ給ひける一條にしいひておはしましたるに池にたちゐるをしのおとなひも同し御心におほされて　さころものみかとの御歌
物語二下　百番歌合七十六番
われはかり思ひしもせし冬のよにつかはぬをしの浮寝なりとも

女のもとにまかれりけるにつれなかりけれは池のをしのなくを聞て　はしたかの按察大納言
もろともにはねうちかはすをしよりも冴る霜よはたへすなく也

あひそひて侍ける女のはなれゐて侍けるころつかはしける　われからのはりまのかみ
冬のよにならはぬをしのひとりねは上毛の霜をいかにせよとそ

四季物語のなかに　にほのさみ
なみかくるにほのうきすの磯つたひよるへ定めぬ契かなしな

かもの帥宮
人おもふつらいゝとこそうき枕心くたくるをみのうへかな

女をおやにとりこめて侍けるにしのひてまかりなからなけきあかして　さゝわけしあさの関白
いかにせむ片敷わふる冬のよのとくろまもなき袖のつらゝを

ゆふきりの二のみこ
なんなにつかはしける

おちつもる涙は袖に氷つゝとけてねらるゝよひのまもなし
雪のふりつもれるに月くまなくさし出てひとつ色に見え
わたされたるにやり水もいたうむせひ池の氷もえもいは
れすこきに　むらさきのうへ
朝顔
氷とちいしまの水はゆきなやみそらすむ月の影そなかるゝ
八條院の冬の御かたにて雪ふり月おもしろき夜詩歌なと
たてまつり侍けるに　さゝわけし朝の關白
冷わたる池の氷も月かけもおなしかゝみとみゆるよはかな
頭中將
たとふへきかたなきものは冬深み雪ふりしけるよはの月影
たいしらす　つまこひかぬる三位中將
なけきわひうちぬる床のさひしきに哀をそふる冬のよの月
うす雲の女院かくれ給てのち思ひいてきこえさせ給つゝ
おほとのこもれるにうらみたるさまにて夢にみえさせ給
ひけれは　六條院おほむうた
朝顔　百番歌合三十六番
とけてねぬれ覺さひしき冬のよに結ほれつる夢のみしかさ
たゝ人におはしましける時こかはにまうて給によし野川
のわたりにてみきは氷のとちこめておほむ舟もえすきや
らぬに　さころものみかとの御歌
物語二下　百番歌合七十八番
わきかへり氷のしたにむせひつゝさもわひまさるよし野河かな
女のもとにたひ／＼まかりてひとりあかしてよみ侍ける
おやこの中の内大臣
ひとりねのよを重ねたる淋しさにとこさへさゆるかたきしの袖
五せちのまひひめにつかはしける　夕きりの左大臣

少女
ひかけにもしろかりけめやなとめこかあまのは袖にかけし心な
とよのあかりの節會になみにて侍けるにまうつとて有明
の月おもしろくさえわたれるに　みかさかはらの右大將（臣イ）
めつらしき豐のあかりのひかけくさかさす袖にも霜はおきけり
まことにおきたりけるにやうちはらへるけはひなかしか
りけれは　大納言典侍
ひかけくさかさすにいとゝ霜さえて氷やむせふ山あゐの袖
しのひたるをとこのりむしのまつりのまひ人にてわたり
けるにくるまよりあふきをさしいてたりけれは馬なからち
よせたるに　五せち
なみのきる山あゐの衣めつらしく只ゆきすりにけふはみよとや
夕くれの空のけしきいとすこうしくれたる日にほふ兵部
卿宮なかむるはおなし雲ゐをと申て侍けるに　うちの中君
總角
あられふるみ山のさとは朝夕になかむる空もかきくらしつゝ
世をのかれむとて出けるに江侍從内侍かもとのものに見
あひてことつけ侍ける　あまのかるもの權大納言
あられふるみ山のさとはいかにそとくる人ことの便すくすな
女院ゆくへしらてなけきけるころ木からしのあらくしく
れうちしてまたふきかへしあられのおとのおとろおとろ
しきをきゝて　末葉の露の右大臣
こひわふる冬の夜すからね覺してしくれかうへのあられをそ聞
いとつれなき女のもとにまかりてたゝきかれて侍けるに

あられのふりければ
　　　　　　　　　　水あさみの左兵衛督
うらやましうはの空なるあられたにまきの板戸の内にいる也
冬のころをのにうつろひ給ひけるに日比心もとなかりけ
る雪かきくらしふりて風のおともいとはげしければ
　　　　　　　　　　めもあはぬの右大臣
山深くけふなれ初るあらしよりやかてはげしくある、雪哉
よし野山にこもりゐて侍けるころ雪のふりければ
　　　　　　　　　　濱松中納言
物語四
ふゆこもりよし野の山の雪ふみていとゝ人めやたえんとすらん
よし野にすみ侍ける人につかはしける
同上
きえかへり思ひやるとはしるらめやよしのゝ山の雪のふかさを
大納言たゝよりの七十賀の屛風に山に雪たかくふれる家
のある所
　　　　　　　　　　よみ人しらず
落久保物語三
雪深くつもりてのちは山里にふりはへてくる人のなき哉
雪のあしたにあはれといふことをおきて歌あまたよみけ
るなかに
　　　　　　　　　　ふたよのとものの上人
道たゆることやうからむふる雪を哀とみても人のまたれは
ふる雪のけさの哀にさそはれていかなる人に誰をまつらむ
中宮いまだおさなくおはしましけるを六條院にわたしきこえ
むと思ひけるに雪かきくらしふりつもるにかやうならむ
日ましていかにおほつかなからむとてめのとに申侍ける
　　　　　　　　　　あかしのうへ
濱松
雪ふかきみ山のさとははれすとも猶ふみかへよ跡たえすして
よし野山にて雪のふる日よませ給ひける
　　　　　　　　　　よし野の女院
ふみ分てくる人あらはとひてまし都もかくや雪つもるらむ
おなし山にすみてことに心ほそかりけるによめる
　　　　　　　　　　はまゝつの師宮中宮
物語　浜　百番歌合二十五番
みよし野の雪のうちにも住わびぬいつれの山を今はたつねむ
女のゆくへしらすなりて侍けるふるさとに雪のふる日ひ
くらしなかめてかへるとてよめる
　　　　　　　　　　かはほりの少将
尋ぬへきかたもなくてそかへりぬる雪ふる郷に跡もみへれと
四季ものかたりの中に
　　　　　　　　　　ゆきのみかとの御歌
しら雪のいかてか涙をむすはましむすぶ氷の便ならては
ないしのかみさまかへて侍ける後雪のあしたにつかはさ
せ給ける
　　　　　　　　　　玉もにあそふの朱雀院御歌
哀とは思ひおこせよかたしきて身もさえわたる雪のよな〳〵
新大納言世をのかれて高野にすみ侍けるに雪のふる日つ
かはさせ給ける
　　　　　　　　　　しのふの院の御歌
都たにきえあへすふる白雪にたかのゝおくを思ひこそやれ
この御歌を見ても雪御らんせし御ともつかうまつれりし
ことなど思ひ出られ侍ければよめる
　　　　　　　　　　新大納言
むかしみしをしほの山のみゆきまて思ひ出ても袖そぬれける
六條院太政大臣にものし給けるときおほはら野の行幸に
つかうまつり給ふへくかれて御けしき有けれとものいみ
のよしそうせさせ給てさも侍らさりけるにきし一えた奉

らせ給とて　冷泉院御歌

行幸　百番歌合九十九番
雪深きなしほの山に立きしのふるき跡をもけふは尋よ

御かへし　六條院御歌

同上
なしほ山みゆきつもれる松原にけふはかりなる跡やなからん

雪のうちにかたる大將まてきて兵部卿宮にかへりてとはいつかたにか聞ゆるととひ侍ければ　うちのおおきみ

淋本　百番歌合七十八番
雪深き山のかけはしおなにし又ふみかよふ跡をみぬかな

ふるきへきよし聞えけれる人に雪いたくつもりてえもいはすしみ氷たるくれ竹の枝につけて給はせける　さ衣の後一條院御歌

物語二下　百番歌合九十七番
たのめつゝいくよへぬらん竹のはにふる白雪のきえかへりつゝ

御かへし　齋院

同上　百番歌合廿八番　ちきりやはするくれ竹のうはゝの雪をなにたのむらん百
末のよもなにたのむらん竹のはにかゝれる雪のきえも果なて

こゝろ例ならす侍けるころ關白このかてきてきく雪のつもりたるあかつきの空ないさなひてみせ侍ける　かやかしたなれし宮補贈女御

うき事は身にのみつもる白雪のきえかへりてもふるそ悲しき

かへし

たれもみなきえ殘るへき身ならねはふりそふ雪を何かいとはん

山さとに侍ける女のもとに雪のふる日つかはしける　ふきこす風の宰相中將

さひしやと思ひこそやれ雪深きみ山の里の雪いけしきを

佛名なとことしはかりにこそはとおほしめして御導師のさかつきのついてによませ給ける　六條院御歌

幻
春まてのいのちもしらす雪の内に色つく梅をけふかさしてん

御かへし　御導師

同上
千世の春みるへき花と祈置て我身そ雪と共にふりぬる

さかい院のきさいの宮の御賀の屏風に佛名したる所　右大將なかた

物宮
かけて祈る佛の數しおほけれは年に一たひちよもますらむ

としのくれによめる　わか身にたとるの皇后宮宰相　ひかりや物語

雪ふりて暮行としの數ことにむかしのとほくなるそ悲しき

風葉和歌集巻第七

神祇

ちきりとて結はすもなき白絲を絶ぬ計や思ひみたるゝ

これはよ所の思ひのみかと中宮の御事をおほむ心ひとつにふかくおほしめしてよな〳〵大神宮を拜したてまつらせ給ひおほとのこもるともなき御ゆめにつけたまひけるとなん

やすみしる我すへらきにしたかはてたか誠をか神はうくへき

御夢のうちの御託宣たのもしくおほしめされけれは關白春宮大夫に侍けるとき勅使にてみてくら奉らせ給けるにことなくかへりのほり侍ける道にてこれもゆめにつけたまひけるとなむ

やはたにこもりてこと事なくきねんすること侍りてかきてはしらにおしつけゝる　いはしみつのいよのかみ

（物語下）深くのみたのみをかくる石清水なかれあふせのしるへともかな

はうてんよりけたかきこゑにて御かへし

（同上）夢はかり結ひおきける契故長き思ひに身をやこかさん

（物語二下）神世よりしめ引そめしさか木はを我より外に誰かをるへき

これはさころもの源氏宮内へたてまつらむとし給ひけるに堀川院の御夢に賀茂よりとてはへりけるとなん

人しれすわかしめさしゝさか木はを折んといかて思ひよるらん

これはみたらし河の大臣さい院のいまたちゝみかとにもしられ聞え給はさりける頃ほのかに見きこえて心にかゝりて寐たる夜賀茂よりとてさか木につけたるふみにかゝれたりけるとなん

雲ゐなる程はみあれのあふひくさ照日のよそに思ふはかりそ

これはよその思ひのみかとおほしめしなけくことを心くるしく見奉りて宰相のすけ賀茂にまうてゝ祈申ける夜の夢にみ侍けるとなむ

（物語）あきらけくてらさんこの世後の世も光をみする露や消なん

これは風につれなきよし野の院の中宮の御さむ近くなりて宇治入道關白かすかにまうてゝ侍けるに夢うつゝともなくいとけたかきさまなる人のつけはへりけるとなむ

猶たのめなけきなき世をまつのはにかゝれる藤の花のさかりは

これは夢かたりの前の關白女をなくなして世をそむかむと思ひ侍けるもとかくさはりかちに侍けれはかすかにまうてゝさまたけあらせたまふなと祈申けるあかつきかたにうちねふりたるゆめにふちの花を給はすとてのたまはせけるとなん

（物語中）なみのほかきしもせさらんさとなからわか國人に立ははなれす

これはまつらの宮の右大辨宰相のうちたゝ遣唐のそへつかひにわたりて侍ける時いくさおこりて世のみたれいてきにけるをかのおほやけのいくさにましはりて我國の神佛を念しけるに馬くらまてわかすかたにかはら

ぬ人九人いてきてもろともにたゝかひてことなくしつ
め侍にけれはうちやすみたるより夢にみえ侍けるすみ
よしの御歌となんいひつたへたる

あふことはいさしら雲のかたく共立かへりみつしるしあらしや

これはかいはみの右大將女のゆくへしらぬことなすみ
よしにまうてゝ申侍とて「思ふ人よにすみよしと思せ
はたちかへりこんきしの白浪」とよみ侍けるにえもい
はすけたかきをとこのけはひにてつけ侍けるとなむ

秋のよの松ふく風のおとよりも哀身にしむ法のこゑかな

これはいはかきぬまの頭中將すみよしにこもりて讀經
なとしておこなひ侍けるあかつきつほねにたてふみに
てさしおきて侍ける歌なりさるへき人もまうて侍らさ
りけれは神の御しわさにやと思ひてひとりこちける

かくはかり物思ふ人はあらしよにたれか身にしむ哀なるらん

左大將かたちをかくしてところ／＼見ありきけるころ前
齋宮に大貳まさかねかちかつきよりけるを太神宮と思は
せてさま／＼申けるにおそれておこたり申て出にけれは
よみ給ける　　かくれみのゝさきの齋宮

我爲にあまてる神のなかりせはうくてそやみに猶まとはまし

やはたにまうてゝよみ侍ける　　をたえのぬまの右大臣

ちかひおきし神の心をたのむ哉人の人にはあらぬ身なれは

女一宮齋院にゐ給へるもはゝはしらすやあらんとおほさ
れてよませ給ひける
秋のよなかしとわふるみかとの御歌

ゆふ懸てしらすやあるらん思ふ人神のいかきにしめゆひつとも

賀茂の御つけにてみかとにしらせ奉り絶てさかき葉のさ
してをしふる人なくはとの給はせける御かへし
おなし齋院の母后のみや

かはるなよ榊葉さして祈るらしこやそのかみの驗しなるらん

御出家おほしめしたゝせ給て賀茂にまうてさせ給てよま
せ給ひける　　風につれなきよしのゝ院御歌

今はとて祈りかけつるゆふたすきわか世の後は神にまかせつ

かものいつきいまたかはり侍らさりけるとき花のさかり
に內大臣まうてゝちらても花の千世をへよかしと申侍け
れは　　みたらし河の齋院中納言

さかき葉も花の匂ひもたくひなきをる人からに千世もへぬへし

みかとたゝ人におはしけるとき祭の日みやしろにてみや
こには音なきほとゝきす御垣のわたりにはふるこゑにな
りけるをきかせ給てかものいはかきたつれきにけりとの
たまはせけるに　　さころもの齋院女別當

物語三下
かたらはゝ神もきゝなん郭公思はんかきり聲なをしみそ

六條院すまにうつろひ給はんとて故院の御はかにまうて
給ひける御ともにさふらひて加茂のしものみやしろをか
れとみわたすほと齋院の御けいにかりの御すゐしんにて
つかうまつれりしこと思ひいてられておりて御まのくち
をとりて聞えける　　源氏の衞門大夫

須磨　百番歌合八十七番
引つれて葵かさしゝそのかみを思へはつらしかものみつかき

やかてうまよりおりてみやしろのかたをかみ給ふ神に

まかり申たまふとて　　六條院御歌

同上 百番歌合四十五番
うき世をは今そ別るゝとゞまらん名をはたゞすの神にまかせて

兵部卿のみこのむすめうちにまゐるへしと聞えけるにに
はかにかものいつきにさたまりにけれはをみなへしにつ
けてつかはせ給ける　　みかさかはらのみかとの御歌

神かきに咲ましるともをみなへし露計をは思ひわするな

御かへし　　斎院

ゆふたすきかけても人のわすれすは露のなさけを頼みこそせめ

神無月十日ころ平野に行幸侍けるに斎院のわたりのもみ
ちいみしうさかりなるに御らんしわたさせ給て
さころものみかとの御歌

物語四下
神かきは杉の梢にあられとももみちの色もしろくみえけり

たいしらす　　うつほの参議すけすみ

藤原君
めにちかくおりていのれとかすかのゝもりの榊は色もかはらす

龍吟出家し侍て又のとし春こそのむつきにいなりの御幸
の御ともつかうまつりて侍けるかさしの杉に雪のふりか
かりたりしなとおほしめし出られけれは
あまのもしほひの院御歌

祈こし神さへつらしいなり山いつらは杉のしるしありけり

六條院すみよしにまうてさせ給けるにしのひてまゐりて
よめる　　源しのあかしのあま

若菜下
むかしこそまつわすられね住吉の神のしるしをみるにつけても

おなしなり廿日の月にはかにすみてうみのおもておもし
ろくみえわたるに霜のいとこちたくおきて松はらも色ま
かひてよろつの事そゝろさむきに　　むらさきのうへ

同上
すみのえの松によふかくおく霜は神のかけたるゆふかつらかも

六條院内大臣と申ける時すみよしに御願はたしにまてさ
せ給ひけるに神の御とくをあはれにめてたしと思ひて申
出侍ける　　参議惟光

澪標 拾 百番歌合六十三番
すみよしのまつこそ物はかなしけれ神世のことをかけて思へは

すみよしの御しるしあらたに侍けるかへり申にまうて
てよみ侍ける　　かいはみの右大将

しるしありとたのむ心は住よしの松のみとりのいつかかはらん

みかとてる月の中納言のときかせ給て月かゝりけむす
みよしの松とのたまはせけれは
はつれのせり河の御息所

住よしの神もことわれあはうしま月か、れとはなかめさりしを

かひのものかたりのなかに八月十五日すみよしにまうて
てよめる　　あはひかひの左大辨

いかはかり神の心もすみぬらん今夜に似たる月しなけれは

五節のまひゝめをみてつかはしける　　夕霧の左のおほいまうち君

少女 拾 百番歌合四十一番
あめにますとよをかひめの宮人もわか心さすしめをわするな

登華殿女御にしのひて物申て出ける暁温明殿のわたりな
すくとて内侍所のおほしめすらむこともおそろしくて
女すゝみの左大将

神もよかゝるなけきにむすひける契はけふの我心かは

すまにてやよひのついたちにいてきたるみの日御はらへせさせ給ふとて　六條院御歌

須磨　百番歌合八十八番

やほよろつ神も哀と思ふらんおかせるつみのそれとなけれは

齋院のみそきの日はらへつかうまつるをきかせ給ていとかう〳〵しく物おそろしうおほされて　さころものみかとの御歌

物語三下　百番歌合八十八番

みそきするやほ萬よの神もきてもとより誰か思ひそめてし（われこそ下に思ひそめしか物語）

たゝ人におはしましけるとき御出家おほしめしたゝせ給ひけるを賀茂の大明神堀河院につけ聞え給ふことありて御ほいもとけさせ給はてみやしろにてさま〳〵御いのり侍りけるをきかせ給て御心のうちに

物語四上

神も猶もとの心をかへりみよこの世とのみは思はさらなん

風葉和歌集巻第八

釋教

むかしより心のつくしの契にてなけかむことも此世はかりそ

これはあまのかるもの權大納言思ふこと侍りてはつせにこもりてかゝる思ひやめ給へと申ける夢にいぬふせきよりうろはしきそうのさしいてゝ申けるとなん

こひわふる心はやみにくらすとも雲ゐの月をよそに詠めよ

これはちゝにくたくる左大臣もの申ける女の后にたち給にけるをしらてなけきけるころの夢に石山よりとて巻數のふたにかきつけたりけるとなむ

かけならへすまむことこそかたからめいりかた近き山のはの月

これも石山の觀音のみたらし河の内大臣のゆめにつけ給けるとなん

まてしはしみちくるしほの時のまをかひもなきさと何恨らん

これはちくまのかはの中の君おとゝひともところところにまとひ身のゆくへ祈けるにあれのきよみつにてあらたなるしるし侍けるを聞て石山にこもりて「おこしけるひろきちかひのなかにしも我身ひとつのなともれにけん」とよみ侍ける御かへしの夢の中にとなん

かれはてん後をうらみよ埋木も花さく春も有とこそきけ

これはうつせみしらぬの内大臣の中宮の行へしらぬさ

まになり給ひ頭中將も世なかしこまることなと侍ける
ころきよ水にこもりてかれたらんうゑ木もと經よみ侍
けるなきゝて「花さかむ事ないのりしうもれきはさて
たにくちてれさへかれめや」と思ていさゝかまところみ
て侍けるにこのてらの師の大とくとおほしきか申侍る
となむ

はかなしや夢計なるあふことに長きうれへなかへてしつまん

これはかさぬる夢の大將いとせちにおもふこと侍て法
輪にこもりておこなひ侍けるに夢うつゝともわきかた
きこゑにてつけ侍けるとなむ

しはしこそせきもとゝめゝ妹せ川終に末にはなかれあひなん

これはなるとの侍從いもうとの行へしらぬことなけ
きてくらまにこもりたりける夢に見侍けるとなん

ところ〳〵見ありき侍けるころほうしの女のてなとらへ
て侍けるに佛のの給ふやうにてみゝにいひいれ侍ける

かくれみのゝ左大將

たもたすてあやまつとかなみる時そ敎へし法もくやしかりける

八月十五夜によみ侍ける　雲のうちのひしり

いかて猶わしのみ山にすむ月なこのみるはかりさやかにもみんかへし

うめつほの女御

はれかたきいつくの雲なはらひつゝ君そ心の月はすむへき

なき人のために普賢菩薩つくりあらはしたてまつりてお
こなひ侍ける夜あかつきかたの月くまなうさし入て御か
さりともゝきら〳〵見え給ひけれは

風につれなきの關白

ちかひあらはかゝる光なさしそへてまよはん闇な照さゝらめや

きよみつにこもらせ給ひけるにむれのみてはたてまつり
ぬといふ夢み給ひてかもにまうてさせ給て院の御車にた
てまつるとて

ちくまかはの女院

夢の中に授くとみえしむれのみての誓ひたかはぬ時至りぬる

おなしてらにこもりて思ふ事かなふさまに侍りけれは

戀に身かふる頭中將

あなたふとかれたる木にも花さくととける誓は今そしらるゝ

すゝめのものかたりの中に方便品若人散二亂心一乃至以二

一華供二養於畫像一漸見二無數佛一

何となく手向し花の一ふさにかすの佛なみる身とそなる

人記品

かれはてゝふかき山へのうもれ木に思はす花の咲にける哉

觀持品

心くまわれはへたてゝ思はぬになにゆゑ人のうらみかほなる

神力品

いひおきしこの言の葉な思ひ出てなからん跡のかたみにもせよ

院のふたん御經ちやうもんして侍けるにいつくかことに
たふときと人の申侍けれは

あまのもしほびの院新中將

水の沫の浮てはかなき世の中ないとへととける法そうれしき

兵部卿のみこのはてにさまかへ給はんとて

なみのしめゆふの冷泉院女一宮

涙のみくもる袂にかけてみよころものうらの玉やにこさむ

女院の御ことにこゝちかきりになりて侍けるにいのりの
僧の若人有ㇾ病得ㇾ聞二是經一といふわたりをよむを聞て
いはてしのふの一條院内大臣

きゝわたる御法のかひもあらしかし絶にし人にかきるいのちは

なにはえの宮に八講おこなひて聽聞せさせ給ひけるに
おのれけふたき右大將

君か爲つとめもとめてこと更にひろむる法の心しらなん

此世をわかれはやのほいもさすかなる身の程に思ひわひ
てくるまにのるとて　水あさみの内大臣

何せんに思ひの家をゝしむらんみつの車にのりをえかはて

經よむはいむなりと人のいひけれは
あまやとりの女御

たかせ舟のりもしらてはしら涙のきえなん後そ悲しかるへき

右大將のはゝのために宇治に堂たてゝ供養し侍てよめる
ひちぬいしまの關白

さり共とたのまるゝ哉さしわたるみのりの舟の道のしるへは

をはりにのそみて善ちしきの心にかなふへきことゝて七
重寶樹のありさまなと説聞かせ侍けれは
あれまくの大納言大君

なゝへなるうゑきをしらてもみちはのやしほになとか心染けん

いり日を見はへるとて　つゝらこの式部卿宮北方

こくらくを思ひやりつゝ今いくか西にいりひの影をたのまん

さかの池の中宮の御すゝなとりて半座のうへにてかへし
ならんとて　かやかしたなれの關白

同しよのつらさもさてや忘れなんともとまつへき契くちすは

大僧都御加持にさふらひけるにあふきにかきてさしいて
させ給ひける　あまのもしほひの皇太后宮

結ひつるたゝかはかりなかことにて沈まん後の世をたにもとへ

たいしらす　みふれの皇后宮

幾度かゆきてはかへるむつの道くるしみならぬ處あらしな

いひわたり侍ける女の佛事しけるにさゝけものてうして
つかはし侍とて　さかのゝ二のみこ

せはからぬはちすの花ときく物をもらすへしやはかゝる露まて

かへし　中務卿のみこのむすめ

にこりなき池のはちすの花なれは此世の露はすゑぬなるへし

おこなひなとし侍けるをさまたけゆくすゑなかきことを
ちきりける人に　こゝろ高き後冷泉院の宣旨

このよにはゆく末とても限あるを長く蓮のうへをちきらん

おこなひすとてねふると人のわらひけれはよめる
うたゝねのかつらの尼

きえぬへき露の我身を夢にてもはちすの上におくやとそ思

しのひて物申ける女のなくなりてつみふかきさまにみえ
けれは世をのかれておこなひて思つゝけ侍る
かはれたつぬる三のみこ

うきしつむ池のみくつとなしはてゝ空にひらくる花ときかはや

すみわたりける女かくれてのちあかつきの念佛のゑかう
にもいまさらもよほされ侍けれは女の母に申つかはしけ

る
　　　　あひすみくるしきの内大臣
いつかまた蓮のうへにあひもみむ露のやとりに心まとはて
　　　　式部卿の宮の北方
今はとてはちすのうへを思ふにも露けきは猶この世なりけり
さまかへてのちよみける　　いせをの前關白三君
にこりなき蓮のうへの露計いかてこの世にこゝろとゝめし
さころものみかとあすかゐうせにけりときかせ給てのち
のことなととふらはせ給てうちまとろませ給へるにあり
しなからのさまにてみえ奉りけるうた
物語三下
くらきよりくらきにまよふしての山とふにそかゝる光をもみる
わらはにて心とゝめたりける女のくらくておそろしきに
しそくさしてといふと夢にみてなくなりにけるにやとて
光明眞言よみてその印結ひて思ひやるとて
　　　　あまのもしほひの大僧正
なか空にたゝよふやみは深くとも光をかはせやまのはの月
あつまの方に修行し侍けるに賴義朝臣かせめけんころも
かはのたちに思ふ心ありてそとはたてなとして
すくはんと思ふちかひをたておけはうへも佛のすかたなりけり
入道前關白太政大臣さかにてわつらひ侍けるに行幸あり
て常行堂のみあかしの事なとおほせくたさせ給てよませ
給ける　　有明のわかれのみかとの御歌
末の世を久しくてらせかゝけおくけふのみゆきの法の燈火

風葉和歌集卷第九

離別

中宮のをさなくおはしましけるくしきこえてむすめのみ
やこにのほり侍けるによめる
　　　　源氏のさきのはりまのかみ
松風
行さきをはるかにいのる別路にたへぬは老の涙なりけり
おなし中宮六條院にわたり給ひけるときよめる
　　　　あかしのうへ
薄雲
末とほき二葉の松に引わかれいつかこたかきかけをみるへき
をさなきむすめをみやこにおきてあつまへくたり侍ける
によめる　　よみひとしらすのしま
思はすなまた二葉なるひめ小松引わかれゆくなけきせんとは
よし野に侍けるころあはをの關白のむかへ侍けれはちゝみ
こわかれをしみ侍けるついてに
　　　　いまとりかへはやのよしのゝみこの中君
物語四
いつかたに身をたくへましとゝまるも出るもともにをしき別を
すまにうつろひ給はんとするころきやうたいにより給ひ
てこよなうこそおとろへにけれとて
　　　　六條院御うた
須磨　拾　百番歌合八十六番
身はかくてさすらへぬとも君かあたりさらぬ鏡の影ははなれし
かへし
　　　　むらさきのうへ

須磨 拾 百番歌合八十六番
わかれてもかけたにとまる物ならは鏡をみてもなくさめてまし
そのあかつきになりて　六條院御歌
同上
いける世のわかれをしらて契つゝ命を人にかきりけるかな
御かへし　むらさきのうへ
同上 百番歌合四十六番
をしからぬ命にかへてめのまへの別をしはしとゝめてしかな
中納言もろこしへ思ひたち侍とていとまきこえけるに月
いとあかゝりけれは　はま松の東宮
いかはかり涙にくれて思ひ出んにしにかたふく月を見つゝも
御かへし
古郷のみかさの山を思ひいてゝ我もいかゝは月を見るへき
參議うちたゝ遣唐のそへつかひにわたり侍けるにしたひ
くたりてまつらの宮にとまりてよみ侍ける
まつらのみやのあすかのみこ
物語上
けふよりや月日のいるを慕ふへき松浦のみやにわかこまつとて
同したひかの宰相にしのひてつかはしける
かむなひのみこ
同上
もろこしのちへのなみまにたくへたる心も共に立かへりみよ
もろこしにわたるとて道より女のもとにつかはしける
はまゝつの中納言
かされけんことそくやしきから衣袖のみぬるゝつまと成けり
かへし　山の僧正の母
から衣たちはなれなは我のみそうらむる袖もくち果ぬへき
すまひの節すきてつくしにかへりくたらむとてすけの中
將のもとにまかりてよめる　すまひの修理のすけ

數ならぬ身こそゆくともしたかはれ心は君にたちもはなれし
かへし　右中將
とゝむるも心はみえぬ物なれは猶おもかけそこひしかるへき
あけむとしも又のほるへきよしなと申て
都いてゝまたこん秋の空までもおほつかなくそ待わたるへき
かへし　修理亮
中々に都の月をみそめては心つくしにわれそなかめむ
石山にこもらむとて出侍けるあかつきに女に
みなせ河の左（大イ）中將
今こむと思ふ物から心をはとめてそいつるあかつきの月
かへし　入道一品宮中納言
かへりこむ程をもまたすきえはては此あかつきや限なるへき
もろこしよりかへりわたり侍けるにかのくにの人ともお
くりにまてきてふみつくりなとしけるついてによめる
はまゝつの中納言
物語上
おなしよのしはしの程と思ふたにわかれてふ名はいかゝ悲しき
かへし　もろこしの宰相
同 拾 百番歌合三十一番
あふこなみ雲のきはめをへたてにていつともあらし君を戀らく
あすかのみこをつくしにおきてかへりのほるとてよみは
へりける　まつらのみやの大將冬明
物語上
しらさりしわかれてそへるわかれ哉これもやよゝの契なるらん
かへし　あすかのみこ
同上
いかなりしよゝの別のむくいにていのちにまさる物思ふらん
參議うちたゝかへりわたらんとし侍けるによませ給ひけ

る　　まつらのみやのもろこしの后
物語下 秋かせの身にしむころをかきりにて又あふましき世のわかれ哉
かへし
同上 ゆく舟のあとなきかたの秋の風わかれてはてぬ道しるへせよ
つくしにくたる人にのたまはせける
おちくほの中宮
物語下 なしめともしひて行たにある物を我心さへなとかおくれぬ
かへし　　大納言たゝよりの四君
同上 身をわけて君にしそふる物ならはゆくもとまるも思はさらまし
ふき上に人々まうてきてひころあそひてうつきの朔日頃
にかへり侍けれはよめる　　中納言すゝし
吹上ノ上 かたらはぬなつたにもくるけふしもや契し人のわかれゆくらむ
齋宮をきこえ給ひぬときこしめしてよませ給ひける
ひとる（りことイ）かたのみかとの御歌
別てふつけのをくしもさしてしをまたせきこゆと聞そ悲しき
みやつかへに出たち侍けるにあれのふるさとにとゝまり　　すゑはの露の中納言典侍
て侍りけれは
拾 百番歌合十五番 わするなよ心にもあらてわかれぬる此夕くれそかたみなるへき
母御息所のすみ侍ける所をほかへうつろひ侍とて
しのふくさの先帝姫君
なき人のかたみとみつる宿をさへ又わかれぬるけふそかなしき
をとこの心かはれるさまに侍けれは外にわたるとてかの
をとこのいもうとなる人に　ゆめちにまとふ大納言女
行すゑにたちかへるへき身なりせは別もかくは思はさらまし

かへし　　關白のむすめ
ちとせまてすむへき物を君か爲別といふ名はかけすもあらなん
左大将まのゝうらにこもりゐて侍けるころまかりてかへ
るとてよめる　　女すゝみの中宮權大夫
君をおきてかへらぬたひの空にたに露けかるへき袖のうへ哉
心ほそくおほえけるころすこしへたゝりぬへき人に
みなせ川の入道一品宮中納言
風をまつ露のいのちはえそしらぬたゝかり初のわかれなりとも
たゝにもおはしまさゝりけるにほとちかくなりていてさ
せ給ふとて　　風につれなきよしのゝ院中宮
物語 かり初と思ふへきかはわかれなはさためなき世の命まつまに
宇治にすみ侍けるか心ならすみやこへいつとて
宇治の河なみの式部卿宮北方
いのちをそかきりと思ひしやとなれとさらて別るゝ方も有けり
世中はしたなきことゝもありて女二宮うちにいり給ふに
きこえける　　みなせ川の左大将
なにせんとさらぬわかれをなけきけんかゝる限の道も有けり
ちゝ大貳になりてくしてくたり侍ける女をえとゝめ侍ら
てよめる　　つゆのやとりの權大納言
行末のさらぬわかれを思はすはなけかさらましこゝろつくしを（にイ）
つれなかりける女のつくしへくたりけるにこかれしてか
まと山のかたをつくりてあたりをこかしてをとこのうち
みあけたるをつか（はイ）はすとて　　いはやの左兵衛督
かまと山もゆる思ひもひとしくて我はけふりにたちおくれぬる

かれのつかひにてみちのくにへくたりてのほりけるにか
しこなる女に　うらみしらぬの所の衆
花かつみかつみてたにも戀しきに淺香のぬまをいかてゆかまし
天の迎ありてのほり侍けるにみかとにふしのくすりたて
まつるとて　たけとりのかくやひめ
物語 今はとてあまのは衣きるなりそ君を哀と思ひ出ける
御かへし
同上 あふことの涙にうかふ我身にはしなぬくすりもなにゝかはせむ
とてふしのくすりもこの御うたにくしてそら近きをえ
らひふしの山にてやかせさせ給へりけるとなむ

風葉和歌集卷第十

羇旅三

あふさかをこゆるとてよめる　按察大納言女
かへし
もろともにたゝまし物をよそにのみ聞そかなしきしかのうら波
いせのみてくらの使にてくたりけるときすゝか山にてよ
み侍ける　よその思ひの關白
またき秋のしくれふりぬるすゝか山ならはぬ袖に色そうつらふ
あつまへまかりける時みちにてよめる
のしまの三位中將
物毎にあはれなりけるたひの空わきていつれと人にかたらん
よみひとしらす
なかめわふる旅のあはれのかきり哉月かけかすむ明ほのゝ空
うちなけきいく宵々の草まくら末こそ露はふかくなりけれ
たいしらす　右大將仲忠
たひ人のひもゆふくれの秋風は草の枕の露もほさなむ
百番歌合八十九番　とりかへはやの新中納言
拾 あさほらけゆふつけ鳥ともろともになく〳〵こゆる相坂の關
石山にまうてけるにあふさかをすくとて
風につれなき兵部卿のみこ

又こえむ人にもかたれあふ坂の關のしみつに袖はぬれしと

みちのくにゝくたらんとてしはつといふ所にとゝまりて侍けるに水うみのおもてに月のいみしうあかきを見ても思ひいつることおほくて　あさくらの皇太后宮大納言

しらしかしおきよりをちにかけはなれみし有明の月をこふとは

はゝそひていせにくたるへきにて侍けるにわつらふことありてとまりにけれはあふみたち給日つかはしける

ひとりかとの齋宮女御

あふみてふ名をたのめとも獨けふたつはかひなし しかの浦波

色そむる木のはゝまきて旅人の袖にしくれのふるそわひしき

のしまにまかりて月まちいてたる折しもしかのなきけるに思ひいつること侍けれはよめる

のしまの三位中將

おもかけを涙よりいつる月にみてあかぬ名殘をなしか鳴也

笙のいはやにこもりてよめる　はなの宰相のみこ律師

とほさかるいはやの中のたひねにはこのはの（をイ）衣こけの（をイ）さむしろ

旅に侍ける夜ふる郷の女の夢にみえ侍けれは

ひちぬいしまの内大臣

古郷のなかめやすらん草まくらたひの夢にもみゆる俤

ふきあけよりかへらんとし侍けるにみやことりのなくを聞て　うつほの右少將仲賴

吹上ノ上
なにしおはゝおきをもこえし都鳥こゑするかたを百敷にして

兵衞佐に侍けるときさつまのくにゝうつされけるにいよのみなとゝいふ所にてみやこ鳥をみてよみ侍ける

あたなみの中關白

一本菊物語中
都鳥戀しきかたの名にはあれとわかふる郷のことつてもなし

こゝろにもあらすふる郷をはなれてさすらへけるに初雁のなくをきゝて　ふせやの關白北方

雁かねよしはしとまりて旅の空こひなくかたの物かたりせよ

すみのえに侍けるを關白にいさなはれて都にのほりけるに霧のたえまより松の木すゑはるかにみえけれは

すみよしの關白北方

はかなくてわかすみなれし住のえの松の梢のかくれぬる哉

すまよりあかしにうつろはせ給てみやこなる人につかはさせ給ひける　六條院御うた

明石　拾　百番歌合三十一番
はるかにも思ひやる哉しらさりしうらよりをちに浦傳ひして

えかたかりける女のゆゑにすまにこもりゐて侍けるころかの女のもとにつかはしける　はつれの入道太政大臣

引かされうらみし袖の涙にもいとかくはかりしつまさりしを

父にくしてつくしへくたりけるにふなこともものあらく〱しきこゑにてうらかなしくもとほくきにける哉とうたふを聞てこひしき人もありけれはよめる

源氏のさきの小貳女

玉葛
ふな人もたれをこふとかおほしまのうら悲しけに聲のきこゆる

つくしよりのほるとて　玉かつらの内侍の督

同上
行さきもみえぬなみちに舟出して風にまかする身こそうきたれ

もろこしへわたりける道にて　松浦宮參議氏忠

同上
天の原おきつしほあひにうかふ沫をともなふ舟の行へしらすも

同上
かすかなるみかさの山の月影はわか舟のりにおくりくらしも

世中いとわつらはしきことありてかうらいといふくにゝ
はなちつかはされけるみちにてよめる
参議安倍仲丸

ゆめかたりの宰相中將
なみ枕しらぬたびねのかなしきにいく世を限る道の空そも

つくしへかへりくたりける道にて海のわたりをおりてみ
るかひなとをてまさくりにして右中將のなつかしうかた
らひしを思ひ出て　すまひの修理亮
あさりつるあらいそよりも都にてみるかひありし君そ戀しき

舟よりおりたるになみの高くうちかくれはよめる
こしかたも又ゆくさきもはるかなる涙のなかにもましりぬる哉

もろこしにてふるさとの女を夢にみて　はま松の中納言
物語 拾 百番合二十一番
日の本のみつのはまゝつ今夜こそ夢にみえつれ我を戀らし

秋の夕をなかめて
同上
おく露も霧たつそらもしかのねも雲ゐのかりもかはりやはする　うさのけの物語

おなしくにゝて月をみてよめる
まつらのみやの参議氏忠
物語中
みることになは捨山のかすそひてしらぬさかひの月そ悲しき

雨のふる日
しらさりし思ひをたびの身にそへていとゝ露けきよるの雨哉

風葉和歌集巻第十一

哀傷

ちゝみこの思ひにおはしましけるに年もたちかへり侍に
けれは　いはてしのふの皇后宮
いかなれは暮ても年の歸へるらんわかれはいとゝ月日へたてゝ

おなしころ皇后宮にきこえ侍ける　關白
あらたまる春につけてもすみ染の袖に霞の色やそふらん

母かおもひに侍りけるころ梅壺のこうはいのおもしろさ
を見てよめる　われからの兵衛佐ィ
こゝろかれし冬の枝ともみえぬ哉戀しき人を花になさはや

關白中宮のはゝにおくれてなけき侍ける比梅の花につけ
てさしおかせける　かやかしたなれの宣耀殿少納言
あはれとてみる人からやしをるらん花は物うき色ならね共

かしは木の權大納言みまかりてのちすみ侍りける處のさ
くらのいとおもしろきをみて　夕霧の左のおほいまうち君
柏木
昨ゝあれはかはらぬ色にさきにけりかたえかれにしやとの櫻も

やよひのついたちころ春院に行幸ありて花のさかりを御
らんするにも故院の御賀のをりおほしめし出られけれは
よませ給ける　みかきかはらの春院御うた

萬世とたのみしきみは霞にて花こそ春の色はかはられ

御かへし　皇太后宮

みしなりの花は匂ひもかはらねと人そむかしの春となりぬる

さかの院かくれさせ給ての春きさいのみやたちのおはしますす所にすみ侍けるはるのかたの花さかりいにしへにかはらぬを御らむして　六條院御うた

幻　百番歌合六十三番
今はとてあらしやはてんなき人の心とゝめし春のかきねを

かしは木の權大納言身まかりて後夕への雲のけしきにひ色にかすみて花のちりたる梢ともをみて　源氏の致仕太政大臣

柏木
木のしたのしつくにぬれてさかさまに霞の衣きたる春哉

同上
うらめしや霞の衣たれきよと春よりさきに花のちりけん

さかの院かくれさせ給へりけるころまつりの日一とせ使して侍りしを思ひいてゝかのふるき院にきこえ侍ける　かやかしたなれの按察典侍

ありし世のけふのみあれを思ひ出て神のいかきも哀しからん

一條の大おほいまうち君かくれ侍てのころあやめにつけてしかまの太政大臣のもとにつかはしける　はつれの入道太政大臣

袖よいかにひろまもあらし夏衣さらてもかゝるねをとゝめつゝ

むらさきのうへかくれ侍てのちほとゝきすのなきけるをきかせ給て　六條院御うた

幻
なき人をしのふるよひのむら雨にぬれてやきつる山郭公

女二宮のいみにこもり侍てほとゝきすのなきわたるも催す心ちして　あさくらの關白

時鳥ことかたらひし君ならてしのひもあへすなきわたるかな

御ふくにおはしましけるころ人の御返事に　ねさめの中宮

さらてたに涙ひまなき墨染の袖におきそふ秋の夕露

むらさきのうへはかなくなり侍ける秋夕きりのおとゝのはゝのかくれにしもこのころの事そかしと思ひいてられて六條院にきこえさせ侍ける　致仕太政大臣

御法　百番歌合六十六番
古への秋さへ今の心ちしてぬれにし袖に露そこほるゝ　おきてゝ物語百

一條院かくれさせ給へりけるに冷泉院の一品宮とふらひ給へりければ　玉もにあそふの一條院女一宮

ありとてや人のとふらん消はてゝ露もとまれる草のはらかは

弘徽殿女御わつらひ侍けるに御こゝろもれいならて遣はされける　袖ぬらすの女院

とゝまらは草の原まてとはましをあらそふ露の哀なる哉

宣旨なくなりて後女院にまゐりてよみ侍ける　おなゝ太政大臣

有しよのくさのはらそとみるからにやかて露とゝ消ぬへき哉

左のおほいまうち君も身まかりて後女の思ひに侍ける人のもとにあさちにつけて遣しける　うつほの左大臣北方

忠こそ
こゝのみや淺茅はしけきと思へとも又むくらおほす宿も有けり

かへしなかきむくらに　橘右大臣

同上
人はいさかなしとそ思ふたのめおきて露の消にし宿のむくらは
御こゝちかきりにおほえさせ給ひけるに女御にのたまは
せける　　女すゝみの先帝御うた
はかなくも契ける哉あさち原葉末の露の常ならぬよに
　　れさめの関白
まれけとも君なき宿は花すゝき涙さへこそとまらさりけれ
白河院の皇后宮かくれさせ給ひて秋女院の御かたにまゐ
りてひもときわたれる花の色々もこの秋うらみまほしう
て　　いはてしのふの関白
みし人はあらしにまよふ野への露よもの草木もしをれたにせよ
入道関白みまかりて侍けるにうちにこもりゐてよめる
　　風につれなきの太政大臣
秋ならてあらましたにも山里の君なきあとの夕暮の空
　　関白
哀いかに人はふりにし山さとに秋をなこりの夕にはして
　　左大臣
わきてこの露をは袖にかけよとや秋を名残にとゝめ置けん
きりつほの更衣うせてのち月のあかゝりける夜ふるさと
をおほしめしやらせ給てよませ給ける
　　さかの院の御歌
桐壺　百番歌合五十四番
雲のうへも涙にくもる秋の月いかてすむらん淺ちふのやと
八月十五日三位中将のはゝにおくれ侍て一めくりのはて
に出家し侍らんとて　　かやか下をれの大将
かきりなくうかりし秋のなかはこそかつはうれしき月日也けれ

宇治のあねきみのいみにこもりて侍けるに月くまなかり
ける夜よめる　　かなる大将
狭衣
おくれしと空行月をしたふ哉つひにすむへき此世ならねは
しのひてかよひ侍ける女のなくなりにけるあとにまかれ
りけるにむしのなきけれは　　かはれたつぬる三のみこ
今更に心とめしと思ふ世にをしみかほなるむしのこゑ哉
女の思ひに侍りけるころよわりゆくきりきりすのこゑも
こゝろひとつをとふ心ちして
　　なか月のわかれの式部卿のみこ
別にし秋もすゑはのむしの音におのかよすかの露や悲しき
中納言身まかりにける法事を秋の末つかたにし侍けるに
　　しのふくさの関白
ゆくへなき別の空にくらふれは過ぬる秋はことの数かは
十月はかり前坊の御ふくぬき侍けるに空のけしきも思ひ
しりかほにうちしくれけれは
　　なけきたえせぬ麗景殿女御
朽はつる袖をかへてもしくるれはいつかほすまのあらんとすらん
左大将身まかりける頃しくれのする日女院にきこえ給ひ
ける　　末葉の露の一品宮
なけきつゝ詠る空もかきくもりしくるゝ袖や涙なるらん
御かへし
しくるなる空たにもみすせきかぬる涙の河に身はなかれつゝ
六條院の御いみはてゝ東宮うちへいらせ給ひてのころ木
の葉を思ひこそやれとのたまはせたる御かへし

あしたつの前齋院
思へたゝ梢にのこる木の葉さへ散みたれ行心ほそさを
もみちのきみ
四季ものかたりの中に
思ひ出てゝとふ人あらは山河のそこのみくつをあはれとはみよ
女三の宮の思ひに侍けるころよもすからなかめてよみ侍
ける
風につれなきの關白
おもひきやひとりねられぬよはの霜はらはぬ袖に消かへれとは
せうとの身まかりにけるをひころさたかにもきゝ侍らさ
りけることを思ひて雪のふる日よめる
すまひのとさのかみのむすめ
人しれすきえにけんこそ哀なれよにふる雪をみるにつけても
女の思ひにて侍けるにとしのくれはてぬるもおとろかれ
て
夢かたりの前關白
年くれてうかりし日をはへたつれと有しにまさる吾涙哉
やまいおもくなりてまかてんとしけるにうへさりともう
ちすてゝはえゆきやらしとの給はせけるに
源氏のきりつほの更衣
補遺 百番歌合四十四番
かきりとて別るゝ道の悲しきにいかまほしきは命なりけり
御こゝちれいならすおほしめされけるに中宮に聞えさせ
給ける
女すゝみのみかとの御歌
かきりあらむ今一ときの命をは君にとゝむるこの世ともかな
御かへし
なしむにもよらぬ命を今はたゝしたふにたゆる此世ともかな
中宮をよそのことに聞たてまつりけるにこゝちかきりに
なりてしのひて奉りける
有明のわかれの內大臣
思ひおく君たに今は哀しれこの世にかゝる中はありやと
御かへし
※
いかなりし此よのさきもたとられす思ひしる身そおき所なき
やまひしてよわうなりにけるときしのひてをとこに申侍
りける
やみのうつゝの大納言更衣
たのめてもこの世はよしやわたり河後のうきせをとはむ計そ
心ちかきりにおほえ給て關白にしのひてつかはしけるあ
ふきにかきつけられ侍ける
風につれなきの冷泉院一品宮
なこりとはしらすいつれの野山にもくちなん苔のしたを尋よ
皇后宮にいさゝかちかつきまゐりてさひしうかしとおほ
しいてよと御みゝにきこえおくとて
みかきかはらの宮大將
今はたゝそれかとはかりたなひかん夕の雲のそらをなかめよ
この世のほかになりなはあはれと思ひなんやと申侍ける
人に
はまゝつの左大將のむすめ
けふりけむ人を誰ともしらぬたに夕の雲はあはれならすや
女のゆくへしられ奉らぬをおもほしなけきけるにはかな
くなりにけるときかせ給て夕の雲かすみなかれにてこそ
のほりにけめとなかめさせ給ひて
よもきかはらの春のみや
こそへつゝなかむる空のうき雲に立おくれぬる身をいかにせん
中納言のわさの夜よそに思ひやり侍けるも人しれぬこゝ

ろさしかひなくて　　しのふくさの關白

時のまもおくれぬものとならひきてわかれちにしもそはぬ悲さ

先帝の御わさの夜よみける　　女のすゝみの中將

限あれはそはぬ烟をよそにみて猶おなしよに立やかへらむ

やかてかしらおろして北山にこもりけるとなん

あふひのうへのはかなくなりにけるを鳥へのにおくり給てのち空のみなかめられ給て　　六條院御うた

葵　のほりぬるけふりはそれとわかねともなへて雲ゐに哀なる哉

おなしころ風あらゝかにふきしくれするくれつかた六條院の御かたにまうてたるにあめとなり雲となりにけん今はしらすとひとりこち給ひけれは　　致仕の大おほいまうち君

同上　百番歌合六十六番　雨となりしくるゝ空のうき雲をいつれのかたとわきて詠めん

冷泉院一品宮のわさの夜鳥邊野のかたに雲の一むらたなひきたりけれは　　風につれなきの關白

はかなしやそれかとはかり詠るもむなしき空にきゆるしら雲

としへてのちおなしのに女三のみこをおくりきこゆとて

古へもいまもけふりに立おくれなく／＼はらふ鳥へ野の露

世のきこえをはゝかりて一品宮のふくもき侍らてよめる

思へともこはいかなりし契にてそめぬ衣をそむる涙そ

冷泉院のおほきさいかくれさせ給て一品宮のくろききぬにやつれ給ひけるを見ておとり聞えさすへくもなきにかきり有けるこそとて　　たまもにあそふ關白

かきくらしおつる涙のふち衣きる人わける色そかなしき

あふひのうへかくれてのちにはめる御そ奉れるにつけてもわれさきたゝましかはふかくそめ給はましとおほされて　　六條院御うた

葵　かきりあれはうすゝみ衣淺けれと涙そ袖をふちとなしける

おほきさいのみやいまたまゐり給はて入道關白のみやにおはしましけるころきこえさせ給ひける八のみこかくれてのちかたなる大將まうてきてくろき几帳のすきかけも心くるしけれはすみそめにやつるゝ袖をとひとりことのやうに侍けるに　　宇治のあれ君

椎本　百番歌合八十九番　色かはる袖をは露のやとりにて我身そ更におき所なき

せちに思ひける女のうせて侍けるのちしなんのきぬの侍けるを誦經にせんとこ侍けるに涙のかゝりけるにや色のかへりたるを見て　　とこ中の關白

涙にはころもの色もかへりけりなとやわかれし人はみえぬそ

入道攝政身まかりけるに權大納言のもとにつかはしける　　露のやとりの中將内侍

思ひやる袖たにいまたかわかぬにくちぬや君かけふの袂は

めのとのなくなりたる四十九日のわさし侍けるにうちきつかはすとてかきつけける　　すみよしの關白北方（をとひなん物語）

物語　から衣しての山路を尋つゝわかはくゝみし袖にかされよ

父のふくぬき侍とてよめる　　水あさみの承香殿女御

なきぬらすふちの袂はくちにけりうき身なからやぬきも捨まし

紫のうへかくれ侍ける一めくりのをはりにあふきにかきつけてはへりける　　六條院中將

幻
君こふる涙はきはもなきものなけふなは何のはてといふらん

これな御らんして　院の御うた

同上
人こふる我身も末になりゆけと殘(きイ)おほかるなみた也けり

しのひて內侍督のいろにて侍けるなはてにもぬき侍らて
よめる　はつねのしかまの太政大臣

限りあれはけふなははてといふなれと我身に染る色はかはらし

中務のみこ身まかりてのちむすめのもとにつかはしける　さか野の頭中將

いかにして君なとはまし哀てふことなは人のふるしてしかは

前齋院のいみにこもりて侍けるに皇后宮のとふらひのたまはせけれは聞えさせ侍ける　いはてしのふの關白

とまる身のうきにつけてやなき人の哀なたにもとはれさるらん

父の左のおほいまうち君こゝちかきりになりてみかとの
かゝるなりたにあはれとものゝ給はせぬことゝなけき侍け
るにうせてのちおほむふみ給はせ侍ける御返事にたてま
つる　うつほの宣耀殿女御

同上
みし世にそかくもいはまし歎きつゝ又はみるよのなきそ悲しき

なく〳〵ての山路をたつねしこはらん物語
兵部卿のみこかくれてのちに夢にみえ侍けれは　なみのしめゆふ麗景舍女御

夢のうちにみゆる別の悲しさもありしうつゝにおとりやはする

おほきおほいまうち君のすみ侍ける三條にわたりてすま
ひはへりけるにやり水のみくさもかきあらためて心ゆき
たるけしきなれは　夕霧の左のおほいまうち君

藤裏葉
なれこそはいはもるあるしみし人の行へはしるや宿のましみつ

あれ君かくれて後宇治にまかりてやり水のほとりなるい
はにゐて　かなる大將

東屋
たえはてし清水になとかなき人の俤なたにとゝめさりけん

しのひたる女のはかにまゐりて　おもかけこふる三位中將

とまる身のつれなかりける命哉思ひきえなて道芝の露

やみのうつゝの大納言の更衣のはかの草しけく侍けるに
左大將のゆめにみえ侍ける歌

うらみしのゆきゝの道となしはてゝ茂る草葉はらふ(よ一本)ともなし

贈皇后宮にうちとけすなからみなれ侍けるかかくれ給ひ
てのち軒のしのふなみて　しつくにゝこるの中納言

まことには結ひやはせししのふ草なとあやにくに露けかるらん

權大納言みまかりて後なさなさすの侍けるな見てよめる　露のやとりの辨少將母

つみおきし忍ふの草なみても先哀かたみとねなのみそなく

贈中納言としかけなくなりて後よめる　うつほの內侍のかみ

俊蔭上
わひ人は月日のゆくそしられける明くれ空なひとりなかめて

弘徽殿女御かくれてのちさむらふよなくおほしめしなけか
せ給て御てならひに　女のすくせしらすの第一のみかとの御歌

かなしさはけふの別の心ちして幾とし〳〵な涙からへぬらん

いもとのことなせちにおほせとられけるにこの御手なら
ひなみて聞えさせ侍ける　右衛門督

としへぬる別は露もなくさきてこしなき袖のくちやはてなん

女におくれてとし月ありて後かの女の夜侍ける帳なうち
はらひてふすとて　うつほの壻右大臣

忠こそ
年ふれとわすれぬ人とねしとこそひとりふすにも嬉しかりける

風葉和歌集卷第十二

賀

今上一宮うまれさせ給へりけるうふやしなひにちこの宮
そてうしてきこえ侍ける　おやこの中の春宮女御

龜山の岩ねの小松おいそひてこれこそ千世の初なりけれ

いぬみやのうまれてはへりけるに　うつほの右大將なかたゝ

藏開
みとり子のおほかる中に一葉より萬代みゆるやとのひめ松

春宮のわか宮のいかまゐり侍ける夜よませ給ける　ひちぬいしまの朱雀院御歌

君か世の千とせのはしめ今夜にて雲ゐにたつのすまんとすらん

皇后宮うまれ給へりける七夜に女院よりちこのきぬにむすひつけて「ちよふへき鶴の毛衣いつしかと雲ゐになれむほとなまちみむ」と侍りける御かへし　末葉の露の關白母

生たちて雲ゐになれむ鶴のこの千世の契も君のみそみん

宇治入道關白むそちの賀し給ひて　風につれなきの女院

君か世の猶萬世といのる哉あかぬ心はかきりしられす

大納言たゝよりの七十賀のつゐのうた　よみひとしらす

物語
やそ坂をこえよときれる杖なれはつきてをのほれくらゐ山にも
ちこのいかれのひにあたりて侍けるによみて侍りける
われからの式部卿親王

今年生の若葉の松をためしにて千世のねのひにたれもひかなん
侍従のめのと

けふよりはいかに久しきためしをか子日の松にひかんとすらん
さかの院のきさいの宮の六十賀正月のおとねに女一のみ
こたてまつり給ひけるに御かざし小松の枝に鶴すゑて
うつほのさきの内侍のかみ

菊宴
おのれたによはひ久しきあしたつのねのひの松の蔭にかくるゝ
いぬみやのもゝかおとれにあたりて侍けるわりこどもふ
ちつほの女御につかはすとて
おなし仁壽殿女御

藏開下
萬世のゆくへもしらすおひいつる小松にけふはねのひしらすな
六條院よそちにみち給ふとしをさなき子ともなとくして
わかなたてまつるとてよみ侍ける
たまかつらの尚侍

若菜上
わかはさすのへの小松を引つれてもとの岩ねをいのるけふかな
御かへし
六條院御うた

同上
小まつ原すゑのよはひにひかれてや野への若なも年をつむへき
おほきおほいまうちきみのむすめのうふやにまかりて侍
けるにさかつきのついてに
とりかへはやの中將

二葉より千世のけしきのしるき哉木高かるへきやとのひめ松
かすかの歌のなかにときをたとらぬ松といふことを
うつほの侍従是風

梅花笠
みる人のよはひは千代のあなたをやみとりの松は春とまつらん
右大將うまれ侍けるにちこのきぬつかはさるとて
みかきか原の一品宮皇太后宮

かすか野のわかはの松やちきるらんみねの朝日の千代の光を
御かへし
二品宮

契おくみねのあさけの光こそ二葉の松の千代もてらさめ
宇治入道關白むすめともにもきせ侍けるこしゆはせ給と
て
風につれなきの冷泉院女御

いつれをも木たかゝれとてかすか山松に千年をいはひそへつる
しほやき中將のはかまき侍ける夜よめる
いはやの按察大納言

ときは山生そふ松の末のよは人よりこえてこたかゝるらん
わか宮坊にさたまらせ給てのちうまれさせ給ひしよりの
こと思ひいてられてよめる
のちくゆる大將女御の太夫

いはひおきし心もしるく高砂の松のこたかきすゑをみる哉
中宮のいかによみ侍ける
ひいこかしつく内大臣

千とせへんみとりの松のゆく末をみるへきほとの齢ともかな
中納言すゝしのふきあけのふちゐの宮にて藤の花の賀し
侍けるに藤の花をりて松の千とせをしるといふことをよ
める
うつほのさきの紀伊守

吹上上
藤の花かざせる春をかそへてそ松のよはひもしるへかりける
參議長峰行升

同上
まとゐしていつれ久しと藤の花かゝれる松の末のよを見む

やよひ廿日ころ冷泉院の中宮さきにたゝせ給けるに池のなかしまの藤の松にかゝりてなへてならぬにこれかれ歌よみ侍ける

袖ぬらすの源中納言

松風も枝をならさぬやとなれはかゝれる藤のかけそのとけき

うちのおとゝ

かけさへそなへてはみえぬ紫の雲たちそへる池のふち浪

ひちぬいこしまの前關白太政大臣

關白なのこたんなこかうふりしもき侍ける夜さかつきのついてに

二葉なるみとりの松とみし物を枝しけるまてなりにけるかな

さかの院の御歌

六條院御元服のなりひきいれのおとゝに御けしきたまはせ給御さかつきのついてに

桐壺
いときなきはつもとゆひに長き世を契る心は結ひこめつや

はつねのしかまの太政大臣

うきゝの内大臣なさなく侍けるを入道太政大臣に申つけ侍とて

諸ともにおなしこ末なみとりなる松に千とせのかけならへよ

かへし

小松原二葉なからに引うゑて千世ならへんかけなこそみめ

むすめのはかまきに中宮こしゆはせ給とて雲ゐまて枝かはすへきとの給はせける御かへし

かはきりの中宮新中納言

雲ゐまて生のほるへきわか松のこや枝かはすはしめなるらん

中宮のねあはせに

よみ人しらす あふさかこえね

中務
君か世の長きためしにあやめ草千ひろにあまるねそ引つる

相撲節の日尚侍まゐりて琴ひき侍けるにいかてかそこにもこゝにもよはひ久しくてなとのたまはせて

うつほの朱雀院御歌

初秋二
千とせふる松より出る風の音はたれかときはにきかんとすらむ

かへし

ないしのかみ

同上
こゑたえすふかむ風には松よりもよはひ久しき君そすゝまん

吹上にみゆきありて九日のえんなさせ給ひけるによみはへりける

おなし中つかさ卿のみこ

菊のそのにいくらの齡こもれはか露の底より千世なかふらん

なかつきふたつ有ける秋高陽院にてきくのえんせさせ給ひけるにきくの下行河水のこゝろはへを

よみひとしらすにはれ

君か世は猶長月の秋までもくみてそみゆるきくのしら露

九月十三夜うへの御あそひのついてによみ侍ける

はしたかの左大臣

幾千世と君かみよなはかきらねは月みん秋の數そしられぬ

さかの院の五十御賀の御あそひの夜月やう／＼さしいてて雁のいとちかくつらねたるに

あまのもしほひの院御うた

雲ゐゆく雁のつかひにことつてゝ月のみやこの人やとふらむ

さかの院御歌

めつらしきいそちのけふにあはさらは思ひ出なき我身ならまし

ふゆの御かたにて雪ふり月おもしろき夜人々詩歌なと奏りけるついてによませ給ける

さゝわけしあさの八條院御歌

池水も月ものとけくみゆる哉千とせすむへきやとのしるしに
　　　　　　　　　　　　　　　　左　　大　　臣
すみわたる月のひかりも池水に君か千年のかけをならへて
　　　　　　　　　　　　　　　　左　　大　　辨
雲の上にのとかに澄し月なれはやとかはれともさやけかりけり
　みかと御いかの目おほちおとゝみたてまつりけるにたま
　はせける　　　　　　　　一品宮のさきのみかとの御歌
色かへぬときはの山の小松原千世の梢は君のみそ見る
　關白權中納言うまれて侍けるにつかはされけるきぬのた
　もとにつけられ侍ける　　　おきくらの皇太后宮
たつの子のすかたはしむる毛衣は色らかはらぬためしなりけり
　御かへし　　　　　　　　　皇太后宮大納言
色かへぬためしにたてる毛衣はまちとる袖そおき所なき
　中納言みちたか子うまれて侍ける七夜にらこのきぬやる
　とてよめる　　　　　　　　こゆみの彈正のみこの女
萬世を君にゆつりてこれそこの雲ゐにすたつ鶴の毛衣
　子とものわれも〳〵と年をこひければ
　　　　　　　　　　　　　　としあらそひの母
むれゐつゝ千年あらそふ鶴の子に我萬世をゆつりてもみん
　左のおほいまうち君にさかの院の女一宮ゆるし給て三日
　の夜御かはらけ給けるによみ侍ける
　　　　　　　　　　　　　　うつほの橋の右大臣
藤原君
岩のうへの苔のむしろにすむつるはよをさへ長く思ふへき哉
　　　　　　　　　　　　　　中納言ゆきたゝ

藤原君
あしたつのうつる千歲のやとりには今やいとこいはゝ成らむ
　右大將仲忠に女一宮ゆるさせ給てみかの夜めして御かは
　らけ給はすとて　　　　　　朱雀院御歌
田鶴村鳥
なておほす松のはやしに今夜より千世をはみせよたつのむら鳥
　　　　　　　　　　　　　　源のおほきおほいまうち君
同上
姬松をねたくみるらしあしたつはおのか齡におひやますとて
　いぬみやのうふやしなひにこかねのきしにかきてつかは
　しける　　　　　　　　　　ふちつほの女御
藏開上
むら鳥のつるのこほりにすむきしは松の枝にそけふはとひける
　おなしうふやによみ侍ける　　參議されより
祭使
人ことに千とせの春をそふるまつ幾世かきれるよはひなるらん
　一宮のいかさとにてまゐりけるに給はせける
　　　　　　　　　　　　　　波のしめゆふのみかとの御歌
雲ゐにも立のほるへきまなつるのしはしみきはにあそふ聲する（ちよのはしめのけふこそゆかしきイ）
　御かへし　　　　　　　　　入道左大臣
とひたゝに千世をかねたるまな鶴のしはしみきはに遊ふ聲する
　中宮のをさなくおはしましける時よめる
　　　　　　　　　　　　　　あしすたれの中宮亮
ひなつるの澤邊にしはしやすらふを雲のうへへ送すたてゝしかな
　さかの院きさいの宮の御賀の屛風にねのひしたる所にい
　はに松おひ鶴あそへり　　　右大將なかたゝ
菊宴
岩のうへにたつの落せる松のみは生にけらしなけふにあふとて
　人の家に花そのありいまうゐきする處
　　　　　　　　　　　　　　民部卿されまさ

菊宴
うゑなむる人そしるへき花の色は幾世みるにか匂ひあくとは

人のいへにたちはなの木にほとゝきすなり

参議すけすみ

同上
我宿の花たちはなほとゝきす千世ふるさとゝ思ふへきかな

大納言忠頼の七十賀の屏風にみな月はらへしたるところ

よみ人しらす　おちくほ

物語下
みそきする川せのそこのきよけれは千年の蔭をうつしてそみる

風葉和歌集巻第十三

戀一

女にはしめてつかはしける　かしは木の権大納言

小頴 百番歌合九番
思ふとも君はしらしなわきかへり岩もる水の色しみえねは

同上
とこなかの関白

世のつねのことのはそとやいひなさんいかてしらせん思ふ心を

ゆめかたりの前関白

いかにしてかゝる涙のつゆはかり思ふこゝろをもらし初（一本あ）まし

はなのしろへのつま君

物思ふといふはなにともしらさりき袖に涙のかゝる也けり

中宮いまた内のおとゝのもとにおはしましけるころ聞え
させ給ける

人たかへのみかとの御歌

いかはかり涙の數のおつるなかもの思ふとは人のいひけむ

女院の大納言にのたまはせける

なくら山たつぬるの院の御歌

うちつけの契と人や思らん心のうちをしらせてしかな

おひ思ひ侍らさりけるなとこのもとにつかはしける

さとのしろへの式部卿のみこの大君

しるらめや戀しとたにもいへはえに思へはむねのさわく心を

女をひきとゝめてよみ侍ける

なたえのぬまの春宮大夫

しのふへき心ちやはする數ならぬ身につゝめともあまる思ひを

心に思ふことなしのひかくすとみかとのうらみさせ給ひけるに　みかきかはらの内大臣

誰にかはもの思ふともなかなかにうきはためしの有身ならねは　みかとの御うた

御かへし

うきはためしなからん下の思ひにも我許りこそしりてこかれめ

つれなく侍ける女につかはしける　かはほりの少將

からてもありにし物をなそもかく思ひにもゆる我身なるらん

女をみえぬへしやとぬりこめに入ゐて侍けれとみえさりけれはよめる　ぬりこめの少將

かけみえぬ人を戀れはいとゝしくくるしきやみにまとはるゝ哉

かきりそと思はぬ程はしのはれし涙も今そ色に出ぬる

一條女三のみこにきこえ侍ける　風につれなきの太政大臣

いかにせん色かはる泣せきかへしもらしかねたる袖のなみたを

しのひて女につかはしける　道心すゝむる右大臣

あはれしる人もあらなんもらさしとつゝむ袖よりあまる涙を

きぬの袖になみたのかゝりてうつりたるをとりはなちてそれにかきつけて女につかはしける　うつほの參議ゆきまさ

[illegible] ときてやる衣の袖の色をみよたゝの涙はかゝるものかは

そのかたはらにかきてかへし侍ける

[illegible] 袖たちてみせぬかきりはいかてかは涙のかゝる色もしるへき　ふちつほの女御

梅つほの女御に思ふ心の程いひしらせ侍とて　あふにかふる三位中將

しのひあまり色に出ぬる秋哉人しれすこそしほり侘しに

なとこのから衣かさねはいかにうれしからましといへりけるかへりことに　よつあしの大臣のむすめ

よそなから思ひはそめよから衣かさねはかへる色もこそあれ

大納言すけうちとけたてまつらぬさまに侍けれはの給はせける　みかきか原の御門御歌

我ならぬ人にもうとくならはすはかさねてなかの袖も恨みし

女なうちとけぬさまにてあかさせ給ひけるのちこひしうおほし出られてよるのこゝろもたかへしわひさせ給ふよなよなもさすかにあやしうおほされけれは　さころものみかとの御歌

物語四中 百番歌合九十六番 かたしきにかさねぬこゝろもうちかへし思へは何をこふる心そ

中宮宇治におはしましけるころ聞えさせ給ける　よその思ひのみかとの御うた

かたしきの袖に我のみくちはてゝつれなきさまさるうちの橋姫

こゝろさしありていひわたりける女うちにまゐるへしときゝてよみ侍ける　いはうつ涙の内大臣

あふことのあらはつゝまんと思ひしに涙はかりをかゝる袖哉

つれなかりける女のはるかなるほとへまかりけるにちかき程まておくりてひとへの袖のぬれたるをひきほころは

して　　いはやの兵衛佐

思ふことけにおろかなる涙かなかゝる袂をみてもしらなむ

ふちつほの女御いまたまゐり侍らさりけるころつかはし
ける　　中納言さねたゝ

涙さへなきよなりせは我戀の身よりあまるをいつちやらまし

源　宰　相

しつみぬる身にこそ有けれ涙川うきても物を思ひける哉

右大将なかたゝ

涙川うきてなかるゝ今さへや我をは人のたのまさるらむ

しのひたるをとこの返事に　　ふくろかけの女御

なきかぬる涙の河ときくからに我身さへこそうきてなかるれ

みかとせちにの給はせける御かへりことたてまつり侍け
る　　こうはいの關白三君

せきかぬる涙の色はかはるともあふといふ名をいかゝなかさん

たいしらす　　しつくにゝこる贈皇后宮

つゝめとも袖のしからみせきわひぬ涙の川やうき名なかさむ

女のつれなく侍けるにかゝるを見てなか／＼ひたふるに
心もつきぬへきとて　　夕霧の左のおほいまうち君

せくからにあさくそみえん山河のなかれての名をつゝみ果すは

たいしらす　　おやこの中の内大臣

なけきつむあまのしほやにあらねとも只わかやくともゆる戀哉

しのひたる女にあふきにかきてみせける
はつねのくもゐの關白

我からとたくものけふりそてなれてたえぬ思ひに身をこかす哉

かへしこのうたの上にかけつけゝる　　しかまの太政大臣のむすめ

かきけたんもしほの烟をほたつな下にほのめく思ひなりとも

たいしらす　　ちゝにくたくる左大臣

もしほやくうら吹風に立けふり一かたにたにくゆりわひはや

女のもとにつかはしける　　すみよしの關白

世と共にけふり絶せぬふしのねのくらきやみにもまとはるゝ哉　したの思ひやわか身なるらん物語

しのひたる女につかはしける　　かやかしたゝれの關白

思ひあまり人めわすれてまよへとや誰もしのふの山の通路

たいしらす　　いはかきぬまの頭中将

我戀はいはかきぬまの水よたゝ色には出すもるかたもなし

玉もにあそふの左衛門督

いはかきや沼のみこもりもらしわひ心つからやくたけはてなん

女のもとにつかはしける　　うつほの中納言さねたゝ

みこもりて思ひしよりも池水のいひての後そくるしかりける

中務卿のみこのむすめ春宮にまゐるへしと聞えけるにつ
かはしける　　みなせかはの新中納言

數ならぬなみのした草浮沈みことわりしらぬねそなかれける

人しらす御ところにものいかなはさりけるころよませ給
ひける　　みかきかはらのみかとの御歌

數ならぬ昔ならてもあやしきはみかきかはらの思ひ也けり

かくひとりこたせ給ふをきゝてわれもあるましう心つく
しなることを思ひ侍けれはこゝろのうちに

内　大　臣
つむせりのねにたになかて朽やせんみかきか原の下のうきくさ
身よりあまれる人をほのかにみてよめる
あつまのものゝふ
かくまては思はさりけん古へのせりつみわひし人のこゝろも
わらはに侍ける時院の中納言三位古今なかゝせ侍けるく
れなゐの色にはいてしといふ歌のかたはらにいさゝか書
ておしつけゝる
あまのもしほひの大僧都
したの思ひやわか身なるらむ
かへし
按察大納言三君
ふしのねの烟ときけはたのまれすうはの空にや立のほるらん
齋院に雪にてふしの山つくられて侍けるを御らんして
さころものみかとの御歌
物語二下　百番歌合三十二番
もえわたるわか身そふしの山よたゝゆきつもれとも烟たちつゝ
にもきえす百
おほすことないさゝかもらさせ給つる女に
物語一上　百番歌合三十二番
われはかり思ひこかれて年ふやとむろのやしまの烟にもとへ
しろかねのひとりにくろはうをまろかしてけふりなとし
て女のもとにつかはしける　中納言さねたゝ
藤原君
ひとりのみ思ふ心のくるしきにけふりもしろくみえすや有らん
中宮一品宮と申けるときいてさせ給つるにしのひて聞え
させ給ひける
みかきかはらのみかとの御歌
志のはすはむなしき空もゆくかたなたか爲みゆる下の烟そ
一條院の女一のみこに志のひつゝきこえ侍けるないまは
さしもあらしと思ひなりて
たまもにあそふ關白
下もえに身をのみこかす我戀のけふりやけふは空にみちぬる
一條院の御うた
本ノ
あふむかへし
志たにたく思ひはたえし雲の上に立のほりぬる烟なりとも
●いもうとの中宮の御事をおもひて「かなしきはたれゆゑ
もえしけふりとも志られぬ山にたなひきやせん」このう
らみなたにいかてはるけてしかなと右大將申侍けるに
みかきかはらの内大臣
消ぬへきこれは思ひのけふりともかひなき空にほのめかせとや
月のよかいはみて侍ける女のもとにつかはしける
なたえのぬまの春宮大夫
志らしかしほのみし月のかけてたにおほろけならすこふる心を
關白北方をほのかに御らんしてよませ給ける
とこなかのみかとの御歌
いかにして木のまの月のほのかにもみつと計りを人に志らせん
これをきゝたてまつりて
關　白　家　侍　從
ほのかにも木のまの月いもらしては心盡しの物やおもはん
なとこのはしめて「これやさはいりてはしけきみちなら
ん山口志るくまとはるゝかな」といへりけるかへりこと
に
とりかへはやの前關白四君
拾
百番歌合八十四番
ふもとよりいかなる道にまとふらん行へも志らすをちこちの山
又拾
登華殿女御石山にこもれりときゝて志のひてたつねまう
つとてよみはへりける
女すゝみの左大將
これも又いかなる道のはしめとては出しけ山猶まとふらむ
いとしのひたる女のあたりをたゝすませ給にもかひなけ

れは

よその思ひのみかとの御歌

いとゝしくあふ坂山そはるかなる人の心のせきをへたてゝ

よそながらあかして侍ける女のもとにあしたにつかはしける

かくれみのゝ先帝の三のみこ

くれはとくゆかむとそ思ふこえつともこえすともなき相坂の關

からうしてひとたび返事したる女のまたともし侍らさりけるに

さか野の四位侍從

東路のさのゝ舟はしはしめよりふみもかよはてあらまし物を

女のもとにかきつくし侍けれとも返事をひとたびもみ侍らて

道心すゝむるの中納言

難波潟數ならぬみをつくしてもみつとはかりの一こともかな

かへりこともせさりける女につかはしける

あしろの宰相

いはみかたいかゝうらみぬ白浪のかへる跡さへたえぬと思へは

つれなく侍ける女のもとに

かくれみのゝ左大將

つらしとも恨みし更に思ふことといはぬをまさるかたになしつゝ

いはやの兵衛佐

我ならぬ人にもかくやつれなきと心みかてら身をやかへまし

あるましきことを思ひけるころよみ侍ける

有明別左大臣

身をくたく戀の行へをたつぬれはあふを限のはてたにもなし

宣耀殿女御いまたまゐり侍らさりけるころつかはしける

女のすくせしらすの右大臣

すてゝはや惜からぬ身のなからへてつらさにたえむおなし命を

いかなりけるなりにか女にたまはせける

よもきか原の春宮

戀わびぬ命にかふる物ならは我身をすてゝあひもみてまし

中宮のいまたまゐらせ給はさりけるころ志のひてたてまつらせ給ひける

みかきかはらのみかとの御歌

つらからはたか名かなしき命たにあふにしかへは露のためしを

つれなかりける女のもとにてよみ侍ける

あたりさらぬ内大臣

涙こそさきにもたゝめ命さへ人よりもろき名をやなかさん

ほのかにみて侍ける女のいとせちにおほえけれはつかはしける

水あさみの右中將

命さへ思ひにやかて絶ぬへしあふにはさらにかへぬものゆゑ

身をさらぬみし俤のなかりせはなにゝかくへき命ならまし

參議氏忠琴の音をたつねまうてきてよな〳〵にならひとりてわかるゝあかつきいといたくおもひいれたるけしきをあはれみて

まつらのみやの華陽公主

物語上
玉のをのたゆる程なき世中を猶みたるへき身のちきりかな

かむなひのみこに聞え侍ける

參議うちたゝ

同上
戀しなはこひもしぬへき月日へていかに物思ふ我身とかしる

いと有かたきひまにいさゝか物申ける女にほとなく引わかるとて

あさくらやまの秀才

物思ふと何いにしへをなけきけんかくいひしらぬをりも有けり

たいしらす

よその思ひのみかとの御歌

下ひものとけてもなれぬなこりよりやかてぬるよの夢も結はす

しのひたる女なうちとけぬさまにておかしてよめる

あたりさらぬ内大臣

みしや夢なけくやうつゝいかなりしよはの名殘に我まとふらん

おなしさまにてわかせ給ひつる女のもとにつかはせ給ひける

さころものみかとの御歌

物語四中 百番歌合上二番
おもかけに身をもはなれす打解てねぬよの夢はみるとなけれと

つ物語 同じ
しのひたる所にてなさけなからぬさまにもてなしていつとて

ちゝにくたくる左大臣

世の常のわかれと人や思ふらんこはたくひなき袖の涙を

かへし

按察御息所

たくひなき袖の涙をかけてたにみしよの夢と人にかたるな

風葉和歌集巻第十四

戀二

賀茂の行幸にかみのみやしろに御はらへつかうまつるとてさまさまいのりたてまつるをきかせ給ひてもそのかみの御こゝろのうちはみなたかひておほしめされけれは

さころものみかとの御うた

物語四下
やしまもる神もきゝけむあひもみぬ戀まさにてふ御祓やはせし

つれなくみえける女につかはしける

よみ人しらす拾遺
うつほの右少將なかより

祭使 拾戀五
思ふことなすこそ神もかたからめしはしなくさむ心つけなん

前齋院にきこえ侍ける

はつねの入道太政大臣

さかき葉のさしてつれなきよゝをへて神もゆるせるしめの外哉

あさかほの齋院なり給ていちもおなしさまにうこきなきけしきにはへりけれは

六條院のおほむうた

朝顔
つれなさをむかしにこりぬ心こそ人のつらさにそへてつらけれ

つれなかりける女のもとにまかりてえなんあはてかへりてつかはしける

わか身にたとるの關白

つれなきに思ひもこりぬ心からいくたひ人のうさをみつらん

しのひたるをんなのもとにてさまさまうらみて

ふくろかけの大將

つれなきをうらむるくすの下葉こそ涙の露のおき所なれ

中宮かくれさせ給てのちおなしさまに女院に聞えさせ給ひけるにつれなくのみ見え奉らせ給ひけれは

風につれなきよし野の院御歌

絶さらん命こそあらめおなし世にありてもつらき人の心よ

御かへし

なからへて有にもあらぬ身のうさをなきか恨の數になさはや

おなし女院にちかつきまいらせ給へりけるにおほしいりてむけになきさまにならせ給ていてさせ給へるいらにをませ給ひける

よし野の院の御歌

あさましやさてもいかなるうきそとしうらむ計の契たになき

戀しともうしとも何に思ひけんかゝるつらさなかきりける世に

女のいひのかれてつれなきさまなりけるかまたもさのみこしらへ侍けれは

にほふ兵部卿宮

つらかりし心なみすはたのむるないつはりとしも思はさらまし

さかの院女二のみこの事御けしき侍けるころかのみこのあたりにたちよらせ給て

ところもりのみかとの御歌

物語二上 百番歌合二番
しにかへりまつに命そたえぬへき中々なにゝたのみ初けん　かの物語

なとこの返事につかはしける

みかはにさける皇后宮中納言

拾 百番歌合十七番 や拾遺
頼めすはさてもねなましなそや此くるゝよなゝゝ待せかほなる

なとこのたのめたるよのふけ侍けれは

あさちか露の兵衛督の中君

おひみんとたのめぬよはゝ中々にくるしからすも更ゆくものを

大將ひさしく立より侍らさりけるにみつへきところにさしおかせはへりける

なけきたえせぬの中宮宰相

またしとは思ふ物からまきの戸をさゝて明行空を見しかな

久しうまからさりける女のもとにつかはしける

女すゝみの右大將

かたしきに待らん床のさむしろをかけて忍はぬ時のまもなし

御かへし

前右のおほいまうち君の中君

うきことのみかたしく袖に涙越てやかて身なから朽やはてなん

女のもとにまかりてたいにかへるとてよめる

おとしふみの中將

きたれともしられぬ夜の衣手をぬらしわひつゝかへりぬる哉

あひまにはへりけるところさかみなりける女のもとにたつねまかりて

野しまのさ敷中將

見せはやな野原しの原尋きてあはぬうらみにぬるゝ袂を

おやも心さし侍ける女のもとにつかはしける

一品宮の殿中納言

そま河におろすいかたにあらすとも我思ふせな引なたかへそ

おやの人にたのめたりける女に忍ひてたまはせける

いちくゆるのみかとの御歌

けふやなほ身をなけてまし飛鳥川あすのあふせを人し渡らは

御かへし

大將女御

あふ瀬をも人し渡らはあすか河流れて世にもすましとそ思ふ

いとしのひたる女のもとにていみしうあかぬけしきにう

ちなかめて　有明別の關白
たまさかに人めまち出るよのまたに涙のひまのなとなかるらん

女院の御ゆくへしはしゝりきこえ給はさりけるに聞いて
たてまつらせ給てきこえさせ給ひける　はしたかの三條院の御歌
涙河なかれあふせをまちいてゝいとゝもさわかし袖のしからみ

しのひたる女に御心よりほかにへたつるよな〳〵のわり
なさなとのたまはせてよませたまひける　さころものみかとの御歌
物語一下 百番歌合廿五番
あひみては袖ぬれまさるさよ衣一よはかりもへたてすもかな
御かへし　あすか井の君
同上
へたつれは袖ほしわふるさよ衣つひには身さへくちや果なん

ほのかに御らんしける女のひとへをたてまつりかへさせ
給とて　あふさかのみかとの御うた
かたみとてかくぬきかふるから衣我ならさらん人にかさぬな

いとしのひたる女によひのほとかたらひておのかきぬき
ぬになるとてよめる　なるとの辨
うらかされあかしもはてぬさよ衣きてもかひなき物とこそ思へ
かへし　致仕大納言のむすめ
きぬ〳〵に引わかるれとあひみてはいとゝかされて物そ悲しき

はしめて物申ける女のいとせちにおほへ侍りけれは　なれてくやしき左大將
つらしとてうしとも人をしらさりき何のむくいの今夜なるらん

いさゝか物のたまはせける女に　あしたつの春宮
夢よりもみるほともなきうたゝねに長くも物を思ふへき哉

いとしのひたる處におはしましたりけるにあやにくなる
みしか夜にてあさましうなか〳〵なりけれは　六條院御歌
若紫 百番歌合一番
みても又あふよまれなる夢の中にやかてまきるゝ我身ともかな
御かへし　うすくもの女院
同上 拾 百番歌合廿二番
世かたりに人や傳へんたくひなくうき身をさめぬ夢になしても

年をへて思ひわたりける女にしのひて物申て侍けるあし
たに　ゆるさぬ中の中納言
そのまゝの夢路にやかてまきれなてあふにしかふる命也せは

しのひたるをとこのいてけるあかつきしはしとなかぬ鳥
の音そうきといひ侍りけるに　宮の袖うらむるの兵部卿のみこの女
うたゝねの夢路にまよふあけくれにさめて消ぬる我身ともかな

たれとはしらすなからおのつからあひみることはたえさ
りける女に　まつらの宮の參議氏忠
物語中
思ふにもいふにもあまる夢のうちをさめて別ぬ長きよもかな

しのひたる女のもとより我にもあらていつ（夢のかよひち）とてよめる　よみひとしらす
いかにして今より後も尋みん人にしられぬ夢のかよひち

夢のやうにてよな〳〵みなれける人に今はかやうにもえ
あるましきよし申て　夢ゆゑ物思ひのあめわかみこ
哀とも思ひ出しや人しれぬ夢のかよひちあとたえぬとも

御かへし　　中　宮

これやさはかきりなるらんうは玉のよな〳〵みえし夢の通路

しのひたる女のもとにまかれるあかつきよめる

はつねのしかまの太政大臣

明ぬとて鳥のそらねやはかるらん猶せきかへす相坂の山

關白たちよりて侍けるかあかつきはかへなとやうにいひ

なしてよふかくいてんとし侍けれは

いはてしのふの白川院御息所

わかるれとたくひもあらしさよふかき鳥よりさきの心つくしは

いとしのひたる所にて鳥の聲もたひ〳〵聞えけれは

みなせ河の左大將

まてしはし鳥のねつらき曉もまたは此世にあらむものかは

いらへもし侍らさりける女のあかつき鳥のなくをきゝてい

またにはやういてねといひけれは

とりかへはやの前のおほいまうち君

つらけれと鳥のねならていかてかは明ぬとつくる聲をきかまし

鳥のなくを聞てこの音はいかゝ聞と申けるをとこに

三舟の式部卿のみこの女

うきなから鳥のねことに思ひ出んあかす明ぬるよはの名殘を

女のもとよりいてけるあかつきよめる

みかはにさける前關白

拾　百番歌合廿四番

なきぬへしあかぬ別の曉をしらするの鳥のこゑのつらさに

あさちか露の入道關白

しのひあへすやこゑの鳥に打そへてねにたてつへきけさの別路

かへし　　尚　侍

曉のやこゑの鳥も人しれすうき身しらるゝねをやなくらん

六條院御かたたかへのついてにしのひていりおはしまし

たりけるに鳥もしは〳〵なくに御心あわたゝしくてとり

あへぬ迄おとろかすらんとの給はせけれは

源氏のうつせみのあま

示七

身のうさをなけくにあかて明るよはとり重てそねもなかれける

しのひたる女のもとよりいつるあかつきよみはへりける

はきにやとかる大將

思ひ出よ夕への空の雲たにも命にかへしあけくれの夢

これをきゝてこゝろのうちに　　院　　女　御

なからへてうき世に月日すまはこそ思ひも出め明くれの空

忍ひて御らんせられける女にあかつきの給はせける

露のやとりの一條院御歌

拾　百番歌合九十二番

なからへて世に有明の月すまは又めくりあふ契ともかな

れいけい殿わたりにて女にわかれけるあかつきよみ侍け

る

今とりかへはやの關白

なこりのみ猶有明の月かけをまたあふ迄のかたみとはみよ

女院大將にてつかへ給けるなひか〳〵しきもてなしと御

らんしあらはすなりにやありけん

有明の別の院御歌

いかにせん只このくれとたのみても行かたしらぬ有明の月

御かへし

つれなくて猶有明のかけとめは身の世かたりになりやはてなん

しのひたるところにて有明の月のくまなくすみわたれる
をもろともにみてよめる

ゆくへしらぬ左大將

諸ともに有明の月と思はゝやなと山のはにかゝるちきりそ
女のもとよりかへりけるあかつき

みふねの左のおほいまうち君（右一本）

曉のわかれにおつる袖の雨に光もぬるゝあり明の月

あかすおほされける女をあかつきいさなひいてさせ給て
またかやうなることをならはさりつるを心つくしにもあ
りける哉とのたまはせて

六條院御歌

（夕霧　百番歌合十一番）
古へもかくやは人のまとひけんわかまたしらぬしのゝめの道

もろこしにて河陽縣のきさきを心よりほかに見たてまつ
りてあかすわりなきに立いてむこゝちもせさりけるあか
つきよめる

はまゝつの中納言

（物語一）
わか世にはまたしらさりし曉のかゝる別にまとひぬるかな

御かへし

（同上　拾　百番歌合廿二番）
うしと思ひ哀と思ふしらさりし雲ゐの外の人のちきりを

またはあひかたく侍ける女にわかるとて

ちゝにくたくる左大臣

このくれとたのむるたにも曉の別はをしき物とこそきけ

しのひたるところにて心ならすいて侍ける程いはんかた
なくて

我身にたとるの關白

かきりありて命たえすはいかゝせんちきらぬくれのけふの思よ
おなしさまなりけるあかつきよめる

うもれ木の少將

あらはこそ物も思はめいてゝいなはやかて消なん命ならすや
しのひたるをとこの出なんとするあかつきよめる

有明のわかれの中務卿みこの北方

かくてたゝいとふ命のきえなゝん絶すかなしきこゝろくたかて

白川院に行幸有けるついてに中宮をみそめ奉らせ給ひてあ
したに聞えさせ給ひける

ゆくへしらぬのみかとの御歌

しぬはかりおもふ物から後にまたあひみんことにかゝる命よ

しのひたるところにて明はてぬさきにと人のおとろかし
侍けるにえいてやり侍らて

にほふ兵部卿のみこ

（浮舟）
よにしらすまとふへき哉さきにたつ涙も道をかきくらしつゝ

かへし

うきふねの君

（同上　拾　百番歌合七十五番）
泪をもほとなき袖にせきかねていかにわかれをとゝむへきみそ

とほき程にはへりける女のもとにまかりてさのみもえと
まり侍らて雨のふる日かへるとて

夢路にまとふの式部卿みこ

諸共に思はましかはかくはかり露けき道をとゝめやはせぬ

かへし

大納言のむすめ

せきとめんかたこそなけれ泪河袖のしからみくち果しより

あひかたく侍ける女にからうしてゆきあひたりけるあし
たつかはしける

うきなみの樣中納言

あふせにも猶よとまれは涙川いかゝはすへき袖のしからみ
をとこのおきわかれけるあかつきかされんよはのかすそ

おほかるといひければ

水あさみの大納言のめのと

かさぬへきよはもしらねはから衣やかて涙に朽や果なん

しのひて女にもの申てあしたにつかはしける

玉もにあそふ關白

ときやせしむすひやしけん下紐の亂れてこふるけさのわひしさ

一條の女三のみこにかよひそめてのあしたに

かせにつれなき太政大臣

わかるとてうらみもなれす曉をえそしらさりしかゝる物とは

しのひたる處よりいてゝあしたにつかはしける

うき涙の權中納言

人はいさうつゝかほにやさめぬらんまた明ぬよの夢のかよひち

御かへし

皇后宮

身なからもこゝろの外と思ふまに今こそたとれ夢のかよひ路

女二のみこのもとにしのひてたちよらせ給へりけるあしたに

さころものみかとの御歌

物語二上 百番歌合三十八番

うたゝねを中々夢と思はゝやさめてあはてる人もありやと

もろこしにてはつかなる女にわかれ侍とて

まつらの宮の參議氏忠

物語上

さめぬよの夢のたゝちをうつゝにていつを限のわかれなるらん

春宮の宣耀殿女御いまた參り侍らさりけるにいさゝかみ

きあひてあしたにつかはしける

ねさめの右大將

宵のまの夢はかりにて立わかれけさはいかなる心ちかはする

女のもとよりかへりてつかはしける

みかはにさける前關白

拾 百番歌合四十五番

とはいやないかなる夢をみつるよの名殘の袖のかはかぬるらん

あやしくもけさの袂のぬるゝ哉今夜いかなる夢をみつらむ

やせかはの右衛門督

宇治のなかの君にかよひてまたのあしたにつかはし

ける

匂ふ兵部卿のみこ

經角 拾 百番歌合四十二番

世の常と思ひやらなん露しけき道のしの原分てきつれと

先帝女一のみこにかよひ初てあしたに聞え侍ける

なれてくやしき左大將

ふりにけるけさの心もかくはかり誰かはしらん道芝の露

かへし

なれにけむその道しはの露よりもおき所なき袖のうへ哉

女のもとよりかへりてあしたに

ひとりことの彈正のみこ

分きつる野原の露にまたひぬに袖さへぬれてかへりぬる哉

心さしある女をおきて外にとまりてかへりける道にてよ

める

おのれけふたき大將

露けさもなりにける哉ひとりのみかたしく袖もかくやぬるらん

冬のころ女のもとより歸りてあしたにつかはしける

たゝえのねさめの春宮大夫

いつのまにおく朝霜のきえかへり戀しきことをなけくなるらん

かへし

按察大納言女

我身にそ今朝はゝそふる消かへり草葉のうへの霜とみしかと

六條院たれともしり給はてなのりせよかうてやみなんと
は思はしとの給はせけれは　　おほろ月夜の尙侍

花宴 百番歌合三番
うき身世にやかて消なは尋ても草の原をはとはしとや思ふ

后宮まゐり給へりけるあしたに奉らせ給ける
袖ぬらすの後朱雀院御歌

たくひ世にありやと人に尋はやくるゝ待間のほとの心を

中宮の新中納言にものいひそめていて侍とてよめる
河きりの内大臣

たくひなき心はかりをとゝめ置て又あふまてのしるへともせむ

女のもとよりかへりてあしたにつかはしける
有明別左大臣

袖のうちに我たましひやまとふらんかへりて生る心ちこそせね

あさちか露の入道關白

たましひはあかぬ夜床にとゝめ置てあるにもあらす暮すけふ哉

あしたにおともせさりけるをとこのもとにつかはしける
おなし兵衞督のむすめ

けさとはぬつらさはさても契なくこの夕くれを猶たのむかな

一條院内大臣夕くれにいつとて「おきわひしなに曉をな
けきけん夕へにわきてとまる心を」と聞え侍けれは
いはてしのふの皇后宮

かはかりもとまる心のかはりなはこれやかたみの夕くれの空

たゝひとたひあひてはへりける女に
みかはにさける前關白

拾 百番歌合三十六番
けふもくれあすもすきなはいかゝせん時のまをたにたへぬ心を

いとたはれたる女をとゝめてかへし侍けるあしたに夢に
たになきうかるへきとこのうへにといひはへりけれは
おなし關白

一かたに心をよすと思はゝや哀もかけんとこのうらなみ

しのひてあひて侍ける女の許へ又まかりてあしたに
おとしふみの中將

あふ坂はなれこし關の道なれとゆくたひことにまとはるゝかな

麗景殿女御ともなひてしのひて石山にまうてはへりける
にこれなんあふさかのせきと申なりとて
なけき絶せぬ大將

つひにかくこえける物をともすれは人わひさせしあふ坂の關

内侍督みそめて侍けるあしたにつかはしける
玉もにあそふ關白

こえて後しつ心なきあふ坂を中々せきのこなたなりせは

風葉和歌集巻第十五

戀三

おろかなるさまに思ふらむとおほゆる女にものゝみ心ほ
そきよしかたらひ侍けるついでに

みつからくゆる左大將

命たに世になからふる物ならは君に心のほとも見えまし

かへし

右のおほいまうち君の女

なからふる我身のうきを思ふより外には人をうらみやはする

しのひて御らんせられける女に給はせける

女すゝみの先帝の御歌

君かあたりしはしはなれぬ心こそ我ものからにうらやまれけれ

女にのたまはせける

よもきかはらの春宮

いかにせん後の世まてと契ても猶あやにくにあかぬこゝろを

藤壺の女御さとにて参り侍らさりけるころおほむ心ちれ
いならすおほされけれは給はせける

うつほの御かとの御うた

國冊中
諸ともにありてそよゝもをしまれしかくてはなそや露の命も

しのひてかよひけるところにてをとこ女のもろともにそ
ひふしたるかたをかきてつれにかくてあらはやなといひ
て

にほふ兵部卿のみこ

浮舟 拾 百番歌合四十番・
長きよをたのめても猶戀しきは只あすしらぬ命なりけり

かへし

うきふねの君

浮舟 拾 百番歌合四十番
心たにはなけかさらましいのちのみ定なき世と思はましかは

こゝろかはれるをとこのたちよりてことなしひにちきる
ことゝも侍けるに

かくれみのゝ源中納言女

うきなから消ぬへき哉行末をちきる心はいのちしられは

世の中はしたなくてさとに侍けるころ春宮みこと申ける
ときしのひておはしましてゆく末こちたくちきらせ給け
るに

なたえのぬまの尙侍

めのまへにかゝらすもかなたのめおく行末まては定なくとも

かへていかてわれとの給はせけれは
おなしころあかつきいてさせ給とてなしからぬいのちに

思へともこの世にあまる身のうさをしらぬ昔の契つらしな

月ころありてまうてきたるをとこのちゝのやしろをひき
かけてゆくさき長きことを契り侍けれは

うちの中君

[illegible]
きしかたを思ひ出るもはかなきを行末かけて何たのむらん

心ちかきりにおほえけるにをとこのゆゝすゑをちきり侍
けれは

右山の大僧都女

行末をかけてもなにか契るらん只めのまへに成ぬる物を

女のえあひかたく侍けるに

かせにつれなきの右大將

きえねたゝ戀にわか身よあれはうし又あふ迄の契ならねは（一本す）

右大將つらききさまに侍りけれはゆくへもしられ侍らさり
けるを尋出てたちかへりうらみわひ侍けれは

みつからくゆるの尚侍

涙のみかゝる契はうけれともつらかりしさへかたみとそおもふ

をとこのさま〳〵ちきることも侍りければ

よみ人しらすのしま

わすれしとたれか契らぬちきれともさてこそかはれ人の心は

二品内親王わたり給へるころてならひにして侍ける

むらさきのうへ

若菜上
めにちかくうつれはかはる世中を行末とほくたのみける哉

うちの中君のもとにまかれりけるにかをる大将のうつり
かのふかくしみたるをあやしとゝかめいてゝけしきとり
けるにともかくもいらへ侍らさりければ

にほふ兵部卿のみこ

宿木　拾　百番歌合四十九番
また人になれける袖のうつりかを我身にしめてうらみつる哉

たえてひさしくなりにける女につかはしける

をたえのぬまの内大臣

打かへしなけきそあかすかはしけんをりもしられぬよはの衣を

ひさしうまかりかよはすなりにける女のもとにつかはし
ける

うつほの右のおほいまうち君

蔵開中
よそなから多くの年もへたてきぬこゝろもうらみし時はいつそも

かへし

さかの院の女三のみこ

同上
うらみけんほとはしられてから衣袖ぬれわたる年そへにける

いつはれることにより女院も院にわたらせ給にければこ
もりゐて侍けるを朝覲の行幸につかうまつるへきよしせ
ちにの給はせければことなほるへきにやと思ひてつかう
まつれりけるのちもかひなく侍ければ

いはてしのふの一條院内大臣

あふことの涙のぬれ衣たち出てゝほすやとまちし程そはかなき

内大臣ものおもはしけなるてならひを見つけて思ひたえ
にし中宮の御事を思ひてそはに書つけ侍ける

みかきかはらの右大将

思ひしれこれたにありなみすもあらすみもせぬ戀の下に燃しを

こと人のもとにすみつきて侍けるをとこのたちよりてと
かくいひけるにいらへはへらさりければなと御返事たに
せぬといひ侍りけるに

古郷たつぬる源大納言女

空にのみ心はなりてうきことを思ふはかりも身にはとまらす

みかとの御返事にたてまつらせ給ける

おやこの中の中宮

ひたすらに消も果てなからふる身をはつれなく人やみるらん

宮大将身まかりて後みかとのしのひてとふらひ給はせた
りける御かへりことに

みかきかはらの女二のみこ

つれなさの命はうきに消やらてあれはこの世のなけきそひつゝ

いとつらかりける女につかはしける

かやかしたたれの關白

つれなさをそへてやいとゝいとふらん我たにうしとおもふ命を

つれなくのみみえ奉りける女のもとにゝかつきゝらせ給
へるに御こたへも聞えさりければ大かたの世をもかきり

におほしめしとちめさせ給ひてあしたにつかはさせ給ひ
ける　　さころものみかとの御うた

物語二下　百番歌合四十四番
命さへつきせす物を思ふかなわかれし程にたえも果なて

のちのあふせをたのみ侍ける女のほかさまに成にける夜
つかはしける　　たまもにあそふ關白

けふ迄もながらへましや忘れしといひしにかゝる命ならすは

たいしらす　　ちゝにくたくる左大臣

さりともと思ふ心のなくさめに今も消せぬ命なりけり

宰相中將大貳かむすめに心にもあらすかよひけるころゑん
くはならはさりつるにと心ほそくてよみはへりける
あし火たくやの源大納言女

我ながらなと思ひけんめのまへにかゝる心はみせしものそと

かへし

かはかりの心を人にみせながらけふ迄いける身をいかにせん

とき〳〵物いひわたりたる女にまたこと人かよひけりと
聞てのちにはつかにゆきあひて
いはてしつふの一條院内大臣

立かへりみても哀のいかならん人はかはらぬこゝろなりせは

みこかへの内侍のかみ

岩はしにおとらぬ中のとたえをはたかつらさとか思ひわたらん

右大將かれ〳〵になり侍にければ
しのふのこ少將

露はかり哀をかくる程ならはかくかきたえしさゝかにのいと

三條院御こゝろとめぬさまにみえさせ給ければたてまつ
り侍ける　　はしたかのきりつほの御息所

數ならぬ身をはのきはのさゝかにのいかにかすへき心ほそさを

みかとたゝ人におはしましけるころしのひてかよひ給ひ
ける所をわれにもあらす外へうつろひけるあかつきたゝ
いまなんとは聞えまほしきに鳥もなきければ
あすかゐ

物語一下　百番歌合四十八番
天のとをやすらひにこそ出しかとゆふつけ鳥よとはゝこたへよ

關白いまた三位中將にはへりけるころしのひてもの申け
るをつゝましきことありていてけるみちにかのくるまの
あひてはへりければ　　あさくらの皇太后宮大納言

拾　百番歌合五十五番
玉にこそみちゆきすりのかはかりも哀いつれのよにかみるへき

みかとみこと申けるときかよひ給けるかゝれ〳〵にみえ
させ給ひければほかへうつろひ給ふとてかきおかせたま
ひける　　うたゝねのきさいの宮

何方へゆくともいはしなか〳〵にとはすは人のつらさみえなん

をとこのこと女むかへんとしけるをみて山さとなるとこ
ろへまかりけるにおくりのもの〳〵いつくにとまりぬると
かいふへきといひければ　　よみ人しらす（はいすみに物語）

堤中納
いつくにかおくりはせしと人とはゝ心もゆかぬなみた河まで

おとろかされてまうてきたりけるをとこの「わすられす
思ふ心をしらればやいとかく人のうらみはつらん」とい

ひけるにいたうなきて
　　みつからくゆるの弾正のみこの女
涙たに思ひしらすはしのひつゝふかくは人をうらみさらまし

風葉和歌集巻第十六

戀四

てりみちひめとりかへされ給ひてよませ給ける
　　はこやの平のふとたまの帝の御歌
いとへ／＼いふに心はなくさます戀しくのみもなりまさるかな
中宮をほかにみたてまつりてむかしのかれ侍けるをく
やしく思ひつゝけて　　いはうつ涙の内大臣
身をしらは人につらしとみえましやなとまつ物な思はさりけん
關白のむすめを思ふ心ありていはせ侍けるをうちに奉ら
んとし侍けるにひきたかへてあれのまゐりけるに御つか
ひにまうてきてそなたへつかはしける
　　人たかへの春宮のすけ
思ふよりほかなる人の（こと一本）くるしき（や同上）は今やはしめて君もしるらん
内大臣心かはりたるさまにみえ侍けるころよませ給ける
　　おやこの中の中宮
かはり行人のつらさもわかれぬにいかにしりてか袖のぬるらむ
なとこをほかへそゝのかしやりてさすか袖もぬれにけれ
は　　し水にぬるゝ内大臣北方
我なから心のうちをしらぬ哉いかなるかたに袖のぬるらむ
夕霧左大臣おちはの宮にかよひはしめ侍けるころ致仕の
おとゝのむすめのもとにつかはしける

藤内侍從

夕霧 百番歌合廿二番
數ならは身にしられまし世のうさを人の爲にもぬらす袖かな

よつかぬ御身のありさまみあらはされ給へりける人の御かへりことに　今とりかへはやの中宮

物語二
まして思へ世にたくひなき身のうさをなけきみたるゝ程の心を

うらみたてまつりぬへきことを思ひしらぬさまに侍けるにいかなるなりにかおやしう心のかはりてみゆるにとみかとのたまはせければ　とこなかの弘徽殿女御

しられにし身のうさなれは今更につらさもなにか思ひわくへき

こゝろとめぬさまなりけるをとこのなけくことありてれいよりもおろかに思はれぬへきことゝいひ侍りければ　あしひたくやの大貳女

ありしよりまさらん程のつらさにも又行末を思ひやる哉

たいしらす　女すゝみの登華殿女御

つらきをもうきをもたとる身ともかなさてたに暫時物を思はし

一條院内大臣こゝろにもあらすはなれ聞えてのちさまさまうらみ奉りてはへりければ　いはてしのふの女院

思はぬと人はしりけり別にしうさも哀もかきりなければ（と一本）

しのひたるをとこのかへりことにひまなきよしをいひて侍りけるにさらはまたはえきこゆましあまり人わろき心ちすと申たりければ　みかはにさけるの尚侍

捨 百番歌合廿六番 きぢ
うきに又つらさをそへて歎けとやさいみはいかゝ物を思はん

いかなりけるなりにか内の御文にてならひにし給ひけれ　さころものさかの院の女二のみこ

物語三中 百番歌合廿三番
夢とのみしにもにたるつらさ哉うきは例もあらしと思ふに

しのひたる男のいといたくうらみ聞えければ　我身にたとるの水のたいの女三宮

今はたゝみきと計りの夢をたに忘れんのみそなさけなるへき

内大臣「みしかともわすれぬ夢をとふ人はなくゝすくるうき世なりけり」と聞えて侍けるかへしに　みかきか原の女二のみこ

なからへてあるたに命つれなきをみしかとゝはん程の夢こそ

しのひたる女にたまはせける　おなしみかとの御うた

わすられぬ夢たになくはおのつからさむる涙のひまもあらまし

庚申しける夜かきて女にみせ侍ける　うつほの侍從なかすみ

祭使
ぬるまなくなけく心も夢にたにあふやと思へはまとろまれけり

いとせちに思ひける女のうせにけるかまた人のむすめにうまれぬと夢にみえ侍りければ　しのふもちすりの右大將

忘らるゝなりのあらはやまとろまんいかてかみけん思ひねの夢

みかとにほのかに御らんせられ給ひて後ゆくへしられたてまつらせ給はさりけるころのてならひに　つるのしるへの中宮

いかなりし夢のなこりのさめやらて今もかわかぬ袂なるらん

女のゆくへしらてなけきはへりけるころ

おさくらの關白

明ぬよの中にもやかてまとふ哉はかなき夢をみるとせしまに

はるかなるほとに侍けるころみやこに思ひおきける女の

つらきさまに夢にみえ侍りけれはつかはしける

はつねの入道太政大臣

戀わひてなくさめかぬる夢ちにもいかにみえつるつらさ成らん

物思ひけるころあふきにかきつけ侍ける

やみのうつゝの左大將

長きよをまとろまてのみあかすともしらてや人の夢をみるらん

女をたゝ一たひしのひて御らんしてのちよませたまひけ

る

うきなみの一條院御歌

いかて又思ひあはせん宵のまにみもあへさりし夢のみしかな

はつかに御らんせられたりける女の御夢にみえたてまつ

りて侍けれは

わたらぬなかのみかとの御歌

うは玉の夢はかりなるあふことを語りあはせんうつゝともかな

おやのまもりていとおひかたかりける女のもとにしのひ

てつかはしける

人にかはれるの大將

みし夢をいかにしてかはかたるへき逢見んことの此世ならねは

たいしらす

なるとの中納言

あはれてふ人たにあらはかたらはやみはてぬ夢の忘れかたさを

いとしのひて侍ける女につかはしける

あひすみくるしきの內大臣

思ひいつやあるかなきかにみし夢はいかならんよに語り合せん

かへし

源大納言三君

ほのめきし曉かたにちかへてし夢よかけてもかたらさらなん

みかとにほのかに御らむせられて侍ける後心ちかきりに

なりてよめる

みかきか原の前左大臣三君

後の世とちきりしはかりたのまれて絕にし中の夢のうきはし

いとせちに思ひける女にたゝふはしそひて侍けるかゆく

へしらすなりにけれは

ちゝにくたくる左大臣

夢とのみ思ひなせともみしまゝの俤にこそわすれわひぬれ

御心さしありての給はせける女のあらぬさまになりにけ

れは

いはてふのふのさかの院御歌

忘れはやとうきに幾たひ思へとも猶俤の身をもはなれぬ

つれなくみえ奉ける女のいのちの後をたのめてもみむと

聞えけるをおほし出てよませ給ける

よその思ひのみかとの御歌

物思ふ命をのみもいとふ哉ちきりし後の世をたのみつゝ

中納言よそなからかたらひける女をつひにはみるへきも

のに思ひて侍けるにおやひきたかへこと人につけて侍り

かけれは「くりかへしなほかへしてもおもひ出よかくは

れとはちきらさりきな」と申て侍りけれは

はま松の大貳女

物語三 契しを心ひとつにわすれねといかゝはすへきふつのをた卷

ひのもとの中納言かへりわたらんとし侍けるに八詔の

詩にそへて

おなしところこしの大臣五君

物語・拾 百番歌合廿六番 けふ物語 今やとふとくやみゆると待つゝも同し世にこそなくさめてふれ

御こゝろにもあらす右大将のもとにおはしましけるころ
おもほすことありて

めもあはぬの右大臣の皇后宮

おなしよにかはかり物を思ふともしらてや人のわすれゆくらむ

ちゝみこ我なん世にひさしうあるましとて右大臣にねん
ころに申おきて程なくかくれ侍にけるのちおとゝまたか
れはてにけれはつかはしける

うつほの式部卿のみこの中君

(蔵開中)
結ひ置てわかたらちねはわかれにきいかにせよとて忘はてしそ

右のおほいまうち君ほかにつかはせりけるふみを後冷泉
院たつねとらせ給てしのひて給はすとて「いかにして思
ひしらせんとおもひしをこれこそ神のたすけなりけれ」
人をそともにの給はせて侍ける御かへし

心高き宣旨

かきりそと思ひ絶にしその日より又なけくへきこともなき身を

しのひて物いひわたりける女のこと人にむかへられにけ
れはつかはしける

ねさめの関白

限とて思ひ絶にし世中に涙しもなとつきせさるらむ

たれともしらて物申ける女のいとたくひなくおほえ侍け
れはかならすこゝをたつねへきさまにかたらひおきける
所にゆきてもむなしうたちわつらひてふえふきうたなと
うたひける末つかた戀しなとはおろかなりとふたかへり
はかりの後神うたにうたひ侍ける

をたえのぬまの春宮大夫

あふ事はまたなき中にいかなれは涙はかりの絶ぬなるらむ

これをきゝゐたるもいとたへかたくて心のうちに

ないしのかみ

人はかく涙はかりをかこちけり我は命も絶ぬへき身そ

をとこの[木ノ]みまうくはまてこしこゝろになんあるへきとい
ひけるに

ひとりことの按察大納言女

いかにせんたえなんもうし青つゝらくるはくるしと思ふ物から

御門おもほしわすれたるにやとおほえ給ひけるころ

秋のよなかしとわふるの齋院の母后

いつのまに契りしことは忘草しけれる中となしはてつらん

右大臣の一條の家にこれかれすませ侍けるこゝろかはり
にけれはみなたよりにつけつゝちり〳〵になりけるにた
けなとちかきはしらにかきつけ侍ける

うつほの橘右大臣のいもうと

(蔵開下)
こぬ人をまちわたりつる我ならてまかきの竹も誰をはらはむ

ものおもほしけるころ竹の風にそゝめくを御らんしいた
して

こまむかへのみかとの御歌

思ひ出よおつる涙にくれ竹のよゝにもかゝるなけきありきや

尙侍心にもあらすうちに參り侍ける頃たのみこしことそ
かなしきくれ竹のとかきてはへりけるを見て

たまもにあそふ關白

吳竹のよゝにたえしと思ひしをいかてむなしきなかと成けん

内にまゐらんとし侍けるのちのあふせをさま〳〵ちきり
ていははほにおふるまつほとはと申ける人のかへしに

おなし春宮のはゝ女御

契きと我はわすれす思ふともいはほにおふるまつ人もあらし

六條院あかしのうへの事ほのめかしの給はせたりけろ

御かへし　むらさきのうへ

明石
うらなくもおもひける哉契しをまつより浪はこえしものそと

もの申ける女のもとにこと人のまかりかよふと聞てつか

はしける　かをる大将

浮舟　百番歌合二十三番
なみこゆる比ともしらす末の松まつらんとのみ思ひける哉

あすかゐのことさらに思ひわすれすそこのもくつまてた

つねまほしうおほされけれは

さころものみかとの御うた

物語二上　百番歌合六十四番
思ひやる心いつくにあひぬらんうみ山とたにしらぬ別に

關白いとせちにいひよりて人たかへしたるさまにみえは

へりけれは　みかはにさけるの女院御匣

拾　百番歌合三十八番
なけきこり道まとひける山人のきくてにかゝる物を思ふよ

山さとに人をしりおきてかよひけるにたひかさなりけれ

はとのいのものなとおきてまもらすることになりてえあ

はてなへり侍とて　にほふ兵部卿のみこ

浮舟　百番歌合四十二番
いつくにか身をはすてんとしら雲のかゝらぬ山もなく／＼そ行

いとつれなくみえたてまつりける女のはてはやまひにさへ

なりにけれはよませ給ける

風につれなきのよし野院御歌

ありしよのうきにはたゝに消なましなにゝ命の長き思ひそ

こゝちそこなへりけるにいさゝかおこたりてのち女のも

とにつかはしける　ひちぬいしまの關白

たえぬへくみたれし玉の誰ゆゑにけふ迄かゝる命とかしる

こゝろならすへたゝりてあひかたくなりにける女にやま

ひにわつらひけるころつかはしける

おやこの中の内大臣

さりともと思ふはかりにかけとめし命も今はかきりなりけり

心ちかきりになりて侍けるに女院しのひてわたりおは

しましたりけれは聞え侍ける

いはてしのふの一條院内大臣

こと〻へよ戀もうらみもはれやらて誰故ならすやみにまとはゝ

みかとにはつかにみえ奉りて侍けるのちこゝろならぬこ

ともありぬへかりけるを思ひわひてよをそむきて侍ける

かかきりのさまにさへなりにけれは内わたりにさふらひ

ける人につかはしける

みかきか原の前左大臣三位

そむけとも此世なからは忘れぬに身をかへてこそ慰みもせめ

このふみをみかとにみせたてまつるとて

ふるいほの中納言

夢にたにしらぬもかなし侍にこそわきてかくへき露のかことな

ときはにしのひてすみ侍けるに心地かきりになりて

あすかゐ

物語古本四下　百番歌合六十八番
なからへてあらはあふよをまつへきに命はつきぬ人はとひこす

れさめのひろさはの准后こゝろにもあらすおい関白にむ
かへられてなけき侍けるころわか関白の夢にみえ侍りけ
るうた
物思ふにあくかれ出てうき身にはそふたましひも泣々そふる
宣旨ゆくへしられ奉らすなりてのち今はむなしきからと
しらすやと聞ゆると御ゆめに御らんして
心高き後冷泉院御製
拾 百番歌合七十七番 戀わひてまよふわかたまことならはむなしきからの行へ尋よ
たいしらす
うつほの侍従なかすみ
寝覚 人を思ふ我身のたまはなからなん空しきからはなけきしもせし
あひかたかりける女のあたりなる人にいひ侍ける
あまのかるもの権大納言
拾 百番歌合九十九番 袖のうらに涙よせかくるうつせ貝むなしきからに成や果なん（といつかなるへき 拾）
しのひて物申ける女のこと人にさたまりぬへく聞侍りけ
れは
うきなみの権中納言
この世にて絶はてぬともみつせ川今一たひのあふせあらしや
いけらしと身ないとひても同しよなわかれんことは猶そ戀しき
帥宮のむすめ
かへし
いかて猶わたり初けんわたり河今一たひのあふせはかりに
たくひなくうき身なからも同しよに今幾世かはありときかれん
いまはのきはにあはれなる歌ともかきて皇后宮に奉らせ
給へとて一品宮に聞えさせ侍ける
みかきかはらの宮大将
涙河この世の外になかれぬと袖よりもらせ水くきのあと

なとこの絶はてにけれはあまになりて侍けるかみなへつ
みてかのなとこのくるまのみえけるにしのひていれさす
とてかきつけゝる
たまかしは
うきしつみこふる涙のうみなれは今はあまとそ我は成ぬる
心よりほかのふねの中にて身なかきりに思ひなりにける
にみかとのわたる舟人とかゝせ給つるあふきにかきつけ
ける
あすかゐ
物語一下 百番歌合三十四番 かちなたえ命もたゆとしらせはや涙の海にしつむ舟人
ななしなりうみにいりなんとてかきそへはへりける
同上 同歌合九十一番 早きせのそこのみくつになりにきとあふきの風に吹もつたへよ
あはれと思ひける女のあはつのはまのほとりにて身なな
けにけりと聞て石山にまうて侍けるにうちいてのほとす
くとてよみはへりける
あさくらの関白
拾 百番歌合五十七番 戀わひぬ我もなきさに身をすてゝ同しもくつと成やしなまし
殿一本 故中納言たよりのついてに一よとまりてまたともとひ侍
らさりけれは身をなけんとしける所にてうかひなみつけ
てはかまのこしをひきやりてかゝりの松のすみしてかき
てかの中納言につたへよとてとらせ侍りける
かたのゝ大領か女
かつきゆるうき身の沫と成ぬとも誰かはとはん跡のしら浪
たゝ人におはしましけるときこかはにまうてさせ給によ
し野のあたりにてあすかゐのことおもほし出られてかは
かりのふかさなたに思ひいりかたけなるにいかはかりお
もひてかなとおほしめされて

さころものみかとの御歌

物語二下　百番歌合五十番
うきふねの便にゆかんわたつみのそことをしへよ跡のしら浪

あすかゐのものかきて侍けるあふきを御らんするになみたのあといと〳〵しるくみえともゝあらはれておちたるをまたなかしそへさせ給ふとて

同上　同歌合九十番
涙河なかるゝあとはそれなからしからみとむる偶そなき

風葉和歌集巻第十七

戀五

としをへていひわたりける女にむつきのついたちにつかはし侍ける　　うつほの參議よしみね行まさ

若宴一
立かへる年とゝもにやつらかりし君か心もあらたまるらん

宣耀殿女御いまたまゐり侍らさりける頃給はせける　　女のすくせしらすの第一御門御歌

こゝのへの霞のよそになけきつゝはれぬ思ひに世をつくせとや

梅のさかりなる所にてもの申て侍ける女のゆくへしらぬことをなけきてよめる　　まつらの宮の參議氏忠

物語中
とはゝやなそれかと匂ふ梅かゝにふたゝひみえぬ夢のたゝちを

弘徽殿のほそとのにたちより給へるにおほろ月夜に似るものそなきとうち眺めける女をふとゝらへさせ給て　　六條院御うた

花宴　百番歌合二番
ふかきよの哀をしるもいる月のおほろけならぬ契とそ思ふ

こゝろならぬこと侍けるあかつきよみ給ひける　　なれてくやしきのかつらのみこ

春のよのはかなきほとの契故人のつらさをみつる夢かな

女のもとよりかへりてあしたにつかはしける　　み山かくれの宰相中將

みるほともなくて明ぬる春のよの夢ちにまとふわか心かな

かへし　　　よみ人しらす

春のよのみはてぬ夢はさもあらはあれ人の心のかゝらすもかな

はやう見侍ける女のこと人につきてのちものまうての所にまゐりあひて侍けるに志のひてつかはしける

時雨の中将これすみ（け一本）

みしや夢これやうつゝとたとるまに亂れてあかす春のよなよな

右のおほいまうち君またともとひ侍らさりけるにおしをりて出にけるかつらの木の叉のとしもえいてたるをみて

うつほの内侍督

忘れしとちきらぬ枝はもえにけりたのめし人そこのめならまし

をとこの柳につけて下にのみ思ひみたるゝ青柳をといひて侍けるかへりことに

ほとゝ〵のけさうの式部卿宮姫君侍風（從カ）

一すちに思ひもよらぬ青柳は風につけつゝさそみたるらん

かしは木の權大納言とかくいひおこすること侍ける返事に

二品内親王家小侍従

今更に色にないてそ山さくらおよはぬ枝に心かけきと

女院をはつかにみたてまつらせ給て櫻につけてきこえさせ給ける

あたりさらぬの一條院御歌

今さらにかすみへたては山さくらひとめみてきと人にかたらん

御かへし

春をへて霞はれせぬ山さくらいかなる折かとほめにもみむ

女のもとにつかはしける

うつほの中納言雅明

水まさるよとのまこもの老の世にふかく物思ふ春にも有哉

山ふきを折て齋院にみせきこえさせ給とてくちなしにしもさきそめけむ契こそとの給はせて

さころものみかとの御歌

いかにせんいはぬ色なる花なれは心のうちをしる人そなき

ふちの花を女にたまはすとて

はしたかの三條院御歌

あふことをまつにかゝりて年ふれは袖のみぬるゝ池のふちなみ

四季のものかたりの中に

ほとゝきすのみかとの御うた

心には猶かゝりけりもろかつら思ひたえにしあふひなれとも

御かへし

あふひの齋院

言のはにかけてもなにか思ひ出るいつきの宮のしめのしたくさ

六條院まつり御らんしける御車に奉りける

源典侍

くやしくもかさしける哉名のみして人たのめなる草葉計を

祭のころあふひかけわたして思ふことなけなるを御らんせさせたまひて

よそのおもひのみかとの御歌

草の名なかけても更にかひなきは神のゆるさぬかさし也けり

しのひて御らむせられける女のもとにてあかつきほとゝきすのなきわたるをきかせ給て

たいの先帝の御歌

時鳥なきていつくに過ぬらん我のみつらき志のゝめの空

姓かはりたるはらからあまた侍ける女ともの中につかはしける橘の女に

あさつゆの權中納言（待一本）

にほふともかひやなからんいたつらに我袖ふれぬのきの橘

かへし

いたらにて昔にならむ徒にわか袖ふれし軒のたち花

五月五日女のもとにつかはせ給ける

さころものみかとの御歌

（物語一上　百番歌合廿番）
思ひつゝいはかき沼のあやめ草みこもりなからくちはてねとや（やにてなん百）

たえてひさしうおはしまさゝりける所をものゝたよりに
おもほしいてゝたちよらせ給へるに更にえわけさせ給ふ
ましきよもきのつゆけさになんはへると申けれは

六條院御歌

（蓬生　百番歌合七十九番）
たつねても我こそとはめ道もなくふかきよもきのもとの心を

先帝の宣耀殿女御いまた参り侍らさりけるにさみたれの
はれまなきころ給はせける

女のすくせしらすの第二御門御歌

人しれぬなかめもいとゝくらされてなくさめかたき頃の空かな

もの思ひけるころさつきになりてはいとゝひまなき空の
けしきにつけてもおもひやるかたなかりけれは

みかはにさける前關白

我おもふ人にみせはやさみたれの空にもまさる袖のしつくを

ひさしうおとし侍らさりける人にさみたれのひまにつか
はされ侍ける

こけのころもの一品宮

思ひやれはれまもみえぬ五月雨にとはて程ふる袖のしつくを

登華殿女御まかりいてゝはへりけるに給はせける

はな宰相のみかとの御歌

夏のよの夢のたゝちにゆきまよひ出し有明のかけそ戀しき

御かへし

有明のわかれし空をなかむれは秋よりさきの露そこほるゝ

女につかはしける　　うつほの右大辨すゑふさ

（夢宴[?]）
夏草におく露よりもはかなきは君にかゝれる命なりけり

物おもほしける比ほたるのとひかふを御らんして

みかきか原の御門の御歌

身をかふるひとつ思ひの夏むしもいと我はかりこかれやはする

六條院なほ人からのとの給はせたるかたつかたに

うつせみのあま

（空蝉　百番歌合十九番）
うつせみのはにおく露のこかくれてしのひ〳〵にぬるゝ袖哉

たいしらす　　さころものみかとの御歌

（物語一下　同歌合十九番）
こゑたてゝなかぬはかりそ物思ふ身は空蝉におとりやはする

女のもとにうつせみの身にかきつけてつかはしける

うつほの右大將なかたゝ

（笑佐[?]）
ことのはの露をのみまつうつせみも空しき物とみるかわひしさ

しのひたるをとこのほかさまになりぬへくきゝけれはみ
な月のすゑつかたつかはしける

なれてくやしきの式部卿宮女

夏虫のひとつ思ひにもゆれとももたれぬ秋の風そすゝしき

あるましきことを思ひけるにその女のもとになこしの月
のわひしきはいむてふことのなきにそ有けると人のいひ
おこせたるをみてかたはらにかきつけはへりける

うつほの侍從なかすみ

祭使
人はいさなこしの月そたのまれしせゝのみそきに忘らるゝやと

秋のはしめつかたをとこのかへりけるあしたに

いはてしのふの皇后宮

ならひこし袖のわかれも秋は猶身にしむ色の露そこほるゝ

心さしありける女にはなれてまたのとし七月はかり秋といふ名もわきて身にしむ風のおとにいとゝ思ひくたけてよみ侍りける

おなし一條院内大臣

わかれにしなにはふりぬる秋なれと猶おとろかす風のおと哉

中宮いてさせ給ていとさひしうおはしましけるにきこえさせたまひける

みかきか原の御かとの御歌

ほさて又秋にあはんと思ひきや別れし袖の露のふかさた

ふちつほの女御いまたまゐり侍らさけりけるに七月七日給はせける

うつほのみかとの御歌

祭使
つれもなき人をまつまにたなはたのあふよもあまた過にける哉

うちとけては御らむせられさりける女に給はせける

なたえのぬまの春宮

ふきむすふ露のみたれもなかりしを何と身にしむ萩のは風そ

ものゝたよりに御らむせられたりける女の有さまさたまりにけるにたかやかなるをきにつけてつかはさせ給ける

六條院御うた

夕霧　百番歌合十五番
ほのかにものきはの萩をむすはすは露のかことを何にかけまし

思ひむすほるゝこと有てはしつかたになかむるになりしりかほにこたふるをきのうは風もけにあやしき程なりければ

有明前中務卿みこの北方

あた人の心の秋のみえしより我身にとまるをきのうはかせ

とひとりこちけるをたちきゝてふとさしよりて

左大臣

下荻のわれにしなひく風ならはあたなる秋のこゑはしらせし

みかと御心かはりよのつねならてとしへぬる秋の夕をなかめて風にとまらぬ露もうらやましうといひかね侍ければ

よその思ひの登華殿女御

きえねかし袖の涙の露とたにうき身をはらふ秋風もかな

野わきのまきれに皇后宮を見たてまつりてのち心ちかきりになりにけれは中務内侍につかはしける

みかきか原の宮大将

身にしみて思ひ出るも戀しきにその秋風の露ときえなて

秋の野かきたるあふきをもちて侍けるにみかといもうとのことをおほしてこゝろにはしめゆひおきしはきのえをとかきけかさせ給へりけれは

さ衣の宰相中将

物語下
おしなへてしめゆひわたす秋のゝに小萩か露をかけしとそ思ふ

そのゝちいもうとのもとに

みかとの御うた

同上
一かたに思ひみたるゝしのすゝき風のたよりにほのめかしきや

女のもとにつかはしける

いはやの左兵衛督

花すゝき末こす風のほのかにもそよとこたふる聲を聞はや

左大将かたみにとてひとへをきかへて侍けるにひさしうおとつれはへらさりけるころすゝきにつけてつかはしける

いせをの式部卿のみこの中将

忘るなといひしかたみな思ひおきてまねくな花の袖そ露けき

いとつれなき女に秋のころつかはしける

うつほの中納言雅明

まねくかとみる程たにもなくさめんのへのな花に風はふかなん

かへし　ふちつほの女御

身にさむみ人の物思ふ秋風になひくなはなたのまさらなん

たち花の右大臣かれはてゝはへりけるころすゝきのまねくなみてよめる

うつほの左大臣北方

忠こ
まつ人の袖かとみれは花すゝき身の秋風になひくなりけり

おなしころさま〳〵うらみつかはしけれとなほさりなる返事はかりしてはへりけれは

同上
しら露に色かはり行秋はきは玉まく葛のかひなかりけり　も一本物語

みかとひさしうとはせ給はさりけるによませ給ひける

うたゝれのきさいのみや

秋のよの草葉におきてあかせともつゆ哀とてとふ人もなし

秋のころ山さとなりける女のもとにまかりてたゝにかへりてよめる

たゆみなきの中将

徒に秋の野山の露わけてさもほしわふる袖のうへかな

返事せぬ女に　なるとの中納言

玉札のあともみえねは初鴈の思ひつらねてねなのみそなく

かへし　大納言女

はつ鴈のうはの空なる玉つさはかきつらぬともあとやなからん

中宮いまた参り給はさりけるに聞えさせ給ひける

かやかしたなれのさかの院御歌

大かたの秋のならひの風のおとをつれなき色に何かこつらん

いさゝか物申て侍ける女のあたりにつかはしける

はきにやとかる大将

もらさはや身にしむ秋の風の音に下はの露のたえて消ぬと

野分しける日女のもとにつかはしける

夕きりの右大臣

野分 百番歌合十八番
風さわきむら雲まよふゆふへにも忘るゝまなくわすられぬ君

風のあら〳〵しき日女に袖をかはして

袖ぬらす大おほいまうち君

こからしの風もよそにそ聞わたるかはせる袖のひましなけれは

かへし　准后

いつ迄かよそにも聞んともすれは身にしみぬへき山の嵐を

秋のころはなれて侍ける女につかはしける

とりかへはやの内大臣

拾 百番歌合八十七番
戀わひてなかきよすからねさむれはならはぬ秋の風をしる哉　月をみる 同上

かへし　權中納言女　母一本

君はさや思ひしるらん我はたゝいつともわかすあきのこゝろは

八月十五夜中宮をほのかに見たてまつりて

いはてしのふの左衛門督

かけとめんものならなくに秋のよの雲まの月をなみにみつらん

おなしよの月のくもりて侍りけるにこそくまなかりしか思ひ出らるゝ事はへりけれは

雲ゐの月の左大将

戀わふる涙や空にくもるらむみしよにも似ぬ秋の月かけ

たいしらす
さころものみかとの御歌
物語一下 百番歌合六十三番
しきたへの枕そうきてなかれぬるいもなきとこの秋のね覺に

六條御息所むすめの齋宮にくしてくたらんとし侍けるに
なか月のはしめつかたたちよらせ給へるに明ゆく空のけ
しきことさらにつくりいてたらむやうなれは
六條院御歌
賢木 百番歌合三十七番
曉のわかれはいつも露けきをこはよにしらぬ秋の空かな

御かへし
同上
大かたの秋の別も戀しきになくねなそへそ野へのまつむし

しのひたる所よりいてけるあかつきよみ侍ける
よその思ひの右大將
君故のつらきわかれはなれぬれと猶まとはるゝ秋の空かな

女のもとにまかりけるみちにきりのふもとをこめてたち
わたりけれは
河霧の内大臣
川霧は行へきかたをへたつれと心のかよふ道はたとらす

いとしのひたる女のもとよりかへり侍けるみちに霧のた
ちこめたりけるに
うきなみの權中納言（はかな一本）
けさのまの川せの霧のへたてたに立わかるゝはくるしき物を

思ふ事はへりて石山にまふてはへりけるに山のもみちの
いとおもしろきをみて
道心すゝむる右大臣
もみちはの色はものかは涙のみかゝる袖こそさまさりけれ

志賀にまうてゝ紅葉の露にぬれたるをゝりて女につかは
しける
うつほの中納言實忠
嵯峨院
我戀は秋のやまへにみちぬらし袖より外にぬるゝもみちは

たいしらす
むらさきのうへ
若菜上 拾 百番歌合七十三番
身にちかく秋やきぬらんみるまゝに青葉の山もうつろひにけり

みかとゝかへる山のとちきらせ給ひけるをおもひいてゝ
きこえけるにやとゝきはに侍けるころはしらにかきつけ
ける
あすかゐ
物語三下 百番歌合三十七番
言の葉を猶やたのまんはしたかのとかへる山はもみちしぬ共

あすかゐときはにわたり侍とて「かはらしといひしし
はしはまちみはやときはのもりに秋やみゆると」と申はへ
りけるをうせてのちきかせ給て
さころものみかとの御歌
物語三上 百番歌合六十六番
秋の色はさもこそみえめたのめしをまたぬ命のつらくも有かな

よし野の院宇治入道關白のむすめ神無月にまゐるへしと
てこゝろもとなくまたせ給ふ御けしきみえさせ給けれは
風につれなきのさかの入道后宮
物語
うつり行人の心の秋の色にしくれもまたすぬるゝ袖かな

たちはなの右大臣かれ〳〵にかよひ侍けるもたえはてに
けれはつかはしける
うつほの左大臣北方
忠乞
我宿にとき〳〵吹し秋かせもいとゝあらしとなるか侘しさ

女にたまはせける
玉もにあそふの春宮
秋ふかきなきの上吹風のおとのそよなそかゝる物思ふらん

たいしらす
よみひとしらす 有明別
待とはて幾よへぬらんあさち原はすゑの露の色かはる迄

道頼朝臣すゝきのかれたるをむすひてこれ見よとておこ
せて侍けれは
秋のよなかしとわふる弘徽殿左近

ほにいてゝいはれとつらゝ花薄秋はてかたにかゝるけしきは

神無月のはしめつかた女につかはしける　あさくら山の中將

いつのまにけさは袂のしくるらん朽にし袖もきのふかへしに

物思ひけるころしくるゝそらをみて　道心すゝむる右大臣

かきくらす空の時雨はしくれかは身よりあまれるよはの涙を

神無月はかり女のもとにまかりて人たかへしてかへる朝
にもとこゝろさし侍ける人につかはしける　さとのしるへの大將

それと見し雲まの月のさてもなとよその時雨にかきくらすらん

かへし　式部卿宮三君

しくれける雲まの月のよそなからたか傍を思ひいつらむ

右大將夜かれしてかへりたるあしたしもかれゆくせんさ
いのけしきのあはれなるさまなときこえけれは
いはてしのふの女四のみこ

契こし露のかことはかれはてゝたか花か袖に霜むすへとや

皇后宮こゝろならすひさしうまゐり給はさりけるころ御
袖の氷もいとゝけなたうあかしかねさせ給て聞えさせ給せ
ける　おなしさかの院の御歌

かたしきのさゆる霜よの衣手にかゝる涙のほとをみせはや

をとこのよふかく出にけるあかつきをなかめて侍ける女
のもとにたちよりたるをもとの人と思ひていかてかくた
ちかへるらんよをこめてあかしもはてすいつるみちより

こ中侍けれは　みかはにさけゐる前關白

拾 百番歌合廿番
えそけかぬまたしもふかき明くれの別の道はたちかへりつゝ

をとこのこと人にきたえりにけるにつかはしける
かいはみの兵部卿のみこの女

みるまゝに野への淺ちもかれはてぬうき身しもなと消殘るらん

みこにおはしましける時御心ならす夜をへたてさせ給ひ
ける女のもとにつかはさせ給ける　なみのしめゆふの御門の御歌

しらさりきしつ心なく浪さわくみきはになしのうきねせんとは

うちにひさしうさふらひてえまかてさりけるころ女一の
みこに聞え侍ける　右大將なかたゝ

藏開中
から衣たちならしてし百敷の袖氷つるこよひなになり

五せちの舞姫のすくれてみえけるにつかはしける
かほよきまひひめの藏人少將

いかにせんをとめのすかた戀しくは天つ空をやいとゝなかめん

かへし　とほりあけの君

あまつ空をとめのすかたなかむとも雲の袂はまたみえんかも

五せちのころ大納言典侍のさうしにたちよりて
みかきかはらの右大將

つれなくてさてやまゐるの袖の色氷れる上にむすほれつゝ

いひたるをとこのはすはかりにこと女にさたまるへ
しと聞てつかはしける　露のやとりの修理大夫女

ひきもりしことたにたえて忘水こほりとけなん程そ悲しき

雪ふかくふりつみたるころ山さとにすみける女のもと

にいとしのひてまかりてわけいりつる道の有さまなとか
たらひて　　　　　　　にほふ兵部卿宮

浮舟 百番歌合三十二番
みねの雪みきはの氷ふみわけて君にそまとふ道はまとはす

なとこの雪のふる日出けるなかくるゝまて見おくりてよ
める　　　　　　うきなみの藤中納言女

たのめなくほとなといつともしら雪のまたてけぬへきけふの暮哉

先帝宣耀殿女御いまた参りはへらさりけるころたまはせ
ける　　　　女のすくせしらすの第二御門御歌

わりなしや山のしら雪ふりぬとてふかき思ひのきゆるものかは

女四のみこのときはにまかれりけるにはる／＼とみえわ
たれる池のおもてにふりいる雪はやかて氷にとちかさな
れるも思ひよそへられけれは
　　　　みなせ川の新中納言

水のおもにかつ氷ゆくしら雪のいつまてとけぬ物な思はむ

雪のふりける夜こゝろにもあらすまからす成にける女の
もとにあしたにつかはしける
　　　　源氏のひけくろの右大臣

槇柱 詒 百番歌合四十番
心さへ空にみたれし雪もよにひとりさえつるかたしきの袖

風葉和歌集卷第十八

雜一

木末にかはる女院はしめうちとけたてるさまに御らむせ
られ給へりけるあしたむ月の朔日なりけれは聞えさせ給
ける　　　はつれの高陽院の御歌

きのふ迄したはむせひし池水にけさは千とせのかけそのとけき

御返しかはりてたてまつり侍ける
　　　　入道おほきおほいまうち君

池水ものとけき御代のしるしにや春たつけさはすみまさるらむ

紀伊國にはへりける春のはしめに鶯のなくをきゝて
　　　　あまのもしほひの大僧都

あらたまるけふもよそなる谷の戸になに鶯の春をつくらむ

たいしらす
　　　　いちゐひろひの大納言北方

數ならぬしつかかきねの梅かえに身をうくひすのねをのみそ鳴

內大臣かくれて後一條院の紅梅もときを忘すさきぬらん
と人のいふをきかせ給て
　　　　いはてしのふの女院

鶯も春やむかしと忘るなよあれまくなしき花のふるさと

大將におはしましける時內大臣の入ける所なしのひてか
いはみ給けるにおとゝほとなく出にけれは女になつかし
きさまにかたらはせ給ひて
　　　　有明のわかれの女院

袖かけてなりもみてまし梅花人のしめゆふかさしならすは

御かへし　　　　　よみ人しらす

しぬゆひしむかしのかけのかれしより人も尋ねぬ宿のうめか香（え一本）

　あれなくなりてのち人のわらひをおこせたりけるかへし

　　　　　　　　宇治の中君

早蕨　治　百番歌合六十七番

この春は誰にかみせんなき人のかたみにつめる峰のさわらひ

　もの思ひけるころ木々の梢のあをみわたれるをみて

　　　　　　　　老人のかたみの源大納言女

人しれぬなけきはいつもたえせねともえ出る春は侘しかりけり

　土佐國むろふといふ所にすむころかへるかりなきゝて

　　　　　　　　すまひの修理亮

かりかねにことやつけまし君かすむ都もおなしかたとこそきけ

　御位のとき女院の一條院におはしましけるに聞えさせ給ひける

　　　　　　　　いはてしのふのさかの院御歌

思ひきや雲ゐに月のかけたえて霞の中になかむへしとは

　此御ふみのかたはしにかきつけさせ給ひける

　　　　　　　　女　　院

涙のみ霞のをちにふりまかひ（よ一本）ひかりもみえすよはの月影

　前坊わつらひて出させ給ひけるに聞えさせ給ひける

　　　　　　　　水のしら浪の朱雀院御歌

年をへてのとかにてらせ雲の上にかけならへつる春のよの月

　御子のみやと申けるときいてさせ給ふこと有けるに右大将にの給はせける

　　　　　　　　よその思ひのみかとの御うた

誰もまたなれし名殘に忘れしな月と花とのをりにつけても

　世をそむかんと思ひたちて后のみやにまうて、女房に申侍りける

　　　　　　　　二はの松の中納言

心しむる花のあたりの月影もこれやかきりのなかめなるへき

　中納言すゝし宮つかへもせてふき上といふ所にこもりるて侍りけるころ人々まうてきてあそひけるにいたしけるものゝ中にかきつけて侍ける

　　　　　　　　うつほの紀伊守たね松か女

吹上上

さくら花春にくれともあめ露にしられぬえたとみるそ悲しき

　はやうおはしましけるところにとし月ありてたちかへらせ給へるに花のさかりなるを御らんして

　　　　　　　　はしたかの女院

古郷の花もいかにと思ふらんうきをもしらすかへりきぬれは

　　　　　　　　辨　内　侍

かきりなき花のさかりに有けるをうき古郷と何おもひけむ

　心にもあらす春宮の御あたりもかけはなれてやまさとにはへりけるころ

　　　　　　　　をたえのぬまの内侍督

いかにしていつれの世にか霞はれ春のみやこの花をみるへき

　たいしらす

　　　　　　　　おなし　右大臣

たゝむなき花の匂ひを身にしめて今幾とせの春をなけかむ

　さまかへて日野といふ所にまゐりけるみちに花のおもしろかりけれは

　　　　　　　　こさうしきの大納言女

此世をはうしとて家をいつる身の花に心をとゝむへしやは

　世中はしたなきころ冷泉院にうゐて侍りける花のさかりをみすてゝ出侍とて

　　　　　　　　みなせ河の左大將

うゐそめし我まつさきにちりはてゝことしの春は花やしのはむ

やまひおもくなりにける春中納言花のえたを折てかやう
なるこすゑにてこゝちもなくさみなんやとてみせ侍りけ
れは　　　　　　　　　　　　　　かさぬる夢の大將
あたなりとなけきし花のちらぬまにさきたちぬへき我そ悲しき
こゝち例ならすおほえけるころ手習に
　　　　　　　　　　　　　　　袖ぬらすの准后
拾　百番歌合六十七番
さきすさふる物とみえしかと此春は花をおもはれて我をいとはむ
これをみて　　　　　　　　　おほきおほいまうち君
風のおともよそにきかせて花さかりかくて千年の春をこそみめ
入道兵部卿のみこに藤の花をゝりてむかし此花によそへ
られ侍けるをおほしいてゝつかはさせ給ける
　　　　　　　　　　　　　　露いやこまい一條院御歌
戀しさにそへてみれとなかさまてなるに物をさとこい藤涙
常葉院の御位のときふちの花につけて心の松にかゝる藤
なみと聞えさせ給へる御かへし
　　　　　　　　　　　　　　夢ゆゑもの思ふの中宮
數ならぬ身には雲ゐの藤の花こゝろの松もいかゝしるへき
春のくれつかたこゝちのたのもしけなくおほえけれは
　　　　　　　　　　　　かすみへたつるの左大將
幾かへり春の別をゝしみきてうき身をかきる暮にあふらん
中宮御いろにてさとにおはしましけるにやよひのつこも
りに聞えさせ給ける
　　　　　　　　　　　　よその思ひの御門の御歌
霞ゆゑいとふ日數の袖の色に春をゝしまぬ春も有けり
たいしらす　　　　　　　ひちぬいしまの關白

うちそへて我もこゑにやたてゝまし山時鳥なきわたるなり
　　　　　　　　　　　　　　　ねさめの左大將
うき世には我すみ侘ぬ郭公しての山ちのしるへやはせぬ
　　　　　　　　　　　　　　五月の源大納言の女
しての山しるへとたのむ時鳥夜にまとひたるこゑの聞ゆる
一條院かくれさせ給て後花たちはなのかをれるほとにほ
とゝきすまちかくこゑすれはよませ給ひける
　　　　　　　　　　　　　　とこなかの御門の御うた
むかしのみこふとしりてや郭公花たちはなをとめて來つらむ
ちゝみこのうせてのち五月にあやめふくをみて
　　　　　　　　　　　　　あたりさらぬ式部卿宮の女
しのふ草茂りかはれる我やとになにのあやめをけふしらすらん
ごさいせいそこを侍らぬなとここになさいきさけいと右
けれはなてしこの花をゝりてやるとて
　　　　　　　　　　　　　　　源氏の夕かほの君
肩木
山賤のかきほあるともをりをりに哀はかけよなてしこの露
しのひたる女のもとにちこのいてきて侍けるを人のもの
にきゝてつかはしける
　　　　　　　　　　　　　　藤のうらはの右衛門督
人しれす思ひこそやれなてしこのよそにしめゆふ花のすかたを
なてしこの大夫父の大將にしられはへらさりけるころた
かくといひてんと内侍督にのたまはせてよませ給ける
　　　　　　　　　　　　　　なてしこの院の御歌
なてしこを思ひ出らん草むらに露かゝりともしらせてしかな
四季ものかたりの中に　　　いつみのひめ君

忍はるゝ人はいつみにかけたえて拂ふみくさそかはりゐにける
左のおほいまうち君子ともくしてつり殿にてすゝみ侍け
ろにもろともならぬを聞え侍けるに
うつほの嵯峨院の女一御子
祭使
枝ことにわかすや風の吹つらんこもれるねさへすゝしかりつる
かへし
同上
おく山にまつのふるねを殘しても岸になひくそかひなかりける
七月朔日頃をとこのたちよりてはへりけるに風のおとも
なかしう聞えけれは　かちぬ石まの中務卿宮女
すゝしさの常よりもけにしらるゝは我身に秋のきたる也けり
かへし　　關　　白
すゝしさはなへての風と聞ものをいかにならひし秋のしるしそ
大將身まかりて後星合を見てなかきためしにひきたてこし
も思ひ出られけれは　　川霧の中宮新中納言
たなはたの行あひの空も別にし人にもかゝるちきりともかな
もの思ひみたれけるけしきをみて心ほそけにおもひたる
人に　　清水にぬるゝ内大臣北方
なき原や末葉における露の身の風まつ程をたのまさらなん
内大臣の心いかなるさまにみえけるなりにか御手ならひ
にし給ひける　　袖ぬらすの朱雀院女二宮
思ひわく心もなきをいかなれはこの秋風のたゝに聞えぬ
うきふねの君にしのひてあひすみ侍けるに中將あたしの
の風になひくなと云て入たりけるを返事そゝのかしかれ・
て　　小　野　の　あ　ま
手習
うつしうゑて思ひみたれぬをみなへしうき世をそむく草の庵に
前栽のなかにあさかほのはかなけなるをみて
しのふくさの關白
はかなさはいつれまされる朝かほの日影を待とかりのこのよを
かへし　　中　　納　　言
あさかほは日影まつまもある物を猶うき世こそはかなかりけれ
人を行へしらすなしてなけき侍りけるころ尾花の風にな
ひくを見て　　はま松の中納言
たつねへきかたしなけれはふる郷のを花か袖にまかせてそみる
うちの中君いもこにてあかつきおかくなるまて物かたり
しあかしてあしたにつかはしける
こ　た　ゑ　大　將
寄木　拾　百番歌合十番
徒にわけつる道の露しけみむかしおほゆる秋のそらかな
前關白女さまかへて侍りけるをまかりてうらみけるにむ
しのこゑあはれに聞えけれは　　袖ぬらす太政大臣
拾　百番歌合七十一番
よもすから思ふ心をしりかほにとふらふむしのこゑそ悲しき
御侍をみそめて久ともえまからさりける比むしのこゑみ
たれたるをきゝても思ひやられ侍けれは
うつほの右大臣
後落一
風吹はこゑふりたつるむしのねに我もあれたる宿をこそ思へ
たいしらす　　ふもとの大將
なくむしのもろともにこそたてねとも涙は袖にあまりぬる哉
夕霧左大臣たちよりて侍けるを楠木の權大納言身にそへて
もてあそひはへりける笛をおくりものにしてはへりける

なよ[illegible]して侍りければ　　一條院御息所

拾百番六十八番
露しけきむくらのやとに古への秋にかはらぬむしのこゑ哉

さうのことに秋風樂をひきて侍りけるを聞て女御のかた

よりよそなる人の袖もぬれけりと申てはへりけるかへし

　　　　　　　　　　　　　　　　岡さのしるへの兵部卿宮の女

秋風のふく夕くれのむしのねにしのふることもいさなはれつゝ

秋の夕は[illegible]二本

[illegible]侍けるなき[illegible]

らぬた[illegible]關白の聞に侍

ければ　　　　　　　　　　　　　我はつかしきの女院

またしらぬ松ふく風のこゑにさへ秋はうき身に先そ聞ゆる

世をそむかんと思ひたちて秋にもなりぬるに夕の空をな

かめて　　　　　　　　　　　　　いはてしのふの右大将

山深く身をあき風にさそはれてさこそはなれぬ露も時雨も

父御子かくれての又のとしの秋あはれ[illegible]に道[illegible]

　　　　　　　　　　　　　　　　うちの河瀬の帥御子の三君

常よりもむかし戀しき夕くれにことの外なる風のおとかな

かへし　　　　　　　　　　　　　式部卿のみこの北方

あさ夕に風にみたるゝ下をきのおとろかすにも露そこほるゝ

野分の後思ひまさるゝことありてよめる

　　　　　　　　　　　　　　　　みかきか原の右大将

思ひ草さらても末の露の身をいかにふきつる秋のあらしそ

冷泉院のかしこまりゆるさせ給てのち女三宮もろともに

秋の夕をなかめてよみはへりける

　　　　　　　　　　　　　　　　ねさめの右大将

ながらふる命をなとていとひけんかゝる夕もあはれなりけり

おほんくらゐおりさせ給ひなん事ちかくおほしめされけ

る秋清涼殿に月を御らむせさせたまひて

　　　　　　　　　　　　　　　　あさちか露の常葉院御歌

みるまゝにおもかはりすな秋の月雲ゐの外にかけはなるとも

八月十五夜つねよりもくまなきに式部卿みこのよをそむ

きにけん行へおほつかなく思ひつゝけられて

　　　　　　　　　　　　　　　　こちあしの左大将

世にすまはいつれの山のふもとにてこよひの月の影をみるらむ

かしは木の權大納言のすみはへりける所を物よりまうて

けるついてにみいれければ月のみやり水のおもてをあら

はにすましたりけるに　　　　　　夕きりの左大将

夕霧
みし人のかけすみはてぬ池水にひとりやともる秋のよの月

なとこのもろともに月をみてよのはかなきさまなとかた

らひけるに　　　　　　　　　　　あまのもしほひの中宮權亮相

色かはる我身の秋はつらけれと月は今夜にかはるあはれな

出家のゝち月をみて思ひつゝけゝる

　　　　　　　　　　　　　　　　おなし大僧都

これのみやかはらぬ友となかむれはあらぬ袂を月やたとらん

もの思ひけるころあかつきちかくなるまて月をみあかし

て　　　　　　　　　　　　　　　あひすみくるしき源大納言三君

みるまゝににしにかたふく月影をうき身の果とおもはましかは

おなしよ女ともたちとかたらひて

かけとめてあるへくもなき世中にのとかにすめるよはの月かな

かへし　左大辨女
すみのほる月の影たになかりせはうき世をいかて我すこさまし
女院ひさしくいらせ給はさりける比奉らせ給ひける　有明の別のみかとの御うた
まちかぬる月の光のおそけれは雲ゐの庭の秋そかひなき
女二のみこ承香殿にすみ給ひけるに前栽のきくを折らせ給ひて關白に御子のかけものに給はすとて　ひちぬいはまの朱雀院御歌
わきてをる心もふかし九重にうつろひはてよしらきくの花
中宮うちにおはしましけるころよみ侍ける　よその思ひの中宮宣旨
おのつからことゝふなみも袖ぬれぬ世をうち山の秋のね覺に
むすめのもとにとき〳〵おとつれけるをとこの秋はたのめしたのみあれはと申てはへりける返し　心やりの式部卿の宮の北方
ひたふるに音はせねとも小山田のたのみむなしくなさん物かは
かつらにおはしましけるに冷泉院より月のすむ河のをちなる里なれはと聞えさせ給へりける御かへし　六條院御歌
松風
久かたの光にちかき名のみしてあさ夕霧もはれぬ山里
女の思ひにはへりけるころさかの院へまゐりけるに色つ(一本)きわたれる木すゑをみて　こけの衣の右大將
小倉山みねのもみちは色つきぬなけきのみこそ常盤也けれ
秋のなかはにあなはなからもみちのちるをみて　とりかへはやのみて物のひしり
秋はまたふかゝらねとも山ふしの涙にそふはこの葉なりけり
右少將なかよりかしらおろしてみつのをに侍けるに紅葉のころこれかれまかりて歌よみはへりけるに　うつほのときかけ
國讓下
古へは君かころもにそめし色の今は山路にちりまかふかな
思ひのほかなることありて山のなかにおはしましけるに鹿のよくなきかせ給ひて　よし野山の中宮
我はかりうきをおほえぬ鹿たにも山ひゝく迄ねをこそはなけ
たいしらす　まよふ琴のねの中納言
我ことや世をあきはてゝおく山につまこひわふるさをしかの聲
民部卿(式一本)のみやかくれてのちかの家のら(隔)になおしをりてよみはへりける
ぬしなくてあるゝまかきの藤はかまをるに露けき秋のくれ哉　・あたりさらぬの内大臣
長月のつこもりころ心ちわつらひてよわく覺えけるによめる　あまのもしほひの中宮新宰相
たか爲に秋のなこりをゝしむらんけふをすくへき命ともなく
しのひて御らんせられける女のゆくへしらせ(れ一本)きこえさりけるをうせぬときこしめしつけゝる比しくるゝ空をなかめおはしまして　みかきか原の御門の御歌
しくれ行空をかたみとみるよりはなと同し世をしらて過けん
右のおほいまうちきみすまひのかへりあるし侍りけるとき右大將なかたゝ侍從にてことひきけるにうなしのさむけなるもかゝれはそかしとてあこめをぬきてかつくとて

うつほの右大臣

宇本
みな人なうつむもみちのかゝらぬは風ふくまつと思ふなるへし

もの思ひけるころ風のあらゝかにもみちなふくな見出して

とこなかの右衛門督の中女

あかすみるもみちはよりもかくはかりうき身なさそへ木枯の風

むすめのことな思ひみたれけるころ

桃のしろへの兵部卿みこの北方

木のはさへおつる涙にまかふ哉心のうちにあらしやはふく

ものおほしめすころいろ〳〵ちりかふ梢なみいたして

さころものさかの院の女二宮

物語二上 百番歌合八十九番
ふきはらふよもの木枯心あらはうきよなかくすくまもあらせよ

な物語

たいしらす

涙のしめゆふの淑景舎女御

いかにして冬のよすからうちはらふなしの上毛の霜と消なん

氷のきえゆくなよめる

我からのさぬきの守か女

朝日さすみきはの氷人ならは今まてきえぬなけきせましや

初雪のあしたに大將にてつかへ給ひしよにつかうまつりし隨身ともの思ひしなれてさふらふなはるかに御らむしいたしてかやうなりしなり〳〵はおほしいてられけれは

有明のわかれの女院

我やそれみしよは夢にふりにけりたつねし狩な野への初雪

關白三位の中將にはへりける時山にのほりけるかへるさに雪のふりけれは立入て侍けるに

我身にたとるの中納言の北方

人とはぬいはのかけちの雪のうちにならはぬ月の影なみる哉

かへし

かなる大將

あかなくにいてそやられぬ古への名こりとまれる庭の月かけ

うちにこもりゐて侍りけるころ豐のあかりはけふそかしと思ひやりてよめる

あさくらの皇太后宮大納言

羽条
かきくらしひかけもみえぬおく山に心なくらすころにも有哉

父かしらおろしてゆくへしられはへらさりけるに雪のふる日山ふしはかゝる折こそれなくなれと人のいふな聞て

拾 百番歌合五十二番
行わかれいつれの山に跡たえておつる涙のいろかはるらむ

われからのさぬきの守か女

雪のふりつもれるにちゝの世なそむきにけるすまひな思ひやりてよめる

年ふかきまきの山人いかはかり雪うつもれて思ひきゆらん

とりかへはやの前關白四君

中將出家して後思ひかけすみあひて侍けるに雪の中にまた出けるなかくるゝまてみおくりて

なちこちのしらぬ山路にあくかれてかゝる雪まないかて分らん

女すゝみの登花殿女御

心ち例ならす侍けるにみかとゆく末とはくらさらせ給ひけるに

左一本
この世なは今いくかともしら雪の消なん後の身なたのめとや

水無瀬川の前關白太政大臣北方

右大將みなせにこもりゐて侍けるか雪のふる日きえはてぬへき雪の中哉と申つかはしたりけれは

さらてたにまよふ心の雪の中は思ひやるさへ消そしぬへきはゝのおもひにおはしましけるとしのくれに雪のふりか

さなりてきえやるへくもなきを御らんして

さころもの中宮

物語四中
ここまてはいとゞのこる涙とはみえなからつもるに消ぬ時も有けり

風葉和歌集巻第十九

雜二

もろこしのしやう山にて華陽公主琴をしらへ侍て又のよもとたのめ侍けれは山のかけにやとりてよめる

松浦の宮の參議氏忠

物語上
大空の月にたのめしくれまつと山のしつくに袖はぬれつゝ

もろこしよりかへりわたらんとしけるに一の大臣のもとにたちよりてはへりけるに夜ふかき月にむすめとも琵琶さうのことなとひきあはせて遊ひけるに

はよいつの中納言

物語一 拾 百番歌合廿八番左
ひのもとの山よりいてん月みてもまつそ今夜は戀しかるへき

かへしひはにひきはへりける

一の大臣五君

同上 同歌合廿八番
かたみとてくるゝ夜毎に詠めてもなくさまめやはなかはなる月

中納言もろこしよりかへりてまゐれるに月いとおもしろかりけれは御あそひありけるついてにの給はせける

おなしみかとの御歌

物語二 同歌合二十四番
わかれては雲ゐの月もくもりつゝかはかりすめる影もみさりき

御かへし

同上
古郷のかたみそかしとあまの原ふりさけ月をみしそかなしき

世をはゝかりて水無瀬といふ處にこもり給てはへりけるころ月をみて

水無瀨川の左大將

さとわかすみしにかはらぬ月のみや馴し雲ゐのかたみなるらん

うちよりまかてさせ給ひけるにみかと身をわくるものならませはと聞えさせ給けれは　　花さかりの中宮

諸ともになかむるやとはかはるとも同し雲ゐの月をこそみめ

二位中将は[illegible]の北[illegible]はに立よりて女房の物[illegible]たりけるに月くまなくさしいてゝぬるゝかほなれは　　あさ[illegible]露の入道關白

數ならぬ袂も露のふかきには雲ゐの月のかけやとしけり

かへし　　よみ人しらす

大空の月のひかりをやとしてもかこちかほなる露とこそきけ

人のもとにふくるまて法文なと申てたちいてゝはへりけるに月のあかゝりけれは　　ふたよのとものひしり

今はまたこと葉のこりていにてさらに更てさえたる月をみましや

とくおちすさめけるをきゝて　　不斷念佛のあ[illegible]

殘るらんそのことのはの末きかはこゝのこはかけの月はみすとも

にほふ兵部卿のみこむすめにたのめて侍けるに十六日の月やうゝさしあかるまてこゝろもとなく侍けれはつかはしける　　夕きりの左大將

宿木 拾 百番哥合九十番
大空の月たにやとる我やとにまつよひ過てみえぬ君かな

なにとなくみなれはへりける女をゆくへしらすなして侍ける所にて月をみて　　はまゝつの中納言

思ひいつる人しもあらし古鄕に心をやりてすめる月かな

世をいとはしくおほしめしける比入かたの月のくまなくさし入たるを御らんして　　さころものみかとの御歌

物語三下 百番歌合七十五番
まてしはし山のはめくる月たにもうき世に獨とゝめさらなん

しはし同上
よをそむかんとて中宮にかきおきて出侍りける　　とりかへはやの中將

戀しくはうき世の中にすみわひて入山のはに月をなかめよ

[illegible]おもへんとて出けるにはしらにかき[illegible]　　あさ[illegible]

かきりそと思ひ入ぬる山ちにも月やかはらぬ友となるへき

關白いまたわかく侍けるころうちふして物かたりしはへりてあやしくおそく出る月かなと申けるに　　あさくらの宰相中納言乳母

みるまゝに月もうき世にすみ侘て山より山にいりやしにけむ

世になきさまに聞えてのち右大將北山にこもれりとつたへきゝて月のあかゝりける夜なかむらんおもかけもみるこゝちして思ひやられけれに　　ねさめの廣澤の准后

拾 百番哥合八番
しらさりし山への月をひとりみて世になき身とや思ひいつらむ

たいしらす　　末葉の露の關白母

ありしにもあらすうき世にすむ月の影こそみしに變らさりけれ 又一本

しのふへきゆかりならねと月みれは過ぬることそわすれ侘ぬる

廣澤のかたにまかりて月をみて　　野しまの三位中將

すみ馴しむかしの人のおもかけを月にそみするひろ澤の池

うき舟の君くしてうちにまかれりけるに辨の尼むかしおほえてすめる月哉といひて侍けれは

薫大将

東序 拾 百番歌合八十七番
さとの名もむかしながらにみし人のおもかはりせるねやの月影

しのひてうちにすみ給ひけるころ月いとあかう水のおもてもすみわたれるにいとゝおほしいつることおほくて　今とりかへはやの中将

物語二
思ひきや身をうち河にすむ月のあまふゝきさんの影をみんとは

大将弘徽殿のかたさまを過はへりけるに　よみ人しらす

なしめともしはしとまらぬ月影をなにしか袖にやとし初けむ

大将にてつかへ給けるころ承香殿の前をすき給ふに時々もの申ける戸口をさゝされけるにかやうのましらひも今いくほとかとおほしめされて　有明の別の女院

忘るなよ夜な〳〵みつる月の影めくりあふへき行へなりとも

すまにうつろはせ給はんとて故院の御はかにまうて給へるに月も雲かくれてもりのこたちこふかくかへり出んかたなくおほされて　六條院御歌

源氏 拾 百番歌合七十七番
なき影もいかにみるらんよそへつゝなかむる月も雲かくれつゝ

こゝろならす出さとにはへりけるころ月をみて　川霧の中宮の新宰相

思ひかねなかむる空もかきくらし涙にくもるよはの月かけ

小野にすみけるころ月のあかきよなかめて　うきふねのきみ

手習 百番歌合七十四番
我かくてうき世の中にめくるとも誰かはしらん月のみやこに

もの思ひけるころことにひきける　ことうらの烟の中納言更衣

おまなとめ月の都にさそはなん跡とゝめしと思ふこの世な

一のみやを坊にたて奉らんとおほしめされけるを一條院の三のみこにこのたひは猶ゆつり奉らせ給ふへきよしかの院より念比にきこえさせ給けれはさるへきになりて　おたりさらぬ冷泉院御歌

ゆく月の光を君にゆつりてん我も心のやみにまとへと

一の御子内に入給へるなこりあかつきまてなかめてよみはへりける　涙にこよゆふの淑景舎女御

雲ゐにもなけく心やかよふらん有明の空にまよふたましひ

法師にならんとていてけるあかつきむすめのかたにまかれるに月かけいとをかしけなるをみて　あさくらの前三河守

つきもせぬ心のやみにくるゝ哉さやけき月のかけみえぬまて

又のとしそのよにめくりあひてさやけき月のといひしも思ひ出られけれは　おなし皇太后宮大納言

拾 百番歌合五十一番
今こんといひてわかれし君により有明の月を幾よみつらん

よし野の宮に参りていてける暁よみ侍ける　風につれなきの左大将

人はよな心にもあらす出にきと月にはかたれあかつきの空

たいしらす　しのふの源大納言

在明の殘れる月のかけよりも我世にすまん程そはかなき

法輪にまうてゝ出けるあかつきよめる　をたえのぬまの春宮大夫

有明の月に心はすみぬるをなにとうき世にかへるなるらん
世をそむかんと思ひたちけるころ中宮中納言のつほねに
たちよりてうらむることゝも侍りて
いはてしのふの左衛門督
みるたびにうしとないひそいつ迄か同し雲ゐにあり明の月
中納言むすめをいたきていて入はへりけるをみて、うちに
まゐりおこ侍てたゝうかみになとこの女をいたきて妻戸
に入かたをかきてみせ侍とて　式部卿宮の四位少将
身にそひてふたりあり明の月の影入あまの戸をみきとしらすや
かへし
月かけは入あまの戸もなかりしをそらめを誰かみたるなるらん
たいしらす　我からの兵衛佐
ふくかたの風にしたかふうき雲は心に身をそまかせさりける
冷泉院をいてたまひていち院そひたてまつりて大うち山
にものし給ひけるころ　寝覚の女三のみこ
しら雲のまたしらさりしおく山にかゝるへき世と思ひかけきや
心ち例ならすはへりけるに御門にきこえたてまつり侍け
る　女すゝみの登花殿女御
忘れすは夕の雲によそへてもむなしき空をそれとなかめよ
山さとよりいてけるに入道のみこのすみ侍りけるたうの
すゑよりはるかにほそきけふりのたちいつるをみやりて
ふもとの后宮母
君かすむ宿のけふりをそれとみて立はなれ行ことそ悲しき
さかのおくに兵部卿のみやおこなふときこゆる所にけふ
りのわつかにたつをみて　けふりのしるへの中将
みわたせはけふりたな引山さとに思ひこもれる人やすむらむ
高麗といふくにゝはなちつかはされけるみちにてあまの
しほやくけふりのたなひくをみて　夢かたりの宰相中将
神もきけもしほの烟こかれてもとかむはかりの思ひありきや
一條院内大臣もの思ひけるときあめのふる日つかはしけ
る　いはてしのふの關白
わきて思ふことしなけれと夕くれの雨にも袖のしをれやはせぬ
しのひて女のもとにまかれりけるをとかくいひてうちに
もいれはへらさりけるほとに雨やゝふりきて空いとくら
きにすのこのはしつかたにゐて　かをる大将
東屋　百番歌合七十七番
さしとむるむくらや茂きあつまやのあまり程ふるあまそゝき哉
北山におはしましたりけるにあかつきかたにせんほうの
こゑ山おろしにつきてたきのおとにひきあひたるに
六條院御歌
若菜　百番歌合七十番
吹まよふみ山おろしに夢さめて涙もよほすたきのおとかな
左大将よしのゝみやにまゐりてあらしのおとを聞ならに
す心ほそけにおほえて侍ければ　風につれなきの按察大納言
君はしらしかゝる嵐のみねふかくこのはの末に夢はたえつゝ
かへし
こよひきてよしのゝあらし身にしみて又なく物そ悲しかりける
御出家おほしめしたゝせ給けるころ宇治入道關白のもと

にてみれのまつかせなきかせ給て

おなしよし野の院御歌

山ふかくやかてなるへき松の風いたくなふきそまなく身にしむ

左大將大内山にはへりけるころ松のうれふく風のおとのみ耳とまりて

みつからくゆるの尚侍

また人のしらぬ山への松かせはこと〻ふさへそ身にはしみける

かつらなるところにはへりけるに松風のおそろしう聞えければ

ひちぬ石まの中務卿御子女

よをならへき〻もならはぬおく山のみねの嵐にねをそたくふる

なしほといふところにすみ侍けるころ

なるとの中務卿の女

心して物思ふ人にかきせなんなしほの山のみねのまつ風

右大將にてつかへ給ひけるころにこもりゐさせ給はん事ちかくなりてよし野の宮におはしまして御子のむすめにのたまはせける

今とりかへはやの中宮

物語一
またもきてうき身かくさんこしの山みねの松風ふきな忘れそ

このひたるをとこのいかなることを申けるなりにかこのみ侍ける

ねさめの老關白の中君

草のはにか〻るもつらき露の身のきえて悲しき風のおと哉

右大將冷泉院にかしこまること侍ていてけるにわするなと申ければ

同女三の御子の中納言

拾　百番歌合十三番
あらし吹あさちか末の白露のきえかへりてもいつか忘れん

かへし

同　歌合十四番
ふきはらふあらしにわひて淺ちふの露殘らしと君につたへよ

たいしらす

夢ちにまとふ大納言女

よしやた〻幾よもあらしさ〻のはにおく白露にたくふ身なれは

六條院すまにおはしましけるころきこえさせ給ひける

花ちるさとの君

須磨
おれまさる軒のしのふをなかめつ〻茂くも露のか〻る袖かな

世をそむきてよし野山に侍ける人の今はこしふかき山に入よしきこえてはへりける御かへりことに

よし野山の中宮

尋らん草の庵にさそはなんおき所なき露のわか身を

たのみたりける人をゆくへなきさまに人のもてなしはへりけるにともなひてよめる

よをうち川のあはち

露の身をよもの嵐のさそひきていつれの〻へにおかむとすらん

やまひにてわつらひけるかおこたりて女に遣はしける

かくれみの〻左大將

きえぬへきみたれし露の下草をしたに哀と思ひおき〻や

たいしらす

はまゆふの宰相女

呉竹のよことに露を袖のうへにおきふしもいなおもふころ哉

琴をひきはへりけるにいなつましきりにして雲のた〻すまひた〻ならさりけれは

松浦宮の華陽公主

物語上
いなつまのさやかにてらす雲の上に我思ふことは空にみゆらし

院の御賀に春宮の御笛の音雲ゐにすみのほりておもしろきに雲のけしきかはり月の光まさりて樂のこゑおなししらへにふきあはせたるに女院御ひはをひきすまさせ給へるに花の女七人雲のかけはしよりおりて一返まひたるに

春宮「なとめこか花の一えたとゝめおけ末の世までのか
たみにもせん」とふかせ給へるにえたへぬにや花のかつ
ら一ふさなりて女院の御袖のうへに奉るとて
有明の別のあまなとめ
この世にはいかゝとゝめん君とわれむかし手折し花の一えた
御かへし　女院
花のかは忘れぬ袖にとゝめおけなれし雲ゐにたちかへるまて
一條院にて女院内大臣ことひきあはせてあそひ給ひける
に笛ふきなとして月は入なんとしければ
いはてしのふの關白
音にかよふ秋のしらへの松の風月なら空にふきやとゝめむ
八月十五夜としならへて夢のうちに天人のひはなしら
へけること思ひいてられて　ねさめのひろさはの准后
物語一　拾　百番歌合一番
あまの原雲のかよひちとちてけり月の笛の人もとひこす
世をそむかんとて内をまかてけるに御門御ひはのね左衛
門陣まて聞え侍ければ右衛門督参りけるにことつけて
露のやとりの入道兵部卿宮
同　歌合九十二番
雲のうへを思ひはなれていつれとも心そとまるなかになる月
左大臣春日にまうでゝはへりけるに藤つほの女御ことご
きけるをまうであひてきゝはへりけるを下人のとかめは
へりければよめる　うつほの眞言院僧都
梅花心
めつらしく風のしらふることのねをきく山人は神もとかめし
思ひなけく事はへりけるころひはをひきさして
わたらぬなかの大納言
思ふ事なくさみはせていとゝしくなけき加はるねにこそ有けれ
世をはなれむと思ひたちけるころ箏をかきならして
おやこの中の中宮母
今はとてかきなす箏のはてのをに心ほそくも成まさるかな
おもひのほかなる身のふるまひをもとのすかたにあらた
めはへらむとて出けるにとしころもてならしける笛をふ
きたてゝ　とりかへはやの權中納言母
拾　百番歌合八十六番
しのふへきふしもあらしな笛竹の此よをかきる音はつくすとも
左大將御あそひに笛つかうまつりて侍けるあしたに給は
せける　霞へたつるの御門の御歌
たくひなく心にすみし笛のねは月の都もひとつなるらん
御かへし
笛の音は月の都にとほけれと清き心は空にすみけん
なさなきうまこに笛ふかせなとして遊ひける夜よめる
おのれけふたきなにはのみこ
末とほくまた音こもれる笛竹の更行よはのをしくも有哉
夕霧の左大臣かしは木の權大納言の笛をつたへてはへり
ける夜夢にかの大納言思ふかたことなりしよし申て
横笛　百番歌合八十四番
笛竹にふきよる風のことならは末のよ長きねにつたへなん

風葉和歌集巻第二十

雑三

仁和の御時せり河行幸のゑを御らんして左のおほいまうち君に給はせける　女のすくせしらすの第三御門御歌

せり川のたえぬなかれになくたつに古き跡をも尋てしかな

御かへし　左大臣

せり川の古きなかれを尋てもちとせの後は君そつくへき

入道前關白太政大臣のさかの家に行啓ありてかへらせ給ふとてよませ給ける　有明別の東宮

大ゐ川ゐせきの涙よなれもきけわれ世にすまは又かへりこん

冷泉院に行幸ありける時もとの中将にて青海波まひておなしく正三位ゆるされて侍りけるに殿の中将すゝみて中納言になりにけれはいひつかはしける　二子の宮の中納言

もろともにのほりし物を位山なと此たひはさそはさりけん

かへし中納言にかはりて　關白

諸ともに立のほるへき位山まつさきたちて道しるへせん

右大将なかたゝの京極の家に従ゆき有けるむかし御らむせられけるさくらの木のらうのうへにさしおほひていかめしうなりにけれはよませ給ける　うつほのさかの院御歌

樓上下
春きては我袖かけしさくら花今はこたかきかけとみる哉

おなしみゆきにつかうまつりて子日に引うゑし岩根の松も木たかくなりにけれは　宮内卿かねみ

同上
引うゑし子の日の松は老にけり千世のすゑにもあひみつる哉

此歌をさかの院いみしうあはれからせ給てこの御返事には民部卿になさるへしとなんおほせ給はせける

左大臣(将一本)なにはにはらへしに出侍けるにともなひて松はらにしほのみちけるをよめる　おなし藤宰相

若宴
深みとりみちひてそむる浦の松いつれのしほに色まさるらん

いそのかみの中納言つはくらめの子やすかひとり侍らてかきりになりぬときゝてとふらひにつかはすとて　かくやひめ

物語
年をへてなみたちよらん住のえのまつかひなしと聞はまことか

しのひてすみよしに侍けるころまつかせをきゝて　住よし關白北方

物語
尋ぬへき人もなきさの住の江にたれまつ風のたえすふくらん

關白北方しのひてゐていてはへりける舟のうちにてよめる　おなしあま

同上
住よしの蜑となりてはすきしかとかはかり袖をぬらしやはせし

ふきあけに人々まうてきてあそひはへりけるに大なる釣舟にあまのたくなはをくりおきたるを見て右少将なかよりかこゝろさしよりはみしかゝらむかしといひけれは　うつほの中納言すゝし

吹上上
くる人の心のうちはしらねともたのまるゝ哉あまのたくなは

おなしたひ人々かへりなんとし侍けるにぬさてうしておくり侍とて宰相中將ゆきまさにこかねのいさこ入たるに

紀伊守たね松か女

同上
君か爲思ふ心はありそ海のはまのまさこにおとらさりけり

心にもあらす土佐の國といふ處にすみ侍ける頃よめる

すまひのせりの亮

世中にいきたるかひもひろはぬにあらいそ浪に袖のぬるらん

かへし

内記のひしり

荒磯をみつゝすくさは自からいけるかひにもあらさらめやは

しのひたる女のさまかへてけるをきゝてまかれりけるにあひはへらさりけれはかへりてあしたに

みふねの大おほいまうち君

岸ちかくよりにし浪のかひなくて立かへる袖のくちぬとをしれ

人々つとひはへりて見合しはへりけるところにまけなんすとをさなきものゝ歎きけるにたれともなくていひける

かひあはせの藏人少將

堤中納言
かひなしとなになけくらん白浪も君かゝたにはこゝろよせてん

和歌のうらの歌合（り一本）よしあしさたむへきよし申侍けるを狂言綺語のあやまちひろかへしかたくやといひ侍て

西の海のあまかひ

みつはさす汐干にあさるあまかひは思ひもよらすわかのうら浪

まとゐうらにこもりてはへりけるころ登花殿の女御草子かきてと申て侍けるに

女すゝみの左大臣

あくかるゝみるめなきさの濱千鳥跡かきとめんかたも覺えす

やまふきといふわたりにうつろひけるに海のおもて心はそくちひさき舟ともの見えけれは

かにほりの中務卿宮女

あるかひもなきさによする浮舟の下にこかるゝ身をいかにせん

關白入道太政大臣のむすめをすめにすみわたりけるにそいおとゝをはやう見にへりけるをたれともしらてはゝへきかせよとせめ侍りけれは

ねさめの女院新少將

物語一 拾 百番歌合五番
こきかへり同し湊によろ舟のなきさをそれとしらすや有けん

いみしきさまにてあまのいはやに侍けるころあまのひさしくみえさりけるにちひさき舟をかれにあらんとみやりて

いはやの内大臣北方

なみまわけうきしつみくるあま舟を待こそわたれ袖はぬれつゝ

なにはわたりにて見あひける人の宿をとひはへりけれはよめる

あま人のむすめ

新古今雜下 朗詠遊女
白浪のよするなきさに世をへつゝあまのこなれは宿も定めす

むすめの女御左大將に名たちてさまかへて侍りけるに前代かくれさせ給て後登花殿女御にすみわたるときゝて大將のもとにつかはしける

女すゝみの内大臣

しほたるゝあまの袖のみ朽果ていかなるうらにみるめおふらん

わかのうらにすみ侍りけるかみやこへ出とて

まよふ琴のねの先帝姫宮

磯なつむあまのみるめにしほなれていかてか浪の立はなるへき

いせより昇り給て後手習に

かくれみのゝ前齋宮

かくてふるかひこそなけれすゝか川八十瀨の浪の何かへりけむ

中納言のもとにあかつきたちよりてはへりけるにいみしくたふとく經をよみすましてゐあかしけるにやとみえければよめる　はまゝつの宰相中將

ひとりしもあかさしと思ふとこの浦に思ひもかけぬ涙のおと哉

ゆくへしられはへらさりけるをとこにいしやまにこもりあひて侍けるを後にきゝてそのをり哀とは思ひけんやと申ければ　あさくらの皇太后宮大納言

吹よりし声かのうら風いかはかり我身にしみし物とかはしろ

住よしへまうてける舟のうちにて　かいはみの大將

さらぬたにうき世と思ふにいとゝしくしらせかほなる跡の白浪

心ちれいならす侍けるに讀る　時雨源大納言のむすめ

きえぬれは又うちいつる水の沫やあるかなきかの我身なるらん

けふりにむせふの姫宮新宰相

せきやらぬ涙の川にうくあわのとまらすきえん程のかなしさ

たいしらす　我からのさぬきの守か女

なかるればかす／＼きゆる水のあわを物思ふ人の命ともかな

宇治にてもの思ひみたれけるころ　うきふれの君

浮舟 拾 百番歌合三十五番
里の名を我身にしれは山城のうちのわたりそいとゝすみうき

うちよりみやこへいつとて　うき涙の院の女御

たなかへり又やわたらんすみなれし身をうち川の夢のうきはし

はつせにまうつとていつみ河のほとりにやすみてよみ侍ける　わたらぬ中の關白北方

ひたふるに流れもやらぬいつみ河みくつにかゝるあわそ侘しき

うきことゝもありて父の大納言のもとをしのひていつとてかきつけゝる　住吉關白北方

我身こそなかれもゆかめ水くきの跡はとゝめんかたみともみよ

たいしらす　うきふれの君

玉習 百番歌合九十番
身をなけし涙の川のはやきせをしからみかけて誰かとゝめし

小野のあまはつせへいさなひにはへりけるにこしかたのことゝも思ひつゝけられて手ならひ

同上 拾 百番歌合六十五番
はかなくて世にふる河のうきせには尋もゆかし二もとの杉

しのひて物へまかりけるみちにかれ／＼に成にけるなとこのもとにはへりけるものにあひてことつけゝる　時雨源大納言の女

尋ぬへきみわの山へは遠くともわれすきかてにことやつてまし

父御子たいこにこもりおこなひ侍るころうちよりいてけるみちにてかれこそたいこの南の山なといひあへるをきゝて　うき涙の院の女御

いつかたとしらぬもかなし聞もうし思ひ入けん山のゆくへを

せちに思ひける女にこゝろにもあらすへたゝりにければ世をそむかんとていさゝかたちよりて　しのひねの中將

行末を何契けんおもひいる山ちに雲のかゝりける世を

ほいとけてのちおなし人のもとにさしおかせける

哀とも思ひおこせよしら雲のたなびく山に跡たえぬ共

山さとにまかりけるときかせ給ける女に給はせける

れさめの冷泉院御歌

物語 拾 百番歌合十九番
何事をいかにうらみてしら雲のやへたつ山に思ひ入けむ

はやうすみけるをとこの世をそむかんとて出にけるをき
ていひつかはしける　わたらぬなかの關白北方

契りこしよし野の山を忘れすはひとりは君かいらしとそ思ふ

かへし　大納言

おくれしと契しことのかはらすは山ちにひとりまとはさらまし

法皇よし野にすみ給ひけるに御子と申ける時たつねおは
しましてのちに聞えさせ給ける　よし野院御歌

ひまもなく心にかゝるよしの山されはそ人もおもひ入けん

院吉野山にこもらせ給て後いつかたにかとおほされて
風につれなきさかの入道姫宮

君かすむそなたの空を詠れは雲も幾へのみよしのゝ山

左大將かの御山にたつね参りて侍けるにの給はせける
同しよしの山の院御うた

おなしよの心なからやすみなるゝよしのゝ峰の岩のかけ道

中納言よし野の山の雪のふかさを申てはへりけるかへし
はま松の帥宮中宮

物語四
ふるまゝにかなしさまさるよしの山うき世厭ふと誰尋ねけん

蜀山といふ處にこもりおはしけるころ日本の中納言たつ
れまゐりけるに　おなし河陽縣后

同一 拾 百番歌合廿四番
世のうさにしをらて入しおく山に何とて人のたつねきつらん

志かにまうてゝつれなき女のもとにつかはしける
うつほの中納言實忠

藤原君
うきことを思ひ入とはなけれとも深き山へをいくらみつらむ

世をのかれんとおもひける道にてよめる
よしの山の中將

ひたふるに思ひ入ぬる山道にさきたつものは涙なりけり

雲ゐの月の左大將

さきにたつ袖の涙やひとり行しらぬ山路の道芝の露

をとこのかれ〳〵にみえければたふのみねのふもとにわ
たるとてふるさとにかきつけゝる
扇なかしの源中納言女

思ひあまり深き山へに入ぬともありやなしやと誰かとふへき

大將心かはれるさまにはへりければほかにうつろひ給に
懸樋の水の氷とちたりければ　むくらのやとの女院

住わひてやとのあるしもあくかれぬかけひの水も絶さらめやは

母にくして父おとゝのもとをいつとてひはたいろのかみ
にかきてはしらの日われたるにおし入侍ける
源氏の紅梅右大臣北方

後拾
今はとてやとかれぬともなれきつるまきの柱は我を忘るな

ときはにはへりけるころこゝち例ならさりけるに常にゐ
たりける所のはしらにかきつけゝる
あすかゐ

物語三下 百番歌合七十七番
なほたのむ常盤のもりのまき柱忘れなはてそ朽はしぬとも

しはしすみ侍りける處のありうきことありてほかにわた
るとてあさ夕むかひたる戸にあしてにてかきつけゝる
ふもとの后宮母

明くれに馴つるまきのとはかりも世にありふへき心ちこそせれ
右のおほいまうち君一條の家にはすませなからかれはて
にけれはつかはしける　　うつほの橘右大臣いもうと
隠開中　古へのわすれかたさにすみ馴しやとをはえこそはなれさりけれ
おなしさまにはへりけるころ右大将なかたゝたちよりて
せうとのなかより水のをにこもれることを申いて「む
つましきうときといもをふりすてゝ山へにひとりいかて
すむらん」と申けれは　　同朱雀院女一宮按察
同下　たのみしもみえしも更に忘られてひとりはさとも住うかりけり
をとこの心かはりけれは山さとにうつろひすみけるをそ
こともしらて物もうてのかへるさにたちいりたりけるを
ほのかにみて　　おなし中納言實忠北方
菊宴　古郷のつらき昔をわするやとかへたるやとも袖はぬれけり
左大将の大内山にこれかれまかりてあそひていみしきあ
さほらけにたちかへらんかたなうて　　身つからくゆるの宰相中將
かへりてはいかゝなかめん山さとにさのみ哀をつくしはてゝは
山さとにはへりけるかかへりてかしこなる女のもとにつ
かはしける　　かをる大将
曉は袖のみぬれし山さとにねさめいかにとおもひやる哉
一品内親王家三位
松かせをおとなふものとたのみつゝね覺せられぬ曉そなき
小野にすみはへりけるころ別にけるをとこの夢にみえけ
れは　　時雨の源大納言女
山さとのふかきね覺にいとゝしくみしよのことをみつる夢かな
思ひのほかにしはしそひたる人にわかるとてよめる　　あさちか露のひしりか母
幾よかはこけのむしろにね覺して君を戀しと思ひあかさん
山寺にこもりて女のもとにつかはしける　　かやかしたをれの三位中將
君やさはうき世そむかん心みにいてつる道のほたしなるへき
世をのかれはへらむとて中宮にたよりあらはみせたてま
つれとてかきおき侍ける　　うつせみしらぬの宰相中將
君をのみつらきなからもほたしにて今そふみゝる岩のかけみち
これを御らむして　　中宮
今はとて入けん道のかけちにも心ひとつやおくれさるらん
たいしらす　　ねさめのひろさはの准后
世の中にふれはうさのみまさりけりいつれの谷に我身すてゝん
朱雀院よりおなし處を君もたつねよと聞えさせ給へるか
へし　　源氏二品内親王
横笛　うき世にはあらぬ所のゆかしくてそむく山ちに思こそいれ
宇治八宮につかはさせ給ひける　　おなし冷泉院御歌
梶姫　拾　百番歌合十九番　世をいとふ心は山にかよへともやへたつ雲をきみやへたつる
御かへし
同上　百番歌合七十一番　あとたえて心すむとはなけれとも世をうち山にやとをこそかれ
さま〳〵物を思ひみたれけるころとりのなくをきゝて　　うちのあれきみ
總角　鳥のねも聞えぬ山と思ひしを世のうきことはたつねきにけり

ゆくへしられはへらしとて山さとにはへりけるなきゝつけたりける人のかへりことに

なるとの中務卿のみこの母

谷ふかみ思ひ入にし道なれとうき身はそれもかくれさりけり

入道關白宇治にて千部經供養し侍けるときよし野の宮よりいておはしましてよませ給ける

風につれなきよしのゝ院御歌

さきたちてすみならしける山水をそむくうき世と誰うらみけん

御かへし　宇治入道關白太政大臣

老か世のうきめをみつの山道に君おくれしとおもひかけきや

七そちのよはひをむすめの賀し侍けるとき中宮の行啓なと侍けるによみ侍ける　ねさめの入道太政大臣

今はとて戸ほそとちてし草の庵にさやけき空の光をそみる

新撰六帖題和歌目錄

第一帖

第二帖

第六帖

作者次第

衣笠内大臣　家良公　紫點色
前藤大納言爲家　號中院入道　黃
九條三位入道　知家　赤
左京大夫行家　又云信實　靑
右大辨入道　光俊　黑
已上五人各除我歌加點四首

新撰六帖題和歌第一帖

はるたつ日　むつき　ついたちの日
のこりの雪　ねのひ　わかな
あをむま　なかのはる　やよひ
三日　はるのはて　はしめの夏
ころもかへ　うつき　うのはな
神まつり　さつき　五日
あやめ草　みなつき　なこしのはらへ
夏のはて　秋たつ日　はつあき
たなはた　のちのあした　は月
十五夜　こまひき　あきのけう
あきの夕　なかつき　九日
秋のはて　はつふゆ　神無月
ふゆのよ　しもつき　神樂
しはす　佛名　うるう月
としのくれ　あかつき　あした
ひる　ゆうへ　よひ
夜半　あまのはら　てるひ

はるの月　なつの月　あきの月
ふゆの月　さうの月　三日月
夕つくよ　弓はり　もち月
いさよひの月（イナシ）　たちまち　ゐまち
ねまち　はつかの月　あり明
ゆふやみ　あかつきやみ　ほし
春のかせ　なつの風　秋のかせ
ふゆの風　山おろし　あらし
さうの風　あめ　はるさめ
さみたれ　ゆふたち　秋のあめ
ふゆの雨　雲　むら雨
しくれ　しも　ゆき
つゆ　しつく　かすみ
きり　あられ　こほり
ひむろ　火　けふり
ちり　なるかみ　いなつま
かけろふ

はるたつ日

家良（イナシ）

夫 くれはてゝ幾日もあらぬ年の内に猶いそきける春はきにけり

爲家（イナシ）

夫 冬かけて春たつ空の朝霞としをはさてもへたてさりけり

知家（イナシ）

春や今朝いそき來つらむ雪のうちに年をこめても立霞哉

行家（信實）（イナシ）

今朝よりは春立ぬとや久かたの空さへさらに長閑かるらん

光俊（イナシ）

くれはてぬ年のをはりに春立てさためかれたる我よはひ哉

むつき

夫 さゝ波や大津の宮はあれぬれと春はふるさす立かはる哉（へイ）

立歸り霞の衣またさむし二月ちかき春のしるしに（日かすイ）

夫 あら玉の空めつらしき春といひてうゐにかそふる月もきにけり

夫 あらたまるけふを今年のはしめとて民のかまともけふり立そふ

深山たに霞たな引春めきぬいかに都の長閑かるらん

ついたちの日

夫 四の海浪しつかなる御代なれははらかのにえも今日そなふ也

あらたまるけふやことしの朝日影山の端出る空そ長閑き

いつしかと池の氷の今朝はまたとくれはむすふ春の若水（りイ）

夫 今朝はみなしつか門松たてなへて祝ふことくさいやめつらなる

けさみれはうなひをとめかすり衣春立初る軒の松かけ（梅かえイ）

のこりの雪

春きても猶とけやらぬ岩むろの氷のうへにつもる白雪（もみえすイ）

夫 風渡るやけ山はたの下萠もまたことゆかすさゆる白雪
山里は日影の雪の消やらてかきれの草の色そすくなき
やゝ見れは山の雫も下とけて友まちすさむ春のあは雪
さもこそは春しらぬ身と成はてめ住山さへにまた雪そふる

ねのひ

玉はゝきとる手もゆらに契りをきて幾代子日の春にあひみん
むかしより松はひかるゝ子日にも君そ千年のかきりなるへき
子日にも人にひかれぬ野邊の松今は老木の春やへぬらん
子日する松も千とせのたねなれは誰も心にまかせてそひく
こゝにありて祈る心やかよふらし子日する野に出る諸人

わかな

しるしらす人こそかはれ春くれは野原のわかなつまぬ日そなき
里人も若菜つむらし朝日さすみかさのゝへは春めきにけり
君かため袖ふりはへて白妙の雪も消あへすわかなつむらん
夫 山かつのそのゝ雪まのかき内に心せはくやわかなつむらん
我ためは雪間の野邊に出すとも垣ねのわかなことたりぬへし

あをむま

夫 庭の面の標とるほとに成にけりはや白馬も引渡さなん
夫 呉竹の青葉の色の駒なへて代々のためしを雲ゐにそ引
夫 霞しく春の色なる白馬をたな引わたすけふもきにけり
夫 見渡せはみなあをさきの毛つるめを引つゝけたる馬つかさかな
夫 長閑なる御代のなかはしとりもあへす引つゝけても渡る白馬

なかのはる

風さむみまたきさらきの山の端にかすむとみえて雪のふりつゝ
夫 永日にまたるゝ花は咲やらて暮しかねたる衣更著の空
夫 いなり山杉の青葉をかさしつゝ歸るはしるきけふのもろ人
なからふる身とやたのまん如月の春の日をくる心ならひに
二月やけふ初午のしるしとていなりの杉はもとつ葉もなし

やよひ

あつさ弓末のゝ草のいやおひに春さへふかくなりそしにける
春ふかきひとつみとりになりにけり霞の下の野邊の若草
淺見とり野邊の草木のめもはるに比は彌生の名こそしるけれ
今ははや春の日數やたけぬらんやよひの月ははしめなれとも
山櫻なきかおほくも散花に春のやよひの日數をそしる

三日

から人の河瀬になかす盃の岩間にさはる程の久しさ
唐人もけふを待らし桃の花かけ行水になかすさかつき
けふとてや花の紅色そへて水のなかれにめくるさかつき
三千とせの數にもめくれ春をへてたえぬ彌生の花の盃
夫 桃の花さくや彌生のみかのはらこつの渡も今さかりなり

春のはて

陸奥のあたちのまゆみそりたかみをしかへしてもをしき春かな
かきりそとおもひなからも今更になれてかなしき春のわかれち
おしからぬうき身のあまりなからへてはたや今年も春に別れん
みな人の心かはりの春のくれおしむわかれはとまりけもなし
おしむへき身のことはりはなき春のなをも心にかゝる暮哉

はしめの夏

散花をおしみしほとに郭公聲待ときにはや成にけり

いつのまに初音來なくと郭公今朝より夏の空に待らん
春の行山路に殘る遲櫻獨やけふは根にかへるらむ
春にのみ心かたひく梓弓をしてや夏のけふはきつらん
むらさきの雲は夏をもむかへけり藤咲かゝる山かけの庵

ころもかへ

けふといへは大宮人のしらかされ春の色こそ立かはりぬれ
たちかふるならひしなくはから衣夏きたりとは何にしらまし
はやくより花色衣たちかへて今日ともわかぬ墨染の袖
花の色をきならし衣けふはまたぬきかへかてら形見にそをく
たをやめのけふぬきかふる衣手のひとへこゝろは我身なりけり

卯月

谷川に波かけそふる卯の花の汝か名にたてる夏はきにけり
花散し梢のみとり隙たえて茂りはしむる夏のかけ哉
夏來てもしのひの岡の郭公猶木かくれに五月待なり
時しもあれ花にをくれて哀いま比を卯月の名にそあらはす
おしめともとまらぬ春のつらさにそやかて卯月の名には立ける

うのはな

宿はあれて古き垣ほの卯花に我身五十年の雪積つゝ
夏來てはうのはな垣れ白たへの衣手かけて幾日ほすらん
めになれてふりにし雪にまかひつゝ初うの花のそのかひそなき
春ならぬ花のあるしもありといはゝ卯木垣根を人はとひなん
我のみそ待へき時もなかりける哀あなうの花もさくめり

神まつり

神まつる榊になひくゆふしてのをとも涼しき森の下風
かみまつるうつきになれはゆふかけてみむろの榊なへてさす也
千早振卯月の花の白妙にゆふとりしてゝ山かつらせり
今日こそは葉ひろかしはにゆふかけてこの森にます神まつる也

さつき

いかなりし契りなれはか郭公さ月をおのかときとなくらん
聞人に初音忍ひし時鳥をのかさつきは里なれにけり
時しあれは田子のかけなは永日も猶いとなくや早苗とるらん
行さきの道もおほえぬ五月やみ位のやまに身はまよひつゝ
郭公何のおもひの行ゑとてはれぬ五月の空に鳴らん

五日

梓弓まゆみはけふそまてつかひあやめの根さへ引そへてける
けふかくるたもとの花の色々に五月の玉もひかりそへつゝ
とし毎の五月の玉の緒たえせていつかと待し今日もきにけり
けふ毎にいやときはなる橘をとしの緒なかく玉にぬきつゝ
枕にはあやめもしかて明にけり身はならはしの苔の床かな

あやめ草

いかにせん今は六日のあやめ草ひく人もなき我身成けり
いつとても身のみうきぬの菖蒲草逢こととしらぬれこそつらけれ
有漏の身のかりのあやめの草枕この世は旅の夢そかなしき
床の上にあやめのわか葉片敷てねをみせねはや夜半のみしかき
引人もなくてやみにしみこもりのうきぬのあやめ何しけるらん

みなつき

茂り行しはせの山のくまつゝらくるゝもなかき水無月の空

えそゆかぬ風もかよはぬ玉鉾の道のなかての夏の日くらし
夏かりのおふの下草顯れて我獨ともしけるころかな
水無月のてる日のつちのわれのみと蟻のかよひちゆきちかふ道
みなつきは吹くる風もまれなれとしつけき窓は心すゝしも

なこしのはらへ

里人のおなし御祓の宿毎にけふはかはらぬ千世いのるなり
いたつらにおふの麻の葉とりしてゝことしもたけぬみな月の空
河の瀬にあらくは涙の音もせす風もなこしの夏はらへして
夏くろゝあきの大ぬさ手にふれてなつともつきし今日の御祓は
ふけぬるか道のちまたに御祓してぬさきりすつる村の里人

夏のはて

夏衣一重なからにうちもれはやかてやたゝむ秋のはつ風
風やとき衣やうすき夏秋のゆきあひの夜半の空そ涼しき
あしかきを吹こす風よ身にそしむ秋のとなりはくるゝ方とて
今夜はやかたへ涼しきうたゝねにはあくるもまたて秋たゝむとや
夏はつる秋たつ風の涼しきにねやの扇そまつをかれける

秋たつ日

さても猶秋くる今朝のいかなれは四方の草木の露けかるらん
水無月の空かたかけて秋立といふはかりにや風そ身にしむ
世を捨て戀にしほれぬ我袖の今朝より秋の露にぬれつゝ
あはれなと衣かへせぬならひにて今朝より秋の氣色寒しも
朝またき秋立ぬらし草の原常よりことにをける白露

はつ秋

白妙の衣手涼しうちま山朝かせ吹てあきはきにけり
ならひそと思ひなからもかなしきは秋の始の夕くれのそら
かり初の柴のあみ戸を吹あけて風のたよりに秋はきにけり
身にしむはたえまもあらし荻原やをひ／＼に吹秋の初風
おもひやれなへて世にある人たにもなみたおつといふ秋の初風

たなはた

銀河八十瀬の船の年毎に一夜わたせり誰か契りし
今日きてやたちかさぬらむ天川いほはたにをる雲の衣手
天河秋はあさせの涙の上に紅葉の小舟はやこかるなり
秋風にけふ七夕のあまつひれおもふかたにやまつなひくらん
さしもやは年に一度わたすへき思へはつらし鵲のはし

後のあした

七夕にたむくる糸のくり返しつらきは今朝の別成けり
久かたの天の河波立わかれきのふの暮を待やわたらん
七夕の明るけしきの朝戸出に又かきくらし袖やぬれなん
別をはかたへのあたやつけつらん七夕つめのあかほしのかけ
久かたの天の河とは明にけり妻をくり船今やいつらん

は月

秋もはや半になれや我せこかかさしの萩もうつろひにけり
久かたの雲井のかりのこしちよりはしめてくるや八月なるらん
男山秋のけふとやちかひけん川瀬にはなつよものいろくつ
紅葉つゝ後や散なんこの比はいまたは月の神なひの森
泉川はゝそもいまたもみちぬにこま山越てかりはきにけり

十五夜

天の原空行月のもちしほのみちにけらしな難波江の浦

出るより光も四方にみちにけり秋の半の山の端の月
おしきかなあすも待みん月なれと今夜にかきる秋の半は
今宵はや空もかひある雲消て月のあた名にあらぬ秋哉
我たのむ西のあるしに契りける今日のこよひの月のさやけさ

こまひき

望月の駒引けふのひきわけに又立出る雲の上人
名に高き木曾の梯引わたし雲井にみゆる望月の駒
夕暮の月よりさきに關越てこの下くらききり原のこま
あふ坂の關路につゝく駒のあしもあすの引わけ數やみたれん
玉鉾の道にほとふときこえあけてまたいりたたぬ桐原の駒

秋のけう

山里もとはれぬへしとまたれつる紅葉のいろに秋そ暮行
秋の野の花見てくらす歸るさに夜もとまれといつる月かな
思ふとちまたきてもみむ秋萩のもと葉の紅葉しはしちらすな
白露のをきて木の葉の數毎にめをおところかす秋の色かな
あらし吹きりのまかきのあれまより麓をみれはわさ田かる也

あきの夕

秋しかもかはる色ともみえなくになとか夕のかなしかるらむ
あはれたか何のならひにいひ初て秋のゆふへはかなしかるらん
よもきふの夕日かくれのきり／＼す夜半の思ひをかれて鳴也
ものをのみさもおもはするさきの世のむくひや秋の夕なるらん
あはれわか身にしみとをる夕かな時雨て寒き秋の山かせ

なかつき

五十あまり老ぬる人のね覺にそ夜を長月の程もしらるゝ
野へみれはをかやか下はうらかれて秋暮かたになりにけるかな
秋の夜のこれや長月・里人の千度八千たひ衣うつなり
秋のうちのおなし寒さもいやましにあらし吹そふ長月の比
長月の有明の空の村時雨いたくも袖をぬらしつるかな

九日

千とせふる末もまことにはるかなりきのふわたきし庭の白菊
長月やけふも名におふ九重に千世をかさねてさけるしら菊
つもりては下行水となりぬらしけふつむ菊の花の上の露
かきねなる菊のきせわた今朝みれはまたきさかりの花咲にけり
いかてかはけふ咲菊をめてさらむことしは又も花のなけれは

秋のはて

暮て行秋は手向やなかるらむ紅葉のぬさも散はてにけり
物毎に四方の草木は紅葉つゝ今はかきりとくるゝ秋かな
世を秋といとふ心はなになれは今日はわかれをまたしたふらん
けふ歸る秋の道しはいかならん庭のあさちのいろをみるにも
岩木にも物の心はありといへはさそなわかれの秋はかなしき

はつ冬

難波江のかれたるあしのうちそよき浦風しろく冬はきにけり
あくるまて秋の別をおしむまにまたぬ冬さへ時雨きにけり
いとゝまた秋の別そしのはるゝはけしき冬の空のけしきに
けふしこそ時雨もことに降まされ思ひし事そ冬のはしめは
我袖の苔のみたれをいかゝせん木枯吹て冬は來にけり

神無月

神無月染にし山の木の葉さへ今は時雨とふりそそひぬる

かみなつき志くれの染る木の葉とてちるにも袖を又ぬらしつゝ
神無月しくるゝ比といふことはまなく木葉のふれはなりけり
大あらきの木の葉もあたに千はやふる神無月こそ神さひにけれ
山たかみはれぬ雲井をたよりにてさも時雨たる神無月哉

冬の夜

明やらてさも長き夜の窓の内に寒きともし火かゝけ侘つゝ
更過るほしの光に風さえて音せぬしもそ夜半に寒けき
冬きてはあれこか閨のたかすかき幾代すきまの風か寒けき
雪のうちの山邊ならねと衣手の下にそ夜半の冬籠する
雪ふりて竹の夜床の寒けきにゆるす衣の御代やきてまし

霜月

久かたの天津乙女か立まひしとよのあかりは猶そ戀しき
夜寒なるとよのあかりの霜の上に月寒渡る雲のかけはし
霜寒るかもの河原に駒なへて道行すりのやまあひの袖
をく霜も時しりかほの冬のよに覚をさむみ袖はこほりぬ
かゝる身に豊のあかりの日かけ草なにとてむすふ契り有けん

神樂

をく霜も寒たる夜半の朝倉にかへす／＼も神やなひかむ
今さらにしらぬむかしにひきかへし神代おほゆる朝倉のこゑ
燎火たく煙もともに立そまふかなつるきれか袖のは風に
人のおさの神のをしへにしたかひてこゑ／＼すめる九重の庭
月さゆる夜そ更ぬらし松の尾の神あそひする聲聞ゆなり

しはす

山人の爪木にそふるゆつり葉に春をかけたる色はみえけり
春ちかき枝にや花の籠るらむ木毎に梅とみゆる白雪
一年のこよみをおくにまきよせて殘る日數の程そすくなき
かそふるも三冬の後の冬なれはいとゝさむさのきはめ行哉
思ひをくことのみさすかありしかと古郷出し月はこの月

佛名

あさましやほとけの御名を聞さしてなとかへなしの程に立けん
となへつる三世のほとけをしるへにてをのれもなのる雲の上人
唱つる佛の光てらさすは消すや霜の身につもらまし
もろ人のみきをすゝむるかへなしのよそひの程に夜そ更にける
霜こほる夜半の野ふしのかつけわた今そさむさを忘はつらん

うるう月

かきりある三冬しそへは年の内にほすゑは咲ぬ軒の梅かえ
七夕のゆきあひの月もかさならは二度わたせかさゝきのはし
あまりある秋はさはかり長月にうら枯殘るをのゝあさちふ
十月あまりまた二月の外になを數くはゝれる年もめつらし
一とせにきはまる月のかさなりて春待かほに誰おもふらん

歳のくれ

百數の大宮人をきゝつきて鬼おふ程に夜は成にけり
くれはてゝ明日ははしめとなるとしの昔になとか歸らさるらん
さかさまにつもるよはひをかそへはや暮行年も殘りありやと
めもあやに老行程のはやけれは數もとりあへぬ年の暮哉
されは身をなをある物とおもへはや積れる年の暮るといふらん

あかつき

わきも子かみとりのまゆをかきそへて門田の鴫の羽音をそ聞

夫 身を思ふれ覺の涙はさめまになきつゝけたる鳥のこゑ哉
夫 たまきはろけふの命のあり數に又はかなくもあくるしのゝめ
夫 深き夜にまつ一しきり聲たてゝゆふ附鳥は又れしてけり
入こゑなく鳥よりさきと思へともあかつき起をれそすきにける

あした

夫 老にける程もはかなし朝ことのたらひの水にうかふ面影
夫 朝毎にはらふとすれとつもるらん身のちりはかりいかて清めむ
夫 明やらぬれやのひまのみまたれつゝ老ぬる身には朝居せられす
夫 殿守のとのゐやつれの庭たちに姿かしこきあさきよめかな
夫 さはかりの朝まつりことしけゝれと世々にすてぬは敷島の道

ひる

夫 芦かきのかけたにみえす成行は露もひるまの庭の秋草
折をけろ根もなき花の一枝は露のひるまもいかゝたのまん
夫 あま小舟引あみのつなのなかき日はくろゝも程のさもそ久しき
夫 人もみはあなしら〳〵し老狐いとゝもひろのましらひなせそ
夫 見れはまたかめに折さす花の色のやかてもしほむ時はきにけり

ゆふへ

夫 たつのなく夕しほさひのみなとすにもかりを舟も今やいるらん
夫 いたつらにけふは過ぬといひ〳〵てあはれ我世もさて過ぬへし
夫 關越てけふも暮ぬと大津馬のをのか一つれ道いそくなり
帰るさの家路にいそく市に出てゆふとゝろきの民のこゑ哉
夫 又けふもくるれはくるゝ空とのみみてやみなん袖はぬれつゝ

よひ

いかにせん人こそうけれよひの間にまたれて出る山の端の月
タ はかなしや老てまとろむ宵のまやうきをうれへぬ隙とたのまん
夫 またれつゝ床さたまらぬうたゝねに夢なりけりな人のみえつる
この夜はゝまたふけなくに老らくのかたれふりする灯のもと
夫 彼岸にまたこきよせぬ舟人のうきてはいかゝいをやすくれん

夜半

夫 しのゝめの曉ちかくなりにけり衣手いたくさえぬこのよは
夫 昨日けふわくなるかねの音にたに猶おとろかぬ長夜もうし
山寺の時うつりしてふく螺にねもすきぬとそおとろかれぬる
夫 又今夜やもめからすよ人すけのなきをはしらて人おとろかす
さ夜中と月のさえたる空みれはすむも心のみたれとそなる

あまのはら

夫 天原なかむる空をためしにてつくる世もなき身のおもひ哉
夫 あまの原空にあふきてうれふとも身のうき事のこたへやはせん
夫 天原岩戸の關のあはれなと過行年をとゝめさるらん
夫 身のうれへあまつ空には滿ぬれとをよふ所のなきそかなしき
夫 天原空に心をうつしてそむなしき世とはおもひしりぬる

てるひ

夫 三笠山かけの草葉もをのつからてる日のひかりさせはさしけり
夫 たのもしなあまねき光世に出て雲ならぬ空に照す日影は
天津雲かはらす照す日の本の國しつかなる御代そかしこき
夫 藪かくれさてしもあふく日の光うき身もらさぬあはれみも哉
今もかもまつたか山をてらす日にその五時のはしめをそしる

春の月

夫 さのみやは霞もたゝむ夜半の月何ゆへ春のおほろ成らむ

月ことにけふは牛の名にたてとみちたるかけはことにも有哉
天津風雲吹はらふ月みれはかけたることそ心にもなき
過かはる宵暁のかたわれをひとつにすめる月の影哉
ことはには我身をさらぬ影そとも空にみちたる月をやはみる

いさよひの月

名にしろき秋の空かな月影のいさよふ山は雲もまかはす
秋風に峯行雲を出やらてまつ程すくるいさよひの月
かけふかき秋のは山の月はまたいさよひ過て猶やまたれん
空晴ていさよふ影をいそけともまた出かての山のはの月
雲きりのたな引消る秋風にいさよひのほる山のはの月

たちまち

我門をさしわつらひてねるおのこささそ立待の月もみるらん
こぬ人を思ひかねたるやすらひの夜戸出やすらふ山のはの月
露そをくしはしはたてれとはおりも頼めぬ月をいかにかこたむ
月待といひてもたてれ宵の間の露をく袖はことしけくとも
柴の戸を立出てみすは此山のむかひの峯に月そほのめく

ゐまち

我のみそねられさりけるかるもかくゐまちの月の程はへぬれと
出ぬまにわすれてぬへき秋の月心ときまたやなかめあかさん
太山路を岩にかたつきこりゐつゝ月とゝもにと猶そやすらふ
夕くれは我のえ寒き秋風にうらひれおりて月を待かな
あはれ我ねなうらむてふ床の上に待出る月の影のさやけさ

ねまち

秋の夜のひとりねまちの月かけに身を吹とをす窓の松風
眞木の戸を誰ゆへさゝぬ秋の夜にまとろむ隙を月の出けん
かたしきの袖の秋風さよ更てなを出かての山のはの月
窓明て山の端みゆる閨のうちに袂そはたて月を待かな
右をしき面を西とさためすはそなたにむきて月やまたまし

はつかの月

長月のはつかの月を待出て我ためみつと妹しるらめや
いかにせんはや待遠になりはてゝ月のはつかに更る山の端
外面なるならのむら立葉をしけみさらても月ははつかにそみし
うしのくゐさすかに月のかけ出て心すむ夜のときのふたかな
たちのほるはつかの月の影みれは我世おとろく涙おちけり

あり明

嵐吹竹のまかきの枯すゝきそよ〳〵さひし在明の月
今しもそ別て出し長月の在明の月の影はかなしも
うき物と人はおもはて天の戸をさし明かたの月やみるらん
いつまてか月にもみえむ世の中にまた在明の程もはかなし
誰誰の別をおしみ今はとてこのあり明の月をみるらん

夕やみ

かた岡の木かくれ過るみたらしの河音清しゆふやみの空
たのみつる月のしるへは程ふけて夕やみくらき山陰の庵
くれはてゝ道のあゆみのしられねはもとこし駒も猶そあやうき
小車の道のへの松はやともせ輪たちもみえす日は暮にけり
わか後のまよはむ道を思ふにそ数にもあらぬ夕やみの空

あかつきやみ

しのはらやまた夜をこむる旅人のあかつきやみは道たとる也

月たにも在明ならぬあかつきの我かはやみの夢かとそみる
旅人のかたへいさなふこゑはして行かたみえぬ明くれのみち
中々によこくもおほふ明暮はしのゝめをそき山のはの空
ね覚して猶そ涙をこほしつるあかつきやみの心まよひに

ほし

雲の行方もしられぬ夕やみに　一本此歌最初に在
ほしみえそむるむら雨の空
君か代は七のほしをためしにてうつらぬ程を空にしるかな
くるゝまに出そふほしの數しらすいやましにのみなる思ひ哉
いつもみる空のみとりはときはにて星のはやしの影そかはらぬ
人をわく心とはみし大空を星のきらめきことよけれとも
このよこそはや明ぬらめ明星の山の端たかく光さえけり

はるの風

春の風氷吹とく河きしの冬木の柳いろつきにけり
たつねはや花なき山の里人に春ふくかせは猶つらきかと
吹なくる風をたよりのあま小船とませの山に花のかそする
さかりなる花の枝ゆるく春の風散をみぬまもしつ心なし
みはつへきことはりもなし櫻花さもふかはふけ春の山風

夏風

かはつなく池のうき草かたよりにたえてわかるゝ夏の夕かせ
しけ山のそかひの道の谷あひは夏とく風のふかぬまもなし
夏ふかき森の日影の遠けれは下吹風そひさにすゝしき
うすけれと衣は千重の心ちしてふけとも風の身にもさはらぬ
岡邊なるならの下風吹ぬなり草刈をのこ袖やすゝしき

あきの風

衣手の露吹はらふ秋風はやかてなみたのしるへなりけり
そことなく我心さへうかれ出てさそはれぬへき秋の風かな
秋きてはされはといひし人ことの思ひしらるゝ風の音哉
すゝきはく音をはけしみしのはら野分ちかつき秋風そ吹
もしやとて心しつむる夕暮にこまぬく袖を秋風そふく

冬のかせ

吹風に枯野のをかや過はてゝ秋みし程の下おれもなし
音信し木の葉殘らぬ冬枯に枝吹しほる風のはけしさ
行水のこほりにとはる冬の夜に河風さむみ音そかはらぬ
はけしさを冬にことよせ吹風に太山もあれてちる紅葉哉
人もこし何そは落葉吹たてゝまた道みする木枯のかせ

山おろし

秋なれは夕はさそと思ふよりなれしともなき山おろしかな
つゝきたつ谷のときは木音立て一すちわたる山颪かな
明てまたみねの白雪なかむれは梢ふきおろす今朝の山風
こゝにしもさそなふもとの宿なれは木の葉かつちる山颪のかせ
捨てすむ身にたにいたくはけしさのおとろかれたる山おろし哉

あらし

見わたしの岡のやしほは散過て長谷山にあらし吹なり
あらし吹かた山里の秋のすゑすゝろに物をおもふ成けり
しとろなるれやのいたふき音立てあらしをきくは所からかも
さても世は過ぬへしやと住山にあらきあらしのこゑそかなしき
あらし吹野なる草木のおれかへりやすくもみえぬ世のならひ哉

さうの風

曉の我心より聞なして涙おちぬるみねのまつかせ

夫 いたつらにむなしき空を吹風の何によるともなき我身哉

誰しかも衣はかさん旅にして朝かせさむしみる人はなし

夫 長明の月の出しほの天津風浮山かけて吹はしむなり

天津風身にしむはかり思ふとも空吹人をいかゝ頼まん

あめ

夫 雲もなく晴たる空にふる雨はのりのうるひのはしめ成けり

明暮し世にふるとても数ならぬ身をしる雨は袖ぬらしけり

今はまたわかゐる山のさひしさを人こそとはね雨はふりきぬ

夫 雨やまはこえんと思ふをあさか山あさくは露の猶かはかめや

北へ行夕の雲の大空にかさなるみれは雨はふりつゝ

春雨

夫 浅みとり四方の木のめもえ出るくさかの山に春雨そふる

さほひめのたつや霞のうす衣しく／＼ぬらすはる雨そふる

春雨のそむる日数の大江山いく野の草の色まさるらし

夫 わきもこか衣いつくに春の空くもりふたかる雨そゝきかな

ふれはかつしほるゝ物をわきもこか衣はる雨名には立とも

さみたれ

夫 日数へて雲にくもそふ五月雨のふりのみまさる身を歎つゝ

侘人は五月の雨のなにならしさもはれまなくふる涙かな

夫 日数へて行積りぬるあま雲のかへりわつらふ五月雨の空

夫 五月雨に瀧もあまりの水はしり所もせかぬ岩はさまかな

あれまさる宿の板間の五月雨はもるともいはしふりにこそふれ

ゆふたち

夫 かきくもり降ぬとみゆるゆふたちのけしきはかりに過にける哉

夫 かきくもる空のむら雲風過て音にちかつく夕立のあめ

暮にけりしはし程ふる夕立に山の端みれは入日さしつゝ

夫 雨やとりしはしとおもへは道のへの空くもりする白雨の雲

夕立に峯のときは木音信てこと／＼しくも過るかせかな

あきの雨

吹まよふ風さたまらぬ秋のよにまとうちすさふ雨の音哉

秋の雨のやみかた寒き山風にかへさの雲のしくれてそゆく

雨そゝく秋のたみのゝ嶋かくれすむてふあまも袖やぬるらん

眞木の葉も秋にはあへぬ山水にしたゝる雨の雫さひしも

たつた姫何ゆへ秋とわき初て木の葉はあめの色に成らん

冬のあめ

夫 この里は空かきくもり降雨にとやまをみれは雪そつもれる

きのふ今日都を寒み降雨も山はみ雪と成やしぬらん

むら雨に雪とけそふるあつまやの餘におつる軒の玉水

けふはまた山の朝けの霜をれに空かきくもり雨はふりつゝ

あし引の山かきくらしふる雨にとき／＼ましる雪の寒けさ

くも

し 久かたの天とふ雲のいかにしててる日のかけを立へたつらん

夫 こち吹は雨けにつたふうき雲のかきあつめてそ物はかなしき

夫 風吹は眞木たつ山の峯の雲われもうき世のいとはれよかし

かへりみぬ雲のかけはし古の跡をはしるや數ならすとも

夕暮の空行雲のはるかにもへたゝりにける我むかし哉

むら雨

かきほなる荻の上葉に吹風の音にふりそふ秋の村雨

夫 山風にさそはれわたる浮雲のたよりにつけておつるむら雨
夕暮の風さたまらぬ浮雲に行てはかへる秋のむら雨
怨うつも風にしたかふよこ雨の音幾度かふりすさふらん
おもへたゝ世にふりはてぬ村雨も人の袖をは猶ぬらすなり

しくれ

初時雨日ことに降はやましろのいはたの森は色付にけり
山陰や木葉しくれの日にそへてふりにのみふる神無月哉
ふりはつる我身むそちの神無月袖はいつよりしくれ初けん
さらてたに覺かちなる寒き夜に時雨を冬と思はすも哉
身にそへぬしくれなりせは中々に苔の袂はほす日あらまし

しも

秋されは夕霜ふりて水くきの岡のくす葉もうら枯にけり
寒氷る岩ねの霜にとちられてならの落葉は風もさそはす
なしれもる田のかりほのとまをあらみはたれに置る霜の衣手
かきれなるしのゝ葉草の冬枯に霜をく風の音しきるなり
夫 谷ふかき岩屋にたてる霜はしらたか冬こもる栖なるらん

ゆき

日數ふる太山の雪のふかけれは木陰そ鳥のすみか成ける
夫 踏分てたれいそくらん九重やとのへにつもる雪のふか沓
玉くしけかたみの山に降雪は誰とし積るかけをとめけん
ふみわくる跡のしるしもなきまゝにあさきもふかくみゆる雪哉
夫 我庵のかきねの岫の朝戸出に雪おれくゝる竹の下道

つゆ

日影まつ草の白露いて人のいやはかなゝる世とはしりにき
散涙をたえの玉とわきもせすみたれてみゆる草の下露
いかにせん庭の草葉にをく露の隙なくなけく秋の心を
露をかは月そやとらむ草の原なにか恨の秋のゆふくれ
むくらはふ庭にも玉をしきみてゝ君きまさはとをける白露

しつく

ときはなる森の雫のいかなれは下草はかり色にいつらん
夫 谷陰の岩本雫つく〳〵と時をもわかすぬるゝ袖かな
夫 暮かゝる山の雫をうけためて枝末にうつすならのはかしは
をきあまる露のふかさやかさぬらんつたふ雫の秋の草ねは
夫 明わたる山の雫にそほちても花をつむ身と成そしにける

かすみ

たちのほるあまのしほやのうす煙いそ山みれは霞なりけり
うちひさすみかきの野邊の朝霞つかへし道をなとへたつらん
ちかのうらにやくしほ煙春は又ひとかすみにも成にけるかな
たこのうらむなし煙におもなれてしほやく霞立かとそみる
ことしけき世の人なかをのかれても春は霞に立ましりつゝ

きり

秋霧の心せはさはからにしきたち殘したる山のもみちは
夫 我庵のおはらかくせる秋霧のまかきの風は心してふけ
とはぬまの程を隔て夕きりの音せてのみもふる日數哉
かりなきて夕霧たちぬ山本のわさ田を寒み秋やきぬらん
しるしらすいく里こめて立ぬらむ山本つゝく秋の夕霧

あられ

山風のかれ野のあられ吹ためて草の葉かをれ消殘りつゝ

白妙の玉のをとけて片糸をくるすの小野にあられ降也
岡邊なるならの枯葉にふるあられほとにも過て音さやくなり
かりな田の鴫の上けにふるあられたまして鳥をうつかとそみる
呉竹のよゝのむかしにかけをきし玉かとみれはあられ成けり

こほり

あはれ我心の水の何よりかとけぬ氷とむすひそめけん
冬きては田河にたてる水車氷のくさひうちそへてけり
すはの海の冬のこほりの通路や神のむすへるちかひ成らん
岩かとをよきて渡とおもへとも氷もかたき冬のやま川
うす氷踏てつかへしいにしへを思ひいつれは身そひえにける

ひむろ

立初るむ月のけふのひのはしめたえすそのふる御代もかしこし
かけしけみすゝみにきつる氷室山氷りて冬もたちとまりけり
いつかたの山の氷室にかくろへて身のつらさゝへ消せさるらん
さしも今ひかけにうとき氷室山岩かき紅葉散やおほひし
夏なれとさへこほりたる氷室山まとひの中のさとり成けり

火

うち出す火うちの石のほくそなみなにゝもつかぬ我身成けり
心なき岩木の中を出る火もうたてはてには身やこかすへき
興津しま月はいりぬる曉の波間にのこるあまのいさり火
のとかなる月もひかりやまさるらむふしのたく火の夜の光は
さゆる夜の明方ちかきうつみ火のはいしれはつる我身成けり

けふり

あはれなり峯の岩屋の冬こもりのほる煙のたえぬはかりそ
いたつらになにと畑の淺間山あさましなから世にたてるらん
ふしのねのなにの思ひはしられとも朝夕けたすたつけふり哉
山本もはたやく里の夕くれもとをきはほそきけふりとそみる
もえつゝくからのけふりの時移りひつしのあゆみ今日も程なし

ちり

苔ふかきみとりのほらはくれなゐの塵のほかなるすみか成けり
かすしらす誰もかきなく名のみして塵につくへき言のはもなし
心をはよしなき色に染紙のうたてはらはてちりつもるらん
老か浪はみる事かたきますかゝみ塵のへたてもさそくもるらん
たのもしなひとつのちりの中にさへ四方の佛のこもらぬもなし

なる神

しらさりきはるけき空に鳴神の見ぬ物からに人をこふとは
なる神の音羽の山の夕立にせきのこなたも水まさりつゝ
たちのほる雲の俄になる神の物おそろしの空のけしきや
天の原とよはた雲になる神の音過やらぬゆふたちの空
晩立の空になるてふ神よりも落なは我身後もおそろし

いなつま

たとり行道のあゆみの見ゆはかりさすかにてらす宵の稲妻
遠山の峯たちのほる雲間よりほのかにめくる秋のいなつま
雲まよふ秋の田のもの村雨にひかりみえさすよひのいなつま
村雨の空うちなひく秋の田の雲のはつれに殘る稲つま
たとへても光みれはや稲妻のよにある人はつれなかるらん

かけろふ

夕暮の軒のかけろふ見るまゝにあはれさためもなき世成けり

陽炎のありやなしやもたのまれぬ世はあた物の果そかなしき
世の中にあり(はイ)てなき身は陽炎のそれかあらぬかわきそかねつる
陽炎の我身またはゆき世にふるをありてなしとや人のみるらん
あはれなり山おろし吹夕暮になきかすまさる軒のかけろふ

新撰六帖題和歌第二帖

山　やまとり　さる
しか　とら　くま
むさゝひ　山川　やまた
やまさと　山の井　やまひこ
いはほ　みね　たに
そま　おのゝえ　すみかま
せき　はら　をか
もり　やしろ　みち
つかひ　むまや　春の田
なつの田　あきの田　ふゆの田
かりほ　いなおほせとり　そほつ
はるの野　夏の野　あきの野
冬の野　さうの野　かり
ともし　わし　おほたか
こたか　きし　はと
うつら　おほたかかり　こたかかり
野にのそむ(望イ)　みゆき　みやこ

山

夫 春なへてとかへる山のたかつめに柴のたち枝もひこはへにけり

夫 こりしけるいはのあら山そはかけにやすくは人の過かたのよや

神代よりとしのいくとせつもるらむ月日な過すあまのかこ山

萬代ないはふ山邊にこたへても君がためしの數そいたらん

いてしとはちかひし山も年ふれはことつけかちに身こそ成ぬれ

山とり

山鳥のなのれもなかきおなこえてぬるや契りになかぬよもなし

高砂の山のやまとりおのへなるはつおのたれななかくこふらん

夫 やまとりのはつおの鏡はつかにもわかるゝつまの影みてそなく

夫 秋されはなかしてふ夜な山鳥のおろ〳〵にてはいかゝあかさん

山鳥のなのつからとふ人もなしなかきわかれにあらぬ身なれと

さる

夫 山里の夜ふかき雨になく猿のこゑそ涙のかきりなりける

時雨行秋の木末のこの葉さる我色かほにおしみてそなく

手にとらぬ水の月影それかとてさるはおろかに身なやかふへき

夫 ふかきよの太山かくれのとのゐ猿ひとり音なふこゑのひさしさ

秋山のこすゑつたひになく猿のしつまる時もなき心哉

鹿

夫 五月雨のひまなき頃も小男鹿のうはけのほしはくもらさりけり

さなしかのつまちあかす朝ふしにしからみやつす小野の秋草

たれもみな秋の哀はしる物な獨やたへす鹿のなくらん

夫 立ならす野はらの鹿の秋ふけてかたむかはきのつまなこふらん

みな人のさひしとおもふ鹿の音ないまは我身の友ときくかな

とら

もろこしの虎ふす(すむイ)山のおくまてもきみしあひみはゆかまし物を
いきなからわかれし世こそ悲しけれつたへて虎の皮を見るにも
我庵を(にイ)とらふす野へにすみかへて世になき身ともいはれてし哉
から國のとらのふしとのたけなれや世をおそれてそ我は過行
誰もけに世のことはりをしりはては飢たる虎に身をはおしまし

くま

夫 おく山にすむあら熊の月のわによめこそいとゝくもらさるらめ(りけれイ)
白雪のふる木のうつほ栖とて太山のくまも冬こもるなり
夫 人なれぬすかのあら野のあら熊はかるや(はかなやイ)のさきもしらす顔なり(るイ)
岩はさますむあら熊ので心を見れはや人のあたにかゝるらん
夫 くまのすむ山にも今は入ぬへしむすふてことに身をかくしつゝ

むさゝひ

おく山の梢につたふむさゝひのこゑも寒けく夜は更にけり
むさゝひのかたえ落行(くる夫)太山木に曉ふかくさゆる月かけ(なイ)
夫 むさゝひの梢にきゐるむら鳥を(のイ)哀〱とまつやくるしき
夫 むさゝひのこゑをちかたの山本に里遠けなる森の一村
むさゝひの里に落くる聲すなりこれをも人はあやしとや聞

山河

夫 山川のおちまふそはの岩さきによとめる水のわきかへりつゝ
谷せはき岩間(らイ)をたきつ太山川わりなき世にもすみわたる哉
かた山のいさゝを川のいしつたひ心ほそくて世を(やイ)過すらん(さイ)
岩まよりおちあひせはき山川のくるゝ(くろイ)も行も音たきるなり
見やま川こなたかなたのおちあひのみなはかくれにめくる流木

山田

里人のつくる山田の谷せはみ心ほそくやもりあかすらん
夫 かた山のすそ田のあせの水落てくたりのみゆく世をいかに(かイ)せん
夫 山かつの外面の小田の片あらし去年のつくり(つくりしはイ)はしめもおろさす
をのつから岩にしたゝる水うけてまつちすくなきしつの(かイ)小山田
夫 小山田の稲葉をこむるくえ垣のあれまくみれはしかいりにけり

山さと

やまさとの谷の丸木のひとつはしあやうかりしも渡りなれつゝ
夫 我かゝる(こゝろイ)山里すみをいかにそ(とも夫)としる人あらはたつねきなまし
このさとはつゝらおりなる山道のとにかくにとてくる人そなき
ひたゝくみな(のイ)にかなにせん山陰にむすふはかりの柴のかこひは
爪木こり水もたよりの山里にさこそは(はイ)人のすみよかるらめ

山の井

夫 岩壺にたゝふ(えねイ)はかりの山の井につゝ(の夫)かなくても世をすこさ(くイ)はや
かきやりし山井の清水さらにまたたへての後の跡をこひつゝ
みちのへのゆきゝにむすふ山の井のすまはやしはし心しつかに
ほりかねにあらぬ山井のあさけれは水も心にまかせてそくむ
山そはの岩根(間イ)にはへる松のね(えたイ)はたへぬとこ井の井つゝ成けり

山ひこ

こゑ(とイ)ことにまた山ひこのこたふれは峰にも尾にも鹿そ鳴なる
なけきあまり我よはふとも山ひこの同しこゑには誰かこたへん
行人をやゝよひ(とイ)こせと山ひこのよそのこたへはそのかひそなき
よそなれとたかまのやまの山ひこは雲にこたふる聲そかくれぬ
夫 世の中にむなしき谷のひゝくをはたれ山ひこと名つけ初けん

いはほ

夫 すみかたき我心こそかなしけれいはほの中に宿はあれとも

よしさらは山の岩ほの中とてもおなし世そとてすまれぬもうし

夫 つもり行なけきはつきし乙女子かなつる岩ほのはてはみるとも

夫 岩の上のかと〳〵しきもある物を人のこゆるをいたみたにせぬ

夫 むす苔のふかき岩ほ(やイ)の中とてもいかてか風のきこへこさらん

みね

夫 あまのはらはるけき空も風こしのみねこへてこそ思ひしらるれ

こゝにてそ月は(もイ)みるへき遠近に(のイ)雲吹とめぬ風こしのみね

あれにける峰の庵の苔むしろたれ世をこゝに數忍ひけん

みわたせはみねあらはなるふしの山高くや雲のかゝりかぬらん

やまとなるおほしまみねの朝あらしはけしかれともふる時雨哉

たに

しつかなる谷の心のふかきをもいらては人のしらむものかは

うき人の心は谷となりななん身をなけてたにあふやと思はん

夫 秋はきぬ衣はうすきうたゝねに谷ふところも(のイ)風そ身にしむ(かなしきイ)

わか心くたけおちたる谷はしをひきあくる人のなきそかなしき

さても世にくたりはてたる身の程(果イ)は栖もしろし谷底の庵

そま

夫 たかしまやみおの杣木の山くたし苦しき世とていとひやはする

見お山や杣のわれ木のかたおちにすてられなからふしは忘れす

夫 むかしたれはやしはしめて今はまた朽木の杣の名さへふりぬる

夫 みやきとる杣も佛のたね見へてわかたつと闇跡はたえせし

みねこしの谷の杣木のつなよはみあからてすてし名こそ惜けれ

おのゝえ

夫 春をへてちらすは出し山櫻いくたひおのゝえはくちぬとも

かた木こるたつきの斧のえを弱み思ひ切られぬ世(櫻イ)こそつらけれ

夫 山人のこしにさすてふ斧のえの手なれてもまた年そへにける

斧のえはさそ朽にけん身のうさのわかつら杖の(もイ)たゆるとも(よそ夫)なき

一すちに心をふかくおさめなはおのゝえくつるほともしられし

すみかま

夫 冬のきて遠山おろし(あら夫)寒ゆけはやくすみかまの烟たつみゆ

ふゆこもる山のすみかまやくとのみむせふ思ひに下こかれつゝ

夫 たえ〳〵にたつやけふりのしるきかな下もへはつる眞木の炭竈

夫 とにかくに大原山のになおもみ冬はすみ木をこりやそふらん

夫 何としていかにやけはかいつみなるよこ山炭のしろくみゆらん

せき

夫 いつくにか我やとりせむやきたちのとなみの關にこえそ暮ぬる

よの中は我身ひとつの關なれはおもふ思ひのとなりやはする

あかつきの袖のわかれをしはしとてとりたにとめよ(すイ)てまの關守

夫 よけかたき道のつまりのせき〳〵は所せなからなをそこえぬる

いさきよき心のそら(そこ夫)の關の戸を(は夫)手にまかせつゝあけぬ日そなき

はら

夫 草たちしめちか原は(もイ)霜かれて身はあらましの賴たになし

あたち野のはらのくろつか鬼こめて心にくゝも世をす(くイ)こさはや

夫 思ひしる人なからめや馬はあれとかち野の原にしほれきつるを

夫 宿しめてなに山かつのしつはらやしつかなるへきあたら住居を

霜かれの小野のしのはら今朝みれはあさちをしなみ風渡なり

なか

夫　君か代ないのるいのりのかくら岡松も千とせの色やそふらん

夫　御幸せしふるききたのゝ見こし岡哀むかしはさそなこひしき

夫　かけなのみ久しきよゝり頼かなわかかた岡のまつの一村

夫　岡越の道なくるしみ河そひのあすかのかたなゆきてめくらん

夫　霜寒る野中の岡のかさおもて立出へゝもなき我身哉

もり

夫　いつみ川夕わたりして山城のはゝその森に宿やからまし

夫　よと川のむかひにみゆるみつの森よそにのみしてこひ渡る哉

夫　夕つくひ關越行はあはつのゝもりの梢に月そいさよふ

夫　ふり行は杉のみとりも色付て木末さひたる山本の森

神よいかにいつないつとか頼むへきはかなやいきの出いりの森

やしろ

夫　いそのかみふるの社の宮うつしあらたまるともなやはかはらん

夫　むそちあまり國におちたるもろ社世のためにこそ跡はたれけめ

夫　むそちまてなゝのやしろの見しめなは心なかくも猶や頼まん

道のへの木の下陰のつし社たれななさりのぬさまつるらむ

みちつしのとりゐにしるし杉かくれこの山中にやしろありとは

みち

夫　こえわたるこさかの道の雪とけにかへるさくるゝ小野の里人

夫　ゆたかなるなゝつの道のみつき物海山かけてさためなきてき

うみ山やいつくにとはんよな渡る道はかた〳〵ありといふなり

我君のあまねき御代の道つくりくほめる身なも哀とはみよ

いるまても末こそみえねかくらくのはつせのやまの谷の下道

つかひ

夫　たてまつるかもの使の名殘こそ時にのそめはさすかなりしか

夫　今の世もひかりとそみるあふひ草まつりにさせるかもの使は

夫　明はまたさかひへたてゝ伊勢しまやかりの使のゆきやわかれん

さしならふさくら山吹つゝけともふちはあまたもなきかさし哉

夫　勅なれはさそいのるらむいせつかひ世は春なりと花な折つゝ

むまや

夫　旅人の山越わふる夕霧にむまやのすゝのこゑひゝくなり

道ほそき關のむまやの鈴鹿山ふりはへ過る友よはふなり

まどろまて今夜も明ぬたひの空むまやつゝきの山の嵐に

はやうちのむまやつたひの東路は遠きもちかきさかひ成けり

夫　東路やむまや〳〵のおちつきに人もすゝめぬ君かわりなき

はるの田

夫　高ねには櫻もさきぬなやまたのたねまくほとになりそしぬらし

夫　道きはのあせのかこひにしめさしてたな井の種もはや蒔てけり

夫　かはつなく井手のあらな田しめはへて誰なはしろに思ひ立らん

山本のあら田のくは井手なたゆみかへす〳〵もひろひやはせぬ

夫　朝日山かすむこなたの伏見田井打なこすへき時はきにけり

夏の田

夫　今ははや秋ちかゝらしな山田のわさほのかつら末なひくまて

ほに出ぬ夏田にましるひえ草のひきすてられて世なや過なん

しつのおはしけるいなはの五月雨にはれまな見てや田草引らん

夫　ちはやふる神の御前のみとしろに六月かけてさなへとるなり

夫　ぬしやたれいくはくならぬな山田の谷のせはちに早苗とるなり

あきの田

あし引の山田にかくろひたふろにあな物さひし秋の夕暮
秋にあへる山田のほたち吹風になとて心のかたなひきなる
夕なきにしほみちくらしみなと田のほなみにつたふ秋の浦かせ
たやまたの庵もろ人におとろきてひたさはきなる秋のさなしか
浦風にはま田のなしれうちなひきはやかりしほに成そしにける

冬の田

山里の門田のあせの霜くつれおちほひろひし道もたえつゝ
あせつたひさそふうき草とちこめて冬田のおもにこほる山水
秋はてしかり田のひつちいたつらにほに出れとも守人そなき
いつまてか水を心にまかせけん山田の氷いまはとつなり
日あたりのさはのふか田の霜とけにつたひかれたるあせの細道

かりほ

山田もるかりほの庵にふくとまのひま吹となす風や寒けき
いかさまにほしてかねまし露むすふかりほの庵の秋の夕暮
ますらおは苅穗の庵にいねにけりおきゐる露のふるにまかせて
秋の田のかりほのほくみいたつらにつみあまるまて賑ひにけり
かり鳴て山風さむし秋の田のかりほの庵のむらさめの空

いなおほせとり

霜しろき朝氣の風のさむけきになくや門田のいなおふせとり
露氣さもなのか涙か秋の田のいなおほせとりは鳴すもあらなん
つゆならぬいなおほせとりの涙さへさもひちまさる秋の袖かな
はやはこへ門田の面の駒のあしいなおほせとりのこゑ急くなり
なにそこはいなおほせ鳥の名のみして苅ほす民そ足たゆくくる

そなつ

秋はつる山田のくろは霜かれてたてるそなつのすかたなのみや
いかにせん苅田のそなついたつらに立るかひなき世を過す身は
里遠き山田のそなつ一かたに鹿はかりとやおとろかすらん
入しれぬ山田のそなつさのみやは立すくみても世をはつくさん
今も猶てら田にたてるそなつかな秋はてぬへき世とはみなから

春の野

きゝすなく春のやけのゝかきわらひ外山をかけてもえわたる哉
うらかれの草葉は霜のなをさえて春めきやらぬ小のゝ古道
もえ出る草葉の床やおしからんやけのにかへる夕ひはり哉
下もえのすくろをあらふ春雨にやけのゝすゝき草たちにけり
霞たつこせの春野になくきゝすいつかありかを人にしられん

夏の野

たひ人のはたこの駒の行すりに夏のゝ草なすさめやはせぬ
うくつらき世の人ことにくらふれは夏のゝ草はしけしともみす
野風ふく草の葉かくれ秋やくるたしかのつのゝつかのまはかり
かせかよふ野守の宿のさゝむしろ木陰ならねと夕すゝみせり
とにかくにみかさと申せ夏ふかき末の原野に日てり雨ふる

秋の野

暮かゝる秋の野風もいま立ぬ岡邊のはしや夜はにちりなん
草の木もなとろへはつる秋のゝのさかり過行比そかなしき
野邊はみな草葉殘らすうら枯て音信よはる秋の風哉
秋の野の草の下ひもうは露の色に見るまてとけにけるかな
あき風の吹上の小野の葛かつらさそうら枯て露こほるらん

冬の野

霜かるゝ冬野のはらのきり／＼す身をある物としる人もなし
霜ゆきのふるのゝをかやおれかへり立なをるへき時のまもなし
ふみからす冬野の草の末をなみ駒のあしたにかくれさりけり
夫 冬野にはこから山からとひちりてまた色／＼の草のはらかな
ふゝきする夕のかせ（いろイ）の時のまに面かはりしてみゆる野へかな

さうの野

旅人の野中の道のおひわけに名殘おほくも行別ぬる
夫 いかにせんうちのゝ芝生年をへてあらぬつくりにせはく成世を
しろしらぬゆきゝに人のとまるらむ我こそしめし野路の宿りを
夫 しらさりし野くちの里に宿かりて道の芝生に今そ朝たつ
露ふかきたこのいり野の草枕ぬれてもこよひまたやむすはん

かり

狩人の行てのを（のイ）しかあひわかれまたは羅みもなき身成けり
夫 なにとして太山おと（ろイ）しのせこ聲にやらはれなから鹿もすむ（く夫）らん
夫 明わ（ら夫）たるもと山（山もとイ）とをくせこたてゝ夜こめの鹿の行方そなき
夫 しゝやとてこらかつとひの山祭けふの狩くら空しから（め夫）んや
かりくらす山の（太山のイ）をしかのおちあひにともやたはさみ駒早むなり

ともし

ともしするすそのゝ原に立鹿のあひもあはすもよなかされつゝ
ともしするはやましけ山たつ鹿も（のイ）おもひ入にや身をはかふらん
いかにせんめもあひかたき鹿ゆへにほくしのまつとつくす心を
ともしするほくしの光かすかにてやみれの木陰夜は更にけり
夫 照射するは山の鹿はわかことくよにあはてこそ身はたすくらめ

わし

あとみえてきりふに殘るゐくひにそとやなるわしの心をもしる
夫 ともすれはとやか（なか夫）ふわしのおはきれて立出かたきよをなけく哉
すたちけむその山しらぬ鷲のはの身を離れたる名のみふりつゝ
夫 または（ほき夫）よもはれをならふる鳥もあらしうへみぬ鷲の空の通路
夫 人とはぬみやまの鷲も哀なりたれにむくひのはれおとすらん

おほたか

夫 御獵場のましろの鷹のもとをしはうき世にめくるしわさ（ろしイ）成けり
夫 山かへるあかけのたかの手なれても心をかるゝきみにもある哉
あちきなくなれぬ心をよとるとて我もれられぬやかたおのたか
とやかへる數もしらふの鷹なれはたなれの鈴もこゑそふりゆく
夫 いてはなるひらかのみ鷹立かへりおやのためには鷲もとるなり

こたか

夫 いくかへり年はふれ（おくれよ夫）ともはし鷹のましろはぬ身に世をは恨みぬ
夫 逢事をいつとか待むわか幸の山のくろつみつみしらせても
夫 なつかひの程もへなくにはしたかのおはをしなへて秋風そふく
夫 へ（ひイ）をはなちてかひに輕き鷹の子はもたりやすくもかへりぬる哉
かりにてもこぬ人またるはしたかのとかへる山の秋のゆふくれ

きし

夫 あきされは野になくきしのほろ／＼と涙こほるゝ夕間暮哉
夫 よそにやは日つきの狩場たつ雉のしはしのほとをありと頼まん
あなかまや人のきかくになくきゝす霞かくれをたちも忍はて
子を思ふ春のとたちのやきかりにけふりを分て立きゝす哉
夫 つたへきく今しも袖のぬるゝかなのひけつきしのはれの雫に

はと

夫 おとこ山老のさかゆく人はみなはとのつえにもかゝりぬるかな

入日さす山下陰のむらしはにはとなきかはす秋の夕暮

夫 庵さす岡邊のましはすゑなひき鳩吹かはす秋の初かせ

夫 茂りつゝ(いイ)木ふかき山の夕暮はこもりこゑにそはとは鳴ける

夫 年へたるさはへのふる木むくひあれは鳩ゐる枝を先そ折つ(け夫)る

うつら

野分する野澤のちはら霜かれて鶉のねやもすみや侘ぬる

あはつ野のかやか下露ふかゝらしをのか羽ほしに鶉鳴也

今はまた人はすたかぬ古郷にうつらやあるしひとり鳴らん

夫 鶉かる秋の草ねのあつさ弓はやとりうちの名こそしるけれ

見わたせは野風を寒み日は暮て尾花かくれに鶉なく也

おほたかかり

冬かれのかた野のみのゝみ鷹狩とりふみたてゝからぬ日はなし

野を寒みたかもましろにふる雪のおち草とめてあさる狩人

草に入つかれの鳥をかりたてよかた野のみのはけふ暮ぬとも

夫 つかり(れ夫)やるこゑを柴間に先たてゝかるやかたのゝ道したふ也

夫 みかり野に草とふいぬの立かへりたつかきゝすの羽音かなしも

こたかかり

夫 とやかへるつみ(たか夫)を手にすへ粟津野の鶉からむとこの日くらしつ

夫 あまたより(たひ夫)鶉にあへ(つイ)るはし鷹のさもとりあへすもかれてしかな

うちむれてあはする鷹のはかせにも野への かや草たちみたる也

すゝめ(ひはりイ)ゐてせはき苅田のめの前にあはするたかも一はれそとふ

夫 ふる雨にくるすのをのゝ小鷹かりぬれしそい(人夫)ゑのはしめ成ける

野にのそむ

あき萩の咲散野邊の葛かつらくるゝもあかぬ花の色哉

幾かへり我冬かれの野へにきてみし世の花の跡をこふらん

咲花を折つくしても歸るとや人くといとふ野へのうくひす

夫 みわたせはのすちましりの道のへにたえ〳〵遠き草のはら哉

野へに出て見れともあかす萩か花おはなくすはな今さかりなり

見ゆき

大井河おなしなかれのかはらぬにふるきみゆきの跡そ殘れる

大井川もみちゝりしく神無月近きみゆきも跡ふりぬへし

そのかみやふりまさるらむおとこ山代々の御幸の跡をかされて

數〳〵にみつなのこのゑひきつれてすゝむみはしの袖そ長閑き

夫 とのもりの夜の行幸にともす火のあきらけき世と成にける哉

みやこ

夫 村雨にちりか過なんやましろの宇治の都に秋はきの花

いさこゝに我家居せむ世中にしかの都もふるされにけり

さゝ浪やあれたる都すむ人も今はたまれにたつけふりかな

としをへて都のうちにしつむ身は所からともえこそかこたれ

我すまて花の都の春かすみやとせははやくへたゝりにけり

みやことり

都鳥聲も寒けし舟きほふほり江の河の氷る霜よに

都鳥あらはとおもふ角田川きゝわたりてや人をとはまし

みやこ鳥都はしらす角田河すみてもこゝ(しはしイ)に年のへぬれは

さりとてもほとやはちかき角田川思はぬかたのみやことり哉

堀江こく小舟のみさほ見なれつゝみなきはさらぬ都鳥かな

もゝしき

もゝしきやみはしの本のたちはなに馴し昔は今そこひしき

つかれ行老をもしらて百敷に身をせめし世のこひしきやなそ

もゝしきのみかきにさす呉竹のおひはしめても幾世へぬらん（かな 夫）

夫 とのへみれは古きみかきの瓦ふきかはらぬ御よに又めくるなり

夫 立よりて先祖みせしかたなしの軒の下こそわすれかたけれ

くに

とよ國の鏡の山のくもらぬにひかりをそへて出る月かけ

夫 かけまくも賢かるへししきしまややまと國なる大みや所

あまのすむ里をはかれすつの國のいくたひ涙の立かへるらん

夫 豊なる國のこたへのみつき物民もやすけき御代いのるらし

さかひこそ數にもあらぬ國なれとおきつ島にそ法はひろまる

こほり

夫 みちのくのけふの郡におりぬのゝせはきは人のこゝろなりけり

夫 わかことはおくの郡のえひすかけとにもかくにも引ちかへつゝ

夫 人めもる關をはゆるせあふみなるやすの郡のやすくかよはん

夫 筵わくる音もさゝらのかうちゝに駒をはやめて今日もくらしつ

夫 長門なるあふのこほりの柚板はもろこし人もすさめさりけり

さと

山本のむかひの里とみつれとも行めくるまに日はくれにけり

夫 うきとかのしはしきこえぬ時やあるといさ音なしの里を尋ん

夫 雨ふれはかたそはつくるいま里のふる道とめて（すイ）おつる山水

なのつから世はうけれとも住吉の里をはかれし松もときはに

かのみゆるとをちの里の夕けふりそれかあらぬか山の霞か

ふるさと

たかまとの尾上の宮のあれまくに月のみひとり住殘つゝ

さても世に我身はかくて楢のはのなにおふ里とふりまさりつゝ

かりあけぬ道ふか草の里の名はあれにし後やいひ（のイ）はしめけん

夫 あともなきむかしかたりのふる都殘る難波はうらさひにけり

いかはかり吉野の山し遠からぬ古郷人の花をみるらむ

やと

夫 はるかなるみやこのいぬゐ我宿は大内山のふもと成けり

いかにとよ世をつくすへき宿にても哀とまらす行涙哉

朝夕に身こそつらけれあれ果てゝかたはかりなる宿のあるしは

訪はれぬをさそな憂身にしられつゝあるしそ宿のあたと成ける

我宿は都のにしの山たかみ入かたはれて月をこそみれ

やとり

夫 かり人のやはきにこよひやとりなはあすやわたらんとよ河の涙

夫 やとりする埴生のこやの壁へたてぬるかうちたにみる夢もなし

明やらぬくらふの山にやとりして人の別をいかゝとゝめん

心して野はらの末は行くらせかならすかりのやとりやはかす

夕暮に山路こえつる旅人は此里にこそやとりとるらめ

かきほ

夫 山かつのかきねの中のからなつなくきたつほとに春そ成ぬる

跡もなくさしもあれつる垣ほにもへたてらるゝは我身なりけり

夫 かくて世をあなうけにても過す哉かこふかきほのれりそ朽つゝ

夫 くつれそふやふれついちの犬はしりふまへ所もなき我身哉

あひみんと君しもいはゝあしかきの末かき分て今もこえてん

家

我家の月みることもかたかりき今そ長閑き老のこゝろは
夫 いかにせん家に傳ふる名のみしていふにもたらぬやまと言のは
家を出し今なゝとせの春ことに花の都は猶そこひしき
人めみぬかた山かけに家ゐして心すむやと身をそならはす
かゝるうき身にこそ出めこの家のあとは昔にかはらすもかな

となり

夫 里人の軒を并へて住宿はいつこまてこそ隣なりけれ
身のうさの所からかとかこてれは隣さへこそくるしかりけれ
ほさてたく賤か爪木のもえやらて隣もいとふ夕煙かな
夫 心あるやとのあたりのなかひかき文のかよひのはさまやはなき
夫 家になき四の隣のかきこしはうたてといふもにくからぬ哉

井

旅人の往來をいそく相坂にはやくそみゆる走井の水
夫 いかにせん井のそこにみる大空の我身ひとつにせはきうき世を
夫 花ちりて春はくれにし櫻井の名にさへあかてむすふ比哉
老はてゝ我身くち行つゝ井つゝ頼むのそみも猶そあやうき
夫 わきてそのあかつき契る法の三井なかれくむみと成かたうとさ

庭

花にさく庭の草葉の色々にねしはふりにし宿もいとはす
夫 春はまつ袖をつらねしむらさきの庭そ立居に今もわすれぬ
このほとはとものみやつこきよめすな花の散をは誰かいとはん
夫 やとしめてかひこそなけれ苔の上の庭つくりせぬ山のいはかと
いかにせんつみさたむなる庭の上にうたて心の我をさそはゝ

にはとり

夫 なく聲にかけのたれおの誰人か明ぬといひて起わかるらん
夫 音のみなくやとの庭とり聞なれて君につかへぬ年ふりにけり
夫 榊葉にゆふつけとりの聲すなり神かきちかき夜はの旅ねに
さたかなきゆふ付鳥の所から庭におりはへ名をそやらはす
こえあかす山路の末の里人に鳥の八聲も今しきるなり

まかき

わか庵は朝ふすしかのなるゝまてまかきにつゝく岡のかや原
夫 ときとして咲つくはなの色々をふるきまかきのいかにみゆらん
我庵のあはら籬に柴そへておひらくのこはたちもかくれん
草茂る宿には道もなかりけりまかきをこえて人はとはなん
我庵のまかきのひまは山なれとくれぬとゝむる人もなき哉

門

夫 あれ果てあやしけれともあやむしろかけたる門はさすか成けり
我門はむくら蓬のなしこめて心とゝちぬ道もたえつゝ
夫 からくして入しは何そ桑の門みちの心よそのしるしあれ
夫 なのつから朽殘たる門はしら我家いかてたてなをさまし
夫 おなしくはとちこもれかし桑の門名にのみ立て年のへぬらん

戸

夫 山里の柴のあみ戸のあけたては峰のあらしの心なりけり
夫 いかにせんときにひくとの出立にかた〳〵みまくほしき昔を
君まつとさも夜さむなる秋風にねやの板戸をさゝて明ぬる
夫 世をそむく柴のあみ戸のかけかねの思ひはつせは人そまたるゝ
ふきたつるまきの板戸のはた〳〵と身をふるはるゝ山おろし哉

すたれ

夫　たえはてゝふりぬる宮の玉すたれこにたにみたす成にける哉
夫　すくもたく難波乙女か蘆簾世にすゝけたる我身成けり
夫　へたつれとまはらにあめるしの簾忍ふ人めもえこそかくれね
夫　世中にはてはすゝけのあしすたれあしくかけたる和歌の浦涙
夫　年をへて世にすゝけたるいよ簾かけさけられて身をはすてゝき

床

やとりするはにふのこやの竹すかき一夜の床もふしそ侘ぬる
こぬ人のつらさをいとゝなけくとて夜床の風は吹まさるなり
はらへともむなしき床のいつはりの言のはのみそ敷つもりける
夫　うちたえてさのみ臥猪の床つめにかゝるものみたれ朽やはてなん
夫　墨染の袖をつらぬるなか床はときまつとてもあたにやはゐる

むしろ

君まさて更たる夜半のさむしろはいかにしつめてねん方もなし
涙にも朽てをになるあやむしろ我こひをれとみえぬ君かな
秋ならぬ露をや人のあやむしろきしのへともかつみたれつゝ
夫　道の邊にそろゐかりほす莚うらをのれかつ／＼敷かとそみる
雲にふす苔のむしろもいたつらに我身たえれは敷かたもなし

おきな

夫　心をはいかにならはむ方もなしきたの翁に身は成ぬとも
あさな／＼しらぬおきなのます鏡めにみすさまにつもる年哉
夫　いにしへのきたの翁もある物をなとあやにくに世をなけくらん
日をへてはしらぬ翁をます鏡みゆる影うとき敷そかさなる
あら玉の年をあまたにふる人も名をとけてこそ入こもるなれ

をうな

やをとめのふるてふすゝのころ／＼になゝの社は宮居せりとそ
たをやめの花のうはきの下匂ひ物思ふつまに誰ならひけん
夫　わきも子かまた朝寢やつゝむらん髮ふりあけておもかくしする
夫　いはひをく御代の始の八乙女にやをよろつ代のほとはみえにき
忌にかけるる乙女の姿それまてもみよとはゆるすをしへやはある

おや

いかなりしよゝの契りにたらちねの佛をたにおほえさるらん
たらちねのおやのいさめの數／＼に思ひ合せてねをのみそなく
夫　かそいろのみし世の花の衣手にかけきやかゝるすみそめの袖
たらちねのおやのいさめも昔にて身は老ほれのはてそかなしき
夫　とひかたみいかなる隈に身をうけて我たらちねの悲しかるらん

うなひこ

夫　百數やくらのつかさのふりうりに我おとらしとつとふうなひこ
うなひ子かをくしもさゝぬ朝ねかみとくるまなくや思ひ亂れん
夫　うなひこかふり分かみの行末によそへてかくる草かつらかな
夫　うなひ子かうちたれかみをふり分てむかひつふての袖かさす也
うなひこか岡本傳ふしはふしに野飼の牛は守るともなし

わかひこ

夫　みとりこのたふさの中の紅葉々をある物かほにしるもはかなし
夫　捨て行・親したふ子のかたいさりよに立やらてねこそなかるれ
夫　世中はいとけなきこのおも嫌ひみしかなきには音こそなかるれ
みとり子のまたいとけなき面きらひうときはうとくけにそ覺る
夫　一すちにある物とのみみとり子の鏡のかけをとるかはかなさ

くるま

夫　今はやかけてやみにし小車のよせ所なき世にもふるかな
夫　哀なとかもの見あれのすき車かさりてわたる世と成にけん
夫　行なやみちから車もひゝくなりむそちあまりのなけきつむとて
おひか世にまたしちたてぬ小車のつたふ力もなきそかなしき
あかなくにくさひをぬきし小車のわれさりかたき世を歎つゝ

うし

夫　ゆきのしまきのこ牛のみとせにて鼻さす程もたえかたのよや
夫　日はくれぬ野かひのうしをしろへにて歸かたにや宿をからまし
夫　涙ちわけ宮古にきたるつくし牛草につきてやさかりみるへき
夫　こと〳〵しことゐの牛の角さきのきらあるみるも恐ろしのよや
いなは分人の田の畔引牛のよこ道もなき時世なりけり

むま

夫　あれまさる駒のしなひのとりもあへすしつめかたきは心成けり
夫　おくの牧の野とりの馬のかたなつけともすれはまたある〻君哉
まれくとや遠方人の思ふらむお花あしけの駒のおふりを
夫　數ならぬ身にしられたる駒さくりさのみやおなし跡をふみゝん
むちかけにおとろく駒の心にもなをよはぬは我身なりけり

佛事

心にてこゝろはかりを傳ふなる三世の佛の道をしらはや
すませ猶心の底の法の水うき世の末のにこり成とも
たのもしな四方の草木に咲花もつゐに佛の身とは成へし
釋迦あみた同しをしへの一つ道よふもおくるもちかひたかふな
あるはなくなきはある世の中をとれさてそ佛のさとりとはなる

寺

夫　徒に往來をとむる關守はむつの道をやゆるさゝるらん
夫　たのもしな國をまもれとちかひ置しわか立杣の嶺の大寺
夫　今日もまた入日さひしき山寺にひくこゑすめる秋風そ吹
夫　更る夜の寺おこなひの鐘の音にはかつゝみにうつそおとろく
今こそは苔の下にてみえすとも空より花のふりし所そ

かね

夫　白浪の岩うつ音やひゝくらんかねのみさきのあかつきの空
夫　石上名におふ寺のかねの音にふるくなる夜を聞そかなしき
はつせ山あらしにまよふ鐘の音にいくよの夢の遠さかるらん
きゝなるゝむそちあまりのかれの聲宵曉もあはれいつまて
誰もきけ尾上にひゝく鐘の聲うたぬにはなる曉もなし

ほうし

夫　三吉野のかけちをつたふ山ふしのすゝかけ衣露にぬれつゝ
夫　髮をそり衣をそむる色なくは何につたへて法をきかまし
高野山あけんひかりをまつ人の長き夜けたぬ法りのともしひ
夫　苔の袖聞もたうとしいにしへの祖師のなかれの跡のしたえれは
朝な〳〵あかの水くみ樒つみ苔のたもとは岩にふれつゝ

あま

夫　くろ髮の色はかはらぬさけ尼のまことのすちに身はなひきつゝ
夫　玉かつらかけし姿をあらためておこなふ道はみるもかしこし
夫　一すちに五の障いとひてやおもひすてゝも道に入らん
もしほやくあまならぬあまの姿にもからき浮世や思ひすつらん
夫　なをさりのむかしの今朝の行衛たにかゝる悟りの身とそ成ける

新撰六帖題和歌第三帖

水

水とり　をし
かも　にほ　う
かめ　いを　こゐ
ふな　すゝき　たい
あゆ　ひを　河
かはつ　はし　ひ
ゐせき　しからみ　夜かは
あしろ　やな　江
いけ　ぬま　うき
たき　にはたつみ　うたかた
さは　ふち　せ
うみ　あま　たくなは
しほ　しほかま　ふね
つり　いかり　あみ
なのりそ　も　みるめ
われから　うら　かひ
なきさ　しま　はま
ちとり　はまゆふ　さき
いそ　なみ　みをつくし
かた　みなと　とまり

水

なのつから岸にしたゝる山水の末は小川になりにける哉

岩山のくつるゝ谷のうもれ水すましかねたる我こゝろ哉

はかなしなむすふ清水のかつもりてのこりありとも頼れぬ身は

すみかはる野中の清水いたつらにぬるき心は世にもつかへす

君すめは水上ふかめ行水のなかれなとたみたゆる世もなし

水とり

山川のはやせになるゝ水鳥のうき世の中になかれてそすむ

おなし江になを立かへる水鳥のしたやすからぬ世をいかにせん

今はまたはねけになれる水鳥の立ゐかなはぬ身をいかにせん

うき鳥のさなからぬるゝ水遊ひなにそはさてもかくらかはらそ

蘆ねはふうきぬにすたくかりの子の親にまさると聞はたのもし
なし

池にすむをしのつかひもねかはれすうき世にめくる契と思へは

池水の思ひも出しあはれわかたなをしとりのたしとりし世は

冬の夜の氷へたつる池水にかけさへみえぬをしのひとりね

池にすむ鴛の劔はそはたてゝつまあらそひのけしきはけしも

山川のあたりは氷る岩わたになかれもやらすをしそ鳴なる

鴨

三草ゐる入江になるゝうき鴨のやすからぬ世は思ひしりにき

日くるれは山陰くたる川あしにうきねをさむみ鴨そなくなる

世にふれはかもの水かきやすからす下の心は我そくるしき

冬の池の鴨のうきねの身ふるひはけにも寒さの程そしらるゝ

霜のきぬ氷の床に夜なかさね寒さたへたる池の鴨鳥

鴎

ふかき江のうきすにすたつ鴎とりの定なき世に身はふりにけり

舟かよふ蘆間にすたく鴎鳥のうくもしつむも我こゝろかは

鴎とりの波の下道ともすれはうき世のうかとゆきかくれつゝ

下にのみ鴎のかよひのみなくゝゝり入ぬる磯はみらくすくなし

かくれかとなる水くゝる鴎鳥もうきはおなしき世なやしるらん

う

いかにしてつかふうなはのさはきつゝおこなふ道に心みたれし

いかにしてえかふ入江のはなれうのしはしの程も心やすめん

おきつしまの涙のまもなくあらうとやほせと翅のかはかさる覧

なにかその波はかくれと見つたきつうのゐる石の上そかくれぬ

みれはまたつかひもいれぬ荒磯の岩にゐる鵜も魚はとりけり

かめ

水とけて春はのとけき池水に汀のかめも日影まちけり

河こしのならの田中の夕やみに何そと聞は亀そなくなる

いかにして行て尋ねん亀山にしなぬくすりはありといふ也

つきもせぬためしやさても重ぬらんこうの下なる亀のよはひは

河の瀬にうきたる亀のさしくしそみし世なからのしるし成ける

いた

冬川のきしの下行水ぬるみはえある世にもあひにけるかな

夏河や瀬たえの水にすむいなのせめくるかたなしる時もなし

雨過るたぬきのさゐの水たまりありはつましき世なつ頼まん

うなのこのかへるたのみもある物をさらぬわかれの跡そ悲しき

しほかれの浦間につたふ魚なみのたのしむへくもなき世成けり

こゐ

淀川にいけてつなけるこゐなみよ誰も此世はあはれいつまて

水底の玉もかくれにすむこゐのうき出んかたもあやふまれつゝ

世中はよとのいけすのつなきこゐ身を心にもまかせやはする

こきまはる湊の舟のこゐかせにひれのさはきの涙たかくみゆ

水舟にうきてひれふるいけこゐの命まつまもせはしなのよや

ふな

いにしへはいともかしこしかたゝふなつゝみやきなる中の玉章

ふなのほの濱江のえりの淺からす人のしはさのなさけなのよや

ふしつくるおとろかしたにすむふなのけふの命も定なの身や

したみおとす水口はやくほす池にとまる鮒子の數そしられぬ

志賀の浦にすなとる鮒をあはれ〳〵おきにもてきて放ちてし哉

すゝき

夕なきの藤江のうらの入海にすゝきつるてふあまの乙女子

くれぬまにすゝきつるてふ夕鹽のひかたのうらの海士の袖みゆ

ひれふりし秋のすゝきを思ひ出て誰いかはかりよへとかへらぬ

鱸つるさほのたはみのたゝよはみ波のたよりによせてこそひけ

夕なみの見なとかたかけみつ鹽にすゝきつり舟さしわたすみゆ

たい

きのうみにたいひくあみのおなかけてなく程みゆるうけの數哉

行春のさかひのうらの櫻鯛あかぬかたみにけふや引らん

水無月や君のなさけにあひそめてうくてふ鯛は今もありとか

わきもこかためと思ひてつる鯛のさここそ心にうけも引らめ

春の海のうらによるてふ櫻鯛なみをやをのか花とみせつる

あゆ

山河のそはのこかけのかた淵にわか鮎つるとけふはくらしつ

かも川ののちせしつけみさてさして鮎ふす淵をねるはたか子そ

太山河のほるこあゆのたてなかしからくもにこる世に生れけん

朝な〳〵ひなみそなふるかつら鮎あゆみをはこふ道もかしこし

すみわたる月のさかりそをのつから瀬にふすあゆの命とはみる

ひを

ひをのよるあふみの海も風さえぬたなかみ河やあしろうつらん

寒行は氷も月もひとつにてひをのよるともみえぬあしろ木

網代もるまきの島人いとまなみひをのよるしもはやはねらるゝ

あしろすにうちあけらるゝあさひをゝこまかに碎く氷とそみる

風さむみ今朝しもしろしあしろ守思ふにさここそ氷魚によるらめ

河

夕すゝみかへるさやすむますらをのかりてすゝけるくさ川の水

あはれ〳〵今につきせぬ思ひ河身をはやなからあるかひもなし

今夜さへあはぬこゆへにこの川の涙をこつけみ袖ぬらしつる

はや河のせきりあやうき舟わたりそかひにむかへ道となくとも

見れはこそ色にもふけれあなし河そことをしへよ我渡なん

かはつ

年をへていし井の底にすむかはつつたなかりける我身成けり

みさひゐる古江のかはつ草かけに人もすさめぬ音こそなかるれ

いそのかみふるのあら小田草深みひとりかはつの時となくらん

春のうちは猶水さむき谷陰の岩のうつほにかこつなく也

つとめすとねもせて夜はをあかす身にめかる蛙の心なきこそ

はし

夫 池水のすさきにわたすそりはしもかたふくまてに古にける哉

昔よりきかぬ橋たにわたす世になからの跡よなとふりにけん

旅人のわたるかけちの丸木はしあやふみなから行ちかひつゝ

峰越て岩にかけつく丸木橋まろのみよはき道そましはる

夫 これやこのそらにはあらぬあまの川かたのへ行は渡る船はし

ひ

夫 まかせつる石ひの水の下にのみすます心はしる人もなし

夫 水わくる田川のうけひうへ下にかはくまなくてくつる袖かな

ほかさまにたれ山水をせきつらん頼かけひの音信そなき

やゝくつるかけひの竹の水錆てたのむうき世の程もはかなし

夫 ふみ越る道にふせたるかはらひのくつともしらし埋もるゝ身は

井せき

夫 五月雨に水かさのまさる大井河となせのゐせき落すはかりに

くたるせのみかさをすまふはる川の井せきを人の心ともかな

夫 山川のせゝのゐくひをうちそへてはやくも水をせきおとす哉

河そひのせきの古抗うちすてゝかゝるみくつの下にくちつゝ

夫 大井河浪うつせきの古くひはくつろきなからぬくる世もなし

しからみ

夫 夏ふかみよとむはかりにかけてけり山下水の草のしからみ

河きしにしからむ竹のわれくたけ我世やかくてしつみはてなん

しはしたにせくにせかれぬ涙川なにそはありて袖のしからみ

みな人のつゐに行てふみつせ河その瀬にかくるしからみそなき

河の瀬にとまる紅葉はかひもなし枝をかけたるしからみもかな

夜かは

夫 かゝりさすうかひの小船かひ下り明てそのほる淀の川なみ

月ならてよ河にさせるかゝり火もおなしかつらの光とそみる

をくら山夜川の水の瀬をはやみのほれは下るかゝり火の影

さしはへて夜河につゝく篝火もさきたつみれはせにやあふらん

夫 この川に小夜更ぬらしかつら人うなは手にまき船くたす也

あしろ

夫 水はやき宇治の河瀬のあしろもり手玉もゆらにうたぬまもなし

したにほるはやせの浪の網代木のうかれなからも世にたてる哉

ふる郷のよしのゝ川のはやくより朽やしにけん瀬々のあしろ木

ひをのほる瀬々の網代木ことよせてわたりすゝむる宇治の川長

夫 さらぬたに浪もてゆるすあしろ木になかしかけたる宇治の柴舟

やな

夫 五月雨はふる川のせの水はなにやなこそ浪の下に成ゆけ

みなと川ゆくせの水のくたりやな春のひよりにはやさしてけり

夫 せきかくるたなかみ河ののほりやな逆まく水のおちそわつらふ

夫 早川のあさ瀬にかゝる片きしをやなうつけたのたよりにそかゝる

夫 手向へき神のにえそとことよせておまへの河はやなうちてけり

江

あしけきなにはほり江にこく船の見さほならぬは心成けり

海士小舟さすかにかよふにこり江のすまさぬ世をも猶したふ哉

夫 おきつ浪津田のほそ江のうらかくれ風も吹やととまる舟人

たまし河三舟はこかしさすさほに堀江の波はにこりもそする

夫 潮むかふをのゝ湊のなかれ江に猶こきかねてとまるいせ船

池

かろしまのあかりの宮のむかしよりつくりそめてしから人の池

山のおのゆきあひにせく池水の入こもりてやわか身成らん

哀れ世なうきぬの池といひたてゝみつからさても出そわつらふ

道のへのつゝみのきはに入たてゝとやまかくれの池ふりにけり

いかにせんかはるすかたの池水の底清からぬこゝろつかな

ぬま

底ふかきいかほのぬまのいかほとに戀しきことな思ひとかしる

こゝれしな草にかくるゝぬま水のしたはえなかすふかき心な

世なすては人めはかりは隠れぬのみこもりにてそ過へかりける

我身いま猶もみこもりにかみつけのいかほのぬまのいかゝ悲しき

いつまてか袖うちぬらしぬま水の末もとならぬ物思ひけん

うき

み草ゐるうきはうへのみ見ゆれとも人の心のそこはしられす

世中にうきはわか身といふほとにやかてふかくもしつみぬる哉

けふもこなうきにかゐてふあしつゝのうすきや人の思ひ成らん

水底のみえぬにこひのふかければうきとはいへと寄もかよはす

うへみえぬうきに生たるあしのねのよはき心そ身なはしつめん

たき

あゆはしる瀧の岩つほわきかへりみるも涼しき水のいろ哉

なく涙世のうき時とせきかけて我身なさらぬ布引の瀧

おち瀧津水の白玉ひゝけとも名は音なしのきゝそふりぬる

山はさまきひしくたゝむ岩かとに年へてきれぬ瀧の糸哉

うき時は袖におほかる涙ともしらてそたきの玉ひろひけん

にはたつみ

五月雨もしけきよもきのにはたつみ行かたしらぬ我心かな

なかめのみたゝつれゝの庭たつみ世にふりはてゝ行方もなし

村雨のふる程もなきにはたつみさてすみはてぬ世ないかにせん

みな人にふみにこきるゝにはたつみ影とむへくもなきすゑ哉

みれはかつ軒のしつくにたゝかれて玉ゐるかすのまさる庭かな

うたかた

河の瀬にうきてなかるゝうたかたの哀れいつまて消かてにせん

うきて世なめくるもかなしうたかたの渦巻く河の岸のみわたに

時のまにきえも消やすき水の沫のうたかたかゝてあるはあるかは

河のせにきゆるうたかたはかなさな思にさらぬやおはれ世の人

うき世には沈みはてにし身ならでは何人なみにましるうたかた

さは

紅荒雄のみのにさゝむと澤に生るさゝめかほにも袖はぬれけり

よしやたゝむすひもそめしあたにきく淺澤水は絶もこそすれ

さは水な秋の野守のかゝみにて千程にうつす花のかけかな

秋さゐる淺澤小野のひとはなれさひしくとなき水の上哉

この雨によとの澤水ふかけれとおりたつ民はまこもかるかも

ふち

おくく山の岩かきふちのふかことをもみえぬはかりにすめる水哉

いくく色とえやはわくへきちりかゝる紅葉の淵の谷の下水

行年やつもりて淵となりぬらむ岩根によとむ谷川の水

ふる川やくつるゝきしの下はやにいとゝわたみのふかき淵かな

さきおかる岩間かくれに淵はあれと猶谷ひゝく浪の音かな

瀬

夫 いつみ川くたる小船のうちかひに淺瀬そしろき行なやみつゝ
今そおもふ關の藤川いかにしてくるしきせゝを我過にけん(過し来イ)
夫 すゝか川我身ふり(ふるイ)行老の波やそせもちかくぬるゝ袖かな
夫 月ことの(の夫)七瀬のみそきたえせねはまことに淸きかはらとやみん
この河はみなとや近くなりぬらんひろせをこえて鹽みちにけり

海

夫 わきも子かいなみの海の白波のよるはすからにくたけてそ思ふ
我袖ゝ海となるおはつの國のなかす涙のつもり成けり
夫 そなたにもちかひたかへす西の海のこち吹なくる(わたイ)風を待らん
夫 けふ(さイ)はまたなころ方よせ(り夫)風やめてやゝはれわたる沖津朝なき
もゝ谷のぬしといふなる海なれは水のこゝろにそむく世そなき

あま

夫 あま人の身をうら波に袖ぬれてぬかり鹽やき世を渡るらん
みるめかり鹽やく蜑のおしたゆくくるれは歸るいとまなの身や
夫 かれはつる色をはしらしあま人の秋なき波の花をのみゝて
夫 はま中にしほ風はかり音信てかたたよりなきあまの宿哉
折かこふはままつかえの袖かきにかりほすあまのみるめ沸しも

たくなは

夫 朝夕のあまのたくなはいとまなみこの世はかりをくるしとや思
夫 海士のすむ里にほすてふたくなはのなかき恨はけに(うちは夫)そゝろしき
夫 うなはらや底の心もしろやとちひろたくなはくりためてみん
さりとても手にもたまらぬ拷繩の苦しき世にそまつはれにける
とにかくにあはれくるしき世中に(をイ)なそたくなはの亂れそめけん

しほ

夫 いせの海のあまのまてかたかきつめて幾度間ともしほたるらん
夫 いさしらすなるみのうらに引潮のはやくそ人は遠ざかりにし
難波かた鹽手しほみちなかれ木のうきては沈む身こそつらけれ
夫 なをさりの浦のとまやによる波をくみてもしほと誰かみすらん
かもめとふ夕しほみちのはまさきに玉藻かるてふ船きよ(よに夫)すなり

しほかま

おもひのみ下にこかれて年はへぬうらの鹽かまぬるよなけれは
あまのくむ浦の鹽竈しほしほとぬれてのはては身をこかしつゝ
うたてなとあまの鹽かまやくとのみ思ひつきせて年のへぬらん(ゆ夫)
夫 たえす(うらイ)のみもしほやくてふかさはやの三ほのうらはに煙立也
すまのあまの朝な夕なにやく鹽のあなかまからき世にも有哉

ふね

夫 あはち島かさまにわたるしほ舟のからろの音そ沖に聞ゆる
たよりあらはもろこし船に尋はやまた我國にたくひなき身は(なイ)
ゆらの戸に興津鹽風むかふらし渡る船人こき歸るみゆ
古河にかたふきをれるすて船のうかふかたなく朽やはて(つイ)なん
いきしにの二の海を渡す(るイ)なりあやきさとこくおきの釣舟

つり

蜑小船おきにさしいつる釣棹のたはむけしきもみえぬ君哉
夫 一すちにあまのつりなは(なた)こひかねてくる〳〵くれとあはぬ君哉
夫 きしたかみつりのたなはのうちはへてなかき日あかす暮る(ゆ夫)空哉
くらきよりくらきをしらてかりそめの釣のいさり火何ともす覽
夕なきにつりするあまのうけなはのなかくや人を恨はてまし

いかり

夫 追風にはしる小船のいかりなはくり返してもむかしをそ思ふ

夫 こひにのみこかるゝ船のいかり繩思ひしつめはくるしかりけり

夫 つくし船あまたいかりの數そへよけふもなころの靜かならぬに

夫 沖つふれおろすいかりのなはつよみ危うからぬも猶そあやふき

夫 こき出るとまりの舟のいかりなはへにくりあくる聲聞ゆなり

あみ

夫 いせしまやあまのたはれをすくあみのめならふ人も猶そ戀しき

夫 引かけて浦の夕日にほすあみのめならふ人は數もしられす

夫 今はまた日もゆふかけてをくあみに遠くな出そ蜑のうけ舟

夫 春は猶なかき日くらし引あみに心ゆるへぬなたのうら人

夫 冬の海のあれたる比のあみよりもをき所なき身をいかにせん

なのりそ

夫 梓弓いそまに生るなのりそのそのことゝなく身はふりにけり

夫 わかの浦磯のなのりそそれはかりわつかにかける蜑の寂しさ

夫 いたつらになにかなのりそあさくらや木の丸殿に生ぬ物ゆへ

夫 徒になみにゆらるゝなのりそを木の丸殿にいかてうへまし

夫 磯かくれのりにましれるなのりそのなのりも今は知人そなき

も

夫 たかしきや浦まの風になひきものよりより世をは思ひしりにき

夫 うへはかり波にしたかふなひきものけによるかたもなき我身哉

夫 さても又おはりみたるなあまのかる磯の玉もはつかれせすとも

夫 よる方の心もしらぬうき波にさやは玉藻のなひきはつらん

夫 みさこゐるはまの眞砂の打上に波きはみえてよるもくつ哉

みるめ

夫 大よとの浦のみるめもよりぬらしおきつしほ風南ふくなり

夫 いとふそよなるゝを人の朝夕に見るめはあまもあかすとそ聞

夫 浦遠き人のみるめになれそめて戀しきたひに船出をそする

夫 あさな夕なかるてふあまのみるめたに猶ほしたらぬ長濱の浦

夫 いせ島や霞の末にこき出てみるめかるなりあまの乙女ら

われから

夫 浦による玉藻にましろわれからの身をありなしと問人もなし

夫 いさやそのあまの莉藻もしらなくにわれからなとか思ひ亂るゝ

夫 わすれめやもにうつもれてすむ虫のわれからくして過し年月

夫 人からのうらみともかなあまのかるもにすむ虫の名たに忘れん

夫 何事もみな我からと思ふ身のなとしも世をは恨きつらん

浦

夫 山のはにほてりせる夜はむろの浦にあすはひよりと出る船人

夫 志賀の浦は頼む日よしの道なれは年にいく度行歸るらん

夫 沖津風千江の浦はのしき波も思ふおもひの數はまさらし

夫 葉すくなに吹からさるゝ浦松の鹽風さむみ猶たてるかな

夫 すまあかし浦の見わたしちかけれはあゆみ苦しきたかすなこ哉

かひ

夫 興津風あれたる浦のいたや貝そも身の程のすみか成けり

夫 よせかへりさためぬ涙のうつせ貝うかれのみ行身をいかにせん

夫 いける身のはてはさなからうつせ貝空しき殼や世にとまるらん

夫 あやしくそうら珍らしきいたや貝苫ふくあまのならひならすや

夫 伊勢の海士の汐干にあさり求たるかひをそたもつ身をは捨つゝ

なきさ

夫　みなと河わかすのさきも心(はイ)せよなきさのふねも近つきにけり

夫　すみよしのあまの古つな引人も今はなきさにくちぬへき哉

なきさなるあまの捨舟朽果てしつみのみ行身こそつらけれ

夫　こもりいしの波の下かとしけからしなきさの小船心してこけ

湊入はなきさつたひにこきまはせとあさもあらは舟もこそいれ

しま

波間より今朝こそみつれとふさたてふな木きるてふのとの島山

淡路島とわたる船のなゝしほに思ひさためすゆくこゝろ哉

こき出るきりのたえまにみわたせは今朝めつらしき浦の初島

いかにせん玉津島姫我道のたゆたふなみのしは〳〵も哉

こき出て猶またはし島はらにもろこし船のたれをまつらん

はま

夫　つれなさは岩木のはまのしき波の(を夫)なにと心を(の夫)かけはしめけん

おきつ波あらきはまへのとまひさし我こそやとれ風はとまらす

はまひさしさせるかひなき住家にもみゆるこ島の月そなれぬる

うと濱のうとかるへくもなき人のとはぬはさすかうらめしき哉

波風のあらきはまへの(まイ)いさこちにうちかされてそ物はかなしき

ちとり

風さゆるさほの川との冬の夜に明やらすとやちとり鳴らん

夫　よさの海や汀のちとり哀にそさゆる霜夜に友よはふなる

夫　風をいたみありそにかよふ濱ちとり涙たかからし跡もとゝめす

浦つたふかたはしられとにまちとり夜鳴こゑそとをさかりゆく

夫　夕なきのあしやのをきの鹽風にさそはれてなくむらちとり哉

はまゆふ

いたつらに年そかさなる三熊野の浦のはまゆふ我ならなくに

よそになる浦のはまゆふいくへまて人の心に我へたつらん

おひそめし浦のはまゆふ幾とせの春をかされてわか葉さすらん

かさぬとは何かいふらんはまゆふのつかれのみ行我世かなし(むらイ)も

夫　かきつくる浦のはまゆふなにとして夢には人をみせはしめけん

さき

夫　はりまかたいてさきめくる夕くれのふなこのこゑも哀なりけり

夫　入うみのせとのさきなるたか岩にうは波こしてあるゝ鹽風

夫　けふは又たかみさきをかしての崎ゆふとりしてゝ波もこすらん

た　見わたせはこすゑひとしきならひ松しまさき遠く誰かうへけん

わたの原見さきこきまふ釣舟のはるかになれは心すみけり

いそ

夫　いせのうみの磯の中道いそけともはや朝鹽はみちそしにける

朝夕にしほみついその岩根松世にいりこもるほとそかなしき

山ふしの磯のつちふむ眞砂地をいかはかりとかあしたゆくゝる

夫　しほたれはあまにも袖をかしゐ(ヘイ)かたいそなつみにと涙を分つゝ

今そわれあらいそ岩の高波につちふみかれて袖ぬらしつる

なみ

年をふるみしまかくれによる浪の音にはたてす世を歎つゝ

沖津かせうらにきよ(ほイ)するしき浪のしきりにこひぬ時のまもなし

侘人はいかなるえにかぬれ初し袖をやすむるあた波そなき

もしほ草かきなひか(すイ)すも有物をよこ浪つらきわかのうら哉

そこはみなすむもにころも同し江にかゝるあた波たつよ成けり

みなつくし

すみの江の涙に朽行みをつくしふかき賴のしるしあらはせ

難波なるあしねに交るみをつくしうきふししけきよにや朽なん

さためなくなかれはかはるふる川にまた朽殘る身をつくしかな

難波江にさそなしるしのみをつくし深きは蘆にはかくれもなし

入をみな渡すしるしのみをつくしふかき江にこそ思ひたてつれ

かた

てる月の影にまかせてあかしかた鹽のみちひもある世成けり

身はかくて沈みはつともみつ鹽に跡かたあらはなくさみなまし

あさか瀉うけらか花のいとゝまた色こそみえねけふもくれつゝ

見わたせは玉藻はからて夏そ引うなかみかたに鹽やひぬらし

はりまかた朝こく船のほのかにもみえたる山けあはのしまかも

みなと

さゝ波やひらのみなとの山颪に船入侘るしかの大わたた

しほむかふかけの見なとのいり涙に哀我身の出かたのよや

興津島月いさよはゝこき出むひらのみなとはさよ更ぬとも

風あらきみなとの奥のいちのすにちかふ小船ははやスにけり

みわたせは海と川との行あひのしほせにかゝる水の白波

とまり

みなと江にかしふりたつる泊り舟なかるゝまてに鹽はみちきぬ

ともみれはとまりに沈む朽船のうき出しかたそさすかこひしき

波のなゝ風のかけたるからことにひきとめられぬ舟人そなき

友ふれはつくしもいせもこきあひのおなし泊にうきねをそする

今もかものこのうら浪高からしとまる船人おきにいつな夢

新撰六帖題和歌第四帖

こひ　　　　　かたこひ　　　ゆめ
おもかけ　　　うたゝね　　　なみた
うらみ　　　　うらみす　　　ないかしろ
さうのおもひ　おもひをのふ　ふるきを思ふ
いはひ　　　　わかな　　　　つえ
かさし　　　　わかれ　　　　ぬさ
たむけ　　　　たひ　　　　　かなしひ

こひ

たまきはる命そ限りつれなきをつれなしといひて戀やまめやは
あふことはいつとしらぬをたのみにて我こふらくにつもる年哉
戀しなん身をやはおしむ逢事にかへぬ命のなをつらき哉
百夜かくしちのはしかき逢まてとせめて久しき數そかなしき
すてゝこし戀の奴のしりしたひとりつかれたる身をいかにせん

かたこひ

波のうつあら磯岩のわれはかりくだけて人をこひわたるかな
さきの世に借をへいかに生れけん思へはもとの身こそつらけれ
いくたびかつれなき物と太山木のこりぬ心を身にうらむらん
逢みての後のつらさのなかつまとをせとも明ぬおとしたてかな
我袖のひたりもみきもぬれなからなとかた戀の涙なるらん

夢

逢事をまとろむほとになくさめて夢そありふる命成ける
夢にたにあふ事しらぬ思ひ寢をたのみけるこそいやはかなけれ
さりともとくらせるよひの更行は今は侘てもゆめそまたるゝ
見ぬもみえきかぬもきゝつ世中に夢こそ戀のさとり成けれ
ちらすなよあふと見るよの夢語りうたてちかふる人もこそあれ

おもかけ

わかるとて我身にそへし情かはしられていこふ人のおもかけ
朝夕はわすれぬまゝに身にそへて心なかたるおもかけはなし
みるもうしかはる心の年月にありしまゝなる人のおもかけ
身にそへる人の面影よしなきをいとはんとてもむく方そなき
あかさりし人の面影とゝめおきて我身にさらぬかたみとそみる

うたゝね

まちなれし夕の床のうたゝねもおとろかれぬる入あひのかね
戀しきにおもひかねたるうたゝねはまとろむとても忘やはする
つれ／＼の秋のなかめのうたゝねにやすく日影の傾ぶきにけり
床の上に手枕はかりかたかけてしはしとおもへはねそ過にける
そむきける親のいさめのむくひとて猶うたゝねはやむ時もなし

なみた

かきたえてぬる夜もかたし花うるし袖の涙をしほり侘つゝ
戀しさもつらさも袖は涙にてひたりみきにも朽ぬへきかな
さても身をいかにせよとて涙のみしけきなけきの花とちるらん
人しれぬ涙せかれてなかれすは袖のちしほや淵となりなん
袖をみは人もあはれはかけつへし涙そ戀のいつわりもなき

うらみ

大ゐ川いかたのはすけいかはかりうきにつけても戀しかるらん
まよひすむさとのなかての道つゝき限あらはやうらみはつへき
なからへてあれはそ物をおもひける命は人のつらさなりけり
みすいはしたゝよそならむとおもへともむかへは落る我涙かな
身にかへるあたとも知らて秋といへはいたくも吹かくすの下風

うらみず

なをさりのたゝ一筆の玉章はうらみ所もなくそなりゆく
身のほとはうらみてとたに頼まねは思ひしらぬになして過つゝ
いとへとも人の心はつらからす身のことはりにおもひなしつゝ
風過てたゝいたつらにくすのはの人にうらなき我こゝろ哉
身をうこと思ふ餘りに恨みねはけにたのまぬになしやはてなん

ないかしろ

なけきつゝさすかある世のほと計なきになしてはおもはすも哉

いつまてかたえれはたえぬ心とてなをさりことの契りたのまん

わすれしの契りもえこそたのまれぬなけゝにいひし人の言のは

あはすあらは思ひしことそ忘かすかの契りやなそと何か恨みん

我たにもなきになしたるうき身をはさこそは人の思ひさくらめ

さうのおもひ

夫 をろかなる心のしとはなりぬ(れと夫)とも思ふ思ひに身をはまかせし

人はさもしらぬ物ゆへあちきなくおもふ思ひのはてそかなしき

ことゝいは忘ける物かは思ひ草尾花かもとの秋のこゝろた

はるかさてさもそけふりのたくひける心の中のむろのやしまは

おもにしとおもふにもにぬ思ひこそ思ふにたかふ思ひ成けれ

おもひなのふ

いかにせんくるしき海に船はあれとのりしらぬ身の行方もなし

われたにもうけくにつらき身の程を哀と誰か思ひゆるさん

いたつらにぬるゝ袖哉墨染のけふも暮ぬる空をなかめて

いかにせん君もたすけよ年ふりて我身ひとつの世のかきり(うらみイ)哉

夫 しらさりきほとけとゝもにをきふして明暮しける我身成とは

ふるきをおもふ

いたつらにいそちを過し春秋は戀しからすといふこともなし

をのつから身を身と思ひし時たにも(にたもイ)猶そむかしは戀しかりける

ふりにけるあとをそ忍ふならのはの名におふ宮のやまと言のは

いにしへのやまと言の葉あとゝめてはるかにあふく柿のもと哉

いかにかゝ心にむかしめになみたうかまぬ時もなき身なるらし(むイ)

いはひ

夫 もちなから平(星イ歌夫)をほなふる盃のきよくにこらぬ御代の久しさ

あまてるや内(年イ)外の宮のくもりなくはくゝみ守る御代は萬代

夫 君か代はそこひもしらぬありそ海(わたつみ夫)の駒うち渡る道(す夫)と成まて

夫 おさなこの春のはしめのいたまき(た夫)に司位はそなへあけつゝ

君まもる法をそ君は守なるさてそこの世は久しかるらし

わかな

治まれる御代のわかなのけふことに千世をつむとも盡しとそ思

末遠き春日の野邊の若菜にに千年の春をしめてこそつめ

ふるさとのかすかの原に生ぬれと若菜といひて年をつむらん

今はとて春のめくみのたのしきをつむや野原のわかな成らん

けふはまた野邊の若菜のなゝ草に君かやちよをつみやそふらん

つえ

夫 あはれわか家に杖つくよはひまて身をなからへん物(て夫)とや(ゟ夫)はみし

夫 宮の内のむつきは上の卯日とて取てふ杖はよろつよのため

老の坂につくてふ杖の末よはみつよくは身をもたすけやはする

なゝそちにおよひかゝれる杖なれはすかりてのみそ足も立ける

灑水かく杖の雫に袖ぬれて祈るれかひはみな人のため

かさし

夫 左ふち右さくらとてとりなれしかさしの花もむかし成けり

もゝしきやむかしかさしゝ櫻花我身ふりても猶そ忘れぬ

夫 うき事に行かくれてもみてし哉山の茂りにかさしさし(かさして夫)つゝ

わたつうみの涙もてかくる島松の枝もかさしの花かとそみる

夫 ことに出てときの花をもかさしこし二月はつきいつかわすれん

わかれ

わするなよわかれし道も出かてのあり明の月の心ほそさは

なさけなくいかさなからそたくらはいさらぬ歎に別はてにし（らイ）

あなこひしあらはと人を思ふにも歸らぬ道のわかれかなしき（なイ）

行をおしみとまるをさそふ心こそともに別のかなしかるらめ

たれゆへかつゐの別もおしからし親にも子にもそはぬ身なれは

ぬさ

夫
いま一めいもをみむろの神にこそぬさとりむけて祈りわたらめ

夫
今はわれ捨られなからあさぬさの君か手なれし時そ戀しき

夫
道のへにたゝりなすなとみそきしてせき守神にぬさたてまつる

夫
なみたつるぬさの追風はやけれはまかちしけぬきわたる舟人

夫
道のへのあらき岩根にぬさむけてさかしき山を越そわつらふ

たむけ

わけ過るきたのゝみやに手向せし（してイ）昔の跡を神そうけゝる

たつた山神の手向もいかはかり秋は紅葉の色にあくらむ

ゆふたすきかけて祈りしかひもなく手向の神やなひかさるらん

せめてわか袖をきるともかみ山の手向におくる錦やはきん

夫
あら山のとをりならはぬ岩つたひ手向のかみに任てそゆく

たひ

夫
道のへの露分衣ほさすして野くれ山くれ幾夜ねぬらん（ぬる夫）

さのみやは故郷をみ旅のよをいもこひしらに（さイ）いてかてにせん（しのイ）

若葉より草をまくらにむすひきて夜長くなりぬ秋のしのはら

みすしらぬ道のみとなき旅の空山こえ野越幾日きぬらん

家はなれひさにすてたる身なれとも旅にしあれは心ものうし

かなしひ

夫
たて置しつかのそとはも朽果て残る形見の跡はかもなし（かなしもイ）

なしかへしさそなならふ（ひイ）と思へともあるかなき世に成そ悲しき

いたつらに過にしかたの悔しさをいかなる道にいかになけかん

うつせみのよをいたつらに啼々もあはれかなしき心からなり（かなイ）

しるしらすしぬてふ人のかすことにとふらひなきの涙こそふれ

新撰六帖題和歌第五帖

しらぬ人　いひはしむ　としへていふ
はしめてあふ　のちのあした　しめ
あひおもふ　あひおもはぬ　こと人をおもふ
わきておもふ　いはておもふ　人忘れぬ
人に忘らるゝ(イナシ)　夜ひとりおり　ひとりぬ
ふたりおり　ふせり　あかつきわかる
一よへたつる(てだるイ)　二夜へたつる(てだるイ)　ものへたてたる
ひころ隔てたる　とし隔てたる　とを道隔てたる
うちきてあへる　よひのま　ものかたり
ちかくてあはす　人をまつ　またす
人をよふ　みちのたより　ふみたかへ
人つて　わする　わすれす
こゝろかはる　おとろかす　おもひいつ
むかしをおもふ(こふイ)　むかしあへる人　あつらふ
ちきる　人をたつぬ　めつらし
たのむる　ちかふ　くちかたむ
人つま　家とうしを思ふ　おもひやす

おもひわつらふ　くれとあはす　人をとゝむ
とゝまらす　なをおしむ　おします
なきな　わきもこ　わかせこ
かくれつま　二なきおもひ　今はかひなし
こん世　かたみ　玉くしけ
たまかつら　かみ　もとゆひ
くし　たま　玉のを
たまたすき　かゝみ　まくら
手まくら　はた　ころも
忘ほやき衣　なつ衣　あきころも
衣うつ　から衣　すり衣
あさころも　かは衣　ぬれ衣
さうの衣　ふすま　裳
ひも　おひ　ひとり
ことのは　ふみ　こと
ふえ　ゆみ　や
たち　かたな　さや
はかり　あふき　かさ
みの　かたみ　つと
いろ　くれなゐ　むらさき

くちなし　　みとり　　にしき
あや　　いと　　わた
ぬの

しらぬ人　　　前内大臣（イナシ）

ふみまよふ山のかけちの丸木橋しらすなからや戀渡るへき

前大納言（イナシ）

音にのみきくもろこしのほとたにもまたしらぬ世の人を戀つゝ

入道三位（イナシ）

我なからわか心をもしらぬかな誰といひてか戀はしめけん

前左京大夫（イナシ）

我そゝの人ともいはぬ面影をおほめくよひは夢かうつゝか

入道左大辨（イナシ）

ちはやふる神のみむろにまろねしてつゝしらぬ人に戀つゝ

いひはしむ

おもひかねけふうち出る山水のなかれて絶ぬちきりともかな

今こそはおもふあまりにしらせつれいはてみゆへき心ならねは

けふは先あらぬ樣ともいひなしてそれにつけたる氣色をもみん（イ）

思ひかねしらせ初つる筆の跡うちつけならぬ言の葉そなき

今をたにいふか愚かになるへくは又なにとしてこふとしらせん

年へていふ　　　夫

山川の（隆夫）みかけのこすけ年をへて心なかくもこひわたるかな（いひイ）

色かへぬおなし言の葉幾とせかつれなき中にふりつもるらん

あまたゝひつもる思ひを武藏鐙かけにかけていひしらせつる

おもふ事いかにやいかに年をへてかくいひくの數はつもれと

年月はいつかいふきの峯におふるさしも思ひのもゆとしらせし

はしめてあふ

こ草つむ野さはの小田のうす氷打とけてこそ袖はぬれけれ

あひに逢てぬる夜の鐘はうちつけにやかてみしかく成そ悲しき
あかすおもふ心はしろや逢坂の山下し水むすひそめつゝ
ちきりある新手枕のねくたれにみたれそめぬる妹かくろかみ
我戀のかきりと今を思ふへき夜はしもいたくねこそなかるれ

のちのあした

夫 ぬる床のうらのしき波よるよりも歸るあしたはくたけそひつゝ
あかぬ夜を月そ〳〵といふほとにけにしらむまて別かれつゝ
わすれめや宿のつま戸に立出て明るをしはしまてといひつる
立なからなを手枕の袖かけてあかぬあり明に出そやすらふ
おしみかねいてさらはとてみをくれはうたて空さへ明放れつゝ

しめ

夫 里人の軒端の竹のみしめなはかけて祈ししるしあらはせ
夫 むすはゝや我しめゆひしわか草の新手枕を人にふるさて
あらはれてはやしめさゝむ若草をねよけなりとは人もこそみれ
人しれぬ心は妹にかけをけと猶つれなさやしめもこゆらん
三輪山の杉のふる木のみしめなはかけきや人をつれなかれとは

あひおもふ

諸ともにしたのおもひはかよへとも忍ふそ戀のかきり成ける
かけしたゝひとり〳〵かあらましもいひてかなしき心まとひは
夫 朝夕にかはす袖しのうらなれてともにみるめいあかれやはする
あつさ弓末まてとなすふせ竹のはなれかたくも契るなる哉
いかゝせんしなはともにと思ふ身のおなしかきりの命ならすは

あひおもはぬ

夫 長月の有明の月のわれのみやつれなさかけを猶したふへき
我そうきつらくは人にしたかはてなをたへしたふ心よはさは
おちたきつよしのゝ河やいもせやまつらきか中の涙なるらん
なをさりの道行すりに逢事もうしろあはせに又ちかひぬる
つめのうへに山をはのせてありくとも又逢事は猶かたきかな

こと人をおもふ

しら波のかけても人に契りきやことうらにのみみるめかれとは
たのむなと告やゝらまし我にたにさこそはいひて變りはてしか
海士小船ほか行涙のよるへにもなれし名殘は袖のぬるらむ
すゑの松あたし心の夕鹽に我身をうしと波そこえぬる
くれなゐのこそめの衣あくかれてまたことつまに何うつるらん

わきておもふ

時雨ふる立田の山の色にみよわきてそ人をおもひ初てし
戀しさもみまくほしさも君ならてまたは心におほえやはする
この里にわくかたもなく行なれて駒さへ今は道いそくなり
花かたみめならふ中のふし〳〵もいかなる竹のよをとをすらん
おとこ山神さへさこそちかふなれわく方ありと何うらむらん

いはておもふ

夫 吹風は涙のきよするしまさきのいはぬ思ひそくたけわひぬる
なけかるゝ心ひとつの年月をいはて思ふと誰かしるへき
夫 さてもなを心にこめてなけくかな身をうきにのみ思ひしりつゝ
しのふ分てうつを杜にかくろひはもろてふ水のくちやなからん
かくはかりいはぬをさてもしろならは君につたふる涙ともかな

人しれぬ

夫 こひ侘ぬありしはかりの隙もかなこしのすかはら人めもりつゝ

かくれぬのあしの下ねのよとゝもに戀つゝふれとしる人もなし
磯かくれあまのしのひの下もえはくゆりわふとも誰かしるへき
こひしなはつゐにつらさのはてそとも誰かは夢を思ひあはさん
人めには雲かくれつゝ夕立の空をそろしき戀もするかな

人にしらるゝ

春日野々雪間の草の春くれは下にもえしも限こそあれ
戀侘る涙の雨のたくひとて我思ふことは世にふりにけり
むら雲に時雨る月のあらはれてされはよつゐにかくれなのよや
下もえのけふりや雲と浮ぬらん立名もあたに人のとふまて
我なからかくれあるへき戀すとは日のはしめより思はさりしそ

夜ひとりおり

夜もすからひとりおきゐる床夏の花のしら露消かへりつゝ
ひとりのみ戀しきまゝにみる月は思ひ忘てねん方もなし
いかはかり袖はぬれけん白浪の立田の山の夜半のなかめに
さりとてはさもあらましの床中にひさをいたきて幾夜あかしつ
ふかき夜に獨おきゐておこなへとさとられぬ身は戀せらるはた

ひとりぬ

歎つゝひとりやねなん水鳥のはれに霜ふり寒き此よを
まてとたにたのめぬ人のよひ〳〵をこひては獨侘つゝそぬる
ねやのうちは身を吹とをす風寒み人のへたてのよをかされても
待侘てさはく心の夕まとひぬるとはなくてねられもやせん
ともし火の消てのみこそよりふせは我影をたにみる夜はもなし

ふたりおり

諸ともに影をならふる十寸鏡みてたにあかぬ心なりけり
待えてもたかひにちきる兼ことにまたれぬ夜半の更にける哉
たちそはぬ今にてしりぬ面影は人のこぬ夜の形見成けり
わきもこかきてはよりゐるもろ心さそな夕のほともなつかし
あひにあふ時さへ物をなけゝとてねやへもいらす明ぬ此夜は

ふせり

山風も時雨にきほひ寒けれと妹としぬれは長夜もなし
くろかみのみたれてかゝる手枕はすきまにかよふ風たにもなし
中々にいやはねらるゝあひみるもこれは夢かとおとろかれつゝ
あなかちにかたみに袖を重ねつゝあかぬ夜床はすきまたになし
をのつから手枕はつしねなをれは我おもはすと妹むつけたり

あかつきわかる

曉のゆふつけ鳥もつらからす明けすは人にわかれせましや
鳥のねをあかぬ別のかきりにてたれかまさると鳴々そ行
たくひなくうき曉の別をは何に似たりといひもやられす
あかつきにおきてさくれは人もなしあな淺ましや妹はいにけり
月影はまた夜ふかしとやすらへははや人やりの鳥はなくなり

一夜へたつる

笛竹の一よのふしのへたてたになとあなかちに戀しかるらん
逢事のあしのかりねよ二夜とはみえも見えすもつゝかさりけり
けふそしるあらぬ所にふし初て我をあきたつかたゝかへとは
いもせ山中に生たる玉篠の一よのへたてさもそ露けき
山かつのかきねにかこふわれ竹のよませになとてあひ見初けん

二夜へたつる

身のほとのうさをもしらす玉くしけ二夜あはすと恨つる哉

あはぬまはきのふけふとてあすか川あすの夕をまち渡る哉
月たちてとはぬつらさを三か月のさすかほのめく影をみすらん
きのふといひけふはかりこそ飛鳥川かはる淵瀬のたえま成らめ
はやきませあはぬ日數をかそへても今夜は君をみよといふよそ

ものへたてたる

夫 むしたるゝあつまをとめかすきかけに名殘おほくて行別ぬる
秋の夜の雲かくれ行空の月みれはゆかしき君にもある哉
夫 今宵さへ事しけしとて逢事をちかへやりとのたてるからかみ
玉たれのこすのひまもるうつり音は秋ふく色の風そつたふる
あちきなし心は妹にひき物のはつれにたにもしるひまやある

日ころへたてたる

浦風にあら磯なみの打つゝきあひみぬ夜半はれん方そなき
三日月のわれてあひみし面影の有明までになりにける哉
かりにとて出にしまゝに逢ぬ日のかそふはかりも積りつるかな
かそへもつ日數はかりを身にそへておる手もたゆし逢ぬ絶まは
逢事をまたあす／＼といひのへてはやこの月も立ぬへきかな

としへたてたる

幾とせを隔つる中のふるひかきふみかよふへきたよりたになき
そのまゝにさて過にけん幾とせをあれはあふとよ思ひしるらん
あひみんとおなし事のみいはるゝは待れし程に身や老ぬらん
まちこふるみつのはま松としへても波のかけなく契やはなき
あひみすてつもりつもれる年月の程も覺えぬ人そ戀しき

となみちへたてたる

我せこかきなれの衣はる／＼と里をへたてゝこふるころ哉
海山の千里の外もなかりけり君にへたてぬ心ひとつは
思ひやる心もくるしわきも子かすむらん里の山こしにして
行つけはこまはなつみぬ妹か門一むらすゝきはやもかはなん
ゆみたけのかすもをよはぬ山中にはる／＼ひとり妹戀めやも

うちきてあへる

秋風も夜寒になれはから衣うちきて妹にあひみつる哉
やゝさむく吹もやすらむから衣きつゝあひみる夜半の秋風
なれ／＼し人のにほひのかほりきてとこなつかしくかはす手枕
かりにてもちきりあれはやから衣きつゝあらしのおかの草ふし
くへしとは思ひもよらてれたる夜に夢かや人の袖をかさぬる

よひのま

かきくらす宵のまほろしみぬ程そ夢をはかなみ猶歎ける
又とたにたのめぬ程のよひのまのやみはうつゝも定めかれつゝ
人しれぬまたいかさまの道もかなまたうちもねぬ夜半の關守
あかつきの別までこそかたからめまた更ぬ夜の夢そはかなき
宵のまにあはれまきれの隙もかな立やすらはゝ人もこそしれ

物かたり

年をへて思ひし程の心をはかたりあらはす言の葉もなし
いかにとよ思ひこしかた行さきをかたるはかりに鳥はなくなり
夫 これきけようき節々をかそふれは人のつらさにいひそくらふる
つらかりし日頃をかたるむつことになきみわらひみ明す夜半哉
あかさりしその古へのふることを語りつゝけてれをのみそなく

ちかくてあはす

あしかきのまちかき中のへたてこそつらき心のおくはみえけれ

夫 よそなから朝夕かはすから衣さて我袖やたゝにくちなん

さてもまたなを逢事はかたし貝ならひふしても何にかは（かひやなから夫）せん

露時雨色にみせてもかひそなきほとはこゝゐの森の言のは

いれ紐のさすかにめにはみえなから解ては人のぬる夜半（よひイ）そなき

人をまつ

まつほとはさすか命をいけれとやとはぬ物からたのめ置けん

山のはに出つる月をおしむ（とイ）まてなをさりともと（にイ）君を待哉

月影はまたれぬころ（かとイ）もある物を人くろしめのよひ／＼そうき

くろはよもまことならしと思ふにも猶夕暮そしつ心なき

いかに（カイ）せんさはかりいひしかれことを我待をれは夜も更にけり

またす

山のはにはるかに月の更行もまたれしまての恨（限イ）なりけり

わすれける時ともしらてまたれこし夕くれまてもうらめしき哉

今はまたとふへき物とたのまれは心さはかぬおきのうはかせ

またすしもあらてや夜半の明ぬらむ思ひ絶ては門させれとも

をのつからとはれしまての夕くれそ月を待とも人にいひけん

人をよふ

長月の秋の夜風のとこさむみきませ我せこころもかされむ

かりにたに君きまさなんかきほなる草のたもとの風につけても

人めこそあしかりけらし難波めか（なるイ）こやといへとも出そわつらふ

たつな今たかつの山もよしさらはあはぬ契に我そひれふる

よひかへせあなかま悔し空みれはまた夜深きにせなをやりつる

道のたより

たまほこの道のたよりにことゝふも人のなさけの程はみえけり

かはかりもいかてかみまし我宿の君か行来のたよりならすは

夫 とはるゝを道のたよりとうらむなよ思ふこゝろは殊更にこそ

これやその（こ夫）道さまたけの妹かせきおもひ出すはたゝそ過まし

つれもなき人をときはにこふれはや春（花イ）のたよりも空しかるらん

ふみたかへ

しほかれの難波の浦のちとりあしふみたかへたる跡もはつかし

かひなしや人をとふとも我れやとてみるにつらさの増る玉札

我やとをきゝたかへてそきたるらむあるへき物かけさの玉章

夫 玉章の道のつたへの門（方イ）たかへ人のたよりもあけてこそみめ

結ひめのたかふもしらす文使ほかにみせす（えイ）といふかはかなさ（き夫）

人つて

なからへていける命のつれなさをきかるはかりの人つてもかな

夫 思ひこしあはれそこらの年月をいまいふはかりはやかたらなん

しなはうし又逢事をこの世にて今ひとたひと君につたへよ

をのつから妹かつたへの口まれひあらぬけしきもなつかしき哉

夫 君かあたり行かふ人と聞しかは我ことつてきいかにいひきや

わする

かみなひのいはせの森の夕時雨うつらふ色に戀つゝそふる

契りこそさても忘れめはてはまた我ならぬかと身をたとりつゝ

こぬは又もとこし道も忘るゝかそれゆへならはしるへせましを

あはれなとたれ（レイ）うらめしき草のなの思ひのきはにしけり初らん

から人の我つまならぬ家うつりそれをためしの戀もする哉

わすれす

た ためしなくうきにつけても忘られぬ心よはさの身をくたき（うらみイ）つゝ

夫
何ゆへとなけくあまりに恨むらんわすられぬさへ人のとかゝは
今も猶心にかゝるわかれかなかみかきやりし人のうしろて
あかつきのうきは別になりはてゝおもひ出るに人そ戀しき
我はかりとかく思ふもくるしきにたゝけに人を忘れはてはや

心かはる

夫
ますらおのすけのあみかさ打たれてめをもあはせす人の成行
かみなひの森の時雨の色よりもあへすかはるは心なりけり
またれこし夕はいとゝなく鴫のつらさしらるゝ秋の暮かな
くまてこそ野中の水もかはるらめかけみしもとの心ともかな
うちになく外にもあらぬ心をはいつくにかはるつらさとかみん

むとろかす

思ひかねみしやいかにと春の夜のはかなき夢をおとろかす哉
さらになをとへとはいはすうきに我たへてある世をしらす計そ
かきたゆる心の中のあやしさをさてもいかにとゝはれぬる哉
うきはうく又逢事のしかすかにたえぬちきりの程もはかなし
たえぬるをさらはさてとも思はれぬあまりや今も人をとふらん

おもひいつ

今そしるおもひ出つゝさらしゐのさらにも人は戀しかりけり
草かけの夏野にふかき忘水たえまあれはや思ひ出らん
別せし曉かたの空みれはまた面影のたちかへりつゝ
夢かとも思ひなせともみし人を忘るゝまてのはかなさそなき
みし人を思ひ出しとおもふ身の心もしらぬ我こゝろかな

むかしをこふ

夫
石上ふるのゝをのゝ玉かつらかけてむかしをこひぬ日はなし
いにしへの雲ゐにみてし夜半の月そのおもかけそ今も戀しき
竹馬におきふしなれしそのかみの世々はふれとも忘やはする
さしもいまいとはれさりしいにしへを思ひ出ても老そかなしき
されはなないかにとすへき身なるらん昔といへは涙おちけり

むかしあへる人

夫
きのうみの眞砂吹上ふく風のはやくあひみし人は忘れす
いかにしてなのかさまゝゝ年ふともありし昔のことなつてまし
ものこしはきゝわすれまし年月にゐ中なれける人のこゑ哉
逢事にむかしかたりの夢なれとおとろかさはやおもひ出やと
哀なり幾とし月をへたてけんみわすれはつる面かはりかな

あつらふ

夜半の月戀しき人の影みえは思ふ心をそらにつたへよ
心にもあらぬ世々にはなりぬとも今は夢とて人にかたるな
ありし世にさなからあらすかはる身をかくとつけこせ秋の山風
山彦もとはゝこたへよ煙たつあさまのたけに思ひありとは
いかさまに人我中をいひうとめさくともきみよ心かはるな

ちきる

なをさりの人の契りも中々にさためなき世とたのむ計そ
いさやそのかたみに契るあらましの叶はん迄の世ともしられは
たのましよ身はあすしらぬはかなさの末の月日のむなし契りを
かくはいへとあらぬ契りに成もせは頼む頼みのかひやなからん
ありし夜に夢とや人のむすひけんうつゝともなき中の契は

人をたつぬ

草の原霜のふり葉も枯果て尋る道もえやはみえける

幾かへり思ひのみこそ志ろへとてそのほと志らぬ道まとふらめ
思ひたつ道はいかにとれきかけついなりもすきの志るし顯はせ
草わかき野邊もろ人にもの申すわれそのそこに妻やこもれる
さらにまた身を捨かへてたつぬとも待見ん人や世になかるらん

めつらし

春ふかみをくれて咲るをそ櫻めつらしとのみあひみつるいも
戀々てたま／＼きたるさ夜衣うらみしことも忘られにけり
かつみても猶そめかれぬ志の薄初ほにむすふ妹か手枕
ふしのねはめつらしけなき煙にてあらぬおもひそめには立ける
夏山の青葉の櫻みしたにもさこそいひしかましてわかせこ

たのむる

僞とおもひはてゝそ中々にたのむることも情なりける
たのむめる命をきはのかねこともあまりになれは疑はれつゝ
思はんとたのむる中の志くれつゝいつことのはに色かはるらん
待もせよ行とも見えんをのつからよも僞の夜をもふかさし
夜も更ぬ今はよもそと〆ひなからたのめし人のまたるゝやなに

ちかふ

いかにして心の末をあらはさんかけてちかひしみこもりの神
よしや我人は命にちかふともたのまてこそはなからへてみめ
さらは又神のみしめを引かけて末かなはすは何かちかひし
うき中によしなき神のちかはれてうけすやかはる契みるらん
わするゝをちかひし神の僞におもひなしてや人をとはまし

くちかたむ

我戀はほこのねちとふくちかためはしめをはりも人に志らせし

世にもらはたかみもあらしわすれねよ戀なよ夢そ今を限に
白玉を露とも人にこたふなよにたるたくひをあやめもそする
夢かたりおもひなよりそ君かなも我なもたてし夜半のうたゝね
かはをちのはにふのこやのかり枕夢になしても人にかたるな

人つま

年をへて人すむやとの妻にこそ志のふの草もふかく志けらめ
まれにあふ人のよつまのあらましはたのみなからも心をかれて
哀れまたつくる心のよしそなきいもりの志るしそれとみなから
ぬしなくてさらせる布も有物を人のてつくりてなゝふれそも
我ものとおもひふせたる人妻はもとへはやらしたゝはこふとも

家とうしをおもふ

紅のちしほもさらに染あかしおもふ心のいろのふかさは
我宿の妹か手なれのますかゝみめつらしけなく猶みまくほし
たかやすのみもとは早く慣にけりみつからけこの備へをそする
衣々のあかつきをきもなかりけりともにあるしと契る夜床は
ものになれぬ家にある妹かたく柴のきをりに人を待やこふらん

おもひやす

いは山のしはの下草やせぬとておもひにたへぬ程を志らめや
捨られぬ戀のつらさを身にそへてかけはかりにそはや成にける
ありしにもあらすなる身は下帶のゆきあふ程そまつうかひける
戀ゆへは我くろかみも色かへて心ほそさの身そよはりゆく
身を捨て後さへ人をこひをれはさこそはほれとかはとなるらん

おもひわつらふ

吹まよふ風さたまらぬあさちふのとにもかくにも露こほれつゝ

いかにせんいかにかせまし思はしとおもへはいとゝ人の戀しき
まつもこすまたぬにもまたとはれけり人の心をいかゝさためん
いなせとも思ひさためぬ逢事を我心にもまたそまかせん
後の世のなけきと人の戀しさとかたつりならぬ身の思ひ哉

くれとあはす

いつまてか蘆苅をふね行かへりつれなき江にもこかれわふへき
通ひくとよそには人にみえなからよしなや何とつれなかるらん
わきもこか心をたてゝ槇の戸のいたつらふしにあくる志のゝめ
難波江をこゝそとまりといはれはやたなゝし小舟こき歸るらん
我戀はきそのあさ衣きたれともあはぬはいとゝむねそくるしき

人をとゝむ

あけぬとも急きかへるな磯かくれ汐のひるまもみるめかるへく
明ぬともまれなる中の逢坂はせきとて人やとゝめさるへき
かへるさをあまつゝみしてまて志はし濡なは袖を人そあやめん
あかつきの鳥の心やあはすらむわかれをつけぬ逢坂のやま
明すきて人も歸さぬ今朝こそはいきたなき身のとり所なれ

とゝまらす

とゝまらぬ心つよさは梓弓引くらふへきためしたになし
曉のなき夜ともかなとゝまらぬ心つよさをなからへてみん
夫
志はしともいふかひそなきおきかけて追手の風に出る舟人
大ゐ川なをこのくれのなはゝあれと引とめ難きせゝのいかたし
峯たかみ岩間をおつる山水のせきとめかたくいぬる君かな

名をおしむ

わすらるゝうき名はかりのおしさたにいかゝ心に淺くなけかん
あさましやうきなすゝかぬ濁江にもかりな舟のまたやかよはむ
いとはるゝうき名なかすな涙川我戀しなは水はまさらし
くち行をおもふもかなし名取河をしかりぬへき瀬々の埋木
人志れす我いもこふと志のふこそ世をすつる名をおしむ成けれ

おします

命たにおしまれぬまて戀侘ぬよしや我名は世にとまるとも
なとり河さてもくつへき埋木のあらはれてたゝこふと志らせよ
そゝやきけ明るねやまの郭公なのり志つゝそ志のはさりける
契りあらはたゝなかしてよ大ぬさのつゐによるせの浮名成とも
命たにおもひかろめて過す身に名のたつ事の何かうらみん

なきな

いかにせんなきなをなかす涙川つれなくせかん志からみもなし
よにはよな志つむ我身をなきなからうき立ぬるは我名成けり
志はしみよ我みやま木に降雪の花のあたなはさてもとまらし
きえかての雪まもかなし春の野にみえぬなきなを誰まさるらん
いひたつる人の僞おもふこそわかなきなよりかなしかりけれ

わきもこ

鹿のたつ山の猶たのねらへともまたわきもこにあふ夜半そなき
歸るさはあゆめくろこまわきもこか待らんさよの更もこそすれ
われをのみたのまさりけりわきもこか一かたならぬ袖のすみ哉
行水のわきはかへれとわきも子にいはて思ふと志らせはやせん
はかなくも我たふろかす吾妹子と志りなからなと戀しかるらん

わかせこ

思ひあらはたのめすとても吾背子は今宵の月にきまさゝらめや

今こんといひしわかせこそのほとゝ月日かそへて待かくろしさ
しきたへの床の秋風寒き夜になと我せこかきまさゝるらん
うらまさに今かみゆらしわかせこかくろや夕のさゝかにのいと
わかせこかこんといひしにたかはすはこの夕暮や山路こゆらん

かくれつま

乙女子かあはせ衣のかくれつまうすきちきりとうらみ侘つゝ
こき返るみしまかくれのもかり舟ほにはしこふな人しれすのみ
よしや又造り重ぬる軒はにてこなたのつまはみえはこそあらめ
冬の池のにほの下道さのみやは水をふかめてかよひはてなん
もろ人のその日もそてはみつれとも猶ゆかしきはかくれつま也

二なきおもひ

たくひなく思ふ心のためしとて野中にたてる松の一本
昔より戀も思ひもきゝをけとにたるたくひは世にあらしかし
一すちに戀やわたらむひたゝくみうつすみ繩のあとにまかせて
君にわきて逢みん事を思ふにはかへん命もまたふたつなし
空にしれみつといふ水にかけうつす月はふたつもなき思ひとは

今はかひなし

逢事の心よはさのわれからを今はかひなき音になかれつゝ
今はわれ悔しとたにも歎かれすいふにかひなき音のみなかれて
あひみての後はなにせんさきたゝぬくひの幾度かなしけれとも
戀しぬる後をはしらてあふまての命をおしくおもひける哉
なにといひかとも思はし今はたゝ人のつらさを身のとかにして

こん世

こん世にもまためくりあふ契あらはおなしつらさを猶や重ねん
いさゝらはこん世を後の契にてうきをもうしと思ひとかめし
いにしへのむくひに今もつれなくは後の世とてもさそな恨みん
めくりあはんこん世のやみの契をは夢のうちにや結ひをかまし
いかにせん戀と思ひと身にそひて來ん世のたきゝけつ方そなき

かたみ

おもひかねなれにし人の形見とていとはるゝ身を先やしのはん
おもひ侘たえ行中の形見とはなれし我身のたのまれやせん
よひ／＼は頼むかた見の夢たにも心やすくはえこそあひみね
かたみやは何かあたなる秋の夜の月に心のとまるちきりは
侘つゝはわするゝ時もあるへきになにしか人の形見とめけん

玉くしけ

玉くしけ明ぬ暮ぬと歎つゝ身をはむなしく過んとやみし
玉くしけ明暮つらきうき世をは二道にのみうらみてそふる
侘つゝは雲たにおほへ玉くしけ明ぬ空とはいひもなすやと
玉くしけふたりぬる夜もある物をくちきよらかに何かいとひし
たゝさらは夜ふかくかへれ玉くしけ明は君かなたゝまくもおし

玉かつら

たえすをく涙の露の玉かつらつらきこゝろはかけはなれにき
末なかく頼みしかとも玉かつらいかなるすちにかけはなれけん
としふともよも絶はてし玉かつらむすふくみめのなかき契は
なかしてふ契ともかな玉かつらかくろたのみはおもひいれてき
玉かつらわたりをいたみ今は身にかけはなれても見えぬ君哉

かみ

いかにせん蓬のかみの秋の霜身のいたつらにふりまさりつゝ

するすみにまつはれ懸るおち髮のとかくに物のうるさきもうし
ふりかくるひたひの髮のかたみたれとくとたのむる今日の暮哉
人とはゝいかゝはのへん朝ねかみけさ手枕にたはつけにけり
うきすちと思ひきりにしくろかみのみたれは今も心なりけり

もとゆひ

霜雪の色にそかはるむらさきのわかもとゆひのもとの身にして
けちかぬる我もとゆひの霜みれはあらはにとしも老にける哉
ゆか近くおちてとゝまるもとゆひはうちそなかれぬ人の形見に
もとゆひの妹かたなれの一むすひうしろめたくや解んとすらむ
世をいとひ今はとゝきしもと結のそのきはたれる人はなかりき

くし

夫 明暮てさしくしもなく成にけりたけふのせうのとるとせしまに
夫 君になきてみせんと思ひしさしくしを朝夕人に誰かとりけん
つゝみあまり人を心にさし櫛のかたはしはかりいひそしらする
夫 逢事をとふやゆふけのうらまさにつけのを櫛のしるしみせなん
世中に今は我身のもつくしそいたつらものゝためしには引

たま

た たれもけにてにとる玉のみえれはや世を照してはある人もなし
夫 いにしへのさつけし玉はわたつうみのしほひしほみち心成けり
涙こさは袖はぬるとも礒に出て玉やひろはんわかせこかため
たをやめのかさすかさしの玉ならは光を花とみえやまかはん
たか山のみねにはたほこわれたてゝみかける玉はよの人のため

玉のを

なかゝらぬ人の心もみゆる世に涙のたまはをたえさりけり

夫 和歌の浦にあまのたもてる玉のをの長くは捨ぬ世にもあはなん
身につもるそこらの年をいかにへて思ひしよりもなかき玉のを
かれてよりたゆとはいはしをのつから玉のを解ていつか逢みん
くるくるも人たのめなる鈴のをは永き世すくふくはんせなん也

玉たすき

夫 まれにのみあひみる中の玉たすきしけくくしきそ苦しかりける
しつのめかあさてほすてふ玉たすき思ひ掛れはちかふ世もなし
夫 賤のめかせはき袂の玉たすきひきはりなるはかくる身のほと
ねたけなる賤かあさての玉たすき誰にむかひてわきをかくらん
玉たすき十つゝ十をかけてこそひとつさとりの世とはなりけれ

かゝみ

夫 いくたひも心をみかけますかゝみうらにはかけのうつる物かは
夫 みかりせぬ野守の鏡時にあはてうつし心もなくくそふる
た いかはかりみかき出けんあきの淵の水ともすめるますかゝみ哉
夫 すて果ぬ影はつかしき古鏡さもそおもてはつれなかりける
くもりなきみつの鏡のとりくにみまくかひある御代とこそ聞

まくら

夫 おそろしやつけの枕のあらつくりかとある人はともに頼まし
ますらおも枕をたかみやすき世にひとり歎はぬる夜半もなし
夫 とはれぬにやすき心のあらはこそ枕さためて夢をたにみめ
とちをける枕さうしのうへにこそむかしかたりの夢はみえけれ
しきたへの枕を寒みめもあはてぬれはや人の夢にたにみぬ

手まくら

あたになく露もちらすな若草の新手枕のかはすはかりを

たまさかにかはすも袖はくちぬへし涙をかけてむすふ手枕

袖かはす夜半の手枕いつかたにあかぬ涙のぬれまさるらん

夫 なのつから幾世なふとも手枕のあかぬ契にひちやくたさむ

手枕のかひな／＼も世にあらは心よはさそ人に見えまし

はた

夫 あさはたになるてふ布のぬきをあらみ夜半の嵐も待やふせかん（えや は夫）

夫 山みちやみのゝひろきぬなるはたのなよひくるしき戀もする哉

夫 あくれつゝ秋のみけしを染はたのなるてにあかす立あらし哉

夫 山かつのなさのあらみのはたなれと音（は夫）はまとなに聞えやはする

夫 山かつのあさてに掛てなるはたのおさ／＼しきは我身なりけり

ころも

夫 いかにせんかけし衣のうらみてもたまなも玉としらぬかなしさ

つかふとてきしや衣のさかさまに年へゆかなん今になるやと

うき度（ヽイ）にあまり涙なしほるとてすみ染衣袖そはつるゝ

峯たかみ天のかこ山白妙のたか衣手な雲にほすらん

うき世なは空とひ別いとふかとあまのは衣まれにかさなん

しほやき衣

夫 いつかわれしほやくあまのふち衣なれ／＼しくも妹にあひみん

かのあまの鹽やき衣（カイ）からくしてはなみることもまとなる成けり

あまのすむまかきのしまの涙のまに鹽焼衣かけてほしつゝ

いたつらに鹽焼衣ぬれてのみ哀なるあまのなりところかな

もしほやくあまのつさ衣いかなれはなれても人のまとなるらん

夏衣

夫 わかせこかけふたちきたる夏衣人の心のうらなくもかな

なのつから我たち出る夏衣世にうすくのみ成身なりけり

わかせこかさらすてつくりぬきなうすみ夏の衣になれる成けり

すゝしさは時しもおなしせみのはにあつらへてけるうす衣哉

世な安み民のわつらひかへりみてひれりかされはきる人もなし

秋衣

夫 七夕の秋さり衣さりかたき契もいかにまとなるらん

泣くれは露も時雨も身にそひて我衣手やほさてやみなん

衣手の涙ないつちせきやりて秋のなきけろ露のほとみん

露わけの衣ならねとわきも子か秋は紅葉の色に染つゝ

秋風はそらはた寒しいさこよひいもか衣手引かされてん

衣うつ

夫 秋ふかみむへ山人のあさ衣うちたゆむへきかせのなとかな

誰かまた霜さえわたる月の夜に衣うつとておきあかすらん

しつのめかきなれ衣の秋あはせはやくもいそくつちのなとかな

秋されはにきはふたみの里なれと音はさひしくうつ衣かな

山ははやうす紅葉せり麓なる賤かさ衣うつさかりはも

かり衣

夫 色々の柳櫻のかり衣たちましろひしむかしなそ思ふ

夫 おきなさひ野邊の御幸のかり衣世に立出は人やとかめん

夫 かり衣わくる野山（原夫）のしはすりにうつろふ露の色そみたるゝ

草の葉に袖つくみちのかり衣いかなる露の色にそむらん

ますらおか夕かり衣いとさむしすゑのはらのゝ木枯のかせ

すり衣

すり衣たゝぬ日にこそ成にけれ道行人もまつ心せよ

しのふてふたゝ一しほのすり衣あさき物ゆへなにみたれけん
そのかみにみし山あゐのすり衣色のときはにわすれやはする
夫 梅かえの一しほすりのをみ衣色こきよりもめにそ立ける
まはきもてすれる衣は身にちかくかけしよ人の秋もうらめし

あさ衣

夫 山かつのしつのあさ衣みしふつき草とる田ゐにたゝぬ日はなし
夫 やまかつのさくらあさもてをる衣花のたもとの名をや立らん
夫 まとをなるしつかうみをのおさいれに心とうすきあさの衣手
夫 しつのおかあつまからけの麻衣ふたまた河はさそわたるらむ
我身には又うへもなきあさ衣あさましけにも人の見るかな

かは衣

夫 わさつのをかたにかけたるかはひしりけふのみあれを待渡けり
夫 山ふかくをこなふ道のかは衣よものかせきもきてなれにけり
秋のきて風はたさむくなりゆけは身になれそむるかは衣哉
夫 やまふしのすかたけとをきかは衣心こはくも身にそはぬかな
夫 谷ふかくかはの衣に身をかくしうき世隔る雪の山人

ぬれきぬ

いかにせん身にはきなれぬぬれ衣のほすへきかたもしらぬ袖哉
まことなき名に立なからぬれ衣のきては袖こそかはかさりけれ
露時雨何につけたるぬれ衣とそのゆへしらはほしもしてまし
夫 世中にうきぬれ衣のはたはりはのへもしゝめもせられやはせん
身をけかすのりのぬれ衣かはくまもなく／＼歎我うらみかな

さうの衣

夫 色ふかきのりの衣のすみ染は三世の佛のかたみにそきる

夫 あさましや賤かゐるもとのとき衣ふみあらはれは人もこそしれ
さためなく時雨る空の幾度か山分衣ぬれてほすらん
きならしのあまのすさひのすて衣ひぬたにあるを猶やくたさん
今はわれぬしなき野邊のすて衣とりきてのみそ世を過すへき

ふすま

夫 神無月ならのみやこになくるてふふすまも年をかさねつる哉
こほりしもさこそさゆらめ鳴をしのふすまたに猶閨寒夜に
閨の上に幾重の雪をかさねきて夜半のふすまの寒さまさるらん
袖しあれは重てもねん何かその物はつかしのふすまおほひや
きん人のまたらふすまのひと色にならてやつゐに心みたれん

裳

夫 わきも子かみものひきこし長夜をかけてそ契るあかぬあまりに
夫 ひき掛て思ひなよりそあからものあからさまにも人しりぬへし
夫 たをやめのうはも染てふうす色のうすきを夏のしるしとやみん
夫 たかためもなかき契をわきも子かうはものすそのためしにそ引
吾妹子か赤裳たれひきおきていなはしぬとやたゝに我戀おらん

ひも

あひかたきやまきののりの花のひも結ふ契りはむなしからしな
契をも度々むすふあかひものうたてなかくもなとわすれけん
さよ衣ひものとちめのいとたえてさし入人そ我やとはなき
わきもこに手枕はかりいれ紐のさせるかひなきうたゝねやせん
むすひてし我下ひものとけ行はあやしや君かくへきよひかも

おひ

むすひをく契りたかふな下おひの又おなしよにめくりあふまて

夫 今さらにむすふ契りもたのまれす人にとけゝるゐての下帯

夫 いのれとも神はうけすやひたちおひのむすほゝれても過る年月

おりしもあれえやは心をかけ帯のいもゐは胸のへたてなるらし

思ひきや我身しつめる石の帯のうはてに人をかけてみんとは

ひとり

夫 徒にとはれて深る空たきのひとりねにこそこかれわひぬれ

夫 たきものゝくゆる烟の下むせひ我ひとりとや身をこかすらん

たき物のひとりのおきのいきなからはひまされても世を過すらん

夫 思ふことふところふかきたき物のひとりのけふり行かたやなき

もろ人のとるやひとりの先たてはのほる乙女の香こそしるけれ

ことのは

夫 世にふれはたゝなをさりのことの葉も情あるこそ忘れかたけれ

代々かけて思へはとをしあし原やなかつ國よりならふことのは

うつろふは心の中のつらさにてさてもちらさぬ人のことの葉

夫 秋風にちることの葉のまゝならは心のいろもえやはたのまん

いつはりの人の言葉心せようみをさへやく火ともなるなり

ふみ

夫 ふみをきし昔の跡のなかりせはいとゝこの世の人やまよはん

夫 うたてなとやまとにはあらぬから文の跡を學はぬ身と成にけん

夫 ものゝふの八十うち文はかたくゝにゆき別れぬる跡そみえける

夫 はてはまたしみのすみかのむかし文拂へはちりとみるそ戀しき

春はまつ御調そなふる國文のさしていくよも君のみそみん

こと

夫 夏くれはあつまのことのあしつをによりかけてける藤なみの花

世にたえて音たにきこえす涙のみ玉のをことのあとはあれとも

夫 佗人のたなれのことの音に立てうき世を秋のしらへをそしる

秋よはひたつることちのをあはせのたゝせめにのみせめも行哉

秋の夜の月にしらふることの音はきゝしらぬ身も心すみけり

笛

夫 玉鉾の道のちまたに吹笛も心はかりはゆかぬものかは

夫 世中はうき一ふしに吹笛のあなむつかしや音こそ絶せね

夫 ふきたつるとなりの笛の聲高みわかしきたへもちりはらふらん

夫 みまきのゝ草かる笛のわらはこゑあなかまとのみよそへてそ聞

夫 うしによりまきのうなひか吹笛は深きさとりのしるへとそきく

ゆみ

夫 いかにせんしなのゝまゆみ年をへてなひかぬほとの心つよさを

引かへしえやはうらみんあつさ弓戀しき方の心よはさは

夫 つるなれぬあらきの弓のそりたかみさて徒にひく人そなき

徒にまたてもふれぬそりま弓人はをしたるはりことなせそ

夫 いまのよや弓の心もあらはれてはなつ矢すしのちかはさらん

や

夫 ものゝふのおふてふやのゝたむれともなをすくならぬ我心かな

夫 おひぬれはのやにさすてふつの鏑そうくしくそ早成にける

夫 人心たのまれかたききつねやはたゝそのまゝにまた音そせぬ

夫 今日はみなゆたちのいての外までもすゝのいた付腰なれにけり

空にきく鼓のこゑのなかりせは身にたつ矢をはいかてぬかまし

たち

夫 から國のふたへのたちは昔より君のまもりにさためを[illegible]てき

つるきたちもろはのときか上よりもふみとめかたき世にも有哉
かちやなるたちのやきはの早くより思ひきりてし此世ならすや
世中を思ふ心もほそ太刀のさやは丸えかつまりはつへき
山ふかみ松のおふてふ岩か根におさめし太刀はいもそしるらし

かたな

何事を思ひけりともしられしなゐみのうちにも刀やはなき
捨やらて身はさひ果ぬふる刀さすかに世をは思ひたてとも
今はわれまろはにとけるこし刀世につかはれぬ身とそ成にし
やまと歌のこしはなれたるさひ刀さも世にたゝすきらもなき哉
かちときのまたはもあはぬ小刀の世にたゝてこそ思ひ侘しか

さや

いまはしもさそしりぬらんしりさやのさしも心に思ふけしきは
徒にあれはありとてかりさやのまことのときはいるみともなし
つし祭けふをはれともみせさやのさきおりかけてねるや誰子そ
かつはまたさすさやくちにあふひつは心ありけるかなつくり哉
みるもうしみたをたのむといふ人の萬の法を思ひかけさや

はかり

たれもみな心にかけておもへかし業のはかりのおもさかるさを
世にしらぬ我身のうさの數々はなにのはかりかかけあはすへき
民のとに秋おさめするいなはかり年ある御代をかけてしるらし
あし引の山にかけたる水はかりかたさかりにもおつるたきかな
めにみえぬ心のとかのおもはかりかゝらむ後の世をなけくかな

あふき

日くるれは軒にとひかふかはほりの扇のかせもすゝしかりけり
かくれける月にたとへし扇こそふかぬ風をも又おしへけれ
てにならすあふきの風はかよへとも草もゆるかすてる日影哉
面影を半かくせるさし扇さてもひかりそそふ心ちする
ひのおものまかりをつけしたをやめの扇の音もえやは忘るゝ

かさ

ふりやまぬ雪まの梅のつほみ笠おもふ心のいつかひらけん
雨過るとやまの道の木くれよりしからきかささそみえかくれする
おほきみのみかさのかけのひろけれはあめの下には誰か頼まぬ
さりとてもさせることなきつふれ笠骨をおりてそ君につかへし
なにせんにわれかさすらし袖笠の下にそ涙雨とふりける

みの

かくれみのうきなをかくすかたもなし心に鬼をつくる身なれと
かち人の野分にあへるふるみのゝ毛をふく世こそ苦しかるらめ
村雨に野邊のさゝめを分行は重てみのをきる心ちする
きまほしき世のうき時のかくれみのなにかは山の奥もかひなし
世を捨て人にもみえすしられは我こそ今はかくれみのなれ

かたみ

いそなつむあま乙女らか花かたみうらはの涙のかけやそふらん
色々につみこし物を花かたみはなゝき時のなにこそ有けれ
つみにこしなにのわかなも思ひ果てかたみむなしき春の野へ哉
めにあまる涙とやみん草の葉の露をきなからつめるかたみは
なのつからかたみにもらぬ水はあれと命の留る世やなかるらん

つと

いかにして都のつとにつゝみもていもにもみせんまつかうら嶋

たびの空その名きこゆる海山を都のつとにうつしてもみん
志はしとて山井の志水むすひつゝかれいひのつとを取て出つる
都にてとはゝ語らんをくろさきみつのこしまにつとはなくとも
暇なみおこなふのりをつとにしてつゐの道にはかては思はし

いろ

もろ〳〵の色に心を染をかしうき世にめくる志るへ成けり
うれしきもうきも身にしむ時ことに色なる物は涙なりけり
春といひ秋とこすゑのかはるにもいろはむなしき物とこそみれ
うつろへる人の心の花にこそ色のちくさも染あまるらめ
世にはけにまさしき色はなけれとも見ろ物からをそれといふ也

くれなゐ

夫 いくかへり染て色こきくれなゐの文みし跡も今はたえつゝ
紅のすゑさくはなの色ふかくうつろはかりもつみしらせはや
くれなゐはかれ行秋の色なれは袖を涙もさそなうつろふ
あさな〳〵すゑつみはやす紅はちしほの色もかれてみえつゝ
春はつゝし秋はもみちと紅の色こそすつる時なかりけれ

むらさき

夫 みとりよりふかむらさきの衣まてつかへしこともむかし成けり
夫 むらさきはなへてくらゐの色なれはこきも薄きもうはき成けり
紫の雲のよそにやおもはましすてぬちかひのかゝらさりせは
むらさきのねそめんこともまた志らす志たはう色の徒にのみ
忘れめや紫生る野へにさへ志はしなれともありしかなしさ

くちなし

ことのはにいはゝをろかになりやせんくちなし色にさける山吹
夫 いかてかは我とはいはしくちなしの色をその名に人の志りけん
こはた山あるはさなからくちなしの宿かるとても答へやはせん
いかなれは言の葉交るくちなしのさのみもいはぬ色にさくらん
くちなしのいはてそ人は悟るらむことのはなれてある世成とも

みとり

年をへて色もかはらぬ高砂の松のみとりは誰か染けん
夫 山陰や水又水のふかみとりかはらぬ色にたれかそめけん
夫 誰かまたかはらぬ色を久かたのそらのみとりに染はしめけん
ときは色のちしをのみとり神代よりそめてふるえの住吉の松
かたふちの水にうきたる青みとりなにをたれともなき世成けり

にしき

世中にまれなる色のこまにしきいかなるこまに妹をあひみん
からにしきたつた山とは春秋の花紅葉にやいひはしめけん
夫 故郷にまたもかへらはのちの世に千重のにしきをきても何せん
夫 錦木にまたもなけきの數そひて千束かきらぬ妹か門かな
夢にみし夜牛の錦のたゝまくにはかなや人のなとまとひけん

あや

夫 わきも子をみしはきのふのくれはとり生憎になと戀しかるらん
ふきまよふ風にたゝよふ雲とりのあやうやうきて世を過る身は
秋のかりつらもみたれすおり出てそめなす春の水の色哉
夫 かくしこそ手引の糸をくれはとりあやともはては成にけらしも
もゝしきや大内山のうしとらにをりへのつかさあやたてまつる

いと

夫 我戀は賤の志けいとくりかれていかなるふしに思ひたゆらん

夫 一すしに心も今は志けいとのうきふしかちに世になりしより

夫 われかくてわくてのいとの幾めくり命なかくも年(て夫)のへぬらん

さのみやはさすかにたえぬ志け糸のふし〳〵(てイ)多く思ひみたれん

いつの日か手引のいとのいつ色にかけしおはりの夕なるらん

わた

夫 数島(ヤイ)のやまとにはあらぬから人のうへてしわたのたれは(そ有けるイ)絶にき

夫 するかなるふしのくわこのにゐわたは高根の雪の色に似るらし

夫 秋の来る夜半の衣の一重わたひとへになをそ風は身にしむ

人忘れぬいもか衣のつまわたはさしも思ひの数そかさなる

夫 それもまた子を思ふはゝの綿なれはいつかはあしの花も恨みし

ぬの

夫 さは川になりはへさらすてつくりは波のかけたる色かとそみる

夫 うらにあふとをみのあさ布とちかけし宵暁もそのかみのこと(もと夫)

夫 いかにせんかたひら布の片よりは身をかくすへき物とやはみる

たち縫ぬけふのほそ布むれよりもかひある市にいかゝあひみん

夫 今はよにあるも稀なるおくぬのゝもちひられしはむかし成けり

新撰六帖題和歌第六帖

はるの草　なつのくさ　あきの草
ふゆの草　志たくさ　にこくさ
さうの草　やまふき　なてしこ
あきはき　をみなへし　すゝき
志のすゝき　おき　らに
きく　かるかや　かや
はちす　かきつはた　こも
はなかつみ　あし　ひし
ぬなは　ねぬなは　あさゝ
うき草　つきくさ　わすれ草
志のふくさ　ことなし草　せり
なき　たて　むくら
たまかつら　くす　さねかつら
あをつゝら　あさかほ　あさち
つはな　あちさひ　すみれ
をはき　わらひ　志く
ゆり　あゐ　まさきのかつら

ひかけ　やまたちはな　すけ
さゝ　あふひ　みくり
よもき　こけ　いちし
しは　むし　せみ
夏むし　きり／＼す　まつむし
すゝむし　ひくらし　ほたる
はたをり　くも　てふ
木　しをり　はな
あきのはな　もみち　はゝそ
まゆみ　かえて　まつ
かえ　竹　たかんな
むめ　こうはい　やなき
さくら　かはさくら　はなさくら
やまさくら　にはさくら　ひさくら
ふち　たちはな　あつたちはな
しゐ　なし　やまなし
もゝ　すもゝ　からもゝ
くるみ　すき　むろ
まき　かつら　かうか
あふち　かし　くぬき

つはき　かしは　ほをかしは
なかめかしは　つゝし　いはつゝし
ひさき　くは　はたつもり
しきみ　あせみ　やまちさ
ゆつるは　かたかし　つまゝ
さなき　とり　はなちとり
ひなとり　つる　かり
かへるかり　うくひす　ほとゝきす
よふことり　しき　からす
さき　はことり　かほとり
かさゝき　もす　くゐな

春の草

夫　山陰やつくりすてたるあらた田のこそのふる道に（跡イ）しける春草

しられしな霞にこめてかけろふのをのゝわか草下にもゆとも

雪消し野邊は霞にうつもれて猶下もえの春のわか草（葉イ）

雪間いそくかきねの小草をのつからめくむみとりのこその古道

もえ出し野邊のわか草今朝みれはすゝめかくれにはや成にけり

夏の草

夏の野に草かるかまのかねよはみよにたえぬ身は長閑なりけり

夏ふかき山のかけ草とにかくにことのしけきは我世成けり

夏ふかくしけるかきほの草たかみかこふ眞柴の末そかくるゝ

さらにまた夏野をしけみ草なかの道のたゝちは行わすれつゝ

夏の日のすゝしくゝるゝ尾上より山草かりてかへる里人

秋の草

秋風のたえす吹しくあさちふにさもありあへて結ふ露哉

露けさは秋の草葉をたくひとてほすまもしらぬ我袂かな

露時雨なにこそかはれうらかるゝ草葉はおなし色にそめつゝ

夫　野邊みれは草のはつ花かた咲て千々には秋の色そまたしき

秋といへは色かはり行草の葉を露のをけはと思ひけるかな

冬の草

夫　かた岡の芝生に（間夫）ましろしの薄霜枯てこそみるへかりけれ

霜むすふすゝ（くイ）ろにかるゝ冬草のなにをたのみとなき世成けり

野へみれは花のさかりのすき果ておひさひにける草の霜かれ

夫　冬しけの霜（雪夫）をいたゝくつくもかみ見えしすちなきたはれ草哉

草はみな冬かれわたる冬のもりいかにすみかのさひしかるらん

した草

おもひかはなみの下草よとゝもにみたれ侘ぬとしらせてしかな

やけおれのそはの木陰の下草のしきふせられて世は過ぬめり

夫　櫻あさのしけみにましろ下草の我とは世にも出かたのみや

夫　おほあらきのもとあらの下の埋草さもおひらくの末そいふせき

をきわたす霜のたゝちやうとからし森の落葉のふかき下草

にこ草

夫　をく霜にかれにけらしなあしからの箱根（り夫）のねろに茂るにこ草

あし垣のなかのにこ草まちかくて茂るおもひのほとはしらなん

河風もあらたつ夜半のにこ草のにこくきよする波（さイ）のまそなき

にこ草なつむやかたみのめを荒み荒きを見てはたまりやはせん

いかにして垣ほ（ねイ）に生るにこ草のにこ〳〵とのみいもにあひみむ

さうの草

いたつらにふるのゝさはにかる草の心つからやよをなけくへき

夫　みつのゝやまきのひつきのかり草の束のまもなし戀のみたれは

夫　かつまたのいけるはなにそつれなしの草の扱しも生にけるみよ（にイ）

見ま草はくる（か夫）ともからむみこもりのゐかひの岡のことの繁くさ

露しけき家のそのなるもゝよ草もゝよいも繼袖ぬらしつゝも

やまふき

夫　山吹の花のさかりは（に夫）よし野河ゐ手こす涙も心あらなん

君みすて散か過なんふる里のみかきにさける山ふきの花

いつくにもさくや山吹みる人はこゝにゐてとやまつおもふらん

春にあふ花もよしなし山吹のさき出ぬへくおもふ世中

山吹はいまさかりともあちきなくいはしや春の暮もうらめし

なてしこ

みてもまたあかむ物かは撫子のはつ花なひきをける白露
山かつのかきほは露もわすられす思ひよそへしやまと撫子
やましろのとはにみてしか敷島や大和なてしこ花のさかりを
うへをきし庭のとこ夏ませゆひて花も手染の色かとそみる
なさけなき人にみせはやおりふしをすくさすさける常夏のはな

あきはき

いもさそひあすもきてみん置露にちらまくおしき秋はきの花
夫 このねぬる朝風さむしさぬかたの野邊の秋はき今さかんかも
露分て秋はきたれと故郷に人もすさめぬ庭のはきはら
萩の露おれは衣にこほれつゝ玉にはぬかぬ色そうつろふ
たかまとの尾上の小萩うつしもてまたみぬ人に袖やかさまし

をみなへし

夫 長月のすゑ野の霜にをとろへてさかり過たるをみなへし哉
おらてたゝよそなからみん女郞花花のすかたのやつれもそする
立歸り猶こそみつれをみなへしひとりもたてるうしろめたさよ
胸とめておりてやみまし女郞花なにめつとてもさそな我身は
いさゝらは袖にかけてんをみなへし此世のさかの秋のしら露

すゝき

夫 秋風に露はみたれぬ花薄はむけのいとのぬきあへぬまて
夫 うくつらき秋のさかのゝ花すゝき草のたもとも露やかはかぬ
暮にけりをはなかりふき今夜もや露ちる庭に獨かもねん
夫 夕暮は吹もさためぬ秋風にまねくすゝきの袖かへるみゆ
秋なへてしけれる宿の篠薄はにはまねけとくる人もなし

しのすゝき

里とをき山のかけのゝしのすゝきほにこそ出れ身をなけきつゝ
おれかへりしのひにしのふ篠薄心のうちよいかゝくるしき
しのすゝきほに出やらぬ草むらに秋のさかりとをける露かな
夫 秋かけてやゝ露ふかき篠薄我かよひちと誰かわくらん
みまくさに幾度かりつ又はへのしのゝをすゝきほに出ぬまを

おき

老て聞荻の上葉の秋風はおりしよりけに淚落けり
きかはやと思ひてうへし荻のはの初秋風は袖ぬらしけり
夫 心とはをとつれもせて吹風のとへはこたふる庭のおきはら
夫 吹すくるはかせはさても荻はらや猶ともすりのをとのはけしき
いかさまになをまた物をおもへとてかきねの荻に風の吹らん

らに

から衣すそのに匂ふふちはかまふみちらしたるしかの跡かな
紫をくたくあらしはまたたゝて野をきかけなるふちはかま哉
今朝はまた誰きてみよとふちはかまぬく露のつかりしつらん
むらさきの色そめはてぬふちはかまうすくや誰のゆかり成けん
秋の野に今さかりなるふちはかままたさそへみれと飽れやはする

きく

夫 霜なけは一夜ふたよにうつろひぬ竹のまかきのしらきくの花
さきはつることしのはなの白菊はうつろふまてそかきり成ける
日かけにはまたそうつろふ朝霜のしはしまかきのしら菊の花
夫 たてなから籬のきくのつくりはな心つからのいろとやはみる
ことならはなにかはあたにうつろはんちらて久しきしら菊の花

かるかや

嵐吹岡邊に茂るかるかやの上葉の露はまつみたれけり

とにかくにみたれにけりなかるかやの我心にもあらぬものゆへ

露なから野邊のかるかや秋風のふきのまに〳〵さもそみたるゝ

おれかへる下のみたれに埋れてほにかすかなる野へのかるかや

あはれうき心の亂おもふにはなをかるかやもたくひとはみす

かや

夫 霧深きまのゝかやはらなをもかけのほのみしよりそ身をは放れぬ

はた山の尾上つゝきのたかゝやにふするゐありやと人とよむなり

しつのおかかるやなをかやをつかねつゝ夕暮いそきかへる空かな

しけしとはよもいはしろのなをかやの原かる人多きよものつかねに（すイ）

河上のねしろかやはらされ〳〵てはてには君かより（かイ）にたにこぬ

はちす

すましかれ心の水はにごるともむれのはちすはひらけさらめや

世にこゆるれかひはむれの蓮にてたのむよりこそ又むかふらめ

夫 はちす葉に物あらかひのなかりせは露を玉とて（もイ）みるべき物を

露やとすちきりもあるを花はちす猶玉こすやうきは成らん

大空にみちたるはすの花なれとむれにおさめぬ人はなき世そ

かきつはた

霞行野さはにさけるかきつはた人の心そへたておほかる

池水にまつ花さけるかきつはたひろきうるひの春をしるらし（んイ）

夫 みれは猶色なつかしきかきつはた我袖すらんはなはちるとも

夫 沼水の底はへたてもなかりけりいはかきつはたかけうつせ（すイ）とも

おく山のみこもりぬまのかきつはたへたてはてたる我世成けり

こも

山城の淀のみこものかりの世にあはれこゝろのみたれずも哉

夫 風むかふなを（ほイ）ふれのほこ（こもイ）もいたつらに吹立てられて世は（にイ）過ぬへし

夫 今もまたよとのにむか（す夫）ふこも枕たかにこ（こく舟イ）え人のしわさ成らん

かりてほすよとのゝまこもあみいとのすきめおほきを我心かな

なのつからとふのすり菰いくふとも誰にかわけん思ひたえにき（にないイ）

はなかつみ

ぬま水のそこの心は花かつみかつみる人もしられさりけり

よしや唯かりにもよらし花かつみかつみなれなは亂れもそする

夫 都人きてやはとはん花かつみあさかのぬまの程となくして

花かつみかつみたれ行ぬま風に露やあさかの名にし（にほイ）おふらん

くるとあくとうつる心の花かつみかつみにつもる罪そかなしき

芦

夫 小船こく堀江の芦のしけき世をなにとさはりてそむかさるらん

人なみにさても世渡る流芦のうきふし〳〵はなき（う夫）になしつゝ

しほれふすなにはの芦の下みたれかくても船のさはりかちなる

難波人かるもひまなき芦のはなをさのみやほさんやへふきのため

難波なるみつめに人はみえしとてあらし（イナシ）ともいへは葺かゝる鴨

ひし

夫 水草ゐしいり江のひしのつる絶す此世をふかくおもふはかなさ

いかにして池のひしつるうきことは始めもはても思ひわくへき

夫 いかに（かイ）せん人しれぬまのみこもりにひしの下ねのたえぬ歎を（はイ）

みさひましる菱の浮つるとにかくにみたれて夏の池さひにけり

古郷の池におりたちとるひしのすみきひしくはなき身成けり

ぬなは

夫　風吹は波にたゝよふうきぬなはうきなからやは世をつくすへき
夫　はらの池の水さひましりの浮ぬなは我にもあらす世に紛れつゝ
古川の志けきぬなはにつなかれてなかれもやらぬせゝの埋木
こもり江に志つみたにせぬうきぬなはくるしき心いや重ぬらん
いもと我今はぬなはのおしけれはあひにはあはし戀はこふとも

ねぬなは

夫　いかにせん沼に生てふねぬなはのなかきうらみに命たえなは
うきにのみ生るねぬなはなかきねに思ひみたれて年はへにけり
くる人もなき物ゆへにねぬなはのなか〱し夜を待あかしつゝ
秋の夜の月をみにくる人さへにねぬなはたえぬひろ澤の池
いたつらにつれなき人にねぬなはのねたくや下の思ひみたれん

あさゝ

夫　水まさるぬまのあさゝのうきてのみあるは有ともなき我身哉
夫　池水に生てふ草のあさゝのみうきはならひとぬらす袖かな
夫　おもふこと底ふかゝらぬうきねより心あさゝのさてそおひぬる
みれはまたあさゝ生てふ澤水は底の心のねをやあらはす
君といへは生るあさゝの池水にうき〱とのみなる心かな

うき草

水の面にねさゝて生るうき草にむなしき世をそ思ひ志りぬる
水まさるぬまの五月のうき草のうきたつとても行方もなし
水の面にねをはなれたるうき草のさためなき身はあすをやは待
さそふ水ありて行瀬のなくはこそ世をうき草のさても絕なめ
なのみして身はうき草のした志つみさもこえやすくみえし水哉

つき草

朝露にあたにひらくる月草のうつりやすきはこの世成けり
月草の哀かりなる命もてぬれての後の人に戀つゝ
おしめとも日數ははやく月草のうつりやすくも過るあきかな
月草のはなたの帶の色もうしこなたかなたのうつりやすさに
月草のはなたもてすれるわきも子か衣はよるや色まさるらん

わすれ草

うきをいとふ人の心にまかせすはわするゝ草のたねや絕まし
うき人の心の種のわすれ草うたてある世になとか生けん
あはれなとねたさもねたし忘草人の軒はに先茂りけん
住よしのきしもせねはや忘草所からなるたねをまきけん
忘草なのみそつらきなにもみな心のほかの種しなけれは

志のふ草

とうさかる月日をそへて忍草志ける軒端のふりまさりつゝ
わすれえぬ世のみ戀つゝ故鄕はむかし志のふのくさにやつれて
志けれたゝねやのあれまの忍草志はし時雨もとまるはかりに
夫　人志れぬむねの思ひのせき板に軒の志のふはさそしけるらん
忍草生る板間もかへりみすあはれ我身のつかへしやいつ

ことなし草

いつくにかうきことなしの草を植て露もかゝらぬ世を送へき
我宿に志ける草葉の中にたにあふことなしの名こそつらけれ
都人とふことなしの草の葉も今霜かれの冬のさひしさ
なにかいふことなし草の言の葉よいらへやすくそ人にとはるゝ
身におもふことなしくさの種植ていかなる人の世をすくすらん

せり

水まさる澤田に茂るふかせりのねもみぬ人をかく戀めやは
こひぬまも水田のあせに引岸にはにあらはれて袖ぬらしけり
いたつらにあるゝそのふのはたけせり侘しけにても有世成けり
つむとても思ふ心のふかせりはおつるなみたやねをあらふらん
むは玉のよるのいとまに立出てせりつむ小田の月をみる哉

なき

なしなへて茂る草葉にわかさりしぬまのこなきも花に咲つゝ
露むすふ田中のゐとのなきの葉に光さしそふ夕つくひ哉
なのれさへ戀ちにぬれて苗代のこなきかもとになくかはつかな
苗代の田つらの畦のうへこなきまくてふなへをとりやませけん
春雨のふりみふらすみ袖ぬれて深田の畔にこなきつむなり

たて

さきのとふ川邊のほたて紅に夕日さひしきあきの水かな
かひもなしほたてふるからからくのみ身の憂節は思ひつめとも
かきほなるほたて色つく露霜にむへさむからし夜半の衣手
みるまゝにこまもすさめすつむ人もなきふる郷のたてに花咲
うきせには身をのみつみし水たてのからきめにこそ涙落けめ

むくら

あれまさる葎の宿になく蟲はとはれぬへしと誰を待らん
我宿に重て茂る八重葎おもひは隙もなきそ戀しき
年月に茂るむくらの八重ひかきもとはまはらに思ひしかとも
八重とつるむくらの門を出かてにうき身いふせき世をや盡さん
霜かれの宿のかきほの八重葎ひまなかりしはむかし成けり

玉かつら

ときは木のかけに茂れる玉かつらくるしき物と世をはしりつゝ
たにさまにはへるみねへの玉かつらたゝくたりにもなる我身哉
玉かつら心なかくや思ひけんかけにはなれぬる人のけしきを
玉かつらはふ木あまたに有物をとりつきかたのなきそかなしき
おく山の岩本はへる玉かつらさもねかたくもみゆるきみ哉

くす

みよし野のかけろふ小野にはふ葛の下のうらみはしる人もなし
秋風もうらみもあへす眞葛原かつらる比のこゝろよはさに
きかしたゝかへる心そさそはれん入ぬる山のくすのうら風
かへりさすうつらの床やさむからし葛はふ野邊の露の下かせ
うらふれて物思ひおれは我宿のかきねの葛も色付にけり

さねかつら

あし引の山さねかつらくる／＼もあひみてあかぬいもにも有哉
いとはゝや山下しけきさねかつらはひまつはれてたえぬ心は
思ふ事おほ江の山のさねかつらくるとあくとはなけきつゝのみ
つま木こり遊ふ手もたゆき五昧くるしや今も歸る山人
世をたえていとふ山邊のさねかつら心しれはやくる人もなき

あをつゝら

なかき日もくるすのをのゝあをつゝら末葉さしそひ茂る比哉
我戀はあそ山もとの青つゝら夏野をひろみ今さかりなり
結ひなく青葛このかほこけにさそなめならふたくひのみして
青葛つゝらなるてふ茂き嶺にとなりかたくそ駒もわすらふ
行駒のつまつく野邊の青つゝらつらはひにのみなる山ち哉

あさかほ

千とせふる松のみとりもおなしこと日影まつ間のあさかほの花

我さきにおきてそみつる白露のかきほにかゝる朝かほの花

忍ひ妻おきて別の袖かきに面影のこるあさかほのはな

朝顔の花をはかなみねぬる夜の夢の直路の名殘とや見ん

日影さすとほそにかゝる朝顔の末ほめる花や我身なるらん

あさち

秋はゝや初霜むすふよ比へてなかへのあさち色付にけり

かれそむる野邊のあさちとみし程にたのみし中も秋果にけり

秋きぬと庭のあさちの枯行をおもひも末らて人を待ける

時は今過すとおもへとあさちふのをのかさかりの花をやはみる

色かはる庭のあさちに置露のけぬへく君をこふる比かな

つはな

夫 春雨のふるのゝちはらけふみれはつはなぬくへく成そしにける

夫 古河のきしのあたりのあさ草につはななみよる夏の夕風

道のへの柴生のつはなぬきためてうなひ子供か手まもりにせん

夫 玉鉾の道の芝草ほに出て春のつはなも人まれくなり

夫 春もすき夏もきぬらし野に出ていはなぬきにと誰をさそはん

あちさひ

宵のまの露に咲そふあちさひのよひらに月の影そみえける

夫 花咲し庭のあちさひあちきなくなとてよひらに我をすてけん

イミ いまもかもきませ我せこみせもせん植しあちさひ花咲にけり

夫 あちさひのよひらすくなき初花をひらけはてすも思ひける哉

夫 末もつけや籬にましるあちさひの四片にみれは八重こそはさけ

すみれ

我せこかうすむらさきの衣手に野へのすみれの花そまかへる

棠のこそめの袖とたかふまてすみれつみもて歸る里人

はつかしや草にやつるゝ庭もせをすみれつみにと人のみるらん

かこひ分るかきねかくれの草陰に名のおふ庭のつほすみれ哉

をのつから誰殘りゐて故郷のあさちかはらにすみれつむらん

なはき

里人やなはきつむらん三笠山春日の原のはるのうらゝに

夫 春日野やなはきつみけりなら山のこのめ春風ゆるく吹らし

いまはまた野への なはきの春ふかみ時すきぬれやつむ人のなき

夫 今日はまた雪間のなはきつみませて野邊の若菜の數やそふらん

夫 なはきつむ春野をみれはあをによしならの都もにきはひにけり

わらひ

夫 打返すかた山はたのさわらひの下にもゆるもあらはれにけり

夫 山人の歸るこさかの道のへに折やすけなる下わらひかな

けふの日はくるゝ外山のかきわらひあけはまたこん折過ぬまに

谷陰やなとろましりの下わらひおりめつらしとひこはへにけり

夫 今そしる山にいる人春されはかしこからぬもわらひ折けり

ゑく

いかにせん山澤ゑくもつまなくに衣手ぬれて戀つゝそふる

あふことはかた山澤にゑくつむとおもひし袖の今もかはらぬ

春はまつゑくのわか葉をつむとてやおりたちそむる賤か小山田

夫 なゝくさの數にはあられと春の野に牛夏の若菜もつみは殘さし

ふゑはいる春の薄氷下解て山澤女妾をつみそかねつる

ゆり

草ふかき野へのゆり花かくろへて露けしとたに人しらめやも

草ふかきしけみか下のさゆり花世に人しれぬみとや成らん

み馬草にかり残されて姫ゆりの心ならすや人にしられん

しらるゝか野邊のさゆりの花さかりしけみかくれも色に出にけり

露けさの程たにいかてしらせまし野草かくれの姫ゆりの花

あゐ

はりまなるしかまの里にほすあゐのいつかおもひの色に出へき

からあゐのやしほもあかていて人を我そ深くはおもひそめてし

燗なけるつかれの藍のそこらあれは飽まて染ん色そしらるゝ

播磨なるしかまにつくる藍はたけいつあなかちのこ染をかみん

うき人をなとあなかちにいひそめてあゐよりもこき色に出らん

まさきのかつら

とやまなるまさきのかつら色かはる秋は物うき栖なりけり

冬のくるまさきのかつらちるくのみさもおちやすき我涙かな

うちはへてのほり坂なる山道にまさきのかつらくるしかりけり

外山なる眞拆の葛くるとあくと紅葉も色のめかれやはする

と山なるまさきのかつら打はへて色付くるゝ秋のそらかな

ひかけ

諸人のかくるひかけの心はにあまてる神のめくみをそみる

見る度にひかけのかつらよそなからむかしをかけて忘やはする

しはしたにありとはえこそ頼まれねさすやひかけの草の葉の露

かさすてふ心はましるひかけ草岩のみとりもはなさきにけり

さはかりや木の下くらき奥山にあるへくもなきひかけ草哉

やまたちはな

跡たゆるやまたちはなの岩かくれみのなるさまをしる人もなし

鳴て出る山橘の名のみしてきてもやとらぬほとゝきすかな

ふりにける卯月のけふのかみそきは山橘のいろもかはらす

岩かねはみとりもあけもはえ色の山たちはなのときはかきはに

あし引の山橘のなそもかくこかくれはつる身とはなりけむ

すけ

隱沼の初瀬の山の岩こすけいはぬそなかきねはなかれける

みな人の笠ぬふ草のかり跡のよにすけもなくなりにける哉

しはしなと立もとまらて白菅のしらすけにては人の過らん

すかのねはむへなかゝらしかたふちの沼田を深み誰かうへけん

太山なるすかのねしのき置霜になかくや袖のぬれて朽なん

さゝ

あふことはかた山峯の小さゝはらわすれぬふしに露もかはかす

いさゝほといたかさもみえぬ小篠原猶世におほきふしくもうし

逢ふ事はかたちかひなるさゝむすひよゝのむくいの契つらしな

山かつの賤か垣ねのさゝくろめにきはふまての栖とはみし

篠の上に霜置さえて日は暮ぬ我いねかてそかれてしらるゝ

あふひ

もろかつらあふひまれなるかなしさを心の中にかけぬ間そなき

哀なりみあれの後のあふひ草なにゝつくへき我身なるらん

玉くしけみあれのけふのあふひ草かけにし世々も年ふりにけり

いく二葉さてのみよゝにあふひ草神のかさしそかけて久しき

よしさらはかけしやけふのあふひ草年にまれなる契成けり

みくり

夫　かくれぬにおふるみくりのくり返し下にや物をおもひみたれん

水かくれにふかきさは（ね夫）ぬのみくりなは月日はくれと引人はなし（も夫）

ねをたえてうきにはさても朽ゆけといつらみくりを人の引ける

夫　徒にひかぬみくりのふかき江にしつむくるしき戀もする哉

夫　さやまなる池のみくりのねもみねと打はへ人のくるそまたるゝ

よもき

庭の面の蓬をふかみもとつ人露を分てもとけんとそ思ふ

夫　老らくのくるとみなからふりにけりしもの蓬にあきたくる身は

夫　世にしあらはゆきかふ人もいかはかり蓬か門にいちをなさまし

まきもくのひはらにゝたるから蓬杣のしけみとむへもいひけり

茂かりし蓬か宿の白露をあはれいつまて袖にかけゝむ

こけ

山里の庭のやり水岩ことにこけむすはかりとしそふり行

夫　谷ふかきいはほの苔のみたれあひてむかしの跡そみえす成ゆく

家を出てさてすみ果ぬ山里にこぬ程みゆる庭の苔かな

松たてる岩のはさまのねかくしにむすやいくへの苔ふりにけん

またきより枕も袖も苔にのみなる身のはてをいかてうつまん

いちし

徒にあふよしをなみちのくのいちしの花のなにはきけとも

あられ跪我にもあらて身におはぬいちしの花のいちしるきよも

夫　時しあれは立田のいちしのいちしるくさけ共花をうる事そなき

大はらは行てやみましいつしかと咲いちしはのはなのしるへに

しるへせよいちしの花の名にしおはゝ又うへもなき道の行ゑを

しは

故郷の庭は芝生になりにけり野かひの駒の立なるゝまて

夫　世にもなき道のしは草しはしそとおもひし跡を我殘しつゝ

夫　駒はなつ野邊のうなひか芝くらへ永き日くらすこれやなくさめ

夫　家の風吹からしたる芝のねはおこしところもなくなりにけり

もゝしきの庭のきり芝降雪にこれをかきりとぬれし袖哉

むし

いかなりし世々の報ひそ木こり蟲身におふほとの宿のはかなさ

我宿はうへし草葉にむし鳴てやかても野邊と（にイ）成ぬへき哉

はかなさは露よりけなる玉蟲のからをとゝめてかたみとやみん

夫　秋の野におほくの露を涙にてちゝにくたくるむしのこゑ哉

住なれしもとの野原や忍ふらんうつすむしやに蟲のわふるは

せみ

夫　夕つくひもりの木末にうつろひてすゝしき風にせみそ（もイ）鳴なる（りイ）

音のみなく身は我からそうつ蟬のむなしき物に成はてしより

あはれともいふ人なしに空蟬の身をいたつらに鳴くらすらん

身におはぬ聲なのみ聞ぬけからの蟬のなりはへありとやはみる

哀なり身をうつせみの心からむなしき世にもなほまとひつゝ

夏むし

夫　なつむしの思ひにもゆるはかなさを我身のうへと人のしれかし

はかなさの類（くも夫）もかなしともし火のかけにかゝよふ夜半の夏蟲

あちきなやよその思ひに身を捨てむなしく消る夜半の夏むし

ともし火をけつや夏むし中々にみせぬおもひの程もはかなし

法にたく火に入夜半の夏むしや闇を出へきたよりなるらん

きり/\す

暮ぬれは音になかむとやきり/\す床のあたりに近つきぬらん
光なき我ふる郷のきり/\す身はかけ草のねをのみそなく
きり/\すなかきうらみを管の根の思ひみたれて鳴ぬ夜そなき
夫 霜宿の苔のかきねのきり/\す野へにのみやは露はならひし
吹風になびくあさぢのきり/\すいかにせんとか夜寒なるらん

松むし

暮ゆけは常あり顔になくむしのまつは名にのみふりにけるかな
夫 草の原秋は末葉にうら枯て名のみつれなき松蟲の聲
夫 涙かくる磯邊の山の松むしは音にあらはれて聲うらむなり
草陰にいつならひてかとふ人をおのれまつむしこゑしきるなり
夕暮はいつかは人を我宿に名たてかほなる松むしのこゑ

すゝむし

むもれ行あさちか庭のすゝむしは秋なかされてなく/\そふる
夫 いそくとて夜る山過る旅人のふりや捨けんすゝむしのこゑ
夫 秋ははや夜寒になりぬ乙女子か袖ふるやまのすゝむしのこゑ
すゝむしの去年の古こゑをのつから遂かもとの心にそなく
鈴蟲のたゝなきにこそなかれぬれ我なるさまを思ひつゝけて

ひくらし

夕日かけ秋とおほゆる(なイ)深山邊の梢さひしき日くらしのこゑ
人はこて風のみ秋の山里にさそひくらしの音はなかれける
明るより鳴もたゆます山里にけにひくらしのこゑそ聞ゆる
夫 夏ふかきこすゑの蟬のよはり聲たゝ山さと(もと夫)のひくらしそなく
とふ人の歸るさいそく山里にいまはたなきぬ日くらしの聲

ほたる

夏ふかき野澤の草のたかけれは下葉の露にとふ螢かな
飛螢ひかりみるこそ哀なれ何のおもひにもえはしめけん
宿はあれて人はふみゝぬあさちふにあたら螢の影そ殘れる
飛ほたるおもひありとや露分の葎の宿にもえ明すらん
あかつきのまた空とほく行螢ひかりにたくふ法のともし火

はたおり

秋の野にはたをるむしのにを寒み誰から衣猶いそくらん
霜のたて露のぬきもて秋の野にはたをるむしは錦なるらし
草の庵に今はたむしのをりかくるこゑのあやなくよはる比かな
秋風の寒さにいそくしつはたをかけて野はらの蟲もをるらん
すそ野にははたをるむしもいそくなり山のにしきの色まさる比

くも

同世にむまれあひてもくものこのちり/\にこそまた別なめ(けイ)
夫 くれことにねやつくりするさゝかにの軒端のつまと(に夫)誰を待らん
夫 いとゝ又造りますなり(ら夫)さき草のみつはよつはのさゝかにのいと(やと夫)
夫 かたきしにあらぬ軒端のたよりにもかけ造りなるさゝかにの糸(やと夫)
露分て朝立くれはしのはらや衣にかゝるさゝかにのいと

てふ

秋の野の千くさの花にとふ蝶の命にたのむ露もはかなし
さきつゝくおりふしかはる花々にうつるてふなや思ひしるらん
いたつらに花やちりなん蝴蝶にもさそはれかたき人のつれなさ
咲花にはねうちかはしあはれてふさのみやふかき色にめつらん
一筋にまとふは人の身なりけりてふすゝはなの色はやつさす

木

杣山のおさきのはしらふし志けみひきたつへくもなき我身哉

捨られしきのふの山のふしおれ木さてもかひなく世にや朽なん

おりにあふ花のあたりのときは木のすさましけにて生立るらん

ふる枝のふしのみのこるうつほ木のたてるもさひしはたの焼山

かさこしにたてるの山木のうは枝は花も紅葉もあるときそなき

志なり

あつさ弓いその山道志なりしてからくもけふは越そくれぬる

雪おれのおとを志なりとたのみつゝ道ある山にわれまよふ哉

我ひとり思ひ入ぬる山路にはたか志なりをかたくひともみん

いく志なり志はのさ枝を分過てはてはをよはぬおくのみ山木

山ふかくまことの道に入ときは我身志なりとほねをおるかな

はな

なかめつゝ花になくさむ春毎に身のふりえさるほとも志られす

今に我はなをもよそに思ふへき春しも雲のうへそ戀しき

春ことに花は志はしもとゝまらておしまれぬ身はある世成けり

咲花にまかふ色やはおかさらん心してたてみねの志ら雲

あはれなる花のさかりの心かな身もかへりみす人またれけり

秋のはな

なく露のひとつうるひに咲花の千くさに匂ふ野邊の色かな

秋草のさきみたれたる花さかり我身におはぬ宿にも有かな

やちくさに心をとめて故郷にたかうへをきし秋の花その

花にみな野へをさかりとみゆる迄千草の露の染る秋かな

ぬらせたゝ袖やはおしむ秋の野の花さく草にかゝる志ら露

もみち

ふりはつるいそちあまりの翁さひ紅葉かさゝむ人なとかめそ

木からしの末野にたてるはし紅葉秋のかたみによきてふかなん

うは葉をそ露も時雨も染つらむいかなる山の下紅葉そも

時雨まつちしほの色はをそけれと山はいつしかうす紅葉せり

志くれの雨いまか降らし龍田山木すゑもみちてかゝる村雲

はゝそ

さほ山の柞のもみち志くれねと色に出へきときは志りけり

みねつゝく外山のすその柞原秋にはあへすうすもみちせり

なくかりのこゑきく山のはゝそ原下葉かつちる秋風そふく

賤かすむかきねにつゝく柞原さとの志くれも紅葉志にけり

さほやまのあらしの風の音はけしはゝそのもみちりか過なん

まゆみ

山ふかみいはかきまゆみ紅葉せは誰みよとてか時雨そむらん

かた山のすそのゝまゆみ朝きりのたなひくみれは紅葉志ぬらん

人志れす紅葉志にけりいなふちのほそかはまゆみいつ時雨けん

あつさのゝまゆみのもとは色とりて常磐姿もいつもみちけん

朝きりのたなひくみれはあたちのゝまゆみ色つき時雨さへふる

かえて

日にそへて末葉さしそふわかゝえて志くるゝ秋も待れさりけり

秋の色に名のみかえてと降ぬれとあへすそ染る露も時雨も

めかれせぬやとのかえてをいつのまに色とる秋の風は吹らん

春かけてはさき色つく若楓さもあらましをなにいそくらむ

ねこしつゝ櫻にませてうへをきしわか木のかえて紅葉志にけり

まつ

はままつのつれなき色にこひ初し我身しくれのふらぬ日はなし

たくひなき身こそおもへはかなしけれ一本たてるからさきの松

いつのまにとは時雨のふりぬらんうへしほとなき庭の松かせ

庭のうへの松なはなをや捨置かむうへてもともに（とイ）年はへぬれと

夫　たかはまの眞砂にたてる松のれのそこへもいらぬ我心かな

かえ

夫　花さけと人もすさめぬかえの木の徒にのみ身はなりにけり

夫　しめのゆき紫野なるかえのもりはかへするからうつもれにけり

道ふかみ人こぬ山のかえのみはいたつらにのみおちつもりつゝ

夫　道のへのかえのかさおちひろふとて木の下かくれ行そやられぬ

夫　ちはやふるみむろの山のかえの木のはかへぬ色は君かためかも

竹

うきふしを思もいれすしの（め歟）へ竹忍へとこそまつなかれけれ

鳥とまる竹のほすゑのよゝをへてたゝかたふきになる我身かな

はむへせて年ふる竹のかき（きは夫）うちは花も紅葉もおりそしら（す夫）れ（こ夫）ぬ

夫　數ならぬ賤かかこひのあはら竹すゑをりかけて世をやつくらん

音さやく夜風を寒み竹の葉にまろひねひてや露も落らん

たかんな

呉竹のなくれてさせるれたかんなむもれなからに身は老にけり（まイ）

いかて我かきれにおふる竹の子に世のうきふしを思ひしらせし

おひ出る夏のかきれの竹の子はさこそみしかきよをかさぬらめ

生たゝむふしの數ある竹の子はみしかしとてもあたにやはみる

夫　いかはかり雪の下なる竹の子の親おもふ人の心しりけん

むめ

夫　日數まつ春をなそしと白雪の下より匂ふ梅のはつ花

我せこにまつ告やらん梅の花あかぬ匂ひをきてもみるかに（はイ）

吹風も心やすくやさそふらむぬしさたまらぬ野邊の梅か枝

春かせのさそふのみかは梅の花色もにほひも心にそしむ

夫　やふしさくおとろましりの梅の花たゝひとへなる色もわりなし

こうはい

くれなゐの色さへふかく咲初てにほひことなる軒の梅かえ

紅の色こき花は梅かえにうつる夕日もわかれさりけり

せこかきし紅染のむめのはなよそへてもなをあかぬ色かな

夫　宿の梅のうす紅のおろし枝れをまつほとの色やかれなん

夕日さすとやまの里の梅の花木ことにまかふ春のくれなゐ

やなき

夫　白浪のうつ（た夫）たのうへの河柳もゆといふはゝるはきのふけふかも

風寒み雪はちりつゝしかすかになひきそめたる青柳の糸

夫　きしかけの水のよとみのかたふちにつりをたれたる青柳の糸

いつのまになひく梢となりぬらむ枝さしうへし庭の青柳

はかなくも幾春經けん（てイ）青柳のいとかゝりける身ともしらすて

さくら

さくら花なれてもあかぬ心からうつろふはてを身に數つゝ

なにことに身のうき事を忘れまし春も櫻のなきよ成せは

年へぬるふるきみきりの糸櫻見にくる人そ春はたゝせぬ

夫　散を我おしみもちたる後までもをりめはつけし櫻うすやう

夫　みれはかつ本木の花はちりはてゝ八重咲かはるつきさくら哉

かはさくら

夫 ひつかはの岸に匂へるかはさくらちるこそ春のとちめなりけれ

夫 梓弓やはきの里のかはさくら花にのみいるわかこゝろかな

夫 から竹の笛にまくてふかは櫻春おもしろく風そふくなる（け夫）

夫 妹かきるむへ（う夫）むらさきのかはさくら花のゆかりの色もなつかし

夫 あふみなるひもの、里のかは櫻はなをはわきて折人もなし

はなさくら

夫 咲ぬらむいさみ（め夫）の山のはな櫻かすみはよそに立へたつとも

うき人のあたし心の花さくらことはり過てうつろひにけり

程もなくうつろひやすきあた人のこゝろににたる花櫻かな

さほひめの春のかたちの花さくら心つからのいろに染らし

あたなりと思ひそめてしつらさにて心をかゝる花さくらかな

山さくら

おもへともいかにうらみむ山櫻はなのみあたに咲世ならねは

いさけふはおりは（らイ）おりてんおらすとて風のなくへき山櫻かは

ふか山の岩根にふせるわ（はイ）ひさくら霞のうち（こすイ）をえこそ立てね

山さくら花のあたりの白雲はさもたゝはたてまかへてもみん

かくれかと頼むよしのゝ山櫻いたくなちりそ庵さひしも

庭さくら

荒まさる葎の宿の庭さくらうつろひぬとも誰に告まし

とふ人の跡たにみえぬ庭さくらよしなや春の花の名たてに

いつのまにこたかくなりて庭もせにうへし櫻の咲みちぬらん（にけイ）

夫 散ちらす本あらの櫻庭もせにかつ／＼いろのうつろふやみん（らイ）

うへてみる所からこそ庭櫻ほかにうつらは名たに殘らし

ひさくら

みよし野の草葉ももゆる春の日に今さかりなるひさくらの花

夫 春をやくひかりはおなし梢にも分て（て夫）名にたつひさくらの花

夫 春はこれ日影もぬるみ（は夫）草の葉も萠る野はらのひさくらのはな

夫 秋なこそやくとはみしか山のはにうす紅のひさくらのはな

夕つくひうつろふ雲やまかふらむ高根にたてるひ櫻の花

ふち

夫 さすかなを春のめくみやをよひけん三笠のもりの藤の末はに

夫 年をへてはふきあまたの藤の花たえぬこゝろの春はみえけり

谷こしの藤の古枝のひこはへてあなひもなかく花咲にけり

夫 深草は名のみなりけり藤のもり春をかけてそ花咲にける

心からさくやふち浪かけなきてまとはかさるゝ岩根松かな

たちはな

橘の匂ふ軒端の夕やみにむら雨ふりて風そ涼しき

たちはなの香をかう（くイ）はしみ散花にかけふむ道は行もやられす

けふまては人をむかしと忍ふらん我あすしらぬ宿のたちはな

夫 故郷の花たちはなの枝折にかたみおほゆる（か夫）一むかしかな

いかなれは花さきみなる橘のわきて葉しもはときは成らん

あつたちはな

夫 いかなれはあつ橘の匂ふ香にうすきたもとも涼しかるらん

名にしおふあつたちはなの花ならは冬の衣の袖の香やせん

ときはなる色をかされてむす苔もあつ橘の年はへにけり

夫 なにか匂ふあつたちはなの袖の香は涼しかるへき風のつてかは

なき人のいくよかさなる袖のかはあつ橘のにほひなるらし

しゐ

夫　むかつをのしゐのこやての世にふれは人の心にあひたかはめや
夫　いつのまにたれ種まきて片岡のむかひの峯に茂る椎柴
夫　山本の椎の葉陰の夕暮に夏もつれなく風そ涼しき
夫　いくはくの道行つかれやすむらん椎の葉せはき旅のかれいひ
夫　秋風に軒端のしゐの落つれは庭にくろ石しくかとそみる

なし

夫　年ふれとかはらすなからつきなしのあらぬ物にも身こそ成ぬれ
夫　いたつらにおふのうらなし年をへて身は數ならす成まさりつゝ
夫　時にあひて秋をしまたぬ夏なしはかならすにしの枝ならすとも
夫　かた枝はなりもならすもつきなしの思合へはやれてはかたらふ
夫　時わかぬ花とみゆるはいせの海のおふのうらなし波かゝるらし

山なし

夫　足曳の山なしの花咲しよりたなひく雲のおもかけそたつ
夫　きゝわたる面影みえて春雨の枝にかゝれる山なしの花
夫　いとひてもいつくにしはし宿からむうき世の外の山なしの花
夫　山なしの花のあるしを人とはゝこたへやせまし數ならすとも
夫　しかすかに世をいとひえぬかくれかよなにそはありて山梨の花

もゝ

夫　いくかへり千代もかさなる八重桃の花のさかりに君そあひみん
夫　朝日影匂へる桃の花さかり空さへ色にうつろひにけり
夫　人くやとまやの軒はの柴垣に立かくれたるひめもゝの花
夫　山吹の色にはあられと桃の花また物いはぬふる郷の春
夫　あかれさす色こそまかへ日のもとのむろふのけ桃花さかりかも

すもゝ

夫　山かつのそのふのすもゝ咲にけり風もいとはぬ花やみるらん
夫　きえてかの雪とみるまて山かつのかきほのすもゝ花咲にけり
夫　やまかつの衣ほすてふかきほかとしろきをみれはすもゝ花咲
夫　數ならぬ片山かけのあをすもゝ身はあるかひもなくなりにけり
夫　梅櫻それはまかへし垣内のすもゝの花を雪かとはみん

から桃

夫　いかにしてにほひ初けん日の本の我國ならぬからもゝの花
夫　もろこしのよしのゝ山に咲もせてをのか名しらぬから桃のはな
夫　かゝりける誰種まきてから桃のやまとにはあらぬ花咲ぬらん
夫　よそにてはさやはみはやすから桃の花のぬしこそ色に出らめ
夫　ことはよもきゝしらしとやから桃の物をはいはて花にのみ咲

くるみ

夫　夏山のすそ野に茂るくるみはらくる身いとふな行て逢みん
夫　時雨にもぬるゝくるみのかはかすてをのか心となにゝそむらん
夫　うきふしをなけきくるみのそめほれは數多つらさのかすそ重る
夫　夏山にしけみかくれのひめくるみかねて見まくのかたきこひ哉
夫　山からのまはすくるみのとにかくにもちあつかふに心なりけり

すき

夫　かくれぬのはつせの河のかはくまに神さひたてる杉は二本
夫　道のへの杉の下枝に引しめにみはすへまつるしるしなるらし
夫　いかはかりふる河の邊に年をへぬいつあひおひの二本の杉
夫　をのつからさても我世のすきやりと折々よはき身をいかゝせん
夫　かこ山のみねのむすきのもとつはにみとりをそへて苔生にけり

むろ

夫 しほのみつ浦に年ふるむろの木のかはらぬ色も下葉散つゝ

夫 あつさ弓いそへにたてるむろの木のとことはにうつともの浦波

夫 しくるれと秋の色にははなれそに絲かはらすたてるむろの木

おく山の杣木はむろのなもしるしとつる戸ほそもさそなと思へ

夫 いかゝせん我ゐる山のむろの木のなれみし人をわすれかねつる

まき

夫 あつまやにたてしはかりの槇柱あさき契りにふしは絶にき

みすひさになりそしにけるなすて山槇のふる木の苔ふかきまて

夫 いかたしのとりみたるともしきはしらもとの心は人にしらせん

陰くらきまきのしけ山つれ／＼といつを月日のあかりともみす

冬過て今は春といふ山の邊に眞木のはしのき雪ふらめやも

かつら

夫 しる人とて折しかつらの枝もかな月の都も行てみるへく

夫 舟とむる秋の入江の月影にひかりたえらすちるかつらかな

久かたの中なる秋の紅葉やしくるゝほとに色そふるらむ

夫 葵かる比にしなれは神山のもとあらのかつらかくれかもなし

夫 いつのよに誰たねうへて久かたの月にありてふかつら成らん

かうか

夫 おく山のかうかのはなも哀なりまたもむすはぬ身のためしとて

夫 うかりけるかうかの花のためしかな我思ふ事もならぬ身なれは

夫 わきもこにかくとはかりは告やらむかたみのかうか花咲にけり

夫 世々に絶ぬおほうち山のかたなしに古き合歡の梢をそみる

山深みいつよりねふと名をかへてかうかの木には人まとふらん

あふち

夫 郭公なく音きかむと尋つる北野のあふち花咲にけり

夫 みかきもりとのへにたてるあふちかけ下ふみなれし道そ忘ぬ

夫 夏ふかきなかへのあふち茂りあひて此里人そ夕すゝみする

道のへのかもの河原のふしおかみ古木のあふちかけもなれにき

夫 今日こそは五月の玉にぬきとめておりにあふちの花とみえけれ

かし

夫 きりたなす田上山のかしの木は宇治の川瀬になかれきにけり

夫 と山なるをかのかしはら吹なひきあれ行ころの風のさむけさ

木の葉たにふりもかへさぬしらかしの下行道をうつむこけかな

杣人のたつきのあとのしらかしは枝にもはにもしられやはする

しらかしの枝はをしなみ雪ふれとなれたる山は道もまよはす

くぬき

夫 たかせさすさほのかはらのくぬき原色つくみれは秋のくれかも

霜かれのはら野にましろふしくぬき世にかしけ行我身成けり

夫 さほ川の岸くたりなるわかくぬき猶しけれとやかりはやすらん

夫 里人のほたきる冬のふしくぬきおほ川のへのあれまくもおし

夫 春來てもはやまかすそのくぬきはらまた冬かれい色そ殘れる

つはき

見る度にあかぬ色かなあし引のかた山つはき今かさくらむ

常磐なるやみねのつはき八千代まて色かはらすと君そみるへく

日にみかく白玉つはきはかへせて久しきものと八千世まつらん

夫 いやましの八峯に茂るあを椿つら／＼物をおもふころ哉

玉椿つら／＼思ひほとくにはある身ともなしなき世ともなし

かしは

夫　よはひのみふるからなのゝもと柏もとの身はかり戀しきはなし
我宿の外面のかしは冬ふかみ霜かれくちてあるかひもなし
三笠山あとふみ絶てかしは木のめつらしからぬ森の木の本
夫　さほ山のならのかしは木またはへのもとつは茂み紅葉しにけり
夫　山風にならのはかしは音たかしすむみゝつくも聞やおとろく

ほなかしは

葉をひろみ岡邊にしたるほなかしは下には月のもる夜半もなし
ほなかしはちる木の本をふみ分てそよさらにとふ跡をみぬかな
なにそこのにしの軒端のほなかしは山のはまたて月そかくるゝ
なく露の情をみかくほなかしはふひなすゝむる紅葉とそみる
年をへて片枝くち行ほなかしは葉ひろしとてもかけそすくなき

なかめかしは

身にしめと吹ころほひの嵐かな秋の夕のなかめかしはに
もろくちる比そかなしき山本のなかめかしはのなかめ〳〵て
雲はれぬなかめかしはの下露はをやみなくこそ袖ぬらしけれ
夫　雨やまぬふるからをのゝ遠方になかめかしはもなにしおふらん
徒らになかめかしはの名にたてゝ頼むこととはけふもくらしつ

つゝし

水傳　みつゝてのいそまのつゝし咲しより螢のいさり火夜とやはみる
夫　夕日さす岡邊の松の下つゝしときは木かほに花さかりなり
日をそふるは山の道のつゝしはら下てるかけは花のいろかも
夫　まれに咲山のたかねの夕つゝし雲まのほしや光そふらん
夫　波かくるみほのうらへのしらつゝし何れを花とみてか手折らん

いはつゝし

岩つゝしいはぬをしらぬならひとて色に出ても誰かとかめん
夫　河峯の岩ねにねさすいはつゝしおもひいれともかくれなのよや
村雨にぬるともおらむいはつゝしせこかま袖の色もなつかし
かたきしにねさしのほする岩つゝしいつれを枝と花の咲らん
我庵の谷むかひなる岩つゝしいはれはとてもうとくやはみる

ひさき

夫　月影も清きかはらの河おろしにちりてひさきの下もくもらす
夫　ひさき生る庭の木陰の秋風に一こゑそゝくむら時雨かな
濱楸ひさしくみれはいたつらにころもことしも咲やちるらん
夫　ひさきおふるかた山かけのきもみちは時雨てたえぬ秋の色哉
ひさきちる霜夜の河へ吹風にきよくも月のすみわたる哉

くは

夫　山かつのそのふのくはのくはまゆの出やらぬ世は猶そかなしき
夫　古畑の桑のわかはのこきたれてこはいかにとよれのみなかるゝ
我妹子かこやのえひらのかすおほみあまたしめつる園の桑はら
里人の今もこくてふ桑はらや茂るともみぬ夏木立かな
夫　みのをはりさかひつゝきにうへなへてよむともつきし桑の幾本

はたつもり

夫　里人やわか葉つむらんはたつもりけとやまも今は春めきにけり
しくれぬにかさなる山のはたつもりはたつもり行罪そかなしき
今よりはこのめも春のはたつもり時きにけりと人や尋ん
夫　はたつもり積りし雪も消ぬれはしつかすさみにわかなつむらん
夫　れやいらぬとやまの奢のはたつもり葉にのみ出て人にしらるゝ

しきみ

夫　樒つむ竹のはなこのはかなきもまことの道にいらさらめやは
夫　あはれなる樒の花のちきりかなほとけのためと種やまきけん
夫　樒つむ時のまもなく山寺にわきて一度花たてまつる
夫　枝なから峯の樒のはなしけみころとはいはてつみにこそつめ
夫　あか水に樒の青葉きりうけてさゝけもたれはぬるゝ袖哉

あせみ

よしの川たきつ岩根の白妙にあせみの花も咲にけらしな
たきの上のあせみの花のあせ水になかれてくひよ罪のむくひを
いつまてと人をはこひん山のへのあせみの花も咲てちりぬる
夫　みまくさは心してかれ夏野なるしけみのあせみ枝ましるらし
神さふるいこまの山のあせみ花さも心なきさきところかな

山ちさ

あし引の山ちさのはな露かけてさける色これ我みはやさん
咲とたにたれかはしらむ白雲の晴せぬやまの山ちさの花
木かくれの日影もをそき山ちさは花のうへなる露そ久しき
とし暮るつま木にましる山ちさのたゝ一えたはうなひこかため
夜半にをく白露をしみ山ちさの花もやけさに風を待らん

ゆつる葉

夫　ゆつるはのときはの色もうつもれぬあしくま山に雪のふれゝは
夫　春ことに色もかはらぬゆつるはのゆつるときはも君かためとそ
これそこのはるをむかふるしるへとてゆつるはかさし歸る山人
夫　年毎になつとはすれとゆつるはのかひこそなけれ老のしはみは
夫　いやましにあしくま山はみ雪ふる峯のゆつるはいそきおらなん

かたかし

夫　妹かくむ寺ゐのうへのかたかしのはなさくほとに春そ成ぬる
夫　たれかみん身をおく山に年ふとも世にあふことのかたかしの花
夫　小車のもろわにかくるかたかしのいつれもつよき人こゝろかな
かつはまた岩にたとふるかたかしもつれなき人の心にそしる
人心なへておもへはかたかしのはなはひらくるときもありけり

つまゝ

夫　神さふるいそのつまゝのねをはへてふかくや人を下に忍はん
夫　よとゝもに波のゆふこそかけつらめ神さひたてる磯のつまゝに
年へたる磯のつまゝのしのひねもあらはれぬらむ波のゆきゝに
夫　いそのうへは心してゆけ眞砂ちやねはふつまゝに駒そつまつく
神さふるいそへのつまゝねを絶て君しとはねはいけりともなし

さなき

夫　おく山のひかけのさなき年ふりてさすかに花のさきにける哉
谷ふかき山のさなきの花さかり色にこふれとしる人もなし
哀とていつかは人のきてもみし山のさなきのねさしよなく〳〵
夫　あな山と名にこそたてれをのつから峯のさなきは花咲にけり
いさ行て我みはやさむおく山のさなきの花はしる人もなし

とり

夫　冬ふかみ太山やいたくあれぬらんわたる小鳥の里にむれたる
夫　夏草の野澤かくれのはぬけ鳥ありしにもあらす成我身哉
白山の雪のうちにもかけふかき松をたのみて鳥や鳴らん
夫　かたしきの衣手さむしいかはかり雪のみやまに鳥のなくらん
松のおのみねしつかなるあけほのにあふきて聞は佛法そうなく

はなちとり

このうちの名殘わするな放鳥心のまゝにあくかれぬとも

うかれ行我身のほとや放鳥ふはことたにも誰かおしまん

山ふかくいりもやられすはなち鳥猶このことをかけて思へは

このうちをおもひて出る放とりさらぬあたりの楠にそすむ

いさやいさふてぬ心のはなちとりはなちかけたる身の行衞哉

ひなとり

夏深みまたかりそめぬあはつ野のきゝすのひなの草かくれつゝ

春の野のありすのひなのはをわかみ思ひたてとも行ゑなのよや

人そうき雀のひなの手なれつゝふはしも身をははなれさるらん

をのつからまた片なきの雛鳥のゑまへかたさのよないかゝせん

春の野に尾羽もそろはぬ雛鳥のみにくけれはや君こさるらん

つる

菅の根のなかきはるへのかすむ日にうねのゝたつの聲そ長閑き

ここにこらる我身もしらすよるの鶴心のやみの音こそなかるに

芦鶴も澤へに年やつもるらむかけみなそこにふれる白雪

さしもこそよはひはなかきすな鶴のなと毛衣のあしにとつかぬ

やまきたのくさのとはりのあれまくに恨てよるは鶴そ鳴なる

かり

外面なる小田におりゐる鴈金のはなと聞えて今そ立なる

雲ゐとふ初鴈かれの淚もて秋の草木のいろかはり行

ふる郷のならの都のことつては空とふかりのたよりをそまつ

玉つさのたよりにあらねゝ絵のゑにかきやすき秋のかりかね

山風の木の葉ちらして吹なへに聲さへいたくなきわたる哉

かへるかり

かへるかりいましもいかにしたふらむならはぬ春の別ならぬに

かひもなきたのむの鴈の別かなしのふむかしにかへりやはする

歸るさなたれしたふとて鴈金のあかぬなこりの今朝の玉つさ

こしちにはかりのくるとや霞たつ春のあさけの空にみゆらん

年こしのみやこの空のなかたひにつはさたれてや鴈歸るらん

うくひす

あら玉の春はへぬれと鶯のなくねはかりそかはらさりける

鶯をきくたに春のよそなれは我身かひなき音をのみそなく

あらたまる春になるらし冬かれの野かみのかたに鶯そなく

いくはくの風のへたてに鶯のはなをはくゝむ春の梅か枝

我庵は山の木立のしけゝれはあささらすこそ鶯もなけ

ほとゝきす

今年こそまたて聞つれ郭公やよひのくれの雲のまよひに

我宿にかたらひきなく時鳥物おもふことはなれもかなしや

さ月山雲にはにほと郭公卯花月夜さやかにそなく

さしもあらはなにかかたらふ時鳥雲闇にうときよはの一聲

都人今もきたらは郭公このはつ音にはあはましものを

よふこ鳥

よふこ鳥また聞人やなかるらむふかきみやまの春の明ほの

なにしおふまたすしもあかし行人をこてふにゝたるよふこ鳥哉

人はこて夜や更ぬらむ呼子鳥よへとこたへすみゝなしの山

よふこ鳥よへはよひつく山彦をなにかいらへと人のきくらん

數ならぬ太山のおくのよふこ鳥よはれと人のこしはむかしか

しき

あかつきのしきのはねかきしけしとも老て夜ふかき寝覺にそ聞
霜かれの野田の草根にふすしきの何のかけにか身を（にイ）もかくさん
夜を寒みなかへのなたにふす鴫の羽かきあへすさやく霜哉
いかなれは朝程なき秋の日にはねかくしきのもゝはかくらん
いかにせん君かこぬ夜の明かたに門田のしきのもゝはかくなり

からす

夫 吹風に霜置きまよふみやまへに月夜からすの聲も寒けし
夫 月になくやもめからすの音に立て秋のきぬたそ霜にうつなる
山のへの梢の森のむらからすねくらあらそふ夕暮の聲
夫 今さらに里へな出そ山からすうときかたみに（には夫）わらはれぬへし
夫 月さえて山は梢のしつけきにうかれからすのよ（う夫）たゝ鳴らん

さき

夫 いつみ川あさせもしろく立さきのみのけみたるゝ風の寒けさ
朝またきそれかあらぬかさきたてるさむき渚によする白波
夫 入潮のひかたにきゐるみとさきを（のあ夫）いさりに出るあまかとやみん
夫 なかゐせは心してゐよあつさ弓やはせの川のさきの一むら
風のふくさきのみのけにたとふなる心よ我身いつちかもせん

はことり

夫 春されは友まとはせるはこ鳥のふたかみ山に朝な／＼なく
夫 夜はきてあくるかなしきはことりにいつ浦島にかよひそめけん
よるはきてあくれはかへる箱鳥のつらきならひにねをや鳴らん
何事なおもひ入てかはこ鳥のあくる朝けの音をや（ハイ）なくらん
夫 鳴（呼イ）わたるみむろの山の箱鳥はふた／＼とこそとひあかるなれ

かほとり

夕されはまほにもみえぬかほとりの聲もほのかにかすむのへ哉
忘られぬその面影はかほとりのこゑきくにたに音はなかれつゝ
我もさそおひにやつるゝ貌鳥（よとりイ）のみてはつかしき音はなかれぬる
ありとてもまたみもしらぬかほ鳥（よとりイ）のいとゝ霞の（にイ）空かくれぬる
春の野にきなくかほとりかほよしとみし人あらは戀やわたらむ（しなるしイ）

かさゝき

七夕の天の河瀬のはしをしもなとかさゝきのわたし初けん
よそにして戀わたるかな天の原雲ゐにたかきかさゝきのはし
天川またことさらにわたすらし秋のひとよのかさゝきのはし
夫 むは玉の夢のうきはしちかへて（つくイ）もまたかさゝきの渡すとやみん
鵲のつはさならふるはしつくりいかて雲ゐに渡し初けん

もす

夫 鵙のゐるふるえのはきも霜枯てあしたの原に秋そ暮行
夫 風わたるおはなかすゑにもす鳴て秋のさかりとみゆる野へ哉
もすのゐる野邊の草葉の末さ（むイ）はきはねもやすめす秋風そふく
見わたせは一村薄鵙なきてやゝかれ（にけイ）わたる野へのさひしさ
紅葉ちるはしのほすゑの秋風にゐところあれて鵙そ鳴なる

くゐな

夏の夜は程なく明る天の戸をまたて水鷄の猶たゝくらん
天の戸も猶や水鷄のたゝくらむさも明やすき夏の空哉
誰かまたたゝく水鷄にこたへせん我住宿はもる人そなき
何かその夜半の水鷄のたゝきこゑさりとて法のとし（ものイ）とや聞
眞木の戸をさしたる事のありかほにたゝく水鷄の人おとろかす

女房　前内大臣衣笠家良　寛元々年十一月廿一日始之
同二年三月廿五日詠之訖
前藤大納言　寛元々年十一月十三日始之
同二年二月廿四日詠之
九條入道三位　寛元々年二月六日始之
同二年六月廿七日詠之
前左京權大夫　寛元々年十一月廿四日始之
同二年正月十三日詠之
入道左大辨　寛元々年十二月廿六イ一日始之
同二年三月廿五日詠之

百首歌合　建仁元年　土御門院御宇

題

春　廿首　夏　十五首　秋　廿首

冬　十五首　祝　五首　戀　十五首

雜　十首

作者

左方

女房後鳥羽院

左大臣正二位藤原朝臣後京極攝政

前權僧正慈圓

從三位行權中納言藤原朝臣公繼德大寺野宮左大臣

參議正三位行左近衞權中將兼越前守藤原朝臣

公經

正三位行皇太后宮大夫藤原朝臣季能

宮內卿後鳥羽院女房

讃岐二條院女房賴政女

小侍從待宵

散位正四位下藤原朝臣隆信

散位正四位下藤原朝臣有家

散位從四位上藤原朝臣保季

正五位下行左近衞權少將藤原朝臣良平醍醐入道前太政大臣

從五位下行左近衞佐臣源朝臣具親

僧顯昭

右方

三宮

內大臣正二位兼右近衞大將皇太弟傅源朝臣

正二位行權大納言藤原朝臣忠良

從二位行權中納言藤原朝臣兼宗

從三位行右近衞權中將源朝臣通光

沙彌釋阿

俊成卿女

丹後

越前

正四位下行左近衞權少將兼安藝權介藤原朝臣

定家

正四位下行左近衞權中將源朝臣通具

從四位下行上總介臣藤原朝臣家隆

從五位上行左近衞權少將藤原朝臣雅經

沙彌寂蓮

從五位下行右馬助源朝臣家長

判者

權大納言忠良春一同二夏一同二秋二同三冬二同三戀二同三

內大臣

女房

季經入道

顯昭

釋阿春三同四夏三秋一秋四冬一祝一戀一雜一同二

左大臣

定家朝臣

師光入道

前權僧正

千五百番歌合卷第一　春一　判者忠良

春二十首

一番

左　勝　　　　　　　　　　　女　　　房

春たてはかはらぬ空そかはり行昨日の雲かけふの霞か

右　　　　　　　　　　　　　三　　　宮

いつしかと雲井に春や立ぬらん雪けなこめてかすむ空哉

左歌心詞めつらしくこそ侍れ右歌もなたらかには侍るな雲井と空とはおなし事にや侍らん以左爲勝

二番

左　勝　　　　　　　　　　　左　大　臣

定家卿なしなへてけさは霞のしきしまややまともろ人春な知らし

右　　　　　　　　　　　　　内　大　臣

夜なこめて竹にさえつる鶯の聲の色にや春のみとりは

右歌あしくも侍らねと左歌うるはしきさまなれは可爲勝

歟

三番

左　勝　　　　　　　　　　　前權僧正慈圓

雪のうちに春はきにけり吉野山雲とやいはん霞とやいはん

右　　　　　　　　　　　　　權大納言忠良

昨日まてさゆし嵐の音羽山かすむや春に逢坂の關

左歌去年とやいはんことしとやいはんといふ歌に心詞おとらぬさまにみえ侍り尤可爲勝

四番

左　持　　　　　　　　　　　權中納言公繼

ふるす出る鶯の音にしるき哉谷より春はたつにぞ有ける

右　　　　　　　　　　　　　權中納言兼宗

春きぬとたれに岩まの水なれはけさは氷のとけはしむらん

左右ともにことなる事なし可爲持

五番

左　　　　　　　　　　　　　參　議　公　經

杉の葉のかすむにしるしあふ坂や關の岩戸の春の曙

右　勝　　　　　　　　　　　右近權中將通光

今朝よりは雪けの雲の跡はれて緑にかへる春の初空

左の關の岩戸の春の曙すかたはなかしく聞ゆるな山立出るきりはらの駒といふ歌をおもへるにやそれは石門にはあらす岩のかとなりとも中にや又石門なるにてもいは戸といはん事いかゝはんへるへからん門と戸とはことなる物にこそ侍めれ初五文字もいたくたしかにや侍らん右も雪けの雲の跡はれてと侍たゝ雲はれてとあらまほしく聞え侍れとさしておほつかなき事なけれは勝侍らん

六番

左　　　　　　　　　　　　　大皇太后宮大夫季能

けさよりや澤への氷とけぬらん春風かよふかさゝきのこゑ

右　勝　　　　　　　　　　　釋　　　阿

八重霞八十嶋かけて立にけり千代のはしめの春の曙

左歌春風かよふかさゝきのこゑと侍るはもし東方朔傳に朔日風從東方來鵲順風而立是以知其東嚮鳴也といへる心にや右歌姿まさり侍らむ

七番

左　持　　宮内卿

いつしかと春は日影に雪消て聲たて初る庭の松風

右　　俊成女

出る日の光もしるし天つ空くもりなき世の春のはしめは

左珍しき狀には侍れと聲立初るとは言るいかにそ聞え侍にや右させる事無れと祝の心あれは何れを勝ると申難し

八番

左　持　　讃岐

雲井より春や立らんあまの戸をなしあけかたの霞そめぬる

右　　丹後

昨日まてこやもあらはに見えしかとけさそ難波の浦はかすめる

兩首の霞勝劣不分明歟持とすへし

九番

左　　小侍從

去年といふ昨日にけふはかはらぬをいかにしりてか鶯のなく

右　勝　　越前

いつしかと春のけしきをなかむれは霞にくもるあけほのゝ空

左去年といふとをけるすこし耳に立にや侍らん右めつらしき所なけれと難なくは侍へし

十番

左　持　　散位藤原朝臣隆信

あふさかや關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは

右　　藤原朝臣定家

春かすみ昨日を去年のしるしとや軒はの山も遠さかるらん

左歌させる難なく侍るにや右歌軒はの山も遠さかるらんといへる餘情過たるにやすかたはよろしく侍り可爲持歟

十一番

左　勝　　散位藤原朝臣有家

山のはの霞を分て出る日ものとかにめくる千代のはつ春

右　　左近衞權中將源通具

年なみのこゆれはやかて色そゝふ霞かゝれる末のまつ山

右歌色そゝふや耳にたち侍らん左可爲勝歟

十二番

左　　散位藤原朝臣保季

年くれて一夜にかはる春なれは霞もあへすあまのかこ山

右　勝　　上總介藤原朝臣家隆

新千載　足引の山のしら雪消もあへす昨日を去年とかすむ空かな

左歌一夜にかはる春なれはといへるはよろしきをあまのかこ山はいつくにてもありぬへくや侍らん右歌昨日はこそとかすむ空哉と侍すこしまさるにや

十三番

左　持　　右近衞權少將藤原朝臣具平

春日山松のうれより出る日は千とせの春のはしめ成けり

右　　　左近衛権少将藤原朝臣雅経

昨日かも年はくれにしあまの戸のあくるまちける春かすみかな

左松のうれふけなとことゝゝに聞ゆるに末の句や事もなく侍らん右もことなる事なければ持たるへし

十四番

左　持　　　左兵衛佐源朝臣具親

年の内の春とは空に見よしのゝ山もかすみて雪はふりつゝ

右　　　寂　蓮

巻向のあなしの檜原春くれは霞をかけて山かつらせり

左右両首ともに得古賢之風勝劣難決仍又持とす

十五番

左　　　僧　顕　昭

夜の程に雪ふる年を引かへて空も心も春めきにけり

右　勝　　　右馬助源家長

こほり吹山風さむみはふる猶また打出ぬ氷のしら浪

左歌めつらしき所なきにや右歌下句なとよろしきなるへし

十六番

左　勝　　　女　房

冬とはみえ行あふ坂の影かえに霞をしのきあは雪そふる

右　　　内　大　臣

岩そゝくたるひのうへにさす日影打とけにける春のはつ空

左よろしく侍り勝とすへし

十七番

左　勝　　　左　大　臣

おちたきつ岩間うち出る泊瀬川はつ春風や氷とく覧

右　　　忠　良　卿

けふよりや木のめも春の山風にさくらか枝も花を待らん

左いはま打出るはつせ川よろしく聞え侍り右なをろかなる詞にこそ侍りけれさくらか枝句なくゝ見え侍り尤可為負

十八番

左　勝　　　前　権　僧　正

春風のむすふ水を吹とけはさらにやけふは袖もひちなん

右　　　兼　宗　卿

昔かため千代の日の松を引うへて千代のかけをも頼みつるかな

右歌させる難なきうへに祝の心も侍と左歌さらにやけふはと侍猶心ある様なりまさるにこそ侍めれ

十九番

左　持　　　公　継　卿

九重にけふたてそむる氷こそ風にもとけぬためし成けれ

右　　　通　光　卿

いく千代のためしまてとか年ことに子日の松を引かさぬらん

左もことなることなく右の子日の松もさよの衣なとや覚侍らん持なとにて侍へきにや

二十番

左　　　公　経　卿

あは雪のふるからをのゝもとかしは本見し空にかへる春かな

右　勝　　　釋　阿

鶯も千代をや契年をへてかはらぬ聲に春をつくらん
左のもとかしはいといひおほせられても聞えさるにや右
勝侍なん

廿一番

左　季能卿

一とせを思ひくらしてまとろめは夢よりあくる空のはつ春

右勝　俊成卿女

明やらぬ谷の戸すゝゝる春風に先さそはるゝ鶯のこゑ
左歌空のはつ春あしかるへきにはあられとつゝきいかに
そや聞え侍るにや右歌先さそはるゝといへる優に侍勝と
すへし

廿二番

左　宮内卿

ゆく末の梢をこめよ姫こ松けふこそよそに嶺のしら雲

右勝　丹後

麓まてかすみにけりな深山には松の葉しろき雪もけなくに
左梢をこめよ姫小松となさて末にみねのしら雲といへる
へたてたる樣にや侍らん右かつへきにや

廿三番

左勝　讃岐

春風をさらに寒けに吹かへて峯の霞そ雲かくれゆく

右　越前

春きぬといふはかりにはかすめ共また雪ふかしみよしのゝ山
左心ことはともに優に侍へし右ことなる事なけれは左勝
侍へし

廿四番

左　小侍従

たゝかすむ空とやけさを思はまし谷の鶯音せさりせは

右勝　定家朝臣

春といへは花やはをそきよしの山きえあへぬ雪のかすむ曙
左初五文字さゝよくも侍らぬにや右宜く見え侍

廿五番

左持　隆信朝臣

春きては人もとふへきみよし野に雪よりふかき朝霞かな

右　通具朝臣

たれに又けふと契を志賀の浦花のさゝ浪春風そふく
右歌花のさゝ浪春風そふくと侍れとも心えす侍り是にも
し今日不知誰計會と申詩の心にや如何樣にもおほつかな
き樣に侍らん左歌めつらしき樣にもなきなるへし持なと
にや

廿六番

左勝　有家朝臣

春風の立田の川やまさるらん三むろのきしの雪の下水

右　家隆朝臣

春たちてけふ三日月の山のはに霞そめたる夕くれの空
右も無難は侍れと左立田の川の水のにこれるといふ歌思
出られてよろしく見え侍り可爲勝

廿七番

左　保季朝臣

氷せし嵐を春に吹かへて昨日はきかぬ谷のした水

右勝　雅経

氷とくおきの春風吹ぬらし汀にかへる志賀の浦なみ

左歌昨日はきかさりしとやいはまほしく聞ゆらん右歌下句なとつねの事なれと指難なけれはまさり侍らん

廿八番

左　良平

今朝もなを雪けの雲にまかふ哉いつれ霞とみよしのゝ山

右勝　寂蓮

春きてもなを雪さゆる山風のふもとになれは氷とくなり

左いつれ霞とみよしのゝ山詞たらぬ様にや侍らん右ふもとになれは氷とく也といへる心をかしく侍り勝とすへし

廿九番

左勝　具親

いつしかとかすみの衣立田山うらめつらしきはるの明ほの

右　家長

春風のおのへの雪を吹からに音信そむる松のはつこゑ

うらめつらしき春の曙勝侍らん

三十番

左勝　顕昭

ひめこ松ひくまのゝへに子日して手ことに千代をかさしつる哉

右　三宮

けふも猶雪ふる松に音信て聲うちかすむ春の初風

左勝へきにや侍らん

三十一番

左勝　女房

かつらきやたかまの山に雪消てさえし嵐は春のはつ風

右　忠良卿

春はまたあさかの沼のうす氷消あへぬうへに淡雪そふる

淺香の沼の氷高間の山の雪に及へからす侍り仍以左爲勝

三十二番

左勝　左大臣

よし野山雪ふるさともしかすかに槇のはしのき春はきて吹

右　雅宗卿

たちわたる霞も春はあはれ也秋風ふかぬ荻のやけはら

右霞も春はあはれ也といへるよはく聞ゆるにや左槇のはしのき春風そ吹よろしく侍り可爲勝

三十三番

左勝　前権僧正

春霞たゝるは都擬も猶山のおくには雪のふるらむ

右　通光卿

たえ〳〵に去年の名殘とちる雪をしはしもみせぬ春霞哉

右雪をたえ〳〵にふるといはん事やいかゝ侍へからん野中のし水なとの心ちし侍らんしはしもみせぬも遠山の殘雪なとはさも侍なん左まさるにや侍らん

三十四番

左　公継卿

春の日の霞のうちにくれぬれはなかしとも又おほえさりけり

右　勝　　釋　　阿

春きぬとみかきか原はかすめ共猶雲さゆるみよしのゝ山

左歌なかしともまたと侍またの字や無用きこえ侍らん右
猶雲さゆる尤可爲勝

三十五番

左　　公　經　卿

白妙の袖にみとりなうつしもて雪ふるのへに若菜つむ比

右　勝　　俊　成　卿　女

昨日まてとちしつらゝの池水にいつ春風の涙な吹らん

右優にはへり

三十六番

左　勝　　季　能　卿

うちなひき所もわかす立春な何とへたつる霞成らん

右　　丹　　後

鶯の泪のこほりとけしより打出そむる谷川の水

右涙の氷とけしよりといひて打出そむると侍るかけあは
すやまた上下の句のはしめも同し文字也左なにとへたつ
る霞なるらんといへるめつらしからねと難なけれはすこ
しまさるへくや

三十七番

左　持　　宮　内　卿

くもる日ないつちうらなくかこたまし霞の衣春雨の空

右　　越　　前

涙路より春や立らん朝ほらけ霞そこゆるすゑの松山

左歌下句はよろしく侍るないつちうらなくかこたましと
いへるやいかにそ聞侍らん右末の松山かすみこゆるなと
つねの事也上句もあまりやすらかにや侍らん可爲持歟

三十八番

左　勝　　讃　　岐

春の雪は猶ふる草に晴やらて道ふみ分ぬ竹の下折

右　　定　家　朝　臣

山のはに霞はかりはいそけ共春にはなれぬ空の色かな

左の深草の雪おかしく思ひやられ侍り右いそけ共といへ
る優にも聞えさるにや左まさり侍らん

三十九番

左　持　　小　侍　從

雲つゝくとなちの里の夕霞たえま／＼にかへるかりかね

右　　通　具　朝　臣

雪のうちに涙とけ行鶯は我音に鳴て春やしるらん

左雲つゝくとなきて又たえま／＼と侍はしめなはり事
たかひてや右此心ふるくおほくよめり持とすへし

四十番

左　　隆　信　朝　臣

君かへん千代のためしに引そめし野への小松も數そひにけり

右　勝　　家　隆　朝　臣

山里は木の間の日影猶さえて春とも見えぬ庭の霜哉

左はいはひの心なれ共右すかた宜侍り勝とすへくや侍ら

ん

四十一番

左　持　　　　　　　有家朝臣

けふこそは花の都にくれ竹のよくらさためよ春の鶯

右　　　　　　　　　雅經

新後拾遺
晴やらぬ雲に雪けの春風に霞おまきるみよしのゝ山

左右おなしほとにや侍らん

四十二番

左　　　　　　　　　保季朝臣

ねのひする野へより色そかはりけるときはの松の春の一しほ

右　勝　　　　　　　寂蓮

春はなをかすみもはてぬけしき哉吉野の山の松の村消

左野へより色そかはりけるといへるいかゝと聞え侍にや右よしのゝ山の松の村きえは優に侍なり霞もはてぬけしき哉と侍るを不被感幾侍れと猶右勝侍らん

四十三番

左　持　　　　　　　良平

みよし野の梢な花となかむれはたかねはいまた冬の白雪

右　　　　　　　　　家長

から衣袖ふりはへて雪消ぬすそのゝ原の若なをそつむ

左右ともに無殊難可爲持歟

四十四番

左　持　　　　　　　具親

志賀のうらや氷によとむ冬の浪のいくかた過て立歸らん

右　　　　　　　　　三宮

秋たにもほのめく空の夕つくよかすめる春はそれかともなし

左氷によとむといへる山川の心ちし侍れとさゝ浪のしかの大わたよとむともなと萬葉にもよめれは難にに及はさるへし右も勝へきほとには見え侍らねは持にて侍るへし

四十五番

左　持　　　　　　　顯昭

春霞けさはけふりにまかふらしあふしもみえす鹽かまのうら

右　　　　　　　　　内大臣

昨日まてつらゝのここに見し根芹けさは雪けの水にこそつめ

左右同科勝劣難決

四十六番

左　勝　　　　　　　女房

白妙の衣春雨かきくもりふる野のわかな今やつむらん

右　　　　　　　　　兼宗卿

山里は聞ゝる人もあらしとやまつの聲たらす谷のうくひす

右の歌つゝれの事也左勝とすへし

四十七番

左　勝　　　　　　　左大臣

時こもあれ春の七日のはつねのひ若菜つむ野に松な引哉

右　　　　　　　　　通光卿

待わひし軒はの梅に風過はそれに聞へきうくひすのこゑ

それに聞へき鶯のこゑ優にしも聞えさるにやわかなつむ野の子日まさり侍らん

四十八番

左持 前権僧正

あは雪の花なき里にうれしきは木のめも春の夕暮の空

右 釋阿

春毎に千日の松の千代は皆我君か世のためし成けり

左木のめも春の雪ふれはと云歌の心おかしくみえ侍り右祝の心也持とすへし

四十九番

左 公継

ときは山しら雲かゝる梢こそはるかにみゆる雪のした草

右勝 俊成卿女

春日野の雪まを分て萌ぬれは草のはつかに春めきにけり

左心になかしきな春の歌と見ゆるところや侍らさらん右難なく侍り勝とすへし

五十番

左 公経卿

鶯の氷れる涙とけにけりまたふる年の雪は消あへて

右勝 丹後

雪とちし軒のたるひのとけ行ないつしか春の雨かとそみる

左歌とくと消るとはおなし事にこそ侍めれ右勝侍へし

五十一番

左勝 季能卿

小松原雪まを分てひく人の手にあらはるゝ千世のはつ春ま

右 越前

音羽山松に明行横雲の名残をみれはかすむ一むら

右歌姿よろしきを松に明行と侍こそ松にしもやはよのあくへきと覺侍れ左難なくは勝もし侍れかし

五十二番

左 宮内卿

霞しく河そひ柳涙かけてねにあらはるゝ春のうくひす

右勝 定家朝臣

山里は谷の鶯打はふき雪よりいつる去年のふる聲

両首の鶯ねにあらはるゝ春の鶯といひ雪より出る去年のふるこゑといへるともに優に侍を左霞しくとをけるや河そひ柳にいとつゝきても聞えす侍らん右勝へくや

五十三番

左持 讃岐

深山いてゝ花を遅しと思ひけり松の雪にそ鶯はなく

右 通具朝臣

芹つみしみかきかはらはそれなから昔をよそにぬらす袖かな

左詞つゝかぬ様に聞え侍れと右昔をよそにぬらす袖かなと侍もさにこそとは聞えなからおほつかなくや侍らん持なとにや

五十四番

左持 小侍従

春といへはなへて霞やわたるらん雲なき空のおほろ月よは

右 家隆朝臣

春の日のあさゝはなかゝらす氷たれふみ分てはせりつむ覽

左右おなし心に侍

五十五番

左　持　隆信朝臣

雪のうちにめくむ若菜は埋れてとふひの野守みるかひそなき

右　雅経

わかなつむゆかりにみれはむさし野の草はみなから春雨の空

左飛火の野守出てみよと云歌の心とは聞え侍れとみるかひそなきといへるや野守の無下に無面目様に聞なされ侍らん右の草はみなから春雨の空又いとも心得す侍れは持とすへし

五十六番

左　持　有家朝臣

春ことにとふ火の野守ふりぬらん雪まの若を年をつみつゝ

右　寂蓮

誰か又春のしるしと契けん三輪の山もとうくひすのこゑ

左ことなる事なけれと無指難右はをかしきをみわの山もとのとやいはまほしく聞覧猶持とすへし

五十七番

左　勝　保季朝臣

春くれはもとよりたえぬ煙さへ霞とみゆる塩かまの浦

右　家長

暮はつる浪路の末は八重霞かすみを出る春のよの月

右八重霞かすみを出る春のよの月誠にかきなりて聞え侍り左もとよりたえぬ煙さへといへる宜侍にや

五十八番

左　持　良平

くもる夜の空をよそにても[illegible]月や木の下陰に殘るあは雪

右　三宮

津國のなにはの春を見わたせは霞をよする奥つ白浪

兩首歌勝劣不分明歟

五十九番

左　具親

都にてなにかへるともうらみけんはつねに出る谷のうくひす

右　勝　内大臣

春風になひくのみかは鶯のきゐるにたえぬ青柳のいと

左はつねに出るといへる宜聞えねは以右爲勝畢

六十番

左　勝　顯昭

はる〳〵と飛火かはらを見わたせは霞とゝもにひはり立也

右　忠良卿

行末を千日の松に引かけて君か千年を手にまかせつる

左歌殊なる事なしといへ共右にはまさり侍るへし

六十一番

左　勝　女房

手折けん軒はの梅を尋ぬれは花もえならぬ袖のかそする

右　通光卿

庭の面に殘る跡まて木のまもる月かけうつす雪の村消

右歌心はあり詞つゝき宜しからす聞え侍り左姿宜く侍り

可爲勝

六十二番

左　　左大臣

鶯のはね白妙にふる雪ならちはらふにも梅のかそする

右勝　　釋阿

袖のかに梅はかはらすかほりけり春に昔の春ならねとも

左右ともによろしく侍にとりて右は下句いますこしまさるにや侍らん

六十三番

左勝　　前權僧正

春はとし霞かゝれる梢より花そなそきと鶯のなく

右　　俊成卿女

山里は猶ふる雪の消かてにまたき梢に花そ散ける

左歌心おかしく侍り右歌もすかたはよろしく侍れと猶左まさり侍らん

六十四番

左勝　　公繼卿

日かけみぬみ山かくれになかれきて雪けの水の又こほりぬる

右　　丹後

昔よりけふまてたえぬ子日にも君を松とや引殘しけん

右も難なくは侍れと左雪けの水の又こほりぬるといへる心よろしきにたり勝とすへし

六十五番

左勝　　公經卿

新千載 春風なたきつ岩根にせきかれて霞におつる花の白浪

右　　越前

うす氷春日うらゝにとけぬらし山田のさはにしつそゑくつむ

左歌宜く侍り右歌ことなる事なけれは以左可爲勝

六十六番

左持　　季能卿

玉はゝきこれも千年のためしとて初ねの松に引そふる哉

右　　定家朝臣

續拾遺 消なくに又やみ山をうつむらんわかなつむのにあは雪そふる

左ことなる事なきか右姿よろしきを又やみ山をうつむらんわかなつむ野もあは雪そふるなといへる野邊よりも都には雪のふかゝるへき樣に聞ゆるにや持に侍へし

六十七番

左　　宮内卿

けふわかなつむてふ事は一とせにのへふみならすはしめ成けり

右勝　　通具朝臣

新古今 梅花たか袖ふれし匂ひそと春や昔の月にとはゝや

左初五文字こととしく侍にや右勝はへらん

六十八番

左持　　讃岐

梅花匂ひはよそにちらすとも色をは風のおしまゝしかは

右　　家隆朝臣

子日する松に千とせや契けん同し二葉のゝへの若草

左のおしまゝしかは聞よくも侍らぬにや右下句はよろし

きたわか草のちとせを契らん事おほつかなけれは持とす

へゝ

六十九番

左　小侍従

ふみなれし昔の跡をたとる哉和歌の浦にも霞へたてゝ

右勝　雅経

雪さむきまやのゝきはの梅かえに春を待こも鶯の聲

左無指事右すかた宜く侍り勝とすへし

七十番

左勝　隆信朝臣

春たちて都のわかなつむまてに鶯の音を松のしら雪

右　寂蓮

梅花咲ぬる色に埋れて雪かとみれは袖ににほふなり

鶯の音を松のしら雪まさるにや

七十一番

左勝　有家朝臣

昨日けふまたみよしのは雪ふりて春とも見えぬ嶺の雲哉

右　家長

雪のうちはつちにつくまて見えしかと立枝にかへる松のむら立

立えにかへるいかゝ侍らん左可爲勝

七十二番

左勝　保季朝臣

夜をこめていく浪路をか過ぬ（つイ）らん跡よりかすむ春の明ほの

右　三宮

（拾千載）ふる巣をは都の春にすみかへて花になれ行谷のうくひす

跡よりかすむといへる宜く侍り

七十三番

左　良平

聲の色にたくふ花たになかりけり鶯きゐる松の村立

右勝　内大臣

詠れは見えみ見えすみ春霞立ゐるいへに若なつむ人

左たくふ花たにといへるたにの字優ならすや聞え侍らん

右可爲勝

七十四番

左勝　具親

白雲のたな引のへの小松原空にしめゆふ君か千代かな

右　忠良卿

雪消ぬ野への通路跡みえてわれよりさきに若なつみけり

空にしめゆふ君か千代かなと侍宜きうへ祝ひ心也尤可爲

勝

七十五番

左持　顯昭

さきやらぬ花のねくらをまつ程やゆふくれ竹にきゐる鶯

右　兼宗卿

鶯のなくねの色に聞ゆるは春しりそむるしるし成けり

兩首ともに無指難又無指事歟

七十六番

左　勝　女房

春風のさそふかのへの梅かえになきてうつろふ鶯のこゑ

右　釋阿

春はなを柳か枝もかきりなしみとりのいとに露のしら玉

左右ともによろしく侍るにとりて左なきてうつろふと侍
猶まさり侍にや

七十七番

左　左大臣

妻戀のきゝすなく野のしたわらひしたにもえても折をしる哉

右　勝　俊成卿女

新古今　梅花あかぬ色香もむかしにて同し形見の春のよの月

左も歌から宜く侍れと右おなしかたみの春のよの月尤よ
ろし勝とすへし

七十八番

左　勝　前權僧正

春雨のふるからをのゝあつさ弓をりていさゝは若なつみてん

右　丹後

梅かえにおもひよそへてなかむれは雪さへかほる春の曙

左勝侍らん

七十九番

左　持　公繼卿

梅かえの花のにほひをゆかりとやきゐる鶯妻もとむらん

右　越前

打はらふ雪たにやまぬ春日野に袖ふりはへて若なをそつむ

右無殊事にや左歌萬葉に春なれは妻もとむとて鶯のとよ
める心にやあなかちに優にしも聞え侍られは持とすへし

八十番

左　公經卿

軒ちかき梅の匂をかたしき(てイ)の袖にそふかき色はみえける

右　勝　定家朝臣

谷風の吹あけにさける梅花あまつ空なる雲や匂はん

左いとも心えす侍り右天つ空なる雲や匂はんと侍ことに
宜く侍にや

八十一番

左　季能卿

春ことに野へに心をやる人も若なにそへて年はつみけり

右　勝　通具朝臣

梅かえを折つる袖にかけみれはかさへなつかし春のよの月

兩首いく程の勝負なく侍れと右折つる袖にかけみれはと
いへるいさゝかまさされるにや

八十二番

左　宮内卿

けさよりはかたまつこともなかりけり梅さく宿に鶯の聲

右　勝　　家隆朝臣

霞たつかたのゝ御野の狩衣はらふともなき春のあは雪

左かた侍ことふるくもよめること葉なれと不被庶幾也右爲勝

八十三番

左　　讚岐

石上ふる野のなのと聞しかと若なは年におひかはりけり

右　勝　　雅經

春もきてたちよるはかりありしより霞の袖の梅のうつりか

右歌下句は宜きな春もきてと侍るもの字耳にたつにや侍らん左又させる事なけれは猶すかた宜きにつきて右勝侍へきにや

八十四番

左　　小侍從

今そしる宮の鶯さえつるもひとり聞ける人のこゝろを

右　勝　　寂蓮

花ならて又も心はうつりけり谷の鶯なくやむめかえ

左上陽人の昔の心おもひやれるよりは右谷の鶯なくや梅かえといへるはめつらしきさまにや

八十五番

左　勝　　隆信朝臣

春日山松のみとりはほのみえて消あへぬ雪に春風そ吹

右　　家長

うめの花なつさふ人の袖ことにありあへたるは匂ひ成けり

左無指難侍り右ありあへたるはといへる俗にちかくや侍らん左勝とすへし

八十六番

左　持　　有家朝臣

まかへつゝなかめそくらす花なのみ松の梢の雪の村きえ

右　　三宮

みな人の花を尋て出ぬれは春の宿もるうくひすのこゑ

松の梢の雪の村消すかたおかしく侍へし春のやともる鶯のこゑ又宜しけれは持にや侍らん

八十七番

左　持　　保季朝臣

けふまても梢は冬の色なから去年にはかはる雪の下草

右　　内大臣

くれはとりあやになかめの成行かみとりの空にあそふいとゆふ

左雪のした草は去年にかはらん事もしりかたくやとは聞ゆれとむすほゝれたる雪の下草ともよめれは不可及難歟すかたはよろしく侍り右歌も無指難侍れはこれも可爲持歟

八十八番

左　勝　　良平

色よりも身にしむものは梅花袂に匂ふ風のうつりか

右　　忠良卿

いくかへりなれぬる春と思へ共なを梅かえにうくひすのこゑ

左風のうつりかといひはてたるいかにそや聞え侍にやさ

れと右おもへともといへるよはくきこゆ劣に侍へし

八十九番

左　勝　　　具　親

谷ふかき雪のふるすにおもなれて花に物うき鶯のこゑ

右　　　兼　宗　卿

おほつかな軒はの梅をかほらせて槇のいたやに誰なかむらん

左歌あしからす聞え侍り右歌必まきの板やとしもおもひやるへからすや聞え侍らん左勝に侍へし

九十番

左　持　　　顯　昭

さく花をうらやましとや思ひけん春の梢にとまる白雪

右　　　通　光　卿

山ふかきまかきの雪も消ぬまに都の人の春をとひける

右心は侍へしうらやましとや思ひけんといへる程そおもはまほしく聞え侍右春を問けるといひはてたる又いかゝと見ゆれは持とすへし

九十一番

左　持　　　女　房

池水のみ草にをける夜の霜消あへぬうへに春雨そふる

右　　　俊　成　卿　女

鶯のねくらにならす梅かえにをのか羽風も身にやしむらん

左右ともに優美にして勝負難決可爲持歟

九十二番

左　勝　　　左　大　臣

野（[illegible]）も山もおなしみとりにそめてけり霞よりふる木のめ春雨

右　　　丹　後

遠近もひとつかすみのうちなから音にそしろき志賀のうら浪

左の野山右のをちこちよろしく侍にとりて左の下句まさり侍らん

九十三番

左　持　　　前　權　僧　正

よふこ鳥うれしくも有かをちこちのたつきにまよふ山の夕暮

右　　　越　前

ふるすより春の嵐やわたるらん袖にこゑちる谷のうくひす

左右同科歟

九十四番

左　　　公　繼　卿

都にて心やはるゝ雪のうちに冬こもりせし谷の鶯

右　勝　　　定　家　朝　臣

里わかぬ月をは色にまかへつゝよものあらしに匂ふ梅かえ

右歌よろしく侍り尤可爲勝

九十五番

左　持　　　公　經　卿

たれもとへ梅か（のイ）香匂ふ木の下に光ほのめくいさよひの月

右　　　通　具　朝　臣

そこともしられぬ梅はかほりきて垣ねの木に鶯そなく

左の誰もとへ右のそこともしも同し程の事にや

九十六番

左　持　　季能卿

あさみとりかすみこむれと鹽風のなとにそしろき磯の松原

右　　宗隆朝臣

梓弓なして春雨ふる綿のみかきかはらそうすみとりなる

左の磯の松原いつこにても侍へけれと猶其所なさゝまほしくや侍らん右のみかきかはらもさせることなけれは持とすへし

九十七番

左　勝　　宮内卿

玉葉 梅かえの花のありかなしられとも袖こそにほへ春の山風

右　　雅經

かすむより雲路にのみそ聲はする澤へのたつものへのひはりも

右こゑはするといへる優にも聞えさるにや左袖こそにほへといへるまさるへくや侍らん

九十八番

左　　讃岐

續古今 かへり行こしちの雪やさむからん春はかすみの衣かりかれ

右　勝　　寂蓮

尋つる花のこすゑをなかむれはうつろふ雲に春の山風

左歌春は霞の衣かりかれといへるも宜く侍れと右歌うつろふ雲に春の山風又優に聞ゆ右勝へきにや

九十九番

左　持　　小侍從

身こそかく年ふりぬれと鶯のさえつる春はあらたまりけり

右　　家長

春風のふくにつけてそ思ひ出るつのくむ荻の行末の秋

左ふるき歌の心をも詞をもとりてよむは常のことなれと是百千鳥を鶯になせる計にや珍しけなくこそ右行末の秋ならは思ひやるとそ有へき持なとにや

百番

左　持　　隆信朝臣

春きては霞の衣いくかさね袖しのうらの涙やたつらん

右　　三宮

かた岡の草はを雪やそめつらん消行まゝにあさみとりなる

左歌秀句限なく侍り右又無指難持にて侍れかし

百一番

左　勝　　有家朝臣

山里は嵐にかほるまとの梅霞にむせふ谷のうくひす

右　　内大臣

春霞たてるやいつく花をまつ心よりこそたちはしめけれ

右もことなる難なく侍れと左霞にむせふ谷の鶯といへるよろしく侍にや

百二番

左　勝　　保季朝臣

霞たつ山のはまてはおほろにてのほれは月に春風そふく

右　　忠良卿

さきぬなりかほるにしるし梅花色こそみえね春の山風

左山のはまてはおほろにてといへる宜く侍り右いま見侍

れはやみなともなくて色こそみえねといへる心えさるへ
しうたかひなきまけにこそ侍めれ

百三番

左　持　　　　　　　　　　　　　　　　　顕　　　　平

石上ふる野のをのゝ雨の中にぬれても萠るはるの若草

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　兼　　宗　　卿

吹風にかたよりしけり鶯のかさやぬふへき青柳のいと

左右同科に侍へし

百四番

左　勝　　　　　　　　　　　　　　　　　具　　　　親

もゑ出る木のめ春雨けふも猶ふるのゝ若なまたはつか也

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　道　　光　　卿

立よらぬ袖たにかほる梅花それともみえぬ雪もあやなし

右雪もあやなしと侍るやみはあやなし梅花といへるには

にすや侍らん左まさり侍にや

百五番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　顕　　　　昭

軒ちかきわか木の梅の初花にことしそ我も春を知ぬる

右　勝　　　　　　　　　　　　　　　　　釋　　　　阿

なかめわひ誰かはとはん山里の花待ころの春雨のうち

左ことしそ我もといへるよりは右の春雨の中勝侍らん

百六番

左　勝　　　　　　　　　　　　　　　　　女　　　　房

ふかき夜のあはれはしるや春の月しく物もなき有明の空

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丹　　　　後

行衛なき雲路にきゆる雁金の聲(はイ)さへかすむ春の明ほの

右歌も宜しくは侍に聲さへかすむなと常の事なるへし左

しく物もなき有明の空勝侍へし

百七番

左　勝　　　　　　　　　　　　　　　　　左(にイ)　大　　臣

わたのはら雲にかりかね涙に舟かすみてかへる春のゆふくれ

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　越　　　　前

梅かえのあたら匂ひに袖ふれてひとりかたしくよはをかさぬる

右歌結句心ゆかす侍はや左歌霞てかへる春の夕くれよろ

しく侍り

百八番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　前　權　僧　正

春ことにかさして年そつもりぬるわかおひかくせ梅の花かさ

右　勝　　　　　　　　　　　　　　　　　定　家　朝　臣

春やあらぬ宿をかことに立出れといつくも同しかすむ夜の月

左もをかしき樣には聞え侍れと右心姿優に侍勝とすへし

百九番

左　持　　　　　　　　　　　　　　　　　公　　繼　　卿

みよしのゝかすかのもりの梅花とる榊はに香をましへけり

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　通　具　朝　臣

さびしさのしけさそまさるあさちふの庭は春雨ふるにつけても

左かをましへけりと侍聞よからすや右庭は春雨降につけ

てもといへるまた宜しからすめえ侍れは可爲持歟

百十番

左　公経卿

梅花袖に匂ひの風こえて夢の枕にさゆるうくひす

右勝　家隆朝臣

百千鳥たか袖ふれしふる郷の軒はの梅のかなしたふらん

左歌鶯はよるはなかさるにや此夢の枕は暁にこそは侍らぬ又夢の中にきゝえにやおほつかなゝ侍り右おほつかなき事なけれは勝侍らん

百十一番

左　季能卿

かさこしの嶺には春やたゝさらんふもとの空に霞へたてゝ

右勝　雅経

新古今
白雲のたえまになひく青柳のかつらき山に春風そふく

右歌すかたよろしく侍り

百十二番

左勝　宮内卿

うすくこきのへのみとりの若草に跡まてみゆる雪のむら消

右　寂蓮

谷の戸をいてゝも雲に入にけり花に木つたふ野への鶯

左心ことはおなしく侍り可爲勝

百十三番

左　讃岐

わきもこか衣春雨ふるからにすそのゝ草そ色まさりける

右勝　家長

おのつから跡みし雪は消はてゝ草たつ庭に春雨そふる

左歌我せこか衣春雨ふることにのへのみとりそ色まさりけるといふ歌にいとたかひたる所なきにや右歌草たつ庭優にも聞えれとふる歌にあらねは勝とも申侍らん

百十四番

左持　小侍従

年つめは我は老けりわかなこそ見しそのかみのかたみなりけれ

右　三宮

梅花あかぬ色かないくしほか心にそめて春をへぬらん

左歌わかなは年へまさりけんそのかみもおいてこそ侍らめ右歌又かやうの心詞常の事也持とすへし

百十五番

左　隆信朝臣

うへしより春はと待しかひありて梅のはつえに鶯のこゑ

右勝　内大臣

春雨にこぬれかくれて鶯の聲うちしめる夕くれのそら

左梅のはつえと侍初花なといへるよりは聞つかぬ様にや侍らん右勝侍にこそ

百十六番

左勝　有家朝臣

新古今
青柳の糸に玉ぬく白露のしらすいくよの春かへぬらん

右　忠良卿

春霞たつた川原の河かせにこすへなみよる岸の青柳

しらすいくよのといへるよろしく聞ゆ可爲勝侍り

百十七番

左　勝　　保季朝臣

ゆきとけて山陰さゆるふるすより聲のみ春の谷の鶯

右　　兼宗卿

年をへてさかぬためしはなけれ共猶またるゝは櫻成けり

左歌すかた優に侍り右歌ことあたらしくや侍らん

百十八番

左　持　　良平

霞しく春のみとりに成ぬれは今一しほのときは木のもり

右　　通光卿

明ほのゝ哀はこれにこりそめつ軒はの梅に月をのこして

左常磐木のもり松のみとりなといへるにはおとりてや聞え侍らん右のあはれはこれにしりそめつといへるいつれもすくれても侍らぬにや

百十九番

左　持　　具親

續拾遺 春風や梅の匂ひをさそふらん行ゑさためぬ鶯のこゑ

右　　釋阿

新古今 いくとせの春に心をつくしきぬ哀とおもへ御よしのゝ花

右あはれとおもへみよしのゝ花かきりなく見え侍に左行ゑさためぬ鶯の聲又心詞優に侍り勝負さためかたし

百廿番

左　　顯昭

梅か香をよはの嵐のさそはすはねやのいたまをいかてもらまし

右　勝　　俊成卿女

風かよふね覺の袖の花の香にかほる枕の春のよの夢

左右の花のかとゝもによろしくは侍れと右すかたおかしく侍り勝とすへし

百廿一番

左　勝　　女房

よひのまはほのめく月のかすかにかすみもはてぬ春の大空

右　　越前

さき初る花は心をいさなへはうたて霞のたちかくすらむ

右花は心をいさなへはといへるかつへからす左の勝判にも及さるへし

百廿二番

左　勝　　左大臣

津國の難波の春の朝ほらけ霞も浪もはてをしらはや

右　　定家朝臣

あつまやのこやの假寢のかやむしろしく／＼ほさぬ春雨そふる

左なにはの春の朝ほらけことに宜く見え侍り右しく／＼ほさぬ負侍へし

百廿三番

左　勝　　前權僧正

風雅 春の心のとけしとてもなにかたせんたえて櫻のなき世なりせは

右　　通具朝臣

いつとなき霞の空は縁にて袖になかめの春雨そふる

左右共興様なり右姿よろしきをなかめの春雨とつゝける

やいかゝと覺侍らん左まさり侍にや

百廿四番

左　持　　公　繼　卿

梅花たちのふもとに咲にけりにほふにしるしかさこしの山

右　　家　隆　朝　臣

思ふよりいかにせよとて梅花うたて匂を袖にかすらん

同等に侍へし

百廿五番

左　勝　　公　經　卿

なかむれはやみはあやなし故郷に匂ひて過る梅の下風

右　　雅　經

立かへりみてもみまくの花盛さそはぬ風の打匂ひつつ

右歌みてもみまくの花盛といへる見まくのほしきとある
へきにや左歌故郷無異詮侍れと勝侍なん

百廿六番

左　勝　　季　能　卿

鶯はさても聞けり春くれは花なき宿のいさゝむら竹

右　　寂　蓮

春くれは猶に花の涙こえてよしのゝおくも末の松やま

左花なきやとは見所すくなくやと覺侍り右花のなみこす
事は常の事なるをよしのゝおくも末の松山といへる宜く
侍にすゑの二所侍り左勝へきにや

百廿七番

左　勝　　宮　内　卿

二月や雪ちる風に枝さえてさき出る花や立とまるらん

右　　家　長

春雨のふるの山田をきてみれは鴫のふしとにかはへなく也

左は心はせおかしく侍に花の立とまるらん事そいかゝと
覺侍れと右鴫と蛙同宿なるよりはさき出る花見所まさり
侍なん

百廿八番

左　　讃　岐

春の池の汀の柳うちはへてなひくしつえになをしそ立なる

右　勝　　宮

うへをきし若木の梅のはつ花に匂ひそめぬる閨のうち哉

左歌なしにはかに出来る様にや右少まさるへくや侍らん

百廿九番

左　　小　侍　従

色あれはそれとはみてん梅花枝に殘りの雪消すとも

右　勝　　内　大　臣

かきつらね歸るこしちに日はくれぬ雲のいつくに宿をかりかね

左有色易分殘雪底といふ詩の心おかしくこそみえ侍れ右
歸る越路に日はくれぬと侍る又よろしきうへに初五文字
なとまさり侍らん

百三十番

左　勝　　隆　信　朝　臣

今はわれよはひも老ぬ鶯のかさにぬふてふ梅をかさゝむ

右　　忠　良　卿

山のはの雲より花にうつりきてなかめくらせはかすむ月かけ

左歌鶯のかさにぬふといふ梅の花といふ歌をおもへるなるへしかれはおりてかさゝん老かくろやとこそいひつれ此歌はたゝ老人のかならす梅をかさす事のあらん樣にや聞え侍らん右雲より花なといへる思わきかたき樣に聞ゆれはいかにも左勝侍へし

百三十一番

左　勝　　有家朝臣

津のくにやなにはのはるの色もみなひとつにかすむ曙の空

右　　兼宗卿

おもかけにこその櫻をさかせてそ花まつ程はなくさめにする

右下句心すくなく聞え侍り左勝へきにや侍らん

百三十二番

左　持　　保季朝臣

をちの里かよはぬ風を恨ても梅かゝ思ふなかめはかりそ

右　　通光卿

打なひく柳のいとのわきて又いかなる風にむすほゝるらむ

兩首の梅香柳糸同等にや

百三十三番

左　　良平

かりかねのかへる名殘をなかむれは心もこしの空まてそ行

右　勝　　釋阿

續拾遺 白妙にゆふかけてけり榊はに櫻さきそふ天のかく山

櫻さきそふ天のかく山岩戸明けん昔思ひやられておかしく侍勝侍へし

百三十四番

左　持　　具親

消やらぬ雪よりめくむ若草の露しり初る春雨の空

右　　俊成卿女

つれ〳〵のまさるなかめは徒に春の物とてふれは成けり

右伊勢物語の歌とも思出られてすかた宜く侍り左も心おかしきを空といへると此歌にとりて無要侍れと持なとにや

百三十五番

左　　顕昭

風ふかぬ君か御代とはしりなから心となひく青柳のいと

右　勝　　丹後

かへりこん秋をたのむのかりたにも鳴てそ春は立わかるなる

左吹風枝をならさすとこそいひならはしたれすへて風ふかす侍らん事いかゝ右歌さまよろしきなるへし

百三十六番

左　　女房

月よゝし夜よしと誰に告やらん花あたらしき春の古郷

右　勝　　定家朝臣

待わひぬ心つくしの春霞花のいさよふ山のはのそら

左花あたらしき春の古郷おかしくこそ侍れ右心こもりて愚意難及侍れとすかたよろしけれは勝とも申侍らん

百三十七番

左持　左大臣

さらしなやおば捨山のうす霞かすめる月に秋そこもれる

右　通具朝臣

尋入心のはてなみよしのゝ山よりふかく花やしるらん

左なはすて山のうす霞に秋のこもらん心おかしく侍り右よろしくはみゆるをちかくかやうの心きゝ侍し樣に覺侍れとさのみはゝかりあふへからさるにや可爲持也

百三十八番

左　前權僧正

櫻花またみぬさきもみよしのゝ山のかひある嶺の白雲

右勝　家隆朝臣

月は猶かすみのしたにこほれとも汀に歸る志賀のうら波

霞のしたにこほれとも汀といへる宜く侍り可爲勝

百三十九番

左　公繼卿

春のうちに梅さくそのゝ玉柳匂をうつせ風のたよりに

右勝　雅經

山たかみ雲井の櫻くもとみてやすらふ程に風や吹らん

左の梅さくそのは柳か枝にといふ歌の櫻を思はぬなるへし右雲井のさくらくもとみてといへるよろし

百四十番

左　公經卿

かすみ行尾上の鐘のうちつけに花のおりまつをはつせの山

右勝　寂蓮

ゆきとまる所もあらし木のもとに過てそ花はみるへかりける

左うちつけに花のおり侍といへるよりは右すきてそ花はといへるまさりて聞ゆるにや侍らん

百四十一番

左　季能卿

春雨のふるからをのなみ渡せはわか葉さしそふもと柏哉

右勝　家長

匂ひさへ花の鏡にうつるらしむすへは水のなつかしき哉

右むすへは水のなといへるよろしきにや勝侍へし

百四十二番

左　宮内卿

雪まわけまたうらわかきみとり哉草のはつかに春はなれとも

右勝　三宮

梅かえの花のねくらはあれにけり櫻にうつる鶯のこゑ

左も下句なとあしくは侍られと右さくらにうつる鶯の聲勝り侍らん

百四十三番

左　讃岐

もゝしきや大宮人の玉かつらかけてそなひく青柳のいと

右勝　内大臣

春雨の心ほそくもふる郷は人くといとふ鳥のみそなく

人くといとふ鳥のみそなくと侍ることに心ほそく思ひやられ侍り勝に侍へし

百四十四番

左勝　　小侍従
かつみても散んなけきを思ふまに花ゆへ身をもくたく比哉
右　　忠良卿
風かほる雪のみふかきよしの山雲とは花のそらめ成けり
左歌心詞常の事成へし右も珍しき様にも侍らねは左猶花
ゆへ身をもなといへる宜きに似たり勝に侍へし
百四十五番
左　　隆信朝臣
梅花ちり行ほとそしられぬる吹くる風のうすき匂ひに
右勝　　兼宗卿
あたら夜の月と花とのなかめよりいとゝ身にしむ春の曙
左うすき匂よろしくもきこえさるにや右春の明ほの優に
侍り可爲勝
百四十六番
左　　有家朝臣
小松原今一しほに色みえてをしほの山も春めきにけり
右勝　　通光卿
名にたかき梢の花の色やさは大内山のみねのしら雲
右歌色やさはといへる程そいかにそや聞え侍れと大内山
のみねの白雲をしほの山の小松原には立まさるへくや侍
らん
百四十七番
左持　　保季朝臣
歸雁そなたの雪に思ひ出よ花の梢にこゝろとまらは
右　　釋阿
たとへてもいはんかたなし山櫻霞にかほる春のあけほの
右歌すかたよろしくみえ侍り左もちからいれたるさまな
り可爲持
百四十八番
左　　良平
新千載　またれつる花成けりな山櫻霞のうへに見ゆる白雲
右勝　　俊成卿女
あかなくにかへる雲井に春雨のふるは涙か雁そなくなる
左花なりけりなといへるあなかちに優にも聞えぬにや右
下旬なと宜く侍り勝とすへし
百四十九番
左持　　具親
すはの海や冬の名殘のうす氷消すはありともたのむへきかは
右　　丹後
おく山の雲の梢もはれにけり都の櫻いまやさくらん
左すはの海の氷右おく山の雪の梢とり〳〵に見え侍れは
勝負難定歟
百五十番
左　　顯昭
よしの山みやこなからそ入にけるおもかけにたつ花のたよりに
右勝　　越前
日をへつゝ霞の末を詠れは雲に成行小泊瀬の山
左花を思へる心ふかきをよしの山へとやいはまほしく聞

ゆらん右か様の心常の事なれとさせる難はなきなるへし
勝もし侍らん

千五百番歌合巻第三　春三　判者釋阿

百五十一番

左　勝　　　　女　房

みよしのゝよしのゝ山の花盛くもより下の春のしら雲

右　　　　通　具　朝　臣

山櫻あかぬ旅ねの露分て手折たもとにあり明の月

左歌雲より下の春のしら雲まことにめつらしくありかたくこそみえ侍れ右手折袂に有明の月といへる姿えんに侍るを木のもとの旅ねの夜のうちに猶手おらむ事や花のためいかゝと覺侍れはなを左の春の白雲猶及侍にや仍以左爲勝

百五十二番

左　勝　　　　左　大　臣

續後撰
山櫻今やさくらんかけろふのもゆる春へにふれるあら雪

右　　　　家　隆　朝　臣

玉柳春の袖にきく時はみとりの空にうくひすの聲

左かけろふのとなきもゆる春へなといへる姿おかしく侍るを右みとりの空に鶯の聲といへる心もめつらしく侍を柳櫻の歌ならへるにとりて猶花の歌まさるへくや侍らんとて以左勝と申侍へし

百五十三番

左　持　　前権僧正

香をたにと思ひし花の霞より色をも途るはるの山かせ

右　　雅経

谷風や山も霞のこまことに又打出る花のしらなみ

左右両首左は頁少將花の色は霞にこめて見せすともといへる歌をおもひ右は源當純かうち出る浪やといへる心をひけりともに古今歌を本歌とせるをかしく見え侍り持とすへくや

百五十四番

左　勝　　公継卿

はかなくそあさゐる雲にまかへつる（けるイ）花は匂ひの有けるものを

右　　寂蓮

花はみな枝に殘らす散にけりたのみかほる春の山かせ

左歌下句の心や花の事少事あたら數聞え侍れと解ゐる雲になといへるわたりよろしく見え侍り右歌上句は見所すくなくみえ侍るを末句も心は優に侍をたのみ詞も荒涼にや左は句の上下の始の字そとかむる時も侍れとさまてをもき難にはあらさるへし左の勝に侍るへし

百五十五番

左　勝　　公経卿

（下葉）先たちてたれみよしのゝ山櫻たらぬしおりの跡付てけり

右　　家長

永日も花みる比は暮やすく程なき夜半そ明しかれける

此右歌日のなかく夜のみしかな事はかりなる樣には侍れと花みるゆへに暮やすき心なれはあしからすきこえ侍るを左たれみよしのゝなといへる詞つかひおかしく侍り以左爲勝

百五十六番

左　　季能卿

花みんと思ひたつよりかよひきて心に匂ふ春の山かせ

右　勝　　三宮

時しあれは雨にあらそふ櫻花つゐに開ぬるみよしのゝ山

左歌上句のおもひたつ程そすこしゝそほひて聞え侍れと心に匂ふは優に侍にや右歌櫻のささやうなこしかたき事なる樣に侍れと赤人か歌にも春雨にあらそひかねてなとよみて侍れに右歌まさり侍らん

百五十七番

左　勝　　宮内卿

雲ならぬ花とは誰か三笠山かすめる空に雪はふりつゝ

右　　内大臣

春草をとひたつきゝす妻こめにけふなやきそと鳴にや有覽

左花とはたれか三笠山なといへる姿よろしく侍るへし右は彼つまもこもれり我もこもれりといへる歌の心なかしく侍るを左歌末句なと宜侍にやまさると申へくや侍らん

百五十八番

左　勝　　讃岐

鶯のたるへのみかは花の香に人をもさそへやとのはる風

右　　忠良卿

（風雅）みねしらむ梢の空に影おちて花の雲間に有明の月

左歌ことなるとかなく優に侍へし右歌花の雲まに有明の月はおかしく侍るを上句やすこしこと〳〵しく侍らんかかる姿ひとつのやうには侍れと始に嶺しらむとなき影おちてなと猶いかにそや見え侍にや無爲なるに付て左勝へく侍らん

百五十九番

左　持　小侍従

花をみて思ふ心のまゝならはちるにとまりてかくは歎（なかめイ）かし

右　兼宗卿

よしの山花とは誰かしらさらんたちなまかへそ峰のしら雲

左右共に殊なるとかなく優に侍るへし持と申へくや

百六十番

左　隆信朝臣

あさみとりいとよりかくる玉柳ぬく白露の名にこそ有けれ

右　勝　通光卿

あたにやはふもとの庵になかむへき花より出る嶺の月かけ

左歌彼遍昭いとよりかけて白露をといへる歌をとれる心殘すくなくや侍らん右歌花より出る嶺の月かけ誠にあたにはなかめかたく侍へし右まさり侍らん

百六十一番

左　持　有家朝臣

春雨のふる野のをさゝよゝをへてさらに緑の色まさりけり

右　釋阿

君か代に春のさくらもみける身を谷にくちぬと何思ひけん

左歌春雨のふるの、小篠といへる詞つゝき宜こそみえ侍れ右歌にことなる事なき述懐に侍うへに愚老か歌に侍りけりたまたま判者の人数にまかりあたれる例によりて勝負を付すや侍へからん

百六十二番

左　保季朝臣

おも影を春の匂ひに先たてゝ枝にしられぬ花をみる哉

右　勝　俊成卿女

すみれ草（さくイ）野を分てしも旅れせし露しく袖のかたみはかりは

左面かけに花の姿を先立てといへる歌を見し心ちし侍れと撰集なとにいらぬ歌はさりあふへきにあられと詞のなき所かはらさらはめつらしからす見え侍にや右露しく袖といへる宜侍にやまさると可申哉

百六十三番

左　持　良平

白雲のかゝる高ねを始にて空より匂ふ山さくらかな

右　丹後

なかめやる花はいつれそ白雲のたつたの山のあけほのゝそら

此両首の歌左は心姿をかくしく右は姿詞いひしれり持にてや侍へからん

百六十四番

左　持　具親

いたつらに霞に夜半は更にけり山のは遠く出る月かけ

右　　　　越　　前

櫻花あかぬ色香をことしたに風にまかする春の山姫

左歌霞や雲よりもあつく侍らんとみえ侍れと心ありては侍へし右歌ことしもいかゝとおほへ侍れと春の山姫はなるむやうに侍なんともに心有てみえ侍れは又持と申へくや

百六十五番

左　　　　顯　　昭

さきぬとて尋てみれは白雲のまかふも花のなさけならすや

右　勝　　　　定　家　朝　臣

櫻花さきぬやいまた白雲のはるかにかほる小泊瀨のやま

兩方の白雲左は上句の詞あまりにたしかに聞え侍うへになさけの詞もよせなくては殊こひれかふへからすや右ははるかにかほるをはつせの山宜や侍らん勝とすへし

百六十六番

左　勝　　　　女　　房

新千載 かりかへる嶺の霞のはれすのみ恨つきせぬはるのよの月

右　　　　家　隆　朝　臣

春はまたそなたともなくとふかりの花に匂へる夕くれのこゑ

左歌鴈かへるといへるより姿心始終妖艶に見え侍り右歌もはなに匂へる夕暮の聲といへる姿宜侍をそなたともなくといへるや鴻鴈春は北に向とこそは申て侍れとおほえ侍りいかゝ猶以左可爲勝

百六十七番

左　勝　　　　左　大　臣

たれをけふまつとはなしに山かけや花の雫に立そぬれぬる

右　　　　雅　　經

山風の吹ぬるからに音羽川せき入れぬ花も瀧の白波

左は萬葉の山のしつくに我立ぬれぬといへる歌の心を取て花のしつくに立そぬれぬるといへる心いみしく艷にみえ侍を右又人の心の見えもするかなといへる歌をおもへるおかしからさるにはあらす侍れと猶中古の歌は萬葉の心に難及からへし仍以左爲勝

百六十八番

左　勝　　　　前　權　僧　正

ほりうへてみるはうれしき花の木のうつろふにこそ習侘ぬれ

右　　　　寂　　蓮

志賀の浦に花のさゝ波こき分て釣するあまや袖匂ふらん

左歌素性法師うつろふ色に人ならひけりといへる歌の心をうつろふにこそと侍いとおかしくみえ侍り右歌は末見えて我おもひやるならはよかの花そのよかの山越なとの花をそ思へきをあまの釣する袖をしもおもへるおもひかけすや侍らん尤左勝侍らん

百六十九番

左　勝　　　　公　繼　卿

いかにまつもおしむも花ゆへは人のこころをみよし野の山

右　　　　家　　長

足曳の山鳥の尾の長日にあかても花を獨かもみる

左歌いかはかりとなける初の五文字やすゑの心にいとゝしもあひかなひても覺侍られと人の心をみよしのゝ山とはよろしく侍にや右はこと／＼しきさまの風躰にみえ侍れとさすかに殊なる事侍らぬうへに上下の句のはしめの字たらさ料にあらされと目にたつ様に侍めり左勝へきにこそ侍らめ

百七十番

左　勝　　公経卿

新千載
尋入かすみもふかき花の香をさそひて出る山下風のかせ

右　　三宮

尋つる花にかはらぬ色なからおくれぬものは嶺のしら雲

兩首歌尋入尋つるいくはくの勝負は侍られと左は心おかしく右は末句姿引すかりてよろしくはみえ侍を心少誠ならぬやうにや申侍らん左勝と可申や侍らん

百七十一番

左　持　　季能卿

山櫻かつさきそむる梢こそ友まつ雪をみしこゝちすれ

右　　内大臣

むめも梅我身もわか身宿もやと春や昔のとのみ詠て

左歌心おかしきさまには侍るへし右は彼月やあらぬといへる歌の心とはみえ侍を梅も梅わか身も我身なといへる姿やすこし如何こそやみえ侍れと末句の心あはれなるやうにもみえ侍れはなすらへて持にや侍へからん

百七十二番

左　　宮内卿

花も雪も色はかはらし歸鴈都の梢こしのしら山

右　勝　　忠良卿

風雅
花や雪かすみやはふり時しらぬふしの高根にさゆる春風

左右歌左は花も雪もとなき都の梢こしの白山といひ右は花や雪霞や煙といへる姿ともに相似てはみえれと左は心すくなくや侍らん右は下句なと宜見え侍りまさるにや侍らん

百七十三番

左　勝　　讃岐

新勅撰
さかぬまは花とみよとやみよしのゝ山のしら雪消かてにする

右　　雅家卿

くれぬ共志はしなつけそはつせ山花みるほとの入相のかね

左歌よし野の山の雪心ありてみえ侍り右歌は泊瀬の寺の鐘志はしなつけそといへる心とり／＼には侍を猶山のしら雪消かてにするといへる心宜くや侍らんまさると申へくや

百七十四番

左　持　　小侍従

つく／＼と花に向ていさゝらは散なん後のおもかけにせん

右　　通光卿

なにと此さてもとまらぬ花ゆへに恨なれたる春の山風

左は花に向ていさゝらはといひ右山風をなにと此といへる心ともにさる歌の心なるへし持にや侍へからん

百七十五番

左 持　隆信朝臣

尋入はなはそれとも白雲のへたつとみれはかほる山かせ

右　釋阿

今はわれよしのゝ山に身を捨ん春より後を問人もかな

左歌花にそれとも白雲のなといへる心よろしからさるにはあらさるへし右歌はあつこの老比丘か歌に侍けり佗たる述懐の躰に侍を此合手猶子のことさに侍りたま〳〵判者の人數に罷いれる事を例によせて勝負を決し申さすや侍へからん

百七十六番

左 持　有家朝臣

鴈金の雲の衣のはる風にかへる空をや猶うらみまし

右　俊成卿女

新千載 故郷と成にしかとも櫻さくはるやむかしのしかのはなその

此右歌春や昔の志かの花園とゝへる心よろしくみえ侍を左歌又雲の衣の春風になといへる彼雲衣范外羇中贈といへる詩なと思出られておかしくも侍れは持なとや可申侍らん

百七十七番

左 持　保季朝臣

木のもとに花の[illegible]夢にもおなし嶺のしら雲

右　丹後

夕月よ光は花にやとせとも櫻かもとはおほろ成けり

左は夢にもおな嶺しの白雲といへる末句右は光に花にやとせともといへる上句ともに殊よろしくみえ侍を先の歌はとくうたゝれしたるやうにみえ侍り後の歌は櫻か本別に花の外なる樣に聞え侍にや共に善否相交心ちし侍れは又是も持にてや侍へからん

百七十八番

左 勝　[illegible]平

久かたの雲のうへなる櫻花空にしらるゝ雪とこそみれ

右　越前

村きえの雪かと見しや花ならんひとつに成ぬ嶺のしら雲

左歌空にしらるゝ雪心おかしくみえ侍り右歌ひとつに成ぬ峯の白雲といへる姿又よろ敷は見え侍を左は雲の上なるといへるやさしく聞え侍らんとに見え侍れと猶雲のうへの花勝と申へくや

百七十九番

左 持　具親

芳の山はなの盛に成にけり故郷にほふ春のあけほの

右　定家朝臣

雲のなみ霞の浪にまかへつゝ芳野の花のおくをみぬかな

左古郷にほふ春の曙彼よし野の山の近けれはといへる等の歌し心花もさそにほふらんと艶に侍へ右芳野の花の奥をみぬ哉といへるふかくいかなる樣にはみえ侍を雲の浪霞の波といへる殊浪のよせなくや侍らん仍ふかさにもまさるには難及や侍らんとて持にてや侍へ

かへん

百八十番

左　　　　　　　　　　　顯　昭

遠近の花みるほとに行やらてかへさは暮ぬ志賀のやま越

右　勝　　　　　　　　　通　具　朝　臣

新古今
石上ふる野の櫻たれうへて春はわすれぬかたみなるらん

左志賀山越に取てはをちこちしゐて右へからすやかへさくれん事は又うたかひなかるへし花みるほとになといへる事は無下にたゝ詞にやあらん右心詞とかなくみえ侍り勝とすへし

百八十一番

左　勝　　　　　　　　　女　房

歸鴈霞のうちに聲はして物うらめしのはるのけしきや

右　　　　　　　　　　　雅　經

雲もうし嵐もつらし山櫻まかふとすればちりはてにけり

左歌霞のうちに歸鴈景色殊見る樣にこそ覺侍れ右歌雲もうし嵐もつらしといひて末句又むかしにやきこえ侍らん左歌尤勝に侍へし

百八十二番

左　勝　　　　　　　　　左　大　臣

春風は花と松とに吹かへてちるもちらぬも身にしまつやは

右　　　　　　　　　　　寂　蓮

さひしさも今一しほの色そへて軒の忍にはるさめそふる

左花と松との春風散もちらぬも身にしめる心殊勝に見え侍り右忍の春雨今一しほのさひしさゝせる興なくや侍らん左可爲勝

百八十三番

左　勝　　　　　　　　　前　權　僧　正

春風のいたりいたらぬきは[太々イ]そなき咲るかちればさかさるもさく

右　　　　　　　　　　　家　長

山風に花の波たつみよしのゝよし野の春や鹽かまのうら

左歌さけるさかさる花のみゆらんといへる歌の心おかしく侍を右歌山風に花の浪たゝん斗に鹽かまの浦を俄に出來たる樣にや侍らん左勝とすへし

百八十四番

左　　　　　　　　　　　公　繼　卿

いつれとも花をわきえぬ心さへ霞にましる春の山かな

右　勝　　　　　　　　　三　宮

よしの山みねの櫻のさきしより花によかれぬ旅ねをそする

左は心の霞にましり侍らんはよろしく侍るを花をはいかにわきえぬかとや聞え侍らん右はみねのさくらの開しより花によかれさらんたひね花を思心可然聞え侍り右まさり侍らん

百八十五番

左　　　　　　　　　　　公　經　卿

千葉
ほの〳〵と花の横雲明初て櫻にあらむみよしのゝ山

右　勝　　　　　　　　　内　大　臣

花ちらぬ社となさはやねきことをさのみ開けんやしろ尋て

左歌花のよこ雲櫻にまらむなとこと〳〵しき風體に侍へし右歌はれきことをさのみ聞けん社こそといへる古今の俳諧歌の心をとりて花ちらぬ森となさはやといへる心おかしく侍り勝と可申哉

百八十六番

左　　　　　　　　　季　能　卿

花そみる道の芝草ふみ分て芳野の宮のはるの曙

右　勝　　　　　　　忠　良　卿

花か雲かゑそゑら浪の梢より落くる色やみよしのゝ瀧

左歌初五字花そみるとなける心いとも心えす侍を右のえそしら波の梢よりも浪の梢とつゝけるこそ如何みえ侍れと道の芝草ふみ分んよりは落くる色やみよしのゝ瀧末句宜侍にや以右勝とすへし

百八十七番

左　勝　　　　　　　宮　内　卿

花故にまれに宿とふ暮に又人くといとふ鳥の聲しも

右　　　　　　　　　丹　宗　婦

いとせめて花に心をつくせとや春の山風吹はしめけん

左歌鳥のこゑしもといへる彼伊勢物語の戀とはいふと問し我しもといへる覺ておかしからさるにはあらさるにや右歌いとせめてとなける五字末句の心にいと叶てしも侍らぬにやと覺侍うへに左猶心こもれるにや侍らんすこしはまさるへくや

百八十八番

左　持　　　　　　　讃　　岐

あたなりとかつみよしのゝ山櫻恨ても猶たつね入かな

右　　　　　　　　　通　光　卿

山里はさらてもまれに問人を思ひたえぬる春雨のころ

左はかつみよしのゝ山さくらといへる寀宜見え侍を右おもひたえぬる春雨の比といへるも取々におかしく侍り持とすへし

百八十九番

左　勝　　　　　　　小　侍　從

風ふけは晴ぬる雲とみる程に麓につもる花のしら雪

右　　　　　　　　　釋　　阿

ゑら山や雪猶ふかき越路には歸鴈にやはるをしるらん

左晴ぬる雲とみる程にといひ麓に積る花の白雲といへる宜くこそみえ侍めれ右歌ゑら山やとなける五文字をつよろしからす聞え侍り左可爲勝

百九十番

左　持　　　　　　　隆　信　朝　臣

年をへて同し櫻の木のもとにこりすもつくす我こゝろかな

右　　　　　　　　　俊　成　卿　女

山路をは送し月を憑にてそこともしらぬ花に暮しつ

左末句こりすもつくすなといへる姿よろしからさらにはあらす同櫻の木の本そいつくにとすこしおほつかなく聞え侍右そこともしらぬいつれとや山路ゝ櫻とは見え侍りたゝ持にて侍かし

百九十一番

左　持　　　　　　　　　　　　有　家　朝　臣

はつせ山ひはらの霞まかふらし思ひしよりもさける花かな

右　　　　　　　　　　　　　　丹　　　後

玉ほこの行てにかゝる山櫻我ひとりやはおらて過へき

此右歌ゆくてにかゝる山櫻ことはりも可然姿も宜みえ侍るを左歌檜原の霞心定又たかくや侍らんなそらへて持にてや又侍へからん

百九十二番

左　　　　　　　　　　　　　　保　季　朝　臣

道すから花ちりくれはこしの山すゝ分る袖に風かほる也

右　勝　　　　　　　　　　　　越　　　前

みよしのゝ外山を花のへたつ霞雲にまつ吹風の音そな

左のすゝわくる袖大峯となる山ふしなとを思へるにやと聞え侍らん右は雲にまつふくといへるよろしくや侍らんとて右の勝と申侍へし

百九十三番

左　持　　　　　　　　　　　　良　　　平

芳野山分けきてのちになかむれは霞をこむる花の白雲

右　　　　　　　　　　　　　　定　家　朝　臣

しるしらぬわかぬ霞の絕間よりあるしあらはにかほる花哉

左歌下句によろしく侍を分きて後になかむれはやすこし慥に聞え侍らん右歌しるしらぬわかぬ霞のなといへるは優に侍をあるしあらはにといへるしるてよろしくもみえ侍らす仍勝負不分明侍にや持なとにてや侍へからん

百九十四番

左　　　　　　　　　　　　　　具　　　親

花にあかぬよしのゝおくの篠枕いとはぬ月の雲かくれ哉

右　勝　　　　　　　　　　　　通　具　朝　臣

行かへり花こそあたに思ふらめ浮世の人かしかのやま越

左さゝ枕なとはふんに侍る末句の心こそいとも心えす侍れ右のいく代の人か志賀の山越よろしく侍にや勝と申へくや

百九十五番

左　勝　　　　　　　　　　　　顯　　　昭

思事なくてみるへき花盛心みたるゝはるの山かせ

右　　　　　　　　　　　　　　家　隆　朝　臣

［新後ニ］散なれし梢にかへらし山櫻春しはそむる花をたつねん

右歌新樹を哀んといへる心おかしく侍を左歌心よろしく侍にやまさると申へくや侍らん

百九十六番

左　勝　　　　　　　　　　　　女　　　房

よしの山雲にうつろふ花の色を緑の空にはる風そふく

右　　　　　　　　　　　　　　寂　　　蓮

あれまさる駒のけしきもたえさ故野と成にける里のあたりは

左歌雲にうつろふ花の色を緑のそらに春風そ吹といへる心詞中々申は事淺く成侍ぬへし右歌は彼庭もまかきもといへる里をおもひて駒をさへはなてるにや如何にも

雲にうつろふ花のあたり中ならふへきにあらす左尤可爲
勝

百九十七番

左　持　　　左大臣

あし鴨の下の氷は解にしなうは毛（もイ）に花の雪そふりしく

右　　　家長

吹風のふかても花はとまられとなのれとちるは庭にこそちれ

左花のちりける春の池水鳥なと題ならんやうにやみえ侍
らん歌の姿におかしく見え侍り右吹風のふかても花はと
いひなのれとちるは庭にこそちれといへる心云おほせさ
るにはあらす侍にや但花をなのれといへるは花いとをし
くや侍へからん勝負申かたくや侍らん

百九十八番

左　勝　　前權僧正

人しれぬ花を霞に隷れはなのれよそなる三輪の山杉

右　　　三宮

古郷の庭の櫻に風ふけは軒の忍に雪かゝりつゝ

左歌花を霞に隷れ心を三輪の杉にこもれるにや侍らん右
歌古郷おほつかなく侍うへにつゝの詞たらすや侍らん左
心まさり侍らん

百九十九番

左　持　　公繼卿

あかなくに花の下ふし日數へぬかへりて宿や旅心ちせん

右　　　内大臣

春ことに花もなけきや積らん散を恨ぬ人しなければ

左かへりて宿やといへる花をおもへる心おかしく侍へし
右花もなけきやといへる人の心も思ひしられて宜聞え侍
りともに心可然持にや侍へからん

二百番

左　勝　　公繼卿

嵐吹花の下陰ふみ分ておほろ月よにとふ人もなし

右　　　忠良卿

みよしのゝ月なたのむの鴈金や花さく春もよると鳴らん

左歌ふみ分てやすこしいかにそ聞え侍れと下句ゑんに見
え侍へし右歌月をたのむのかりかねやとは如何侍にか老
の心難及侍にや左まさるへきにこそ侍めれ

二百一番

左　　　季能卿

玉つさにあらぬ霞を何と又つはさにかけてかへるかりかね

右　勝　　兼宗卿

あやなしや惜にとまらぬ花ゆへに幾度風を恨きぬらん

左なにと又なといへる姿おかしきさまには侍を末句こと
たらぬ樣にや聞え侍らん右事理雖に無科みえ侍りまさる
にや侍らん

二百二番

左　　　宮内卿

わきも子か葛城山の花さかりはなれぬ色の嶺の白雲

右　勝　　通光卿

かへるらん行衛もしらぬ曙にたいおいかりの雲ふかき聲

左歌はなれぬ色とはいかに侍にや右歌明ほの〻たのむの
雁の雲ふかき聲心こもりて聞え侍りまさるへくや侍らん

二百三番

左 勝 讃岐

思ねの花を夢路に尋きて嵐にかへるうたゝねの床

右 釋阿

御狩せし片野の冬やつらからん春の山路にきゝす鳴也

左花を夢路にといひ嵐にかへるうたゝねの床いとえんに
こそみえ侍れ右只百首の中の地歌に侍り尤させる事なし
左事外の勝に侍へし

二百四番

左 勝 小侍従

おしからもとまらぬ春をおしむとて花も心や空に散けん

右 俊成卿女

嶺こしに散くる花をさそへにて恨もあへぬはその山かせ

左歌花も心やといへるおかしくみえ侍り右歌末句はよろ
しく侍るめるを初の五字やことくしく侍らん左は終の
句けんそ覧にてあらまほしく聞え侍れと左まさり侍らん

二百五番

左 持 隆信朝臣

ちる花を涙かとみれは高砂の尾上も今朝は末のまつ山

右 丹後

吹風を夢の中にもいとふ哉花に枕をむすふよなく

左歌涙かとみれは高砂といへる尾上の松山にかけたる
心よろ敷こそ侍めれ右歌又夢の中にもいとふ哉といひ花
に枕をむすへる心えんに侍にや左はけさはといへるそい
つれの朝にかとおほえ侍れと末の松山にかけたる心猶捨
かたくみえ侍れはなそらへて持にてや侍へからん

二百六番

左 勝 有家朝臣

続古今 かつらきや高間の山の花盛雲のよそなる雲をみる哉

右 越前

花の色にうつる心のいとなくて我身世にふるなかめやはする

右歌花の色はうつりにけりなといへる小町か歌を思へる
心宜侍ないとなくてとをける中の五字やこゝろかふへか
らさる詞に侍らん左歌高間の山の花盛といひて雲のよそ
なる雲の心いと宜くこそ見え侍れ尤たちまさり侍らん

二百七番

左 保季朝臣

音をのみ哀と聞し松風に花の香うつす春の山里

右 勝 定家朝臣

あかさりし霞の衣たちこめて袖のなかなる花のおもかけ

すへて歌の初の五字はよく思へき物にこそ侍めれ左音を
のみとをけるおかしと聞なさん事かたくや侍らん右あか
さりし霞の衣袖のなかなる花のおもかけなといへるえん
ならさるにあらすや侍らんまさるにこそ侍めれ

二百八番

左持　良平

山川の岩もと櫻かけみれは雪をそあらふ瀧つしら波

右　通具朝臣

秋風にこしちくやしき旅なれや霞たつやとかへる鴈かね

左歌末句はおかしくみえ侍を岩もと櫻やすこしつらしすかのねなとに聞なれて如何そ覺侍れとさくらも梢は高くも侍らんとは思なし侍れと右歌ことなくみえ侍を左も猶下句めつらしきさまに侍れはなすらへて持と申へくや

二百九番

左　具親

春の夜のまた明やらぬ山のはにしらむともなき花のよこ雲

右勝　家隆朝臣

新勅撰　けふみれは雲も櫻にうつもれて霞かねたるみよしのゝ山

左ならむよこ雲なとこと／＼しく詞もつよけに侍り右かすみかねたるみよしのゝ山いとよろしくも侍哉勝侍へし

二百十番

左勝　顯昭

ちりまかふ花を雪かとみるからに風さへしろし春の曙

右　雅經

春のうちは待もおしむも思ひねの花をのみ見る比の夢哉

左歌風さへ白し春の曙といへる下句よろしくこそ侍めれ右歌もおかしきやうにはみえ侍を比の夢哉とはてたる心すくなくや侍らん猶左の末句勝と可申や

二百十一番

左勝　女房

ちらはちれよしやよしのゝ山櫻吹まよふ風はいふかひもなし

右　家長

梢にはたえて櫻のなきさなる波の花こそかたみなりけれ

左歌よしやよしのゝ山櫻吹まよふ風はいふかひ（かイ）もなしすてさまに侍につけて猶えんに侍れはいかなる事にか侍らん右歌理ありては聞え侍を河池なとやあらまほしく侍らんいかにも左尤可勝侍

二百十二番

左持　左大臣

櫻花うつろはんとや山のはのうすき紅に今朝はかすめる

右　三宮

かきくもる遠の高ねの花盛消せぬ雪に春雨そふる

左姿心高く又色ありてみえ侍にや右はかきくもるといへる五文字そことはなれてをかれるやうにみえ侍れと末には叶て侍へし消せぬ雪に春雨そふるといへる末の句おかしく侍れは持にてや侍へからん

二百十三番

左持　前權僧正

おしめともとまらぬ花のゆかりとて恨はつへき春のうへかは

右　内大臣

あかさりし花の名殘をなかめよと木の間もりくる春のよの月

左は姿おかしく右心うるはしくとり／＼にみえ侍り是も又持にこそ侍めれ

二百十四番

左　公繼卿

めつらしくつはさ軒端にきなるれは霞かくれに鶯かへる也

右勝　忠良卿

なれにけり名殘よいかに山櫻風より後の春の日かすな

左歌支鳥來臨向北繩心おかしく侍へし右歌は名殘よいかに山櫻といへる心姿えんにも侍れはまさるへくや侍らん

二百十五番

左勝　公經

春風におりなは後ないかにせんなにし驕れる志賀の花園

右　俊宗卿

春雨はのへの草葉の色よりもつれ〳〵まさる物にそ有ける

右春雨のうち寂寞の心誠にもかある事にも侍れと左志賀の花園にいかにゐる名殘を思へる心ほえんにや侍らんまさるへくや

二百十六番

左　季能卿

はる〳〵と雲路にかへるかりかねないゝ後まてなかめやるらん

右勝　通光卿

山川なまゝせてゝりな小山田の苗代水に花のなみよる

右歌眺望眼路あまさへ遠くや侍らん右歌苗代水に花の波よるらんけちかくみつへくや侍へからん

二百十七番

左勝　宮内卿

時きぬと苗代水やまかすらん（まさるらんイ）いなこの小田に蛙なく也

右　讃阿

哀にもそらにさえつるひはり哉芝生のすなに思ふ物から

右の雲雀ことなる事なく侍る左の苗代時きたりて五百代に蛙鳴らん尤左勝侍へし

二百十八番

左持　讃岐

くもりもせす雲もかゝらぬ春のよの月は庭こそしつか成けれ

右　俊成卿女

なかきよきき花の所は有明の月もえならて澄める空かな

左歌不明不暗朧々月には閑ならん心宜侍るを右歌花の所の有明の月えならすみえ侍らんともに女人の歌はか樣にこそとえんにみえ侍りよき持にて侍へし

二百十九番

左持　小侍從

ありふれは人の心もつらき世になれて花のちりぬるもよし

右　丹後

櫻花又こんまてと契れともうしろめたきは春の山かせ

此兩首又ともに其心花をおもへる餘にとりて思ひわつらへる意趣おかしくみえ侍り又勝負難分猶持とすへくや侍らん

二百廿番

左　隆信朝臣

尋こし山路は花をしるへにてちる木の本やすみかなるへき

右勝　越前

いかにせん分るもおしき詠哉花のおりしもかへるかりかね

左歌散木のもとやなといへる心妖艶には侍へし右歌分る
もおしきといひ花のおりしもなと詞つゝきやすらかにい
ひくたして宜く聞え侍にやまさると申へくや

二百廿一番

左持　有家朝臣

朝日影にほへる山の櫻花つれなく消ぬ雪かとそみる

右　定家朝臣

續古今 さくら花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬる淺茅生の宿

左朝日影となきつれなく消ぬとみゆらん風情いとおかし
く侍へし右うつろふ春をあまたへてといひ身さへふりぬ
るあさちふの心のやみをくらすにや侍らん哀もかくへく
と覺侍れと猶左の朝日影も昔の夜鶴の侍らましかはと心
をかへて覺侍れは勝負既まとひて同しなとや申へく侍ら
ん

二百廿二番

左勝　保季朝臣

せきもあへす花吹おろす嵐哉よしのゝ瀧の末匂ふまて

右　通具朝臣

春のよの心をわかぬ人はあらし（なしイ）月と花とのあはれはかりは

右歌月と花との哀人の心まておしはかられたるおかしく
は侍を左歌せきもあへすとをきよしのゝ瀧の末にほふま
てといへる心宜侍にやまさると可申哉

二百廿三番

左　良平

尋きてしらぬ木のもとなかりけり花になれ行みよしのゝ山

右勝　家隆朝臣

新後撰 久かたの光のとかに櫻花ちらてそ匂ふはるの山かせ

左花になれ行みよしのゝ山心姿おかしく侍を右久かたの
となきちらてそ匂ふといへる心遠年年日周武漢文之時之
春の山風にやと覺侍にたして且有爲對

二百廿四番

左　具親

跡たえてなかめし雪の庭まては契し物を花のさかりを

右勝　雅經

忘すは散なん後も思出よ花見かてらのはるのよの月

右歌去年の庭の雪の時契ける心とかなくは侍へし右歌花
見かてらの春のよの月當時の事にておかしく侍にや勝と
すへくや

二百廿五番

左　顯昭

越路にはさひしきこともあらんかし友引つれて歸る雁かね

右勝　寂蓮

玉葉 なにとなくきえつる山の鳥の音も物の哀は春の曙

左歌歸鴈友引つれてこしちさひしからしといへるあしか
らすは聞え侍り右歌何となくきえつる鳥の音も哀に覺侍
りけんいつれの山の末にかとあはれに侍れはいまも哀に

て此歌もまさるにや侍へからん

千五百番歌合卷第四　春四　判釋阿

二百廿六番

左　勝　　　　女　房

花は雪とふるの小山田かへしても恨はてぬる春の夕風

右　　　　三　宮

かくしつゝ今一しほやまさるらん春雨そゝく浦のはま松

左ふるの小山田返してもといひ恨はてぬる春の夕風心姿詞つゝきありかたくみえ侍り右歌春雨そゝく浦の濱松えんには侍をかくしつゝといへる心や彼君かやちよにあふよしもかなとも世をやつくさん高砂のなといへるこそかなひて聞ならひては侍れ今ひとしほのまさるはかりにはいかゝと聞え侍にや左尤まさり侍なん

二百廿七番

左　持　　　　左　大　臣

明はては戀しかるへき名殘哉花の影もるあたら夜の月

右　　　　内　大　臣

侘人の住とはきけと足引の山のかひある岩つゝしかな

左花のかけもるあたら夜の月誠になこり多かるへき事也右山のかひある岩つゝしおかしく侍へきを侘人の住とはきけとゝいへる管見の老巳不覺悟侍り其間暫も左まさるへきにやと可申侍之處愼以其恐多あたら夜の詞雖爲宜艷

事強不可庶幾所存也彷持とすへく侍にや如此申状尚恐惶
恐惶

二百廿八番

左　　前権僧正

こゝらなく鳥のれたくや思らんおしむにとまる花ならなくに

右 勝　　忠良卿

山おろしに櫻なかるゝ吉野川はやくも春のくれて行哉

左歌たれにおほせてこゝら鳴らんといへる歌の心おかしく侍へし右歌山おろしに櫻なかるゝ吉野河姿詞たかくみえ侍り近来舊歌おほくとる事はあまたみえ侍れとあらはに其歌をひけるとみゆるはさる事にて侍り是は古今の戀の秀歌をよしの川はやくとなき所おなしく侍にや中々に如何そ侍へからん然れは歌に負へきにあらす山おろしに櫻なかるゝなと姿も宜侍れは猶右まさるへきにや侍へからん

二百廿九番

左　　公繼卿

かへる鴈こしちにふかき雪をみて春の空をやおほめきぬらん

右 勝　　兼宗卿

なかむれはたなひく雲のたえまより心ほそくもかへる鴈金

左姿おかしくも侍るにや但越路の雪爲毎年事歸鴈おほめかすや侍らん右うるはしく無爲には侍にや歌合のならひまさるへくや侍らん

二百三十番

左　　公經卿

春ふかく尋いるさの山のはにほのみし雲の色そ殘れる

右 勝　　通光卿

續後撰
まかふとていとひし峯の白雲はちりてそ花のかたみ成ける

左歌姿詞とかなくはみえ侍を右歌ちりてそ花の形見成けるといへるいとおかしく侍にや勝侍らん

二百三十一番

左 持　　季能卿

これにたに問人なしに住宿を猶山ふかくよふこ鳥かな

右　　釋阿

うらやまし苗代水をせく賤も心の程はまかせこそすれ

左喚子鳥猶山ふかくといへるよろしからさるにはあらす右老法師の述懐氣みえたる歌悪氣もや侍らん但左是にたにといへるいつくにかとすこしおほつかなく侍にやたまたま判者にまかりあたれる事を例によせて不付勝負や侍へからん

二百三十二番

左 勝　　宮内卿

庭は冬こすゑは夏の心ちして春にもあらす花そ散行

右　　俊成卿女

みよしのゝ野へのさくらもちるまゝに風にみたるゝ嶺のしら雲

左庭は冬梢は夏のといひ右野へのさくらとなき嶺の白雲といへる姿詞共にいくはくの勝劣なきやうに侍れと右も中の五文字ちるまゝにといへる少よはくや侍らん聊順も

て左まさると申侍へし

二百三十三番

左　持　　　　　　讃　　　　岐

春いよのみしかきほとないかにして八こゑの鳥のそらに知らん

右　　　　　　丹　　　後

よしの山尋し花は散はてて跡なき雲のあとをみるかな

左右兩首姿詞いひつゝけたるふしみえ侍り勝劣難申かく

へし仍爲持

二百三十四番

左　　　　　小　侍　從

たれをかくうはの空にはよふこ鳥たのめぬ人のいかゝこたへん

右　勝　　　　　越　　前

春風は吹にけらしな吉野山雲になみたつ夕暮の空

此兩首左は姿おかしき樣也右は風體高かるへし取々に見

わつらひ侍程に左上下句初のたの字おなしく侍りけり是

は例としてふかき難にはあらされと少の勝劣をもとむる

時はとかに申也右少はまさるへくや

二百三十五番

左　持　　　　　隆　信　朝　臣

風かほる花のしつくに袖ぬれて空なつかしき春雨の雲

右　　　　　　定　家　朝　臣

新古今
櫻色の庭の春風跡もなしとはゝそ人の雪とたにみん

左歌空なつかしき春雨の雲といへる末句は姿よろしくこ

そ侍めれ右歌はおすは雪とそ降なましといへる歌の心を

とかくいひなして侍詞つかひおかしく侍にや老の心まと

ひあやしく侍れは勝劣申かたくや侍らん

二百三十六番

左　持　　　　　有　家　朝　臣

吉野山梢に花のはれぬれは岩のかけちをうつむしら雲

右　　　　　　通　具　朝　臣

みるまゝに高ねのさくら雲消て緑にかゝる松の空哉

右歌緑にすめるといへる下句姿も高く心もおかしくは侍

を左岩のかけちをうつむ白雲花の氣色猶見所まさるへく

やとみえ侍いかゝ

二百三十七番

左　勝　　　　　保　季　朝　臣

うつもるゝ花の梢に日數へて風よりはるゝしら川の里

右　　　　　　家　隆　朝　臣

待人に宿の春風ことつてよけふこそ櫻梢にもみめ

左歌うつもるゝ花の梢にといへるは如何そ聞わかれぬ心

ちし侍を風よりはるゝしら川の里姿何となく宜侍にや右

歌けふこそ櫻おらは折てめといへる歌の心を梢にもみめ

といひなせる程もおかしくは侍れと猶風よりはるゝとい

へるすかたみつへくや侍らんと覺侍れは白河の里まさる

へきにや侍らん

二百三十八番

左　勝　　　　　　頁　　　　平

花のちる山の高ねのかすますはくもらぬ空の雪と見てまし

右　　雅　　経

みよしのやたのむのかりの聲す也花に名殘の春のあけほの

左やすらかなる姿詞よろしくみえ侍り右みよしのやとな（こはりて イ）けるより心こはくては侍なから猶花の名殘のなといへる心えかたきやうにや侍らん左まさるに侍へし

二百三十九番

左　　具　　親

今はとや雲をはなれてかり金の霞にうつる明ほのゝ空

右勝　　寂　　蓮

あかて行鴈の涙やこれならん雲に名殘の雨そゝく也

左末句の姿宜はみえ侍を雲より霞にうつる心聊意及かたく侍いかゝ右歌雲に名殘の雨そゝく也といへる雲よりそそくへきと覺侍れと鴈の涙やなといへるも今すこし哀にも覺侍れはにや右まさる樣に聞なされ侍へし

二百四十番

左持　　顯　　昭

心から妻こひすれや逢事のかた山きゝすねにたてゝなく

右　　家　　長

都をはたのむのかりのふり捨てをのかこしちによると鳴也

兩首心詞殊なる科なく侍めり左の片山きゝす右たのむのかり同科に侍へし

二百四十一番

左勝　　女　　房

かすみ行やよひの空の山のはをほの〳〵出るいさよひの月

右　　内　大　臣

此右歌兩本共無之不審

左歌霞行らん彌生の山をほの〳〵出らん月の心も殊えしにこそ侍れ右歌根はふよこ野萬葉集の心花の色紫むへよしくなとはみえ侍を上の三句かゝる歌をみ侍し心ちし侍れとさやかには覺侍らぬうへに左の山のはの月にはよこ野の草難及侍へし

二百四十二番

左持　　左　大　臣

うちなかめ春のやよひの短夜をねもせて獨あかす比哉

右　　忠　良　卿

住吉のまつ吹かせのさひしさも今一しほの春の明ほの

左ねもせて獨あかす比哉心姿何となくおかしくこそみえ侍れ右住吉の松いま一入の春の曙は殊よろしかるへく侍をさひしさのまさり侍らん事やふるの山への秋の松なとやさは侍へからんとは覺侍れと住吉の春の曙いかゝはをろかに侍へきとてなすらへて持にてや侍へからん

二百四十三番

左勝　　前權僧正

古鄕の花の白雪みにゆかんいさ駒なめて志賀の山越

右　　兼　宗　朝

草も木もいかに契て櫻の花松にとしもはかゝりそめけん

左歌いさ駒なめて志賀の山越是等は只詞にまかせて百首

の中いつり歌とにみえ侍れと心詞におかしく侍にや右歌心うるはしくとかなくはみえ侍を藤の松にかゝれる心さしてしもは覺侍られと聞なれてや侍らん左の志賀の山越めつらしく侍にや

二百四十四番

左　　　公継卿

苗代にやつるゝしつかあさ衣こなきか花のするかひそなき

右勝　　通光卿

杜若色に出てそかくれぬなそこともへにしらせそめつる

左のこなきか花めつらしきさまには侍へし右杜若は常の歌枕也色に出てそしらせそめつるなといへるよしありてみえ侍れはなきの花にまさるへくや

二百四十五番

左　　　公経卿

つく〳〵と軒の玉水數そひてしのふにくもる春雨の空

右勝　　釋阿

なをさそへ位の山の喚子鳥むかしの跡をたゝぬ程をは

左歌末句姿もおかしくこそ侍を初句につく〳〵といへるや如何そ聞え侍れといはゝや物を心行まてとうたふ郢曲に歌も侍れはおかしくも侍へし右歌は老法師の述懐に侍りけり只左まさるとて侍らまほしく侍を此喚子鳥はいさゝか人の憐愍もこひねかふへく侍をたま〳〵判者の人數に罷入侍れは是計得分にや可申請侍らん

二百四十六番

左　　　季能卿

駒なめてこせの春野を朝ゆけはなあきか原にきゝす鳴也

右勝　　俊成卿女

（風雅）高砂の松のみとりもまかふまておのへの風に花そ散ける

左こせの春野をなといへる萬葉集なとおほえて優に侍を下句こそ何の原といへるにか侍らん管見のものよみにたにえよみとかす侍り萬葉集にもこなの山野にはつら〳〵椿なとはいへるやうに覺侍り右はことなる事は侍られと姿詞とかなくは侍にや大方は萬葉集にもおかしきやうなる事なとり詠する也とそ古き物にも申侍る巨勢の春野もしゐてこひねかふへきにはあらさるにや無事なるにつきて右勝へきにや侍へからん

二百四十七番

左　　　宮内卿

なしこめて朧月夜の春ならは霞の外をあきとなかめし

右勝　　丹後

春風にしられぬ花や殘らん猶雲かゝる小泊瀬の山

左歌朧月よの春ならはなといへる心こもりてはみえ侍り右歌猶雲かゝる小泊瀬の山心姿宜も侍哉只右爲勝

二百四十八番

左勝　　讃岐

あれはてゝ我もかれにし古郷に又立かへり菫をそつむ

右　　　越前

さくらさくひらの高ねに風吹は梢につゝく志賀のうら浪

左我もかれにし古郷にといへるいつくとはわき侍られと哀おほく侍にや右梢につゝくといへる此つゝくなといへる詞はこひねかふへからす覺侍事にてさき〳〵も侍る此歌にとりてはことさらにつゝくとこそ申へけれとおかしくは侍るを左の革露けくや侍らんとてまさるとや申侍へし

二百四十九番

左　持　　　　小　侍　從

おもへ共聲はたてしと忍ふるにうらやましくも喚子鳥哉

右　　　　定　家　朝　臣

花の香も風こそよもにさそふらめ心もしらぬ古郷の春

左歌よふこ鳥の心おもへ共といへるよりいみしくおもひしられ侍れは左右なくまさると申たく侍るを右歌又心もしらぬ古郷の春といへるも身にとりては捨かたく聞なし侍にや勝劣申かたく侍へし

二百五十番

左　　　　隆　信　朝　臣

雨そゝく色こそ春にあひにけれ人も分こぬ庭のよもきふ

右　勝　　　　通　具　朝　臣

ちり殘る靑葉の山のさくら花風より後を尋さりせは

左色こそ春にといへる心は宜しく侍へし右風より後を尋さりせはといへる姿心又いとおかしくも見え侍り左の蓬生哀なる方も侍れ共猶靑葉の山の櫻立まさりてや侍らん

二百五十一番

左　勝　　　　有　家　朝　臣

さらぬたに朧にみゆる春の月ちりかひくもる花の陰かな

右　　　　家　隆　朝　臣

花のちる山下風にふしわひて誰又あくる空を待らむ

此右の歌面かけ覺て花の下ふしえんには思やられ侍るを左歌春の日を罷かりあこゝそえさゝへる彼にこへとしよう る道まえふかにといへる昔覺て誰又あくるとおもごやられんよりはまさるへくや侍らん

二百五十二番

左　勝　　　　保　季　朝　臣

眞柴分る片野のみのゝ朝ほらけ霞の末にきゝす立也

右　　　　雅　　　　經

里遠みいくのゝ末を見渡せは霞にかへす春の小山田

兩首左はかたのゝ御野右はいく野の末といひ霞のすゑ霞にかへす歌の姿詞取々に侍を霞にかへさん小山田よりは霞の末のきゝす見所や侍らんとて左をまさると申へくや

二百五十三番

左　持　　　　長　　　　平

ちるおりもふるにまかひし花なれは又木のもとに殘るあは雪

右　　　　家　　　　蓮

新古今
ちりにけりあはれ恨のたれなれは花の跡とふ春の山かせ

左又木のもとに殘るあは雪心詞おかしくは侍を右あはれうらみの誰なれはなといへる心宜侍にや仍持にや侍へからん

二百五十四番

左　持　　　　具　親

よしさらはいつちもさそへ春のかせ花も盛（限りイ）とみん人のため

右　　　　　　宗　長

つく〳〵と隣にくらす野への庵庭の菫にひはりおつ也

左歌御集作か袖にこき入てもていなんといへる歌の心な
いつちもさそへといへるおかしく侍へし右の歌庭の菫に
雲雀おつ也といへる姿もよろしからさるにはあらすや仍
又持にや侍へからん

二百五十五番

左　　　　　　顕　昭

つれ〳〵の春日ないかてくらさまし心すみれの花見さりせは

右　勝　　　　三　宮

さく花に心をとめてかりかねのかへりわつらふ明ほのゝ空

左春日ないかてといへることたる事なくやみえ侍らん右
のかりかね帰りわつらふ曙のこゝろ尤まさるへし

二百五十六番

左　勝　　　　女　房

芳野山てりもせぬよの月影に梢の花は雪とちりつゝ

右　　　　　　忠　良　卿

水底に紫ふかきかけみえて波に色つくたこのうら藤

左歌彼文集の春夜の詩にてりもせすくもりもせす朧々た
る月非暖非寒漫々たる風といへるを吉野山照もせぬよの
月影にと侍面影みるやうにこそ侍れ右歌みなそこに紫
ふかくうつるらんたこのうら藤もおかしくは見え侍れと
猶左の月の前春の雲殊艶にみえ侍り仍只左勝と申侍へし

二百五十七番

左　勝　　　　左　大　臣

泊瀬山花に春風吹はてゝ雲なき嶺に有明の月

右　　　　　　雅　宗　綱

よしの河よとむまもなく行水にかけはなかれぬ岸の山吹

左のはつせ山花に春風吹はてゝ雲なき嶺の月誠に花の後
の春のなくさめに侍へし右よしの河の款冬影は流さらん
とかなく云くたされてはみえ侍を猶吉野川の山吹泊瀬の
山の月には難及や侍らん

二百五十八番

左　持　　　　前　権　僧　正

おくまては尋ねぬ花をみせかほに風になかるゝ山川の水

右　　　　　　通　光　卿

見渡せは春の限の色なれやたかすの宿のいけの藤浪

左歌の下句右歌の上句共に姿詞宜みえ侍り同科にてや侍
へからん

二百五十九番

左　勝　　　　公　継　卿

春山に駒もすさめぬ岩つゝしこゝろのまゝに花さきにけり

右　　　　　　釋　[illegible]

松陰にさける菫は藤の花散しく庭とみえもする哉

左歌岩つゝし見所おほく侍らん古歌老の後華なよゝみ侍
しかは只藤の花の散たるにて侍りけるを遅々見さため侍

て返たつの百首の歌に松の下にちらして侍ける許に侍り
歌さま尤ことやうに侍り左の岩つゝし遙にまさりて侍り

二百六十番

左　持　　公　經　卿

ひたふるにたのむの雁のいかなれはかへる雲路をみよしのゝ里

右　　俊　成　卿　女

春くれて花や散らん吉野川せゝの岩浪風かほる也

兩方歌左はたのむのかり右は吉野河の落花共よろしくみえ侍り持と申侍へし

二百六十一番

左　持　　季　能　卿

天つ空雲のはたてにみたれつゝめもあやなりやあそふ糸ゆふ

右　　丹　後

とかむへき人なきゐての款冬を心やすくや浪のおるらん

左の遊糸雲のはたてにみたれめもあやならん心秀句ことの外に侍へし右のゐての山吹心やすく波の折らんおかしゝ聞は是も又持にて侍へくや

二百六十二番

左　持　　宮　内　卿

松か枝におきつ鹽風吹かけて霞になきぬたこのうら波

右　　越　前

谷河に花のしからみかけてけり嶺の嵐や春の關守

左歌になきぬたこのうら波といひ右峯の嵐や春の關守といへる心又勝劣分かたくみえ侍なるへし猶同しなとすへし

二百六十三番

左　勝　　讃　岐

こぬ人をうらみやすらん喚子鳥しほたれ山の夕暮の聲

右　　定　家　朝　臣

とまらぬは櫻はかりを色に出てちりのまかひにくるゝ春哉

左末ほたれ山のよふこ鳥誠うらみやすらんと聞え侍を右櫻はかりを色に出てといへる心いと心えす侍れは以左まさると申へくや

二百六十四番

左　持　　小　侍　従

石上ふる野のさとをきてみれは獨すみれの花さきにけり

右　　通　具　朝　臣

吹はらふ木の下風にかつきえてつもらぬ庭の花の雪かな

左のすみれ右の落花取々なるへし持とすへくや

二百六十五番

左　　隆　信　朝　臣

さほ姫はなへて緑をそむれ共菫にかはる野(寔イ)への色哉

右　勝　　家　隆　朝　臣

さらに又猶面かけに櫻花やよひの雲の暮かたの空

左歌さほ姫の染る心大方は山姫なは春はさほ姫といひ秋は立田姫と云けれは春も秋も花の色色に取ては菫のみにやは驚へからん右歌猶おもかけに櫻花といひて彌生の雲の暮方の空といへる尤宜侍へし以右爲勝

二百六十六番

左　持　　　有家朝臣

尋つゝ小島かさきの山ふきのいはぬ色しもしるへかほなる

右　　　雅經

くれぬ共いかゝ見捨て橘の尋こしまの欵冬のはな

兩方の小島の欵冬もしつゝきともに取々におかしくみえ侍りよき持なるへし

二百六十七番

左　持　　　保季朝臣

山ふかき嵐のそこに喚子鳥跡なき道をふみ分よとや

右　　　寂蓮

吹風のさそひもはてぬ青柳の枝にそ春の色は殘れる

左の嵐の底に喚子鳥右の枝にそ春のといへる心なのなのおかしからさるにあらす又持とすへし

二百六十八番

左　勝　　　良平

新古今
ちる花の忘れかたみのみねの雲そをたにに殘せ春の山かせ

右　　　家長

菫さく野をなつかしみ草枕むすへる夢は一夜のみかは

右菫に結へる草枕一夜のみかはといへる心侍に侍をたゝそをたに殘せ春の山風猶宜侍へし左勝なるへし

二百六十九番

左　　　具親

色ふかき藤浪なこきみる人の心をよするたこの浦かせ

右　勝　　　三宮

いとせめてまたふ心やかりかねのかへん雲ゐのつらにそふらん

左歌可もなく不可もなく侍にや右歌いとせめてといへる初の五字やゐて叶ても聞え侍られと末句宜侍へしとまきると申へくや

二百七十番

左　持　　　顯昭

山ふきのうつろふ影を結手のしつくにあかぬゐての玉水

右　　　内大臣

むかしたれゐての山吹うへをきて花故里の名を殘すらん

左右のゐての欵冬左は滴にあかぬといへる彼あかても人にといへる本歌のあかてもといへる詞をおしく心得て申人も有を其由に心得たるにやとみえ侍にや

二百七十一番

左　勝　　　女房

風ふけは花のしら雲やや消てよな〳〵はるゝみよしのゝ月

右　　　兼宗卿

花ゆへにおしむけふそといふならはかへりて春や我をうらみん

左歌よな〳〵はるゝみよしのゝ月秋の空のひとへにくまなからんよりもえんに侍らんかしと面影みるやうにこそ覺侍れ右歌おしむけふそといふならはなといへる詞髓に理聞えては侍へし但歌の道よな〳〵はるゝみよしのゝ月なと幽玄に及かたきさまにあらまほしく侍る事也

二百七十二番

左　勝　　　　　　　　　　　　　　左　大　臣

花ちりて木のもとうとくなるまゝに遠さかり行袖のうつり香

右　　　　　　　　　　　　　　　通　光　卿

志のへ共いはぬ色なる山ふきの花に戀しきゐての古鄕

左歌遠さかり行袖のうつりか姿心いみしくこそ見え侍れ
右歌花に戀しきといへる心いとやさしく聞え侍り但ゐて
の古鄕を戀しさはかりはいはぬ色なるなとまて志のふる
戀には及へからすや侍らん左の袖の移香猶えんに侍へし

二百七十三番

左　勝　　　　　　　　　　　　　前　權　僧　正

新千載
立かへりみれ共あかぬ藤なみは過る心にかゝる成けり

右　　　　　　　　　　　　　　　釋　　　阿

春くれぬ今やさくらん蛙なく神なひ川の山ふきの花

左過る心にかゝる也けりいみしくおかしくこそみえ侍れ
右の神無妃河の欵冬是はよゝのふることを百首につきて
はさまの歌になきて侍りける計也尤以左勝とすへし

二百七十四番

左　勝　　　　　　　　　　　　　公　　　繼　　　卿

大かたの春の日影ものとけくて時にそあへる藤生のゝはな

右　　　　　　　　　　　　　　　俊　成　卿　女

くれぬ共猶春風は吹かよへよしのゝおくの花の靑葉に

右歌猶春風は吹かよへなといへる姿はよろしからさるに
はあらす侍れと左歌大かたの春の日影もなといへる心宜
見え侍り末句の藤生のゝ花そ猶今少やすらかなる藤にて

あらまほしくやと聞え侍れと上句よろしくみえ侍り左勝
にて侍へし

二百七十五番

左　持　　　　　　　　　　　　　公　　　經　　　卿

立かへり猶古鄕にすみれさくまかきの暮に春風そふく

右　　　　　　　　　　　　　　　丹　　　後

なつかしき色のゆかりと思ふにもみれは心にかゝるふちなみ

左のすみれ籬の暮に春風そ吹と云右の藤浪の色のゆかり
と思にもなといへる兩方共にえんに侍へし持とすへし

二百七十六番

左　持　　　　　　　　　　　　　季　　　能　　　卿

色志らぬあまもやめにはたてつらん雲にまかへるたこのうら藤

右　　　　　　　　　　　　　　　越　　　前

春ふかみゐての山ふきちるまゝにひとへに夏に成かとそみる

左は田子のうら藤を思ひ右はゐての欵冬をひけり心とり
とりに優に侍を左あまもやめにはといひ右は散まゝに一
重になれる心兼盛か歌ふるき難にや侍らんなすらへて又
持にや侍へからん

二百七十七番

左　勝　　　　　　　　　　　　　宮　　　內　　　卿

庭の面はのらと成ぬる古鄕のまやのあまりに雲雀おつ也

右　　　　　　　　　　　　　　　定　家　朝　臣

吉野川たきつ岩浪せきもあへす早く過行花のころ哉

左歌彼庭も籬も秋の野らなるといへる遍昭か母の家の心

なまやのあまりにひはりおつらん姿本歌よりもつき／＼しく聞え侍にや右吉野河によせてはやく過行花の比哉といへるか様の心さきにも見え侍つるにや左雲雀おつなとおかしく侍り左まさりて侍なんかし

二百七十八番

左　持　　讃　岐

續古今
今はとて春の有明にちる花や月にもおしき嶺の白雲

右　　通　具　朝　臣

櫻花ちりのまかひに暮なゝん歸らは春の道まかふかに

左月にもおしきみねの白雲いと宜こそみえ侍めれ右かへらは春のといへる彼ちりかひくもれ老らくのといへる業平朝臣の歌を思へる心又なとるとは申かたし仍持とすへし

二百七十九番

左　持　　小　侍　從

紫の雲井にみゆる藤の花いつか心の松そかゝらむ

右　　家　隆　朝　臣

鳴とむる花かとそ思ふ鶯の歸るふるすの谷のしら雲

左歌紫の雲いつる心の松にかけたりしか覺ゆへき事なりと覺侍を右歌花かとそ思ふといへる花を雲とのみこそいふことを雲を花かといへる姿もおかしくめつらしくも侍れは又なすらへて持にて侍へし

二百八十番

左　勝　　隆　信　朝　臣

春といへは今はの心つくはねの嶺をはるかに歸るかりかね

右　　雅　經

うつり行春をはたこのうらみても忘れすかけよ峯の藤浪

右歌心おかしくみえ侍を左歌今はの侍つくはねのといへるはかりこそよろしくみえ侍めれ勝にや侍らん

二百八十一番

左　　有　家　朝　臣

わきも子かくれなゐそめの岩つゝしいはて千入の色そみえける

右　勝　　寂　蓮

新古今
おもひたつ鳥はふるすもたのむらんなれぬる花のあとの夕暮

左歌岩つゝし千入の色ふかくもみえ侍を右歌なれぬる花の跡の夕暮宜侍りけるにやとみえ侍り勝にて侍へからん

二百八十二番

左　勝　　保　季　朝　臣

明ほのにおもひなれたる春なれと山の端かすむ夕暮の空

右　　家　長

あとしのふむかしみかはのかきつはた涙は今もふりはてにけり

左歌曙に思ひなれたる春なれとゝいへる心宜侍り右歌昔みかはの杜若ゆへおかしからさるにはあらさるへし但左の山のはかすむ夕暮の空猶宜にや侍らん仍可爲勝

二百八十三番

左　持　　具　平

おしきかな彌生の空に花ちりて梢にすさむうくひすの聲

右　　三　宮

水むすふ峯の山吹さきしより底さへ匂ふゐての玉河
左おしき哉といへる五字より姿おかしくは侍をすさむ詞やあたらしき樣に聞え侍らん右底さへ匂ふなとは聞なれたる樣には侍れとゐての玉河心とまる所に侍れはなすらへて持にてや侍へからん

二百八十四番

左　持　具親

心あれや神なひ河に鳴かはつ春もうつろふ山ふきの花

右　内大臣

花ちりぬ何かは春もおしからん花ゆへにこそ春を侍しか
左歌心あれやとをけるより姿詞おかしくみえ侍を右歌花ちりぬといひ何かは春もと又をし返し花ゆへにこそといへる心珍敷も聞え侍れ勝劣又難申侍にや

二百八十五番

左　顯昭

葉かへせぬ老木の松に色めくや若紫のふちなみのはな

右　勝　忠良卿

花になれし名殘を雲になかむれはやよひの暮の春雨の空
左老木の松に色めくらんわか紫よろしからすやみゆへく侍らん右名殘を雲にといひ彌生のくれの春雨の空心姿事外にこそみえ侍れ左の老木の松藤波の花諷詠にたゝさるへし以右爲勝

二百八十六番

左　勝　女房

いにしへの春さへけふはつらき哉くるとていかに歸そめけん

右　通光卿

さ夜ふくる鐘の音には行春をしたふ心もつきはてにけり
右歌彼いにしへの人さへ今朝はつらき哉といへる後拾遺の歌の心いみしくおかしくみえ侍り右歌さ夜ふくる鐘の音に春をしたふ心もつくらん心おかしくは侍れと春さへけふはつらきと侍には如何及侍へき

二百八十七番

左　勝　左大臣

手に結ふ岩井の水のあかてのみ春にわかるゝ志賀の山越

右　釋阿

おしむとて春はとまらぬ物ゆへに卯月の空はいとふとやみん
左歌岩井のみつのあかてのみといへる心姿しつくに濁る山の井にもいく程の勝劣いかゝとまて覺侍を老のまとひこそ侍らん右歌とかく申に及へからす左萬里の勝にみえ侍り

二百八十八番

左　勝　前權僧正

暮ぬれと花のしたにも宿かれは日數はかりそ春にわかるゝ

右　俊成卿女

なをわきて時こそ有けれ霞たつ夕の空も春くるゝほと
左日數計そといへる心めつらしくこそみえ侍れ右時こそ有けれといへるおかしくみえ侍れと下句いく程の事にかはと覺侍れは猶左まさるへくや侍らん

二百八十九番

左　公経卿

行春よ空のけしきをつくづくと心にとめてながむはかりそ

右勝　丹後

そなたへは歸らぬ春と知なからくるれはつらき西の山のは

左歌ゆく春よといへる心とかなくは侍へし右歌始にそなたへはとをけるや何事そと聞え侍らん下句にくるれはつらき西の山のはといひつれはかなひて侍うへに末句心姿宜侍り勝へきにこそ侍れ

二百九十番

左勝　公経卿

暮はつる春の行末も白雲のなかめや送る氣色なるらん

右　越前

かへりなは春のみおしき名殘かはなれにし鳥も雲に入なり

右歌春のゆくゑも白雲のなといへる文字つゞきは宜侍を末句今少思ふへくそ侍りける左歌春のみおしき名殘かはといへる心まさるへくや侍らん

二百九十一番

左　季能卿

四方の山けふをかきりとかすませておほつかなみの春の行ゑや

右勝　定家朝臣

けふのみとしゐてもおらし藤花さきける夏の色ならぬかは

左上句はよろしきやうに侍をおほつかなみの詞こそこひれかふへき事にも侍らすや伊勢物語の異説の本にそけふの詠やといへるやうに覺侍れとさてはふるくも用ゐたるやうにもおほえ侍らす萬葉集伊勢物語もよき詞を取へきにや侍らん右しゐてもおらし藤花といへる春はいくかもといへる業平朝臣の歌の心宜や侍らん

二百九十二番

左持　宮内卿

花もなし人めもしらぬ柴の戸もさすかに春のくるゝけふこそ

右　通具朝臣

行ゑなくはてなき物は暮て行春の雲路のとまり也けり

左歌初五字そいかにそ聞え侍れとさすかに春のくるゝけふこそといへる心こもりておかしく侍へし右歌はてなき物は暮て行と云る心細くも侍れは持と申へくや侍らむ

二百九十三番

左持　讃岐

枝にちる花こそあらめ鶯のねさへかれゆく春の暮かな

右　家隆朝臣

みよしのゝ大河のへの藤浪の春もふかしと色にみすらん

此兩首又よろしくみえ侍り持に侍へし

二百九十四番

左勝　小侍従

ちるとみる花もれにこそかへるなれ過行春の行ゑしらはや

右　雅経

限あれは今夜もすてにふけにけりくれかたかりし春の日數の

此つかひも又共におかしく侍をさのみ持と申も例の事に

侍うへに右歌こよひもすてにといへる己の字そよせなくては無下にたゝ詞にや聞え侍らん仍左少はまさるへくや侍らん

二百九十五番

左　持　　隆信朝臣

こきよせよ難波わたりに舟とめて今宵はかりの春なかめん

右　　寂蓮

東路や春の行ゑな今夜より夢にもつけようつの山ふみ

左歌旅泊海路なといへる題もなくて只こと葉に漕よせよと下知したるにいつくのつゐてともなくおきてたるやうに聞えや侍らん右歌は東路やとなけれは旅行の歌にこそとはきこえ侍な今夜よりといへるうつの山に日數ふへきやうにや侍らんいつれもまさると難申や侍らん持に侍へきにや

二百九十六番

左　　有家朝臣

名殘なくけふこそ春はつくはねの木のもとことの花もふりにき

右　勝　　家長

ちる花になけきなれぬる心こそ春の別もたへ忍ひけれ

左けふこそ春はつくはねのといへるおかしくみえ侍な花もふりにきといひはてたるや匂すくなきやうに侍らん右歎なれぬる心こそといへる理聞え侍にやまさるへきにや侍らん

二百九十七番

左　　保季朝臣

今日暮ぬいつくへ春の行て又ともなふ花な外にみすらん

右　勝　　三宮

なかめ送る心なやかてさそひつゝ雲のふる巣に歸る鶯

左歌ゆきて又といひ外にみすらんなといへる詞くたけていとゆきても侍らぬにや右歌雲のふる巣にかへる鶯よくきこえ侍りまさり侍へし

二百九十八番

左　持　　良平

行春の別はけふになるとより船いたしてもいかに尋ん

右　　内大臣

春の色もけふな限の夕附日さしもや藤のうら紫に

左は別はけふになるとより右は夕つくひさしもや藤の共に文字つゝきおかしきやうに見え侍り持にて侍へからん

二百九十九番

左　　具親

花もちり鳥も古巣にかへりなはおしかるへくもなき別哉

右　勝　　忠良卿

行ゑなきなかめ計な名殘にて雲のはたてに春そ暮ぬる

左歌花ちり鳥も歸る崇德院の御歌にや見給へし心ちし侍らん右歌とかなくくたりて侍へし以右可勝爲

三百番

左　　顯昭

かへる春おもひやるこそくるしけれなこその關の夕暮の空

右勝　　兼宗卿

郭公きなかん事をおもはすは暮のる春にいかてたへまし

左かへる春をなこその關におもひやれる物惣にこそ聞え侍れ春をはいつくにもいとひ侍らしものを右は郭公をも思ひ春をも惜む心深く見え侍り右尤勝侍へし

千五百番歌合卷第五　夏一　無判

判者土御門内大臣雖有勅定薨去畢

三百一番

左　女房

春山の霞の衣ぬきすてゝ今朝はみとりの夏の明ほの

右　釋阿

ころもこそかふともかへめ春の色にそめし心はいつかうつらん

三百二番

左　左大臣

見しま江にしけりはてぬる蘆のねの一よは春を隔きにけり

右　俊成卿女

春の色をとゝめかたみの夏衣たつ日も今日に成にける哉

三百三番

左　前權僧正

夏にさく池の藤なみ色に出て山郭公なくをまつ哉

右　丹後

けふよりは心さへこそかはりぬれ昨日はまちし郭公かは

三百四番

左　公繼卿

かたみとやかへにそむくる灯のわつかに殘る春の影かな

右　越前

新後拾遺　夏衣いそきかへつるかひもなくたち重ねたる花のおも影

三百五番

左　公経卿

おもはすよ蟬のは衣たちかへて一夜に春をわすろへしとは

右　定家朝臣

郭公まつに心のうつろより袖にとまらぬ春の色かな

三百六番

左　季能卿

花にそむ心やうすく成ぬらんいそきたゝろゝ蟬のは衣

右　通具朝臣

暮ていにし春のかたみとけふみれは花の袂に露そまたひぬ

三百七番

左　宮内卿

けふこそあれ春は霞も立田山緑をこめて過しもの也

右　家隆朝臣

今はよも花は嵐の夏山に青葉ましりの峯のしら雲

三百八番

左　讃岐

神まつる卯月の花もさきにけり山郭公夕かけてなけ

右　雅経

袖の色もうつりにけりな夏衣春はくれぬと詠せしまに

三百九番

左　小侍従

昨日まていとひし風をまつにこそ定なき世の程もしらるれ

右　寂蓮

野へみれは霞の袖も引かへてみとりは草のたもとなりけり

三百十番

左　隆信朝臣

心には春の名残をうらみてもかひなき袖の一えなるらん

右　家長

春の色のなこりも更に夏たてはみとりにかふる衣手のもり

三百十一番

左　有家朝臣

夏衣春の形見を立田山秋は紅葉の色はそむとも

右　三宮

ぬきかふる衣の袖にしられけりまたうらなれぬ夏の氣色は

三百十二番

左　保季朝臣

心からけふぬきかへて夏衣恨を春に猶のこすらん

右　内大臣

神まつる卯月になれは卯花のかきねもなみの衣きてけり

三百十三番

左　良平

けふよりは春をは夏に立かへて花の袂はせみのはころも

右　忠良卿

けさよりは花ともみえす夏衣立田の山の峯のしら雲

三百十四番

左　具親

空蟬の羽にをくこれや袖のつゆ花のなこりをしのひ〳〵に

右　　兼宗卿

かきりあらん春こそあらめ花の色な心とかふる夏衣かな

三百十五番

左　　顯昭

卯のはな折たかへても思ふ哉雪ふるさとに我やきぬらん

右　　通光卿

たちかふる衣にこそは思ひしれけふより春なよそになるとも

三百十六番

左　　女房

夏の空くもれるよ半の卯の花の月なやとせる玉河のさと

右　　俊成卿女

卯花のさきぬる時は夏山の木蔭くもらぬ夕つくよかな

三百十七番

左　　左大臣

鶯のひとりかへれるおく山に心あるへきなそさくらかな

右　　丹後

今朝きなは夏のかきねの鶯も暮にし春の忘かたみに

三百十八番

左　　前權僧正

とめくれと春なき山の梢より今はいとはぬ風わたる也

右　　越前

故郷の卯花月よきてみれはねやの板まなもらぬ計そ

三百十九番

左　　公繼卿

夏きぬとかふる衣はきなれにし春のかたみなたつにそ有ける

右　　定家朝臣

待とせし人のためにはなかめれとしける夏草道もなきまて

三百二十番

左　　公經卿

卯花のかきねほのめく夕つくよいつあり明の久かたの空

右　　通具朝臣

さきぬれはまたき有明の光哉卯花山のあかつきのかけ

三百廿一番

左　　季能卿

むら雨に露置わたす卯花のかきねつゝきや玉河のさと

右　　家隆朝臣

入る月に[こゝ月イ]こほりきえ行木のまより打出る浪や谷の卯花

三百廿二番

左　　宮內卿

卯花なまかきにうへて雨のよも月見かほなるなのゝさと人

右　　雅經

卯花や春なへたつるかきねまて曉りはてたる雪の村きえ

三百廿三番

左　　讃岐

ほとゝきすまた打とけぬ忍ひねに木の下くらき夏のよの月

右　　寂蓮

卯花やみきはなかけてさきぬらん浪よせまさる玉河の里

三百廿四番

左　小侍従

あふひ草たのみをかくる諸人のしるしはいつかみあれなるへき

右　家長

わすれては冬かとそ思ふ卯花の雪ふみ分るをのゝかよひち

三百廿五番

左　隆信朝臣

山かつのたのむはかりのうつ木垣花みんとしはうへすや有けん

右　三宮

いつしかと山ほとゝきすまつことや春を忘るゝはしめなるらん

三百廿六番

左　有家朝臣

神代より年に一たひあふひ草逢日まれなるかさしなりけり

右　内大臣

橘の花ちるさとをあくかれて山ほとゝきすなとや音せぬ

三百廿七番

左　保季朝臣

卯花のかはらぬ色を名殘にていろもいらぬも有明の月

右　忠良卿

新後撰 しのひねをいつくに鳴てほとゝきすうの花かきに猶またるらん

三百廿八番

左　具平

玉河のきしのうの花咲ぬれは汀にしらぬ浪そたちける

右　兼宗卿

いくたひかけふのみあれにあふひ草思ふも久しみつかきの内

三百廿九番

左　具親

卯花のさけるかきねやこれならんそなからあらぬ有明の月

右　通光卿

ほとゝきす待につけてそ夏のよをねぬにあけぬと思ひしりぬる

三百卅番

左　顕昭

ぬれ衣ほすかとみれは白妙の卯花さけるあまの袖かき

右　釋阿

卯花のかきねの露にやとりきて春わすれよと夕つくよ哉

三百卅一番

左　女房

ほとゝきす心してなけ橘のはなちる里の五月雨の空

右　丹後

夕たすきかけてそ待し神まつる卯月は夏をはしめと思へは

三百卅二番

左　左大臣

新古今 有明のつれなく見えし月は出ぬ山ほとゝきす待よなからに

右　越前

思ひねのまくらになれて時鳥うつゝも夢の一聲のそら

三百卅三番

左　前權僧正

夜半にきて山郭公なのるなり旅の宿かせ橘のはな

右　定家朝臣

時しらぬ里は玉川いつとてか夏のかきねをうつむ白雪

三百卅四番

左　公繼卿

しつのおかかこひませたる垣ねこそ卯花月のくもり成けれ

右　通具朝臣

ともしけり澤の螢はほのみえてくもろもしらぬ鳥の一聲

三百卅五番

左　公經卿

ほとゝきすしのふる聲のすか原や伏見のくれの夢かうつゝか

右　家隆朝臣

ちはやふる神代をかけてあふひ草君に二葉のかけやそふらん

三百卅六番

左　季能卿

しらさりき卯花月ようちしらみ春より後も明ほのゝ空

右　雅經

花は春散にし峯にあはれてふことをあまたにやらぬ白雲

三百卅七番

左　宮内卿

ほとゝきす初音をとこそおもへともまたすしもなし山のはの月

右　寂蓮

里なれぬ聲をそたのむ郭公み山にふかき宿の夕くれ

三百卅八番

左　讃岐

ほとゝきす夜ふかき聲は諸ともにねさめぬ人もうらめしき哉

右　家長

鶯のいりにし跡の雲路よりまち出る時の鳥もなくなり

三百卅九番

左　小侍從

おほえ山いそきいく野の道にしもことをかたらふ時鳥かな

右　三宮

春過てなをみ山へを尋みん嵐にのこる花はありやと

三百四十番

左　隆信朝臣

若葉さす君か光にあふひ草よろつ代かけて神やうへけん

右　内大臣

五月雨にあふさか山の郭公關屋にしはし雨やとりせよ

三百四十一番

左　有家朝臣

郭公まつ夜むなしく明ぬなりゆふつけ鳥の聲計して

右　忠良卿

浪やたつ雲やつもると卯花のさきまかへたる玉河の里

三百四十二番

左　保季朝臣

むら雨そ先をとつるゝ時鳥待夕くれの雲のはたてに

右　兼宗卿

郭公まつにはよらぬ物そとも中々さらは聞もはてはや

三百四十三番

左　良平

郭公山のいつくにうちはふき鶯かへるころをまちけん

右　通光卿

わきかれつ夢うつゝとも時鳥それかあらぬか夜はの一こゑ

三百四十四番

左　具親

月もおし初音もをそし郭公山のあなたにすむ身ともかな

右　釋阿

夏もなを心はつきぬあちさひのよひらの露に月も住けり

三百四十五番

左　顯昭

まきの戸を月にさゝてそひろも又たゝく水鷄は有けりとしる

右　俊成卿女

人しれぬれにはつくさてほとゝきす待よの月のかけにかたらへ

三百四十六番

左　女房

風雅 またよひの月まつとても明にけりみしかき夢のむすふともなく

右　越前

一こゑはきくもつらしと郭公うらみはてれは明そしにける

三百四十七番

左　左大臣

須まのうらの浪におりはへふる雨にしほたれ衣いかにほさまし

右　定家朝臣

あふひ草かりねの野へに郭公あかつきかけてたれを問らん

三百四十八番

左　前權僧正

ほとゝきすあふさかこえて尋れは今そをとはの山に鳴なる

右　通具朝臣

しのひねのあはれしらるゝうたゝねにかたらふよゐの郭公哉

三百四十九番

左　公繼卿

草枕あやめをむすふ今夜こそよとのかはらぬかりね成けれ

右　家隆朝臣

うちつけにそれかとそきくほとゝきす人まつ山にしのひねの聲

三百五十番

左　公經卿

名殘までしのひそあへぬ霍公深山の庵の出かてのこゑ

右　雅經

尋はや五月こすともほとゝきすしのふの山のおくの二こゑ

三百五十一番

左　季能卿

時鳥かよひそむれは卯花のかきねうかるゝうくひすの聲

右　寂蓮

ほとゝきすまつ夜ふけ行一こゑもあまり程ふる五月の空

三百五十二番

左　宮内卿

あま雲のよそにもなるか時鳥さすかに聲はたえぬ物から

右　家長

聞そめしたゝ一聲にほとゝきすいくみしか夜をあかしきぬらん

三百五十三番

左　讃岐

新古今 手折つるはな橘の香をしめてわかたまくらにおしき袖哉

右　三宮

卯花のかきねつゝきのほとゝきす月影分るよはのしのひね

三百五十四番

左　小侍従

なか〳〵にしのひし比そ郭公さりとも聞しよ半の一こゑ

右　内大臣

一こゑはみはてぬ夢の心ちしてねてかさめてか山郭公

三百五十五番

左　隆信朝臣

なかきねをむすふあやめの枕にもなを程なきは夏のよの夢

右　忠良卿

こゝろこそ行衛もしられ時鳥なくや夕の一こゑのそら

三百五十六番

左　有家朝臣

猶またんなかてもやまし時鳥こそもならしの岡の一こゑ

右　兼宗卿

名にたちし春にもまさる哀哉ほとゝきすなく明ほのゝ空

三百五十七番

左　保季朝臣

郭公いつかわすれんあつまはやすかのあら野のよはの一聲

右　通光卿

ほとゝきすしはしはなとか在明の月も夜ふかき空のけしきに

三百五十八番

左　良平

夏の夜も花たちはなのかほるかにやみはあやなき物にそ有ける

右　釋阿

しのひつま待にそ似たる郭公かたらふ聲はなれぬ物ゆへ

三百五十九番

左　具親

郭公まつも心やかはるらん花たちはなにしのひねそなく

右　俊成卿女

時鳥まつゆふくれのたちはなに風さへいかに吹てすくらむ

三百六十番

左　顯昭

たれもみなたのみをかくるみあれ山神の惠にあふひとをしれ

右　丹後

ほとゝきすなかぬかきりそ卯花をきえぬかきねの雪かとそみる

三百六十一番

左　女房

夕つくよしはしやとれる山の井のあかぬ光の水に涼しさ

右　定家朝臣

なをさりに山ほとゝきす鳴捨てわれしもとまる森の下かけ

三百六十二番

左　左大臣

時しあれは花ちる里の軒の雨にをのかさ月の鳥の一聲

右　　通光卿
露かけてはらふ袂にちりぬへしかきね分行よひの卯花
三百六十三番
左　　前權僧正
續後拾遺 いく里をかたらひすてゝ郭公いまわか宿のはつね成らん
右　　家隆朝臣
かきくもる庭の梢とみるほとに軒もみとりにあやめをそふく
三百六十四番
左　　公繼卿
足曳の山した水を引かけしすそわの田井に早苗とる也
右　　雅經
かそふれはこぬ夜あまたの郭公まつ夜まされるなかめせよとや
三百六十五番
左　　公經卿
新古今 郭公なをうとまれぬ心かな汝かなく里の他所の夕暮
右　　寂蓮
よそに又心なわけそほとゝきす人まつ山の夜はの一こゑ
三百六十六番
左　　季能卿
うれしさのたくひなき哉郭公ひとりは聞ぬはつねなれとも
右　　家長
明はつる名殘よいかにほとゝきす月にいさよふ山のはのこゑ
三百六十七番
左　　宮内卿
その程となかむれは又時鳥おもはぬかたの雲の一こゑ
右　　三宮
待わひぬ宿やかへましほとゝきすおなしみやこもわきて鳴なり
三百六十八番
左　　讃岐
引かねし山田の水を五月雨にあらぬかたにもまかせつるかな
右　　内大臣
けふたにも結ふよもきの人數にいらぬあやめの音をもなけとや
三百六十九番
左　　小侍從
あやめ草あさかの沼に引つれとおもふはかりのねこそかたけれ
右　　忠良卿
續後拾遺 なけやなを己のか五月そ時鳥たれゆへならぬよはのね覺を
三百七十番
左　　隆信朝臣
あやめ草けふかりそめにふきつれはしのふそ軒のあるし顔なる
右　　兼宗卿
郭公をりしりかほにきなく也花たちはなのにほふ夕くれ
三百七十一番
左　　有家朝臣
聲よりもすかたやしのふ郭公をくらの山の雲になく也
右　　通光卿
あやめふくけふとも分てみえぬ哉さらてもしける草の庵は
三百七十二番

左　　保季朝臣

すきぬなり信太のもりの郭公たえぬしつくを袖にのこして

右　　釋阿

新古今
ほとゝきす五月の雲に契をきて人の心を空になすらん

三百七十三番

左　　良平

年ことにふけるあやめのねをとめは軒やあさかの沼と成なん

右　　俊成卿女

夏も猶あはれしらする妻とてやしのふの軒にあやめふくらん

三百七十四番

左　　具親

おもひしりぬ雲のいく重をへたつとも人をはとはん五月雨の頃

右　　丹後

郭公こそのふるこゑいまさらになにかは忍ふをのか五月を

三百七十五番

左　　顯昭

郭公菴かれたるうらみしてかへる（かはるイ）人めやはつかしのもり

右　　越前

ほとゝきすなのれは待と（まつそイ）しられけり（るイ）たそかれ時のいにしへの空

本云
此卷内大臣通親公判者也于時不遂薨逝畢云云

千五百番歌合卷第六　夏二　無判

土御門内大臣雖可勅定薨去畢

三百七十六番

左　　女房

たちよらは涼しくやあると結ふ手のしつくに濁る井手の玉みつ

右　　通光卿

行すゑをたれしのへとて夕風に契かをかん宿のたち花

三百七十七番

左　　左大臣

とふ鳥のあすかの里をほとゝきすむかしの聲に猶や鳴らん

右　　家隆朝臣

軒はもる月の光にかほるよは花たちはなにあきかせそふく

三百七十八番

左　　前權僧正

くれなゐ（のイ）にふり出てそなく時鳥もみちの山にあらぬ物ゆへ

右　　雅經

郭公ねさめさりせはとはかりに思ひもあへす過る一聲

三百七十九番

左　　公經卿

飛鳥川せゝのいしはし水こえて道たと／＼し五月雨のころ

右　　寂蓮

五月雨にあさちかすゑは浪こえて又うつもるゝ庭のやり水

三百八十番

左　　公經卿

さらはよし心をかへてほとゝきすきなかぬ空をまちこゝろみよ

右　　家長

むこ河に跡もとゝめぬかほよ鳥いく井も見えぬ五月雨の頃

三百八十一番

左　　季能卿

五月雨に露さへそふるさゝまくら短き夜をもあかしかれけり

右　　三宮

郭公まちわれの床の板まより枕におつる夜はの一聲

三百八十二番

左　　宮内卿

けふといへはみきはのあやめたち乍ら末をかたしくひなの夕暮

右　　内大臣

ふきそふる軒のあやめもみとりにてしのふになるゝ蓬生のやと

三百八十三番

左　　讃岐

涼むへき清水たつねて行道の野中の草を先結ひつる

右　　忠良卿

五月雨のしつくにゝころ山の井のあかて過ぬるほとゝきすかな

三百八十四番

左　　小侍從

よそへけん昔の人をみるに似て露にぬれたるなてしこの花

右　　兼家卿

郭公雲ゐはるかに鳴ゆくは月のみやこの人もきけとや

三百八十五番

左　　隆信朝臣

一かたにまたましものを郭公すくろ雲路も跡をさためは

右　　通光卿

五月雨はけふをまちけりいつしかとあやめにつたふ軒の玉水

三百八十六番

左　　有家朝臣

五月雨に山郭公をとつれて軒はのあやめ風かほろ也

右　　釋阿

夏のよのなかくもあらは時鳥いま一聲もまたましものを

三百八十七番

左　　保季朝臣

五月雨にを田のみなくちせきもあへす涙こす袖に早苗とるなり

右　　俊成卿女

ほとゝきす鳴有明の雲はれていつくの露の袖にちるらん

三百八十八番

左　　良平

ほとゝきすたつねくらせる木本にこたふる物はみねの松風

右　　丹後

蘆の葉にけふのあやめを引添へて幾重になりぬこやの八重ふき

三百八十九番

左　　具親

津の國のあしのまろやの五月雨にひまこそなけれ雲の八重ふき

右　　　　越　　前

時鳥言傳てんまてなけれともやよやまてとはいはましものを

三百九十番

左　　　　顯　　昭

音なしの山ほとゝきすいつよりかこゝになくとは人にしられし

右　　　　定宗朝臣

夕暮はなくね空なる郭公こゝろのかよふやとやしるらん

三百九十一番

左　　　　女　　房

心あてにきかはやきかん時鳥雲路にまよふみたの一こゑ

右　　　　家隆朝臣

時もときそれかあらぬか時鳥こその五月のたそかれのそら

三百九十二番

左　　　　左大臣

かさゝきの雲のかけはし程やなき夏の夜わたる山のはの月

右　　　　雅　　經

橘のにほひはいまそほとゝきすなかはなくへき夕暮の空

三百九十三番

左　　　　前權僧正

郭公涙はなれに聲はわれにたかひにかしていくよへぬらん

右　　　　寂　　蓮

五月雨の空のみ夏はくもるかは月をなかめし池のうき草

三百九十四番

左　　　　公繼卿

五月雨にゆけの河原のむもれ木もあらはれてこそ流きにけれ

右　　　　家　　長

あくるまもくるゝもしらぬ空の雲軒まてとつる五月雨の山

三百九十五番

左　　　　公經卿

郭公あはれもふかく住やまに杉のあみ戸のあけくれの聲

右　　　　三　　宮

さきにけん花はまたきの夏草に先一色の露むすひけり

三百九十六番

左　　　　季能卿

ともしすと山のこさめに立わひてあはれにもうき袖もぬれけり

右　　　　内大臣

五月雨はみかさもえこそさしあへね木下露のかゝるしけさに

三百九十七番

左　　　　宮内卿

宿のあらぬ花や五月の花ならぬ山時鳥よそにのみして

右　　　　忠良卿

橘のむかしにかほる袖に又けふのあやめもねはかゝりけり

三百九十八番

左　　　　讃　　岐

夏むしのともしすてたる光さへのこりてあくるしのゝめの空

右　　　　兼宗朝臣

とことはに鳴とも人やあかさらんさてこゝろみよ山郭公

三百九十九番

左　小侍従

五月雨に水やこゆらんさはた河袖つくはかりあさかりしかと

右　通光卿

早苗とるけふおもかけに立そめていなはもそよの秋いはつ風

四百番

左　隆信朝臣

一聲の後はうらめしほとゝきすきく心ちせぬ時しなければ

右　釋阿

よそへてもむかしは今はかひもなし花橘の袖のかもかな

四百一番

左　有家朝臣

此ころは月をまつへき山のはをいく夜へたてつ五月雨の雲

右　俊成卿女

露けさもあはれとそおもふ風なひくしけみにしける常夏の花

四百二番

左　保季朝臣

五月やみいくよの雨になれぬらんいてゐる月の影をわすれて

右　丹後

五月雨に庭のさゆるは水こへていりぬる磯のくさかとそ見る

四百三番

左　良平

夏刈の玉江(にイ)のあしやくちぬらん涙に鳥ゐる五月雨の頃

右　越前

初聲にかきらさりけり郭公聞ての後も猶そまたるゝ

四百四番

左　具親

一こゑのあかぬなこりはほとゝきす恨てあかすしのゝめの月

右　定家朝臣

(風本)またれつゝ年にまれなる郭公さ月計のこゑなおしみそ

四百五番

左　顯昭

いまはとていなはの山のほとゝきすわすれかたみの一聲も哉

右　通具朝臣

ともしする木下やみを分ぬれて露にみたるゝしのふもちすり

四百六番

左　女房

足引の山ほとゝきすなちかへりしつくにぬるゝ夕暮の空

右　雅經

いにしへやみぬ面影もたちはなの花ちるさとの有明の空

四百七番

左　左大臣

まくすはら玉まくかすやまさるらん葉にをく露に螢飛也

右　寂蓮

むかしともおもひなすへき身の程を花橘にとふ人もかな

四百八番

左　前權僧正

やよやいかに山郭公われさへそすみわふる身は猶つれなきに

右　家長

五月雨によどのつき橋跡もなしこれもなからの名をなかしつゝ

四百九番

左　公繼卿

五月雨ののどかにくらす夕暮をおどろかしつるほとゝきす哉

右　三宮

芳野山はなのみやこ尋ぬへきとへかし人の五月雨の比

四百十番

左　公經卿

郭公きの丸殿の雲井まてあさくら山のおもひ出のころ

右　内大臣

ことしげししばしばたてん槇の戸をたゝく水鶏よ鳴はてすとも

四百十一番

左　季能卿

花をまつ心は秋にかよへとも分る跡なき庭のなつ草

右　忠良卿

ともしけちころは聞えぬ夏虫のいはぬ思ひに身をこかす哉

四百十二番

左　宮内卿

おほかたのはるゝ時たに雲たえぬ嶺のいほりの五月雨の比

右　雅宗卿

けふといへは薫るありかをさそひつゝ風も吹ける軒のあやめを

四百十三番

左　讃岐

故郷の庭のあさちに風たちて涼しくなれは夕たちの空

右　通光卿

なにとなくさびしき程をつく／＼と思ふ心も五月雨の空

四百十四番

左　小侍從

ふくるまではれすと見えし夕立の名殘ともなき有明の空

右　釋阿

（新後拾）簷にあやめのまくらかほる夜そむかしを忍ふかきり成ける

四百十五番

左　隆信朝臣

時鳥あかぬなごりをおもはせてきくとしもなきさよの一こゑ

右　俊成卿女

（新千載）みても猶あかぬよのまの月かけを思ひ絶たる五月雨の空

四百十六番

左　有家朝臣

百敷や軒はにかほる橘の代々のむかしの風や吹らん

右　丹後

（玉葉）郭公すきぬる後の雲まより猶なかめよと出る月影

四百十七番

左　保季朝臣

春まではとはれし物をあはれ又よしのゝおくの五月雨の比

右　越前

たか手より引分れてかあやめ草おもひ／＼のつまにかゝれる

四百十八番

左　具平

むは玉の夜わたる月はもりもこすまやのあまりの五月雨の比

右　定家朝臣

けふいとゝおなしみとりにうつもれて草の庵もあやめふく也

四百十九番

左　具親

おもひいてゝたれわか宿をしのへとて花橘に風のふくらん

右　通具朝臣

夕されは光みえ行夏むしのこれや世をしる思ひ成らん

四百廿番

左　顯昭

まとゐしていかゝあそはん五月雨にせか井の水も岩こえにけり

右　家隆朝臣

一聲はたむけの山のほとゝきすぬさも取あへす明る夜は哉

四百廿一番

左　女房

筏士のやみなもわかぬみなれさほさすかに夏は月を待けり

右　寂蓮

夏かりのあしまに涙の音はして月のみこほるみほの古郷

四百廿二番

左　大臣

みさひえのひしのうき葉にかくろへてかはつ鳴なり夕立の空

右　家長

ね覺する枕におつる瀧の音にむすほゝれたる夏のよの夢

四百廿三番

左　前權僧正

五月雨に物思ふ宿は時鳥なく一こゑも猶そ夜ふかき

右　三宮

夕ま暮風につれなき白露はゝのふかすかゐ螢なりけり

四百廿四番

左　公繼卿

たか宿の花橘にふきこそとおもふかたさへなつかしき哉

右　内大臣

五月雨にしつの垣根に日數へてあさのはさへなほすこまそなき

四百廿五番

左　公經卿

あやめ草かたしくよひのさゝ枕（かりイ）しらぬ匂ひのひまもとめけり

右　忠良卿

夏の月雲吹かせをさきたてゝ山のは涼し夕立（暮イ）のそら

四百廿六番

左　季能卿

なにとなくうらやましきは夏虫のはちすになるゝ光成けり

右　雅宗卿

けふは皆わさ田の早苗うへてけり田子のてまなくみゆるさ月に

四百廿七番

左　宮内卿

軒しろき月の光に山かけのやみをしたひて行螢かな

右　通光卿

ほとゝきす花橘もちりはてゝ雲よりもらすさよの一聲

四百廿八番

左　讃岐

此世よりやとる露さへ清き哉にこりにしまぬ池のはちす葉

右　釋阿

さなへ月五月雨にむるさへしみとめにこの山雲くもり行らん

四百廿九番

左　小侍從

我ならぬ澤のほたるまよふるもいの思ひにはえこそ忍はさりけれ

右　俊成卿女

五月雨の雲路たとらぬ郭公ないかさ月のやとになならして

四百卅番

左　隆信朝臣

五月雨はふしみの田井に水こえて庭まてつゝく宇治の川なみ

右　丹後

新後よ 郭公なれも心やなくさまぬなは捨山の月になく夜は

四百卅一番

左　有家朝臣

いま越の秋のおもひ（ならひイ）はいかゝせんとさしに鹿の身なれかふへき

右　越前

五月雨にかけのみ殘る心ちして底にみゆるや沼のやつはし

四百卅二番

左　保季朝臣

めにみえぬ匂ひに袖をぬらす哉露やはかよふ軒のたちはな

右　定家朝臣

天川やそなもしらぬ五月雨に思ふもふかき雲のみをかな

四百卅三番

左　良平

待えても恨そふかきほとゝきすなのか五月の夜半の一聲

右　通具朝臣

五月雨はたのめし野へに水こえていかに守らんさなの草くき

四百卅四番

左　具親

蓮葉に風もなひかぬ夏の日もなきさたまらぬ露のしら玉

右　家隆朝臣

いかはかり田子のさ衣みしふつき雨もしみゝにさなへとるらん

四百卅五番

左　顯昭

ほくし影鹿にあひつの山なれはいるにかひあるさつほ（ニイ）なりけり

右　雅經

風雅 五月雨にこえ行浪はかつしかやかつみかくるゝまゝ（まの、イ）のつき橋

四百卅六番

左　女房

ともしする影をこそなくゝ深山木のこのすも鹿のあなおはすらん

右　家長

夕すゝみ夏ははまへに住吉の松とはしるや濱つしほ風

四百卅七番

左　左大臣

ちりなこそすへしとせしか獨ぬる我とこなつは露もはらはす（かにうイ）

右　　　　　　　　　　　　三宮

月夜にはなのか影ともわかさりし螢はやみにあらはれにけり

四百卅八番

左　　　　　　　　　　　　前權僧正

夜やくらき道やまとふとゝふへきに山時鳥なかてあけぬる

右　　　　　　　　　　　　内大臣

あはれなるゝとのすまゐは眞葛ゆへ夏はかりこそ人にからるれ

四百卅九番

左　　　　　　　　　　　　公繼卿

身にしむる人の心やかはるらん花たちはなのおなし匂ひを

右　　　　　　　　　　　　忠良卿

夕つくよかたふく空はよゐなから雲のいつこに有明の影

四百四十番

左　　　　　　　　　　　　公經卿

いにしへを花たちはなに忍ふれは袖とふ風のにほふ夕暮

右　　　　　　　　　　　　兼宗卿

五月雨は雲まなけれは久かたの月のさかりは猶しるきかな

四百四十一番

左　　　　　　　　　　　　季能卿

わきておもふにほひなくても夕まくれ花橘に風は吹しを

右　　　　　　　　　　　　通光卿

花の春月の秋とてなになれや忍ひまたるゝ此ほとの空

四百四十二番

左　　　　　　　　　　　　宮内卿

（風雅）衣手に涼しき風をさきたてゝくもりはしむる夕たちの空

右　　　　　　　　　　　　釋阿

五月雨はぬまのうき草岩こえて蛙の床もねやたえぬらん

四百四十三番

左　　　　　　　　　　　　讃岐

よとともにもゆる螢のいかにして涼しき秋をかねて知らん

右　　　　　　　　　　　　俊成卿女

なかきよのやみこそまされともしするほくしの松のかりの光に

四百四十四番

左　　　　　　　　　　　　小侍從

しつまぬはこの世計としらすしてはかなくみゆるうかひ舟哉

右　　　　　　　　　　　　丹後

鵜飼舟ほのかにともすかゝり火に數そふ物や螢なるらん

四百四十五番

左　　　　　　　　　　　　隆信朝臣

雲は雲庭のあさちになみこへて軒に涼しき五月雨のころ

右　　　　　　　　　　　　越前

よはふへき人もあらはや五月雨にすきてなかるゝさのゝ舟橋

四百四十六番

左　　　　　　　　　　　　有家朝臣

よそにみておもはさりつる村雲も此里までの夕たちの空

右　　　　　　　　　　　　定家朝臣

袖の香を花橘におとろけは空にあり明の月そ殘れる

四百四十七番

左　　　　保季朝臣

またきこの秋にや宿をかり枕松かけ涼しうたゝねの床

右　　　　通具朝臣

かたらひし宿なわするなほとゝきす聲みな月のそらになるとも

四百四十八番

左　　　　良平

思ひあまりなかめつるかな時鳥かたらひ捨てきゆる雲路を

右　　　　家隆朝臣

五月雨はかひやかけふり打しめり山田のくれに蛙なくなり

四百四十九番

左　　　　具親

心あてに露も光やそへつらん月に色なき夕かほの花

右　　　　雅經

いそのかみふるのゝ道な忘草[illegible]袖ふかきことよて

四百五十番

左　　　　顯昭

かひのほる鵜舟なこゝろくら河瀬々の涙やくかゝり火のかけ

右　　　　寂蓮

風雅
いにしへの野守のかゝみ跡たえてとふ火はよ半のほたる成けり

千五百番歌合卷第七　夏三

判　左大臣後京極攝政良經

四百五十一番

左　勝　　　　女房

新後拾遺
風ないたみはすのうき葉に宿しめて涼しき玉に蛙鳴なり

右　　　　三宮

常夏の花になきゐる白露に又影やとす夜半の月哉

我君尊八雲於出雲之昔、酌餘波於難波之朝、姑射山之花下各遂風雅之中興、和歌所之月前再見天暦之先蹤、爰小臣頻侍謳詠之筵、剰當判者之選、頻涯分欲辭之恐、遂勅命守勅命欲從之懇、乖涯分、何況非宗匠之所經歴其閣、定以失進退、愁猶綺靡、獻此推崇淮藻、菅家萬葉集以詩讀、獻大江千里詠以詩爲題、蓋和漢之詞同類相求之故也、仍綴七十五首之絶句、代百五十番之雌雄、分彼二句授之兩番也、於此道之梗概、寛其才於後輩而已

荷葉露將罷夢窓、招涼珠有擲金聲

四百五十二番

左　　　　左大臣

續後
山姫の瀧のしら糸くりためてをるてふ布はなつ衣かも

右　勝　　　　内大臣

新千載
つゝ井つゝ井つゝのうへに水こえてむすふもあさし五月雨の比

嶺泉曝布共何並雨洪ニ艷流ー古井程

四百五十三番

左　勝　前　權　僧　正

ほとゝきすきなかぬ宿の橋はたゝかれねとそ思ふへらなる

右　忠　良　卿

秋やくるとへと白露風凉しいはたのなのゝ夏の夕くれ

郭公定有ニ雙飛思一白露詞伎ニ時翟詞一

四百五十四番

左　勝　公　繼　卿

中々にすゝしくみゆるけしきかな野さはの水にもゆる螢は

右　兼　宗　卿

かくしつゝいつはるへしと見えねともさ月はかりや五月雨の空

聖澤螢光頗可ㇾ見　夏霖五月甚彳遲

四百五十五番

左　勝　公　經　卿

かやりひのけふりな空のへたてにて雲にくもらぬ軒の月かな

右　通　光　卿

月かけなおもひもわかぬなかめ哉五月のやみに卯花の比

見月卯花新計會　風情可ㇾ比ニ兩方篇一

四百五十六番

左　季　能　卿

夏かりの蘆ふくこやにかよひきて軒はすゝしき難波浦風

右　勝　釋　阿

五月雨はすまのしほやも空とちてけふりはかりそ雲にそひける

海村眺望無ニ同類一　淺雨雲間一片煙

四百五十七番

左　勝　宮　內　卿

なにはかた月には遠く成はてゝおきにたゝよふ夕たちの雲

右　俊　成　卿　女

草も木もさなから露の玉おちて風に過ぬる夕たちの雲

雲雷過後暮天與　野露豈爭ニ江月光一

四百五十八番

左　持　讃　岐

かりてなく涙やかへす郭公こゑみな月のむら雨のそら

右　丹　後

人しれぬわか常なつのから錦たれをまつとて數はしめけん

山鳥羅苑相比處　云ㇾ聲云ㇾ色兩等常

四百五十九番

左　勝　小　侍　從

はちす葉に朝なく露のみたれあひてひとつになるも法の心か

右　越　前

夏山のともしのかけにほしみえてふもとにたれか鹿を待らん

誰憶獵人期ㇾ鹿志　露光宜ㇾ觀一園蓮

四百六十番

左　隆　信　朝　臣

旅人の友よひかはす聲す也夏野の草に道まとふらし

右　勝　定　家　朝　臣

新古今
久かたの中なる河のうかひ舟いかに契りてやみをまつらん

任他草野行人路　只歎二桂河漁客船一

四百六十一番

左　持　　有家朝臣

ほに出ぬかやかしけみにつゝめ共おもひみたれてとふほたる哉

右　　通具朝臣

夏の夜も岩もる月を結ふ手に氷くたくる山の井の水

草中螢火水中月　皎々夜光是一同

四百六十二番

左　持　　保季朝臣

ひさきおふるおきの小島の浪の上に浦かぜさそふ日ゝらしの聲

右　　家隆朝臣

五月雨のふるの中道なか／＼にしけゝる草葉も見えぬ比哉

蟬意二浦風一已戻　雨超二野草一與共空

四百六十三番

左　持　　良平

ほとゝきすたゝ一こゑと契けりくるれはあくる夏の夜の月

右　　雅經

夕立のなこりは峯に雲消てすそ野の草の露の一むら

如何山鳥與二亥露一　月霽雲清與互加

四百六十四番

左　　具親

たか宿のものとも見えつ山かつのおなしかきほのなてしこの花

右　勝　　寂蓮

蚊遣火のけふりのすゑもほのかにてかすみにのこる夏の夜の月

墻下草花爭得レ比　暮煙籠レ月似二衣霞一

四百六十五番

左　持　　顯昭

うちとけぬけしきにしるし氷室山夏をへたつる心ありけり

右　　家長

夜もすから岩もる清水かたしきて程なき夢もいく結しつ

氷室素非レ締レ契處一　泉流豈作二結レ夢床一

四百六十六番

左　勝　　女房

澤水の草葉にやとをかりこものおもひみたれて行螢かな

右　　内大臣

しかのねもまた打とけぬ夕暮にあやしかるへき風のをとかな

秋風難レ近未レ聞レ鹿　只愛草中螢火光

四百六十七番

左　　左大臣

松かせのはらふ汀のはちす葉にきよき玉ゐる夏の夕くれ

右　勝　　忠良卿

夕立の一むら過る雲はれて名殘の露はとこなつのいろ

常夏雨過花色好　岸松池藕定難レ爭

四百六十八番

左　勝　　前権僧正

宿もやとなく聲もこゑ郭公身のふりぬるやことしなるらん

右　　兼宗卿

ますらおかは山のはらにこかくれて松をともしの鹿につけはや

今聞舊里霍公語　空忘深山照射情

四百六十九番

左　持　　公　繼　卿

花ちりし宿のこかけなたのつからすゝみかてらにとふ人もかな

右　　通　光　卿

中々になかむる程も夏のよの月に名殘はおもひしられて

觸境感懷隨分有　戀花惜月憶春秋

四百七十番

左　　公　經　卿

玉にまかふよひの螢の影むれて雲井のかりの聲を待ける

右　勝　　釋　阿

ますらおやは山わくゝ覽ともしける螢にまかふ夕やみの空

成群螢影未曾聞　豈若山人夜火幽

四百七十一番

左　　季　能　卿

かつみてもめつらしき哉とこ夏のはや初花の色をそへつゝ

右　勝　　俊　成　卿　女

澤水に秋風ちかし行ほたるまかふひかりは影みたれつゝ

洞露凡卑粗姿色　思風催螢水螢輝

四百七十二番

左　持　　宮　内　卿

見わたせは涙もゆるかぬ夏の日に松かけ遠きいそのほそ道

右　　丹　後

涼しやと立よる人のむすふ手にみたれておつる瀧のしらいと

猶殊飛瀧與開涙　何謂何涇迷是非

四百七十三番

左　持　　讃　岐

住よしの松陰あらふおきつ浪したにや秋の風かよふらん

右　　越　前

きふれ河玉ちるせゝにまかひてもまかひもはてぬ夏虫のかけ

南北兩神鑒地邈　欲論優劣恐猶深

四百七十四番

左　　小　侍　從

眞葛はふ夏野のくさのしけくのみたれをうらみて露こほるらん

右　勝　　定　家　朝　臣

夏衣たつた河原をきてみれはしのになりはへ涙そほしける

縱教葛葉成其恨　河水曝衣叶夏心

四百七十五番

左　　隆　信　朝　臣

かきくらすとはかりみゆる夕立にいつれの里かあさちふの露

右　勝　　通　具　朝　臣

忘れては秋かとそおもふ風わたる峯より西の日くらしのこゑ

雷雨不知何所過　待秋只聽嶺蟬聲

四百七十六番

左　　有　家　朝　臣

時こそあれ露吹はらふ夕風に涼しくなりぬ床なつの花

右　勝　　家　隆　朝　臣

ともしするは山かみねをなかむれは雲路そ鹿のたちとなりける

蘇花振レ露蛩猶啼　山鹿諳レ雲射宴高

四百七十七番

左　持　　保季朝臣

うらなれて螢飛かふ夕まくれいつれかもとのあまのいさり火

右　　雅經

明わたる雲のいつくに入やらて山のはかこつなつのよの月

混レ螢漁火猶レ雲月　光自高低彼是同

四百七十八番

左　　良平

かゝみかとみゆる氷室のこほりにそあらはれにける冬の面影

右　勝　　寂蓮

せきとむる山した水は末たえて風になかるゝ蟬のむらこゑ

冬景不レ思氷鏡上　只聞蟬響韵二溪風一

四百七十九番

左　持　　具親

夕立のはるゝ程なき雲まより猶いてかはる山のはの月

右　　家長

みな月や風まちわふる野への宿うらみぬくすのうらめしき哉

吐レ月嶺雲應レ厭否　待レ風野草可レ親不

四百八十番

左　　顯昭

さよふかみ風にたくへて行螢秋ちかしとは空にしるらん

右　勝　　三宮

新後拾　松かけの岩井の水の夕暮なたつねぬ人や秋なまつらん

任他螢火亂飛處　松下清泉不レ待レ秋

四百八十一番

左　持　　女房

柳陰すゝみにきたるから衣ならす秋になるゝ河かせ

右　　忠良卿

新古今　夕つくひさすやいほりの柴の戸にさひしくもあるひくらしの聲

柳岸風聲應二絕妙一　柴扉蟬響又幽奇

四百八十二番

左　　左大臣

新後撰　日くらしのなくねに風を吹そへて夕日涼しき岡のへの松

右　勝　　兼宗卿

みな月のてる日の影に色そへてにしきをさらす常夏の花

非二斯瞿麥詞花好一　偏可二青松言葉貞一

四百八十三番

左　持　　前權僧正

ほとゝきす空もとゝろに鳴程に夜たゝ雨ふる袖のうへかな

右　　通光卿

夏むしのおもひをうつす池水にたくひもしらするかゝり火のかけ

郭公縱有二舊風體一　一點水螢又莫レ捐

四百八十四番

左　　公繼卿

涼しさは宿からにしもなきものを心しつまるところなりけり

右　勝　　釋阿

新古今　おほ井河かゝりさし行鵜かひ舟いくせに夏のよをあかすらん

心靜身涼難ㇾ慣目　舟中浪上太閤之

四百八十五番

左 持　公經卿

新古今 露すかる庭の玉さゝ打なひき一むらすきぬ夕たちの雲

右　俊成卿女

岩たゝく谷のし水の音きけはむすはぬ袖そまたきすゝしき

庭露巖泉清冷夕　風情兩々尙難ㇾ分

四百八十六番

左　季能卿

風わたるならの葉かせのあらましになかむる空のはつかりの聲

右 勝　丹後

待もせすおしみもあへす夏のよは山のはうとき月なこそみれ

夏天新涼乘ニ時令一　縱觀ニ未來一聲豈聞

四百八十七番

左 勝　宮內卿

みぬ人を松の木陰のこけ莚猶しきしまや大和なてしこ

右　越前

はゝそ原立こるかけの涼しきは楢に秋やちかくなるらん

青苔展ㇾ席花重ㇾ錦　定類ニ漢儒重ㇾ席名一

四百八十八番

左 勝　讃岐

夏のよの月のかつらの下もみちかつ〳〵秋のひかりなりけり

右　定家朝臣

夏のよはまたよひのまとなかめつゝぬるや川へのしのゝめの空

只訝佳華秋色深　夏宵不ㇾ憶一夢成

四百八十九番

左 勝　小侍從

しろしらぬひとつ木陰に立よりて契をむすふ山の井の水

右　通具朝臣

夏衣すそのゝはらの夕風に秋おもほゆるさゆりはのつゆ

只斷草露不ㇾ能ㇾ翫　已盜ニ當時先達歌一

四百九十番

左　隆信朝臣

み山かけ夏なき年やこれならん月なこし水に松の下かせ

右 勝　家隆朝臣

身に近くならすあふきもならのはのしたゝ、風に行ふしにも

松下豈爲ニ期ㇾ月處一　林風宜ㇾ扇感情多

四百九十一番

左　有家朝臣

昨日けふ夏なはゝそにみ山へのならの木かけに日晩のこゑ

右 勝　雅經

たちよれは衣手涼しあらし山秋やとなせの瀧のしら波（いとイ）

避ㇾ暑何尋蟬樹下　嵐山景氣近ㇾ秋聲

四百九十二番

左　保季朝臣

夕暮のまかきに秋やかよふらん露をならはす庭のさゆりは

右 勝　寂蓮

すむ人はあるしともなきよもきふに虫のねそはん秋の夕くれ

草中虫怨明秋處　誰比幽人閑地情

四百九十三番

左　　良平

夕立の雲まの日影はれぬれは玉なそみかくあさちふの露

右勝　　家長

吹風はおもひたえたる庭の面に露にそなひく常夏の花

瞿麥待風無氣力　可憐籬露落低辰

四百九十四番

左　　具親

はゝそはらまた色つかぬむら雨に秋のけしきも森の下露

右勝　　二宮

雨そゝく嶺の楠なかむれはむら雲かゝる蟬のこゑ〳〵

樹陰嶺上雨過處　論嘶高低定不均

四百九十五番

左持　　顯昭

はらす葉になとか心なかけさらんあたなる露もなくとこそみれ

右　　内大臣

さひしとて柴折くへし山里に猶かやり火のけふりたてけり

桑門詠與槐門詠　眞俗詞同宜作持

四百九十六番

左勝　　女房

夏ふかみ草のはかくれ露はゑてしのゝ〳〵の秋のにゝ風

右　　雅宗卿

むすふ手のしつくに月もやとりけりこれや名におふ玉の井の水

玄遊風情雖在后　古賢難及況當時

四百九十七番

左　　左大臣

荻原やこゑもほに出ぬさほしかの深〳〵夏野にそよくなる哉

右勝　　通光卿

石はしるし水をむすふ深山へに涼しさそふる松の下かせ

右方後學非臣右　可聽左方左道篇

四百九十八番

左持　　前權僧正

露の身を玉ともなさん蓮葉のにこりにしまぬ我心かな

右　　釋阿

山の井をむすひて夏は過ぬへし秋や立なん志賀のうら浪

露色先憐禪觀處　水聲又翫納涼前

四百九十九番

左勝　　公繼卿

續拾遺　せきとむる岩まの水にすむ月はむすへはとくる氷なりけり

右　　俊成卿女

山ふかき松に吹けり都にはまたいはたらぬ秋かせのこゑ

波月松風忘夏處　浮涼猶勝御水程

五百番

左勝　　公經卿

かはつなくはすの下葉のさゝ波に浮草わたる夕くれのかせ

右　　丹後

わかるれはこれも名殘のおしき哉夏のかきりの日晩のこゑ

寒蟬自本秋天物　送ㇾ夏何因欲ㇾ惜ㇾ聲

五百一番

左　季能卿

人はこす心はうかる岡のへやけふさへいかにひくらしのこゑ

右勝　越前

かけさゆる山井の水のいつくにか暮行夏の立かへるらむ

倩見二左方詞首尾一　詞旨不ㇾ足意參差

五百二番

左勝　宮内卿

新古今 かたえさすおふのうらなし初秋になりもならすも風そ身にしむ

右　定家朝臣

山のかけおほめくさとにひくらしの聲たのまるゝ夕かほの花

山陰花色雖ㇾ難ㇾ弁　猶勝二秋風浦樹枝一

五百三番

左勝　讃岐

むしのねはまたあさちふに忍きて下に露けき野への夏草

右　通具朝臣

吹きてならす日かすに秋風や立田河原の夕くれのそら

虫聲先好草間露　風響不ㇾ思河上秋

五百四番

左持　小侍従

手に結ふいつみの水のすゝしさに忘て鹿のねなそ待つる

右　家隆朝臣

松かけや瀧のうら葉のいは枕夏なき山にかよふころかな

手掬二清泉一堪ㇾ忘ㇾ夏　定聞瀧裏占巖頭

五百五番

左持　隆信朝臣

秋なまつ日かすもちかくなる神のなとにはたてぬ風そ涼しき

右　雅経

夏ふかき野原のくれにかけみえて螢露けきさゆりはの花

非三唯雷響肯二風響一　葉字何要百合花

五百六番

左勝　有家朝臣

續後撰 はまかせに涼しくなひく夏草の野島かさきに秋はきにけり

右　寂蓮

夏も猶草にやつるゝ故郷に秋なかけたる荻のうはかせ

舊宅草將二弧島草一　海邊景氣感猶加

五百七番

左勝　保季朝臣

はつせ河岩こす浪に打そへて涼しく成ぬ入あひのかね

右　家長

へたてこし垣根も見えす成にけりとなりひとつに草そしけれる

山寺好聞鐘報ㇾ韻　隣家還厭草滋除

五百八番

左　良平

木間よりもりくる月の涼しさにちるも秋なる下紅葉かな

右勝　宮

秋なまつみ山かくれのさなしかはしのひ〳〵に聲やたつらん

林間月影似秋處　猶勝暮山麋鹿聲

五百九番

左　持　具親

秋ちかき夏のゝ草にかくろへてまたほにいてぬ鹿のはつ聲

右　內大臣

戀せしのみそきと人やみたらしの河せのけふの夏はらへをも

古今雨讓已爲病　鵲橋未加愈奈何

五百十番

左　持　顯昭

むすふ手のすゝしきのみか岩そゝくたるみの音も夏はしられす

右　忠良卿

松風の夏たけゝまに涼しきは猶に秋めちかいこゑかま

浦號綁名强結搆　若後其忠定同科

五百十一番

左　勝　女房

（詞千載）みそき川せゝの玉藻のみかくれてしられぬ秋やこよひきぬらん

右　通光卿

御祓する河せの浪も音すゝし夏の日數（かけイ）はみな月のそら

神明從本感祈語　何況河邊后詞

五百十二番

左　左大臣

七夕のあまのかはらに戀せしと秋なむかふるみそきすらしも

右　勝　釋阿

（詞後撰）なる瀧や西の河せにみそきせん岩こす浪も秋やちかきと

鳴瀧西邊秋近處　岩表曾未又思誰

五百十三番

左　勝　前權僧正

夏衣かたへ涼しゝ成ぬ也夜やふけぬらん行あひの空

右　俊成卿女

うたゝねのまたよひなからあけなゝむみそきに過るみな月の空

夏光秋景去來夜　半冷衣裳感我情

五百十四番

左　勝　公繼卿

みそきするなかれになひけ蘆原のくにはしめせし神の心も

右　丹後

みそきする河せの風の涼しきは秋にや神もこゝろよすらん

神國古風詞上顯　對之何物欲相爭

五百十五番

左　持　公經卿

みそきするあさのは風のふき分て秋なよせくる浪の夕こゑ

右　越前

夏衣たちきてなれし程もなく秋に秋の風そ吹ける

河水上將衣袖上　最秋氣定相同

五百十六番

左　季能卿

みな月のなこしの森の夕すゝみみそきもまたぬ秋の下かせ

右　勝　定家朝臣

たかみそきおなしあさちのゆふかけてまつ打靡くかもの河かせ

強求二杜號一其何益　未三敢見聞二秋下風一

五百十七番

左　宮内卿

夏衣たもとに秋の浪かけてみそきにふくるさ夜の川かせ

右勝　通具朝臣

みそき川夜や深ぬらんあさ露のやかて秋なる道芝のうへ

河邊夏祓雖二相似一　行路且涼勝二浪音一

五百十八番

左　讃岐

はやき瀬のみそきになかすうき事はかへらぬ水にたくへてそ思

右勝　家隆朝臣

郭公こゑもたえにしかきねよりしのひねになくきり〱す哉

者思偷通二時鳥後一　聲々相續宜レ搖レ心

五百十九番

左　小侍従

みそき川なつるあさちのひとかたにおもふ心をしられぬる哉

右勝　雅經

みな月やさこそは夏のすゑの松秋にもこゆる波の音かな

非三唯白浪超二松末一　又有二風情一超二左方一

五百二十番

左　隆信朝臣

みそきして神のめくみも廣瀬川いく千世まてかすまんとすらん

右勝　寂蓮

夏はつるかもの河原のみそきこそ神やうくらん秋風のこゑ

廣瀬祝言雖レ叵レ負　鴨河往事不レ能レ忘

五百廿一番

左勝　有家朝臣

夏はたゝ今夜はかりとみそきする河浪涼し秋やたつらん

右　家長

御祓する河せの浪の立かへり猶むすへとや夏したふらん

只思臨レ水迎レ秋處　遮莫掬レ波慕レ夏程

五百廿二番

左　保季朝臣

みそきする河瀬に今夜音信てあくるをまたぬ秋の初かせ

右勝　三宮

けふのみと夏をなかむる淺茅原末こす風のかたへ涼しき

見取二竹園言葉趣一　秋風近報好二風情一

五百廿三番

左　良平

日くらしの聲にや秋のかよふらん木かけ涼しき夏のくれかな

右勝　内大臣

みな月のけふくれ竹のよ(かはイ)おりにそ君か千とせの數はそへける

遣レ懐節祈千年祝　他事雖レ論宜レ更許

五百廿四番

左持　具親

をしなへてみな六月のみそき川いくせの波にいくし立らん

右　忠良卿

さほしかの聲もまだに出ぬしのすゝきしのひかねたるのへの夕風

左右相共心已舊　等閑相准欲ㇾ爲ㇾ持

五百廿五番

左　持　顯昭

涼しさをならの葉風にさきたてゝしのふのもりに秋やきぬらん

右　兼宗卿

うき事もみなつきにつるけふならはあすや袂のしるしをもみん

無ㇾ咎無ㇾ難無二氣味一　兩方勝負實難ㇾ分

千五百番歌合卷第八　秋一　判者同前

五百廿六番

左　持　女房

風の音に秋はけふより立田山夜半にや更のひとりこゆらん

右　釋阿

しほちより秋や立らん明かたはこゑかはるなりすまのなみかせ

如何此道一遺老　齡及二九旬一獨待レ君

五百廿七番

左　左大臣

新古今 深草の露のよすかな契にて里をはかれす秋は來にけり

右　勝　俊成卿女

續拾遺 秋くれは身にしむ物と成にけり昨日も聞し荻のうは風

性圃一荒唯有ㇾ莠　誰尋二深草露光幽一

五百廿八番

左　勝　前權僧正

風の音におとろくのみか荻のはのさやかになひく秋はきにけり

右　丹後

うたゝねは心せよともいふへきにおもひもあへぬ秋のはつかせ

若令下劉白聞中秋荻上　下レ感二深春一勝二早秋一

五百廿九番

左　持　公繼卿

秋きぬと一夜な分る鐘の音にあはれうちそふ曉のそら

右　越前

うたゝねに心つくしの秋きぬとおとろかすなり荻のうは風

鐘響告秋将曙處　相同假寐夢驚情

五百卅番

左持　公經卿

けふよりや秋は立田の山のはに入日さひしくかはる空かな

右　定家朝臣

けさよりは風なたよりのしるへにて跡なき涙も秋や立らん

心憐嶺日凄々影　思動海風蕭々聲

五百卅一番

左持　季能卿

たれに又露のあはれなかけんとて袖より過る秋のはつ風

右　通具朝臣

荻の葉にいつ秋風の吹なれて身にしむはかり人にしらする

秋風吹寄高樹舊　秋始一聲相互存

五百卅二番

左勝　宮内卿

軒ちかき松の梢におとつれて袖にしられぬ秋のはつ風

右　家隆朝臣

秋はくるまたしのゝめのけしきより夕の空もみえける物な

簷下松風秋思苦　任他曉色似二黃昏一

五百卅三番

左持　讃岐

かそへしる人の心にたつ秋な西よりとしも誰さためけん

右　雅經

あさくらやきのまろ殿にたれとへは秋なもなのるおきのうは風

人意計レ秋能識レ節　猶同荻響忽稱レ名

五百卅四番

左　小侍從

いかなれに身にはしむそと尋てし秋吹かせの色なしらはや

右勝　寂蓮

秋風に一夜にかりな蟲の音のはたなるまてや夕くれの空

聞二蟲將一哉秋風色一　只感心機絡緯聲

五百卅五番

左　隆信朝臣

またきかぬ哀ないかてそへつらんことしにかきる秋の風かは

右勝　家長

しのひこし岩井の水の松の風あらはれて吹秋はきにけり

風聲幾聞何變　松韻顯二秋興豈一空

五百卅六番

左　有家朝臣

けさよりはいな葉もそよとしらせ也鳥羽田のおもの秋の初風

右勝　三宮

續千載 昨日より荻の下葉にかよひきてけさあらはるゝ秋のはつ風

蕭瑟秋聲初報レ曉　荻花風勝二稻花風一

五百卅七番

左　保季朝臣

かれてたに心にとまる秋風のけふ明そむるたそかれの空

右　勝　　内大臣

秋風のたつた河原の柳かけ春のみとりもいろつきにけり

龍田河畔今宜ㇾ賞　岸柳春過秋色寒

五百卅八番

左　勝　　良平

けふよりは秋のけしきの森なれはやかて身にしむ山おろしの風

右　　忠良卿

夕暮のあはれな空になかむれは秋きにけりと荻のうは風

備憶近年秋夕詠　此詞度々幾回看

五百卅九番

左　　具親

（新古今）しきたへの枕のうへに過ぬなり露を尋ぬる秋のはつかせ

右　勝　　[illegible]宗[illegible]

故郷とあれにし庭のあさちにも露なきそへて秋はきにけり

枕上秋風纔ㇾ露到　不ㇾ思蓬草廢場

五百四十番

左　勝　　顯昭

（新古今）水くきの岡のくすはも色付てけさうらかなし秋のはつかせ

右　　通光卿

たちそむるけふより人にしられけりなれし袂にかへる秋かせ

可ㇾ憐老後灑ㇾ詞處　葛露閑邊秋色黃

五百四十一番

左　勝　　女房

秋たちて昨日にかはる涙風に涼しくなひく伊せの濱荻

右　　俊成卿女

まれにあふあまの河邊の秋風は此世ならすや哀なるらん

遮莫張眞雌帳策　決ㇾ勝只出ニ殺情中一

五百四十二番

左　　左大臣

おほかたの夕はさそとおもへとも我ためにふく荻のうは風

右　勝　　丹後

けふも又みとりにおなし松陰に風にまかせて秋やきつらん

詞躰偏被ニ衆人弃一　昨木不才寄ニ此躬一

五百四十三番

左　　前權僧正

今宵こそ人にそあはん七夕のたえぬ契にあはんとおもへは

右　勝　　越前

かくれはや野山も色のかはるらん身にしみ初る秋のはつ風

嵐氣向ㇾ人宜ㇾ染ㇾ意　山頭野面早秋天

五百四十四番

左　　公繼卿

ふけにけり今や秋たつ思ひねの夢路をこめて風そ涼しき

右　勝　　定家朝臣

水莖の岡のくすはら吹返し衣手うすき秋のはつかせ

風吹ニ秋草一衣裳薄　曉夢難ㇾ思孤枕前

五百四十五番

左　持　　公經卿

新續古今
契あれはおなしは衣立ゐても待よかならす星合のそら

右　通具朝臣

新古今
あはれ又いかにしのはん袖の露野原の風に秋はきにけり

星影露光雖レ照レ耀　其詞優劣未二分明一

五百四十六番

左　季能卿

けふよりは月の秋そとなかむれはたゝにはあらぬ夕つゝのかけ

右勝　家隆朝臣

七夕の雲の衣を吹かさねて夜さむに成ぬあまの川風

潘郎昔見二曉星詠一　秋興葉優定改レ情

五百四十七番

左　宮内卿

風の音に物わひしかる秋はきぬいつくに宿をおもひさためん

右勝　雅經

久かたのあまのは衣まれにきて契はつきぬほし合の空

七夕羽衣変不レ變　豈挽喜觀覺二秋悲一

五百四十八番

左持　讃岐

三日月の光はいかにみゆるより心をつくす秋のそらかな

右　寂蓮

吹風も松のひゝきも浪の音も秋きにけりな住よしの濱

新秋微月尋常事　白濱青松又比レ之

五百四十九番

左　小侍従

天河年に一よはまちもみし又わく方のこゝろありせは

右勝　家長

いとはやもおのへの鹿は聲たてつすそのゝこ萩さきもあへぬに

星躔縦有レ離二他天一　風體太卑似レ落レ弓

五百五十番

左持　隆信朝臣

秋の色をいつしかみする夕つくひさすやおかへの松風のこゑ

右　宮

秋たちていくかもあらぬに哀さをいつならひけん夕くれのそら

両首秋詞憐レ比レ類　等閑篇詠見猶同

五百五十一番

左持　有家朝臣

さらに又待へき秋も久かたのあまの河せにかへるたみかな

右　内大臣

秋きぬとほのみか月の光にそかれてくまなき影はしらるゝ

備讀二星歸路曉　猶同二片月未レ圓天一

五百五十二番

左　保季朝臣

出そむるまた三日月のほのかにていかてか（さなからイ）秋の色をみすらん

右勝　忠良卿

續古今
竹のはにあさひくいとや七夕の一夜のふしのみたれなるらん

竹竿若有二顆絲掛一　棘府何無二意緒牽一

五百五十三番

左　頁平

天川けふをあふせとなかめてもくるゝ待には袖やぬるらん

右 勝　　　兼 宗 卿

年をへてなかき契のたえせねはためしにひかる七夕のいと

　牽牛織女稍期日　待夕何因涙不ㇾ禁

五百五十四番

左 持　　　具 親

けふのみや心もはれて七夕のおなし雲井に月をみるらん

右　　　通 光 卿

あひみてもなを行末の契をやむすひかさぬる七夕のいと

　乞巧今宵皆献ㇾ靦　此詞定叶ニ星心一

五百五十五番

左　　　顯 昭

七夕にけふかす絲は君か代のなかきためしをひくにそありける

右 勝　　　釋 阿

風の音を荻の葉のみと聞こしをくすのうらにも秋は見えけり

　七夕祝言雖ㇾ可ㇾ賞　風聲吹ㇾ葛ニ猶勝一

五百五十六番

左 勝　　　女 房

しのすゝきまたほに出ぬ夕月よさすかに秋のけしきなるかな

右　　　丹 後

新勅撰 まくすはらうらみぬ袖のうへまても露をき初る秋はきにけり

　暮天月與ニ秋衣露一　相去雲泥萬里路

五百五十七番

左　　　左 大 臣

しら露も色そめあへぬ立田山またあをはにて秋風そふく

右 勝　　　越 前

待えてもいかになかめんいつしかとけしきことなる三か月の影

　寄ㇾ晉詞林渚好容　定嘲木葉未ㇾ紅時

五百五十八番

左 勝　　　前 權 僧 正

おもふへき我身ことつゆ秋そかしたれかかくしも月をなかめん

右　　　定 家 朝 臣

夕暮はをのゝしのはらしのはれぬ秋きにけりとうつら鳴なり

　天無ニ雲霧一傍無ニ友　月下幽情又比ㇾ誰

五百五十九番

左 持　　　公 継 卿

ひこほしのつまむかへ舟よそふらしあまの河原の今日のくれ方

右　　　通 具 朝 臣

いつしかと空にあはれを三日月のかたふく影も秋の夕くれ

　星渚艤ㇾ舟相待夕　夕傾片月互搖ㇾ情

五百六十番

左 持　　　公 經 卿

もとあらの萩の下ねになく蟲の聲をは誰にみせもきかせも

右　　　家 隆 朝 臣

我宿の萩の下葉のいかならん袖も露けしはつかりのこゑ

　萩花開處秋庭興　相類暗蛩遠雁聲

五百六十一番

左 持　　　季 能 卿

人こそあれ庭のむくらも色付て風のみかよふふるさとの秋

右　雅經

萩か花さくともよそに宮城野の木の下露の秋の夕くれ

可レ怪此詞無二艷色一　庭蕪變レ綠野萩開

五百六十二番

左　持　宮内卿

天河もみしのはしやわたすらん色付にしの夕くれの空

右　寂蓮

秋なへてよそにおもひし夕よりたまらぬ物な荻の上かせ

非二唯紅葉秋橋色一　吹レ荻西風染レ意哉

五百六十三番

左　讃岐

天川こそのわたりはうつろへとふかきちきりやかはらさるらん

右　勝　家長

よとゝもに山かけくらき谷の庵のくるゝしらする日晩のこゑ

秋樹蟬鳴山影寂　以レ聲知暮感猶深

五百六十四番

左　持　小侍從

いつしかとけふな待つる七夕のあすの心なおもひこそやれ

右　三宮

七夕もしはしやすらへ天河わけこし浪はかへりやはする

不レ知詞浪深將レ淺　河漢比レ才兩首心

五百六十五番

左　勝　隆信朝臣

あきらけき庭の灯かすことに雲井にかよふひこほしのかけ

右　内大臣

荻の葉に秋ふく色はみえねとも身にしむ程の風のなとかな

乞巧奠レ庭雲上燭　星河倏昧定增レ明

五百六十六番

左　勝　有家朝臣

萩原や末吹なひく秋風の音するたひに人はうらめし

右　忠良卿

荻の葉に松の梢な吹まぜておなし嵐のあはれわく也

吹レ松吹レ草風雖レ作　秋思最憐催レ怨聲

五百六十七番

左　勝　保季朝臣

星合のまたれし空と思ふよりまかきの萩に風かはるなり

右　雅宗卿

いとゝしく露のしら玉なきそへて萩のにしきのあたならぬ哉

野花黃錦何彊歎　詞草大都直自麻

五百六十八番

左　勝　良平

新古今
夕されは玉ちる野への女郎花枕さためぬ秋風そふく

右　通光卿

なかむへき秋のなかはのかけまても思ひしらする夕つくよ哉

風思縱非二華麗體一　以レ名可レ賞女郎花

五百六十九番

左　持　具親

大かたのこのてる月の影までも宿るならひに秋はきにけり

右　釋　阿

七夕のあかぬ(名殘イ)別の袖よりや秋は露けきこころとなるらん

蟾兎影將牛女涙　秋初景氣互蕭條

五百七十番

左　顯　昭

さしてなと年に一夜をわたしけんおもへはつらしかさゝきの橋

右勝　俊成卿女

むくらはふ宿ともわかす秋はきて心つくしに月そもりくる

綠蘿簷破月空濤　臥月誰尋烏鵲橋

五百七十一番

左持　女　房

七夕の雲の袂やぬれぬらん明ぬとつくる秋風のこゑ

右　越　前

七夕の涙やそへてかへすらん我衣手もけさはつゆけき

想像曉更牛女別　兩方衣濕涙相幷

五百七十二番

左　左大臣

旅人のいゑのゝおはな手枕にむすひかはせるなみなへしかな

右勝　定家朝臣

松の葉のいつともわかぬ陰にしもいかなる色とかはる秋風

女郎花冷露無艷　君子松高風有情

五百七十三番

左持　前權僧正

秋のさかりくもらぬ空や久かたの月の桂のもみちなるらん

右　通具朝臣

秋はきていくかもあらぬ空にしも心つくしの星合にかけ

只看月桂星楡影　秋意何强有淺深

五百七十四番

左　公繼卿

七夕の袂のちりははらふとも猶むつことはつきしとそおもふ

右勝　家隆朝臣

(玉葉)秋風にもとあらの小萩露おちて山かけさむみ鹿そ鳴なる

山間人家宜賞翫　鹿鳴花下鹿鳴音

五百七十五番

左勝　公經卿

わひつゝは玉かと問し白露のなきまとはせるしのゝめの空

右　雅　經

なとつれて身にしむ風の吹しよりむすはぬ袖に荻の上露

曉露如珠仍薄黯　昔時感思與今同

五百七十六番

左　季能卿

草のはに(はらふイ)露こほるとや思ふらん風こそしらね暮かたの空(梢イ)

右勝　寂　蓮

女郎花なひきもはてぬ秋風に心よはきに露の下荷

猿猴豈顧周公服　俗骨草摸賓俗風

五百七十七番

左持　宮内卿

宮城野やのはらの床なかり衣風にまかする萩か花すり

右　　家　長

あせつたふ鳥羽田の面の夕まくれわくろいなはにうつら鳴也

若論二野宿鹿鳴艶一　盍レ比二田疇鶉咲聲一

五百七十八番

右　持　　讃　岐

秋はまたあさかの野らの朝露にさしもしほるゝ旅衣かな

右　　三　宮

七夕のあかぬ別のなみたゆへもみちのはしや色まさるらん

逆旅路將二靈迹路一　露光涙色欲二相爭一

五百七十九番

左　　小　侍　從

なきわふる露にやしほる七夕のかへる朝のあまの羽衣

右　勝　　内　大　臣

こしちまて秋風吹とたれ告て都にけさははつかりのこゑ

萬里秋風胡地報　望レ雲先慈遠鳴來

五百八十番

左　　隆　信　朝　臣

秋といへは心も色に成ぬへしおほなにましりさく花なみて

右　勝　　忠　良　卿

雲井より鴈の泪やをくら山ふもとの野への萩の上の露

詞花縦伴二野花興一　鴈涙相加添レ色哉

五百八十一番

左　勝　　有　家　朝　臣

ふちはかま一もとゆへの色よりも香そむつましきのへの秋風

右　　兼　宗　卿

花の名はたれかつけけん女郎花心ありけるむかしなりけり

人心定染二蘂蘭色一　況有二秋風帶二異香一

五百八十二番

左　　保　季　朝　臣

袖に又いつより露のなれぬらん風こそ秋のはしめと思ふに

右　勝　　通　光　卿

思ひこしなかめはこれか秋萩の花にほひゆく野への夕くれ

不レ憶尋二常風露趣一　猶宜二潟暮草花粧一

五百八十三番

左　　頁　平

むらさきの色にそ匂ふふちはかましらぬ主さへむつましき哉

右　勝　　釋　阿

夕月夜このまもりくるよひのまそ心つくしのはしめ成ける

微光初冷林間月　秋感且知向後添

五百八十四番

左　持　　具　親

心なき草の秋も花すゝき露なきあへぬ秋は來にけり

右　　俊　成　卿　女

秋風に外山の鹿は聲たてゝ露ふきむすふをのゝあさちふ

草露無レ情還有レ意　何准麋鹿與相衆

五百八十五番

左　　顯　昭

秋風に絶まおしとや思ふらん錦をさらすまのゝ萩はら

右　勝　　　　　　丹　　後

七夕のおはぬたえまをかそへしは此世にみする月日成けり

詞中有レ錦而非レ錦　猶異二文君機上功一

五百八十六番

左　勝　　　　　　女　　房

日影さす岡への松の秋風に夕暮かけて鹿そ鳴なる

右　　　　　　定　家　朝　臣

露をおもみ人は待えぬ庭の面に風こそはらへもとあらの萩

若比二西施顔色美一　君詞妖艶尚無レ窮

五百八十七番

左　　　　　　左　大　臣

さをしかのなきそめしより宮城のゝ萩の下露をかぬ日そなき

右　勝　　　　　　通　具　朝　臣

七夕のあかぬ涙にをきそめてこれより秋はあかつきのつゆ

風情高下以レ之識　禽獸豈覃二星漢光一

五百八十八番

左　勝　　　　　　前　權　僧　正

ころもうしはつかりかねの玉札にかきあへぬものは涙なりけり

右　　　　　　家　隆　朝　臣

とことはにかはらぬ風も萩のはにそよく音より秋の夕暮

秋雁懸レ書南嚮處　宜哉華洛斷二人腸一

五百八十九番

左　　　　　　公　繼　卿

宿ちかき野への小萩や秋霧のたちのこしたる錦なるらん

右　勝　　　　　　雅　　經

さきにほふ千種の花の末葉よりうすきりなびく野への夕風

裁レ錦秋花皆舊事　靡レ風夕霧是新詞

五百九十番

左　　　　　　公　經　卿

たれとたにいはたの小野のふちはかまおほめく暮に匂ふ袖哉

右　勝　　　　　　寂　　蓮

あれにけり籬を野らとみし程によもきか露も軒の玉水

蓬蒿露濟如レ懐レ舊　試識佳名夢後貽

五百九十一番

左　　　　　　季　能　卿

たれゆへに野と成はてゝふか草の里のお花にうつら鳴らん

右　勝　　　　　　家　　長

さても又露をくことのかはらぬは袖にうつれる萩か花すり

秋鶉鳴什宜二雌伏一　深草故郷眼不レ驚

五百九十二番

左　勝　　　　　　宮　　内　　卿

我のみと聲なたてそ嶺の松心はかりは秋のうは風

右　　　　　　三　　宮

秋はきのうはゝ下葉の露けさや鹿と蟲との涙なるらん

松與二荻聲一風互好　鹿將二蟲涙一露無レ情

五百九十三番

左　持　　　　　　讃　　岐

續千載 さびしさに秋の哀をそへてけりあれたる宿の萩の上風

右　内大臣

秋きぬと荻のうはかせうたかひて萩の下露心なかるな

可レ察風露少二秋興一　何況右方雜二響應一

五百九十四番

左勝　小侍従

たゝならす見ゆるまかきのしのすゝきいかなる露の契成けん

右　忠良卿

おのへよりかよふ嵐にたくひきて松の梢にさをしかのこゑ

松上鹿聲難二事舊一　若論二最薄一倚爲レ賭

五百九十五番

左持　隆信朝臣

しら露のなくとは野への花をみてぬとはしのはん荻の上風

右　經宗卿

朝夕にむかひの野への女郎花みるともあかし花のすかたは

寤寐望將二朝暮望一　野花色々各非レ珍

五百九十六番

左持　有家朝臣

袖のうへにたれかはかゝる露はなく我身ひとつの秋の夕暮

右　通光卿

女郎花あさちか草のまくらにてなのみ野原なたひねとや思ふ

滿レ衣露爲レ誰涙　可レ比二女郎似一旅人一

五百九十七番

左持　保季朝臣

風ふけは雲はのこらぬ山のはに月なよこきるはつ雁のこゑ

右　釋阿

夏の野は草のしけみのさゆりはも秋は露にやしほれはつらん

月前新雁露中草　視聽共知レ觸レ物幽

五百九十八番

左　良平

これや此夜るなく蟲の涙とて玉たつらぬくまのゝいとはき

右勝　俊成卿女

いかなりし夜はのあはれに月も又秋にひかりなりそめけん

良夜佳期事不レ賞　昔誰計會月將レ秋

五百九十九番

左持　具親

しのふれと色にやいつるをみなへし物やおもふと露のなくまて

右　丹後

たゝはのみ思ひみたるゝかるかやの世を秋きぬと風やつけゝん

秋風秋露滿レ秋草　温レ故新詞彼是宜

六百番

左持　顯昭

そむくとて恨もはてし女郎花又吹かへすかせもこそあれ

右　越前

たれか又とめて折つる秋霧の立かくすらん萩のにしきを

六百番歌共興少　恨猶左右互凡卑

千五百番歌合巻第九　秋二　御判

六百一番

左　　　女　　　房

このゆふへ風吹たゝぬ白露にあらそふ萩なあすやかもみん

右勝　　　通具朝臣

夕まくれ待人はこぬ故郷のもとあらの小萩風そとふなる

なの〳〵たてまつれる百首をつかひて廿巻の歌合として人々判申内に二巻よしあしなさため申へきにて侍に愚意のおよふ所勝負はかりはつくへしとはいへとも難になきてはいかに申へしとも覺侍らす左右の志もに一文字計な付んは無下に念なきさまなるへしよりて判の詞の所にかたの樣に卅一字なつらねて其句の上ことに勝負の字計な定申へき也

みせはやな君な待よの野への露に枯まくおしく散こ萩哉

六百二番

左勝　　　左　大　臣

きり〳〵す草葉にあらぬ我か床の露な尋ていかて鳴らん

右　　　家　隆　朝　臣

秋はなな心つくしの木の間より月にもりくる棹鹿の聲

とにかくに心そとまるはにはあらてかつなく露のちりまかふ秋

六百三番

左勝　　　前　權　僧　正

新古今 鳴鹿のこゑにめさめて忍ふ哉みはてぬ夢の秋の思ひな

右　　　雅　　　經

尋てもたれかいとはん三輪の山きりのまかきに杉たてるかと

忍ふ夢かつ〳〵覺ぬ宵の月よわたる山の木々の秋風

六百四番

左　　　公　繼　卿

武藏野にこれもむつまし女郎花若紫のゆへならねとも

右勝　　　寂　　　蓮

野へまても尋て聞し蟲の音のあさちかそこにうらめしき哉

むくらはひしけきまくすのはの下によすから鳴か志のゝめの蟲

六百五番

左　　　公　經　卿

きり〳〵す鳴てよすから明す也まのゝうら萩色かはる比

右勝　　　家　　　長

秋風に思ひみたるゝかやふきのこやのね覺になしか鳴也

なく露のしのにみたるゝかるかやのかつみるからに散か涙の

六百六番

左持　　　季　能　卿

いささらは妻に結はん女郎花旅ねの庵の秋のね覺に

右　　　三　　　宮

ちりぬれはかけもとまらす底にけり野澤の水の萩か花すり
　おれかへりなひくすそのゝ下萩のほの上てらす遠山の月

六百七番

左　勝　　宮内卿

物やおもふ秋にや空のなりそむるかはらぬ床にね覺をそする

右　　内大臣

七夕のたへぬおもひやいかならん雲の衣なこよひかりかれ
　閨の上にさしも時雨のめくりきてよはのさ衣しほりわひつゝ

六百八番

左　持　　讃岐

花すゝき秋のかたみになる時は聲もほに出て鹿も鳴也

右　　忠良卿

遠山田いなはほのかに鳴なきて雲のたえまに三日月のかけ
　遠山田打そよくなる時しもあれ恨もあへすかよふ鹿のね

六百九番

左　　小侍従

いかにせむ風にしたかふかるかやの思ひさたむる方もなき世な

右　勝　　兼宗卿

分きつるなさゝか原の朝露に袂ひまなきたひ衣かな
　見渡せはきつゝなれにし野への小篠かたみと袖に散かし
ら露

六百十番

左　　隆信朝臣

夕暮は野原のけしきたゝならて露吹かへすくすのうら風

右　勝　　通光卿

たれとなくまねくお花のひとつ野に心をきけるくすのうら風
　よの常にきゝもなれにし風の音も身にしむ暮のきり〳〵
す哉

六百十一番

左　持　　有家朝臣

みよし野のたのむともなき玉つさないく歳かけて鳴ぬらん

右　　釋阿

朝露にはかなくうつす月草も秋のかたみの色と成らん
　時さとや森の秋風夜にも夜寒に成ぬしのゝまの空

六百十二番

左　　保季朝臣

涙のうへにいさよふ月な松島やをしまかいその秋の初風

右　勝　　俊成卿女

新古今　風ふけはしのにみたるゝかるかやも夕にわきて露こほれけり
　月すめは夢やはむすふ野への庵かりの涙にちりまかひつ
つ

六百十三番

左　持　　良平

さひしさの心のかきり吹風に鹿の音さそふ野への夕暮

右　　丹後

から衣すそ野をすくる秋風にいかに袂のきつゝしほる覽
　千々に思外山の月の山おろしにせはき袂にむすふ白露

六百十四番

左　勝　　具親

たえ／＼に月より過る村雲の雨うちすさむ荻のうは風

右　　越前

秋はきの露に袂を分なしてほさんもおしき花のぬれ色

秋の月めくりてすめる野への露かさなる玉を千里にそしく

六百十五番

左　　顯昭

ぬししらぬ若むらさきの蘭たかゆかりとて風のたつらん

右　勝　　定家朝臣

萩にちやうへてくやしき秋風はふくをすきみにたれかおかさん

なきまよふ木ことの露を山風のかつふくからにちる木葉哉

六百十六番

左　　女房

女郎花枝もとをゝにをく露を待とるかせに蟲うらむ也

右　勝　　家隆朝臣

雲消る空をかきりとすむ月の光もなるゝ秋の袖かな

空きよくてる月影の山里にさしてもなれぬ柴あめるかと

六百十七番

左　勝　　左大臣

とこよにていつれの秋か月はみし都わすれぬ初かりの聲

右　　雅經

夕つくよやとる山田の露のうへにかりねあらそふ稲葉のかけ

遠山をこえ行鴈の夜はの聲夜寒に成ぬしはのかり庵

六百十八番

左　勝　　前權僧正

こ萩はられぬ夜の露やふかゝ覧獨ある人の秋の栖かは

右　　寂蓮

たれか又千々におもひをくたきても秋のこゝろに秋の夕暮

こゝろより初鴈金そきこゆなるよるとな鳴そしのゝめの月

六百十九番

左　持　　公經卿

をみなへし秋はきましり開ぬれはしからむ鹿や心わくらん

右　　家長

なきすてゝ鹿はつれなき山下風にすこみおとろくこたの音哉

闇のへやなひくかたのゝしのゝ薄はむけの露も時を待ける

六百廿番

左　　公經卿

雲にまかふ花ともいはしなかむれは月もよしのゝ山路成けり

右　勝　　三宮

新後撰　行人もとまらぬ野への花薄まねきかねてや露こほるらん

住侘ぬすそのゝ庵の霧の中に夜ふかき月のしのゝめの影

六百廿一番

左　持　　季能卿

わきもこかすそわの田ゐに風過て衣手寒し初かりの聲

右　内大臣

あさちはらたへ忍ふへき夕かは露ふきはらふ風のけしきに

遠山田うす霧かくれ飛鴈なうちなかむれは風そ身にしむ

六百廿二番

左持　宮内卿

見る人の心つくせと初秋の空よりかはる夕月夜かな

右　忠良卿

ふちはかま嵐になひく末葉より紫くたく野への夕つゆ

ひとりたれ外山の月をよのひかれ木々の木葉に風恨らん

六百廿三番

左勝　讃岐

とれはけぬよし枝なから宮城のゝ萩に玉ゐる秋の夕露

右　兼宗卿

尋てもたれかはとはん鶉なく野へにあはれはふかくさの里

部人きてもとへかし松風のけはしき里のよはのけしきを

六百廿四番

左持　小侍従

たのめつる人まつよゐに哀又心さはかす萩のうは風

右　通光卿

わりなゝなかやか下のみたれ葉に露吹むすふ秋ゝ夕かせ

なく露に離くなかやの葉れつゝほすまゐなしとそはゝこ

たへよ

六百廿五番

左　隆信朝臣

人はこすさひしかれとや萩の葉のそよくはかりの秋の山さと

右勝　釋阿

涙にあらふから錦ともみゆる哉野島かさきの秋萩の花

にほの海やしかのうらわに霧はれてかけくもりなき月の

影哉

六百廿六番

左　有家朝臣

待出て後さへつらくるこゝろかな雲にいさよふ山のはの月

右勝　俊成卿女

忍へき人たにたへぬ秋のよな野はらの蟲の露に鳴らん

昔たれよのに露なく野へにしもかゝる秋とは契なきけん

六百廿七番

左勝　保季朝臣

大かたの月には風もつらからす宿かる露のあるかあたなる

右　丹後

さまさまに花のひもとく秋ののにいかなる露のむすほゝる覧

片敷のせはき袂なのへとてやかゝしも露のちりまかふら

ん

六百廿八番

左勝　良平

秋きてはいくかになりぬ夕月夜ふけ行空に影殘るまて

右　越前

吹まよふ嵐のつてにさそはれて松にみたるゝ棹鹿のこゑ

柴の戸やかよふ嵐の庭の松にけにもさひしきよはの寢か

な

六百廿九番

左　具　親

いとひえて雲なき空となるまゝにいや遠さかる山のはの月

右勝　定家朝臣

棹鹿のなく音の限つくしてもいかゝこゝろに秋の夕くれ

石ま行山下水のうす氷けにはこほらてすめる月影

六百卅番

左持　顯昭

友なしみわかかり衣こそさひしけれ野にたつ鹿は妻よはふ也

右　通具朝臣

我もしるおもひし物をもろ共に音にたてつへき夕まくれ哉

みるからに涙そ凉しきにほの海や暮行空のしかのうらか

せ

六百卅一番

左　女房

分ゆけはしけくも露のみゆる哉月吹やとせ野への秋かせ

右勝　雅經

よしさらは袖にも影をやとしてむ月待宵の山のした露

峯に吹木々の嵐に空晴てゝわたる月のきよき比哉

六百卅二番

左　左大臣

物おもへとするわさならし木間よりおちたる月にさをしかの聲

右勝　寂蓮

露さむき聲になたてそ荻たれかはこゝらの草のはらとは

あらさりきかゝる露たく野への庵に槙の戸たゝくけさの

木からし

六百卅三番

左持　前權僧正

ふちはかま花にねしとふ夕暮にこたふる風の荻の上そも

右　家隆

野へみれは朝夕露のおき原やなきあへぬ程に秋風そ吹

人はこて年ふる秋の柴の庵に樹の落葉を風そ問ける

六百卅四番

左持　公繼卿

むかしたれ秋ににせてしのひけんお花か露をおきふ秋かせ

右　三宮

風わたる萩の上葉にやとりきて影うちそよく秋のよの月

手にむすふいしゐの水も人とはて年へにけりなしかの山

かせ

六百卅五番

左持　公經卿

すめはすみくもれはくもる涙かな物おもへとて月にはあられと

右　内大臣

かへになく秋の末葉のきり／＼すいつまて草にすまんとすらん

となへ川うす霧なひく瀨々の浪にむれたる千鳥風に行也

六百卅六番

左　季能卿

きりまよふ深山のおくのすまゐまてやれはやらるゝ我心哉

右　勝　　忠　良　卿

眞葛はふまのゝはまちの夕風に恨てかへるおきつしら浪

なかむれは峯の嵐に空晴て影ゝもりなき月の比哉

六百卅七番

左　勝　　宮　内　卿

つねよりも哀そふかき霧の中に鹿の立なく峯の夕暮

右　　兼　宗　卿

山里の秋の哀の身にしむは鹿の音そふる萩の夕風

みつしほやさしうつ浪の松かねにはしきまての夜はの

浦風

六百卅八番

左　勝　　讃　岐

新拾遺
なみなへしよかれぬ露をなきなからあたなる風に何なひくらん

右　　通　光　卿

さよふけてあはれときけは袖の上に露をつたふる荻の上かせ

みわの里きてもとへかしはる〳〵と待もうらめしくすの

秋風

六百卅九番

左　　小　侍　従

はるかにそおのへの鹿はなくなれと涙は袖の物とこそみれ

右　勝　　釋　阿

名こそあらあみるもなつかし女郎花枝さへ花の色に匂ひて

庭の萩のはむけの風に日數へてよな〳〵やとるしのゝめ

の月

六百四十番

左　持　　隆　信　朝　臣

雲はらふ風に哀を先立て出るもしるき山のはの月

右　　俊　成　卿　女

引つらねかへりし空に音信て又袖ぬらす秋のかりかね

おきつなみ浪吹上の濱風にてらすともなき磯のいさり火

六百四十一番

左　持　　有　家　朝　臣

すゑの松まつよふけ行空晴て涙よりいつる山のはの月

右　　丹　後

聲たてゝむかはかりこそなかね共袖にそしるき秋の夕暮

時は秋物おもへとや庭の萩よかれぬ露をしたふ秋かせ

六百四十二番

左　勝　　保　季　朝　臣

なかめ侘ぬ心を秋にとめしとて思ひすつれとさらしなの月

右　　越　前

秋風の身にしむ夜はのね覺こそ物の哀の限なりけれ

みわたせは木々の木葉も晴ぬへし松にのこりてくるゝ秋か

せ

六百四十三番

左　持　　良　平

ぬのすゝき上葉の露に宿かりて風にみたるゝ秋のよの月

右　　定　家　朝　臣

吹きぬと袖におらぬゝ夕露にやかて木間の月そやとれる

みる袖のなみた事とひやとる月さひしくもあるか柴あめ
る頃

六百四十四番

左　持　　　　　　　　　　　具　　　　　親

秋といへはこれはならひよ夕まくれ袖に涙と何おもひけん。

右　　　　　　　　　　　　通　具　朝　臣

下荻に露きえわふる蟲の音にうたてさひしき風の音哉

人はこて年ふるさとを庭そとふ木ことに秋の風はふきつゝ

六百四十五番

左　持　　　　　　　　　　　顯　　　　　昭

小萩原にしくゝ色なみぬ人や露をあたなる物といひけん

右　　　　　　　　　　　　家　隆　朝　臣

さやけさは秋のならひの夜はの月思へとえこそねられさりけれ

瀬々くたす宇治のさと人舟とめて涙にすむ月しはしかも
みよ

六百四十六番

左　　　　　　　　　　　　女　　　　　房

風雅
あはれむかしいかなる野への草葉よりかゝる秋風吹はしめけん

右　勝　　　　　　　　　　　寂　　　　　蓮

新後撰
おもひあまる心の程もきこゆ也しのふの山のさをしかの聲

よはの月に鹿の立なくみ山より霧を分つるはつかりのこ
ゑ

六百四十七番

左　勝　　　　　　　　　　左　大　臣

故郷は我まつ風をあるしにて月に出こしさらしなの山

右　　　　　　　　　　　　家　　　　　長

秋にそむ心もたへすみる月のほのめく影にさをしかの聲

たゝいつから柴の戸たゝく風の音も松にそふよふくるゝ夜
每に

六百四十八番

左　持　　　　　　　　　　前　權　僧　正

あはれにもおなしみとりの春の草の心々に色かはりゆく

右　　　　　　　　　　　　三　　　　　宮

蟲の音も千種の花も野へなから鹿なのみまつ庭のあさちふ

小山田になるこひくてふしつのおはほむけの風を友と聞
らん

六百四十九番

左　持　　　　　　　　　　公　繼　卿

花すゝきまねきとめてや思ふらん道行くれの野へのたひねを

右　　　　　　　　　　　　內　大　臣

月影をほとなき袖にせきかねて秋のあはれをもらす涙か

なにとなくなきまよふ露そおろかなき外山にむすふ柴の
假庵

六百五十番

左　　　　　　　　　　　　公　經　卿

さえわたる光に霜の色そへて野原の蟲も月に鳴なり

右勝　　　　　　　　忠　良　卿

千々におもふ心は月にふけにけり我身ひとつの秋となかめて

み山へやきりの籬の萩かうへにかことかましき露の色かな

六百五十一番

左持　　　　　　　　季　能　卿

故郷の庭なはなのか野へにしてさすかにたれなまつ虫の聲

右　　　　　　　　　兼　宗　卿

山田もるすこかすまゐのいかならんいなはの風の秋の夕暮

時しもあれ物おもへとや庭の萩に夜すからかよふ鹿の聲哉

六百五十二番

左持　　　　　　　　宮　内　卿

おきちはら下葉かたしく袖のうへに露なきかふる野への秋風

右　　　　　　　　　通　光　卿

秋はたゝ荻の葉すくる風の音に夜ふかく出る山のはの月

きゝの入あひの鐘に目はくれて外山の月に鹿そ鳴なる

六百五十三番

左　　　　　　　　　讃　岐

一時の花とみれ共女郎花秋のちきりを世々にむすはん

右勝　　　　　　　　釋　阿

むらさきの色なはのこせ藤はかま露は嵐にくたけちるとも

月きよみはらのみなとの濱千鳥夜ふかき空の霜になく也

六百五十四番

左持　　　　　　　　小　侍　従

はかなさをともにみんとや思ふらんあたなる露に宿るいなつま

右　　　　　　　　　俊　成　卿　女

よしさらはかならす人にあはすとも今夜の月にねなん物かは

友さそひ浦わのきりに飛かりはうはの大空にかへる玉つさ

六百五十五番

左　　　　　　　　　隆　信　朝　臣

秋をへてなかめぬよはもなき物を猶めつらしくすめる月哉

右勝　　　　　　　　丹　後

野へならてしからむ鹿はなけれとも露になれふす宿の萩はき

下にのみかこふか袖に野への露かつ〳〵やかてこらふ涙哉

六百五十六番

左勝　　　　　　　　有　家　朝　臣

秋きては宇治のはしもりなれも又夜わたる月を哀とやおもふ

右　　　　　　　　　越　前

おもひこし秋のあはれを数々にかきつらねたるかりの玉つさ

初時雨し　れてわたる山風にさひしさおもふ鹿のこゑ哉

六百五十七番

左持　　　　　　　　保　季　朝　臣

浦風にゐほちのすゑも霧はれて月に鹿行ふたの浮島

右　　　　　　　　　定　家　朝　臣

松虫の聲をとひ行秋の野に露尋ける月のかけかな

みつ嶋になみ立くらし夜もすから岸の松かえ風さはく也

ふかきよの心のうちなあらはして霧まの月になしか鳴也

右　雅宗卿

夕暮に荻の上葉に風さえて花にやとかる虫のこゑ〳〵
　千々におもふ時とは月のやとれともせはくや袖は武藏の
の露

六百六十六番

左勝　季能卿

草葉にもおらぬ袖さへ志ほれけり露はきためぬ置所かな

右　通光卿

初かりはかへりし雲の跡わけて又都にもおもこたるけり
　雲路より澤へたたのむ初かりのよはの涙に時雨おつなり

六百六十七番

左勝　宮内卿

谷の戸はまた明やらぬ霧のうちに出る朝日は影たけにけり

右　釋阿

花も露もいかに心なくたけとて秋は野分の吹はしめけん
　秋やまのさびしき庵に人はこて四方の嵐を鹿そわふなる

六百六十八番

左持　讃岐

君か代の秋の空まてなかめける契うれしき月のかけかな

右　俊成卿女

行めくりなれぬる空の秋の月さて〳〵もあかぬ光そひけり
　みるからに涙そくもる宿の月さびしとや思ふはの扉を

六百六十九番

左持　小侍従

朝ことの露にはなにのなゝならん我袖のみそ其れとしらるゝ

右　丹後

うき世とはおもふ物から鈴蟲のふりすてかたき身ないかにせん
　おきつかせ涙や吹らんよかのうらにてる月影の磯にさや
けき

六百七十番

左持　隆信朝臣

夜さむる月は都にかはらねと鹿なくゝ野へに秋風そ吹

右　越前

さま〳〵に秋のあはれは［illegible］なことゝ萩ふく風にふく物になこ
　獨のみとしふる軒の忍ふ草さてとふものは風の音のみ

六百七十一番

左持　有家朝臣

すまの浦にわふとこたへし跡もなしよな〳〵月の影はとへとも

右　定家朝臣

おもひいれぬ人の過行野山にも秋は秋なる月やすむらん
　水無瀬川なかむる空のよはの月清き早瀬にかけやとしけ
り

六百七十二番

左持　保季朝臣

長夜の哀ないかにみたやもりいなはの露に月なやとして

右　通具朝臣

高砂のおのへの秋よいつとても松なはらはぬ風ならね共

千たひうつとたちのさとのさよ衣旅ねの夢にむすほゝれつゝ

六百七十三番

左　　丹後

おもひやるむかしの秋の哀まて今夜のやとにみする月影

右勝　　家隆朝臣

志かの海やにほてる浪をみわたせは月にいさよふあまの釣舟

影さよき月松かえに風すきて汀に浪なきひなはよそなき

六百七十四番

左　　具親

くもるといふ思ひはかりそさらしなやをはすて山も月は入けり

右勝　　雅経

（新千載）かつらきや高間の峯に雲はれてあくる侘しき有明の月

たれか又かゝるみ山の槇の葉に影もりかぬる月なみるらん

六百七十五番

左持　　顯昭

都へはなと出やらぬあふさかの關に入ぬるもち月の駒

右　　寂蓮

涙をはよその袂になしはてゝ聲をは鹿のなのかものとはなかやはらなひく夕の柴のいほにてらすともなき稲妻のかけ

千五百番歌合巻第十　秋三　御判折句歌

六百七十六番

左　　女房

（續千載）物やおもふ雲のはたての夕暮に天津空なる初かりのこゑ

右勝　　三宮

初かりはこし地の雲を分過て都のきりにいまそ鳴なる

此ころは鹿こそはなけ山里のさひしくむすふ柴の庵に

六百七十七番

左勝　　左大臣

虫のねはなきの落葉にうもれて霧のまきさに村雨そふる

右　　内大臣

あら玉かなにそと問へは女郎花露のきえつゝしほれふしぬる

むかし思ふ志かの都の山風に里あれぬとや鹿もなくらん

六百七十八番

左勝　　前權僧正

わたつ海の秋なき浪の花に猶霜なくて物はこはの月さき

右　　忠良卿

明石かた浦かせさひし月影の浪にきえ行くす霧の空

下葉ふく森の秋風かせさゑて月すむ露にかよふそて哉

六百七十九番

左勝　　公繼卿

しのゝめの暁露やそめつらんよのまにかはる萩の上のいろ

右　　兼宗卿

あまのはら空行月をいかなれは我か物かほにみする山のは

よさの浦や嶺風松をはらふ也清き月夜のはるかなるかせ

六百八十番

左勝　　公経卿

長岡や田つらの庵のあれまくにね覺いさなふ鴫のはねかき

右　　通光卿

この比はおのへの鹿の聲によりふもとの里にね覺かちなる

しかの海にきつゝもとひこ山風にさひしくもあるか鹿の

初聲

六百八十一番

左　　季能卿

身をくたく心の色は夕ま暮千草の花にあらはれにけり

右勝　　釋阿

しめなきていまやとおもふ秋山のよもきかもとに松虫の鳴

武藏野や下葉露けき萩かえによな／＼秋のしかや鳴らん

六百八十二番

左　　宮内卿

雲かゝるいこまたかねに月おちて三輪のひはらにましら鳴也

右勝　　俊成卿女

さらてたになくさむ物か長き夜に月より外の獨ね覺は

ねもやらすさそな深山にめさめつゝよわたる月をしのふ

秋哉

六百八十三番

左勝　　讃岐

なかめつる有明の月はかたふきて山より出るさをしかのこゑ

右　　丹後

秋風にむら雲はるゝ月みれは心の中も涼しかりけり

しのゝめやかり田の面に風さえて月にむれたる鴫のこゑ

哉

六百八十四番

左持　　小侍従

霧ふかき難波の浦のもかり舟いとゝあしまをよせやわつらふ

左　　越前

我さへに涙そおつる秋かせにしのひもあへぬ虫の聲々

契あれや常世のかりの山を分て都の空にむれてきにけり

六百八十五番

左　　隆信朝臣

きてみれはさひしかるへき家ゐかは月も住けり秋の山里

右勝　　定家朝臣

高砂の尾上の鹿の聲たてし風よりかはる月の影哉

闇のへや軒もる月のへたてゝ哉よわたる雲に時雨すさつゝ

六百八十六番

左勝　　有家朝臣

しのすたれ秋はかけても槇の戸をさゝて有明の月をみる哉

右　　通具朝臣

鴈もこはまてと契をすかはらや伏見の床に衣うつなり

こゑ

六百九十四番

左　持　　公　継　卿

行人のもすそもぬるし秋といへはあさなく露のふか草の里

右　　通　光　卿

あさちふや吹くる風をたよりにて光をちらす露の月かけ（な）

新拾遺入之

閨の上やならの落葉に時雨ふりはの〳〵出ると空の月

六百九十五番

左　持　　公　経　卿

秋をへていく夜もぬらぬ故郷の月はあるしにすみかはりつゝ

右　　禅　阿

續古今

あれわたる秋の庭こそ哀なれましてや消なん露の夕くれ

身にしめてなかむる比の宿にしもさもあやにくの鹿のこゑ哉

六百九十六番

左　　季　能　卿

いく秋のためしをかひく諸人の行あふさかのもち月の駒

右　勝　　俊　成　卿　女

くすのはふまかきの霧に鳴鹿も恨かほなる風の音哉

松にふく風こそあられ霧の中にかすみし春の月の面かけ

六百九十七番

左　勝　　宮　内　卿

わすれすは又こん秋の空まてと雲にたのむるあり明の月

右　　丹　後

秋のよの月もりあかす柴の戸をこと問ふものは嶺の松かせ

くすのはに物うらめしく風過て月はあさちに影やとしけり

六百九十八番

左　勝　　讃　岐

秋の月いかに待出てなかむれはさやけき影のまつくもるらん

右　　通　前

ひろ澤の池しもいかに昔より月みる夜はのさかと成らん（なりけんイ）

いなは山けはしくもあらぬ松風のくもらぬ月の影はらふ

六百九十九番

左　　小　侍　従

つれよりも月に心のすむ夜哉かくてや人の雲にいりけん

右　勝　　定　家　朝　臣

續古今

心のみもろこしまてもうかれつゝ夢ちに遠き月の比かな

草枕もりくる月にうらむなりけさたつ山のすゑの白雲

七百番

左　　隆　信　朝　臣

さのみやは月にふするのいをやすみねられぬ物を秋のよな〳〵

右　勝　　通　具　朝　臣

影やとす露のよすかの秋くれは月そすみけるをのゝしの原

夜はの秋すむ月影のかけきよしまさの〳〵はいつの〳〵み

の空

七百一番

左　　　　　　　　有家朝臣

秋のよは月見よとてやなか月の有明にさへなりにける哉

右勝　　　　　　　家隆朝臣

わすれすや昔のかさい浦の月猶ふるさとにめくりあふとは

みるからに影そさえ行さゝの庵よとこの月の霜のさむしろ

七百二番

左持　　　　　　　保季朝臣

鳴鹿の聲より落る夕露に萩の下葉のところせきまて

右　　　　　　　　雅經

續古今
ともしせしは山しけ山しのひきて秋にはたへぬさをしかのこゑ

大かたのなかむる宿のふた萩もほに出つゝそ時を待ける

七百三番

左勝　　　　　　　良平

鴈金にいさ事とはんこしちより部にむかふたひの心を

右　　　　　　　　寂蓮

空さえてすむへき月を山のはに星の光のかねてみすらん

此ころは鹿も月にや契りけんよかれぬ露のしのゝめの空

七百四番

左勝　　　　　　　具親

人はいさくるしき物としりぬれはよそにはきかし松虫の聲

右　　　　　　　　家長

秋の夜は虫の音のみとおもひしに月影しけきあさちふの露

よはの月空さえわたる山風に里にも秋の霜やなくらん

七百五番

左持　　　　　　　顯昭

岩かねにたかはかりしきなかむれは吉野のたけに月かたふきぬ

右　　　　　　　　三宮

おりしもあれひとりなかむる大空の有明の月に初鴈のこゑ

庭の松ねやもる月をとふからに千々にもの思ふ風の音哉

七百六番

左　　　　　　　　女房

新後撰
小山田のいなはかたより月さえてほむけの風に露みたる也

右勝　　　　　　　忠良卿

夜さむなる松のあらしをとひかほにとを里をのに衣うつ也

夜はの秋きそなかなしき虫のねも風のけしきも月のひかりも

七百七番

左持　　　　　　　左大臣

千たひうつきぬたの音をかそへても夜をなか月の程そしらるゝ

右　　　　　　　　兼宗卿

岩まよりもりくる水にやとしても心計の月はなかめつ

北よりやぬしさたまらぬ玉章をかけつゝ鴈の月にきつらん

七百八番

左勝　　　　　　　前權僧正

我門のわさ田かりねの草のいほに夢路うつろふ神なひのもり

右　　　　　　　　通光卿

都人とへかし秋の花さかりなさけこめたる露のまかきを
わくらはに里とふ人のたよりあらはよかれぬ月に忍と答へよ

七百九番

左　公継卿

みよしのゝきさ山きはに待月はとをちの里の影よりそみる

右勝　釋阿

秋の夜は光なことにそへよとや月の都にさためなきけん
みほの浦の清見か關に影やとす月はたひねもかはらさりけり

七百十番

左持　公経卿

あかて入月に恨やのこらまし山のはにくる夕なりせは

右　俊成卿女

新古今 色かはる露をは袖におきまよひうらかれて行野への秋哉
うらかれの下葉色つく秋はきの露ちる風にうつら鳴なり
・なしかへしなかむる秋をしのひても（ほしあへす）こほる、露の所せきまて

七百十一番

左　季能卿

秋かゝる月の光か露ゆへの秋のあはれかいかになかめん

右勝　丹後

いかなれは霞にきえし鴈かれは月の秋しも契なきけん
水きよき清瀧川の月影をよるとはみえすしのゝめの空

七百十二番

左　宮内卿

ことしけき都の空の月にたに秋はなかめのつきぬとそきく

右勝　越前

草ふかみ道ふみまとふ故郷にあれても月の影のみそすむ
くすのはもさそなうらむる野へにしもかたゑ露けく契る
露哉

七百十三番

左　讃岐

玉葉 あはれなる山田の庵のね覺哉いなはの風に初かりの聲

右勝　定家朝臣

もみちする月の桂にさそはれてしたのなけきも色そうつろふ
物思へにみたれて露そちりまかふ夜はにね覺なしかの聲
より

七百十四番

左　小侍従

くらき夜のやみにまよはん道にても今夜の月やおもひいつへき

右勝　通具朝臣

新古今 ふかくさの里の月影さひしさもすみこしまゝの野への秋かせ
嶺の月清き岩まにやとりきてさゝ浪氷る志かの山の井

七百十五番

左持　隆信朝臣

秋の夜は雲も心やあり明のかたふくまてもすめる月哉

右　家隆朝臣

月みはとたのめはなきし人はこてあさちか露に松虫そなく
目數へぬ外山の露にしほる袖きつゝなれにしから長歳

七百十六番

左　持　　有家朝臣

身のためにいそくとならはから衣かさぬる夜はゝ打もねなゝむ

右　　雅經

秋風にさそはれ野のなさへ思まであはれなさける
忘すよ清見か浦のかりまくら袂に涙をしほりわびしも

七百十七番

左　持　　保季朝臣

鳴くらすよもきかそこのさよ枕かたしく袖に松むしの聲

右　　寂蓮

み山出し山路の月の影のみそたゝりつけても友に成ける
峯の月なかめ馴ぬる宿にしもさこの袂を魂そこひける

七百十八番

左　　具平

心さへはるゝまそなき霧の中になかめ馴ぬる秋の山さと

右　勝　　家長

虫のねを荻ふく風やさそふらんそよくとすれは遠さかるなり
むさし野や下葉の露のよすからや清くも月のかけやとすらん

七百十九番

左　持　　具親

いたつらにねぬ夜の數と成にけり月ならぬ比の鳴の羽かき

右　　三宮

草枕なみたの露は秋風の事とふにしも落まさりけり
たみなへしなひく風とやしたふらんやゝふく露も打時雨つゝ

七百廿番

左　持　　顯昭

なかむれは千々に物思これそこの心つくしの秋のよの月

右　　内大臣

あくかれて今はと思山里にすみなれにける夜はの月哉
眞葛はふ見えゝ露もなきやそふなかむるよいのゝの空

七百廿一番

左　　女房

めくり行秋やはもとの秋の空月も昔のふかのふるさと

右　勝　　兼宗朝臣

なかむれは月は涙らに影さえてあかしのはまにつもる白雪
水の面に峯の松風やとりきてさそすみの江のしのゝめの月

七百廿二番

左　勝　　左大臣

すそのゆく衣にすれる月草のうつりやすくも過る秋哉

右　　通光卿

雲はらふ風を空に先たてゝ秋ともふるくすめるよの月
すゑの秋空はあくともいこれとや夜わたる月をしたふう

ら風

七百廿三番

左　　　　　　　　　　前　權　僧　正

露の染て色々になす紅葉はの又色々に露をそむらん

右勝　　　　　　　　　寂　　　　　阿

秋の月こゝには見えてさえさむし雪こむこゝは庭にこゝ露

さひしさはむしあけのせとの颱風に夜深き月にしく物そ

なき

七百廿四番

左　　　　　　　　　　公　　繼　　卿

涙のうつ玉の浦わのあら磯に光をくたくよはの月かな

右勝　　　　　　　　　俊　成　卿　女

月をのみ伏見のさとの秋の暮松風ならてとふ人もなし

槇の戸は月にまかせて夜やあかす桐の葉つたひ風は吹つ

つ

七百廿五番

左勝　　　　　　　　　公　　經　　卿

新古今 衣うつみ山の庵のしはゝゝもしらぬ夢路にむすふ手枕

右　　　　　　　　　　丹　　　　　後

さ夜ふけてきぬたの音のさむけれは衣かりかね空に鳴也

むさしのやすみける月を吹風にまかれぬ露や下葉そむら

ん

七百廿六番

左　　　　　　　　　　季　　能　　卿

はるゝゝと月みる空にあくかれて心にこゆるおはつせの山

右勝　　　　　　　　　越　　　　　前

袖のうへにくもらぬ夜はの雨過て月はくまなく住よしの里

みよし野やきりたつ秋も春そみる影おほろなる月は住つ

七百廿七番

左持　　　　　　　　　宮　　內　　卿

衣手は秋の山田いそほつとも月さゆる夜のつゆは拂はし

右　　　　　　　　　　定　家　朝　臣

いく秋を千々にくたけて過ぬらん我身ひとつを月にうれへて

なける露もとあらのこ萩隙をなみ枝もとをゝにすめる月

哉

七百廿八番

左持　　　　　　　　　讃　　　　　岐

夜もすからをきゐる露のいかなれは草の葉毎にぬるとみゆらん

右　　　　　　　　　　通　具　朝　臣

世中になひきおきふす下荻も末こす風に露は落けり

音にきくなるとの浦の鹽風にほのかにかよふ友千鳥哉

七百廿九番

左　　　　　　　　　　小　侍　從

なかむるに傾ふく月そうらめしき我はかくこそいりもやられね

右勝　　　　　　　　　家　隆　朝　臣

心なき身をさへさらにおしむ哉なにはわたりの秋の夕暮

なかむれは庭のあさちをはらふ風かけうちなひく月の影

秋

七百卅番

左 持　　隆信朝臣

明ぬるか外山の原の秋の月かたふく空に鴫のはねかき

右　　雅経

夕暮にいつくたいかになかめまし野にも山にも秋風そふく

秋の霜になかれもやらすかとこに月さえて河風ふすいかには

なし

七百卅一番

左 勝　　有家朝臣

秋の色なそむるなき名か立田姫ときはの山は鹿のみそなく

右　　寂蓮

なこりなく峯は嵐に雲落て軒はの空に有明の月

外山かせ木々の木葉をはらふらしおりかはさむくつもる秋哉

七百卅二番

左 勝　　保季朝臣

暮ことの露にの色のかはるらん時雨にまたし庭のあさちふ

右　　家長

秋の夜の野へにかほらぬ袖し露おりとやこゝに虫の鳴らん

窓ちかくたつきの音や柴の戸にかよふ山人つま木とるらん

七百卅三番

左 持　　巨　平

玉葉

衣うつまつかふせやの板まもるみきぬたのうへに月もりにけり

右　　三宮

草むすふ秋の野はらのかりねには月にそかはすさよの手枕

都人なとかとこぬ山の月さすやいほりの椎柴の門

七百卅四番

左 勝　　具親

またたいすきにかへたる浅きぬかな里わく物な秋の

右　　内大臣

風ふけは過行秋の立田山夜半に紅葉やひとりちるらん

閨のうちにさす月影に目覚つゝかたしく袖のつゆはらふなり

七百卅五番

左　　顕昭

むかしみし月はあはれやまさりけん顔かはりにさへぬるゝ袖も

右 勝　　忠良

秋風なくなるよことに身にしみてたのめぬたれな松虫のこゑ

都にも霧は立けり野も山もかきこめぬ秋のへきりむすひて

七百卅六番

左　　女房

おなしくはあはれしれらん人もかな鹿とむしとの秋の夕暮

右 勝　　通光卿

衣うつきぬたの音に賤のめかいそく心や夜はのあき風

よはの月あきつの浦をみわたせは岸の松かえはらふ秋かせ

七百卅七番

左勝　左大臣

秋風に箸鷹ならすかた岡の柴の下草色付にけり

右　釋阿

人とはゝいかにかたらん秋の山松のあらしにあり明の月（テイ）

時雨して晴ぬるよはの野への露なかつ〳〵袖にちらす秋かせ

七百卅八番

左勝　前權僧正

露は野へわか夕暮の袖な又かりのなみたのそめて過ける（あイ）

右　俊成卿女

夜なかされ月影さむみきり〴〵すよもきか本に聲よはる也

月をまつ夕になひく空の雲夜半には拂へ木々のあきかせ

七百卅九番

左　公繼卿

曲もなき月なしみれは秋のよも程こそなけれねぬに明ぬる

右勝　丹後

紅葉さに染る時雨もある物をなにはいかゝ月の色なそふらん

物おもはゝ身にしみかへれ千々にのみ夜はな詠て忍ふ月影

七百四十番

左　公經卿

玉ほこの行ての袖のてるまてに紅葉をあらふ雨の夕暮

右勝　越前

なくさまぬ心に月のめくりきて昔にかへるなはすての山

村雨の風打なひく下荻にかことかましく露むすふ袖

七百四十一番

左　季能卿

月みれはやかて秋のねさゝかな心のまゝ水なとみらむ

右勝　定家朝臣

新古今 秋とたに忘れんと思ふ月かけをさもあやにくにうつ衣哉

山路よりさすか月影柴の門みるもさひしき霧のまかきに

七百四十二番

左持　宮内卿

夜々なへて聲達さかるきり〴〵す栖かはおなしすみかなれとも

右　通具朝臣

玉葉 あはれなる時しも秋のね覺かな妻とふ鹿の明かたの聲

わたのはら霧に漕入もかり舟關とはふるやすまのうらか

七百四十三番

左勝　讃岐

續後拾 人はみな心の外の秋なれやわかそてはかりなけるふら露

右　家隆朝臣

新勅撰 秋の嵐ふきにけらしな外山なる柴の下草色かはるまて

鹿のねのはるかにかよふ野山かなまやのあまりのけさの秋風

七百四十四番

左　小侍從

なかむれは身には心のとまらぬにきそてしもおてゝ秋のよの月

右勝　　　　　　雅　　経

君か代の野への下草吹風にむすほゝれたる松むしのこゑ

鳴わたるかりの涙にむすふ露まなくもちるかくすのうらかせ

七百四十五番

左持　　　　　　隆　信　朝　臣

よしさらは人松虫にまかせてん草にやつるゝふこ緒のいにしへ

右　　　　　　　寂　　蓮

月あかぬ秋の心は秋のよのちよを一よに秋風そふく

里に吹浦のとまやの風の音にたれかもひとりすみはしめけん

七百四十六番

左　　　　　　　右　家　朝　臣

色かはるに山かみねに庭なきてお花吹こす野への秋風

右勝　　　　　　家　　長

今さらにまくすかはらなれけふしとや恨かまなえ松虫のこゑ

松か枝にくもらて空も住吉のかこふ浜風に月はすみけり

七百四十七番

左勝　　　　　　保　季　朝　臣

さ夜ふけてはとふく山の秋風に村雨過ぬ袖におくれて

右　　　　　　　三　　宮

衣うつなちの里より吹風にはる〳〵きたるつちの音哉

さゝの庵夜ふかき月の影さむし妻とふ鹿のかよふ岩塁に

七百四十八番

左　　　　　　　良　　平

いつれともみえぬまかきの月影を匂にそわくきくの白露

右勝　　　　　　内　大　臣

朝ほらけまきのを山に霧こめてうちの川おさ舟よはふ也

女郎花さきける野へに露おちて夜ふかき風に鳴たちぬな

七百四十九番

左　　　　　　　具　　親

この人なまへしてもりぬうち風に遠里なのは衣うつなり

右勝　　　　　　忠　良　知

柴の戸に木葉おかのねさそひきてみせよさかせも山嵐のかせ

此比の野にも山にも晴くもりかゝふ時雨を月にうらむる

七百五十番

左持　　　　　　顕　　昭

とはゝやな詠るまゝにあはゝおる心のほてに月やおるらん

右　　　　　　　繁　宗　朝

あり明のあけ行空の月みにはすかたにかりも哀なりけり

ささ[illegible]もたゝ[illegible]も朝き[illegible]

世々

千五百番歌合卷第十一　秋四　判定家朝臣

七百五十一番

左勝　　　　　　女房

秋の虫の手玉もゆらになる機をたれきてみよと野への夕くれ

右　　　　　　釋阿

月はこれあはれを人につくさせて西につゐにはさそふ成けり

左秋虫假ニ機婦札々聲ヲ、脱野感ニ行人悠々之望ヲ、詞艷、爲ニ塞北秋雁之行ニ心深ニ於江南春水之色ニ、其義偏慣ニ于上世ニ、其體已超ニ于中古ニ、右寄ニ瞻望於秋月ニ、凝ニ觀念於西天ニ、許也幽玄之詞雖ニ頗異ナリ、他勝負之思更雖レ及ハ、左旨歟

七百五十二番

左持　　　　　　左大臣

新千載　秋はなをくすのうら風恨てもとはすかれにし人そ戀しき

右　　　　　　俊成卿女

新古今　とふ人もあらし吹そふ秋はきて木葉にうつむやとの道芝

兩首秋の哀を盡して戀の心に通へり左は眞葛の風を恨て枯にし人を戀右は木葉の嵐に向ひて埋るゝ跡を思へり時雨に移ろひ秋にあへぬ色何れを深しと辨へ難くや侍らん

七百五十三番

左勝　　　　　　前權僧正

もろく見し霜と露とのたてぬきは風のおりける錦なりけり

右　　　　　　丹後

夕ま暮野へのあさちを分ゆけは露ちる風にうつら鳴なり

もろく見し霜と露とのたてぬきて風のおりける錦也なりけりと侍はめつらしくこそみえ侍れ

七百五十四番

左　　　　　　公繼卿

はれくもりさためなきよの月影にくめちの神の心いかにそ

右勝　　　　　　越前

月ないみ見るとはなきをすまの海士の秋の幾世をへて明すらん

晴曇定めなきよとは時雨なとを思へるにやくめちの神の心月の晴曇んに依ていかなるへきとにか侍ん近き世の歌に古の月かゝりせはなといへるを思へるにやかの歌も唯月の隅なき由を云ん爲さやあらましと讀るにそ侍へき昔より申傳へたる夜の契たたに基俊は本文慥かならぬ事と申侍けるとかや右歌はれて明すらんと云る優に侍にや

七百五十五番

左勝　　　　　　公經卿

新千載　紅の色にそ涙もたつた川もみちのふちをせきかけしより

右　　　　　　定家朝臣

ひとりぬる山鳥の尾のしたりおに霜をきまよふ床の月かけ

山鳥の垂尾床の月影なと霜夜の長き思同たぬ所多く心分ち難くゝ侍めり紅の涙紅葉の淵は誠に深く思入て心の色も染ましとこそ侍らめ

七百五十六番

左勝　　　　　　季成卿

あなし吹なたのしほちに雲消て涙にきはまる月の影哉

右　通具朝臣

吹風もあらしになれは床の山夕のうつらうらみてそなく

雲消る雖の一路は歌の丈有ん事を好み嵐吹床の山は詞の艶ならむことを希へり涙に極まる月風に恨むる鶉もいつれと申難くは侍れと吹風嵐となるかはりぬその程を存せることにや侍らん涙にきはまるもすこし聞なれぬこゝちして侍れと月のかけはるかにすみてきこえ侍にや

七百五十七番

左　持　宮内卿

秋はたゝ草にまかせて虫の音のあれたる庭と人はみるとも

右　家隆朝臣

鐘のこゑ鴫の羽音もあはれ也野守の露の明かたの空

左の歌ことはりのきこえぬには侍られと詞のつゝきやたとらるゝかた侍らん右歌うるはしくいひくたしては侍れと又かやうの心つねの事にや鴫の羽音もみゝなれ虫の音もみたれては聞え侍れと基俊は鶴膝蜂腰の病とたに申て侍に右の歌のの字六かさなりて侍やあまりに侍らん

七百五十八番

左　勝　讃岐

[新後撰] 夜とゝもになたの鹽やにいとまなみ涙のよるさへ衣うつらん

右　雅經

何とかくはらひもあへす結ふらん秋はつゆのなきところかは

波にうつ衣露結ふ秋歌のすかた詞のつゝきいつれもいとおかしくは見え侍をなたの鹽や波の衣よれる所侍らん

七百五十九番

左　勝　小侍從

よしさらはなかむる月にすむ心やかて西へのみちにともなへ

右　寂蓮

曉の鴫たつ沢もなかりけりいなはにこもる宿の夕暮

右歌田面の秋の望にたへすして宿の夕のあはれをのへたるとはほの〳〵みえて侍と鴫立沢もなかりけりやうちきくに何事とわきまへかたく侍らん唐にもやまとにも曉鴫立心を秋のあはれのもとゝとすはかりいひならはしたることはいとも侍らぬにや春は曙秋は夕暮なとこそ申をきて侍れはすこしことあたらしくもや聞え侍らんいなはにこもるといへるも霞外花色霧中鹿聲わか草のつまおやのかふこならてはことはりならすや聞え侍らん左歌當時述懐にすきて来世得脱をおもへり秋の歌にはかならすやとは見え侍れとおほつかなき所は侍らぬにや

七百六十番

左　隆信朝臣

鹽風や秋は夜寒になるみかたあまのとまやも衣うつ也

右　勝　家長

秋風はふかぬ草葉もなき物をかこちかほなるをやえし折

右歌ことなる事なきなめつらしく心おかしく侍へし

七百六十一番

左　持　有家朝臣

時雨には色もかはらぬ高砂のおのへの松に秋かせそふく

右　　三宮

秋やおしき暮行空やあはれなる思ひさためよ虫のこゑ〳〵

左歌雖レ似レ有ニ餘情一可レ謂レ無ニ殊事一右歌惜ニ涼秋之暮景一憐ニ微陽之短明一雖レ不ニ思定一强無ニ差別一也如何

七百六十二番

左　　保季朝臣

山ふかき秋をみるにもおもふ哉これよりおくの夕くれのそら

右勝　　内大臣

續古今
うら風や夜寒なるらん松島やあまのとまやに衣うつ也

山のふかさのみかさならんによりて秋の夕暮まさるへきゆへも侍らしすその〻鹿の音外山のまさきの色しもすてかたく侍物をおもふかなもおもはまほしく侍にや浦風も夜さむならんあまの衣はひとへにあはれなる方も侍らん

七百六十三番

左勝　　良平

紅葉ちるいは田のをの〻はゝそはら風にそはる〻秋のよの月

右　　忠良卿

うらちかきあしやの里に日は暮て浪路のきりにあまのいさり火

岩田のをの〻はゝそはらふりにたる詞には侍れとさせる難なく侍へし津のくにむはらのこほり蘆やの里は業平朝臣住侍りけんむかし歌になたのしほやきいとまなみとよみ南のかせふきてなころたかくうきみるのよせられたるもかくれなく侍れは浦ちかきとをかすとも星か河邊の螢とまかひしいさり火の面影計りは波路の霧に隱れなくや侍へき上下句のに文字もなきよりはいかにそ聞え侍にや

七百六十四番

左　　具親

大かたの秋のけしきをこれはたゝおもふま〻なるさをしかの聲

右勝　　兼宗卿

こと〳〵にかなしき秋としりなからさてしもたれか恨はてたる

大かたの秋の氣色千々にかなしき月かけを我身ひとつのとうらみ物おもふやとのはきの露をかりの涙にかこちても人の思ひは忍ふるをさを鹿にも思ふま〻には侍るめれとこれはたゝなといへるわたりすこし心えかたきかたや侍らんことにかなしき秋又衣のすそを吹かへす初風よりもしもかれはつるくすの下はまて恨ところおほかる秋の氣色をしもおしみしたふならひのみあやしけに侍へし是も詞につくさぬ所侍れと左よりは心えられてや侍らん

七百六十五番

左　　顯昭

秋風におもひやりつ〻うつ衣聞音さへに身にはしみけり

右勝　　通光卿

松虫の聲する方に宿からはよもきか門のすまゐなりとも

左歌の心こまもろこしのふみより昨日けふの歌まて詞の露色々に見え思の風こゑ〳〵に聞えて身にしむふし〳〵もおほく侍を此歌にとりては秋風に思ひやりつ〻といへる何をおもひやるともことにわかれ侍らす聞音さへそな

と優にしもあらすや侍らん心あらはに詞すなをならんと
このみよむとおほしからん歌は人のいたくよふみるさぬ
心なとを思ひよりたらんやさるかたにも聞え侍へき右歌
松虫の聲を尋てよもきか門をきらはぬ心おかしく侍へし

七百六十六番

左　勝　　　　　女　　　　房

ますかゝみ見るめのうらのよはの月氷をよする秋の鹽かせ

右　　　　　　　後　成　卿　女

月みはとたのみし秋のよもすから又うらめしくうつころもかな

右擣衣迎ニ八月九月之涼夜ー怨ニ千聲萬聲之寒杵ー其詞雖ニ
尤美麗之體ー頗無ニ氣力ー歟左眞寸鏡江心波上之色秋風夜
月之影如レ金其月磨レ瑩珠歯新開勝レ自ニ秦皇之照膽ー不レ異ニ
唐帝之鑒古ー似宵有ニ九五飛天之龍ー人間臣妾誰敢及乎

七百六十七番

左　持　　　　　左　大　臣

露の袖しものさむしろしきしのふかたこそなけれあさちふの宿

右　　　　　　　丹　後

いかなれはうつろふ色とみせなからちるてふことなしら菊の花
霜のさむしろはしく物なくはみえ侍を露しもそ少末の詞
によせなきかたも侍りぬへきちることとしらぬ花の色も心
深くまて見え侍れは此あさち白菊色わきかたくや侍らん

七百六十八番

左　持　　　　　前　權　僧　正

立田川袖のもみちにせきかれてから紅のしたとよむ也

右　　　　　　　越　前

波のうへにつもれる雪をなかむれはおきのしらすに冴るよの月
兩首左は紅右はしろたへ也色々を題としてよめらん心ち
し侍れと波のうへの雪おきのしらすの月秋の心かすかに
して冬の歌にことならすや侍らん

七百六十九番

左　勝　　　　　公　繼　卿

新古今
ね覺する九月のよの床さむみ今朝ふく風に霜やをくらん

右　　　　　　　定　家　朝　臣

いかにせんさおふ木葉の木枯にたえす物おもふ九月の空
左涼夜之方永耿介而不レ寐心むかしの花省の秋思やられ
ていとをかしくこそ侍めれ右いかにせんとをけるより風
情つきにけるにやと聞え侍れは尤以左可爲勝

七百七十番

左　持　　　　　公　經　卿

紅葉はの色よりはやく行水のそこの木末にうつる秋かせ

右　　　　　　　通　具　朝　臣

新拾遺
よはり行虫の音にさへ秋暮て月も有明に成にけるかな
左は秋かせの色紅葉にさそはれてうつり右は曉の月の影
虫の音共によはれる秋の心歌の姿何れと分難くや侍らん

七百七十一番

左　　　　　　　季　能　卿

いさいかに深山のおくにしほれても心しりたき秋のよの月

右　勝　　　　　家　隆　朝　臣

夜やふくる雲ゐはるかに鳴かりもひとつになりぬ衣うつこゑ
左しりたきといへる雖レ聞ニ俗人之語ニ未レ詠ニ和歌之詞ニ也加之初五字又不レ甘レ心右歌霜碪之韻夜深雲雁之聲暗通景氣甚幽而感情相催歟

七百七十二番

左 持　宮内卿

外山まて深山のあられ分過てまさ木のかつら秋風そふく

右　雅経

よな〳〵はやとりなれにし月かけもかれ行をのゝあさちふの露
みやまのあられ過つらん秋風のかよひちはるかにおもひやられてをかしくは侍を分過てと侍る詞すこしもとめたる様に聞え侍やとりなれにし月影のかれ行をのゝあさちは詞の霜も見所おほく侍れとみ山のあられまて思入たる心ふかく侍れいつれと申かたくや

七百七十三番

左　讃岐

磯ちかきあまのとまやの夕暮に霧のまかきをあらふ白浪

右 勝　寂蓮

秋をしる袖は恨の露なから萩の下葉をあはれとそ思ふ
此あまのとまやも磯ちかきとをかれすは白波のより所なく侍へきにやさしも侍らし物を末の句はいひなれてみえ侍れと秋をしる袖はうらみのなといへるはしめをはりかなひてや聞え侍らん

七百七十四番

左　小侍従

ひとりねの枕の下のきり〳〵すとふらふ聲はしのはさりけり

右 勝　家長

あさの袖いかにほしあへて松島やをしまか磯に衣うつらん
いかにほしあへで松しまやといへるをかしく侍にや

七百七十五番

左 勝　隆信朝臣

秋ふかき深山の庵のならひそときゝてもかなし峰の松かせ

右　三宮

行かよふ人たにあらはとひてまし山路のきくの千代のけしきを
山路のきく行かよふ人なきよしは仙家の心にや侍らん歌のすかた詞よろしく侍へしならひそと聞てもかなしとやらんのことはちかく見侍し心ちし侍れといつれとも思ひ給へす侍れは秋の景氣にとりて右はたしかにや侍らん

七百七十六番

左　有家朝臣

松風に草のやとりやあれぬらん枕になるゝきり〳〵す哉

右 勝　内大臣

今こんの空たのめをや九月のあり明かたの松むしのこゑ
左歌優には侍をそことところと作者ことに思ひいれたるさまに侍らぬにや右歌は艶に聞え侍へし

七百七十七番

左 持　保季朝臣

くれかゝるをのゝ草ふし風過てむすふまくらにうつら鳴也

右　　忠良卿

たかすみかいつくの秋を尋まし野へも山邊もなかめわひぬる

中の句に風過て露ちりて終の句に鳥鳴虫怨歎此心餘に耳なれてそ聞え侍れとすかたこと葉優には侍へしたかすみかいつれの秋もことに思入ては見え侍らね共歌の程いつれと申分かたく侍らん

七百七十八番

左　勝　　良平

嵐まてくれなゐふかくみゆる哉わたる木すゑに木葉ちる頃

右　　兼宗卿

なか月の九日ことにあふならは八重はなとさく白菊のはな

左歌すかたおかしくは見え侍るわたる木末と侍るたつた河の紅葉をみてわたらは錦といひくらはし山の霞によせて立わたるなとよめるにはにぬ心ちし侍れとあまりの事にや右歌かならす九日をちきらはなとか八重にはさくといへることはりなきには侍らねと左猶やすらかにいひくたされて侍にや

七百七十九番

左　持　　具親

たれか又山路のすゑにむすふらん千年ななかす菊の下水

右　　通光卿

色ふかくそむる木末もある物を花にうつろふきくのしら露

菊の下水菊のしら露ふかさあさきしゐてわきまへかたくや侍らん

七百八十番

左　　顯昭

なきまさるをのか聲にやきりぎりす深ゆくよはの程をしるらん

右　勝　　釋阿

故郷にひとりも月をみつるかなをは捨山をなに思ひけん

左暗蛩之韻以己音之漸增知夜漏方闌雖無深思頗似無詮右玄兎之影棲舊里之閑望隔名山之遠情心尤幽玄足賞翫者歟

七百八十一番

左　勝　　女房

新後　玉ほこの道の芝草うちなひきふるき都に秋風そふく

右　　丹後

水上にみねのもみちやちりぬらん色々になる瀧のしらいと

ふるきみやこに昔の人なくして玉ほこのみちに秋風のこれる心おもかけ空にうかひて誠にたくひなく見え侍れはよれる所なき瀧のしらいと色わきかたくや侍るらん

七百八十二番

左　持　　左大臣

新千載　いねかてに庵もる田子のかり枕夜半にをくての露そひまなき

右　　越前

夕まくれ木すゑをはらふ風の音にさひしく成ぬ秋の山里

左はいねかての田子のかり枕よはにをくてのなと誠に露のひまなく見え侍を右の梢をはらふ風の音又歌のさまもすこしさひしくや侍らん

七百八十三番

左　勝　　前權僧正

紅葉々をよるのにしきになす物はまたみぬ山の嵐成けり

右　　定家朝臣

續拾遺 さをしかのふすや草むらうら枯て下もあらはに秋風そふく

したもあらはにうらかれん草村歌のすかた詞もまたみぬ山の紅葉の錦におよひかたくこそ侍らめ

七百八十四番

左　　公継卿

衣うつしつか袖にやかよふらんね覺の床のあかつきの露

右勝　　通具朝臣

暮て行秋の契はあさちはら末葉の露やむすひはつらん

ね覺の床の曉露はすゑはの霜にけたるへくも見え侍らねと秋の契は淺茅はらなとゝこほる所なくいひ下されたる詞つゝき猶はしめをはりかなひて侍にや

七百八十五番

左　勝　　公經卿

續古今 昨日みてけふみぬ程の風のまにあやなくもろき峰のもみちは

右　　家隆朝臣

大かたの野はらの花はうつろひて風にしられぬ庭のしら菊

左歌心ことはおかしくこそ侍めれ右歌も詞いとよろしくは侍を心はすこし聞なれたる心ちし侍にやあやなくもろき嶺のもみちはめつらしくや侍らん

七百八十六番

左　持　　季能卿

長きよを思ひあかしてあさかほの世のことはりを人にみするも

右　　雅經

くれかたの木葉にまよふ秋の雨の窓うつ程によはなりにけり

左の秋の夜は槿のおもひあかし侍にや右雨の窓うつ程いつはかりにか歌はさのみこそ侍れとすこしおほつかなきかたや侍らん

七百八十七番

左　勝　　宮内卿

そらも海もひとつにかよふみとり哉月さへ浪に有明のいろ

右　　寂蓮

暮つるはしのたちゑやそれならん霧のあなたにもゝそ鳴なる

左歌空も海も一つに通ふ覽彿をかしく侍な春の空浦々に霞める松の村立なとにや一に通ふみとりは聞ならひて侍らん唐の歌にも紅心秋月白白月正圓時なとゝこそ作て侍めれ在明の色もあまりにめつらしきつゝきにや右歌暮つるなといはゝみわの杉むら芳野の花なとや聞なれて侍らん物氣なきはしの立枝はかりはなにのゆへにかとあやしくや霧のあなたもさほ川の千鳥立田山の紅葉なとこそおかしくは侍をもすそ鳴なるはよろしき歌の詞に聞ならはす侍れは左猶月の色もすみてや聞え侍らん

七百八十八番

左　持　　讃岐

賴めなきし人のゆくゑを松虫の聲はかりして秋そ深行

右　　家長

吹からに涙もゝろき秋風の木々の紅葉にかゝらすもかな

左人のゆくゑな松虫のなと優に侍な行ゑといひて深行と
侍やおなし心に聞え侍らん右涙もゝろき秋風なとまた心
なきには侍らぬなかゝらすもかなや松の梢の藤なみかつ
らきのしら雲なとならてはすこし聞ならはぬ心ちやし侍
らん是は深き難に侍らし

七百八十九番

左　　小侍従

なろこ引鳥羽田のおもの夕ま暮色々にこそ風も見えけれ

右勝　　三宮

影やとす峰の白菊さきしより庭に秋ある谷川の水

鳥羽田のおもの夕の色々は稲花の遠望にこそはと見え侍
れと鳴子引によりて風の色々にみえんやうにや聞え侍ら
んかけやとす峰の白菊は庭に秋あることはり叶て侍へし

七百九十番

左　　隆信朝臣

女郎花たゝ一枝の名残さへ今はあらしの風わたるなり

右勝　　内大臣

秋きては夢の枕やよそにみん月よゝしとてうちもふさすは

女郎花たゝ一枝のなこり何事にか侍らんそのゆへあらは
優にも侍へしまきたへの枕塵つもりてまたすしもあらぬ
月にふさぬ心はいとおかしくこそ侍めれ

七百九十一番

左　　有家朝臣

木枯の露ふき結ふ草むらに秋もふけぬと虫そわふなる

右勝　　忠良卿

なかむれは空に心そつきぬへき秋にしられぬ夕暮もかな

左下句よはく右は上句ことなることなく聞え侍れと秋に
しられぬ夕暮もかなとは左上句よりもよろしきにや侍ら
ん

七百九十二番

左持　　保季朝臣

聞わかぬ木のはゝ庭の時雨にて鹿のねすさむ長月のくれ

右　　兼宗卿

たくひなき入しほの岡のもみちはゝみぬより色の程そしらるゝ

木葉は庭の時雨にてとなきてはそのすちの心詞のよせな
としもにあらまほしくや侍らん上下ことかはれる心ちし
侍るうへにすさむといふことはふるく聞ならはすや侍ら
ん三代集にいらぬ歌は本歌ともせすなとたて申人も侍れ
とそれはさるへき事にも侍らす打きくにおかしき歌はか
ならす集にいれらんにもより侍らし詞はふるくよめるこ
とはのよしあるな置てはしめてこのみよまむこともかつ
は時によりことにしたかふへくや侍らんやしほの岡のも
みちさせるとかは侍られと左も思入られては見え侍れは
いつれと申かたくや

七百九十三番

左持　　良平

ちりつもる木葉しのきてさなしかの立田の山に秋風そふく

右　　通光卿

枝かはす松のみとりの一しほももみちの秋そ色まさりける

棹鹿の立田の山いひくたされては侍へし松のみとりも春くれはといふ歌を思て紅葉の秋そなといひなされたるも又心有て聞え侍にや

七百九十四番

左　　具親

今日まてはまた露のみやをくら山下葉よりこそ色付にけれ

右勝　　釋阿

衣うつ音こそあやなたのまるれ夜半の枕もさゆる霜よは

左歌けふまてはまた露のみやとは時雨ゆかん程なとを思へるにやことはりの聞えぬにはあられと色付にけれといひはてたるすこしたかへる心ちやし侍らん

七百九十五番

左　　顕昭

紅葉々をそむるのみかは常盤木の色も時雨にあらはれにけり

右勝　　俊成卿女

秋山のふもとの小田のかりいほに紅葉を分て月そもりける

もみちにましる常盤木の時雨にあらはるゝ色めつらしき事にはあらねとよろしく侍へし秋の田のかり庵月そもりけるなとも又つれの事なれとも詞は又優に侍にや

七百九十六番

左持　　女房

秋山の松をはしのけ立田姫そむるにかひもなきみとり也

右　　越前

かよひこし枕に虫の聲たえて嵐に秋のくれそきこゆる

左はかはらぬ松のみとりにそむる山姫かひなく右はくれぬる秋の嵐にかよひし虫の聲たえぬ心詞いつれもいとよろしく侍へし

七百九十七番

左勝　　左大臣

苔のうへに嵐ふきしくから錦たゝまくおしき森のかけ哉

右　　定家朝臣

岩代の野中さえ行松風にむすひそへつる秋のはつ霜

左歌上句は不ㇾ堪紅葉青苔地といへる文集の詩をおもひ下句まとゐせるよはといへる古今の歌によせてもりの一かけかなと侍る季の句まて心たくみにおもかけおかしく覺てをかしくこそみえ侍れ嵐吹しく錦にて紅葉を詞にあらはされぬも業平朝臣のからくれなゐに水くゝるとはといへる歌思出られて心もふかく侍へし右歌初霜結ふといはんはかりに心とけぬ岩代の松まてはるかに思ひよりけん誠々に見所なくや侍らん

七百九十八番

左持　　前權僧正

秋はいぬとをくらの山になく鹿の聲のうちにや時雨そむらん

右　　通具朝臣

ひろまなき袖をは露のやとりにて心の秋よいつかはるへき

此左歌中の三句あまりや本歌にかはらす侍らん右歌二句も露の置所かはり侍らぬうへに彼源氏の物語の歌には上下なよひかたくや侍らんいかゝ

七百九十九番

左　　　　公　継　卿

なへて世のあはれも秋の風そよく夕くれよりや思ひ初らん

右　勝　　　家　隆　朝　臣

をくら山にしこそ秋と尋ぬれは夕日にまかふ嶺のもみちは

夕暮よりや思ひそむらんなとおかしくは見え侍を西こそ秋と尋ぬれは夕日にまかふ峰のもみちはといへるおなしをくら山のあまた見え侍るなかにも此みねのもみちはに心の色もふかくそめはてられ侍りぬるにや

八百番

左　持　　　公　経　卿

霜の下にかきこもりなは草の原秋の夕もとはしとやさは

右　　　　雅　経

秋ふかき松に嵐の立田山よその梢をまつはらふらん

左歌これも源氏物語の心にかよへるにや詞えんには侍へし右歌松に嵐のといへる緣於太山阿舞於松栢之下なといふ心おもへるにやいかにも草のはらよりは木たかき松には侍へし

八百一番

左　勝　　　季　能　卿

鹿のねものこらぬ宿の小萩はらまかきになせる古郷の秋

右　　　　寂　蓮

秋ふかき野への草葉の色よりもなきからしたる松むしの聲

虫の聲さへ枯ぬらん野への草葉の色もあはれあさくは侍られとなきからしたるといへるあまりめつらしき詞にや侍らんつれによみならはれとえんにおかしきことはも侍なこれは[illegible]しも聞え侍らぬにや鹿の音たにのこらさるらん故郷のこ萩露けくや侍らん

八百二番

左　持　　　宮　内　卿

ひたふるにみぬ人戀し秋風にやゝ露さむしなか月の末

右　　　　家　長

なかめやるみとりのおくの紅葉ゆへおもはぬ松を手折つる哉

人のおもはぬなかにてはあらてか樣の心をも思はぬとよめる詞はいつはりよりいてきていつれの歌のをかしきにかは侍らんいまたたしかにも尋見侍らすいかにも近き世よりはうたことに侍れといまたよろしき歌は聞え侍らさるへし山したかせはふかれともきまさぬよひの秋風はなとよみならはして侍れとみぬ人戀　からんをはひたふるにのこと葉もすこしあまりにや侍らん

八百三番

左　勝　　　讃　岐

秋のくれ嵐の山をすきゆけは袖にこきいろゝ峰の紅葉は

右　　　　三　宮

虫のねのかれ〳〵になる草の上に秋かけてをく庭のはつ霜

梅かえにきゐる鶯いひしなかにもあらなくになといへる
ふるき歌の心にはかけてといふ詞は兼ての心によせて春
秋のはしめによめるとそ見え侍るめる是もたかひては聞
え侍らす秋をかきりとみん人のためといふ歌を思ひて袖
にこきいろゝ峰のもみちといへる誠に宜も侍哉

八百四番

左 勝　小侍従

よそへつるまかきのきくはうつろはて[ひイ]人の心の秋をしるかな

右　内大臣

なからへは又もさこそとおもへとも戀しかるへき秋のそらかな

右の歌のちの秋をは待なから此暮をおしめる心もおかし
くは侍を左歌心は戀にすゝみて見え侍れと詞えんなもと
として歌のさまよろしく侍にや

八百五番

左 持　隆信朝臣

なかめてもいかにしのはん紅葉はに時雨ふりぬる秋の日數を

右　忠良

時雨ふる秋にはあへすくすのはの恨は色に出にけるかな

ともに時雨ふりにける紅葉の色なれはふかきあさきわき
かたくや侍らん

八百六番

左 勝　有家朝臣

みるたひにおらまほしきはから錦立田の山のもみち成けり

右　兼宗卿

そめわたす時雨の雨はかはくとも猶もみち葉に[にはイ]風ないとはん

おらまほしき唐錦なとこひわかはるへくは侍れとふるき
歌覺てひとつのすかたにはいひしりて聞え侍にや

八百七番

左　保季朝臣

荻はらや秋も末葉にうら枯ておもへとよはるかせの音かな

右 勝　通光卿

新古今 入日さすふもとのお花打なひきたか秋風にうつらなくらん

左の上句は優に聞え侍をおもへとよはるといへるや聞な
らはす侍らんふもとのお花おもかけ有てたか秋風になと
いへるはよろしくこそ侍らめ

八百八番

左　良平

かれ〳〵に野への千種も成はてゝ又こん秋をまつむしのこゑ

右 勝　釋阿

立田姫たつたの山は我名とや紅葉もことに思ひそめけん

たつた姫も我名をおしむ心かよひて紅葉の色のことに見
なされ侍にや

八百九番

左 持　具親

露さゆる秋の末葉の淺茅原虫のねよりそ枯はしめける

右　俊成卿女

なかめつゝさえ行袖に有明の月よりむすふ秋の霜かな

秋の末はの淺茅虫の音よりかれ曉さえ行霜月影よりむす

へるおなし心によろしく侍にや

八百十番

左　　　　顕　昭

紅葉々にこかれあひてもみゆる哉絵島か磯のあけのそほ舟

右勝　　　　丹　後

鳴とめぬ秋こそあらめきり〳〵すなのかれさへそ弱りはてぬる

良暹かつかまつれる歌とかや物語に申つたへたるすくれてなかしきにはあられとあまねく人の口に侍に絵島か磯のましりて歌に成にけるとや聞侍らんなきとめぬ秋こそあらめなといへるなかしきかたも侍へし

八百十一番

左勝　　　　女　房

けふこそは秋の日数もくれはとりあやなし名のみ長月のそら

右　　　　定家朝臣

冬はたゝあすかの里の旅枕をきてやいなん秋のしら露

左はしめなはりかなひて心たくみにすかたなかしく侍へし仍為勝

八百十二番

左持　　　　左大臣

こたふへき荻の葉風も霜かれてたれにとはまし秋のわかれち

右　　　　通具朝臣

秋かせは木葉の底に吹きかれて身にしみはつる夕ま暮哉

左艶には聞え侍れと右夕ま暮秋の暮の心はさも侍りなん

八百十三番

左　　　　前権僧正

紅葉はなぬさに手向て行秋をおしみとめぬや神なひの森

右勝　　　　家隆朝臣

新古今
露しくれもる山かけの下紅葉ぬるともおらん秋のかたみに

下葉のこらすもみちする山にぬるともおらんといへる秋のかたみ本歌の心にかなひていとおかしくも侍かな

八百十四番

左持　　　　公継卿

過る秋露もなこりはなき物をなにゝぬるらん我袖のうへ

右　　　　雅　経

深草や秋さへ今夜いてゝいなはいとゝさひしき野とや成なん

左は過る秋我袖のうへすこしやすらかならすや侍らん右はふるき歌を本歌としておほくとりすこすは昔よりのならひに侍れと上句を下にすゑ下句を上にもひきちかへ又五七句はさなから読すへ侍ことも歌さまにしたかひてはつれに侍めれと出ていなはいとゝ野とや成なんなと文字のをき所いたくかはる所なくや左右はるかにあらぬさまに侍れは中々おなし程にもや侍らん

八百十五番

左　　　　公　経

これよりや秋はいく田の森のかけ過る時雨にちるこのはかな

右勝　　　　寂　蓮

誰もみなあかぬ名残そ大江山秋はいく野のかたをなかめて

雨音心詞なかしくは見え侍をともに秋の行によそへてい

く田いく野といへるおなし心には侍れと金風の西にかへるによそへてあかぬ名残そおほえ山秋はいく野のかたをなかめてといへるは行にかなひて聞え侍らん

八百十六番

左　勝　　季能卿

秋風の吹そめしよりなれにける秋の露は今夜はかりや

右　　家長

聲たつる鹿もいまはの常盤山をのれなきてや秋おしむらん

右をのれなきてや秋をしるらん又いくはくかはらすや侍らん今夜はかりやもいひとちめぬ心ちし侍れとふるき心には侍らす

八百十七番

左　　宮内卿

津の國やなからへもせて秋はけふいく田のおくに風そはけしき

右　勝　　三宮

うちわひてなかむる空のうき雲に今夜はかりの秋風そふく

つのくにやなからへいくたなと事かさなりて侍らん右はさせるとかなく侍へし

八百十八番

左　勝　　讃岐

いつかたへ秋のをくりをすまの關せき行舟も行衛しられは

右　　内大臣

時雨する雲のあなたは冬の空秋の名残はいまいくかゝは

左は心おかしく侍ををくりをすまの關すこしさゝへてや聞え侍らん右の句末のはの字かさなりて聞え侍りことにはいかるへき事には侍らねとうちきくにいかにそ侍にや左猶末句もをかしきさまにや侍らん

八百十九番

左　　小侍従

長月のみそらに秋やかへるらんけふしも風の音もたてれは

右　勝　　忠良卿

とゝまらぬ秋に涙は先たちて木葉もたえす山おろしの風

左歌のみそらに秋のかへる今はしめて思よれるやうにや聞え侍らん九月のみそらならてはいつれの秋かはかへり侍へき右歌は優に聞え侍へし

八百廿番

左　　隆信朝臣

今夜まて荻ふく風の音のみや秋をのこして人にきかれん

右　勝　　雅宗卿

新古今 行秋のかたみなるへき紅葉々もあすは時雨とふりやまかはん

秋をのこす荻ふく風の人にきかれんといへるよりはあすをまつ紅葉の色ふりやまかはんと侍はよろしく侍にや

八百廿一番

左　　有家朝臣

おしめともけふさへくれぬいつかたへあすはいく田の森の秋風

右　勝　　通光卿

あすよりは秋をしのふの草枕名残なるへき袖のつゆかな

兩首ことなる事は侍らねと左の中の五字や少よはく聞え

侍らん

八百廿二番

左　　　　　　　保季朝臣

みるもうしあすは名殘も嵐山けふのみ秋の夕くれの雲

右　勝　　　　　釋阿

たのめなくかたもやあらんかへる秋心をやりておしむけふ哉

雲之爲レ綸忽分歧レ容須臾之間變化無レ窮何限二暮秋之期一永失二日朝之望一乎右歌無二指難一也

八百廿三番

左　持　　　　　良平

くれはつる秋の名殘をしのふ山みねに嵐のこゑうらむなり

右　　　　　　　俊成卿女

色かはるあさぢかすゑに吹風のをとにもしろき秋のくれかな

兩首詠秋のくれのかせの聲ことにかはれる心侍らぬにや

八百廿四番

左　勝　　　　　具親

紅葉々に秋の日數も見むろ山立田の河にしからみもかな

右　　　　　　　丹後

ゐせきにもとまる紅葉やなかるらん流てはやき秋の暮には

左ニ室山のもみちに秋の日數をみて立田河にしからみもかなといへるいとおかしく見え侍を右けふとくらしてあすか川といふ心を思ひてなかれてはやきなといへるも心なきには侍られと猶ゐせきとをきてなかれてなと侍らは川やあらまほしく侍らん左は歌のたけ侍らんかし

八百廿五番

左　　　　　　　顯昭

今夜かく心つくしのことの葉や秋をとゝむろもしの關もり

右　勝　　　　　越前

かた岡のすゝのしのやに秋くれぬ時雨もらすなならのうはふき

ちかき世のことにやおしむとて今夜かきなくことのはやと侍る歌の心をもしのせきにひきよせたるにそ侍める關城國たにかひなき春秋のとゝめかたさをことの葉はかりのもしの關守とならんこと物はかなくや侍らん片岡のすゝすのしの屋ことにをかしきふしは侍られと又させるとかは侍らぬにや

千五百番歌合巻第十二　冬一　判定家朝臣

八百廿六番

左 持　女房

風さえて今朝より冬をなら柴やかりはの小野に時雨すく也

右　通具朝臣

秋はけふいつち旅ねの草枕かれ行野へに霜むすふらん

雨方野左はかりはに時雨過てなら柴の冬をむかへ右は旅ねに霜結ふらんと草枕の秋をおもへり心姿いつれもいとよろしく侍へし

八百廿七番

左 勝　左大臣

風の音もいつしか寒き槇の戸に今朝よりなるゝ埋火のもと

右　家隆朝臣

立田山みねのもみちはちりはてゝ嵐にすさふ松のこゑ哉

右の嵐にすさふの詞やすこし聞なれす侍らん左の埋火耳にたつ所侍らぬにや

八百廿八番

左 勝　前権僧正

錦をろしつはた山のはつ時雨けにたてぬきと成にける哉

右　雅経

秋山に時雨はすきぬ神無月木葉そ冬のはしめとはふる

右神な月に時雨ふらぬやうには聞え侍れと木葉そ冬のなといはんためはさも侍なん左はしつはた山も艶なるかたは侍られとことはたくみに聞えて歌にまくへきに侍らし

八百廿九番

左 持　公継卿

をしなへて冬の氣色に成にけり昨日もけふも打時雨つゝ

右　寂蓮

昨日みし秋の梢もそれなからおりしりかほにうちしくれつゝ

左右の歌をはりに打時雨つゝといひ心に昨日けふの空の氣色を思へりかはれる所侍らぬにや

八百三十番

左 勝　公経卿

をきそむる霜にもさゆる嵐哉昨日は露のこほりやはせし

右　家長

紅葉せし秋はいなはの山風に松のみ殘る冬は來にけり

霜は冬しもをきそめねと歌はさのみそ侍りしいなはの山にももみちはさためて侍らんかの立わかれいなはの山の峰におふるとはわかれなんことをかねていへるにや今すこしことはりかなひて聞え侍らん左下句も優に侍にや

八百卅一番

左　季能卿

今朝は又時雨そめけり昨日まて秋のあはれにぬれしたもとを

右 勝　三宮

冬きぬる氣色のもりの村時雨そめし木葉を又さそひけり

秋のあはれにぬれし袂すこしよはくや聞え侍らん大かたは近き世よりの歌にそこと心なく袖ぬるゝことにおほく侍にや氣色のもりの時雨そめし木のはを又さそふもことはり聞え侍らん

八百卅二番

左 持　宮内卿

昨日こそなかめし秋もくれはとりあやにくなれやさゆるよの風

右　内大臣

何とかや峰なるかねは霜をけは冬にや今夜成はしむらん

左夜ゐの風右冬霜ともに無指難可謂同科也

八百卅三番

左 勝　讃岐

秋くれてあはれつきにし鐘の音の霜にこたふる冬は來にけり

右　忠良卿

秋はみな杉のいた戸のひましらみ明行空に時雨ふるなり

秋はみなと侍あまたあるやうにや聞え侍らん月令曰其日庚辛其音商其數九なとは侍れといかにもすきぬといはんに聞え侍らんみなのことはいかゝ左は優に侍へし

八百卅四番

左　小侍從

たく霜のをとをたてゝやまはきつるお花か末に冬は來にけり

右 勝　兼宗卿

神な月けさは梢に秋過て庭にもみちの色をみるかな

左歌忩うつ雨まきの屋のあられをはさらにもいはすならの葉にこほるゝ露竹の枝におれふす雪音にたてゝ聞なれたるものおほく侍れとをく霜の音こそいかなるへしと覺侍らね右歌耳にたつ所なくうるはしくや侍らん

八百卅五番

左 勝　隆信朝臣

霜とのみ結ふか露の玉くしけ二よたにへぬ秋の名殘を

右　通光卿

いつしかと時雨ぬ冬にうつりこは秋の跡とてさひしからまし

二見のうら明かたの空ともいはんための玉くしけはつれに聞なれて侍れと露のとつゝけてはくしけやいかゝ聞え侍らん秋の跡とてさひしからましもさる事にはきこえ侍れと左猶思いれたるさまに侍へし

八百卅六番

左　有家朝臣

なかめやる野へもひとつに霜かれてあしの丸やに冬は來にけり

右 勝　釋阿

新古今　なきあかす秋のわかれの袖の露霜こそ結へ冬やきぬらん

右歌させるめつらしき心には侍らねと優には聞え侍にや

八百卅七番

左 持　保季朝臣

鳴子引秋やむかしに成ぬらん門田の面に時雨すくなり

右　俊成卿女

いつしかと時雨ふりきて明かたのまきの戸たゝく木からしの風

此初五字秋の歌にも聞え侍つるにやなにも昔になりて後

時雨は過ることにや侍らん鳴子引音さなへとりし昨日は
ろかにことかはりて侍かなまきの戸たゝく木枯のかせそ
のことゝ聞え侍る所は侍らす

八百卅八番

左　　良平

人めまて今はかれ行はしめとや草の戸さしに冬は來にけり

右　勝　　丹後

冬來ては時雨はかりそをとつるゝとふ人もなき老のねさめに

冬きにけり老のね覺めつらしからぬさまには侍られと又
ことなるとかは侍らさるへし

八百卅九番

左　勝　　具親

秋の色はつれなく杉のこすゑより嵐そかよふあふさかの關

右　　越前

冬きぬと思ふはかりの朝ほらけことの外にもかはる空かな

左歌心姿よろしく侍にや右歌の詞誠にすこし事の外なる
かたや侍らん

八百四十番

左　持　　顯昭

朝風にはたへもさむし衣手のもりにや冬はたちはしむらん

右　　定家朝臣

秋くれしもみちの色なかされても衣かへうきけふの袖かな

はたへもさむしなといふ事こそちかき歌にきゝならひ侍
られ詞はふるき歌にならひ心は我心より思よれるや歌の
本意には侍らんたゝし紅葉の袖の色よはくみえ侍にや女
の歌なとならはゆるさるゝかたも侍なん

八百四十一番

左　勝　　女房

秋くれて露もまたひぬならのはにをして時雨の雨そゝく也

右　　家隆朝臣

むら雲の伊駒の山にかゝるよりなかむる袖も打しくれつゝ

いこまの山の雲は時しもわかすや侍らんもの字にて冬の
心は侍にや左殊叶初冬之節歟

八百四十二番

左　勝　　左大臣

しのはらやしのひに秋のをきし露こほりなはてそ忘れかたみに

右　　雅經

行秋のわかれし野へは跡もなしたゝ霜ふかき淺茅生のはら

左右の秋のわかれ左はしのはらの露の形見こほりなんこ
とをうらみ右は淺茅生の霜の跡たへぬ事をおもへり歌の
すかた詞も優には見え侍を淺茅おひたらん原はあさちふ
の原ことはりたかひ侍ましけれとつねには淺茅生あさち
原なと申なれて侍にや左の忘かたみはいさゝか事も聞え
侍らす

八百四十三番

左　持　　前權僧正

宿さひて人めもくさもかれぬれは袖にそ殘るあきのしら露

右　　寂蓮

木葉ちるみ山のいほの時雨こそふるもふらぬも袖ぬらしけれ
初冬景氣袖ぬらせる心かはれる事侍らぬにや

八百四十四番

左 持　公繼卿

久かたの雲たちめくり時雨して野山のあさち色付にけり

右　家長

外山なる松な吹こす木枯にしらぬ梢のもみちなそ見る
立めくる雲吹こす木からしいつれとも殊事侍らぬにや

八百四十五番

左 勝　公經卿

神な月外山のしくれすきぬ也正木のかつらちりもあへねは

右　三宮

わきかれし木葉の音はたえはてゝ時雨のみちるもりの下陰
左散もあへねはといへる少心えかたきかたも侍れと右木葉の音にのこる時雨あはれあまり聞なれてや侍らん左歌姿はなかしく侍にや

八百四十六番

左　季能卿

かくしつゝ人めも草もかれよとや庭のあさちのけさのはつ霜

右 勝　内大臣

初時雨ふりはへてこそとはすとも都の雲のよそにたにみよ
庭の淺茅の枯行氣色も心なきに侍られと都の雲のよそになと侍はことによろしく侍へし

八百四十七番

左 勝　宮内卿

秋の色も今は嵐の山風に紅葉こき（吹イ）ませ時雨おつなり

右　忠良卿

山めくり時雨やすくる松かせの吹かときけはのきの玉水
吹かときけは軒の玉水なといへること葉つかひ此ころの歌におほく侍ちかくよりみゆる事に侍へし紅葉こきませ時雨おつ也もふるなりなと侍らんはよの常の事とかへられたるに侍めり大かたの歌の姿はよろしきにや侍らん

八百四十八番

左 持　讃岐

なきかはす籬の虫も鹿のねも時雨にかへてなとつれもせす

右　兼宗卿

秋のうちもおり〱音はせしかとも冬のはしめのはつ時雨哉
はしめ鳴かはすと侍よりまかきの虫鹿のね時雨なと聲々おほくかそへられたる心ちし侍いかゝ折々の音は冬のはしめのなと又平懐なるさまにや侍らん

八百四十九番

左 持　小侍從

なとつれて猶過ぬ也いつくにも心なとめぬ初しくれかな

右　通光卿

たえ〱の木葉か下の音信も霜にとちつる虫のこゑ〱
詞つかひ同音信に侍れはしゐて聞分かたくや侍らん

八百五十番

左　隆信朝臣

槇の屋の冬のさひしさつけかほに木葉しくれて袖ぬらす也

右 勝　釋 阿

そめすてゝ立田姫もや神な月風にまかせてちる紅葉かな

立田姫もや風にまかせて散もみち又優におかしく聞侍る事にや

八百五十一番

左　有 家 朝 臣

さひしさをとひこぬ人に山おろしの木葉吹まく庭をみせはや

右 勝　俊 成 卿 女

淺茅生のをのゝしの原霜かれていつくを秋のかたみとかみん

木葉吹まく庭をみせはやもおかしく見え侍をあさちふのをのゝしのはらいつくを秋のなと侍猶々すくれて艶に聞え侍れは是もいかゝ

八百五十二番

左 勝　保 季 朝 臣

嶺つゝき時雨る雲のたえまより夢かほのかにみる月のかけ

右　丹 後

ちりかゝる紅葉に色そかはりける袖をはそめぬ時雨と思ふに

夢かほのかになと詞のつゝきめつらしきさまに侍へし右歌そのことゝは聞え侍られとかやうの心はつねに侍にや

八百五十三番

左 持　良 平

木間もる夕日のかけはさしなからかたへしくるゝみやまへの里

右　越 前

續古今 木葉さへ山めくりする夕かな時雨をさそふみねの嵐に

兩方の時雨いくはく思ひわくへき程なくや侍らん

八百五十四番

左 勝　具 親

はれくもる影をみやこにさきたてゝしくるとつくる山のはの月

右　定 家 朝 臣

冬來ぬと時雨の音におとろけはめにもさやかにはるゝ木のもと

影を都にと侍はよその時雨にや心あるさまに侍へし

八百五十五番

左　顯 昭

雨とふるもみちの山をこえゆけは身のしろ衣色かへてけり

右 勝　通 具 朝 臣

野へにをく露の名殘も霜かれぬあたなる秋のわすれかたみは

紅葉の山みのしろ衣色かはれる心見所ありて珍敷見え侍れとあたなる秋の忘形見こそ誠によろしく侍めれ

八百五十六番

左 勝　女 房

冬來ぬと嵐にきくの露のまにぬれてほしあへす今朝そうつろふ

右　雅 經

暮ぬとも猶秋風はをとつれよ荻のうは葉のかれ／＼にたに

吹かはる冬の嵐の音を聞もあへすぬれてほす朝の露の色にうつろふ菊のにほひはをの詞心もそめはてられ侍りてかれ／＼の荻のうは葉のおとつれ何とも耳にとまり侍らす

八百五十七番

左　左大臣

夕ぐれの一むら雲の山めぐり時雨はつれに軒はもる月

右勝　寂蓮

朝ことにうつろふ色を置かへて霜にそかれぬしら菊の花

左心姿いとおかしきさまには侍をおほりの句の月やすこしさゝへて聞え侍らん右霜にそかれぬと思かへせる程心あるにや侍らん

八百五十八番

左勝　前權僧正

秋の夜の影みし水のうす氷月にこたふる冬は來にけり

右　家長

山かけや木葉しぐるゝ槇のやにもらぬ時雨は袖にのみして

影みし水の月にこたふる心めづらしく侍らん

八百五十九番

左勝　公繼卿

おもへとも心さたむるかたぞなき時雨る空のさ夜のひとりね

右　三宮

見わたせはすまのうらよりくもりきて時雨とわたるあはち島山

左歌優に聞え侍うへに右時雨とわたる雲のけしきもおかしくは侍をみわたせはとをきてとわたるとそ侍ける

八百六十番

左　公經卿

事とひし庭のみちしはうら枯て霜よりさゆる冬の夜な〳〵

右勝　内大臣

時雨するしるしも見えず神な月みわの杉むらおなしみどりに

庭の路芝の霜置には聞え侍を三輪の杉むらの時雨神な月にしるしのみえぬ心猶おかしくや侍らん

八百六十一番

左持　季能卿

山里は雪氣の空のくもるより分こん人そしたまたれける

右　忠良卿

さびしさは深山のおくの神な月時雨ぬ夜はも木枯のかせ

雪氣の空の雲に人を待しくれぬ夜半の風にさびしさをしれるともに殊事は侍らぬにや

八百六十二番

左勝　宮内卿

紅葉々の色をやとしてはては又さそひて出るやま川の水

右　兼宗卿

霜かれのお花か末になくもすは秋の名殘をとふにや有らん

むかしの花のかゝみとなる名は散かゝるをくもるといひ今の紅葉の下行山川はうつりしかけをさそふと見る春の花秋のもみちはことなれと心の色そむる思ひはおなしさまにをかしく侍へしなくもすはしの立枝にも見え侍ぬにやもすの草ぐきなといはては殊なる事なき物に侍めり

八百六十三番

左持　讃岐

槇の屋もひまなく苔にとぢられて時雨の音もかはるふる郷

右　通光卿

ふけゆけはいとゝかたしく袖さえて夜毎にしるしねやの上の霜

　雨首苫の下に時雨の音をわすれねやの上に霜の色を思へ
　りすかた詞いつれもわくへくも侍らぬにや

八百六十四番

　左　持　小侍従

尋きて歸らんみちそ忘ぬる花にかはらぬ雪の木かけは

　右　釋阿

うへをきて秋のかたみとみる菊の冬の色こそ猶まさりけれ

　左尋雪中寒樹混春花之美景右對霜後孤叢翫紫菊之殘色各
　催其感可謂同科歟

八百六十五番

　左　持　隆信朝臣

時雨こそ音もしつくもよそならめ月さへもらぬあしの八重ふき

　右　俊成卿女

木葉ふく嵐の庭の虫の音にほのかに殘る秋のこゑかな

　左あしの八重ふきの時雨しつくよそなりとはいかに侍に
　か右虫の音秋の聲おなし心とや申へく侍らんいかゝ

八百六十六番

　左　勝　有家朝臣

初霜のをきまとはせる菊の上にかされて秋の色をみる哉

　右　丹後

つくゝゝと身をしる夜はの村時雨よその床にはきかしとそ思ふ

　左菊の上の霜かされて秋の色なる心いとよろしくこそ侍
　れ非ニ啻六義之詞ニ已叶ニ五行之理ニ身をしるよはの時雨
　冬の空にかきらすや侍へきおほつかなくや

八百六十七番

　左　保季朝臣

散にける峰の梢はむなしくて色も殘らぬ山颪のかせ

　右　勝　越前

なかれくる紅葉の波の立田河ふもとにきかぬ嵐をそみる

　色ものこらぬ山をろしのかせよりは紅葉の波のたつた河
　見所ありてや見え侍らん

八百六十八番

　左　勝　良平

あしふきのやともあらはにかれはてゝ霜にさえたる夜はのさ莚

　右　定家朝臣

のこる色もあらしの山の秋をゐせきの涙におろすくれなゐ

　あしふきのやと殊にめつらしき所は侍られと優なるさま
　には侍にや

八百六十九番

　左　持　具親

新古今　今は又ちらてもまかふ時雨かなひとりふり行庭の松かせ

　右　通具朝臣

時雨行宿はいかにと木枯の吹につけつゝとふひともかな

　左心なかしく右は詞艷に侍にや

八百七十番

　左　顯昭

たきつ浪たつかときけは吉野河いはとかしはに時雨ふる也

右　勝　　家　隆　朝　臣

嵐ふく梢はゝれて大井河木葉かくれにやとる月かな

左たけあらんとはよめる歌に侍へし但たきつ浪たつかと聞はとはよしの河岩浪たかく行水にもなみたゝぬ時の侍へきにやおきつしほかせにしたかふ浦浪こそなきたるあさもことに侍らめ吉野の瀧の岩なみのあたりには立かとに聞なされん事有かたくや侍らんいはとかしはもときはなる物にそゝみて侍めれと時雨の音なとにはたよりも侍らすや右嵐の山の木葉ふりしきにける程ことはもけちかく心もをかしく聞え侍へし

八百七十一番

左　勝　　女　房

紅葉する程は時雨のむら雲に空行月やめくりあふらん

右　　寂　蓮

軒ちかき峯の嵐もこゝろせよ木葉ならてはくもるやとかは

右歌心せよといへることはかはいすや侍らん紅葉する程は時雨のなとすかた詞まきれすおかしく聞え侍れは空行月の光も猶勝にや侍らん

八百七十二番

左　勝　　左　大　臣

霜うつむかり田の木葉ふみしたきむれゐるかりも秋なこふらし

右　　家　長

山嵐にたえすちりくる紅葉はのなきまよはせる庭のにゝ霜

かり田の木葉ふみしたきとなき秋なこふらしなと侍心詞巧みに及ひ難き所聞えてきら〳〵しくおかしきかたも侍にや絶すちりくる紅葉々のなきまよはせる初霜のけしきもおもかけなかしく思よりてみえ侍れと左には及ひ難し

八百七十三番

左　持　　前　權　僧　正

あけはみよ四方の山邊の雪の色なころもてさむし東雲の空

右　　三　宮

虫の音は草葉とゝもに枯ぬれとよはらぬものはあさちふのかせ

左のすかた詞いとよろしくは見え侍なしのゝめの空にあけはみよと侍やたかひて聞なさるゝかたも侍らん四方の山への雪の色も見えわかるへきほとになりぬとこそ侍らめ右虫の音かれて風の音よはらぬ心もことはり聞え侍れはいつれと申かたくや

八百七十四番

左　持　　公　繼　卿

風わたる梢に雨なきゝなれてもろにぬれける袖もしられす

右　　内　大　臣

むしの音は木葉の下にうつもれて時雨のみこそ庭に音すれ

兩首ともに下句や思いれぬさまに侍らん

八百七十五番

左　持　　公　經　卿

さえくらし夜な〳〵過るあられ哉ならのふり葉に音を殘して

右　　　　忠良卿

ふしはれや木葉なみよるきよ見かた嵐のすゑにおきのとも船

よな〳〵過るあられならのふり葉の音は誠にさも侍らむ

かしさえくらしそかなひても聞え侍らぬふしのねの木葉

清みかたおきの友舟にまかふはかりはるかに吹みたされ

ん程歌のならひには侍れとあまり事遠くや侍らんよもすか

らふしのたかねに雲消てなと近頃侍歌も雲のきえ月のす

ゑんほとは木葉のなみよらんにすや侍へきいかゝ

八百七十六番

左　　　　季能卿

ひとりぬる山鳥のおのかきたれてふるらん雪をおもふさひしさ

右　勝　　　　兼宗卿

都たにあられふる夜はしからきのまきの外山そおもひやらるゝ（時雨るイ）

山鳥のおのつゝきこそ鳴のはねかきなとにやきゝなれた

る心ちし侍らんさるゆへの侍にや霰ふるよはしからきの

なとこと葉なたらかにことはり聞えて侍にや

八百七十七番

左　持　　　　宮内卿

立田山木の下ふしの跡にのみ嵐に殘るもみちなりけり

右　　　　通光卿

あはれなりみ山の庵にちりつもるならの枯葉にあられふるなと

左はわりなき風情をもとめ右はよのつねの霰の音をよま

れて侍れと歌の程いつれとも見え侍らぬにや

八百七十八番

左　持　　　　讃岐

みなと河なみの枕にねきかぬ六時雨にはとまの雫にそゝる

右　　　　釋阿

山めくる時雨はやかて過ぬれと木葉にぬるゝ袖のうへかな

兩首の時雨みなと河枕のもと山めくりの袖のうへ又おなし程にや聞え侍らん

八百七十九番

左　　　　小侍從

【新後拾遺】跡つけしその昔こそ戀しけれのとかにつもる雪を見るにも

右　勝　　　　俊成卿女

秋も猶あはれそありし夕暮かゝる嵐のかせはなかりき

左はむかしの事をこひ右は秋のあはれをあらそへり是もいつれとはわかれ侍らねと嵐の風はしめをはりかなひてや聞え侍らん

八百八十番

左　持　　　　隆信朝臣

木葉かときゝたにわかぬ村時雨もらて過ぬる音そすくなき

右　　　　丹後

【續後拾遺】山さとは雪より先に跡たえて木葉ふみ分とふ人もなし

左の木葉時雨誠にきゝもわかれ侍らす少きもわさともとめてよむへき心とも聞え侍らねと晴くもり不定空のけしきなとをいはんためにこそ侍らめ右の雪より先も又ふりにたる心ちし侍にや

八百八十一番

左　持　　　　　　　　有　家　朝　臣

わけきつるすそ野のおたゝら枯て衣手さむししのゝなふゝき

右　　　　　　　　越　　　　前

木枯に峯のもみちはちりにけり色々にたつうちの河なみ

左のしのゝなふゝき身にしむまては侍らねとさるかたに

いひくたされては侍にや右もいろ〳〵にたつといへるそ

少おもはまほしく侍れとおとるまては侍らし

八百八十二番

左　持　　　　　　　　保　季　朝　臣

露ふれし葉末は霜に成にけり秋より冬のたのいゝ（ミ）の原

右　　　　　　　　定　家　朝　臣

かれはつる草のまかきはあらはれて岩もる水をうつむ紅葉々

左初五字いかになきいかにきこゆる露をふるゝとは申へ

きにかいまたえ思え侍らねはわきまへ申かたくや

八百八十三番

左　勝　　　　　　　　具　　　　平

うたゝねの夢もあらしの山里にまきの葉つたひ霰ふる也

右　　　　　　　　通　具　朝　臣

時雨つる今朝のむら雲程もなく入日にみかく山のはのつゆ

夢もあらしの山里つねの霰の音なれと誠におかしくこそ

聞え侍れ今朝の時雨の露みしかき冬の日なとは申なから

入日の山のはにみかく事如何と侍らん

八百八十四番

左　　　　　　　　具　　　　親

今こそは木葉かくれもなけれとも時雨に殘るも[illegible]

右　勝　　　　　　　　家　隆　朝　臣

月さゆる庭の木葉になく霜のくもらぬうへにあられふるなり

冬のよの月はおなしさまに侍を左の末の句や少さゝへて

聞え侍らんくまなき霜の上の月は光も殊に侍らんかし

八百八十五番

左　勝　　　　　　　　顯　　　　昭

雪ふれはみな白妙の梢にて名もさたまらぬ花さきにけり

右　　　　　　　　雅　　　　經

行かへりこれや時雨のめくる雲又かきくらす遠山のそら

木毎にさかはいつれを梅とも分き難く春なから消かてに

せしならひにはさくらともおほめかれ侍らて名もさたま

らさらん花のさまはほいなきかたもや侍へき山めくりな

といひならはしては侍れとこれや時雨のめくる雲とをけ

るはいかにそ聞え侍れは左猶姿をかしく侍にや

八百八十六番

左　持　　　　　　　　女　　　　房

はれくもり時雨ふるやの板まあらみ月をかたしく夜（床のイ）はのさ莚

右　　　　　　　　家　　　　長

袖さえてぬる夜の床もさむしろに夢をはかなみ松風そふく

月をかたしくさ莚のおもかけなへてならすおかしく思ひ

やられ侍をぬるよの床もといひて夢をはかなみと思よれ

る心詞是も優には聞え侍にや

八百八十七番

左 持　左大臣

なにはかた光を月のみつ蘆にあしへの千とりうらつたふなり

右　三宮

まれにこし都の人はかれはてゝ草の戸さしにあられふるなり

あしへの月の光草扁のあられの音又いつれと申かたくや侍らん

八百八十八番

左 勝　前權僧正

おく山の雪けの水になかれ出て秋と冬とをみするもみちは

右　內大臣

ひとりねの友とや鷺もふる雪をゆるきの杜に立もさはかぬ

雪けの水になかれいつる紅葉ゆるきの森にさはかぬ白鷺いつれもつれに思よりかたきさまには侍れとおく山の紅葉秋を見せん色はふかきかたや侍らん

八百八十九番

左　公繼卿

吹まよふ峯のあらしはつもりにし庭の木葉を又ちらしけり

右 勝　忠良卿

新拾遺　今はとてあさちかれ行霜のうへに月影さひしをのゝしの原

右は下句やさしく聞え侍らん

八百九十番

左 勝　公經卿

手にくみしゐての玉水さゆるよに契をむすふうすこほりかな

右　兼宗卿

ふる郷のねやの板まにもるあられ思はぬ床に玉そしきける

契りをむすふ水ことは優に聞え侍へし宿の床のおもはぬことはゝさきにも侍つるにや又か樣の心つれにめなれても侍らん

八百九十一番

左　季能卿

そことなき雪を心にわけさせてみぬ深山へのこゝにさひしき

右 勝　通光卿

みる人に秋の名殘をしのへとやかれ野にさゆる冬のよの月

初の句のそこおはりの句のこゝろこひねかはれぬさまにや聞え侍らん枯野にさゆる冬のよの月うるはしきさまには侍らん

八百九十二番

左　宮內卿

つの國やなにそはあしのあるかひは風もあらはに宿はなりつゝ

右 勝　釋阿

はつせ山夜ふかき鐘におとろけは旅ねの床も霜そさえける

右のすかたことはめつらしきには侍らねといとをかしく聞え侍いかゝ

八百九十三番

左 勝　讃岐

霜結ふ冬のよな／＼かさなりて風のみかれぬ庭のあさちふ

右　俊成卿女

待人もとふへき里もなけれとも時雨ふる夜はねられさりけり

風のみかれぬ庭のあさちふいとよろしく侍かな

八百九十四番

左 持　　小　侍　従

夕しほにあら磯涙やさはくらんゐもさたまらす鳴千鳥かな

右　　丹　　後

時雨たに音にしらるゝ山里のならのかれ葉に霰ふるなり

ゐもさたまらすといへるおかしきことはには侍らぬにや

あら磯のゆふしほも山さとの霰いつれもふりてや聞え侍

らん

八百九十五番

左　　隆　信　朝　臣

我門のかり田のねやにふす鴫の床あらはなる冬のよの月

右 勝　　越　　前

みし人もとはてのみこそ杉の庵にたえす音する村しくれ哉

杉の庵の時雨も詞のつゝき優に侍を田家の冬月猶すかた

いひしりてや聞え侍らん（或本判詞如此）左歌殷富門院大

輔先年所詠也作者定忘却歟隨右歌優也

八百九十六番

左 勝　　有　家　朝　臣

新古今霜をかぬ人めも今はかれはてゝ松にとひくる風そかはらぬ

右　　定　家　朝　臣

しほれはや露のかたみになく霜も猶嵐ふく庭のよもきふ

霜なく草を詞にあらはさすして風吹松の音にとはれたる

心おなし人めかるゝもかくてこそいと宜聞え侍れ

八百九十七番

左 勝　　保　季　朝　臣

けふまては猶とちはてぬ氷にて音をそ殘す谷川の水

右　　通　具　朝　臣

霜結ふ袖のかたしき打とけてねぬよの月の影そさむけき

左猶とちはてぬ氷にてなとさるかたのすかたに侍へし右

袖のかたしき打とけてねぬよと侍を五文字のかすにつけ

てはしくよみつゝけぬ程はかみにことはりたる様にそ

聞え侍さむけきも此歌の詞つかひにはすこし思はすとや

侍らん如何

八百九十八番

左 勝　　良　　平

大井川なみは木葉になりはてゝ峯に色なき嵐山かな

右　　家　隆　朝　臣

新古今夕つくひさすかにつつる柴の戸に霰ふきまく山おろしのかせ

柴の戸の冬のゆふけ霰の音山おろしのけしきもめのまへに

むかへる心ちして誠になかしくこそ見え侍めれ左歌させ

るとかなくは侍へし

八百九十九番

左　　具　　親

松風も今は嵐になるみかた色なき涙のふゆのさひしさ

右 勝　　雅　　經

霜やこれかはらぬ色を置あかし月にかれ野の秋のふる郷

秋も見え侍りつるにや鳴見かたの松の風あらしとならん

心おなし人めかるゝもかくてこそいと宜聞え侍れ

事いかゝよもの草木のしほるれはなといふ歌も秋部に侍れは山風なとよめるにや侍らんかはらぬ色を置きおかしといひかけて月にかれのゝ秋の故郷と侍るもいとおかしく見え侍れは色なき涙たちならひかたくや侍らん

九百番

左　　　顯　　昭

東路を雪にうち出て見わたせは浪にたゝよふうき島かはら

右　勝　　寂　　蓮

木葉ちるみきはをはらふ山風の跡にむすふは氷なりけり

左歌雪に打出てといへる波にもことよりてをかしくは侍をすこし思出らるゝ事そ侍作者は見およはすも侍らん建久二年左大將家百首

あしからの關路越行しのゝめに一村かすむうき島かはら

正治二年内大臣家歌合

駒なめて打出の濱よ見わたせは朝日にさはく志賀の浦浪

雖レ似二昨今事一徐逢二遐邇之聽一打出見渡詞東路眺望心大略相同此兩首歟右歌氷句雖二頗無一レ詮風體似三聊有二レ心歟

千五百番歌合卷第十三　冬二

判　蓮經　季經入道

九百一番

左　勝　　女　　房

からにしき秋のかた見をたゝしとや霜まて殘る庭の一むら

右　　　三　　宮

とふ人のふみわけてける庭の雪の跡をそうつむ夜はの月かけ

左歌そのものをあらはさすしてそのものときかする一の様ニ侍り彼「霜の縦露のぬきこそよはからし山の錦のをれはかつ散」といひ「から錦枝に一村のこれるは秋の形見をたゝぬなるへし」なとよめる姿なり霜まてのころ庭の一むらなとおもしろく侍り右歌心をかしく侍れと猶霜まてのころは詞をきまさりてやとそうけ給侍る

九百二番

左　持　　左　大　臣

霜の上にをのかつはさをかたしきて友なきをしのさよふかき聲

右　　　内　大　臣

詞花に
時雨ともなにかはわかん神な月いつもしのたのもりのしつくは

左歌をのかつはさをかたしきて友なきをしのさよふかきころ誠心すみて聞え侍り右歌いつもしの田の杜のしつくはと侍るよろしきに似たり勝負いつれとおもひわきかたく侍り

九百三番

左持　　　前權僧正

吉野山みねのしら雪いかならしふもとの里もふらぬ日はなし

右　　　忠良卿

しはしこそ秋のかたみとなかめしか霜に跡なき野への小萩か（?）な

左歌よろしく聞え侍に上下の句いはての字おなしこれは同聲韻病と遁成式にいたせり隨て天德四年内裏歌合に兼盛か歟冬歌に「ひとえつゝ八重山吹は開けなんほとへてにほふ花とたのまん」とよめるを聲韻病と咎められたり右歌これも歌からはおかしく聞ゆるに上下の句の始のおなしくて聞よからぬ同歌合に中務戀歌に「ことならは雲井の月と成なゝん戀しき影や空にみゆると」とよめる左方念人聞にくきよし申也左は聲韻病難然ちかき比はあなかちにはゝからさるにや右は避レ非レ病きゝよからねはなすらへて爲持

九百四番

左　　　公繼卿

さか木葉に霜のしらゆふかけてけり神なひ山の明ほのゝ空

右勝　　　兼宗卿

さひしさも中々さそわすれぬる深山の里の雪のけしきに

左歌は金葉集に「榊葉のみむろの山に霜ふれはゆふしてかけぬ賢木葉そなき」といふ歌にこそ侍めれ右歌猜何そいまこゝし思へくやと聞ゆれとも古き心ならねは爲勝

九百五番

左　　　公經卿

時雨たにあらそひかねし槇のはのうつもれはつる雪の夕くれ

右勝　　　通光卿

初（打イ）時雨むら雲まよふ夜半の月なかめわひぬる山かけの庵

左時雨たにあらそひかねしとは色なき雲にや[illegible]れはつるといへるもいかゝ右歌下の二句いかに侍こそまさるへくや

九百六番

左　　　季能卿

せめて猶おしみなれにし花ゆへに雪ふく風もうらめしき哉

右勝　　　釋阿

霜さゆるかれ野の草のはらにきて涙そやかてこほり成ける

左歌心はきこえ侍に雪ふく風こそあまりたしかに侍れ右歌かれのゝ草の原にきてなとよろしくうけ給侍り仍爲勝

九百七番

左　　　宮内卿

神な月夕日のかけに成にけりあらたちそむる奥つしら波

右勝　　　俊成卿女

ふみわけてさらに尋る人もなし霜にくちぬる庭のもみちは

左の波あらたつよりは右の霜にくちはてぬるはまさりてや侍らん故猶右を爲勝

九百八番

左勝　　　讃岐

新古今
世にふるはくるしき物をまきのやにやすくも過る初しくれかな

右　　丹　後

なには江にむれゐるたつもかくれなく蘆の下葉は霜かれにけり

右歌蘆の下はことなるふしならね共歌からうるはしくや侍らん左歌やすくも過る初時雨かなといへるよろしく侍り仍爲勝

九百九番

左　　小　侍　從

涙かへるいそまかくれの友千鳥浦よりをちにうらへたふ也

右勝　　越　前

山里の庭のあさちふ霜かれて人めもさそなおもふかなしさ

左歌いそ浦の様なる事をはふる丶はとかめ申にや今はあなかちに申さぬこそされとも先例を申さんとことはかるへし右歌はよろしく侍れは爲勝

九百十番

左持　　隆　信　朝　臣

何ゆへのうらみをすまの友千鳥涙にしほる丶あかつきのこゑ

右　　定　家　朝　臣

花すゝき草の袂もくちはてぬなれて別し秋をこふとて

左歌何ゆへのうら見をすまの友千鳥涙にしほる丶曉なといへるよろしくこそ侍れ右歌草の袂くちはてぬなれてわかれし秋をこふとてといへる又やさしく侍れはいつれと思かね侍りぬ

九百十一番

左持　　有　家　朝　臣

神な月やまかきくもるむらしくれほとやはふるにけふも暮ぬる

右　　通　具　卿

水鳥のはらなはらふなとすなり袖にそ消ぬ冬のよの霜（はイ）

左歌村時雨ほとやはふるにけふも暮ぬるといへる冬日みしかしといへとも無下にほとなくや右歌野へは旅ふしともあさちか原にかたしく袖なともいはて袖にそきえぬ冬のよの霜といへる兩首共に有不審仍爲持

九百十二番

左持　　保　季　朝　臣

草の庵もあらぬをかやと成ぬれはよな／＼なれし虫のねもなし

右　　家　隆　朝　臣

春秋のいろ／＼ことにみし夢のさむるは冬の楕成けり

左歌をかやそ心えかたく侍れとも右歌夢思ときかたく侍れはなすらへて持とや申へからん

九百十三番

左持　　具　平

いつしかと鴫のはかひに霜をきて玉もの床にこほりゐにけり

右　　雅　經

この比は月こそいたくもる山の下葉のこらぬ木枯のかせ

左歌冬のけしきあらはれて聞え侍り右歌下葉のこらぬこかん木枯の風さもと聞え侍り又持と申へきにや

九百十四番

左勝　　具　親

今は又きくのまかきはかれはて丶なきまよふ霜にあり明の月

右　寂蓮

浪さはくなしの羽風もさたまりぬ結ひやとしつる池のうすらひ

左歌霜はかれはてゝ月と霜とい又ますよふらんさもと聞え侍り右歌浪さはくなしの羽風も定まりぬといへる事心えす池やこほりぬる羽風にさはゝ浪もさたまりぬとこそいふへけれことは上下したるにや又しつるといふ詞もてつゝきに聞ゆれは左の勝なるへし

九百十五番

左 勝　顯昭

むさしのゝ草のゆかりもとひかねつつゝきの原の雪の夕くれ

右　家長

結ひきて露にかはりし初霜の霜より雪のふる郷の庭

左歌むさしのゝつゝきの原と有詞に侍りかはつといふつ文字そいかゝ侍へき右歌露霜雪つくせり事しけくやつもしそ心ゆかねとも左勝なるにや

九百十六番

左 持　女房

深山ふくよもの木枯さえ初て槇の葉しろく初雪そふる

右　内大臣

なさゝ原あられふる夜そ思ひ出るいまさら〳〵に獨のみねて

左歌み山ふく四方のこからしさえそめてまきのは白くなと侍るたけたかくこそ承れ右歌和泉式部か竹の葉に霰ふるなりさら〳〵にひとりいぬへきなとよめるを思ひてあられふる夜そ思ひいつる今さら〳〵になと侍又おかしきさまにとりなされて侍れはいつれとわきかたく侍り

九百十七番

左　左大臣

網代もる宇治のさと人いかはかりいさよふ浪に月なみるらん

右 勝　忠良卿

（續後拾）あはち島浪もてゆへる山のはに氷て月いさえわたる哉

左歌させるふしの侍らぬにや右歌は歌から詞つゝきなときよけにうけ給る仍爲勝

九百十八番

左 勝　前權僧正

岩にさく雪の花こそあはれなれ春も見さりき秋も見さりき

右　兼宗卿

待人の跡なはつけよ庭の雪ひとりはいかゝみ山へのさと

左歌は古今に紀秋岑か歌に「白雪の所もわかすふりしけはいはほにもさく花とこそみれ」とよめるを思ひて岩に花さくと侍にや跡なきにあらす面白こそ見え侍れとも の二句ことにめつらしく侍り但雪の花春の初に花と（はなとイ）かはらさらん右歌雪は跡つけかたくこそよみならはして侍れともけふこん人をなともよめれはそれはあなかちの難にあらすひとりと人とそ申比の判者或は爲病いまた事きれすなと判詞に申けるしかれはめつらしきうへにこの不審なきにつきて左を爲勝

九百十九番

左 持　公繼卿

とふ人のなとかときけは山かけの眞柴かうへにあられふるなり

右　　通光卿

道たへぬけふよりやさは都人心みゆへきにはのしら雪

左歌とふ人のなとかときけはといひ右歌けふよりやさはみやこ人といへる勝負難辨歟

九百二十番

左　　公經卿

うちとけし岩まの水は今夜こそまことに氷る冬のよの月

右勝　　釋阿

むら雲の時雨し空はそれなからさゆる嵐にあられふるなり

左歌ことなるあやまりは侍らぬに右歌さゆる嵐にあられふるなりと侍まさるへきにや侍らん

九百廿一番

左勝　　季能卿

なときけは梢くもらぬ木葉にもまことに袖はうち時雨けり

右　　俊成卿女

風にちる木葉みたるゝ露霜にむすほゝれ行冬のよの夢

左歌初の句になときけはと打いたせるやにはかなるさまならんされとも心なきにあらす右歌風にちる木葉みたるゝは今の世にはあなかちにさらぬにやと思給ふれとも第一第二のはての文字おなしきなは頭尾の病と濱成式にいたせりうちきくも聞よからぬに左の可勝にや

九百廿二番

左勝　　宮内卿

いにしへに花ももみちも成はてゝ雪にそ宿の梢なはまつ

右　　丹後

曉の時雨のなとにたくふなり寐覺もよほす鳴のはねかき

右歌はうるはしくよまれたれとも左歌は心ふかくめつらしきやうにうけ給れは猶まさると申へきにや

九百廿三番

左勝　　讃岐

うちはへて冬はさはかり長夜を猶のこりけるあり明の月

右　　越前

夜もすからさえつる床のあやしさにいつしかみれは嶺のはつ雪

左歌心おかしきうへに猶のこりける在明の月よろしくや右歌これもよろしく承はれ共左の猶のこりける有明の月は心にとゝまれりと可申

九百廿四番

左　　小侍從

谷ふかみ住人いかにせよとてかこほりなむすふ山川の水

右勝　　定家朝臣

時雨こし峯の松かけつれもなくすむにほ鳥の池の通路

左歌めつらしき事なきうへにすむ人いかにせよとてかといへる無下になに心もなくや右歌こゝろ侍ればまさるへし

九百廿五番

左持　　隆信朝臣

奥つ浪たかしの濱のさよ千鳥跡もさためぬ聲きこゆ也

右　　　　通　具　朝　臣

冬のよのね覺ならしさきのゝの時雨かうへにふるあられ哉

左歌おきつ浪たかしの濱のなといひよれるほとよろしく聞ゆるに跡も定めぬなと侍心ありと申へし右歌もよろしく侍り持と申へきにこそ

九百廿六番

左　勝　　　　有　家　朝　臣

玉葉
村雲のすきのいほりのあれまより時雨にかはる夜はの月哉

右　　　　家　隆　朝　臣

楸おふるさほの河原にたつ千鳥空さへ淸き月に鳴なり

左歌むら雲の杉のいほりのあれまより時雨にかはるらん月前影侍り右歌かゝいひなれて侍れともさしたるふしは侍らぬにや左つよきにこそ

九百廿七番

左　持　　　　保　季　朝　臣

外山なる松よりこゑのうつりきてかれのゝ嵐月にふく也

右　　　　雅　經

淵はせにかはるのみかは飛鳥川昨日の淚そけふはこほれる

右歌あすか川ふちは瀨になる事つねに聞ゆるにとりて此歌はこほりにとりよれるたくみなるにや左歌外山なる松よりこゑのうつりきてかれのゝ嵐月に吹なりさも侍なんと思給へれは持なとにてこそ侍らめ

九百廿八番

左　　　　　　　　　　眞　　　平

あさちはらこほれる露に霜ふりて玉ゝりうへに玉そこほるゝ

右　勝　　　　寂　　　蓮

續古今
心とやことり明石のうら千鳥友まとふへき夜半の月かは

左歌玉ゝりうへに玉そこほるゝなと侍あしからす侍れと右歌ひとりあかしの浦千鳥といひて友まとふへき夜半の月かはといへるよろしきにや仍以右爲勝

九百廿九番

左　持　　　　具　　　親

霜にのこるみとりはいつか嶺の松ありとはかりそ雪の下風

右　　　　家　　　長

はりまかた磯うつ浪のなみのまに友よふ千鳥こゑのころ也

左歌心なきにあらす右歌是又あしからす持と定申

九百卅番

左　持　　　　顯　　　昭

住吉のまそ江の蘆も霜かれてよそにもしるきみなつくし哉

右　　　　三　　　宮

谷川の岩うつ波やこほるらん嶺の嵐の音のさむけさ

左歌ことなるとか侍らぬにや右歌これもあしからす侍に文字の多侍らんされ共又持なとにて侍らん

九百卅一番

左　持　　　　女　　　房

玉葉
里人のいほりにたける椎柴のけふり吹しく山おろしの風

右　　　　忠　　　良　　　卿

ひとつ空におなし雲こそかはりけれふもとは時雨嶺はしら雪

左歌けふり吹しくなとよろしく聞え侍り右歌是又ゆへなきにあらされは猶持と申へし

九百卅二番

左　勝　　左大臣

王葉
朝日さす氷のうへのうすけふりまたはれやらぬよどの河きし

右　　雅宗卿

吉野山さくへき花のしろへかとみれは松にも雪そふりける

左歌よろしき姿にこそ侍るめれ右歌又させるとかきこえ侍られとも左は詞つかひまされるにや

九百卅三番

左　　前權僧正

白浪のこえてかへるとみえつるや雪に風吹すゑの松やま

右　勝　　通光卿

うちしほれ今はお花か末の露むすひし秋の跡しのひけり

左歌は古今に「浦ちかくふりくる雪はしら浪の末の松山こすかとそみる」と侍る歌を思て風に雪をふかせて白浪をこしてかへされて侍り右歌打しほれてお花か露むすひし秋なとのへるはすこしまさるへきにや侍らん

九百卅四番

左　　公繼卿

日をふれとまた跡もなき庭の雪にとはれぬ程を人に見えぬる

右　勝　　釋阿

冬くれはをのかやくとや炭かまのけふりにきをふおほはらの里

左歌「我宿は雪ふりしきて跡もなし踏分てとふ人しなければ」といひ又「雪深き道こそしるき山里は我より先に人こさりけり」なといへる歌にや聞なれたる體也右歌は萩のふる枝をやくとやくかなとよめる思出られてをのかやくとやといへるおかしくこそきをふもたよりありて侍り仍勝と申へし

九百卅五番

左　　公經卿

うちむれて遠さかり行千鳥哉浦よりをちにこゑを殘して

右　勝　　俊成卿女

露こほる野路の玉さゝよをへつゝ嵐にそよき霰ふるなり

左歌浦を遠さかりなん千鳥のこゑの殘らん事ありかたくや上下の初の字同歟右歌嵐にそよきあられふるなといへるすこしまさるへきにや

九百卅六番

左　勝　　季能卿

中々に軒の雫の音もなし木葉のふるもさひしかりけり

右　　丹後

夜やさむき友なし千鳥打わひて浪の立ゐにねをのみそなく

左歌させるあやまちは聞え侍らす右歌金葉集に「あふ事はいつともなきさの濱千鳥浪の立ゐにねをのみそ鳴」といふ歌にたかひ侍らすやうちわひてといふ心もゆかす左の勝にこそ

九百卅七番

左　勝　　宮内卿

ほともなく風のけしきもあらち山みねよりわけて積る白雪

右　　越前

これなきかん生田のおくにさ夜ふけて妻や争ふなしのもろこゑ

左歌ことなるあやまりなきにや右歌生田のおくおほつか
なしもし生田のおきにや生田の杜のおくになしゐるへき
所やは侍る左可勝

九百卅八番

左持　　讃岐

露は霜水は氷にとぢられて宿かりわぶる冬のよの月

右　　定家朝臣

まきのやに時雨あられは夜がれせてこほるかけひの音信そなき

左右ともに心おかしく侍には勝劣難決

九百卅九番

左　　小侍従

たにかくれ木葉かしたのむもれ水こほれはやらん音信もせぬ

右勝　　通具朝臣

あま人のほしあへぬ袖もこほるらんなしまの浪に月さゆる夜は

左歌こほれはやらん音つれもせぬといへるほと無下にお
さなくや右歌あま人のほしあへぬ袖といひてなしまの浪
に月さゆる夜はといへるいひなれてしほはこほらぬ物な
れともこれは月の光をこほりによせたる也仍右爲勝

九百四十番

左勝　　隆信朝臣

山のはは宵よりしらむ雪のよの猶さえ行や明ほのゝそら

右　　家隆朝臣

衣手に松風さむみ住よしの夕浪千とりうらつたふなり

左歌心たきにはあらす右歌これはひとつの姿をよめるに
やなにとなくいひちらしたり左つよく侍らん

九百四十一番

左勝　　有家朝臣

柴のいほの軒はの日かけいまさらにくもるとすれは霰ふる也

右　　雅經

つくは山しけき梢やいかならんこのもかのもの雪の下おれ

左右なの〳〵よろしく侍にとりて左はいますこし思へる
所侍にや猶左勝にや

九百四十二番

左　　保季朝臣

はる〳〵と猶行末やおほえ山いくのゝみちの雪の明ほの

右勝　　寂蓮

志賀のうらはこほりにけりな有明の月より後にやとる月かけ

左歌はる〳〵となを行末やおほえ山いくのゝ道のなとい
へるあしからぬに右歌の有明の月より後にやとる月かけ
といへるまさり侍らん

九百四十三番

左勝　　良平

（新後撰）さ夜千とり浦つたひ行浪のうへにかたふく月も遠さかりぬる

右　　家長

波のうへに行ゑもしらぬうきす哉すたちにけりな鴨のひなとり

左歌さよの月もなとかたふくと讀きゝらん五六月の月はまゐに西にはかたふくにこそ侍めれ右歌にほいうきすのゆられん事冬にかきるへからす又にほは子をはいつうむにかはいつれの鳥も春もしは夏のはしめなとにうむにこそひなもたちたりといふ共かならす冬と思かたし左まさるへきにこそ

九百四十四番

左　　　　　　　　　　具　　　親

木からしやいかに待みん三輪の山つれなき杉の雪おれの聲

右　勝　　　　　　　　宮　　　内

雪ふれはしかのからさき浦さえて氷のうへによするしら浪

左歌心えかたし伊勢か三輪の山いかに待みん年ふ共とよめる歌を思ひて待みんとよめる歟それはあひこしれるおとこ心かはりにけれはおやの大和守に侍けるもとへまかりけるとて三輪の山いかに待みん年ふともたつぬる人もあらしとよめるこれは木からしやいかに待みんとよめる心得かたく侍り右歌聞なれたるさまなれ共かち侍らん

九百四十五番

左　　　　　　　　　　顯　　　昭

千鳥なくせとのうきねに月みきとしあはれさひしき浪の上哉

右　勝　　　　　　　　内　大　臣

こゆるきの礒の松風おとすれはなみ浪千鳥たちさはくなり

左歌つねに聞なれたるさまにや月夜さしといひてふるまへるはかりにや右歌こゆるきの礒の松風なとすれはといひて夕浪千鳥たちさはくなりと侍るよろしきに似たり仍猶右爲勝

九百四十六番

左　勝　　　　　　　　女　　　房

なしてるやなにはの蘆のしたかくれかりねもる鴨の霜に鳴こゑ

右　　　　　　　　　　雅　宗　卿

いつかわかすかたの池と思ふにもかれはのあしのあはれなる哉

左歌なしてるやなにはの蘆のといひてかりねもるかもの霜に鳴こゑと侍る歌からたけたかく侍り右歌寒蘆をみて老後を歎くきもありぬへき事に侍れ共わか姿なとさゝれたるあまりに侍りたゝさかりすきん事を思ひあはせたるさまはよく侍ぬへしいかにも左まさるへきにこそ

九百四十七番

左　持　　　　　　　　左　大　臣

みむろ山嶺のひはらのつれなきをしほる嵐にあられふる也

右　　　　　　　　　　通　光　卿

たひねからきゝやしのはぬ礒千鳥なれたるあまの袖をとはゝや

左歌よろしく侍り右歌又よろしく侍りなれたるあまの袖を聞はいかなと又いひなれて侍れはこれかれ持と申へし

九百四十八番

左　　　　　　　　　　前　權　僧　正

おなし雪のよそめ成けり初瀬山花とみつるも月とみつるも

右　勝　　　　　　　　釋　　　阿

しきしのひ夜半の枕はさえつれと今朝はうれしき庭の初雪

左歌心詞めつらしく侍り初瀬山の雪のよそ目花とはうたかひなく見え侍なん月とは庭の雪はまかひ侍とも泊せ山のよそめには見えかたくやとそ思ひ給ふ右歌はうるはしく聞え侍れは勝と申へし

九百四十九番

左　公繼卿

木葉をは風もはらひき雪にこそうつもれにけれ冬の山里

右勝　俊成卿女

おく山の雪氣の水やくたすらん瀧つ岩ねにつもるもみちは

左歌心なきにあらす右歌は古今に「此川にもみちはなかる奥山の雪氣の水そ今まさるらん」といへる歌にこそふるきによりて以右爲勝

九百五十番

左持　公經卿

あし鴨のうはけの霜をうちはらふ羽風もさやに氷る空哉

右　丹後

こほりゐて鳥たにすます成にけり昔の池の跡ならねとも

左歌は風もさやにとよめるいかに心うへきにか萬葉集に「さゝの葉は見山も清にみたるれ共」と讀る或本にはさやにとよめり萬葉のことくはそよくにや此歌にはさゆるよしにやそよきてこほる空といへり又さやに見ゆるなとこそよめれ右歌むかしの池はもしかつま田の池にや水なきによりて昔の池といはん荒涼にや侍るらん持なるへし

九百五十一番

左　季能卿

さゆるよの氷のうへに住なれて月に鳥ゐるかつまたのいけ

右勝　越前

あり明の月のてしほに湊ふねいまや入るらん千鳥たつ也

左歌心なきに侍らねと鳥ゐるといふ詞そいかゝと承る又こほりしぬれは鳥はゐすとこそよみならはしたれはすみなるゝと侍るおほつかなく侍り右歌心なきにあらすみなと舟そいかにそ侍れとも勝成へし

九百五十二番

左　宮内卿

花にとひし跡をは尋て侍人もこすゑの雪にあらし吹なり

右勝　定家朝臣

これやさは秋のかたみの浦ならんかはらぬいろを奥の月かけ

左歌花のおりはとひし人もいまはこすとよめるにや心きこえ侍れとも右歌「是やさは秋のかたみの浦ならん」なといへるよろしく侍りおきの月かけそいかに侍れとも勝と申へし

九百五十三番

左持　讃岐

風わたる池のみきはのいかならん袖たにこほる冬のよな〳〵

右　通具朝臣

こほりゐるかけひのをとのたえしより夜はの嵐そ寢覺聞ける

左歌「霜をかぬ袖たに冴る冬の夜の鴨の上毛を思ひこそやれ」といふ歌の心をとかくしるせるにや右歌夜はの嵐

のれ聲とひけるもあしからねは持と申へし

九百五十四番

左　　　　　　小　侍　従

あられふり風もはけしき冬のよにつかはぬなしの聲そわふなる

右　勝　　　　家　隆　朝　臣

夏かりの玉江のあしも霜かれて葉分の涙になくこそ鳴なる

右歌霜かれの蘆の葉分になしのなかん事夏かりのといはても侍りなんかしされ共左歌はわふるといふ詞いかにそ侍れはまくへきにこそ

九百五十五番

左　持　　　　隆　信　朝　臣

春秋の花か月かとなかむれは雪やはつもる庭も梢も

右　　　　　　雅　　　經

とふ嵐とはぬ人めもつもりてはひとつなかめのゆきの夕くれ

左右まことにみつらしき風情なもとめいたされて詞ないたはらぬにこそ持と申へし

九百五十六番

左　勝　　　　有　家　朝　臣

野へみれはかつふる雪なわすれ水たゝむらきえの心ちこそすれ

右　　　　　　寂　　　蓮

ひとりのみなりぬる空に雲消て雪の光にすめるよの月

左歌心なきにあらす右歌ひとりのみなかむる空に雲きえてといへりひとりのみといへるよせなきやうに侍左勝にこそ

九百五十七番

左　勝　　　　保　季　朝　臣

雪つもる梢を花にまかへてもとふ人つらき庭の跡かな

右　　　　　　家　　　長

さゆる夜のなのか上毛なはらひわひ霜に物思ふなしの獨ねるや猶おもふへからん左つよくや

左右の歌各心なきにあらぬに右のはらひわひといひされ

九百五十八番

左　勝　　　　良　　　平

月影のやとりなれたる池の上にこほりはてぬもわかれさりけり

右　　　　　　三　　　宮

夕ま暮風のけしきもあらち山雪に宿かるこしの旅人

左歌池のうへなと侍そいかゝと聞え侍れ共こほりはてぬもわかれさりけりといへる心なきにあらす右歌雪にやとかるやうの詞此世につれに聞え侍り又上下の初文字聞にくし左つよくや

九百五十九番

左　　　　　　具　　　親

春秋のなかめは雪につもりけり花と月となみよしのゝ里

右　勝　　　　内　大　臣

つきはてし秋のあはれは曉の時雨のなとに猶のこりけり

左歌又上下の句の始の字おなしきは聞にくしと申とかやしたかひてなかめと見るとはおなしことにや右歌つきはてし秋のあはれ時雨のなとに殘らんまことに心すみて聞

え侍り故以右爲勝

九百六十番

左　顯昭

夕かけてつまや戀しきかみ島のいそまのうらに千鳥しは鳴

右　勝　忠良朝臣

空や海月やこほりとさ夜千鳥雲より浪に聲まよふ也

左歌かみしまのいそまの浦に千鳥しはなくなとさひしく侍れとも右歌の「空や海月や氷とさよ千とり雲より波にこゑまよふ也」といへる左さひ〳〵として右の勝にこそ

九百六十一番

左　勝　女房

浦ちかき末の松山雪ふれは冬よりうへな浪やこゆらん

右　通光卿

それとみし月の光も池水にかさねてむすふ冰なるらん

左歌「末の松山雪ふれは冬よりうへな浪やこゆらん」といへるよろしく侍り右歌これもよろしく侍れ共猶冬より上な浪やこゆらん立まさり侍なん

九百六十二番

左　勝　左大臣

新後拾
山里はいくへか雪のつもるらん軒はにかゝる松の下折

右　釋阿

雪こそは雲さへこほる冬の雨の空にむすへる名にこそ有けれ

左歌いくへか雪のつもるらんといひて軒はにかゝる松の下折なるよろしく侍り右歌雲さへこほる冬の雨のといひて空にむすへるこほりむすふおなし心にや左は勝にや

九百六十三番

左　勝　前權僧正

白雪のなへてふれゝは梅の花冬さく色はかひなかりけり

右　俊成卿女

新古今
さえわひてさむるまくらに影みれは霜ふかき夜の有明の月

左歌梅花それとも見えす久かたのあまきる雪のなへてふれゝはといふ歌の詞をおもへり梅花といへる萬葉にふることはなのへられたり冬さく色かひなしといへる心ある也右歌夢ともぬる共いはてさむとよむおほつかなし左かつへくや

九百六十四番

左　公繼卿

夕されはさほの河瀨の風さむみ空に浪たつさよ千とり哉

右　勝　丹後

さえ〳〵て夜のまにつもる嶺の雪を朝ゐる雲とたれかなかむらん

左歌夕されはと侍程にさ夜千とりと侍る時刻やたかひて侍らん右歌させるふしもなく難も侍られは勝へきにや

九百六十五番

左　公經卿

岩間わけし苔の下水行なやみしられぬ冬の音こほる也

右　勝　越前

雪にまたかくれてすめる津のくにのこやもあらはに立煙かな

左歌水の行なやみ源氏物語に侍にや「こほり閉し石まの

水も行なやみ〳〵とよめるにや大方如此の物語なとの詞をあなかちの名事ならすはよむましなと先達申侍るに近比おほくよみあへるにや右歌は「蘆の葉に隱れて住し津の國のこやもあらはに冬は來にけり」といふ歌を寄にとりなせり心なきにあらすまさるへきにこそ

九百六十六番

左 持　季能卿

かたしきの袖こそぬるれ嶺わけに時雨落くるまつかせの音

右　定家朝臣

浦かせにやく鹽けふり吹まよひたな引山の冬そさひしき

左歌時雨おちくる右鹽けふり同し程にや侍らん

九百六十七番

左 持　宮内卿

紀のくにやあまのふせやのとまひさし吹上の千とり月に鳴也

右　通具朝臣

玉ほこやかよふな川のうす氷むすひもあへぬ音きこゆ也

左歌あまのふせやのとまひさし吹上のちとり月に鳴なりなところしきにや右歌これ又よく侍に初五文字のやの字ともに侍れとも左は聞なれて耳にたち侍らす左つよくや

九百六十八番

左 持　讃岐

ね覺する人なかりせは消ぬともいかてしらまし夜はの埋火

右　家隆朝臣

あまのはら雪ふりくれは足引の山こそ涙のふもとなりけれ

左歌させるふしなくや聞え侍共いかゝ右歌涙の麓心えかたく侍れはいつれと申かたく侍り

九百六十九番

左　小侍従

朝日さす池の氷のひま〳〵にむれゐるなくの友そあまれる

右 勝　雅經

涙のうへに友なし千鳥打わひて月にうらむるあり明の聲

左歌させるふし侍らぬうへに友そあまれる心えかたし右歌は月にうらむる有明のこゑなといひなれて聞え侍り右勝也

九百七十番

左 勝　隆信朝臣

みよしのゝ冬のすまゐそあはれなる日數は雪のふるにまかせて

右　寂蓮

色も猶むかしの袖そしられける雪ふりうつむ軒のたち花

左歌日數は雪のふるにまかせてといへる心なきにあらす右歌色も猶昔の袖そしられけるとはいかにしられけるにか左まさると申へし

九百七十一番

左　有家朝臣

冬かれのすゝきなしなみ古郷のふみ分かたき庭の雪かな

右 勝　家長

さゝのくまひのくま川につらゝゐて駒もとゝめす冬の明ほの

左歌ことなるあやまり侍らぬにや雖非病上下句初字きゝ

にくきか右歌「さゝのくまひのくま川に駒とめて」といへる歌を引なせる也左はきゝよからぬ文字侍れは右勝なるへし

九百七十二番

左　勝　　　　保季朝臣

とはれけるむかしの跡はなけれとも雪ふみ分るなのゝ通路

右　　　　三宮

雪の下こほりのうへをすみかにて冬にこもれる池のをし鳥

左歌伊勢物語に雪ふみ分て君を見んとはといへる歌をおもひてよめり右歌雪の下氷のうへにをしのすまん事いかか侍へからんこほりぬれは池に鳥はゐぬにや又雪をはらはてうつもれん事もけにも共おほえ侍らねは左勝侍りなん

九百七十三番

左　持　　　　良平

山里は軒はの岡をふく風にこほりておつる松の白雪

右　　　　内大臣

さほ川に千鳥なくなりぬされは衣手さむしたれとかはれん

左歌軒はの岡いときゝよからす右歌又さしたるふし聞えねは持と可申

九百七十四番

左　持　　　　具親

跡たゆる都の外の山さとは人もうらみす雪もいとはす

右　　　　忠良卿

浪のをとは氷にたえて蘆鴨の上毛の霜にあられふる也

左歌おろかなる心及かたし跡たゆる都の外かはうたかひ侍らす人もうらみす雪もいとはすとは若人跡たえたる所なれはとはぬ人もうらめしからす道たゆる雪もいとはすとにやあきらかならす右歌浪のをとは氷にたへたゐに鴨の上毛の霜にあられふるなりとはうは毛にふらん霰なとし侍りなんやなと聞程に近つきなんに鴨にはさるへきにあらすこのうたかひ侍れは左右勝劣定めかたく侍り

九百七十五番

左　持　　　　顯昭

こほりしてかちわたりするすはの海を出わつらふは鴨の浮舟

右　　　　雅宗卿

浪かくるこしまかさきの友千鳥立かとすれは又きなく也

左歌鴨のうきふねなとゆへ侍へし右歌は入内御屛風の歌になろかなる判者か「風さゆるこしまかいその友千鳥たちゐは浪の心なりけり」とつかふまつる歌にこそ侍めれ右勝と申さは愚詠をもてなすになりぬへけれは於二此番一者勝劣難レ定申侍り

千五百番歌合卷第十四　冬三　判者同前

九百七十六番

左　勝　女房

雪のあした木のした風はさむけれと櫻もしらぬ花そ散ける

右　釋阿

すむ月も千里の外は氷りけり雪のあしたはかきりたになし

右歌は秦甸之一千餘里凜々氷鋪といふ事を思て雪はかきりなしとよめりよろしき歌と承れとも左歌はおほよそ彼本歌をかうとりなされたる思よりかたし兩首の雪の朝おもしろくうけたまはれ共猶以左爲勝

九百七十七番

左　勝　左大臣

嵐ふく空にみたるゝ雪のよに氷そむすふ夢はむすはす

右　俊成卿女

新後撰 松島やをしまか磯による浪の月のこほりに千鳥鳴なり

左歌面白侍り右歌はおとり侍らん

九百七十八番

左　前權僧正

梅かえのにほひうれしきたえま哉木ことに花の雪の明ほの

右　勝　丹後

冬のよはあまきる雪に空さえて雲の浪ちに氷る月かけ

左歌木ことに花さける詞跡あるへしたえまかなといへる詞そ聞よからぬ今樣に御前の池なる水木心とけたる絶ま哉ことうたふをたえまなとうたふ事も侍とかやそれはうちまかせぬよしこそ承れ若其義にや證歌侍らは不及左右侍り右の歌はことなるとか侍らねは可爲勝にや

九百七十九番

左　持　公繼卿

ちりつもる木葉にうつむ谷川のやかてつらゝにむすはれにけり

右　越前

かよひける人の跡たにみえぬ哉しきみか原につもるしら雪

左右の歌いつれと申かたく侍り

九百八十番

左　公經卿

さひしさをいかにとはまし夕月日さすや岡への松の雪折

右　勝　定家朝臣

續古今 なく千鳥袖のみなとをとひこかしもろこし舟のよるの枕に

左歌さすやおかへの松の雪をれなといへる「夕月夜さすや岡への松のはの」といふ歌を思てよめるにやその歌をおもひてよまは夕つくよとや侍へからん萬葉集には夕月日さすやと侍り古今の歌を思ひて松をよまは夕つく夜とそ侍へき大略同樣なれとも右歌本歌伊勢物語に「おもほえす袖にみなとのさはくらしもろこし舟もよりしはかりに」といふ歌をとりなせるゆへなきにあらねは以右爲勝

九百八十一番

左持　季能卿

しほ風の鹽また分て吹たひにうきねやかはるあちのむら鳥

右　通具朝臣

千鳥なく浦わの西の松風に月もおもしとやあり明のそら

左右歌とりどりに侍り持と申へくや

九百八十二番

左持　宮内卿

さゆる夜もなとこそたえね岩かねにちる玉こほるみよしのゝ瀧

右　家隆朝臣

まきもくのひはらに雪やおもるらんたえぬ楢に柚木とるおと

左歌吉野の瀧後撰には「こほりこそ今はすらしもみ吉のの山のたきつせ聲もきこえす」とよみ拾遺抄には冬寒みこほらぬ水はなけれとも芳野の瀧は絶るよもなしとよめり今の歌は散玉こほるとよめれはたゆるよもなくともおち散らん水玉となとかこほらさらん右歌雪折の音柚木とるなのゝ音にきこえんさもとおほえ侍れはいつれと聞わきかたく侍り

九百八十三番

左勝　讃岐

ふる雪に人こそとはね炭かまのけふりはたゝぬおはらの里

右　雅經

あしまとちいかにうきねのをしのこゝろ先氷ける涙の枕な

左歌よろしくも侍哉右歌すこしはおとり侍らん

九百八十四番

左　小侍従

ますらをは年よるひなにおもなれてかしらの霜も網代とやなる

右勝　寂蓮

柴の戸になとすゑかたななかむれはをのれと雪をはらふ松風

左歌年よるひないかゝ又かしらの霜なおもしろとはいかゝ見侍へきしろきよし也右歌をのれと雪をはらふ松風おもしろく侍れは勝侍へし

九百八十五番

左持　隆信朝臣

石まわけおつるよそめはそれなから音せぬ瀧のたるひ成らん

右　家長

駒とめて草のゝ末にあられふりまたかりいかぬきゝす立也

左歌さも侍なん右歌殊にきゝすのおとろきゝ立らんさもときこえ侍れは持にや

九百八十六番

左勝　有家朝臣

たれかくてすむらんとたに白雪のふかきみ山のおくの庵哉

右　三宮

やとりぬる影もこほれる池水に月なかたらふなしのひとりね

左歌おもしろくつゝけくたされて侍り右歌やとりぬる心ゆかす又月なかたらふなしもいかゝとそうけ給はれは左つよくや

九百八十七番

左　保季朝臣

ふりつもるいくえの雪のしたにてもけふりそたえぬなのゝ炭竈

右　勝　　　　内　大　臣

秋はてゝ人めかれ行山さとにともまつ雪のいかにふるらん

左歌の心は煙不絶とたにこそとは思つゝけ侍れともうちきくは煙不立とにやと覺侍りたへぬとこふむへきにや右まさりて承り侍り

九百八十八番

左　　　　　　具　平

雪のうちこゝのしらの山みわたせは雲にくもらぬさらしなの月

右　勝　　　　忠　良　卿

冬くれは谷の下水なとたえてひとりこほらぬみねの松風

左歌心なきに侍らねとも右歌の下水はこほりて音せぬにひとりこほらぬみねの松風おもしろくこそ承れは爲勝

九百八十九番

左　　　　　　具　親

なにゆへかさえ行涙とおもふらんこほれはゝたくかの浦風

右　勝　　　　兼　宗　卿

やとるへき月なへたつる冬の池に心のつらゝ思ひしられぬ

左歌おもへる心さこほの聞え侍り右歌こほりの月なゝたつる池の心しられぬといへるすこしまさるへくや

九百九十番

左　持　　　　顯　昭

網代木にちるもみちはなかたしきて月とゝもにそもり明しつる

右　　　　　　通　光　卿

うちきらしはれぬ空にもなし鳥のつかごはたれぬ雪の夕くれ

左右歌勝劣難辨侍り

九百九十一番

左　勝　　　　女　房

月かとてにらはれはまた白妙の袖にそさゆるふかき夜の霜

右　　　　　　俊　成　卿　女

さらに又つもれる雪にうつもれぬ時雨ふりなきしなのゝ枯葉も

左歌「白妙の衣の袖を霜かとてはらへは月の光也」といふ歌引かへて霜を月かとてはらはすといへるおもしろくこそ承侍れ右歌彼文屋のありすゑか萬葉集撰の時代を御たつねの時「神無月時雨ふりおける楢のはの」と讀るに何なとれりか樣の名歌をはとるましきにや隨て初五文字よみいてたるもよからねは左の勝にこそ

九百九十二番

左　勝　　　　左　大　臣

にほの海のつりするあまの衣手に雪にはなちるし賀の山かせ

右　　　　　　丹　後

庭の面を我のみ見れはおしき哉月と花とにまかふ白雪

左歌は「さゝ浪やひらの山風海ふけはつりする蜑の袖かへるみゆ」といふ歌を思へりよくとりなされてそ承るみつうみをはにほてるといへにかく侍にこそ右歌我のみ見れはおしきかなといへるほとたゝことはにや左はまさりて承る

九百九十三番

左 勝　　前權僧正

冬草のかれぬとなにかおもふへき花の春こそ人もとひてし

右　　越前

かつしかやまゝの繼橋雪ふれはその名はかけにうつるはかりそ

左歌心なきにあらす右歌の心はかつしかのまゝのつきはし雪にうつもるれとも影にそ其名はうつるとにや水とも月ともいはてかけうつらんことといかゝまのゝ入江とあらは水は聞えなんたゝしそのはしそ入江にわたしたれはみつありとかやいかにも左はまさりてや

九百九十四番

左 勝　　公繼卿

そのかみやあまの岩戸のあけしよも思ひしらるゝあかほしの聲

右　　定家朝臣

ことそともなくてことしも杉の戸のあけておとろく初雪の空

左歌神樂のおこりに今夜の星を思ひはせられたるけへなきにあらす右歌ことしもすきぬといへる已に歳暮の心かはつ雪におとろくといへる初雪及二歳暮一降ことのほかの遲々歟仍以左爲勝

九百九十五番

左 持　　公經卿

ふりつもる雪を氷にしきかへて月かけさゆる山のはのそら

右　　通具朝臣

庭のこのは色はかはれと跡そなき霜より雪にふりはつるまて

左右の歌あるひは月影さゆる山のはの空或は霜より雪にふりはつるまてとよめるいつれもわきかたく侍り

九百九十六番

左　　季能卿

そのかみの岩戸もかくや明星のあけ行空に鳥うたふ也

右 勝　　家隆朝臣

宿からん人有衞も見えす久かたのあまのかはらのゆきくれの空

左歌は又神樂のおこりに侍鳥うたふそいかゝと承たゝ鳥なは詩なとには作り侍とかや八聲の鳥をうたふと讀ること承不及若神樂催馬樂なとに侍かたしらぬ道に侍れはおほつかなく右歌伊勢物語に「狩くらしたなはたつめに宿からん」といふ歌を思ひて讀り左は鳥うたふ心侍られは以右爲勝

九百九十七番

左 持　　宮內卿

見わたせは氷のうへに月さえてあられたまよるまのゝ浦風

右　　雅經

網代木にうちの川風夜はさえてなかれのみよる波の音哉

左右共にさせる難聞えて侍らす持歟

九百九十八番

左　　讃岐

我友とたのみし竹は雪おれて人こそなけれ冬の明ほの

右 勝　　寂蓮

山風はさそひかねたる槇の戸を行衞もしらすうつむ雪哉

左歌唐太子賓客白樂天愛爲吾友といふ事をよめり閑居の

歌にはよくや侍るへき右歌さもと侍れはまさるにこそ

九百九十九番

左　持　　小　侍　従

見かりする山路にすゝの音はしてしらふの鷹は雪にまかひぬ

右　　家　長

風さえぬ宇治の川おさこよひもやよらんともせぬひをゝ侍らん

左歌するとしてとは病にや右歌風さえぬといひてよらん
ともせぬとよめる不の字二つ侍れはともに病にこそ仍爲
持

千番

左　持　　隆　信　朝　臣

まのゝうらの浪はこほりに音絶て立ゐる物にあちのむら鳥

右　　三　宮

（正本）嵐ふく八十うち河の浪の上に木葉いさよふせゝのおもしろ木

左歌よろしきにや右歌又殊事侍らねはいつれと申かたし

千一番

左　　有　家　朝　臣

久かたのあまの川風さえぬらしなかるゝ月のなをこほるまて

右　勝　　内　大　臣

三とせまてつかひなくともおし鳥のうきねのとこに新枕すな

左歌なかるゝ月のなをこほるまてよろしけれとも右歌の
三とせまてつかひなくともをしとりのうきねの床ににひ
まくらすなと侍伊勢物語の「たゝ今宵こそにひまくらす
れ」といふ歌思ひ出られて侍なか しく勝侍なん

千二番

左　　保　季　朝　臣

冬くれはときはの山も風さえてかはらぬ松にあられふるなり

右　勝　　忠　良　卿

こぬ人は跡なき庭にあらはれてうらみもふかしけさの白雪

左歌殊事侍らす右歌あとなき庭にあらはれて恨もふかし
今朝のしら雪おもしろく侍れは右爲勝

千三番

左　勝　　良　平

ふりつもるみやこの雪なかめても思ひこそやれこしの山こえ

右　　兼　宗　卿

哀れなりしたのおもひやいかならん氷をくゝるおしのけころも

左歌殊なる難聞え侍らす右歌結句そ心ゆかす聞え侍る毛
衣といふ事もしのたらぬかいりたるさま也めつらしから
ねと左勝にや

千四番

左　勝　　具　親

岩たゝく音も嵐につらゝゐて谷の小川も冬こもる也

右　　通　光　卿

ものゝふや八十宇治川に月さえて網代にひをのよるもねられす

左歌岩たゝくなとも嵐になといひて谷の小川も冬こもる
とゆへなきにあらす右歌ものゝふのやそうち川とこそふ
るくもいへものゝふやはきゝつかす左勝にや

千五番

左　持　　顯昭

山あゐにすれる衣やまかふらんはたれ霜ふる庭の榊葉

右　　釋阿

さゆる夜はしみつの涙も氷りけり玉そくたくるとこのさむしろ

左右歌共にあやまりなし可爲持

千六番

左　勝　　女房

まきもくのきさしの小松に雪ふれはひはらかすゑに雲そかゝれる

右　　丹後

秋よりもさひしき影やまさるらん雪に月みるさらしなの山

左歌難侍らす詞つかひなとよく侍り右歌雪に月みる無下にたゝ詞に侍れは左の勝とそ見え侍る

千七番

左　持　　左大臣

雲はるゝ雪の光やしろたへのころもほすてふあまのかく山

右　　越前

つく／＼とけふりにつけて思ひやる心そやかてたのいほみかま

左のかく山右のすみかまいつれと申かたく侍り猶持也

千八番

左　持　　前權僧正

色かへぬ冬のみとりなみよとてやつゐにもみちぬ松のしら雪

右　　定家朝臣

かたしきの床のさむしろこほるまにふりやしく覽み山の白雪

左歌十八公榮霜後露、一千年色雪中深といふ詩の心にや腰の五字そいかにそ侍れとさまてのとかならすや色かへぬとよみちせぬとは同心にや隨て不審也右歌これもよろしく承れは猶又持と申へし片敷とふりやしくらんとは病にや仍爲持

千九番

左　持　　公繼卿

炭かまのたえぬけふりのゆへなれや雪にもかよふをのゝほそ道

右　　通具朝臣

とふ人も跡なき庭はたえもせて庭のしら雪ふるにまかせて

左のゆへなれや右のたへもせすおなしくなにや見え猶勝

負難辨

千十番

左　勝　　公經卿

かくれたえすゝきなしなみふる雪にとはぬもつらし岡のへの里

右　　家隆朝臣

新後撰　あまつ袖ふるしら雪に乙女子か雲の通路花そちりかふ

左歌させるあやまりもなく又殊なるふしも聞え侍らす右歌あまつ袖こそおほつかなく侍れ大なにあまつ空と申天衣の義にやいひならへる事こそよく侍れふるしら雪に過雪の曲と聞え侍り依無不審左爲勝也

千十一番

左　勝　　季能卿

新古今　さよ千とりこゑこそちかくなるみかた傾ふく月に鹽やみつらん

右　　雅經

むかしよりたゝぬけふりのさひしきはむろの八島の冬の夕暮

左歌筆こそらかくなるみかたかたふく月に譏やみつらんよろしく聞え侍り右歌上下句の初の字同てきゝよからぬうへにたゝぬけふりとはいかにむろの八しまなはけふりたつとこそよみならはして侍れもしたゝぬはたえぬ由也さらはたゝたゝぬけふりと侍らはや誠に富士の山あさまのたけなとのやうにもえすともけふりたつとよみならはせる事を依此不審左勝へし

千十二番

左　宮内卿

宮木野やはきのふるえに霜さえてこのした露はたるひなりけり

右　勝　寂蓮

庭の雪にけふこん人を哀ともふみわけつへき程そまたれし

左歌はみやきのゝ木下露は雨にまされりといふ歌をおもひてよめり宮木野に萩さく事疑なかるへし但此歌はこの下露とこそいへれ本歌にもなきことをはきあれはとてなさへてよまんこといかゝはきのこのしたも心え侍らす結句のたるひ成危もはたしにやと申承侍り右歌「けふこん人をあはれとはみん」といふ歌を思へり雪の深きことゝこほりき程こそ侍らかといへるはよろこきに似たり

仍爲勝

千十三番

左　讃岐

槇川の水によとむ筏士や岩まの雪にはるをまつらん

右　勝　家長

ふる雪のふかきいほりを人とはゝ柴おりくへてわふとこたへよ

左歌宜さまに侍れとも右歌和泉式部か「柴折くふる冬の山さと」といふ歌を思ひてよめりふる雪の深き庵をとたより侍り右の勝にや

千十四番

左　勝　小侍従

今朝はこもそる箸鷹のかけも見し野守のかゝみうち氷して

右　三宮

綱代木になみとひおとのよる〳〵なひとりやあかすまきの島人

左歌はし鷹の野守のかゝみおほつかなき事侍らす右歌あしろ木に涙とひなとのよる〳〵なとはたこりありて聞え侍にひとりやあかすこそ山田もるいをななといはんやうに聞え侍れ綱代には必ゝ人あるへしと云事侍らんやうに侍り左勝へき也

千十五番

左　隆信朝臣

さむけしやつかはぬなしのよなかきは涙にかたしく霜の毛衣

右　勝　内大臣

霰ふるさむきみきはに立鷺は臣にわたる鳥にそ有ける

左歌涙にかたしく霜の毛衣心えかたし霜は上毛にこそ置侍らめ隨て涙にかたしかは霜きえ侍なん霜もかた〳〵はいはれ侍り右歌彼崑崙山の鳥は玉してうてとも玉になれてをとろかすこうたの侍にや心めつらしくとりなされて

侍仍爲勝

千十六番

左　勝　　　　　　　　有家朝臣

よひのまは月をこほりと水の面にやかてもむすふ涙の音哉

右　　　　　　　　　　忠良卿

くれて行冬の枝折か跡たえて山路もふかきまつの雪折

左歌月を氷とみつの面にをとたくみに聞え侍り右歌心おかしくや聞え侍にしおりと雪おれとは病とや申へからんもし病ならは左の勝にこそ

千十七番

左　勝　　　　　　　　保季朝臣

うきねする枕をすきそさよ千鳥いつれのうらもおなし月影

右　　　　　　　　　　雅宗卿

山かつの世にすみかまそあはれなるけふりさひしき大原の里

左歌「我宿の垣ねな過そ郭公」といふ歌を郭公を千鳥になし卯花を月にひきちかへたるさま思ひより侍なん右歌心ほそく聞え侍れともおかしきかたは左まさり侍るらん

千十八番

左　持　　　　　　　　良平

なにゆへの思ひなるらん埋火のやすむまもなくしたこかれする

右　　　　　　　　　　通光卿

榊とりうたへは冬のなかきよもいまやあくらんあまの岩戸を

左の結句のをはりの字右の初七字共にいとゝ聞よからぬにや仍爲持

千十九番

左　持　　　　　　　　具親

新勅撰
さ夜ちとりみなと吹こす鹽風に浦よりほかの友さそふ也

右　　　　　　　　　　釋阿

埋火のあたりにちかきうたゝねは春のはなこそ夢にみえけれ

左歌めつらしからねともよろしきにて侍り右歌春の花社夢にみえけれといへるは埋火のあたりは春の心ちしてといへる歌の心をとりてあたゝかなる春かとて夢に花こそ見ゆれと侍り思所なきにあらねは可爲持

千廿番

左　持　　　　　　　　顯昭

みしま野に鳥ふみたてゝあはせやるましろの鷹の鈴もゆらゝに

右　　　　　　　　　　俊成卿女

山里の眞柴のけふりかすかにてさゝぬもさひし雪のゆふくれ

左歌萬葉集に「綾形おの鷹てにすへてみしまのにからぬひまなく」とよめり偏に存古風不叶時詠なり右歌心ほそくよまれて侍り左右姿かはれりといへともなすらへて爲持

千廿一番

左　勝　　　　　　　　女房

松の葉のみとりもみえすふる雪をわたる嵐のあとの一しほ

右　　　　　　　　　　越前

年くれてをくり迎ふる人ことはいつれをいそくいそきなるらん

左歌みとりも見えすふる雪をわたる嵐の跡の一しほ宜承

侍り右歌此迄迎のいそきいつれともにこそはいとなみ侍らめ我身につもる年月を送り迎となにいそくらんとこそはよめれ必ひとつないそくへき事ならはわたる嵐のあとの一入は色ことに承侍り

千廿二番

左 勝　　左大臣

袖くたすにふの川かみあとたえぬみきはの氷みれのしら雪

右　　定家朝臣

冬ふかきまのゝかやはら跡たえてまたことゝなし春のおもかけ

左右歌共に跡たえぬるよし侍にとりて右はまたことゝなし春の面影と侍夏秋なといはんさま侍り左勝侍也

千廿三番

左 持　　前權僧正

飛鳥川なかれてけふもくれぬれは春にあふ瀬は今夜成けり

右　　通具朝臣

新古今
草も木もふりまかへたる雪もよに春まつ梅の花の香そする

左歌飛鳥川の歳暮の詞古今に「昨日といひけふと暮して飛鳥川」と云歌思ひ出られ侍り春に逢せはたより侍り右歌花の香そするといへる事「かすみ立春の山邊に遠けれと」といふ歌の結句なとれり古今の句は一二句とれとも殊なるしるしなきはなにことも聞えすこれは耳にたちて侍り左もこの詞侍れはひとしめて可爲持也

千廿四番

左 持　　公繼卿

身につもる年と思へはおしけれと春をはえこそいとふましけれ

右　　家隆朝臣

雪のうちにつゐにもみちぬ松のはのつれなき山にくるゝ年哉

左歌金葉集に「河となく年のくるゝは惜けれと花のゆかりに春を待哉」といふ歌の心にこそかよひて聞え侍れ右歌古今に「雪降て年のくれぬる時にこそつゐにもみちぬ松もみえけれ」といふ歌をおもひてよめり持と申へし

千廿五番

左　　公經卿

梅花それともみへぬ雪の夜におほめく月の影そもりくる

右 勝　　雅經

あはれにもなのゝ音まていそく也松きる山の年のくれかな

左歌たしかに冬の歌とも覺すや侍らん梅も雪も春迄も侍也第一二の句彼「天きる雪のなへてふれゝは」と云歌思出られ侍右歌無疑冬歌と聞え侍り松きる山のそ心えられぬやうに承たしかなるにつきて右勝也

千廿六番

左 持　　季能卿

ふみわけしさやまは雪に跡絶て池のみくりはくる人もなし

右　　寂蓮

潤の戸はむすこほてたる山風に松の雪さへうへこほるなり

左歌さ山をしもよめる雪にはおなしくはこしのかたをやよみ侍へからんさやまにはよせある事あらんには沙汰に不及事に侍右歌山風松のとなむすふといへるはいかにむす

ふにかさえこほりたるよしにやしからは松ゝ雪さへこほると侍也病にや此むすひはてたる事思ひとはん程は勝劣申かたし

千廿七番

左 勝　宮内卿

をのかさとの山風さえて吹からに都へ出るをのゝすみやき

右　家長

ことゝはに音せし風はをともせてたえ／＼ひゝくまつの雪折

左歌よろしく侍に初五字そこは／＼しく侍る右歌これ又音せし風はをともせてといへるあまりに心にまかせ侍りなとゝひゝくとはいかゝ侍へからん初の句こは／＼しく侍れとも左やゝまくや

千廿八番

左　讃岐

白妙のふしの高ねに雪ふれはこほらてさゆる田子のうらなみ

右 勝　三宮

春ちかきこほりのしたのさゝ浪は打いてん事や思ひたつらん

左歌はからよりかみは萬葉集に「田籠の浦に打いてゝみれは白妙のふしの高ねに雪降にけり」といへる歌也こほらてさゆる田子の浦なみといふ事くはゝたるはなかにかるへきにふしのたかねに雪ふらんからにたこの浦浪のさゆへきにあらすふしの高ねに月なとすまはたこの浦にうつりてこほらてもさえ侍なんかし右歌は心えぬ事侍らねは勝とす

千廿九番

左　小侍従

數ならて世にすみかまのけふりこそ心にそへはおもひたちけれ

右 勝　内大臣

冬と春にゆきかふ風の池水にかたえとけ行うすこほりかな

左歌聞なれたるさまに侍りけふりとかけるおほつかなく侍り右歌彼「夏と秋とゆきかふ空のかよひち」にといふ歌を思ひてかたえとけ行池水と侍たくみにとりなされて侍り左ふるめかしさにまけ侍なん

千卅番

左　持　隆信朝臣

大はらやこゝろ／＼にやく炭のけふりはひとつそらのうき雲

右　忠良卿

かすみそめし春の空よりなかめきて雪ふることしの暮に成ぬる

左のけふりは空のひとつ浮雲右の雪ふる年の暮いつれと申かたく侍り

千卅一番

左　有家朝臣

水鳥のさはく入江のさゝ浪のよる／＼こほるまのゝうら風

右 勝　兼宗卿

續後拾 心あらは杣山川のいかたしもしはしは年のくれなとゝめよ

左歌は蘆鴨のさはく入江の白浪といふ歌なからとれり入江と侍もこかきあやまれるにや右歌いとふるしとも覺えねは可勝にや

千卅二番

左　持　　　保季朝臣

夜やふかきせきいる丶水の音たえて衣手さむしなしの一聲

右　　　通光卿

月はくれぬ宿はいつくにかり衣うらみはかへれはしたかの木居

左歌なしの一こゑ何ゆへとも聞え侍らす右歌此根はかへれ箸鷹の木居心得かたく侍れは持にやとそ覺侍る

千卅三番

左　　　頁平

あまの戸のあけやしぬらんむは玉のふけ行空にあかほしのこゑ

右　勝　　　釋阿

千鳥なくゑしまかさきを繪にかゝは友よふ聲そきこえさるへき

左歌又神樂のおこりをのへられたり第一第三の句の下の字聞よからす右歌友よふ聲誠にゑにうつしかたく侍り右勝と申へし

千卅四番

左　持　　　具親

炭かまのけふりはかりは大はらやたえぬもさひし冬の山さと

右　　　俊成卿女

とはさらん人もうらみし跡たえてふるの丶里の雪のふかさに

左のけふり計は大原やたえぬもさひしといひ右の跡たえてふるの丶里の雪も歌からおなし程にや

千卅五番

左　　　顯昭

すみかまの大原山はこれなれとこのもかのもにけふりたつめり

右　勝　　　丹後

炭かまのけふりになる丶をのゝ山はいつれ雪けの雲とわくらん

左歌させる難は侍られとも右歌いつれ雪氣の雲とわくらんといへるまさりてそ侍らん

千卅六番

左　勝　　　女房

冬くれて今年もけふにつくはねのこのめもかねて春めきにけり

右　　　定家朝臣

宿ことに春の霞を待とてやとしをこめてはいそきたつらん

左歌冬くれてことしも今日につくはねと侍る能つゝきてこそこのめもかねてはるめきにけりと侍る誠に春ちかつきぬれはなにとなく梢すゝけわたりてみえ侍りおもかけはこれにこそ侍るめれ右歌年をこめんこと霞に便侍れとこのめ春めくには立ならひかたくやとそ承仍以左爲勝

千卅七番

左　持　　　左大臣

月よめは早くも年のゆく水に數かきとむるしからみそなき

右　　　通具朝臣

いたつらに月日はゆきとつもりつゝ我身ふりぬる年のくれかな

左歌年月はやすくそと侍り右歌月日はゆきとつもるといへりその詞かはれりといへとも同科にこそ侍めれ

千卅八番

左　持　　　前權僧正

としのあけて影いかならんます鏡今夜ひとよにおもかはりして

右　宗隆朝臣

年くれてよそちそ過ぬむは玉の我くろかみも霜やなく覽

左歌さそものをはいふ事なれとも一夜におもかはりけん
事さすかにや右歌我黑髮も霜や置らむといへる古今拾遺
抄なとにかやうにたちたることはきゝなれてそ侍れとも
なすらへて持と申へし

千卅九番

左勝　公繼卿

新拾遺 行としもたちくる春もおふさかのせきぢに鳥のねをやまつらん

右　雅經

歳くるゝ春やむかしの春ならぬもとの身にのみたちかへりつゝ

左除夜の心よみおふせられて侍り右歌年くるゝ春や昔の
春ならぬと侍れはすてに春になり侍りたるにや大方のた
ろかなる心をよひかたく侍り左勝へきにや

千四十番

左　公經卿

くれにけり空に月日の杉の戸にことしも今は入あひのかね

右勝　寂蓮

春秋となかめし月や今もこれつもれはとしのすゑとなるらん

左歌空に月日の杉の戸にまてはよく侍にことしも今は入
あひのかねといへるそ心得かたく侍右歌彼つもれは人の
老となる物といふ歌をおもへり心得やすきにつけて右勝
と申へし

千四十一番

左　季能卿

あすは又今日をはこそといひすてゝおしみし物と思ひたにせし

右勝　家長

冬のそらわひつゝ今日に成にけり跡なき庭の雪とみるから

左歌いひすてゝといへる五字并に結句いかゝと承右歌は
少まさり侍なん

千四十二番

左　宮内卿

やゝわかめかりそめふしの袖の上にけふとゝ涙も越るきのいそ

右勝　三宮

今日まてはまた雪ふかきみよしのゝ山のあなたに春やきぬ覽

左歌風俗の玉たれの歌にあるにやけふとしなみもこゆる
きの磯と侍るは正則のよしにやとそ聞え侍右歌は年の中
と侍り題心冬につきて勝にや

千四十三番

左　讃岐

ます鏡影さへくれぬ物ならはかさなるとしなけかさらまし

右勝　内大臣

くれて行年のおしさはますかゝみ見る影さへやあすはかはらん

左歌ます鏡の影くれすとてもよはひおとろへはなけかさ
るへきにもあらす右歌くれて行としのおしさはます鏡と
いひてみるかけさへやあすはかはらんといへる此ます鏡
こそあきらかに侍れは仍爲勝

千四十四番

左　　　　　　　　　　　　　小　侍　從

新古今
思ひやれ八十のとしのくれなれはいかはかりかはものは哀しき

右　勝　　　　　　　　　　　忠　良　卿

としといひて四十もちかく迄りきぬさても迎ふる春にすとくて

左歌誠に八十算のくれいか計かは哀に侍へき但何事を思へるにか上を承程はすゝにいかなる事かと思給ふるにいか計かは物はかなしきといへるこひさめにこそ承れ右歌としといひてと侍るより四十もちかく迄りきぬると侍よろしきうへにさてもむかふる春はうとくてと侍左の八旬よりは右の四十算はまさりて承る

千四十五番

左　勝　　　　　　　　　　　隆　信　朝　臣

春の日を秋の夜とこそなかめしかさても程なき年の暮哉

右　　　　　　　　　　　　　兼　宗　朝　臣

めつらしき春もあすとそ聞ゆれはくれなん年をなにかをしまん

左歌春は花秋は月となかめしかともさても程なくとしくれぬと讀る心なきにあらす右歌春もあすとそ聞ゆれはといへる程や聞よからす侍るらん左まさりてや

千四十六番

左　勝　　　　　　　　　　　有　家　朝　臣

行としの名殘の空もふけぬれは春やこゆらんさ夜の中山

右　　　　　　　　　　　　　通　光　卿

みな人のなにゆへならすおしむらん今歲のはてのけふの暮とて

左右歲暮歌何もよく侍にとりて猶さよの中山は今すこしまさりてや

千四十七番

左　　　　　　　　　　　　　保　季　朝　臣

あすをまつしつか門松さきたてゝけふより春の色をみる哉

右　勝　　　　　　　　　　　釋　　　阿

新古今
今日ことにけふやかきりとおしめ共又もことしにあひにける哉

左歌門松さきたてゝ侍るなれとも右歌もことにあはれに侍るの哉可爲勝

千四十八番

左　勝　　　　　　　　　　　良　平

けふまてはゆきやとく覽春風のあけてたつへき白川の關

右　　　　　　　　　　　　　俊　成　卿　女

昨日といひけふとすきこし年月をふりつむ雪の跡そしられぬ

左歌よろしく侍り右歌すゑの句思ひわきかたく侍れは左可勝や

千四十九番

左　持　　　　　　　　　　　具　親

今日も又すきし日數にくれにけりまとろむ夢に春をへたてゝ

右　　　　　　　　　　　　　丹　後

一とせをこゝひにかりになかめきておしみなからに春をまつ哉

左右歌共に宜にや仍爲持

千五十番

左　持　　　　　　　　　　　顯　昭

とゝめあへす流るゝ年のはては早かさなる老の涙にそ有ける

右　　越前

はかなくてことしの空もくれ竹の[illegible]はかりになりにけるかな

左右歌これも又ひとしと申へし

千五百番歌合卷第十五　祝部

判者生蓮師光入道

千五十一番

左勝　　女房

萬代とみもすそ川の春の朝浪にかさねてたつかすみかな

右　　通具朝臣

新千載 あさみとり四方の梢のめもはるにさま〳〵みゆる千代のかけ哉

左歌よろつ代とみもすそ河なとゝつゝきて浪に重てたつ霞と侍ほとこそめつらしくおかしく見給れ右歌よもの木すゑのめもはるにさま〳〵みゆる千世のかけなと侍もよろしく侍り然而左は猶たけたちまさりて侍り仍爲勝

千五十二番

左勝　　左大臣

新古今 ぬれてほす玉くしのはの露霜に天てる光いく世へぬらん

右　　家隆朝臣

四方の海の浪の外まて聞ゆ也こゝやの山のよろつ世のこゑ

左歌玉くしの葉の露霜にと置て天てる光いく代へぬらんと侍程太神宮の風俗不混侍りおほろけの歌立ならひかたく見給れは右の負にや

千五十三番

左勝　　前權僧正

さゝれ石のこけむす岩と成て又雲かくるまて君そみるへき

右　　　　　　　　　　雅　経

千世を祈る神のみむろのさか木はは君かためしと茂（にイ）りあひにき

左歌「君か世を何にたとへんさゝれ石の巌となりてこけのむす迄」と云歌を思はれて猶雲か〻るまてなと侍る祝の心久しくこそ見え給れ右歌もよろしく覺侍れと左の雲は猶立まさりてや侍らん

千五十四番

左　持　　　　　　　　公　繼　卿

宮ゐせしちひろたくなは君かためなかき契をむすひそめけり

右　　　　　　　　　　寂　蓮

あしたつの友よふこゑにきこゆるき哉名殘おほかる千代のけしきは

左伊勢太神宮の宮ゐの時にはへるちひろたくなは事なかくとりなされたる尤可然事也右名殘おほかるといはんとて友よふ聲なと侍これも詞叶て宜侍り仍持と申へし

千五十五番

左　　　　　　　　　　公　經　卿

君か代を我たつ杣に祈きてひはらすきはら色もかにらし

右　勝　　　　　　　　家　長

春ことにはこやの山にさき草の萬代かけて殿つくりせり

左我たつ杣そいかにそや聞え侍れとも歌からはよろしく侍り右いひしりて今すこし宜侍にや

千五十六番

左　持　　　　　　　　季　能　卿

君か代はなかとの島の小松原神さひて又わか葉さすまて

右　　　　　　　　　　三　宮

さゝれいしのいはほとならん行末を千度みるへき君とこそきけ

左君か代はなかとの島のことに侍る歌古風存られたるにや右さゝれにも申侍様これも古歌の心を思はれて大方もおなし程にこそみ侍れ

千五十七番

左　持　　　　　　　　宮　内　卿

のとかなる御代のはしめの春の日を霞にかはる空かとやみん

右　　　　　　　　　　内　大　臣

君か代はみもすそ川にすむ月のそこのこゝろは神そしるらん

左右共宜侍りいつれと難辨こそ

千五十八番

左　　　　　　　　　　讃　岐

伊勢の海きよきなきさの浪もたゝ君に心をよする成けり

右　勝　　　　　　　　忠　良　卿

あまつ空かすみを分て出る日の影ものとけき千世の初春

左歌いせの海きよきなきさの浪も君に心をよすとはかりにては祝の心こそおほつかなく侍れ右歌は大方もよろしく侍上に祝の心侍れは可爲勝

千五十九番

左　　　　　　　　　　小　侍　従

かしこまるゝたつみかみに祈きて（せイ）千とせは君かこゝろなるかな（りけりイ）

右　勝　　　　　　　　兼　宗　卿

神風や内外の宮に祈をきてかた〳〵君か千代はたのまむ

左本の旬聞なれたるやうに侍り右内外の宮に祈なきてと
ゝひてかたくなと侍上下かなひて侍れは勝侍へし

千六十番

左 持　隆信朝臣

君かへん八千世の數もくもりなくみもすそ川をてらす月かけ

右　通光卿

おとこ山おひそふ松にころきかなかきりもしらぬ君か千とせには

みもすそ川をてらす月かけおとこ山におひそふ松いつれ
もともにやんことなき事ともに侍れは勝負難申侍り

千六十一番

左 持　有家朝臣

雲の色ほしのやとりもさしなからおさまれる代を空にみる哉

右　釋阿

神風やみもすそ川のさゝれ石も君か御世にそ岩となるへき

左雲の色星のやとりもさしなからといひておさまれる世
を空にみるなと侍心めつらしくこそ侍れ故存古心いはひ
のよしふかゝ侍れは同程にや侍らん

千六十二番

左　保季朝臣

としへたるみもすそ川の月かけそ世にすむ君かひかりなるへき

右 勝　俊成卿女

てらしみんやを萬代そくもりなきはこやの山のみねにすむ月

左歌心は宜侍を世にすむ君なと侍やすこしよそへたる心
ちし侍かとゝ右歌はこやの山の嶺にすむ月なと侍程こと
にゆゝしく覺侍仍爲勝

千六十三番

左 持　良平

すゝか川ふるきなかれをつたへきて絶すとなき君か御代かな

右　丹後

枝ことに千代も八千世も色かへぬひら野の松は君かまゝに

左右共におなし程に覺侍れは持と申へし

千六十四番

左　具親

君か代の數にはこれもつくは山としへてしけき繁なれとも

右 勝　越前

ひまもなく内外の宮に行かよふ心には君かよろつ世のため

内外の宮に祈申侍の萬歳左右なく勝侍へし

千六十五番

左 持　顯昭

我君に千代もやちよもゆつりはの常盤のかけは猶つきもせし

右　定家朝臣

あめ[illegible]神のみことを我君の爲

左歌千世もやちよもゆつりはと葉の名をなきて存萬葉古風に
ひやかに侍り右は心めつらしく侍れはなすらへて持なと
にや侍らん

千六十六番

左 勝　女房

萬代とみたらし川の夏のよに秋ともすめる山のはの月

右　　　　　　　　　家隆朝臣

續古今 久かたのあまのかく山空晴て出る月日やよろつ代のため

左歌夏のよとをきて秋ともすめる山のはの月と侍ことに
おもしろく侍り右歌久堅のあまのかく山に出る月日なと
は侍れとさせる心も侍らす仍以左爲勝

千六十七番

左　勝　　　　　　　　左大臣

君か代に法のなかれをせきとめて昔の涙やたちかへるらん

右　　　　　　　　　　雅經

おもひやる心のはても猶過て道ある御代の千代の行すゑ

左歌佛法皇法は如牛角佛法繁昌すれは又皇法盛なるとい
ふ心にて法のなかれの昔に立歸をもて君の御齢久しく盛
なるへき由をあらはされたるにや若然者心ふかくこそ見
給れ右歌よみしりてよろしく侍れとも左勝にこそ

千六十八番

左　勝　　　　　　　　前權僧正

君か代にさしてのの磯の友千鳥八千代のこゑを聞そうれしき

右　　　　　　　　　　寂蓮

いつとなく八重の鹽路にたつ浪の數かきりなき君か御代哉

左右共に宜侍に左猶今少思入られたる所侍り勝へきにや

千六十九番

左　持　　　　　　　　公繼卿

足引の八みつをイれの椿君か世にいくたひかけなかへんとすらん

右　　　　　　　　　　家長

きみか代に遙かなるとのはまひさし久しき影は神イ涙のまに〳〵
やみつおイれの椿こと〳〵くにかけなかへん事は誠に久しかる
へしはまひさしの歌もあしくも侍らす持なとにや

千七十番

左　勝　　　　　　　　公經卿

君か世のすゑを思へは久かたの天てる神の影をならへて

右　　　　　　　　　　三宮

いくたひか君か御代にはめくりあはん月日の光千々の春秋

左歌よろしく侍り右歌もあしくは侍られとも左勝へきに
や

千七十一番

左　　　　　　　　　　季能卿

おさまれる八すみのうちの一くさの君か御影になひかぬはなし

右　勝　　　　　　　　内大臣

續古今 百數はかめのうへなる山なれは千世をかさねよ鶴の毛衣

右歌もいしきの蓬萊宮を龜の上の山といひあらはして千
代をかさぬる鶴の毛衣なと侍こそ詞たくみに義あらはれ
て面白侍れ左歌民の皆なひき侍らん事さることなれとあ
なかちにも侍らぬかとよ仍以右爲勝

千七十二番

左　　　　　　　　　　宮内卿

行すゑを思へは涼し君か世の風ものとけき夏の夕くれ

右　勝　　　　　　　　忠良卿

君かため千町の早苗年をへていく萬代もとりそかされん

左はさせる事侍らす右歌宜侍り可爲勝

千七十三番

左 持　讃 岐

やとしなく影しつかなる月みれはすむもかひある石清水哉

右　兼 宗 卿

いく千世も君か心にまかせよとすみはしめける石清水哉

おなし石清水いつれも同程にこそ

千七十四番

左 持　小 侍 従

此君とたのめてうへしから人の千世の契りや今のよのため

右　通 光 卿

君か代は谷の岩ねのひめ小松雲ゐる嶺にたつえさすまて

左歌のふるまはんとはよまれたれともいとしもおほえ侍らす右歌谷の岩ねのこ松の雲ゐる嶺にしつえさゝん事祝の心はふかく侍れと年久しくならんにしたかひて松のたかくならんことやいかゝなるへきほとの後はたゝふる木にて侍なり仍爲持

千七十五番

左　隆 信 朝 臣

行末よいく代の秋を契るらんわかのうらにたてらす月かけ

右 勝　釋 阿

君か代はいく千とせにかあふひ草かはらぬ色に神もまもらん

左歌なひやかには侍に五文字すこし耳にたちて侍るとよ

右歌心詞相叶て足爲勝

千七十六番

左 持　有 家 朝 臣

君か世に十たひすむへき水の色をくみてしりける山の聲哉

右　俊 成 卿 女

千はやふる神代もしらぬためしなや君にはしめて定めなきけん

左黄河千年にすみ出萬歳をよはふ事を昔の御代に引よせられたる相叶てこそ聞え侍れ右神代もしらぬよはひ昔にはしめてさたむる程是めつらしく侍り持なとにや

千七十七番

左 持　保 季 朝 臣

君なこそ神もあはれと石清水外よりいてぬなかれと思へは

右　丹 後

君か世は藐姑射の山の嶺におふる白玉椿葉かへせんまて

左歌心にさもと聞え侍事あたらしき様にや聞え侍らん右歌も末句なひやかにも侍られは持なとにや

千七十八番

左 持　良 平

君か世はあたにもいはし石清水すむへき御代のそこのふかさに

右　越 前

すゝか河やそせの涙をへたてゝもわか神風に君を祈らん

左末句とゝこほりて侍り右八十瀬の涙を隔てもなと侍は今少なひやかに聞え侍祝の心のかすかに侍にや仍可爲持

千七十九番

左　具 親

いく千世も君かためしやこれならんいつぬき川の鶴の毛衣

右 勝　　定家朝臣

新後撰 ねこしのさか木にかけし鏡こそ君かときはの影はみえけれ

右歌詞そすこしと〻こほりて聞え侍れとも昔天照大神天の岩戸をとちさせ給へりし時世の中とこやみとなりて侍しに神たち香久山のさか木ねこしてしらにきてあをにきて鏡なとかけて神樂なし給ける事を今祝に引よせてなかしくよまれて侍哉左つねの風情なり左右なき右の勝にこそ侍めれ

千八十番

左　　顯昭

君かへん三千世をかけてさく桃の百かへりまてさかへまさなん

右 勝　　通具朝臣

あかねさす日影もしろし夏の空あきらけき世のなかきためしに

左歌王母か桃の事常の事にてめつらしき所も侍らす右歌風情めつらしく侍り仍爲勝

千八十一番

左 勝　　女房

萬代と三笠の山の秋風にのとかに嶺の月そすみける

右　　雅經

かきりなき世に久かたの空晴て照らす月日ものとかにそすむ

左歌みかさ山の秋風になと侍こそたけたかくすみて聞え侍れ右歌心はおしくも侍られともくたけて聞え侍れは左によみあはせ侍れはにや右の負とそみえ給ふる

千八十二番

左　　左大臣

久かたの空のかきりもなき世かな三の光のすまんかきりは

右 勝　　寂蓮

新後撰 浪の上にくすりもとめし人もあらは藐姑射の山に道しるへせよ

左歌久かたの空のかきりもなき世哉三の光のすまんかきりはと侍こそ風體たけたかくして三光心めつらしく侍に限といふ事の上下の句に侍や歌合には申へく侍らん但よき歌に成ぬれは先例も失にて失ならぬ事とも見え侍れは是もおなかちの事にに侍らぬに右の歌の波の上に藥もとめし人もあらはと置てはこやの山に道しるへせよといへる程いみしくおほえ侍れは猶右の勝ともや申侍へからん

千八十三番

左 持　　前權僧正

かくはかりふかき心のむくひには君か八千世にあはさらめやは

右　　家長

ますらをも千町の早苗とり〳〵にいはふもしるき天の下哉

左の讀けにと聞え侍り右歌も又祝の心ひろく見え侍り同程に侍り可爲持

千八十四番

左 持　　公繼卿

春日野に若なつみつ〻祝けんそのふることもかなふ御代哉

右　　三宮

新後 朝夕に千とせの聲そ聞ゆなる松と竹とにかよふあらしは

いつれも同程に侍り但右歌はかきあやまりの侍かとよ

千八十五番

左　勝　　公　經　卿

君か代のあり數にせん神風やみもすそ河によするしき浪

右　　内　大　臣

もろこしの代々はうつれと敷島や大和しまねは久しかりけり

左歌めつらしき風情なり面白侍り右歌もよろしく侍れと猶左の勝にや

千八十六番

左　　季　能　卿

雲の浪けふりの浪を尋ても君か御代にはなよふしまかは

右　勝　　忠　良　卿

霧はるゝはこやの山の秋の空に月もいく千世すまんとすらん

左歌蓬萊宮も猶不及射山と侍こそ心得かたく覺侍れいかなる方の難及侍やらん蓬萊には不死の藥ありその齡際限なし射山も不死の義なり其齡又際限なかるへし共におなしくこそ侍へきに君か御代にはなよふ島かはと侍こそあまりなるやうに覺侍うへに來の島かはも聞よくも侍らぬかとよ右歌させる難なく侍り仍爲勝

千八十七番

左　持　　宮　内　卿

草も木もわかすなくてふ白露のしられぬかすの君か御代哉

右　　兼　宗　卿

神山の嶺におひそふ小松はらいく木の千世も君か代の數

心詞ともにおなし程に侍り

千八十八番

左　　讃　岐

四方の海は浪しつかにて住よしの松吹風のをとのみそする

右　勝　　通　光　卿

ときはなるみとりの色にあらはれて君か千とせは空にしるしも

左歌めつらしき事も侍らす又させる難もなし右歌は心めつらしく侍れは勝とや申へく侍らん

千八十九番

左　　小　侍　從

四の海浪しつかなる君か代にあまの命もうれしかるらん

右　勝　　釋　阿

君かへん千世のためとそ小松原をしほの山も祝ひそめけん

左あまの命いかにそや覺侍り右宜侍可爲勝

千九十番

左　勝　　隆　信　朝　臣

たとへても猶君か代そ大はらやをしほの松も千代をこそつめ

右　　俊　成　卿　女

四方の海や吹浪風もしつかにてけふりまよはぬあまのもしほ火

右の歌よもの海ふく風浪とそ侍らまほしき吹浪風につゝき上下したるやうに見給る如何左歌宜侍れは勝とも申侍へき

千九十一番

左　　有　家　朝　臣

もろ人のふた心なくあふく哉はこやの山に身をまかせつゝ

右　勝　丹後

君かためうへなく竹のふししけみ其數々に千世そこもれる

左歌詞つかひもいかにそや聞え侍らへに祝の心くらくや

侍らん右歌はさせるとか見え侍らす

千九十二番

左　勝　保季朝臣

古きあとを世のためしにはうつすとも千歳は君そはゝか成へき

右　越前

いくかへりおひかふ松の花を見んはこやの山の春の梢に

左心さもときこえ侍り右もよろしくは侍れとも猶左はめ

つらしく侍へし

千九十三番

左　良平

千はやふる賀茂の社のゆふたすき千年を君にかけよとそ思ふ

右　勝　定家朝臣

新古今　我道をまもらは君をまもるらんよはひはゆつれ住よしの松

左歌おもしろくも見え侍らねとも右歌尤興ありておほえ侍り

仍爲勝

千九十四番

左　具親

君ならておりきおらすや萬代をとふてい野守年にへにけり

右　勝　通具朝臣

いきなりし色はもえさし衣なれは君に契れるとよ闘い出

左歌難もなく又すくれたる方も見え侍らぬにや右歌ゆへ

ある事をよくとりなされたれは勝と申へし

千九十五番

左　顯昭

君か代は數しらぬまのあやめ草引ともつきしけふのかさしは

右　勝　家隆朝臣

かけなひく星のくらゐものとかにて空にそしるき御代の氣色は

左右共に難なくみえ侍り但右は今少めつらしき所まさり

てや侍らん

千九十六番

左　勝　女房

萬代とみつのはま風うらさえてのとけき涙にこほりゐにけり

右　寂蓮

今よりやあくまて花も三千とせになるてふ桃のそのをうつして

左歌萬代とみつのはま風とをきてのとけき涙に氷ゐにけ

りと侍有餘情有高情尤足賞翫右歌は常の事なおもしろく

つゝけては侍に詞いかさ少いかにそや聞侍所の見え給ふ

る歌の丈ら事の外におさくこそ見え侍れ然者以左可爲勝

千九十七番

左　勝　左大臣

ゑるおりの山をいく重にかさねてもけに我國はうこきなき世を

右　家長

萬代をふへき君なり月も日ものとけき光かれてゐるしも

左歌ゐめつらしく詞不混俗右歌もおもしろくも侍らねとも猶

かれにに難及こそ侍れ

千九十八番

左　　　前權僧正

千はやふる神そしるらん我君なほてもいのる心は

右勝　　　三宮

水のすむいつぬき川のしき浪に猶たちまさる御代のかす哉

左歌君ないのる心其忠ありてさもと覺侍に祝の心や少く
らく侍らん右歌は祝の心は侍にや

千九十九番

左　　　公繼卿

ときはなる幾代のしるしにたてりけり古河のへの二本の杉

右勝　　　内大臣

はるかなる君を思へはたけくまの松のみとりや君か行すゑ

右歌はるかなるためしにたけくまの松を引よせられたる
おもしろくこそ侍めれ左させる事侍らぬにや仍以右爲勝

千百番

左持　　　公經卿

君か代につもりて山となるちりのすゑをおもへは雲かゝるまて

右　　　忠良卿

友千鳥むれゐる磯のこゑ〳〵に君か八千世の數そ聞ゆる

左歌は君か代は千世に一たひゐるちりの白雲かゝる山と
なるまてといふ歌を思にれたるにやあまりにとりすくさ
れて侍やうに見給ふる如何右歌も心は侍にむれゐる磯の
こゑ〳〵にと侍る程そ千鳥のこゑにこそにと覺侍れと猶

つゝきのいかゝそや覺侍れは勝負思わきかたく侍り

千百一番

左勝　　　季能卿

くもりなくおさまる御代を人もみな見よとて出る星の影哉

右　　　雅宗卿

跡たれし三笠の山のかひあれは天の下こそいとゝおさまれ

左歌あしくも侍らす右歌聞なれたる風情なれは猶左や勝
侍へからん

千百二番

左持　　　宮内卿

千代まてと夜はの水にことよせて契なむすふふかのうら浪

右　　　通光卿

君か世にあまのたくなはくり返し濱のまさこを數にとるらん

同程にや侍らん

千百三番

左持　　　讃岐

春日野のはるの若菜も君かためいく萬世かつまんとすらん

右　　　釋阿

君か代を日吉の神に祈りなけは千とせの數やまかのうら浪

是も又勝負は思ひわきかたく侍れは爲持

千百四番

左　　　小侍従

二葉なる松のためしもたえぬ哉いく千世となき君か御代には

右勝　　　俊成卿女

むれゐつゝ和歌のうらわに鳴たつのこゑにも君か千代そ聞ゆる
左は中五文字いかにそや聞え侍右心詞叶てよくこそ見給
ふれ

千百五番

左　勝　　隆信朝臣

むかしよりきこそはいのる萬代も君そまことのためし成へき

右　　丹後

君か世を長井のうらにゐるたつも萬世まてとこゑ聞ゆ也
左心めつらしくて逸興にこそ侍めれ右も宜は侍り君か代
と萬世とやいかゝ侍へからん君そまことのためしなと侍
まさるへくや

千百六番

左　持　　有家朝臣

龜のおの岩ねおちくる瀧の糸のいく千世へてもたえん物かは

右　　越前

君か代にあふの松はら枝しけみ木たのもしくも影そさしそふ
左歌さもと見侍に瀧の水たえさらん事計にて祝の心いか
か侍へからん右歌もあふの松はらは祝にはいとよみなら
はしたるとも覺侍らす又祝の心これもおなし程にや仍爲
持

千百七番

左　　保季朝臣

此世には昔もきかす今もあらし君かよはひにまさるためしは

右　勝　　定家朝臣

萬代の春秋君になつさはん花と月とのすゑそ久しき
左は祝の心ふかく侍り右は心めつらしくいますこし見所
あり勝侍へきにや

千百八番

左　　具親

つきせしとあめのしたをや祈るらん萬代へよふみかさ山かせ

右　勝　　通具朝臣

千々の秋かねてそしるき君か世を長月にさくしら菊の花
左歌宜は侍れとすこしめつらしからぬさまにや侍らん右
歌はさもと見え侍勝とも申侍なん

千百九番

左　持　　具親

かつまたの池に鳥なしいにしへの過にしほとや君か行すゑ

右　　家隆朝臣

君か代は花も千とせの友として松と竹とに春風そふく
左歌殊なる事もなく又させる難も侍らぬにや右歌からは
面白きさまなるにすこしかきあはぬやうに見え侍なそらへ
て持なとにや

千百十番

左　持　　顯昭

かちの葉にやを萬代とかきつけてねかふねかひは君かまに〳〵

右　　雅經

君かへんよはひをさして大空にむれたるたつのなのか聲々
左右ともにおなしほとにや

千百十一番

左勝　女房

萬代とみくまのゝ浦のはまゆふのかされても猶つきせさるへし

右　家長

君か代は二葉の松の千世をへて楠の風を雲にきくまて

左歌かされても猶つきせさるへしなと侍程なへての事には難及こそ見給へ萬代となきてみるよしのへゝけやゝ歌多侍様のおほえ侍いは古跡引見給ふるに五首歌を併初五文字に萬代と置てやかて見るよしのやうなかへて四季に侍こそ興ありておかしく覺侍れ右歌もうるはしくよまれて侍り然而猶以左爲勝

千百十二番

左勝　左大臣

人の世をなと定なくおもひけん君か千とせのありける物を

右　三宮

くもりなきあまてる神のみつかきに君か千とせの影うつるなり

左歌めつらしき風情にして見所侍物かな右歌もよろしく侍れとも猶左はすてかたくや侍らん

千百十三番

左持　前權僧正

なからへてかひある事を松なれや君か千年の影にかくれて

右　内大臣

諸人のあふくのみかは君か代の空［はイ］によろこふ雲も立けり

左歌松をこそおほくは祝のためしに讀ならひて侍に昔の千とせの影にかくるゝ程心めつらしく侍に又右歌樂者に侍かとよ本文ある事ないみしくとりなされて祝の歌には尤出來へかりける事と見ふる給に言葉つかひなとも優に侍れは勝負思わつらひ侍りぬ

千百十四番

左持　公繼卿

君か世はちくまの川のさゝれ石のさなから岩とあらはるゝまて

右　忠良卿

すゑとなく千世の御かけをたのむ哉契あれはそあふの松原

祝歌にちくまの河あふの松はらともにきゝならひても覺え侍らす持なとにや

千百十五番

左持　公經卿

［新千載］君か世をとふ人あらは出る日の光をさして空にこたへん

右　兼宗卿

くもりなきはこやの山の月影に光をそふる玉つしま哉［如イ］

出る日の光はこやの山の月影共に見所侍れは爲持

千百十六番

左持　季能卿

神路山下津岩ねの宮はしらしるしたかへぬ御世とこそみれ

右　通光卿

萬代のためしないはゝ君か代は鶴の毛衣いろもかはらて

左歌伊勢御神の宮柱しるしたかへぬ程祝の心たしかに侍り右歌鶴の毛衣色もかはらぬ體なひやかに侍り仍爲持

千百十七番

左　持　　宮内卿

昔よりなかれをうくる四方の海のあかぬは君かよはひ成けり

右　　釋阿

住吉の松もすゝしくおもふらし君か千とせの和歌のうら風

左歌あしくも侍らす右の歌優に侍り持なとにてや侍ぬへき

千百十八番

左　　讃岐

君かいのる心をくみてこたふ也みたらし川の音もさやかに

右　勝　　俊成卿女

新後拾
さきにけり君かみるへき行末は遠里をのゝ秋はきの花

左歌祝の心くらく侍り右歌祝の心はへあるうへにおほかたもをかしく侍れは可爲勝

千百十九番

左　持　　小侍従

みちとせになるてふ桃のもゝかへり花さく春を君やみるへき

右　　丹後

龜のおのいはねにおつる瀧つせにちる白玉や君か代のかす

いつれも〳〵なひやかに侍り持とこそ見給ふれ

千百廿番

左　　隆信朝臣

君か世はにまの里人つくる田のいねのほすゑの數にまかせて

右　勝　　越前

空はれていつゐる日月や君か代のすゑはるかなるためし成らん

左歌心はよろしく侍れと詞つかひや少いかにそや侍右歌心詞よろしく侍り仍爲勝

千百廿一番

左　持　　有家朝臣

玉椿八千世の後も我君のときはかきはの色はかはらし

右　　定家朝臣

四方の海もけふりにきはふ濱ひさし久しき千世に君そさかへん

彼此雖思分侍り可爲持也

千百廿二番

左　持　　保季朝臣

此君のなを行末は年なへて生そふ竹の數もしらぬまて

右　　通具朝臣

君そみん千ひろの海の底の色のこん年なみにあらはるゝまて

左歌さもと覺侍り右歌海底あらはれん事長元歌合の判にとかめたるやうに見侍れともあまり久しからんためには又なとかにと覺侍れは持なとにや

千百廿三番

左　持　　良平

すみよしの松のみとりと君か代といつれ久しと神そしるらん

右　　家隆朝臣

やをか行はまの眞砂にゐる千鳥君か千代をやそへてかそへん

いつれも共によろしく侍り仍爲持

千百廿四番

左　　　具親

おほの浦のそのなかはまによる涙のゆたけき君か千代の末哉

右勝　　　雅経

君か世はときはの山の松の風色もかはらし音もたえせし

左こと／＼しきさまなからさせる事侍らす右松の風の色もかはらし音もたえせさらん程さもと覺て尤勝侍へし

千百廿五番

左　　　顯昭

君そみん山路の菊を千代なから長月ことにつめるしるしは

右勝　　　寂蓮

たちぬはぬ衣の袖もにほふ也山路の菊のよろつ世の秋

おなし菊なるにとりても衣の袖のにほふはいますこし可賞翫や侍らん

千五百番歌合卷第十六　戀一　判者生蓮

千百廿六番

左勝　　　女房

足曳の山した水のわきかへり色にはいてしこかくれてのみ

右　　　三宮

我袖にけふそ涙のはつ時雨いかなる色にそめんとすらん

左歌古今のあし引の山下水のこかくれてと侍歌をとりなされて優艶にこそ見給ふる右歌もはつ時雨いかなる色にそめんとすらんと侍もまことに行ゑおほつかなく侍ておかしく侍れとも猶以左勝とさため申へし

千百廿七番

左持　　　左大臣

しらせはや戀をするかのたこのうら恨に波のたゝぬ日はなし

右　　　内大臣

玉たれのみすのひまのみしけゝれはかけても人を頼むへきかは

左歌はこと葉たくみにしてたけたかく右歌は心めつらしくこそ聞所侍り仍持なとゝや申へく侍らん

千百廿八番

左勝　　　前權僧正

五月雨の軒のしつくはほとゝきすなくやさ月の涙なりけり

右　　　忠良卿

つゝましよなかめはゐるき物なれはたえぬ景色は誰もみつらん

左歌鳴や五月なとは宜侍り歌合には戀の心やかすかに侍らん右歌末句にたえぬと侍そいひくたされても覺侍らぬもしたへぬなとをかきあやまりて侍にや又五文字も少心ゆかす覺侍れは左の勝侍へきにや

千百廿九番

左　勝　　公　繼　卿

あま乙女いさりたく火のほのかにも思ひの程を人ゐるらめや

右　　兼　宗　卿

またゐらぬ人はさかしき嶺なれやふみつたふへき道たにもなし

右歌心は侍に人はさかしきみねなれやと侍こそなひやかならす侍れ左歌させる難見え侍らすまさり侍へきか

千百卅番

左　持　　公　經　卿

ゐかりとてなひかし物をさをしかの入野の薄ほにも出あへす

右　　通　光　卿

これやさは人をみるめのなきさなるならはぬ袖にかゝる涙かな

左歌さをしかの入野の薄なと存萬葉之古風おほかたは宜侍に五文字そなひやかならす覺侍る小野篁か歌にもかやうに侍かとよ右歌さもと聞え侍れは持なとにや

千百卅一番

左　　季　能　卿

わけそめていかにたとらん行ゑなきあふをかきりの道芝の露

右　勝　　釋　阿

尋入らん道もゐられぬ忍山袖はかりこそゐほりなりけれ

左右共におかしく侍れ共右は今少勝てや侍らん

千百卅二番

左　　宮　内　卿

なかめには心ゆるさしこれそ此つもれはつゐに戀となるもの

右　勝　　後　成　卿　女

続後拾遺

ゐらさりきむすはぬ水に影みえて袖に宿いかゝる物とは

左古歌を思て讀侍れとも右水の心いひなかされて侍り仍爲勝

千百卅三番

左　持　　讃　岐

続古今

ふしのねも立そふ雲は有物を戀のけふりそまかふかたなき

右　　丹　後

新後撰

けふこそは袖にもゝらせいつのまにやかて涙の色にみゆらん

共にいひしりてさせる難なく侍り同程の事にこそ

千百卅四番

左　　小　侍　従

たてそめてあふ日をまちし錦木のあまりつれなき人心哉

右　勝　　越　前

戀路にもおりたちぬれはよそに見したこのもすそを袂にそしる

左歌錦木のあまりつれなきとつゝきて侍れは千つかにあまりてたつる事の侍にや右歌は心得られぬ所なくさもと聞ゆれは勝侍へきにや

千百卅五番

左　　隆信朝臣

袖の色は若紫にあらなくに心をそむるしのふもちすり

右勝　　定家朝臣

新古今

あふ事のまれなる色やあらはれんもりいてゝそむる袖の涙に。

左わかむらさきにしのふもちすりをひきよせられたるは
たよりありて聞え侍に心やめつらしからす侍らん右に心
なかしくこそ侍れ爲勝

千百卅六番

左　　有家朝臣

おらすしてやみなん物か山櫻霞のまよりみえし匂を

右勝　　通具朝臣

戀なのみしのふの里の道のはてかよふしるへは心なりけり

左歌は古歌の心を思ひておもしろく侍に戀の心やくらく
侍らん右宜侍れは可爲勝

千百卅七番

左　　保季朝臣

雲の色も昨日みしにはかはりけり思ひそめつる夕くれの空

右勝　　家隆朝臣

ほのみてし君にはしかし春霞たなひく山のさくらなりとも

左歌いかに侍にかけふはしめて物を思より心かはり雲の
色もかはるとよまれたるかたしかにも心得られす侍右歌
は春古風歌の心姿なひやかにこそ侍れ

千百卅八番

左　　亘平

いつのまに君に心をつくは山程なくしけるなけき成らん

右勝　　雅經

是やさは人を思ひのはつけふりなれぬなかめの空のうき雲

左もあしくも聞え侍らぬに右よろしくこそよまれて侍れ
勝へきにや

千百卅九番

左　　具親

戀すてふ名はいたつらにみちのくの忍の山もかひなかりけり

右勝　　寂蓮

ものおもふと泪のすゑもちりぬへし心のうちも袖にしられて

左させる事なく侍り右は心詞共に見所侍仍可爲勝

千百四十番

左　　顯昭

ほのめかすかひこそなけれあふ事ないなみの浦のあまの漁りを

右勝　　家長

君をけふみかきか原に袖ぬらしせりつむ計物やおもはん

左歌難なく聞え侍れとも右は猶まさりてや侍らん

千百四十一番

左勝　　女房

神な月袖のみしたの初時雨人のこゝろを秋の一しほ

右　　内大臣

つゝむ袖たかこふるとはもらさすとつく覽すみを哀ともみよ

左は毎句おもへる所ありて不混俗右心なかしく侍に中五
文字やいかゝにそ聞え侍らん仍以左爲勝

千百四十二番

左　持　　左　大　臣

うちしのひいはせの山の谷かくれ水の心をくむ人そなき

右　　忠　良　卿

ことの葉は色にもいてゝくちねとやときはのもりのあきの下露

ときはの杜いはせの山共によろしく覺侍り仍勝負難申侍り

千百四十三番

左　勝　　前　權　僧　正

我戀はゆくかたもなきなかめよりむなしき空に秋風そふく

右　　兼　宗　卿

富士のねのけふりにはちぬ思ひ哉もゆとはみえて下にこかるゝ

左歌たけたかく面白侍り右歌も心は侍とも猶左勝へきにや

千百四十四番

左　勝　　公　繼　卿

續古今 かけろふのいはかき淵のわきかへりうは涙たゝぬ物なこそ思へ

右　　通　光　卿

人しれぬ心のおなし友なれやほのみしま江の蘆のみたれは

左歌「蜻蛉の岩垣ふちの隱れにはふしてしぬともなかめはいはし」と侍歌の詞をとりてうは涙たゝぬなとよろしく侍り右の歌もあしくも侍らね共左の涙は猶立まさりてや侍らん

千百四十五番

左　持　　公　經　卿

せきもあへす戀すてふ名やなかれなん水のしたまて影かよふ也

右　　釋　阿

新古今 あはれなりうたゝねにのみ見し夢の長き思ひにむすほゝれなん

左歌心めつらしく見所侍り右歌の又たけたかくすみたるさま侍れはおなし程にや

千百四十六番

左　持　　季　能　卿

身にはまたならはぬ物をあやしくも聞しに似たる袖の上哉

右　　俊　成　卿　女

いかにせんしのふの山に跡たえて思ひいれ共露のふかさを

左歌心めつらしきさまにや侍らん右歌しのふの山に跡たえて思ひ入られたる程心ふかく侍れとも猶持にこそ

千百四十七番

左　持　　宮　內　卿

人しれぬ戀をのみたゝすかのねのなかくやゝかて思ひいれなん

右　　丹　後

うちいてんことの葉さへそせかれぬるかきもなかさぬ山川の水

右歌心はつねに聞なれたる心ちし侍り左下句の初耳にたちて侍にや仍爲持

千百四十八番

左　持　　讃　岐

もろともに有明の空そまたれけるはつ三日月のよひの面かけ

右　　越　　前

あらはれん名はおしけれと忍山嶺のしら雲かゝらすもかな

左右共にさもと聞えてよき持にこそ

千百四十九番

左　持　　小　侍　従

よしさらは戀しぬへしといひなからいけるは人を頼まさりしに

右　　定　家　朝　臣

かた糸のあふとはなしに玉のをもたえぬ計そみたれはてぬる

左歌風情めつらしく見所ありて侍り右又は常の事を面白
つゝけられてたやすからぬ所侍かとよ是も持なとにや

千百五十番

左　　隆　信　朝　臣

しのふ山うつゝにたにもまたみぬをはかなくたのむ夢の通ひち

右　勝　　通　具　朝　臣

（新古今）せきかへし猶もろ袖の涙かなしのふもよその心ならぬに

左さもとは聞え侍か又いかにそよ侍かとよ右は心詞かけ
あひて聞え侍仍可勝にや

千百五十一番

左　勝　　有　家　朝　臣

下荻のほにこそあられ露計もらしそ始るあつのはつ風

右　　家　隆　朝　臣

春の涙の入江にまよふ初草のはつかにみてし人そ戀しき

左右共に思所あらはれて優に侍を左猶めとゝまる所や侍
らん勝へきにや

千百五十二番

左　　保　季　朝　臣

染まさん猶行末をおもふかなけふ一しほの袖のなみたに

右　勝　　雅　経

ほにいてし蘆のふし葉の下みたれ入江の涙にくちははつとも

左よろしく侍に右の思入たる程こと葉つかひ艶に侍り勝
にもや申侍らん

千百五十三番

左　　良　平

忍ひねの色のみふかき袖なれやいはての杜の秋の時雨に

右　勝　　寂　蓮

たへぬへき涙の程はしのひきぬさのみはいかゝ袖のしからみ

左歌よろしく侍にしのひねの色と侍こそ涙にこそはと思
ひ給ふれとつゝけやうのいかにそや聞え侍也右歌袖のし
からみは河なとに引よせすしてはいかゝと覺侍粗さる歌
も侍やに覺給ふれと猶歌合の時はおもふへくや侍らん彼
天徳歌合に判者水なくて藤波といふ事古歌におり〳〵あ
りされと尋る人なければさてとゝまれるなるへし歌合に
はいかゝあらんことによせぬはいはれなし水岸なとによ
すへかりけると云々以彼思之猶河なくして志からみをよ
まん事や如何そ侍へければこれも難にや共に難侍らんに
とりては右宜こそ可勝

千百五十四番

左　持　　具　親

またさりし秋やは物なおもひしろ道なきまての庭のけしきな

右　　　　　　　　　家　　　長

かきくもり雨ふる宿の秋風に涙かたしきこよひかもねん

左右共におなし程にや

千百五十五番

左　持　　　　　　　顯　　　昭

みたれぬる心はよそにみえぬらんなにか人めなしのふもちすり

右　　　　　　　　　三　　　宮

かくこふといかてか人にもらすへきおもひしのふの山のした水

共によろしく侍是又持にこそ侍らめ

千百五十六番

左　勝　　　　　　　女　　　房

續古今
蘆のやのなたの鹽くむあま人もしほるゝ袖のいとまなきまて

右　　　　　　　　　忠　良　卿

たのみなきし淺茅か露に秋かけて木葉ふりしく宿の通路

左歌蘆のやのなたのしほくむあま人もと置てしほるゝ袖のいとまなきまてと侍程世のすゑにいてきかたく侍り申の五文字のもの字に戀の心あらはれてめてたく覺侍り俊惠法師と申しもの蘆のやのなたと置てたけたかくいみしかるへきに末の句の叶ほとなるかたき也是よみかなへたらんはめてたかるへしとつねに申侍し思合られていみしく覺侍也右歌心こもり詞優に侍れとも猶左かく申になよはす覺ぬ涙おちて仍可勝侍

千百五十七番

左　勝　　　　　　　左　大　臣

我戀は又しる人もしらすけのまのゝ秋萩露ももらすな

右　　　　　　　　　兼　宗　卿

續拾遺
もらさしと思ふ心やせき返す涙の河にかくろしからみ

左歌詞つかひことにめつらしくたくみにして不混俗右心珍敷からすといへ共さして難はなし然て左は左右なき勝にこそ

千百五十八番

左　持　　　　　　　前　權　僧　正

戀なすまのうらみてかへる風の音なあふ事なみに聞そかなしき

右　　　　　　　　　通　光　卿

身のうさはさてつれなきにしられとむすほゝれても岩代の松

左歌おもしろくそへくたされて有興聞え侍り右歌身の程おもひしりてむすほゝれても岩代のまつ艷に侍れはすてかたく侍り持なとにこそ

千百五十九番

左　持　　　　　　　公　繼　卿

つれなさなかねてしらはや天雲のよそにみるより袖のぬれぬる

右　　　　　　　　　釋　　　阿

色にいてす人の袖には露かくる君はうけらの花にや有らん

左つれなさなかねてしらはやあま雲のなとなけろ程おかしくこそ侍にあま雲なよそにみるに袖のぬれん事こそおほつかなく侍と又ふる時にてもなとか侍さらん右よろしく侍り持にや

千百六十番

左　　公継卿

我戀は嵐にまよふうき雲のさはきそわたる夕くれの空

右　勝　　俊成卿女

おもふさへ跡なき空のかたみ哉そなたの風の身にはしめとも

左は末句すこし耳にたちてや侍らん右は心ありてこそ見え侍れ

千百六十一番

左　持　　季能卿

はりまかた恨ても猶たのめとやすゑにありてふあふの松原

右　　丹後

戀わたる涙の河のはやきせ（ふかきえイ）に身をつくしてもあひみてし哉

左歌すゑにありてふあふの松原と侍は播磨よりつくしへゆかんに末とてよまれたるにや右歌むけにふるく聞え侍れと持なとにこそ

千百六十二番

左　持　　宮内卿

我戀はかり田の庵に吹風のにはかに人にしられぬるかな

右　　越前

なにせんにかゝる戀路をふみそめて行ゑもしらぬなけき成らん

戀路をふみそめて行ゑもしらぬなといふ事によろしく侍にきゝなれたる風情にや

かり田の風はすこしめつらしくもやと覺侍りにはかに戀のしられん程いかゝ仍爲持

千百六十三番

左　　讃岐

（新勅撰）蛙なく神なひ河にさく花のいはぬ色をも人のとへかし

右　勝　　定家朝臣

たれか又物おもふ事ををしへせし枕ひとつをしる人にして

左の神なひ河にさく花のいはぬ色なとはふるまはれて侍り右の枕をしる人にして物思ふ事を誰かをしへしなとうたかはれたるこそ風情[illegible]見え侍勝にや侍らん

千百六十四番

左　　小侍従

（後新撰）涙たかきゆらのみなとをこく船のしつめもあへぬ我心かな

右　勝　　通具朝臣

（續拾遺）めくりこしよゝの契に袖ぬれてこれも昔のうきなみた哉

左由良のみなとをこく船のをつめもあへぬと侍さもあり ぬへし右よゝの契に袖ぬれてこれもむかしのうき涙かなと侍こそ思ひいれたる所ありて見え侍れは左にはまさるへくや侍らん

千百六十五番

左　持　　隆信朝臣

うらやましたれゆへ露をこほすらん我身のためはくすの秋風

右　　家隆朝臣

ゐるといへはそなたの空となかめれと吹くる風の袖になれぬる

左右共に詞つかひなひやかならす同程にや

千百六十六番

左持　　　有家朝臣

（新後撰）かはらやの烟は志たにむすふ（サカ）ともおもひありとは人にしられし

右　　　雅經

（續古今）おもひなく心の瀧のあらはれておつとは袖の色に見えぬる

左歌かはらやのけふりはしたにむせふともど侍こそさる事の侍にやかはらやのけふりをむせふとこそ聞なれて侍右歌さもと聞え侍に色そあなかちに詮ありても覺侍らぬかれこれ共に思ひはす侍れは勝負申かたし

千百六十七番

左持　　　保季朝臣

かひもなきたゝいたつらのなかめ哉思へといはて過る月日に

右　　　寂蓮

わひつゝも春まてとたに思はゝやしほれはてぬる雪の下草

左心ありて侍り右戀の心かすかに見え侍と詞なひやかに優に侍れは猶持なとにや

千百六十八番

左勝　　　具平

夕されは松に秋風なとつれてこぬ人つらきうたゝねのゆめ

右　　　家長

いたつらにたのめぬ人を松の門さらてそあくるいくよともなく

左歌松に秋風音信てといひこぬ人つらきうたゝねの夢なと侍こそ事外にいひしりて侍れ右歌もあしくも侍らねとも猶左勝へくや

千百六十九番

左　　　具親

うしといへはやかて心のかはるかは戀しき上のおもひなりけり

右勝　　　三宮

物思ふにならはぬ袖のしら露はしのはんとしもおほえさりけり

左歌さても侍ぬきに戀しきうへのといへる字やさゝへたるやうに覺侍右歌さる事と覺侍にしら露そたよりなきやうに聞ゆれとすへて歌からをかしく侍り仍爲勝

千百七十番

左　　　顯昭

我戀やよるのいとまにつみしせり袖のみぬれてみる人もなし

右勝　　　内大臣

せきとむる心も苦しいさゝらはいさら井の水ももらしはてゝん

左本文ある事をよめれとよるのいとまなと侍ほとにや俗に聞え侍らん右よろしく侍り仍爲勝

千百七十一番

左勝　　　女房

いつら秋のなかしてふ夜は名のみしてつきぬ名殘そ有明の月

右　　　雅宗卿

しのふれと涙の色のくれなゐにふかきこゝろもあらはれにけり

左歌古今にいつらは秋のなかしてふ夜はと末句になける（ママ）よりは今上句にいつら秋のなかしてふ夜は名のみしてなと侍催めてたく覺侍右めなれたる事に侍れは無左右以左爲勝

千百七十二番

左　持　　　　　　　　　左　大　臣

續拾遺 あら磯の涙よせかくる岩根松いはねとねにはあらはれぬへし

右　　　　　　　　　　　通　光　卿

うれしくも色にみせつる涙かないふともいかゝおもふはかりは

左歌涙よせかくるいはね松いはねとねにはあらはれぬへしなと侍風體面白詞花美にこそ覺侍に右の歌いふともいかゝなと侍程是又すてかたくこそ見え侍はえまかし侍らし持と申侍へし

千百七十三番

左　勝　　　　　　　　　前　權　僧　正

かよひ行夢路にすふる關守はうちもねぬよの我身なりけり

右　　　　　　　　　　　釋　　阿

關守はうちもねぬともいたつらにかへる戀路はかひなかりけり

左右共に同關をよまれていつれもをかしく侍に左の關にはいますこし心とまりて覺侍り

千百七十四番

左　　　　　　　　　　　公　繼　卿

山かけの岩もとすけのねたくのみ色もかはらぬ物おもふらむ

右　勝　　　　　　　　　俊　成　卿　女

新勅撰 くれなはとたのめても猶朝露のおきやらぬ床に消そしぬへき

左いひしりて優に見給に岩もとすけはねかたき事に見ききならひて侍にたゝねはかりにはいかゝおほえ侍れと又さる事もなとか侍さるへき右心さもと覺て詞よろしくいひくたされて侍り猶右の可爲勝にや

千百七十五番

左　勝　　　　　　　　　公　經　卿

ならへこし枕はうとき面影のうらめしなから猶そはなれぬ

右　　　　　　　　　　　後　　丹

我ゆへのなかめと君はしらしかし中々よその人はとへとも

左心めつらしく侍かとよ右もあしくも侍らねとも左猶勝へきにや

千百七十六番

左　　　　　　　　　　　季　能　卿

なにとなく思ひ入るらん吉野山奥にも人はあはぬ物ゆへ

右　勝　　　　　　　　　前　越　前

をのつからまとろむ程にわすらるゝ戀な夢こそおとろかしつれ

左歌さもと覺侍に顯季卿歌に我戀はよし野の山のおくなれや思ひ入ともあふ人もなしと侍歌に心通ひて侍めりもし此歌な思ひてよまれたるにやされと歌おもてはさとも見え侍らす右歌心をかしく侍めり仍爲勝

千百七十七番

左　　　　　　　　　　　宮　内　卿

思事えそしのはれん袖のうへに秋ならはこそ露とかこため

右　勝　　　　　　　　　定　家　朝　臣

戀しさのわひていさなふまこゝに行てはきぬる道のさゝ原

左歌させるとかも侍らぬに右歌心詞相叶事外に宜こそ見え侍れ仍爲勝

千百七十八番

左　持　　　讃　　岐

いたつらにさてやはくちんあや莚なかす涙なしきしのひつゝ

右　　　通　具　朝　臣

しる人も涙のしたにくちはてはたか名はたゝしつれなきにして

右歌分明にもえ心得侍らねは無左右勝負難申

千百七十九番

左　　　小　侍　従

夢とのみ思ひはてゝもやむへきに契しふみのなに殘りけん

右　勝　　家　隆　朝　臣

人しれすくつるたくひや我袖にくらふの山の谷のむもれ木

左歌心はさても侍りぬへし契し文や無下にたゝありに侍
らん右歌心詞相叶て侍めれは爲勝

千百八十番

左　　　隆　信　朝　臣

いくしほとそむる心を人とはゝかはる涙の色をこたへむ

右　勝　　雅　　經

いかて猶しはしも人に住よしのあさゝは水のすゑはたゆとも

左歌よろしくよまれて侍に右の歌いかてなをしはしも人
にすみよしのと置てあさゝは水の末はたゆともと侍程め
つらしく艶に見給ふれは猶可勝にや

千百八十一番

左　　　有　家　朝　臣

山川のこほれる涙の春風に打出てこそいはまほしけれ

右　勝　　寂　　蓮

なそもかくおりしも物を思ふらん秋のね覺もふかきよの雨

左ノ山風に解る氷のひまことにうち出る波や春の初花と
よめる歌の心をもて面白戀に引よせられて侍ものかな
右なそもかくおりしも物を思ふらんといひて秋のね覺も
ふかき夜の雨と侍る心くろしきさまのすてかたく覺侍り
勝と申侍へし

千百八十二番

左　　　保　季　朝　臣

まてとかやいひしはかりを命にてあふまてとやは身を怨むへき

右　勝　　家　　長

秋の暮かへる春をもたのみけり我末つさいの行ゑしらすも

左あ[illegible]くも侍らぬに五文字を耳にたちて侍右めつらしき
さまにて宜こそ見え侍れ可爲勝

千百八十三番

左　　　具　　平

さりともとつれなき人を松風の心くたくる秋のしらつゆ

右　勝　　三　　宮

今こんと契し程も年ふりて軒はしのふに庭は淺茅に

左ことなる事侍らす右心は侍り末の句を耳にたちて聞え
侍れとも猶勝なとにや

千百八十四番

左　　　具　　親

中々につゝむけしきや時雨（しるかい）らんうきになしたる泪なりけり

右　勝　　内　大　臣

あふ事はつくまの神にいのりきてなへての數にいれしとやさは

右ふるき事を引よせて心めつらしくして尤逸興にこそ侍

めれ仍爲勝

千百八十五番

左　勝　　　顯　　　昭

新千載
さゝみやにつらきけしきをみしま江の入江の菰の亂にはつへき

右　　　忠　　良　　卿

あちきなくたのめぬ人を我待て深行まゝになけきそへつる

左歌ことなる事もなく又めつらしき所も侍られとよくつゝきて侍めり右歌よしくも侍らぬを中の五文字いかにそ聞え侍らん猶左はまさるへきにや

千百八十六番

左　勝　　　女　　　房

つれもなき人をはたのむかひもなくてくるゝ夜ことに秋風そ吹

右　　　通　　光　　卿

けふまてはおもひにしほる袖の露いつあらはれて誰にもらさん

左歌思ひ入られて侍さま幽玄にこそ見給へ右もさる事なから猶以左爲勝

千百八十七番

左　勝　　　左　　大　　臣

續後撰
よそなからかけてそおもふ玉かつらかつらき山のみねの白雲

右　　　釋　　　阿

年もへぬ宇治のはし守君ならはあはれもいまはかけまし物を

左歌「よそなからみてやゝみなんかつらきの高間の山のみねの白雲」といふ歌をもてかやうにとりなされて侍詞たくみに餘情高情ありてこそ覺侍れ右又「下早振宇治の橋姫なれなこそあはれとは思へ年のへぬれは」といふ歌思はれて艶に侍れとも猶以左爲勝

千百八十八番

左　持　　　前　　權　　僧　　正

槇の戸をさゝてそあくる君にこす我やゆかんのやすらひのまに

右　　　俊　　成　　卿　　女

思ひねの夢のうきはしとたえしてさむる枕にきゆるおもかけ

左は衣通姫の歌に「君やこん我や行んのいさよひに槇の板戸もさゝすねにけり」といふに似てこそ侍れ此歌をとられたるにや右歌源氏物語の詞をすへてやさしくこそ見え侍にさむる枕にきゆる面影とこそいかゝ心ゆかす侍れ夢に見えんすかたこそおとろかはきえもし侍らめ面影は夢さむとき消侍らし物をとおほえ侍れは是をおもひさためむ程は勝負難申

千百八十九番

左　持　　　公　　繼　　卿

こひすともつれにあふせを祈哉これをはうけよみたらしの神

右　　　丹　　　後

待々て山のは出る月はみつ今こんといふ人はなけれと

左右共に古歌を思て侍り左は五文字いかにそや侍り右によろしく侍り戀の心すくなしやと見給れは持なとにても侍れかし

千百九十番

左　公経卿

しほ風に岩うつ浪のわきかへり心くたくるものおもふかな

右勝　越前

いとそむる戀路にまよふ玉つさのむすほゝれたる物をこそ思へ

左歌「風ふけは岩打浪のおのれのみくたけて物を思比哉」といへる歌にや似て侍これもやかて此歌の心なとをとらんとよまれたるか右歌心は侍に聞なたすふなといふことをよまれたるそまめ／＼しからぬ心ちし侍れと難まては侍らねは可爲勝

千百九十一番

左　季能卿

面影に行ゑをとへはあちきなくこらぬ涙のこたへかほなる

右勝　定家朝臣

新古今
きえわひぬうつろふ人の秋の色に身をこからしの杜の下露

左は心おかしく右は心詞いひくたされてことによろしくこそ聞え侍仍可爲勝にや

千百九十二番

左持　宮内卿

わか戀は人しれぬまのあやめ草あやめぬ程そねをも忍し

右　通具朝臣

吉野川岩うつ浪のわきかへりかけみぬ水の瀬にくたけつゝ

右歌は心侍こか末句そいかゝと覺侍左歌はことにめにたつことも侍らぬにや持なとにや

千百九十三番

左勝　讃岐

新古今
うちはへてくるしき物は人めのみしのふの浦のあまのたくなは

右　家隆朝臣

から衣日も夕くれの空の色くもらはくもれまつ人もなし

左歌なひやかにいひくたされて侍うへに右歌も面白侍に少歌合にには戀の心やすゝなからと思給へは猶左勝侍なん

千百九十四番

左　小侍従

思はしとおもふ心のかなはねは人をはましていかゝうらみん

右勝　雅経

新勅撰
かけてたにたのめぬ浪のよる／＼をまつもつれなきよさの浦風

左歌末句に人をはましてなとつゝけられ侍いときゝよくもおほえ侍らす右宜聞え侍可勝にこそ

千百九十五番

左持　隆信朝臣

いかにせん思ひは深し伊勢の海に釣するあまのうけひかぬ身を

右　寂蓮

をのつから恨むるかたもありなまし身をなき物に思ひなさすは

左歌なひやかにいひしりて侍右歌も宜に侍めれは持なとにや

千百九十六番

左勝　有家朝臣

山かつのおりたつさはのまこも草かりにのみこそ袖もぬるらめ

右　　　　　　　　　　　　　　家　　長

涙かへる君にあふみのかたゝ舟しけきあしまな行かたそなき（くイ）

左歌戀の心よそなるやうにすこし聞ゆれと又さやうにも讀て侍にや右歌詞なひやかにもいられは左猶可爲勝

千百九十七番

左　勝　　　　　　　　　　　保　季　朝　臣

今こんも契むなしくふけぬれは空行月の影もうらめし

右　　　　　　　　　　　　　三　　宮

たのましと思ふ物から暮ことにこゝろにかゝる雲のふるまひ

右もあしくも侍らぬに左は猶宜侍にや

千百九十八番

左　　　　　　　　　　　　　良　　平

（續後拾遺）あはてたゝなけく計の契なはこはなにゆへにむすひなきけん

右　勝　　　　　　　　　　　内　大　臣

幾世しもあらし物ゆへあちきなくうき身にかへて思ふへきかは

左歌心は侍り右歌の心詞かけあひて華美にこそ見給れ勝侍へし

千百九十九番

左　　　　　　　　　　　　　具　　親

さりともと待しくれこそはかなけれとふにたに猶つらき心な

右　勝　　　　　　　　　　　忠　良　卿

思ひれに我か心からみる夢もあふ夜は人のなさけなりけり

右よろしく聞え侍り可爲勝

千二百番

左　　　　　　　　　　　　　顕　　昭

いとはれて年ふる身には思ひやる心つかひもはつかしき哉

右　勝　　　　　　　　　　　兼　宗　卿

あふ坂はみやこにちかき程なれと戀路となれは遠さかりけり

右勝侍へきにや

千五百番歌合卷第十七　戀二

判者顯昭法師

千二百一番

左勝　　女房

なかむれはこぬ人またる佗つゝも今夜の月にあかすかもねむ

右　　釋阿

せきわひぬあふ瀨もしらぬ涙河かたしく袖やゐてのしからみ

判申云左歌は「月夜にはこぬ人待るかき曇り雨もふらなん佗つゝもねん」と申歌の心にこそ侍ぬれ雨もふらなんの詞をすてゝひとへに今夜の月にあかすねんと侍るおそらくは月をもてあそふ心もふかく成て本歌よりもまさりてこそ侍ぬれ右歌は萬葉歌に玉藻苅ゐてのしからみうすきかも」と侍歌の一句をとりて井てのしからみと置れたるは心高きに上句は金葉集の歌に「淺ましや逢瀨もしらぬ名取川またきいはまにもらすへしやは」と侍にかよひてあふせもしらぬ涙川と侍るわたりあさくやきこえ侍らん左歌は本末一すちに高情のすかたをこのまれて左歌勝と申侍へし

千二百二番

左勝　　左大臣

下もえの名にやはたてん難波なるあし火たくやにくゆる煙を

右　　俊成卿女

續後拾遺
夏衣うすくやのなりぬらん空蟬のねにぬるゝ袖かな

左歌は萬葉に「難波人蘆火焚屋はすしたれとをのか妻こそ床めつらしき」と侍歌によせて蘆火たくやにくゆる煙の我下もえの名にたてん事を歎かれたる程優艷にこそ聞え侍れ右歌は「蟬の聲きけはかなしな夏衣うすくや人の成んと思へは」と侍歌を上下の句にとりちかへられたるにや空蟬の音にぬれん袖よりも猶蘆火たくやの煙はたちまさり侍らん

千二百三番

左勝　　前權僧正

あり明のこや長月の空たのめ待出る月のかきくもるまて

右　　丹後

續千載
時しらぬ戀はふしのねいつとなくたえぬおもひにたつけふり哉

左歌は「今こんといひし計りに長月の有明の月を待出るかな」とよめる素性か歌によせてそらたのめに待出る月をかきくもらせられたりさもと聞え侍り右歌は伊勢物語に「時しらぬ山はふしのねいつとてかゝのこまたらに雪の降覽」と有歌をおもひて山は富士のねを戀はふしのねとかへられたるにこそかゝるすちの歌にとりてあしくも侍らねと歌合には如何侍へからん左歌をまさると可申哉

千二百四番

左持　　公繼卿

涙あらき岩にも松はおひにけりとおもふ計をなくさめにして

右　　越前

岩のうへにおひぬる松のたねたのみたのむ計のなくさめそうき

左右共に一種しあれは岩にも松は生にけり戀をしこひはおはさらめやもと一侍歌を思はれて詞もおなしやうに侍めり終句そかはりて侍れとそれもとり／＼なれはおとりまさり申かたき也

千二百五番

左　勝　公経卿

かくしつゝうき身消なはありし世の夢をはかなみ哀となみよ

右　定家朝臣

夢なれやをのゝしのはらかりそめに露わけし袖は今もしほれて

左歌は伊勢物語の「ねぬる夜の夢をはかなみまとろめは」と侍歌の詞を思はれたるにや哀に聞え侍り右歌は思はれたるすち侍にこそおほつかなく侍れ但もし源氏物語に北山の旅ねに紫上のうはの尼におひて一につ草のいか葉のうへを見つるより旅ねの袖そ露もかはかぬ」と侍歌やかて詞も侍りその事のおけやうなとを思はれたるにやをのゝしのはらなとも北山の旅ねのたよりありてや此事をはかりの事に侍る歌合のうたいしかなるへけれはその事と承らん程左かつへき歟

千二百六番

左　勝　季能卿

さもあらはあれ憂身の程やしらせましいかてやむへき物思かは

右　通具朝臣

我戀はあふをかきりのたのみたに行ゑもしらぬ空のうき雲

左歌詞もかさらす心におもふまゝにいひのへられたり右歌は「我戀は行ゑもしらす果もなしあふを限りと思ふ計そ」とよめる躬恒か歌をおかしきさまにとりなされて侍りとちむる句の空のうき雲の詞いかゝ聞え侍にをまさるへくや

千二百七番

左　持　宮内卿

身のほとにつゝむといはゝ自らいとふになりぬ戀すしもあらす

右　家隆朝臣

おもへとも人の心のあさちふにをきまかふ霜のあへすけぬへし

左歌に「月夜よし夜よしと人に告やらはこてふに似たり待すしも非す」と侍心をこひねかひて月を戀になしまたすしもあらすをこひすしもあらすといひかへられたるにこそ右歌には「ありつゝも君をはまたん打なひき我くろかみに霜の置まよひ」といへる終の詞をなさまよふ霜のとよみなされて又ひるは思ひにあへすけぬへしとあるをはりの詞をひきうつされたる共にちからえて侍れといつにさたかに勝まくへしとは申かたきなや

千二百八番

左　讃岐

ふけにけりこれや頼めし夜はならん月をのみこそ侍へかりけれ

右　勝　雅経

あはれともいつかは人にいはれ野のいはれすかゝる袖の露かな

左歌は後拾遺に侍江侍従か「月みれは山の端高く成にけ

り出はと言し人に告はや」と讀る事思ひ出られ侍り右歌にいはれ野と侍るは新拾遺に「鶉鳴いはれの野への秋はきを思ふ人ともみつるけふ哉」と侍るに萬葉には鶉なくふりにし里のはきにと侍はおほつかなく侍り其歌ならて侍にやたしかにかんかへられ侍へし後拾遺に頁暹か歌に「磐余野の萩の白露分行は戀せし袖の心ちこそすれ」と侍はふるくもよみて侍にこそいかさまにても右かちにや

千二百九番

左勝　小侍從

あさましやかくやは物をおもふへき我つらからは人はしのはし

右　寂蓮

おもふ事千えの浦わのうき木たによりあふ末はありとこそきけ

右歌は萬葉に「秋風の千えの浦はのこつみなる心は寄ぬ後はしらねと」と侍歌の心也此歌には浮木と侍り萬葉には木積と侍りこつみとは涙にうかへる木の枝なとの類にひかれて浦々になかれてよるを申にこそ萬葉には又よめり「堀江より朝鹽みちによるこつみ貝にありせはつとにせましを」これはこつみとよますしてうき木とよまれんは本歌にやたかふへき又法花經には一眼の龜の浮木のあなにあへるかことしと解り海の龜いかはかりのあなならは浮木もちいさからし又張騫か浮木にのりて天河の水上を尋たり又海渚の人も槎にのりて天の河邊にいたりてたなはたのひこ星にあへりといへり小大君か歌にも「天河浮木にのれる我ならは君かあたりにけふはきなまし」とよめり萬葉の木積を抑へてうき木とよまんことはいかゝ又思事千えの浦わとつけられたる事は庵主か歌に「わかおもふ事のしけさにくらふれはしのたのもりの千えは物かは」と侍るは千枝と申事也千えのうらわにとことたかひたれとたゝちえのうらとよめる名はかりによせたるなるへし歌合にはかゝる耳となき詞なとはよますとそ先達申をきて侍るに左させるとか侍らねは勝と申へし

千二百十番

左勝　隆信朝臣

あさゆふにうき面影をみなれさはさすかに扱もなくさみやせん

右　家長

夢にたにみるよもなくて明るよのかへす衣のそてのうら涙

左歌みなれさはさすとはかりにてたかせ舟なともよせられぬいかゝとおほえ侍れと古くはさのみこそ侍めれ「梓弓なして春雨けふふりぬあすさへふらに若菜つみてん」なとそ侍めり右はしめおはりよむへきふしはみなよまれて侍れと夢によせて夜の衣を返し袖のうら涙にかけてみるめなきよしをよまれたり事一すちならねはなを左勝ぬへしとそ思ひ賜へ侍ける

千二百十一番

左　有家朝臣

年ふともなかれてこひんつらしとて扱やは人を山川の水

右勝　三宮

よとゝもにうき人よりもつれなきは思ひにきえぬ命也けり

左歌は「山高み下行水の下にのみなかれてこひん戀はしぬとも」侍る歌の詞をとられたりと見ゆれとさてやは人を山川の水と侍るあさきさまなるへくや右歌心詞始終相叶て心詞たしかによみすへられて侍はうたかひなきかちに侍めり

千二百十二番

左　　保季朝臣

思ひやれ草にもあらす木にもあらすたゝやは袖に露はをくへき

右 勝　　内大臣

見し夢をしのふる雨のもらさはやうつゝともなき袖の雫を

左歌は「木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしに吾身はなりぬへら也」と侍歌は竹をは木にもあらす草にもあらすとよみて侍りそのかしらむれの句をとりて今の歌のむねこしにをかれてはへる本歌よりは品なきやうにきこえ侍るはひか覺えにや侍らん右歌は源氏の歌に侍る「見し夢をあふ夜ありやと嘆くまにめさへあはてそころもへにける」とある歌の心にやたとひ其本歌ならすとも歌のすかたよろしきさまなれは勝と可申

千二百十三番

左 持　　良平

新後拾
池水につかはぬをしのうき枕ならふかたなき戀もするかな

右　　忠良卿

人もうく我もくやしきなくさめは世々のちきりのむくひ計そ

左歌ふるきやうをこひれかはれて一ふしとよまれたるさる事と見え侍右歌はつれなきこひのなくさめに世々のちきりまておもひ入られて侍り心さしとりに侍れは持と申へき也

千二百十四番

左 勝　　具親

今はとて思ひたゆへき槇の戸をさゝぬやまちしならひ成覽

右　　兼宗卿

君をのみひとへにしのふ夏衣さてもうらなきかひやなからん

左歌は「君やこん我やゆかんのいさよひにまきのいた戸もさゝすねに息」此歌を思はれてよろしく侍り右歌は夏衣によせてひとへにうらなしとはめつらしけなくや左をかちと申侍へし

千二百十五番

左　　顯昭

さりともとよもたゝにては山城のいつみの小菅いつかあひみん

右 勝　　通光卿

古へはしちのはしかきもゝ夜とも頼むれはこそそれにつけても

左歌は「山城のいつみのこすけよそなみにいもか心をわか思はなくに」と侍る萬葉の歌をおもひて侍れと下句いつかあひみんなと心よくもおほえ侍らす右歌はしちのはしかきもゝ夜なとよまれたるは昔よりよみきたれる事なれははしめて申へからす天德四年内裏歌合に平兼盛か歌に「ひとへつゝやへ山吹はひらけなんほとへて匂ふ花と頼まん」と侍をは判云やへ山吹の一重つゝひらけはひと

へ山吹にこそ本意なくやあらん又上句のはての文字下句同し文字ありて負侍るに同歌合に小貳命婦か歌に「足引の山かくれなるさくらはな散のこれりと風にしらすな」と侍る歌をはいとをかしくてさてもありなんとて勝侍りぬされは同病なれとかちまけは歌のよしあしもしは難のありなしによるかと心得られ侍れは右歌勝へく侍る

千二百十六番

左 持　女房

君はしるや待夜あまたにつもりきて袖に有明の月をみる共

右　俊成卿女

色かはる心の秋のときしもあれ身にしむ暮の荻の上風

左歌上句に待夜あまたにつもりきてと侍る柿本人丸かたのめつつこぬ夜あまたにとよめること葉思出られて侍り下句は伊勢か歌に「あひにあひて物思比のわか袖に宿る月さへぬるゝ貌なる」とよめる歌おもかけにたちて侍り袖にあり明の月をみるともとさへ侍るいよ／＼月前戀きはまりぬることにこそ侍めれ右歌の色かはる心の秋の身にしむ暮の荻の上風もやうかはりてたゝならす侍れはみきの袖も露をきぬへくや持と定可申也

千二百十七番

左　左大臣

木かくれて身はうつ蟬のから衣ころもへにけりしのひ／＼に

右 勝　丹後

わりなしや露のよすかを尋きて物思袖にやとる月かけ

左歌「敷島のやまとにはあらぬから衣比もへすしてあふ由もかな」と申歌は貫之か詠也此左の歌は後撰に「忘らるゝ身はうつせみのから衣かへすはつらき心也けり」と侍歌又伊勢か歌に侍る源氏にもいれる「うつ蟬のはにをく露の木かくれてしのひ／＼にぬるゝ袖哉」これらの心にておもしろうよみなされ侍にこそ木かくれて身はうつせみのから衣とをきてころもへにけりしのひ／＼にと侍るめつらしさめもをよはすこそ侍めれ右歌は露のよすかと侍源氏の詞にはあさからぬよすかにかけてなといへる詞は侍るにや萬葉には「しかの山いたくなきりそ荒おらかよすかの山とみつゝ忍はん」と侍りひこひめか和歌の式には「あひみるめなきこのしまにふけよりてあまそてみちぬよすかなみ也」是らにていかなることはとは心えられ侍なん此の歌の心もたかひ侍らす歌めきて侍れは左のころもへにけりは心得すして耳に聞なれて侍れは露のよすかまさり侍りなんや

千二百十八番

左 勝　前権僧正

いかにとよ戀しき事をよしなしと思ひはつれは物忘れして

右　越前

あふ事はかた山きしの岩の上にいつをまつとてふる（くイ）み成らん

左歌は「むかし人になを立返る心かな戀しきことに物わすれせて」これは貫之か詠に侍今の歌下句は此歌の二句をとりて今三句をおかしくよみそへられて侍る也おかし

くよみなされぬれは撰集にもまかり入侍らんか右歌は萬葉の歌にあさつまのかた山きしと申歌の詞をとられて侍れと終句なとよろしからねは左歌は勝侍なん

千二百十九番

左 勝　　公繼卿

ふちはかま夢路はさこそ通ひけれあふとみる夜のうつりかも哉

右　　定家朝臣

新古今 尋みるつらき心のおくの海よしほひのかたのいふかひもなし

左歌は鄭文公か家にいやしき妾ありその名を燕姫といふ夢に天使來て蘭をあたへていはくこれをなんちか子とせよといへり夢覺て後にうめる子を蘭となつくといへり此事をよまれたるなるへし右歌は伊勢よりみやこ所の源氏のもとへたてまつれる歌云「いせしまや鹽干の潟にあさりてもいふかひなきはうき世也けり」此歌いせしまなかへてつらき心のおくの海となされしほひのかたにあさりてもいふかひなきは浮世とあるなしほひのかたいいふかひもなしとかへられたりうき世の詞をすてゝ戀の歌につけられたる成へし左の燕姫か蘭の夢は今すこし歌めきてにほひふかく侍れはまさると申へし

千二百二十番

左 持　　公經卿

なかめわひうはの空なる月かけに身のうき雲をいとゝかなしき

右　　通具朝臣

あふとみて思ひあはせぬ夢にさへはかなかりける契りなれとや

左歌はうはの空なる月をなかめわひて身のうき雲をいとひ右歌はあふとみて夢のむなしきにはかなき契をしれるほと共に宜きこえ侍れは同程と可申にこそ

千二百廿一番

左 勝　　季能卿

しらせては中々戀やまさるへきいはぬにつらき人しなければ

右　　家隆朝臣

をのつから頼む夢路はむなしくていつかうつゝの戀はさむへき

左歌の心あしくも侍らす右歌夢路なとよみてよせある詞やいさゝかも侍へきされは古も「夢ちには足もやすめす通へ共うつゝに一め見し事にはあらす」又「夢ちにも露や置らん夜もすからかよへる袖のひちてかはかぬ」なとこそよまれたれ左勝也

千二百廿二番

左 持　　宮内卿

これも又あはれいつまてなけかれんかはらぬたにもかはる心を

右　　雅經

さきの世をおもふもうしや人心つれなかれとは契りしもせし

左右の詠おもひ／＼に心をつくされたるにとりて右歌はいさゝかおほつかなきふしこそ侍れつれなかれと契らすはさきの世を思はんもなにかはうかるへきせめておもふあまりにこそふるき歌には「先の世の契をしらてはかなくも人をつらしとおもひける哉」とおもふ人も侍る物をされとちゝやちくさにおもひみたるゝ心のうちをは一す

ちにしつゝおもふともかなひかたし人の心々はたゝ同事
と申侍へきにこそ

千二百廿三番

左　勝　　讃岐

夢にたに人をみよとやうたゝねの袖吹かへす秋のゆふかせ

右　　寂蓮

いせの海の鹽瀬になひく濱荻のほとなきふしに何しほるらん

左歌は萬葉に「白妙の袖ふりかへし戀れはや妹かすかたの夢にしみゆる」といふ歌の心をおもひて袖ふきかへすとよまれたるよろしくも侍り國信卿の歌合の時夜戀に登源法師か「戀侘てかたしく袖はかへせともいつかは君か夢にみえける」とよめるなはその時の歌仙衣かへすと同事かなとおほめき侍けるも萬葉の歌たしかにもおほえさりけるにや右歌は「神風やいせのはま荻おりふせて旅ねやすらんあらき濱へに」と侍歌の心にこそたゝし上句鹽瀬と侍れと下句にしほるとよめるはあらぬ事なれとあま人わたつみなとによせては袖のぬるゝなしにたるなとそへよむ事なれはたゝ文字の病よりは耳にたち侍ぬへし源氏の歌に「しほ〳〵とまつそなかるゝかりそめのみるめはあまのすさひなれとも」とよめり左歌勝にや

千二百廿四番

左　　小侍従

ちきらすな枕にとめんうつりかをたえなん後のかたみなれとは

右　勝　　家長

わひつゝは同し世にたにと思ふ身のさらぬ別になりやはてなん

左歌枕にとむるうつりかのたえての後の形見とならんもなさけふかくこそ覺侍れ右歌は五郎中將業平の君か母のみこ長岡に住けるときとみの事とて文をもてきたりこと事はなくて「老ぬれはさらぬ別の有といへはいよ〳〵見まくほしき君哉」とよめる歌そこのさらぬ別にのあるはしめとおほえ侍るひとことはをとれるも心ほそくきこゆれは右の歌は猶あはれもかけ侍ぬへし

千二百廿五番

左　　隆信朝臣

いし川や蟬のを川のなかれにもあふをありやとみそきをそする

右　勝　　三宮

物思ふ心のうちにやとりきぬふしのたかねもむろのやしまも

左歌は左大臣家の百首歌合に祈戀に「石河やせみのを川に齋串たてねきしあふせは神にまかせつ」とよめる歌侍りその作者達定おほえられ侍らん但長承のころほひ顯輔卿歌合に「戀侘て落る涙の玉ならはちはこの數もつきやしなまし」藤雅親か歌也其後保延の比家成卿歌合に「君戀る涙の玉をぬきをきても車にも積てみせはや」藤宗國歌基俊判云さきの歌合に涙の玉ちはこの歌あり今の歌合に泪の玉もゝ車の歌あり忘て詠するかこひねかひてよめるにても千箱百車これ同事也古歌二たひよむは歌合にゆるさぬ事也遼東のゐのこにたとふへしといへりしからは此左歌すてに此とかをかせり右の歌にはおもひにか、

る心に富士のね室の八島なともにやとされたる珍らしく、たゝきしきふせいなり。たくひなき勝に定られ侍へき也

千二百廿六番

左 持　有家朝臣

おりそめに結ふさゝやの雨そゝき一よのほともしのふ涙かな

右　内大臣

忍ふれとよそめやいかにあさてあらふ閨の水のかけもはつかし

左歌は催馬楽の歌に「あつまやのまやのあまりの雨そゝき我たちぬれぬとのとひらかせ」とうたへるをむすふさゝやの雨そゝきとよみなされたる有興也右歌は世俗の口すさみに「あさてあらふたらひの水に影みれは戀にわか身は面やせにけり」此たはふれことにかよひて侍るにつけてもおかしくは侍り但はれの歌合にもかやうの戯咲歌はとりいつる事もふるく侍めり寛平太上天皇の御時后宮歌合に「いくはくの田を作れはか郭公してのたをさをあさなあさなよふ」藤敏行歌「秋風にほころひぬらし藤はかまつゝりさせてふきりきりすなく」在原棟梁これらを案し侍るに左はひきつくろへたるさまなこのみ右はおかしき心にほこれりいつれをすてゝいつれをとるへからす侍り

千二百廿七番

左　保季朝臣

おもふ事しのへと今に名取川せゝの埋木あらはれやせん（にけりイ）

右 勝　忠良卿

ねられねは枕もうとき床のうへにわれしりかほにもる涙哉

左歌は「名取河せゝの埋木あらはれはいかにせんとかあひ見初けん」此歌の上句（三句イ）なとりて今の歌の腰より下三句になかれて侍めりはしめの二句はかりあたらしく侍也右歌は「我戀を人知らめや敷妙の枕のみこそしらはしるらめ」と侍歌につきてねられねはまくらもうとき床の上にと讀なかれてわれしりかほにもる涙かなと侍る下句おなしく侍れはいつこふるくと申へからす古歌枕はかりそしらはしるらんと侍詞に付て枕もうときとなされたるはかりなれはあたらしき歌なれは勝とさため申侍ぬ

千二百廿八番

左 持　良平

名殘にはぬれこそまされさよ衣返してきつる夢の明ほの

右　兼宗卿

いとふ共同し世にこそすむらめと思ふはかりそたのみなりける

左右の歌共に風情はふくとられて侍に左は下句よろしからす右は腰句のすむらめと侍詞や今少おもはるへく侍らん同程とやならへて可申

千二百廿九番

左　具親

ほしわひぬ思ひしのたのもりの露千々にくたくる手枕の袖

右 勝　通光卿

空蟬のひともといへはなにならす身にかへてやは忍ひはつへき

左歌はさきにもしるし申つるいほぬしか歌にしのたのもりの千えは物かほと申歌のすこしひきなをされて侍にこ

そ又おもひしのたのつゝきはさきにもおとろかし申侍ぬ
右歌は源重光卿のせみのもぬけな女のもとへつかはすとて「これなみよ人もとかめぬ戀すとてねなく蟲のなれる姿な」とよみけること葉おもひ合られていと哀にこそ
覺侍れ勝と可申

千二百卅番

左　顯昭

いとひつる侍はかりやはうきぬなはくるしき物なたえぬ恨みは

右勝　釋阿

いく年になれにし床のふりぬらんつけの枕もこけおひにけり

左歌うきぬなはにかけてたえすくるしなとそへよむはものすそよりおちたるふる事なれはめつらしけ侍らす右歌は上句よのつねならすたけたかく見え侍うへに下句は萬葉に「ゆひし紐とかんひとなみ敷妙のわか木の枕苔おひに鳬」と侍歌なと思出られて左歌まけ侍へし

千二百卅一番

左勝　女房

續古今
うらみよとなれる夕のけしき哉たのめぬ宿の荻のうはかせ

右　丹後

新後拾遺
中々にこえてそまよふ相坂の關のあなたの戀ち成らん

左歌は一偏に金なちりはめ五句に玉なつらねけり心詞共にあひ叶てほめ申に付ておそれふかく侍也ゑところなうしなへり右歌はこゝちわりなく侍るにいさゝかいきこを
ることろあひましはれり中々にこえてまよふといはゝ關のこなたとそよみ侍へき「なそく出る月にもある哉足引の山のあなたも惜むへらなり」これは月の出やられはかくよめり「みよしのゝ山のあなたに家もかな世のうき時の隠れかにせん」これも山よりこなたにてよむ心なりされはこそ關のあなたにまよふとは申へからす作者よくよくおもはるへし以左可申勝

千二百卅二番

左勝　左大臣

行かよふ夢のうちにもまきるやとうちぬる程の心やすめに

右　越前

秋風に思ひみたれてくやしきは君なならしの岡のかるかや

左歌は「戀わひて打ぬるなかに行通ふ夢のたゝちはうつゝならなん」此歌の心を終句におもはせていひさゝれ侍なり右は古郷のならしの岡の郭公と侍歌につきてならしの岡のかるかや秋風におもひみたれてくやしきはとはよくこそよみくたされて侍れあまりにたくみにきりくまれて岡のかるかやなともしなやなくれて聞え侍らんやまと歌ははかなきさまにておもへる所見えたるはいみしきしなに侍れは左勝にこそ

千二百卅三番

左勝　前權僧正

なくさむる時こそなけれ月やあらぬ秋やむかしの荻のうは風

右　定家朝臣

人心かよふたゝちのたえしよりうらみそわたる夢のうきはし

左歌は伊せ物語に「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして」と侍歌の心おしはかりて秋の心に引かへてなくさむる時こそなけれとよみなかれて秋やむかしの荻のうはかせと侍まことにたくみに侍心もなよはぬ風情に侍ぬへし大かたは詩にも歌にも時にしたかひてそのすかたかはる事にこそ侍めれ詩は齊公文傳序云漢より魏にいたるまて四百餘年詞人才子文體三たびかはると侍めりされは杜伯山か事時務にかなはすとてつれのやうなかふる事も侍りやまと歌もかくのことし和歌は古今序云昔平城天子詔侍臣令撰萬葉集自爾以來時歷十代數過百年其後和歌棄不被採雖風流如野宰相輕情如在納言而皆以他才聞不以斯道顯云々又云時變澆漓人貴奢淫浮詞雲興艷流泉涌其實皆落其花孤榮至有好色之家以此爲花鳥之使乞食之客以此爲活計之謀故半爲婦人之右難進丈夫之前云々今案平城御代萬葉之風體延喜御撰古今歌撰其姿不同其詞相違詩者四百年文體三變歌者百餘年風流亦變者歟古今序には今世中色につき人の心花になりにけるよりあたなる歌はかなきことのみおほくとかけり又そのみ皆おちてその花ことりさかゆ共いへりこれはならのみかとの萬葉より後延喜御代古今の歌なとはかはりて侍にやいはんや其後今の世になりてはともかうもかはり侍らん事たゝ人の心にまかせ侍へし古き歌なのみほめ今なそしるへからす左の歌の心たかさも右うたのよのつれめきてけちかく侍もいつれに心えへし共思ひえ侍らす歌合に持のつかひ侍事なれはさやうにてこそ侍へけれと猶うるはしきに付て左勝か

千二百卅四番

左　　　　　　　　　　　　　　　　公　經　卿

いかて我しのひになるゝうつりかいたえぬ匂ひな袖にかさねん

右　勝　　　　　　　　　　　　　　通　具　朝　臣

曉の床は草はのなになれや露に別のなみたたく曉

左歌上句のうつりかと下句の匂ひとは同心の病にて侍りとかちのよしの證歌いたして侍れ共くはしくそのよしなしるさねはおほつかなし此歌は病あり共つかひの歌無下にわろくや侍りけん判者心はかたし右歌は「獨ぬる床は草葉にあられ共秋くるよひは露けかりけり」此歌の詞なとりぬる夜もうつりかそすゝる」と侍歌勝侍るとて病あれ

六條右大臣家歌合に「我宿のはなたちはなの匂ひにはことりてあしくも侍られは左歌やまひによりてまけ侍なん

千二百卅五番

左　持　　　　　　　　　　　　　　公　經　卿

荻のはに露のかことなむすはすはかなも人なもたれかうらみん

右　　　　　　　　　　　　　　　　家　隆　朝　臣

新古今
おもひ出よたかかれことの末ならん昨日の雲のあとの山かせ

左歌は源氏物語の歌に「ほのかにも軒はの荻な結はすは露のかことな何にかけまし」右歌は同物語に「みし宿の煙な雲となかむれは夕の空も睦しきかな」もし此歌の心かさらぬにても左かこと右かれことたゝ同科にてや

千二百卅六番

左　季能卿

なにとかくよな／＼袖のしほるらん思へはたれか心なりしそ

右勝　雅經

おもひわひおつる涙の玉ことにくたきはてゝもある心かな

左歌ゆへなきにあらすおもへる所はいひのへられたり右歌は「あは雪のたまれはかてにくたけつゝわか物おもひのしけき比哉」又源重之歌にも「風をいたみ岩うつ涙のおのれのみくたけて物を思ふ比かな」か様の心共くたけて物をおもふに涙の玉のくたくるよしをよみそへられて侍るはいつれまさるともおほえ侍らねと左歌終句の心なりしそなといかにそや侍れは右歌ちからいれられて侍めれは勝侍なん

千二百卅七番

左勝　宮内卿

新後拾遺 あくるまに〔たイ〕おしまぬ物をくれはとは心の外のそらたのめかな

右　寂蓮

涙さはくあしまにかつくにほ鳥のうきしつみてもぬるゝ袖かな

左歌後朝歌にてはさる心も侍ぬへし右歌は鳰鳥のうきしつみてぬるゝ袖も歌さまあしくも聞え侍らねと左はおもひ入て侍り右はよのつねの事にてや左可勝歟

千二百卅八番

左勝　讃岐

深草の野へのうつらよなれはなをかりにはとたにまたぬ物かは

右　家長

詠わひぬことり有明の月かけにあはぬ數かく鴫のはねかき

左歌は「野とならはうつらと成て年はへんかりにたにやは君はこさらん」といふ歌を思へり右歌は「曉の鴫の羽かき百はかき我そかすかく君かこぬよは」と侍り左歌は我宿のあれて野とならは我は鶉のやうになきて年へんとよめるをそれおらましことのうつらなかりにはとたにまたぬ物かはとよめり右は君かこぬ夜の數を鴫のもゝはかきのやうに我はかすなからんとよめるを鴫の人にあはぬ數なからんするやうにあはぬ數かく鴫の羽かきとよまれたりふたつにとらは鶉にならんと人の讀たれはさもよみつへし鴫の數かくことはなけれはいかゝ左はいますこしたよりや侍らん勝と申へくや

千二百卅九番

左　小侍従

たのむ共今はたのましあふみちのしのゝをふゝき人はかりなり〔けりイ〕

右勝　三宮

さのみやは人の心にまかすへきわするゝ草のたねをしらはや

左歌は催馬樂に「あふみちのしのゝをふゝきはやふかすこもりまちやせぬらん志のゝをふゝき」と申歌に附て讀るなるへし志のゝをふゝきは風の名と申つたへたりこもちまちやせぬらんといふ詞につきて人はかりけりとはよめるにこそそれもをしはかりにやたしかに詞をことにあきらむる事はいかゝ大かた神樂風俗催馬樂なとのうたは

ふるきうたにて心得やすき事もあり又古語なとましりゆへありてなにことゝ申あきらむへくもなきことありとこそよろつのみゝふりくゝりたる人々も申侍りけれ俊頼朝臣か竹風如秋と申題にて「秋きぬと竹の園生になのらせてふしのゝなふゝき人はかりなり」と讀るに下句おなし如何旨歌「今はとてわするゝ草の種をたに人の心に委せすもかな」此心にて上三句に此歌をなかめて我種なしらはやと侍りをしはかりなれと左歌の下句ふるけなれはまくへし

千二百四十番

左　　　　隆信朝臣

戀せしのみそきもいまの夢にたにみたらし川の忘れかたみは

右勝　　　　内大臣

明暮になれし昔を忘れつゝ夢かとのみそおもひこなきる、

左歌「戀せしと御手洗川にせしみそき神は受すもなりにけらしも」と申歌につきて戀せしのみそきとよむ事侍れとこひせしのとよむ事はうけられぬ詞に侍りたゝ心うつくしう戀せしとゝよみ侍らはやとふるき人も申侍き右歌業平朝臣これたかのみこのもとに年ころかよひけるにかしらおろしておほのさかもとに小野と申所にうつりゐられたるに正月にとふらひにゆけりけるに雪いたうふりてものさひしけに侍りけるにかの室にいたりておかむにつれつれとしていと物かなしかりけれは歸りてつかはしけろうたなりその心をとりてさりけなくていもせのなからひによみなされてあはれもふかく侍に左歌常の事にて目もおとろき侍らねは右をや勝と申侍

千二百四十一番

左持　　　　有家朝臣

立かへり暮まつほとのひるまたになくなく袖をしほりつる哉

右　　　　忠良卿

(續拾遺)戀をのみしつやのこすけ露ふかみかりにも袖のかはくまそなき

左歌ひるまたになくなく袖をと侍るうちまかせたるつゝけやうにて上にはひるまなしといひ下にはねをなくよしにそへつゝけられたるよろしき歌に侍らすと源氏物語なとには「いつくにか身をに捨てん白雲のかゝらぬ山もなくなくそ行」なと讀る事はおほかれはとかめ侍へからす右歌かくらのしつやのこすけの歌につけて露ふかみかりにも袖のかはくまそなきなとはなかしく侍るに戀をのみしつやとつゝけ侍る事はふるくいとみえ侍らすこひすまなとは侍めりされと近比はかく侍めれはひとりいかゝと申さんはひか事にてそ侍へきかちまけ定申かたし

千二百四十二番

左　　　　保季朝臣

大かたを涙にくらす夕されはおもふはかりのなかめたにせす

右勝　　　　兼宗朝臣

なきなかす涙も我をいとへはや身をはなれてはおつる成らん

左歌にふかくも侍らね上手とせられたるふしやいかゝ千載集に源明賢歌に「なけきあまりしらせそめつる言のは

も思ふはかりはいはれさりけり」と侍下句にやかよひて侍るらん一ことはもむねと思ひたるふるき詞なははれにはさるへしあまた句なにとさせる事なきなはとかむるにをよはすといましむることなれは申侍なりおほゆるほとの事を申されは志らさりけるともわたくし侍り共かたかたそしり侍へけれは申侍なり右歌は涙も我ないとひてや身をはなれておつらんと侍あしからすきこえ侍れは右勝と可申

千二百四十三番

左　持　　良　平

さむしろやあたりさひしきね覺して夢の別も露けかりけり

右　　通　光　卿

なのつからあふよあらはのあらましも思ひ絶ぬる身の思ひかな

左歌ふるまへるすかた優に侍り右歌心をかしく侍れは持にて侍へきにや

千二百四十四番

左　　具　親

むすひけるあさき契りの程みえてあかて別るゝ山の井の水

右　勝　　釋　阿

みちのくのあら野のまきの駒たにもとれはとられてなれ行物を

左歌は「結ふ手のしつくに濁る山の井のあかても人に別れぬる哉」とよめる歌のなかれにこそまちかく聞なれてあさき事とおもひ侍へし右歌はみちのくのあら野のまきの駒によせられたれはおくふかく心にくゝ侍れはいし井にむすふてのしつくにこゝろかけよりもあたちの駒のあしはやくかちふちうちまかせてやさしく侍らん

千二百四十五番

左　　顯　昭

昔より人のうへにもおもひきや戀にうき名をとゝむへしとは

右　勝　　俊　成　卿　女

うちかへしかされし袖をかたしけはそれかと匂ふ手枕のつゆ

左歌の心と申詞につけてさせる見所も侍らす右の歌心たくみにすかた妙にして古判の詞にいとゝおかしなとほめられたるはかゝる歌をめてられたる詞にやとそおもひあはせ侍かちと申につけてかたはらいたく侍へし

千二百四十六番

左　勝　　女　房

荻のはに身にしむ風は音信てこぬ人つらき夕くれの雨

右　　越　前

人ならはおとろかすなといひてまし心もしらぬおきのうはかせ

左歌上句には荻の葉に身にしむかせを音信させて下句にはこぬ人つらきゆふ暮の雨と侍こそ不堪紅葉靑苔地又是涼風暮雨天と白樂天のつくれる詩まても思ひ合られて戀のなさけも催され侍けんと思ひやられ侍れ右歌下句の心もしらぬ荻の上風と侍も「夏衣また一重なるうたゝねに心してふけ秋の初かせ」とよみてこそは侍るめれことわり讀歌はすこしもちかひ侍ましきか左かち侍へし

千二百四十七番

左　勝　　　　　　　　　　　　　左　大　臣

繰返したのめてもなをあふことのかたいとをやは玉のをにせん

右　　　　　　　　　　　　　　　定　家　朝　臣

面かけはなれしなからの身にそひてあらぬ心のたれちきるらん

左歌は「かた糸をかなたこなたによりかけてあはすはなにを玉緒にせん」と侍歌にて一ふしおかしくむすひなされ侍る右歌はふかき心はしり侍らねとひとへにあらましことにてくさりやられて誠すくなきさまにやふるき歌讀の中にも贈答の歌戀風しやうしの歌合の歌にはみなさまかはりておなし歌よみなれとえぬかたえたるかたなと一すちならすと申つたへ侍と申事も侍歟左はたしかにはみえ侍れはつよしと可申歟

千二百四十八番

左　　　　　　　　　　　　　　　前　權　僧　正

つみしらはむくひを思へ花かたみめならふ人はひとりならぬを

右　勝　　　　　　　　　　　　　通　具　朝　臣

とへかしなお花かもとの思草しほるゝ野への露はいかにと

左歌は「花かたみめならふ人の數多あれはわすられにけん數ならぬ身は」と侍歌のさまにてこそ侍めれ此歌の上三句を取て今の歌の下三句にせられて侍るめり右の歌は萬葉の歌に「道のへのお花かもとの思ひ草今さらになと物思ふへき」と侍る歌のむねこしをとりて更に下句を讀かへられて侍めり又始の句もあたらしく侍は今少右すゝみにや侍らん

千二百四十九番

左　勝　　　　　　　　　　　　　公　繼　卿

道のへのいつ志はらのいつかわれ歸る朝のつゆはらふへき

右　　　　　　　　　　　　　　　家　隆　朝　臣

時しもあれ名そおなかちにつらなく秋は夕暮月はあり明

左歌は萬葉に「道のへのいつしはらのいつも〳〵人のゆるさんことをなし待ん」と侍歌の上三句のうち第三句のいつも〳〵をいつかわれとかへて下二句を後朝の歌によくかへなされて侍めり右歌は下句に秋はゆふくれ月は有明と侍はさきにもしるし申秋のゆふへはあやしかりけりの歌歟もしは「獨ぬる床は草はにあらねとも秋くるよひは露けかりけり」と申歌のこゝろ歟又は月はあり明とにそれもさきにいたし申す曉にかけうき物はなしと申歌かいかさまにも此下句のありさまよく讀すへられたると覺侍らす秋はたゝ夕ま暮こそたゝならね荻のうは風萩の下露なとこそけにもとおほえ侍れ以左爲勝

千二百五十番

左　　　　　　　　　　　　　　　公　經　卿

うらみはや人をも身をも朝霧の八重たつなみの秋おしそ思ふ

右　勝　　　　　　　　　　　　　雅　經

やとるとて月に涙をまかせてもくちなはいかに袖のしからみ

左歌は「またしらぬ曉露におきぬれて八重立霧にまとひぬる哉」是はさ衣の歌と承に此歌の心ならは朝霧の八重たつなみの秋と侍はいかによまれて侍にかもし涙と雲と

なまかへてよみ侍らはきりとなみとなもおひませてよまれ侍にや右歌もさきに申伊勢かやとる月さへぬるゝかほなると申歌にくちなはいかに袖のしからみなとよみそへられて侍るかともに思はれたる所よく侍れと左の朝きりの八えたつ浪のなきゝつかぬように覺侍れは右なかつと可申

千二百五十一番

左　季能

おきつ浪あらゐの磯の岩に生る松にもにたるそてのうへ哉

右　勝　寂蓮

面かけはくもる空たに有物をうたてくまなくすめる月かな

左歌は「くさかけの荒ゐの崎のかさしまをみつゝや皆か山路こゆらん」とよめる歌萬葉に侍れはあらゐの磯も侍らん磯と崎とはかよはしてよめる事おほしとしまか崎ともとしまか磯ともよめり右歌は「いつしかと暮を待まの大空は曇るさへこそうれしかりけれ」と申歌の心にや後拾遺に隆家卿の歌「さもこそは都の外に宿りせめうたて露けき草枕哉」これはたゝ三文字なれともなき所かはらねはこの詞によりてきよけにきこゆ又ふるしとも申つへし但あまりの事也詞つかひなとよろしく見ゆれは右まさると申侍へし

千二百五十二番

左　勝　宮内卿

から衣うちぬるほとの夢路にも人にうらみをむすふ成けり

右　家長

さ夜衣かさぬる事のなきてのみ涙に袖のくちやはてなん

左歌させるとかなくみえ侍に夢路と申詞かよふ行なとよりたる詞なくてはたゝ夢とはかりよまれても侍ぬへくやさきにも此よし申侍にき但あまりの事にこそ此御歌合にもたひ〳〵見え侍とほの〳〵おとろかし申侍るはかりなり夢路の歌さきにくはしくしるし申てき右歌はさ夜衣かさぬる事のなきてのみとよまれたるさきにも申侍にき腰句のなきてのみと侍上句の詞によらは無といふ心下の泪によらは音なくとよめりさきと古物かたりにと侍はとかく申かたし歌合は物語なとのうたはにるへくも侍られはなきてのみの詞いかゝと聞え侍れは左勝と可申歟

千二百五十三番

左　持　讃岐

くもるさへうれしかるへき空ならは涙の雨もいとはさらまし

右　三宮

うとかりしもろこし船もよるはかり袖のみなとをあらふ白浪

左歌はさきの五十一番の右歌に申あけ侍ぬるゝもろさゝへの歌に聞え侍ぬ右歌伊勢物語に「おもほえす袖に港のさはくかなもろこし船もよせつはかりに」と侍歌の上下句をとりちかへられて侍なりしかれと詞つかひなとあしからねはさて侍なん左の歌も一ふしは侍れと猶右歌下の句の袖のみなとをあらふしら浪とふるまはれて侍は勝侍るへし

千二百五十四番

左　　　　　　　　　　　　小　侍　従

待人もとふの菅こもとはゝこそなゝふをあけてぬともしられめ

右　勝　　　　　　　　　　内　大　臣

詠れは心さへこそうき雲やそのいにしへのゆふくれのそら

左歌は「みちのくのとふの菅こもなゝふには君をねさせてみふに我ねん」と申歌にてよまれたるか上句にとふとよみて下句になゝふとよめるやまひには侍らすや又とふのすかこもとはゝとそへられたるは此こもならねともその證は定めてかんかへられてそよまれて侍らん右歌は源氏物語に「君もさはあはれをかはせ人しれす我身にしむる秋の夕くれ」と侍歌の心にやあしくも侍らす左は病侍は負侍へし

千二百五十五番

左　　　　　　　　　　　　隆　信　朝　臣

明ぬとてはかなく忍ふなこり哉あふとしもなき夢の契を

右　勝　　　　　　　　　　忠　良　卿

侍ゝし比ならぬにし夕暮はまたれぬ時も猶またれけり

左歌は上にはかなくとよみて下に逢とこもなきと侍れは病なり右はかゝる詞つかひの歌も侍うへに左病侍れはうたかひなき右勝也

千二百五十六番

左　　　　　　　　　　　　有　家　朝　臣

たれもみなうきをはいとふことはりなしらすはこそは人を恨め

右　勝　　　　　　　　　　雅・宗　朝

あさゆふになれ行君かおもかけはつらき心の外にやあるらん

左歌はことはりはきこえたれと詞くたけてや侍らん右歌は風情よろしく侍れは爲勝

千二百五十七番

左　　　　　　　　　　　　保　季　朝　臣

つれなさは猶かはらてや山しなの音羽の山の音にたつらん

右　勝　　　　　　　　　　通　光　卿

逢事は夢にのみこそならひきてうつゝともなき今夜也けれ

左歌は「山科のをとはの山の音にたに人のしるへを我戀めかも」是は山しなのをとはの山とあるまゝにつゝけて音にたにとそへたり和泉式部か歌は歸るさなまの心みよかくなからよもたゝにてはやましなとそへたり此左歌はつれなさはなをかはらてや山しなのと侍れはいはれぬつゝきにや右はさるふし侍られは爲勝なり

千二百五十八番

左　持　　　　　　　　　　良　平

あひみても名殘をしまのあま人はけさのおきにそ袖ぬらしつる

右　　　　　　　　　　　　釋　阿

あやなしや戀すてふ名は立田河袖をそくゝるくれなゐの涙

左歌は「松島やをしまか磯にあさりせし蜑の袖こそかくはぬれしか」と後拾遺の歌に侍り是にて後朝の心をよまれて今朝おきにそ袖ぬらすなとそへられて侍り右の歌は「千早振神代もきかすたつた川から紅に水くゝるとは」

これは業平が歌也此歌をこそみそへて侍めりあやなくてまたきなき名の立田川渡られてやまんものならなくに」と申歌をとり合てたくみに戀のうたをつくりいたせり左歌もよろしく見侍ればかちまけ申定かたし

千二百五十九番

左勝　具親

おきてわかるゝ涙袖にしほれなきものゝみに道芝の露

右　俊成卿女

思ひ出てなきこそわたれ秋風に契りし空の初かりのこゑ

左歌は「あかすして別るゝなみたさきにそふ水增れとや下はみゆらん」これは仁和のみかどみこにおはしましける時にふるのたき御らんして歸り給ひけるに遍昭法師かよめるなりわかるゝ涙たきにそふなみ袖にそふとよみ水まさるとや下はみゆらんなをなをしゝわかれ道芝の露とよみうつしたることの外に物あさくや右歌は「思ひ出て戀しき時は初かりのなきてわたると人にしらすや」これはしのひにかたらへる人の家のあたりをまかるおりに鴈のなくをきゝて黒主がよめるなり左は猶しのゝめいかゝときこゆれと右は本歌と心も詞たがはぬやうに侍仍爲負（勝イ）

千二百六十番

左　顯昭

さきの世の契ありけりとはかりもみゆるほとなることのはも哉

右勝　丹後

あひみても心のはるゝひまそなき歸る空（雲イ）には打時雨つゝ

左歌させるめつらしきふしはあらねとも戀の心は侍めり右歌は後朝の心さも侍りぬへし勝と可申也

千二百六十一番

左勝　女房

（續古今）うつゝこそぬるよひ〳〵もかたからめそなたにゆるせ夢の關守

右　定家朝臣

（續拾遺同集入）（新後拾）おもひ出よたかきぬ〳〵の曉もわかまた忍ふ月そみゆらん

左歌は「人しれぬ吾通路のせきもりはよひ〳〵ことに打もねなゝむ」と侍歌と「あかでこそ思はん中に別なめそなたに後の忘れかたみに」と侍歌とをふたつをとりてあはせられてめでたくこそ侍れ誠庸才はけむとも及へからす俗骨くたく共かなふへからすこそみえ侍れ右歌は「しのゝめのほがら〳〵と明行は己がきぬ〳〵なるそ悲しき」と申歌にわかまたしのふ月そみゆらんとによみかへられて侍くと秀逸にはみえ侍らぬうへに月の字がさなりて侍りあかつきとよみならはしたればきゝよからすや仍以左爲勝

千二百六十二番

左　大臣

くらしつる日はすかのねのすか枕かはしてもなをつきぬよは哉

右勝　通具朝臣

今こんと契し事は夢ながらみし夜に似たるあり明の空

左歌は「待くらす日は菅のねにおもほえてあふよしもなとはのなからん」と申歌にすかまくらかはされて

たよりなかしくこそとりなされて侍ゐれまねひ歌にかや
うに侍へきなりかはしてもなをつきぬ夜半かなと侍すか
枕と尤よまるへく侍けり右歌は今こんといひしはかりと
申歌にとりかゝるへくはおなしくはあり明の月とともめ
られ侍る空もひかことならねと二にとらはの事に侍りか
やうの事は人のこのみ／＼侍れと存やうな申侍なりされ
と歌姿あしからねは右歌可勝也

千二百六十三番

左　　　　前　權　僧　正

我袖にやとるならひのかなしきはぬるゝかほなる夜はの月かけ

右　勝　　　　家　隆　朝　臣

清見かた我かよひこし關なれやうちぬる人も涙のよそ／＼

左歌さきにも申侍やとる月さへぬるゝかほなるに侍歌の
かみのめつらしきやうに侍にこそ右歌伊勢物かたりの歌
に「人しれぬわか通ひちのせき守はよひ／＼ことにうち
もねなゝん」と侍歌につきて通路のせきもりを清見か關
になしてうちぬる人も涙のよる／＼とよまれてめつらし
く侍れは勝と可申

千二百六十四番

左　持　　　　公　繼　卿

あひなくも時雨の音のつらき哉待人のこぬ夜はのね覺は

右　　　　雅　經

返してもむなしき床にしほる哉恨はてつるよはのさ衣

左歌にことはりさもときこえてよろしく見給るに初句の
あひなくもと侍おほつかなく侍つれにはあやなくもとこ
そよみ侍ゐれもしひかゝきにや侍らん規子内親王野の宮
歌合に有忠か女郎花をよめる歌「くらふ山麓の野への女
郎花露の下よりうつしつる哉」とよめるを源順か判申て
いはく有忠かさか野をすきてくらふ山まてもとめありき
けんもあひなしと詞にこそかきて侍ゐれそれも又あやな
しをかきたかへて侍しやらん又あちきなしとかける本も
侍ゐりとにかくにおほつかなく侍り右歌にさせることか見
え侍らすされと左かきたかへを承て勝負を（承ほと右勝と可申歟イ）は可申侍りひ
かゝきをおさへてまくへしとうたへ申事は左右相わかれ
てはしたなく勝負あらそふ時の事に侍り

千二百六十五番

左　　　　公　經　卿

新古今　つく／＼と思ひあかしの浦千鳥涙のまくらになく／＼そきく

右　勝　　　　寂　蓮

たか里の露をは袖にはらふらんよもきのもとは風にまかせて

左歌なみの枕になく／＼そ聞と侍るは人聞事を千鳥のな
くにそへられて侍るか又千鳥の鳴にはあらて思ひあかし
の浦千鳥をあはれにたへすして人のなく／＼聞と侍にも
や覺束なく侍右歌は源氏のよもきふのまきにたつねても
我こそとはめみちもなくふかきよもきのもとの心はと侍
歌の心か本歌にふかき蓬のもとの心と侍れは如何にと申
にに及ひ侍らねと蓬のもとは風にまかせてと侍つゝきい
かゝとこそおほえ侍れさりなからも左の涙の枕に流〻そ

きくと侍は千鳥にもきく人にも通ひて如何と覺え侍れは
右の蓬の本の露は分行袖もしおれ増るへくや

千二百六十六番

左　　　　　　　　　季　能　卿

あひみても後つらからんうき名をはとめぬ命にかへんとそ思ふ

右　勝　　　　　　　家　長

うちしほれ露のみふかき思草霜にしられて年はへにけり

左歌はつれにはあふに命をかふとこそ讀ならはして侍れ「命やは何そは露のあた物をあふにしかへは惜からなくに」「人しれすあふをまつまに戀しなは何にかへたる命とか言ん」かやうによめるに此左歌は命にかへんともいはすしてあはれ事はかしこき事にて有を後につらからんうきなのとまらんことを命にかへんとおもはれんはいかゝはせんとめぬいのちにかへんとよまれたる詞のつゝきの心得られぬいかゝ右歌は露のみふかきおもひ草にて霜かるゝ共なくて年ふる心よろしく侍り左の命にかへんの一すちならぬにはかち侍りなむ

千二百六十七番

左　勝　　　　　　　宮　内　卿

とへかしな時雨る袖の色に出て人の心の秋になるみを

右　　　　　　　　　三　宮

心こそ一かたならすまとひぬれつりするあまのうけならね共

左歌さることゝみえ侍り右歌は「いせの海に釣するあまのうけなれや心一つにさためかねつる」と侍歌にあまりにたかはすや侍らん本末の詞のとりちかへられて侍はかりにこそこれは左歌かち侍へき也

千二百六十八番

左　勝　　　　　　　讃　岐

なみた川せきやるかたやまかの浦みるめは末もたのみなけれは

右　　　　　　　　　内　大　臣

山しろのこまのうりふの世中やならしはてゝ人のつれなき

左歌はふるき歌ふたつをとり合てよまれて侍にや「早き瀬にみるめおひせは我袖の涙の川にうへまし物を」「みるめこそあふみの海にかたからめ吹たにかよへまかの浦風」かやうの心はへともに侍歟右歌は「山城のこまのわたりのうりつくりとなりかくなりなる心哉」とよめる歌の心にてこまのうりふの世中やなとおかしくよみなされて侍なるへし左はいますこし歌合の歌にはかち侍なん

千二百六十九番

左　　　　　　　　　小　侍　従

たゝもせしなかめなれ共おりからに忍ふも又そくるしかりける

右　勝　　　　　　　忠　良　卿

身のうきは人のつらさをなる[illegible]にて涙の袖は秋なりけり

左歌たゝもせしなかめはつれの事なれは忍ふる戀のおりのなかめくるしからん事は申くらふへきにあらすや右歌は上下句共にたゝうちあるさまの事に侍らすことの外にことにこたかくみえ侍りまさると申侍へし

千二百七十番

左　持　隆信朝臣

[illegible]ははかなき夢のはさめかにみるにつけても袖のぬるらん

右　雅宗卿

續拾遺
いつまてか思ひみたれてすくすへきつれなき人を忍ふもちすり

左歌させる科見え侍らす右歌は河原左大臣の歌に「みちのくの忍ふもちすりたれ故にみたれそめにし我ならなくに」と侍歌の心にてふしくよろしく讀なされて侍れは聞なれたる心ちもつかまつり侍にやともにさせることはとみゆる難も侍らねは持と可申也

千二百七十一番

左　持　有家朝臣

泪しもせきやはあへぬ結ひをく水ももらしの契りたかはゝ

右　通光卿

おひみても過にしかたのつらさをは忘るへしとは思はさりしを

左歌は「なとてかく逢こかたみに成にけん水漏さしと契りし物を」と侍歌の心なからあふこ形見の詞なとはあなかちにとられすとも侍ぬへかりけり水もらさしの契の詞や心よからすきこえ侍らん右歌あしくも侍られと又すくれたる心もみえ侍られは同程と申侍へし

千二百七十二番

左　保季朝臣

袖のうへに心の色はふるけれとさすかにあさゝおもひとはみし

右　勝　釋阿

おもひ出よおすれやしぬるわかさちや後瀬の山と契し物を

左歌袖の上に心の色ふるしと侍にさゝとみえ侍れとなをかゝる涙なとは申さまほしくや右歌は萬葉に「とにかくに人はいふとも若狹ちの後せの山の後もあはん君」と侍歌の腰よりはもをよみうつされなから頭尾の兩句をいみしくこそよみなかれて侍れかやうによしあしも申かたく侍れと勝負申さす侍もをそれふかく侍れは申侍なり左歌あしくも侍られとなを右はつよく覺侍れは勝と定申

千二百七十三番

左　勝　夏　平

露の身の其曉にきえすしてたゆる恨にむすほゝれつゝ

右　後成卿女

侍とたに人はわするゝさ莚にいくよかさねつ袖のかたしき

左歌うちとけての後につらからん心くるしさもおほえ侍りぬへし右歌は「さむしろに衣片しき今夜もや我を待らん宇治の橋姬」と侍る歌につきて宇治のはし姬といふその名をはかくしてまつとたに人はわするゝさむしろなとはをかしく見給ふるにむすふ句の袖のかたしきはいかゝ侍らん本歌は衣かたしきこよひもやとよみかけて侍ればこそきゝにくからね此袖のかたしきはをよはぬこゝろにかたふかれ侍よりて左爲勝

千二百七十四番

左　持　具親

いつまてとこぬよを月にかこちつゝぬれても袖をまた忍ふらん

右　丹後

くやしくそ磯邊の涙の打出てけふはかひなきうらみのみする

左右歌上下句の心詞ともにおかしくよみくたされて侍れはかつまくと申きり侍らんもをろかなる心の底もあらはれぬへしおの〳〵二首の歌かされてなかめ合てかちまけは定侍ぬへし

千二百七十五番

左　顯昭

あたに吹風にはいかゝちらすへきうきたのもりの秋のことのは

右　越前

かゝれとはかされさりしをさよ衣あなあやにくの袖のけしきや

右歌は顯輔卿の歌合に「さらぬたに秋の心に耐ぬ身をあなあやにくの月のけしきや」と季通朝臣讀るを基俊か判詞に一はしの興あれとあまりの心うすしとことはりて侍り月のけしきと侍るはいかにそや聞え侍にこの袖のけしきこそあらめとおほえ侍かな左歌はいかさまにもやつからおとりて侍れはひきちから侍らさるをや

千五百番歌合巻第十八　戀三　判同前

千二百七十六番

左持　女房

濱ひさし久しくもみぬ君なれや逢よをなみの涙まなけれは

右　通具朝臣

草のはらとへはしら玉とれはけぬはかなの人の露のかことや

左歌は萬葉に「涙まよりみゆる小島のはまひさき久しくなりぬ君にあはすして」と侍歌につかは濱ひさきとよみ侍へきを伊勢物語もしは雜藝集なとに或は濱ひさしとかける本の侍につきてはまひさしともよむ事の侍にひとへに萬葉を本として見ゆるこしまのはまひさきとよみつゝけ侍らんときは左右にをよひ侍らすたゝはまひさし久しくとはかりつゝけられんときははまひさしにても苦し見侍らましはまひさきにてもはまひさしにてもこゝろにまかせ侍へしはまひさしとては今少なひやかにいひくたさるゝ方も侍へし右歌は源氏物かたりには「うき身世にやかてきえなはたつねても草のはらをはとはしとや思ふ」狹衣物かたりには「たつぬへき草の原さへ霜かれてたれにとはまし道芝の露」古き人は歌合の歌には物語の歌をは本歌にもいたし證歌にも用るましと申けれと源氏世繼伊勢大和とて歌讀のみるへき文とうけたまは

れはさ衣も同事歟左歌をかしく侍右詠もよろしく侍れは持と可申歟

千二百七十七番

左　　　　　　　　　　左　大　臣

新古今
身にそへるその面かけも消なゝん夢なりけりと忘るはかりに

右　　　　　　　　　　家　隆　朝　臣

うら風や今夜も松にふけにけりたのめぬ涙の音はかりして

左は身にそへるおもかけきえなは夢とおもひて忘んと侍さもと覺侍右歌は浦風やこよひも松にふけにけりと侍はいかによまれて侍にかふけにけりと申詞はさ夜ふけなと申は夜のふかくなる心なり天つ風ふけゐのうらにゐるたつとよみ侍は風のふく心なり所の名にも吹と書てそふけと讀侍此歌はうら風やこよひも松にふけにけりと侍は風ならはふきにけりと心えへきにたのめぬ涙の音はかりしてと侍は風はふかす聞え侍なり大かた年老ほれてわつかにみたる事も覺す侍れはやすく心えへき歌もひかさまにおほえ侍れはよろつのこと薄きこほりをふむこゝちのみつかまつれはおもひさたむへきかたも侍らすいかにも各はからひ申されんよろしかるへき歟

千二百七十八番

左　　　　　　　　　　前　權　僧　正

ね覺する我手枕の秋の露は春もなきけりいつもおきけり

右　　　　　　　　　　雅　　　經

おもひかねつれなき中にまつ事はくらせるよひの夢の通路

左歌上句にはね覺の秋の露は春もおきけりと侍るに秋のみならすとはきこえ侍に又いつもなきけりと侍こそおもひかたく侍れ第五句侍へくは春もなきけりと侍らすとも聞え侍りなんと可申に想につけ別につけてたしかに申なく事も侍らすあしからすや侍らん右歌こしの句侍ことはと侍そあまりにたゝ詞に侍れと下句なとよろしく侍めり勝負はおろかなる心難及侍めりまかきのもとのかやくきあまつ空の雲にかけりかたし井の内の蛙わたつ海の涙をしのくにあたはさるにや

千二百七十九番

左　勝　　　　　　　　公　　繼　　卿

逢よさへいまや〳〵と鳥のねを思へはまつに成ぬへきかな

右　　　　　　　　　　寂　　　蓮

夕されは軒の忍ふにさゝかにのいとかゝりける心よはさよ

左はさる事と聞え侍り右は日本紀に衣通姫か歌に「吾脊子かくへきよひなりさゝかにのくものふるまひ兼てしるしも」彼注にさゝかには蜘蛛の別名也といへり又申やうも侍れとこの歌につきてはよしなくや歌のすかたはさゝかにのいと心ほそくきこゆれと左歌はいますこし心ありてみえ侍めれは左勝と申す

千二百八十番

左　勝　　　　　　　　公　　經　　卿

きえかへり風にたゝよふあは雪の哀思ひの行るしらせよ

右　　　　　　　　　　家　　　長

物思へは袖にひかりは有明の月の行ゑをいく夜なかめつ
左歌は我戀はゆくゑもしらすはてもなしといふ歌をおもひてあはれおもひの行ゑしらせよとよまんかために消かへり風にたゝよふあは雪のとをけるつゝき心ふかくこそみえ侍れ右歌もわりなくはよみなされて侍れと袖にひかりはあり明のなと此御歌合にあまた見え侍にやめつらしけなく見え侍れは左勝にや侍らん

千二百八十一番

左　季能卿

なかめやるいこまの山に雲とちて行ゑにまよふ雨の夕くれ

右勝　三宮

おもひわひうちぬるひまのかたけれは夢もよかるゝ床の上哉

左歌は「君かあたり見つゝをゝらん生駒山雲なかくしそ雨はふるとも」と侍歌を思はれて侍れと下句の「雲なかくしそ雨は降とも」と侍るは唯ありとみえ侍り行ゑにまよふ雨のゆふくれはよしあるさまにて歌めきなからも右歌はさきにいたし申つるうちぬるなかに行かよふ夢のたゝちと申す歌のふるまいにこそ夢も夜かるゝ床のうへなとよろしく聞え侍れは勝と申侍にや

千二百八十二番

左　宮内卿

いとせめて思ひいれたるなけき哉うき身ならては恨やはする

右勝　内大臣

戀しなんいつかたへとていきのをのたえん命の名こそ惜けれ

左歌うらみやはすると侍もあしくゝ侍られとうらみやはせんと侍はいますこしいひきらぬさまにてまさり侍なんやむけに申事もなきにはかやうにふしくをむしり侍もめさましきさまにて侍歟右歌いつかたへとていきのをのたへん命なとさもときこへ侍れは仍而勝と申侍へし

千二百八十三番

左　讃岐

おもひねの心の外にさめにけり夢のうちにも夢としられは

右勝　忠良卿

續後拾 跡たえぬたれにとはましみちのくの思ひ忍ふのおくの通路

左歌夢の中の夢つねにみゆる事にてめおとろかすへきふしもあらすや右歌は詞きらくゝ敷てありつきふるまはれて侍れは勝とこそは申侍らめ

千三百八十四番

左　小侍従

つらさをは恨ぬものを逢事のあれはそかゝる心をもみる

右勝　雅宗卿

ひとりねの床にかたしく我袖にあふうれしさをいつかつゝまん

左歌は天德四年歌合に朝忠卿か戀歌に「あふことの絶てしなくは中々に人をも身をも恨みさらまし」と侍歌の心を出すや侍らん右歌は「嬉しさをむかしは袖につゝみけり今夜は身にもあまりぬる哉」と申歌の心にてこの心つれにみえ侍れと此歌はよみおほせられて侍は勝侍へし

千二百八十五番

左 勝　　隆信朝臣

いまはたゝ思ひたえたる夜な／＼の契りもしらぬまつの風哉

右　　通光卿

今そしるつらしと聞し鳥の音はひとりね覺に待れけり共

左歌は思へる所侍めりをはりの松の風かなと侍を庭の松風と侍らはいますこし聞よく侍なんや人の心々か右歌はよろしく侍に後拾遺に井手の尼か讀て侍かとよ「いにしへはつらく聞えし鳥の音のうれしきさへそ物は悲しき」と侍歌に下句よみかへられたれとおほ心はひとつすちにや左勝にや

千二百八十六番

左　　有家朝臣

これを見はおはれもなとか懸さらんぬるゝ貌なる袖の月かけ

右 勝　　釋阿

夢にたにあふせありやと待へきに枕のみうく涙川哉

左歌はひとつとりはなちて見侍はあしからぬに下句のさき／＼も申侍伊勢か歌の腰より下三句をとりてむねとのきもにせられて侍るうへに又右歌はしめをはりあひかなひてことに神妙に見給侍れは論なき勝にこそ侍らめ

千二百八十七番

左　　保季朝臣

いくかへりなゝふのちりをはらふらん待夜かさなるとふの菅薦

右 勝　　俊成卿女

みる程そ忍はしなくさむ歎つゝねぬよの空の有明の月

左歌さきにも申つるとふのすかこもの歌に侍り上に七ふのちりとをかれて末にとふのすかこもと侍は右歌ことの外のきす侍すは左歌可勝に右ことの外にたちまさりてこそみえ侍れ

千二百八十八番

左　　良平

いまはさは心にしけれ忘草うきをはたへてしのふ物かは

右 勝　　丹後

思ひかね宇治の橋姫事とはん待夜の袖はかくやぬれしと

左歌につきて忘草と忍草とひとつ草の名なりと申事侍り萱草といひて萬葉にはわすれくさとよめりそのうへに順か和名には又忘憂草と侍りうれへをわするゝと申心なり又垣衣とかきてしのふ草とよめり垣もしは屋のうへなとに生たる苔のたくひなりと侍かは軒のしのふなとよむにこそされはこれは萱草としのふ草とおなし事にはよも侍らし軒のしのふなとを忘草と申ことの侍にこそ伊勢物語にある御つほねより忘草を忍草といふやとていたされたりけれは男給りて「わすれくさ生るのへとはみるらめとこはしのふなり後もたのまん」と申せりける此返事にひとつといふ事は出きて侍けるにやかのいたされたりける忘草そおほつかなく侍軒のしのふにて侍りけるかといふへきなり又わすれ草をは住よしのきしにもよめりすみよしとあまはいふともなかゐすな人わすれ草きしにおふ也これは忍草にてそあるらんと申めりある文にわすれ草し

のふ草とは同物とはみたり本草にかゝれて侍はまことかと見侍り忘かれと又くはしき事みえず本草には萱草のほか忘れ草侍らずそれは別々の物とそおかしく侍めるされは忘草忍草ひとつといふ事もこは忘のふなりといふ歌よりはしまりたるかされは刺てうたかひ申侍へからす右歌はさむしろに衣片しきの歌をおかしくよみなされたれはすこしきら〳〵しくや侍らんまさると申侍なり

千二百八十九番

左　　　　　具　親

わすれすよまれにかよひし一夜たに我たうらみし人や契し

右勝　　　　　越　前

侍ほとにふけぬる夏のよはも猶おもひたゆれはあかしかねけり

左歌上句はことありけに聞へ侍に下句いひおほせられても覺侍らすいかゝ右歌いますこしおもふ所いひあらはされて侍らん爲勝

千二百九十番

左　　　　　顯　昭

なたさりの玉章なたに（ことのはなたにイ）みましやはうきな恨ぬ心ならずは

右勝　　　　　定家朝臣

わすれねよこれは限のとはかりの（にイ）人つてならぬ思出は（もイなイ）うし

左歌させるをかしきふしも聞え侍らすくれてめつらしき心も見えすや右歌道雅卿忘のひて物申ける人にえあはさりければ「今は唯おもひたえなんとはかりを人つてならていふよしもかな」と恨みけん袖のなみたを我身にかけてつくされんことのはなにかは事もをろかに侍へきたた日にまかすはかりにては心にしみ身にとまる程のなさけはよにありかたくや左歌はいとおさし右勝と可申

千二百九十一番

左勝　　　　　女　房

數々に思ふ心は大淀のまつなうらむる涙のたとかな

右　　　　　家隆朝臣

あひにあひて物思ふ比の夕くれになくやさ月の山郭公

左歌は伊勢物かたりにむかし伊勢國なる女にえあはぬおとこいみしう恨てとなりのくにへいきけれは女「大淀のまつはつらくもあらなくに恨てのみもかへる浪哉」とよめる歌の心をおもひて數々におもふ心はおほよとのとつゝきいしみうこそよまれてきこえ侍れ右歌は五句なから面白くそよみつゝけられて侍めれあひにあひて物思ころのと侍二句は伊勢か歌なり夕暮にといふ腰句は齋宮女御の「さらてたにあやしき程の夕暮に」と侍歌なくやさ月は萬葉の「ほとゝきす鳴や五月の短夜」と侍る歌山ほとゝきすとはてたるは躬恒か歌にくるゝかとみれは明ぬる夏のよをあかすやとなく山ほとゝきす已上新歌とて一文字も我詞も侍らぬうへにさせる事侍らすやされは以左可勝也古今に「夏山に鳴時鳥心あらは物おもふ我に聲なきかせそ」と申歌の心にこそ堂舍高危尾有松と申詩を法花經の四文字に久少三文字を讀と感しけるには不可似歟然を爲負

千二百九十二番

左 勝　　左大臣

新古今 めくりあはん限はいつとしらね共月なへたてそ空のうき雲

右　　雅經

新後〃 山のはに入まて月をなかむともしらてや人の有明の空

左歌は「忘るなよほとは雲ゐになりぬとも空行月のめくりあふ迄」と申歌の心にかよひてや詞は伊勢物語にみえたり右は昔より有明月とのみこそよみつゝけて侍るめれ上句に入まて月をとよみて後に有明の空といへるはひか事ならねと古やうにはたかひてや第二句を入まてわれか共入まて今夜共ありて第五句には有明の月とやふるき人はよみ侍らまし後拾遺に「年もへぬ長月のよの月影の有明方のそらをこひつゝ」と侍はさるていの歌にて詞はなれてもきこえ侍らぬにや但左歌上下韵字に聲韵病そ侍れとそれは同病なれとゝかなきやうに侍れはまけぬ歌と同やうなるへし右歌さまてのとか侍られはなを以左爲勝

千二百九十三番

左 持　　前權僧正

とにかくにうき數かくや我ならんしちのはしかき鴫の羽かき

右　　寂蓮

物思へは月たにやとる袖のうへをとはてや人の有明の空

左歌のはしかき鴫の羽かきにつきて二の義侍へし一には古今の「曉の鴫のはねかき百はかき君かこぬ夜は我そ數かく」此歌につきて「曉のしちのはしかき百よかき君かこぬ夜は我そ數かく」と申歌侍りそれは別の歌にあらす曉の鴫をしちといひなし羽かきをはしかきといひもゝはかきをもゝ夜かきとあひにたる詞につきてかきなしたる事かさてしちのうへにもゝよれよといふもの語をもつくり出してしちのはしかき百夜數かくとはいへるなるへしと申此義は別にしちのはしかきといふ事も歌にもあるましき心なるへし一には古今に鴫のはねかきの歌あるにてもしちのはしかきといふ事あらむにかたかるへからすやまことに歌のならひはさせる日本紀なとにみえぬ事も古歌ひとついてぬれはそれを本文にてやかてよみつたふる事おほかりいかさまにてもしちのはしかきといふ事をよの人よみたちなん後ははしめてすつへきにあらす古き歌の論義と申物は一條院時殿上人に仰て歌論義をせられ侍ける時問答抄とて四條大納言公任卿あまたのおほつかなきことをかゝれたる内にこの事も入て侍めれは此左の歌の様に二のことによまれんもとか侍へからすそれにとりては鴫の羽かきのやうに人のこぬ夜の數をしけくかく事もあり又しちのうへにもゝ夜れてもゝ夜かきとよまる人もあれはそれを我身にふたつをかされてよまれんはおもひもよらぬ風情にて侍れはとかく可申に侍らす但作者のおもむきはさやは侍らんいま少しふかくもよろしくも侍へきをひかさまに申さはおこかましかるへしかしこき人はいかによまれて侍そなとしるして手をいたさぬ事にてそ侍へき右歌はまへの歌のやうに月と有明の空とは

なれはなれに侍れとこれは上に月とをきてはすゑに空なくてはあしかりぬへく侍れはちからをよはす左歌もあま（心にまかせ侍れとめつらしき風情に侍は可勝也イ）りに任意侍は持歟

千二百九十四番

左　勝　公　継　卿

いもかこと思ひくらせは山のはにまたれてこそは月は出けれ

右　家　長

いまはたゝむねはいさり火床は海恨てのみも年はふるかな

左歌まちくらす人につけてたかはす出たる月をそれみたる心さもあることゝ覚侍り右歌は「胸はふし袖はきよみか関なれやけふりも涙も立ぬ日そなき」といへる中比の歌の心さまをまねはれたれとゆく／＼とよみなかしたるすかたはあひ似すや侍らん左歌はいますこしなひやかにて勝共可申歟

千二百九十五番

左　持　公　継　卿

なけきわひみしは夢そと忍ふれは忘侘ぬる中のたまくら

右　三　宮

なをたのむ我心をそうらむへきこれにかきれる空たのめかは

左歌はあしからす侍にはしめの句に歎侘と侍に又下句にわすれわひぬるといへるはさりかたき病に侍右詠もよろしく侍に初句なほたのむとをかれて末の句にそらたのめかはと侍に又病累うたかひなく侍り同つかひしもいかに侍ける事にか持にこそ侍めれくらへ馬そ持にのるは馬心にまかせれはさすかにわつらはしく侍なれは心得たるとちいひあはせてそとりくみてわたり侍なる歌合の勝負は持をこのむとも判者の心もさりかたくてはいかなるへしともはからひにくゝ侍にかやうにおなしさまの病の侍らんのみそ持と定可申

千二百九十六番

左　持　季　能　卿

わすれても露の情や思ふらんよしや草はといひしはかりに

右　内　大　臣

わすれ草おふるのへをは尋ぬれと昔忍ふそなをも露けき

左歌おとこあるこたちのみつほれのまへをとをるになにをあたにかおもひけんよしや草葉のならむさかみんといふを「罪もなき人をうけへは忘草をのか上にそおふといふなる」と申歌のことにや右歌さきに申侍つる歌に忘草おふるのへとはみるらめと申歌の事にこそ左右共に伊勢物語の忘草の事なれは露はかりのかはりめもみへかたかるへし

千二百九十七番

左　持　宮　内　卿

（新後撰）つれなくも猶なからへて思ふ哉うき名をおしむ心はかりに

右　忠　良　卿

戀わふる袖のみなとの涙枕いく夜うきねの數つもるらん

左歌物にもそへすなすらふる事もなくてたゝありによまれたり心うちうこきて詞ほかにあらはるとはかゝる歌の

事か右歌袖のみなとの事さきにも申侍つれともなみ枕いく夜うきれの數つもるらんなとなかしく聞ゆれはひとしめて持とはからひ申つれの事也

千二百九十八番

左　持　讃　岐

契なきしうら吹風はさもあらて袖に涙そやむ時もなき

右　釋　宗　卿

あひみての後さへ物な思ふかな人の心のしらまほしさに

左歌は「われも思ふ人もわするなありそ海の浦吹かせのやむ時もなく」と六帖に侍ればにや人みな口つけて侍な萬葉には初二句は此定にて腰の句はゝおほなはに浦吹風のやむ時なくあり〳〵と侍古歌の終句いひにくきな誦直されたりけるに左歌い終意ないかさまにもうら吹風につきてはなかしくよみなされたり右歌は「あひみての後こそ戀は増りけれつれなき人な今はうらみし」と侍後拾遺の歌なやうかへて人の心のしらまほしからん事さも侍へし左は詞なかさり右はおもふ心なのへられたり持と可申

千二百九十九番

左　持　小　侍　從

なからふる身のつれなさな同し世にありて聞る〻事のみそうき

右　通　光　卿

さりともとたのむ心のふかけれはなな此暮もまつの下水

左歌恨の心はふかけれと下句の詞あら〻かにや右歌いますこしうためきてきこえ侍にむすひ詞の松の下水やにはかに出たる心ち侍らんたかひにえぬ所えたる所も侍れはひとしめて同科とことはり申へけれと左はさしたるとか侍らす松の下水はいか〻ときこえ侍れは左勝と可申

千三百番

左　隆　信　朝　臣

わすれしの露のなさけな忍草名なかふるまて老にける哉

右　勝　釋　阿

うつゝには思たえ行逢事ないかにみえつるゆめちなるらん

左歌上句はさることゝきこえ侍な忍草名なかふるまてとは忍草な忘草といふ迄とにや心は侍れと詞にはくらくや侍らん右歌こゝはとみゆるふしもなくこのましき姿にみえ侍はおろかなる心のなよふ所まさると申侍へし

千三百一番

左　勝　有　家　朝　臣

うしとおもひ戀しと思ひ一かたにかはく時なき袖のうへかな

右　俊　成　卿　女

めのまへにかはる物そとみても猶よゝの契のはてそ忘れぬ

左歌は風情たくみに露詞あさやかに侍り右歌はこん世にもはやなりな〻んめの前につれなき人なむかしとおもはんといふ歌の心をは思はれたれと末句たしかにも聞えす。歌合の歌には左やまさり侍らん

千三百二番

左　勝　保　季　朝　臣

忍ひあへぬ名なや煙にたてつらんあまのもしほ火下こかれても

右　　　　　　　　　　　　　　　丹　　　後

もらさしと形見につゝむ人めにも涙はえこそとゝめさりけれ

左歌上下あひかなひてよろしく聞え侍めり右歌上句はさる事と見給ふるに下句ふるめき過てや侍らん以左爲勝

千三百三番

左　勝　　　　　　　　　　　　　頁　　　平

おもはすな重ねし袖のそのまゝになけきのつまとならん物とは

右　　　　　　　　　　　　　　　越　　　前

廬のはのかれ行みれはつのくにのこやあきはつるしるし成らん

右歌拾遺集に能宣か歌にことの葉も宿にはあへすかれにけりこやあきはつるしるしなる覽己に撰集の古歌也左させるとかみえ侍らす勝と可申

千三百四番

左　持　　　　　　　　　　　　　具　　　親

いとはるゝ身にそへとしも思はしを心ならぬやきみかおもかけ

右　　　　　　　　　　　　　　　定　家　朝　臣

はてはたゝあまのかるもを宿りにて枕さたむるよゐ／＼そなき

左歌よろしくよまれて侍めり右歌さしていつれの歌の心とは思ひより侍らねと大かたのやさしきさまの歌共こそおもひあはせられ侍れ「幾世しもあらし我身をなそもかくあまのかるもに思ひ亂るゝ」「戀わひぬ蜑のかるもにやとるてふわれから身をもくたきつる哉」「白浪のよするなきさに世をすくす蜑の子なれは宿も定めす」なと侍歌ともにあくかるゝ心をあまのすまひになしかへされて侍にこそ左歌まことにとゝのほり右は艶をこのめり花實をたくらふるにやまと歌は尤花を先とすへきにこそ右捨かたかるへし准て同とすへし

千三百五番

左　　　　　　　　　　　　　　　顯　　　昭

待夜半の明行かれはこぬ人のつらさをさへそおとろかしける

右　勝　　　　　　　　　　　　　通　具　朝　臣

まつらんと思ひし物を秋風のひとり身にしむ夕ま暮哉

左歌明行鐘のこぬ人のつらさをおとろかすよりも右歌夕くれのかせのひとり身にしむは時こそかはれと恨の心は事のほかにまさり侍へき也

千三百六番

左　勝　　　　　　　　　　　　　女　　　房

つれなくはたゝことうらにたてけふり我すむ方は月そさやけき

右　　　　　　　　　　　　　　　雅　　　經

物思ふ心ひとつに秋ふけて人をも身をもくすのうら風

左歌は「顯たるゝ我身の方はつれなくてことうらにこそけふり立なれ」これは天王寺の阿闍梨道命か歌に侍りその心とはおほめかれなから上句のことうらにたてけふりと侍るつき／＼しきさま申もおろかに侍に下句の我住かたは月そさやけきと侍本歌はわか身のかたはとこそ侍るに我すむかたはと侍るよみまさられてこそ聞え侍れ在中將か布引の瀧を見てわか家あしやの里へ歸るに日くれてあまのいさり火をみて「はるゝよの星か河への螢かもわ

か住方のあまのたく火か」とよめるおもひ合られてをよはぬ心にもめてたくこそ覺侍れ右歌は上句はいかなる事か侍らんすらんと末ゆかしく侍に人をも身をもくすの」ら風と侍るなを恨の心なからも事たらすも又なへての事にても左にはをよふへくも侍らぬかな

千三百七番

左　持　　左　大　臣

新古今 我なみたもとめて袖にやとれ月さりとて人の影はみえねと

右　　寂　蓮

すまのうらの鹽やくあまの袖は猶ほすもぬるゝも心成らん

左歌上句たくましけにこそよみくたされて侍れ下句もやすらかなるさまなから「戀すれは我身は影と成にけりさりとて人にそはぬ物故」と侍詞つかひ覺て侍り右歌ふるめきたるすかたなからあしくも侍らねはかやうの程をおなしほとゝ可申にや

千三百八番

左　勝　　前　權　僧　正

あらはれてうつろふ色のしるけれは人の心のはなをみるかな

右　　家　長

年月をふる河のへに戀わひぬいつかあひみんふたもとの杉

左歌「色みえてうつろふ物は世中の人の心の花にそ有ける」と小野小町か讀る歌によせて色みえて移ろふ物はと侍をあらはれてうつろふ色のしるけれはとなをされて人の心の花にそ有けるを人の心の花をみるかなとよまれたるも詞も心も共に同しさまには侍歟右歌旋頭歌に「初瀬河ふる川のへに二本ある杉年をへて又もあひみん二本ある杉」といふ歌を思て年月をふる河のへに戀わひぬいつかあひみむ二本の杉と侍はよくとりなされて聞え侍れと下句すきてつよきにや侍らん左歌はゆへありてきこゆれはかちに侍へし

左　　公　繼　卿

戀しさもあまり思へは忘られてその事となく涙落けり

右　勝　　三　宮

さめぬれはあかぬ別の心ちしてわりなき物はうたゝねの夢

左歌上句はよろしく聞え侍に下句は法性寺大相國の月三十三首の歌人々によませ侍しに清輔朝臣か「今よりは更行まてに月はみし其ことゝなく涙おちけり」とよみて侍しかは世人あまねく見侍し歌也同大相國歌合に「つれなしとかつは心をみ山きのこりすもをのゝ音つるゝかな」と女房堀川かよめりしをは判者俊頼朝臣申云此歌さいつころしのひたる人の歌合にみしやうにおほえ侍れは僻事にやよみ合たらはよしかくれの歌とてをしてとりたらはぬしやはなふかんとおほえへきかなとかけりこれをおもふに歌のぬしきかすとも世人思はん事も同事也いかにも勅撰の歌のみならす内々會歌合の歌も可被尋見事歟右歌心詞あひそなへて侍れは勝侍へし

千三百十番

左　　公　經　卿

獨りのみうきふる郷のなにしいては忍ふとたにも人のしれかし

右　勝　　内　大　臣

しのふとも軒の玉水つふ〳〵とありし雨夜の物かたりせよ

左歌後拾遺に「ひとりしてなかむる宿のつまに生る忍とたにも知せてしかな」此歌の心詞にやかよひて侍らん右歌は世俗の目すさみの歌に「雨ふれは軒の玉水つふ〳〵といはゝや物を心ゆく迄」と侍歌に源氏のあま夜の物語なかしゝ讀つかれて侍歟仍右歌まさると申へきにや

千三百十一番

左　　季　能　卿

つらきをも思ひしらすは無物をうらむはかりの身の程もかな

右　勝　　忠　良　卿

うきを思ふなけきの色をそめしより松によふかく風しくる也

左歌さることゝきこえてよろしくきこえ侍めり下句なとよまゝほしくこそ覺侍れ右歌うきをおもふなけきの色をそめしよりなと侍やうありけにも又述懷なとのかたにもよりぬへくや共覺侍り下句の松に夜ふかく風しくるなりと侍松風雨にかよふ心なときこえたやすきさまにもなくや松にと侍るも風しくるなりと侍る詞も戀のかたによせられぬへくやされとも右歌は歌合から侍れはまさると可申

千三百十二番

左　　宮　内　卿

津のくにのみつとないひそ山城のとはぬつらさは身にあまる共

右　勝　　兼　宗　卿

つく〳〵と思ふもかなし逢ぬ夜はいをたにやすくぬるよしも哉

左歌は「君か名も我名もたてし難波なるみつともいふな逢きともいはし」又「つの國のなには思はす山城のとはに逢みん事をのみこそ」此兩首をとり分ていまの歌の上下にをける歟山城のとはにあひみんとよめるは鳥羽ときこゆるにとはぬつらさとあるはすこしかすかにや侍らん右歌は戀の心ひとすちに侍めり可勝侍

千三百十三番

左　　讃　岐

あま雲のよそなからたにいつまてかめにみる程の契り成けん

右　勝　　通　光　卿

かひなしとかへす衣をうらむれはねられぬよはのならひ成けり

左歌は「天雲のよそにも人の成行かさすかにめにはみゆる物から」と申歌の心なるへしいさゝか心はよみつけられて侍る右歌は「いとせめて戀しき時はむは玉の夜の衣を返してそきる」と申歌よりはしめて衣を返してぬれは戀しき人夢にみると申に返すかひなきは戀しさの餘りにいのねられぬならひそとあれはことはりありて聞え侍れは右歌すこふる勝へきにこそ

千三百十四番

左　　小　侍　従

とにかくにおもへと物のかなはねはいける命を歎くはかりそ

右　勝　　釋　阿

いひかよふ道たにたえぬ逢事のなからの橋はさこそくちなめ

左歌あしからねと戀の心はうすくて述懷の歌にもかよひ・侍へきにや右歌は「あふ事を長柄の橋のなからへて戀わたるまに年そへにける」と侍歌によせなからこひの心もつよけれは勝と可申

千三百十五番

左　持　　隆信朝臣

いたつらにあけぬと告る鐘のねはあはぬ夜しもそ悲しかりける

右　　俊成卿女

續古今　うき物とたれかいひけん曉の別のみこそかたみなりけれ

左歌曉のわかれにはむかしより鳥の音をこそよみならはして侍に小一條院の女のもとにて「曉の鐘の聲こそきこゆなれこれを入相と思はましかは」とあそはしたるより鐘の音をはきゝりによむ事に侍に此歌にもあはぬ夜しもそ悲しかりけると侍いみしくや右歌「あかつきはかりうき物はなし」とよめるにつきてそれはなにか悲しからん又もあはさらんには形見にてこそあれとはよまれたる事なれは此左右共にすてかたく侍也

千三百十六番

左　勝　　有家朝臣

夕ま暮賴めぬ物をとはかりにしのひかへせは荻の上かせ

右　　丹後

君こふる涙の色のくれなゐは思ひかへすにかへるものかは

左歌惡くも侍らす右歌は後入道二品親王の百首中に「戀

そめし心はなにの色なれはおもひかへせとかへらさるらん」と侍に心詞違はぬうへに聲韻病さるところなく侍れは左勝也

千三百十七番

左　勝　　保季朝臣

きくもうし何と心にとまるらん思ひたえたる夕くれのかね

右　　越前

心あらはこゝろをかへて思ひしれをのゝしのはら忍ふけしきを

左歌よろしく侍めり右歌は「淺ちふのをのゝしのはら忍とも」と侍歌をよみあけられたるはかりにて差事も侍らねは左爲勝

千三百十八番

左　　良平

恨こし涙はかりを袖にかけていく夜かこひをすまの關守

右　勝　　定家朝臣

かれぬるはさそなためしとなかめてもなくさまなくに霜の下草

左歌上下の詞おしくも侍らねと戀をすまの關守によせてそうらみの涙を袖にかくなとは聞なれてや侍らん右歌はもし源氏物語に「ほのめかす風につけても下荻のなかはは霜に結ほゝれ」なと侍歌の心にやかやうに申へきに侍られと歌のよしあしも聞え侍られはおとろかし申につけて歌のほとはみゆる事にて侍は心にくゝもなり侍也まさり侍へし

千三百十九番

左　　具親

忘られん時しのへとはなけれ共いはねはしらぬならひ計そ

右勝　　通具朝臣

うちはらふおりも有けん床のうらの涙になれたるよはのさ莚

左歌は「わすられん時忍へとそ濱千鳥行衛もしらぬ跡をは止むる」とある心にていはねはしらぬならひにてふみとむる跡のよしなるへし右の歌「わたつ海とあれにし床を今さらにはらはゝ袖やあはとうきなん」といふ心にて涙になれたるよはのさ莚なとやさひたるけしきなれは勝と可申也

千三百廿番

左　　顯昭

つらしとてなにうらみけん契あれはとけゝる物をよはの下ひも

右勝　　家隆朝臣

中々に明たにはてねおきもせすねもせぬよはのむら雨の空

左歌は初逢戀の心にこそ侍れ百首の歌をはなれてよみしむる事きこへかたく侍歟右の歌は「起もせす寢もせて夜るを明しては春の物とてなかめくらしつ」と侍いせ物かたりの詞には男うち物かたらひてかへりきていかゝおもひけんときはやよひのついたち雨そほふるにやりけりとありこれをおもふになかめくらしつとあれは歸りたるつきの日やりたるかさては上句のあけたにはてゝとはいつれのよにか又ねもせぬ夜はの村雨の空と侍るもそのよはおほつかなしこれは歌のことはにあはせておもふはかりなりかゝる歌はあふところたかふ所侍りあなかちにとかもなし又古今の詞にはすこし物語はたかひて侍歟猶左歌に負也

千三百廿一番

左　　女房

白露もまた行ほとにのへにをく時ともわかぬそての上哉

右　　寂蓮

さゆる夜のうきねの霜をうちはらひなくなるをしも我計やは

左歌萬葉に「ひくらしは時となけともわかこふるたをやめ我はさためかねつも」と侍に此上句にはしら露もあけ行ほとそのへにをくとよまれて下にときともわかぬ袖のうへかなと侍すてに萬葉の一言に一篇の五句かさゝれ侍ぬるにこそ牛頭栴檀のかたされ仙人琪樹の一枝とこそ見給へ侍れ右歌は「夜を寒みねさめてきけはをしそなくはらひもあへす霜や置らん」なとよめるうへに我はかりやはなと一ことはくはへられたるはかりにやなくなるをしなともいかゝと聞ゆ勝負をはかるに一日の論にあらす

千三百廿二番

左勝　　左大臣

われとこそなかめなれにし山のはにそれもかたみの有明の月

右　　家長

みせはやな曉つゆのおき別さゝわくるあさの袖のけしきを

左歌上句の我とこそなかめなれにし山のはにゝ侍より承心もてみたちて侍に下句のそれも形見の有明の月と侍た

た一詞に戀の心のふかさもあらはれぬるにこそたけたかく心あまれりなと申はかゝる歌の事に侍歟右歌上句萬葉の歌に「この比の曉露に我宿の萩の下葉は色付に息」下句はいせ物かたりにいりて侍「秋霧にさゝわくるあさの袖よりもあはてこし夜そひち増りける」と申歌の詞をひき合てよくこそいとなまれて侍れとあかつき露にさゝ分る袖もあはれはふかけれとそれもかたみの有明の月になすらへは下にやなり侍らん

千三百廿三番

左　勝　　前　權　僧　正

我なみたよしのゝ河のよしさらはいもせの山の中になかれよ

右　　三　　宮

七夕をわか身のうへになしはてゝ重ねぬ袖にあまの河涙

左歌は「なかれてはいもせの山の中に落る吉野の河のよしや世の中」と侍歌は大方のいもせのなかの戀のありやうをよめる歌にて古今の戀の歌のはてには入て侍とみゆるをおかしくもとりなされて侍かな本歌はよし野の河のよしやと侍にいまのうたは我泪をよそへてよし野の河のよしさらはといひ本歌にはなかれてはいもせの山の中におつると侍を今の詠にいもせの山の中になかれよとなされて侍ゆゝしき心たくみなり木にかたをきさまは郢匠か斧もおよふへからす紙に繪をかゝんには長康か筆もならひかたかるへし右歌は七夕を我身になしてかされぬ袖に天の河をかけられたる風情たゝの人のたましゐ思ひよりかたゝ泪の詞をすてゝあまの河なみとことゝもこもりて侍れと猶左の歌はおかしくや侍らんけたみ詞もよしの河には右はおとり侍へくや

千三百廿四番

左　持　　公　繼　卿

身をしらて人をは何か恨むへきと思へはいとゝなくさめもなし

右　勝　　内　大　臣

いせの蜑のみるめの果よいかならんおふの浦梨なりもならすも

左歌は伊勢物語に男女のもとに一夜はかりにて又もいかすなりけれは女の手あらふ所にぬきすをうちやりてたらひの水にかけのみえけれは身つから「我はかりものおもふ人は又もあらしと思へは水の下にもありけり」とこれにことはやすらかにて心さしのへたる歌にこそ人をはなにかうらむへきとおもへはいとゝなくさめもなしと侍おこかましけれと身を恨てこそ心をもゆかすとなにかうらみんと思てんはむけになくさめもなかるへきにこそ右歌は古今あつまうたの中に伊勢か歌に「おふの浦にかたえさしおほひなるなしのなりもならすもねて語らはん」と侍心にて上にいせのあまのみるめのはてよいかならんと（なからも猶右の歌は心有て聞え侍れは勝と申へしイ）はよくなかれてこそ侍めれとりとりのすかた持と可申也

千三百廿五番

左　持　　公　經　卿

かくまてのつらさにたえて戀しなは思ひ出もなき命成けり

右　　忠　良　卿

戀わたるとたえはかりは現にてみるもはかなき夢の浮橋

左歌は六義の中のたゝことうたなるへしおもふ心にまかせてあなかちに詞をかさらす右歌はなすらへ歌也心詞をあひならへて夢のうきはしとよまんために戀わたるとたえとよみうつゝにてみるもはかなしなとなすらへとをされたるともによろしくたくみによみおほせられぬれはきはめて勝負さためかたき事にて侍りすこしもよみたかふろふしも出き又たえぬ心も侍時はそれにつけてよしあしをも申侍人の心々にまかすへし此左右は共によく侍は持と申侍へし

千三百廿六番

左　勝　　季　能　卿

こんとてもすくるならひは中々に憑めぬ夜はの情成けり

右　　　兼　宗　卿

新勅撰 人こゝろこのはふりしく秋にしあれは泪の河も色かはりけり

左歌させるくせもなくよろしくよまれたり右歌いせ物語に「秋かけて言しなからもあらなくに木葉ふり敷秋にこそ有けれ」と侍をおもひて涙の河も色かはるとよまれて侍りよろしく侍に歌合にはかゝるさまの歌は左歌とか侍は勝もし侍なん共にことなる事なからんにとりては左は歌合のうたすかたにて侍れは勝と可申

千三百廿七番

左　　　宮　内　卿

われからと人なうらみぬ袖のうへもなみたは同し涙なりけり

右　勝　　通　光　卿

形見共つれにしすまはなかめましなれしその夜の有明の月

左歌上句はよろしく見給ふるに下句の千載集の歌にて侍なり藤顯方「うきせにも嬉しきせにもさきにたつなみたは同し泪なりけり」又基俊か歌合の判詞に云古人と心あひ通ふ事は甚興あることに侍れと歌合に尤さるへき事也たとひ文字すこしことなりといへ共おほ心たかへることなくは是をさるへし上の三句下の二句同からむこれをとかむへしといへり己勅撰の歌の下二句尤さるへかりける也右歌心詞ともによろしくて難すへき所侍られは左歌負侍へき也

千三百廿八番

左　勝　　讃　岐

續千載 いそのかみふるのわさ田につなはへて引人あらは物は思はし

右　　　釋　阿

むかしみし人のみいまは戀しきを（にイ）又逢ましき事そかなしき

左歌は萬葉に「いそのかみふるのわさ田のほに出す心のうちにこふる此比」と侍をうかゝひて上句をはよみおかれて下句にひく人あらは物はおもはしとをかしくこそよまれて侍めれ右歌はなにとなく過にしかたの戀しきにいにしへさまになれや世中とよみをける人の心は老もて行まゝにこそ思しられ侍を此詠につけていよ〳〵あはれもまさりむかし忍物おもひのやみいとゝはれせぬ涙をのこひて左右の勝負を思ひ侍に右歌戀しきあふましきかなし

きなとみつまてつゝきぬるは病にあらすとうけ給はれと歌合の時はかしかましうしなゝくや侍らん左作者ふるのわさ田につなけへてなといふによみて又龍の賦にあはれぬるにこそ侍めれ此度斗こ左歌勝の詞をつけ侍ぬ

千三百廿九番

左 勝　小侍従

續古今 たのめつゝこぬ夜をまちしいにしへを忍へしとは思やはせし

右　俊成卿女

新古今 ならひこしたか僞もまたしらて待とせしまに庭のよもきふ

左歌はたのめつゝこぬ夜あまたにとよみをけり古事なおもひ出わか身にしられし古の人のつらさを思合られたるかとをしはからるゝもなかしくや右の歌は花山僧正の歌に「我宿は道もなきまて荒にけりつれなき人を待とせしまに」と侍る歌又源氏に「藤波のうちすきかたくみえつるは松こそ宿のしるしなりけれ」と侍歌ならひにその詞なとかきつゝけたるこそ此歌の心かとは見え侍れとそれはしりかたしいかにもふるきうたをまなはんにとりては柿本詠にはをよふへからすたゝしさり共歌の様をとり侍らは可申になをよはす左歌まさり侍なん

千三百卅番

左　隆信朝臣

戀をのみしつる門田のひたふるに音たふる迄秋はてぬとや

右 勝　丹後

ひとりねの袖にしらるゝ時雨こそ秋しもわかぬ物と見えけれ

左歌戀をのみしつか門田のとつゝけられたるは戀をせきまなとよみ侍やうに戀しつとよまれ侍る近比はさる歌時々見え侍れとむかしは見え侍らぬにやひとへに僻事と申には侍らすふるき歌をかんかへ侍らんためにおとろかし申はかりなり右歌は上下あひかなひてよみおほせられて侍めり古今序に小野小町か歌を申すに艶にして無氣力と侍りつよからぬは女の歌なれはと申せり以右爲勝

千三百卅一番

左 勝　有家朝臣

戀をのみつねに時雨る槙のやのまはらにたたにも音信よかし

右　越前

いかにせんなくさむやとてなかむれは別しよはの有明の空

左歌まきのやのまはらにたたにも音信よかしなとさる事も聞え侍り右歌さきにも申侍るやうに別しよはゝあり明の空と侍らはおなしくは有明の月とよまれ侍れなくはしくよしはさきに申侍ぬ左勝と可申

千三百卅二番

左 勝　保季朝臣

おもひをきていつる涙の行すゑは袖よりやかて道芝のつゆ

右　定家朝臣

ときつ風ふけゐのうらにかよひてもたか爲にとか(かはイ)身をも惜まし

左歌はをかしき風情をよくこそよみくたされて侍めれ右歌は萬葉に「時つかせふけゐのうらにいてゐつゝあかふ命は妹かためこそ」侍歌をおもはれたりけれは俗流をは

なれてみゆるは理りなりけれ共ゑわさと取られて侍はいかゝせん萬葉の歌とろは故實ある事なりちかき世には顯季卿こそ其樣な心得てみゆれと崇德院の御たひ／＼承きと顯輔卿申され侍しを承傳侍りいかさまにも此歌は時つかせ吹飯のうらよりはしめてあかふ命はいもかためと侍まて心も詞もみなよみのせられてわたくしのゑわさそすくなくや侍らん志かれはあたらしきにつきて左歌可勝也

千三百卅三番

左　勝　　　　良　　　平

かはり行人の心はなになれはつらきを志たふ我身成らん

右　　　　通　具　朝　臣

新古今 ことのはのうつりし秋も過ぬれはわか身時雨とふる涙かな

左歌えんにこそ見え侍れ右歌は今はとて我身時雨とふりぬれはことのはさへにうつろひにけりと小町かなかめけるふりにしことのはやおもひわすられ侍らん又以左爲勝

千三百卅四番

左　　　　具　　　親

後の世をたのむ賴も有なまし契かはらぬ我身なりせは

右　勝　　　　家　隆　朝　臣

入まては月はなかめついなつまのひかりのまにも物思ふ身の

左歌はいとあはれに侍りたゝし上にたのむたのみなと侍に下句にちきりと侍らん三になりてかしかましくや聞え侍らん歌合にはよろつを忘て讀すゝされ侍へき歟右歌初二句はつねの心腰より下は又「秋の田のほの上にてらすいなつまの光のまにも忘れやはする（我やわする、イ）」と申歌をこめ入て終句に物おもふ身のとゝちられて侍いみしく侍り雲林院の御子の歌に「吹まよふ野風をさむみ秋はきのうつりも行か人の心の」と侍歌の人しれすこのもしう侍るさすかにをきにくゝ侍に興ありて侍大かたはいなつまのひかりのまにも物思ひわすれぬに入まて月をなかむる戀のわりなさをしはかられてまさると申侍へし

千三百卅五番

左　　　　顯　　　昭

なにとかは今朝のわかれをなけくへきその移りかは墓ひきに皃

右　勝　　　　雅　　　經

思事のこらぬ秋のゆふへたに（にもイ）をを忘らるゝ身こそつらけれ

左歌今朝の別れにそのうつりかの志たひくるほとめもおとろき侍らす右歌思事のこらぬ夕にわするらんつらさは身にあまり侍ぬへし爲勝

千三百卅六番

左　勝　　　　女　　　房

續後撰 長月の月みてかひはなけれ共たのめしものを有明の比

右　　　　家　　　長

眞葛原人のこゝろの秋風はかへす／＼もうらめしき哉

左歌さきにもほのめかし申侍今こんといひしはかりに長月のと侍歌のこゝろはいみしうとりて侍ものかな長つきの月みてかひはなとまことにをかしうつき（本ノ）まれたる詞に侍にたのめしものを有明の比と侍かくてこそ有明の月と

侍らぬもことはりとおほえ侍れ有明のそらとよまは月にて侍へきよしをたひ／＼申おきて侍るゆへに心をいみしと取りわき申侍るなり右歌は「秋風の吹うら返す葛のはのうらみても猶うらめしき哉」と申詞をかへす／＼もとよみかされたる計か右歌のくすのはよりは左歌こそあやなくうらめしく侍れ

千三百卅七番

左　勝　　左　大　臣

なけかすよ今はた同し名取川せゝの埋木くちはてぬとも

右　　三　宮

今こんの契はたえて中々にたのめぬ月そよかれさりける

左歌はさきにも申侍つるなとり河瀬々の埋木の歌に「侘ぬれは今はたおなしなにはなる身をつくしてもあはんとそ思」と申歌のむねの一句なとりそへられて侍にこそ其の上に神おろしの句むすひ句なとよろしく侍り右歌はいまこんといひしはかりのうたの心はあまた侍ぬれはとかく可申にも侍らす契とたのむとは同心と申ならはして侍りさきにはたのむたのみと三にかさなりて侍つれはたゝきゝにくしとはかり申侍ぬ歌合はわつらはしくはかなきとかをもとめて侍なり「契置し人も木すゑの木のまよりたのめぬ月の影そもりくる」と申歌は金葉に入てこそ侍れ然者任例依病左歌可勝歟

千三百卅八番

左　勝　　前　權　僧　正

たつた山夜はにや君かひとりとてねしよの夢の行ゑをそしる

右　　内　大　臣

なをつらしきかすかほにてあかす夜に枕にちかき鳥のうきねよ

左歌は「風吹は沖津白浪たつた山夜はにや君かひとりこゆ覽」と申歌の心をとりて上句にむすひて彼歌うちなかめてひとりふしけんものゝその夜の思ねの夢の行ゑをさへさこそありけめと思しれる心はへなるへし但伊勢物語には男いかにも女の恨たるけしきのみえさりけれはなきまにこと男にあふかとうたかひて前栽の中にかくれて見けれは女此歌をよみ侍けるをきゝて河内へもいかすなりにけりといへり大和物語には男前栽の中にて見をれはまへなる女に此歌をかたりけるしはし見ゐたれはうちなきてよりそふしぬ前なる女かなまりに水を入てむねになんすへたりけるわきかへりにけれは其ゆをはすてゝ又水を入かへ／＼してたひ／＼に成にけれは男はしりいてゝいかなる心ちし給へはかくはし給ふそとてかいたきてねにけりといへりされはこの二の物かたりにともに河内へもゆかて男ねにけれは更に思ねの夢も見え侍へからすれしよの夢のゆくゑなにゝつけてしられ侍へきされとかゝる事はさてこそ侍れ本文をみてたゝすにはをよひ侍らす和歌に縱法令の難するは此道の外道なりとこそ法性寺の大相國もいましめおもく侍けれ右は遊仙窟に可憎病鵲半夜驚」人薄媚狂鷄三更唱」曉此句をよまれて侍るめれは鳥の音いとゝうらめしく侍りけん此文の心也枕にちかき鳥

もやもめからすうかれ鳥をならへてよまれて侍りなん
されと此鳥の音恨ろ事は常の風情に侍り左の夢の行ゑ
はめつらしき心にこそ河内へもゆかさりけりなとはあ
まりの事に侍りおきつしら浪たつ田山となかむろこそ此
物かたりの肝心にては侍れ左の歌風情たかく侍れは勝侍
ろへし

千三百卅九番

左　持　　　公　繼　卿

たえはつる程そ哀にしられける夢路にたにもみらくすくなき

右　　　忠　良　卿

影たえて程は雲井のなかめにも猶夕暮の山のはの月

左歌は「鹽みては入ぬる磯の草なれやみらくすくなく戀
らくの多き」と申歌は萬葉の中にぬきいてゝ花山法皇拾
遺に入させ給て侍は世の末にもてあそふへき歌にこそ侍
めれみらくすくなくこふらくのおほきと侍本歌は中々に
わさ〳〵しく聞え侍にわつかにみらくすくなきの一句は
きゝよくこそ侍れ右歌はさきにもよまれて侍程は雲井の
ひとことはをのせられて侍れとすゑのよくよみくはへら
れて侍れはともによろしく持なるへし

千三百四十番

左　勝　　　公　經　卿

戀わふる涙や空にくもるらんひかりもかはるねやの月かけ

右　　　雅　宗　卿

こりはてぬうき身のはて(程イ)を疑ひて心のうらにつく(しイ)へかりけり

左歌涙に空をくもらせてねやの月かけをかはなと侍るゝ
となかしくみえ侍り右歌「かく戀ん物とは我も思ひきや
心のうらそまさしかりける」と申歌につきておもひしま
まにいとはるゝうき身をこりはてぬるよしはことはりふ
かくて侍れと心のうらはまさしかりけりと申ことのあま
りに耳なれて侍はにや左はなをめつらしくや侍らん

千三百四十一番

左　持　　　季　能　卿

いとはるゝ名はふらさしと思しを心にあまるそてのむら雨

右　　　通　光　卿

しのひあへす我やゆかんのいさよひに昔語の夕暮の空

左歌は上句はさもと聞え侍に終句の袖のむら雨の詞あまり
にあたらしきそや侍らん但人のこのみ〳〵に侍れは一ゝ
すちに申定かたく侍りめつらしとおもふ人も侍る右歌は
君やこん我やゆかんのいさよひの歌にむかしかたりの夕
くれの空をよみそへられて事こもりたるさまにあひて初
句のしのひあへすなともたくましうをかれて侍るなすら
へて持と可申

千三百四十二番

左　持　　　宮　内　卿

頼めしをまつとて我身ゆきふれはうらみとりにもはては成けり

右　　　釋　阿

(新古今)逢事はかたのゝ里のさゝの庵しのに露ちる夜はの床かな

左大かた心もたくみに侍るうへに詞つかひもをかしくこ

そ見え侍れ詞花集の歌に「とはぬまをうらむらさきに咲藤のなにとて松にかゝりそめけん」とよめるすかたおもひあはせられて侍るかな右歌上句もこのもしきさまによみくたされて侍めり下句も萬葉の「秋のはなしのになしなみ置露のけかもしなまし戀つゝあらすは」と侍歌なと取合られていみしくこそ聞え侍れ左歌すてかたく侍れは持と可申歟

千三百四十三番

左　讃岐

新勅撰
あはれ〳〵はかなかりける契かなたゝうたゝねの春のよの夢

右　勝　俊成卿女

戀といふうき名はかりそとゝめけん忘かたみをたれ忍へとて

左歌あまりによろつをむなしくおもひとられてたうとくや右歌はさまかはりて戀にしみかへりてみえ侍れは戀の歌にはかつへきにこそ

千三百四十四番

左　持　小侍従

さらぬたにね覺さひしき冬のよにうらみし鳥のねこそかはられ

右　丹後

敷妙の枕もうとくなりぬれは夢みし夜はも戀しかりけり

左のうらみし鳥の音こそかはられと侍るも右の夢みし夜半さへ戀しからんも心得のうちあさゝふかさとかく申さんに及侍らすや

千三百四十五番

左　勝　隆信朝臣

とへかしな哀とまてはあらす共さてもやいけるとはかりなたに

右　越前

うちたえてまたれぬ程に成ぬれは吹もふかぬ（スイ）も荻の上風

左歌まことにあはれにきこへ侍るうへに上句にあはれとまてにといひ下句にとはかりなたになと侍るよみかけられたるいみしくおほへ侍り右歌もめつらしきすかたにて侍れと吹もふかぬ（スイ）も荻のうは風とおもはせられたるなを心ゆかすや左やまさり侍らん

千三百四十六番

左　勝　有家朝臣

新古今
忘れじといひしはかりの名殘とてその夜の月はめくりきにけり

右　定家朝臣

久かたの月そかはらてまたれける人にはいひし山のはのそら

左歌よろしくきこえ侍り末句きゝなれて侍らんされとたしかにはおほえ侍らす右歌もあしくも侍らぬに末の人にはいひし山のはの空と侍すこしおろかなるこゝろゆかす（ふかきとかなくすくれたるふし侍らす持かイ）や左まさると可申

千三百四十七番

左　勝　保季朝臣

おきわかれ歸る道をはなくる共月は物をやおもはさるらん

右　通具朝臣

忘れなん人こそあらめ夜と共に契し事はこのよのみかは

左歌心ふかく詞きよらかに侍めり右歌は上によとゝもに

侍るにこのよのみかと侍るおなし心のやまひさりかた
けれは左なかちと申侍へし

千三百四十八番

左　　　　　良　　　平

忘らるゝ身をしる雨の行ゑとやうかりしまゝに袖のくちぬる

右　勝　　　家　隆　朝　臣

今はとやなのかきぬ〳〵いそくらん獨りかたしくしのゝめの月

左歌藤原敏行か業平かもとに侍女のもとへ文つかはしけ
る詞に雨のふりけるをみわつらひ侍と云けれはかの女に
かはりて業平かよめる「かすゝゝにおもひ思はすとひか
たみ身をしる雨は降そまされる」又源氏物かたりに五月
雨のふりやまぬにつけて「つれ〳〵と身を知雨のをやま
れは袖さへいとゝみかさ増りて」後拾遺にも雨のふりけ
る日和泉式部か「みし人に忘られて降袖に社身を知雨は
いつもをやます」堀川院百首の春雨に俊頼朝臣「つくつ
くと思へはかなしかすならぬ身をしる雨はをやみたにせ
よ」しかるに近比の人々涙を一つに身をしる雨とよめり
身をしる詞は涙にもかよはぬへしされはまことの雨にの
みよせてよめる右歌はひとりかたしくしのゝめの月なと
よろしく侍れは勝と可申歟身をしる雨を難申故にあらす
それは事のつゐてにおとろかし申はかり也

千三百四十九番

左　勝　　　具　　　親

よしさらはうらみはてんと思へ共心つよさは人によりけり

右　　　雅　　　經

結手の雫はかりを袖にみてあかても人に山の井の水

左歌めつらしくみえ侍り右歌貫之かむすふ手のしつくに
にこる山の井のこゝろにや此御歌合にもあまたみえ侍り
右はなをまさりて侍らん

千三百五十番

左　勝　　　顯　　　昭

たまさかにあひみて後もいとひけり戀は果うき物にそありける

右　　　寂　　　蓮

露しけきよもきかねやのひまとちて古き枕に秋風そ吹

右歌ふるき枕とよまれたるは長恨歌にふる枕ふるき衾た
れとゝもにかせんと侍る詞をひきて源氏物語に懷舊の所
にしるして侍めり又狹衣の物語にも「ちり積る古きまく
らをかたみにてみるもかなしき床の上かな」と侍るうた
もふるきをおもふ心なるへし歌合の戀の歌にはたてまつ
られかたくや左歌は戀の心侍れと猶合歌はよみしれるす
かたなれは勝と申へき也

和歌の浦のよしあしをさへ分へしと人並にたに思ひかけきや

千五百番歌合卷第十九　雜一　判者前權僧正

千三百五十一番

左　勝　女　房

ゆふたすき萬代かけて住よしの神や種まきし峯の姫松

右　三　宮

久かたの空はれわたる浪のうへに雲ときえ行奥のつりふね

君か代にたくひも見えぬためし哉神のたねまきし住よしの松仍以左爲勝

千三百五十二番

左　左　大　臣

みな人の世にふる道そあはれなる思ひいるゝも思ひいれぬも

右　勝　内　大　臣

そのかみや祈しことはとようけのしるしそ君かめくみなりける

豐受のうけすといかゝ思へき世にふる道にみちはあれ共

仍右爲勝

千三百五十三番

左　前　權　僧　正

明石かた舟のむかしに事とへは島かくれ行跡のしら浪

右　勝　忠　良　卿

さひしさを人もこすゑのなかめにてけふもくれぬとまつの夕風

たゝきける水鷄ならねと松風の人もこすゑは哀成けり以右爲勝

千三百五十四番

左　公　繼　卿

なさけしる人はいかにかなかむらん明行山の空のけしきを

右　勝　兼　宗　卿

住吉の松のこすゑのふか緑つもれるはるの色そみえける

なかむれは明行山の空よりも緑の色はすみよしの松仍右勝

千三百五十五番

左　公　經　卿

さらに又つまとふ聲の武藏野にゆかりの草の色もむつまし

右　勝　通　光　卿

いにしへも今行末の世のはても思ひいれ（にイ）つるあかつきのそら

世のはてと中になかすはむさし野の色やあらまし曉の空

仍右爲勝

千三百五十六番

左　季　能　卿

くらもちの神もうらめしいかなれはあたに櫻の花となしけん

右　勝　釋　阿

夜をかさねさひしき床にすか枕いくたひ鐘の聲を待らん

鐘の音におとろきて聞神の名は猶しらすけの枕也けり

千三百五十七番

左　宮　内　卿

さしのほる日影たけぬる朝なきの雲なき空にたつあそふ也

右　勝　　　　　　　　　　後成卿女
ね覺もろ月さへさひし奥山の柴のあみ戸の明かたのそら
ねさめもろ月そさひしき舟路ならておほつかなみの朝なきの空然は暫以右爲勝
千三百五十八番
左　勝　　　　　　　　　　讃岐
古の神世もかくや春の花秋の紅葉はさためをきけん
右　　　　　　　　　　　　丹後
時しあれは花は春にも逢にけり待こともなき身をいかにせん
待ことはめつらしからぬ花なれは神世の紅葉色やそふらん仍左勝歟
千三百五十九番
左　　　　　　　　　　　　小侍從
袖になく露もたまひぬ曉にゆふつけ鳥の鳴そあやしき
右　勝　　　　　　　　　　越前
いすゝ川その水上を尋ぬれは神路の峯にかゝろしら雲
曉の鳥のねたしや神路山思ひなかけそ嶺のしら雲以右爲勝
千三百六十番
左　勝　　　　　　　　　　隆信朝臣
明ぬとや釣する舟も出ぬらん月に棹さすしほかまのうら
右　　　　　　　　　　　　定家朝臣
大かたの月もつれなき鐘の音に猶うらめしき有明のそら
なに事とわかぬ有明の空よりも月に棹こそさしまさるらめ然は左勝也
千三百六十一番
左　持　　　　　　　　　　有家朝臣
跡たれていく世になりぬ神風やいすゝの川のきよき（ふるイ）なかれに
右　　　　　　　　　　　　通具朝臣
羽とのねにかよふ岡邊の松風（の）は（色イ）葉分に千々の秋しらふ也
神かせはいすゝ河原に吹なれぬ時々ゆるせ松のは分に
千三百六十二番
左　　　　　　　　　　　　保季朝臣
尋入山路のふかくなるまゝに鳥のこゑまてかはり行かな
右　勝　　　　　　　　　　家隆朝臣
神風やみもすそ川も岩清水も君かためとやすみはしめけん
かけまくも畏き神のもろしめはなかにもいかゝ引ならふへき
千三百六十三番
左　持　　　　　　　　　　良平
いかなれはおなし空よりふる雨の春秋のへのいろをかふらん
右　　　　　　　　　　　　雅經
あつまやの軒のしのふのすゑの露いく朝なきの袖したふらん
雨も露も朝なきの袖の上の色深しあさしも思わかれす仍爲持
千三百六十四番
左　　　　　　　　　　　　具親
てる月も君に心をゆふかけて榊葉しろき天のかく山

右　如寒含得火　　　寂　蓮

谷の水嶺の嵐をしのびてゝ法の薪にあふそうれしき

　あはれ也法の薪をこりつみて思ひをきけん秋の白露但可
　爲持也

千三百六十五番

　左　　　　　　顯　　昭

明ぬとて鳴か羽音におとろけはまた夜もふかしいなのふし原

　右　勝　　　　家　　長

八雲たついつも八重かきひまもなくめくみにこめよ君か萬代

　ふけにける鳴か羽音もいかてかは八雲の色に立まさるへ
　き仍以右爲勝

千三百六十六番

　左　勝　　　　女　　房

ありそ海のやむ時もなき浦風に涙かくれ行あまの釣舟

　右　　　　　　内　大　臣

榊葉やいつも緑のしめの内に嶋吹秋は風そ身にしむ

　あま小舟なみかくれ行うらかせは嶋ふくよりも身にそし
　みける左尤勝

千三百六十七番

　左　持　　　　左　大　臣

かり人もあはれしれかし嶺の鹿のへのきゝすのなのかこゑ／＼

　右　　　　　　忠　良　卿

山たかみかけちの雲のたえまよりふもとの涙を出る月かけ

　月かけよ麓の雲を出ぬれは嶺には鹿の聲そかなしき仍持
　歟

千三百六十八番

　左　　　　　　前　權　僧　正

君か代にふるからをのゝもとかしはもとに返るや我身なるらん

　右　勝　　　　兼　宗　卿

風の音に聲をもやかてしらすれは友とそたのむまとのくれ竹

　もと柏もとにはいまた歸りはてすされはよ竹のよしとこ
　そみれ仍右勝

千三百六十九番

　左　勝　　　　公　繼　卿

玉ほこの道の消行けしきまてあはれしらする夕くれの空

　右　　　　　　通　光　卿

暮はてん空をはしはし三日月の影ほのかなる名殘をそ思ふ

　たまほこの道の夕の氣色には光そうすき三日月の空

千三百七十番

　左　　　　　　公　經　卿

山のはにかさなる雲のいかなれや都にもにぬ空のいろかな

　右　勝　　　　釋　　阿

なしてるやはまの南の松原もいく木の千代を君にそふらん

　君か代のいく木の千世を松の色に染ます物はあらしとそ
　おもふ仍右勝

千三百七十一番

　左　　　　　　季　能　卿

深山木の梢にさ夜やふけぬらん月にさひたるむさゝびのこゑ

右　勝　　俊成卿女

あはれ思ふ（言をもイ）人こそしられ雲のいる嶺のかけちをかよふ松かせ

あはれなる峯のかけちの松風にいとおそろしきむさゝひのこゑ以右爲勝

千三百七十二番

左　勝　　宮内卿

窓ちかく嶺の松風音信て軒より下をかよふしら雲

右　　丹後

うらやまし雲ゐはるかに成ぬれと空行月はめくりあひけり

めつらしき軒より下の白雲に空行月の立かくれぬる左爲勝

千三百七十三番

左　持　　讃岐

草も木もたのかおり〱契なきて色をも香をも人にしれつゝ

右　　越前

榊さすとよ宮人の神あそひ立まふ袖の香さへなつかし（かうはしイ）

とにかくにたゝなそらへて有ぬへしゆへありとても聞よからねは仍爲持

千三百七十四番

左　勝　　小侍従

鹽みてはかくるゝ磯のそなれ松これもみる日そすくなかりける

右　　定家朝臣

たつけふり野山のすゑのさひしさは秋ともわかす夕くれの空

中々にかくるゝ松はさもとみえて野山の末はめにもたゝれぬ左勝歟

千三百七十五番

左　持　　隆信朝臣

故郷の池はみ草にとちられて心に月をやとしつるかな

右　　通具朝臣

なかれての世々につたはる河竹も君に契れる末そ久しき

此左右は又なそらへて持とすへし難の言葉もつゝけにくくて

千三百七十六番

左　持　　有家朝臣

續古今 風ふけはあまのとまやのあれまくもおしまか磯によする浪哉

右　　家隆朝臣

霧はるゝ鳥羽田のおもをみわたせは行末遠き秋の山里

此比の風の姿になれ〱て身にしむ色はいつれともなし

千三百七十七番

左　持　　保季朝臣

一夜たに心とまらぬすまゐ哉かたしく袖に山おろしのかせ

右　　雅経

やとれとや苔のさむしろうちはらひ旅行人を松の下風

とにかくに松の下風山おろし吹みたりぬる心なりけり仍又持也

千三百七十八番

左　　良平

曉はよもの草木もをく露の清き光もこゝろすみけり

右　勝　如裸者得衣　　　　寂　　　　蓮

今そ思かた岡山の旅人も身をかくしける紫のそて

みれはこれもあはれなりける衣かな身をかくすとて身も

かくれぬる仍右勝也

千三百七十九番

左　　　　　　　　　具　　　　親

見わたせは花と雪とにおなし色のおりからかはるみねのしら雲

右　勝　　　　　　家　　　　長

此比は和歌のうら浪立そひて君をやまもる玉つ島ひめ

雲にいかゝ立をとるへき和歌のうらに君をまもらん玉つ

しまひめ殊以右爲勝

千三百八十番

左　　　　　　　　顯　　　　昭

むしろ田のいつぬき川に年をへて浪や立らん鶴の毛衣

右　勝　　　　　　三　　　　宮

鳥のねもかれのひゝきもなき山は明るもしらぬみねのまろふし

莚田とうちきくよりもふかき山に哀なるへき嶺の丸伏仍

右勝

千三百八十一番

左　勝　　　　　　女　　　　房

すまのうらに待夜ふけ行月影を浪のあなたに誰おしむらん

右　　　　　　　　忠　　良　　卿

續古今
うしとても又はいつちかあくかれん山より深きすみかなければ

めつらしき浪のあなたの月影に忘られにけり深き山のは

以左爲勝

千三百八十二番

左　勝　　　　　　左　　大　　臣

新古今
舟のうち浪の下にそ老にけるあまのしわさもいとまなの世や

右　　　　　　　　兼　　宗　　卿

春の日の長閑にてらす大空にむれたるたつのあそふ聲々

浪のしたあまのしわさにくらふれはそのことゝなきたつ

のこゑかな尤左勝

千三百八十三番

左　　　　　　　　前　權　僧　正

ふりにけるなからの橋は跡もなし我か老の末はかゝらすもかな

右　勝　　　　　　通　　光　　卿

かよひけんむかしの琴のしらへまて思ひしらるゝ峯の松風

松風に昔のことを引かけて思ひ知るらん末そはるけき尤右

勝

千三百八十四番

左　　　　　　　　公　　繼　　卿

秋としもあはれをなにか思ひけん暮行そらのかせにそ有ける

右　勝　　　　　　釋　　　　阿

色かへぬみかきのうちの吳竹も君か御代にそ千世はしけらん

君か代に千世しけるへきくれ竹のくせなき方に心うつり

ぬ

千三百八十五番

左　持　　　　　　公　經　・　卿

をしへをきし是そ都のたつみとて軒はの嶺に鹿も鳴也

右　　後成卿女

時しらぬすゝのしのやに月もりて風こそ秋の音たえかすれ
いつかたそ巽の鹿も風の音もいさとよいかに聞そわかれ
ぬ

千三百八十六番

左　持　　季能卿

くりはらのあれはの松をさそひても都はいつとしらぬ旅かな

右　　丹後

あはれなるすゝのしのやのまろね哉跡留むへきくまとやはみし
すへてたゝなとりといはて有ぬへしあれはの松もすゝの
しのやも仍持也

千三百八十七番

左　　宮内卿

わたのはらいくえの浪をへたてゝも都をこめしおなし白くも

右　勝　　越前

にごる世に光さやけき夜半の月心をすます道しるへせよ
思ひわかぬ雲のへたてにまよふ程月のしるへやすみまさ
るらん右勝也

千三百八十八番

左　　讃岐

心あらは行てみるへき身なれ共音にこそきけ松かうら島

右　勝　　定家朝臣

新後拾 いく世へぬかさしおりけんいにしへに三輪のひはらの苔の通路
すむあまの心あるへき松か浦もみわのひはらに及へきか
は以右爲勝

千三百八十九番

左　　小侍従

うきふしはとゝこほるとも河竹のなかれて末にあふせなりせは

右　勝　　通具朝臣

風はやみ夕しほみては難波かた入江のたつのこゑもおします
うきふしはけにとゝこほる心ちして入江のたつや鳴まさ
るらん以右爲勝

千三百九十番

左　　隆信朝臣

尋きて心なきまて月そすむ世のかくれかとたのむいほりに

右　勝　　家隆朝臣

新後撰 住の江の月に神代のことゝへは松の梢に秋かせそふく
かくれかの庵によまし住の江にいつもなかめん松の秋風
尤右勝

千三百九十一番

左　勝　　有家朝臣

山のはの雲を衣にかたしきてさも明かたき岩まくらかな

右　　雅經

雲にふし嵐にやとる足引の山のいくえの夕くれのそら
山のはのおなし雲にはふしなからつよくもみゆる岩枕か
な仍左勝也

千三百九十二番

左　保季朝臣

うちはへていかゝとみえし柴の庵もすめは遠かに日數へにけり

右勝　如爾人得主　寂蓮

里となき市の庵のとまひさし行かふ民にあふ心ちして

柴の庵けにいかゝとてとまひさしさしてそいとふ心とめけん以右爲勝

千三百九十三番

左勝　頁平

夕暮は山の端いつる月をみてかゝけもやらぬ窓のともし火

右　家長

色ふかき萬の葉までならのはの名におふ宮に散はしめけり

萬のは散おほせてもみえぬ哉此古ことはかけまくもいさ以左爲勝

千三百九十四番

左勝　具親

尋くる人もいつかは三輪の山杉はふりぬるしるしはかりそ

右　三宮

涙の音も風のひゝきもさしながらいく世に成ぬ松かうら島

ふりぬれと杉はしるしも有ぬへし涙のよせなき松かうらしま然は左勝也

千三百九十五番

左　顯昭

くる人のあらはいかゝと問てましひとりのみきく嶺のまつかせ

右勝　內大臣

そさのをも君かみことのためとてや八雲のしるし思ひ立けん

松風は人に聞へさなかめかは八雲のしるし立まさるへし尤以右爲勝

千三百九十六番

左勝　女房

都人とはて月日は松の庵の軒になれたる嶺のまつかせ

右　雅宗卿

ふりにける磯の岩やにすむ龜はいく年涙なかされきぬらん

杉の庵の軒になれてはいとゝしく聞所ある松のかせかな尤左勝

千三百九十七番

左勝　左大臣

岩かねのこりしく嶺なふみならし薪こるおもいかゝくるしき

右　通光卿

年毎におひそふ竹の世々をへて久かれともなれる御代かな

としことに生そふ竹のふしよりもこりしく嶺やたかくみゆらん以左爲勝

千三百九十八番

左　前權僧正

なさけあらは人もさそさめよ櫻あさのおふの下草おいはてぬとも

右勝　釋阿

和歌のうらの風にたつさふ友鶴の君か千とせにあふそうれしき

今そしる左を右になしたらは老ことすとは人にいはれし仍尤右爲勝

千三百九十九番

左　勝　　公　継　卿

さよふけて嵐吹らしあなし河川音たかくなりまさる也

右　　俊　成　卿　女

新古今 かくしても明せはいく夜過ぬらん山路の苔の露のさむしろ

あなし河けに音たかく聞ゆ也しきしのふへき露のさ莚

千四百番

左　勝　　公　経　卿

たつた山こえし昔の面かけはふもとの里のあり明の月

右　　丹　後

今さらに思入こそはかなけれしめなかさりし谷の戸ほそに

なにとなく物さひしきは立田山思入かたもあはれなれと
も左勝也

千四百一番

左　持　　季　能　卿

またかゝる道こそ雪もしらすけの風にたゝよふ朝ほらけ哉

右　　越　前

高砂の松を友とはなけれともなかめそなるゝいたつらにして

とにかくにいひおほせてやみえさらん雲のしらすけ高砂
の松持歟

千四百二番

左　持　　宮　内　卿

中々になかめにぬれぬしつかきろたみのゝ島の雨のゆふくれ

右　　定　家　朝　臣

駒とめしひのくま川の水清み夜わたる月のかけのみそみる

ふけにける雨と月とに分かれぬ田簑のゝしまもひのくま
川も爲持也

千四百三番

左　勝　　讃　岐

新古今 身のうさに月やあらぬとなかむれは昔なからの影そもりくる

右　　通　具　朝　臣

暁はひとりねさめに思事あはれ数そふ鴫のはねかき

身のうさの詠はけにそ哀なる月やあらぬの春の明ほの以
左爲勝

千四百四番

左　　小　侍　従

音羽河をとに聞つゝやみなはやこえてくやしき相坂の關

右　勝　　家　隆　朝　臣

いく代ともしられぬ物はしら雲の上よりおつる布引の瀧

いとゝしく音さへたかく聞ゆ也雲にさらせる布引の瀧以
右爲勝

千四百五番

左　持　　隆　信　朝　臣

古郷はいく重の雲に跡とちてかさなる山のみねの月かけ

右　　雅　経

跡とめてとまるかたなきうきね哉さこそうきたる涙ちなれ共

とにかくに山路涙ちはかはれ共心はおなし旅ねなりけり

千四百六番

左　勝　有家朝臣

花かとも故郷人のとひこかし軒はの山のみねのしら雲

右　如子得母　寂蓮

かゝりける御法の花そ驚よ梢をおしとなにおもひけん

あはれとも如子得母のたはふれを思ひ出てやひとり行らん但左勝也

千四百七番

左　勝　保季朝臣

玉葉 山ふかくすまは共にといふ人もまことにならはかはりもやせん

右　家長

これまてもかしこき御代にかはらねは古へ今の跡をこそとへ

そむく道はまことになれはとをられと思ひしろこそけにはおほゆれ左勝也

千四百八番

左　持　良平

わたのはらなかめのはてはひとつにて村雲わくる奥つしら浪

右　三宮

尋こし昔の人は跡たえて野中のし水誰かくむらん

わたの原村雲分る浪に又野中の水もあさからぬかな仍持　歟

千四百九番

左　持　具親

わたのはらいく夜の月をしろへにて都の山を浪にまつらん

右　内大臣

神かきに夜や明かたに成ぬらん夕つけ鳥の聲のきこゆる

山のはを浪のうへには待もせよ月のしろへやかすかなるらん仍持也

千四百十番

左　顯昭

我友と人やみるらん柴の庵のまかきにうつすいさゝむら竹

右　勝　忠良卿

しほかまやをちのなかめの浪分て松の木間に奥のつりふね

常にみるいさゝ村竹いさゝかもかつへきふしそみえす成ぬる仍以右爲勝

千四百十一番

左　勝　女房

これやさは都にてみし空の雲それをかたしく嶺の旅ふし

右　通光卿

苫莚あをねかみねは名のみしてたゝしら雲のよそめ成けり

たちをとる峯の雲こそかひなけれそれをかたしく心ふさに右尤可負也

千四百十二番

左　大臣

春の田に心をつくる民もみなをりたちてのみ世をそいとはん

右　勝　釋阿

四の海おさまれる世は音に聞龜のお山も浪そよせこん

をりたちていとなむ民もしかはあれと猶よせふかし龜のお山は仍右勝

千四百十三番

左　　　　前　權　僧　正

蘆たてる難波のみつにやく鹽のしほたれて物な思はすもかな

右　勝　　　俊　成　卿　女

もろともにすめはなりけりあしたつも吉野の奥の松の木のもと

仙人のすみかゝましきよしなれやよしのゝ山のおくの松

風仍右勝

千四百十四番

左　勝　　　公　繼　卿

すきゝぬる山分衣ぬれなから野はらの露に猶そかたしく

右　　　　丹　　　後

松風の軒はにおつる音たにさへ窓うつ雨とおもひけるかな

なかむれは共に色あることのはのかたしく袖やそめまさ

るらん仍左勝

千四百十五番

左　勝　　　公　經　卿

月た思袖より秋のしるへせよしのたのもりのよその夕露

右　　　　越　　　前

果もなき山路はるかに行暮しゆるすもしらす雲にやとかる

かれも是もそのもと末も分かれて猶みる袖に月のやとれ

る然は左可勝也

千四百十六番

左　　　　季　能　卿

なかめけんくものふるまひ空晴て月かけしろきたまつ島姫

右　勝　　　定　家　朝　臣

空に吹おなし風こそ聲たつれ嶺の松かえあら磯のなみ

雲か蜘蛛かあら磯に吹松風のおひたゝしきも猶めにそた

つ右可勝也

千四百十七番

左　　　　宮　内　卿

晴ぬるかたちろく雲のたえまより星みえそむる村雨の空

右　　　　通　具　朝　臣

新古今
一すちになれなはさても杉の庵に夜な〳〵かはる風の音かな

くれはとりあやなるはたにひく絲のかはれる色に心まと

ひぬ

千四百十八番

左　勝　　　讃　　　岐

いかはかり心の水のあさけれはぬしたにしらぬむれの蓮葉

右　　　　家　隆　朝　臣

もしほやくけふりも涙の末にして知ぬはまちにけふもくらしつ

つゐに猶むねのはちすはひらけなん知ぬ濱路は行てしも

なし仍以左爲勝

千四百十九番

左　　　　小　侍　從

名にしほは、尋もゆかんみちのくのあふくま川は程となくとも

右　勝　　　雅　　　經

風わたる松の下ねのさ夜まくら夢路とたゆるあまの橋たて

橋たてや夢路とたゆるさ夜まくら吹まさるらし松の下風

仍右勝

千四百廿番

左　　　　　　隆　信　朝　臣

老か世のあたら光の秋の空雲井のよそにみつる月かな

右　勝　如渡得船　　寂　　　蓮

おもふ人あるにつけても都とりあはれ今はと法の川なさ
わたり川舟待えてもいかはかりけに都鳥こひしかるらん
以右爲勝

千四百廿一番

左　　　　　　有　家　朝　臣

山田もるしつか庵のひたふるにうちぬる夢もたえて程へぬ

右　勝　　　　家　　　　長

梨つほの昔の跡にたちかへりわかのうらわに涙の寄人
なしつほの昔の跡のうれしさはとてもかくてもかたさら
めやは仍右勝

千四百廿二番

左　　　　　　保　季　朝　臣

さためなき人の心にしたかひて住もいとふもおなし山里

右　勝　　　　三　　　　宮

ふりにける三輪のひはらにこと問んいく世の人かかさし折けん
なさけあるみわのひはらのかさしなはさして思ひそ山の
里人左負也

千四百廿三番

左　　　　　　良　　　　平

いてゝこし都の空にあくかれて心さためぬ草まくらかな

右　勝　　　　内　大　臣

住の江の松風かよふからことな涙のなかけてしほや引らん
涙のなや引まさるらんあくかれて定めぬ空は秀句なけれ
は以右爲勝

千四百廿四番

左　勝　　　　具　　　　親

草の庵は尋し跡もふりはてゝ嵐そさむき相坂のせき

右　　　　　　忠　良　卿

月よする明石の浪な枕にてみやこの夢はすまの關もり
夢はすまも月よする浪もいさ如何に尋もしてん蟬丸かあ
と左勝也

千四百廿五番

左　　　　　　顯　　　　昭

暮ゆけはさは風さむし旅人の宿かすか野やいつこ成らん

右　勝　　　　兼　宗　卿

旅ねしてきけはむつまし都鳥なれもおもふや同し友とは
都鳥おなし旅ねとみゆれとも猶さは風は身にしまぬかな
仍以右爲勝

千四百廿六番

左　勝　　女房

旅ねする夜半の嵐に夢覺て打なかむれはあり明の月

右　　釋阿

昔きく野への岩屋そあはれなる嵐のそこを夢にみえけん

　こともなくめてたきさまそ有かたき岩やの夢は昔かまにまに左勝歟

千四百廿七番

左　　左大臣

我心その色としはそめれとも花や紅葉をなかめきにける

右　勝　　俊成卿女

むかし思心もいとゝすみた川暮行程のわたりなりけり

　花やといひ紅葉をそむる色よりも暮行程は心にそゝむ右勝歟

千四百廿八番

左　　前權僧正

君か代のつきぬ千とせの友とならん老の使ひになしとこたへよ

右　　丹後

我もさそ草の枕にむすひつる露にやとかる月の影かな

　月とゝもに草の夜床にやとりける枕の露や心すむんら仍右勝

千四百廿九番

左　勝　　公繼卿

あはれにもすみなれにける山里を松の嵐に夢さめねえて

右　　越前

うたゝねにまとろむ夢を程もなくさめたりかほに思はかなさ

　松風もけに夢なるゝ同夢のさめたりかほは猶いかゝとて左勝

千四百卅番

左　勝　　公經卿

冬の色をけしきの杜に顯してうつもれはつる雪の下草

右　　定家朝臣

朝夕はたのむとなしに大空のむなしき雲を打なかめつゝ

　色みゆるけしきの森の氣色哉むなしき雲は心くもりて左可勝か

千四百卅一番

左　勝　　季能卿

新古今　みつのゐのよしのゝ宮は神さひてよはひたけたる浦の松風

右　　通具朝臣

とふへしとたのまぬ物を（にほイ）松の戸の嵐にとつる夕くれのこゑ

　神さひて齡たけたる松風や猶松の戸に吹まさるらん左勝

千四百卅二番

左　勝　　宮内卿

なかめてもいく世になりぬ有明の月を待えて出る山人

右　家隆朝臣

古郷にたのめし人も末の松まつらん袖に涙やこすらむ

末の松やまひなくはと見ゆる哉寔加有ける出る山人左勝歟

千四百卅三番

左勝　讃岐

後の世の身をしる雨のかきくもり苔のたもとにふらぬ日そなき

右　雅經

玉藻しき袖しく磯の松かれにあはれかくろも奥つしら浪

花なくて實ありとみゆることのはを吹なみたりそ磯の松かせ以左爲勝

千四百卅四番

左　小侍従

春日野のわか紫の妻こひはおふとそみしになとかへるらん

右勝如病得醫　寂蓮

身につもる風の通路尋すはよもきの關ないかてすへまし

妻戀におひてかくとやおらさらん蓬に消しその露の身は

右勝歟

千四百卅五番

左　隆信朝臣

旅の空誰かはとはん萩原や野への秋風そよいかにとも

右勝　家長

玉ほこの道こそたえれ山のへやかきのもとまて跡をたつれて

まけぬへし人丸にたに誰かあはん赤人さへに立そひにけり左負

千四百卅六番

左勝　有家朝臣

新古今 春の雨のあまねき御代をたのむ哉霜にかれ行草葉もらすな

右　三宮

わたのはらやへのしほちをみわたせは雲につらなる奥つしら浪

春の雨にうるおひにける草なれはふるき波にはたちまさるへし以左爲勝

千四百卅七番

左　保季朝臣

都おもふそなたの風を身にしめて月に伴なふうつの山こえ

右勝　内大臣

老の後月にすみけんから人の跡をたつれて入山路かな

から人の跡を尋ぬる月影はうつの山にも澄まさるらん以右爲勝

千四百卅八番

左持　良平

右　忠良卿

いつかたへたかことつてをすまの關せき吹こゆる奥つしほかせ

きみを置て小島か崎の岩枕なみよりほかの涙もかけゝり

あはれにも波よりほかの涙に又立ならひぬる奥つ鹽風仍爲持

千四百卅九番

左　具親

高砂やこきのく舟もうちむれて風やすけなる浪のうへかな

右　勝　兼宗卿

待わたる都の人にこゆるきのいそく浪らといかてしらせん

風やすくこきのく舟やいかならんいそく浪ちによる心かな以右爲勝

千四百四十番

左　顯昭

なにとなく心ほそきは南ふくとさの舟路の明かたのそら

右　勝　通光卿

眞柴わけ道もおほえぬ山路哉しほりをこむる嶺のしら雲

嶺の雲におもひなかけそ南ふきて物おそろしき土佐の舟路や仍左負

千四百四十一番

左　勝　女房

わするなよかゝる深山の夜はの秋いかなる空の月をみるとも

右　俊成卿女

露しけきをさゝか原の風の音にかりねの夢を結やはする

常にきくをさゝかりねの夢よりもいかなる空の月は忘れし以左爲勝

千四百四十二番

左　勝　左大臣

月日のみなに事なくて明暮ぬくやしかるへき身の行ゑ哉

右　丹後

うちとけてまとろまはこそ古郷をとはぬ旅ねの夢にたに見めな

旅ねしてまとろむ夢の床よりも覺るまことにしくものそなき以左爲勝

千四百四十三番

左　前權僧正

君か代に久しくにほへ住よしの松に契し百草のはな

右　勝　越前

石の火に此身をよせて世中のつねならすさを思しる哉

石の火によする身まてはあはれなりつねならすさこそ猶おもふへき然而以右爲勝

千四百四十四番

左　持　公繼卿

ますらおはいなはかき分家ゐしていく秋風を身にしめつらん

右　定家朝臣

そなれ松しつみやためしをのれのみかはらぬ色に涙のこゆらん

そなれ松かはらぬ色の色もいさ身にしむ風もしますやあるらん仍爲持

千四百四十五番

左　持　公經卿

まてとやはひのくま川にたのめをきし駒うちなむる夕暮の空

右　通具朝臣

新古選
とまりするをしまか磯の波枕さこそはふかめ夜の松風

なたらかに吹なす磯の松風もうち行駒の跡もかはらなし仍持歟

千四百四十六番

左 持　　季能卿

むくらふのさしもけはしき古鄕をまことにいとふ心なりせは

右　　家隆朝臣

昨日こそ涙はかけしか梶まくら雲しくみれも袖はぬれけり

かち枕雲しく嶺にうつる程けはしき里にしはしやとらん

仍爲持也

千四百四十七番

左 勝　　宮内卿

もの丶ふの八十宇治川のはしはしらのとかにおとせまきの島舟

右　　雅經

今日も又萩の末はな空にみて露ふりくらすむさしのゝはら

武藏のゝ露もこまかに見ゆれ共もしすくなゝる橋はしら

故尤以左爲勝

千四百四十八番

左 持　　讃岐

行末を忘る人あらは問てましかくいひ〳〵てはてはいかにそ

右 如暗得灯　　寂蓮

ゆきはたる光を窓にあつめても思ひしらるゝ法のともし火

はかなしな法の灯そも消ぬかくいひ〳〵てはてもまことに仍持歟

千四百四十九番

左　　小侍從

かくはかり名こその關と思ひける人にこゝろをなにと止めん

右 勝　　家長

かたなみ蘆邊をさして鳴たつの千世を伴なふわかのうらひと

かくはかりいとふ名こその關よりも蘆へよせある和歌のうら人右爲勝

千四百五十番

左　　隆信朝臣

は嶺とふ深山の里の松の風さゝ〳〵さかねもきこゝかりけり

右 勝　　三宮

かりそめと思し物を飛鳥井のみまくさかくれいく夜ねぬらん

みまくさや立まさるらん松風を聞ぬ心はいかゝしるへき

右勝歟

千四百五十一番

左　　有家朝臣

人數になかめもすへき秋の月身をうき雲のうち〳〵くれつゝ

右 勝　　内大臣

新勅撰

やをよろつ神のちかひもまことには三世の佛のめくみなりけり

うき雲やわかね心に見る時は神を佛と〳〵たのもしき以

右爲勝

千四百五十二番

左 勝　　保季朝臣

物おもはて袖のなみたとなるものは松よりおろす嵐なりけり

右　　忠良卿

月影を待もおしむもなかめにて出るも入も山のはのそら

ふけに待月をなかめの山のはに袖の松風吹まさるらし左

勝

千四百五十三番

左持　頁平

夜と共に木の下くらきときはやま月も迄らて誰かこゆらん

右　兼宗卿

都にてみしにかはらぬ月なれと山里さひしあり明のそら

なにとなくてことなる影もみえぬ哉迄らぬ月もかはらぬ
月も仍爲持

千四百五十四番

左　具親

月いらは我もさてやは磯まくら旅ねもちかしまかのうら波

右勝　通光卿

冬の夜はうら風さむしかち枕さても明石の月をみつれは

旅枕ならへてみれはいとゝしく月は明石をすみまさるら
ん仍以右爲勝

千四百五十五番

左　顯昭

すゝ舟をよする音にやさはく覽すまの上野にきゝす立也

右勝　釋阿

かけていへは厭ひもすらん春日山さりとていかゝ頼まさるへき

昔より木たかくなれる春日山をちくたりてもみゆるすゝ
ふれ尤左負也

千四百五十六番

左勝　女房

月殘る靈鷲のさとの有明に昔に似たるあまのいさり火

右　丹後

人にたにしられぬ谷の下水にあまれき月の影はさしけり

谷水にやとれる月はおほろにてかけさやかなるあまのい
さり火仍以左爲勝

千四百五十七番

左持　左大臣

なしかへし物を思ふはくるしきにしらすかほにて世をや過まし

右　越前

すてやらぬ我身を浦のうつせ貝むなしき世とは思ものから

あらすかほにこひねかはるゝ世なれ共又すてかたきうつ
せ貝哉然と持也

千四百五十八番

左　前權僧正

たれか聞難波のあしのみしなへにたみのゝ島の鶴のもろ聲

右勝　定家朝臣

年ふれは霜夜のなみになく鶴をいつまて袖のよそに聞けん

行末をたのむ霜夜の鶴の聲やたみのゝ島に鳴まさるらん
以右爲勝

千四百五十九番

左持　公繼卿

つくりけるなからの橋は又くちぬふりにし人のこれをみませは

右　通具朝臣

あるしらすわかぬあはれをのこしつゝ幾夜の宿の曉のそら

又つくろなからの橋の末もいかゝそも忘りしらす曉の空
然は可爲持歟

千四百六十番

左 勝　公經卿

かされては衣手さむし泉河千鳥なく夜のあかつきの霜

右　家隆朝臣

我庵は嶺の杉むら分過てそれとも忘らぬ深山木のかけ

峯の杉又み山木の忘けきゝりなかめやすきは曉の霜左勝
歟

千四百六十一番

左　季能卿

九品のはちすのうちに結はれてとへはちらさぬ身ともならはや

右 勝　雅經

草の葉にしほれふしぬる袖枕夢やはむすふ夜はの白露

極樂のたうとき方にふたゝしなくなかしき色の袖まくら哉
以右爲勝

千四百六十二番

左 持　宮内卿

こえ行は梢にかゝる跡もなし山のいつくに雲かくるらん

右 如貧得寶　寂蓮

わひ人の心はかりはかよひきて思ふにさこそうれしかるらめ

わひ人のうれしきゆへもかすか也雲の跡なき嶺にまとひ
て仍持也

千四百六十三番

左　讃岐

影たけてくやしかるへき秋の月山路ちかくもなりやしぬらん

右 勝　家長

君か代にそめます物と成にけり山とことはのいまの一しほ

君か世にそめますと聞色なれは今一しほも身にそしむへ
き右可勝也

千四百六十四番

左　小侍從

うらやましいたゝのはしのけたよりも戀わたりけん人の心よ

右 勝　二宮

奥のかた鹽やくうらを吹からにのほりもやらぬ夕けふりかな

みれは猶いたゝのはしの末よりも鹽やく浦に風わたる也
仍右勝

千四百六十五番

左　隆信朝臣

我宿なとか人あらは忘るへせよ岩ふむ道になるゝ山もり

右 勝　内大臣

位山跡をたつねてのほれとも子を思道に猶まよひぬる

昔聞心はつみの末なれは子を思道そけに哀なる尤右勝

千四百六十六番

左 持　有家朝臣

身の程を中々なれはいはねともみる人ことにいかゝとそ思

右　忠良卿

數ならぬ我身は花にふく嵐すむ夜も月にかゝるうき雲

述懐のこゝろ〳〵の心をはこゝろしてこそ定むへらな
れ仍持也

千四百六十七番

左　保季朝臣

明ぬれと涙はゆるさす清見かた關路は鳥の音まてと思に

右勝　兼宗卿

續後拾遺
位山なに中々の跡ならん嶺まて思ほとのくるしさ

位山思心そあはれなる跡あるからにあとをくろしと以右
爲勝

千四百六十八番

左勝　良平

春の日のめくみをまつにかゝる哉其數ならぬ藤の末葉に（もイ）

右　通光卿

かくしつゝいく世の露になれぬらん草の枕に袖をかされて

なにとなくさこそは松にかゝるらめ藤の末葉をあはれと
そみる左可勝

千四百六十九番

左　具親

すまはさてならひやすると思へ共ましら鳴也たにのゆふくれ

右勝　寂阿

芳野河岩こす涙をなかむれはたえせぬ水の心をそしる

吉野川たえぬなかれのふかさをはくみてたにこそしらま
ほしけれ以右爲勝

千四百七十番

左　顯昭

かり庵の友とはいかゝたのむへきもろともなきよひの稲妻

右勝　俊成卿女

清見かたうきねの涙にやとる夜は月に心のとまるなりけり

ことはりや清見か月の光にはいかゝをよはんよひのいな
つま以右爲勝

千四百七十一番

左持　女房

たれみよとあれたる宿の松風にひとりすみけるあさちふの月

右　越前

續古今
思事なきたにやすくそむく世にあはれすてゝもおしからぬ身を

あさちふの月に心のすむからにおしからぬ身も捨られぬ
かな然は持歟

千四百七十二番

左持　大臣

うきしつみこん世はさてもいかにそと心に問てこたへかねぬる

右　定家朝臣

いたつらにあたら命をせめきけん長らへてこそけふにあひぬれ

けふにあひて過こしかたのくやしきも心にとふもくるし
かるらん仍持歟

千四百七十三番

左　前權僧正

鴈のくる嶺の松風身にしみて思ひつきせぬ世の行ゑ哉

右勝　通具朝臣

過にける三十は夢の秋ふけて枕にならふあかつきの霜
霜に結ふ三十の夢の枕にもあはれに秋のふくろあかつき
仍右勝
千四百七十四番
左　公繼卿
駒とめてこゝにやしはしやすらはんみまくさもよき飛鳥井の蔭
右勝　家隆朝臣
むかしたに昔朽ける津の國のながらのはしの跡なしそ思ふ
くちにけるながらの橋の跡なれは昔のむかしさそなはる
けき尤右勝
千四百七十五番
左　公經卿
ありし世の月を涙まに待佗て袖ふしかぬるむしあけのせと
右勝　雅經
野への露山のしつくと立ぬれてかことかましき旅ころもかな
待わびて袖ふしかぬるせとよりも猶ぬれまさるたび衣哉
右勝歟
千四百七十六番
左持　季能卿
心やる道こそ遠くなりまされ老行まゝにむかしおもへは
右　寂蓮
難波津になのか物ゆへ行かへりをなくあまも春にあふ比
心やる道もはかなし歸こてはなくあまも猶いかにせん
仍持歟
千四百七十七番
左持　宮内卿
谷ふかみかさなる宿を見わたせは軒より出る山川の水
右　家長
もしほ草かきたく末の跡みれはむかしにこゆる和歌のうら浪
とにかくにいひなかしてもみえぬ哉わかのうら波山河の
水仍爲持
千四百七十八番
左持　讃岐
ながらへて猶君か代を松山のまつとせしまに年そへにける
右　三宮
いとせめて身のうき時のなかめには袖にも落る瀧のしら玉
誰もみなのふる思ひはしな〳〵にあはれにぬるゝ百草の
袖仍爲持
千四百七十九番
左勝　小侍從
みきとたに誰にかたらん雨そゝく雲にまかひしあかつきの夢
右　内大臣
世をいとふ人の入なる山里に又すみわひていつちゆかまし
みる人の心はかりやしほるらん夢さへくもるあかつきの
雨左勝也
千四百八十番
左　隆信朝臣
浦ちかき嶺のいほりのさびしきはふもとの雲に夕なみのこゑ

右　勝　　　　　　　　　　忠　良　卿

世中をすゝてても何か椎柴やしはしへぬへき住家たになし

なにとなくいひくたしたる椎柴やふもとの涙におりまさ

るらん仍以右爲勝

千四百八十一番

左　持　　　　　　　　　　有　家　朝　臣

うきなから猶つれなくて過すともあらし我身の末のおもひて

右　　　　　　　　　　　　雅　宗　卿

恨へき人はなけれはおほかたにたのめは世たもうちなけきつゝ

とりとりに思ひけるこそあはれなれたのめは世たもある

は思出爲持

千四百八十二番

左　持　　　　　　　　　　保　季　朝　臣

山ふかみたゝこそ人のとはさらめ月につけては音信もかな

右　　　　　　　　　　　　通　光　卿

跡もなく岩のかけみちたとりきて雪と分つる庭の白雲

思ひわかすおなしといひて有なゝむふかき山へも岩のか

けちも仍持歟

千四百八十三番

左　勝　　　　　　　　　　良　平

もれきても猶うつもれて年やへん木葉かくれの山川の水

續古今
右　　　　　　　　　　　　釋　阿

おち瀧つ千々のなかれはつもれ共かはらぬ物はおきつしら涙

行ゑある木葉かくれの山水は奥つなみにもたちまされか

し然は以左爲勝

千四百八十四番

左　　　　　　　　　　　　具　親

かりそめのいほりも草のたび枕夢こそかよへ野への古たゝれ

右　勝　　　　　　　　　　俊　成　卿　女

ふりにけり跡なけれともつの國のなからの橋は名こそくちせね

誰も皆聞わたるなる橋の名に此夢よりもけに殘らん右勝

千四百八十五番

左　持　　　　　　　　　　顯　昭

袖ぬらす木の下露もある物を涙おちそふすゝのかりふし

右　　　　　　　　　　　　丹　後

山のはにいさよふ月の影みてもふけぬる身こそかなしかりけれ

たゝさやかなる光も見えすいく程と思ひわかれぬ月と露とは

仍持也

千四百八十六番

續拾遺
左　勝　　　　　　　　　　女　房

朝夕にあふく心を猶てらせ涙もまつかに宮川の月

右　　　　　　　　　　　　丹　後

わかの浦にかひなき藻屑かきつめて身さへくちぬと思ひける哉

とにかくに心詞も及れすいともかしこき宮川の月無左右

右負也

千四百八十七番

左　勝　　　　　　　　　　左　大　臣

君にかくあひぬる身こそ嬉しけれ名やはくちせん代々の末まて

右　　通具朝臣

此時にあふそうれしき世々の風聞しにまさるわかのうら波

代々といふもうれしと聞もそれなから朽せぬ名こそいへ

[illegible]左勝

千四百八十八番

左　　前權僧正

朝夕にみてもなつさふ山水のはやくも君につかへつるかな

右勝　　家隆朝臣

うきなからあれはそあへる君か世に數ならすとも身をは厭はし

山水にかきなかしてしさゝ浪はたれにもいかゝ立まさる

へき併左負也

千四百八十九番

左　　公繼卿

うれしくも其人數になかれきて跡をたつぬるほり川の水

右勝　　雅經

玉葉 あはれとてしらぬ山路はおくりきと人にはつけよ有明の月

いかはかり心の底にすみきけんみれは跡あるほり川の水

仍以右爲勝

千四百九十番

左持　　公經卿

心あらん人は中々住ぬへし浦のとまやに世をつくしても

右　如寶客得海　　寂蓮

見すしらぬもろこし舟の行ゑまて世をふる道は八重の鹽かせ

あはれさをなにゝたとへんと思まにもろこし舟の跡のし

らなみ但可爲持歟

千四百九十一番

左　　季能卿

[illegible]

右勝　　家長

君か代に此ことわさは山城のとはにあひみん和歌のうら人

[illegible]

らなみ以右爲勝

千四百九十二番

左持　　宮内卿

身のうさをかくてもやみになしはつなあふく心をみくまのゝ月

右　　三宮

かきつくろ藻くつをいかゝ思らん涙になれたる和歌のうら人

みくまのゝ月をあはれとみる程に又袖ぬらすわかのうら

波仍爲持

千四百九十三番

左勝　　讃岐

老のなみなを立出るわかのうらにあはれはかけよ住よしの神

右　　内大臣

年をへてこしかたのみそしのはるゝあらましかはと思ふ人ゆへ

こしかたを忍ふもいかゝ老の波にあはれかくへきすみよ

しの神若可左勝歟

千四百九十四番

左持　　小侍從

命こそうれしかりけれ和歌のうらの又人なみに立まじりぬる

右　忠良卿

いなみしとわかいふ涙立ましけり思ふあまりいまもしき草哉

とにかくにしけく成ぬるうら涙の耳なれぬれはめにもた
たれす爲持

千四百九十五番

左　持　隆信朝臣

位山のほりたちにし椎柴の道にまよひて老にけるかな

右　兼宗卿

いかて猶思ふ心なとさまして道ある御代にあふ身とならは

あはれなるなふさしいひ思ひし哉なさけなから人にこ
れつゝ可爲持也

千四百九十六番

左　持　有家朝臣

おもふ事しはしなくさのはま千鳥跡こそかよへ和歌のうらはに

右　通光卿

われなから蘆邊をたつのさしもやはもくつをよする和歌の浦風

はま千鳥あしへのたつもおしなへておなし道なるわかの
うら哉仍持也

千四百九十七番

左　保季朝臣

數ならぬ袖をはつる君か代にあふうれしさをつゝみなからも

右　勝　釋阿

いかにしてうき身なからに君か代の千世の始のけふにあふらん

君か代の千世のはしめにくらふれはけに數ならぬ袖とこ
そみれ仍左爲負

千四百九十八番

左　良平

人なみにたち出なから和歌の浦にかゝる藻屑はあらしとそ思ふ

右　勝　俊成卿女

こきはなれ行月影もあはれなるむしあけの松の風の音哉

月に聞むしあけのまつの風の音やつれのうらには吹まさ
るらん以右爲勝

千四百九十九番

左　具親

續古今　いそのかみふるの中道立歸りむかしにかよふ大和ことの葉

右　勝　丹後

君か代にとまらん名こそうれしけれはかなき鳥の跡とみるとも

磯のかみまことにふりて見ゆる哉とまらん鳥は跡有ぬへ
し仍右勝

千五百番

左　勝　顯昭

思事今こそなけれ和歌のうらにあつむもくつも花さきにけり

右　越前

年もへぬその月よみをたのみこし心のやみはいつかはるへき

君か代のひろきめくみにあひぬれは思ひもあらしやみも
はれなん仍持

勅なれはなにはのこともいなひれと
よしあしにこそなたまよひぬれ

千五百番歌合卷第二十終

集外三十六歌仙

是はかけまくもかしこき　後水尾の上皇のおり居させ給ひし比の御すさひにして神なを日の直き御心に白妙の雲井の人は置せ給ひ御下司よりして世捨人等のやまと歌にかしこかりしを三十あまり六軸に撰はせ給ひて東福門院の御屛風の色帋におさせたまへりしを今世につたへなから長柄のはしの橋柱の波に朽なんも本意なくこたひ風齋老人とはかりて櫻木にうつしおのれ／＼同しこゝろのひとにたよりすみつかきのひさしく玉椿の八千代にもつたへてむとねかふことしかなり

安田貞雄花押

左

嶺炭竈　平常緣
たちのほる煙ならすは炭かまなそこともいさやみねのしら雪

殘花　津守國豐
よし野山ところせきまてみしひとの散々になるはなのふる郷

山月入簾　淨通尼
秋の夜のつゆの玉たれひまなおらみもりくるものは山の端の月

春祝言　柴屋宗長
青柳のなひくを人のこゝろにてみちある御代のはるそのとけき

寄舟戀　月村齋宗碩
こかれ行ふねなかしたるおもひしてよらむ方なき君そつれなき

月前鴈　永閑
きゝそむる雲井の鴈の聲よりもおとろかれぬる月のかけ哉

曙雪　沙門正徹
しらさきの雲井遙かに飛きえておのか羽こほす雪のあけほの

初逢戀　沙門正廣
錦木の外にひとりの月のふけぬらむ夜ころのまていく渡た／＼れて

浦擣衣　耕閑齋兼載
秋ふかくなるなのうらの蜑人はしほたれ衣いまやうつ覽

冬野　太田持資
かり衣すそのゝ原の花すゝきほの見しかせもしもかれにけり

寒蘆風　三好長慶
なにはかた入江にわたる風さえてあしの枯葉のおとそさむけき

旅宿霰　宗祇
風まぜにあられたはしるさゝ枕ゆめもむすはぬ旅寢わひしき

關雪　伊達政宗
さゝすとて誰かは越むあふ坂の關の戸うつむ夜半のしら雪

梅香留袖　從興
誰か袖に匂ひをふれて散殘る色香すくなきにはの梅かえ

遠里鷄　里見玄陣
遠かたにゆふつけ鳥の聲すなりいさその里に宿りとらまし

待花　佐川田昌俊

よし野山はなまつ頃の朝な〳〵心にかゝるみねのしら雲

山家初冬　尚證

やま賤の閨けの煙うちしめりしくれしそらにふゆはきにけり

月思往事　木下長嘯

世々の人の月はなかめしかたみそとおもへは〳〵ぬるゝ袖哉

右

閑月　種玉庵宗祇

清見かたまた明やらぬ關の戸を誰ゆるせはか月のこゆ覽

月前述懐　沙門心敬

こしかたも歸るところもしらぬ身をおもへはそらにみする月哉

荻驚夢　櫻井基佐

さひしさの種をそうゑし宵々にゆめおとろかす庭の荻原

月前述懐　牡丹花肖柏

おもふこと櫻かさしゝみや人のかつらたをらぬ月のうらみは

山下燈　蜷川親當

くれて社人すむ庵もしられけれかた山かけのまとのともし火

曉神樂　安達冬康

うたふ夜のあか月ふかく聲ふけて神代なからのすゝの音哉

佛名夕　修江齋紹巴

夕々ほとけのみなをとなへつゝつみもきえ行衣手のつゆ

初冬時雨　宗牧

けふつゐに秋の時雨のあらましをそらことにせぬ冬は來にけり

田鹿　細川玄旨

さすかまた小田もる賤も鹿の音の遠さかるをはしたひてや聞

行路時雨　沙門心前

かへりみるあとの山風ふきしほりやかて時雨のみちいそくらし

柳　毛利元就

あをやきのいとくり返すそのかみはたか小手卷のはしめ成らむ

閑居　北條氏康

中々にきよめぬ庭はちりもなしかせにまかする山の下庵

松間花　武田信玄

立ならふかひこそなけれやまさくら松に千とせの色はならはて

寄松祝　北條氏政

守れ猶ひこかれてすみよしのまつのちとせもあふへき代の春

河上五月雨　今川氏眞

よし野川瀨々のしら浪岩越てこすへにかゝる五月雨の雲

寄枕戀　里村昌叱

あはれともうくとも今はなれなしもしる人にせむ小夜の手枕

河邊寒月　小堀政一

かせさえてよせ來るなみのあともなし氷る入江のふゆの夜の月

月　松永貞德

雪と見えはこゝのへの月にうからましよしみ吉野ゝ櫻なりとも

作者姓名

左方

平常緣　東下野守
津守國豊　津國住吉社人
淨通尼　足利將軍義晴公母堂
柴屋宗長　連歌師宗祇門人
月村齋宗碩　連歌師
永閑　追考
釋正徹　東福寺書記
釋正廣　正徹和歌門人
耕閑齋兼載　連歌師蘆名氏
太田持資　左衞門大夫入道道灌
三好長慶　修理大夫
宗振　追考
伊達政宗　左京大夫
兼興　連歌師兼載門人
里見玄陳　連歌師
佐川田昌俊　永井信濃家士佐川田喜六ト云
尙證　追考
木下長嘯子　若狹少將勝俊

右方

種玉菴宗祇　飯尾氏東野州門人
心敬　北嶺十住心院連歌師
基佐　櫻井中務丞連歌師
牡丹花肖柏　連歌師夢菴
蜷川親當　新左衞門
安達冬康　三好長慶舍弟
紹巴　松村氏連歌師
宗牧　宗長子也
細川玄旨　式部太夫藤孝二位法印
心前　心敬門人
毛利元就　右馬頭
北條氏康　左京大夫
武田信玄　大膳大夫晴信
北條氏政　氏康子
今川氏眞　式部太輔
昌叱　里見氏連歌師
小堀政一　遠江守
松永貞德　細川玄旨和歌門人

右集外歌仙は近代歌仙とも云寛永の　太上皇御自撰にして詠歌は宸筆を下し給ひ畫像は狩野蓮長に勅して畫かしめたまひしも雲上月宮の御事なれはしるへきに非す人々の官職によりておろ／＼に圖せしむ和歌は松永貞德翁の男昌三子の廣澤長孝子に書て贈られしを我師六陽齋長雪居士まて相傳ありし秘本のままを許されて寫し置ぬ此歌仙の人々のめいはく昔の歌仙の人々にもおさ／＼劣るましく有難くも覺侍りぬ今世たま／＼みる所の詠歌の寫書損不少原本をもて改め正して世に普く弘めむと思ふ事久して果さす爰に安田貞雄の主の力にてこたひ梓とはなしぬ年比のあらまし成て老の悦はしさになし時に寛なる政も八といふ年の霜ふり月の事に祉あなれ

稻梁軒風齋

懷にまきおさめたろ文迄もしらろゝ御代にあふかかしこき

元丘本云
右歌仙者依二東福門院之御懇望一爲龍慰被レ染二宸筆一者也

寛文五年二月下旬　狩野内匠頭寫之

院御覽之後命狩野蓮長被レ製二畫圖一與二各詠一合往乎

山井圖書定量記之

慶長千首和歌　慶長十年九月　禁裏御會

春二百首

立春朝　御製（後陽成院）

さほ姫の霞の衣たちかへる春とはしろき朝ほらけかな

立春天　素然

君か代は猶のとかにと久方の空もかすみて春や立らん

立春日　同

今朝のあさけ天照す日の光より四方も曇らぬ春はきにけり

立春風　信尹

あふ坂の關吹こゆる山風の音羽の里も春やたつらん

立春霞　言緒

空もまつ春やきぬらん今朝はゝや霞と見ゆる四方の山の端

立春雲　實益

鳥か音に明行空は長閑にて雲路まとはす春や立らん

立春雪　總光

今朝きけは嵐は風に吹かへて雪のうちにも春や立らん

立春氷　道勝

吹もまた去年の嵐に音羽川氷のひまに春や立らん

立春水　智仁

あら玉の春たつ今朝の谷の水に君か千とせの契りむすはん

立春都　時直

山の端の霞にみせて九重の空はゆたかに春のたつかな

早春山　秀直

春の色はまたそれとしも分れぬを先山の端の霞そめぬる

早春關　雅朝

相坂は春の越來る關路にて今朝は霞の色にあけゆく

早春川　隆尚

立かへる春そと今やいはた川氷とけゆく水のしらなみ

早春湖　有廣

春はまた淺き汀と唐崎の松にもかすむ色そすくなき

早春浦　最胤

春はまた幾日もあらぬ空よりも氷吹とく志賀の浦風

野子日　實顯

宮人のころもの袖も紫の野邊にむれゐていく子日かな

子日松　季繼

引かふる子日の松のふかみとり千年の春の色そこもれる

子日祝　茶地丸

ひかぬより千年の影と見ゆる哉子日の野邊の松の緑に

山霞　光廣

なかめやるおもかけ消て此頃はまちかき山の霞をそ見る

嶺霞　通村

咲ぬへき比とはなきを春といへは嶺の霞を花かとそみる

野霞　道勝

春日野やたとる〳〵も分まよふ袖は霞とひかれてそ行

關霞　爲滿

あふ坂や關のこなたの杉村につたへし雲やまつ霞むらん

徑霞　　時慶

詠めやる道は絶しを行人の袖にさはらぬ霞なるらん

橋霞　　雅勝

春風のとたえみせつゝ杉むらも霞にこもるふるのたか橋

江霞

難波江や音も長閑に浪の上の霞たゝくゝるあまの釣舟

瀧霞　　季繼

春霞吹とく風に音羽山瀧のしらいと亂れそふらし

河霞　　秀直

さすさほのよるせもなにと白浪や霞こめたる宇治の川長

海霞　　定熈

よ佐の海や浪路を渡る舟人も春は霞や分まよふらん

湖霞　　道勝

朝ほらけ國津みかみのうら舟も霞にきゆる末のしら浪

濱霞　　永孝

もしほやく海人の住家もそことなく明る濱へは霞立なり

嶋霞　　素然

霞てはうつさん筆のあともなし名のみ繪嶋の春の明ほの

渡霞　　總光

明ぬれとしはしはまよふ舟人の宇治の渡りにたつ霞哉

里霞　　基任

柴の戸も霞の下に埋れてなを奥ふかし春の山さと

舊巣鶯　　實條

春淺きこゝろなしりて谷の戸のふるすを出ぬ鶯の聲

初鶯　　雅庸

千里にも鳴て春をや告ぬらん今朝ほころふる鶯の聲

雪中鶯

聲はまた雪のふるえの梅か枝になれてもうとき鶯の聲

曉鶯　　智仁

ねやちかきやとりしられて曉の枕よりきくうくひすの聲

朝鶯　　光廣

うち霞春の軒端の朝日影のとかにうつる鶯の聲

夕鶯　　宗勝

夕日影うつろふかたのくれ竹になれつゝきなく鶯の聲

里鶯　　秀賢

春寒きかた山里も梅かゝをとめてやきなく鶯の聲

山家鶯

山里に春さへ殘る朝霧にむすほゝれたるうくひすの聲

竹鶯　　信尹

朝なきは植しかきねの呉竹のよことにかよふ鶯の聲

寢覺鶯　　時慶

竹ちかき床の寢覺のさひしきになれて鳴音や老の鶯

野若菜　　雅朝

春淺き野への雪間のわかれをもつみは殘さて歸る諸人

原若菜　　爲親

いつる日のあしたの原は分てまつ雪間にしけきわかなをそつむ

澤若菜　　實益

けふはまつ野澤につもる白雪の消る方より若菜つみてん

水邊若菜　光豊

うす氷まつ解そむる澤邊こそよそに尋ねぬゑかれ也けれ

田若菜　同

すきかへす袖にはあらて山陰のあら田の面のわかなつむなり

岡殘雪　信尹

光さす雪間よりしも緑そふ松にならぶこの岡のをちこち

草殘雪　雅賢

日の移る交野は草の緑さへもえ出る迄を春の泡雪

木殘雪　信尹

み山木はまた其まゝの白雪の深きに淺き春そ見へける

餘寒月

大空に去年の嵐の殘るらん見るかけ寒き春の夜の月

餘寒風　水孝

吹とふく夜の間の風の名殘にやをのへには雲も春にきゆらん

餘寒水　景通

春しらぬみ山は風もなをさえて氷の下に[illegible]も川音

梅雪　貞恕

消るともはらはておらん梅かゝの雪もひとつに匂ふ春風

梅風　篤勝

軒ちかきこすにもれいる風ふけてたゝならぬ袖も匂ふ梅か香

夜梅　雅庸

明るかとまたなき出ぬ白妙に咲そふ梅の花の下ふし

故郷梅　之仲

故郷となりにし軒の梅かゝも春やむかしと花そ咲そふ

里梅　雅庸

暮てたに道もたとらぬ咲梅の香をとめてこせ小泊瀬の里

庭梅　爲滿

あかなくも鶯のねにさそはれて軒端の梅たにしはしたにみむ

簷梅　時慶

外にこそ匂ひたとめて立よらめ我すみならす軒の梅か香

隣家梅　尊政

中垣をへたてにはあれとかほりさへとなりの花もわか宿の梅

梅移水　同

梅の花うつろふ蔭に立さらしなられぬ水に袖ひたすとも

梅香　光豊

咲出る一本ゆへに花さかり梢も梅の香ににほふなり

梅薰枕　智仁

おのつからふかき匂ひもふれにけり手枕の野の梅の下ふし

折梅　實條

折取なつゝしのみそ吹なくる匂ひもふかき梅の下風

若木梅　定淵

軒ちかきわか木の梅に今年より色香の春や知られそむらん

紅梅　實條

夕日影さすかたは猶さく梅のくれなゐふかく色やそふらん

落梅　素然

冬木より咲そめし梅はゆきなからおちて衣に匂ふ春風

柳露

春風はさもこそあらめ朝な〳〵露にもなびく青柳の糸

池柳

春ことに柳の髮も亂れてやうつろふ池のかゝみなるらん

門柳　　亘恕

青柳をうつし植たる門の前の緑にふかく誰かすむらん

岸柳

西東川邊の水に春の色のいたりいたらぬ岸の青柳

河柳　　信尹

早川の岸のよどみにくりためてかけもなかれぬ青柳の糸

路若草　　光廣

春にまつもえ出そむる若草を道行人ややかてむすはむ

岡早蕨　　時慶

もえ出る比は岡邊の里人の外にもとめすおろわらひ哉

樵路早蕨　　爲滿

くろゝ日をいそきても又こる柴に手折そへたる道の早蕨

山春月　　昌琢

曉の雲にたなびく影はおもさゝても霞を出るよの月

關春月　　秀直

名にしおふ空はかこたし分て猶霞の關の春の夜の月

江春月

たなやかに舟漕とめて三嶋江や涙にかすめる有明の月

春曉月　　智仁

霞そふ空かとみえし明方の影うすくなる春のよの月

春月幽　　爲勝

哀たれ春といひけん秋を置て時こそ有けれ霞むよの月

朝春雨　　信尹

降つみし夜の間の雪も軒に消て今朝春雨の音をそへけり

夕春雨　　光廣

さひしさの秋は程なく夕暮をなかめ侘ぬる春雨の空

谷春雨　　雅庸

緑そふる色を三谷の草木まて惠みにもれぬ春雨そふる

野春雨　　季繼

旅衣行衛そ遠き大江山いく野の道の春雨の空

旅春雨　　爲滿

さなきたに春もさびしき草の庵に猶音へぬるゝ駒はうらめし

春駒　　同

春雨のはるゝ市より青み出る草葉になれて駒いはふなり

岡雉　　季賢

名にしおふ入日の岡をたつ雉子朝鷹人をよきて鳴也

野雲雀　　兼勝

野をわけて霞こめたる半天にあかることはりゝ聲さすな也

踏雲雀　　敎利

くるゝまて野路のゆきゝやしけからん空に雲雀の聲のみそなく

歸鴈知春　　信尹

いつしかに秋こし嶺にかへる山南をあとの天津鴈かね

曉歸鴈　　亘恕

したふにもつれなく見えて行鴈の名殘かすめる有明の空

夕歸鴈　　兼勝

天津鴈夕の雲路別れつゝかすみの關もさはらてそゆく

夜歸鴈　言緒

かへるさは夜なこめてたにいそくらん雲路にまよふ鴈の一行

歸鴈連雲　實顯

遙なる行衛やまよふ白雲のこなたかなたに歸る鴈かね

嶺歸鴈　素然

分てこし峰の朝霧春は又はれぬ空にかへるかりかね

海歸鴈　爲滿

浦遠くなきたる朝は漕舟のほのかに歸る鴈の一つら

遠歸鴈　同

したふにも雲をへたてゝかへる山なにそはいそく天津鴈かね

歸鴈似字　雅庸

玉札なかきつらねしも見るはかり夕の空にかへるかりかね

歸鴈幽

雲に先つはさは消てかへる鴈殘るも聲や霞ゆくらん

春山　道勝

かすみつゝ花なき山も有明の春こそはるの綠なりけれ

春野　最胤

わきてその秋は草葉の花に見む野へもひとつの下燃の色

春關　基任

霞行汐のひかたの末かけてあかぬ詠めや須磨の關守

春行　貞恕

音羽川水も岩にうちいてゝ浪の花さゝ春の色かな

春海　爲滿

行衛なき舟のなかめや是ならん今朝は霞のうらの初嶋

野遊　宗勝

もりにしも立歸る哉すみれ草摘つゝ野へに春日くらして

遊絲　實條

長閑なる空にはまよふ色もなしと心のまゝにあそふいとゆふ

待花　永孝

あくかるゝ心はあやし年々にまつをならひの花としりても

栽花　素然

うへしうへに幾木の花もあかさらん吉野の春をおちこゝにても

尋花　道勝

尋ね行跡のり花のおもかけは道さまたけの嶺のしら雲

初花　光廣

待得ては猶そまたるゝ山櫻又たくひなき花の色かな

見花　信尹

心なな花にちらさて見る程に風ふかぬよの例をそしる

翫花　雅庸

色に香に染てもあかす木かくれに花を見はやす九重の袖

折花　秀賢

山守のゆるすこゝろそ哀なるおらぬも花の片枝ちるより

夾花　最胤

ましはれる心の色のほと／＼をわきてしるやと花にまはゆき

曉花　實條

夜を殘す空は空にて咲花のおほふ軒端そ先しらみゆく

朝花　永孝

玉簾また捲あへぬ袖にさへ匂ひはあまる花の朝風

夕花　雅　庸

なかめして永き日影もおもほへぬ花に待出る夕月夜哉

夜花　秀　直

暮るまて見るかうちより山の端の月もさしそふ花の色哉

山花　尊　政

しほりして入そあやなき奥山の花の匂ひをしるへとやせん

嶺花　貞　恕

白雲のかゝる嶺まて春はたゝおなし櫻の盛ともみむ

谷花　篤　親

水上の春もやすらふの谷川になかれいつらん花のしら浪

岡花　智　仁

雪霜の後あらはるゝ程そなき岡邊の松の花にむもれて

杜花

春毎に信太の森のさくら花千枝に咲そふ色としもかな

野花　道　勝

千はやふる神代の春も忍はれて三笠の野邊の花に暮しつ

關花　雅　庸

へたて見し都さくらと思ひ出ぬ咲そふ花のしら川の關

瀧花　通　村

雲井より落くる瀧と見ゆるもや高ねの花のさかり成らん

禁中花　尊　政

かけふかくいやかさなりて花さかりおほふは雲の上には有らん

社頭花　之　仲

色ふかく花のひかりの猶そひて春は櫻の宮居たゝしき

古寺花　信　尹

咲と見る枝より花のふる寺の軒の忍ふそ香にみたれつゝ

故郷花　素　然

ひとりのみなかむる花の夕暮に身な故郷の春やしるらん

里花　貞　恕

さく比は涙なれてすむ里の海人も花にゆかしき心成らん

山家花　道　勝

さく比は都のみかは柴の戸も花見かてらの春のともなひ

庭花　智　仁

人にまた咲ともしらぬ庭の面の花な尋ねて春風そ吹

閑居花　言　緒

奥ふかきたゝひとりゐの扉まてわかてや春の花は咲らん

花雲　智　仁

葛城や嶺のしら雲かさなるとよそには見ゆる花さかり哉

花雪　隆　尙

さきそへて下たれもせぬ色なれや梢にあまる花のしら雪

花枝

花梢　爲　滿

にほふより咲とやしらん吉野山花の梢に見へすは有とも

花本　宗　勝

散はつる跡もしたはむみよし野やなれてもあかぬ花の木の本

花根　定　淵

又もこん春にも契れ年にのみ楮の花は根にかへれとも

花挿頭　時直

手折るをも人なとかめそ花の枝をかさしにさして家つとにせん

花手向　榮勝

花ふさをさりし佛の手向とて朝な夕なにつみやかふらん

花麻　實顯

行春の折しも麻と散花はいつれの神の手向成らん

花袂　雅庸

山風の吹くるかたに大原や折てかへさの花のたもとは

花衣　素然

心にはよしあかすとも花の枝苔の衣に折はやつさし

花鏡

池水も花にこゝろやうつすらん鏡となりて影をやとせは

花錦　實益

三吉野は花のにしきと成りにけりきて見る人も今はさかりと

花匂　隆尙

吹風にうつりかはして咲花のあさき匂ひは一木たになし

花色　爲滿

たをやめのそむる衣と見るまてに紅にほふ花の夕はへ

花便　時宜

三よしのゝ里より奥も咲花の便まつ間そしつ心なき

花主　實條

春來てはとはれぬかたもとはるやと花を主になしてこそまて

花佛　光廣

さく花の面影見せて春風も匂ふはかりの峰のしらくも

花形見　素然

散ぬれは花の紀念のかひもなし春ならぬ色の花の白雲

惜花　雅賢

かれてより木末の花そおしまるゝちらぬも春のかきりと思へは

落花　資政

散花をまなくもさそふ山風や消殘る雪を又ふゝくらん

殘花　素然

咲殘る一木の色そ見せてける四方の花をも暮る春なれ

三月三日　雅朝

あひにあひて彌生のけふの花かつらそれとはかりに咲る桃哉

桃花　素然

花の色はもゝにはあらて三ちとせに咲てふ種や仙人の宿

梨花　隆尙

雨はるゝ軒のつまなし打ちりてこすのひまより風そもりくる

山田苗代

山水を心のまゝにせき入てつくるや賤か小田の苗代

路苗代　實益

賤のおか道のわき田の苗代に水せき入る手をもたゆます

河苗代　實條

おのつからゆく川水をせき入て春の苗代末はるかなり

夕蛙　同

みさひゐて色めもわかす暮る日の野澤の蛙聲かすかなり

田蛙　定淵

すきかへす春のあら田の水口に聲もすたきて蛙なく也
野菫　有廣
袖にたゝ露も亂れて春雨のふる野の原にすみれつむ也
夜菫　實益
我宿の庭におふてふつほすみれ花咲まてはつましとそ思ふ
摘菫　雅庸
けふことに入野はいかて里人のつみもつくさぬすみれ成らん
松下躑躅　信尹
石の中のおもひの色の下つゝしましはる松もけふりたつ也
躑躅紅　定熈
春もはやくるゝとしりて岩つゝし紅ふかき花そさきける
池杜若　實顯
花咲て隔そ見するかきつはた芦の葉ましろ池の汀に
澤杜若　爲満
せりつみし野澤の水に咲出ておりな隔つる杜若かな
欵冬露　言緒
家つとゝおもひなから山吹を手折れはぬるゝ露の玉川
夕欵冬　至勝
夕霞はれわたるより吉野川浪の底まてうつる山吹
路欵冬　實條
行袖の露もこほれて匂ふなり春の名殘の山吹の花
池欵冬　總光
池水の底まてすみて匂ふらし浪に色ある欵冬の花
川欵冬

大井川ゐせきの浪の山吹の花色衣かけてほすなり
嶋欵冬　爲親
橘の小嶋にさける山吹は色に匂ひのなをそふらし
岸欵冬　教利
清瀧やきしの山吹さきそひてよせくる浪も色やそふらん
里欵冬　信尹
いはぬ色に咲とはすれと玉川の里の名のりはしろき山吹
庭欵冬　光豐
庭の面は雨のなこりの山吹の花はちらぬも色そしほるゝ
籬欵冬　總光
おらて見む籬の外に咲あまりおきみたれたる山吹の露
夕藤　爲満
春日山夕は雲と見えてけり紫にほふまつの藤なみ
岡藤　最胤
梢にも咲かゝりつゝ風かよふ岡邊の松なこゆる藤浪
池藤　實顯
水の面に春を殘してさくよりもやかてうつろふ池の藤なみ
江藤　爲満
住の江や岸根の水の底まてもうつる梢にかゝる藤浪
浦藤　昌叱
底までもうつろふ色の藤か枝をおしてはいかゝ田子の浦浪
岸藤　季繼
住吉のきし根に藤の咲しより水の外なる浪そかゝれる
松藤　永孝

松の葉の色こそわかれ咲藤の花にもれたる枝しなければ

春欲暮　　雅朝

花鳥の色にも音にも惜まるゝ春も今はた日數すくなき

暮春月　　教利

暮て行なごりやはなき春の夜も有明方の山の端の月

暮春雲　　有廣

しはしたゝ暮行春を立こめていくへもかゝれ山の端の雲

暮春霞　　實益

いつしかに暮行春の山の端も霞もうすく棚引にけり

暮春鐘　　有廣

行春のあはれしれとや夕暮の空もかすみて鐘ひゝくらん

留春不駐　　道勝

花はちり鳥も古巣に行春の空にかすみのせきもりもかな

惜三月盡　　通村

留めえぬ春としりても今日の日のくるゝをいかて惜まさらまし

三月盡夕

暮て行春の餘波もけふのみと猶したはるゝ入相の鐘

三月盡夜　　貞恕

花鳥になれしまよひも限り有今夜はあたにいかてねなまし

閏三月盡

花鳥の色香にあかて惜む哉後のやよひのけふのわかれを

夏百首

首夏　　宗勝

ぬきかふるけふのならひと惜まるゝ心そふかき花染の袖

朝更衣

きのふ暮し春の名殘の今朝をたにしはしはかへぬ衣ともかな

更衣惜春

花染にそめし衣も立かへておしむかひなき春の色かな

餘花

木隠れをしらてや風の殘すらん若葉の中に交る一花

新樹　　雅朝

夏山の梢は露のそめしより緑の色も染とそ見る

路卯花　　同

卯花の咲る垣ねにくれはてゝ雪にそかへる小野の細道

籬卯花　　實條

さかり今と笆もたはに降雪の色をかされて咲る卯花

田家卯花　　時慶

かきねには月をまかひて白妙に卯花さける小山田の庵

卯花似雪　　之仲

消あへぬ雪かとそ見る山陰の卯花かこふ賤か棲を

卯花似月　　實顯

卯花の咲ぬる時は玉川やこの里のみの月かとそ見る

葵　　之仲

諸人の袖をつられて玉簾かくるあふひの比はきにけり

待郭公　光豊
心あらはまたれすとても郭公なかてに過しむらさめの空

尋郭公　為親
明は又尋ねやゆかむほとゝきす聲する里の遠の一むら

人傳郭公　道勝
人とはゝ人つてならぬ一聲とこたへまほしきほとゝきす哉

初聞郭公　智仁
此比と待しものから初聲におとろかさるゝほとゝきす哉

郭公未遍　為親
聲もまた稀なるころは過行もなをかへりなけ山郭公

月前郭公　信尹
郭公聲いやたかく成にけり月のかつらをやとりとや行

雲外郭公　雅賢
明方の雲をはるかにへたてきて軒端の山になく時鳥

雨中郭公　良恕
月にこそよしつらくとも郭公雨の夕の一聲もかな

曉郭公　定淵
ほとゝきす明ほのかけて鳴聲や寝ぬよの夢と紛れ行らん

曙郭公　尊政
郭公待し夕はつれなくも夢のうちなる明ほのゝ聲

朝郭公　秀賢
朝附日はつかにくもる村雨に一聲たとる山ほとゝきす

夕郭公　通村
ほとゝきす雲間に名のる一聲もあやなくまよふ夕暮の空

夜郭公　教利
あかす猶百千度なけほとゝきす夢路おとろく夜半の一聲

山郭公　永孝
行かたはいつく成らんむらさめの空はくらふの山ほとゝきす

杜郭公　實條
聲を猶おしまてもなけ郭公もりの下道くるゝ夕は

岡郭公　直勝
まこゝきすきなさはゆかし片岡の杜の下道小夜は更とも

野郭公　繁勝
川つらの涙にねし夜の舟とめて明る淀野にきく時鳥

原郭公　雅賢
一聲の名残をそしたふ郭公眞野の萱原分まつくさて

關郭公　有廣
あふ坂の關路越行旅人をかついさめてや鳴ほとゝきす

浦郭公　實益
ほとゝきす須磨の浦半の涙かけて聲をおします百千度なけ

渡郭公　智仁
さす舟のさほにも（こ歟）たへて郭公それかとそきく淀の渡りに

夢中郭公　有廣
きゝつともおもひ定めす時鳥只一…のたゝちは

寝覺時鳥　宗條
ね覺して物に紛れぬ聞くたにも幽なりけり山ほとゝきす

獨聞郭公　永孝
詠めつゝひとりたへぬる草の戸に哀をそへよなく郭公

郭公幽　秀直
しはしたにしたふかうちの一聲も空に消行山ほとゝきす

田家早苗　光豊
風たゆむ山田の庵に雨過てなひく早苗におもき朝露

急早苗　實條
秋來てやまつなひかまし小山田の中にもいそゝ暁か早苗は

早苗多
さなへとる伏見の小田の遠近の綠につゝく水の涼しさ

池菖蒲　通村
池水のふかき心もひきそふるけふのあやめのねとそしらるゝ

沼菖蒲　兼勝
いとゝしく幕行方はかくれぬの中にあやめも香にわくるらん

苅菖蒲　定熙
根もふかき池の汀のあやめ草苅殘したる方そすくなき

盧橘薫風　為満
玉すたれ透間もとめて吹風に花橘そにほひことなる

雨中盧橘　兼勝
風ふるゝ軒端の雨の音つれてむかし忘れすにほふ立花

簷盧橘　光豊
五月雨の軒の雫に立花の色さへ香さへしめる夕くれ

樗
花さけるあふちの梢雨すきて雲ゐる軒に風かほる也

夜五月雨　兼勝
つれ／＼の庵のうちはみしか夜もあくる程なる五月雨の比

山五月雨　為親
五月雨のそらは明行空なからわかれかれたる山の端の雲

杣五月雨　信尹
五月雨にたてにし音の谿も朽木の杣も絶やはつらん

橋五月雨　雅賢
かきくらし日數猶ふる五月雨に往來絶たる佐野の舟はし

江五月雨　秀賢
江の村も嶋となるまて浪よせて見るめそかはる五月雨の空

瀧五月雨　尊政
水上はそこともしらす五月雨に瀧の音せぬ山陰もなし

河五月雨　有廣
晴ぬへき空ないつとか松浦川かは音たかし五月雨の比

湖五月雨　隆尚
五月雨の雲かさなりて志賀の浦やむかふ鏡の山もしられす

浦五月雨　之仲
旅衣しほれそひたる五月雨にあまりなるみの浦のさひしさ

古宅五月雨
五月雨のふるき軒端は朽そひて音こそたへね露も雫も

夜水鶏　時慶
端居してやゝ更る夜の月影にたくひやはある水鶏鳴聲

夏夜　雅庸
影はやき月の御舟の入さなやしたひて見るも短夜の空

雲間夏月　信尹
ところ／＼月の下行浮雲はむら消見する夏の夜の月

水上夏月　最　胤
涼しやと見る木かくれな行水にはやけく月の影なさそひそ

樹陰夏月　道　勝
涼しさに袖にしられて今行けは月影なから森のしたつゆ

夏月涼　敦　利
しけりあふ竹の末葉の露の上に宿れる月の影の涼しき

夏月易明　素　然
難波かた芦のふしの間程もなくかりねに明る夏の夜の月

瞿麥露　尊　政
手ふるゝにこほれやせんと塵なたに拂はて置る床夏の露

庭瞿麥　隆　尚
故郷の庭のなてしこ塵なたにすへしと今は誰はらふらん

夏草露　秀　直
草ふかみ分入袖に夏にしも秋とはかりの野への夕露

杜夏草　實　顯
涼しさに分こそあかね秋もやゝちかき氣色の杜の下草

野夏草　季　繼
分行も跡なき野への夏草にかへる道なも又やたとらん

徑夏草　實　條
さすか又道ひとすしは殘りけり夏野の草の茂りあひても

庭夏草　光　廣
稀に見はおらぬ所とたとるまて茂りそひたる庭の夏草

夏山　兼　勝
休らふにあつき日影も夏山のおのへつゝきそ茂りそひ行

夏野　貞　恕
茂りあふ野中の道は花にいつれはけんともなき露の草むら

照射　基　任
夏山やしけみはそことますらおに幾夜おくしの影を見すらん

鵜河　最　胤
後の世のやみおもしれかゝ鵜飼舟しはしかゝりのはなる間にたに

夜螢　通　村
更る夜のおとせの里のいさり火に影あらそひてとふほたる哉

橋螢　隆　尚
立ならす橋の下水くれそめて螢みたるゝ風の涼しさ

水上螢　季　繼
雨はるゝ流すみ行澤水に影もみたれて螢とふなり

池螢　實　益
うちなひく池の芦間なほの／＼と風に亂れて螢とひかふ

江螢　定　熙
おのかその影なも友と難波江の濱にみたれて行螢かな

澤螢　基　任
かひなしやすたく螢の澤水にもゆるおもひなけたぬ螢に

浦螢　智　仁
暮ぬ間は葉かくれなりし芦の屋の浦に亂れてとふ螢かな

草螢　尊　政
夕風の吹も亂れて夏草の露かと見しは螢なりけり

螢似露　雅　朝
置露のちるかと見れは吳竹の葉分の風に螢とふなり

螢似玉　永孝
くれ竹の葉分の露と白玉と光まかへてとふ螢かな

蚊遣火　爲滿
[illegible]て宿にふすふる芥火の煙に[illegible]れて遠き蚊の聲

垣夕顏　時宜
たそかれの比にもなれは草垣にひもとく花の夕顏の露

池蓮　言緒
雨過る跡より風の音つれて池のはちすの露とちるゝ

氷室　同
立よれは夏こそなけれ氷室山猶下さゆるこゝちのみして

夕立風　雅庸
大江山雲吹なくる風はやみいく野にすくる夕立の雲

夕立雲　定熙
夕立の雲をさそひておほえ山いく野の末や風きほふらん

山夕立　實益
風あらくむら雲まよひ見れは又と山のみねにすくる夕立

河夕立　基任
まさりけるみかさも浪は川岸に濁るはかりの夕立のおと

夕立早過　宗勝
夕立の空かきくもり暮るかと見れは外山に殘る日の影

杜蟬　總光
白雨の音にまかへて蟬の鳴森の木陰に立そやすらふ

樹陰蟬

松下泉　雅賢
岩かねのたかねあまりにせき入く砌ゝしき松の木かくれ

々納涼　光廣
夏の日のあつさわするゝ夕暮は木陰の外も立そやすらふ

樹陰納涼　爲滿
降雨の名殘涼しく暮るまて立こそぬるれ木々の下露

納涼忘夏　基任
夕すゝみ夏なわすれて秋ふかき月なそいそくもりの下風

六月祓　素然
ぬさなかすみそきは夏のかきりにて身のうき瀬々や猶殘らまし

秋二百首

立秋朝　　　實顯

玉さゝの一夜へたてゝ朝またき秋きにけりとをける白露

立秋天　　　貞恕

天つたふひかりも今朝は秋きぬと誰里まては時を分らん

立秋日　　　實益

こゝろより秋や立らし今朝は又いつるひかりの色もかはれる

立秋風　　　榮勝

久かたの空に入日のかたふきて西吹風に秋やたつらん

立秋露　　　雅賢

淺ちふや秋立くれは袖に又かつ〳〵露のむすひそめける

初秋曉　　　信尹

涼しさを秋くるよひにおもひあへず風身にしめる明ほのゝ空

初秋夕　　　敦利

昨日けふはや音かへて吹風の身にしみそむる秋の夕くれ

初秋夜　　　秀賢

くるゝまはあつさに秋もしられぬをおとろかしけり床の小夜風

初秋雲　　　爲滋

暑きたくそいみ空にもよほして秋とて見ゆる雲の一むら

初秋衣　　　時直

葛の葉のうらめつらしき衣手にふるゝも涼し秋の初風

待七夕　　　隆尚

暮ぬ間のけふの空にも七夕の千とせふるてふおもひをやせん

七夕雲　　　實條

こゝろあらは立そひつゝも七夕のわかれをしたへ空の浮雲

七夕霧　　　最胤

七夕のあふ夜やいそく夕霧の先立わたるかさゝきの橋

七夕橋　　　隆尚

天の川紅葉の橋の色に出て忍ふともなきほしあいの空

七夕衣　　　總光

わかれ行星の契りそあはれなる秋さり衣ころもへすして

七夕船

一とせをおくりしよりもけふは

七夕後朝　　　通村

七夕のこゝろよいかゝ銀河となきわたりに今朝は成ぬる

曉露　　　之仲

稻荷守山田の庵の露の間もいをねすなくる曉の空

朝露　　　實益

秋の野はすゝき苅萱みたれあひて朝露ふかくなきにける哉

夕露　　　有廣

夕暮は草葉も物を思ひ出やしほるゝ色に露の置らん

夜露　　　爲滿

白露の置そふまゝに月清みよるは見よとや玉しきの庭

野露　　　基任

哀とも誰かこゝろをなく露のあたの大野のあたにちるらし

原露　　　光豐

やゝさむみあしたの原は名のみして夕もふかく露や置らん

徑露　雅　庸
誰袖か先分て入る跡ならんこほれし野への道の朝露

故郷露　秀　賢
蓬生も淺茅もかるゝ故郷は露の色さへなき所なき

庵露　總　光
秋風のたゆる跡より置そひて露のもり入原のかり庵

庭露　雅　賢
庭の面は影さやかなる夜半の月に光をみかく露の白玉

草露　爲　滿
折を得て秋の物とや置つらん草葉にあまる今朝の白露

淺茅露　素　然
とふ人の有ともわけやかれてまし名のみ淺茅か庵の夕露

苔露　敎　利
草も木も色かへ行をはいかにして苔路は露にみとりそふらん

袖露　兼　勝
萩すゝき分る夕はこほれても又つなくらん袖の上の露

枕露　秀　直
忘れしなかりねせし野の女郎花亂れあひたる露の手枕

夕荻　言　緒
夕されは軒端の荻の聲たてゝおとろかれぬるうたゝねの夢

夜荻　定　熙
秋の夜はまた床なれぬうたゝねに聞もならはぬ荻の音哉

江荻　爲　滿
我にも汐の入江の荻の葉の音こそかはれ涙やこゆらん

庭荻　敎　利
庭の面にそよき立つゝうたゝねの夢おとろかす荻の上の露

簷荻　尊　政
夕暮の秋の哀そたゝならぬ軒端の荻の聲聞しより

野萩　實　顯
ちらぬ間をいかに見すてゝかへらましあたの大野の萩の夕露

行路萩　言　緒
色もなきあさの衣も秋の野を分行袖や萩か花すり

河萩　尊　政
萩かえの露にちりきて色々にくたくる野路の玉川の浪

崎萩　時　慶
はる〳〵と露を分來てけふそ日に見そめの崎の秋萩の花

庭萩　最　胤
さをしかの聲もまかさに隔つなようへ置萩の花のさかりは

野女郎花　雅　庸
風かよふ末はあたにや女郎花くるゝさか野のなひき伏らん

女郎花靡風　智　仁
秋風になひくをみれは名にしおふあたの大野の女郎花かな

徑女郎花　尊　政
露ふかき道をは分し女郎花なまめきたてるかけの茂きに

岡薄　光　廣
穗にはまた出ぬものから白露のおかへのすゝき誰招くらん

原薄　貞　恕
亂れ行小笹か原の白露の玉をつらぬく糸すゝき哉

徑薄　雅朝
野をとなみ茂るまゝに穂に出て尾花か末の道そ絶行

闇荊萱　時直
岡野邊やしとろにしほれなみよるは誰ふみ分し跡のかるかや

荊萱亂風　爲親
なひくをもそのまゝならて秋風の吹みたしたる野へのかる萱

庭荊萱　尊政
うつろへる薄か袖にかくされて露も色なき庭の荊萱

闇薫風　雅庸
秋風の吹より花の百種に匂ひを分るふしはかまかな

闇露　時慶
分行にうちちる露に袖も又おなし匂ひの藤はかまかな

野蘭　道勝
露にけさほころひ出る藤はかま誰野を分てぬしと成らん

籬槿　永孝
草ふかき籬のうちは消やらて露をさかりの朝かほの花

暁虫
明かたの秋のねさめをことゝひて涙もよほす虫の聲々

夕虫　光豐
たへかぬる秋の夕のさひしさをなれもしりてや虫の鳴らん

夜虫　實條
更行けは霜ふかくなる秋の夜をうらみかほにも虫や鳴らん

野虫　信尹
百草の花にはなちてわた殿の西をさか野に移す虫の音

原虫　道勝
淺茅原色つく露のさかりにもふり出かたきすゝ虫の聲

徑虫　在廣
したひつゝ猶やきかまし春日野のをとろの道の松虫の聲

庵虫　爲綺
な[illegible]も[illegible]秋の哀やそへにならんなきそふ露ゝ草ふき庵

庭虫　光廣
百草の秋の花野をおのつから砌にうつむ松むしの聲

閨虫　尊政
更ぬれは身にしみて聞ねやの内に入かと近き虫の聲々

聞虫　永孝
虫の音にさそはれきつゝ諸人もくるゝさか野を分も殘さす

暁初鴈　總光
大かたの秋もかなしき暁にあはれもよほす初鴈の聲

夕初雁　光豐
近なるも夕ゐる雲の山の端に翅はきゆるはつ鴈の聲

夜初鴈

雲間初鴈　最胤
幾重ともしられぬ越の嶺の雲を分きて今朝は初鴈の聲

出初鴈　永孝
夢さます枕の山の明ほのにうらめつらしきはつ鴈の聲

嶺初鴈　之仲
常世よりいそく心や筑波根の嶺とひこゆるはつ鴈の聲

遠初鴈　同
あまとふはそれと見えしも初鴈のつはさ消行秋の夕暮

近初鴈　信尹
待よはりしはしまとろむ烏羽玉の夢路に近き初鴈の聲

初聞鴈　雅庸
いかにして秋霧深き雲の上に迷はて來つる初鴈の聲

初鴈幽　素然
秋風に雲間の聲そほのかなる先くる鴈の友やすくなき

朝鹿　智仁
さをしかのゆきてに歸る今朝とてやつれなき妻に鳴音成らん

夜鹿　實條
暮ぬれは秋のおもひを野邊に猶絶せしもなく棹鹿の聲

夕鹿　光豐
長き夜もかきりはあるを聲こめて明方しらぬ小男鹿の聲

山鹿　雅庸
秋の夜や明ほのならし山遠く野へより歸るさをしかの聲

谷鹿　素然
谷ふかみ猶夜を殘す霧のうちに今朝も妻とふ棹鹿の聲

岡鹿　總光
暮ぬれは端山出つゝ岡こえの道をふしとに男鹿鳴也

野鹿　兼勝
里近き人けいとはすなれにける小鹿の聲の近き春日野

原鹿　爲滿
聞は猶秋のおもひやそひぬらん山田の原のさをしかの聲

海邊鹿　同
淡路潟なれも身にしむこゝろとやかたふく月に棹鹿鳴らん

田鹿　信尹
なれて聞田つらの庵は守人のあはれしらるゝ小雄鹿の聲

野鶉　總光
露に野はそこともわかす草深きかたを鶉の床と定むる

江鶉　爲滿
風かよふ眞野の入江に秋更て夢をはなれすなく鶉哉

里鶉　信尹
露霜の床をうつらと鳴よりもけに夕暮の深草の里

曉鴫　同
篠枕とてもねられぬ曉の霜うちはらひ鴫の羽かき

澤鴫　道勝
旅ねをそうきかきりとや明すらん澤邊の鴫の夜半に鳴聲

田鴫
長き夜も明むとするに小山田の鴫の羽かきかそふ枕に

秋田風　秀賢
うへてかつ早苗にみえし秋風の穂に出て吹比もきにけり

秋田露　時直
門田よりひたのかけ縄引程や稻葉の露もこほれそふらん

秋雨　智仁
憂秋の淋しきやとも立出ん空こそなけれ雨の夕は

山霧　兼勝
玉ほこの道の行ても分かぬまて霧にをくらの山のはるけさ

野霧　　　　通村
むさし野や行末となくたつ霧に猶しほれそふ旅衣哉

關霧　　　　亘恕
明やらぬしはし空にも殘る夜の霧な戸さしの相坂の關

河霧　　　　道勝
山風の吹なかしたる夕霧にむすひやかへる川浪の音

浦霞　　　　信尹
秋風のさそへはやかて霧の海のひかたにうかふ遠の浦々

駒迎
相坂の山立出んきりはらの駒うち渡す瀬多の長橋

八月十五夜　　　　亘恕
かそふれは秋の最中は今宵そと空にも見する月の影哉

夕月
半天にひかりやなはむ夕くれはまたほのかなる山の端の月

夜月　　　　雅賢
末遠くなくる野風に霧晴て影もくまなき秋の夜の月

曉月　　　　實條
立まよふ霧はあらしの空に晴て曉となく月そ殘れる

山月　　　　茶地丸
月影の澄こそまされおのつから雲ゐぬ山の夜半の嵐に

嶺月　　　　宗勝
雲霧はたちも及はし風越の嶺にくまなき秋のよの月

谷月　　　　道勝
雪とのみ影こそまかへひかりなき谷とやはみん月の下道

杣月　　　　爲親
分入もしけきみ山の杣人や月をまちつゝ杣木ひくらん

岡月　　　　秀直
紅葉々の色をそへつゝ片岡のもりくる月の影さやけき

杜月　　　　季繼
月はなを袖ぬらすとも立よらんなかめし野田の杜の雫に

野月　　　　總光
木隱れはさはり有とや廣き野に出つゝ月の影を見る哉

原月　　　　雅庸
露なからかたしく袖にやとし見る月も幾世の武藏野の原

關月　　　　光豐
旅ねする夢をとをさぬ板間こそ不破の關屋の月の明方

徑月　　　　兼勝
ふむあとを惜むはかりに行やらて雪かとそ見る月の下道

橋月　　　　定淵
月のため浮雲はらふ行衛とて濱名の橋を風わたる也

水邊月　　　　光廣
河風の音もなかれて行水の底まてこほる秋の夜の月

池月　　　　雅賢
風の音の更行まゝに澄影もます田の池の秋のよの月

澤月　　　　定淵
影やとす澤邊の水のすさましく月に吹そふ秋の夕風

沼月　　　　信尹
月見てもあやしかりけり更る夜に冴野の沼の秋の水は

江月　智仁
曇りなき光はやとに蘆の葉の露の玉江の秋の夜の月
渡月
一ふしを月にうたひて友舟のゆらの戸渡る聲聞ゆなり
田月　信尹
くるゝより露をきわたるむしろ田のうへに玉しく夜半の月影
都月　尊政
見る人のこゝろにわくや天の原へたてぬ月も都なりけり
禁中月　素然
雲の上や二たひかゝる月を見て明らけき世の惠みをそしる
社頭月　定淵
照月も空に光をやわらけて影さしそふるみつかきの内
古寺月　實顯
鐘ひゝく曉わけてかつらきやとよらの寺の月そさひしき
故郷月　實條
故郷の軒端に月のやとりてや忍ふの露に影みたるらん
村月　隆尚
あまのすむ里ひとむらはもしほたく煙にしるし月そ曇れる
里月　永孝
名にたかき月のかつらの里人は外にもとめぬ光をや見る
山家月　定淵
柴の戸のうきにたへたる夕暮を更に催す月の影かな
庵月　宗勝
秋更る山田の庵にかたふくや月影寒き軒の松風

庭月
とふ人を松の戸ほそに詠侘ぬ月の雪には跡もおしまて
瀧月　信尹
山姫のひろは紅葉を染て又月にさらせる瀧の白絲
河月　智仁
川の瀬に流れてはやき月影をしはしもとむるしからみそなき
湊月　同
船よせて愛こそおかね橋立や與謝の湊の月澄る夜は
湖月　秀直
浦風の吹たつ浪に影とめて月もよりくる志賀の辛崎
浦月　爲親
夜もすから猶しほたるゝ海士衣うらなきつゝも月や見るらん
濱月　光廣
秋風も眞砂に落てくもりなき月のひかりや吹上の濱
礒月　季継
旅ねするいそへの秋の夜々はなかめ侘たる月の影かな
汀月　尊政
浦浪のかくるゝ影もさそはれてみきはのかたは月そさひしき
崎月　素然
行暮ぬ此まゝにてや三輪か崎今宵の月に家は有とも
嶋月　眞恕
海原の浪よりくれてすむ月の八十嶋かけて行こゝろ哉
潟月　同
浪のうへに月の光はみつしほのひかたくもらて浦風そ吹

泊月　　為満

行やらて幾夜あかしのとまりにもあかぬは月の光也けり

井月　　信尹

山の井の浅き水にもいかなれは底なふかめて月やとるらん

閑月　　時慶

小夜風のよしや吹ともねやの戸をさし入月は詠めすてめや

隣月　　最胤

とはいやな軒端ならふる宿にしもそなたの月はわきて澄やと

閑居月に翫　　實條

ともし見る人たにもなき蓬生の宿には月の影そしつけき

船月　　雅朝

秋の水もみとりの色に空晴て月に掉さす淀の川長

惜月　　為勝

明方の月の光は晴ては、空に見し後の山の端そなき

夜擣衣　　光廣

手枕の夢をさそひてから衣打もねられぬ夜半の小莚

里擣衣　　長恕

音なこい里にひゝきて夜な寒みね覚にきけは衣うつ也

聞擣衣　　秀直

里人のうちはよはらて秋風のたゆみはたゆむ麻のさ衣

遠擣衣　　總光

なかき夜をともに明せと絶まなく村を隔て衣うつなり

近擣衣　　言緒

秋もやと更行まゝにならへすむ隣の里も衣うつなり

秋夜長　　信尹

いにしへをかたるにむへも残る夜や言の葉つきぬ長月の空

野分　　素然

色々に野分の風のなるまゝに千種の花のあとかたもなし

葛風　　基任

さを鹿も恨みをそへて妻こふる聲さそひくる葛の裏風

深葛　　雅勝

朝霜ははらひはてゝも道は猶しからみかくる葛の葉かつら

垣葛　　雅庸

とはれぬをおもふ心のまつかきに恨みをそへて葛ははふらん

野草欲枯　　素然

かれむ色を秋よりかれておもひ草尾花かもとの霜結ふなり

栽菊　　尊政

山人もあめてなを菊の花の種うふる砌の秋はつきせし

菊露　　通村

うへて見る筒もたはに置露の色をそへたるしら菊の花

山菊　　兼勝

仙人のすみかなるらし谷陰のなかれもにほふ菊の下水

谷菊　　雅賢

分入てたれかまほらし人しれぬ三谷に咲る菊のさかりを

水邊菊　　實條

山川の岸ねにさける菊の花露や落そふ水にほふなり

尋紅葉　　同

花のとき松に交れる山さくらもみちやすると尋ねてもみよ

初紅葉　實條
露霜のまたド染はたしなへてひとつ梢の紅葉とそ見る

蔦紅葉　隆尚
染やらて先一しほに色めくや松の木の間の蔦ハ葉かつら

柞紅葉　有廣
染つくす色なもまたて柞原いかてあらしの吹ちらすらん

櫨紅葉　實益
露時雨かゝらぬ枝はなけれとも染てもうすき櫨の紅葉々

山紅葉　素然
涙そなきゝえはらぬ音ハ立田川時雨に山は色に出けり

峰紅葉

谷紅葉　尊政
山姫のしらてやそめもあへさらんまたうす色ハ谷ハ紅葉々

岡紅葉　素然
そめ染ハ時雨ハ程な分てけり松にならひの岡の紅葉々

杜紅葉　智仁
うすくこき色なはわかし下枝まて露も雫も森の紅葉々

行路紅葉
太山路に手折もみちハ錦きて花ハ都にかへるもろ人

瀧紅葉　季繼
はけしくも嶺ハ嵐の吹ならんとなせの瀧に紅葉散也

川紅葉　光廣
あしひきの嵐も間なく大井川先かけうかふ木々ハ紅葉々

岸紅葉
三室山岸根ハ紅葉散にけり嵐や秋なさそひゆくらん

古寺紅葉
紅葉する豐等ハ寺ハ入相の聲も色あるかつらきの山

遠村紅葉　時慶
なちかたハむらに林は隔ても梢は近きもみち葉ハ色

里紅葉　雅庸
露時雨そめつくす色もうすき紅葉霧に小倉の里ハ一村

垣紅葉　智仁
紅葉にや時雨ぬるゝまも岩かきハふかき雫に色なそふらん

庭紅葉　季繼
なくゝ露ハ庭ハ梢ハ下染も時雨やふかき色なそふらん

簷紅葉　道勝
分てこゝ山な初にかけほしてさなからなハか軒ハ紅葉々

松間紅葉　宣勝
さたかなる松ハ木ハ間ハ夕日かゝみねに尾上ハ紅葉々ハ色

竹間紅葉　道勝
陰おほふ窓ハ呉竹なびかすは峰ハ紅葉ハ色な見ましや

紅葉暮雨　永孝
夕日さす木々ハ梢はたびゝゝハ時雨な見する下入夜らん

紅葉映日　雅庸
さやかなる夕日にむかふ色そこき分てなからハ嶺ハ紅葉々

紅葉移水　同
うつろへる色はさなから立田川水にねさしの木々の紅葉々

紅葉如錦　光廣
よそめには折えてかへるもみち葉を故郷人の錦とやみん

暮秋風　敬利
うらかるゝ淺茅か末に吹風も色に成行秋の夕暮

暮秋雲　信尹
久堅の雲のはたての物おもひもくれ行秋をかきりともかな

暮秋露　有廣
くれて行秋の末野の白露やかつ／＼霜に結ひかふらん

暮秋雨　素然
暮てゆく秋の名殘の雨の音やかて時雨に聞やかへまし

暮秋霜　信尹
日にそひて森の葉は落からす鳴霜みつ空を秋そ暮行

九月盡夕　尊政
紅葉吹嶺の木からしまてしはしけふの夕の秋の形見に

九月盡夜　雅朝
曉のかねをかなしむ春もまた秋をかなしむ夜半に成にき

九月盡曉　實條
おしめともかきりある夜の曉に鐘を名殘に秋やくるらん

冬百首

初冬曉　光豐
よな／＼の霜のをきゐのかさなりて冬そとしろき曉の空

初冬朝　兼勝
冬くれは木のは亂れて朝な／＼秋の時雨に音やそふらん

初時雨　貞恕
今朝よりは日影も寒き山のはの時雨に冬の空そしらるゝ

山時雨　有廣
跡もなく嶺には雲も晴なからかく山もとや猶時雨るらん

嶺時雨　定淵
一とをり時雨て晴る跡もなし又立かはる嶺のしら雲

谷時雨　兼勝
谷の戸に絶すおりゐる雲よりや時雨るゝ跡も又時雨るらん

杜時雨　爲親
朝朗うかへる雲に三冬たつけしきの森の時雨てそ行く

關時雨　尊政
あれまさる不破の關屋の板庇いたく時雨の雨そもり入

野時雨
夕時雨まなく矢田野に過にけりあすや有乳の嶺の初雪

河時雨　時慶
川上の嵐につれて瀬の聲も更にそふ行夕時雨かな

里時雨
山の端にしくるゝ雲のかさなりて里はをくらの名こそかくれれ

聞時雨　雅賢
手枕の夢をはらひて幾度かねやの板間に時雨きぬらん

曉落葉　實條
見はつへき夢をさそひて明方に木の葉の音そ猶殘りける

朝落葉　秀直
風にのみちるにはあらす朝な〳〵霜にもぬれて落る木の葉は

夕落葉　實條
秋の色の木のはも今は殘さしと夕風さそふ木々の紅葉々

落葉隨風　實顯
木末をはらひつくすと見るかうちに又ふきたつる風の紅葉々

落葉混雨　爲勝
音は猶わかれぬもりの木陰哉時雨の雨も落る木の葉も

山落葉　道勝
風さそふ木の葉の後やしらるらん見さりしこたの山のすかたは

谷落葉　定熈
柴人のかよへる谷の下道もおち葉か色に踏まよふらし

路落葉　爲滿
淸めする秋の名殘をおもふなり踏分かたき道の木の葉を

橋落葉　道晴
谷陰はかよふともなき橋の上も霜に朽葉の色そかさなる

庭落葉　永孝
染殘す落葉の色やしらるらん置けるうへなる庭の朝霜

野霜　實益
秋に見しその色もなし武藏野の小萩も今は霜の下草

田霜　光廣
色なから冬まて殘る小山田の穗なみにしろく結ふ霜哉

庭霜　實條
さむき夜の程なしらせて眞砂地に深く見せぬる今朝の霜哉

草霜　尊政
浦浪やさこそさゆらし小夜更て松風寒き志賀のから崎

田氷　信尹
冬深き山田のそほつ音せぬや岩もる水の氷はつらし

懸樋氷　通村
山川のかけひの水の音せぬは木の葉に又や氷しつらん

冬寒月　同
空にしも見るたに寒き月影の氷の上にやとりてそ行

冬月冴　秀直
時雨にやふりかはりけん曉の霜にさえ行有明のつき

曉千鳥　敎利
浪の音にめさますすまの浦風に千鳥なきたつ曉の空

夜千鳥　宗勝
夜もすから浦風すくるあら磯に浪の千鳥や鳴さはくらん

河千鳥　隆尚
霧ふかきさほの川舟さして行方もわかてや千鳥鳴らん

浦千鳥　智仁
おり居つゝ浦のひかたもしほみては友にさそはれてたつ千鳥哉

濱千鳥　秀直
浪の音もたえしの濱のはま風に友やわかれて千鳥鳴らん

池水鳥　秀賢
霜さゆる夜はなし鴨の池水の涙のうきねに猶そ鳴なる

河水鳥　秀繼
紅葉々の折も殘らぬ川水に涙な色とるなしのつれ

夜網代　實條
かたしける霜も氷もさむからて網代に氷魚のよるや待らん

網代寒　同
かゝり火の影も消つゝ田上の網代の床に猶やさゆらん

竹霰　最胤
山風の軒端に竹な吹わけて窓によこきる霰はけしき

篠霰　定熈
吹風に音なはかへて更る夜の霰にさやく道のさゝはら

栢霰　之仲
雲さそふ風のたび〳〵栢木の杜に音して散あられ哉

屋上霰
夢絶て霰たはしる風の音に心くたくるねやの寒けき

寢覺霰　素然
降出し霰の音に夢絶てよはる枕そ覺とはなる

初雪　言緒
置霜のふかき色にはあらなくに今朝またうすき庭の初雪

山雪　最胤
雲も猶はれて明行大ひえや都にうつむ雪のふしのね

嶺雪　季繼
泊瀬山檜原のあらしさえ〳〵て嶺に雪けの雲そたゝよふ

谷雪　智仁
とふ人なまつとなけれは谷の戸の道ふり埋む雪もいとはし

杣雪　信尹
誰も見よ我立杣に墨染の夕な殘す雪のけしきな

杜雪　貞恕
かふ駒のあとさへ見えす降雪にかれて殘らぬ杜の下草

野雪　素然
行かよふ隣の里の道もなしあたりの野邊の雪つもる頃

關雪　兼勝
あらしふく秋な寒み相坂の雪ふむ道や駒なつむらん

河雪　雅賢
みたれあしもうつもれはてゝ白妙の雪に明行木の川つら

湖雪　敎利
熊にもふりくる雪に蜑人の舟こきかへる志賀のうら浪

浦雪　兼勝
浦風も松のあらしもしつまりて雪に志賀のからさき

濱雪　永孝
枯殘る荻の末葉も濱風に折つゝつもる今朝の白雪

嶋雪　雅庸
白浪もこゝかとはかり浮島やふりくる雪を誘ふうら風

田雪　實條
かり殘す田面はなくて今朝はにや稻葉にかはる雪の色哉

都雪　雅朝
日數のみふりつむ雪におほひえや西な都のあけほのゝ空

禁中雪　尊政
たとふへき詠めそあらぬかけ高き竹の臺の雪の明ほの

社頭雪　光廣
朝またき神の御前の榊葉のなひくと見しや雪の白ゆふ

古寺雪　雅朝
泊瀬寺嶺にも尾にも降つみて雪より出る入相のかね

里雪　經光
ふりつもる雪を花かとまかへつゝふむゐとおしきみよしのゝ里

故郷雪　最胤
野山にもへたてさりけり盧垣の吉野のみやの雪のあしたは

閑居雪　同
世の外に結ひ置きける住家をは雪とて人の問むものかは

松雪　定熙
冬ふかく成行まゝに降そひて松をもうつむ雪の色かな

竹雪　宗勝
吹風にしつまりはてゝ降くらす雪を閑の窓のくれ竹

杉雪　雅庸
積りてもそれとにしるし相坂の杉の梢の雪のむら立

檜雪　時直
みとりなる檜原か末はかきくもり降白雪の色にまかする

待場風　雅朝
風あらきかり場のすゑはくれはてゝ行方たとる雪のおち草

夕鷹狩　隆尚
折敷て旅寝やせましかりくらす交野の眞柴霜はなくとも

野鷹狩　言緒
けふもはやおしむかひなく暮にけり交野のみのゝ御狩せしまに

炭竈煙　通村
すみかまや立る煙も此ころは雪にすくなき小野の山里

遠炭竈　爲満
かよふへき道は遠へてふる雪にけふりはるかき奥の炭竈

爐火　尊政
眞木の戸のうちは寒さも白雪に埋火のみを頼む夜な〳〵

神樂　信尹
置霜に幾重ともなきかす〳〵にうたふ聲より曉の空

佛名　總光
さむき夜の更ゆくまてもとなへつゝ三世の佛の數やそへけん

年内早梅　實顯
こゝろあれや春をもまたす先咲に色香ことなる園の梅かゝ

年欲暮　秀賢
いとま有もいとまなき身もいそかぬなとてか年のしゐて暮行

夜歳暮　雅賢
行年を猶こそしたへけふの夜はゆふつけ鳥の聲をかきりに

山歳暮　智仁
年に今、なにはの山の峰の松雪の下にや春をまつらん

路歳暮　永孝
としもはやくるゝかきりに玉鉾の道もさりあへす袖はゆきかふ

川歳暮　光豊
月も日も流るゝかけの早瀬川はやくも年のくるゝ空かな

歳暮松　　素然

年くるゝ門の松さへあすは又春の緑そかつはそはまし

山家歳暮　　隆尚

山里は道も軒端もうつもれて雪にこもれる年の暮かな

閑居歳暮　　爲親

さひしさになれたる宿もむかふへき春をこゝろの年のくれ哉

老後歳暮　　素然

年ことにくるゝとはかりおしみきていつちの老を今そおとろく

惜歳暮　　基任

身のわさも何をなしきて暮はつることこをおしむ心成らん

戀二百首

寄天戀　　雅庸

見るになをうこく心は給にかける姿にたくふ天の羽衣

寄日戀　　信尹

年をへてあはぬつらさはいむことのおほき日よりや思ひ初けん

寄月戀　　雅朝

つれなきを頼むかひなく更々てまたれし月の（もカ）入方の空

寄星戀　　實條

心とけてあふとしならは彦星の年に一夜を身にも頼まん

寄風戀　　素然

行かよふ我身ならはや君かあたりあはれたよりの風にのりても

寄雲戀　　同

おもひいてゝまつらん物よとはゝとへ夕の雲の空なかめそ

寄煙戀　　智仁

あたなりし名にこそたゝめつゐ（のカ）身はおもひ消ての煙なりとも

寄霞戀　　爲滿

なれてたゝ人の心をしらぬかな霞の衣うすきちきりは

寄霧戀　　之仲

いつよりか人の心も秋霧の立へたてたる中と成らん

寄露戀　　雅賢

玉の緒のなかき行衞もしらぬ身に露のかことを頼むはかなさ

寄雨戀　　雅庸

我袖のひちかさ雨はをのつから人めを忍ふよすかとそなる

寄霜戀　道勝

暮ことの霜そうつろふ草の原人めもかるゝ中の秋風

寄霰戀　尊政

おもひねの夢おとろかす玉霰きえてや袖の涙ともなる

寄雪戀　實顯

はれやらす雪のつもるな心なるたくひかなしきわか恨み哉

寄稲妻戀　有廣

諸共にこゝろかよはゝ稲妻のひかりの間にもあひ見てしかな

寄曉戀　實益

なかき夜も明ぬとつくる庭鳥の聲をかきりのきぬ〳〵の袖

寄朝戀　宗勝

うき人の今朝のわかれの身にしみて涙の露そ袖に餘れる

寄晝戀

かけなきし契りもつらし朝露のひろますくらん命しられは

寄夕戀

形見ともおもほえなくにこし時の夕の雲そおも影にたつ

寄夜戀　最胤

あたなるはよそのかへさとおもふより小夜更方の音信もうし

寄山戀　智仁

夢にたにあふと見る夜は心せよ我かたしきの床の山風

寄嶺戀　道勝

侘つゝもおもふあたりの嶺の雲そなたに人のたよりとな見ん

寄谷戀　雅賢

かはく間も猶我袖は谷川にせかれてかゝる涙のむもれ木

寄岡戀　永孝

秋風も吹つたへてよ水くきの岡の葛葉の中のうらみな

寄杣戀　尊政

しらせはや色にいつみの杣山のふかきなけきになれるこゝろを

寄杜戀　頁恕

つたへてもへや恨みむ我やうきつゐにあはての杜のことの葉

寄野戀　有廣

頼めても人のこゝろの淺葉野にみたれなはてそ露のかや原

寄原戀　實益

うらみはや今夜もとはす秋の野の眞葛か原に風も吹なり

寄關戀　道勝

いつかさてとけてもねなん下紐の關路にまよふ袖の露霜

寄濯戀　素然

我にのみたゆると見せて淺茅原誰か中道にかよひなすらん

寄橋戀　信尹

うつゝにてよしや涙にしつむ身も渡ると見るに夢の浮はし

寄水戀　最胤

袖ぬれてなとしもかくはしたふらん岩井の水の淺き契りを

寄池戀　實益

おもひなます田の池のあやめ草ひくになひかぬ中のつれなさ

寄沼戀　通村

頼むそよそのかねことなわすれすは淺澤沼のあさきこゝろも

寄江戀　時慶

難波江のあしのほの見し面影を夢になしてもいかてわすれん

寄瀧戀　秀賢
我袖の涙は瀧と落ぬれとつゐのあふ瀬はそことしもなし

寄川戀　實顯
いつかさて色にもいてゝふかくのみおもひ染川渡りてな見む

寄淵戀　實益
絶すのみ落る涙にわか袖はふちとなりつゝ浮しつむなり

寄瀬戀　光廣
早川の見なきるふりもつれもなき人のうき世に渡りかねたる

寄湊戀　道勝
おもひなそふる涙にくちぬよの袖の湊の見るめからはや

寄海戀　雅賢
頼めてもとはれぬ夜は床の海の涙にぬれそふひとりねの袖

寄浦戀　素然
絶果て又はあふみのかたゝなるうらめしとたにいふよしもかな

寄濱戀
さてもかくつらき心なみつの濱に拾ふかひなき身ないかにせん

寄礒戀　光豐
しゐて猶つれなき人を松島の礒のなみ風ぬるゝ袖かな

寄渚戀　爲滿
こり須磨におもふなきさはそなれ松なれなは又も名にや立らん

寄崎戀
一夜とはなとて契りし箱崎やあけてうき名の立ん身なるに

寄嶋戀　茶地丸
朝な夕な忘れもやらぬ面影によもきか嶋も遠くからぬかな

寄潟戀　信尹
つゐにさてしほひのかたにはなかりけり涙の海に下草はかりや

寄泊戀　言緒
行末をかけて契りし心さへうきからことのとまりはてめや

寄渡戀　實條
なき名たゝ淀の渡りのよとみつゝ流るゝ水の思ひとそなる

寄岸戀　實益
朝夕に松は久しき住よしのきしこともなき人のつれなさ

寄石戀　通村
うきことのまた打出ぬさゝれいしの中の思ひの絶ぬ身にして

寄砂戀　秀直
いつかさて恨みないつもつくさまし濱の眞砂を有數にして

寄巖戀　光廣
あひおもはゝ岩ほか中にすむとてもつきぬ契りの蟲や賴まむ

寄田戀　智仁
我おもふおもひはいつか秋の田のほにはあらはれて色に側れん

寄都戀　貞恕
おもふ人すむとしきかは和田つみのたつの都もいとはさらめや

寄禁中戀　秀賢
御溝水にかきなかしぬる紅葉々なひるふや深きえにし成らん

寄社頭戀　爲親
忘るなよ神のやしろの木綿襷かけて誓し末とおもはゝ

寄寺戀
小泊瀬のいゐるこゝろのあさからぬしるしたを見する契ならすや

寄里戀　光廣

こぬ夜半はおほつかなしや住里をたとらぬはかり我にをしへよ

寄庵戀　秀直

稀にしもせめてとはれは笹の庵の身のうきふしをいひや出まし

寄門戀

忍ふとも人なとゝめそ妹か門たよりにうたふ中とおもはゝ

寄戸戀

おさまれるよとやこたへむ人とはゝ槇の戸さゝて下待し夜は

寄垣戀　隆尚

隔てなきこゝろともかな人しれす頼むる方の里の中かき

寄籬戀　定淵

つゝめとも籬のひまのかたみにももるゝ涙の袖いかにせん

寄庭戀　爲親

いつしかにとひすてらるゝ中道やはしめて深き庭の淺茅生

寄井戀　實條

山の井の淺からすのみ結ひつゝ絶ることなき契りともかな

寄屋戀　素然

人つまといつなりはてゝ東屋のまやのあまりにつらさ見すらん

寄柱戀　信尹

いかにせん契りあさきの眞木柱われてもあはむたよりなき身を

寄簷戀　雅庸

いかにせん茂る軒端の忍ふ草露のみたれも外に見えなん

寄窓戀　同

かゝりせは頼ましものを足たゆくとふにこたへぬ窓の内かな

寄床戀　之仲

すさましき床とこそなれかりにたに拂はぬ塵のやまぬなけきに

寄閨戀

寄隣戀　爲滿

蘆垣のまちかき中も恨みある人のこゝろのへたてはかりに

寄簾戀　雅賢

恨みわひ落る涙の玉すたれおもひかけても人そつれなき

寄初草戀　雅朝

手につまん程もはるかの初草に生さきしるく頼めなき中

寄忍草戀　爲滿

ふりはつる軒端におふる草の名も忘るはかりの袖の露かな

寄忘草戀　有廣

わか中にいつうへそめし忘草さてしもふかき根さしなるらん

寄思草戀　季繼

花すゝきほにあらはれて思ひ草しのふと袖の色やしられん

寄月草戀　實晴

頼みてもかひこそなけれ月草のうつろひやすき人のこゝろは

寄下草戀　定淵

かくとたにいひはもらさて下草の下のみたれになるおもひかな

寄葵戀　有廣

つれなさやかけていのらん葵草なひくな頼む神の東に

寄菖蒲戀　雅晉

池におふるあやめの根さし我方にまつこゝろひく契りともかな

寄蔦戀　　　　　　　　　　貞　　恕

せめてさはみつの御牧の眞薦草かりにもとふと頼む夜もかな

寄菅戀　　　　　　　　　　宗　　勝

面影をほのかりそめにみしま江の茂る眞菅もわかおもひ草

寄葛戀　　　　　　　　　　季　　繼

すへかけて頼む誓もいつまてそかゝる眞葛の恨みありては

寄萱戀　　　　　　　　　　時　　直

つれもなき人の心はかるかやの露に亂るゝおもひくるしさ

寄淺茅戀　　　　　　　　　秀　　直

人の秋にあはさらましを命たに淺茅か末の露と消なん

寄蓬戀　　　　　　　　　　爲　　親

かれ〳〵になる身の秋を哀れともいつかとはれむ蓬生の宿

寄芝戀

いたつらにおもふこゝろは道芝や露と情は更にかゝらて

寄苔戀　　　　　　　　　　貞　　顯

頼みつゝとひけん人はまつかれや苺おふるまてなりにける哉

寄蘋戀　　　　　　　　　　敎　　利

心のみ下に亂れてうき草やたれも見ぬ人のえにしはかなさ

寄藻戀　　　　　　　　　　通　　村

涙のうへにたゝよふうき藻浮洗みいつをよるへの逢瀬とは見ん

寄桐戀　　　　　　　　　　定　　熙

人こゝろつれなきまゝに桐の葉のもろくも落る我涙かな

寄柞戀

心をはかたへの秋に見せそめし柞の色を我中にうき

寄櫨戀　　　　　　　　　　最　　胤

しはしその色になりてそ櫨紅葉人の秋なる名にや立まし

寄楸戀　　　　　　　　　　隆　　尙

身にそしむ楸ちるなる川原風淺夕くれをあはてきつらん

寄常磐木戀　　　　　　　　貞　　恕

いかなれは人のこゝろは常磐木のつれなき色にならひきぬらん

寄軸木戀　　　　　　　　　智　　仁

今はたゝ軸人のみそ恨なるわかなけきをは引もつくさて

寄宿木戀　　　　　　　　　時　　慶

あふ事もあらぬ歎きにやとり木のねも見ぬ末やつゐにかれなん

寄鹽木戀　　　　　　　　　言　　緒

いかにせんはこふ鹽木のこりすまにうらめしとても絕ぬ思ひは

寄朽木戀

寄埋木戀　　　　　　　　　素　　然

あふ瀨あらはいとはてよしや名取川身を埋木と朽なむにうし

寄鶯戀　　　　　　　　　　永　　孝

かきりなく忍ふもくるし今日はたゝ身を鶯の音にや立まし

寄雉戀　　　　　　　　　　尊　　政

聞からにあはれとそ思ふ春の野の雉子もおなし妻こひの聲

寄郭公戀　　　　　　　　　時　　直

待よひの更る恨のなみたをもことつてやらん山ほとゝきす

寄水鷄戀　　　　　　　　　時　　慶

ひとりねの戸ほそをたゝく水鷄かとつれなき人を思はましかは

寄鷹戀

名にしおふ鷹のつかひにことつてん我玉章をかけてかよへと

寄鶉戀　定凞

つれなきを恨とすれは我そまつ鶉の床にうきねをもなく

寄鴫戀　雅朝

きぬ〳〵の思ひもふかく身にそしむ曉しけき鴫のはねかき

寄鵙戀　智仁

頼めつるそのことの葉の末もなきしろへに似たる鵙の草くき

寄鳩戀　雅庸

哀とも人はとはしな夕〳〵鳩ふく秋の風のたよりと

寄鵆戀　素然

なにそもいもかかたみの浦千鳥なきてわかれし名殘なき身は

寄鳰戀　同

うしやたゝ我身にしらて鳰鳥のなき中川のよその契りは

寄鴛戀　貞恕

霜寒みつかはぬ鴛のおもひをもならふはかりの床のうへ哉

寄鴨戀　雅朝

身のうへに哀とそきく鴨のなくうきねの床の涙のまくらを

寄鵜戀　同

あた涙を人のこゝろの嶋つ鳥うきたくひとてぬるゝ袖哉

寄鷺戀　雅庸

たつ鷺の翅もかもな空に絶す思ふかたにもうかれゆかまし

寄鵲戀　同

稀なるもうらやましきは世々かけて契りかはらぬ鵲のはし

寄鷹戀　實益

いかにせん心もしらぬはし鷹のたかへる程になれるおもひを

寄山鳥戀　定凞

あはれしれおのへを分る山鳥のかほとはかりのおもひ有身を

寄鷄戀　永孝

たまさかの契りをしらてきぬ〳〵を八聲の鳥はなにいそくらん

寄鶴戀　雅勝

我もれに鳴こそあかせよるの鶴の子を思ふ道にあらぬ物から

寄熊戀　實條

思ひしれ人の心のくまよりも身をうつほ木のたくひにはして

寄虎戀　隆尚

身をかへて虎ふす野邊の末迄も待としきかは行きはおくれし

寄馬戀　季繼

うき人に見せはや牧の馬たにもやかて手なるゝ心よはさを

寄猪戀　貞恕

枕たにならぬとならはかるもかく伏猪の床になれてしもれん

寄鹿戀　教利

身のうへにたくへとそきく鳴鹿もおきふしつらき妻やこふらん

寄蝶戀　尊政

年月のあたの頼みをくらふれはそれも胡蝶の夢のたはふれ

寄蛙戀　信尹

いたつらに袖行水そ増りける蛙のあまた鳴田ならねと

寄螢戀　雅賢

かきりなく積るうらみは人もしれ螢とのみもゆるおもひを

寄祈戀　兼勝

契りてもむなしき床の夕暮に恨をそへてなくきり／＼す

寄松蟲戀　雅庸

夜な／＼にとはれぬ人を契りても身に松蟲の音をのみぞなく

寄鈴蟲戀　素然

人よいかに長き夜あかですゞ蟲のふり捨がたき今朝のわかれを

寄促織戀　光廣

誰ためにはた織蟲を戀衣かことやかけむ衿にてぬとて

寄蛛戀　尊政

さらてたにまたるゝ暮をさゝかにのいとゝ心やあくからすらん

寄蠶戀　智仁

いもにあはぬならひにみなもつらき哉哀桑子のまゆこもりして

寄我捫戀　有廣

うき人をしたふこゝろや我からと藻に住蟲の音にも鳴らん

寄玉戀　最胤

かゝはかりしほれやはせんひかりなき玉とそなきし人の心も

寄鏡戀　季繼

面影をしたふおもひのます鏡かけてへたてぬこゝろともかな

寄匣戀　基任

殘しなく見るもつらしな玉手箱あくとこしもなき形見なからも

寄櫛戀　隆尚

玉かつらかけはなれつゝさし櫛のさして頼まむ便たになし

寄鬘戀　宗勝

おもひ出て落る涙の玉かつらかけし契りの末いかならん

寄本結戀　信尹

生たむゝ行末となゝ契る哉初もとゆひに妹なさたまて

寄枕戀　智仁

逢夜あらは拂ひつゝさむ獨ねの枕の塵は山となるとも

寄席戀　素然

契らぬも人まつ夜半となくさめて獨と拂ふ床のさむしろ

寄衾戀　雅朝

ひとりのみきつゝそねぬる夢中に重ねもやらぬ床の衾に

寄衣戀　信尹

下紐のとけぬひそねはしられて猶衣の關を作そこえける

寄裳戀

こぬゝいもまつらの川にわかゆゝるもすそより猶ぬるゝ袖哉

寄鍛戀　兼勝

とたへぬる程も今はたゝめくりあひて恨みの中もとくゝ下組

寄帶戀　秀賢

結びえぬ契りそつらき倭は花田の帶のめくりあひても

寄書戀　尊政

返しなき程をはもとのおもひにて又見るふみに戀や剩さん

寄繪戀　定凞

たへ侘ていかにとかせんうつし繪にうつし見るともあかぬ心は

寄硯戀　有廣

忘られて打ふす床の硯にはなみたも水もわかれやはする

寄筆戀　之仲

かきりあれはかきもつくさぬ水くきの短き筆の跡そはかなき

寄笛戀　信尹

ぬりこめのうちにかよはす中たちにせめては笛の音をや頼まん

寄箏戀　雅庸

しるやいかに琴のしらへも片絲のむすほゝれたる胸のおもひを

寄弓戀　爲滿

年月は觸つもるともあつさ弓引かたありや我によりこぬ

寄簡戀　雅庸

はかなしやかきやる文も白眞弓やなみの數のつもるうらみは

寄扇戀　爲滿

したひ侘ぬ秋の扇と捨られて身の程なにと思ひしりても

寄隻戀　素然

忍ふへき道にとおもふかくれ簑名におくれなはなにか立なん

寄絲戀　總光

くり返しおもふはかりに白絲の結ひもとめぬ契りもそうき

寄笠戀　信尹

餘所にてはぬれ衣きると我宿の笠やとりにも立よらしとや

寄錦戀　實條

一筋におもふとすれとかひもなくにしきの紐そむすほゝれける

寄插頭戀　爲親

忘れめや香もなつかしき舞姫の袖のかさしの花のおもかけ

寄手向戀　智仁

身に契る結ふの神のうけぬへき言の葉もかな手向してまし

寄被麻戀

大ぬさのとる手にいのる末終にしるしあらはせ神のもろふし

寄木綿戀　雅庸

なひくやといのる心の行すゑも白ゆふかくる森のしめ縄

寄四手戀　實顯

つれなきもかけてはなれしゆふ四手の靡かぬ末を神に祈りて

寄注連戀　總光

あふ事と神のしるしも御注連縄かけてつらさを猶いのらし

寄車戀　基任

賴めなく行衞とならは小車のめくりあはむを身にや引かまし

寄船戀　光豐

物おもふうき身は海士の捨小舟よるへも涙の床となしけれ

寄[illegible]戀　爲滿

行末の猶いかならんこゝ舟のかちとるひまもあらぬおもひに

寄帆戀

便ある風を待得て行舟の眞帆にあひ見むこゝろともかな

寄碇戀　時慶

いかりおろす舟はたゆたふ浦浪の下にのみやは思ひはつへき

寄笘戀　光豐

おもひねの袖の涙のたくひかはかりほの笘の露も雫も

寄網戀

餘所に引人のこゝろはしら浪の立さはく浦の網のうけ縄

寄釣戀（本ノマヽ）

釣たるゝ舟も浪間にうけ繩の長きおもひに身を恨みつゝ

寄筏戀　永孝

よるへまつ身はいつまてか筏士の棹のひまなく物はおもはむ

寄篝戀　尊政
かゝり火の煙もともにこもるよとくるしきむれの内そこかゝろ

寄綱戀　言緒
こゝろなきあまの小舟の綱手さへひけはひかれて我によりくろ

寄繩戀　尊政
見るめたゝあらぬ恨みはつきせまや海人のたく繩くり返しても

寄[illegible]戀　爲滿
難波江の身をつくしてもかひそなき人の心もしろし見えれは

寄貝戀　總光
しらせすはいさしら浪のうつせ貝われてもあはぬ頼みなき身は

寄斧戀　爲親
あはてふる日數は更に斧のえもくちむ涙の袖の上かな

寄筌管戀　素然
忘られむ故たにもなし花かたみめならふかすにいらぬうき身は

寄燈戀　實條
卷こめて人に忍ふの玉札をひらくたよりもともし火のもと

寄鐘戀　敬利
契りをきてまつ夜更行閨の戶に猶うらめしき鐘の音かな

雜二百首

山榊　最胤
香久山の嶺の榊葉いつよりか緣もふかきかけと成らん

巖椿　隆尚
松かえの嶺に相生のたまつはき千世に八千代のかけそならへる

澗槙　秀直
幾年かかはらぬ色に槙の葉のみとりもふかき谷の下道

巖柴　智仁
里人のかへさの道の近しとやふもとよりかる眞柴成らん

杣檜　宗勝
杣人や引て宮木になしいらん茂る檜原の陰あさくなる

杜柏
かつちるも葉ひろかしはの影そひて月こそいたく杜の下道

岡椎　之常
山賤もひろひ殘すやいたつらに岡へにくつる道の落椎

濱楸　貞恕
陰あさく秋になるみの濱ひさき涙のまに〳〵しほれてそ行

磯松　道勝
風の音は浪に殘して見るかうちに月も入海の磯の山松

門杉　信尹
よそめには人とふらへのたよりとも見ゆるしるしの杉たてる門

窓竹　之仲
生そふる窓のくれ竹ふしておもひ起てまよふも身そおろかなる

籬草　同

籬にける色と見しも秋くれはさすか色ある草の花々

庭苔　雅朝

世々をへてつくりなしたる庭とてやたゝめる石も苔のむす也

簷忍草　信尹

むれたゆる古屋に雨にたまらねと軒の忍ふに露そやとれる

岸忘草　實條

住吉の岸にや種をうへそめてうきをわするゝ草といふらん

野篠　雅光

行人もまた夜ふかしと分されや霜をくまゝの野への篠原

路芝

芝草もなひきあひけりやりはつる吉野の里は道もなきまて

沼蘆　光廣

こと草はそれとも見えぬかくれぬに生立わたる蘆の一むら

江菅　時直

三嶋江や蘆の葉かくれ生ぬれは涙のしら菅かる人もなし

河藻　實益

流れ來て淺瀬によとむ川のせに結ほゝれつる巾のひしつる

名所山　素然

おさめしろ心のすゑも□見んはこやの山の動きなき世に

名所嶺　季繼

村雨の過るかたへのうき雲はよそに成行たかまとのみね

名所岡　光豐

幾もとかならひの岡の松風にしくれの音を殘す明ほの

名所杣

信樂のそまやま人の斧の音も道も絶たる雪にむもれ木

名所杜　素然

おり〳〵の心うつらてなかむるやかはる氣色の森の春秋

名所野　言緒

草も木も色付にけり露霜のふるからをのゝ秋の夕暮

名所原　良恕

木の下に露もこほれて幾度か又時雨に人宮城野の原

名所關　宗勝

うき旅も忘れて爰におかしかた須磨の關屋の月のかりふし

名所路　雅賢

をのつから茂りそひてや宇津の山月影もらぬ蔦の下道

名所橋　時直

川浪もこゆるはかりの音はしてなやます雨はふるの高橋

名所池　永孝

なし鴨の床はなれてやさはくらん明方さむきこやの池水

名所澤　雅庸

雲の上に音もや絶ぬ天地のひらけしよりの富士のなる澤

名所沼　光廣

哀れやはあさかの沼の花かつみかつみもおへぬ名所にして

名所瀧　通村

嵐山嶺の紅葉やかけつらんとなせの瀧の風のしからみ

名所河　道勝

よし野川浪の花さへ散行をしからみとめよ山風のすへ

名所湊　　智仁

松の風浪のひゝきにうきねしていなの湊にかゝる舟人

名所海　　綱光

ことの葉も筆も及はぬ松原の浪よりうかふよさの入海

名所湖　　光廣

浪の音も猶おもしろく諏訪の海や嵐の空の暮そむるより

名所浦　　實條

漕て行かたはわかれて春はたゝ霞にこもる和歌の浦浪

名所濱

いつの間になのゝ葛葉も霜枯て汐風寒き吹上の濱

名所磯　　永孝

なれてたになかめあかぬは浪よする繪嶋か磯の秋の夜の月

名所汀　　雅庸

こと浦に見るたにあるをいかはかり清き渚の夜半の月影

名所崎　　信尹

人とはゝ我は忘れしよむひてまし金の御崎を過ぬてに見て

名所嶋　　尊政

くもりなく照日のもといさやえにまつてゝくそゝ淡路嶋山

名所潟

泊舟こきはなれ行難波かたあと邊のよるの名殘をそ思ふ

名所泊　　有廣

秋に猶月にあかしのとまりして浪の小舟は苫ふくもなし

名所渡

名所田　　邦慶

ほのかにも明行末の一村の竹田の早苗今やとるらん

名所里　　智仁

菅原や伏見のさとに住人の今もあれまく猶惜むらん

名所市　　同

哀身はをろかなる名に辰の市やさしてうるてふことしなけれは

羈中山　　信尹

夢かとよこくらき陰はうつの山うつゝともなくたとる細道

羈中嶺　　道勝

かり衣日も夕くれにこへ殘す峰のこなたに宿やからまし

羈中野　　實顯

むさし野やはふも千種の露にのみしほれきてうき旅ころも哉

羈中原　　道勝

夢さめぬ夜や更ぬらんかり枕小篠か原の露さむき袖

羈中關　　雅賢

出てこし都にいつかかへるへき旅の日數もしら川の關

羈中路　　忠任

いとはしな幾重ゝ山をこえきても都にちかき關路なりせに

羈中橋　　雅庸

いかにともうしろめたくも思ひ渡る故郷いてしまゝの繼橋

羈中河　　實顯

今も猶とをき都をおもひ出て隅田川原の舟よはふなり

羈中湊　　素然

風をあらみおなし湊による舟も出るを見れはなのか浦々

羇中海　　永孝
けふも又海原となく漕出てこゝろつくしの船路にそ行

羇中湖　　實條
旅衣涙にしほれてなのつから行もかた田の浦風そ吹

羇中浦　　秀直
今こゝをとまりとやせん涙枕袖を敷津のうらのふな人

羇中濱　　實益
旅ころもたちて幾夜を浪枕さてしらぬ濱邊の月を見るらん

羇中磯　　信尹
たひ衣さのみしほれてこゆるきの磯の涙なる蜑の袖かは

羇中汀　　定淵
浦浪のよする汀にとまりして末またしらぬ旅そかなしき

羇中嶋　　兼勝
日をへつゝ風のたよりを松嶋やをしまにかゝる涙のうら船

羇中潟　　永孝
旅ころも猶うらふれて清見かたよせくる浪にうちもねられす

羇中泊　　總光
漕くれしけふもあかしの泊舟涙にかたこく旅ころもかな

羇中渡　　爲滿
日もくれぬはや舟わたせ隅田川やとりもとめぬ旅は物うき（しカ）

羇中里
夢路たに遠さかりゆく故郷をしのふの里の旅ねかなしき（もカ）

山家春　　道勝
春といへは契らぬ友もとひくやと山櫻戸そ明てまたるゝ

山家夏
なのつから夏をはよそにやり水のこの水上やみやまへの里

山家秋　　隆尚
白雲の八重たつ奥に庵しめて誰山里の秋を侘らん

山家冬　　雅朝
人とはぬうらみは絶てふりつもる深山の里の雪の通ひち

山家曉　　素然
鳥の音の聞えぬ里に聞なれてあかつきしるは鶏の聲

山家朝　　基任
朝またきはるけき山の家居をは立るつま木の煙もそしる

山家夕　　秀賢
山すみとおもはさりせはいかにしてたへなんものそ秋の夕暮

山家夜　　爲親
柴の戸をたゝく嵐に夢さめてあかしそ侘る山のした庵

山家風
聞なるゝ音とてさすか柴の戸にむすふ夢ある山風の聲

山家雲　　秀賢
軒ちかく立と見えしは程もなく餘所に成行山のしら雲

山家煙　　爲滿
民の戸も奥山すみもなへてよの治まる御代の煙たてけり

山家雨　　時慶
餘所に今ふりはれぬるも山里は岩の雫にのこる雨かな

山家路　　雅朝
今朝分しかたともしらすたゝなり落葉に埋む柴の戸の道

山眺望　素然

不二のねも都の山はおほひえを重ねあけつゝむかふこゝろは

野眺望　言緒

を地かたの空はそれとも見ゆるまてうす霧はるゝ野への夕暮

海眺望　季繼

與謝の海や松の木末を吹風に霧はれわたる天の橋たて

寄風無常　素然

世の中は風のうへなる塵の身のかろき物からおはれはかなき

寄雲無常　通村

しはしよし有と見なから頼まれぬ憂身のうへの空の浮雲

寄露無常

なきあへすやかて消行白露につゐは此世のたくひなりけり

雨中懷舊　最胤

しつかにもねやに音つるゝ雨の夜は思ひ殘せるいにしへもなし

深夜懷舊　秀賢

しけかりし昔のことを深き夜のしつけき（にカ）窓そおもひ出ぬる

草庵懷舊　爲滿

いとゝしく涙そ落る草の庵の春のむかしのね覺（ね覺のむかし）思へは

閑居懷舊　宗勝

ひとりのみむかしを思ふ草の庵に袖の涙は雨にふるなり

懷舊涙　尊政

おもひ出てすゝろに落る涙こそいにしへ人の形見成らめ

獨懷舊　定熙

かたらはむ友もなけれはひとりのみ昔を忍ふわかこゝろかな

老後懷舊　時慶

なきをしも思ひ出れと哀にも涙さしくむ老か身そうき

寄日述懷　同

をろかなる憂身のうへも頼まゝし天てらす日の光なりせは

寄月述懷　光豐

捨し身は月もめてしと月もしれ昔を忍ふよすかとおもへは

寄星述懷

さとりえぬ心そつらき曉の星をしるしの法のためしを

寄風述懷　季繼

世の中はうはの空吹く風なたゝ我身のうへとしるそ侘しき

寄雲述懷　爲親

ありて世に定めもやらぬ浮雲は我身にたくふ物とやは見ぬ

寄煙述懷　光廣

高きやにのほりてや見し古も民のかまとに立るけふりを

寄路述懷　素然

治れる關の東とはこれちやわきて絶せぬゆきゝ成らん

寄橋述懷　永孝

かくれ家に入跡とめぬ友さへも絶てふりぬる谷のしは橋

寄沼述懷　雅庸

をろかなる心はいとゝかくれぬのかくれやはすることの葉の道

寄江述懷　爲滿

よる浪の玉江にしけきよしあしをいつかわかたむ大和ことの葉

寄河述懷　信尹

最上川のほるは名のみつゐにきて身のうき舟やくたりはつへき

寄海述懐　實條

なにことも學ふとならは淺からぬ海をこゝろの底ゐにやせん

寄[illegible]懐

なろ〻なる身にあはれなる名取川瀬々にあるてふ埋木にして

寄[illegible]　最[illegible]

音も猶のとかなりけりなのつから治れる世の四方のうら浪

寄雨述懐　貞恕

世にふれはあらぬおもひに身をなしはる涙の雨は晴るともなし

寄露述懐　定熙

露もなをうきにたへての結ふらんふけたる露の淺の草葉は

寄霜述懐　尊政

をろかにしふる身のはてそかひもなき霜をいたゝく姿なからも

寄雪述懐　時慶

ふりをける黑髮山の雪ならてつもる我身のよはひおとろく

寄山述懐

學ひえぬ窓の硯はちりひちの山としなりて歎きこりつゝ

寄關述懐　實[illegible]

あふ坂の關路の花にこえかれておほえすけふも暮しぬる哉

伊勢　爲滿

くみてしる人はあまたの世なりけり五十鈴川のきよきなかれを

石清水　素然

老か身のかゝらむ杖のはとのみねさかゆく道は神のまにまに

賀茂　爲滿

あふくより頼みこそあれ片岡のもりてしらるゝ神のちかひは

松尾　爲親

そのかみのあふひかはらぬ根さしとてかくる二葉の松の尾の宮

平野　雅庸

君かよはひ積る言葉のちりひちや平野の松をためしとも見ん

稻荷　貞恕

杉の葉の常磐かきはのいなり山さか行かけを□くらへん

春日　同

いつよりのためしなるらん今も又神まつるなる春日野の道

大原野　時慶

長閑の宮まもるてふ大原の神のめくみは今もかはらし

布留　[illegible]光

折々にひくしめ繩をかけそへてあふくに代々をふるの神杉

住吉　爲滿

幾千代もかきりあらしとうへつらん君に相生の住吉の松

日吉　雅庸

いつよりか跡たれそめてくもりなき春の日吉と世に仰くらん

梅宮　道勝

名にしあふ神も心やいさむらん梅の宮ゐに春を迎へて

吉田　實顯

君と臣ちかひかはらて九重の近き吉田に宮居すらしも

祇園　雅庸

末とをく道しある世を守らなむ今もたゝしき神のそのふは

北野　同

祈るとて絶す立よる神おほみ分て北野の神の宮居に

貴布禰　　素　然

木舟川その水上にたゝるからにはやきこゝろを頼まさらめや

出雲　　同

八雲たつむかしの跡なしたふとも神かみならは空に知らん

三輪

數々の道もまよはす神垣は杉なしるしに三輪の山里

玉津島　　雅　寄

みな人の思ひめくみもわきて身に頼まさらめや玉津嶋姫

熊野　　習　仁

三熊野や浦におふてふ濱ゆふの幾重も神に世をやいのらん

如是相　　篤　親

見ても猶心のほとはすみかたき濁りを出て匂ふはちす葉

如是性

如是體　　繁　勝

色分てさくらは花のくれなゐに柳か枝そ淺みとりなる

如是力　　通　村

木々の枝はおるゝことはかり吹風にたはるゝからを見する青柳

如是作　　雅　賢

四の時種をわからて蟲蟄より作りそめけん民の草葉も

如是因　　宗　條

たれとりてまくとしもなき村草のかれても又や春を待らん

如是縁　　光　廣

法はたゝえにしもとめよ吹風を眞帆にうけたる舟とまるより

如是果　　具　恕

嵐ふく木陰にひろふ柴栗のしはしと頼む此身ならすや

如是報　　篤　滿

過きつる身のことわさを思ふにそ世々の報ひの程もしらるゝ

如是本末究竟等

もとあらの小萩の花ももろともに末葉の露と散し色かな

地獄界　　雅　朝

哀なりむせふほのほを出やらておもひの家のなかきすみかは

餓鬼界　　爲　滿

物ことにうへしなけきは前の世に人をすくはぬむくひならまし

畜生界

後の世もあはれなる哉里の犬のうてともさらぬえにも也けり

修羅界　　信　尹

及ひなき月日をも手にとらはやのたけき心に身をははつらん

人界　　光　豐

さかふるも衰へぬるも人の世のならひとのみはおもひわかれす

天界　　智　仁

かきりあれはしほれこそすれ久方の天津乙女の花のかつらも

聲聞界　　素　然

琴の音に立まひし袖の心をはしりきと人のいかゝ答へむ

縁覺界　　尊　政

はてもなくめくる憂世のことはりをむなしくしるや悟り成らん

菩薩界

彼岸へ行てふ道をしることもけに舟長のあれはなりけり

佛界　雅賢

白雲のへたてなければとことはにやとるこゝろの月も澄けり

寄天祝　雅庸

君も臣も猶直にやお　め行世は久堅の空に知るらん

寄日祝　素然

かしこしな天津日嗣のそのまゝにひとつなかれの絶ぬためしは

寄月祝　有廣

契りなけわか君か代も久かたの空にめくれる月をためしに

寄星祝　光豐

あふくてふためしにひかむ君か代は北にうこかぬ星のひかりに

寄雨祝　尊政

久堅の空よりくたる雨たにもおさまる時そ日數たかへぬ

寄地祝　光豐

あらかねのつちの始をおもふより神代かはらぬ國そかしこき

寄國祝　時直

惠みにはいかてもれまし順風の時をたかへぬ國にすむ身は

寄都祝　教利

名にしおふ鶴の都にすむ民やあかす千年の齢ひふるらし

寄道祝　雅賢

神代より傳へもて來て今も猶種はつきせぬ敷島の道

寄水祝　隆尙

底きよき松の下水結ふ手の雫も千代の影そうつれる

寄巖祝　長想

池水は絶すなかれてさゝれ石のいはほに契る君か代のすゑ

寄都祝　秀直

君か代のめくみあまねき春にあひて花の都そなへてさかふる

寄苔祝　尊政

さゝれ石の苔むす庭の松かえも若むすかけやかはらさるらん

寄竹祝　智仁

一ふしに千世もこもれと九重の竹の葉やうへもなくらん

寄松祝　資條

霜雪に色もかはらぬ松かえのよはひや君か齢なるらん

寄蘿祝　道勝

かけも猶たかの山の玉つはきかはらぬ千世の色に咲く也

寄榊祝　之仲

かけたかき神の御前の榊葉のときはかきはに世をやいのらん

寄杉祝　時直

年をへて平野の宮に立杉のなをき御世をはあふかさらめや

寄鶴祝

羽吹いてゝ雲井にあそふ鶴のよは幾千年をか世々にかさねん

寄龜祝　有廣

萬代のよはひをのへて池水にすむてふ龜もわか君のため

慶長千首作者

六十五首 御製 後陽成帝

五十三首 信尹 近衞三藐院 慶長十九薨五十

二十八首 實益 西園寺正二位右大臣寛永九薨 公朝男 公益父

二十一首 總光 廣橋正二位權大納言 從一位兼勝男

三十七首 智仁 八條後陽成御弟 陽光院御子

十八首 秀直 富小路從二位左兵衞權佐 種直從三位兵衞佐頼直父

二十五首 雅朝 白川三木元ハ雅英 雅業男

二十三首 有慶 六條權中納言元ハ有親又ハ 俊久正二位有繼男有純父

二十一首 最胤 梶井

十九首 季繼 四辻正二位權大納言三木 季滿男公理父

三首 茶地丸

二十首 通村 中院 承應二二廿九卒

五十四首 素然 中院通勝卿 也足軒號

十六首 言緒 山科言經男 三木天正五生

三十四首 道勝 聖護院

十五首 時直 西洞院三木從二位 時慶男元ハ時康

二十三首 隆尚 鷲尾三木慶長十三年卒 四辻一權中納言隆康男

十九首 實順 阿野正二位權大納言 元ハ實政季時男

二十七首 光廣 烏丸寛永十五年卒 六十光宣男光賢父

四十七首 爲滿 上冷泉正二位權大 爲益男爲頼父

二十二首 時慶 西洞院從二元ハ時通 時秀男

二十八首 定熙 花山院左大臣寛永十一卒 元ハ家雅家輔長男定好父

二十五首 永孝 高倉正三位權中納言慶長 十二卒四十八永相男永慶父

十四首 基任 園權大納言後光明外祖 基繼男基音父

四十六首 雅庸 飛鳥井元ハ雅繼權中納言 法名尊政三木雅敦男雅賢父

十五首 宗勝 難波實ハ雅庸男難波中絶 家ヲ相續後飛鳥井相續雅胤ト改

十六首 秀賢 舟橋ノ元祖少納言 國賢男秀相父

二十一首 爲親 中山冷泉歟有少將正二位權大納言 親綱男權中納言爲尚父

二十三首 光豐 勸修寺贈内大臣 慶長十七卒時豐男

三十八首 尊政 一乘院門主 近衞龍山弟

十八首 之仲 五辻從四位馬頭 元ハ元仲爲仲男

三首 爲勝 下冷泉三木爲純男爲將父 爲純元ハ爲有爲純天正六四一横死

十六首 敎利 高倉元ハ範遠 範國男

二十七首 兼勝 廣橋從一位内大臣 元和八出家國光男

三十七首 實條 三條西寛永十九年 内大臣公明男公勝父

二十六首 雅賢 飛鳥井左少將慶長十四 流隱岐雅庸男

三十四首 良恕 竹内門主 後陽成御弟

以上三拾七人

右之外ニ

宗條　實條歟宗勝ヲ誤歟　松木宗條歟時代少相違歟

基任　基任ノ誤歟　秀繼　季繼ヲ誤歟

有慶　有慶ノ誤歟　六條有廣歟時代少相違歟

季直　秀直ヲ誤歟　言備　言精ノ誤歟　此名諸家系ニ不見

六條有慶　元祿九年御會之作者此時中將　慶長九年ヨリ九十三年ニ成ル年數相違如何

松木宗條　貞享五年御會作者此時正二位　慶長九年ヨリ八十五年ニ成ル　是又年數相違如何

慶長千首落ル歌八首

春一首　花枝　夏一首　樹陰蟬

秋二首　夜初鴈　當紅葉

戀二首　寄關戀　寄朽木戀

雜二首　名所浪　如是性

天保九年五月中浣　源　政　忠　寫

沙彌惠空百首

詠百首和歌

沙彌惠空

春二十首

立春氷

けふといへは氷も涙に龍田河水をや春の潜そむらん

初春霞

冴くれし雲より明て出日のかすむをいかてはらふ春風

雪中若菜

わかな摘袖には雪のひまそなきつもるもちるも打はらひつゝ

初鶯

ふる巣にてなかては出し鶯のはつねとけさはたれか聞へき

梅薫

いにしへを軒はにおふる草の名に忘れはてしとにほふ梅か香

門柳

我門によする車の玉すたれかゝるもおなしあをやきの絲

歸鴈知春

鴈かへる聲そ聞ゆる故郷の花はいかなる色香なるらん

二月餘寒

春霞えすみの衣たちかさね又きさらきのさえかへる空

故郷春月

かはらすや奈良の都の春の月かすむもゝとの光なるらん

夜春雨

春雨のふるは聞えす鐘のをとの朧に成ぬ老のまくらに

春日遲

行くれし冬の山路の宿ならしひるまの空の長閑さ

尋花

常よりも花のためには岩根ふみかさなる山のこゆるともなし

見花

久かたの空にも花のさくやとてうちなかむれは嶺のしら雲

翫花

かめにさして見つゝならむ世間の花に心は長閑からしな

折花

花なみし木の下陰のしるしとてこつえの末を折て歸らむ

惜花

よひよひの月たにおしむ年の内花に心をつくしはてゝむ

三月三日

思ふ事みそきに捨て三日月の光のそはむ春をたのむる

欵冬

芳野河しからみかけてさきそむる花の色かふ岸のやまふき

松間藤

すかへりの花やおそしと藤波の松をいさめてさきかゝるらん

三月盡名

あすよりは春にあらねは花鳥の色ねも猶やあたにおもにし

海月

霧はれて秋の海へと見え渡る月になとせぬなこの浦波

湖月

世中の縁に任てしなてるやにほの水海にうかふ月影

關月

あふ坂の清水にやとる月をみて關守とても心とむらん

擣衣響風

天津かせ此世にかよふ乙女子の衣うつらしおとゝきゝにけり

紅葉増雨

よるの雨をいとひしはさてけさは緑色こそ増れ四方の紅葉は

紅葉映日

をくら山名にそかくるゝ入日まて光そひける嶺のもみち葉

暮秋露

又こんの秋をもさらにしら露のをきゐる草は根さへかれなや

惜九月盡

おしかへしおもへはなにか惜からむ八十年なれこし長月のけふ

冬十首

初冬時雨

けふよりは冬なりけりとつけわたる時雨をゝくる山風の音

風前落葉

吹はらふ風のちからや盡ぬらむ天津空よりおつる紅葉は

庭霜

さしのほる朝日にしめる庭の面の眞砂の霜やとけ渡らん

冬月

冴てこそ心もすめれふくる夜の月の光とはたれかいひけん

古屋霰

荒はてゝ霰うちちる槇の屋のみや苔しける跡そ見えける

曉千鳥

すまのうらに心すましゝ聲ならむ千鳥なく也あかつきの空

池氷

池の面に庭のかよひ路閉にけるこほりのうへをわたる水鳥

常盤木雪

ときは木も二たび色をみせにけり今一しほの積しら雪

深雪

みよし野を思やるまてふりつもる都の山の雪の曙

歳暮雪

月も日も今日をさかひと白雪のつもるにつけておとろかれぬる

戀二十首

寄雲戀

わかおもふ人の心はおほ空の雲の立ゐに見えける物を

寄風戀

葛のはの枯て猶ふけ秋の風すこしとたにも思しらせむ

寄雨戀

つれ〳〵と思な佗そ五月雨ははれむ限の空をなかめて

寄月戀

半天に絶む物かはてる月も入さの山をさしてこそゆけ

寄煙戀

たちそめし富士の煙のそのかみをいへはゆゝしな思ひけちてん

寄山戀

折々の色なしみせて動なき山の心におもひもそつく

寄杜戀

こゝろなるうき田の杜のみしめ繩かけはなれすも朽はてぬとや

寄關戀

あやなくもたつ名なしひてとゝめえす世にかくれなき逢坂の關

寄海戀

みるめなき海へにすまはいか計り波のよる／＼いなやすくねむ

寄橋戀

谷河の水こす岩のかけ橋のうきていつまて思ひ絶しな

寄埋木戀

今さらに事ならふとも名取河絶々見ゆる瀬々の埋木

寄鹽木戀

見せはやなおもき鹽木の海士小船涙にたゝよふ袖のしほれを

寄宿木戀

なをさりにおもひなすてそやとり木の根ふかき程の契ならすや

寄杣木戀

思へたゝ杣のたつ木のたつきなき山のおくにも分いりてこそ

寄朽木戀

花の香も色をもわかし朽木にそなしもはてゝし人の心は

寄初草戀

我おもひこかるゝゆへに春の野の草はみなからもえ出にけり

寄忍草戀

かくしつゝさてや軒はの忍草ねをのみ[illegible]といかてしらせむ

寄思草戀

霜やたひたけとかれせぬ思草つゆるうらみや種となるらん

寄下草戀

色にこそつゐに出けれ松の葉の末よりもるゝ露の下草

寄忘草戀

我たにもしけくすゐともいはす忘草おひなはけりなは思しるへく

雜二十首

曉聞鳥覺

鳥の音を恨もそする老らくの思ひよはりし夢の中に

窓燈

窓の内は螢よりけに燈のさすかに文字のかけはみえける

名所松

淡路島あはとみしより吹風やつたへきぬらむ住よしの松

名所浦

いまの世に昔の人の名をとめておもひもよらぬ和歌のうら波

名所鶴

和歌の浦の蘆へのたつの鳴ことにみちくる汐の時をしらるゝ

野風

かへりみる野原の道を行まゝにしほりもそする田かせのをと

橋雨

なみたくる松の葉しゆきふる雨にかせわたるなる天の橋立

渡舟

先の世に契し人や渡船往もかへるもたゝまたるらむ

旅行

あつまかたけふあひみしを都人程は雲ゐになるとつたへよ

旅宿

明日は又いつくの里に宿かりていかなる人と枕ならへむ

旅泊

日の本の内といへともから泊はる〳〵わけし波なしき思

山家路

ゆきかへり柴うちゝりて山里のおくそしらるゝ道の一筋

山家鳥

なくとのみ山さと人や思ふらむ八こゑの鳥は心あるへし

田家煙

朝夕の煙そうすき苅はてし田面の秋のくれかたの空

獨述懐

うらやまし海士のたくなはくり返し思へは海になすわさそなき

老後懐舊

こえむとは思はさりしな老の坂さかさえにしも立かへらはや

往事如夢

さむるまもなき夢の世に老はてゝうつゝと見つることは何そも

神祇

岩戸にて兒屋根命のことわさは其日の神のいかて忘れん

釋教

鷲の嶺こゝに三笠の仙人の薪こりしをえにしとめこし

祝言

君と臣すくなる道に相生の松の千とせをいく代つたへむ

天正十八庚寅暦沽洗吉日良辰仁沙彌惠空春日大明神若宮社乃廣前仁跪豆畏美畏天恐美恐豆申壽

夫世既仁澆季爾及止謂止毛日月乃行度者不易也只人乃心凡俗仁遷利豆朝廷日仁衰政道月爾廢連利是越歎豆惠空祖神與利三十一世仁志傳東漂西泊憂悲苦惱毛一流再興乃太目也終爾其志越不遂奈利實子無仁依豆晴良公息兼孝公仁家督越讓天先途越遂天家業越相續事太留神慮奈利。然仁長男五歳仁傳元服則右近衞少將藤原忠榮此仁越見留爾同年乃嬰兒仁不准奈理因玆惠空誠越致新天祈精志奉留夫和歌者託其根於心地止奈禮者正慮乃趣於沈吟越凝志天詠千百首和歌備進志奉留義慣神明者奈禮微志越納受之給豆此小冠國家棟梁再榮万機乃攝籙越意仁任天息災延命富貴仁子孫繁昌內心仁者慈愍越根源止志天神明佛智乃冥慮越仰喜外仁者仁義禮智信越專止之才藝者詩歌仁性心越竭志日本靈止成給遍登申壽

ことしむ月のはしめ雪のあしたに右近衞少將忠榮庭前の木に鳥のやとりけるを見て

雪ふれは鳥かすくみて枝にある

とし給ふに

日のあたゝかにはやくなれかし」と付侍て吟歎すれはおいさきたのもしくてためしなとれは菅丞相五歳はかりにて紅梅の下に現し給ふを是善公いたき奉て歌をよみ給へと申給へに

梅花へにの色にも似たりけりあこかほうにもつけよかし（てたへかしイ）もり

とよませ給ふ

定家卿家隆いつれも五歳の歌みな人しれる事なれはしるすにおよはす只五歳の例を引侍也法性寺殿月輪殿後京極殿峰殿此道に長し給代々集に當家の歌終不レ漏也家をおこし給ふへきしたかたと見えける中にも風雅を二たひ握翫あるへき事無レ疑九旬に及て大慶何事如レ之乎

いつゝにて歌よみそめしためしをそいまひきおこす人のかしこさ

きさらき廿日あまり元服の時

さく藤の若きむらさきのもとゆひにむすひそこむる松の千とせを

奉納の一卷に書加事自愛感悅之あまりを神慮に納受し給へと

奉レ仰也

春秋八十四歳

天正十六年聚樂亭御會御歌

（天正拾六年正月廿五日聚樂に於て御歌の懷紙）

詠梅有佳色和歌

關白秀吉

梅花いく千世かけて咲ぬれとおなこの春は一しほの色

從一位內基

植おきて春しもあらは咲梅の花の色かはつきしとそ思ふ

從一位昭實

なへて世にもれぬめくみの春の色な見せてや庭の梅匂ふらん

左大臣信輔

咲いつる花の色しもあら玉の春にさかふる宿の梅か枝

右大臣晴季

百しきのちゝ咲色も所えてみゆき待ける宿の梅か枝

正二位雅春

色もかも猶咲まさることとしより春しりそむる宿の梅か枝

正二位公遠

空に吹風ものとかに咲梅の花の色なや世にあはすらん

權大納言晴豐

色もかも梅にそちきろもろ人のけふのかさしや千世の初花

權大納言親綱

ときなしろ雨に色そひ吹風もならさぬ枝の梅匂ふらし

權大納言輝資

庭ひろみわきてうへそふ梅の花つきぬ色かやひさしからまし

中納言基孝

立ならふ木々のなかにも咲やこの花は色かにあらはれにけり

權中納言兼勝

年なへて色まさり行宿の梅や四方にあまねく匂ふ春哉

右衞門督永孝

萬世の色な見せつゝ咲梅の花に立よるもろ人の袖

左近衞權中將雅繼

いくとせの春にさかへん咲やこの花の色かのふるき立枝は

侍從賴隆

年々に色なかさねて咲梅のいく世か君か春にあはまし

准三宮道隆

梅の花まつ咲そめて草も木もさかへん春の行衞なそしる

准三宮尊信

色そふるのきはの梅に見る人のおらて千とせのかさしならまし

法印玄旨

色なうつし匂ひなとめてうれしさや袂につゝむ梅の下風

法印全宗

なかきへん御世のためしに咲梅の色かそふかき庭の面哉

民部卿法印玄以

咲梅の一もとゆへにときはなる木々も見なから色にこそなれ

法橋紹巴

なにはつの梅の匂ひな春風の花の都の色となすかな

文祿三年吉野山御會御歌（文祿三年二月廿九日於吉野歌之御會御歌也）

はなのねかひ　　秀　吉

とし月をこゝろにかけしよし野山はなのさかりをけふみつる哉

はなをちらさぬかせ

こゝろあるかせはふかしなよしのやまはなの盛を雪と見るまて

たきのうへの花

たきつなみくたすいかたのよしの川こす瀬にのこせ花のやま風

かみのまへのはな

春にかな神のめくみのあるゆへにまふてゝみるやよしのゝ花

はなのいはひ

なとめこか袖ふるやまに千とせへてなかめにあかぬ花の色香を

はなのねかひ　　關白秀次

いつかはと思ひ入にしみよしのゝよし野の花をけふ見つるかな

はなをちらさぬかせ

かたわけてなひく柳もさきいつる花にいとはぬ春のあさ風

たきのうへの花

見るか内にまきのしつえもしつみ旡よしのゝ瀧の花のあらしに

かみのまへのはな

ちはやふる神やみるらんよしの山からくれなゐの花の袂を

はなのいはひ

治れる世のかたちこそみよしのゝ花にしつやもなさけくむころ

はなのねかひ　　右大臣晴季

ちりひちの山に生出し根ざしよりけふいさ[illegible]

はなをちらさぬかせ

うつろはぬ木々のこすゑをさそふらし花の香はかりかをる山風

花のうへのたき

咲つゝくうへよりおちてよしの山はなにせかれんたきのしら波

かみのまへのはな

人こゝろへたてもなしや神かきの花のしらゆふあかぬ色香は

はなのいはひ

うへそへて千とせのはるを契りをかん花も老せぬ影をならへて

花のねかひ　　權大納言親綱

四時おなしいろにもさきつけとおもふはかりの花のうへかな

はなをちらさぬ風

さそはせはなをふくとてもいとはぬ花に見えたる春の夕風

たきのうへの花

みよし野やさなから花を水上になしておちそふたきのしら浪

かみのまへのはな

けふといへは大宮人のたちよりて神のいかきの花をみるかな

花のいはひ

うつしうへてあかぬ心にたちなれん花の千とせも君かまに／＼

はなのねかひ　　權大納言輝資

かけたかき雲井の花にみよしのゝ山をさなからうつしてしかな

花をちらさぬ風

かすみせは吹はらひても心あるや花にさはらぬ春の山風

たきのうへの花
岩ふれてみなきりおつるたきのうへのはなの梢はいかて手折ん
神のまへの花
春は猶袖ふりはへて行かふも花にみちあるかみのひろまへ
花のいはひ
色も香もかはらぬはなの木の本にいくよの春をたちなれてみん
はなのねかひ　　權大納言
まちかぬるはなも色香をあらはしてさくやよし野の春雨のたと
花をちらさぬかせ
咲花をちらさしとおもふみよしのゝこゝろあるへきはるの山風
たきのうへの花
花の色春より後もわすれめやみなかみとなきたきのしら浪
かみのまへの花
とし〳〵の花のみきりのよしの山うらやましくもすめる神垣
花のいはひ
君か代は千とせの春もよしの山花にちきりはかきりあらしな
はなのねかひ　　權中納言秀保
年々にきても見ねともみよしのゝ花にこゝろをかけぬまもなし
花をちらさぬ風
春はたゝかせにこゝろをつくすかなよし野の山の花をふくやと
たきの上のはな
水上はいつくなるらんみよしのゝたきにおちそふ花のしら浪
かみのまへの花
見わたせはよしのゝ山はしろたへに花の色こきかみかきのうち

はなのいはひ
天地のめくみもふかき君か代は花もいく春みよしのゝ山
花のねかひ　　權中納言秀經
みよしのゝはなのさかりを見ぬ人に見せはやとのみおもふ計そ
はなをちらさぬ風
よしの山こすゑをわたる春かせもちらさぬ花ないかゝたならん
たきのうへのはな
みなかみに花やちるらんみよしのゝたきのしら玉色におちそふ
神のまへの花
よしの山奥のみやたにたちつゝくかすみな花のいかきなりけり
花のいはひ
君か代にたゝしかりけりみよしのゝ花になとせぬみねの春風
はなのねかひ　　參議左近衛中將秀家
春ことにこゝろをかけてみよしのゝ花の色香をまちそかねぬる
花をちらさぬ風
かせふくと花にはよけよよしの山わか身一つの春にあらねと
たきのうへの花
みよし野や花のにほひもたかねよりかすみにもるゝたきの白糸
かみのまへのはな
植をきし神のいかきの花さかり代々ふるためしあるをちきらん
花のいはひ
白妙によしのゝ山はさくら花千とせふるともわすられんやは
花のねかひ　　參議左近衛中將利家
はなさけとこゝろをつくすよしの山またこん春を思ひやるにも

はなをちらさぬ風
ちらさしとおもふ櫻の花のえたよしのゝさとはかせもふかしな
たきのうへの花
ちる花にたきのしら玉ましはりて雪かとみねの雲そかゝれる
かみのまへの花
千早ふるかみのめくみにかなひてそけふみよしのゝ花を見る哉
花のいはひ
吉野山はなのさかりの久しきにきみかよはひはかきりあらしな
はなのねかひ　右衛門督永孝
春ならぬ時もかはらてさくらはなさかはきてみむみよしのゝ山
はなをちらさぬかせ
山かせもこゝろありてやたゆむらん枝も動かぬはなのさかりは
たきのうへのはな
みなかみのはなの錦をのつからたこやよし野の瀧のしらいと
かみのまへのはな
さゝ花にぬさとりそへてかみかきの長閑にかよふ春のみや〳〵
はなのいはひ
花にめてゝこゝろのはへは年々もつきせぬはるに猶やなれ見む
はなのねかひ　左近衛權中將雅枝
花の木の限もあらぬみよし野をこゝのかさねに植みてしかな
はなをちらさぬ風
春風にこゝろあれはやさかりなるはなはさそはぬみよしのゝ奥
たきのうへの花
瀧つせのうへより見えてよしの山なかれもいてぬはなのしら浪

かみのまへのはな
神の代にうつしうへてやよしの山いかきにたてる花の木たかき
はなのいはひ
おさまれる世の春なれは花も猶借なこまたんみよしのゝやま
はなのねかい　侍従政宗
おなしくはあかぬ心にまかせつゝちらさて花を見るよしもかな
はなをちらさぬ風
となくみし花の木すゑもにほふなり枝にしられぬ風のふくらへ
たきのうへのはな
よし野山たきのなかれに花ちれはいせきにかゝる浪そたちそふ
かみのまへの花
むかしたれふかきこゝろのねさしにてこの神垣の花をうへけん
はなのいはひ
君かためよし野のやまの槇の葉のときはに花の色やそはまし
はなのねかひ　准三宮道澄
花の春くるにかきりのなくもかなあくまてさくら猶かさしてん
はなをちらさぬ風
みよしのゝよしやうらみし花さかりちらさぬ花の風のやとりは
たきのうへのはな
石はしる瀧のみなかみまさるやとみしはあらしの花のしら波
かみのまへのはな
神かきもうへをきけんは心あれやをのつからなる花のしらゆふ
はなのいはひ
かた〳〵の花みる人の往來にもおさまれる代のなとはしるしも

はなのねかひ　　　　　　　　　　常　　眞

とし月のねかひもみちぬよし野山おくかおくなる花をとめきて
はなをちらさぬ風

おさめしる君かこゝろやあふかまし風ふかぬ世の花につけても
たきのうへのはな

ゆく水のはやくの事も思ひ出て袖をそひたす花のたきなみ
かみのまへのはな

手はやふる社のみまへの杉むらにかけてそ祈るはなのしらゆふ
はなのいはひ

おくまてもなかめやせよし年々に春したゝすは花もたえまし
はなのねかひ　　　　　　　　　法　印　玄　旨

春かせもおほふかすみの袖もかなちらさて花をみよしのゝ山
はなをちらさぬ風

吹も猶はなとゆめとなさそひみぬ風のちからや夜はの手枕
たきのうへの花

瀧波のおつとはみえてをとせぬや花もまされる水かさなるらん
かみのまへの花

一枝もなをさかきはの香をそへて手向ことなるはなのいろかな
はるのいはひ

君かためはなの錦をしきしまややまとしまねもなひくかすみに
はなのねかひ　　　　　　　　　法　印　全　宗

玉きはるわかおひらくの花もかな君かちとせの春ことにみん
はなをちらさぬ風

たちかくすかすみのうちの花の色ちらぬも風のたよりにそみる
たきのうへの花

石はしる瀧つなかれに落つもる花はみなからあはとこそなれ
かみのまへのはな

なへて世のちりにしまはるちかひをも花にみせたる神垣のうち
はなのいはひ

むすこけの青根かみねの花さかりこすゑはさらにすかへりの松
はなのねかひ　　　　　　　　　法　眼　紹　巴

花にけふこゝろはなき春ことにおもひうかれしみよしのゝ山
はなをちらさぬ風

御舟のま花のにしきのよはひしてのとけき春のかせやまつらん
たきのうへのはな

瀧のうへもあさからぬかなよしの山雨のなこりの花のしつくに
かみのまへのはな

杉むらのみとりの色もをしなへてあけのゐかきに花やさくらん
はなのいはひ

植そふる吉野のおくの山さくら花のさかりも萬代まてに
はなのねかひ　　　　　　　　　法　眼　由　巳

よしの山はるの木たちもをのつから都のうちにうつしをかはや
はなをちらさぬ風

さく花のちるともみえぬみよし野の山のほかをや風はふくらん
たきのうへの花

よしの川ちりそふはなの瀧ならてみねの雲さへなかれてそ行
かみのまへのはな

こゝろなき人やたをらん花の色もみや木もりなるみよしのゝ山

はなのいはひ
吉野山千とせの後も春をへて君かよはひにはなもあかなん
はなのねかひ　　　法　橋　昌　叱
あらましに送りきつゝもはるをへし花もけふこそみよしのゝ山
はなをちらさぬ風
吉野山すゝふく風もかすみてやはなのにほひも明わたるらん
たきのうへのはな
水上の花さくいろにたきの絲もからくれなゐをふりいたすかな
かみのまへのはな
うつろはん色ともさらにみつかきのひさしき春に花もならひて
はなのいはひ
そのかみの春を思へは行すゑもなをいつまてのはなのみよし野

後柏原院御日次結題

御人數十六人　詠歌千六百首

永正六己巳年九月九日始同年十二月廿日終

自永正六年至于正德三年二百五年

題

春二十首

歳中立春　野外朝霞　海上晩霞　山居子日　水郷若菜
氷消田地　南北梅花　露暖梅開　春鴈離々　獨見春月
閑中春曙　柳無氣力　旅泊春雨　行路春草　山家花遲
花下送日　落花入簾　桃花曝錦　留春不駐

夏十五首

羇旅更衣　殘花何在　人傳郭公　寢覺子規　盧橘子低
民戸早苗　梅五月雨　湖五月雨　鵜船廻嶋　連峰照射
里蚊遣火　閑庭瞿麥　沙月忘夏　野亭螢火　晩見蟬聲

秋二十首

幽栖秋來　二星適逢　織女惜別　秋深聞荻　萩花凝水
女郎花露　風動野花　鹿聲何方　秋夕傷心　遠天旅鴈
横峯待月　明月如晝　十五夜月　雲間稲妻　名所擣衣
霧中求海　伴菊延齡　霜草虫吟　紅葉出垣　山路秋過

冬十五首

初冬落葉　遠郷時雨　寒草處々　濱邊寒蘆　月照網代
連日鷹狩　薄暮千鳥　氷留水聲　寒閨聞霰　水鳥馴船
雪中殘鴈　眺望山雪　雪埋苔徑　爐火似春　老人惜歳

戀十五首

思不言戀　祈難會戀　歎無名戀　相樂忍戀　不堪待戀
臨期變戀　時々驚戀　憑誓言戀　深更歸戀　後朝切戀
逢日増戀　非心離戀　見形疑戀　寄書恨戀　絶經年戀

雜十五首

曉月越關　風破旅夢　嶺林猿叫　翠松遠家　山家人稀
野寺僧歸　田家見鶴　樵路日暮　晴後遠水　滄海雲低
漁船連浪　江雨鷺飛　夜涙餘袖　憂喜依人　竹契遐年

作者傳

人王百五代
後柏原院　諱勝仁
後土御門院第一皇子
御母准三后源朝子権大納言長賢女
寛正五十廿降誕文明十二十二十三立太子
明應九十廿五踐祚大永六四七崩御寶算六十四

御集稱柏玉集

西三條實隆公條系譜

號後三條
公豐　内大臣――實豐　正二權大納言――公雅　權大納言

實雅　内大臣

三條西祖
公時　權大納言――實清　權大納言――公保　内大臣

實隆　内大臣永正十三四十三出家堯空號逍遙院家集名雪玉集
母左大辨房長女　天文六十三薨

公條　右大臣正二位太宰帥天文十三二廿七出家法名仍覺號逍遙名院
母左大臣敬秀女

冷泉政爲爲孝系譜

號京極
定家　中納言――號中院
爲家　大納言――冷泉祖
爲相　正二位中納言

爲秀　正二權中納言――號五條
爲邦　正四下左中將――爲尹　正二權大納言

下冷泉祖
持爲　正二權大納言

政爲　正二權大納言法名曉覺
大永三年薨
家集號碧玉集

爲季　從二權中納言法名宗圓
天文十二　月薨
六十九

飛鳥井雅綱系譜

飛鳥井祖
雅經　參議從三
新古今撰者――敎定　正三右兵衛督――雅有　從二參木

雅孝　正三中納言――雅家　從三右兵衛督――雅緣　從三權中納言

雅世　正二權大納言――雅康　正二權中納言――雅親　正二權大納言

雅俊　正二權大納言――雅綱　從一權大納言
法名高雅永祿六八廿一薨七十五

甘露寺元長伊長系譜

甘露寺
爲經　正二中納言――經長　正二權大――隆長　正二權中納言

藤長　正三權中納言――兼長　從一權大納言――房長　頭辨

親長　正二權大納言　和歌所寄人

元長 民部卿右兵衛佐 従一権大納言 法名清空 大永七八十七頓 薨七十一歳 — 伊長 右兵衛佐按察使 従一権大納言天文十七十二廿薨六十五歳 母中納言永経女

廣橋守光系

●廣橋祖 頼資 従二権中納言 — 経光 従二権中 — 兼仲 正二権中納言
光業 従二権中納言 — 兼綱 従一 — 仲光 従一権大納言
兼宣 贈内大臣 — 兼郷 正二権中 — 綱光 従一
兼顕 従二権中納言 — 守光 従一准大臣 大永六年薨贈内大臣

中山康親系

●中山祖 忠親 — 兼宗 正二権大 — 忠定 正二参木
基雅 正三 — 家親 正二参木 — 定宗 従二権中納言
親雅 権大納言 — 満親 権大納言 — 定親 正二権大納言
親通 准大納言 — 宣親 権中納言 — 康親 権大納言

東坊城和長系譜

●東坊城祖 茂長 正三治部卿 — 長綱 正三参議 — 秀長 正三参木
長遠 正二参木 — 益長 正二権大納言 — 長清 参木従三
和長 正二権大納言 享祿二年薨七十歳

四辻公音系

●四辻祖 実藤 正二権大納言 — 公重 正二参木 — 実為 従二参木
公春 従二 — 実郷 左少将 — 季顕 正二権大納言
実茂 従二権中納言 — 季俊 権中納言 — 実仲 正二権大納言
公音 正二権大納言 天文九年薨

姉小路済継系

●師綱 宮内卿正四下 — 親綱 従四上 — 家時 正三
師平 宮内卿正四下 — 頼基 従三 — 家綱 従三
昌家 姉小路左中将 — 基綱 従三権中納言 — 済継 参議正三位 永正十五年五廿九 於飛州卒四十九

高倉永宣系

●範昌 從四位 ― 永經 從三 ― 永賢 正四下
　―永忠 從四上 ― 範賢 長門守
　　　　　　　　― 範康 左近將監
―範定 從三 ― 永基 從四下 ― 永親 參木
―永宣 正二位

小倉季種系

小倉祖
●公雄 正二權中納言 ― 實敎 正二權大納言 ― 公脩 正二權中納言
公名 正二權大納言 ― 公種 正二權大納言 ― 實右 從二權中納言
―季種 正二權大納言 永祿二年薨

田向重治系

田向
●資蔭 ― 經良 從二參木 ― 長資 從二權大納言
―經家 從三參木 ― 重治 正三權中納言兵部卿 天文四年薨八十四

後柏原院御日次結題

春部

九月九日　歲中立春

年の内の雪もけさ〳〵にあつさ弓おして春立つけふの初風　御製

春霞たてるや同し年の緒なこなたかなたにかけて見すらん　實隆

世の中は年こえぬへきことはりのほかに立ちくる春の色かな　政爲

ゆきかへる月日いそきてあら玉のとしのをはりも初春の空　季種

かゝるこそ千世も數へぬ舊年の暮ならぬ内に春は來にけり　元長

松の雪のふる年なから朝日影あたゝけなる春は來にけり　重治

としのうちは春のみ色にすきたらて花鶯やあとにまたれむ　相長

花鳥の色音もわかぬ年のうちにけふ立つ春もはるや待らん　長宣

朝日影先のとけきやふる年のきへあへぬ雪に春を見すらん　守光

古しへもいかにいはむと一年をたとるにおなしけふの春哉　濟繼

天津空霞もやらて年のうちはいたりいたらぬ春を見えかな　公條

としの内は待もおしむも心そとけふ立春や身にまかすらん　爲孝

たちかへりいま來る春や早瀨川こその氷のいころ目なみに　公音

年こえぬ春まちえては折にあふ雲井の庭をまたいそくなり　康親

しらゆきはまたふる年の空なから立つ春しるき朝日影かな　伊長

急くらん誰かこゝよりうつり來て年をもこえぬ春の光そ　雅綱

十日　野外朝霞

朝戶出の野守か庵よ世は春のかすみも袖に露けかるらし

あさな〳〵雪のふる道たつね來てまつ春日野に立つ霞かな　守光

時しらぬ山たにあるに朝な〳〵すそ野のかすみ幾重立らん　康親
野邊はまたかれふの草のあさ霜に霞の色もむすほゝれつゝ　濟繼
またさゆる雪のひかりに霞さへむらきえわたる野邊の朝風　雅綱
春さむみ枯野の霜も打かすみいつる日影に今や消ゆらん　季種
朝またき霜の枯生のとき〳〵にかすむや野邊の緑なるらん　公音
野邊はまた行人みえぬあさほらけ霞のほかに袖やなからん　政爲
けさそ見る秋ふく風のいろよりも霞にかはるむさし野の原　公條
朝日影いつるたかねは先みえてかすむ末野の色そはるけき　爲孝
矢田の野やかすみの袖もあは雪にまたふきかへす峯の朝風　實隆
野を遠み深き霞のかきりをは日たけてはるゝ空にこそしれ　永宣
朝立ちてわたる淀野や舟よはふこゑは聞えてなほ霞むらん　重治
春日野やゆかりの草のすり衣けさおりそへて立かすみかな　和長
わかくさの青野か原の朝霞かすみはてたる野邊のをちかた　伊長

十一日　海上晩霞

浪のうへは入相の鐘も程遠しかすむやゆふへかへる釣舟　政爲
立さはる色やはかなむ夕くれは沖津しほあひにうかふ霞ゝ　康親
ゆふ鹽のこゑたや遠くなりぬらん霞はてたる波のしつけさ　濟繼
くれわたる霞の波にうきしまの松はいろなき春のひとしほ　雅綱
鹽風は吹ともなき夕なきに立や霞の浪もまつけし　公音
あまの住しるへも浪の千里まてかすむやけふり浦のゆふ暮　季種
浦ちかく見えすはわかしおきつ船あとは霞のふかきゆふ波　爲孝
海士をふね一葉まかはぬ波のいろも霞にくるゝ春の浦かせ　公條
霞もや袖をかさぬるあまころも目もゆふくれの浦のつり舟　守光
ゆふしほの干潟の松のうす霞春のうみへよいつはありとも　永宣
くれゆけは猶立そひてうなはらや霞にきゆる三つのあは嶋　重治
さへ〳〵し風はなこりも田子の海の浦風かすむ春のゆふ波　和長
みつしほもかすむ夕への難波かたいふにまさりて曙もなし　元長
くれてゆく霞のいろに波の上のあはときえぬる淡路しま山　伊長
おもひやる波路はるかに松浦潟にしに山なき夕かすみかな　守光
海原やかすみもやらてゆふ波のなほさへかへる沖のつり舟

十二日　山居子日

なへて世のけふは子日の松の戸に山深き身のひく人そなき　實隆
住なるゝ山も初子によはふらし軒端の松の千世のはるかせ　季種
柴の戸の軒端の山の姫小松ひかてやこれも千世を待つらん　康親
たよりにもけふは子日の松とたにこの山陰よ誰につけまし　濟繼
君を祝ふ千代はかはらし山かつの都をよその子日なりとも　雅綱
すむ身こそいつ共わかね山松の子日におふる春の一しほ
山かけや子日にもれし松の頂ひかても千世の春やこもらん　守光
岩におふる小松をおかて柴の戸の身をわすれても引子日哉　政爲
子日よりけふこの春やこゝろこゝ松にいくよもわかぬ山陰　公音
柴の戸の賀時とかけと思ふ身はけふは千年の子日をそする　爲孝
山里はひくもふるもとほからぬ松陰しめて子日をそする　永宣
山里に身をはおもはぬ子日にもちきりやおかむ松かせの聲　公條
をのつからけふは子日とひきうへぬ小松も庭の山陰のいほ　重治
子日すと柴の戸いつる苔の袖松のおもはんことはわすれて　和長
子日しに立いつる宿の松の戸もいつれの年に引かうへけむ　元長
子日する松はかすそふ山里になほ春ふかくさへかへるなり　伊長

十三日　水邊若菜

河上に摘て歸らん若菜にもよる瀨は妹かあたりたや思ふ
諸人のわかなつむてふ袖のいろに川邊の里も春なしるらん　公條
きえそむる雪もけふこそ三島江にあし間の若菜誰求むらん　康親
山水のなかるゝ末もにごるなり川邊の村やわかなつむらん　濟繼
春の來てふれとも雪は粟津野のみきはの若菜むれて摘なり　雅綱
あけて行雪間のわかな春といへは里はみなせの誰か摘らん　季種
里人はわかなもとむと川上の流のいとなき春にやあるらん　公音
つみたむる袖のうへにや飛ふらんみつ野の若菜淡雪そふる　政爲
わかなつむ乙女か袖も玉しまの春のこかりにほふ川かせ　實隆
さは邊にはわかなつむなり伏見山松の雪間の春のしるへに　永宣
けふやまた野邊の若菜のかすかすに伏見の澤の根芹摘らん　重治
芹河の水の根芹のなかき世も誰かつみそめし若菜とかしる　和長
日影さしおるむみつ野の里人のつむ手ひまなき深根芹かな　元長
かきわけてわか菜つまゝし敷妙の美豆野のさとの雪の朝明　伊長
雪間わくる遠かた人の袖見えてみつ野の里につむ若菜かな　守光

十四日　　春鶯呼客

谷の戸なまた出やらぬうくひすや鳴て舊巢に我さそふらん　康親
うくひすの鳴音をおもふか言の葉にさそはれ出る心とやしる　政爲
うくひすの音に誘はれぬつれなさな人にことはる春の谷陰　濟繼
さそはれてこゝにとひ來は鶯のなく音も人なよふこ鳥かな　雅綱
さく梅の枝のうくひすおのれまた聲にも人なさそふ頃かな　季種
いたつらにはつ音はなしき谷の戸な人もとへとや鶯のなく　爲孝
うくひすよわれやはあるし隱家の心もしらす人さそふらん　實隆
まつとひて花なもちきれ鶯のこゑこそあるし春のふるさと　永宣
鶯にさそはれ來てやふるさとの春なもさすか人のとふらん　重治
さそはれん花のもとなはわすれしな心いられの鶯のこゑ
鶯の人來と鳴くはいつくよりとふへき友なかねてしるらん　元長
今よりの心な花にあしひきの山さくら戸のうくひすのこゑ　守光
里とほきしはの戸ほそも鶯の音にさそはれて人のとへかし　伊長
うくひすは春のあるしと成はてゝ宿のこすゑに誰な待らん　公條
とへかしの鳴音もしるき鶯はいとひしもとの人やわすれし　和長
のとかなる心の友もうくひすの聲さく時そいとゝまたるゝ　公音

十五日　　氷消田地

春來てもかへさてある、小山田にむすふ氷はよし殘るとも　政爲
山川のこほりも今になかるらん鳥羽田のおもに春風そふく　實隆
あきかせの尾花か波も又や見むしつくの田井は氷とけゝり　公條
けさもなほ氷なからにせきあへぬそは田の水の流れてそ行　爲孝
草かくれ氷もとくる小山田につれなくむすふ春のあさしも　永宣
雪氷とけゆくすゑのおちそこて田面にひろき春のやまみつ　重治
春の日のみ影よりこそ筑波根のすそはの田井も氷解けれ
春きぬと山田の氷したとけて蛙より先に水やもるらん　元長
氷とけも元出る草のみしかきも早苗にまかふ春のあら小田　公音
小山田のたるひも春にとけぬらし水のうたかた蛙なくまて　和長
やまかけの水のなかれも音たてゝ田面にとくるうす氷かな　伊長
おのつから氷もとくる湊田にやかてうち出る浪や見ゆらん　守光
かつとくる氷のひまなもり初てひとりまかする小田の水音　雅綱
せきいれむ苗代なからこほりとく田面しはしと水落すらし　康親
せきいれし水田の氷したとけてたちゆく末の聲そきこゆる　濟繼

せかてさへ水は田面にますら男か心もとくるこほり成らし　季種

十六日　南北梅花

さく梅のいろにもしるし日のうつる南のゝきはまとの北風　永宣

月をうつす南のえたも北に見る星のひかりもにほふ梅か香　重治

名にしおふ峯の春風吹分てちれはひらくる梅か香そする

梅の花くれなゐにほふ日影にもそともの雪の枝のさむけき　實隆

大内やみはしも梅のにほひもて花はへたてぬ北のかみかき　和長

おなし枝の南と北に咲く梅のおそくときにそ春はひさしき　元長

かたわけて咲きちる梅や日の影も南の枝をさして知るらん　公音

ふく風はさそふたよりか中垣の北の窓にもにほふうめか香　伊長

都にもかつ咲きにけり春日野の三笠の梅やさかりなるらん　雅綱

くもるなよ月の南のむめの花影はこなたにゝほふはるかせ　公條

こしの雪吉野の花のいろに出て梅さく枝のいつれをか見む　政爲

都にも花をそけなる梅か枝になれし越路の色香をそおもふ　康親

おもひやる難波わたりの春かせを都の梅にいそくころかな　濟繼

谷ふかみ木こりの道の（以下如此）　季種

爲孝

守光

十七日　露暖梅開

寒かれの雪にかはりて梅か枝も露のこゝろの色香見せつゝ　和長

春のいろに獨さきたつ花の枝やいつくの露のかゝる梅か香　實隆

のとかなる夜の間の雨に咲初てなこりの露にしめる梅か香　元長

梅か香をしのふの軒の霜も今つゆにとけたる花のしたひも　公音

けさはなほ露ものとかにおき出てかつ咲く梅の色を見る哉　伊長

あさつゆにうつる日影も長閑にて花のいろそふ軒の梅か香　雅綱

をしなへて木の芽は春の朝露に梅のみまたき花や咲くらん　永宣

をく霜のむすほゝれたる古枝にもけさ白露のにほふ梅か香　公條

いつしかと軒端は春の霜きえて木末のつゆに咲ける梅か香　政爲

露もけさ春の光やこもるらん梅か香ならて花にゝほへる（のイ）

うちけふり行とも見えぬ山水にしつえつゆけき梅のほつ花　康親

朝日影のほる木すゑに雨はれて露さむからぬ梅か香そする　濟繼

影うつす春日のとけき梅か香の咲く花ことにおつる朝つゆ　季種

日の影のさすかた見えて咲く梅の心とけたる枝のしらつゆ　重治

さく梅のした行く水もぬるむ日に木すゑの露の心をそしる　爲孝

朝日さすあたりの露もくれなゐに咲よりにほふ梅の春かせ　守光

十八日　春鴈離々

日をかへて旅立つ鴈の歸るさもおなし越路やとまり成らん　元長

つれて行中のへたてもうき雲におもへわかれの春のかり金　永宣

をのつから花見て歸る道やあるとをのかさま〳〵鴈の行空　公音

かへりゆくこゝろよいかに天津鴈たれも都の春をこそとへ　伊長

なれも又名殘はさそな思ふかたに雲井の鴈のわかれ行とも　雅綱

跡さきに行はあれとも名殘おもふ心よ鴈にをくれやはする　政爲

かへるさはおなし道にと行雲のへたてよいかに天津かり金　爲孝

まてといふこゑかとそ聞かへる鴈雲にさきたつ友したふ空　重治

横雲の空にもはなれ山の端もたれにあまたの鴈のわかれ路　和長

したはるゝ誰かなこりしる鴈金のおくれし空に又急くらん　康親

かへる鴈おなし雲路のゆく末もこゝろ〳〵の友は見えけり（むイ）　濟繼

空に過しはしむれ居て立つ鴈は山もそなたと今かへるらし　季種

墓ふとていつれか春にとまらしな後ろゝ鴈の行も悲しき

急くにや友もおもはてかり金のおなし道にも行わかるらん　公條

行ゑなき誰か玉章(はイ)のあとならしかきもつらねすかへる鴈金　守光

つれてゆく數も霞のたえ／＼に鳴なる雁のおもひなそしる　實隆

十九日　獨見春月

ひとり見る所からかもさひしさの秋にかよへる春の夜の月　元長

われはかり涙にかすむ袖もなしうき身や春の名立ならん　永宣

ひとり見る我か影さへに曇りけり誰にかこたむ春の夜の月　公條

このまゝにかすみなはてそ待出て友と見る夜の袖の月かけ　伊長

夜よしともたれにかつけん獨たにむかふ空なくかすむ月影　守光

面影もかすめる空にひとりのみ見るとはしらし春の夜の月　雅綱

なへて世にかすむものから身一つの恨は月に猶やのこらむ　政爲

われならぬ人やはさてもたへて(にイ)見むかすみに更る蓬生の月　實隆

身ひとつの老のあはれな思ふ夜やなみたの月に霞(のイ)そふらん　重治

さそな月なへての春に霞めとも獨かうへな世はかこつらん　和長

身ひとつは恨そはてぬかすむ夜の月も心に晴れくもるかと　康親

誰ならぬ影な友なるなくさめも月にすゝなく霞むよな／＼　濟繼

し、物もなき春の夜も我のみそ月にことはる床のさむしろ　季種

哀しるたくひにはあらし春の月かたふくまてに獨見る夜も　公音

雲霞くれなやはたむ春の夜なおもふかなかと月に明して

月たにもかすめはうとき手枕のさひしさ思ふ友やなからむ　爲孝

二十日　閑中春曙

夜や深きねくらの鳥のこゑもせて霞にこもる春のあけほの　宗光

あけほのゝ空はかはらしとちこもる葎に春の色はなくとも　政爲

鳥の音も霞のおくにほのかにて春しつかなるあけほのゝ山　雅綱

淺茅生にすむ身もこゝろありかほにおきゝうかゝる春の曙　永宣

誰かしるなへてうき世の花ならぬ霞のそこの宿のあけほの　公條

春の色になにになか見まし住む庵は楢原の山のあけほのゝ空　伊長

明ほのゝ春にかこたむ色もなしうきならひの淺茅生の奥　爲孝

つく／＼のなかめにくらせとはかりの春や我か世の曙の空　和長

草の戸になかめなれぬるあはれさのそれにまかせぬ春の曙　康親

おきこしをそゝの門もいまさらにとらやはてゝ人春の曙　濟繼

けふそしるたゝ花鳥に過來しはいかなき夢の春のあけほの　實隆

雲霞いくへのいろそ山ふかみしはの戸くらき春のあけほの　重治

ことしはのいろさへふかくかすむらし松の戸はその春の曙　季種

おもこやるみやこの空もいかならむ柴の扉の春のあけほの　元長

おもひやる心いくへの山里にすむともかくや春のあけほの　公音

春の夜の夢なわすれてなにとこのおもひまたかむ曙の空

廿一日　柳無氣力

みつとりの涙にしられぬ羽風さへ見えてかたよる青柳の糸　實隆

春風もやとゐとはなしくちのこる老木の柳いとみたれつゝ　康親

露にさへなひく柳の枝なれはみ風にはたへす猶そみたるゝ　季種

ふく音にきこえぬ春の朝風もやとるにしるきあをやきの糸　元長

春風のふかぬたえまもおさつゆの木葉かたよる青柳のかけ　雅綱

つゆなこそつれなくは見れ青柳のいともはかなき春の朝風　爲孝

あまのてはふり分髮も引舟のよわき綱手になひくあをやき　永宣

見るほとそしつ心なきしなゝらん柳か枝を風にまかせて

ちとり飛ふ川添やなき羽風にもみたれやすきなよのか姿に　公音

をのつから末葉におつる露にたに枝先うこく春のあさつき　濟繼
寒からぬ風のけしきも身にしみてなひくにたへぬ青柳の糸　公條
青柳のこゝろよはくもなひくこそ春吹風のすかたなりけれ　重治
風わたる川そひ柳かたよりになひきもあへすかゝるしら波　守光
さそひても音こそなけれ青柳はなひくを風の色に見せつゝ　伊長
ふく風のたえ間を見るも青柳のなひくはをのか心つからを　政爲
わか草のなひくたにある春風につゝみの柳さそなみたれむ　和長

廿二日　旅泊春雨

枕かる波しつかなる春雨にとまのしつくそおつるひまなき　季種
音せても苫のしつくや波まくらまきれぬ夜のはるさめの空　實隆
ほしわひぬ須磨の磯屋の波たにもうきねの袖のよるの春雨　重治
音もなき波のとまりの春の雨はそれもやさはるゆめの故郷　和長
こきよせてたのむとまりの一村も雨にかすめる浦のゆふ波　濟繼
旅ころも船にぬる夜もしほれけり野山のほかの春雨のそら　元長
しはしたに夢やは見えむとまり舟苫もる雨の春のまくらに　雅綱
こきよする船もさはらぬ蘆の葉のみしかき夢や春雨のそら　公條
梶まくら磯うつ波のものうきにさひしさそふる夜はの春雨　伊長
降るとしも雨をはらしてかち枕音するときそ春はのとけき　政爲
波まくら春の夜長きおもひねにまた降いつるあかつきの雨　永宣
春の雨もいかにもりけむ波まくら苫のひま／＼明る光に
はるさめのふるさと人もおもひしれなみの枕のたえぬ雫は　爲孝
とまり船苫のしつくのつく／＼と雨きゝあかす春の夜長さ　守光
聞わひてゆめ路むなしき波枕またやさはらむ夜のはるさめ　公音
一夜たに波のうきねにきゝわひぬかくてはいかゝ春の長雨　康親

廿三日　行路春草

春もさそとはれぬ道の跡見するよもきの枯葉のころ草葉に　和長
もえいつるひまもとめゆく道たにも末はひとつの春の若草　康親
わくるともおもはぬ草の末はよりもすそにしめる春の朝露　濟繼
ふみなれし若菜つむ野の道のへに下萌かれて草そみしかき　元長
わけてこそ萌出る色もしられけれうへは古葉の野邊の道芝　雅綱
春ふかく霞にこもる御馬草もたれかはからん道もわかれ（イすれて）す（して）　守光
初草のいかにもえてか道のへのゆきかへるまに絲そふらん　政爲
うつりゆく心そいかにあさみとり道はさよはぬ野邊の若草　爲孝
道邊のしるへにむすふ程もなしはつかにもゆる（イふ）春のわか草　重治
一本もまたそれならて分る野の青むかれ葉や春のわかくさ　永宣
もえ出る草葉を見てもおもふそよ跡はたえせぬ道も有けり　季種
時しあれは青きを踏し草の上も果は行來の道によくらん
しもかれもまた春風のあさみとりこれや時世の道芝のつゆ　實隆
きえ初る雪まもとめて道のへにはやしたもえの草そ色つく　伊長
春深きかけともしらて朝露を淺しやわくる野邊のわかくさ　公音
末遠きかすみの袖もみとりにて行手にかゝる野邊のわか草　公條

廿四日　山寒花遲

山ふかみ谷のこほりも春しらてまた打とけぬ花のひもかな　元長
山深み春またさむしよしさらは花と見るまて雪もふらなむ　雅綱
さきやらぬ枝ふきしほり山さむき嵐そ花のちるよりもうき　實隆
咲やらぬ木陰におつる山水のおとのみさえて花の香もなし　政爲
山ふかくとひ來し花はつれなくてこその嵐にかへる寒けさ　重治
きえあへぬ外山の松の雪の色に花をことはる春のさむけさ　公條

たつれてもまた春寒き山さくらかつ咲色もいかて見るへき　爲孝
ほかの散のちにと花を山かせのおもふにさゆる心なりせは　伊長
さかぬ間の花にたとらむ面影もまた雲さむき山かせそふく　康親
山守はをのかさむさや答へまし花のうへこそ人はとふなれ　和長
さき出ん後は風なき花ならはしはし太山の春さむくとも　季種
寒かへる山路にのこる雪の色を枝の花ともいつかまち見む　濟繼
こそにして花にうらみしつれなさを嵐にかこつ春の山かけ　公音
さきぬへき花もつれなし吹風のまた身にさむき春の山ふみ　永宣
待人にこゝろのとめて寒かへる深山は花のあらましもなし　守光
さき出ん花をもしらす雲のゐる軒端の山のかせのさむけさ　元長

廿五日　　花下送日

行かへり夜の間はかりのあるしにてわか宿うとき花盛かな　雅綱
斧のえも朽木の花の陰しめは日をふるほとの幾世ならまし　守光
けふ幾日なれし日數よ春風もたゝまくおしき花のかけかな　伊長
色にそむ心つからやおくりむかふ花の木陰に永き日もなし　公條
けふ〳〵と春の日數を詠め來てうつろひかはる花の木の本　實隆
木の本になれ行まゝに日數さへうつるてふ名そ花に悲しき　政爲
花にこそ命をは思へ昨日といひけふと暮すは惜からぬ身も　康親
見ぬかたに枕かへてもけふまてはおなし山路の花の下ふし　重治
奥ふかく咲そふまゝにみ吉野の花に幾日の春をつくさむ　永宣
ありあけになるまて花を見つるかな山路わけ來し月の夕影　濟繼
思はすもけふはといひて幾日をかたゝ假初の花にくらせる〔イれね〕　公音
けふ幾日われこそ峯の雲たにもゆふへはかへる花の陰かな　季種
立さらすこゝろうかれて春毎にくらすや幾日はなの下陰　季種

花に來てけふを幾日と思ひけん咲ちる程は時の間にして　和長
このまゝにとしの三年も花の陰吉野の裾といふもこそあれ　爲孝
さく櫻ちるまてなれて吉野山よしや花にも世をやつくさむ

廿六日　　落花入簾

ひまとめてちりくる花よ玉すたれまきの扉の雪と見るまて　雅綱
よきてふけさそはぬさへに玉簾ひまもとめ來る花のした風　伊長
さそひ來はよし玉垂の内外なく花にゆるさむ春のやまかせ　實隆
さそひくるいつくの風そ玉簾かけてもしらぬ花のいろ香は　爲孝
ちりかふや音なきかせも玉垂のひまもとめくる花のしら雪　重治
花ちりてけさなほつらし玉すたれまくらの夢ものこる春風　永宣
いろも香も内外をかけて散くるや花のたもとの鈎簾の追風　季種
推あての匂はかりも鈎簾の内に花とやいはん花そ散くる　濟繼
風は猶ふきそたゆまぬ玉すたれひまもる花の隙はあれとも　守光
ちり來ては袖にそ積るたますたれ吹まく風の花のしら雪　公音
はかなさを何そとゝへは玉すたれ露よりもろく花そ散くる　元長
よしやさは風も恨しこすの間に木の本ならぬ花そ散くる　和長
花やさき風やさきにと鈎簾の間の人の匂ひにひかれゆく色　康親
一かたにいかゝ恨んたますたれひまもる花の風のたよりを　政爲
玉垂の隙もとめてもさそひ來る花にまたるゝ風もこそあれ　公條
おしめとも花ふきいるゝ玉簾みとりを木々にかへす春かせ

廿七日　　桃花曝錦

なりにあふ春のにしきと咲桃や柳さくらにたちかされてむ　公條
薄くこき三千世の花の唐にしき着て歸らはやあかぬ木陰を　政爲
またとはゝ立やかへましさく桃のみなもとならぬ花の錦を　康親

ふるさとに花さく桃は誰か袖を入日にかへすにしき成らん　重治

あひ思ふ錦とも見る色なれや物いはぬ桃の花のうへをも

古里となりて花さく桃園に誰かぬきかくるにしきなるらん　元長

一むらのにしき色こき日影かな桃さくころのさとの木末に　濟繼

さくら花都にさらすにしきをは桃さく山の木すゑにも見つ　永宣

今もそのにしき織はへ桃園の花のむかしもおもひしらるゝ　爲孝

さく桃のゆふくれなゐの色はへておる人しらぬ錦なりけり　伊長

野も山も桃さく春のにしきをは柳さくらのほかに見すらん　和長

見る人もまれなる桃の花の陰夜のにしきの名にやたゝまし　公音

故郷にきて歸るへきにしきとやくれゆく春に桃のさくらん　雅綱

けふの日のあかすくれなはさく桃の花もや夜の錦ならまし　守光

たてぬきの光をそへてさく桃の花のにしきを織る日影かな　季種

花を見てかへるといはぬ人はなし袂も桃のにしきたちきて　實陞

廿八日　留春不駐

如何にせん留らぬ春に殘る身の後れしとするも見ぬ別にて　季種

あかす思ふ春もとまらぬ花鳥のあとは心やかたみならまし　元長

吾妻よりくるにさはらぬ春なれはかへるもとめぬ逢阪の關　雅綱

いかなれはあひも思はて行春をしたふ心もとまらさるらむ　公音

風にうらみ雨におもひし心のみはかなき花の春はくれけり　永宣

おもひしる春や行らんとまるとも限しあらはおなし名殘を　康親

世には猶つらき別れも有とのみしたふを春のしらす顏なる　爲孝

春よさてしたふにとまる方もあらは誰ゆへにかと又や恨む　公條

山川の花のしからみ雲かすみなにゝかけてか春はとまらむ　實隆

よし野川なかるゝ水や行春のこゝろをしたふ人に見すらん

慕ひてもとまらぬ春のかきりをは心にのみやなほ殘さまし　伊長

身に積る年ともいはし春はかり思ふ名殘のたくひやはある　政爲

逢阪の關守もなとこしかたにかへらは春をとゝめさるらん　重治

暮る春もまたあらたまる物每を歎く我のみ身はふりれとや　和長

なれ〳〵て何をかたみと思はまし花ものこらぬ春の別れは　守光

春よ今しはしとたにも恨まはやいふに休らふ道はなくとも　濟繼

後柏原院御日次結題

夏部

廿九日　羇旅更衣

おもひやる山路つゆけし都にもけふはかへけむ花そめの袖　永宣
花染のおしきのみかは都いてしなこりの袖も立わかれぬる　雅綱
春もおしなこりはいつれ都いてゝけふたちかふる旅の衣手　守光
朝ゆふの露にやつるゝ旅ころもけふ立かふる折そうれしき　伊長
ぬきかへて衣手うすし山風もけふの假寢よこゝろしてふけ　實隆
しほれ來し山分衣かへまくも惜とはいはしけふな待えて
はないろな惜むのみかは立いてしみやこの春の衣更して　公條
かふるなもうしとはいはしたひころも都の春の花ならぬ袖　重治
ふるさとの春のへたてと花染のほかに更まくおしき袖かな　康親
時しあれはけふこそかへめ夏衣旅のやつれの袖ならすとも　濟繼
花染の袖やしはしもかへさらむ旅は月日のゆくへなきにも　和長
かへてたに露やはほさむ夏衣たもとも草のまくらかる野に　季種
つゆけさにかへてやまさる旅衣野山の春のわすれかたみに　政爲
たちかふる春も衣のわかれさへ露けきものな草のまくらは　公音
しほれても春の形見はけふさらにかふるにあかぬ旅衣かな　元長
たひ衣かろきかうへに立かへて更にや身にも夏なしらまし　爲孝

十月一日　殘花何在

散てこそよし野の奧も春くれし花の名殘はいつくにか見む　永宣
ちりはてし春の山邊の道かへていつこれる花なまたや尋ねむ　雅綱
たつねはやいつくの花に待しきて飛かふ蝶の春なわすれぬ　公條
なへてさく春こそあらめ山守の心ゆるさむ花やとはまし
尋ねこし香やにかくるゝとはかりにゆけとも花は夏木立哉　康親
たか里にほかの散なんかきりなも待しさくらの今匂ふらん　濟繼
行ゑなき花の香そする夏かけてちらぬなしるもうき心かな　政爲
あかすなほ青葉の底に尋ね見む風にしられぬ花もあるやと　元長
吹風の匂ひな夏はしるへにてのこるさくらにちる心かな　季種
かけかくす雲のいつくそ山櫻ありてうき世の春もくれぬと　爲孝
よし野山春より後もたつね見むこゝろい與な花にのこしつ　公音
花はとも人にいはれと夏山やさくらかした水もゆくなり　和長
花さそふみなかみとほみ山人の餘なとゝむる住家とはゝや　重治
わけくらす青葉の底にとふ蝶の白きな見ゝも花かとそ思ふ　實隆
此頃はなへて青葉の山さくら散のころ色ないつくにか見む　伊長
しられすよせめては風のつてもかな春に後れし花も尋ねん　守光

二日　人傳郭公

われにのみなほ忍ひ音か郭公人はきゝつと世にもらせとも　雅綱
初音をは我に忍ひてほとゝきすいかなる中に先もらしけむ　守光
聞とてもはや人傳の後は世の初音なるへきほとゝきすかは　實隆
時鳥こゑな傳ふる言の葉はよしいつはりの有世なりとも
聞つともかたるを人の僞りになすまてうときほとゝきす哉　政爲
きくもたゝ人傳のみは雲井よりなな遙なるほとゝきすかな　公條
待夜さへ我につれなきほとゝきすなと人傳にけさは聞らん　伊長
聞人のかたるをしらはほとゝきす忍ふ音なや我におしまむ　重治

ほとゝきす人に傳えむ心とはしらてや忍ふ音をもらしけん　濟繼
しらす世に何のむくいの時鳥きゝおよふ名も初音とは（イも）なし　和長
鳴つともいふ人なくはほとゝきすわきて我身に何か恨みむ　元長
つれなさの限はありと子規よそにきく音をたのみてそまつ　爲孝
さく人もあれはとたのむほとゝきす鳴へき空に心ゆるさし　季種
なれこそは我につれなき時鳥きゝつとかたる人のはつ音よ　公音
待さりしいつの間にかとかたり出る人に恨のほとゝきす哉　康親
人をわかは我も忍ひてほとゝきす鳴つる方の里やたつねむ　永宣

三月　寢覺子規

折しもあれ寢覺の床の一聲は待にまさるゝほとゝきすかな　雅綱
かたらふもなほ淺からぬ情かな寢覺をときの山ほとゝきす　季種
郭公ねさめはたのか爲としもしらてやすくる夜半の一こゑ　伊長
ほとゝきす幾夜なく〳〵の寢覺にもこの一こゑを面影にせむ　實隆
子規おもふる度に鳴て來はねさめかちなる身ともうらまし　政爲
寢覺するなりしりかほにかたらふや世にたくひなき山時鳥　公條
ほのかなる山時鳥ひとこゑをおなしねさめの誰にとはまし　重治
鳴すてゝいなにを名殘のほとゝきす寢覺の枕月たにもなし　康親
一こゑのさたかならぬや時鳥きくころさむる夢路なりせは　濟繼
恨むな思ひしれとやほとゝきす今宵はまたぬ寢覺とふらん　永宣
子規なれもねさめの夜ころとやおなし夜明の空に鳴なり　公音
思ひねに聞しやうつゝさめて後夢はかりなるほとゝきす哉　元長
こゝにしもぬる夜をしらて時鳥おそくも夢の後に聞つる
ほとゝきすなれて聞へき山里のあらまし思ふ寢覺にそとふ　爲孝
老もはやまくらにちかき郭公いつれおとろく寢覺とかしる　守光

時鳥ねさめのなみたおちかへり鳴音の數はなとかすくなき　和長

四月　盧橘子低

軒ちかく枝うちなひきたちはなの實さへ花さへかほる夕風　元長
ちる花はけにかろき名に橘の實をむすひけるかけの木深さ　政爲
そめぬへき色とはなしに立花の實さへ花さへ雨おもけなる　康親
散てさへ花のなこりか枝をおもみ露うちなひきにほふ立花　伊長
妹かそてにぬくや五月の玉と見てはな橘の實さへなつかし　實隆
花ちりて雨おもけなるたちはなに霜の林を見るこゝちして　公條
ほともなく花ちる枝にたち花の實さへなひくか重きしら露　重治
雨はなほおもくや見えむ立花のみさへ數そふ枝のしけみに　濟繼
をのつから花たちはなの花の鈴枝もたはゝにふむ鳥もなし　和長
花も實もことし見そむる立花のわか葉におもき雨のゆふ風　永宣
實をむすふ花橘にふる雨もしたてる色をそむるとはなし
村雨のなこりの露もたちはなの實さへ花さへなひく枝かな　雅綱
おもく見る露のさ枝は花もみも匂ひおくれぬ軒のたちはな　爲孝
いこしけり見るかうちにも橘の實のなる枝に花のむかしを　季種
雨にぬれておすふの露やのこるらんみさへ花さへにほふ立花　守光
たちはなの實さへ花さへしけりあふ枝おもけなる雨の朝露　公音

五月　民戸早苗

うへわたすけふの早苗の露の袖ほさても田子の秋を待らん　實隆
早苗とるほかにひまなき民もなくつかふ時有道もしられて　濟繼
ほかよりも先うへたてし程見えて門田の早苗しけりあふ色　重治
民の戸のむろのはやわせとる苗にこゝにやまたむ秋の初風　和長
早苗とる田子のこゑ〳〵くるゝ日を我もおしとや蛙鳴らむ　政爲

うきわさに我世たのしむ民の戸やうたふ聲して早苗取らん　永宣
陰しむる門田の早苗うふるより稻葉の庭も見る心地して
いそかるゝ心の種もとりそへて田子の早苗や植わたすらん　爲孝
秋の色やまたき見ゆらんうへわたす門田の早苗露深くして　公條
家々の門田の秋もとほからす畔なへたてゝとる早苗かな　季種
うへわたす賤か心も一むらとのころ門田のさなへにそしる　康親
日頃へてふし立ぬらし民の戸のあくるなそしととる早苗哉　雅綱
門田よりとりし早苗のけふはゝや千町の末に人さはくなり　元長
立いてゝよそに見るたにさなへとる賤か門田そしつ心なき　公音
日數へてうふる門田のさなへにはなくれ先たつ綠なそ見る　伊長
うへわたす門田のさなへとり／＼に心は秋に先かよふらし　守光

六日　杣五月雨

斧の音はたえてほとふる五月雨にひかぬ杣木なくたす山川　濟繼
筏士は水かさもしらし杣川や雲にさなさすさみたれのころ　和長
五月雨に杣のかりやは人もなしそれも朽木の名にや流れむ　政爲
五月雨や日ころは涙なせく石もしたになかるゝ水[　][　]杣川（[illegible]如此[illegible]歟）　永宣
さみたれにひかぬ宮木も杣川の水のひゝきに山彥のこゑ
時しあれは杣山川のさみたれにいつの朽木のなかれ出らん　公條
川瀨なはくたさぬ山のさみたれに杣木や雲の波にうくらん　季種
こゑたてゝたゝ川波や杣木ひく山路たえたるさみたれの頃　實隆
五月雨に川瀨な早みくたしてや杣木ひく身のうさも忘るゝ　康親
ひき捨し杣木やくたす山川の瀨々におちそふ五月雨のころ　重治
そことなく水もいつみの杣川にくたす宮木のさみたれの頃　雅綱
うきわさになれてもさそな杣木引山路の奥の五月雨の空　伊長

五月雨の日なふるまゝに引過てくち木の杣といひや初けむ　元長
とりつくす杣木の跡もゐる雲のは山しけ山さみたれのころ　爲孝
杣川やいかたの床による波もなほおとまさる五月雨のころ　公音
斧の柄は朽もやすらんいたつらに日なふる杣の五月雨の頃　守光

七日　湖五月雨

あまはいさ海ふく比良の山風に歸るとも見ぬ五月雨の頃　政爲
むかふともなにか鏡の山ならむふもとの海のさみたれの空　和長
さみたれは雲や志賀津の濱松の（イに）さゝ波よする風たにも無し　永宣
さみたれはまのゝ入江にこす波の色な尾花にあき風そふく　守光
五月雨にみるめも波の海こしや山はかゝみの影もわかれす　季種
雲うつむそなたや比良の海山もへたてぬ雨は五月なりけり　實隆
田子の浦やあらぬ淵なるさみたれに底さへ匂ふ花は殘らて　雅綱
志賀の浦や雲の波のみ重なりて水かさも見えぬ五月雨の空　伊長
五月雨の雲なかさねて湖の海の水のけふりも晴間なきころ　元長
五月雨の浮雲のほるにほの海にもとの水とやまたドるらん　爲孝
水なそわたるとは見しすはの海やまた雲とつる五月雨の頃　公音
五月雨にとまふく船の行すゑは雲こそおほへ志賀のうら波　濟繼
辛崎や松はひとつのみきはにもあらぬ波こす五月雨のころ　重治
かゝみ山かけ見る海による波もくもりはてたる五月雨の空　公條
しほやかぬ袖もほさしな志賀の浦や涙の幾重の五月雨の頃
さみたれにしける湖もみかゝれて吹かたしらぬまのゝ浦風　康親

八日　鵜船廻島

島かけのそなたになりぬ川上の里の鵜船やさしかへるらん　永宣
哀いかに明やすき夜のうかひ船しまかくれ行程やなからん　公條

心なやこの瀬ひとつに川しまの行めぐりても鵜舟さすらん　實隆
篝火のかげそきえゆく鵜かひ舟いまや島陰こぎめぐるらん　雅綱
世と共にさすや鵜ふねの篝火はやみに明ゆくしま陰もなし　政爲
鵜かひ船月もあまぎり明る夜になほしまかくれ思ひ行らん　和長
川島のなかれ洲とほみ鵜かひ舟めぐりもはてず明ぬ此夜は　元長
うかひ舟水の川しまゆきめぐり影もかくれぬ夜のかゝり火　濟繼
大井川見よや鵜舟にともす火の明石もさそと島かゝれ行
川しまのこなたかなたの鵜かひ舟月の夜頃もかけや有けむ　守光
あくり來ん闇もいく夜そ鵜飼ふねくらきより猶くらき嶋陰　公音
川島やめぐるも早きうかひ舟思へむくひのかゝりける世を　爲孝
うかひ舟のほれはくだる川しまのこなたかなたの篝火の影　伊長
川島のやくる鵜舟になす罪のむくひもかくや程なからまし　重治
河上やくだすうふねの嶋かくれきえぬかゝりの影そ跡なき　康親
おなじ瀬にしげき篝や川島のへだつるなみの鵜舟なるらん　季種

九日　連峰照射

遠かへて鹿やゆくらんともしする山のきいふの峰の遠かた　永宣
峯つゞき絶ぬほぐしの待宵にいかなる鹿の身をかくすらん　實隆
影うつるみねより峰に照射してもらさしとのみ鹿や待らん　雅綱
さぞと見るさつ男のともし夜を重ね峰を重ねて明す苦しさ　政爲
ともしする葉山のすゑの峰つゞき明るけぶりそ雲に立そふ　伊長
のがるべき小鹿の道とをちこちの峰を殘さすともしする影　元長
何方に思ひかよらむ小男鹿のおなし恒なる峰のともしは　爲孝
滿ゝ行かたやなからんともしするさつ男も峰も獨ならねは　康親
すな鹿の月待なれし峰つゞきあらぬともしの影したふらん　公條

棹鹿のひとつおもひを遠近のみねのほぐしにたき明すらん　重治
哀けにいつれのみねの照射にか野にふす鹿のこゝろ寄らん　和長
鹿をまつ幾重のみねも奧深くともすほぐしの影にみえけり　季種
夜の雲かさなる峰に影きえて殘るともしを外山にや見ん
きかへては鹿もしらすやともしするみね立つゞく星の光に　公音
明ぬるか峰もあまたに見し影のきえて少なく殘るともしは　濟繼
よる鹿のともしあらはに峰つゞきあはれ立所を雲も隱さて　守光

十日　里蚊遣火

かやりたくおもひつきせぬ山里の夜のけふりや峰の朝霧
夕けふりかすかに立てし住居をも蚊遣の末はわかぬ里かな　康親
みしか夜も明しやかねむ夕けふり雨打しめる宿のかゝり火　實隆
いかにたく里の蚊遣そ住む人もむせはゝおなし夜はの煙を　永宣
なへてたく里・むらのかやり火やたつるけふりも雲霧の空　政爲
ゆふまぐれかやりにたつる薄煙里わくはかり打なひきつゝ　伊長
心なきしつかわさとや夕かほの花もあはれにかやりたく影　和長
松原のおくある里の薄けふり夜ふかく立やかやりなるらん　元長
あまのすむ里のしるへもなへて今かやりにあかぬ夕暮の空　爲孝
けふりをも月には立てし此里にたゝ宵の間のかやり火の影　守光
かすかにて住世しられぬ里もなほ煙は見えて蚊遣たくらん　濟繼
山本や一むらのこる夕けふりなほ里わきてかやりたくらし　公音
この頃やかやり立そふゆふけふりよそめにきはふ遠の里人　公條
かやりひの影にも見よ佗てすむ人はおほかる里のあはれさ　重治
雲なきゝいとふへき夜の月になと里の蚊遣のけふり立らん　雅綱
里人はそむくとなしにねぬ夜半もつきな傾にやつす蚊遣火　季種

十一日　閑庭瞿麥

なにかおもふ今はうき世の塵をたにはらはむ宿の床夏の花　實隆
あるしとて我やは折ん心なくあらしはてたる庭のなてしこ　永宣
淺茅生のおくにも咲るこゝろこそわか床夏の色にしるけれ　政爲
露の庭なさけなかくる人しあらは我か思ふかひや床夏の花　和長
すむ人も見えぬ淺茅か庭の面はいかて塵なきとこなつの花　康親
あれのこる宿はむかしの床夏の花やはらはぬ塵にうもれん　重治
つく／＼と見れともあかす庭の面に起臥なるゝ床なつの花　雅綱
獨のみ見るにはをしく咲にけりむくらの宿の庭のなてしこ　伊長
人とはてあれたる庭の筵にはちりの床なるとこなつのはな　元長
おしむへき隣もしらぬ庭の面やひとりのための床夏のはな　公條
花も其床なつかしきふるさとの色にやそこの露なかくらん　爲孝
たのみけるちきりもかなし山かつの垣ほなかけて咲る撫子　濟繼
待人のあらはそ庭のちりをたにはらはてな見む床なつの花　公音
さき出る花もまかはぬ色なから宿はむくらの庭のなてしこ　季種
花の色もむくらにとつる宿よりや猶なてしこの哀そふらん　守光
はらはねと塵にけかれぬ床夏の花の色のみをしき宿かな

十二日　沙月忘夏

影さえてまさこに霜を置なから秋をわするゝ月のみしか夜　永宣
月や秋まさこや霜とわきかねつ夏はいつくの隈となるらん　雅綱
明やすき空にや夏をおもひ出るまさこの霜のふかき夜の月　政爲
夏の夜の月とはいはしまさこ路にふむ跡きえぬ雪を見る哉　元長
鷗ゐるまさこの月のかけすみて夏なき水のよるそすゝしき　公條
月にゆくまさこのふもと冷しさは霜夜のかねに山かせそ吹　實隆
すゝしさもぬれてまさこの月かけや庭に夏なき白雨のあと　季種
わすれては霜もやおくとゆふ波の眞砂の月の影のすゝしさ　公音
秋の月霜おく庭と見しかけやあけてすゝしき露のまさこ路　濟繼
露しめる沙の月のすゝしさを秋のいろ／＼あり敷にせん
霜の色を月に見せたるまさこ路に鏡もさやけき短か夜の空　守光
霜と見るまさこの月の影よりそ明やすき空も身に忘れぬる　康親
夏ころもうすきたもとにまさこ路の霜夜の月の秋さゆる影　重治
夏しらぬあたりの清水なほさえて月も水なしくまさこかな　爲孝
月かけのまさこみたるゝ夏草による／＼おくや秋のはつ霜　和長
あつきをもかつわすれけりおく霜の清き眞砂や夏の夜の月　伊長

十三日　野亭螢火

にたる飛ふとふ火の野守出て見よ今いく夜半の夕やみの空　永宣
ゆく螢おとろかしつる影もうしあき風ちかき野へのかり庵　政爲
隣なき庵にちかくともす火は野澤にもゆるほたるなりけり　元長
春日野の野守かいほもかくれなき夜の螢や飛ふ火なるらん　雅綱
風さはく野守か庵にともす火と見ゆるやきえぬ螢なるらん　伊長
草の原たく火の扉よるむしにをのれともえてほたる飛ふ影　和長
月くらき野中の松の陰の庵ひかりもありとゆくほたるかな　公條
草かくれ見えし螢も影きえてあくる夜くらき野への庵かな　實隆
あらはなる野邊のかりほにともす火の影をのこして行螢哉　濟繼
いたつらにゆくほたる哉あつめなく人は夏野の草の庵に　康親
身をしるもはかなき野への草の庵に飛や螢も石の火の影
こゝろなき野中のいほにすむ人のあつめかほにも行螢かな　守光
あつめける窓にはあらて住人も夏野の庵にほたる飛ふ見ゆ　公音

くらき夜の光を見せて庵むすふ野澤のほたるいつち行らん　季種
くみなれし野守か庵のうもれ水有とやこゝにほたるとふ影　重治
誰かとてとひ來る野への草のいほ見えしは夜の螢はかりを　爲孝

十四日　　晩夏蟬聲

鳴蟬のそめぬ木すゑも秋ちかきこゑにしくるゝ杜のした露　永宣
すゝしさはゝや秋風の木末より夏をわすれぬ蟬のもろこゑ　雅綱
なくこゑはなにのなこりか空蟬のは山にくるゝ水無月の空　政爲
かはり行空蟬の世の夏もはやとまるとはなき露の木のした　和長
鳴せみのこゑのしくれは夏はつる木末に秋を先いそくらん　元長
きけはまた袂もすゝしなく蟬のなみたに秋のつゆや散らん　公條
なほそ鳴人の秋にはあはしとも身を空蟬のおもひやはせぬ　實隆
秋風の木すゑをまつや空蟬のつきぬ音になく夏はくれけり　爲孝
秋かせにうつりかはらむ夏山の木末やしたふうつせみの聲　重治
程なきをおもひやむせふ空蟬の羽におく露にかよふ秋かせ　濟繼
色に出む秋もやちきる夏山の木すゑしくるゝせみのもろ聲　公音
枝の露に鳴とはしるし秋ちかきは山の蟬のこゑしきるにも　康親
鳴せみのこゑもしくれて秋近きみそきやいそく杜の下かけ　季種
みそきするゝ森のした道くるゝより秋風告る蟬のもろこゑ　守光
夏ころもうすきにおもふ秋風をいそくもくるしせみの諸聲
なくつゆの杜のしめ繩くるゝ日に秋風さそふ蟬のもろこゑ　伊長

後柏原院御日次結題

秋　部

十五日　　幽栖秋來

すむ身たにたへしと思ふ蓬生に露うちみたれ秋そ來にける　永宣
あき風のたよりはかりやなへて世の數にはもれぬ蓬生の陰　爲孝
とちはてゝ思ひし道の草葉にもさはらぬ物か秋は來にけり　濟繼
閉はつるむくらの門もそのまゝにいつくを秋の道芝のつゆ　和長
思ふとも花にはさかし草の戸の色をもまたぬ秋に來にけり　政爲
わひて住よもきか門のゆふくれに待としもなき秋のはつ風　元長
いつとなく心よりなく露をこそなへての秋も宿と來つらん　實隆
くむ人も見えぬ板井の水の上に桐の葉おつる秋は來にけり　公條
山かけの松の扉をとひ來てもさひしきものや秋のはつかせ　重治
さひしさをおのか物なる蓬生の宿にやゝかて秋をしるらん　公音
初風につゆ打ちりてよもき生の陰にもけさや秋の來ぬらん　雅綱
露むすふけさよりしるし跡見えぬ庭のよもきや秋の通路　季種
松の戸は色なき秋をふきかはる風のたよりに先しらせけり　伊長
いかならんかねても露の八重むくらしけれる宿の秋の初風　守光
しられしの淺茅か奥の音つれも人ならぬよの秋のはつ風
さしこもるむくらの門も今そしる秋來る風のたより有とは　康親

十六日　　二星適逢

七夕のまれのあふ瀨にこゝろせよ紅葉の筏かさゝきのはし　公條

一とせに空なへたての雲きりもけふやはれ間の星あひの影　濟繼

七夕のけふのちきりの嬉しさは誰かかす袖に猶あまるらん　康親

あはぬ夜なちきりになして七夕の年にまれなる獨寢もかな　元長

一とせのうらみは世々にふりぬとも更にや夢の星合にうき　政爲

織女はさらに今宵そにひ枕なにとし毎のちきりともせむ

うらみなはおきもつくさぬ行ゑとや猶さら月の星あひの空　守光

ほしあひの秋の日數の七車つむともつきしつくすこゝろは　永宣

はゝ袖らかきたえ間も行合のこよひ名におふ天のかはなみ　季種

待程やたのみならましたまさかのちきりあやうき星合の空　伊長

一とせなかたちは葉のつゆの間なおもふもあかぬ星合の空　雅綱

たまさかにあふ夜うれしと七夕の天の羽衣うらみもやなき　公音

まれにあふうらみのみして七夕はいひよる中の初ともなし　和長

一年に一夜かはすはたなはたに誰かかしそめし枕なるらん　重治

うらみとかいふもはかなし七夕の夢もまれなる契はかりに　爲孝

待くるやなさきな請みひらふてふ長々けふの天の川ふね　實隆

十七日　織女惜別

待々てこゝろ休めむ程たにもまたみしか夜の星合のそら　公條

別路のつらさなしらは七夕のあはぬ月日もなくさみやせむ　爲孝

七夕のいく世の秋のわかれ路な心なかくもしたひ來ぬらん　重治

こゝろよはき別もさそな小車の牛ひきわたすかさゝきの橋　和長

天の川けさのわかれのうき瀬より立とし波なやかて待らん　康親

七夕に人のかしつる袖かけてぬらすにあかぬけさの別れ路　元長

七夕のわかれのなみたけさよりや紅葉の橋に時雨そむらん　守光

あふ程もなみたなかけて七夕の手引の糸の立や　わかれん　永宣

彥星のあはぬ日數にくらへ見は一夜のわかれ猶うかるらん　季種

かきりなき秋はちきれと七夕のあかぬ別やしたひわふらん　伊長

七夕のけふの別にかへやせむ幾とし／＼のちきりなりとも　雅綱

さそなけに天の河原のあま雲のわかれもやらぬ明ほのゝ空　公音

七夕のなみたの袂ほしもあへすこの別にや又しほるらん　濟繼

今はとてよそなる峯のよこ雲におもふもかなし星合の空

七夕のなかき契はなにならてわかるゝ度に身なくたくらん　實隆

其まゝにかはるちきりな人に見よ別るゝ星のうきは物かは　政爲

十八日　夜深聞荻

ともしひのまたゝく影なしるへにて窓より荻も聞の秋かせ　和長

おとろかす夢もこそあれ寢覺にはいとはてきかむ荻の上風　康親

見し夢のおとろくのみか小夜更て又もねられぬ荻の上かせ　元長

とはゝやなまくら露けき荻の音に人待ふくる袖はいかにと　政爲

小夜ふけて露もおつらん秋風につれなくかはる荻のこゑ哉　公條

さすかなる夢もこそあれ小夜枕あまりひまなき荻の音かな　實隆

吹ちらし夕への風のした荻や夜ふかき露におれかへるらん　濟繼

荻の風ふけゆくまゝに音すなり夢もむすはす物おもへとや　公音

明やらぬまくらの露も夜ふかきに夢はみしかき荻のうは風　雅綱

色もなきこゝろなそむる寢覺かなふらぬ雨きくなきの上風　永宣

荻の葉に吹たゆむ風の跡までもつれなき露そ袖に夜深き

いひしらぬ秋の心のかきりなは夜深き荻やさそふあきかせ　季種

さらてたに秋はあはれも深き夜のねさめなさそふ荻の上風　伊長

夢はいさなれし枕のかねの音もよそにやさそふ荻のうは風　爲孝

とはるへき夢路はたえてつゆよりも心なくたく荻の上かせ　守光

きくたひにねさめ物うき秋かせをなにやとすらん軒の下荻　重治

十九日　萩花藏水

とまるともゆくとも見えす秋はきの散しく水のしたの心は　元長

ちりうかは絶間も見えむ萩か花したゆく水や枝おほふらん　政爲

枝ひたす花こそ花よしからみにちらてもせくや萩のした水　實隆

せきとめて花にや袖をしほらましま萩うつらふ庭の池みつ　永宣

たえ〳〵の音にこそしれま萩ちる花のみうかふ庭のやり水　伊長

とてもちる名になかれなんま萩原なに咲かくす花のした水　康親

枝おほふ花のかゝみの影も見すちらぬにくもる萩の下水

なかれ出るすゑは色なる秋はきの花の下水かけはうもれて　済繼

みかは水よしや拂はし萩の戸の花のちりにはうもれ行とも　重治

ふる枝にもとのこゝろのはきか花野中の水を夏と見るらん　公條

ま萩散る野へにしられぬ忘水うつろひはてむ後や見てまし　公音

くれなゐの色にや底もなかるらん花にせかるゝ萩のした水　和長

胡蝶にももろき小萩の散しよりあらはれそむる花のした水　雅綱

花さかりした葉もしらぬ秋はきの影ゆく水の色はたえつゝ　爲孝

埋めなほ散なんのちもはきか花よそにさそはぬ庭のやり水　季種

二十日　女郎花露

夜をこめて誰おき出し露ならんけさいろふかき女郎花かな　公條

置はこそなひくを露の女郎花あたなる名をや花にかくへき　實隆

女郎花なひきなはてそ夕つゆのむすふもあたの契はかりに　重治

心ありておきける露か女郎花あたなる名をや花にかくすと　済繼

一ときはやとしもはてよ女郎花露もあたなる名には立とも　雅綱

名にめては露の情けもをみなへし花には淺き色や見ゆらん　永宣

しはしなと心もおかて女郎花あたなる露になひきそめけむ　元長

口なしの色に咲出はをみなへし露のあた名もいかゝ晴けむ　政爲

おくつゆを玉のかさしにみかきてもなほ光そふ女郎花かな　季種

駒なへて野へ行人の袖のうへに露はおちけるをみなへし哉　公音

置まよふ露もえならすさく枝にうつれはおなし女郎花かな　伊長

立よるも我名はたゝし女郎花露をちきりになひき初ぬる

をく露になひきはてゝも女郎花しめゆふ野への主な忘れそ　守光

なひくとも露こそかこてをみなへし人に多かる心見えすは　和長

をみなへしかさしの玉の露ならはちるを哀と猶や見てまし　爲孝

露の間のちきりはかりに女郎花心よはくもはやなひくらん　康親

廿一日　風動野花

野へは今まのゝ浦風あさゆふに尾花の波そよせてかへらぬ　和長

吹からに野邊の千種のうちなひき目に見ぬ風も色付にけり　公條

誰を恨たれをかしたふくるゝ野の風にみたるゝ尾花葛はな　重治

色もなき草のたもとの露ならはしひてもしほれ野への秋風　済繼

野をとほみ吹とは見えぬ秋風に一かたなひく花すゝきかな　雅綱

吹みたす秋の野風の糸すゝきたえてもちらぬ花のいろかな　永宣

風わたるすそ野の草の陰しけみいかなる花か咲てちるらん　元長

露なひく花野を見れはあきかせの心ひとつを千種にそをく　政爲

これもまた野もせの雫か穂に出る尾花か袖をかへす秋かせ　季種

我たにもおしとて花にわけぬ野をしらすや風の吹捨てゆく　康親

花の色も千々に物こそとはかりに我身一つの野への秋風

風見えて尾花はなひく秋の野ににほふ千種の色もわかれす　守光

野へはいさ千種なからに咲花の何れを風のよきといはまし　爲孝

風さはくすゝの野原の夕くれになひく千種の花やちるらん　伊長

咲花や冬かれまたてしほれまし野原の風のあまりはけしき　公音

正木散山よりもたえ花のうへにこゝろなしきる野邊の秋風　實隆

廿二日　鹿聲何方

山風の空にきこえて鹿の音の秋のあはれや四方にみつらん　公條

たゝへ來し尾上やいつく秋風のまくらにまよふ棹鹿のこゑ　重治

男鹿なくあらしの末は我ならぬおのか妻さへ聞かまとはむ　清繼

秋風のつてもほのかにきこえ來て猶そこともなきさを鹿の聲　雅綱

しるへなく鹿をこかれてくるゝ野にたまたま聞も男鹿の聲　永宣

をちこちに聞さためぬ鹿の音はかくるゝ妻や尋ねかぬらん　元長

鹿の音はいつれか先にさそひ來て峯にも尾にも秋の小夜風　政爲

この頃の野分の風のいつれなほ身にしむ鹿のこゑに吹らん

あくるまて妻もつれなく鳴鹿はふもとの野へか歸る山路か　季種

あはれなは我そ答ふるなく鹿やいつれ山彦をちこちのこゑ　實隆

幾山もいつくか近き秋かせの船にぬる夜のさなしかのこゑ　和長

その山とさためぬ鹿のこゑなれやいつくも秋の心うかれて　公音

そことなく聲きくときやさを鹿の妻とふ道も猶たとるらん　康親

敷たへの枕にかはるさをしかの聲さためなき夢はさめつゝ　爲孝

そなたそと聞もさためぬ妻戀によそまてまよふ棹鹿のこゑ　守光

松風のさはく夕はいつくそときゝもなかれぬさをしかの聲　伊長

廿三日　秋夕傷心

露やしる年深からぬ秋たにもゆふへは袖のぬれしならひに　實隆

春そとて世の人なみに花も見す我にしらるな秋のゆふくれ　永宣

いかにして我よりおいの心にも堪けるものそあきの夕くれ　重治

夕にも秋にも眠るうきならぬ身をさへなとか思ひそふらん　清繼

夕くれに一しほまさるあはれさの心をいかて秋にかこたむ　雅綱

うきなからいつくの秋を過し來てこの夕暮に堪しとすらん　元長

あはれいかになひく淺茅のいろ／＼も人の心の秋の夕くれ　公條

またも逢む秋をもしらぬ我身にはうきも名殘の夕ならすや　政爲

あきそとて物おもふことの夕暮を心にとふも答へわひつゝ　公音

わきて身に物思ふ人はいかならん秋の夕もつらきならひに　伊長

いとはしよ夕の秋のそれならて何を憂身のたくひにかせん　爲孝

閑の樞草のちまたのおきふしに猶わひさする秋のゆふくれ　和長

なかめつゝ夕となれは誰か世のうきにし堪ぬ我を知らん　季種

ことはりのうき世なりけり心より思へは秋の夕暮もなし

露のくの草の秋はいかならん人のこゝろそあきにしほるゝ　守光

うき物といとひはてゝも秋よ今なかめすつへき夕暮はなし　康親

廿四日　遠天旅鴈

くるかたのしられて聞も天つ鴈いつくの雲そかすかなる聲　清繼

急くらんみやこの空は程なくて出しこし路やとほきかり金　雅綱

都には見わたす山もはるけきに越路の鴈のいくか來ぬらん　永宣

雲ゐはていくたひ鴈のゆくとくといつくかおなし旅の中宿　元長

なか空におもひやわふる古里もみやこもとほき天つ鴈かね　公條

天津鴈なになしなりと雲水の跡なきみちをわけて來つらん　實隆

來しかたを天つ空にやしのふらん雲のはたての鴈の一つら　政爲

やつれ來し旅もさそなと來る鴈の雲路隔てかすかなるこゑ　重治

旅の空なほはるけしとおもふなよ都の山をこゆるかりかね　公音

うき雲をまきれて行もほのかなる聲をしるへのかりの一列　伊長

天つかり雲ゐよそなる音つれも誰かすむ山のたよりとか待　爲孝

おもふにも幾うみ山なこのき来し心やかたる初鴈のこゑ

まちえても都な旅となく鴈のこゑさへとほき秋にかひなき　康親

なのか空へたての雲に音なきて都いそかぬ鴈のあはれさ　和長

むれてゐる田面やとほき都には空にのみきく天つかりかれ　季種

いつくにか宿りはからん来る鴈の都なたひの空にまよひて　守光

廿五日　横峯待月

峯たかみよこほりふせるふもとにも月は立待の小夜の中山　永宣

峯續き高きかたへは木くらくてよそより月の影そほのめく　元長

うき雲の横きるみねの秋風にこゝろつくせとなれる月かな　公條

かひかねな今や出らん月かけになほ雲うつむ小夜のなか山　實隆

まつほとはくらき高根な雲かとも影見ぬ月に先いとふかな　政爲

あき風もさむき音羽の瀧のうへの峯やそなたと月な待かな　重治

峰高みこゝにこそまて待すともそなたの里は月や見るらん　伊長

なそくとく出へき月の影としもわかれぬ峰につれなくそ待　康親

まちわひて更ゆく空は横雲のそれかとにほふみねの月かけ　爲孝

心あてにおもひし峰の雲とほくあたりも今はにほふ月かな　濟繼

まちわふるたかねの雲もそれなから松なつくして出る月影　守光

まちわひぬ山のこなたのゆふやみに峰こす月の出やらぬ影　季種

しはしなほ横きる雲の面影とおもひしみねに月そほのめく　雅綱

待わひぬふもとの雲も風こしの峰こす月に立のほりつゝ

このまゝに明やはなれん待更る月のたかねのよこくもの空　公音

あちきなく待出し月もよこ雲のみね一すちにあり明のそら　和長

廿六日　明月如晝

曇なき月な夜ともおもはてや寢たるからすの鳴さはくらん　元長

よるならぬ都の名なもつきかけの千里に見するあき風の空　公條

山鳥もひとりやは寢んますかゝみ照すは月の夜としもなし　實隆

なほさりに見し影いかにすむ月の夜とは人の空めなるらん　政爲

この頃の月の秋にや文まなふ窓にはくるゝ夜なわするらん　重治

よるひるとわきて見るへき色もなし隅なき月のてらす光は　伊長

きえやらて光そひゆく露にこそ日影な月のそらとしも知れ　康親

明るかとくまなき月におき出て思ひしよりもなるゝ影かな　爲孝

かれの音や月見ぬ里なしらすらん隈なき空は夜としもなし　永宣

夜な日に繼てし人のこゝろまてさやかに見する月のなか空　和長

くまもなき影にむかひて夜とたにおほえぬ空に更る月かな　雅綱

さやけさな露のふるまと思ふには何なかやとり月の下草

かはかりの月には誰かふし糸のよるとはいかて枕さためむ　公音

すむまゝに梢のくまもなき月によるなわするゝ鳥の聲して　濟繼

夜なへたつ露のひろまな面影にうつすかゝみや月はるゝ空　季種

烏羽玉のよるとは見えし一むらの雲のよそなるつきの光に　守光

廿七日　十五夜月

かたふかて此まゝ見はやかそふれは秋の日數もなか空の月　元長

これもまた天の河はらの秋の月としに一夜の名にや立らん　公條

今年もと秋のなかはな月に見ていかに身にしむ光とかしる　實隆

月は只なへてのあきも明石潟なみのもなかの影ことにして　政爲

いかなれは人の國にもこよひはとなかめ初ける秋の月かけ　重治

こゝろなき心やそらに月も見む秋も最中と名のみめてゝも　康親

くもらしと月は其名な思はてもてるこそ秋の最中なりけり　爲孝

おほかたの秋を光のはしめにてもなかの月そさらに照そふ　永宣
一葉より月もろ桐のした水も最中の影やさらにすむらん
わきて見む葉月の月も名にたてる今宵いかなる影か添らん　雅綱
ひとゝせの秋の中にもこよひはとかれて心の月もくもらす　公音
かそふれは心のくまか月影の似る夜半もなき水のなかはに　守光
最中そと思ふ光は効もなし知らてあこかれん月にやは非ぬ　和長
秋なからことなるものは名にたかき一夜の月の光なりけり　伊長
めくり来て滿ぬる月のいつはあれと中にも中の秋の夜の月　濟繼
おなしくは名高き月と聞はかり身に知はやなめてん惜さを　季種

廿八日　雲間稲妻

はかなしとなにおもひけむ浮雲を跡にのこしてきゆる稲妻　元長
きえかへり此世を露のたくひとや空なる雲もいなつまの影　公條
野へとほき外山の雲の一むらにかよひなれたる稲妻のかけ　重治
いかはかりてらす雲間に稲つまの跡なき影に見ゆる山の端　永宣
とめぬへき影をはいなと稲妻の雲のよそめは餘りはかなき　政爲
村雨のそらにまきるゝ光かな雲のたえ／＼見ゆるいなつま　伊長
ゆくゑなき露のちきりに稲つまはほのめく雲を面影にして　濟繼
雲の端にまたぬ光はいくたひか心うこかすよひのいなつま　守光
しはし猶おなし雲間にかよひてもありとたのまぬ宵の稲妻　季種
いなつまのひかりに見れは村雲の色すさましき夕闇のそら　公音
むら雲のでらしもはてぬ稲妻によるゆく人や道まとふらん　實隆
雲くらき曉月の露のうへにかよふともなきいなつまのかけ　爲孝
風さはく雲のたえ間の影またてをのれも出るよひの稲妻　康親
雲の端も光はかりのいなつまは何をすかたに時の間も見む　和長
空にしもうつると見しや程もなくかへる雲井の稲妻のかけ　雅綱
稲妻の光もおなし末たえていつくともなき雲のかけはし

廿九日　名所擣衣

折しもあれ立田のあらし夜やさむきゆふつけ鳥の衣うつ聲　實隆
秋ふかき生田の杜のあき風に身にさむしとやころも打らん　重治
打たゆむ木曾の麻衣淺はかにまとろむ程やよそにしられん　爲孝
月になるなにはの蘆火たきすてゝこやの軒端に衣うつなり　永宣
秋さむき槇のしま人たへかねてさらさぬ布も月にうつらん　和長
ころもうつよし野のおくのあきの風身にしむ色や花に吹聲　公條
あき風の目をへてさむき夜もすからおきゐの里に衣打なり　元長
夜をさむみ今や音羽の山ひこもこたふるにかり衣うつらん　政爲
須磨の浦や波こゝもとに打そへて礎は音のそれとしもなし　康親
名にも似す里は十市の小夜衣うつ音ちかくまくらにそきく　伊長
うつ音よ誰をしのふの里とほみそれかあらぬか夜半のさ衣　雅綱
住來しはあらぬものから深草や里は野風にころも打なり
姨捨や山かせさむきあきの夜をなくさめかねて衣うつなり　公音
小夜衣うつ頃よりやまとろまておきゐの里のゆめは絶なん　季種
秋しのや外山の里のをく露もよそにしられてころもうつ聲　守光
ころも打おとは音羽の山こえて關のこなたもおなしあき風　濟繼

三十日　霧中求泊

行舟やとまりいつくとたとるらん霧間にしけき梶こたへ哉　永宣
霧のまにかち答へして行ふれもいつく泊といふよしはなし　和長
藻鹽やく浦のとまやとこきいれは霧のまかきにまよふ友船　公條
つなくへき船のとまりはそことしも思ひさためぬ薄霧の空　元長

泊そと見えしは霧のうきしまによせてやさらにまよふ船人　實隆
霧くらきみつの泊は見つとしてもなくそまよふ秋のふな人　政爲
船とめてたのむとまりも牛窓やあききりくらき沖つしほ風　重治
から櫓おす聲をしるへに行舟もおなしとまりか夕きりの空　康親
夜もゆく波路なからにこく舟のとまりいつくと霧まよふ空　爲孝
霧のうちはこゝそ泊と聞てたに猶まよふへき船のよるへを　濟繼
くれにけり三津とさためむ泊さへ波路のきりに迷ふ舟ひと　季種
浦とをく霧立まよひゆくふねはこゝそ泊とよるかたもなし　公音
たのみ來し泊いつくとこきゆかむみきはもしらぬ涙の夕霧　雅綱
霧の中にこき行船のそのまゝにこゝを泊と行かたやなき
こくふねや霧のなかにも唐琴のとまりは波の音にしらるゝ　守光
霧深みたとるゆふへの浦傳ひいつくに船をさしてとゝめむ　伊長

十一月一日　件菊延齡

うへてたに幾秋なれぬしら菊の花の千とせはまたや待見む　永宣
咲菊のしたゆく水や千代かけて秋をせくへき花のしからみ　公條
仙人のすみ家におふる菊の花うつす宿にも千世は經ぬへし　元長
あかす見て千代もまことに露の間と思ふはかりの秋の白菊　實隆
すゑの秋の花に匂へるしら菊を千世のかさしの初とそ見る　政爲
仙人の千とせのあきをつむ菊の九かさねにあかすちきらん　重治
移らふをあたにもなさて秋の菊ひとへに花の千世や契らむ　康親
しら菊の花をし見れはあきといひ春と共にも幾世とかしる　和長
あひにあひて今九重にさく菊やつゆも千年の數におくらん　爲孝
うへそへて君か千年のゆくすゑをけふより契る庭のしら菊　伊長
いまも其山路のきくのした水や汲てつきせぬ秋をしるらん　濟繼
置つゆに千とせの數のよはひをも猶つみ添む庭のしらきく　守光
打はらひ手折かさしも君かため千代にや千せと菊の上の露　季種
よろつ代と秋もつもらは音にのみ菊の白つゆ淵とこそ見め　雅綱
うつらふと見るも齡の秋の來て老せぬ花に身をや忘れむ
匂へなほ千年の秋をとし毎にいく度なれてちきりをくらむ　公音

二日　霜草蟲吟

かれはてむかきりやいつれ鳴蟲のこゑも色なき霜のした草　永宣
花の色はあへすうつらふ初霜にそなたにのこれ松蟲のこゑ　公條
朝な／＼霜のふる葉のよもきふに淺き陰よりよはる蟲の音　元長
初霜のなかのかや根よ蟲の音よいつれか先に枯まさるらん　實隆
露をこそたのむ陰なれ蟲の音のかれぬやいかに霜のした草　政爲
きり／＼す聲はきえゆく草垣のゆふ日に霜の色そつれなき　重治
木の葉たに遂にしほるゝ秋の霜蟲の音そへて草ものこらし　和長
霜にあへすかるゝか色も淺ちふのをのれさひしき蟲の聲々　爲孝
蟲の音もなひく淺茅の色ことになく霜よりや思ひみたるゝ　濟繼
置まよふ草こそあらめ蟲の音もかれ行野へのゆふへ明ほの　季種
草の原たのむ陰なくなく霜にいまいくほとを松むしのこゑ　公音
なく霜の草のそこにも鳴蟲のなほかれのこる聲もこそあれ　雅綱
こゑ／＼に聞しも今や松蟲のひとりつれなき霜のした草
なくしもは拂ひもあへぬ草の葉につれてや蟲も枯そむる聲　守光
蟲の音もなかれ／＼になく霜の色にきえゆく草の原かな　伊長
あはれなる霜のかれ葉の草根をもたのむ陰とて蟲の鳴らん　康親

三日　紅葉出垣

中垣のすゑこすはかり我か物と見るはちきりの薄紅葉かな　元長

やまさとは垣ほにあまる紅葉のおく物ふかき秋のいろかな　公條

やまさとは庭の草垣うらかれて枝こす色のふかきもみち葉　致爲

聞ゝへの宿ゝ木すゑの色つきて眞垣や山とよそに見ゆらん　重治

はふ蔦のこすゑも山と岩垣はかきもこもらぬもみち葉の色　和長

呉竹の根はふと見えしなかゝきにあらぬ色そふ秋のもみ葉　爲孝

思へともおほふやせはき垣のすゑこす紅葉あらし吹なり　清繼

露しくれ染つくすよりもみち葉のたえ間に見ゆる庭の松垣　康親

山かつの垣ほのもみち一えたはしほりのこすも心ありけり　永宣

くれたけの笆の山のしたもみちいかなるつゆの色に出らん　伊長

しくれてもかた枝はかりはかひなしと笆を山にそむる紅葉　守光

庭に見るあるしよいかに外面にも越る垣ほの枝のもみち葉　季種

打しくれいかに隔て中かきのよその木末はそめまさるらん　公音

隣をあらみ紅葉はよその詠めにもあるしに惜き賤か袖垣

隔なく中垣こゆるもみち葉はいつれの方のあるしとか見む　雅綱

誰をまた見まくほしとか色に出て神のいかきもこゆる紅葉　實隆

四日　　山路秋過

くれはつる秋のこえ行跡ならし草木しほるゝ山のしたみち　元長

すゑ遠くしくるゝ雲の山風に見えてとまらぬ秋のわかれ路　公條

わかれ路におふるもそれと葛の葉のさ山の風や秋を恨みむ　實隆

更にまたわたるもおなし山路ゆく秋やかきりの色鳥のこゑ　致爲

立田山もみち分まよひくれてゆく都の秋や夜半にこゆらん　重治

絶はつる深山路なから來し方をのかしるへと秋は行らん　康親

秋もいま蔦のほそ道わけてゆく宇津の山こえあふ人やなき　和長

花もみちおもひのこさぬ山路にも心をとめす秋やゆくらん　爲孝

なかれては木の葉をのこす水もなし山路を出て秋や行らん　永宣

あはれしる山路の奥もけふのみと思ふにおしき秋の空かな　伊長

ゆく秋や有明の月をしるへにて山路の霜にあとをたつれん　清繼

したへとや山路のすゑにはふ葛の恨かほにもかへる秋かな　守光

散紅葉さそふあらしの日にそへて山路の秋そくるゝ程なき　季種

神鹿の跡たに見ゆる山路にもしられぬ秋のいつち行らん

あふ坂やせきもる山のかひもなく秋は今こそ杉のしたみち　公音

そめつくす紅葉のぬさも手向山木々のした道秋やゆくらん　雅綱

後柏原院御日次結題

冬部

五日　初冬落葉

山かつも山わけころも冬の來ておち葉に袖の色やそふらん　和長

あらし山にしこそ秋と思ひしに落葉と見れは冬も來にけり　永宣

さそはゝと思ふ木の葉やかみな月けふ立風にはやく散らん　伊長

根に歸る木の葉みたれて庭の面に何處を道と冬の來ぬらん　元長

一葉にもおとろき初し秋の風はらひつくして冬は來にけり　實隆

深からぬ山の木の葉もみたれそふみねの嵐に冬や來ぬらん　重治

冬來ぬとけさふく風や秋にちる一葉（イ木の）の庭をまたうつむらん　政爲

秋のうちは堪し木の葉の風の上にもろきを冬の心とや見む　康親

冬きぬとちるを色なる紅葉に露のたえなくさゆる名もうし　爲孝

秋もかくもろき木の葉の殘りなく散もや冬のしるし成らん　公音

神南備の杜はけふこそ冬の色に兼て移らふ一葉たに無き　季種

吹風は露とみたるゝもみち葉や霜さむき松の冬を見すらん　濟繼

冬の色に思ひもなすか木々の葉の名殘なき迄けふは散つゝ　雅綱

庭の面の夜の落葉をけさ見れは霜をかされて冬は來にけり　守光

ちる木の葉まよはぬものそ冬は來ぬ嵐や山の道もわくらん　公條

散はつる木の葉に冬の色を見て枝にすむ鳥あきやこひしき

六日　遠鄕時雨

住の江のとを里小野やしくるらん松の木すゑの船のうき雲　和長

しくれつる袖うちはらひ蓑ほして入日にくたす宇治の柴船　永宣

都には晴ぬる雲のゆくすゑのふもとのさとに今そしくるゝ　伊長

いく里をしくるゝ雲の末ならむ降みふらすみはるゝ空かな　元長

誰か里の袖をたつねてしくるらん木の葉のすゑの遠の村雲　公條

けふも又ふるの山邊のいかにそと袖のほになる夕しくれ哉　實隆

三輪の山檜原くもれる程もなく十市の里やはやしくるらん　重治

行駒のうかへる雲も山こえて木幡のさとのしくれをそしる　政爲

遠かたの里と見るとも曇り來るしくれは神に猶やながらん　康親

故鄕もそなたとはかり詠やる時雨や袖を先ぬらすらん　爲孝

遠かたの里はしくれて晴くもる月の桂のかけのさむけさ　守光

見るかうちに都の空は晴初て雲ゐる里やいましくるらん　雅綱

生駒山しくるゝ雲をいかに見ん思あたりは有もあらすも

小夜しくれ故鄕人もこの頃やおなし雫に袖ぬらすらん　濟繼

遠かたにしくるゝ雲はたか里の心あてさへさためなき空　季種

たか里に袖ほしあへぬ程ならむまたしくれゆく雲の遠かた　公音

七日　寒草處々

のこさしと馬草かる男も冬かれに靑葉すくなき霜や思はむ　永宣

おく霜はへたてぬ草のいかなれはむら〳〵殘る野への冬枯　伊長

其名をもいつれかいつれかたはかりましる忍ふの霜の下草　元長

露に見し草のたもとはほのかにて置ところなき霜の色かな　公條

わけわひし袖やいつくの村薄なかはゝ霜にくちてのこれる　實隆

むら薄のこるを思ふ色ならてなほ冬かれをまれく野へかな　和長

あらすなる草の原かなそれかともとふへき色は稀に殘りて　政爲

置霜は草葉を分て見えねともむら〳〵かるゝ野への色かな　雅綱

いつまての霜なかよそにおもふらん谷の陰くさ松のした草　濟繼
なにゝかは所おきける初霜のむら／＼見えてのこる冬くさ　爲孝
かれて行草葉のこらて初霜にまたむら／＼の花や見すらん　守光
かれにける後さへかはる面影や霜おきまよふ野への村萩　公條
冬枯にいつれかいつれわすれ草こは忍ふへき秋の色かは
冬ふかき霜はわかしな道のへや行手にのこる草もありけり　季種
かつさきし秋の花野のおもかけにいまはたかへる霜の下草　康親
あけまきの刈殘したる蓬生やむら／＼霜のむすほゝるらん　重治

八日　濱邊寒蘆

鳴田鶴も霜夜なわひてゆふ波のあし間にさむき三津の濱風　永宣
はま風にしほこす蘆のかれ葉なに藻鹽になしてよする波哉　元長
ゆふ日影入江のあしのかれしより濱松かえの色そさひしき　公條
濱ひさし久しく波にしほれ蘆の音もかはりて霜さやくなり　實隆
あらはるゝ濱松かえの色を見よ霜にやたへぬ波のむらあし　政爲
はま川のゆくかた見えてむらあしのかれ葉に氷る水の白波　重治
花も葉も散しはいつのはま楸かれたつあしの音はかりして　和長
濱川のこゝろみきはにたつあしの葉風も波も音けたえつゝ　爲孝
霜まよふあしのかれ葉の一村になほ濱松のいろそつれなき　守光
はま風に行かふ人の袖かけてあしのかれ葉をしほる頃かな　伊長
濱風のふくかた見えて蘆の葉のなひきまよふに氷る波かな　公音
蘆の葉に潮風さむく濱ゆふの幾重の霜をむすひそふらん
かけひさし楸はちりし濱かせに波こすあしのかるゝ一むら　季種
しほれゆくあしへの霜の朝な／＼濱のまさこの末は晴つゝ　濟繼
音そよくみきはの蘆はかれふして濱松か枝にのこる浦かせ　雅綱

吹たゆと松にはこ三津のはま風もかれ葉のあしに音そ殘れる　康親

九日　月前網代

人も寐ぬあしろの床のかりひさし今は月のみもり明しつゝ　元長
網代もる瀨々のあたりにすむ月の影見し水もこほらさりける　公條
浪はかり夜のあしろなもる月のすさましけなる宇治の川風　重治
もりはつる田上川のあしろもり秋よりのちの月やいかなる　永宣
鶴かこ人いつより冬は網代木にやみなはかなき月に守らん　和長
年波をおもふや宇治の網代もりつもれは老の月もすさまし　政爲
守わさの宇治の網代木さゆる夜は月の氷によるひをやなき　守光
曇なき月にはありとも網代守たく火にまさる影とやは見る　濟繼
袖のうへに波と月とを宿してやこの里人はあしろもるらん　康親
よせてのみかへらぬ波と月影も守やあしろの床のさむけさ　爲孝
あしろ木に月の氷もなほさえてもる袖さそな宇治の川かせ　雅綱
川かせも宇治の網代のうきふしをとふになくさむ床の月影　伊長
夜川たつ宇治の里人いつの間にいとはぬ月とあしろ守らん　季種
網代木によるの川音ふけゆけは空たかくこそ月もすみけれ　公音
波風をわすれて袖に宿すともさこそあしろの床の月かけ
川かせに夜のかゝり火影もなし網代は月にまかせてや見る　實隆

十日　連日鷹狩

あすも來んけふの狩場の名殘あれや暮る末野に雉子鳴なり　公條
いつまてかけふはかりとの狩衣かさなる山のあかぬ鳥立に　實隆
けふも又猶とりかはむ手になれぬあかけの鷹の心しるまて　永宣
はし鷹のあかぬ狩場のけふ幾日くるすの小野の苔拂ふらん　重治
鳥もやは日次の狩場かくれえむ片野のましは折つくしつゝ　和長

狩人もけふ立鳥もにかなくやあすをはたのむ心なるらん
踏したくきのふの野邊の雪の上にけふはまかはぬ鳥の落草　元長
犬もなつみせこもつかれぬ鳥の引違の山本あすやからまし　康親
狩くらすきのふもあかすけふも又鳥立をかへていそく鷹人　伊長
草ふしやつかれの鳥のけふまてにまた殘りける雪の御狩場　守光
あすも來て山遠からぬ家路とやくれぬと見てもかへる狩人　濟繼
芹川に日數かそへてはしたかのつかふる道やおもふかり人　季種
けふは又きのふの野邊の道かへて鳥のおち草分つゝそゆく　公音
七夕の一夜のみともいく夜ねむ天の河原のあかぬ狩場に
けふも猶鳥立はしらす狩人のきのふの山をかへてこそゆけ　雅綱
狩盡す程もしられすけふに早きのふはかりの鳥立たになし　爲孝

十一日　薄暮千鳥

くれわたるそかの川原の川千鳥こゑきゝすてゝ誰か歸らん　永宣
鳴よるや鴨の川瀨のゆふちとり君にや千世を聞えあけつゝ　和長
暮る夜のもしほ火くらき折しもあれ妻とふ千鳥聲怨ふらん　政爲
夕しほに磯邊にみつの濱千鳥ふたりもつれす立わかれつゝ　元長
ゆふ波のよりくるほとをなき立て聲とほからぬ磯千鳥かな　康親
今はとてつまとふ波のゆふ千鳥さそ待かたも音には鳴らん　爲孝
身にしむは秋より後のゆふへかなあはれ千鳥の立ゐなく空　公條
あさりする眞砂をひろみ夕しほの干潟の千鳥打とけてなく　實隆
夕くれの浪路はるけき浦ちとり聲やしるへに友さそふらん　伊長
風さむみゆふ鹽みては村千鳥かたもさためす立さはくこゑ　雅綱
うなはらや夕の雲のそれなからなほ立つるゝむら千鳥かな　守光
さしくるや鹽もくもりて夕波のたつ空わかぬ村ちとりかな　濟繼
夕しほの入江の田鶴の友千鳥こゑをかはして今か鳴らん　公音
ゆふ鹽にたつや千鳥のうちわひておなし汀にかへる波かな　季種
いたつらにけふもくらして飛鳥風わか友千鳥川邊にそなく　重治
はし立や松かせさむみゆふちとり日も入海のなみに鳴なり

十二日　氷留水聲

たゆるとは見えぬものから岩波の氷りての名や音なしの瀧　元長
人めのみおもひしものを山水のかれぬたよりも氷はてつゝ　康親
淺き瀨もせくにはひゝく瀧波のいかにこほりて音は絕けむ　永宣
音たゆる谷の氷のしからみやせくにまさらぬ水かさ成らん　爲孝
やまかはも冬は氷におとたえて松かせはかりうき物はなし　公條
こほりても月はなかるゝ岩こえて行瀨の水のゆく音はなし　和長
音せぬそ氷のなとゝ山水のむせふをとへはしたにむせひて　實隆
音するも音せぬ時もさひしとはわか山水のこほりにそしる　政爲
あらいその波はしつかに氷りゐて空にはけしき山風のこゑ　伊長
よる波は松にのこりて山水の氷のうへをふくあらしかな　守光
氷りては音せぬ水よ物每にたえぬなかれの有ときくにも
山水のかすかに通ふこゑもなし岩ねの苔をとつるこほりに　公音
さゝ風もけさ見るはかり淺き瀨にみたるゝ水は氷とちけり　季種
いとひしを思ひしれとや山水の音をたえてもけさ氷るらん　濟繼
けふ幾日こほりはてゝやおつと見る瀧の白波音はたゆらん　雅綱
山川の音たえにけりこす波もこほる岩間をしからみにして　重治

十三日　寒閨聞霰

板間よりもらぬ霰もねやの中の衾のしたにさえとほりつゝ　元長
夜をさむみ閨の枕にいく度かあられも夢もみたれはつらん　康親

闇のうへに散くる音のさむけさは身にとほりてもふる霰哉　永宣
袖に猶はらひそかぬる玉あられたまらぬ閨はさえ明しつゝ　爲孝
あられふる夜半の枕よ草のいほの雨にはのこる夢も有けむ　公條
降つもれ篠ふく閨の玉あられこれをや玉のいらかとも見む　和長
あられふる音につけても竹ちかき夜床は更にねむ方もなし　實隆
見るゆめはあらし嵐と音たてゝ夜ふかくきゆる閨の中かな　政爲
あはらなる板間しられて閨の中に散来る霰をとのすくなき　雅綱
もる月はねやの板間に影きえて音のみきこゆるあられかな　伊長
あれまさる板間しられて閨の中に音きくこのま散あられ哉　守光
衣うつ秋の風にもたへさりし閨はあられの散にまかせて
風さむみ霰くたくる閨の中におとろくほとの夢をたに見す　重治
闇のうへにあられみたれて霜氷る枕の夢はむすふ間もなし　公音
さしむかふ影もしめりてをとにきくあられにさはく閨の灯　季種
闇の上にたえ／＼ちりて玉霰かそふはかりの音のさやけさ　済繼

十四日　水鳥馴船

ふな人のおなし心になれ来ては夢もいく夜そなみのなし鴨　康親
池水にさすや小船のみなれ棹見なれてつるゝなみのうき鳥　永宣
水鳥もこほりのほかをゆく船に心へたてぬこゑのさむけさ　公條
釣のあまの心かたよるいとまなみ隔てぬこゑのうらの水鳥　和長
なこり有と立空やなきさす舟なしる人にして鳥うかふなり　政爲
あま小船つれてもゆくやよそにまたたつ空みえぬ波の浮鳥　爲孝
浮へるをおのか友とや水鳥のはかなく船になれて来つらん　實隆
ゆく舟のさをさす袖にまかふまて間近き波にあそふをし鴨　雅綱
たえす見る釣の小船はおとろかて行来になるゝ水のうき鳥　伊長
ゆきかよふ入江の舟のみなれ棹見なるゝ鳥のたつ空そなき　元長
捨小舟おなし入江の波のうへにつかはぬ鷺の影ならふらん　守光
わたし舟しけきゆきゝも馴ぬれは水のむら鳥立としもなし　済繼
ふねわたすゆきゝになれて川波の立もさはかぬ水鳥のこゑ　公音
水鳥の釣する船になれくるも綱になれたる身をも知らん
江の水に近くなれ来てつなきおく舟にともねのをし鴨の聲　重治
鴨といふ名をなつかしみ水鳥やなれてともなふ浦の友ふね　季種

十五日　雪中殘鴈

雪のなか秋になくれてくる鴈や花の春にもしひてとゝめむ　公條
花と見は今もかへらん心かもまことの雪にのこるかりかね　和長
越路よりめなれてや来し都にはけふこそ雪のはつ鴈のこゑ　實隆
我もまたはらひかねてはふる雪に天とふかりの心をそしる　康親
あまつかり都の今をおもひ出よこゝらの春の雪にかへらは　政爲
みやこにも日をふる雪をいとひては猶南にと鴈やゆかまし　伊長
こし路より旅なる空にうかれ来てみやこの雪にまよふ鴈金　元長
鳴鴈のつはさそ白き降雪に誰かたまつさの文字はきえけむ　永宣
秋の空になくれし聲かくもりなき田面の雪におつるかり金　守光
なくれ来しこゝろよいかに大の鴈迷ふは雪の道ならすとも　爲孝
はらひわひ雪をや鴈の恨むらんをくれて来しは心なからに　済繼
しほれ来し露霜のみかはらひえぬ雪ふりはへて鴈の鳴こゑ　季種
鴈やしるこし路にのこる春よりも都は雪の今もあさしと
ふる雪の深きあはれをしれとてや秋にをくれて鴈のくる空　公音
みこし路を幾日過来てふる雪の身のしろ衣かりのなくらん　重治
人かへる田つらの里の雪のなかに跡をたつねて鴈そ落くる　雅綱

十六日　眺望山雪

出る日のくれなゐふかき雪の色に花こそにほへ雪の山の端　公條
しろやいかに太山の雪に都おもふ人もありやとかはす心は　和長
けさの朝けみね白妙に降しきて雪もあなしの山かつらせり　實隆
一すちのみねのかけはし猶見えて降くる雪に山かせそふく　政爲
松原もうつもれ果るけさの雪につくり出せる山そかさなる　元長
うつもれて里こそ見えねゆく人の橋うちわたす雪の山した　永宣
おもひやる心の色にふりつみて幾重かたかき雪のやまの端　守光
なかめ來しかすみも霧も何ならて雪に惜まぬけさの山のは　爲孝
面影も見さりし山のけさ晴てしらぬ日ころの雪もめつらし　濟繼
時の間にふりしく雪やはれ初てこの里ちかき山を見すらん　季種
空にのみ雲をつゝける月もいさ雪に晴てそ山の端もなき
ふしの根のけふりもそれと面影にたつや小比叡の雪の白雲　重治
白たへになへてつもれる雪にしも山の姿はさま／＼にして　公音
ときはなる色こそなけれ白たへに千里くもらぬ雪のとを山　伊長
はる／＼とはても長等の山見えて雪のはなちる志賀の辛崎　雅綱
朝戸あけてむかふはそめは春あきもおよはぬ色や雪の遠山　康親

十七日　雪埋苔徑

苺生しみちも尾上にうつもれてつもれる雪のたかまとの宮　和長
ふす苔のまほには誰をまちも見むさしも日ころの雪の山陰　實隆
降うつむ雪をかこたむ我身かは苔にもたえし宿のかよひ路　康親
ふきはらふあらしの松の梢たに雪のしたなる苺のかよひ路　永宣
たえ／＼の苔のほそみちそれたにも雪より後は行人もなし　政爲
降つもる雪にいくへか埋むらんたとりなれたるこけの通路　伊長
人とはて苔むす庭はふみ分るゆきのしたにも道たとるなり　元長
ふみ分てけさやなか／＼跡も見む苔路のうへの雪のふる里　守光
岩かれやあしもたまらぬ苔の上にやすくも雪の積りぬる哉　爲孝
絶はてゝ思ひしものを苔の上の雪にはまれの跡も見えけり　濟繼
ふりゆくは苔にも見えし道なからまた今更のゆきの山里
日頃ふる雪にうもるゝ山陰はいつかみとりの苔のかよひ路　季種
けさはなほ山路の苔の道もなし雪や世にふる人いとふらん　公音
岩かれの苔のなかめやはらひ行山路の雪のしるへなるらん　重治
雪の中はかれ野の外にたのみ來し岩ねの苔の道もたえけり　公條
苔のうへはなほ跡見えて山人のかよひし道も雪にたえつゝ　雅綱

十八日　爐火似春

打とくる春のこほりか埋火にむかひてかたる人のこゝろは　公音
たき物と名にたつ梅の花の香にときも春なるうつみ火の本　永宣
たとへても春の心のありかほはなにゝか見せむ埋火のもと　和長
さゆる夜もさなから春とむかひゐて折をわすゝる埋火の本　雅綱
むかひゐて心のとけきうつみ火に待るゝ春や先かよふらん　伊長
夢に先さきちる花も見えなゝむ春おもほゆるうつみ火の本　元長
鶯のなかぬかきりの春の色は先しりそむるうつみ火のもと　公條
埋火のかすかなるにも春の色は先かよひくる夢の手まくら　爲孝
むかひ見るこゝろな春の雪なれやとけてのとけき埋火の本　濟繼
あくる夜のかすみの色も埋火の光より見る閨ののとけき
むすふ手に夏なき水もとはかりやむかへは春の埋火のもと　實隆
空たきの袂は春の梅か香のそれかとくゆるれやのうつみ火　重治
花に咲ともしひならぬ埋火のひかりを春と見るものとけし　政爲

きえやらぬ光をたのむうつみ火にすゝむ殿りや春の一とき　康親

折しもあれかつ咲梅のいろ香にも春いそかれぬ埋火のもと　守光

寒かへる風のおとして春とのみおもひはてぬる埋火のもと　季種

十九日　老人惜歳

春をまつ心はかりの暮たにもなしかりし身に年のつもれる　實隆

世の中のなこりはたえす思ふ身に又年くるゝ老そかなしき　政爲

身につもるかしらの雪の翁川ゆく〳〵年なみなき瀬とそ見る　永宣

老らくをよそに數かは年波の身に越るをは知すとやいはむ　康親

更になほ何惜むらん老らくの身にのみこえてつもる年かな　雅綱

わきて猶をしむもさそな老の波かへらぬ年のくれてゆく空　伊長

老の身に過來しほとをなくるとも惜かるましき年の暮かは　元長

この暮にまた立こえむ年波もおいのたもとは先おしむらん　守光

皆人の老をかへさむくすりもか暮ゆく年はかきりある世に　公條

としは今たゝ我のみの限とかいふにも老のあはれをそしる　爲孝

數ふれは惑ふへきにもあらぬ身の年をいつくに暮るとか思　濟繼

つれなくも殘ると見ゆる老の上に思ふともやに年は惜まむ　和長

おしむにもかひなき物か老の波こえてかへらぬ年の暮かな　重治

大方はおしみなれても有しよりくれやすき年を老てしる哉　季種

老そうきかしらの雪も行年もつもれる年のうへにつもれは　公音

積りては我身ひとりそ年の暮としは春とて立かへるとも

後柏原院御日次結題

戀部

二十日　思不言戀

身をしれは打出の濱にうちいてぬ心の色をいかに見えまし　公條

ほかに其見えなむ色をとはれはや我あらはさぬ淺き思ひを　濟繼

いかさまに打もか出ん言の葉に心ゆるさぬうたかひもなし　和長

おもふとて心をつくす言の葉はあらし物からあたに散さし　實隆

涙たにせかてや見せん誰ゆゑと問はゝ言葉のたよりもそ有　永宣

いひ出てつらきを見むもわりなしと思ひ煩ふ年もへにけり　元長

限あらは人や汲しるとはかりにいはてもえやは山の井の水　政爲

思ひ餘りあらぬ人にやなかなかに問すかたりし心見えまし

わか心安達のま弓すゑつゐにしのひは果てし色や見えなむ　公音

うきふしもましる習ひの世にこりていはぬ歎きや谷の下柴　季種

つれもなき心ぞそれといはさらむ限はいつか隣くなも見む　爲孝

下くゆる煙も藻鹽火それとたにほのめかすへき言の葉も哉　重治

いひ出てつれなき色はうき物とおもふになほも忍ふ中かな　伊長

猶そ憂それにもあらぬ人にさへくるしき物といはぬ思ひに　康親

いつまてか涙はかりにむせふへきせめてしらする一言も哉　守光

もらしてもつれなかりせはとはかりに思ひ返して過る中哉　雅綱

廿一日　祈難會戀

伊能里天茂浮田農森乃憂中者神左奥請怒契越蓮知　公條

思へかし神にしるしの無名をもたかつれなさに立とかは知　濟繼
人はなほはけしく見ゆる初瀬山かれの御獄やしひて祈らん　和長
かひもなき心つくしかよそにのみうつる鏡の神と見はては　實隆
あはてうき哀なしらはいのるてふ鏡の神もかけてくもらむ　永宣
貴船川たとる逢瀬のあた波ないのるかひなき袖にうけつゝ　元長
みしめ繩なひくとも見ゑ一言の神はなき世な恨みてそふる　政爲
淺はかに何恨けむいのるさへめくりもあはて過る月日な
祈らすよ千木のかたそき行合もしらぬ契のくち果てれとは　重治
神や先なひかさるらんわか中にあはぬ歎きの杜のゆふして　康親
よしやたゝ神も恨しいのりてもあはぬ契のむくひなりせは　雅綱
榊葉の葉かへぬ陰を見るもうしつれなき色に祈來し身は
哀とはいつれの神かゆふたすき懸て此身はいたつらにして　公音
いのるてふことはうけしの神な月袖のしくれなとふ人も哉　守光
あふ事は神もゆるさて祈るかひなく〳〵かくる杜のしめ繩　季種
しろしなき神も心のつれなさを人にはいつかならひ初けむ　爲孝

廿二日　歎無名戀

くらへてもなき名は憂やたはれ島波の濡衣いつかほさまし　公條
我上はとにもかくにも思ふ名のいへはさすかに人に苦しき　濟繼
月草の移らふ人のたくひにはかはらむとての名にや立らん　和長
恨すや思ひもかけぬなき名さへ風にさきたつ波にぬれぬる　實隆
かされぬるたかぬれ衣を我袖の涙になして名にはもれけん　永宣
憂こともよし逢まてと過し來て無名をさへに歎きそへつゝ　元長
誰かしろ身は中々にあらぬ名を晴けもやらて過す月日を　政爲
思ふとはたかしり初てかくはかりよそに無名の末き立らん　伊長
かこつへきかこと求めて我にうき人や無名もいはゝ立らん　重治
いつまてか山とし高くあたし名の立にもしらぬ中に歎かむ　季種
乾わふる波の濡衣くるしくも誰かぬきゝするつらさなる覽　守光
今更に歎きやはせむとてもかく立名といひて人しなひかは　雅綱
厭ふとか思ひもなさはよしや只身の浮名をはいひも晴けし　爲孝
とにかくに立は無名と思はぬを思ふ習ひも身には知れと
いかなれは袖のした行なみた川しらぬ逢瀬の名には立らん　公音
身にゆるす往來はたえつ今はさはあらぬ名こその關守も哉　康親

廿三日　相互忍戀

身一つの人目つゝみはいかならん二人せくにそ水も淺さぬ　和長
行かよふ心のおくはいかなれや共にしのふの山のしたみち　永宣
はかなくも誰か方よりかよはるへき色に出しの心くらへは　元長
猶もひつ袖のしからみおなし瀬に人目つゝみの涙もらすな　守光
かはかりの涙やはせく世につゝむ契りはおなし心なりとも　雅綱
もらさしの心はおなし袂にも我そなみたはせきまさるらん　濟繼
いか樣に人の見るらん我中はよそけになして共にふる世を　爲孝
誰か方か限知られんとはかりにいとゝ忍ふの亂てそおもふ
世にもれは我身のとかに成やせむ人にまけしと忍ふ苦しさ　公條
夢にたに見えしとおもふおもひ寢に人もやつらき人の面影　公音
誰か方か心のおくは深からむ見はやしのふのおなし山路も　實隆
もらさしの心くらへも我はいさまけて思ひの身にも餘らは　政爲
訪來しのかこと也とは賴ましよ人もよそめを忍ふはかりは　重治
ひまもなき人目をよきてもろ共にせくやなみたの川口の關　季種
わするなよ露のちきりの末葉まて共にと忍ふ草の根さした　康親

もろ共に深きなさけは通ひてもしのふにたゆる中のとし月　伊長

廿四日　不堪待戀

一夜にも身は朽ぬへし橋姫の袖やつれなく波になれけん　實隆
たのめつる人は音せぬゆふかせに心の松の身をしほりぬる　永宣
いのちをはこの夕暮につくしても待わひぬとは誰か傳へむ　元長
こよひ來てそれときくとももとはしとや心の松の雪折のこゑ　政爲
此夕身をかきりそと思ひしる道たにあれなよしとはすとも　爲孝
むなしくて明もやしなんとはかりをこの夕より先歎くかな　濟繼
心たにこゝろにさはるうさなれや契いかにとおもふ待夜は　季種
ありし身におなし物から此暮を待もかきりと何おもふらん　康親
いつはりに習ふ憂身はたのめつゝ待夕さへくるしかりけり　伊長
あたならぬ命なりとも待夜半の心は千々にくたくものから　重治
今は身に思ひたえなむとはかりに待夜くるしき心となしれ　守光
僞になれし夜ころのいつまてか只うたゝねの月にあかさむ　公條
待程もたゝにあられぬ身にしあれは幾度床の塵はらふらん　和長
萩の上の露をも袖に拂ひかねわか待來れは風もつれなし
我やゆかむ今は明ぬと思へともとても寢ぬ夜を恨かてらに　公音
きえはてゝ後は何せむ露の身の殘れるほとをとふ人もかな　雅綱

廿五日　臨期變戀

しらさりきふりはへ今は雪もよにひとり氷の袖をしけとは　實隆
時の間は淵は瀬となる飛鳥川あすといひても又やかはらむ　永宣
わか門をとふかと聞し小車の引かへすにもやるかたそなき　元長
風かはる空さりけなき夕暮やわか袖のみのしくれなるらん　政爲
かならすといひし夕のかねことにかはる今宵の獨寢そうき　伊長
人はこの後いかさまに契るともいま更かはる音つれはうし　康親
此暮となしへ置つる妹か門あらぬこたへにさしやこもれる　重治
笹蟹の蛛のふるまひ引返てうしやかねても知らぬさはりは　濟繼
今こんといふはなれぬる僞をさらにことはる音つれもうし　爲孝
賴めしも今の間なから音せぬはもしわするゝの疑もなし
ときの間もつらき千年か今來んと心の待につくるさはりは　季種
時のまに何をかことのさはりとも我にことはれつけの小枕　守光
今來んといひしは身にもたのまねは思ひし事にかはる夕暮　公音
おもはすよ今はとあくる槇の戸にとはしと告る人の夕くれ　雅綱
つれなくも今はこりねと思ふらん又この際も人のかはれは　和長
思ひかへす心もあらは小夜枕かねてしらせぬ夢の世そうき　公條

廿六日　時々驚戀

たまさかにさてもとかこつ夕たにとはては人の幾日過けむ　永宣
身を秋と思ひしりてもこのまゝはいかゝ山田の驚かしつゝ　元長
いつか見む夢をは知らすおり〳〵の身の憂數そ驚かれぬる　政爲
せめて只忘れはつなと折々に又おとろかす中はかひなし　伊長
折々のつらさはかりをたよりにて身は徒らに驚かるらん　康親
はらひ來し道よりみちの露けさにまたいつまての蓬生の庭　重治
かきやるも人目もろまの玉草をたのむ思ひの有身とや見む　雅綱
いつをきておもふにたゆむ心とて心の我をおとろかすらん　濟繼
物毎におもひ忘れぬたよりにもなを雪風や身をしほるらん　爲孝
あちきなくこれを誠の契かは忘れぬ程におとろかしても
春の花秋の紅葉にうつる世をおなし思ひの身にそおとろく　公條
風のこゑ虫の音もたゝこの頃はわか思ひなる袖を見せはや　實隆
あた波の折しもあれは捨小舟おもひはてすの風もよすらん　和長
さすか猶わすれもはてす思ひ出て稀にも我を人のとふらし　季種

ともすれは心なしほる松の風わすれぬものに袖そしくるゝ　守光
戀に身はけふも暮ぬとおとろけと猶わすられぬ鐘の音かな　公音

廿七日　憑誓言戀

頼むそよ神にかけつる言の葉はたゝ我爲のゆふたすきとも　政爲
ゆふかけて契りや置むかはらしの言の葉守の神のまに／＼　永宣
一すちに誓ひこすゑよさりともとたのむ誠を神やうくらん　爲孝
神よさて誓ひしことゝいさめてやかはる心の後もたのまむ　伊長
おなし世の後まてなほも頼むかな契むすふの神のまに／＼　元長
忘るとも神やいさめむ誓ひてし言葉を人にたのむとも見は　濟繼
事にふれてあた成にしも神懸て言しはよもと頼むはかりそ　康親
わすれしと誓ひし人の言の葉にかけてものこる命とをしれ　雅綱
ちかひてし神やたのまむ僞もまこともわかむ我身ならねは　公音
我にのみいふにもあらす誓ひてし詞そ神の知にまかせむ
忘れすは何かかはらむ川の石のほりて星となる世ありとも　實隆
枝をかはし羽を並ふる誓ひあらはたゝ花鳥の世をも頼まむ　公條
みしめ繩なかき契やちかひてし千々の社にかけてたのまむ　重治
いつはりのなき世になさは神かけし人の言の葉末も頼まむ　和長
僞もあらしかことのたよりある神もあはれぬ我もたのまむ　季種
今そしるちかひしすゑを頼とて神のめくみも人のなさけも　守光

廿八日　深更歸戀

恨ても夜ふかき道のいかにそとそふる心も我にわかれて
いつなとか心の末に待も見むまれの夜をたに一夜となさて　實隆
夜をこめてなく／＼出し涙ゆゑゆふつけ鳥のこゑも露けし　公條
夜を深みわか歸るさは人やりの道ともいはむつらさをそ知　政爲
よのつねにおき出し朝の道芝もさこそは露のふかき世の空　濟繼
つれなくも何いそくらん有明の月も夜ふかき人のかへるさ　重治
夜をこめて急くにあかぬ衣々はうらなく頼む中としも無　伊長
いく程もあらしわかれをいそきつる恨も人にのこる夜の空　康親
うしやたゝ暁出る月をたにまたて夜ふかききぬ／＼のそら　永宣
なけかしな人目はかりに深き夜をのこす心の別れなりせは　雅綱
とりあへぬ音そなかれける深き夜の鐘さへきかぬ衣々の空　元長
立かへり露おく袖よしのゝめの鳥より先になにをうらみし　爲孝
小車のうしみつまたてかへるにも人は驚くゆめもやはある　知長
深き夜の鳥にさきたつ鳴音をはつけさへあへぬ人の歸るさ　季種
立歸るなこりもつらく殘る夜にせめて又寢の夢やまたまし　守光
まきの戸に夜深く殘る月を見よ我かへるさは思ひなくとも　公音

廿九日　後朝切戀

獨寢をなくさめとてやわかれてもあしたの床にのこる面影　伊長
のこしつゝ人にそへつる魂のいかにかへりてけさは戀しき　元長
つくすへきならひ成共いかさまにけさの心を書もやらまし　濟繼
世にしらぬ月のゆくへやけさは身の心の闇に猶やのこらん　爲孝
あすしらぬ命と何か歎きけむけさの名殘のうさもならはて　康親
けさたにも思ひきえぬる露の身のいかて夜深くおき別けむ　永宣
誠にも消はてぬへし逢毎にかへてや來つるけさのいのちは　實隆
つゝきにはかこちも遣ゝ我中のけさの名殘そ言の葉もなき　守光
夢ならはまたも見ゆやと思ふたに朝の床はうかりしものを　公音
又いつといひしそ命忘れすはけさの名殘や思ひのとめむ
年月はあふをかきりのわか涙けさの袖にはせくかたもなし　公條

ひと夜ねていかに絶ける七夕の心なけさの身にもしらはや　政爲
しらせはや別れしけさの袖の露なをきえわひてうき命とも　雅綱
なからへてあれは逢夜の命ともおもひなされぬけさの別路　重治
思ひきえはゆふへの空をまつの間はゝき別とも心やまある　和長
おきあへぬ床のけしきもおもひやれその朝寢髮のこる面影　季種

十二月一日　逐日增戀

日數ふるなみたの雨の思ひ川まさる水かさはせく方もなし　永宣
忍ひ來し袖のなみたもけふは猶つゝむにあまるわか思ひ哉　伊長
思ひのみつもるや雪の日にそへてなひく草木を心ともかな　雅綱
なほさりに思ひ初しも今そしるなれ行まゝに近まさりして　元長
思ひ草春の雪間の日にそひて繁るをそれと見すや知らすや　濟繼
積りけりきのふは淺き雪の上に消ぬ思ひをたくへても見よ　政爲
幾しほといはむもあさし戀衣そめます日々の色に見えなは　實隆
さりともとたのむ契も朝もよひきのふに增る人のつらさは　季種
あやにくに思ひそ增る日にそひてつらくなるにも懲ぬ心は　公音
物思ふ雲のはたての夕月夜々をへてまさる影は見ゆらん
とにかくにつれなさのみやます鏡うき面影は曇もくもらて　守光
とへかしな日をふる袖の時雨には心木の葉の色はいかにと　康親
何にそめなにを色なる思ひにもきのふに增る袖の下には　和長
にしき木にあらぬ深さのくれなゐの袖も幾日の色を重ねん　重治
あかねさす日數も空に幾しほの思ひの色のはてそしられぬ　公條
露しくれそめし木末は何ならてなみたの袖の色そそひゆく　爲孝

二日　非心離戀

萩の葉のそよくを見ても思ふらん難波のあしのはれし契を　永宣
疎きたにつらかりし身のよそ人に其儘ならん物としりきや　伊長
心こそへたてもはてね都をはたちわかれにし須磨のうら波　雅綱
いかにせんしけき人目を忍ふ山通ひし道もあとたゆるまて　元長
根にこそと思へる花の心に[illegible]　濟繼
のこしおく心やかたみ玉手箱身をわけてとも思ふわかれに　政爲
とりあへす心もゆかぬ別には忘るなとたにいふよしもなし　公條
やく鹽のなかなか身そからき浦風になひくけふりは心しらねと　實隆
中たえていつちかさそふ水鳥の入江にさはく波のうきくさ　公音
思へかし其人ならぬうつし繪に遠き別もなきためしかは
床さむみくさふし知らぬかた鶉たか秋風にたちわかれけむ　守光
あはれとも海士の鹽燒うらみをも今ゆく道におもひ出つゝ　康親
へたてあるほとに雲井のかり初に親の諫めし音をや鳴らん　季種
このわかれ思ひもかけぬ人やりにしひて恨ん言の葉もなし　和長
身にそふる扇の風もへたてゆくふな路かなしき蟲明のせと　重治
ぬれ〱す八十瀬の波も袖に今むかしをかけておもふ別よ　爲孝

三日　見形厭戀

いかにせむ立そふ影を月に見てこゝろの雲に厭はるゝ身を　永宣
いとふらん身こそ老木の心をは花になすとも人はしらすや　元長
かへり見て見ぬにしらるゝ面影を我も人にそ深くことはる　濟繼
夢うつゝそふ面影は誰ならん見えし我をはいとふものから　政爲
衰ふる身は誰ゆゑの思ひとて見るめをさへに厭ひはつらん　伊長
見るたひに鏡にはつる面影をわすれて人のうきになさはや　爲孝
いかにさて戀にやつるゝ姿をは有にまかせていとひ果らん　公條
恨しなうき太山木のすかたをは思ひもかけぬ花のこゝろを　雅綱

おもきなく夜の契はゆるさなむいとふ姿もしひて見えしな　實隆
つくも髮おもひみたるゝ面影の立なるゝをもさそ厭ふらん　重治
みるめかるあまたに夜は海士衣かさぬる妻し有世いとふな　和長
いやしきは心言葉のほかにまた見にくき姿さそいとふらん　季種
三輪の山それ共人の訪來かし身を小たまきの厭ひはてゝも　康親
人はまた面影見えてやみねとやわか姿をもいとひはつらん　守光
我たにも我なそいとふ朝毎のかゝみにうつる影を見るより　公音
鳴蟲もはてこそかゝる姿なれすさめぬ戀のわれや何なる

四日　　數書恨戀

僞の人の言の葉見る度にうらみよみてや數つもるらん　公音
かきすつるたゝ一筆のあとにたに心をこめて人そつれなき　公條
我方に知ぬかことのそふもうしうへはつれなき筆の跡にも　實隆
知やいかにたま〳〵鳥の跡見ても思ふに堪ぬ音こそ鳴るれ　政爲
僞と見るもうらみの文なからあまりなくさむ言の葉もなき　濟繼
かはかりの心を見する玉章はとふにうらみの數そゝひぬる　伊長
かひそなきより來る波の玉章もおなし恨のうしと見るめは　雅綱
一筆にかきとゝめさる玉つさよ恨ぬものゝうらみとはなる　元長
恨有その一筆もさすか猶なき所なき物とやは見ぬ　爲孝
恨あるこの一筆をことはらは見よとも人にまたやかへさん　永宣
かはらしといひしにたかふ水莖のなかの葛葉やあき風の色　重治
玉章は手にとる程なおもへたゝ見すは恨のかゝらましやは　和長
藻鹽草わか書やりし程はかり返る波には見ぬもかひなし
待えても見るに程なき一筆をいかはかりかは我はうらみむ　守光
見るたひに打なくはかりいかなれは涙せきあへぬ袖の玉章　季種
筆のうみ千尋のそこも何ならてたゝ一言にこもるうらみよ　康親

後柏原院御日次結題

雜　部

六日　　殘月越關

月にはなほ杉の木末にありあけの道をもたとるあふさかの山　雅綱
影さゆる月のしら濱にゐる〳〵と關路あけゆく須磨の浦かせ　永宣
かへり見るみやこの月の夜に深し鳥の音をしゐあふ坂の關　實隆
月ゆゑもかへり見かちにおき出ゆけは關の戶をこゆへき月そ空に殘れる　元長
鳥の音におき出てゆけは關の戶をこゆへき月そ空に殘れる　公條
こゑやらて先やすらはむ有明の月はこなたのあふ坂の山
あかて行これも心の戶さしかな關の木すゑの月のあけほの　政爲
都をはあとにへたてゝ有明の月もこゆるやあふさかのせき　守光
あかてゆく都のけさのおもかけも月にほとなきあふ坂の山　濟繼
月にゆく竹のした風ふきたへて明る夜おそきあしからの關　康親
かへり來んみやこの月の明かたも今はとしたふ逢坂のせき　季種
おき出てゆけと夜ふかし相坂や鳥のそら音も月を見よとか　公音
しはしまた月たにおくる關の戶を明ぬと誰か立わかるらん　爲孝
こえゆけは名のみ霞の關なれやくまなき月のありあけの空　伊長
有明にふねこき出せきよ見かた關もる夜のなみもとゝめし　和長
鳥の音に關路こえてもみやこ出し月や夜ふかきあふ坂の山　重治

七日　　風破旅夢

吹しほる袖のあらしはうつゝにも夢にもつらき宇津の山越　永宣

旅ならぬ人もおもふにうちとけてこの山風に夢はあらしを　實隆
草むすふまくらの風のはけしくて夢も果なきむさし野の原　元長
吹とふく風もいく夜の笹まくらたゝふる里の夢そみしかき　公條
松かねにかけつる夢のうきはしも枕のあらし末はとほさす　季種
草まくらとけて寢ぬ夜に心ともさめまし夢に山かせそ吹
さそはるゝ夢はみしかき小夜風におくるはおそき草枕かな　雅綱
波風にこゝろゆるさぬいそ枕ゆめも旅寢のならひしるらし　公音
はかなくも見え來てつらき嵐かな松かね枕ゆめもまたぬに　康親
まくらかる小笹か霜をふく風に跡なき夢をしたふはかなさ　爲孝
こゝろなきこの山風よ夢ならてなくさめかたきくさの枕を　濟繼
草まくら都にかよう夢路さへたえて身にしむ野邊の小夜風　伊長
山いつく陰なき草のまくらにも夢はあらしのむさし野の原　守光
來し方のたよりの風と思ふ共夢にはつらき物にやはあらぬ　致爲
夢もなほおもふかたより見え來すは波の枕の風もいとはし　和長
枕かるみのゝ小山の松かせに見はてぬ夢そなこりさひしき　重治

八日　　嶺林猿叫

ますら男かみね立こゆる狩こゑに林かくれをわたるむら猿　永宣
峯たかみ木の實むなしき山風をわか歎きとやましら鳴らん　實隆
峰とよみ林をわたる風のおとに木の葉みたれて猿さけふ聲　元長
猿さけふ峰のはやしの雲の色よ雨ならすとも袖ぬらせとや　公條
みね高み子を思ふ道は木隱もおほつかなしやましら鳴こゑ　政爲
花に風香をたにおもふ峰の雲ふかき木末に猿もなくなり
梢にとりおつる木の實を拾ひても峰つたふ猿の聲そ隙なき　季種
山彦もちかくこたへて峰つゝき木ふかき奥にましら鳴なり　雅綱

みね高き木末のあらし吹まゝに鳴やましらの聲もすさまし　公條
きかてさへ住うかるへき峰の庵雲の木すゑにましら鳴なり　康親
陰ふかき木すゑもわかぬ雨雲の峰たちならしましらなく聲　爲孝
木つたふや木の葉もそよと音はして猿なく峰の雲ふかき暮　濟繼
くるゝ日の木深きみねにかへり來て哀ましらの聲そ淋しき　伊長
おち初る椎のはやしになく猿の聲やゝさむきみねのあき風　守光
みね高き木すゑは鳥も住すなる枝うつりしてましら鳴なり　和長
おち葉する峰のあらしのくるゝ日に猶さひしき猿叫ふこゑ　重治

九日　　翠松遶家

ゆきめくる道も幾木の陰ならん木すゑかさなる松のした庵　永宣
落葉かく道たえ〴〵の松原にさひしくも有かかき籠る身は　實隆
ねくらとふ鳥もなれくる山松に木かくれてすむ宿の靜けさ　重治
軒も垣も松か枝ふりてわか宿は巣にすむ世とや白鶴のこゑ　和長
かくれ家と尋ねはいらす引うへて見るかうちより高き松原　元長
尋ね來てこの世のほかにたとるかな空のみとりの宿の松風　公條
頼むとて千年をふへき住居かは松を廻りの垣もはかなし
はるゝ夜の月さへうとき住居かな枝さしおほふ松のした庵　伊長
陰しけき松よりほかは草もなしいほりはなにを引結ひけん　公音
葉かへせぬ枝もひまなき陰ふかみとしふる里の四方の松原　季種
すむ人の千とせをこむる軒端かな庭も外面も松のみさをに　雅綱
拂ふへきかたこそなけれ松陰の宿のかよひ路深きおち葉は　康親
めくる日もさす方見えぬ松陰の軒端はかはく露の間もなし　爲孝
入來れはかさなる陰もあらはにてたゝ一むらの松のした庵　濟繼
もみち散るのちは色なき松の陰しくれそ今は宿につれなき　守光

年もへぬ庭も垣ほもおなし枝の松にかこへる色はかはらて　政為

十日　山家人稀

山さとはたま〳〵見ゆる人影も行かたしらぬ木かくれの道　永宣
とふ人も道なきかたとたつね來し心もふかしかくれ家の山　重治
さひしとも思はゝ堪し山里はなるゝまゝなるひとつ庵かな　元長
とはるへき人もはや世になき身をは行て山里おもひ過さし　和長
山里はわか跡はかりふみ分てまたまよふへき道たにもなし　公條
音つれもまかへてきかむ嵐かはとふへき人もあらぬ深山に　政為
山里もさすかにたのむ花にたにとはぬ夕のいく日すきけむ　伊長
とふ人のありとも誰かこたへましなかはおほゆる柴の扉に　済繼
世にしれぬなさけありとも山深くむすふ庵は誰かとふへき　季種
假にたにとはぬやいかに後れしと言しはかはる山路也共
大かたの鳥たになかぬ山深みいかなる人を待むとかおもふ　實隆
とはれぬを世の憂事になさむ身は頼む山路も住やうかれん　為孝
山里に我住すともすまはやといひしは人のこゝろならすや　公音
行かへる人は見えねとしはの庵住とはかりの聲のほそみち　雅綱
とふ人のあらはと思ふ山の奥にまた捨果ぬ身をそおとろく　康親
ましはとる人のゆきゝを松の門たのみかほにてすくる山陰　守光

十一日　野寺僧歸

わけかへる袖さむからし月の下の門は野風の吹にまかせて　實隆
かへりてや又墨染の袖のいろに道たとりゆく野への古てら　重治
ふりにける寺は野原の松の門月にたゝくもしろきかへるさ　和長
花つみてかへる野寺は墨そめの袖のつゆほす夕けふりかな　元長
うき身をはまかせ果てし雲水にかへるやいつく野への古寺　公條
空は雲かへるをさそふ墨染のたもともさそな野への露けさ　政為
さこしくもかへる野寺は墨そめの袖とふ月そ友となりぬる　伊長
くれわたる野寺の月にかね聞て船さしかへるすみそめの袖　永宣
墨染の雲のはやしの入あひにかへるもおなし袖のさひしさ　済繼
かへるらん袖に夕日の影見えて野寺の道は山もつゝかす
道とほき野寺のかねにさそはれてかへる袂やすみそめの空　季種
雲も今かへる野寺のゆふくれにいろこそまかへ墨そめの袖　雅綱
墨染のゆふへの袖に露わけてかへる野寺はさそなはるけき　公音
かへる袖いそくを見れは墨染のゆふへの鐘の野への遠かた　康親
こゝろをそ宿す一葉の船ならしかへるは野への墨そめの袖　為孝
入あひのかねは雪よりひゝく野にかへるやいそく墨染の袖　守光

十二日　田家見鶴

きゝなるゝわれや仙人山田守さはへにあさる鶴のもろこゑ　元長
ひたい音をおのか友とやあさりする田つらの庵の秋寒き空　政為
人かよふ田面の庵のあさゆふになれてや近く鶴のすむらん　伊長
もり捨るかりほの小田に鳴鶴のたてるすかたそ翁さひたる　永宣
人もなきほともしられて庵ちかき田面の水につるのたつ影　済繼
静にて庵もる友はむしろ田の群ゐるたつにしかしとそ見る　實隆
苅あけし田つらの里のいつまてか鶴は門もる聲殘すらん
いとひ來し鹿はかよはて庵近き苅田の面にたつのもろこゑ　季種
小田守は見馴にけりな立さらてかりほに近くたつそ鳴なる　雅綱
山もとの田面に見るも蘆田鶴のこゑは雲井の物とこそきけ　公條
洞のうちの昔やおもふふりにける里は鳥羽田の蘆たつの聲　為孝
あさりしておのか影をや友鶴のたてる門田の水のさひしさ　重治

里のをさも翁さびつゝ稲守や田つらの鶴をおのかよはひに　和長
見るも聞も住居さびしきひな鶴の聲や小田守友となるらん　公音
もり捨るとまや行けむあれのころ冬田の庵にたつそ鴫なる　康親
守すてし庵はあるしむしろ田になほ立さらぬ鴫のもろこゑ　守光

十三日　樵路日暮

みねにのみ日影をたのみてもくるゝ麓にまよふ山人　公條
山人もかくとしれかし徒らにくらすわか身は猶そくるしき　政爲
友なひて歸る木こりのうたてなと獨もすまぬ山路なるらん　永宣
岨つたひ一人〳〵のかへるさに柴とる山の日はくれにけり　濟繼
哀にもくれにけるかなおもからぬ薪なれともとほき山路を　實隆
休らはん花なき頃の山人はいかにくらして今かへるらん
後るゝは何のうへにもくるしさを思へ爪木の道とくかへり　爲孝
行すゑを急かむとてやくれわたる爪木の道に先やすむらん　和長
ふきおくるゆふ日も谷の北風に船さしかへるみねのしは人　康親
よしさらは月待てとの休らひにうたふ木こりの山路来しつ　公音
暮すきてかへるしは人よひかはす聲をしるへの谷のした道　元長
くるゝ日に道ごなれても山陰は歸る木こりの道たとるらし　季種
くれ渡る岩ほつたひも柴人のかよひなれたる道のまへはね　雅綱
月なたにたのまぬくれの眞柴とる山路くるしと誰急くらん　重治
とは人の休むほとかは行やらてくるゝ山路にうたふ一ふし　伊長
暮ゆけは月のかつらの影をさへなほ折そへてかへるしは人　守光

十四日　晴後遠水

はる〳〵ときのふの雨の山風にちりもまかはぬ水のしら波　公條
霧のこるこの山もとは木くらくてゆくすゑとほく白き川水　伊長
雨はるゝ水に入日のかけそひて雲はふもとをのほる川かみ　永宣
山かせのふもとのくもの行末にはしめてはるゝ水の一すち　濟繼
よそに見る水影すみて山かせに朝川わたり行しくれかな
雨に見し雲もいこふていなみ野の淺茅か末にすむ清水かな　政爲
むらさめの雲ふきつくす山風にみなきりおちて清きたき川　重治
朝もよひきのふの雨にみなきりて行すゑひろき水のしら波　元長
雲もきえ雨もはれゆく峯たかみ落くる水やとほきゆくすゑ　季種
雲はらふ雨のなこりのゆふかせに末はるかなる野への澤水　雅綱
遠こちのきかひも見えて雨雲のよそにはれゆく山水のすゑ　公音
山本の木すゑもはるゝみなせ川ありてや水もむらさめの跡　和長
木幡山夜の間のあめに見わたせは伏見の澤にひろきさは水　康親
山たかみあらしおちゆく川水のすゑもくもらす雨はるゝ空　爲孝
夜の雨のなこりもさそとみかの原今いつみ川音もさやけし　實隆
雨はるゝ野澤のすゑの草かくれたえ〳〵見ゆる水の一すち　守光

十五日　滄海雲低

海原やきのふの雲のこりしきてけさあらはるゝ雪のとは嶋　守光
うなはらや見るめかりうき浪路かな雲に消ぬる舟の行へは　伊長
はるかなる松浦か沖を見わたせは雲をかきりによする白波　永宣
しほかまのたえぬ煙やわたつ海の波の幾重のすゑのうき雲　公條
おきつ風みきはによせぬしら波や影をひたせる空のうき雲　濟繼
へたて來し面影みせて浦しまや明ゆく雲そ波にのこれる
うな原や水よりのほるうき雲のまた中空になひきかれつゝ　元長
海はらやしほ瀬にかゝる白雲は風なきなみを見する色かな　雅綱
うなはらはこれもやかきり雲おほふ空も一つにつゝく白波　季種

夜半にきく雨のなこりか明わたる浦わのなみに雲そたな引　公音

海わたる人をそれとや天さかる雲のころもにかゝるうき波　和長

雲のなみけふりの波も松はらの木するにわかぬ天のはし立　康親

松浦かた雲をもひたす海原のなみに入日のかきりをそ見る　重治

一むらの雲はさなから苫おほふねかとも見るおきつしら波　政為

雲のゐる波のうへなる淡路島あはとはるかに見し影もなし　為孝

しらさりし新島なれやあま雲のさなから沖の浪にかゝれる　實隆

十六日　漁螢連波

猶しはし見てこそ行かめ夕なきにこきならへたる波の釣船　永宣

こき出る末は千里のあま小船まほにも見えぬ波のうへかな　公條

行かへり急くも見ゆる浪のうへに釣する船のひとり靜けき　濟繼

くるゝ夜の釣にともせる明石かたすまの浦波影もへたてす　實隆

數そふと見るもあたなるいさり火の浮たる船は身を思ふ哉　爲孝

綱引するうらわの波の夕なきに數もしられぬあま小船かな　重治

月おそき磯山陰のなみまよりいてゝ數そふあまのいさり火　康親

おくれしと磯のなみわけ行ふねもはや綱おろす袖のうら風　和長

夕日影つりするあまの遠近にうら〳〵見えてかへる波かな　守光

波のうへに釣するほとを友船のおのか浦々又やわかれむ

いさり火の數なほそひて天つ星かけをうかふる波のうへ哉　元長

けふの日のくもらぬ波にいさとてや打むれて行あまの釣船　公音

浪風になれてやけふも出つらん沖に見えたる海士のつり船　伊長

後れしのこゝろや追手あま小船なみに一葉の數そひゆく　政爲

打けふりくれゆく海に見し船も夜やかすそふ波のいさり火　季種

世をわたるいとまや灘のうら波に朝ゆふうかふあまの釣船　雅綱

十七日　江雨鷺飛

江をとをみ雨ふきおくる浦風におもかけきゆるなみの白鷺　永宣

鷺のとふ入江の雨の色を見てしらすうしほの日は暮にけり　公條

水に入つはさも有にとふ鷺のふる江の雨にしほれてそゆく　濟繼

雨くらき入江の鷺はしらなみの立別れてやそれと見ゆらん　爲孝

鷺のゆく空はみそれかかきくらす入江の雨に雪のおもかけ　政爲

くれわたるいり江の雨による波の色をのこすや鷺のとふ影　重治

たつ鷺のおのか蓑毛は名のみして入江の雨にしほれてそ行　康親

立鷺も身のしろ衣をのれのみ雨はるゝ江の雪と見ゆらん　公音

しつかなる雨の入江にたつ鷺は船の行きやおとろきぬらん　伊長

雨くらき入江の松にとふ鷺のをのれくもらぬ色は見えつゝ　雅綱

蓑毛たにしほれもあへす降雨に入江をとほく鷺のとふ見ゆ　季種

雨になる入江の波路くれはてゝねにゆく鷺の色そのこれる　元長

雨くらき水の入江にたつ鷺のみの毛のこせる跡のしらなみ　守光

ふる雨にあしまを分てとふ鷺の入江の山も陰はあらしを

雨に行鷺の蓑毛よみしま江のますけの笠もぬきて着せはや　實隆

あめはるゝいり江の水にたつ虹の影にまきれぬ鷺の一つれ　和長

十八日　夜涙餘袖

まきれなく我をおとろく夜な〳〵に涙に狹き袖をしりぬる　濟繼

袖の上の涙もさそなうけかたき身はいたつらの老の寢覺に　實隆

世のうきを包むにあふる涙さへ猶せく夜半の袖いかにせむ　爲孝

うれしさを袖につゝまむ事もなし夜の涙は身にあまれとも　永宣

なきを忍ひあるはうき身を思ふ夜の涙の限り袖もしらしな　政爲

老らくの寢覺の袖をあらそふや昔わすれぬなみたなるらん　重治

小夜衣袖のほかにもしほり行なみたはいつの身を忍ふらん　康親
夜の袖の涙にもしれ世のうきめ千聲百こゑ音には立れと　和長
寢覺して思ひし事のかず〳〵に涙となりて袖にせけとも
身をうしと思ひねさめは夢のうちにせかぬ涙や袖に落けん　元長
いたつらに老となる身の思ふ事つきぬなみたは夜の袖かな　季種
おもふことみな夢の世のさのみなと寢覺の袖にかゝる涙そ　公音
おろかなるをなけく心も深き夜の袖の雫そかきりしられぬ　雅綱
愚なる身はとにかくに憂ふしの涙せきあへぬひとり寢の袖　伊長
思ひ出ておつる涙そ小夜ころも袂にせはきむかしなりける　公條
小夜ふかく袖こそしほれ身のうさの限りを我にかこつ涙は　守光

十九日　憂喜依人 両本不足

市をなす門もこそあれ我すめは同しうき世もかくれ家の奥　康親
よしあしの報いをしれは世の中のいさみ有にも歎き有にも　政爲
人の世は憂をのみなることわりをしるに増れる嬉さもなし　濟繼
あかす猶これをも人はおもふらん及はぬ身にはあまる惠を　爲孝
いとけなきうへにや年も急くらんかへらぬ老を人は歎くに　和長
梓弓それはうしなふことわりは心をわかむ物としもなし
民の戸のときしるあめにうるほふも大宮人や花にいとはむ　元長
つかふへき道ある時をあふく世に歎かさらめや身の愚さを　季種
思ふ事はたのしむ人も有らめとうき身の憂は猶そかなしき　永宣
うれしともなす業なくは思はめや道ある時に逢る身なから　公音
憂世にはなへての名にも身に知らぬ人を見るにも我そ悲き　實隆
なへてその世のことわりや一さかり露の朝かほ花のゆふ顔　公條

二十日　竹契遐年 両本缺

唐ころもいろもかはらしさゝ竹の大宮人の代々のちきりは　政爲
すゑ〳〵の千年の陰もちきりおけ御垣の竹は誰を隔てむ
敷島のみちはふりぬや呉竹の世々のふる言とをゝく傳へて　實隆
末とをき常盤の陰は松もあれと竹にすくなる世をや契らん　濟繼
さゝ竹の色もかはらしよろつ代に霜の幾度しみはつくとも　公條

今はむかし物まなびに尾張國あつたのさとに在りけるほとをり／＼名古屋の里に行かよひける道に澤といふあたりに種々ふるき調度なとうる見世棚あり歌書つらねたるもの丶見ゆれは立よりてとりて見るに此永正御日次百首の春戀雜の部にて惜らくは夏秋冬の歌のかけたりけるなりあかすくちをしけれとかひつかくて家に歸來ていくほとも日を經さりしに野口翁（名玄珪號尋化通稱養安）とふらひて何くれと物かたりせらる丶ついてにゆくりなきやうにていはる丶やう此ころふるき書函の中に歌集めきたる物ありき外題は何とかありしをいまわすれつとくまゐらすへしやうあるものならはと丶められよとてかへられけるすなはちおくられき見れは此百首のともにて彼缺たりける夏秋冬なりけるものか思はさるにいとうれしくてよろこふこと限なしかくて又もこそ散みたれめとおもへはとく引合て一冊子となしつるに餘れるもなくかけもせす年をへ國をへたて丶有けるもの丶かく邂逅にもあひに合けるものかなくすしともいともくすしくあやしともいともあやしきことなりけり

此は大秀若かりける寛政の末はかりの事なりしをこのころ大田氏の南畝莠言といふ書を見るに彼家にをさめられたる法花科註の奥書に

余曾托二法住院景春藏局一曰若逢下需二法花科註一者上請告而知焉前年蜡月廿七日景春以二好本一被レ送雖レ不レ堪二舞踏一以レ圖二第一一爲レ根矣翌年人日雲頂院仁如藏局相過見レ之歎賞且曰往歲店上見二一卷於故帋堆中一不レ知二猶在也否一待二我遣一レ人搜レ之須臾仁如蒼黄自携來則如レ合レ符不二亦異一乎聞此經者應仁亂後西陣除鍵男某得レ之而施二與於景雲僧某一其端闕者殆數十年也嗚乎余何幸不レ出二十日一以補レ之平屏山先生所レ謂神寶去來自有二定數一不レ可下以二歲月一而測上焉寔知言者也矣旹永正戊寅孟陬上澣日東樵瑞佐書二于相國寺裡長得禪院一

かく見えたるをいとあやしき事におほえてつくつくと思をれは自己かうへにもさること有けり同日に語出へきことそと當時を思ひ出て書しるしつ

文政八年六月廿三日　田中大秀花押

後水尾院御集

後水尾院御製

春部

立春試筆

寛永廿一元日 百鋪やけふ待えたる部人もたもとゆたかに春は立らし

もゝしきやふるきにかへるけさは先枕こと葉に春をおほへて

古今御傳受ノ年 時しありと聞も嬉しき百千鳥さへつる春を今日に待えて

あつさ弓大和の國にをしなへて治る道に春やきぬらん

たか里もゝれぬ惠の光よりをのかさま〳〵春をむかへて

立春風

天津風ちりくる雪を吹とちて雲のかよひち春や立らん

早春

雲霞海より出て明そむる沖のとま屋の春をしるらん

來る春の色もそひけり水無瀬河このやまもとの霞ひかりに

聖廟御法樂慶安廿二九日 けふといへはつもるも雪のあさくつの跡あらはるゝ百敷の庭

神垣や春のしるしは杉ならぬ松の嵐も匂ふ梅か香

初春霞

ゆふへとは見しを幾よの光にて霞そめたる春の山もと

早春朝霞

慶安四 待えたるたか嬉しさの春の色や霞の袖にけさあまるらん

雪けにもくもりなれにし山なから春の霞は色もまかはす

朝霞

世は春の民の朝けの烟より霞も四方の空に立らん

朝ほらけいつくはあれと塩竈のよはの煙や先霞らん

さへかえる風や霞をまきもくの檜原か末も今朝はくもらす

嵐ふく松も一夜の春に明て霞光やあけの玉かき

山の端のかきりはそこと見えわかて霞をいつる朝日かけかな

春にみむ霞む朝けの色も香も備る四の時はありとも

曉霞

水無瀬御法樂 寒かへる風もしられて山の端は霞もやらぬ有明の月

霞

水無瀬川遠きむかしの面影も立や霞にくるゝ山もと

戀つゝも鳴や四歸り百千鳥霞へたてゝ遠きむかしを

峯霞

ことはりや春にはおへす霞けり今朝まて雪に見えし高根も

峯つゝき松の煙のそれもなを今一しほに霞む春かな

嶺つゝき松も檜原も陰ふかく晴やらぬ色や先霞らん

春ふかく霞やさこそ遠からぬ花に嬉しき四方の山の端

けさは先そなたに薄き山眉を遠きや霞む色を見すらん

遠近の高根そしろき薄くこく霞の内も色は別れて

遠山霞

霞匂ふ夕日の空は長閑にて雲に色ある山の端のまつ

峰高み春の光をさし添て霞む朝日の色もめつらし

霞添山氣色

春の色も花に匂はす霞より心になるゝ四方の山の端

世のめくみ大河山は雪きえて綠の霞そておほふらん

寛永十二年正十
たちぬはぬ春の衣の色そへてはこやの山に霞たなひく

霞春衣

花鳥のあや織はえて朝霞春のたつてふころもきにけり

白妙の雪にかされて遠山なすれる衣や霞なるらん

江上霞

住の江や春のしらへは松風もひとつみとりの色もかすみて

海上霞

和田のはら春は煙の色もみす鹽焼浦のおなし霞に

松上霞

いつなかは霞色とも分てみむ煙になるゝ松のよそめは

橋邊霞

かさゝきの渡す雲路の末かけて霞につゝくあまの橋立

湖上霞

鹽やかぬ志賀のから崎ほのほのとなひく煙や霞なるらん

春朝

春にみむ霞むあさけそ色も香も花にはうしといとひてやみむ

初春

千里鶯啼緑映紅ノ意也
紅も緑も見えぬ春の色を千里に告る鶯の聲

初春見鶴

來る春の道ひろからし峰の雪汀の氷消ものこらて

萬代とさこそ雲井にはふらし年立歸るあし田鶴のこゑ

早春鶯

このねぬる一よの松の鶯や千代のはしめの春をつくらん

梅か香のしるへもまたて來る春に先さそはるゝ宿のうくひす

春の來る天の岩戸の明ほのになか鳴聲の鶯のこゑ

春といへは神の御代より呉竹のよゝに絶せすきなく鶯

あら玉の春をもこゑの内にして世の長閑さを鶯のなく

南枝暖待鶯

行かりを跡に見のこす花の香に鶯いそけ春の初風

鶯告春

おさまれる世のこゑならし鶯の四方も長閑に春をつくれは

鶯入新年語

鶯のこゑのつゝみも百舗や軒端の梅もかけてかそへむ

いにしへのことかたらなん幾萬代々の春しる宮のうくひす

鶯知春

宮のうちときくそのとけし春きぬといふ計なる鶯のこゑ

都さへまた降雪の古巣にはいかに春しるうくひすの聲

谷鶯

鶯のこゑきくよりや雪ふかき谷の心も春にとけ行

谷の戸はさすか春とや鶯のさきちらぬ聲の匂ひにもしる

名所鶯

うくひすのとひくるのみや故郷の見かきか原の春もへたてぬ

櫻ちるみかきか原にゆく春の故郷さへやうくひすのなく

鶯

寛永八
鶯のこゑの匂ひを梅か枝のいつこにそへてあかすとかなく

長閑なる光なさそふしるへにて花より先に鶯のなく

梅近聞鶯

聲なからうつす計に植しより鶯なかすやとの梅かえ

梅か香もこゑの匂ひも暗からすおし明方の窓の鶯

軒ちかき梅を心に朝な／＼花にそひ行うくひすの聲

鶯聲和琴

しらふるも名にあふ春の鶯のさへつる琴の音にかよひつゝ

春情在鶯

ちりもせし花よりさきに鶯のこゑの色香にそむる心は

曉立春

鳥か啼あつまの山のせき越て曉ふかく春や立らん

春曙

詠てそ身にしみかへる鴈かねの名殘もつきぬ春のあけほの

見しまゝの心にとまる面影やたかならにしの春の明ほの

殘雪

峰つゝき都にちかき山々の限りもみえてのこる雪かな

早春雪

山のはにこその雪けの色そへて曇や霞春なわくらん

春雪

かきくらし降もたまらて庭の面はしめる計の春の淡雪

庭殘雪

今ふるはつもらて消る庭の面に去年のまゝなる雪のつれなさ

水邊殘雪

うち出ん波には遠き花の色や谷の氷の殘るしら雪

殘雪半藏梅

梅やしろ消あへぬ雪の埋木もかた枝花さく春の惠はにしこそと秋みし梅の同し枝も分て殘れる雪に咲らん

早春

春立て幾日もあらぬ梅壺の梅こそ匂へこゝの朝かせ

初春霞

相坂や關のこなたに春きぬと霞そめたる朝日影かな

元日宴

百敷や百の官に御酒たまふつかひも世々の春にしられて

夕鶯

聞あかしやとりやからん夕暮の笆は山と鶯のなく

關早春

あつまにありてふ關の名に立て霞やけふの春をみすらん

朝霞

立こむる霞もうすき山眉に匂ひ出たる朝附日かな

霞遠衣

白妙の雪はのこらてかく山や春に霞の衣ほすらし

雪消春水來

絕たるをつくや雪けの山水の末たのもしき春をみすらん

春風來海上

吹かふる春はなへての沖津風波の千里の誰に告らん

題不知

いとはやも緣に匂ふ柳かな花はこのめの春とみしまに

春風吹春水

時つかせ春の色香の水の上に先吹そめて氷とくらし

風光日々新

きのふよりけふはめつらし花鳥も千世をならさん宿の初春

毎家有春

（御會初）世はなへて梅や柳の時津風たかゝきれかは春をへたつる

いますめる霞のほらの宿もあれと猶九重の春そのとけき

毎山有春

白妙の花匂ふらん春に又山また山に霞そめぬる

雪消山色靜

雪とくる春にしつけし年のをのなかきはこやの山のみとりは

春風春水一時來

うき草のすゑより水の春風や世に吹そめてのとけかるらん

東風吹春水

時津風春の色かのみなかみに先ふきそめて氷とくらし

梅

咲花のいつくにこめて白妙の一重なからもふかき梅か香

大空をおほはむ袖につゝむとも餘るはかりのかせの梅か香

初梅

（寛永十六）時もまたあたゝかならぬ春風に雨まちあへす匂ふ梅か香

里梅

吹まよふ空にみちてや梅かゝにたか里分ぬ月の下風

軒梅

誰とひてこそはともみむ淺芽生や人は軒端の梅のさかりを

雪中梅

春風の寒かへる空にさそひ來る雪にまたれぬ梅かゝそする

雨中梅

（寛永十二十一廿六）心あれや雨もふり出て紅の色そふけふの庭の梅かえ

吹風もよそにさそはて咲梅の匂ひしつけき雨のうちかな

故郷梅

軒ふりて橘ならぬ梅かゝもむかし忍ふの露やそふらん

梅告春

（寛永廿）世をめくむ道にもうつせ天か下みな春におふ梅のにほひを

若木梅

（寛永十九廿五）いかに又色香そはまし宿の梅生行末も長き立枝に

梅風

（寛永十二十七）春風は吹ともなしに青柳の木末にみえてなひく梅か香

梅薫風

世は春にさける咲かさる宿はあれと梅か香ならて吹風もなし

よろつ木にやとらて吹もひとつかのなをあまりある梅の下風

花薫袖

袖ことに匂ひそうつるいやしきもよきもさかりの梅の下風

多春翫梅

幾春か言葉の花も咲匂ふ此もゝしきのやとの梅かえ

毎年愛梅

去年よりもことしはまさる色香そと幾春かみる庭の梅かえ

梅度年香

としことに色香をそへて咲梅の花にや千世の春を待らん

梅有遲速

先咲やをくるゝ程をうつしうへて梅かゝひさしさかりをもみん

梅花何方

朝霞立枝も見えぬ垣根よりおもひの外に匂ふ梅か香

玉たれのひまもとめ入春風はいつくなりけんあやし梅かゝ

落梅浮水

駒つなくたか爲かほに梅の花またきちり行春の山水

梅柳渡江春　寛文五正廿一

江の水に棹さす棹のうちならぬ梅も柳も影うつす春

江の南梅さき初ておそくとくみとりにつゝく岸の青柳

梅交松芳

立ならふ枝にもうつる花の香に松よりふくも梅の下風

若菜

ひまみゆる澤邊の氷ふみ分て若菜つむてふ道はまよはす

若菜處々

雪きゆる野原の若菜[illegible]む澤の根芹に猶もさくなし

水邊若菜

春はまたあさ澤水のあさからぬ名にあふせりやつむもすくなき

寄若菜祝言

若菜つむ袖のよそめも白妙の露の毛衣千代は見えけり

草花早

見そむるそ思ひは深き咲花の色はいつれと分ぬ千種も

若草

やとりつるこてふの夢も覺さらんねよけにみゆる野への若草

春草

分みれはをのかさま〴〵花そさくひとつ緑の野への小草も

春木

神かきやきのふにも似すかへる春の一木の松はかすみ讀けて

窓前梅

あかすなをとちもやられす月やとる影さへ匂ふ窓の梅かえ

玉柳

ならひては花もはつかゝ玉柳玉かつらせる百のすかたに

柳先花緑

立ならふ花はこのめの春の色に先染けりな青柳の絲

岸柳

生ましる岸根の竹のふし柳おなし緑も春やわくらん

柳辨春

春は猶柳にしるし緑なるひとつ草木の有か中にも

柳蔭池水　元和十[illegible]十九御會始

青柳の絲絶すして萬代をすむへき陰や庭の池水

柳垂臨水

氷とく池のかゝみにかけみへて柳のまゆも世にたくひなき

柳靡風

花ならぬ柳か枝に吹もなを思ひみたるゝ露の袖かせ

行路柳

別路の心ほそさを行人に誰か折そへし青柳の絲

道のへや行もかへるも立そよる春のかけなる青柳の絲

柳垂藏水

岸かけの柳の梢いとたれて松ならなくにこゆる河波

柳映池水

池水の底なるかけも色そひて年のおなかき青柳の絲

柳櫻交枝

花のときにあはすは何を玉の緒の柳櫻にあかぬ春かな

二月餘寒

梅の花折へき袖も春寒て猶二月の雪そかゝれる

柳露

青柳は中々おもる露もみすなひくをおのかもとのすかたに

餘寒氷

春の日にとけ行末も木かくれの山下水やまたこほるらん

春雨

道遠くきてや覺ゆる行人のぬるゝはかりのころも春雨

たつ鳥のあらぬ羽音に音もなく霞む軒端の雨を聞哉

東屋のまやのあまりにかすめるや降も音せぬ春雨の空

閑居春雨

春の雨さたかにそ聞音信の人にまれなるやとの軒端は

潤花薄暮雨

長閑なる夕の雨を光にて谷にも春の花は咲けり

春月

月影はそことも見えす霞野に木の下やみそひとり晴行

鳴くらす鶯の音によろこひの色をそへても出る月かな

霞行影さへ嬉しさよ風のさえしとはそを月にひらきて

いつはあれと霞める花のこのまより光も匂ふ春のよの月

春曉月 (寛永四一廿二)

空にはふあかつき方の影もうし霞か(おイ)うへに(花イ)春のよの月

名殘あれや待出しまに影うつる松の梢の月の明ほの

風寒く霞吹とく明方のかけしもおしき春のよの月

浦春月

浦舟のとまかゝけてや難波人梅かゝらぬ月も見るらし

月影の霞める程も浦なみにみえてさやけき海士のいさり火

難波江の笘かゝけてや浦人も梅かゝならぬ月も見るらん

餘寒月

風あれて霞をはらふ山の端に春としもなき月のさやけさ

旅宿春月

旅衣みやこ思へは都にて見しにもあらす霞む月かな

深夜春月

かたふけは鈎簾のまちかく入月のおほろけならぬ哀をそしる

餘寒月似雪

寒かへる空にはくもる月影のそれかとまかふ雪そつもれる

歸雁

したはれて來にし心の雁ならはかへる雲路をいかてしるらん

春霞かくす都の山の端をかへりみかちに雁もゆくらん

曉歸雁

曉の別といへははるのかりかへる雲路をしたひやはせぬ

深夜歸雁

曉の鳥よりさきに鳴そめてなれも別やおしむなりかね

陽春布德

やとことに咲梅かゝもとなりある春の心を先しらすらん

世を花にもよほしたつる雨風も更に時ある春の長閑さ

くまもなき人の恵を鳥すらももゝよろこひの春やつくらん

餘寒風

立かへぬ霞の色も春あさみこそ見し雪をかへす山風

江山春興多

氷とけし江の水遠く山かすむ春やことはの代々の種なる

引うへし松も高砂住の江の春にあひおひのみとりをやみむ

綠竹辨春

めつらしきこゑの色そへ呉竹の千世のみとりを鶯のなく

霞中瀧

この山の上にありてふ瀧なれや霞のうちに響く岩なみ

松契春

これや此千とせのはしめあたらしき春しるやとの庭の松かえ

松かえも千年の外の色そはむ此やとからの春の日長さ

峰春松

峰に生ふるたれもしらしな八千代へんみかきの松の春の一入

松色春久

八千年を春の色なる影もあれと猶かきりなき庭の松かた

飛瀧音清

雪とくる山の瀧津瀬落そひてあかぬ音にも春をわくらし

遠山如畫圖

つくり繪を霞や殘す咲頃はまた遠山の花の千枝に

これも又こゑある繪しと夕閒暮山の端遠くかへる雁かね

龜の上のうつしゑなれや千代の秋雪をふくめる春の山の端

梨花

降雨もましらぬ雪の枝たはにつもる色そふな山しの花

雪なからうつろふ色はさむからてたくひもなしの花の色哉

櫻

しほみては磯山さくら吹風に是も見らくのさかりすくなき

漸待花

雪も今殘らぬ山の木すゑより咲いてむ花そやかて待るゝ

待花

ときはなるたれもあらなむ住の江の松は久しき花ならぬかは

あすからは枝にうつさむけふはなをまつを心の花のさかりを

いさこゝに千代も待みん花の友あかぬ心に春をまかせて

待たてみむ思ふに違ふあやにくの世のことはりに花やさかぬと

花初開

いさきよき朝露なから咲そむる花よさかりの色はありとも

山櫻

散らはおし春をなつかしみ櫻花匂にをはぬ春の山かせ

初花

めつらしき見るを心の千しほにてさく色ふかきはつ櫻かな

禁庭待花

世の常の色香ともみすすたれこし初花そめの深き思ひは

松間花

鶯の聲のつゝみも百敷の軒端の花にかけてかそへん

松風にさそはれやすき花そうきさしも常盤の陰はならはて

見花

いかなれやみる物からのわりなさを心の花の春にそひ行

あかなくの心の色や見るたひに又みるはかり花にそふらん

靜見花
ことしけき世をもわすれてつく〳〵と心をわけぬ花にむかひて
暮山花
ことくさに旅ねしぬへく暮にけりこえ行山の花の下かけ
森花
しめのうちの花をよきてや神かきの杜の春風吹も長閑さ（しカ）
折花
折のこせあすみむ人に見ぬ人のけふのためなる山の櫻も
曙花
霞行松は夜ふかき山の端に明ほのいそく花の色かな
河上花
花さかりすき行ものは川波のよるひる分ぬならひかなしき
磯櫻
鹽みては磯山櫻吹風にこれもみらくの盛すくなき
花下忘歸
見る人もしあひおもふ花ならは――――道を我もわすれぬ
題不知　岩倉御幸の時
長閑しな風もうこかぬ岩倉の山も花さく春のこゝろは
初花
なへて咲盛はあれとあかすなをけふ初花の色を見初て
曙花
白雲に松も檜原も麓江に初瀬の山そ花に明行
寄雲花
匂ひこそ四方にみたるれ風吹けと所もさらぬ花のしら雲

雨後花
雨の後花はまれなる花にこそましるとみえし青葉かくれに
旅宿花
花の比は野山をやとのならはしに又今更に旅ねともかな
山家花
――――柴の戸は花もうき世の外ならぬかは
わりなしや花さく比は柴の戸をさすかとはぬもとはるゝもうし
花盛
あすを待けふこそ花は盛なれ咲のこらねはちらすやはある
逐年花珍
春をへてなるゝにいとゝ染まらさる心や花の色にいつらん
花雲
天津風しはしとゝめむちる花の雲のかよひち心してふけ
寛永廿六廿七
花なれや遠山かつら白妙に麓をかけて明る光は
花留人
見るかうちに語らふ人のなさけ迄花にそへてもえこそ見捨ね
翫花
まとひして見る人からや花にあかぬ色香もけふに似る時はなし
見花戀友
友こそは色香の外の色香なれとへかし花のさかり過さて
澗花待暮雨
長閑なる夕への雨を光にて谷にも春の花は咲けり
寄雪花
花なれや春日うつろふ山の端にあたゝかけなる雪の一むら

花埋路

過かてにけふや暮さん散つもる花のうへ行春の山みち

池水似鏡

長閑しな世にはにこれる水もなき春をうつせる池の鏡は

寄風花

さそへともちるへくもあらす盛なる花には風いとよきかくれて

寄花神祇

あかすとや神もうくらん色も香もふかき心の花の手向を

花随風

花よいかに身をまかすらんあひ思ふ中ともみえぬ風の心は

花漸散

日かすこそつゐにつらけれ山風のさそはぬ花も青葉そひ行

落花

家つとにせよとや風のおくるらんたをらぬ花の袖に乱れて

山に鳴く鳥の音にさへちる花のむなしき色はみえてさひしき

よしやふけちるも色香の外ならぬ花には風もおもひかへさん

鐘かまといふ櫻を

浦の名に聞はゝるけし陸奥の花は軒端にちかのしほかま

三月三日

けふはその水上の月もめくりあひて咲かけふかき桃の波かな

寛永十二十一十六　苗代

あらそはぬ民の心もせきいるゝ苗代水のすへに見えつゝ

雲雀

夕ひはり我ゐる山の風はやみふかれてこゑの空にのみする

款冬

山吹のいはてもおもふ吉野川はやくの春のおしき名残を

誰ゆへにいはぬ色しもみたるらん忍ふにはあらぬ山吹の露

寛永八十一　里款冬

里の名のいはても物をとはかりに何か露けき山吹の花

岸款冬

よし野河さくらは浪に行春もしはしせくかと匂ふ山ふき

山吹のうつろふ影も五百年にすむ名も色も井手の玉河

寛永八十一廿　藤

なひかゝる草木も分す紫の色こき藤のあかぬこゝろに

池藤

池水に松のみとりを染かへて紫ふかくかゝる藤なみ

池にすむをしとやさこそ行春をうらむらさきに藤も咲らむ

咲藤もうらむらさきの色にいゝぬとはれぬやとの池の心に

池水そむらさきふかき咲藤をうつしつはさの色もうかへて

松上藤

玉かつら峰まてかけて咲藤に木高き松も谷のうもれ木

藤花盛久

いはひつる松に契りて君と臣あひに相生の春の藤なみ

春到管絃中

谷かけもあはまくはかり吹笛のこゑの中なる春のは開さ

牡丹

思へとも猶あかさりし花をさへわするはかりのふかみ草かな

一きはのかすさへそひて紅の色もことしはふかみ草かな

春生人意中

のとかなる人の心の春の色や世に初花とまつ匂ふらん

山殘春

限ある春はかひなし外のちる後しも花は匂ふ山かせ

朝眺望

時しらぬ都の富士の春の雪かのこまたらに今朝はきえつゝ

春釋教

雪なからきえも殘らし春日さす野への若菜のしたは有とも

拈花微笑　世尊拈華如葉微笑

心もてひらくる花は梅か桃かとはゝや人によしいはすとも

故鄉草

あれまくも春そおよはぬ古鄉のかきねにしけきつはな菫も

笙笛篳篥琴琵琶をかくして

うしやうし花にほふえに風かよひちりきて人のことゝひはせす

雜

子を思ふ心やかはす夕ひはりとこをならへてきゝす鳴なり

春風不分處　古事孟子萬章篇下武王不レ泄レ邇不レ忘レ遠

風も今おさまる春に遠近のわすれすなれぬ心をやふく

世は春のもれぬめくみの風にこそ所もわかす雪はけぬらめ

本歌しら雪の所もわかす降しけはいはほにも咲花かとそ見る

又惠ノ風之事古文後集蘭亭記天朗氣淸惠風和暢惠風は春風也

暮春

花鳥にあかてそつゐにくれはとりあやなの春のあまることしも

かきりある春の日數をかそへても今さらおしきけふの暮哉

今さらにけふそおとろくかねてより限ある春はかそへしれても

暮春風

この夕花も殘らぬ朝風にきほひて歸る春のさひしさ

暮春雨

ひちかさの雨にかくれんやとりさへしはしたとへて行春はなし

柳先花綠

春はまつなひく柳も深山木の花にならはん綠をやおもふ

海邊霞

朝またき海つら遠く漕舟のほの〳〵霞色やみすらん

夏部

首夏

夏きてはひとつ緑もうすくこき梢にをのか色はわかれて

けふといへは心を分て時鳥花をおもふかうちもきたるゝ

林首夏

すむ鳥も春より後やうしとなくちりしきのふの花の林に

ちる花の雪をたゝめる夏衣かへても春の名残やはなき

更衣

引かへて見えぬもかなし夏衣うらなく花にそめし心を

聖廟御法樂
貴賤更衣

是やこのもとつ色なるしらかされけふの袂はしなもわかれす

山殘春

かきりある春はかひなし外のちる後しも花のにほふ山にも

殘花

咲そめし面影なから日にそへてまれなる夏の山さくらかな

餘花

玉かきの風もよきてや神まつる卯月にかゝる花のゆふして

新樹

常盤木に色をわかはのうすもへきおなしみとりの中に涼しき

夏山のおなし緑にむかはめや花やもみちのおなし千種に

卯花

咲いつる折しもあかすうの花は月なきほとの庭の光に

卯花似月

里まてはさしもおくらぬ影なれや卯の花山のかへるさの月

卯花繞家

月影はめくらぬかたの垣根にも咲卯の花そ光さやけき

社卯花

白妙の衣ほすかと川社しのにみたれてさける卯の花

待郭公

高砂の尾上ならねと郭公まつはいくよの物とかはしる

時鳥まつこそしるし咲藤の花のたよりを宿にすくすな

子規心の松のみさほにもくらへくるしきこゑのつれなき

社鵑

過行なたか初音とかほとゝきす我おしむなも待えてはきし

時鳥幽

聞つともえしもさためす時鳥あやな雲井のよその一こゑ

なをさりに待やはきかむほとゝきす雲井に遠きよその一聲

一こゑの空そ明行郭公啼つる方の月もほのかに

跡したふたゝ一こゑは郭公遠き入さの山の端の月

時鳥橘

うとくなるをのかなくねも色見えは青葉の花の山ほとゝきす

聞時鳥

覺はてぬ曉やみの一こゑは夢にまさらぬほとゝきすかな

野時鳥

聞初ておかぬ野中の郭公見をくるほとそ空に久しき

岡郭公

寛永八四
時鳥鳴ていふきの岡の松まつにかひある聲の色かな

故郷とならしの岡のほとゝきす世に忍ひねやこゝに鳴らん

一こゑもゆきゝの岡の時鳥里をあまたに聞やつたへむ

嶋子規

時鳥嶋かくれ行一こゑをあかしの浦のあかすしそおもふ

磯郭公

待とはなきあまのいとやもこゆる波にこゑそへてとふ時鳥かな

寛永廿一八廿七 夕時鳥

神まつる卯月の影も白妙のゆふかけてなくほとゝきすかな

時鳥ゆふとゝろきのまきれにも待一こゑはなをさたかにて

五月時鳥

郭公をのか五月はおりはへて引やあやめのねをもおしまぬ

五月の空といふ手向に

かりそめの軒のあやめも時しあれは五月の空に匂ひことなる

卯月郭公

初こゑはまた忍ひねの時鳥卯月なをのか時ならすとも

濱五月雨

谷川の岩こす浪に淺き瀬も淵と成行五月雨の空

五月雨

梢にも魚もとむへくそなれ松浪にしつめる五月雨のころ

岡五月雨

岡にもやつゐにのほらん麓川行水高き五月雨の頃

杣五月雨

杣人は宮木もひかぬ五月雨に山とよむこゑや瀬々の川波

横なかす川波たかき五月雨に力をもいれす丹生の杣人

暁時鳥

時鳥たかとひすてし恨さへしらて待とるあかつきのこゑ

晩立

夏の日のけしきをかへて降音はあられに似たる夕立の雨

俄にも波をたゝへしにはたすみかはくもやすき夕立のあと

音羽山音は聞えて夕立のこゝに降つるほとをふるかな

常はみぬ山のみとりも瀧落て名殘もすゝし夕立の雨

寛永十七十五 夕立

むさし野や此野の末に降くるもしはしよそなる夕立の雲

夏雲

降雨のなこり涼しく夏山の綠につゝく雲の色かな

河眺望

ふかくなる青葉の山の麓川夏しも白き浪の色かな

眺望日暮

釣舟はみなすなとりにみえ渡て暮行奥に近きいさり火

白鷺立汀

白妙の池にはちすもまた咲ぬ汀の鷺は色もまかはす

早苗

うへ渡す早苗の末葉しけるらし千草と共にひく夕風

山水のたき津なかれをせき入て雨ふらぬ[illegible]さなへかな

夜盧橘

名殘なをむかしおほへて見し夢の後も枕にかほるたち花

故郷橘

ふる郷の軒端に匂ふ立花やむかし忍ふの露をこふらん

すみ捨しむかしも遠く故郷のぬししらぬ香に匂ふ立花

沼菖蒲

しけりあふ草のみとりにかくれぬのあやめもけふや分て引らん

夏月

てりそはむ紅葉はしらす秋風も月の桂はまたぬ涼しさ

松風よりもにわかふる夏しらぬ月そまことの霜の花なる

あつき日の暮かたかりし名残しも待とる月のあかぬ涼しさ

瀬夏月

夕涼み渡りもはてぬ此川の淺瀬しら波月そあけ行

浦夏月

白妙の色そ涼しき夏ころもかとりの浦の浪と月とに

夏月易明

さし入ておくも殘らぬ槇の戸の明る夜しるき月のみしかさ

夏關

なのかうへにきゝおひてこそ郭公待に名こその關のなもうし

瞿麥

露けしな誰か別をしたひこしねてのあさけのとこ夏の花

籬瞿麥

朝夕のまかきの露やかそいろとおほしたてけむ花のなてしこ

夏草

あけまきのはなちかふ野の夏ふかみかくるゝ草の陰ならしとや

野夏草

たのもしな夏野の草もふむ跡は絶なむとなる道なのこして

叢螢

草の上に今朝そきえ行白玉か露かとまかふよはの螢に

くちはてむ後こそあらめ草の上に螢や何のもえて行らん

水螢

池水になほ消やらて飛螢はかなくもゆるなのかおもひな

沼螢

もへ渡る思ひはあはれかくれぬのうきなは人にゝ[illegible]ほたるも

水邊螢

とふ螢水の下にもありけりとなのか思ひななくさみやせん

深夜螢

たかおもひあまりて出し玉そとも夜ふかく見えて飛ほたる哉

あはれ我よはひもいまは更る夜に窓の螢はあつめても何

嶺照射

さなしかのたつたのおくも殘らぬや峰にも尾にもともしする比

蚊遣火

蚊のこゑをはらひはてゝもしつかやにくゆる煙は又やくるしき

曉螢

明方の影うすくなる水の面に螢や春の光そふらん

里蚊遣火

里人もかやりたくなる難波かたあまのもしほ火煙くらへに

垣夕顔

卯の花の日かすへたつるかきほにものこる色かとさける夕顔

あれねたるこゝかゝきねのたそかれに光涼しき夕顔の露

卯花

時鳥かたらふころに降つむと見し卯の花の雪はけぬなり

河夕立

水上に夕たちすらしみるか内ににこりてきほふ瀧津河波

森蟬

夕日さす楢の露になく蟬の泪ほしあへぬ衣手のもり

瀧波を木すゑにかけて山ふかきけしきの森の蟬のもろ聲

葉山蟬

夕露を待えかほにも空蟬のは山しけ山しけきこゑかな

樹陰蟬

秋風もせみなく露の木かくれて忍び／＼にかよふすゝしさ

霜かれて木の葉そまかふ鳴蟬の葉山はしけき楢なからも

鵜川

河そひの柳にすくやかゝり火の影もみたるゝ鵜舟なるらん

納涼忘夏

涼しさのことはり過てはては又秋風更ぬ森の下かけ

松下納涼

むかしきくおのゝゑくたす松陰も爰におほへてあかぬ涼しさ

夕納涼

鳴蟬のこゑも木すゑにしつまりて涼しく暮るゝ森の下風

納涼

松陰やまたこぬ秋の初風も下行水にかよふすゝしさ

夏祝

今爰に人の國さへたゝきこんと君にしらするくひなとそきく

森夏祓

かれてより月もうつろふ河波にみそきすゝしき神なひの森

庭草

はらへとも跡より生る庭草を思へは野へはしけらさりけり

六月祓

けふのみの夏に人まね麻の葉を瀬々になかして御祓すゝしも

秋部

早秋

きのふにはなを吹かへつ秋の風身にしむまでの音はわかれと

色みえはこれや初入紅葉する秋のけしきの森の涼しさ

[illegible]露

いにしへも[illegible]心一つ[illegible]の秋の初かせ

むかしより心つくしの[illegible]にむすびそめてや露にこかたき

吹こほす秋の朝けの露みえて初かせしろきあさちふの庭

初秋風

すゝつゐに身にしむ色の初入や衣手かろき今朝の秋風

吹初る桐の一葉の秋風にあらそひてちる淺芽生の露

都初秋

いつしかとけふは紅葉の秋もきぬ見しはきのふの花の都に

音羽山音にもしるし都にはまた入たゝぬ秋の初風

森初秋

とはやゝとおもふやしろへ我心つれて生田の森の秋風

はゝそ原露より先の秋の色に染ぬもしるし森の下風

關初秋

初風のせき吹こゆる[illegible]に秋なき花もちりやそふらん

殘暑

秋きても[illegible]たへかたくあつき日のさすかに暮るゝ影の程なさ

七夕

一とせを中にへたてゝ逢見まくほしの契や思ひつきせぬ

七夕の一夜のちきり思ふには入ぬる磯のうらみもそなき

七夕風

此ころのせこか衣の初風なうらさひしとやほしあひの空

七夕雨

おほつかな雨ふりくらす七夕の行あひの空は雲もかよはす

七夕衣

かさねたる夢とや思ふ七夕のかへしはれたる中の衣は

七夕の衣のすその[illegible]つらしくおきわかれてやぬる

名所七夕

今宵さへ衣かたしき彦ほしに戀やまさらんうちのはし姫

七夕月

天の川なかるゝ月も心してまれのあふ瀨に光とゝめよ

七夕川

なきこふる泪の河のおり姫のうへて見るめもけふやかるらん

七夕草

うくらんもしらすや星の手向草此八千種は花もましらす

七夕草花

今よりはちりもすへしと織女や契らまほしき床なつの花

庚申七夕

七夕に今夜ねぬよにあひりくる年さへうしとかこたさらめや

詠二星適逢

七夕のまれの一よに一とせをつもろうらみはいひもつくさし

二星待逢

暮るまをいかに久しと七夕の待こしけふも待や侘らん

七夕鳥

かへまくも星の契よなのか上に思ふはおしのひとりねぬよな

七夕別

いかにまたみきはまさらん天の川けさしもかへる涙のなごりに

七夕祝

星合の空にくらへて君と臣も身をあはせたる代々の契を

夜荻

ふかきよの物にまきれぬしつけさやこゑそへけらし荻の上風

月前荻

かゝる夜の月に夢見る人はうしといはぬばかりの荻のこゑかな

荻風

陰高き松に吹たに埋もるゝ軒端の荻の秋かせの暮

萩露

正保八九 袖ふれておらはおちぬへく色にしもあたのおほ野の萩の夕露

さやけしな清く涼しき萩の戸の花にとられぬ露の光を

野外萩

此宿にうつしうへても萩の戸の露の光はにるへくもなし

しかなかりそ萩かるをのこ一本はかさしに殘せ野へのかへるさ

秋萩

から錦こゝそたゝまく男鹿なく野への眞萩も此ころの秋

女郎花

女郎花なまめく花よ朝顏やつまとふしかもおもひかへらん

たかためにおもひみたれて女郎花いはぬ色しも露けかるらん

たかための露ふかゝらし女郎花萩の千種に思ひこかれて

白露のかさしの玉の女郎花よそひことなる花の面影

野女郎花

誰か此野をなつかしみ女郎花なひく一夜のまくらかるらん

寛永十七廿五 苅萱

みたるゝをすかたなりけりかる萱はたゝ秋風にまかせておらん

草花早

みそむるそ思ひはふかき咲花の色はいつれとわかぬ千種も

草花露

かゝやくは玉か何そと百草の色にとられぬ花のしら露

朝見草花

かすみには千重まさりけり霧渡る秋の花野の露の明ほの

朝またき露しらみ行庭の面にはへある秋の花の色々

秋花

千々に身をわくともあかし秋の花ひとつ〳〵にとまるこゝろは

秋夕

さひしさは秋のならひを荻の葉のことはり過る風の音かな

なかめこしいくよの秋のうさならむ我とはなしの夕暮の空

身をしほるならひよいかに世やはうき人やはつらき秋の夕暮

さしてうき色はわかれす何事も思ひのこさぬ秋のゆふ暮

澤間秋夕

夕間暮鴫たつ秋の澤邊にはうき曉の羽かきもなし

早涼

色見えすこれや初しほ紅葉する秋のけしきの森の涼しさ

秋夕思

たか秋か露の外なるなく鹿も籬のむしも絶ぬ夕に

槿花

朝貌は朝な〳〵に咲かへてさかり久しき花にそ有ける

槿不待夕

露よりはしはしなくろゝそれもなを夕かけまたぬ朝顏の花

蘭

ふちはかま吹風ふりて秋の野の草の袂もかくやにほへる

むの薄

霧にのみむすほゝろらしむの薄穗にたに出ぬ秋の心は

秋里

露も猶身にしむ比のいかならんうらめしといふ里の秋風

蟲

色見えはなのかさま〳〵鳴いのろそれもや千種野への蟲の音

夜蟲

よな〳〵の露を忍ひて松蟲の名におふ聲の色もかはらぬ

折しもあれ夜さむの衣雁かねのはた織蟲も聲いそくらし

原蟲

秋風に亂てしけき蟲の音は宮城か原の露にまされり

松蟲

淺茅生の霜にもかれぬ聲の色やひとり名におふ野への松蟲

夕蟲

やとりしろ誰を松蟲草ふかきまかきを山と夕暮のこゑ

山家蟲

都にて聞しにも似す山ふかみ瀧の音そふ夜半の蟲のれ

蟲怨

うらかろゝ眞葛か中の秋風を音に顯して蟲もなくなり

月前霜

白妙の霜にまかへてきり〳〵すいたくなわひそすめる月影

雁

あま小船はつかにそきく初雁のこゑをほにおくる秋風の空

秋風を宮古の空のしほりにて雲路たとらぬ雁やきぬらん

したひこし春も昨日の夢の世をかりとなきてやおとろかすらん

ふる郷の秋に絶すや雁かねのこゝろかろくも出て來ぬらん

ふる郷を秋しも餘所に別きて雁のと渡る空にしくろゝ

月前雁

初雁の聲をほにあけてしたひ來ぬ天の戸渡る月のみふれに

駒迎

世に絶し道踏分ていにしへのためしにもひけ望月の駒

夜鹿

あま小船よろの袂をぬらすともさしてらすやさほしかのこゑ

梓弓いろ野の鹿や我か方にひけはよろ〳〵妻をこふらん

さをしかも山鳥の尾のなかきよをよそにへたてゝ妻やこふらん

秋の風夜さむなりとや小男鹿もかれにしおのか妻をこふらん

深山鹿

をのかうへに何より秋の山ふかくおもひ入らむさをしかのこゑ

秋ふかき太山颪にさそはれて紅葉にましろ小男鹿の聲

田家鹿

小山田のかりほへたつろ夕霧にもろ人なしと鹿や鳴らむ

鹿聲驚夢

我となす人もみえこぬ夢はたゝ何かをしかのこゑもいとはむ

鹿聲留人

から錦こゝそたゝまくをしかなく野へのまはきも此ころの秋

河霧

そことなき霧のうち行浪の音も一すしみゆる秋の川きり

河上霧

明ほのや山本くらく立こめて霧にこゑある秋の川水

渡霧

水の面に吹跡みえて山本の川風しろきなみのうき霧

是もまた渡る舟人そことしも行衛やしらぬよとの川霧

曉霧

さたかにももりくる鐘の聲なから明ぬ夜ふかき峯の八重霧

山朝霧

峯つゝき吹方みえて朝霧の風の絶間そ絶間たになき

霧中山

山もさらにうこくとそ見る明ほのや秋風なひく霧につゝみて

月

もれ出ぬ雲間またれて半天に行もおしまぬ夜半の月かな

いく里かおなし心に見る月も千々におもひの色はかはらむ

花ならはうつろふ比のよはの月かたふきなからそふ光かな

月出山

半天に更もゆくかは山の端をさし上るほとの月におもへは

待月

うき雲はうすくも空に消のこれ待出ん月の光もそ添ふ

山のはの雲より雲にうつりきて猶出やらぬ秋のよの月

弄月

いひしらぬ色にも有かな何事かなにのむしろか月にはへなき

見月

見る人やをのかさま〳〵色かはる月は千里も分ぬひかりを

有明月

月はなをさかり過たる有明のかけしもふかき哀そひ行

あくるよのしらむ光や池水の月の氷なわたるはる風

長月も今幾ほとか殘る夜の名殘つきせぬ有明の空

十五夜月

もと見しもけふの今宵に似る時は半の秋の雲の上の月

はこのこと雲井にのほれこきのこの今宵の月も空にすめ〳〵

停午月

半天にのほりはてゝそ呉竹の夜なかき影も月にすくなき

かたふかはくひある道そ月もいまのほる空なき影をとゝめよ

雨後月

いひしらぬ月そうつろふ萩すゝき露もまたひぬ雨の名殘に

月すめるこよひのためと雨も世にさしも此比降つくしけむ

不知夜月

雨もよにうしや名たゝる昨日といひけふたにはれぬ十六夜の月

九月十三夜月

名にしあふ今宵一よにとはかりも見し長月の影をしそ思ふ

光あるこよひの月の言の葉にくもるうらみをわすれてやみむ

長月のこの夕汐のみつとなき月もみるめにあかぬかけかな

よしやみむ月のかつらを千入まてけふしも染る秋の雨かと

よしやよし月のかつらの花もみつ空はさなから雪の明ほの

山家月

山里の友とはならて夜半の月これもうき世を廻るとおもへは

山水のすめるやいかに月にこそうき世なからも世をはわするれ

立待月

ひくらしのなく夕くれのそれならて立またるゝは山の端の月

居待月

より居ても月をこそまて心あての嶺にむかへる槇のはしらに

山月

巻上る鈎簾のまちかく山もさらにうこき出たる月の影哉

茸狩御幸の時叡山を叡覧ありて

みよやみよ都のふしの空晴て月もうへなき秋の光を

嶺月

夜長さの程もしられて待出るみねこそかはれ有明の月

富士の根はなへての峯の雲霧も麓になして月やすむらん

影うすき月のかつらの初もみちくるゝ尾上の松にもりくる

岡月

木かくれはあやな出ても秋の月さすや岡へのまつそ久しき

暁月厭雲

はれかたき雲をそいとふ（おもふイ）むかひみる心の月もすめるあかつき

明月

さやけしなたえても残るうき雲に又待出る山の端の月

槇峯待月

影にほふ松もうつり行秋の月まつよかさなる峯のつゝきに

松間月

ゆきみむと引うへし松も秋をへて木の間すくなき月にくやしき

盛秋月

松のはも秋は別れて夕附日さす岡野邊の月のさやけき

野月

むさし野や草の葉分にみえ初て露より下にいつる月影

行手にやむすひよるらん月やとる野中のし水しるもしらぬも

やとりけり月も花野の露分て家路わするゝ草の枕に

野径月

おきあへぬ露はさなから月影に分しあとある野への通路

関月

月そすむ不破のせき屋の板ひさしひさしき跡を代々にとゝめて

江月

かりはらふ手にまかせてやあしまにもみかく玉江の涙の月影

河月

河波に月のかつらのさほさしてあすをもしらすうとふ舟人

月そすむ舟さし下す川波の夜の雨きく音もさなから

雲のうへの影もかよひて天の河名になかれたる月やすむらん

池上月

月やしろこよひも今宵見る人を待えしやとの池の心は

池月久明

月そすむ千里の秋も池水のそこのさゝれの數にみえつゝ

水邊月

秋の月いつくはあれと海つらの宇治よ伏見よいかにすむらん

湖上月　寛永十七[illegible]

はれてよきおなしたくひの秋の月たか江影に湖の海つら

しほならぬうらにそうらむ煙さへ空にくもらぬ月のみるめは

瀧月

これもまた瀧なくもかなかへりこん山路はさこそ月もおくらめ

ぬきみたる玉かとそみる月影も清く涼しき瀧津白なみ

池月

さゝ波のよろさへみよと紅葉はのうつるも照す池の月影

月照瀧水

月はなを雲のみなとて瀧津瀬の中にもよとむ影やなからん

海月

くもらすよむへも心ある海士のかるもなかの秋の浪の月影

海上月

須磨あかしすむらん影もみるめなき我身をうらの波の上の月

海邊月

和田の原雲井につゝく夕波のかきりしられていつる月影

夕煙月に心して須磨の海士の家たにまれよもしほたくらし

浦月

波かゝる眞砂地遠く影更てうら風しろき住の江の月

暮ぬれは沖のとも舟こきわかれをのかうら〳〵月やみるらん

思ひやる赤石も須磨もおもなれてまたみぬ浦の月としもなし

行舟にゆふへあるへき見る月も波路やかはる秋の浦人

都月

今宵たにいかて都の空なから山の端しらぬ月にあかさむ

花洛月

春によせし心の花の宮古人うつろふ秋の月やみるらん

おもひやる心に遠き海山もこよひ都の月にむかひて

旅浦月

浦人の夕へ曉行舟になみ路をかへて月や見るらん

海上曉月

入はつる都の山の月影も殘るや沖の波の明かた

河月　毗沙門堂門跡井領

更渡る月やさそひてすみのほる河音高きよはの閑けさ

旅泊月

思ひやる心の道そ友舟の同し泊りの月やかはらむ

寄月旅泊

波風のこゝろさはくよりも泊舟思ひのこさぬ月それられぬ

こき出はあすの浪路もことゝへよこよひの月はみつの泊りを

月契多秋

こよひたに千夜を一よの月もかなあかす八ちよの秋を契らん

詠月餞友

月を友といはむもやさし雲の上にすむかすむにもあらぬ我身は

月の御歌とて

山風のたゝく夕は聞すてゝ音なき月におくる柴の戸

寄月旅

あすは又いかなる野への月をみん行衛さためぬ草の枕に

庭上月

雪ならのあさちか庭の露も猶はらはぬ跡におしき月かけ

月契千秋

月におもふ心々は千々の秋をいはふことはのたねはかはらし

古寺月

古寺の菊も紅葉も折ちらしくむあかつきの影そ身にしむ

寺ふりぬ誰おこなひて閑なる心よりすむ月やみるらん

江上月

紅葉はのなかれてかゝる江の涙のよるさへみよと月やすむらん

寛永十三十一十六　寝覺月

夢ならて見しよの事そおもほゆる寝覺の後の月にむかひて

月下淺茅

しつけしな人もはらはむ露更て月影おもるあさちふの庭

月前草露

影やとすあさちか露のみたれきて野風にくもる月もこそあれ

月前萩

かゝる夜の月に夢見る人はうしといはぬはかりの萩のこゑ枝

月前雲

吹かゝる雲さへうれし晴るゝよの月にむかへるにしの山かせ

月前星

しらす誰星をかさしに月をおひてこゝもはこやの山をとふらん

月前時雨

まとの月もりくる竹のさよ風やしくれせぬ間もはれ曇らし

しはし猶くもると見しそ光なる時雨の雲をもるゝ月影

月前鹿

さほ鹿や思ひくまなくすむ月にこよひさへうき妻を戀らん

一しほの色もこそゝへ夜半の月鹿なく山の秋をとはゝや

つま戀をなくさめかねておは捨の山ならぬ月に鹿やなくらん

もろともに山より出し小男鹿や入方見せぬ月になくらん

月前鴫

聞わひぬおしと思ふ夜の月影にあかつきしろき鴫の羽かき

月前鶴

くまもなき眞砂の月に白妙の色をかさぬる鶴の毛ころも

月前釣翁

そなれてもあはれ翁の釣たるゝいとまなくてや月は見さらん

おきなさひ誰とかむなと秋の水すめるを待て月に釣らん

寄月述懐

世をなけく泪かちなる袂にはくもるはかりの月もかなしき

寄月祝言

みちぬへき月に思ふも行すゑをまつこそつきぬたのしみにして

擣衣

枕なるしるへにやとる夕かせのたよりにたくふ里のきぬたは

更行はうつや衣のおさをあらみまとをに聞しこゑもさやけし

うつもなをきく人よりは夢やみる更てきぬたのしはし音せぬ

聞擣衣

夜な〳〵のきぬたの音に此ころのまかきの花のなにもねられぬ

遠津人かへらむ衣うつたへにさそなねぬよの月にかなしき

寛永十十廿五　松下擣衣

獨のみ夜床にみつの霜をへてたれ松の戸に衣うつらむ

海邊擣衣
あま衣なをうちそへてあしのやのなたの釣するいとまなき比
野徑鶉
秋の野のふる枝の眞萩かりにたにくる人なしと鶉なくらん
菊　萬葉集ニ菊ノ歌ナキコト 原カ醍醐ニ梅ヲ忘レシニ同
ならの葉の世のふることにもれし菊梅を忘れしうらみなしやは
菊半開
またそみむかた枝はおそき白菊も咲しはかりの秋の日數に
籬菊
春秋もまかきの蝶の夢にしていつしか菊のうつる花かな
菊映月
光とは是や籬の秋の菊月にはへある花のてこらさ
くもらすも雲井の庭の秋の菊花も光を月にかはして
菊帶露
咲まゝに花ふさおもみをく露もたえぬはかりになひく菊哉
折にあふたまのかさしにおかす見し萩も下葉の露の白菊
山路菊
露のまに千とせあまりの菊そ咲大内山もやま路覺えて
河邊菊
よし野河はやくのとしをかへさめや菊の下水老はせくとも
菊粧如錦
秋のきく誰かあかすらし面影にゝしきぬる野の花の色々
菊花盛久
ちりうせぬ此言のはの種となる花もいくよの秋のしらきく

霜の後松もしらしなしら菊の萬代かれぬ秋のちきりは
菊花久芳
百種の花はあとなき霜の庭に我はかほにも匂ふ白菊
露光宿菊
あかすみむ千よの數にも咲菊のまかきにあまる露の白玉
菊似霜
菊はいま咲も殘らぬ花の色の霜やまことの霜をまつらん
寄菊契
月草の露もなかけそ我中の契りはかれぬ菊をためしに
寄菊恨
木からしのやとすきかてに手折しも菊はうらみの淺からめやは
寄菊旅
梅か香をふれし衣に秋の菊かさねて匂ふ旅をしそおもふ
寄菊祝言
百舖や世々のむかしにかへる世をとりそへてくめ菊のさかつき
菊爲花第一
咲きくや天津星かと雲の上にうへなき花の光みつらん
天津星と見えて雲井に咲菊はうへなき花の光ならすや
重陽宴
かきりなき秋のいくとせ廻りあはむけふ九重の菊の盃
菊有長生種
種しあれはけふ九重に咲菊の花もいくよの秋にあふらん
秋旅
思ひやれ床は草葉も敷わふる旅ねの秋の露のふかさを

秋神祇
稲葉にもあまるめぐみの露ならむあまたの神にたつるみてくら
紅葉
このごろの朝夕露は染やらで一夜の霜に木々も色こき
山紅葉
分入は麓にも似ず紅葉はのふかきやふかき山路なるらん
嶺紅葉
餘所にみてまつやゝみなむ染わたす高間の山の木々の紅葉も
むら紅葉夜の間に染てよこ雲の峯にわかるゝ松の色かな
森紅葉
思ひかれ梢の露もくれなゐの色にやいつる衣手の森
岡紅葉
染あへぬ枝へ手ことに折つくすゆきゝの岡の紅葉はゝおこ
うすくこく染し梢にはへあれや松もならびの岡の紅葉は
瀧紅葉
戸名瀬川水の面にはちらぬ間も紅葉をくゝる瀧の白絲
澤邊紅葉
木々の色のうつろふ池にうく鴨や時雨もしらぬ青葉なるらん
紅葉隨風
梢ゆく風には又やまかすらしゑくれに染し山の木の葉も
紅葉霜
染つくす露より後も置そひぬ紅葉にあける霜やなからん
なにか世もはてはうからぬ紅葉はゝつゐに染たる霜やくたさむ
朝風に吹やられてや松陰も霜置なからつもる紅葉は

あかぬ紅葉の
心せよあかぬ紅葉のちらまくも思ふにおしきよはの山風
筏
心あれやちり行水をせきとめて紅葉はなからたゝむいかたし
暮秋
色香をはおもひも入ぬ鷹人もさこそは野への秋をおしまめ
九月盡
鳴蟲のこゑも哀やつくすらむ暮行秋のけふをかきりに
けふはかりいかてとゝめん又來むはおもふに遠き秋の別を
見をくらむ行衛ならねと名殘なく霧なへたてそ秋の別路
寛永八十十 堤霧
誰か中の人めつゝみのへたてとて立かくすらん秋の川霧

冬部

初冬

秋風の音をなをさらに吹かへて又おとろかす冬は来にけり

初冬時雨

冬きては木の葉降そふ山風にきのふの秋の時雨ともなし

時雨

さためなき此身もいつの夕時雨ふるも思へは袖の外かは

夕間暮閨まかへつる松風のやかてもさそふさよ時雨かな

物ことにさためなき世を思ふにも袖の外なる時雨のみかは

朝時雨

山めくる時雨もみえて晴くもる雲にいさよふ朝附日かな

ちりそひて山あらはるゝ木の間より紅葉にかへて瀧そ落くる

ふみ分る山路にそきく落葉して梢の風のまれになる聲

染そめすつゐに嵐の末の露もとの雫とちる木の葉哉

落葉風

あたにちる春の花より木の葉まて思ふに風のうさもつもれる

風やなを木の葉にあらき夕時雨染あへぬ枝もさそひ殘さぬ

落葉霜

かさなるを吹わくる風に今朝の霜なかは置たる落葉もそある

殘菊

霜をへてうつろひかはる園の菊殘るものこる秋の色かは

寛永十二十一十六 枯野

薄のみせめてわかれて花はみなあらぬさまなる霜の野へかな

木枯

はけしくも猶吹しほる木からしにうすき紅葉の色ものこらす

松添榮色

霜の後の松ともしるし榮ゆへき我國民の千世のためしは

寒草

しはしこそ霜をもしらね冬草はつゐにみさほの松かけもなし

枯るゝよりかりもはらはぬ道みえて霜に跡ある野への草むら

千種にもなをかへつへし霜かれの中にはなさけあるなてしこ

冬かれの草葉にも見よ色といへは千種咲たにあたの世中

寒草霜

朝顔のもろきも千世の白菊もわかすかれ野の霜のあはれさ

正保二十一三 江寒蘆

江にしけきあしの葉からす霜の後是もあらはれぬ中のいさり火

氷

雪をさへよはとかされて氷よりもさむき岸根の朝氷かな

氷初結

照日にもなを絶さりし山水の音こそきかね今朝や氷れる

霜

光もて曙いそくかさゝきのはしにみちたるよはの霜かな

朝霜

霜なれや光おさまる有明のことはりすきてさやかなるかけ

冬月

見る人の袖さへとをる小夜風に木の葉の後の月そくまなき

水鳥

見し秋のにしき絶たる河波にかされてうかふおしの毛ころも

寒夜水鳥

獨ぬるなしの思ひやみたれ蘆のはたれ霜ふりさむき夜床に

水鳥馴

池水に我袖ちかくすみなれてあそふもあかぬをしの毛衣

千鳥

さそはれておのか立ゐも隙そなき夕なみ千鳥風のまに〳〵

波かゝる袖の湊の風をあらみさはく千鳥やよるかたもなき

浦なみの立わかれるもなりゐるもこゑにみえ行さよ千鳥哉

河千鳥

千鳥なくさほの河霧立別行衛もしらぬつまやとふらん

岸千鳥

松ならぬ音にあらはれ小夜ちとり涙うつきしに妻やこふらん

浦千鳥

おのかつまつはつらくも大淀のうらみてのみや千鳥なくらん

霜夜立別

おのか上にかされむ霜やいく世ともしらす白洲の鶴の毛衣

冬浦

時雨きて此夕なみにこと浦の雪をのせたる舟もこそあれ

焚そへてさすか三冬の浦かせもふせくたよりやあまのもしほ火

橋上霜

板橋や朝風寒き霜の上にかよはぬ人の見えてさひしき

擣衣寒衣

秋風の身に寒く成山賤やくるゝ夜毎に衣うつらむ

冬植物

殘りけり松にみとりのほらの門にうつらてななふ千世の白菊

冬天象

是もまた白きをみれは更る夜の月さへわたるかさゝきの橋

冬地儀

枯はてゝ中々秋の露よりも色なき野への色そ身にしむ

野霰

思ふそゝの故郷遠き旅ねして霰ふる野にあられける身を

霙

山風や暮るまに〳〵さむからしみそれに雪の色そ添ひゆく

雪

山々のへたてわかれてさやかなる雪は晴ての後にこそあれ

庭初雪

庭の面は降もたまらて眞砂のみしろき梢の今朝の初雪

冬池雪

みたれふす蘆間や消る冬の池の波はすくなく積るしら雪

庭雪

晴やらぬ今朝のまをとへ踏跡もふりかくすへき庭の白雪

雪庭樹花

あかすなをみきりの松の千代もみむちらすは雪の花の常盤に

いまさらににほはぬ花の恨なれみかきの柳雪になひきて

殘雪

踏分る沓もかくれぬ今朝の間をとふは思ふにあさき雪かな

曉雪

有明の月と見しまに松竹のわかれぬ色そ雪にわかるゝ

行路雪

かきくらす雪にもしけき通ひちはうつみもはてす跡もとまらす

關路雪

しら雪のいつこか家路ふる雪にすゝまぬ駒のあしからの關

暮村雪

暮ふかくかへるや遠き道ならむ笠おもけなる雪の里人

閑中雪

佳人の心は外にふりをきし雪や友まつよもきふのやと

人をまつ心の道の絶にしも雪ははらはんよもきふの宿

海邊雪

あま小舟はつ雪なれやわたつ海の波よりしろき奥津嶋山

松雪深

落葉せし楷の雪はおもからて松にとのみもつもる雪かな

山家雪朝

かくれ家の心も雪に埋れて見しよの友そけさはまたるゝ

山ふかき今朝の雪にも埋れぬ心の松に人のとへかし

望雪

山の端に降つむ雪も深きよのやみはあやなき色にさへつゝ

眺望山雪

めにちかく山も入くる樓のうへに千里晴たる雪のさやけき

春秋の山のにしきの面影も埋みはてたる今朝の雪哉

積雪

ちりそめてつもるな思へおこたらぬ學ひたりせはまとの白雪

連日雪

都とて思ふに雪の晴やらぬ日數はかりはつもるともなき

都たに間なく時なくふる雪に深山はさそなつもりはつへき

途日雪深

けふことに手折枝よりなれそひて松こそ雪のみをつくしなれ

鷹狩

暮るまをしらすや分るかり衣なを心ひく鳥の落くる

はしたかに心いれてやかり衣風もさむからす道もまとはす

夕鷹狩

あかすなを今一よりとかり衣日も落くるをしたひてそ行

雪中鷹狩

白砂の雪こそ光れゆふかりのあかぬ日影なつきてふらなむ

炭竈

煙にもまつあらはるゝとし寒き松よりをくの峰のすみかま

夜埋火

聲すなり夜のまに竹をうつみ火のあたりはしらぬ雪や折らん

枇杷

二たひはさしも匂はしたち花に霜の後なる花そまかへる

色こそあれ紅葉ちる日は咲初て我はかほにも花そ匂へる

冬祝言

鶴龜もしらしな君か萬代の霜のしらきく殘る日數は

歳暮

けふことに過行年をくれのとて身におとろくもいへはおろかさ

なすことのなきにそ思ふ行年もいまはおしまぬよはひならねと

海邊歳暮

暇なみ今年もくれぬうみ渡る世のことわざよ海士のまてかた

歳暮

梓弓いるにも過て年ごとに去年にさへ似すくるゝとしかな

戀部

初戀

もえそむるいまたにかゝる思ひ草葉すゑの露のいかにみたれん

おもひたつこれはあしもと遠くとも戀の山路のすゑもまよふな

心から物おもへとやいひそめてたえん夕への空もしられす

すゑつゐに淵とやならむなみた河けふのたもとを水上にして

忍戀

今こそは忍ふもちすり誰ゆへとみたれてつゐにしられんもうし

思ひわひきゝもあはせんしのひねをわれにかたらへ山郭公

忍ふとも見えしとおもふ涙をはまきらはさむもなをこゝろせよ

しられしとおもひもいれし物思ふ心は色に見えもこそすれ

我か袖の月もとかむなうき秋に露のかゝらぬたくひやはある

忍尋縁戀

此里のみちしるへにはたのむとも人に忍ふのおくはしられし

忍逢戀

思ひをく床の山には人しれぬ又たまさかの夢もこそあれ

あやにくにくらふの山も明る夜をまれなる中にかこちそへつゝ

見戀

思ふそよあしのほのかに聞しより見しまかくれは汀まさりて

聞戀

いつはらぬ言葉としるも聞あかておくれし方もさすかかたるに

尋戀

嵐ふく秋より後はとこなつの露のよすかもたつね侘つゝ

つれなさをたつねてやまむ契りをや年へて祈るしるしにはせん

祈難逢戀

いかてかくいのるしるしの見えさらん神は人をもわかし心を

祈戀

れきことのしるしもみえぬ我か爲は神もいさむる道をしれとや

祈逢戀

今そしるうきとし月も逢ことのかけていのりし神のしるしも

行不逢戀

槇の戶をたゝくもあくも小夜更て待人ならぬ人もこそしれ

誓戀

よしやその千々の社はかけすともたのまれぬへき色しみえねは

逢戀

たくひなやあふよとなれはつらかりし人にもあらすとくる心は

あれはありし此身よいつのならはしに世を隔むも今更にうき

つゐに身の契りなれとやたとへても浮木の龜のおふせ計を

適逢戀

いかにせむ年にまれなる逢ことをまちし櫻に人もならはゝ

たまさかにあふよなれはとゝけやらぬ恨を人にゆるすさへうき

逢增戀

かた絲のあはすはかゝるけちかさの覩たらぬふしも思ひ亂れて

人そうきかゝるふしさへ片絲のあはすは何とおもひみたれん

逢後增戀

逢も見ぬさきならはこそ戀せしの御祓もつらき我おもひかは

不逢戀

いかさまにいひもかへましつれなさの同しすちなる中の恨みは

よそにこそあふの松原か計にかもたゝにてはあらしつれなさ

終にいかにまことの色をみはてむのおもき方には猶たのむとも

動きなく思ひさためて中々にあはしともいはてあはしとやする

通書戀

あさくこそ人は見るらむ玉章にかきもつくさぬ中のおもひは

契戀

わかれてはよもなからへしうき身とも思はぬ人やちきる行する

もろ神をかけてちきれは行す衞の松には越む波も思はす

たのましよことよくちきる言の葉そつゐになけなる物思ひせむ

契待戀

たのめしをたのまは今は賴むなよ月いてゝとは人もちきらす

忍待戀

忍ふれはうれしきものゝ小夜ふけて人はれたゝそ待にかなしき

別戀

待えてそいそき立らん鳥か音をおなしつらさにいひなすもうき

あはぬ夜もありけろ物を別路の鳥より後そあかしかれぬる

いそくなよも又はこし此たひや限りとしたふ今朝のわかれを

惜別戀

明るよの程なき袖の泪にやなをかきくらすきぬ〳〵の空

祈戀

祷も忠へ賴む祈もかひなくて立やなき名を誰におふせん

深更歸戀

まちいてゝかへるこよひのつれなさはひとり見はつる有明の月

あはすしてはかれぬ程をいたつらに月も見ぬと人にうらみて
有明の月はつれなき色もなし見はてゝかへる人のこゝろに

後朝戀

我こそはさそひてかへるおも影を跡にそ人のさしもとゝめし
身にそへて又やねなまし移り香もまたさなからの今朝の袂を

馴戀

なれ行を又も見まくのとはかりはおもはし物のいとひはつらん
あま衣なるとはすれといは鳴やあはぬうつせはひろふかひなし

顯戀

つゝみこし思ひの雲のたえ／＼に身はうち河の瀬々のあしろ木
うしや世の人の物いひさかなさよまたき我か名も淺んとすらん

增戀

いかにせんふろや泪の雨もよに淀の澤水まさるおもひを
神よいかに聞たかへたる戀せしとはらひしまゝにまさる悲しき

遠戀

嶺の雪分こし道のわりなさもあさき方にはいかゝおもはむ
たちかへりとふとも遠き中道に心の外の世をやへたてん
みやのうちを千里とたにも思ふ身の部にうつろふ程をしらなん

近戀

つらきかなたゝはい渡る程にたに思はぬ中の遠き絶間は
人はたゝ見たにおこさぬ我宿のまつとはさこそしろき梢も

久戀

今まてにむかしはものをとはかりに恨ぬ身をぱうらみやはせぬ
つらきこそいつもかはらぬしら玉の見えしは色の泪なりけり

夢戀

さきの世の夢をわすれぬ契りかとたとるはかりの中の年月

恨戀

情こそ思ふにうけれつらしとておほよそ人にうらみやはある
おのつから見ゆらん物を恨ともしらすかほなるそれも一ふし
いかならん此一ふしのうらみゆへつらき心のおくも見えなむ
恨みしよことはの恨つくすともかたはしをたにえやはるけむ

人傳恨戀

我か恨世のそらことにいひなして聞もいれすと語るさへうき
人つてはうしろめたしやにくからすおなし恨もうちいてゝこそ

恨身戀

思ふ人うき身のとかになしはてゝうらみぬまての中の恨を
おもふにはうきもつらきも誰ならん恨のはてそいふかたもなき
つゐにその里のしるへもあまのかる藻にすむ蟲の我そかなしき

忍恨戀

けにかよふ心ならはとかこつかなさこそは人のひまはなくとも

變戀

つらくともさらにはてしとかはり行心をしゐて頼むはかなさ

被厭戀

つけはやなきたる朝の我袖につゐに身をしる雨はしけしと

難忘戀

思ふにはなけの情もいかなれやそよそのことのうきわすれは

忘戀

千重まさる霧や隔つる我方のはふ日つもりて遠き絶間を

片恋

寛永十二廿五
よしや人それにつけても思ひしらは思はむ方のよそにたにあれ
なとか我つらき心のつらからぬよしあひ思ふ道はなくとも

偽恋

ことよきにはかられきては偽のしらるゝきはを人にうたかふ

絶恋

よしや見よ果無きふしにうきなからえしも忘れぬ人もこそあれ

隔川恋

うしつらしちきりにかけむ鵲のうき中河を君にへたてゝ

経年恋

さりともとなくさめきぬる年月になか〳〵つらき限りをそみる

関路恋

したひこし面影なから鳥か音にいそく関路のならひさへうき

羇中恋

故郷のたよりと聞は文かきてつくしもはてぬ思ひとをしれ

春恋

いかにせんとはれぬ春も頼まれぬ身はうくひすの聲のやとりを

夏恋

明やすき空そわりなき夏のよも逢人からはおしむならひを

夏忍恋

思ひわひきゝもあはせむ忍ひねを我にかたらへ山ほとゝきす

夕恋

此暮のさはる恨をかきやるもまつらんかたはつらしとやみむ

夜恋

つく〳〵と物にまきれぬ思ひのみまさきのつなのよるそ侘しき
名残なをあふと見えつる夢よりもさたかにむかふよはの面影

恋涙

別行我袂には色かへて身をのみなけく涙さへうき

忍泪恋

ゆるされは袖には落す幾度か心まてくる我なみたかな

思

思ひ草おもふも物をとはかりにおきふし志けく露そこほるゝ
くり返しなかき世までもまよふへき思ひを何としつのをたまき

片思

なとか我つらき心のつらからぬよしわひおもふ道はなくとも

寄月恋

面影の我にむかひてかきくらす人はさたかにみむ月もうし
たのめしはあらすなる世に面影のむかしおほゆる月さへそうき

寄月尋恋

しるへなきやみにそたとる恋の山かくるゝ月をなを思ふとて

寄月忍恋

うちとけて見えんもいかゝくまもなき月は心のおくもしるらん

寄月逢恋

もろともに見しよの月の光まて面かはりする人の秋(本ノマヽ)はうらみし

寄月別恋

人もかくおくらましかはかへるさの月は身にそふ今朝の別を

寄雲恋

寛永十三十一十六
晴間なきならひよいかに雲ならぬ恋はむなしき空にみちても

はかなしや人の心の風はやみ身にうき雲の半天にして

契りたゝ思ふにもうき中空の雲は跡ある人のことの葉

寄煙戀

人のためは煙をたちし此頃のおもひもしらぬ思ひかなしき

煙たに人にしられぬ下もへにさとのしろへのあまのもしほ火

おほ方の風にはさしもなひくらむうしや見さほの松の煙も

寄夕戀 寛永十一十一十六

思へ人あすはとふとも草のはら此夕露の消は殘らし

寄露戀 寛永十四八廿三

思ひやれ人の心の秋もあき露も空なしき露のたもとを

靡くかと見むふしもかな竹の露のまろひあふ迄は契りなくとも

寄山戀

人心見はては我もやみれたゝよしうき戀の山つくるとも

寄海戀

みちひなきならひもうしや敷妙の枕の下のしほならぬうみ

寄湊戀

人心うかへる船のよるへとも我見なと江をいかてたのまむ

寄瀧戀

せきあへぬ袖の瀧津瀬行末にわれてもあはむ契りたにあれ

寄野戀

かりにたに人はこさらむ戀草のしけき夏野に何たくふらん

寄木戀

人心花にうつろふならひこそ我かかたはらのつらき深山木

寄草戀

道絶るあさちか庭は眞葛葉をかへす秋風吹とつたへよ

寄草別戀

別行此道芝にくらへみよあはてこしよの露はつゆかは

寄葛戀

つれなきに我や眞葛の恨さへいまさらふかき露なしらなん

寄鳥戀

槇の戸をたゝけは人に契りおかむ水鷄なくよは間もとかめし

うき中は鷹よ燕よ羽根なさへならへんと契る人もこそあれ

寄猪戀

見せはやな伏猪のかるもかきたへてこぬよの床の露のみたれを

寄蟲戀

おのか名のこてふに似たり折かさす花にやとりてむすふ契りは

ひをむしのまたぬ夕へを思ふにそきえぬを頼む身さへはかなし

寄玉戀

聞侘てあやな泪のたま／＼のあふよはうさをたにこそかこたれ

寄風戀

さそへともちろへくもあらぬ盛なる花には風のとかもかくれて

聞もうしとひしはいつの松の戸にそなたより吹風の音信

寄河戀

いかにせん泪の河のなかれても哀あふせをつゐにしられね

寄鐘戀

聞もうし暮をまつまの鐘ならてとはれぬよはの曉のこゑ

寄山戀

あひみての後世の山のこなたにも戀てふ道は猶たとれとや

題不知

いつはりのことのみおほき玉章をひき返しても恨つるかな

寄枕戀

あふとみる夜はかりの夢もあれな五十の枕それはおもはす

寄秋戀

うしやいま誰か手枕にいとふらん身はならはしのねやの秋風

寄衣戀

いかにせむ我戀ころも春雨にぬれしはかりのなみたならすは

寛永廿一廿七

かへしても見るよまれなる夢そうき中にあるたにうとき衣を

見るめなきうらみよりけに中々にしほやき衣ぬれそふもうし

寄繪戀

かひもあらし形はさこそうつすとも月は光をえしもかゝれは

是をたに見さらん程はとはかりにかきすさみしやえしも恨ぬ

寄糸戀

いはゝやな下のうらみのふし多みしつかしけいと繰返しつゝ

寄商人戀

哀身にあはぬなけきや商人のきぬきたらんかたくひさへうき

寄名所戀

あふことを我松山はあたにのみいく年なみのこえんとすらん

恨絶戀

大かたのうきならはこそとはかりも恨て後のこゝろとはしれ

忍久戀

つゝましき身をかへりみる心にはいつか忍ふの色かはらまし

雜部

松

百舖やうへし我か世も思ふにはいく程ならぬ松の木高さ

紅葉こそ餘所にもおもへ松風の聲には秋の分ぬ物かは

庭松 寛十御方御會初

うつせなを竹の園生の跡とめて色ぬる松の庭のをしへを

庭上松

家々の松のことの葉ちりうせぬ庭のをしへの幾よならまし

砌松

百敷のふることかたれ我みても久しき代々の松はしるらん

嶺松

つもりしもつゐに嵐の枝はれて雪に色そふ峰の松原

峰に生ふる程もしらしな八千代へんみかきの松の梢のゝえ

浦松

松風も秋にすゝしく音かへて浦めつらしき志賀のからさき

よせかへる波吹立て夏なしと松にこたふる志賀の浦風

住吉や松の緑も猶かへてあまの家たにあやめふくらし

名所松

百舖や誰をしる人高砂の松のふりぬるむかしかたりも

松有歡聲

松にふくもやはらく國の風なれや安くたのしむ聲に通ひて

風吹けは空にしられぬ白雪のりちにしらふる松のこゑ哉

窓竹

いや高く生そふまゝに大空のおほふはかりのまとの呉竹

なよ竹のなひきふしてはさみたれの雨くらからぬ窓のうち哉

ことし生の陰さへしけく呉竹のはやまも窓にみえす成行

庭竹

呉竹の園生に残せ代々の道に老ぬる松の庭のをしへを

竹契遐年寛永三丙寅九月廿六日行幸之時八日御歌會

唐の鳥もすむへく呉竹のすくなる世々そかきりしられぬ

岡篠

かの岡にもゆる草葉のうらわかみ霜にもかれぬ小篠をやかる

門杉

あはれ誰まつこともなくさしこめて世を杉たてる門のあけくれ

麁柴

なをそふる山のふもとの涼しさに眞柴かたしきくらすころかな

山家

山里は時につけたるうさはあれと浮世のうきに似るへくもなし

心よりひとり／＼の山住はならふ軒端もしらすかほなる

先たちて入し心そなれぬへきいま住初むやまの奥にも

思ひ入心の奥のかくれ家にすまはや山はよしあさくとも

山家煙

冬ふかみさらに折たく柴の戸の煙をそへてさゆる山風

山中隠家

妻木こる賤たに見えぬ山も我おもへ入にはあさきかくれ家

山家嵐

たえてやは太山の庵に閑初しその夜のまゝの嵐なりせは

山家燈

柴の戸に誰かしこきを友として文にむかへる夜半のともし火

山家客来

ことよせてとひくるもうし山住の心の外の花やもみちに

山中瀧

岩なみを梢にかけて松風もさらに音なき山の瀧つ瀬

水かみは梢の露やちりひちのつもりてたかき山の瀧つ瀬

山たかみ落くる瀧のしら糸に結ひもとめぬ玉そ亂るゝ

谷樵夫

暮ふかみ峰より谷の賤のをにこゑをかはして歸る山人

題不知　笛吹藤田清久拜領

おひそむるねよりもしろき笛竹の末の世なかくならん物とは

題しらす

うつすともえやはをよはぬ峰の松白きを後の俤にせよ

ひらけ猶文の道こそいにしへにかへらんあとは今もこらさめ

水石契久

天下あくむ心も行水のもろてふ石をためしにやせん

幽徑苔

誰はらふ道ともなしにおのつから苔にちりなき松の下かけ

水樹佳趣多

しら玉のかすにもしるし池水のたきつ岩根の松の千とせは

橋上苔

おのつから柳やたをれふる苔のまほならすしも渡す河はし

橋雨

寛永十七廿五
行人の跡たえはて丶板橋の霜よりけなる雨いさびしさ
みのもかさもとりあへす行村雨のしと丶にぬる丶まゝの繼橋

名所橋
世をわたる道もこ丶より行かへる人やたとらぬ淀のつきはし

故郷草
あれまくも春そ思はぬ古郷の垣ほにしけきつ丅はなすみれに

閑居
心よりしつかならすはしつかなるかくれ家とても塵の世中

市中隱居
立さらて心の内を住かへよ里の庵もふかきかくれ家

閑居待友
今さらにとふへき誰を松の門さすかに三の徑をのこして

草庵燈
草の戸のすきまの風の灯のきえやらぬ程と住や誰なる

曉
鳥か音におき出るよりよしあしのわかる丶道を思はさらめや

曉鐘
おとろかす曉ことの鐘の音にをを覺はてぬ夢をしそ思ふ

夕鐘
春秋のいく夕暮をおしみきてかねもつきぬるとしをつくらん
さすか身はおとろきなからつきはてぬれかひも悲し入相の鐘

古寺鐘
小初瀨や紅葉吹おくる山風にこゑも色ある入相のかね

古寺松
法のこゑにそれもやさそふ高野山曉ふかき庭の松かせ

田家
はかなしなかりほならぬもかり初にかこふ田中の賤か家居に
とる聲も水のひゞきも絕はてぬ氷る冬田に庭のさびしさ

田家鳥
思へ世は玉敷とても秋の田のかりいほならぬやとりやはある
おとろかす跡よりやかてかへりきて門田の鳥そ人にまちかき

鶴伴仙齡
仙人の名にあふやとそ千世かけてこゝにもちきれつるの毛衣

名所鶴
住鶴にとは丶や和歌のうら波をむかしにかへす道はしるやと

正保五御會初
鶴馴砌
すみなれぬなれも千とせの友こふや雲井の庭の鶴の諸聲
君かため久しき跡は九重の眞砂を敷に田鶴や住らん

鶴立洲
おのか上にかされむ霜を幾代ともしらす白洲の鶴の毛衣

池岸有松鶴
池水の岸根の松に千代ふへき所をみてや田鶴も住らん

白鷺立汀
白妙の池のはちすのまたさかぬ見きはの鷺は色もまかはす

關鷄
名殘あれや鳥か鳴音に起いつる關のかや丶の月を殘して

題不知
關守もうちもねな丶ん人心すくなる折そあふさかの山

馬　千里馬雜說ニミエタリ

思ふそよ千里の馬を尋てもしるらん人はさてもなき世を

海路

故郷をおもふやおなし過行をともに見をくるおきつ舟人

鹽屋煙

もしほやく海士の家たにまれにして煙さひしき須磨の浦浪

浦船

難波かたうらなみ遠き蘆間よりおなし一葉とみゆる釣舟

題不知

淡路方せとこす舟をうつなみにいはねも山ものこるものかは

漁舟遠浪

あま人の一葉にまかふ舟よりもかろき身をおく浪のうへかな

明はてはおのかうら〳〵漕出て世をうみわたるあまの釣舟

遠帆

しるやいかにすき行舟の遠からすそなたに見えぬ浪のあはれを

海眺望

面影ならの煙に先たてゝかすまん春もちかのしほかま

蜑小舟初雪なれやわたつみの浪より白き奥津嶋山

みるかうちに湊漕出て行舟もきえて跡なき須磨の浦波

河眺望

ふかくなる青葉の山の麓川夏しもしろきなみのうへかな

いにしへのちきりにかけし帶はかり一すしふるき遠の川なみ

こりつめるしはしか程も行かへる世のいとなみやうちの川舟

湖水眺望

わたつみのいかさしにはふらて白妙の花のなみよるしかの浦風

眺望日暮

釣舟はみえすなるより見え初て暮行沖にちかきいさり火

旅行

行々ておもへはかなし末遠く見えし高根もあとのしら浪

旅宿

何かうき草の枕そふる郷とおもふもかりの一やとならぬかは

旅宿嵐

たのみこし夢路もたえて草枕ふる郷遠く吹あらしかな

旅夜

なきそふや故郷遠き露ならむさゝのまくらの一夜〳〵に

旅朝

旅衣あさたつ野へのさゝ枕一夜のふしもたれかおもはぬ

旅友

おもふより遠くきぬらし旅衣分る夏野の草たかくなる

羇旅

たひ衣うちぬるまゝに故郷にかよふ夢路はおしも休めす

羇中關

都人あかすわかるゝ夢路にはあやなまさしき關もかためす

旅泊夢

舟人のいつからとまり浪なれて見るらむ夜半の夢もかなしき

波さはくうきねのまくら又うきぬ都のゆめのかへる名殘に

富士

物としてなしとはいはし世の中をこれもうらなる雪のふしの根

述懐

後の世のつとめの外はことなくて物にまきれぬ身をつくさはや

しなはやなもよは〻草よ世の中のめにも耳にもあまることこそ

寄木述懐

いたつらになすなよ心直き木にまかれる枝はなとゆるして

獨述懐

ともかくもなさは成なむ心もて此身ひとつをなけくおろかさ

寄書述懐

古を書なく筆の跡もうしさらすはくたる世にはしらしを

ひらけなを文の道こそ古へにかへらん跡は今はのこらめ

夜述懐

人もこれ草葉もしけし野も廣しつむ柴となれは雨もすくなし

何事をなけきの森のしけからん今幾程の老のね覺に

寄鏡述懐

うつしみぬ我やいかなる世の中に人のかゝみはいまもこそあれ

述懐悲

道々のその一たにいにしへのはちかはしにもあらぬ世にして

懷舊

みち〳〵の百の工のしわさまてむかしに及ふ物にまれにて

思往事

さま〳〵に見しよをかへす道なれや雨夜更行ともし火の本

寄橋雜

おもへ人木曾のかけはしそれならてうき世を渡る道もあやうし

孔子

たれ道をうけつかさらん四をたち四をなしゆる跡しならはゝ

顔回

ちまたにはしけるもよしやたのしめる道にさはらぬ葎よもきふ

點不知

千世もへしみかきの竹の一ふしをおきてかそふる人のまことに

神祇部

伊勢

うごきなき下つ岩根の宮柱身をたつる代々のためしならすや
なか月やなかきためしのみてくらのつかには絶し神の御前に

神社

見ても思ふよななけしも蔭高き内外の宮のかゝやか軒端を

社頭暁

暁の霜もおくかと神かきやさかき葉しろき夏のよの月

社頭松久

すみよしやいつの御幸に逢生の松はしるらん世をもとはゝや

社頭祝

代々かけてたのむ北野の一夜松ひとつふたつの道のためかは
いはし水なかれの末の我末も神し守らは世々に絶しな

寄社祝

九重のためならぬかは守れたゝ天津やしろも國津社も

神祇

たのむそよみもすそ川の末の世の數には我ももれぬ惠を

秋神祇

いなはにやあまる惠の露ならんあまたの神にたてるみてくら

寄月神祇

月よみの神のめくみの露しけきこよひの秋そ光ことなる
八百萬神もさこそは守るらめ照日の本の國津宮古を

寄花神祇

あかすとや神もうくらん色も香もふかき心の花の手向を

社頭月

やはらくる光やおなし波間より影あらはるゝ住の江の月

社頭水

月こよひいかにすむらん石清水にごりなき名も空にかよひて

社頭祝

我たのむ心の底もいはし水おなしたくひと守らましかは

神樂

今もなを神代のまゝの跡とめてうとふ榊のもとすゑのこゑ

神祇

まもれなをよに住吉の神ならは此敷島の道のまことを

隱岐國へ被遣候

隱岐の海のあらき浪風しつかにて都の南宮つくりせり

祝部

祝言

いまこそと袋にはせめ梓弓八つのゑひすもみななひきゝぬ

しきしまや此ことの葉に何事かまさきのかつらなかきためしは

守るてふ五つの常の道しあれは六十あまりの國もうこかす

絶せしなその神代より人の世にうけてたゝしき敷島の道

寄日祝

天津日を見るかことくに惠ある世はたにしらぬ時のかしこさ

つきせしな天津日嗣も曇なく出入影の照すかきりは

寄月祝

月よみの光あまねく照すてふ國も千五百の秋はつきせし

寄鏡祝

開きみる文にそしるきおさまれる御代のかたみや世々の古こと

寄國祝

ためしなや他の國にも我國の神にさつけしたえぬ日嗣は

寄道祝

九重の名は絶すなる木の道のたくみも代々の跡を殘して

行人の皆出ぬへき道ひろく今はおさまる國のかしこさ

寄世祝

いのりなく千とせは代々につきもせしありとある人の一つ心に

寄龜祝

九重にうつせるかめの山陰にしらぬ千とせの後までもみむ

夏祝言

今こゝに人の國さへたゝきこむ君にしらする水鷄とそきく

冬祝言

松にすむ鶴の毛衣冬きてやおきまさる千世の霜をみすらん

爲君祈世

千世もしるしみかきの竹のふしして思ひおきてかそふる人の誠に

對龜爭齡

池水のいとけき宿と萬代を我にちきりて龜やすむらん

寄若菜祝言

わか菜つむ袖のよそめに白妙のつるの毛衣千代は見えけり

寄道慶賀

思ふことの道々あらむ世の人のなへてたのしむ時のうれしさ

行人の遠しともせし東路のみちのはてまておさまれる世は

龜萬年友

うこきなき我世の友と池水にすむ龜の尾の山を契らん

釋教部

在於閑處

靜なる太山の松のあらしこそ心につもるちりもはらはめ

無諸衰患

あふけなき八しまの外も浪風のうれへなしてふ法のまことを

空門極樂

むなしきか色なき色は誰かみむゝし見む人もみぬ世ならすは

秋霧の立も及はぬ大空のくまなき月は見る人もなし

未顯眞實

慶安四四六廬山ニテ詠
妙なれやつゐに四十年の霜の後世にあらはるゝ松のことのは

世尊拈華伽葉微笑

ゑみのまゆひらけし花は梅か桃か誰しりしらん誰しらすとも

德山入門則棒

明石方迫門こす舟をうつ浪にいはほも山も碎るものかは

應無所住而性己身

わしや誰とへとこたへぬ海人の子のとまりさためぬ浪の上かな

無覺無性

おのつから思ふは物をおもふかはおもはしこそはこき思ひなれ

如是我聞

我聞し人の心を種として世々にや法の花にさくらん

釋教

ふかく入もあさしとなしれ法の道山の奥なるふもとならすは

耳にきゝめに見ることの一たに法の外なる物やなからん

春釋教

照しみよ春日に消ぬ霜もあらし野への若菜のつみは有とも

霜なから消も殘らし春日さす野へのわかなのつみはありとも

借問趙州　如何是祖師西來意州云庭前柏樹子

染なきはこゝや西より來る秋の色は色なき庭の木すゑた

東照宮十三回忌法華經廿八品人々に歌よませたまひける卷頭に

序品照于東方　寛永五
元和八年四月十七日

いちしるし妙なる法にあふ坂の關のあなたをてらすひかりに

思往事

さま〳〵に見し世をかへす道なれや雨夜更行ともし火の本

無常

おにゝなり鳥部の山の夕煙われさへ風になくれ先たつ

寄舟無常

世中の浪のさはきもいつまての身のうき舟はさもあらはあれ

坊城俊定剃身まかりし時趙州無の心を

かくれ家の何國かはあるゐのこ草それはとゝへは山なしの花

御辭世

行々ておもふもかなし末遠くこえし高根の峰の白雲

御影の御自詠　般若院ニ在御グハ妙門樣被仰
外ハ探幽書入之

うしや此太山かくれの朽木かきさても心の花し匂はゝ

靈源寺御像　奈良一門樣被遊

おもへたゝ應化の外もなす事のあらはまことの佛ならしを

御連歌御發句

身ならゝに千とせも見はや園の梅

梅か香にふかさくらへむ花もなし

五月雨になかきねあはせあやめ草

かさねあけて見はや都のふしの雪

五典の御歌

君臣有義

天津空くもりなきまて照月のうつれる水の色もにこらす

父子有親

雲井より澤邊におよふ聲すゝ也子を思ふ鶴もおもはるゝ哉

夫婦有別

行かよふ山田もる男そいとまなきしつはた帶のとけし夜の間も

長幼有序

春ことに梅よりつきて咲花の楷あまたの折ふしそなき

朋友有信

あし間より友したふ聲の哀なるおのれのみやはあさるかりかね

御在位の砌仙洞へ竹に雪の降かゝりたるをそのまゝ折

なからまいらせられて

今よりは雪にもてはやす言のはのみかきの竹の世々につもらん

御位をゆつらせ給ふ時

思ふ事なきたにやすく背世にあはれすてゝもおしからぬ身を

萬治三年比女院御茶屋作らせ玉ふに御幸成て家つくりた

くひなしといふ事を沓冠にすへ給ひて

いくよをへ月も住へくりちの歌くりかへしうたひ猶かけもなし

沓冠の御歌　御茶屋を板倉周防守建しに御色紙被下候 此ちややたくひなし

ことさらの千よのはしめや大和歌くり返しうたひ猶あふくらし

仙洞へよみて奉りける　烏丸資慶

春に猶今一たひを松かえの藤波かけてさそへ花その

御返し

藤波のなみにおもはゝかひもあらし月にさそはん秋の花園

おなし年兩臣獻和歌　烏丸資慶

紅葉はや染て待らん花園の秋にといひし月の桂も

御返し

うそといふ鳥やとまらん忘草生る花その秋や暮なむ

中院通茂

花園の月にといひしことの葉のあたに導なん秋をこそ思ふ

御返し

わすれくさ生る　秋や暮なん

仙洞より聖護院の宮へつかはさる、御製に野山なつかし

き折ふし花檀の菊一枝折候一枝けさんに入候

此ころの菊そうつろひ盛なるさこそ紅葉の千しほなるらめ

野山漸色つき叡覽にそなへたきと存候折ふし御花檀の一

枝拜領候中々紅葉にはめもうつるましくかしこまりて詠

入候はかりにて候　聖護院宮道晃

一枝の菊にけたれて色もなし山の木の葉は千種なからに

鹿苑院童長老へつかはしたまふけるこのころの時雨に盛

のもみちいかゝと

とはゝやな衣笠山の秋の色をきてみよとこそ鹿も鳴らめ

たけかりの興ある日神にこき入計も木の葉はまたそめお
へれは
霜の後又もきてみむ名にしおはゝさこそ八鹽の岡のもみち葉
けふの御幸は茸かりの爲なりとや木々の紅葉は八鹽の岡
のやしほならねも心有なほ也　　導　晃　親　王
心して今一たひの御幸まつ木々の紅葉や染殘すらむ
大猷院殿御他界の悼五首　大院の御所へまいらせらる
あかなくにまたき卯月の廿日にも雲かくれにしかけなしと思ふ
時鳥やとにかよふもかひなくて哀なき人のことつてもなし
いとゝしく世はかき暮ぬ五月やみ降や泪の雨にまさりて
たのもしな猶後の世はめの前に見ることはりな人におもへは
賀之御歌
貝數のかけいや高き若竹の世々の緣は色もかはらし
修學院へ御幸の時昔御覽しられたる野原の人里となりて
侍りけれは
むかし見し野原は里と成にけり數そふ民の程はしられと
富士山　今上御製　寛文二年春の頃仙洞御屏風の歌
いさきよく繪かく計りにみれは見し俤きえぬ富士のしら雪
末の松山といふ謠山の名の御歌
逢事は我松山のあたにのみ幾年涙の越んとすらむ
延寶二年七十九の御寢覺に
おもひやれいるかことくも梓弓八十ちかつく老のね覺を
御目覺に
思ふそよ我もむかしは九重のしのはれぬへき道もこれまて

八十四の御年
それなたに人にみえんもつゝましき八十の後の數しまのうた
題しらす
いとふとてみな人ことに身なすては山や中々うき世ならまし
癸巳年燒亡　寛文十三年五月九日禁裏院中殘りなく町屋に至るまておひたゝしく燒失し侍る比
ありとある事はさなから内も外もよの常ならぬ世の常なこそ
龍の繪の讃に
手にもてる扇の風はふかすとも繪にかくたつよ雨ふらすらん
濱邊の月に鶴ある繪の讃禪閤所望ありしに
こと浦に心もとめす來る鶴やおなしところの月に鳴らん
御茸かりの後將軍家へけんさんに可入候御製を申請度よし
板倉周防守所望申御清書色紙にあそはしつかはさる
分みれは草木もさらにことやめて野山か末の道もさはらて
御山庄に御幸ありてはたえたといふ言葉たち入給ひて
ゆかてはたえたへし春の山里に見し面影の月はかすます
柏の葉の形したる硯を將軍家光公につかはさるとて
色にこそあらはれすとも玉柏かふるにあかぬこゝろはみよ
行幸の御なくり物さうの琴のことちつゝみにかきつけさ
せ給ふ
しるしなく世のふることのおのつから絶たるをつく跡習はなむ
女御入内の御時將軍家より使藤堂和泉守高虎に橘の折枝
に付て下さるゝ
名にしおはゝ花立花はそれなからむかしはかりの匂ひやはある
永井信濃守領に來れるさたといふ所の天神の社参詣して

とし久しく成ぬるを修造のいとなみ功を終りてかの社に
こめ奉り度念願とて御製申請し時
家の風代々につたへて神かきや絶たるをつく梅も匂はす
東照権現十三回御忌につかはさるゝ心経の包紙に
郭公鳴はむかしのとはかりやけふの御法を空にとふらし
あつさ弓八しまの涙をおさめをきていまはたおなし世を守らし
後光明院崩御の時
なり／＼を思ひいつれは草も木も見るに泪の種ならぬかは
八月中旬の比中院大納言通村武家勘當の事ありて武州に
ある比つかはさる
思ふより月日へにけり一日たにみぬはおほくの秋にやはあらぬ
秋風に袂の露もふる郷を忍ふもちすりみたれてやおもふ
いかに又袂の夕をなかむらんうきは数そふ旅のやとりに
見る人の心の秋にむさし野もおはすて山の月やすむらん
何事もみなよくなりぬとはかりをこの秋風にはやもつけこせ
御返し　　　　　　　　　　　　　中　院　通　村
行方に身をはさそはて夜な／＼の袖の露とふむさし野の月
物の名　かにはさくら
　　　　こさくら
待花はさこそ外にはさくらめとこれのいろこさくらへましやは
物の名　みやまつくみといふ事を
大和路を絶すかよひし折のみやまつくみてん井手の玉水
題不知
あかさりし昔のことを書つゝる硯の水はなみたなりけり
いかなる折にか
おもふ事一つかなへはまた二つ三つ四つ五つ六つかしの身や
題不知　此御製は澤庵和尚を東堂に被勅時東武より申返せ
　　　　故に本院江御濃の時云々
蘆原やしけらはしけれ荻薄とても道ある世にすまはこそ
歳暮
思ひやれいるかことくも梓弓八十にちかき老のくさみを
御返し　　　　　　　　　　　　　圓　照　寺　宮
曳かへしいて見まくほし梓弓八十にちかき君かよはひを
延寶三卯年八十の御賀歌
仝和前韵　　　　　　　　　　　　中　院　通　茂
この春にせめておとろく身ともかな愧おほしてふ命なかさを
新院御製
おとろかて幾千世か経む洞のうちにうき年しらぬ命なかさを
禁裏御製
この春の八十を千代の初にて命なかさそかきりしられぬ
仙人のよはひを君かためしにて八十の春を百かへりみむ
　　　　　　　　　　　　　　　　宰　烏　井　雅　章
八十年に八千代をかけて松の葉の常盤堅盤の春はつきせし
　　　　　　　　　　　　　　　　日　野　弘　資
みな人のあかぬ心に八十年をまかせん洞の春の行すゑ
　　　　　　　　　　　　　　　　風　早　宰　相
洞の松の春に契りて我君は千世ませ千代のうたかひもなし
　　　　　　　　　　　　　　　　白　河　二　位
あかさらん命なかさよ八十年に猶五百とせをかそへあけても
同年霜月八十御賀に上より銀の御杖をまいらせられて

君か手にはふとえ竹の千世の坂こえてうれしき行末もみた

御返し

つくからに千とせの坂も踏分て君か越ゆへき道しるへせむ

寛文十二年十二月女院御所へ庭に高さ三丈はかりに
て富士山のかたちつくらせ松うへさせなとして御幸す

法皇御幸なりてよませ給ひける

花鳥の色香もなにか老か身は雪より外の友ならはこそ

泉涌寺の御影にあそはし付らる御グシハ堯恕親王外ハ深幽書之

時ありて静にうつりそむる花よみよ一はなもさきに殘るかは

身はかへて又も來ぬ世に水くきの跡たにしはしとゝめんもかし

東福門院崩御之時

あまた見たかりし身そと世をしらは思ひ暮せる日こそつらけれ

延寶八庚申年五月八日將軍家綱公御他界之時

世の哀しるかこそ思ふらとゝきすおのか五月の空に鳴音は

後鳥羽院四百年忌御追善に霞

こひつゝも鳴や四かへり百千鳥霞へたてゝ遠きむかしを

東福門院崩御の時彌陀之六字を句の上に置てあそはしけ
る

南に事も夢の外なる世にはなしと思ひしこともかきまきれつゝ

無かひゐてたゝさなからの佛に一ことをたにかはさぬそうき

阿よ暮にありしなからのことわさも目の前さらに見る心地して

彌ぬ世まて思ひのこさすとはかりも此一ことを何にかふへき

陀れに思ひ聞てもみても驚かぬ世をはいつまての空たのみして

佛たゝひはめくりあはむもたのまれす此世を夢の契かなしも

題不知

哀なり鳥部の山の夕煙我もたきゝの身をわすれつゝ

寄船無常

あるはなくなきは浪間に消うせて漕行舟や人の世の中

岩倉山御幸の時題不知

長閑しな風もうこかぬ岩倉の山も花咲春のこゝろは

東照宮三十三回忌をとふらふうたと云ものを廻
りにおきて中にやくし佛の五體をこめてあそはし
ける

十首御製

早春霞

雲けにもくもりなれぬる空なから春の霞の色そまかはぬ

静見花

事しけき世をもわすれてつく〳〵と心をわけぬ花にむかひて

野子規

聞とめてあかぬ野中の時鳥見なくる程そ空に久しき

海邊月

須磨あかしそむらん影も見るめかな我身を浦の浪の上の月

山紅葉

分入は錦にも似す紅葉はのふかきや深き山路なるらん

關路雪

白雲のいつこか家路ふる雪はすゝまぬ駒のあしからのせき

忍待戀

忍れはうれしき物の小夜更て人はねたるそ待にくるしき

稀逢戀

つゐに身の契りなれとやたとへてゝ浮木の龜のあふせ計な

旅宿嵐

たのみこし夢路も絶て草枕故郷遠く吹あらしかな

社頭祝

石清水なかれの末の我末も神し守らは代々に絶せし

十首の御製拜みつかうまつり候

早春霞寒雲棚霞共ニ雖ニ遮翠微一路春相威嚴然たる心詞艶美候歟靜見レ花繁務の世をわすれ對レ花心雖レ募ニ凡慮一候野郭公景氣如レ見候海邊月多年雖レ羨ニ雲上洞中月影一未レ見ニ遠境遼海之佳景一之思を小町かわか身をうらみとりなされ候染ニ心膽一候山紅葉錦より分のほる紅葉景氣眼前に候珍重々々關路雪藍關雪すゝまぬ駒のあしからのつゝき又殊勝候歟忍待戀忍ふ夜の更行憂さ喜ふ心誠に感動に候稀逢戀まれなる中の契を龜のうき木に取合され候たくみに候得共題の心あまりにや候へからん旅宿嵐寒風破ニ旅夢一故郷遠き草の枕心たゝに詞艶美麗拔群の様に存候社頭祝これ又珍重殊勝存候條々はゝかりおほく候得とも仰にまかせ例の無ニ心體一事とも書つけ候よく〳〵御とりなしにてひろう參らせ候　通村上

江府永源寺一系和尚へ硯御寄進の時硯箱の内に宸筆にて被遊被遺候

硯の命は世をもてかそへしるとかや人の世をさしも見しかきにかへまくほしきことに故院つねに御手ふれし物をとおもへは崩御の後は坐右に置て朝夕もてならして廿とせあまり七とせに成ぬ今はとて永源寺の住持にゆへりあたへて彼寺の具となさしむおのつから經陀羅尼の功をつまはなとか結縁にならさらんやとてなむ

海はあれと君か御影の見るめなき硯の水のあはれはかなさ

我後は硯の箱のふた代まて取傳へてし形見とも見よ

山陰の道の側に世捨人あり白雲を結ひて住る事十年計に成ぬかの庵に銘て桐江といふ三公にもかへさる江山を望

ては詩情の助となし一鳥鳴さる雪の朝岑寂を甘ひては禪定を修し已に詩熱し禪熱せり爰に十篇の金玉をつらねて投贈せらる幽賞やます翫味あくことなきあまりに芳韵をけがし拙き詞をつゝりてこれにむくふといふ愧赧甚しき物ならし

浦山しおもひ入けん山よりもふかきこゝろのをくの閑けさ
いかてその住る屋上の松風に我もうき世の夢をさまさむ
思へ此身を誦なから法の道にふみもみさらむ人は人かは
うくひすも所得かほにいとふらん心とやなく人來〳〵と
心して嵐もたゝけとち果てものにまきれぬ蓬生の門
山里の春やへたてぬ雪間そふ柴の笆の草青くして
ふる郷にかへれはかはる色もなし花もみし花山も見しやま
去年よりもことしはしけき雪をもる太山の杉の下折の聲
此國に傳へぬこそは恨なれ誰あらそはむ法のこゝろを
世にふるは扨も思ひに何をかは人にもとめて身をは頼まむ

後陽成院崩御の御時の御歌

九月の末つかたおもひもあへす色にうつろひしは唯夢の内なから覺へきかたなきかなしさに佛を念し侍りけるに諸方實相といふ事をおもひ出てそのはしめに置ていさゝか愁吟のおもひを述侍るならし

しら雲のまかふ計のかたみにてけふりのすゑもみぬそ悲しき
よそへみるたくひもはかな朝顔の花の中にもしほれやすさは
ほしわひぬさらても秋の露けさは泪しくるゝすみのたもとに
うつゝある物とはなしの夢の世にさらは覺へきおもひともかな
しらさりきさらぬ別のならひにもかゝる嘆をきのふけふとは
つかふへきあとたにあらはなくさまむ苔の雫を袖にかけても
さま〳〵にうつりかはるもうき事は常なる物よあはれ世中
うけつけし身のおろかさに何の道もすたれ行へき我世とそ思ふ

八景之御歌

粟津晴嵐
雲はらふ嵐につれて百舟も千船も波のあはつにそよる

勢田夕照
露時雨もる山となく過きつゝ夕日の渡る勢田の長はし

矢橋歸帆
眞帆引て矢橋に歸る舟は今うち出の濱のあとの追風

三井晩鐘
思ふその曉ちかきはしめそと先きく三井の入相の鐘

唐崎夜雨
よるの雨に音をゆつりて春風を余所になたてそから崎の松

比良暮雪
雪はるゝ比良の高根の夕暮に花のさかりを過る春風

石山秋月
石山やにほの海てる月影はあかしも須磨も外ならぬかな

堅田落鴈
峰あまた越へてこし路にまつ近き堅田になひき落るかり金

慶安元年九月十三夜十三首和歌

九月十三夜
名にしおふこよひ一夜にとはかりもみる長月の影をしそおもふ

月前星

しらすたれ星をかさしに月をおひて爰もはこや（都く）の山をとふらん

月前時雨

しはし猶くもると見しそ光なる時雨の雲にもるゝ月影

月前萩

かゝるよの月に夢みる人はうしいはぬはかりの萩の音かな

月前鹿

つまこひをなくさめかねておは捨の山ならぬ月に鹿や鳴らん

花洛月

春によせし心の花の都人うつろふ秋の月やみるらし

古寺月

古寺の菊もゝみちも折ちらしくむおかつきの影そ身にしむ

露月忍戀

うちとけて見えむはいかゝくまもなき月に心のおくもしるらん

寄月別戀

人もかくなくまらしかはかへるさの月は身にそふ今朝の別を

寄月述懐

世をなけゝ泪かちなる袂にはくもるはかりの月もかなしき

寄月旅泊

こき出はあすの波路もことゝへよ今宵の月はみつの泊りを

寄月祝言

みちぬへき月に思ふを行末をまつこそつきぬたのしみにして

御のおもむき☐候ぬ此題人の見参に入候まゝあそはし候よしにて拜見をゆるされ候かしこまり入候さて〳〵とりの金玉共中々言の葉も及はぬ御事とも有かたく存候今夜に季秋の名殘一入おしむへき事にて候就中こよひは清光にて候へき空の體に見え申候星をかさし故事にて候やらん不覺悟候へ共詞つゝくまことに及かたき體とも申へく候やとそんし候時雨の雲をもるゝ月一しほの光輝をそへ候へき御事にて候いはぬはかりの荻ことはり外に其心あらはれ餘情かきりなきとも申ぬへく候かの妻こひをなくさめかねておは捨のならぬ山に鳴鹿の思ひよりかたき御事にてや候へからん春によせし心の花物語の詞の面影候にや菊も紅葉も折ちらし是また雲林の體おもひ出られ候月は心の奥もしるらん心詞又ありかたく拜見候月のひかりまて面かはりする心のあきまことにさる事にて候へきと存候おくらましかはわりなき別れの編無申計か泪かちなるたもとにはくもるはかりの月も悲しき心はさる物にて御ことはのつゝきまことになつみなく心にまかせていひくたされ候とはかやうの御事にやとすいりやう候あすの浪路とことゝへよとてこよこの月みつのとまり妖艶の體にて候やらんみちぬ月に行末つきぬたのしみかへすかへすことはのたねもつきせぬ御事は空をあふくはかりにて候かんたんの心にひかれて禿言ことの外しけくなり候そのまゝにてはなを〳〵憚おほくやと存候へとも拜見のあいた御使まちまいらせ候ことの外程をへ候やらん御わたくしまて見参に入候くるしからすと候そと御ひろうは則やらせおはしまし候へかしく　中院通村

太上法皇御製賜黄檗山

舍利偈宸翰

北天曾自奉南山、　古佛眞身傳世門、
十萬里程靈骨携、　三千年後異光斑、
宋皇述讃感生相、　源晨將心欽定顏、
晨夕拳々服膺久、　檗峰永仰五雲閑、

正三位平忠康奉

太上法皇詔賜佛舍利於黄檗山萬福禪寺

伏以靈覺舍利輝古騰今常住身隨緣赴感是
宗社皇神讓詑
歷朝聖王傾心原夫
佛牙舍利北天王昔献宣師今
在天龍寺傳來之由見于普明國師之記
上皇未欽佛化有旨迎請入內供養貯
水晶之匣旦夕瞻禮初貯匣時如
粟米粒素之歳月大齋薮子生分化
結似貫珠非
崇信深密焉能如斯矣頃年匣中生白石之屑
掃之又生如是影向自然穿穴內外洞明也
上怪示臣等庸昧不知何等祥瑞竊謂佛眞法
身未曾寂滅見神明靈氣之所依而通也
上益加敬重乃
命工造金色寶塔而焉兹隱元和尚入也
寰內洛南靈區門創黄檗展龍象
筵暢無道實當世法行之場也
上美其興復之盛特賜寶塔兼宸筆
御讃臣等所蘇聖壽無疆皇圖萬福
人天瞻禮共成佛自矣

寛文六年丙午六月十九日

尼梓休寺　同　芳春門院
尼寶鏡院宮　同　同
品宮　同　新黄双門院
尼興正院　同　芳春門院
大聖寺　同　壬生院
靈鑑寺　同　同
當曇花院宮
當大聖寺宮
當寶篋院宮

後西院━┓

	御母		
八條宮	御母	女御子高松宮女	
有栖川	同	新大納言局	幸仁
實相院	同	同	義延
輪王寺宮	同	同	天眞
毘沙門堂宮	同	六條	公辨
聖護院宮	同	同	道祐
八條宮	同	同	尙仁
圓滿院宮	同	高辻息女	
蔓珠院宮	同	六條	

後水尾院━┓

	御母	
本院	御母	東福門院
後光明院	同	壬生院京極殿園殿妹
後西院	同	芳春門院櫛殿四條殿妹
今上	同	新黄双門院　園殿息女
輪王寺	同	壬生院守澄尊敬臣
仁和寺	同	師局　水無瀨殿息女
大覺寺	同	芳春門院
八條宮	同	同
妙法院	同	新黄双門院堯恕御母新中納言殿臣
一條院	同	眞敬
聖護院	同	芳春門院　道寛
智恩院	同	權中納言殿四條殿息
靑蓮院	同	新黄双門院　尊證
梶井宮	同	權中納言殿　脩龍
女二宮	同	近衛殿
女三宮	同	東福門院
女五宮	同	同　二條殿
尼圓照寺	同	四局藪凡第一宮四辻殿腹

女一宮　同　女御
寶鏡寺　同　新大納言　宗榮
桃宮　同　同
曇華院宮　同　六條
賢宮　同　新大納言局
栢宮　同　同
瀧宮　同　六條　寶鏡寺 持壽院
定宮　同　同　入江殿
壽宮　同　同　光照院

後光明院
女一宮　御母　小一條殿山科殿

今上
東宮　御母　松木大納言女大納言典侍
一宮　同　源典侍　小倉女勧修寺門跡
二宮　仁和寺　私若殿
六宮　妙法院　五條殿腹
宮　松木
女一宮　近衛殿　小川坊城殿腹

女二宮　女御
女宮　松木
女宮　松木

後十輪院内大臣詠草　添削者内大臣實條公

春部

元日

けふにあけて老のこゝろも立かへりまた花鳥も春に喚ぬる

元日陰　柿本影前詠吉志和歌

ふりまさる身もあら玉の年越てまた花鳥の春にあひぬる

試筆　元和五年

としのうちにかすみ初つゝけふよりや我ところえて春の立らん

歳暮立春　寛永元年十二月小廿九日

けふなまた去年とやいはん一夜明て更に立そふ春の霞に

元日雨降ければ

一夜あけて四方の草木のおもはるにうるふ時しる雨の長閑さ

試筆

うらゝ（[illegible]）なる心なた枝にことのはの花もさき出ん春は来にけり

初春

男山のとけき色なまつみせて日影も春にたつ霞かな

慶安元十二月廿二日水無瀬御法樂

水無瀬山いく世の春の河の名もありとやこゝに霞こむらん

世におほふ袂ゆたかに棹姫の霞のころも春や立らん

初春次

なかれさへのとかにそすむ石清水こほりとけゆく春の朝風

初春祝道　禁裏御會慶安四正十九日

君に今遠き所もくる春の道にいてたつ時やしるらん

立春

一夜明てあらしもさかす朝霞こゝのかさねの春や立らん

早春

松に吹音もかすみて男山けふより春の風そのとけき

さほ姫の世におほふ袖のせはにかゝまた春あさき空の霞に

早春風

吹そむる春のかせにや石清水下つ岩ねも氷とくらん

朝な／＼立そふ空の霞よりあらし（かせさへ）も春の色に吹なり

さほ姫のかすみの衣うすからしまたうらなれぬ春のあらしに

早春山

男山みとり立そふ松かえに今より春の色そさかゆく

八幡山さか行春の色とてや尾上の春もえきみそむらん

はる来てはほとなき峯にのこし雪も霞むか嶺え山の端もなし

早春河

吉野川いさは霞の下くゝる氷より春の色にみえけり

早春鶯

春を浅みかせさむくとも今更にふるすおもふな宿の鶯

にほと共に深谷な出る鶯の宿になにさむ千代の初こゑ

春風解氷　禁裏御會寛保四正十九　長雄丸（童名通純）代何明之

行水も氷にたえし跡とめてふるき道しる春風そ吹く

春風春水一時来　仙洞御會始承應二年

池水に千代の浪をせき入て松にや風の春な告らん

江上春興多
伊駒山になのはやこし難波江の春をへたてぬ浪そかすめる
　雪消春水來
山河やこほる日影を水上の幾重の雪かとくるにとくらん
　雪消山色靜　同寛永十八
きのふみし雪の跡木みとりにて春あらはるゝ山のし閑き
　風光日々新　同寛永十七正十八日
空の海や春の光のいやましにみちくるしほは立かすみかな
　禁苑春來早　禁裏御會始寛永十八正月
九重の梅も柳もこの内の春のいてゆの心なやしる
　春到管絃中　同寛永廿一正廿二
物の音に柳の糸をひきそへて風のしらへもいふき春哉
　毎家有春
わか家のはるの光にあらそふや人なへたてぬ春かすくみな
　毎山有春
春の色の外山にいはしゝらかしの枝にもみえて雪を破らぬ
　霞　寛永十七七廿四御當座
たゝぬ日の一日たになし和田の原はるは浪の奥津しら波
　霞知春
朝日かけ出る高根に匂ひ初てたつ色淺き春かすみかな
よなこめておなし道をやくる春に立もをくれぬ朝霞哉
立かへり春もしられて長閑さは海にまふ浦なたつ霞哉
　山霞　内裏御月次寛永五二廿一
朝附日うつろひかけも紅のかすみ色こき春の山の端

　おなしこゝろを
いとおさもわきて都の春の色な大内山やまつかすむらん
朝な〳〵な立そひて春の色の霞に淺き山のはもなし
　嶺霞　後陽成院御時一日千首に
色とらぬたゝ一筆のすみかきな都のたちにかすむみねかな
咲ぬへき比とはなきも春といへは峯のかすみを花かとそみる
春ふかきかすみやさこそ遠からん花にうれしき四方の山のは
　嶺樹霞
たちそむる峯のかすみの緑より木のめも春の色にみゆらん
松か枝のみとりは雪のうちよりも峯の霞の春の一しほ
　霞添山氣色　仙洞御會始
わきて此名にあふ洞のかすむより山も時しる春の長閑さ
　霞添山色
時は今またき木のめも春の色に霞のそむる四方の山のは
いとおなる空の霞の色よりや山の木のめも春をしるらん
　霞添春色　公宴御會　慶安五年
筑波ねのこのもかのものかすむよりあまねき春の色はみえけり
なへて世の霞も人の心とやなひくを春の色にみすらん
　霞隔村
ほと近きこなたの里か朝霞へたてゝみゆる遠の一村
　海邊霞　元和四三九月次當座
みくまのゝ浦のはまゆふそれならて春のかすみの幾重隔らん
見る汐の汀の松もはるかなり春は霞の沖をふかめて
　江山霞

難波江や春はみちくる汐よりもなをいやましに立霞かな
なには江や（の）隙なし小塩春は又あしへの霞いく重分らん
萌出てかすむ緑の玉津しま入江に寒きあしのはもなし

若菜

かきりなき年をそつまん春毎に老ぬ名におふ野への若なは
わかなてふその七草は七十なをな十かへりの春につみてん

若菜知時　禁裏御會始寛永廿一正十九

君か代もことしそ千代の初わかな老せぬ春をつむ時やしる

鶯

はるかせのうち出るなみのはつ花にほのさそはれし谷の鶯
降雪の匂はぬはなも匂ふかとこゑに春ある枝のうくひす　寛永五二廿四
霜とくるはるの日影に鶯の羽かせもかろき枝の朝露
あさ露にぬれて木つたふ鶯のはかせもかろき春の曙
吹かせはなをさゆれとも鶯のなく音春なる園のあけほの
くれ竹のよふかき枝にやとりつるねくらしらるゝ春の鶯
やとりこしねくらしられてくれ竹のよふかく

南枝暖待鶯

鶯も來なけ巣つくる鳥もあるかたへは春の長閑成日に

古巣鶯

心さしはなにや（深くも）深きうくひすの（や添）消あへぬ雪のふるす成らん
鶯もあくかれ出は谷陰にわれやすもりの音をはなかまし　元和四三九月次
寒かへる谷のふるすにならひてや都におそき鶯のこゑ
はる來ても雪のふるすにとちられてまた谷深き鶯の聲

鶯聞萬春　禁裏御會始承應二年

萬代の春の初音を松の上になくうくひすや君に告らん

鶯聲和琴

琴の音のひゝきそかよふこのうちに夜なく鶴も春の鶯

雪中鶯　仙洞御會

いとはやも花にきかはつ鶯の雪より出る聲の匂ひを

夕鶯

くれ竹のまとのうくひす後もなを夕日かくれの枝しめて鳴く

竹鶯

呉竹の去年のやとりの雪折にいまた旅なる鶯や鳴く

山家鶯

うくひすの都の春はおもふともこの山里をあらさすもかな

谷鶯

谷陰になくはかひなし花ならぬ岩木を春の鶯の聲

名所鶯　水無瀬法樂正保四二廿二

みよし野やなのか巣出る鶯も古郷さむき雪になくなり

梅邊聞鶯　御會始正保二正廿八

なには津のはるを雲井の梅か枝に鳴うくひすや君に告らん

餘寒月

行月もはるを（なを添）空にたとるらん猶かせさゆる雲の通路
すむ（月添）影のかすむや流石春の月（空）雪氣のかせは袖にさえても

殘雪

うつもれし笹の竹の枝なからこほりてさむき去年の雪哉

松殘雪

とけ初て下よりおつる雫にもうへはつれなき松の白雪

春月

深き夜のあはれは猶も秋なゝきて時こそありけれかすむ月影（よしかすむとも添）

ことはりい春にも過る夜はの月かすむあまりて雨に成らん（なよ添）

ことはりの春のものとはかすむとも雲なかくしそ夜半の月影

はらへとも月におよはて飛鳥風只徒に影そかすめる

いたつらに吹とこそ見れ飛鳥風かすめる月の空におよはて

さやかなる影はありとゝ春はたゝ霞にゝほふ月をこそみめ

しゐて猶春たに老を忘れはやたか見る月もかすむ習に

春月　後鳥羽院四百年御遠忌に

思ひやる浪路かなしき隠岐の海のむかしも遠くかすむ月影

曉春月

明ぬるかいとゝ光もかすむなり夜をまた中空の月とみしまに（また添）

ありとしも影をやはみん横雲の絶間にかすむ春のよの月（やは添）（たのまん同）

春雨

庭の面は降ともみえぬ春雨のかすみにおつる軒の玉水

おのつから軒の雫はおちあひて空にはいとゝかすむ雨哉（玉かのみ音のみ聞に添）

軒はもる雫もあひぬゆふくれの深きかすみや夜半の春雨

かすみつゝ音そふ軒の玉水に今降そむる春雨のそら

春草

さえかへる野は初草のうらわかみ更にや霜にむすほゝるらん

春草短

萌そむる草はみなから紫のゆかりとやみん武藏野の原（みとりなる）

むらさきのゆかりもみえす萌そむる草はみなから春の緑に

春色浮水

うつろふもおなし緑の空の色を庭にふかむる春の池水

解わたる池の水のなみのあやに色もめつらし鶯の毛衣

見梅

開梅のまたね色香を見るほとは花にうつらん心ともなき（おもふには添）（わくへき同）（同）

あかす見る梅の色かにおもふには

梅花告春　寛永廿年

草の葉の一そかしらする種もまれとゝ春たに梅さきて匂ふらん

聲梅

はるの夜のみしかき軒端あけ初て梅か香しろき園の朝風

思ひ出るむかしやいつれ橘のはなにかほりしいきのむめかえ

窓梅

咲そはん若木の梅のおひ先もはるにこもれる窓のうち哉

はなの色は雪にみなれし窓のうちに匂ひあやしき梅の下風

若木梅

幾はるの色香とかしる咲梅のわか木にこもる花のおひさき

逐年梅盛　仙洞御會始慶安三正十九

千代の春こゝのかさねに咲そふやあらしもきかぬ庭の梅かえ

殘雪半藏梅　同

物こそと秋見し梅やおなし枝をわきて殘れる雪に咲らん

里梅

はなは猶さかぬ垣ねも吹かせに梅か香うとき里やなからん

里つゝきいく手の風にさそわれて去さたまらぬ梅か香そする

行路梅

吹おくる遠近人の追かせにとはてもしろき梅か香そする

折そめは枝もあらしと見る梅に先たつ人の心をそしる
ゆく末の道やまとはむ咲梅の匂ひをゝくるかせのしるへに

梅風
春かせのさそふまに／＼梅か香もよるの軒はの花としもなき

梅薫風
時わかぬ松に吹さへ咲ころはたゝ梅か香の春風にして

梅薫春風
木の本をたつねてもみん咲梅の宿もさたかに匂ふ春風

梅香遠薫
幾里をへたてゝもなをみつゝこしおなし軒端の梅か香そする（宿はさたかに匂ふ梅か香 添）
木の本は隔てもなを行やらぬ道かとたとる梅か香そする
過來ぬる道におもへは咲梅のもとの木末はにほはさりけり（へたてこし 添）（立枝の花は匂ひやはせし 添）

毎年愛梅
咲出る色もにほひも春毎に似たるもののなき庭の梅かえ（はな 添）

毎年翫梅
はる毎に花のかきりはみれとあかぬ色をそへつゝ匂ふ梅かも
心にも幾はるそめつ梅のはなことしは去年にまさる色かな
雲の上やなれこし春の幾年にあかぬ色香を匂ふ梅かえ
はな／＼を色香もそひぬなれてこし身こそ古木の春の梅かえ

柳糸緑新
萬代をまゆにこめてやくり出すとしの緒なかき青柳の糸

梅柳渡江春　仙洞御會始慶安五正廿一
和田津海のかさしのはなも梅柳はるの入江におりやかへまし

柳緑臨池　禁裏御會始慶安三正十九
池水に吹ものとけし青柳のまゆにこもれる千世の春かせ

柳似煙　寛永七二廿五竹門主
もえそむる柳一本のかせ見えてなひくけふりの末もつゝかぬ（み 添）
山本の里の朝けのそれならてなひくけふりや春の青柳（青柳の陰 添）
もえ出るきしの柳は行水になにの思ひのけふりくらへそ

花
開ぬれはいつれともなき春の花の中に櫻そものにまきれぬ

待花
はなになをわりなきものか咲初る色にさかりを急くこゝろは

漸待花
花はまた枝にこもれる木末にも心の色そまつは染ぬる
山さくら咲へきころの心あてにたかはん花そ兼て侘しき
またきより待としなしれ安き代は花もやはらく色や増ると

初花　御當座
雨もふにふれる軒はの朝戸出に思はぬ花の色をみる哉
あさ霞日影はかりにみし花の光に匂ふ色もめつらし

或人の許より初花そへて「咲初る心を迷る山櫻はなの色
香はさもあらはあれ」と侍し返し
ことのはの色をそへすは山櫻はなの匂ひもかひやなからん

庭花初開
うへしよりまたれし花の咲初て宿も今年そ春を知ぬる

尋花
暮なはとたのむにはあらぬ山路にも花ゆへ幾日旅ねしつらん

所々尋花

時のましつ心なし分入てまた見ぬ方のはなも咲やと
なそくくく咲つかん花に又こそと心なやりてけふも分きや
咲そむる花やいつこと白雲のかゝらぬ山も幾重越きぬ

嶺上望花

岩ねふむ道趣わひてにほひさへまかはぬ花も峯の白雲

霞隔花

山高み木陰になれぬほとなたに思ひし花な霞へたてゝ
やまさくら霞へたてゝ花の香に見ぬおもかけなさそふ春風

靜見花

いかならん身にか千年の一度も花な此世のあくものとせむ
しつかなる折こそ花はそふ色ないかならん世にあくまてはみん
踏るさな忘れはてけり長閑さの世にゝぬ花の色に向ひて
はる毎にかはらぬ花も長閑にて見る時にこそ色かそひけれ
いつはあれとけふこそはるの長閑成ひかりも花の色にそひけれ
朝露もこほさて匂ふ花の上に心なくへき春かせもなし
さそふへきかせなき花に心さへ外にちらさてくるゝ空かな

獨見花　竹門主

心こそまつ散そむれ咲花も獨かためはおしき色かな

見花戀友

いつの春そのおりふしの俤なはなに變ゆる人そ多かる
けふまてもとはれぬはつらき人よりもなき俤そ花に多かる
花に今とはぬ恨はわすられてともに見しよの春そ戀しき

花滿山

外よりは去年のまゝなる雪と見て踏らん山の花盛かな

杣花

咲にけり宮木引てふ杣人のはなに心のななとまるまて

瀧花　一日千首

雲井よりおちくる瀧と見ゆるもや高根の花の盛なるらん

翫花　法樂

はる毎にあかぬ心のそふも變しなれはまさらぬ花の色香に
是もまたなるゝはいとふことはりな我またしらて花に悔しき
なかめあかぬ心な花の常盤にてなるゝ日數そはるにすくなき
馴て後散はうらめしことはりな又咲花に物忘れして

折花

山守のゆるす一枝な散かゝる花に折たるこゝろとやみん

花未徧　元和五正廿五竹門主

はるな經て花にそおもふ秋の夜の千代な一よと云し心も
あかすしてちれはとおもふ心もやくる春毎の花にそふらん
今年もやあかて暮さん咲花のとまらぬ春な物忘れして

花留人

くれにけりしはしとてこそと計な花にかたらふ春のもろ人

花下忘歸　竹門主御法樂

木の本に今幾日あらはかへるへき我古鄕な花におもはむ

故鄕花

咲ころの花にいとはんうき世かは奈良の都はよゝにふりても
更に今すみけん人のおとつれも花に待へき宿そふりぬる
來てとへはふりにし跡も栗栖野の花は忘れぬ淺茅生の宿

古鄕夕花

里はあれてふりにし人の哀さへ夕への花の色にそひぬる

寄雪花

ちらぬたに露の枝は花ならて雪を色なる山さくらかな

花の香の雪になる日にとふ人は數のうらみをいかゝはるけん

花風

心さへうつれはかはる花にまち花にうらむるはるの山かせ

風はまつねたきものからさすかなる花の心そいふかたもなし

今は又空にもかせの色みえてうつろふものと花さそふらん

依花待人　竹門主御法樂

幾年かとはれぬ宿を春毎のはなに忘れて人を待らん

花浮水

はなさそふ水せきとめて枝なからうつろとみてや散を忘れん

花隨風

うしやなをさそひもはてす吹風に身をまかせたる花の心は

落花

さそはるゝ心そつらき櫻はな散すは風のとかになしてゝ

おもふかひなき世なりけり櫻花あたにしさそふ風の契に

花さそふおのかつらさを心かへするもの（人ありとも）にもか風にしらせん

うらみすやさそふと見るも半天に花をなくらす風のつらさは

夕落花　寛永六三廿四内御月次

散と見てあるへき物をしたふまにうたてかへさの道そ暮ぬる

ゆふ月夜はや影うつれ散と見て立かへるへき花の陰かは

ちるまゝに枝には花の色消てゆふくれ深きゆきの木の本（心にて可有御座歟）

風前落花

咲はなをさそふつらさに心さへ空にみたるゝ春の風かな

つゐに散花にはありともめのまへにさそふつらさは風を恨ん

花漸稀

外いてる後とか誰にな（さため添）つくしか深山櫻のなを匂ふらん

[illegible]

猶人もこゝにてむすふ咲花の錦たちいつえ水のみなみ

歸雁

ゆくかりもさすか都の別れとやおし明かたの雪に鳴らん

松かせのふかんと見てもくすの葉の恨は春にかへる鴈金

深夜歸鴈　寛永三三月廿四日

人ならは夜をもとをさぬ長〳〵の名殘ににたる春の鴈金

うき物とわかれはしるや有明の空につれなく歸る鴈金

月前歸鴈

古郷のほとは雲井の春のかり空にや月の秋契るらし

秋を空の月にや契る別行ほとは雲井のはるゝ鴈かね

めくりあはん秋をや月に契らん春の雲井にかへるかり金

歸鴈幽

はるかなる雲路のこゑに俤もかすみて殘るはるの（かりの）かり哉（行序）

ゆくかりの翅は消て山のはの霞のおちにのこる聲かな

湖邊歸鴈

漣やきよき渚にかすむ夜の月をのこしてかへるかり金

こん秋を月に忘るゝにほの海や今はとかりの思ひ立とも

にほの海や漕出る船のかちの音にまかひてかすむ春の（かりの一行）かり金

春駒

正保三二廿二
晉いさむ駒やしるらん花山のむかしのはるにかへる道をも

はなちかふ春のゝ草の緑さへあるゝとみえて駒そいはゆる

遲日

今朝のほとひるまの空をきのふかとたとるも老の春の日永さ

遊絲

うちはへてなにみたるらん春風の吹ともしらぬ空のいとゆふ

杜若　元和四二廿五內裏御法樂

ましるともみさりし池の杜若はなに咲てそあやめわきける

行春のへたてともなれかきつはた花のふちとたに立やとまると

藤

波こゆるならひを春のちきりにて藤咲かゝるすゑの松山

さきかゝる花ともみえすふく風のこゑうちそふる松の藤浪

松藤

緑にかよふものかとそ見るむらさきの色に匂へる松のふちかえ

まつにはふ汀のふちのかけみえてまことの波もこすかとそみる

江上藤

うちよするまことの浪も白妙のふちえの松の花かとそみる

幾春をかけてか契る住の江や神代久しき松の藤かえ

春欲暮

はな鳥の後の日數はのこりてもかひなきものゝおしき春かな

暮春

くれにけりうつる日かすのほとなきをおもへは春もけふの一時

あり明の月もほのかにかすむなりのこりすくなき春の日數に

有明の月かけほそき山のはに霞もうすし春のくれかた

ゆく方をしるともいかて尋ましけふにとちむるはるの湊に

暮春月

又も來んはるはありとも山櫻ちりかひくもれあり明の月

暮春雲

おもかけの花とたにみし春もはつ殘すくなき山のはの雲

暮て行はるのわかれの衣々を雲のころもや空に見すらん

暮春雨　慶安三十廿三御當座

春もけふかへる道にし降雨はたか袖ならふなみた成らん

暮春鶯　寛永六三廿四內御月次

行春とともにかへらは鶯のものうかるねは我そなかまし

くれて行春はおもはてうくひすのかへるをまつ谷の里人

暮春

殘るとてたのむものかは手を折てかそふともなき春の日影は

ゆくゑなき名殘を空にたのむれは雲ものこらぬ春の山のは

暮て行空をかきりになかむれは雲さへかへる春の山のは

惜三月盡　一日千首

とゝめえぬ春としりてもけふの日の暮るないかて惜まさるへき

柳臨池水　元和十正十九禁裏御會始

池の鷺も波のあやなる水の面に色をましたる岸の青柳

夏部

首夏風

恨こしはなは跡なき夏山の若葉（みどり添）すゝしき木々の下風

あかすみしさいふい花の俤に露もうらゝる風そ涼しき

更衣

花の色にうつろひはてし行ゑとて袖さへかほる夏衣哉

新樹

茂りそふみとりに木々を（に）染わけて色は千種も若葉にそみる

卯花

わきかぬる月と雪とに咲花の色にけたれぬうつき垣かな

卯花隠路　元和五閏廿五月次

分かへるみちたと／＼し卯花にまち出る月のひかりなからに

咲うつむ色にそしろき卯花の垣ねつゝきの蹊（の際のかよひ路同）かよひ路

おく（あと絶て添）ふかく誰か住らんとふことをあなうの花にみちはまかせて

薄暮卯花

分出は道やたとらん卯花のくれぬひかりをたのむかきねも

賀茂祭

かはらぬやその神山のむかしよりけふにあふひのかさし成らん

山朝祭

神山やかさしの玉を代々かけて今もあふひに見する朝露

郭公

さたかなるこゑはありとも時鳥うつゝ（閨のうつゝの添）にきかん一こゑもかな

夕されは山本かすむ面影を（ことのは添）さそひてもなくほとゝきすかな

五月まつ心やおなし時鳥はな立花のかれぬちきりに

庭の面のはなたち花に郭公今もやしのふよゝのふる禁

まちし夜の雨ないつくに過してか朝の雲になく郭公

ほとゝきすたかなをさりの待暮に思ひなしてか我につれなき

やよいかに我をやさそふ時鳥この世の夢のあけかたのこゑ

待郭公　聖廟法楽右三首雪玉抄に實隆の歌なり

時鳥なをつれなき神垣のまつは一夜の名なたゝとも

まつほとはとひもあはせし時鳥きゝつといはゝ初音ならねた

待人につれなき名のみ世にふりてなを出かての山郭公

郭公いつより人のまちそめて難面ものになをならひけん

聞郭公

子規なく一こゑをまちつけて今はねぬへきめこそ覺ぬれ

初時鳥　横手茅世歸國の時會せしに

古郷にかへる道たの郭公人にすゝまむ初音なくらん

卯月郭公　元和三年二月

またさかぬにな立花の時鳥なれもやなきて五月待らん

鶯の歸るふるすをあくかれて出やまたき山ほとゝきす

曉時鳥

有明の月のゆくゑの一聲もなをよにしらぬ時鳥かな

寝覺時鳥

ねぬるよに幾度かにと一聲に夢路くやしき郭公かな

待にいくこゑかはと寝覺しておしと思ふよの聞郭公

ゆめたゆるやみのうつゝに時鳥むすほゝれたる夜半の一こゑ

時鳥過る枕に夢たえて只一こゑそむすほゝれたる

郭公きゝつともなきね覺かなむすほゝれたる夢の枕に
上規たちかへりなけみゝ夢もむすほゝれたる夜半の一聲
絶初る夢のまくらの郭公たゝ一こゑそむすほゝれたる

夕郭公　一日十首

郭公雲まに名のる一こゑにあやなくまよふ夕くれの空

杜時鳥

村雨のやとりもとらは郭公三笠の森に聲はおしまし

郭公幽　元和三十七廿五首當座

したはるゝ心にこえてほのかなる聲にはなきぬ山郭公
時鳥こゝろを雲のいつこまてほのかなるねにさそひ行らん

郭公語少

かたらはん里なあまたと思へはやたゝ一こゑに行時鳥

時鳥稀

今はまた待しにかへる一聲を聞しにも似ぬ郭公かな

題不知

五月まつ心やおなし時鳥はな立花のかれぬ契りは

池菖蒲　一日千首

池水の深き心もひき初るけふのあやめのねにそしらるゝ

盧橘

見すしらぬよゝのむかしに袖ふれぬふるき軒はにかほる橘
橘の香にこそしのへ袖ふれしそれかとまても知ぬ昔を
古郷の忘草生ふ軒はにもむかしをしのふやにほふ立花

橘風　元和八二廿五公宴御法樂

ふりにけりよゝのむかしを夕風やはな立花に今も吹らむ

簷橘　慶安三六廿五日

おかすみゝ春もむかしと梅かえのおなし軒はに匂ふ立花

砌橘

袖ふれしみはしに近き橘のみさへふりぬるむかしをそ思

花橘に

いにしへをはなたち花に見し夢も覺すあらなむもとの身にして

古郷橘

人こそ遠ふり里の軒はにもむかしの身なからにほふ立花
あかしなにあはれ幾世を匂ふらむふり里の軒の橘

對橘問昔

むかしをはとへとしら玉露おちて袖の香しめる軒の橘

護家　元和三年六月廿五日竹門主御法樂

とほらはあふちやかこと紫の色にかよへる宿のあるしを
あふちなやかことにとはむ紫のゆかりにはあらぬ宿の主を

早苗

たか宿そ軒はに絶すあるゝ雲の色かと見れはあふち咲陰

おり立ていそく中にも一むらはとしておくての早苗分らん

採早苗

袖の色もおなし綠をとる田子の手さへ涼しくみゆる若苗
賤のめかとるや早苗のあさ衣ほさて幾日かぬれ渡るらん

五月雨

五月雨は半天とつる雲水に明ぬ幾日の日をなくるらん
もえ出し若葉はかけに成にけり蘆の末こす五月雨の波
天川瀬々にみなきる雲水やあまりておつる五月雨の比

菴五月雨

降ぬまゝ葉そ絶ぬ五月雨にやかて朽ぬる草の庵は

五月雨久

かけ清き川原も見えす五月雨にしつき木の末葉もくす流て

鵜照射

棹鹿のよらぬ幾夜をあかすらむ峯のほくしの待かひもなし

水鶏

行とまる宿をさためぬ水鶏もやいつことさゝぬ門たゝくらん

水鶏もやおとろかすらん老か世を猶出かての門さゝせりとて

夜水鶏

柴の戸の音はあることゝ小夜更てたゝく水鶏におとろきやする

さやかなる月をやたとる天の戸のあくとおしへてたゝく水鶏は

鵜川

うかひ舟とるや手縄の隙なさもよそにしられてしめるかゝりた

山陰のやみとや思ふ夕月夜おほつかなくも出し鵜舟は

雨後鵜川

鵜飼舟雨より後もくもる夜をうれしきよとや篝さすらん

夕立もあくくれる山の麓川また跡とめてさす鵜舟かな

鵜川篝火

う船さす袖吹おくる河風に濡さへさはくかゝり火の影

世をわたるわさを思へは鵜飼舟おのかうき世の篝火の影

夕立　元和四卯月九日月次御會

此里を過行方のすゝしきも空にしらるゝゆふ立の雲

夕立の名殘の露に風立て日影涼しき山のした柴

天津かせ日影を空に吹とちて夕立涼し雲のかよひ路

村夕立

一とをり過ぬと見つる山本に又雲きほふゆふ立の雨

しはしなを笠やとりせん行道にむかひの里のゆふ立の空

瞿麦露

朝またき塵をもしはし撫子のはなにおこたれともの宮つこ

夏草

秋をまつ草もありけりと計に庭そ草葉に茂りはてぬる

咲出ん秋の花をや白露のしたにふくめる野への夏草

おく露は秋の花なる草の葉を夏野にかへす夕風そ吹

道やいつこ雪にはみえし駒の跡もしけるに分ぬ野への夏草

庭の面にはらふもおなし種なれや心にしけるむくらよもきふ

夏月

ほともなく明行月は秋の夜のおなし空行影とたに見す

涼しさもあかすとむかふ程なさの心つくしや短夜の月

色清る真砂の夜の霜もおし涼しき月のあくる光に

きのふけふさやけき月を五月雨の晴まになしてまた曇なよ

夜螢

更る夜のあしやの里のいさり火にかけみたらそひて飛螢かな

螢知夜　一日千首

うは玉の夜こそつゝまれ光ありと見し夕露も草の螢か

くるゝよりをのれもえてやうは玉の闇の螢は夜をわくらん

乱ては涙にも消ぬおもひともしらぬの螢夜やいそくらん

池螢

さゝれ石の中のおもひを池水の涙にうち入てとふ螢かな

河邊螢

音はして行水くらき木かくれに照す螢の影も涼しき

夏風　元和三五月十三

吹風は松に木高き聲もあれとなびく若葉の上にこそ見れ

風そなをふたおもてなる花に吹この手かしはに夏はつれなき

國民もやすき（イ添）思は夏の日も治まれる代の風や涼しき

君か代の手にまかせたる國の風は夏のあふきに増る音かな

立ならす木陰涼しく露おちて秋にしめる夏の朝かせ

はなの色もうつればかはる心より秋にあかぬ夏の朝風

夏來てそしらはとはまし吹も猶秋にあかぬ風のやどりは

夏河

花は散紅葉はまたき立田川夏そにしきの中は絶ける

夏野

しはしまてまちかくきかむ時鳥われもいくのゝ末の一聲

あふひ草名をなつかしみ一夜ねん菫摘しもおなし野原に

夏蟲

秋近き籬の野へのゆふ暮に何ともしらぬむしのこゑ哉

身をてらすよはの光をおもふかなあつめぬ窓は過る螢に

夏鳥

水鷄にやおとろかさるゝ明ぬ夜の月に鳴行かさゝきの聲

夏木

此まゝにしけりも行は庭の面にみ山計の梢をやみん

ときは木は下葉散つゝ茂り行緑そふかき陰はみえけり

（夏の日に添）立よらむ茂る梢の影もよしやとる計の家はなくとも

夏門

涼しさに行過かねつ陰しけき（なひく添）柳はいもか門ならねとも

日の影もよそにへたてゝ（つる添）涼しさに誰かはこゝを杉たてる門

夏衣

ぬきかへしうすき衣の單へたに猶身にそはすあつき比哉

松下泉

おのつから木深き松の下くゝる水には秋の風も涼しき

涼しさもあかぬものかなあつき日にしられぬ谷の松の下水

松風秋近

松にこそまつ（はや添）おとつるれかそふれは空には絶ぬ秋の初風

下くゝる水よりもなをほと近き秋風かよふ庭の松か枝

納涼

陰しけきめくみの露のつくは山庭にも見する木々の涼しさ

暮るまでなを山の井を結ふ手の雫も袖にあかぬ涼しさ

九條家夢想の歌を句の頭にすへて三十一首の歌

すゝめられしに　松下納涼

すゝみにと來つゝならして花ならぬ松にも見ゆる蔭の下道

樹陰納涼

夕日影もえぬ木陰は葉さへうちゝるはかり風の涼しき

夏祓

水鳥のかものかはせも色かへてけふは御祓の麻の白ゆふ

御祓する川瀬の麻の夕風は（も添）神の心もなひくとそみる

夏月涼　元和五六廿二御法樂

待出る袖に光も散はかり月よりおつる風の涼しさ
あつき日は夕への後に隔て來てまた出る月に秋風そ吹

秋部

初秋
おき初るけふより秋のものと見て涙のすれし袖の白露
風告秋
吹からにやかてしほるゝ末はにて草木もみすゝる秋の初風
新秋田　元和八八十五八幡宮法樂廿五首
穗に出る秋たつからに小山田の庵のけふりもにきはひにけり
ほに出る稻はもそよと吹初て鳥羽田の面になひく秋風
早秋　慶安三七月廿四日御當座
色ならはうつるはかりに吹かへて音そ身にしむ秋の初風
白露のまつおき初て草のはの風たにしらぬ秋や來ぬらん
七夕　織女曙イ
明ぬれはくるゝものともあふことをたのめぬ星や夜を惜らん
七夕月　已下七首御懐紙
天漢わたりを照せ玉はしの光まちつけん夜半の月影
七夕河
天の川あすの舟出のいかならむけふこそやすの渡り成共
七夕草
いつしかと待こし秋のはつお花こよひやほしの手枕にせむ
七夕鳥
心してなか鳴とりの夜なゝしめけふ法し合のあすの岩戸に
七夕衣
秋かせも猶身にしまし織女の袖つく夜半の天の羽衣

七夕別

棚機や別路に生ふくすの葉にこむ秋風な又契るらん

七夕祝

天津空けふ逢ほしのわか君に影をならへむあきも幾秋

七夕風　禁裏御會兼題

追風に船出やすらん七夕の月のかつらの棹もとりあへす

吹かせのたより待えて七夕の舟出もやすの渡すゝしも

七夕のけふの船出は吹風のたよりにやすのわたり涼しも

七夕霧

更行は天津ほし合の影もみむ空より晴よ水のあき霧

七夕絲

あふ事はかた絲ならて七夕の絶ぬ契にけふやかさまし

織女にかくるれかひの絲はやも心のすちにあふ夜あらなむ

さゝかにの絲も手向に七夕のくへき宵とや空に立らん

七夕草

萩薄二の星に手向なきていつれか秋と空にとはゝや

七夕絃管　七夕公宴

空にすむしらへも秋にあふ星の心ゆくよの絲竹の聲

星夕涼如水

袖ぬらす星のあふ瀬の音つれもこゝにおちてや風の涼しき

織女惜曉　元和七年七夕公宴

七夕の後のあふよに時のまなかへんとやおもふ曉のそら

つきせぬや神代のうらみ長鳴のとりあへす明る星合の空

七夕後朝　一日千首

七夕の心よいかに天の川遠きわたりにけさは成ぬる

閏月七夕

あふ瀬なき後の文月や七夕のぬれきぬならし天の川波

月前臨二星

こよひあふほしのいもせの中に落る天の川風月そ涼しき

牛女秋來祝

かへる秋のえにしるしけむ七夕の露やまなふとおもふ涙を

牛女年々渡

年毎の秋の一よや七夕の夢のわたりのかさゝきのはし

天川わたりなれてもたとるらん年にまれなる中のあふせは

けふ毎にわたりなれても天河と絶あやうき鵲のはし

なれゆけは浮身をしるや七夕のまとをに渡る鵲のはし

星河欲明天

明行か朝のまをも天の川ほし合の空にかこちよせても

萩

またれても猶つれなかれ秋の風本荒の小萩露なからみん

野へにをくひとつものとは誰かみん花咲のらの萩の上の露

露なから本荒の小萩うちなびきつれなき風の化に嬉しき

萩露

深からぬ露までなみむ置はてゝ本あらの小萩風なこそまて

萩映水

かけもあへすあたになかれん色もなし萩こそ波の花のしからみ

行路萩

人ことの袖にうつらは色もあらし道よきてみむ野への秋萩

あたに散花のゆかりに行道の露分わふる野への萩原

萩

萩のはにきゝもすつへき秋風を身にならはしのうき夕へ哉

籬萩

萩のはい一本ゆへに秋風いあはれ多くもそふ軒にかな

吹過る軒はの松のゆふ風をやかてこた（まちと本）ふる露の下萩

路薄

なきなから露になひきて花薄分ぬに人の跡は見えけり

朝またき分る人なき道みえて行手の薄露も亂れて

はな薄まねく袂にまかすれは道もさりあへす露そ亂る

風前薄

過行に千種なからの秋風とひとり小花か袖いものなる

女郎花

露にふし風になひきて女郎花なのか心とせぬ姿かな

をみなへしあたにや契る白露い結ふ程たに秋風そふく

原苅萱

おく露を己か花にやかるかやの野原い風に散（亂れもおとし本）な亂れそ

蘭

朝またきたれか來て見し蘭露もふみたれて綻にけり

蘭さきぬるときかむらさきの色に匂へる野へのしら露

いかにして綻ひぬらんふちはかまきて見る人もあらぬ野原に

草花露　八十五放生會

袖にそふわきて手折ん色もなしうけてよ露の千種なからに

をきそひておもれはなひく萩か枝に末葉の露そ見る程もなき

移し植しいつくの野への白露か庭の小萩になきかはるらん

月前草花

心あらははなによはかれ月影の露のやとりの野への秋風

秋夕

吹しほるなへて草木の夕露に我袖のこす秋かせもなし

海路秋夕

ゆふくれの浦かなしさも秋風のなみに立そふ船のうち哉

初鴈

秋かせに又わけてきぬ天津鴈宵にとさし雲の通路

越てくる翅は峯のよそなからこゑをみやこの秋の初鴈

今朝そ鳴きのふかすみし俤も忘れぬ峯を越る鴈金

初聞鴈

春霞雲井はるかに思ひこゝ秋かせ吹て鴈の（峯にけり本）なくらん

初鴈連雲　元和三六廿五聖廟御法樂

秋風の尾上の雲のみたれかとみしや空めの初鴈の聲

峯越るつはさはおなし空なから雲にわかるゝ初鴈の聲

暮天鴈

くれかゝる夕の雲の尾上よりかすあまたなる初鴈の聲

月前鴈

鳴かたに心をわけて月影にこゑをくまなる鴈の一聲

くるかりも聲をほにあけて渡るなり月のみ船のおなし雲井に

鹿

私に云後水尾院御集に此歌有之

小山田のかり庵隔つる夕霧に守る人なしと鹿や鳴らん

聞鹿

夜もすから鹿のなくねをさそひきて袖に露けき野への秋風
なみたさへとゝめかたしや入方の月に鳴夜のさほしかのこゑ

暮山鹿

ゆふまくれ露の笆をへたてにて尾上の鹿もこゝに鳴なり
小倉山夕の秋のさひしさに絶すや鹿の音にはなくらん
常盤山つれなき妻をとふ鹿のをのれ色なる夕暮の聲

夜鹿　元和三正八當座

おのか妻いつくにありとゆふ月夜覺束なくも鹿の（本添）鳴らん
あり明のつれなき妻をとふ（さほしか同）とてや長き夜あかす鹿の鳴らん
（つまこふる添）棹鹿の思ひやおなし山鳥の尾上へたてゝもろこゑになく
かなしさの絶ぬ心に夜らすから袖に露けきさほしかのこゑ

野外鹿

春日野のしのふもちすり鳴鹿やつれなき妻に思ひ亂るゝ
かすか野や忍ふのみたれ鳴鹿はつれなき妻をとこやわふらん
春日野やつれなき妻をとひ侘て忍ふのみたれ鹿の鳴らん
秋の野に妻とふ鹿の鳴聲につれなからぬは我なみたかな

夕蟲

ゆふ日影うつろもよはき草かくれもよほす露に蟲やなくらん

草蟲

かれ／＼の草ねのむしのねもころも此比かふる霜夜をそ思ふ

野蟲

おなし野のをはなか袖も松蟲に心おはせて人まねくらん

野外蟲

蟲のねに分こし野への草の原かへる道をは誰にとはまし

蟲聲近枕

鳴むしの思ひや露にかよふらん今宵は草のまくらならへて
なきよるは夜の枕のきり／＼す草葉の露の深さしられて
聞人の思ひはしるやなくむしに枕ならへておきあかす夜に

鈴蟲

籠の中に聞しにも似ぬす（本添）ゝむしのをのかすむ野の夕暮の聲
ふりかたきこゑたにあるを鈴むしは人にやすくもなるゝ心よ

蟋蟀鳴我床

きり／＼す霜の下葉を我床の秋のよさむにかへて鳴なり（しのひてや鳴添）
夜さむをはなれもやわふる閨の内に枕ならへて鳴きり／＼す

秋聲夜盡蛩

羽ねれと猶こゑ絶ぬきり／＼す長き夜あかす秋を恨みて
淺茅生やゆふへもまたぬ蛩こよひもまたやなき（き添）あかさまし

朝霧

八幡山ふもとの里に霧はれて朝氣にきほふけふり立みゆ
さそひゆく山風はやき朝霧にをくれてくたる淀の河舟
朝霧をはらふ南ゝ山風にこ末よりはるゝよとの河水

野霧　一日千首

むさし野や行末遠くたつ霧にをなしほれそふ旅衣かな

川霧

川かせにふかれてのほる霧の跡にむら／＼みえて落る山水

月

吹としもしられぬ（なきかせにも添）草のかせ（露同）みえて下葉につとふ露（夜は同）の月影
出ぬまに外山の雲をはらひつゝ月吹おくる峯の松かせ

月の歌とて

わたつ海のかさしの涙のこす岩に光を花と月も散なり

待月

秋かせにはるへき雲を山のはのそなたにや待夜半の月影

まつほとの尾上にはるゝ雲間より光吹こす月の小夜風

不知夜月　慶安四八十六公宴御當座

雨に見てきのふ恨しひかりまて空にまたるゝいさよひの月

九月十三夜

光ある今夜の月のことのはにくもるうらみを忘れてやみむ

秋風も雲吹つくせ長月やこよひに殘る月のひかりを

野月

月見つゝ一夜は野邊にねもしなんおはなか袖をしき物にて

うかれゆく秋のよとのゝこも枕月にや露のやとりからまし

野月露凉

秋の野の露わけ衣かせふれて月影なから萩か花すり

山月

秋かせに積らぬ雪をはらはせて山の端さゆる夜はの月哉

山の端の松をはなるゝ影みえて秋風高く月そすみ行

山家月

山住の心の塵もはらへとやいさめてすめる柴の戸の月

田家見月

月にのみおきあかしつゝ心とはもらぬ庵もる秋の小山田

河月　元和三八十五

河水の最中の秋の月そすむいけるをはなついをもあらはに

河月似氷

河水に空ゆく月にすみなから中にへたてぬ氷をそみる

江月

秋かせの水のうき霧雲晴て江のなみ遠くすめる月影

江月冷

冬なれや添
冬はいさ眞砂の霜を吹かせになみの水のすみの江の月

秋ふかみ浦かせさえて住の江や見る影さむき波の上の月

湖上月明

所からひかりもやそふさゝ波や月もにほてるからの辛崎

木間月　元和四十廿五月次會當座

影たかき尾上の松を出やらてあらしにさはく秋の夜の月

あらし吹尾上の雲は出なから外山の松そ月のくまなる

松間月

もりかぬる月影見せて雲よりも松にうれしき秋風そ吹

松のみそ殘るくまなき秋の夜の雲なき峯に出る月影

庭上月

庭の面のひかりもそへと秋風や紅葉の木の間月に吹らん

禁中月

衛士のたく夜のけふりのおこたりも月にことはる秋の夜の空

雲の上やすみそめならぬ影にても袖にくもらむ秋のよの月

古寺殘月

鐘の音そひとり明ゆく月は猶とよらの寺の西にのこりて

深更見月

そのまゝにくもるとて
なかめ捨なに雲もなき夜を中空の月はしらしな

とほし火をそむけて向ふ深き夜の哀は春の月ならね共

深山曉月

すむ庵の外山の峯の出かてにいとゝあけゆく有明の月

遠江曉月

此里は湖となみあり明の月のゆくゑにとふ人もなし

月多秋友

おとこ山さかゆく末の秋來てもかはらぬ友と月も忘るな

月宿松

おとこ山尾上の松にやとるらん千代の影すむ秋のよの月

月前松風

いとはしな雲霧はらふ松風は月にしはしの木のまあり共

月前眺望

住の江や松陰とたゝく漕舟のそなたに見るもあかぬ月哉

さそはるゝ心のはてよ月に見る雲の千里も限こそあれ

見るまゝに清見か波の月はれて浦かせ遠きみほの松原

月前鐘

またれこし山のは近き月影の殘ん夜半を聞かれもうし

月をのみおしと思ふよに聞初てしはしめうつる鐘の音哉

月前鶴

くまもなき眞砂の上に白妙の色をかさぬる鶴の毛ころも

猶惜月

夜もすからこれのみ友とすむ月のかたふく月を侘つゝそみる

月やしろかたふく影を獨のみおしと思ふ夜の心つくしは

鴫

有明の月影さむき澤水に數かきわふるしきの羽かき

身の上にかそへもあへぬさひしさや長き夜あかぬ鴫の羽かき

寢覺鴫

さめて猶わすれぬ夢の哀さにかすかきそふる鴫の羽かき

長き夜に今いく度とかそへみむ夢のかすかくしきの羽かき

みし夢そやかて覺ぬる立鴫の羽音もさむき秋の枕に

重陽宴

九月九日

けふ毎の秋にかさねて萬代の霜をかさねん白菊の花

君か代に淵とそならむ千々の秋は九かさねの菊の上の露

放生會

かはらしな生けるをはなつことわさの絶ても神のめくみ計は

絶ぬとも生けるをはなつ此神のもとのめくみは今もかはらし

野草欲枯　元和三二月

花はみなしほりはてつゝ置霜の下葉にうつる野への秋かな

をき初る野原の霜の秋風になひく淺茅か末そしほるゝ

色はみなうつる花野にをく霜のとけてや秋の露もみえまし

野風　慶安三五十九御當座

露みえてはや袖すゝし吹風の西こそ秋のちかき嵯峨野は

閑居秋風

さひしさよ物にまきれぬ松の戸の心もしらぬ秋のゆふ風

人とはぬしつけき宿の秋よりや身にしむものと風は成らん

秋色

露しもの染る木末の秋をさへいそくに似るも色鳥の聲
ほともなく移にけりな色〳〵［きのふみし歟］の花野の露も山の木のはも

秋霜

秋にあへす枯ゆく庭の淺茅生ははや〳〵の霜のをき所かな

秋野

色にみし野への千草の露のまにうつりもゆくか秋の初霜
秋もなをかせしつかなる武藏野はおはなか末も亂れやはする

秋田　戌九月九日

色になる小田の穗むけの秋風になれもかたよる村雀かな

秋山田

賤の男かにきはふ秋のかまとさへ山田の稻の色にしられて

秋水

よもすから誰なかむらん山水にすめる心を月にかはして
おきなかすことのはならてみかは水秋の紅葉そ波にうかへる

秋興

あかなくの色の千入も染なすやもみちのもとの秋のさかつき
入日をはもみちの陰にしたひつゝねもせて月をめつる秋かな

秋夜長

いかになをあかしかねまし此比の夜はたにあるを八月九月

菊

色もかも世にならへみむものそなき花なき比の秋の白菊
さき出る色もめつらし菊の花はや霜枯の草の色に
野へにみし色の千草の花をけふ雲井の菊の上にみすらん

菊映月　以下九首御懷紙

やとりきて月のかつらもにま〳〵哉いかりな花の菊の色に

菊帶露

時過てうつろふ色もむらさきの一もと菊の露に摘みん

菊似霜

開みちてかさなる花の下まてはおかしとみるも霜のしら菊

山路菊

おの〳〵えのくちしやいつこ咲菊の花は千年もみむ山路哉

河邊菊

谷川や岩ねを越るなみ分てなかれぬ末も菊の匂へる

寄菊契

かさぬへき夜の契をわするなよ名にあふ菊のを〳〵の衾に

寄菊恨

うつり行心の秋の菊の枝にかれぬ思ひの色ははかなし

寄菊旅

故里をわかれてにほふ菊ならは花にかりねの□

寄菊祝

鶴かめのよはひを菊につみかへてよそへん千世は君につきせし

菊露　一日千首

植てみる色もたゝになく露の色をそへたる白菊の花

露光宿菊　元和六重陽

秋の露もあかすとやなく色まさる盛はありともけふの白菊
ゆふまくれほしより外の光ありとみしや雲井の菊の上の露
あたにやは露のひかりもゆふつゝの名にあふ菊の花にをきては

禁宮庭菊　御懷紙

千々の秋もそへなれてみむ紫の庭のまかきのしら菊の花

菊花映霜

なきまよふ色ともみえす紅に匂ふかうへの霜のしら菊

うつろふな今はさかりの秋の菊もとの色をは霜にゆつりて（いつより霜に添）

籬菊　寛永十七七廿四

うつろはて幾世も匂へ菊のはな笆は秋の霜にはありとも

笆菊如雪

九月の空に降てふ雪の色を笆の菊そ咲て匂へる

籬菊帶秋風　重陽公宴

うつり来てまかきの露に匂ふなる花の千草の野への秋風

菊契多秋

九重の笆にさくやぬれてほす露より外の千代の白菊

よゝの霜ほしの光をつむ菊やけに久かたの雲の上の秋

菊花久芳　重陽公宴

幾千代の霜をかされん雲の上や星をひかりに匂ふ白菊

にほひさへふりすもあるかな萬代の霜をかさねんしら菊の花

雲の上に千代をかさねて咲菊や花にふりせぬ匂ひ成らん

笆菊露芳　重陽

九重のまかきや山路ぬれてほす露も幾秋匂ふしら菊

月照菊花　重陽公宴御懐紙

月影のほのとみえても色そふや雲井の庭の花の白菊

題しらす

色そへてうつろふからにけふのみと秋を思はぬしら菊の花

題しらす

程もなく暮行空のうすきりに松原遠き秋の海つら

浦秋夕

海原や波にうつろふ影見えて入日なくゝるあきの釣舟

擣衣

秋もはや更ゆく風の夜寒をやをなし心にころもうつらん

擣衣幽

秋風のひゝきそへたるほと計うつ音すなり賤（あさ山添）かさころも

秋かせや響そふらんみし夢を打おとろかす夜々の衣は

淺茅原さむ人おれや風にたくふひゝき叫に衣うつ聲

さめて後ほのかなりしもさたかにて夢路ゆるさすうつ衣哉

秋もはや更ゆく風の襟の中にきけは夜寒の衣うつなり

月前擣衣

里人の夜寒にいそくから衣まきかへす程や月をみるらん

月下擣衣

たかためにうちあかすらん里人のころも（のころも打添）夜寒の影にうらみて

紅葉

いそかるゝ色の千入を思ふにはもみちにあさき秋の露しも

春秋のいつれかいかになかめまし櫻の花よ紅葉よ

染つくす千入の後の色もうしさそふ風まつ木々のもみちは

紅葉一樹

うつろふにはなへての秋を一木まついかなる露のわきて染らん

なへてなくよもの草木の露霜をこの一もとの色に出ぬる

此趣向ことはつゝきあるやうに覺申候如何

置露や心とゝめて一木まつしくれもまたぬ色を染けん

紅葉如錦

あかすな色こき花な見し春のにしきに増る秋の紅葉は

秋不留

限りなくみくりあふへきけふなれはとまらぬ秋な何か惜まん

秋欲暮

長月や有明の月の山おろしに空にも秋の色はすくなき

九月盡

もと結の霜のかたみもおもなれぬ幾年秋のけふの別に

冬部

初冬

いつもきく軒はの松に吹そへてむへ山かせも冬そはけしき

初冬時雨

降にける秋のしくれもけふはけや冬立空にめくり來にけり

冬天象　勝

此ころのほとなき空にくる糸のなかきなそへむ日さへまたれて

冬地儀　持

かけすてし風のしからみ跡みえてもみち岩行山川の水

冬植物　勝

神無月けふかきつむることのはゝ散うせぬ松の代々の種かも

時雨　元和四二廿五内御法樂

幾度かむすひかふらん定なき時雨にましる冬の夜の聲

間度におとろかさるゝ夢路のみいかにさためてさそふ時雨そ

神無月絶すしくれやかゝるらんさためなき世なはなけく袂に

納の上に今やかゝらん神無月いつも時雨のふることのは

松いはのかはらぬ色はつれなくてしくれにぬるゝ夕日影哉

もみちはゝ殘らぬ山の村しくれはれて色こきゆふ日影かな

峯時雨

よそにのみ降とはみえす葛城やしくれてかゝる峯のうき雲

半天に過ぬとみつるうき雲ももとの尾上に時雨來にけり

時雨雲

うちつけにましらぬ雪もみる計山のはさむきゆふ時雨哉

ふるまゝに山風さむし時雨ゆく雲のへかしや雪げ成らん

落葉

染つくす時雨なゝくる木末より風さへぬれて散木の葉哉

やえかせにさはふ木のはの跡に又なのれと落る音そさびしき

橋落葉

埋もれて絶まなきしもあやうきは木の葉の下に朽る板はし

ちりにけり空にみちぬる夜の霜染るもみちの橋とみるまて

残菊

ひとつ色な霜にゆつりて冬枯の色にうつる白菊の花

冬枯の草の中にも秋の色のありとやこゝに匂ふ白菊

霜もなを心をきてや秋の色をまかきにのこす花の白菊

菊ひとり残るもあはれ秋の色はうつろひはつる草の色に

谷残菊

谷陰や冬まて残るしら菊はちらて八千代の霜を待らん

榊葉の色をやならふ霜八度冬もかれせぬ谷のしら菊

枯野

みしや夢草葉のこらす霜むすふ手枕の野の秋の面影

冬風　元和七十竹門主

落はする枝には絶て松にのみつれなく残るかせの音かな

吹しほる秋の草木の色よりも冬そあらしの音はゝけしき

寒草

冬かれて残る末はのうちなびくおはなに寒きかせの色哉

庭寒草

枯そめし人めおもへは庭の面にはやくの霜はあさき色哉

我宿のたのむ陰なる蓬生も霜のかきほはゆふかひもなし

名所寒草

篠上霰

降くるはそのまゝ散て篠のはにたまるはゝそのあられ成けり

ふりくるはちるや霰のたまさかに外よりたまる野への笹原

きゝなれし小篠の庵のそよ更に音も霰の冬そはけしき

柴霰

椎柴のともにくたけて散はかりうらはもしろく霰亂て

氷

散こともこほりさ木のはに行なやむ石間の水やまつ氷らん

ふくる夜の空よりおちて水よりもさむき氷をしく嵐哉

掛樋氷　日千首

山河のかけひの水の音せぬは木の葉に又や氷しつらん

雪

吹おろす風に深谷は埋もれて峯もたいらにつもる雪哉

山の端は雪の色より明そめて出るまおそき朝日影かな

くれ竹やうへもれおらんさゆ風のしつまる聲にかはる雪折

よもすから幾重か埋む呉竹に積りしまては雪折の聲

八十賀に雪

松か枝に八十年つもる雪の色もなを十かへりの花とみゆらん

雪の中に

つもりこし八十年を猶も十かへりの花にみせたる松の白雪

竹屋宰相光長卿祖母九十賀すゝめられしに雪を

九十なを十かへりな松のはな今よりみせてつもる雪哉

庭初雪

ふりそひて道も絶なは春秋なとはぬ恨や雪にとちめん

ふり初てやかてつもるは春秋もとはぬ恨や雪にとちめん

降そむるほとを過きは春秋なとはぬ恨や雪に積らん

まつ人のつれなく過し春秋も更に忘るゝ庭のまつ雪

つ[illegible]雪ふり初るよりこれ人を忘しまゝに[illegible]もるゝまて

夜雪

今も猶ふるかとみれは在明のひかりそへたる庭の白雪

宵の雨は降ともいさや白雪の更てつもれる色を見すらん

深夜雪

東雲はまた明やらて降雪の光にしらむねやのひま哉

望山雪　元和三霜廿四公宴御月次

さらに今うこきや出ると計に嶺の松につゝく山の端

くもりにし日影の後やはれぬらん暮てさやけき雪の山のは

積雪

つもりそふほとはみえねと降雪に梢みしかき軒の山松

遠村雪

山本の軒はの梢おもるとてはらはゝよそにおとしき雪哉

社頭雪　元和二四廿四竹門主

深きよの雪にや緋の玉垣の神のみまへにおふ人もなし

松雪

ふくか世やなをはらふらん降雪のうつみもはてぬ庭の松かえ

雪中松

つもりけりよのまの雪の朝朗松をあらしのよそに吹迄

樵路雪

山人のやすむにつけて雪をもるたきゝの道やいとくるしき

同し題　大山當座

柴人の歸る[　]はつもりしにたとらぬ[　]の道やくるしき

雪如花　元和二霜廿五公宴御月次

枝なから消んもかなし木々の雪はなはうつろふ色もみえしを

散まかふ色かと見れはやかてまた枝に花さく木々の白雪

雪瀑泉飛聞日寒

山かせのせき入ておとす瀧津せや深谷にふかき雪の白波

やまかせを水上にして降雪の瀧なみさむし谷の下陰

千鳥　元和五十六内御月次

ことゝへよおなしうきねの小夜千鳥浦なれてたに悲しかるらん

うらやましもろこゑになく小夜千鳥我はうきねの友なしにして

小夜千鳥われはうきねの友なしにうらやましくも諸こゑになく

我も今うきねの千鳥なれてたに浦かなしさを諸聲になく

浦かせに吹かへすらん立千鳥おなし所にこゑの明ゆく

夕千鳥

夕されはしほかせ寒き眞砂地になみよりさきに立千鳥哉

浦風や猶さむからし夕汐のひかたの千鳥なみになくなり

鷹狩

夕まくれふる散雪もはし鷹の毛白にまかふ野への遠方

かり衣今一よりとしたふまにはやくれ深き鳥のおち草

寒閨衾

さむき夜もうすきなからもかさねてや衾となれは閨の手枕

神樂　元和四霜十九月次會

九重にをきそふ霜の柚葉を猶おりかへすこゑもかはらぬ

もろ人をもよほす夜半や更ぬらん今そ明行朝倉のこゑ

更行は水なき空も氷るまと雲井にさはるさゝなみの聲

炭竈烟　一日千首

すみかまやたつるけふりも此ころは雪にすくなき小野の山里

おなし題　元和二四廿五竹門主

さそひくる峯のあらしに炭竈のけふりは雪の下にくゆりて

寒々て雪吹おろす山かせにけふりもしろき小野のすみかま

名所炭竈

冬くれは小野のすみやき（かま添）をのれまつさむさい（もしら同）とはぬ烟立なり

雪中早梅

降雪のおよはぬ枝や春またてほゝゑむ梅の匂ひ成らん

はるまたてほゝゑむ梅の花の香に深さおよはぬ枝の白雪

年の中に春は（の添）ありとや匂らん（しらす同）雪の下なる庭（枝同）の梅か香

歳欲暮

承應元年此歌被詠けるに同二年廿九日に六十六歳にて身まかり給ふなれは此歌辭世となるとなん

殘るとてたのむ日數もあけ明の影い[illegible]くれかな

年欲已暮

春秋をあたにおくりしくやしさもけふとりそへて暮ぬる年哉

惜歳暮

いかにせんおしみなれてもいたつらに行ては來ぬる年の名殘を

市歳暮　慶安三六廿五聖廟御法樂當座

くる年に心をかへて市人もおしまん年のくれいそくらし

社頭雪　竹門主

まことある守る北野の神かきに誰いつはりの雪のしらゆふ

戀部

初戀

まよふへき戀路のすゑないかにとも我またしらて思ひ入哉

ふかくならん行末しらぬ涙のみけふより袖にかゝる思ひよ

洩始戀

幾年たつゝむにあまる思ひさへたゝうちつけに人は聞らん

思ふなよいふにあまることのはにいはぬはいふに増る習を

忍戀　元和四霜十九月次會

思ふその人はかりにもみえもせよしのふ心のおくのみたれも

あまるな（なみた添）らなせきかへす心さへ今幾度によはりはてまし

戀すてふ我名やもれん中々につゝみあまるなけく氣色に

忍久戀

たへかぬる戀にそしるつゝみこし此年月はあさき思ひな（らは添）

つゝみこし此とし月のかひもあらし心ひとつに思ひあまりて

年な經てつゝむ涙に袖くちて身にあまる戀の限りなそしる

忍傳書戀

人めのみしのふの浦のもしは草なかきやらん波のまもかな

契戀　元和四霜十九月次會

忘るゝもうれしからましたのむるな（な添）ちかき日數に思ひまかへは（なし同）

たのむには又もとはるや言の葉の我おもふ方に聞もかへてむ

契なは我中川にかけ初つあふ瀬の涙ゝ立もかへるな

ちきりなく日數の後やしられまし定めなき世に殘る心は

行末の遠き契もよしや身の老は命もかきりある世に

朝契戀

けさのまの心よ末のゆふ（なからもゆふかけ添）へまて頼むことはの人にかはるな

行末なたのめてかへる別にもれての朝氣の名殘なそ思ふ

契經年戀　元和四卯九月次會

と[illegible]經ても戀りはせ[illegible]いはの葉にかゝるもはかな露の玉の緒

たび[illegible]忘れはせしと契しもおなへかなきに年そ經にける

契變戀

かはることも我こそおもへはしめより人はたのめぬ心成けん

かはりゆく今そくやしき言の葉のなけなるものた[illegible]て

久戀　元和三正十八當座

何事なたのむ身そつれなさは見はつ計の年も經にけり

絶ぬへき命といひし年月にいけらぬ身とや思ひなすらん

身な[illegible]ある思ひもつらし水かきの久しきほとに物忘れせて

不逢戀

此まゝにたゝ戀しなん思はしとおもふものから猶そかなしき

つれなくて終にかちぬと思はんも弱りのみゆく身にはしらした

つれなさのむくひあらはと戀しなむ身こそ思へは人につらけれ

戀しなん後も心やとゝまりてつれなき人にものなおもはん（われによはらぬ添）

つれなさのあまりに見たき氣色よりまけし心も人にそひぬる（の同）

難面も今さりともと頼こし月日はかなく過るかなしさ

身ひとつになけくのみかは戀しなん世々の報ひの人にさへうき

おふと云なけきも更にあしかれと思はぬ人の上にかなしき

きかはうしとく戀しなむ我ならぬ人には人のつれなからしな

つれなさの限な人にみはてんと思ふにも似す身のよはるらん

先の世のしらるゝのみかつれなさにいまさへつらき身の契哉

詞和不逢戀

言のはなひく計といひよれは心のおくのありてみえける

いひよれはつらき心に言の葉はなけなる物なしらてくやしき

言の葉はなひくとみえてなよ竹のおるへくもあらぬ人の心よ

何とまたいひもおるへき言の葉はつらからぬしもつらき心な

逢戀

とけ初る夜半のしたひも今宵よりなかき契に結ひかへてよ

つらかりし筋にはあらて逢夜はゝ又いひしらぬ思ひもそゝふ

逢ことなしらてやゝまんつらかりしその夜にかなふ心なりせは

俄逢戀　元和三五十二當座

わするなよたゝ今のまの逢こともおもへはさきの代々の契な

白地逢戀

忘るなよ夜なもどなさぬ蘆のやのかりそめふしの契なりとも

祈戀　元和九二十八公宴御月次拜題

あちきなく契たにしゐて祈るてふいつれの神か我にうからめ

わかためや終に驗のみえさらんいつれの神に祈りかけても

人よりも神やうからんかけて祈る中につれなき心みえなは（神にはありとも添）

つれもなき人になひくな祈ること耳かたからぬ社成とも（おほせん添）

いのりてもなかひなくはつれなさのつらき恨や神に殘らん

祈るにも猶つれなくは人よりもつらきうらみや神に殘らん

くるしとて神もやうとむつれなさなあまりわりなく祈る心な

祈るてふしるしまつまに年も經ぬ神たにかけよ人の哀な

たのむにも（めと添）猶あふことはかたそきの行あひ遠き神のしるしか

いのるにもかひなかるへき契かとしらはやせめて神の心な

祈るてふしるしもそなき我中は神のいさむる道とみるまて（にありけり添）

祈逢戀

（そのまゝに添）立かへるつれなさならは中々にけふのしるしや神にうらみん（あふよはのなき身を又や同）

あふことなけふの後瀨も初せ川はやきゐしの末にたのまん（を）

逢ことのしるしありける神なこそ此ゆゝ末もかけて賴まむ

待戀

（とふとても添）あふほとも更てはあらし（りけむ）今（こ添）はたゝ中々あすのくれなまたはや

待人にかこつけしきの月もいる眞木の戸口やよそにみえまし

山のはの月より後もつれなくはいかにいひてか人なまたまし

深更待戀

徒にあけなんもうし小夜更て今はまたしと思ひ（とにて添）やみなは

おろかさな明てやくひん更ぬれはよしや今はとまたれずもなし

とひもこはおろかに人や思はんと中々あくる夜こそまたるれ（更る夜しもそいとゝまたるゝ）

待空戀

さりともと待宵すくる鐘の音に思ひとらむるはとそかなしき（氣へき添）

[illegible]戀

たのめつゝこはりし暮は見しものな夜深くいそく心さへうき

名殘あれや明しいつこも夏の夜はほとなき空ないそく別に

またれつゝ更しつらさも明ぬよなやかて立そふ衣々の空

又いつとせめてたのめん言の葉も涙かきくらす衣々の空

恨別戀

引とめてなそうらむる暮にもといはぬ別の心つよさな

後朝戀

消かへるけさの思ひに分てこしわか道芝の露をうらやむ
別こし袖の中なるたましゐは今もまたれの床に歸らし
立かへりこはゝの今朝の衣々なりつゝなけは共思ふおはせん

逢不遇戀
はかなくそおひみんまてと頼ける猶のこりある人のつらさを
つれなきもなをたのまずつ逢みしは情をすてぬ人と見るより
あひみしをくやしと人やおもふらん今のつらさの昔にも似ぬ
思ひきや（しらさりき落）あひみて後のつれなさにもとの歎きを忍ふへしとは
逢ふ事にかへさりし身のつれなさに有てうき世の果をみる哉

恨戀
恨るに又もれたしやいふことをさならぬすちにことはりもせて
ことはりなきゝもつくさは流石またおもひしろへき中の恨を
恨るにことはりしらぬ心とはみえぬ物かられたきさまなる
つゝみあまる恨をしらて等閑の恨を人にいはてくやしき
いかてかは思ひもしらんうきふしのひとつふたつも積る恨を

恨心中戀　元和三正五
身の上に（に今そ添）しるもかなしき契かな（とこなつに同）あらし吹そふ秋のこゝろを
よきふしと思ひなりなはと計に恨をかへす身さへはつかし

戀不依人　元和三五十二御當座一說慶安十九九四於陽明院御當座
いかなれは戀てふものゝくるしさは人わきもせぬ習ひ成らん

馴戀
戀しさもつらさも流石まさるやと朝夕なれてみぬわさも哉
よのつれのつらさはなるゝ朝夕に心つよさやしゐてくはゆる
朝夕のへたてもあらは中々につらき心のおくもみえしを

増戀　元和三二廿五於禁裏聖廟御法樂
戀しさの限あるやと思ふまの月日にそへてやるかたもなし

難忘戀　元和三二廿五聖廟御法樂
うきふしも情をもみしこし方はたゝめのまへの俤にして
うれしさも又つらかりし俤も身をはなれたる時のまもなし

變戀
うつり行人の心は我ためにくる秋としもわきてかなしき
うき人に心木の葉の秋の色に思ひみたるゝ我そかなしき

恥身戀　元和四三九月次當座
見えまうき我身のほとを思ふさへいとゝくるしき戀の妻なる
われたにもつゝましき身を殘りなく心淺くは何にみえけん

稀戀
と絶こし中の日數をかそへてもさためなき身はいかゝ頼ん
とたえこし中の月日にこりもせてゆふくれ毎に何またるらん
はかなしや千夜に一よのあふ事に積る恨をかへすこゝろよ
さためなき中の日數はかそへてもいかにまちみん中のと絶そ
絶なはとおもふ計に隔たれる人の心にまかせてそみる

返昔戀　元和四三九月次當座
つれもなき言のはよりもつらきこそ手ふれぬ文に多くそひけれ
かへすをもみつと還まん玉章を人たかへかとおほめきもせは

白地戀
行人を今しはしともいひ侘ぬあまり程なき折のつらさに
かりそめに立かへりぬるあた波のよせし名殘の袖はかはかす

顯戀　慶安三三廿二水無瀨宮御法樂

猶しはしせかまし袖のしからみにあまる涙を思はさりけん

非心離戀

身の上に今そかなしき出ていなは誰かといひし人の別も

絕戀

身のために猶うらめしきつらきその心にあらぬ中の別も

秋絕戀

絕々にかれはてさりしつらさゝへおもひしものを中川の水

またすして絕んものかはたえはてゝ賴みなき身い秋い夕暮

三句猶可有之候

かれにけり恨しのへの眞葛原あきかせまてを身の契にて

顯絕戀

なへて世に洩しあた名を思ふさへ憂さにつらさをそへて絕にし

旅戀

もれしさへなけくにあかぬ身の程をとりかされても絕る契よ

待人名戀

鳥か音におとろかされて草まくらあふ夜の夢も今そ別るゝ

我れかとも思ひもよらはかひもなし名計りものと人にしられし

春待戀

つれなさはうき身からかと我ならぬ名にいひかへて心をはみる

夏戀

こたへぬに道もまとひぬ大かたにかすみし宿の春の夕へも

疑眞僞戀

かすむうちに宿こそわかれ俤はたゝこゝにしも見る計なる

かことかと又は疑ふ五月雨のいみおく迄は思ひはれしを

言の葉をいひしまゝにや賴まゝし世のいつはりは人に任せて

隱在所戀

今はたゝまことに蜑の子なりともおしへよ里のしるへ計は

戀扇

いかなれは中の扇のそれならてかはす契のなとなかるらん

戀枕

ひとりのみねやのあふきの風ともし我身を秋の中の契に

枕とて草引むすふ程たにもかはす夜もなき身の契かな

戀鏡

枕たにつれなき人に告もせよ涙せきあへぬ夜はのけしきを

戀面影　元和四十廿九月次會當座

契りさへよそにうつりし鏡には我俤もなみたへたてゝ

つらきふしうき折ふしの戀しさの外にはみゆる俤もなし

いつくにもうきは身にそふ俤を忘れぬ人の思ひ出にして

思

つれなさを思ひ出ても戀しさのうきにまきれぬ面影そ立

像想こゝろに行てみせもせは我おもかけの人に侘しき

寄日戀

とし經てもなにをか人に染まさる思ひの色のあくものにせん

限りあれは傾ふきやらぬ春の日もくるゝ習ひを人そつれなき

もの思ひよ何にまきれん獨のみはるの日永き窓にむかひて

寄月戀

ほすひまも涙かきくらす心には日影も袖にたのむ物かは

くもるなよたのめぬ夜半のなくさめに忘れて待ん山の端の月

物思へは空やあらぬとたとる迄おもかはりする袖の月影

曇なよ忘れて待んとひこむとたのめもおかぬ夜はの月影

あくかるゝ習ひもありとみる月の人はさそはぬ儚そうき

寄月待戀

かこつけし月はつれなき空ならて人はかけせす更る夜半哉

寄春月戀

我袖にやつすきもみゝ物思ふなみたならてもかすむ夜の月

寄風戀

わきてしも身にしむ風は秋ならて獨ぬる夜の床のものなる

なのれのみよはらぬ葉を聞もうしとふ程過る夜はの松風

寄雨戀

絶佗ぬとはぬ身なしろ袖の雨はさかやとりたに思ひかけねは

寄烟戀

まかふへきよその煙のかひもあらし是そ思ひの末としられは

戀しなむ後のけふりにそれと見よ終にしられぬ中の思ひは

寄雪戀　元和二霜廿四公宴御月次

積りそふ思ひやしらむ行かよふ心のあとの雪にみえなは

通路も雪にそ絶るふむ跡なおとこむにはおふていとふ心に

寄花戀

いさ櫻われもいとひてつれなさに幾春人のうきめ見るらん

うつり行人のこゝろのはなは猶後の春まつなくさめもなし

寄草戀　元和三十七廿五首當座

生出る種はかはらぬ草の名のしのふわすれそ人をわきける

萌出る今たにかゝる思ひ草まして茂らん末いかゝせん

寄山戀

かなひしや人の心の岩木山絶ぬ思ひをあはれともみし

うこきなき心もうしやいふ事は耳無山のきかすかほにて

情しらぬ心をみれは山の名の岩木はいはし人のつれなさ

寄野戀

萌そむる入野のすゝき手枕にむすふ契ないつとたのまん

うちはらふ露しけくともこも枕かはす淀野の床にたのまむ

限なき人の心をおもふには猶末ちかきむさしのゝはら

寄杜戀

いつよりか我名はよそに杜の露はてはなけきの身をしほるらん

寄沼戀　一日千首

たのむそよそのかねことの忘れすは淺澤沼のあさき心は

寄里戀

つれなさのつらき詞の里の名をおひみてのちの身に頼まはや

思ひある身をかくすへき宿もやと忍ふの里にもとめてもみん

教すてし道にまよはゝ蛋の住里のしるへを先やうらみん

寄河戀

わか身にはうきせ瀬にかりの飛鳥川かはる淵ともいかゝ頼まん

寄海戀　慶安五四廿

枕うく涙もかなし和田海とおれにし床の夜半の獨ね

寄嶋戀

憑めなきし契をまつか浦嶋に心ある海人のたよりたにあれ

身にそひて殘るもつらし待てみん儚のみのうらの初嶋

寄桂戀　一日千首

手にとらぬ月のかつらのたくひなる人の心をなとしたふらん

寄簾戀　一日千首

秋風のつらき心になら柴やしはし計のおとつれも哉

寄桐戀　一日千首

人心つれなきまゝに桐の葉のもろくもおつる我涙かな

寄竹戀

つれなさの色そかはらぬ呉竹のうきふししけき人の心は

獨ねのうきふしならてくれ竹の一よはかりの逢こともかな

寄鳥戀

まれに來てふすかとすれは鳴聲にとりあへす明る短夜もうし

なへて世の別れにも似す山鳥の尾上へたてし夜はの鏡るさ

我ためはかそへてもうき數なれやこぬ夜計の鴫の羽かき

寄門戀　竹門主御法樂

つらきかな人の心は八重葎門させりとはみえぬものから

とかむるはくるしき妹か門のいぬなれよ幾度行かへるらん

寄篷戀

はらひ佗ぬ袖の湊のとまり舟篷の雫も夜半の涙も

寄蓮戀

おもへ人太山の苔の露けさをうけしく袖の夜はの小莚

寄衣戀

から衣あふ夜やまれん嬉しさをつゝみならはぬ袖にあまらは

寄絲戀

年經てもなをあふことはかた絲の絶んものかはぬきき玉のを

寄遊女戀

船のうちやうきね計の契たにつらきか中にいかて頼まん

いかにせんあふには身をも惜まれとつらさに絶ぬ命なりせは

戀の歌の中に

猶そうき我つれなさになさしとやしゐて人めをつゝみ顔なる

なから我つらさにはなさしとやわりなくつゝむ人め成らん

うらむるな我ことはりに聞もせよたかためならぬつらき心に

たのむへきことのはなからいつはりのある世に殘る我心かな

僞のある世はしけぬことかりとてそれかれなくに頼む言の葉

消ねたゝしのふの山の峰の雲かゝる思ひのあともなきまで

寄関戀

色に出て今より戀んさのみやは忍ふの関の忍ひはつへき

朝戀　御短冊

袖よいかにおくるあしたの淺茅の露も日影をまつものかは

雜部

江山春興多

伊駒山はなのはやしも難波江の春をへたてぬ浪そかすめる

遠山如畫圖　　御

色とらぬた丶一筆のすみかきを都の遠にかすむ峰かな

曉更鷄　慶安四十廿四御當座

鳥の音はなをそまたる丶心さへゆるふれむりも老の枕に

雲

へたてある山とみえしは白雲の八重にかさなる高根成けり

薄暮雲　御月次

山のはにしはしと見るも吹かせにやかて跡なき峰の白雲

くれにけり山より遠のゆふ日影雲にうつりしあとの光も

庭苔

まれにとひし人の跡さへ庭の面は幾重の苔の下に埋れて

山かせの吹につけつ丶おのつから苔の塵なき庭の面かな

庭上松

枝かはすかたへの木々の霜の後も庭にふりたる松の色哉

浦松

浪はまた遠さかるなり志賀の浦やおとをは松の枝に殘して

樹老五株松

ふりにけり木高き松の立並かけも五葉の色はかはらて

浦鶴

袖くたす海人にかさはや浦波になをしはなれぬ鶴の毛衣

鶴立洲

むれ來てそ水なき空の友鶴も河邊の浪の色をそへける

鶴砌馴

君かため久しき跡は九重の眞砂を數にたつやとむらん

河邊鳥

すむ鳥もおもひやすらん河水にいけるをはなつ神のめくみを

水郷鷺

すむ鳥もうれしとや思ふ飛鳥川七瀨のよとの浪絶ぬ世を

淀川や底すむ瀨々に立鷺はをのか影をや友と見るらん

寄木雜

たれか世にしられぬ谷を心にてかけの古木の身をいくるらん

市商客

うる事のしけきをそしろ商人の造そへたる市のかりやに

うることを市にあらそふ心よりまつ丶いそき立よその商人

山家

心には身をまかせたる心しも身にしたかはぬ山のおくかな

山家夕

すみつかぬ我こ丶ろより夕暮のあはれを山にかこつ庵かな

山中瀧

涼しさのいつれたかはむ山かせも袖におちくる瀧のしら玉

閑居燈

世の塵をあらはん水やおく深き山の岩ねに落る瀧つ瀨

つく／＼とわかよ更ぬるとほし火を今はわられぬ友とかゝけん

山竹

年も經ぬ直き心はしらねとも我住山は竹を友にて
としを經て我住山のくれ竹はうきふしゝけき友とこそみれ

樵路雨

降雨にくれぬさきにといそくらし眞柴すくなく歸る山人

樵夫夕飯

山上樵夫依雨晴、擔薪踏險里千程、黃昏待月欲飯香、隔谷遙聽一笛聲、
山人のおもき薪の道となみいそくとよろも暮る空哉

古寺鐘

初瀨山みねのかすみはつゝめともよそにもれくる入相の鐘
かはらのみわつかにくれて鐘ひゝく尾上の寺の暮やさひしき

曉鐘

初瀨山おのへのあらし音さえて霜夜にかへる曉のかね
春もはやみしかきほとの空なれや夜深き鐘の聲そ明行
在明の月は霞のうちなからひとりさやけき鐘のこゑかな

野篠

春きてもかすまぬ空の風おちて猶霜さやく野への篠原
もえ出る草の綠におなし野のをさゝは春の色そすくなき

浪洗石苔

池の面の岩の蘋をは波のあやをたちかさねたる衣とそみる

海路

船人に身をまかせ來ぬけふ幾日しらぬ浪路の末を賴みて
舟のうちに幾日なれても聞たひにこゝろさはかす浪風の音

渡船

おのかわきななうき船の渡し守人のゆきゝはやすき道にも

漁舟火

漕出て釣するならし蜑小舟沖にたゆたふ篝火の影

夕眺望

日のおつる山の麓は暮る色にむかひの峰の影そ消行く
海こしの山よりくれてなかめやる心もちかき波にうつりぬ

湖水眺望

にほの海や霞はれ行波の上に遠さかる船もみえて數そふ
砂はれ水みとりなる浦の名も浪に立そふ志賀の辛崎

名所松

住へきてとしも經にけり高砂の松のおもはん身をは忘れて
ことのはも代々に積りの浦風に猶色そふやすみよしの松
いくよゝかおなしなかめの色そへてかけ高砂の松の春風
ことのはゝ散うせぬ松なこゝろへにて吹つたへなん和歌の浦風

名所橋

明る夜も春はわかれし岩橋をかすみにわたせ葛城の神
おもひしる心の道にたれかけてよをう治川の橋は絕せぬ

名所瀧

あらし山峰のもみちやかけつらんとなせの瀧の風のしからみ
春くれはまた山姬のたちぬはぬ霞のころもさらす瀧津せ

名所浦　寬永六三廿四內御月次

長閑なる浪に此世をうみ渡るものともみえす三津の浦舟
櫻あさのあふのうらなし春は又花のみるめを蜑や刈らん
ふく風も春には名古の浦浪によるてふ貝も今はひろはん

名所島

橋姫のかすみな筆のすみかきにうつすや浪の綸島成らん

心ある舊りにはやく煙かとかすみそはての松か浦島

名所渡

天の川としに一度あふ春の花にもとなき渡りとそ思ふ

なかき日は幾度人な見なれさはわたす隙なき淀の川長

音羽河　春

音羽川水ふきとく山風に岩浪はやく春や越らん

大井河　夏

大井河入江の松のしたすゝみ今より夏の影にならさん

三室山　秋

おく霜はよそのもみちの上に見せて三室の梢色もかはらす

紅葉はの色染へくせ三室山時雨もまの間に嵐こそ立て

相坂關

木かくれぬ世にあふ坂の石清水あふく陰なる名をも頼まん

交野　冬

夜もすから霜こそむすへと付てみる夢にかた野の笹の枕に

よゝな經しかりの使の跡ふりてかたのゝみ雪つもる色かな

世々かけてかた野のみ雪降にけりかりの使の跡もなきまて

鏡山　冬

散かゝるほとこそくもれ鏡山はれてさやけき雪の花にも

手にとりしこれや神代の鏡山雪より出る月よみの影

筑波山　戀

入そめてまよふもかなし筑波山人のこゝろのこのもかのもに

鳥羽　雜

松か枝にまたも降つけ山城の鳥羽にみるともおかし雪哉

朝な夕な松のけふりも立そひぬ鳥羽田の里の民の竈は

常盤森

月もなを秋にはみえて山城の常盤の杜の時雨さるよは

伏見里

數ねむて夢も幾夜か絶ぬらん獨ふしみの里のきむしろ

富士山

不假のはは雲風な姿にてもとみし山の他もなし

時のまにたな引消てふしのねは雲こそ山の姿なりけれ

宮城野

みやき野や木の下草におちそひて中々かろき萩の上の露

述懷

終にさてなす事なくは身のいきた歎くにおかす世なやつくさん

後の世な思へやたれもある程はかすならぬ身のかすにいるとも

曉述懷

山深く今はさへへき鳥の音なおなしくは聲に待もつれなし

獨述懷

身につきの隔たゝむの人もおらは聞ておにせても慰みなまし

水無瀨氏成卿追善にすゝめられし　獨述懷

誰かしる友におくれて和歌の浦になくはかなしき田鶴の心は

寄書述懷

しるしなく跡にそまよふ古き世の文見る道をしらぬ心は

寄雪述懷

あつめぬな身のうらみにて今はたゝ雪にそとつる窓の明暮
年月はあたにつもれる白雪の我身世に經るたくひ計りに

懷舊　元和五十廿五

かくなからにこりはつへき末の世にふたゝひすまん山水もかな
こし方は何はかりなる思ひ出のなき身なりとて忍はすもなし
言の葉なかはす計りになき人のおもかけむかふともし火の本
老はてん末もかくこそ時のまに三十過にし身なおもふには
我身には何はかりなる思ひ出のありとてしのふむかし成らん
その折と定かにはあらていつそやも見しかと思ふ事そ床しき

懷舊淚　元和三十七廿五首當座

なき人のかはらぬ跡な水莖にふるき涙もなかれそふなり
垂乳ねのおやのいさめの數々にそむく我身そ涙せきあへぬ

思往事

しのふ世や心に深きこしかたのたゝ目（こ作）のまへにうかふ涙は
思ひ出の有身にはあらてこし方のしのふ心のくせもわりなし
年月そあまた經（たに通行くゝ作）にける思ひこし我あらましの末はとならて

逢友述志

いひ出る友（中深）そしたしき言の葉なすつへくもあらぬ心々に
言出は今もかはらし諸共にましはる中の深き誠な

夜涙餘袖

うれしきもうさも寢覺の思ひ出にひとつ涙そ袖にせきあへぬ

夢　元和二四廿五竹門主

思ふ事心にかなふ夢覺てうつゝにつらき風の音かな
何ことのすちともわかて覺にけり枕の夢の行ゑゆかしき

永き夜に殘るもあるなおもふにはいかに見えてし夢の行ゑそ
見はつるな思へはあやし春の夜の夢はかりなる夢の枕に

萬事無心一釣竿

釣の絲の餌なかくはしみよる魚やおもふか程の心やはある
とにかくにうつる心よ釣の絲のたゝ一すちに世なは思はて

青燈耿々思悠々

いかになな身なしほれとて灯のさやかにむかふ人の俤

公の御心に不叶事ありて下向の刻久しく武城にとゝめられて寛永寺にうちこもりて年經し秋の比道房卿の方より
「さらぬ得ぬ草の枕な月もさそ出てや恨む武藏野の原」
返し御洞より　思ひあれはなゝさめ果つ武藏野に姨捨山の月やすむらん」との御返しとも云々

行方（以作）に身なはさそはて夜な／＼の袖の露とふ武藏野の月

此歌御感ありて歸京の事な許し給ふとなり

源忠晴（松平伊賀守）百首の歌讀て見せ給ひける奥に書付ける

かきつむるかすの玉もに心なくかくるやあたの和歌の浦浪

藤原三友齋藤攝津守五十首歌讀て見せられけるな返すとて奥に書付られける

むさし野の露やいかなる秋ゑたてみつる言葉の花の色々

藤原正盛（中根壹岐守）富士の繪の讃に

思ひあへす半はの雲な降と見て山な忘るゝ雪の富士の根

或人亦富士の畫の讚なのそまれしに

ふしの根は雪の光に明そめて麓の雲に殘る夜半哉

同

船人に心なかしてや似の根の雪に漕出る田子の浦濱

清見瀉書し繪に

清見瀉岩うつ波に磐そへゝ幾つたび行山の松風

雪の山水書し奈に

梢なも手にとるはかりまちかきや雪にはれたる遠の山本

山紅葉書し繪に

その色としくるゝ山はわかれとも去年の日影に染る紅葉は

曙の山水書し奈に

近くなる程にみえねと明そむる浪にそうかふ沖の友船

薄雪の繪に

おく露なゝはなか袖のおほひてや菊はうつろふ色のなからん

竹菊書し繪に

咲初て神なき時や千尋ある陰なためしに匂ふ菊かも

竹の繪に

よとゝもに落葉は絶ぬ吳竹のなとかは秋の色にもれけん

定家卿影に

世にしのふ名なは殘して小倉山ふるき軒はの松のことのは

攝津守藤貞まうて來て「しるへせよ代々にかはらぬ跡つきてけふ入初る敷島の道」返し

代々の道つきてならへしき島の道守るてふ神につかへて

內大臣に任せられし時林道春詩な送りし和韻に

かけ高き星の位やおろかなる身にはうかへる雲の中空

おなし時林春齋詩の和韻

出る日の影なひくにとあふくなりひかりあまねき關の東な

慈鎮和尚

常に思ふ心のまゝによしなやとかされしつまは思ひかへさし

あかたゝ　元和二極月廿四竹門ホ

あしたうつかたへより先たれかして惡む頃しも賤かいとなさ

黄　元和二三廿五

風ふけは下々のこかれな我宿の庭に散しく山吹の花

鹹

朝夕にいとなき蜑はしほよりも我いとなみなからしとや思ふ

わらはやみに煩事おこたり八月十五日に

男山ことしの秋にたのこめて心計な神にたむくる

高雄にて

ちれはうき散ぬにこのむ紅葉にのかけや高雄の山川の水

別　元和四卯九月次會

ゆくな猶見なくるかたにかゝりみる人は心ないはてゝしらする

かたしかん露なもまたすほれけり別かなしき旅のこゝろもは

羇旅

あまたゝひかれてしほるゝ袂かな都出ては一よ二夜な

いとゝ猶しほれにけりな旅衣都しのふの露の亂に

羇中衣

うちとけて夢もやは見む旅衣かへす程なき夜はの枕は

旅行

行つれて我はわれなる古郷ないひなくさむる旅の道かな

旅衣きのふのとまりなくれぬとまついそき立今朝の宿哉

寄雲旅行

分まよふ袖にかさなる山高み雲の衣にあらぬ立なり

わけくらし雲の衣なかさねても猶袖寒き山のかりふし

旅友　公宴聖廟御法樂

年月をなれにしはかり行つるゝ人にしたしき旅の道かな

たれとなく草の枕をかりそめに行あふ人も旅はしたしき

旅宿　寛永四七月廿五竹門主

しる人といふはかりにも一夜かる宿のあるしの我にしたしき

旅衣おはなか袖にかさねてはいとゝ露けきかり枕かな

旅宿夢

現にはしらぬ幾重の山路をか越てみえける夢の古郷

同　寛永廿二一廿四水無瀬法樂

見るほとも古郷まては行やらぬ夢路をたのむ草枕かな

故郷の夢路はかせのつてならて吹ぬまかよふ人のおもかけ

海路

追風のあまりあやうき行舟にこゝそとまりといふ聲も哉

おひかせにうきしつみゆく友船を見るにあやうき浪の上かな

野旅　元和五十月六内御月次

むさし野や草の枕は霜かれぬ猶行旅になにをしかまし

おきあかす草の枕の野への霜わくろあしたの袖しほるなり

夏旅

旅衣あさ夕すゝみ分そ行あつき日影の中やとりして

あつからぬ程とそいそくのゝ駒のあゆみの塵も雨のしめりも

秋旅

旅ころもすゑの時雨をゝもふにはしほるも袖に淺き露哉

別こし古郷人もいかならんさろは夜寒の比もへにけり

旅泊夢覺　元和七十竹門主

浪の音もかはるとまりの舟のうちになれにし夢も人そおとろく

梶まくら夢はうつゝの古郷をもとのうきねにかへる波かな

關路時　竹門主御法樂

相坂の關路をこえは半天の日影も西にかたふきぬへし

あふ坂の關路の空になりにけりよそに都の今朝の日影も

釋教部

釋敎

聞人のこゝろにそこるゝこともとかぬ御法に耳の外にて

二月やのこす敎もたかためとしらぬうき身のよそに聞らん

一言もとかぬ御法なゝかゝりし心に聞て世につたふらん

一言もとかすといふにとく法なやかて心につたへてそきく

寄月釋敎

やとさにわきことの法の月の影を心の水のにこりあらせて

見る人の心にかはる月なれやわしの高ねのおなし光も

如是力　一日千首

木々の枝はおるかとはかり吹風にたゝゝ力な見する靑柳

東照大權現十三年忌に法華經二十八品の歌をさゝれけるに

唯獨自明了

くもらしの心ひとつに見る月は出入山のさはりたになし

殺生戒　元和五卯月廿五竹門主御法樂

ともしするさつおの弓も後の世の報ひなしらは別かへさなむ

報佛之恩　元和八八月廿六

忘れても恩ひたにせしいむ事のいつゝか中のおもきつみなも

よゝ經てもむくひつくさし親と子の深き敎の道おもふには

はかりなき劫經ても猶おこかたき敎なゝかてむくゝし盡さん

父少而子老

いつのまにこゝも老けん鶯のすたちし松の色はかはらて

年深き松はかはらぬ緑にて柳の髮の色そ老たる

前亞相光廣卿七周忌に光賢卿より一品經の歌すゝめられしに常護是人といふ事を

たのもしな御法のはなの山寺はさる人なしもめくむ誓よ

たらちねの親の守りのそれなふて身にそふちかひ聞も頼もし

慶安三年十月十一日本源自性院殿一周忌の追善の歌に示

以所繫珠

聞ゝこそかけし衣の玉さかにさめぬる醉も身にしられけり

我見灯明佛

古き代を見し人ならに法のはなさかえん時もいかてしらまし

そのかみにかはらすと見る六種（にそ添）より二度とかん法たこそ恩

便得離欲

一すちにたのむよりこそ女郎花めつる心の露も（とま添）のこらぬ

常にそのちかひを深くたのますは戀の山路に闇や迷はん

神祇部

神祇

今もなをあふくに高し天の原空にうつしゝ神の御影は

あふくより猶こそいはめ法の水絶ぬもまもる神の恵は

元和二八月十五日

けふよりそたのみをかくる男山さかゆく末をけふの手向に（道の末もはるかに添）

神も我心をはしれ春秋のたむけにおなし手向なからも

九重のかさしの櫻いにしへにかへる春をや神もまつらん

道まもる神もめくみや猶そへん絶すもよせよ和歌の浦波

秋神祇

御幸せしむかしの秋のけふ忍ふ心そ手向神もかけてよ

石清水

石清水そのこころもにかけとめし神の心や法まもるらん（もやわきし添）

社頭榊　元和八二廿五御法樂

瑞籬の久しき代々の霜を經て神の御室にしける榊葉

榊葉のさしては祈るさかゆへき世をやす國の神の御前に

神代のことも

千早振神よのことも水くきのはかなき跡にみするかしこさ

祝部

祝言　寛永二正十一初卯石清水法樂

我君か代に[illegible]石清水[illegible]して（いのるそよ添）

まもれなをたえぬなかれの石清水君につかへん末かすへ迄

我君か代はやす國に生れあふ身をうれしとや民も思ん

神も今此ことのはの手向種とうけてや千々の秋もつもらん

石清水ほそきなかれの絶すしてつかへん道も我君のため

慶賀

吹音もわきてのとけし君か代はけふを千年のはるの初風

もろ人のひとり／＼の身の上にさちある時にあふかうれしき（をとりゝにみる添）

數ならぬ我身なからも君か代をいはふ心の人におくれし

寄神祝　寛永七二廿二水無瀬御法樂

天下うけつくまゝにをさめ來て神のさつけし國そうこかぬ（こ添）

祈るよりわきても神の惠ある宿は千年の春もかはらし

月前祝

君のみやまつにかそへんよはひをもかきらぬ月を雲の上にみん

寄月祝

夏祝言　慶安三四

千代すまん影そすゝしき池水に清くやはらく空をひたして

早苗とる田子の歌にも治まれる我君か代のこゑやわくらん（わきて今治れる）

冬祝言

高砂の松をかさぬる千代なれや尾上の霜の鶴の毛衣

寄道祝

ふるき跡の絶たるをつきあたらしき道おこすへき時や此時
君に今つかふる道もおろかなる身を捨ぬ世にあふかうれしさ
ことのはの末もまよはし敷島の道すなほなる御代にひかれて
石清水君かもゝ代につかふへき人は道をもまさて守るらん

同し題

みな人はあやうさしらぬ道にそみる道の心の深きまことは

寄道祝言

治まる道より國はやすかれやこのおしへもひとつこゝろに

爲君祈世

一ことをさつけしまゝに今もなを治まる世は君いのるなり

花過多春　慶安四二廿五仙洞へ朝覲之行幸御當座

洞のうちは春につもらぬ御幸にも老せぬといふ花をこそ見る

松有歡聲

長閑なる春にさかえん宿の松君萬代のこゑよはふなる
松に吹音にもしるしまつりことやはらく國は風をうつして

松添榮色　寛永廿霜九御即位御會

さかゆへき御代のはしめと榊葉は霜なき枝に見する松かな

松竹增春色　同十四正廿九公宴御會始

呉竹のよゝにこもれる春の色も松にかりみせて立みとり哉

緑竹辨春　慶安四正十一仙洞御會始

春は色のみとりにも見る萬代なかき住て風は竹になるこゑ

竹不改色　元和四九廿四禁闕後御月次御會始

おもふにはたれかたのまぬ色も猶千尋あるかけな君か御影と
百敷や臺の竹はひとふしに千代をこめたる色やそふらん
すくなるを代々のためしと色かへぬ臺の竹にうつしかへてん

御懷紙寫之

秋日待　行幸二條第同行契遐年和歌

中宮權大夫源通村

幾度か御幸まちみんくれ竹の末はよなかき秋にかにらて

竹契遐年

すくなる治まる御代のためしにて千世もさかへん庭は呉竹

鶴伴仙齡　仙洞御會　庚午二月八

仙人はよはひにたくひて千とせをもそへてゆつるのこゑそ聞ゆる
仙人もしらすよはひやたつもへん今よりなるゝ芝の砌に
ぬれてにす山はあさしと蘆たつや芝の砌の露に見るらん

對龜爭齡

うつしみよ君か齡の萬代もすみぬる池の龜のかゝみに
君はなやかそへもそへん萬代の龜はおよはぬ末の齡を
萬代の君かよはひは池水にすむてふ龜のかゝみにもみん
萬ふものとかなるへき君か代に心やすくやかめもすむらん
君か代をいはふことはゝ多かれと

寄道慶賀

たのしみは心にあまることのはや見せて雲井に敷島の道

緑竹年久　寛永廿正十九御會始

あひにあひぬみかきの竹を此君の千世に千尋の陰をならへて

本々此集者後十輪院中院殿通村卿前内府之詠草也予年々

集レ之以爲二一冊一傳聞御一代所二詠出一之和歌或三千餘首或五千首今爰千三十餘首書二載之一後人加二補焉一

和歌門弟觀向居士以繁

詠十首和歌

竹鶯

鶯のこゑぞ明ゆくくれ竹の夜深き窓とおもふまくらに

春雨

春雨のしのふのみたれ吹風にむすほふれたる軒の糸水

歸鴈幽

さき立はまへ飛消て一行のおくるゝ鴈は雲にかすめる

更衣

あかすしてはなにわかれしこゝろのみなを立かへる夏衣かな

尋時鳥

郭公人にもとはしけふよりもさきにときかはねたき初音を

寒蘆

江にたてるあしのは寒き朝霜に氷ないそくかれ渡るなり

待戀

月まつと人にはいひし夕暮の今夜もまたやあたに更なん

顯戀

人しれすつゝむとおもひし我涙いつより袖の外にもれけん

寢覺鷄

身の上の寢覺になりし初聲に鳥のつかさもおとろかすらん

祝言

みとり成松たにしらし萬代もつきぬはこやの山のときはゝ

詠十首和歌　此十首長嘯詠歌幽齋點なり

立春

霞たつあふ坂山のされかつら又くりかへし春は來にけり

朝鶯

なかめやるすへのゝ原の朝霞かすみの中に鶯そなく

更衣

いつのまにうつる月日もかはるらんはなの袂よ夏の衣よ

水邊納涼

大原やせかゐの清水むすふまに月もかたふき鳥も鳴なり

野蟲

むしの音そみたれて野邊にしとろなる秋の思ひや忍ひかぬらん

月爲友

うき世には又かたらはん友もなしなをなくさめよ秋の夜の月

深夜雪

しのゝめはまたあけやらて降雪の光にしらむねやのつまかな

寒庭水鳥

うちはらふおしのうきねのさゝら浪またなくも夜半に霜や置らん

寄繪戀

又も見るそのなくさみはありなましゑにかくほとの姿なりとも

夕戀

日くるれはたつ傷を身にそへてそのまゝにこそうちふされけれ（やかてうちふす床の上　或本）

夏日同詠五十首和歌

早春

此ころの春またあさき山のはに日數を見せて立霞かな

氷解

春かせに汀の氷とけぬらしけふ立かへる志賀のうらなみ

嶋霞

船路さへ遠きかるかと見ゆるまて今朝は霞のうちのはし姫

河邊梅

水上なたつねもみはや年毎になかるゝ川に梅にほふなり

春夜

照もせぬおほろ月夜は名のみして曇はてたる春の夜の月

栽花

ことしうへてやかて咲へき春そ先疎きも花のおりはとふへき

花埋路

雪とみて道も絶けり春かせに梢のはなたさそふのみかは

遊糸

長閑なる空にみたるゝ糸はふは春の霞の衣おるらし

雲雀

かすむ野は子を思ふ道も迷ふとやおのかすにのみ雲雀鳴なり

樵路躑躅

こりかへるこしはにそやすむ山人も道の行手のつゝし折とて

竹亭夏來

我友とうへし色の吳竹のかはらぬ色に夏は來にけり

磯時鳥

あら磯の浪のまかひの一こゑなきゝつとやいはん山郭公

澤菖蒲

それとなく野澤に生しあやめ草けふたか爲にひかんとか見し

幽栖五月雨

とふ人はなきをならひの宿にしてなを住わひぬ五月雨の比

夏草

夏草のしけりあまゝにかれ行や野中の庵の人め成らん

樹蟬

蟬のなく木ゝに秋やかよふらしのひ〳〵の森のゆふかせ

簷下萩

軒ちかき萩の上にはこほれつゝやかて袖にも露かゝるなり

萩半綻

白露や心をわけゝたきぬらんなかは咲出るはなの萩原

初鴈成字

かけてこしたか玉章そ鳥の跡のほのかにみゆる初鴈のこゑ

旅泊鹿

浪の上に幾夜うきねの梶まくらしく〳〵におしかの聲そわびしき

秋夕

色みえぬものから秋のさひしさはゆふへゝ毎に又はそふらん

月前鐘

庭の面にまかふのみかは鐘の音も霜をきゆる秋のよの月

月下遊士

ゆく月の影をしたひてたはれをやかたふくかたの宿をとふらん

古郷擣衣

都たに今は夜さむの秋かせによし野の里はころもうつなり

葛閉戸

あれ残る草の庵の柴の戸を又とちはつる葛かつらかな

秋不留

おしとおもふ心を道のしるへせよ行きてもしはし秋をとゝめん

山館冬至

我宿の陰とたのみし紅葉にも今朝より冬の木枯の山

落葉驚夢

神無月しくれぬ夜はの山風に木のはに幾度夢さそふらん

田氷

たえ〳〵の筧の水の音もせす氷かさなる小山田の原

澗水鳥

飛鳥川きのふの淵やかはるらんうきねさためぬおし鴨の聲

都初雪

冬はなをはなにゝほふこゝの名にたてゝそれとは見えぬ今朝の初雪

市歳暮

月も日もいそきなれぬる市人も道にや年のくれおしむらん

寄名所山戀

分そむるほとたにまよふ筑波山こひのしけ山すゑいかにせん

寄名所関戀

色に出て今より戀んさいふかは忍ふの関のよのつこへき

寄名所浦戀

かくはかりつらきものとはしらさりき待夜むなしき床の浦風

寄名所瀧戀

布引の瀧のしら玉いさからむ袖のなみたの色をはかり行

寄名所河戀

もろともに今宵そ契る水無瀬河ありてゆくゑも絶ぬ逢瀬は

寄名所橋戀

いかにして又もわたさんあふ年は終に一よのまゝのつきはし

寄名所里戀

更級の里にを行ん月ゆへになくさめかねて物おもふ身と

寄名所杜戀

色かへぬときはの森はつれもなき人のこゝろのたくひなりけり

寄名所湊戀

涙せく袖の湊の浪たかみはてはうき名やたゝんとすらん

寄名所濱戀

今はゝやうらみたにせしうと濱のうときあみなる人の心を

伊勢

我君をひとつ心にまもるらしふたつの宮の内外ともなく

石清水

石清水あきの最中にすむ月や神の光を空に見すらん

玉津島明神

あはれかくや身のかすならぬことの葉も數には入ぬ玉津島姫

山家猿

さらぬたにさてもさひしき松の戸の軒はの山にましら鳴なり

羇旅

日にそへていやとをさかる都かなきのふのかすみけふの白雲

寄草述懐

冬の霜の下にかれにし草のはも春のめくみにことしあひぬる

寄夢懐舊

更にまた思ひ出てそしのはるゝはかなき夢に昔見しより

寄世祝

君を猶あふかさらめやおしなへて治まれる世にあへる諸人

詠百首和歌

立春

一夜あけてあらしもきかす朝霞こゝのかさねに春や立らむ

朝霞

あさな〳〵なを風さむみ棹姫の衣手うすく立霞かな

はるをあさみまた空さゆる山風にたちもさためぬ朝霞かな
霞の衣たちもさためす

谷鶯

谷陰に鳴もかひなし花ならぬ岩木をはるの鶯のこえ

殘雪

うつもれし籬の竹の枝なからこほさて寒き去年の雪哉

若菜

立かへりあすこそつまめけふはまた雪間もみえぬ野への若菜を

行人の跡を雪まの野へに來てかたみの若菜つみもたまらす

里梅

里つゝき行手の風にさそはれてぬしさたまらぬ梅か香そする

はなはなを咲ぬかきねも吹かせに梅か香うとき里やなからん

籬梅

思ひ出るむかしやいつれ立花のかほりし宿の軒の梅かえ

はるの夜のみしかき軒はあけそめて梅か香白きねやの朝風

春月

夕まくれほのみし月の影なからやかて霞にふくる空かな

春曙

明る夜のひかり待とる山のはにひきわかるゝもおしき横雲

歸鴈

秋風の吹はと見ても葛の葉のうらみは春にかへるかり金

ゆく雁もさすか都の別(名殘)もやおしく明方の月になくらん

春雨

花にこそおしまんはるの一時に幾日おくるゝ雨のさひしさ

岸柳

春風の岸行水のゆふけふりすへはひとへになひく青柳

待花

初花

朝霞の光と計見しはなの日影に匂ふ色もめつらし

見花

花盛

いつを身のあくものにせん春毎の名殘を花に詠めそへては

散花のひとつふたつの色はあれと咲のこらぬを盛とはいはん

吹かせを枝にいとはて見る花の盛の色に物思ひゝなし

落花

うつろふは心つからになしもせて花にまたるゝ春風もうし

款冬

かたふきて咲こほるゝも山吹のはなには藁籬ともみす

池藤

吹過る木末の風に浪の音も松よりこゆる池の藤なみ

暮春

行ゑ(くれて行凉)なき名殘を空になかむれは雲ものこらぬ春の山の端

くれて行空をかきりとなかむれは雲さへ歸る春の山のは

更衣

はなの色のうつろひはてし行ゑとて袖さへかほる夏衣かな

卯花

分かぬる月と雪との中垣に咲卯の花の色はけたれぬ(に咲はなの色はけたれぬ卯木かきかな凉)

待郭公

時鳥いつより人をまちそめてつれなきものに音を惜むらん

聞時鳥

ほとゝきすなく一こゑを待つけて今はねぬへき日こそ覺ぬれ

子規稀

聲も今なるゝは須磨のあま衣きとをにもなく時鳥哉

古郷橘

さこはあれてふるき軒はの橘にたれとはしらぬ袖の香そする

早苗

うへわたす山田の早苗雨過て緑すゝしき夕日影かな

五月雨

幾重まてかさなる雲そ行はあれと晴まも見えぬ五月雨の空

鵜川

かひくたす幾瀬(里凉)を月に(月に同)かそへてや浪の鵜舟(の同)はさしのほるらん

叢蟲

夏草

たひ／＼にはらひ捨すは庭の面に陰たかくなる草葉をや見む

夏月

夕立

天津かせ日影を空に吹とちてゆふ立涼し雲のかよひ路

夏祓

あつさをもはらひや捨る大祓のよる瀬すゝしき波の夕風

早秋

いさけふは夏と秋との中川にうきせかへこぬ御祓をもせん

白露のまつなき初る草のはに風たにしらぬ秋や来ぬらん

七夕

片糸のあはすはなにを七夕や玉の緒はかり契おくらん

一夜ねてたえぬ思ひや七夕の夢のわたりの天の川橋

荻風

荻の葉のしほれぬ聲そ身をしほるやかて吹しく秋風も哉

秋風のこゑきく暮の荻のはに契やをきし袖の白露

萩露

咲そめん盛しられて萩か枝に色つきそむる花の朝露

杜蟬

ゆふ日影もりこそ夏の陰はあれと猶木かくれに蟬や鳴らん

女郎花

おみなへしかゝける花の色もうしけにあたものゝ露の契を

夕蟲

夕日さす淺茅かすへのきり〳〵すをのれもよはき聲に鳴なり

夜鹿

秋かせもまさきのかつら暮る夜の思ひを鹿の音にやなくらん

初鴈

けさそ鳴きのふかすみし俤もわすれぬ峯を越る鴈かね

秋夕

吹しほるをへて草木の夕露に我袖のこす秋風もなし

山月

秋風につもらぬ雪をはらはせて山のはしろくさゆる月哉

野月

うかれ行秋のよとのゝこも枕月にや露のやとりからまし

月見つゝ一夜は野へにねもしなんおはなか袖をひしき物にて

江月

涙はるゝ堀江の月にいく夜來てたなゝし小船漕かへるらん

あき風の水のうき霧空はれて江の涙遠くすめる月かけ

河月

影うつる川音たかく浪更て水なき空も月そなかるゝ

浦月

船出る浪の行ゑにあくかれて苫屋あらすな秋の浦人

籬菊

擣衣

曉霧

山路をはおくりし月の入跡にわくる麓の霧そ夜深き

岡紅葉

夕附日そむるもみちの色にこそ岡部の松も秋をわくらん

庭紅葉

九月盡

初冬

いつも聞軒はの松に吹かへてむへ山かせも冬そさひしき

時雨
我袖を跡まてぬらす時雨かな過てねやもる夜半の雫に
落葉
さそはるゝ行ゑやいつこ吹まゝに風の上なる塵の木の葉に
朝霜
寒草
冬かれて殘る木葉のうちなひくおはなに寒き風の色かな
千鳥
浦千鳥こゝもかしこもうき涙のよるの床をや思ひさためぬ
水鳥
宵のまは池の岩ほにねしかもゝ更てや寒き水になく聲
氷初結
冬月
鷹狩
野霰
淺雪
積雪
閑中雪
歲暮
寄月戀
寄雲戀
寄露戀
たのしみも今は仇なりあたし野の露の情もきえはつる身は
寄雨戀
寄風戀
寄山戀
くみて知れつれなき戀をするか成ふしのけむりのたえぬ思ひを
寄關戀
寄海戀
寄原戀
寄橋戀
寄木戀
寄草戀
寄鳥戀
曉のうき鳥のねもいとふましあはぬを夜半のならゐ成身は
寄蟲戀
我のみそ心みたれてほたる火のもゆる思ひに身をやこかさん
寄獸戀
逢ふとあらは千里もゆかん唐の虎ふす山をよし越るとも
寄玉戀
寄鏡戀
寄枕戀
寄衣戀
寄糸戀
浦松
窓竹
山家嵐
田家

古郷

海路

羇旅

述懐

神祇

祝言

爲兼卿家集補遺

続拾遺和歌集　戀四

忘れすよ霞の間よりもる月のほのかにみてし夜はの俤

新後撰和歌集　春上

弘安元年百首歌奉りし時

山さくらはや咲にけりかつらきや霞をかけてにほふ春風

入道前關白家にて庭落花といへる心をよみ侍ける

ちる花を又吹さそふ春風に庭を盛りとみるほともなし

荻風告秋といふことを

秋きぬと思ひもあへぬ荻のはにいつしかかはる風の音かな

山風にたゝよふ雲のはれくもりおなし尾上にふる時雨哉

戀

いかさまに身をつくしてか難波江に深き思ひのしるしみすへき

逢ことはたゝ思ひねの夢路にてうつゝはあさぬ夜はの關もり

我をたに忘るなとこそ契りしかいつよりかはる心なるらむ

弘安元年百首歌奉りし時

わすれ行人の契りはかりこものおもはぬかたになに亂れけむ

新千載和歌集

性助法新王の家の五十首歌に

風渡るきしの柳のかた糸にむすひもとめぬ春の朝露

高砂の松のみとりはつれなくて尾上の花の色そうつろふ

今はいや聞ふりぬへき五月雨の空にもあかぬほとゝきす哉

弘安六年八月十五日夜内裏にて月五首歌講せられけるに

おく露の光も清き庭の面に玉敷そふる秋のよの月

山田もるかりほの庵に露散て稲葉吹こす秋の夕風

秋ふかき籬の露も匂ふなり花よりつたふ菊の雫に

色かはる正木のかつらくり返し外山もくるゝあきの暮かな

性助法親王家五十首歌に

夜もすから置そふ霜の消かてに氷かさぬる庭の冬草

弘安八年住江に御幸ありて行旅述懐といふことを講せら
れ侍けるにつかうまつりける

ふりにける跡を尋て住江の御幸かさなる今日にもある哉

道洪法師すゝめ侍ける十首歌の中に

別戀の心を

一すちに心なき身とおもへとも憂をは袖にしる涙哉

建武二年九月十三夜内裏にて五首歌講せられける時お
なし心を

いかゝ（にイ）せんまた夜そふかき鐘の音に名殘つきせぬ曉の空

はかなくそ有し別の曉もこれをかきりと思はさりける

性助法親王家五十首歌に

うかりけるさのゝ中河さのみなと逢瀬たえても戀わたるらん

新拾遺和歌集

弘安元年龜山院に百首歌奉りける時

立かへり又きさらきの空さへてあまきる雪に霞山のは

弘安元年百首歌奉りける時

あれはてしむかしの故郷来てみれは春こそ花の都也けれ

伏見院卅首の歌に

なる神の音ほのかなる夕立のくもる方より風そはけしき

永仁元年八月十五夜後宇多院に十首歌奉りしに秋旅と云事を

故郷を忘れんとてもいかゝせむ旅ねの秋の夜はの松風

題しらす

海士のかるみるめはよその契にて鹽ひもしらぬ袖の浦波

かひなしやうきになしても一かたに思ひもこりぬ心よはさは

弘安八年八月十五夜卅首歌作し時落花埋庭

庭の面は跡見えぬまて埋れぬ風よりつもる花のしら雪

新後拾遺和歌集

弘安百首歌に

蓬生の露のみ深き古郷にもとみしよりも月そすみける

同

秋ふかき紅葉のぬさのから錦けふも手向の山そ時雨る

同

この里はしくれて寒き冬の夜の明る高ねにふれる白雪

同

海士のかる磯の玉もの下みたれしらせそむへき波のまもかな

同

さりともと心ひとつに頼めともいひしまゝなる夕暮もなし

新續古今和歌集

ほとゝきすきゝつともなき初音こそ夢にまさらぬ現なりけれ

弘安元年百首歌中に戀の心を

くやしくそ唯時のまのうたゝねにまたみぬ夢をむすひ初ける

同

はかなくも夢をうつゝと思ふこそまとろむほとの心なりけれ

柳風和歌集

永仁のころうへのをのことも歌つかうまつりける時

霞

春といへはいつもかすみの時にあれと猶山のはの夕あけほの

鶯

むめかゝは枕にみちて鶯のこゑよりあくる窓のしのゝめ

花

さそふ風もなさけなしるやよきて散花靜かなる春の夕くれ

首夏のこゝろをよみ侍りける

春ちかきみとりの山の朝くもり雲もかすみの色はなしけり

時鳥

月よりもまつさきたちて郭公夕山いつるむら雲の空

秋

風の音の哀そふにもなかりけり吹よはるしも秋の夕暮

月になる秋の心のいつくより我さへしらぬなみた落らむ

暮秋のこゝろを

木葉おち草葉しほるゝ秋の雨に詠るすゑも夕くれの空

玉葉和歌集

山中春望といふ事をよみ侍し

鳥の音ものとけき山の朝あけに霞の色は春めきにけり

家に歌合し侍し時春雨を
梅の花くれなゐ匂ふ夕暮に柳なびきて春雨ぞふる
春歌の中に
思ひそめき四の時には花の春はるのうちにも明ぼのゝ空（はイ）
花歌の中に
おもひやるなへての花の春の風こゝろごともといふらみいかは
彌生のつごもりの夜よみ侍し
めぐりゆかは春には又も逢とてもけふの今宵は後にしもあらし
夏歌の中に
枝にもる朝日の影のすくなさにすゞしさふかき竹のおく哉（きイ）
露おもる小萩か末はなびきふして吹かへす風に花ぞ色そふ
秋廿首歌めされし時
露の色ましばの風の夕けしきあすもやこゝにたへてながめん
院みこの宮と申侍し頃なのこととも題をさぐりて歌合し侍
し時月前懷舊といふことを
いかなりし人のなさけか思ひ出るこしかたかたれ秋のよの月
暮秋十首歌奉りし時
心とめて草木の色もながめおもふ人僕にたゞに秋の暮ると
月歌の中に
秋そかはる月と空とはむかしにて世々へし影をさながらぞみる
冬夕
たゆる日の時雨の後の夕山に薄雪ふりて雲ぞ晴行
題をさぐりて歌つかうまつり侍し時冬木と云事を
木の葉なきむなしき枝に年くれて又めぐむべき春ぞちかづく

百首歌奉りし中に夜旅
とまるべき宿をは月にあくがれてあすの道ゆく夜半の旅人
雨中旅
旅の空雨の降日は暮ぬかとおもひて後も行ぞ久しき
忍戀
さらにまたつゝみまさると聞からにうき戀しさもいはずなる頃
不逢戀
恨したふ人いかなれやそれは猶おもひみて後のうれへなるらん
忍待戀
人もつゝみ我もかさねてとひかたみたのめし夜はゝ唯更ぞゆく
待戀
まつことの心にすゝむけふの日はくれしとすれやあまり久しき
月前待戀
とはむしも今はうしやゝ明がたもまたれずはなき月の夜すから
戀歌中に
時のまも我に心のいかゝなるとたゞつれにこそとはまほしけれ
寄夢戀
なくなくも人を恨むぞ夢にみてうつゝに袖をけにぬらしぬる
題しらず
戀しさもみまくほしさも君ならでまたは心におぼえやはする
恨戀を
ことのはに出しうらみはつきはてゝ心にこむるうさに成ぬる
絶戀の心を
ありし世の心ながらにこひかへしいはゝやそれに今までの身を

戀の歌の中に

つらき餘りうしともいはて過す日な恨みぬにこそ思ひはてぬれ

うれふる事侍し頃

もの思ひにけなはけぬへき露のみなあらくな吹そ秋の木からし

海邊眺望な

浪のうへにうつる夕日の影はあれと遠つこ嶋は色くれにけり

山家嵐

やま風は垣ほの竹に吹すてゝ嶺の松よりまたひゝくなり

龜山院かくれさせ給にし比去年の秋後深草院うせさせ給しな又程なく哀なる御ことなと女房の中へ申送り侍とて

ふたとせの秋のあはれは深草やさか野の露もまたきえぬ也

般若心經の畢竟空の心を

むなしきなきはめなはりてその上に世なつれ也と又みつる哉

春日社にまうてゝよみ侍し

頼むへき神とあらはれ身となれりおほろけならぬ契なるへし

風雅和歌集

春たつ心なよめる

あし引の山の白雪けぬかうへに春てふけふは霞たなひく

題しらす

しつみはつる入日のきはにあらはれぬかすめる山の猶奥の峯

鶯

うくひすの聲ものとかに鳴なしてかすむ日影はくれんともせす

梅

重出

梅かゝは枕にみちて鶯の聲よりあくる窓のしのゝめ

春雨な

はるの色なもよほす雨のふるなへに枯野の草も下めくむ也

さひしさは花よはつかのなかめして霞にくるゝ春雨のそら

題なさくりて歌よみ侍けるに河上春月といふことな

うちわたす宇治の渡の夜深きに河音すみて月そ霞る

伏見院西園寺に御幸ありて花の歌人々によませさせ給ける時

宿からや春の心もいそくらむ外にまたみぬ初櫻かな

落花なよめる

一しきり吹みたしつる風はやみてさそはぬ花も長閑にそちる

暮春浦といふ事な

春のなこりなかむる浦の夕風に漕わかれ行船もうらめし

題しらす

夏淺きみとりの木立庭遠み雨降しむる日くらしの宿

郭公な

おりはへていまこゝになく時鳥きよくすゝしき聲の色哉

題しらす

松なすらふ風はすそ野の草に落て夕立雲に雨きほふ也

秋歌の中に

あはれさもその色となき夕暮の尾花か末に秋そうかへる

吹捨て過ぬる風のなこりまて音せぬ萩も秋そかなしき

秋風に浮雲たかく空すみて夕日になひく岸の青柳

夕日うつる柳の末の秋風にそなたの雁の聲もさひしき

伏見院御時六帖題にて人々歌よませ給けるに秋雨な

庭の蟲は鳴とまりぬる雨の夜の壁に音するきり／＼す哉

月の歌とて

月の色も秋にそめなす風の夜のあはれうけとる松の音かな

野分を

野分たつ夕の雲のあしはやみ時雨にゝたる秋のむら雨

河霧を讀侍ける

朝あらしの峯よりおろす大井河うきたる霧も流てそ行

題しらす

ふりはるゝ庭の霰はかたよりて色なる雲そ空にくれ行

雪ふりける日日吉社へまうてけるに山ふかくなるまゝ風吹あれて行さきもみえす雲立むかひ侍ければ

行さきは雪のふゝきにとちこめて雲に分入志賀の山越

三島社に奉らんとて平貞時朝臣すゝめ侍ける十首歌の中に松雪を

山おろしの梢の雪を吹たびに一くもりする松の下蔭

夕雪

くるゝまてしはしはゝらふ竹のはに風はよはりて雪そ降しく

鷹

谷こしに草とる鷹をめにかけて行ほとをそきしはの下道

五十首歌よみ侍けるに旅

めにかけて暮ぬといそく山もとの松の夕日の色そすくなき

あつまへまかりけるにやす川を渡るとて

やす川といかてか名には流れけんくるしきせのみ有世と思ふに

あつまへまかりける道にてよみ侍りける

たかせ山松の下道わけ行は夕風吹てあふ人もなし

旅歌中に

故郷に契りし人もねさめせは我旅ねをも思ひやるらん

結ひすてゝ夜な／＼かはる旅枕かりねの夢の跡もはかなし

寄樹戀といふことを

初時雨思ひそめてもいたつらに槇の下葉の色そつれなき

百首歌の中に

頼まれはまたぬになして見る夜半の更行まゝになとか悲しき

題しらす

暮ぬとてなかめすつへき名殘かはかすめる末のはるの山のは

後山本前左大臣左大將に轉任して侍ける次の朝申つかはしける

時わかぬ君か春とや橘の蔭もさくらに猶うつるらむ

永仁二年三月大江貞秀藏人になりて慶を奏しけるをみて

宗秀かもとに申つかはしける

めつらしきみとりの袖も雨のうへの花に色そふ春の一しほ

あさき夕といふことを

もりうつる谷に一すち日影みえて峯も麓も松の夕風

雜歌の中に

大空にあまねくおほふ雲の心國土うるほふ雨くたす也

物としてはかりかたしなよはき水におもき船しも浮ふと思へは

題しらす

大井河はるかにみゆる橋のうへに行人すこし雨の夕くれ

岡のへやなひかぬ松は聲をなして下草しほる山おろしの風

見るとなき心にも猶あたりけりむかふみきりの松のひともと

應長元年八月竹林院前左大臣かさりおろして侍けるを聞て申つかはしける

かた／＼にをしむへき世を思ひ捨てまことの道に入そかしこき

雜歌に

あふきても賴みそなるゝいにしへの風をのこせる住よしの松

戀のうたとて

おもひけりと賴みなりての後しもそはかなき事も人よりはうき

伏見院御時六帖題にて人々に歌よませさせ給けるに一夜へたてたるといふ事を

夜かれそむるねまちの月のつらさより廿日の影も又やへたてん

寄雲戀

物おもふ心の色にそめられてめにみる雲も人や戀しき

思ひとりし昨日のうさはよはれはやけふは待そと又いはれぬる

仙洞五十番歌合 乾元二年四月廿九日

春風

さそひ來る梅や櫻の色香にて風なつかしき正月如月

夏雨

秋近き野はらの草の夕かけにむら雨降て風そ涼しき

冬雲

みねの雪をむら／＼雲に吹交て渡る嵐はかたもさためす

戀夕

暮每に思ひそまさる待し頃うさ哀さにかはるいまゝて

歌合 乾元二年五月四日

夏夜

月影はまた更ぬとも見えなくにみしかき夜半は鳥鳴ぬ也

絕戀

雨舌も賴む名殘の有しよしたえはてぬれはこれも戀しき

庭松

としへてもかはらぬ色そなつかしき君住宿の軒の松か枝

爲兼卿家歌合

春朝

さたかにはその色となきけしきにも唯春めける今朝にそ有ける

春夕

梅花くれなゐ匂ふ夕暮に柳なひきて春雨そふる

夏朝

朝あけのまかきの竹の淺みとりなひく若葉に露そ涼しき

夏夜

庭しろく袖に涼しく影みえて月は夏とそ又おもはるゝ

秋朝

朝風は梢にあらく吹過てくもりもあへぬ秋のむら雨

冬朝

けさしはや雪はふりきぬ山風のあれつる夜はゝこれにそ有ける

冬夕

秋の名殘なかめし空の有明に俤にたる冬のみか月

冬夜

こしかたの戀しきうちに戀しきはとよの明りを月にみし頃

戀朝

戀まさる心のまゝになかめしてしくれぬ時なけさうつしぬる

戀夕

暮かゝる空にむかひぬ物を我思はしとても入あひのこゑ

十六夜日記

大宮の院の權中納言の許より道のほとのおほつかなさと音つれ給へる文のついてに此せうとの爲兼の君もおなしさまにおほつかなさなとかきて

古郷は時雨にたちし旅衣雪にやいとゝさえまさるらん

佐渡國にてよみ給へる長歌文字くさりゆふ襷といふ物の歌なと物に見えたるを爰にあく

あら玉の年も越ぬとあふ坂の關さへあけて霞むこのしたふる雪に昔のあとを尋てやわか菜つむらんたかまとのをの此ほとは川音たてゝうちとくる氷のひまにのこるしら波時そとてひもとく梅の玉かつら心にかけてみるやわきもこなりけんと花をもみすは鶯の波よりほかに聲やきかまし待侘しはつねをそきく郭公しのひしほとはしはしはかりかたちはなの香をなつかしみ夏衣袖そ涼しき風のふくかも今はゝや夕立しけりいかはかり露けかる覽森のしつくの津の國のあしまの螢ほの／＼と明行よはの野にも見ゆるか川の瀬に清きみきわの御祓せし跡より秋の風は吹かは春夏や秋霧かけて泊らはや夜半も吹飯のはまになるなみとまり船苫引捨てゝ夜もすから滿くるもしほみて明しつゝ夕暮は野原おしなみ鳴鹿のあはれをそへて露むすふ草ふるさとの庭の朝貌吹風にむしの音そへて寒きころもて誰もはた惜むかひなく秋も早とまらて行かてまの關にもすきのやに降音す也神無月しくるゝころそのもろきこのはか聞しにもあらぬ嵐のさら／＼に音さへ今はあまりてそ吹かきくらしふる泡雪のつもるまて猶山深く雲かゝれたゝけふまても狩場の眞柴そよさへて嚴そ寒きたまはこゝのへ慕へとも猶暮はてゝむは玉の一夜にふしをへたてつる哉契りしも僞にしてうき人を忘れんとすれはなしとことのはかくはかりあひも思ぬあふことを頼む心のはてはつらきかひまをなみうらみそまさる麻衣ぬるゝ袂にかゝるしら波おのつからとにも恨めし人心憂在(ウカリ)しまゝの身そと思ふを數々に猶そ戀しき月日へはわすれんとのみ思ひける哉見しもうしきゝしも人の思ひより立や烟のなひく夕へを西に通ふ我こゝろとそ極樂の道のしるへと思ひしらすや待ことの猶とし月のあけくれて積れは老とやかてならぬか掛卷もかしこき賀茂の葵草のかけてそ頼む神のみこまこせを早み流れて早き水くきの跡はかりみゆこれそうたかた手を折てかそへつゝみむ萬代を神より外は誰かしらなむ

有三十一首なり又一首のかしらの一字を横によめは

あふことを又いつかはとゆふたすきかけし誓ひを神にまかせて

又一首の下の一字を横によめは

たのみこしかもの川みつさてもかくたへなは神を猶やかこたむ

有合て三十三首

佐渡志といふふみに云此卿こゝにおはしけるほと五月雨

山といふ所にてよみ給ひしといひ傳へたる歌

としなへてつもりし越の湖はさみたれ山の森の雫か

藤爲兼卿傳

藤大納言爲兼卿の事は公卿補任に故從二位爲敎卿の男母は故修理大夫三善雅衡朝臣の女建長八年正月七日敍爵正嘉二年二月廿七日從五位上同年正月廿一日任侍從文永四年正月五日正五位下同五年十二月二日任右少將同七年正月六日從四位下同十二年正月六日從四位上建治元年十月八日任左近少將同四年正月六日正四位下二月八日兼土佐介四月十一日轉右中將正應元年七月十一日補藏人頭同二年正月十三日任參議四月廿九日敍從三位同三年正月十三日兼讃岐權守六月八日兼右兵衛督十一月廿七日轉右衛門督十二月八日敍正三位石淸水賀茂行幸行事賞同四年七月廿九日任權中納言同五年七月廿八日敍從二位六月帶劒永仁二年正月六日敍正二位同四年五月十五日辭權中納言同六年三月十六日座事乾元二年閏四月自關東蒙免除自佐渡國被召返延慶三年十二月廿八日任權大納言明年正月御元服上壽也同四年十二月廿一日辭權大納言正和

元年八月廿三日聽ニ本座ニ同二年十月十七日出家依ニ上皇御出家ニ也法名蓮覺後改ニ靜覺ニと見えたり又補任毎年の下にしるせし卿の御齡の中にはひが書も見ゆれど正しとおもふ方につきて考れば建長六年の誕生なるべしそれよりかぞふれば正應元年　伏見院女御入内の御時に頭中將爲兼朝臣御消息もて參れりと增かゞみに見えたるは此卿卅五歳の時にあたれりおもふに此比よりやおほやけにも殊に用ひられ給ひけむ正三位の權中納言に任ぜられ給ひし永仁六年は四十三歳ならんかくて其島に六とせ在て乾元二年歸洛し給ひし時は既に五十歳也其後四五年を經て延慶中に爲世卿と撰者の諍論ありしは五十五六歳のほどなるべし扨　伏見院の勅によりて玉葉集を撰みて奉られし正和元年は五十九歳出家して法名蓮覺と申しは六十歳の冬にて同四年の冬ふたゝび六波羅にとらはれ給ひしは六十歳の時にてやおはしけむ免除の沙汰はいづれの年なりけん記したる物も見えざれど猶建武の末迄もながらへおはしけるよしは新千載集の歌の詞がきにみえて其比八十餘歳に及び給ひぬらむとはおしてしられたりその後　萩原院の風雅集の撰みおぼし召たゝせ給ひし康永の比迄も猶老くちずおはしてことくはへなどもし給ひしにやと思ふよしもあれどしひごとならんかすべて終り給ひし年月を記したる物をいまだ見ざればさだかにはいひがたけれど此御子左の御ざうは長壽の人多くて九十のうへ迄もながらへおはして然も老ぼけず若き輩にうちまじりて歌をもよまれけるためしあればさることなしともいふべからず既に新千載集の戀五に　建武二年九月十三日夜内裏にて五首歌講ぜられける時おなじ心を前大納言爲兼はかなくて有し別の云々といふ歌を入らる今年八十二歳か又同集に建武二年内裏にて人々題をさぐりて千首歌かつうまつりける時戀天象と云ことを前大納言爲世下もえの我身よりこそ云々といふ歌をよまれけるよし見えたり此時爲世卿御年八十七歳なるべし抑爲世卿は爲兼卿に五歳の長者にて先官といひ殊に嫡流なれば我にきしらふ者なしとおぼしけれど爲兼卿又すぐれたる歌道の達者にて上下の用ひいみじくおはしければつねにねたき事に思はれしとか彼增かゞみに院の上(伏見院)さばかり和歌の道に御名高くいみじくおはしませばいかばかりかとお

ぼし丶かども正應の撰者どもの事ゆゑわづらひどもありて撰集もなかりしかばいとゞくちをしうおぼされて

我世にはあつめぬ和歌の浦千鳥むなしき名をやあとに殘さん

などよませおはしましたりしを今だにいそぎた丶せ給ひて爲兼の大納言うけたまはりて萬葉よりこなたの歌どもあつめられき正和元年三月廿八日奏せらる玉葉集とぞいふ此爲兼の大納言は爲氏の大納言の弟に爲教右衛門督といひしが子なりかぎりなき院の御おぼえの人にてかく撰者にもさだまりにけりそねむ人々おほかりしかどさはらんやは院の上好みよませ給ふ御製の姿は前大納言爲世のこ丶ちにはかはりてなん有ける云々といへるをみれば其世のさまかつかつ意得らる但し此兩卿のそねみかはされしもひと世の事ならず祖父入道大納言爲家卿の沒後より爲氏爲教の兩卿兄弟の御中そば／＼敷何事につけてもいといたくいどみかはされたりきかの爲氏の大納言はおしたちかど／＼しき質にてやおはしたりけむ弟達をいつくしむ心露おはさで爲教卿をおとしめにくみ給ふのみならず爲相卿の相傳ありし播磨の細河の莊をさへ横さまにおし取などいと殘忍なる所爲どもの有けるやらん物には書傳へたり又續拾遺撰集の事にて兄弟あらそひ有し時爲教卿にはかにやまひつきて既に死ぬべくおぼされしかば

かぎりある命を人にいそかれて見ぬ世の後をかねてしりぬる

とよみて身まかり給ひにければ其比これを口ずさみにして世にはさま／＼に沙汰しけるとなん此歌のさまいかさまにゆゑ有しことならんかし爲世卿も猶その質をや受つぎ給ひけむ一族の中にても評論つねにたえずおはしけり爲相卿の都を出て鎌倉に下り爲守朝臣の歌道を廢して出家し給つるもみな爲世卿によりてのゆゑ也とかや此比は歌の道三つに別れて彼はこれを譏りこれはかれを破らんとかまへたりし中にも持明院の御方には爲兼卿のまめなる風體を好ませ給ひ大覺寺殿の御方には爲世卿の艶なる姿を執しおぼし召れければ自然に此兩家のいどみ殊更にて其門葉の末々までかたみに讎敵のおもひをなしけりとぞ然るに爲兼卿は永仁にいたりて　院の御おぼえ他にすぐれ歌道の繁昌時を得たまひければ爲世卿ならぬ人達迄もあいなく／＼そねみにくみて野守の鏡などいふ

書をつくりて彼卿の歌のさまをいたく難じ申されけりそれに爲兼卿のうたとて

なけとなる有明かたの月影よほとゝきすなる夜のけしき哉

荻の葉をよく／＼見れは今そしるたゝおほきなる薄也けり

といへる兩首を出して種々の難をかゝれたれども其論さらに當れりとも覺えずもとより此卿は當時の浮花なる體をこのまれず萬葉集のいにしへにもとつき歌は實正によむべき物ぞと人にも敎へ導き給ひしかは詞をもかざらず姿をもつくろはすたゝありによみ給ひしも多かりつらんそれとてもそらごとをかまへ詞をかざりていつもおなじさまなることをつゝけよみたる其比の歌にはまさりぬべし心敬僧都が老のくり言にむかし爲兼卿爲世卿と歌道の訴陳侍しに爲兼卿申給ひしとなむ我はせめて一萬餘首仕侍り爲世卿は歌七百首には過べからずそれにてはいかでか歌の旨をば存知侍らむと申されしと見えたりさる達者にて口にまかせられたる中には平懷なる體もなどかまじらざらんさばかり多き歌の中よりたゞ此兩首をのみ擧てこと長く難じ給ひしは又外にそしるべき歌のなかりけるにやとおもはれて中々に爲兼卿のほまれにこそと物わきまへたる人は申たりきすべて此野守の鏡うへは清げにした濁りて取見べき物にもあらず多く偏執より出たる僻言のよしをやつがりさきに論じ置たれど位山のぼりはてしよき人の御しわざときけばかしこさにこゝにはいはずかうざまにそねめる人多かりし故にや此永仁の末此卿隱謀の聞えありとて佐渡國に流され給ひしに實はそら言なりければ後に關東の免除ありて乾元二年閏四月歸洛ありてもとのつかさかへされけるよし保曆間記公卿補任等にしるされたりければそねめる人々の猶胸あかずおもひて撰者の事にとかくさはりを申延慶に又爲世卿と諍論おこり兩卿の訴陳しば／＼なりしを爲兼卿の陳狀道理にやかなひけん遂に玉葉の撰者をばうけ給はり給ひけり此時の事とかや爲世卿の訴狀に「爲兼卿は當家三代の風體を詠せず自己の一流を立て定家卿の遺訓にもとれり」と訴へその證にとて祖父相傳の書どもを引出されしも誠はみな僞り書にて僻案集、桐火桶、三五記などいへる書どもゝ時にあたりて爲世卿の作られける物也と近き比に成てほの／＼世に沙汰し侍るはまことにやあらんいかゞ侍りけん未來記、雨中

吟の兩書は玉葉風雅の御集をかしこくもいひやぶらんとて二條家の門人たちの作り出て例の定家卿の名をかりたる物ならんとはやく戸田茂睡翁はいはれたりき扨正和に玉葉集出來てよりはます／＼爲兼卿の風體世に行はれ毘舍門堂一流と稱して上下まなびよみければ偏執の人々はいよ／＼妬忌をましていかで此卿をなきものにせんとまでそねまれつらん撰集の後程もなくふたゝび六波羅に召とられ給ひにけり兼好法師がつれ／＼草に爲兼大納言入道めしとられて武士ども打かこみて六波羅へゐて行けるを資朝卿これを見てあなうら山し世にあらん思出かくこそあらまほしけれとぞ申されけると書しは此時の事也かの書の諸抄に永仁六年の事をひきたるはたがへりいかなれば此卿ふたゝび迄かゝる難にあひてとらはれ人とはなり給ひけん不幸ははなはだしけれどつら／＼思へば其身朝廷のきり物にてまめなる心おはしける上に歌道にさへ長じ給ひてならぶ人又なかりければいづかたにつけてもふかく妬まれ給ひたる故なるべしこれはた高名の人に必ずあるならひなればかへりては御身のほまれとも申べくや資朝卿のあなうらやましとの給ひし事を思へばみづからの犯し有しにはあらで君の爲に身を忘るなどいへる勇ましきこゝろざしもおはしゝ人なるべし扨こそよみ給へる歌も雄雄しくていつはりかざれるふしはをさ／＼見えざりしかそれには事かはりて爲世卿はやさばみかざれることをむねとし給ひけると見えて今川了俊入道の和歌所へ出されたる不審の中に云爲世卿は態と人のおほく見申候時稚き御子孫達に短尺と蹴鞠をもたせ申され候て歌鞠の兩道御たしなみ候と人に見せられ候ける又内裏にて節會の夜きぬかづきを御けさう候けるを此女房あらけなく突倒し申てあの年やうしてと申ければ起直り給ひて

はかなくも人の心のあら礒におもひかけたる老の波かな

とよませ給て候けるとかや是は其前年の春の節會に此おなじ所にて爲兼卿かくの如く衣かづきをけさうせられけるに夜さりよと仰られ候ければ此女房見返りてあの顔やうにてと申て逃のきける袖をひかへて

さればこそよるとは契れかつらきの神も我身もおなし心に

とよみ給候けるをやさしきためしに申候ける事をききて後に爲世卿の家の女房をきぬかづきに作りたて

られ候て老の波の歌をばよませ給て候けるを守季と申者しりて語候し云々とあるをみればとかくに爲兼卿に劣らじときしろひ給ふ餘りにはかゝる心きたなき事をもし僞書などをも作られけるにやと疑ひ思はれ侍るされど此卿は幸ひ人にて息女爲子典侍と申けるは　後醍醐帝の御いつくしみ深く第一第二の皇子の御母にさへおはしければ此御ひかりにて御代のはじめに續千載集を撰ばれなどして又此かたに勢うつりにければ爲相卿爲兼卿もやう〳〵にけおされ給ひて只此二條家一流のやうになりて當家によらざれば歌といふ物にはあらざる如くいひなし種々の掟どもとし〴〵におほくなりもて行玉葉、風雅の勅撰をだに邪路なれば見る事なかれといましめられしかば爲兼卿の歌などはまして口遊びにもするものなくはて〳〵は何ゆゑにかく忌嫌ふぞといふことわりもしらでひたすらにいひ落しにければ四百餘年の今に至りてはさる名高き歌人おはしけりとだにしらぬ輩さへあるは歎かしとも歎かしき事ならずややつがりはやく此卿の風體を好みて玉葉、風雅をつねにくりかへしながら猶あかずして此卿の御集世に傳はりてあるものならばいかで見てしがなと神佛に申さぬばかりにねがひをりしにさいつ比都にのぼりてやごとなき御あたりのしかもいにしへこのませ給ふ御方へめされて何くれと御物語のついで爲兼卿の御うへにおよびてかの御集のことを聞へ出ければその御あたりにもこの卿を慕ひおぼしめしける故に其集かねてをさめ置給ひつとてやかでうつくしう寫させてたうびたりきそのよろこばしさ何にかたとへ侍らんおしいただきもち歸りて見侍りしに正本は中院大納言通勝卿の御手跡にて妙壽院殿の御所持ありける御本のよし奥書に見ゆ歌數二百七十五首こと〴〵く新奇にして然も詠物の正義を失はず本として歌よまんにはこれにこす物あらじと夫より後身をはなさず家の寶としてさし置つるを椎園のあるじはかねて珍書を好める人なればとり出て見せたりしにいたく珍重してかく有がたきものをひとりもてあそばんよりおなじくは板に彫らせて世の人にもしらせよかしとしりかきをさへ書て返されければげにもとおもひたちて此外にこれかれの集にて見及び置つる此卿の歌百八十餘首を本集の末に補ひ附るついで本集の中にもまたく寫

し誤りたりと覺ゆる所々にはかしこけれど愚按を傍に書つけなどして都て四百六十四首ふた卷としてふみ屋にあたへつかはる事はいともおほけなきわざながらこは彼三代宗匠の沒後歌の道も何事も猥かはしき世に出給ひながら人々のよみふるされたる跡によらずいにしへぶりによみあらためんと一家の風をたて制の詞などいふわづらはしきこともなく見るものきくことにつけてひたぶるによみすゑられたる此卿の心ひろさ才のかしこさをあまねく世にしらせて僻案以下の僞書どもに惑はされて琴柱に膠する輩の眼をひらかしめんとてのしわざ也けりよしや正道をしらずして邪路にみちびくゑせわざなりと譏りにくむ人ありとも我は無學無智にして道理に通じ歌學をもつとめざれば歌をもよむことなくたゞ歌の道の僻言を悲しむといはれたる梨の本の一樹をたのむ蔭にて水無月の照はたゝく日をもいとはず汗とゝもにかきしるす

としの名文政とあらたまりたる日より

三十日ばかりの事になむ　北川眞顔㊞

いまはむかし玉葉集えらひたまひし大納言爲兼卿なんあやしく其ころの歌口にはおはしけるさるものからかの卿のうたの今やうすがたなるを玉津島の御神も和歌の浦に御耳をやあらひたまふらんなどいひかたぶけたることのふるくも聞えたるは歌のよみくちのすぐれたるもふのみかは世のきり人にさへおはしければねたくやすからず思はれてのわざにやあらむさばかり人のねたみいとふまで時の歌仙にていませしをいかゞはしけむ家の集の世にありともきこえざりしを北川眞顔のぬしさいつころやごとなきあたりよりもとめいでゝ文櫃のそこにふかくひめおかれしかどかくてしみのすみかとなしはてなましかばいまだにかく得がたかるをまして後にはひたすらなきものにやなりはてんとて板にはゑらせられしにこそこの集のかくおほやけになりぬることは歌の中みちふみならせる人たちのいとよきしるべならむかしさればこの集見ん人かのくもりがちなる野守の鏡にこゝろうつさで北川のきよきながれにこそよるべけれつちのえとらにあたれるとしやよひつごもり岸本由豆流しるす

惺窩先生倭謌集

序

いでや此やまと歌はそさのおの神風より吹つたへてをのか家々の柱を折人世々にたゆる事なしこゝにわか先生せの山人なんもとひやゝかなる泉のなかれより出てつゐにくしのひしりの道のみなもとをきはめ文てふ文をよみつくすとはいへれとなをあきたらぬすさひにやこゝろをわかの浦浪によせてかひやりすてしもしほ草を今はたひとり誦しみれはそのすかたふるめきてことはけとをく聞とかぬ事のみおほかれとうまくみてはらにあちはふ人あらはその心まことなきにはあらさるへしされは世のもとゝろをすつるともからとさらにかたるへからす爲景むけにいはけなくまた小學にたにいらぬほとにてをくれたてまつりしかはかてを千里の外にをふに力なくふみを一牕の中に學ふにたよりあらすやをらあれ行故郷にたてる四の壁もかたふきてうかつとなきひまあらはにをのつからとなりの燈もひきつへしやゝふはこをおひて行かよふとせしほとにはからすして垣上人も竹の林の光かくれにしかはみなれ棹さしてをしへむ人もかなと志賀津の海士の捨船のゆたのたゆたによるへなき心ちせしをたまゝゝ玄同子情有て書を講し詩をときて我たらちねに請し恵の露はかりたにむくゐんとはけみしもかひなくあらぬわさはひにあひぬをのれあまさへおもき病ひにさへをかされ藥をにる埋火のもとにむかひていたつらに年月ををくりしかいつら宮つかひし後はひたすらになたのしほやきいとまなくてつけのをくしのとりも見ぬふみはむなしくしみのすみかとなるもねたからすやもし人有て名たゝる跡のことの葉やいかにとゝばゝうさきの裘ともこの集をやこたへ侍らむさてもこれをえらへりしは行水のはやくの事なりしかとひそかにかうかへあはすめれはそのあやまちちりひちのことしまゝにはらへはまゝにおほきためしはけにもしられぬるをよそに見てたゝにやまんはかつふけうに似たれはみつからこれをあらためしかも猶のこれる玉を伊勢の海清き渚にひろひいてふたゝひこゝにかきつめ侍るまんなは民部卿法印道春とゝもにはかりかんなは西山前少將

入道にとふらひ公軌をしてうつさしめやかてあつさにちりはめんとすゝへて十あまり五巻なつけて惺窩文集といふゆたかに長きはたちの年の長月十二日先生廿五回の正忌にあたれりいさゝかこれをしるしてかつとをきをおふ心さしをのへ侍る物ならし

惺窩先生倭謌集巻第一

春部

立春

かすみつゝそれともわかすあめつちの初めもかくし春や立らむ

春のまたたつらん門のけふに明てしりくめなはのくり返しつゝ

棹姫やはなのかつらをかけそめていろなる雲の今朝はみはらん

おもかけはおもひそめてし色にけふまつ咲花の春や立らむ

何となくひとの心のゝとかなるそらにうき立はるにやあるらし

風のやまひにをかされし年の春

花にのみいとひなれこし風のなを身にいたつきの春は來にけり

はかなくもまた咲はなと頼むかなみに幾たひのはるをかそへて

依風知梅

玉すたれさなからこゝも咲梅のにほひにこもるよそのはるかせ

柳先花綠

春の錦綠のいとのたてはあれとはなをそけなるぬきもあるかな

花經暗水

ちるはなのをときく水のうき枕夢路もかほる春のうたゝね

靈山にまかりて花を見てよめる

春ことにおもふ物からあらぬ世の花もこゝろをけふみてしかな

花の比人のさそひけるにいたはることありてまからさりけれは

例ならぬ身はふしなから花のかけこゝろは人になくれやはする

花

世のうさをよそのしら雲かほりつゝ花はいつくもみよしのゝ山

溪水の月影かほるはなの枝ははつ雪またぬゆきのあけほの

山かけの雪に棹さす舟やいつれはなよりいつる春の三日月

四の時おもへはおなし一とせにはなにあやしきはるのほとなさ

いつはりの花にもわかぬ世なりけりたかきことゝやみねの白雪

旅衣あやないつこのはなのかけれてのあさけの香にのこり行

山人のつま木のつてにみし花のいろなき袖もかにゝほひつゝ

かめにさすはなにも千代を契る哉ちれは櫻のとしことの春

誰駒やつなきし峯のいはほよりをちくる水にはなそなかるゝ

はなかつらそれかと匂ふきみかあたりあたにいさむる峯の白雲

吹やいかになのか枝ならぬ香に匂ふはなさくはかりみねの松風

枝たかみおもふこゝろのかよへはや手折ぬ花の袖に落ぬる

迷ひなのこらむ物をさく花におもひつくみの春のころもて

かさゝすはくふへき物を花たにもはつへき老の行末のはる

月もはや夜やふけぬらん更ぬとてたちさりぬへき花のかけかは

たれも見よ惠の雨のいつしかにうつれはいとふはなにふる世に

春雨

さひしさも世にふりかへつやま里をうきに忍はぬごころもはる雨

春雨の親のいさめのいろにさくはなをしみれは物おもふ身や

春雨よぬるとも花の色にいてはそめはや殘る春のころも手

相國寺幻菴上人むらさきつゝしを贈りける返事に

紫のはいはをくるとはるは見んつゝしの色にのりのころもを

棠杜鵑花

あけうはふ色にくまるゝ身を恥てほとゝきすくろ花のむらさき

海棠

あかぬよのはるの燈火きゆる雨に眠れるはなよれふらすを見む

春山家に友をこふると云事を

春霞そなたにとはぬやま里のかきねの柳雲のそこなる

正月二日由山居士の許へ衣をおくるとて

作かため春のころもはうすけれといはふこゝろを重ねそへつも

題しらす

ほろ〳〵ときしのはれ音をとつれて人こそ見えねめをさまし宛

ともに見し面影かへてはなになきとりにおとろくはるの空かな

暮春

日は春とくれ行そらのしたはしく名にはつなかぬ絲さくらかな

おくれこし深山かくれの櫻はなちるをもまたて春やくれまし

三月盡

はるはゝやけふ月なみのさそふ見つ花の行ゑに身もなかれてよ

明ぬまの花にやかゝけつくさまにさてもわかるゝ春のともし火

三十のやのかすさへけふのしたはれてくれゆく春のはなの小車

夏部

子規

山の端の月におくれぬほとゝきすなそへもあたの窓のともしび

勝熊か歌に「子規をのか稀なる聲よりは待てふ人をきか
ぬこころ哉」とよめるを聞てつかはしける

なれさへやくたり行世のほとゝきすまたぬに來鳴里のあまたに

信澄か歌の返しに

夏草のみとりにうつむまとのうちにこゝろあれなと月の夕かせ

あはれしれ人の情はかたき世のみなみのかせの音はしてまし

五月雨

はれくもりいくたひけふもあすか川ふち瀬を庭の五月雨のころ

夏月

夏の夜の蟲の音いそくすゝしさにこほりをかたる庭の月かけ

すかみのゝ袖打はらふゆふたちの殘るしつくに月そこほるゝ

蓮

はちす葉の濁にしまぬ花をしもとれはとらるゝたをやめの袖

納涼

涼しさはなをむすふての水よりもすむやこゝろのしつかなる暮

燒しほの關吹こゆるけふりさへすゝしくなひく須磨の浦かせ

團のおふきに書て人につかはしける

時しもあれてる日のもとのあつけれはあふきても見よ諸越の風

題しらす

この比の夏のあつさの人こゝろおそろしき世をひとりかもふる

かたるなり友こそ夏をそよさらにそかひにみゆる竹の葉の風

長嘯子の歌の和答に

麥たゝよはしけん人の昔の夏の雨はふりにたりしをふみな
んすしけむ今の庭の面にもまたそ詠たよふる言葉けにさこ
そうつり行らめと雨も人の心もはたかはらぬことはりもあ
りけりなさはいへと槇の戸の明なからなる枕の月は人わき

して色ことなる涼しさもなしとはいへらす
ほすむきなふみにわする丶庭の面にのこるむかしの夕たちの空
心なしおもへはおなし夏の月もたゝ秋にかさやほす丶しき

惺窩先生倭謌集巻第二

秋部

秋

日の色も秋はさらなりそめつくすあはれな月にゆつりすてつゝ
たか秋の夕な染てさひしさのいろとしたてる槙のしたいほ

初秋

つゆよかせよあかしよりけにたゝならぬ夕はまたし今朝の初秋

七夕

ことの葉のあやに戀しも織女は人のねかひのいとならなくに

荻似人来

人はかる荻のうれはのそよさらにひらかしものな柴のとほそよ

草花非一

植なきしはなの數さへ八千種にあきのこゝろの色そみたるゝ

秋夕傷心

さひしさの秋のいつこか外ならんゆふへなやとす心つからに

蘭

ふちはかま誰かゆふ路にか通ふらん野ななつかしみ秋の夕かせ

月

たえてやは人はしのはむ草の菴に月もすみけり我もすみけり
雲埋むまさきのかつら月はもりぬさてやこの世も住ぬへきみな
晴るまの雨にかりほのとまなあらみもりにしほとはもらぬ月影

世にふるやさそなためしも有明の月の行衛にかゝるむらさめ
花にいつれ色はへまさる朝日かけにほひしまゝのありあけの月
なか〳〵にくもれは晴るつきもみつさためなき世のうき雲の空
見ましかはかたふく影や惜むらむ雨におもひ出のあり明のつき
廣澤の草のかりねのつきに行雲の夢路もゝろこしのそら
秋かせにみたれそめにしくろ髮はたれをあるしのやとの蓬生
あさちふやたかなみたにかなれし月こよひ都のにきはゝしきに

八月十五夜

めくりきぬ月をやためし人のよもいつかはこよひ秋のなかはの
世中よくたりはてにきこよひしもつきすみのほるいにしへの空

八月十五夜月蝕

中秋雨

これをさへ世のありさまの今夜かもおもひの外に月のくもれる
世をはいまかくのみしりし月にこそちきりし中のあきの夜の雨
くまもなく心にしむる秋のなかは月は出にけりあめの夜すから

市原野月見

罪なくてさすらふ身にし月みれはむかしへ人はむへもいひけり

中秋市原看月

山も野もいつふる雪にしかすらんとおもへは水の月そなかるゝ
秋の半おもふゆへありてひとり廣澤の池の月みんとさまよひありきしに水はなみあせてたゝ名もしらぬ草のみおのれところえかほにしけりあひいにしへのかたはかりたにたと〳〵しく世の有さまもかくやはとそ思ひなりぬ
ひろ澤の池の心のすむ世かは月のかつらもみ草ましりに
この歌人の見ましかはそのかみおもひけり水たゝふとも草やはなからんとそさもいはゝいはむかし

獨見月

いひかはす物ならなくにつきにとふ古のひといにしへのひと

九月十三夜

今夜そとみぬもろこしの月やさは我あきつすのすむひかりかも

九月十三夜宗隆來れりけるに

共に見し月も今宵にめくりあひぬなからへまうく恥かしの身を

題しらす

しらさりしたゝ宿からのあきの夜そ月の都のよそならぬとは
うしとのみ何思ひけんこゝろからこのよも月のよそならぬよを
思はしなたまゝつら野の夕霧にうつろふ月のこゝろからとは
廻り來ぬ雲井のつきにさそはれてあきこそわたれかさゝきの橋

九月九日

ことの葉は心の花のにほひもてさかぬもみゆるやとのしら菊
おくふかき谷の木の間にきく咲てをくれぬ水のにほふ山かけ
岡といふ人の許より「おもひやる種そさひしき一村の薄うへをく山すみのいほ」といひをこせたるかへしに
分入しこゝろの跡はなきものをいかに薄のさひしさやしる
相國寺升首座許より菊を折りて「白菊のうつろふ色のなかりせは唯けふのみとなかめさらまし」といひをくりける返事に
けふのみと何なかめけんしら菊のはなのころもをむらさきの袖
此歌かの人のわつらひさはやき行末は紫の衣も此秋よ

りのあらましにこそ

紅葉一樹

朝霧にほの〳〵ひとり立田ひめたつやにしきのうはきそひして

九月盡雨

よしやさは暮行秋のけふの雨よあすさへふらはそれもかたみを

冬部

山落葉

木葉ちる木すゑに山はあせて猶ふかくも住やひとのこゝろの

寒爐燒葉

この葉ちる此ころさむき衣手のうらふれかほに燒すさみつゝ

雪

打拂ふ袖や千代もとあかぬ色の雪にくたさむをのゝ山人

ことの葉の玉のちりをや雪とつむくにのしつめの山たかきまて

法の師のさそいのるらんゆき折の竹より後の梅の立枝を

山蔭やたつれはうとしともかきのへたてなきとち雪まろはさむ

初雪

けふそけに雪もはつかの月なからかはすひかりは風まとかなり

名所雪

しつかなるこゝろや雪の宿なからたのむよしのゝ奧も見ろへく

面影は夢かとそおもふはろ秋のこすへの雪の大はらの山

世のうさを夕のかれの一聲にみをや初瀨の雪のやまひと

雪にけふみはふりかへつむそかてもよし野の山のよしや世の中

江暮雪

くれぬ夜をおもへは照すしら玉のたま江のあしの雪のしたをれ

雪中松樹低

ふりつもる雪のそこなる窓のもとになれし聲さへうつむ松か枝

靑山有雪諳松性

操なる高根の松のをのれたにけちめは雪のみせぬるものを

霰

玉あられかやか軒はのふりはてゝ今朝みる程はこゑなかりしか

寒對月

見るかうちに雪けの雲はさえはてゝあらしを出る月のさやけさ

寒夜月

ひかりやゝうすくさえ行衣手になれにし物をよひのまのつき

旅泊千鳥

ともをなみあるはさなからこと濱のうきねのね覺千鳥なくなり

河上氷

川かせの行てやしのになりはへて波の紋目の氷るなるらん

これや世をわたる朝の河ならむうすきこほりをふみまよひつゝ

逐夜氷厚

氷はてし枯葉のあしの夜をしろやなにはの道をふみまよふしも

題しらす

さつまかた雲にほえけん犬もさや梅さく庭のふゆの明ほの

歲の暮にある人の許に遣しける

人の世はなきもおほかる年のくれの命にまさるおもひてやなそ

なすこともなくて暮せる年そさはたか爲ならぬ世をし知れはや

風の病にあてられしとしの暮に

かせましり涙のあめのあめましりかしらの雪のくろゝとしかな

歳暮

やさしくもくろゝ年のみゝくまのゝ浦のはま木綿かされ〱て

いつまてかわかれわかれん我をすら年の思はんけふにもある哉

えやはいふ限りあるみのかきりなき年をはかなふけふに暮ぬと

なけくそよ今こん年と別れてはあはんとのちのたのまれぬ身に

はかなくも又なけくなり惜むとて暮ゆくそらのことしのみかは

關路歳暮

年よ關すえてもこゆるこよひかな鳥のそら音をたれはかるらむ

惺窩先生倭謌集卷第二

別離部

宗隆かあかたにまかり侍る比つかはしける

朝夕につられし袖のわかれてもおなしこゝろの香にゝほはまし

きみならて葎の門のさしてとふ人はありともひらきやはする

まつとたに我はちきらしはなにまつ都の春をわすれし物を

宗隆に征衣を贈けるに返事せされはかされてまたやると
てあさちか下に啼からしたる蟲のかこと計の心さしをむ
なしくおほしてんはあまりに情なくや

武さし野のつゆわけ衣君かためはた織むしのなさけはかりそ

也足軒に和答してをくりける歌二十一首

今日しも神無月朔日さる人のむすめともあまたおほやけ
のかしこまりとてするかにゐてくたり侍しをあはれと聞
ものからさらぬよその袂とも打しくろゝは人の心の岩木
ならぬなるへし

たか親のこゝろの闇のかきくれてけふし時雨るそらにみせきや

このたひの老懐をのへられし事ともを見て九月半にや

しらさりしたれもれさめの秋の雨の子をおもふ道にふるは涙を

駿府へくたりの事さたまりて

命なり此世のうちはあめつちのよそならぬものを遠きわかれも

同晦日のあすとての日

老か身を千代もと猶も祈りをかむしはしわかるゝ人の子のため

十月朔日都をいたしたてし日

大空をおもふはかりに人のおやのそてよりいそくはつ時雨かな

くらへみよこの思ごころ何[illegible]世を

たか心おやなき國にむまれしを子はしりにけん子はしりにけり

よの常のうさにはあらぬ世のうさとさや思ふらんそれもよの常

おなし夜のあかつき

かなしさの涙よ冬のさよすからいをねぬ夢をむすふつらゝは

われにとはゝをろかなりとはなそいはむ悲しき事は悲しき物を

二日

なけかしよ思ひわかすはわかれにし昨日のうつゝけふの夢とも

同夜

いかにせんねゝはや見えぬうさはあれと別の後も夢に別れは

三日夢かた

かよふらむ心木の葉にあともなしわけ出しまの庭はさなから

うつたへにわすれん物かわすれ草枯なはかれねうきもかた身を

四日陽明の御歌の和

はゝそ葉もあらしの色にいつみ川かけしや波をよその秋に

たのめなく星のやとりや木のもとをひかりにみするも千代の白菊

五日たよりの文を見て

みすしらぬいつくの袖のみなとよりかへりよるへを水茎のあと

八日

はふらさぬ心をしらはをのつからいかにこの世を捨はてゝまし

殘しをゝたる貝おけ

終に逢むかひあるかたのかひやこれ人をふたみのうら思ひすな

又

ゆけはゆく心にとをき道はあれな見よあま雲のよそにへたつと

愚哀

よしやかのうきにつけても猶頼めつゝみに泣らんなさけある世を

紀伊國へまかるへきあらましせし比東におもむき侍る人に

松の葉にうつろふ月をなれて思ふもみちの秋のわかれのみかは

行はゆくこゝろは跡になくれしをつられし袖のわかれはかりや

わかるとも音信のみはゆきかたのふしのなるさは絶すきゝてよ

わかゆかんきの關守よたつかゆみ引かへてたにとゝめましかは

わするなよ車のうへにことゝはゝ小笠かたふけそれとこたへん

細川内記の東にくたるとていとまこひにきたれりけるか

すゝろに涙のおちけれは「情しる心の花よ又や見んいのちありていはるにあふとも」といへりし返事に

今そしる心のはなのなかき春はときはいつはとわかぬかきりを

小幡孫一郎關東におもむき侍し時薫物を贈とて同心鬮といへる銘をその包紙にかきて

東路や秋行野へのふちはかまおなしこゝろの香やはわするゝ

もころしへわたり侍らんとてつくしまてくたりし時しれる人のもとへよみてつかはしける

なれてうし人の心をつきにはなにおもひいくへの山のおもかけ

その時船を鬼界かしまにつなきて

やまと歌のあはれかけゝり目に見えぬ鬼のしまねの月の夕なみ

おなし時

薩摩かた八重のしほかせ告やらんあはれうきみは親たにもなし

けふりたつ湊の小しまやいにしへのおもひの色をなを殘しつゝ

見よいかに雲路の鳥はとひ消えてかへるゆふへの山もありけり

東にくたり侍る時富士山をみて

白妙にふりつむ雪もしほしりな山のすかたにけふりたつらし

時しらぬ山のふもとに五月雨はさそな高根のみそれなるらん

同し時

たか情かくやは我をゝくりゆかむみやこの月のあつまちのそら

おもはすや共に見まくのほしきかなみをしわけれは秋のよの月

哀傷部

縗衣はつらゝいとのみたれ心ちなさそとにおもひはかり

侍れとつたなき言葉にはいひとくへくもえあらて

いなつまのひかりによするみの露やつもりてふちの衣手のそて

玉よはひかひなくなれて山も野もたゝ秋かせのこゑをさなから

月にわかれほしうつり行横雲のきゝてかなしき世のならひかな

しらさりき千代もと祈ることのはのしるしを塚の松に見んとは

人の上にきえしをいまの身にしらはおもふに過てさそな悲しき

墨染の夕への雨の雲と見しはきみかころもの袖にやあるらむ

むかしたれかゝる恨をのこし置てかせの木の葉の色にみすらん

たちなれしかきにも思へ數へてし庭にものこるおもかけよさは

さきほときこえしこほりなにかしのぬしはからすおもひ

かけぬ有さまいまもおもへ〳〵と夢にやうつゝにやいと

しもさたかならぬをいかゝおほえたまふにやさりし七月

のころせうそこせし筆のあとせめて箱のうちよりもとめ

いてゝひらきみれは我袖のみなとはいとゝかの水の江の

うら島の子かそれならぬいのちとのみさらにくやしむは

かりにこそ

人ことにゆめといふてふよのなかのまことの夢をまたみつる哉

ありし世の人の情のいまさらになかき恨となるらんものかは

又もあはぬ人の形みの筆の跡をあけてうらみのうらしまのはこ

秋あさくまたし扇もおきあへぬつゆよりさきにきゆる身そうき

霜をかぬ南の海になくしものつるきをわたる世はつかのまを

つのゝうへ光のうちのひとの世をさらぬ身にしも思ひかけきや

筆のはな矢かせの紅葉散にけりまたきさかりな名にのこしつゝ

詠めこし心のすゑはいまもなをやいろの雲に立のほるらん

みせはやと契りてし繪の筆もかなにたるをそれと影もうつさむ

玄同妻になくれし時いひつかはしけるなそもかくわかる

とならはといひをくりしをおもふにむかしありけんとほ

きをならせし人しもいかにかなしからすやはあるへきゆ

へこそ侍りけめ

やへかきのつまなさすきのさしなから今やわかれの雲隱する

いなつまもてらしやあへむ本末のしつくも露もすみはてぬ世は

さゝの葉のいまはた同しなとも似すさやく霜夜やあきのはつ風

秋のくれつかたさる人のおやのおやなるさらぬわかれを

つたへ聞とふらはましくおもひなりぬるおりからそなた

の山に月はそくかゝりたる大かたの秋のわかれたにあは

れ催しかほなるをましてとてことつてやりぬ

人のおやのおやのわかれのあきの月子のこをおもふ道照すらん

みちかはるをはすて山の秋のそら都のつきに何のころらむ

このかみなりける熊谷のなにかしか好色のつみありて自害したりけるに周丹首座につかはしける

なにかしの主さる事のゆへありけらしものゝふのたけくいさめる心さしいちはやきあまりにや秋の半またをきあへぬ霜のつるきのさやつかのまに身つからきゑしはかなさを思へは猶あとさへのころ庭たゝきのはらからあまたあるか中にかへにむかふる法のともし火をかゝけましいははにたゝめるしるしの衣をつたへつくへき人もさそなえたふましくなんかなしみあへるとなりのかりもかりもへたてなきあはひいとせめてうたはぬ歌のしのひ音にやとて

つられこしおなしえにしを水鳥の獨やくかにさそまとふらむ

いさむ名はなをいやたかき大ひえやはたちあまりの五とせの秋

色にそむこゝろのはなをいまみれはむなしきのりの種よりや咲

浅野紀伊守幸長身まかりける時

たか爲のよはひをのへてあきかせや吹上のきくの色もうらめし

思ひおもふ人のなさけの色に出てたきし紅葉のみもこかれつゝ

四十あまり九年とていなつまのひかりのうちをなにかそへけん

ありし日は國にむくふること草の草やむすはんつゆときえても

いはさりし今ひとことの悔しさよ永きわかれのそれもかたみを

又たくひすくない神の名そつらき世はかゝるわかれしもせし

時しもあれちるやあなうの花のいろはみにしむ秋の月に殘りて

かすたらてなく音はおなしかりのよをわれも南の海よなみたよ

友千鳥なくるゝ袖におもひいつるいつはと時は和歌の浦波

なき人のかへりくる身のなにしおはゝうへし木末や蔭と頼まむ

おなしころにや

さよかせやいかに吹上の友千鳥なくるゝこゑの袖なみなとに

君しいますき行友のかすそへてなかは泉のみつからそうき

和人哀詞

いりにけん春の鶯おなしなにのりのかとにはまことよりこそ

題しらす

有し世のなき名悲しき山ふかみ雲かくれにし月なみるかな

面影は有しなからなせめてけに物言ひかはすならひありせは

闇ならん夢をはかなみ玉やさはさむる枕に有明の月

名はきゝぬ言の葉ことの玉の緒も永きためしのなとなかるらん

細川内記忠利のつくれりし友涙集のおくにかきそへける

みし友のなみたとをなれ身はいつかなかはいつみの水莖のあと

惺窩先生倭謌集巻第四

戀　部

戀

身はいつの恨の空にたちのほりみせはやくゆるむねのけふりを

あはれしれおもかけのみを身にそへてこれさへ君か情とそ思ふ

はしめよりいなにはあらていな船のいまはにいつるよその浦風

花染の重ねてといひしきぬ／＼のひとへにかはる空さへそうき

あひそめていまさらいかにしかま川よそにみなはの消ん行衛よ

身にそへし面影をのみなさけとや言もかよはぬ中そかなしき

恨すよねてかさめてかつかの間もいつかはあはぬ面影そさは

夢うつゝ現もゆめもたゝならしひるはひめもす夜はすからに

年ふともさてやはとはて山しろのこまの瓜生のなりもならすも

待戀

わすれはや契らぬ夢の行ゑたにあしたの雲の夕くれの雨

寄蟲戀

おもふこともえてし色にゆく螢さはかりみせん我かみともかな

寄蟲忍戀　代人

なれはなをゆるすねになくきり／＼すしらしな下に忍ふ思ひは

寄鳥戀

おもひあまりなかむるかたの空たかく飛にや鳥の影もはつかし

よしさらは我かやの雀それとたにおもはん人のことのはもかな

をよひなきとりも翅はあま雲のよそに成ゆくそらなかめつゝ

そのかたと夕日のかけやからす羽の色になるてふ空もなつかし

おなしこゝろを　代人

雜　部

燈花

ふみ見れはむかしの人をともし火の花にそ契るよるはすからに

みな人は春のいろをやいそくらむひとり夜ふかきともしびの花

雨中竹

世にふれはなひくや竹のぬれ／＼ておのかいろなる秋の時雨の

山河

世をもすて世にすてらるゝ身なれはやさしてはうとき山川の水

海路

いつしかに行とも見えぬ沖津ふねあとなき波の末のしら雲

碧落無雲稱鶴心

日もはるにむかふ心の雲消て飛ゆく鶴の行ゑしるしも

寄日懷舊

てりとをる國のひかりをわかくらきこゝろにあけよ天の御柱

寄月懷舊

秋ことの同しなかめをわれからやむかしにすめる月たにもなき

寄硯懷舊

すゝりのみいのちなりけりと思ふ哉たかよのふみの四の友とて

述懷

有し世に名をはうつみぬ身はいつのいつくの山のこけの行ゑや

人はいなあひやとりしてふるふみのしみのすみかをおのか棲に

浮世とはたかまことよりつけ初しなのいつはりを聞よしもかな
いつも〳〵同しことゝて世のうさをいはて唯にはやむへき物か
いてやよのなとたまたすきかけてさは同しことのみ明くれの空
いにしへにむへ富まさる高きやにみせはや民の立てしけふりを

獨述懷

たかみねの草葉にうつむ谷のまつまつらんなれは霜の後とも

壯年述懷

まとはしとまなひしとしの秋もなしわか身にかへす春の荒小田

老後述懷

身をしれは老ぬらむまそはつかしきひとの人なる道まとふ世に

驢馬倒載圖

わすれけりしりえしそきにしそくなりのるやたゝ世を兎馬とて

橫臥樓　樓名

山も我もよこほりふせる窓のうちにのらぬものかはよその浮雲

白雲　酒器名

壽のみみつのうれへの外やこれかのしら雲のかゝるやま人

蟬丸　刻石爲像是相坂之舊物也

世のちりをもぬけのからのうつ蟬の蟬丸とたゝ名にしおふらむ
宮よりもわらやのあるし四の絃のこゑなき聲は石にのこりて
四の絃に六種の歌にわらくつのわらやのあらしいひにうへきや

玄同のもとへ蓬窓日錄をかへしやりける文いをくに過し

よいたく更して燈火かつきえみきえすみかゝけまし
ひとの國われも蓬のまとのふみおなし心をかたるともし火

與順知　叙在別卷

かくはかり道こそあれなおもひいる山にふみ見る世々のふること

蒙菴大書易菴

もゝのはな五百とせかくす山水も道しまことなしれはしるきや

いつの比にや春日高野なと見めくりける時よめる八首

春日山

かすか山ふみまよふ道に松の葉の塵をつけとやたか家のかせ
今宵月三笠の山の草まくらゆめかうつゝかもろこしのそら
老木うつむ雲間のほしやともし火のかすかにひかる緋の玉かき

高野山

たかの山杉の木のまの月ひとりすむらん人のむかしみしはや
たかの山法の席をまきもあへすうる五千人にためしなのよや
高野山うき世のほかはなかりけり八のたにすら八十いちまたを
さよふけぬ三のたからの鳥もなしうきよの夢をのこせとや思ふ

骨堂に骨のおほきを見てよめる

塵の身のたれつもれはや高野山名をうつみつゝほねはうつまぬ

題しらす

代々にたれ硯の海のなかれ行てかへらぬ水のおはとみなから
身そためしくみ行く人はなきものをすめはすみぬる山の井の水
なからへて人も梢のかせの音を植る小松にまつ契るかな
いつくより何のためとか野を遠み尾はなにましり人ひとりゆく
こけの下まねきし月も夢の世をいつらはつゐのうつゝともみん
山ならぬやまとおもひし松かせをとはれんとたに思ひかけきや
谷水のなにやなかれんおろかなるかけさへ移す身にしおもへは
みなきりて秋の行水河原毛の駒か牛かもわかぬはかりに

月にとてむかひしかきにみゝつくのゐやはきゝとく文の古言と

むらからす夕日さひしき嶺となくかへる翅のいろに暮ゆく

はかなさは水に繪をかく紙や川向しことをおもかけにして

桃花源

かくれきぬいく五百年の情よりこゝろをあらふもゝのはな水

蒙山

なかれては天地ひろくひたすめりやました水の木かくれてたに

氣象巖

心あてにいはほはたかく見えなゝんむかしの人を面影にして

去し年嵯峨の山莊にあそひてところ／＼みありくつゐてに

なつけぬ

涙花隈

ひとこゝろあたにさくらの春の色のはなよりけなるなみの花かも

群書巖

かくしなくたかよの文のあとならむすかたを山のたゝむ巖に

鳥船灘

波のうへにはなれてなとふ鳥ふねやかみよをわたるはるの山川

觀瀾磐陀

ことにいてゝえやはいはまのさゝら浪たちて見ゐてみ洗ふ心を

おもふとて人はゆるさぬ山水をこゝろにむすふあらましのいほ

石にすゝきなかれに枕この山をおはゝやおひくいなんとそ思ふ

市原の山莊その景あるもののことに八の名をつけ侍りて

飛鳥潭

とふ鳥の明日かとえやはいひあへんけふの淵瀨の流れての世を

手月磧

いく世たれ雲のよそにやなかむらむわかてにむすふ水の月かけ

朽斧松

ことの音にくたすや斧のえにしあれはこの山かつの軒のまつ風

巖牆水

岩かきや水のすたれのたれこめぬ世のありさまよ隔て果てゝき

北肉峯

心をやそかひにすらんひともわれも北のそかひの山のはなはに

流六溪

たに水のみつのまに／＼なかるらん六のむなしきかたも定めす

洗蜜科

たかみそきいかにかくしてかくるらんみそか心は神もしらしを

枕流洞

うたゝねの枕なかるゝみつ草のみとりの洞は春秋もなし

長嘯子の許より椎の木をほりてなくりける歌のかへしに

しめをかんときはかきはに椎か本をそれより昔か陰と見てまし

たくへみんしゐのうら葉も白雲になかはゝゆつる峯のいほりや

たてかぬるやとのけふりのさひしさにひともとあかつ谷の椎柴

みつから作れるかなの詞に佐方入道宗佐か注をしたりけ

るをみて感じてその心さしを たへゐにつあらん翁につ

けていひやりける

さそひとり友もあれなとおもふらん花ほとゝきす月雪にこそ

なかむらんそなたの空は八雲たつ雲のいつこか出雲ならさる

しらぬ火のつくしのひとはまたしらぬ心ゆきてや友と契りし

慶長甲辰の冬陸船の說を道春書侍りける時に此歌をよみ
て宗隆につかはしける
たかいほの名のみ船とて渡りあへす陸にもこつむ波やかくらむ
駿河より道春ふみをおくりけるときの返事
有てうき身いさかなさにおもふな不死の藥をおきすてしよな
富士の雪におもひも出よみそめてしはたちはかりの山のはの月
この歌は道春二十二歳のとき初てまみえけるによりてか
くなん
なれよふし雲のうへまていや高き名の實をもしかれとそ思ふ
やまひの床にふして心ちいとあしかりける時よみて長
嘯子の許へつかはしける
しのはれん我ならなくにまつ忍ふともに見しよのはる秋の山
物ことにされるはうとき行ゑとてきみにうらみん言の葉やある
明ぬるかくるゝ夜毎のことはりをゆふつけ鳥もわれにつくなる
人につかはしける
君もさは思はしとたにおもほえすこはさていかにうしやよの中
平の昌茂修學院といふ所にかくれて侍りける比とふらひ
まかりたるに「大比叡と音に聞しを今宵しもさむさしら
るゝかたしきの袖」とひとりこちければ
かたしきの袖に落つる秋のかせ枕のうへの大ひゑのやま
かくてしはし物かたりなとして
大ひえや麓のさとをたつねてもものいこかはす月も有かな
其後又かの里にまかりけるに折しも時雨のふりければ
神無月さらぬ時雨をいまさらにたかいつはりの世にやふるらむ

狂歌

飯にうへていとゝ腹さへ脹るならは思ふ事いはんあれやほるへく
道春に金剛經の口義をかへすとて文のおくに
ふみしりて佛の道をゆくなとやこんかうをみなくきつけにして
道踏んこんかうきやうのくきつけをしらて走らは足のふんぬき
江戸にをもむきし比淨土宗の寺ちかきあたりに一宿しけ
るに夜日と名號をとなへてかしかましかりければ
をろかにも西とはかりはたのむかな穢土に淨土はありける物を
下部をいさふとて
手のやつこ足のゝりもの人は唯つかはぬならはつかはぬぞよき
人の臑腨臍をおくりけるかへりことに
嬉しさをおつとせいてはいかならむ妙なる命のふるくすりは

惺窩先生倭謌集卷第五

倭文部

長嘯子立春の歌を和してつかはしける

君によりまつたつ春の音羽川
　波に言葉の花そなかるゝ
清見かた岩こすなみはたちぬはぬ
　きぬをや春の富士の山姫

吉備のさけに細谷河を汲なさむはなにてはゝるはるのさかつきもとより市に虎はなしそうしんもいかてひとをころさんくしくよき玉のひかりをうつみはつへき理やはある岩こす波のぬれきぬをあらたまのはるのひかりにほしかへて千代へん仙人のたちぬはぬためしを君かみけしと奉りけんはなに山姫のしわさにかあらんたま／＼はるくはゝれる花に酔らん世にしも生れあひもすそをたに濯んと思へとそれしかすへきすへなけれはいひ迸る言の葉のえにし我すむ宿の枕すはかりなかれに帶せるはかり細きほそ谷川の名にしおはゝ吉備の酒にもくみなしみかのはらたゝへてんこそねかはしけれあはれさけの泉のいつこかさしてたつねゆくへくもあらぬかなさう／＼しき宵のまねさめかちなるあかつきのすさひにはたゝつらつらふしなからあまつさかりをのみまもり／＼てなにかしのぬしか貧窮の歌とかあまたゝひすしていかかはせんは一城の人たふれたるかこときはなの都の世の常ならんをあやしのおきなはゑもきの門のさしてしる事もなかりしをさるともかきのへたてなきもとよりかゝる折からもはや過ぬとつけこしたよりにゆき見しかはいにし春なるかたひらのかけすゝしくいとゝなを廿日のかきりもいまいつはりにやとおもひもそこなはれぬへくかそへもてつらつえつく／＼とのみなかめをり白香山かなりはひをうれふるおなしことをつゝりうたひあるしにたはふるゝになん

世をしるやむへもとみける色にさく
　はなははつかのほとしおもへは

宗隆につかはしける

いにしへの人古のひとゝのみつゝめきしためしは世の中のかはりゆくさまをなけき思ふ心やりにやあらん何の時にか敷しまの道のひしりとかや山荘をしめ

給し德大寺の古跡をしたひてしはし冬こもり居し秀才なん有ける時しもいとすちの長をこふといふなる日影にはちかゝれと道のあさちにゆきいとふりしきて人めも草もおなし色にうつまれしにたゝしりへの峯に松のみひとりみさをつくりてたてり哀にさしむかひつゝ文つくへによりゐて文くりひろけふと興しおもふゆへやありけんからうたなり和歌なりからくひねりいたしていやしきちまたの邊繩のとほそのうちにいひ送り侍るかの身はおろちなれと心はひしりなりし人の書あらはし給ひけん文の名はそのつから目のまへの時とものとにあんなるをいてや今のかたちは人なる物しか心はけたものにひとしくまねひてしもしらすほいなくまきらはしつゝさてやみぬかくさかしくいひおとろかし心つゝめるは我をおこすらんとそおもほゆされはあさちの松の人のうちにものこり侍りとよろこひていをねす心もすか〳〵しくおもひなりてかへりことなんすなる

人めさへかれ野の淺茅くたちゆく
ゆきにし松も世をやみるらむ

しりにけんまたらふすまに聞馴し

をとせぬ松の雪の夜をやも

宗隆かかける神代卷にかしらかきをしてつかはしけるころ此歌をよみてをくりけり

大和文の神代の道はむへしおほやけことにてあまつ日つきの天地とゝもに傳へますゝちはいふにやは及ふわたくしさまに殘りぬるも猶和歌の家と巫祝のともからの我にあひていへるなといふなるためしにのしるは道とするにたらすとそ桃花坊のおとゝものたまひしとかやいつれの世いかてか宗源のなかれの大江の水のおやなすことの葉にうつりて世の鏡とはなれるにかみつからの師の師なるは其氏人にて侍りしにさるゆへありてその家わろくなりつゝいとけなきより世捨ひとの道に入ぬれとさるふんひとのすゑとて文なんうるはしくて世のほまれも有けりもとより京極の先人つたへ來り父にをよひし故なきにしはあらさめれとおろかなるをのかしも彼伯樂か馬の三世につたへては鹿と成かへるとなりて力なくやみぬかしさても世はいかにそやそのかみの岩ねこのもとかやのかきはもゝのいふまてこそなからめあるは螢火のかゝやくさまにわつかなるをのかひかりをいひ

ほこらかしあるはさはへなすあしきためしにあらぬ人のきゝをねちけまとはしてさたまれる世の五のつねもやゝなくなりきみとひとゝの道したえなにの車をくたきなにの舟をくつかへすなんあさましいてや姨捨山にてりまさる月の色にたに物すこくいもせの山の中におつる川の流もいとあれて老ぬるものはしつむ身に白川の水はおりくみぬなれにし友をも賣人はたつの市路にもてさはきつゝうきことのみ年に月にいやましゆくほとこそ物むつかしくたゆへくもあらねさるものからつくりてん八重の青ふしかきもせんすへなくかくれし八十隈ちも行かたしらてともなふ友ふねたになくたゝひとりさまよひしまゝにしはらく蛛のすかきにあはらかくし鶉ころもにかたちをやつして住し所はけに都のうちなれとよろつひなひたるさましてあやしの賤の物いひさかにくゝこゑたかく打ゆかみあやめもわかすかましくて朝な夕ないとなみあへる業をみれは、あらすみ、こすみ、黒木なといふものもたけはたかりよきをうるにあしきをもてをのれかしこけにとりしたゝめもよほす馬のみちしるくあかゝりふむなしりなる子なとゝよみあひてたま〳〵酒しくらひつれはよろほひまふかとするうちにいとけしきあしくいさかひうちあひゝたふるにかほの人なる心のふたものなりけらしされはかくかみ中しもの人殘なくくたちもて行なるも神代の風二たひふきはらひて民の草葉のすくなる道にたちなをるへきものゝさとしにやかゝるらんとかへりてたのもしき心ちもすゝめりこゝに柿本のまうちきみかいかなるえにかこひしといひしかこの島のいにしへの道したふなる人なんひとりありける才さかしく手なとつたなからて心をしりかたちをわすれ常にゆきかひしになをさりならすあるしのいやつくして隙ゆく駒のあしなみのかけみぬまてにかたりくらし家鷄のたれ尾のなかなくほとに居あかしつゝにつかはしからぬやまともろこしの世々の古事におもひ殘すかたなくなくさむあまり彼文よみてきかせむ哉とすゝめしかとをさ〳〵しり侍らすとはいひなからさのみいなみはつへくもえあらてそのうちの山とくさくた〳〵しくむすひあつめかきやりすつることになん

春

春や又あくる岩戸のけふしかもしりくへなはの引わたすらん

岩戸あけしはじめな春の朝日影匂ひしまゝかふりさけみれは

はなの時まつりし花のさく色にいまもましてゐ神かせよふけ

夏

螢ひの澤にみし夜のあけぬまなゝのかものとやおはれよの中

篠の葉の拂ひもあへす夜ちけぬる人よさはへの神代のみかは

秋

やはらくる光あまねき月よみの交にもおふく秋の夜のそら

かり神はなからの澄月のはれはくたるよを歎くかな

秋の田の穂たり八束穂しおひのしまきのむらきみ樂しかるらん

冬

神の代の宵のしまねの朝戸あけておもかけむかふよもの山々

榊はになく霜しろし御決しろし今みるさへにおもしろのよや

戀

久方の天のしたてる色にめてゝまめならすやは思ひそむらし

さきたつる波のおやもてなる機の手玉もゆらの色になるてふ

和田津海の三年のほとのむつましくおもひし物なさやなきこ鳥

羇旅

とふ日とくいそぬかむの行空は鳥のあそひのあまのはと舟

述懷

常闇と思ひなはてそ面白くまたみしことのあれはあるよな

浮世なは八重の青ふし隔てにきなのれいふせさ蜘のすかきも

むへ人の世は百たらす八十隈ちにやかくれ行へき

哀傷

天地もおもへはちかき友かきのへたてはかなし終にゆくみち

賀

武きなもなくさむ歌の道しあれなすか／＼しかる心つからに

長嘯子につかはしける詞

かやくきの落にかけるよるへもおさはかに丶はの浮菓のた丶よふいとなみもおたなれとさはかりたになくてかくやつ／＼しき身にしもありけるかなとさりとて人の隣をしめんとすめれは世にかすまへられぬものしかとをいつたりの數あるかなかにつらねつみなはるらん於商の君かまつりごちしおりにさへあひぬ牛ならぬはな縄さ丶れ馬ならぬふもたしかくらんはけにわひしかるへき世にしもありけるかなやんことなくてたま／＼人とをくかすかなる所ひとつもとめえしかとうさきの裘とこたへしふみなんつくらまほしくかりのいゑゐも飛鳥河の瀬にかはり行ことの葉のすゑおもひ出つへくなりもてあれわたる庭のおもは京極のとをつをやのやとからそ都のうちのふることもあらかしめけふをやはみそなはしけんといふからせめての心やりにやいにしとも松あまた蒔ひとむら栽そへつ丶朝夕のすさひにさしむかひおり今た

にかゝりと聲をあけてなくめりとはかりありてうた
ふその薄の歌
しけき野の蟲のねかねてわれそなく
ひとむらすゝき栽初しより
またうたふ松の歌
身をかくすよすかの山もあらなくに
なれたにしけれ庭のまつ蔭
とのみたのむ物から月はかりはもりこかしとそおも
ふさりぬへきよな〳〵は契りあやまたすて月は出に
けり葉わけにくたくるひかりところせうきらめきあ
ひこれさへやまのすかたをおもかけにしてまつなつ
かしくうれしさはいへといつかはのそみかなふへか
らんをなにをまちかほにおほけなきあらましのほと
こそうたてはかなしなひとりされたる竹の杖により
ゐ影みたりい行のそらまても心のくまなくすみのほ
りめもうつら〳〵なかむれは四方に人しつまりぬれ
と木末よりかよふものゝ音こそ聞ゆれかねにあらす
いしにあらすいと竹にはあらすかし手の足のふみま
ふかきりもおもほえすほと〳〵しくありけらしたゆ
からすしもあらねはねやさしこもりひきかくるあさ
てこふすまのしたになを耳をあらひふしぬふけゆく
にやあらんしらへいかにそやあらたまり五湖の濤に
三更の枕をたかうしてゆるらかにまとろめは夢たに
きよき心ちそするやねたし時もりのうちなすつゝみ
にふとむねつふれ心のひしてさめぬれはかはらのま
と桑の梢のひましろくなるまゝにをさ出みれはいた
くかしける薄のかしらの花に霜雪まよひつれ葉の風
のそよさらに心もなくてさむくたてるもをのかたく
ひしられてはたかはゆしおもへと〳〵すへこそなけ
れかけより外にかたらふ友もなしや蘇門の山になか
くうそふく人そもとよりおもなれましはりさかふこ
となかりしかなへてなさけすくさすみさはいやたか
しとそいふめるあはれ獣の心ならて人のしわさもて
あそふ世ならましかはいひのふることとくさかさすさ
む擧の跡はあふきをうる賤のめもてつへく紙をひさ
く市人も價ましぬはかりものし給ふれはことゝひわ
ひきこゆおはする山のそはのたつ木にゐる鳩のとも
よふ聲は聞給ふやかれすらしかりまして人としてと
かこちやれはいて此山祇のこゝろうかゝひて同しか
さしをとあるしなから世のならはしのさかなくてな

にはのよしといひつゝもあしまの舟のさはるふしおほかれはやかしこにもおもふゆへあらんこゝにもいふことあれとゆくりなくたえてひさしくをとつれさりしのち年はかへれと花鳥の色にも音にもうとまりはて日は春とくるゝことありうれへはゑひとさむる事なくてうはひもさらぬ夏の空は雌雄の風の人わきしぬるを恨み身ひとつの秋の袖に紅葉こきいれしかたみたにあらておもはんことのやさしくとしもまたやゝくれぬ彼山よりせうそこもてくころしも神無月しくれにきほふならの葉のふりにしすかたを二歌につくり山すみのこゝろいまたとけすほいなくなとことはの外に心のそこをつくしうるせくなんかひ給へり鐘山の英靈もこのひとはしらの神の御心にやとおもほえりしはちらひてやみぬこの二歌はよるひかる玉なるをくらきになけあたふれはつるきはなくていともにふきふんてのほこさきをにらきてむくひせんとすしれる前にははもとにいたれらんゑみをそまねくへかめれとそをたにねかはしけれはやらんかたなくふつくみあまりもしの數もさたまらすことの心わきかたき昔をさらにしのひかへさんとなるへしやよや心をさへはふらしすてつるけうのをのこにしもあなりとてつみゆるへたまひてんとよ

君かすむ山の田ふせにふせいほを
　我もむすはな契りたかふなむ

にこるさけにこらぬ人とよしゑやし
　ゑひなきしつゝわらはなんやそ

元和五年の春夕顔巻の詞かきて道春にをくれりける

五條わたりにはあらさなるをかのゑみのまゆひらけて白くさける花の名は人のくにゝもやとたつねはへりしにいさやことなることもしらさりきしかはあれと心をたねとかいへれはいつくかおなしからすやはとてなんそこのふみそこのまきから歌ひとつかうかへ出ぬり

たねしあれは心は同しやまとにも
　からのうたにも夕かほの花

といへは又そいふなるをのれさるかたのたふせのふせいほもたるにその青きかつらのはひもこよへれはゆふかほの巻といふ三文字をひとひらの版にゑりつけてかけつ露のよすか月の夕はへきら／＼しくひか

りあひてみぬ世のことまておもかけうかみ心もすかすかしくいてや此たゝいまのつゐてしてそのこゝろをもとせむれはつかひにそのまゝなからいひやる
なにかいやし賤しきちまた夕顏の
花さへみさへ名さへなつかし
たにゝはなにの時の韮山にはなにの日の糧やとりしところのあまなしおしへしところのからもゝ草木の名たにはつかしからぬかはおもへはすなはち夕顔おもへはすなはちなりひさこ花あらは實あらんかし名あらはまことあらんかしそのおろかなることはあらてわれ何人そいとゝをろかにこそそれのとしといふより五かへりの草の靑かりし時せの山のやま人そかくなる
悼赤松氏三十首
赤松左兵衞佐廣通はゆかりあるぬしにてもとよりしたしかりけるか一とせ世の亂し時龜井の何かししこちことによりつみなくて切腹せしか年比ひめをきし書物なと形見にのこして文いとねんころにかきをくりけるをみて
かくはかり終り正しき筆のあとを
みるかひもなく亂てそ思ふ
神無月思ふも悲しゆふしもの
をくやつるきのつかのまの身を
つるきはのくたきても身を鶴鳥の
惜むかひなく我そなくなる
かへりこんとかやことふることたりしいなは山はこゝかしこ其國さたかならさるにやしかはあれと時にあたりまことに名もつらき心ちのかこちかほにてたゝそのかたとのみおもひなりぬかの蘇長公か賦せし赤壁も異論なきにしはあらすとなん
かへりこむものとはなきにいなは山
きく名もつらし松の言葉
萬代を住はてぬためしにひかれけん網にかゝりし龜の古の鏡にかけてたにいかにくらかりしたゝ人のみはかりてん夢はかりもをのか身をこかせしならひをはわすれはてけりなよしやかの山鳥のをろのかゝみのをろかにてらす影にたにかけはをよはすのみおもひあまりつく〳〵とむかひし垣に耳つくらむもおほつかなくて聲も忍ひやかにひとりこちしことになんなりぬ

身をこかすためし忘るゝ龜なれや
人をはかなみ夢になしつる

山鳥のをろかに照す影にたに
かめのかゝみの影やをよはぬ

昔山なりし人の虎と化せしためしは今の世にあることにやひとのくちこそなをなともいふかれは虎はものかはとそ思ふ

人のくちうそふく虎のみやまなる
草木もしほり風そしくめる

しるよしゝて侍り礒邊といひし所は海にもあらす江にもあらて名に聞ゆるにはたかひぬさらてたに僞りおほき世のふたおもてになんねちけしたくひはけにこの手かしはよりも茂りあひつゝ時しもよきたよりありてやおもひけんかゝる所のさまもなき名にたちし波のさはきに人をおとしめしもあはれと聞物からたま〳〵そこなるひとのことゝひかはすえにしひかれてみつからのおほふにたらぬうすき袂も八重のしほあひにしほり侘ぬさても世ははかなき物かなかくはかりなさけなきむくひのほともよせてはかへる波のなきならひとやはおもふ

立かへれをのれよせくる世を海の
礒へともなき波のぬれきぬ

世の物まなひなんする人のならひ上なきみちはをよはすも齡たに短こえぬとやらんのかきりまてとはこそはけみけんよしされは今まとはすとはかりのほとにたに一とせたらさりしあへなさもよしやその身はまとはてもありけんよのため人のためいと惜からぬかはとて

學ひてし道にこゝろはまとはしを
年たらぬよはひたにおし

此手書のなかの文の名によりて身つからもおほくのわさはひにあへり

璧の中石のはこにもかくすへき
世はなき道に文の名もうし

朝鮮の刑部員外郎なりし博士姜沆に五經四書なとの道傳られし後絕て久しき釋奠の式試科のさまとりいとなませみ侍りこの國にもあかりての世にはさかりに行れしにや菅右相道眞公の遺稿にもおほく書のせられけり彼博士のいひけらく此戰國のうちにてかゝるこゝろさしのおはするこれなん膝の文公のためし

おもひいてられて時に亞聖の才のなきのみそいとほいなからすはあらすとそ感しあへりけるおほくの文のをくにかく言かき記しとめてをのかもとつ國にかへりいにし

學ふとておしみしひまのこま人の
　筆のあとのみ名は殘りつゝ

おほやけのいとまありし折々のすさみには琴なとひきしことを

聞なれし人ならなくにことの緒の
　たえなはたえね軒の松かせ

いにしなつの夜いたくふくるまて宗隆なとゝもなひつきみることのありし屋梁の殘月に顏色をうたかひしひともさることやありけむ

ともなひし面影なから夏の夜の
　あたのかたみの月そかなしき

今よりのをのれさやけき月をたに
　涙にくもるかけやかこたむ

うれしさの人の情のすゑ終に
　おもへはうさのはしめ成りしか

天津そらうらみしとても我なみた
　かゝる人にしかゝるへきかは

世のうさの逢さきるさにいひ〳〵て
　又いひ〳〵ていふも言れす

歳暮

明は又春のとなりの笛竹や
　世にふるとしのねをも忍はん

世中にかくてはあらしさてもいかに
　と思ふまにそ年はいぬめる

なからふるはちに忍はん年くれぬ
　あふけはいつのそらのしら雲

元日

としことをおもへはおなし花鳥の
　なみたあやしき春は來にけり

はなならぬ人の名殘のこそといへは
　あけてかなしき春の櫻戸

前栽にとをくより花なんねこしうへられしに此はなさかん後の春ことの我心の友とそたはふれしことを時人をまたぬ物からねこしうへて
　はなにくやしき後の世のはる

小祥忌

期年の正忌なりしに墓に宿草ありて哭せすといふな
るためしをおもひてさてもいかに涙さへそ今こりは
かきりあるへきこゝちのし侍りて

今年しもかきりあれはや限なき
　なみたの雨のふるつかのくさ
夢とのみ驚くほとや二とせの
　けふそまことのなみたをそゝく

大祥忌

つかの草かれては生る三かへりの
　それならぬ世のうき年そふる
おくれゐていや遠さかる年月の
　けふをいつまて歎んとすらむ

彼舊き友なりし宗隆のもとにいひつかはしける

語り出てあらはと問ん人たにも
　なき世のなかそいやはかなゝる

ほとなくいまは昔にふりにしあとをことのたよりに
たつねみしかは時うつりことさりしさもおもほえす
目くれむねふたかりやるかたなきあまりいと物くる
おしきわらは歌なんひとつ作り出つかたへの人にか
たりしにいてや世の人の心のたねしいにしへもい
まもことならねはや平のむかしつ人のなかめし心の
まゝの蓬にさまよくにてんとそいひしされとそのみ
ちの器にたへたる人のたゝ此事とのみなこひつゝ集
なとひろく覚えなから狐のしろき裘をぬすみて鳥の
そこねの聲をはかりけんさましたらんこそ心のおこ
も見るへくなんおかしぬるとかのからふへくもあらす
侍らぬあやしのをのか歌といふことしらすたゝ折に
ふれてなにとなくうかめる心をやりすつるはかりの
すさみはおなしことといへるもいとよしかたくなゝる
もおかしものくるおしきも興ありあらためつくりて
もよかなし商州の刺史か數枝のはなを吹おるといひ
しもをのつから少陵にかなへりとかへりてみつから
こゝろおこりせぬかはとてやみぬ

蓬生のしけれるやとはむかしみし
　あとなきあさの淺ましの世や

春の暮つかた西山にまかりしに賤のおの片山畑にわ
らひつほとろなんうち返してさひしくたてりしにふ
と思ひいつることの侍り四とせ五とせのさきならし
いつそやへたてなきとちたつさひて此所に山莊の地
をしめむとてみわたふこしおりしも此叢の塵打拂ひ

つゝおさりし面影もあらぬ世にふりかはりてなをものうきいろのみ身にしみまさる心ちせしかはいまはいさきよきみさほつくりてん人もなしやとて

たか春の藪いはとろうちかへし
　おもふかものをしつのをのれも

君臣之事

夫君は臣下の賢否を見てかしこきをは位にすゝめ祿をおもくしえからさるをは下位にをいて其分々につかふ是は君臣をみるの法なり臣は君の明闇をみて常々敬をいたしいさむへきをいさめ恐るへきををそれ百官以下の善惡を察して竊に君と談合し賢をは上にすゝめいなゝるをは下にをき國民の賦稅を少薄くす薄則かならす三年のうち厚とるにあたり厚則國三年の內うすく取にあたれり如此にして先民を以て國の本とし其上によりくゝ君と臣と道を論し義を正し國々の諸侯の忠不忠を察し如此ならは吉祥日々にあらはれて國治り天下やすからんとおもひ如此ならは兵亂不慮に發て天下かならす危からんと思ひ此安危の二を君臣の心の中に置て終夜寢す終日食せす家國天下の平にならんことをおもふ是は君明なるによりて臣君をかしつき奉るの職分なり又君くらきとても其まゝすてす再三いさめ君を勵ます諫むれともきかす勵とも不行徒に一旦の計を以て民の物を剝取君に奉る者を良臣とし日夜に機變の巧をめくらし君に諂をいるゝ者を賢才とする時は其國かならす亡ふ然則臣見レ機其國をさるこれ異姓の臣といふさられさるの故ある時は其身を報し位を下り祿をうすく得て政事をいはす只道德のみを高くし修レ己以俟レ命此を同姓貴戚の臣と云是君臣に義あるのところなり

父子之事

凡父たる者子を愛するは天道の自然也愛せすむは何を以父と云へきや愛するに道あり能子に物ををしへ智深德高からしめて君の德を正し天下の政道を聞樣に手ならはす此を以て實の愛とする也徒に愛して理を以てあひせさる時は彼鳥獸の其子を愛し牡牛のをのか子をねふりまはしたるに異ならす只世間の人貴賤共に隨意にそたて無能にしてさてやみぬ能敎ときは貴も賤も皆天下の輔相となるをしへすして無レ能則貴人の子下位におり賤士の子反て上位に登る彼貴

とへとも無レ能則何をもつて天下をえらはんや此賤といへとも有レ能則天下を輔相するにやすし是をしゆるとをしへさるとの間みな其父にかゝる是故に殷の湯王は其太子を民間に下して民の辛苦を知しめ周公は伯禽をはけます此誠に子を愛するの道也又子たるものゝ父に孝をなす是亦天賦の自然也無レ孝は何をもつて子といふへけむや孝をなすに道あり只親を養ひ勞にかはる事誰もする所なり養は犬馬までにいたる敬せすは何を以て孝といはんや凡人の子たる者親を敬ふのあまりを以て身を立道を行ひ已か名を天下に擧則其親甚悅甚悅則これより大なるはなし是を眞の孝とす是故に舜の孝は四海に達し武王の孝は天下に通す此を父子のしたしむと云

夫婦之事

蓋夫婦は天地のことし天は地の外をつゝみ地は天の中はに懷る是故に男は外をいとなみ女は内を調ふ文王の后眞葛の中谷にはひらく其葉の茂れる比ほひこの葛をこゝに刈こゝに護絺綌の衣を織て其成ことの安からさるをしり給へは文王も又天下のつとめに其勞苦し民の安を見ても猶傷かことくし給ふ是文王はほかをいとなみ太姒は内を調へ給ふ此夫婦の德によりて天下の政閨門の内より出て萬邦自然に風化し民をの／＼其所を得たり此亦夫婦に別あるの意なり

兄弟之事

それ兄弟は天より次第すといへとも尤難レ知者也是故に上に有二兄弟一兄は弟を慈愛し弟は兄を尊敬則其鄕黨隣里より國に及て必法を法とす如レ此則兄弟の敬より起て國治る事あり是を兄弟に敬ありといふ

朋友之事

夫朋友は他人と他人と交る何以四の物の内にいるや父子兄弟の間にをいて自いひかたきものあり他人にあらすんはいかてか己か情意を伸へけんや是以四の物に之をくはへて五倫と號す朋友は信あるを以て朋友とし又互の是非を諫あひて益ある事最多しされとも朋友は義を以て合すかの朋友に非ある時再三諫てよきほとにすへきを此人彌近つきしたしまむと思て諫ていさめ過せはいふもの輕く聽もの厭親しみを求として反て疎せらる是は義もなく信もなき朋友なりかくのことくなる者をは友とすへからす此眞僞をよく辨て信あるを友とすこれを朋友に信ありと云なり

嫡子並庶子之事

或人云嫡子を重し庶子を輕する事古よりあり思ふに妻も妾も共に我婦也功をの〳〵ひとしからす槐棘のたかきゑな袋よりも猿狙の子を生し賢子か婢腹よりも卓ろくの才を出す然則只人の子の器量才能次第にかしつきもてなしてこそ能侍らんと云へり曰嫡子は天地交泰の德によりて生す夫婦の世配も亦天也彼妾婦は侍女のたくひなにを以夫婦の正對に比ふへけんや是故に嫡子は重く庶子は輕し然れとも天子の太子と公卿大夫の嫡庶等にいたるまて十五より皆大學に入て理をきはめこゝろを正し己を修め人を治るの道を以て敎ㇾ之後に太子をは天子の位につけ奉る間天子の庶子をは國に對して諸侯とす又公卿大夫の嫡子も其家をつく庶子は其才によりて或は天子につかへ或は諸侯につかへ別に家あり是を以てみれは誰か其天倫を背て庶子を重くし嫡子を輕せんや若愛に溺て人意をもつて私に計則綱紀亂て人道立へからす大人たるもの不ㇾ可ㇾ不ㇾ愼乎

女子之事

夫女は不幸にして男子と生れす是によりて女に三從といへることあり幼稚の時は親にしたかひ若き時は男に隨ひ老ては子にしたかふ是故に人君たる者女子には師傅とて女の師匠をつけ其所をえらひおくふかき所にをいて聊も人のみぬやうにし敎師傅して（しむカ）へさらむ或人曰その師なにををしへ其女子なにを習やいはく關雎の德を以てならはす關雎は后妃の德夫婦和合の至なり彼關々たる雎鳩河の洲に和鳴し男先に唱へ女後に順ふ是夫婦の別なり彼聖女を學はすんは何をて女子の道といはんや凡女子すてに嫁して父母に孝をなす事易褒何樂て淫し哀て傷るへけんや男の愛によりて易ㇾ狎者は女の情なり貌相共に和樂して敬ひ其貞しきをいたし其守をうしなはさるを以て婦人の道とす三月桃の夭々たる時は男女必す會り女子男の家へ行て能一家の中をなつけ一家の內をなつくる時は其法國に及ふ時は（誤脫カ）其國治ると云ことを敎訓す此女子ををしゆるの法なり

妾婦之事

蓋大夫たる者は妾婦一人士たる者は一人然れとも嫡婦妾婦の方あり此理を知さる時は大人は國をうしなひ小人は其身をおとす周幽王は惜二其本妻一妾婦を愛

し太子をしりぞけ庶子をたつ是によつて犬戎殺して又子もなしおもはしからさる妾婦を持てその身をおとすものあり儉年等是也只以レ婦爲レ婦以レ妾爲レ妾をのをの其分にしたかひ其宜に合ときんは何のあやまりのあらんや婦の字をみれは女篇に帚といふ字なり彼嫡婦は常々帚をもつて家をはき家をおさめんことを思ふ是は婦の道なり妾の字をみれは女篇に立と云字也此妾婦のおもはくは我は是侍女のたくひ立て侍御する役の身とおもひて必帚を取て室家をはき必家を治て子孫永年なることを忘さるは侍女の意也此婦妾の二字を以ても意得へしひとの良知深く萬事に變通する良能これもつて何ぞ天下の人の心をしらさらんや況や彼妾婦の計りやすきものをや

交隣國之事

それ國に大小あり大は小をつかひ小は大につかふ是必然の理なり今己の國大にして人の國小なる時は能人の小國をめぐまん人の國大にして己か國小なる時は能大國につかふるかことくにして交る或人云如レ此にして何益ありや曰己之國大にして人の小國をめくまん時は彼小國わか喜にも進み憂にも進むこの二は天理の自然大小之勢理の當然を以て交るそれ天道は德あるものに天下をもつて與へ給ふ己小國也といへとも其德漸々に積て天下の者皆小國の德を慕て各歸服則吾事へ交かことく大國も反て我にしたかふ況や其國をや然則天下何我手に入さらんや殷の湯王は小國を以て大國につかへ仁政の德をもつて天下をたもち給ふ周文王もまた小國を以て大國につかへ仁政の德をもつて天下をたもち給ふ是等みな其效也吾德をもつて國と交則隣國大小は申に及はす天下皆服して吾は堯舜となり民も亦堯舜の民とならん此交り既先如レ此にして小國をめくむふりをして大國にしたかふ巧をめくらし後には人の國をとり天下を奪とする私にあらす是天理の自然禮にあたる儀則也如レ此則必天下を得へしたとひ其一代にえすともかならす子孫天下を得へし是を隣國に交り吾人を待の禮といふ

隱居之事

夫人者二十にして冠し三十にして妻を娶り五十にしてつかへ七十にして官を返遁世のこと其身をやすくす故に是を隱居と云去とも其人の德高き時は朝廷よ

り杖を賜て又參內して論道談義いくはくそや八九十歳に及て朝廷に杖つくこともならさる時は天子自その屋へ行幸なりて其事をとひ給ふ何必これを隱居といはんや彼商山の四皓か避レ世箕山の許由か隱居不レ足レ論矣然れとも是は君臣各その德高く道の道たるときの事なるへし道の興ると廢れると人事の可否と天道の盈虛人の力の及ところにあらす如レ此なる時は深く世をいとひ隱居しても可乎歟夫蔣詡之幽居劉禹錫之陋室何も心ゆかしき事なれは學ひでも又よしあり夫三徑の下には有レ道陋室之中には無ニ白丁一東籬の下には松菊猶存獨樂の園には明月の時に至り清風自來此時に德ある者と酒を擧て琴を彈し先生の道を論し天道一致の奧妙を心に得天年を終る事誰もねかはしき事なるへし是を隱居といひて可乎歟右節日の十條四書詩禮等の中を以て答を申といへともすこし心のいそかはしき事ありてあらく申上侍るなりかならす大なる差御座有へく候

衆妙集

詠百首和歌

玄旨法印

立春
なしなへて今日こそかすめ四方山のこのもかのもに春や立らむ
一本に
さへかへる夕の雲はきえはてゝけさこそはるのかすみなるらめ

朝霞
よもすから聞しあらしも心あれや今朝は霞をよきて吹なり

谷鶯
朝またき霧吹はらふ谷風にまつうち出るうくひすの聲

殘雪
降そめし去年の高根にほの〴〵とまた消のこる雪をみるかな

若菜
誰かまつわかな摘らむ花かたみめならふ人の袖のゆきゝに

里梅
野へにまつ咲よりなれてみれとあかぬ梅の立枝も里をあまたに

簷梅
軒ちかき梅か香なから玉簾ひきもとめいろはるの夕かせ

春月
かすむへき山の端遠くなりにけりくもりなはてそ春のよの月

春曙
花鳥の色にも音にもかすみのみ猶立まさるはるのあけほの

歸鴈
おもはすよ都はなれて北に行鴈のなく音にともなはんとは

春雨
花見にといてたちもせす八重葎心にしけき春雨の空

岸柳
柳よりあたに散てやしら露の水行岸のあはとなるらむ

待花
はなよいかに森とゝもにかなえとせむひなの住居に咲を待ゝも

翫花
雨まにさける軒はの朝戸明ておもはぬ花の色をみるかな

見花
くるとあくと花の思はぬことはりにわか心をもちらさてそみる

花盛
よをこめて花咲かゝる枝も葉もうつもれはつる雪とみえまて

落花
ひたすらに猶やうらみん咲散るも常ある花とおもはさりせは

款冬
はやせ河なられぬ水にうつろひて花や散らん岸のやまふき

池藤
水のおもにかけをひたして紫のあけほのうはふ池の藤波

暮春
ちる花もすくるゝはひも処にけふ春のわかれにをとつかれつゝ

更衣
かふるとて花のにほひも夏衣春をはよそにすみ染の袖

卯花

夕されは雪かとそみる卯の花の垣ほの竹の枝もたはゝに

待郭公

ほとゝきすなにを契りに今こんといひし人をも待心地して

聞郭公

ほとゝきす聞しとやいはむうたゝねの夢のまかひのよはの一聲

郭公稀

手を折てかそへやせましほとゝきすまれなる聲とつもる日數と

故郷橘

古郷の軒端におふる草の名を花たちはなや香ににほふらむ

早苗

うへわたすふもとのさなへ一かたになひくとみれは山風そふく

五月雨

さみたれの比にしなとの風とても吹やははらふ天の八重くも

鵜河

うかひ舟かはせの月にかはりてやのほれはくたるかゝり火の影

夏草

花はまた咲もさかぬも夏草のわく人なしにしけるころ哉

叢螢

むかしたかあつめし窓の名殘とて茂き草葉にやとるほたるそ

夏月

明やすき名殘をそおもふ秋のよもなかしとはなき月のなかめを

夕立

かせの音むら雲なからきほひきて野分にしたる夕立の空

杜蟬

なく蟬の聲を時雨にまかへても立よるもりの下露はなし

せみのこゑ（にイ）さなからまかふ時雨かな立よる袖にもりの夕つゆ

夏秡

けふは身のうちと涼しき御秡河にこるこゝろの水もなかれて

早秋

大かたの野への草葉の露をゝきて袖よりなるゝ秋のはつかせ

七夕

あふことは稀なる中になかれても契りはふかきあまの川なみ

荻風

一葉さへまたちりあへぬ木の本に先うちそよく荻のうはかせ

萩露

枝なからみよといひしをわすれては折袖にけぬ露のむら萩

女郎花

をみなへしたか言の葉になくさめて色めく花のくねるともなき

夕蟲

秋の野の露さへさむき草村に猶夕しもをまつむしのこゑ

夜鹿

よもすから妻やつれなき棹鹿のひとりふしとに恨てそなく

初鴈

此ころの秋の寢覺のうきこともわすれてそ聞初鴈のこゑ

秋夕

そのことゝさしてはものをおもはねとなみたいとなき秋の夕暮

山月

中そらにくまなきかけをみるよりはうす雲かゝる山の端の月

野月

月ゆへにしらぬ野はらの露分て旅寝にかたるかたしきの袖

河月

わすれしなすみ馴つゝも久かたの中におひたるさとの川波

江月

なにはつのよしあしなしも誰わけむ入江の月は雲かくれして

浦月

はる／＼とよさの濱の霧はれて月に吹こすいねのうらかせ

籬菊

うつろふな花のうへにも色そふと籬の菊や霜を待らむ

擣衣

そいさとゝ明てこそみめ夕月夜おほつかなくも衣うつ聲

曉霧

しくれせむ明ほのまたて秋山の麓をめくるきりの一むら

岡紅葉

松の葉のいつともつかぬをかのへに今一しほの下紅葉かな

庭紅葉

峯はちり麓の色はこかるれとまた庭もせにうすき紅葉

九月盡

今はとてはひまつはれよ行秋のわかれ路に生るくつのはかつら

初冬

山里はしくれの雲をさきたてゝみそれの空に冬はきにけり

時雨

一年のめくる日數もうつり行時雨の空にたくへてそみる

落葉

色やたゝこきもうすきもはて／＼はおなし落葉に木からしの風

朝霜

いつよりか結ひとめけん朝霜をしらていねつるほとなしそ思ふ

寒草

かせ渡るすさきのよもき冬かれて夕霜白きをちの川なみ

千鳥

友ちとりおなし所に立かへりあとこそのこれわかのうらなみ

水鳥

いはたゝむ池の心は繪にもはたうつさまほしき鴛の一つれ

氷始結

氷るらし淺瀬なからにかち人のわたれとぬれぬ水の朝風

冬月

花紅葉散るあと遠き木の間より月に冬こそさかり成けれ

鷹狩

たつ鳥に手はなす鷹のとひよるやいま心みし翅なるらむ

野霰

むこ山やあまつたふ日もさえくれて霰になりぬいなのさゝ原

淺雪

降つむもよの間の雪は朝日影松と竹とのけちめ見えつゝ

積雪

こゝろあてのかきほの竹のふしの間も雪にかくるゝ朝明の庭

閑中雪

燈を守りつくしてふくるよにまとうつ雪のおとを聞哉

歳暮

老の波あはれことしもこゆるきのいそちといはん限をそおもふ

寄月戀

月ひとりそらにしりてやゝとりけんしのふる袖の涙なれとも

寄雲戀

立かへりしのふの山に入雲のまたなか空になにまよふらむ

寄露戀

いさゝらは人の心の秋風をふせきてやみん袖のしら露

寄雨戀

よしやふれ身をしる雨も天雲のよそになり行人のかたみと

寄風戀

便あるかせもうきたる心地してことつてやらん人を待かな

寄山戀

ふしのねを廿はかりはかさぬとも麓にやみんわか戀のやま

寄關戀

わか爲はへたつる關となりにけりなとあふ坂の名をたのみけん

寄海戀

みるめかるかたこそなけれあら海の涙の立居に心よせても

寄原戀

戀しなむ身のおもひてに草の原とはんと契る一言もかな

寄橋戀

よひ／＼の人めおもはぬかよひちやうつゝにまさる夢の浮橋

寄木戀

色みえぬ心の松も葛の葉のうらみはしたにさはぐ夕かせ

寄草戀

みせはやなをはなかもとに咲花の色よりふかき露の袂を

寄鳥戀

鷲さへもこひにおもひをかけぬれは空とふ鳥も落るためしを

寄蟲戀

聞すてし君もやくるとまつむしのなく音にきほふ夕くれの宿

寄獸戀

はかなしやかゝる戀路におりたちてひま行駒も身にはしられす

寄玉戀

わか袖のうへにそ落るひろひ置てかへらんといひし瀧のしら玉

寄鏡戀

手向くともあらぬ思ひにます鏡うけすやいかにあらみさきひめ

寄枕戀

人にやはつけの枕と頼むそよとけてわかぬるよはのなみたを

寄衣戀

よかれきぬ中の衣の隔さへあはれうらみのあれは有身に

寄絲戀

かた絲のその一ふしはのころともまたよりあはん恨をそまつ

浦松

こゝろあるあまのしわさに釣舟をよせてはつなく松かうらしま

窓竹

なひきあひて窓におほふも植置し一本ゆへのむらさきの竹

山家嵐

都にてあらしときゝし音はたゝみ山のさとの朝な夕かせ

田家

よころへて守小山田の稲莚かたしきなるゝ賤か衣手

故郷

行とまる心を宿とさためてもなをふるさとのかたそゆかしき

海路

舟人もしらすはるけき波路をはたゝ吹風にみをやまかせん

羇旅

さすらふる旅にしあれは宿ことの主のこゝろとりそわつらふ

述懐

うつもるゝ身ともうらみしよの中の人をしらぬを先うれへてん

神祇

おほかたは鏡をみてもおもひしれ空にくもらぬ神の心を

祝言

治まれる御よのしるしはしられけり君と臣との身をあはせつゝ

詠二十首和歌

初秋露

このねぬる朝けの露の玉かしは落るも散るも秋の初風

閑居秋風

わけてとふ人もなければ萩の葉の音にさたむるやとの秋かせ

野草花

こはき咲野守のかたみよそなから心をうつす花のいろかな

夜蟲

むしのねなな閑あかてねぬるよの夢をはかなみさそひてそ行

曉鴈

時しもあれ有明の月にさそはれて曉おつるあまつかりかね

深山鹿

はるかなるみ山おろしにたくへきてたゆめはたゆむ棹鹿の聲

杜月

月はなを露にそやとる秋かせの信太のもりの千枝に吹とも

河月

みるかうちに西になかれて淀川のよとむともなき月の影哉

浦月

とまりせしいく浦浪のあはれをも月にやさらにおもひいつらん

島月

詠すみて八重の鹽路になかむらん奥の小島の秋のよの月

江月

かせそよく入江の蘆のほの〴〵と月になり行うす霧の空

山朝霧

めのまへに海をなしつゝ朝霧のあらぬ所に興津しま山

海邊擣衣

風あらき浪のよる〳〵あま衣うつ音さへもまとをにそきく

田家秋寒

小山田のかりほの庵の稲莚霜をかさねて風そ吹しく

野草欲枯

いろ〳〵の花に咲とも行秋にならんさかみん野への草葉の

庭菊

もゝ草のうらかれはつる露霜に一花殘る庭のしら菊

雨中紅葉

紅葉はゝ時雨のあめにぬれにけり笠取山の名にもかくれす

河邊紅葉

ちらて先かけなやうつす紅葉はのうきてなかれぬ山川の水

山家暮秋

くれて行名殘おもへは山里のうきこそ秋のかたみなりけれ

閏九月盡

なか月のひかりの影を又そおしむ有明の空をなかめつくして

春部

由己亭の會に年内立春を

くれて行年のをた卷くり返し今もむかしの春やたつらむ

雪も今日ふるとしなからあら玉の春のものとて立かすみかな

立春

明渡る遠山かつらそのまゝにかすみをかけて春や立らむ

波路より春やきぬらむわたつみの沖をふかめて立かすみかな

元日立春

天地のめくみをうくる人やけふみつのはしめの春をしるらん

正月十二日會始に立春霞（一本ナシ）

野も山も春につゝめる棹姫の袂ゆたかにたつかすみかな

たちにけり明ては春と夕月夜おほつかなしとみへし霞も

天正九年正月江南安土に越年せし元日の試筆に

みるかことくあふけ神代のかゝみ山けふあら玉の春のひかりを

同十六年元日のこえ侍ける前の日より曉かたまてあら

しはけしくて朔日にはしつまり侍しに

けちめあれや昨日はこそのあらしとてけふはなきたる朝風そ吹

同十七年正月大坂旅亭にて元日に

あら玉のとしの緒そへてこそたちし霞の衣かされきにけり

同十九年元日寅の時はかり禁中の四方拜おかみにまいり

て歸り侍ての試筆の歌に

ともし火のひかりをそへて雲の上に星をとなふるあかつきの庭

同廿年入唐の御さた有し年の元日に

日本の光をみせてはるかなるもろこしまでも春やたつらん

文祿二年薩州鹿兒島に年をとりての元日に

あつまよりこえくる春もはや人のさつまちとなく立かすみ哉

同三年元日に

一とせを六十にそへてさためある命のほかになからへにけり

同四年元日に

またれつゝさかん日數を先そおもふ花の都のはるをむかへて

同五年元日に雨降侍ければ

豐年のはしめをみせてふる雨に民の草葉やまつめくむらむ

慶長二年元日に

ふる雪もふかき山路も春とたちことしをこえてかすむ色かな

同三年元日に

うしと思ひつらしといひていく返りあら玉の年を身に迎へけん

同四年正月孝元に家督相續し侍へきとての元日に

あら玉の今年はよをもゆつりはの常磐の色にならへとそおもふ

同五年元日に

正月には五百八十とせも在へんと逢人ことのことくさにして

同六年吉田に越年の元日に

あふくなり先あめつちの神まつるよしたの里に春をむかへて

同八年元日に

七十にみちぬるしほの濱ひさし久しくなりぬわかのうらなみ

同十一年丙午正月元日に

春立ていさめる馬の年のなのなかきためしにひかんとそおもふ

年號不知

たちかへりかひある春ともろ人のあそひの浦の名にやふるらん

あふけ猶天津日嗣のしるしとてくもりなきこの春に來にけり

元日試筆に

八隅しる君かめくみをよにうけてのころ隈なきはるはきにけり

うなはらや霞もともにみつしほの浪ちはるかに春立らしも

打出て國見をすれは山かすみうら浪なきて春はきにけり

たれも猶松に千年やかそふらむけふを子日ときくにつけても

初春

さほ姫のかすみの衣ほしそめて雪のひまゝつ朝日かけかな

正月七日會始當座に初春霞

春きてはいくかもあらすさほ姫のかすみの衣またきほすらむ

早春鶯

なれにけりかすみの衣春立ていくかもあらぬうくひすの聲

慶長五年三月廿五日式部卿智仁親王亭にて古今講釋つかうまつりし後和歌會御興行の當座に春風解氷といへることを

とけて行音やわくらむ耳利川こほりのうへのはるのあさかせ

朝霞

さえかへるゆふへの雲は消はてゝ今朝こそ春のかすみなりけれ

正月七日會始に山朝霞

このねぬる朝けのかせも山姫のおもかけそへてたつかすみかな

二月十九日月次會におなしこゝろを

朝な〱たつとはみえす山の端の遠きや霞むけちめなるらん

足曳のあらしの音にたえはてゝなのれとなびくあさかすみ哉

霞滿山

さほ姫の雲の衣のうはきとや春のかすみの立かさぬらん

あさもよひきのふの山もみえぬまて春をふかめて立霞哉

文祿三年正月廿一日月次會始に霞添山氣色

山姫のかさしの櫻またきよりおもかけにほふ朝かすみかな

海霞

あまのはら雲の波路もわたつみの奥をふかめて立かすみ哉

海上曉霞

あさもよひきの海かけて住の江のくろゝ浪間に立かすみ哉

雪中聞鶯

うくひすの梅の花かさけさきても雪のふゝきにぬれて鳴なり

谷鶯

朝またき霧吹はらふ谷かせにまつ打出るうくひすの聲

野外朝鶯

今朝のあさけなのか名こえて鶯の里のこなたの野へに鳴なり

文祿五年正月七日會始に若菜知時

なのれのみ春をわかなの花かたみめならふのへの雪の草葉に

慶長五年正月七日會始に雪中求若菜

わかなさへ人のもとめにことなれや雪の下まて道をたゝして

ゆきかへり野へは雪間も七種をけふの爲とやつみあつむらん

同八年正月七日に烏丸闕籌のもとより

君かよはひ十といひつゝ七種の名をかそふへきはつねのひかな

返し

君かよはひかきりはさらに七種の名をやかそへんちよの初子と

龍野侍從亭會當座に谷殘雪

河波の音そふまゝに谷の戸の奥かおくまて雪そすくなき

谷せはみ雪のしほりや殘らん日影もしらぬいはねこのねに

松殘雪

吹はらふあらしのいかにうつもれてはるまてのこる松のしら雪

餘寒霜

かれぬへき色とはみえぬわかくさに秋よりさむき春の朝しも

露晞梅開

梅かえもあふひのくさのゆかりとや日影にむかふ露よりそさく

若木梅

いかにしてむかしの香ににほふらんうへし若木の梅の初花

夜梅

夜も明はたつねてもみんそのさとゝなしへし程のむめの下風

慶長五年二月十九日月次會に梅遠薫

かほりくるゆくさきおほくふくるまに尋ねそわふる梅の木の本

正月會始に梅花久芳

梅の花かをこそふくめ天地のひらけし春の跡をのこして

天地のひらけし春のためしとてことしも梅の香をふくむらし

後正月十日飛鳥井中將亭會始に梅花久薫

さゝの葉のよゝをかさねて梅のえもしみつくほとの春風そふく

軒梅

たちぬるゝ袖もいとはしなかめふる軒の雫もむめか香そする

天正十六年正月廿五日殿下御會始に梅有佳色
色をうつしにほひをとめてうれしさや袂にうつむ梅の下かせ
いろわきてこそうへをきし庭の面の若木の梅や千代の初花
同廿年正月十二日龍野侍従亭にて有し會に多年翫梅
散ものゝさりとてたえぬなかめ哉はるいくかへりさくやこの花
同正月十三日月次會始におなし心を
うへをきし一木ことにと身を分て春いくかへりなかめしつらん
たのみきぬ松もむかしのとはかりに春咲梅をしる人にして
菊亭右府晴季公庭前の梅を一枝送らせ給ひて
よもきふのかけなりけりな咲やこの花の春をもとふ人のなき
御返し
さくやこの花をもとはすなりにけりわか蓬生にむすほゝれつゝ
病中に幸藏司より紅梅一枝送られ侍し返事に
かくはかりにほふもあやし紅の色にとられぬ花とみるにも
岸柳
きしによるなみをひたして淀川のよとむとみする青柳の絲
天正廿年六月朔日式部卿智仁親王亭御會始當座柳靡風
枝かはす柳の絲にさそはれてしとろもとろに春風そふく
夢想法樂の會に春月
ひきかへて花散るのちの春の風月のかすみは吹としもなし
久かたの空もひとつにかすむなり雲やはかゝる春のよの月
春曉月
曉の雲吹かせにさそはれてかすみにもるゝ春のよのつき
二月廿五日東福寺哲長老詩歌興行侍しに月流春夜短といふことを
雲の波にとまる瀬なしと行月の舟なかしたるさよの春かせ
同十六日夜飛鳥井羽林亭にて三十首の題をさくりて讀侍けるに遠山春月
かさなれる山の端みせて夕くれの霞の奥に月やいつらむ
吹風もおよはぬ山の夕かすみ月のひかりやまつはらふらむ
名所春月
月影はかすみもやらす相坂の關のあなたにあらしふくらし
春曙
めてきつる花も紅葉も月雪もかすみに消る春のあけほの
柴翫丸興行月次會におなしこゝろを
くらへつるこゝろの秋もうす霧に月と花との春のあけほの
春流飲馬
さくらかり水かふほともあら駒のあなむなかれに引そとゝむる
春鴈離
春風につらをはなれて北にさりみなみにかへる天津かりかね
關春雉
心せよきゝす鳴なりかの關にくさかるおのこわけて入とも
雲雀
鳴たつもむかふ野かせをそむくとて雲にはのらぬ夕雲雀哉
子をおもふひはりの床も夕日影さすかあかるも立かへる聲
飛鳥井羽林亭にて夕雲雀を
のとかなるかけを契りて春の日のおつればおつる夕雲雀かな
三月五日也足軒興行餞別當座に花を

そこともしらぬ野山のさくらより花こそ花のしほりなりけれ
たつね入こゝろのとはゝいかゝせんまたみぬ山の花はありやと
もろく散る老のなみたにくらふれは猶のとかなるはなの朝露
　愚亭興行の會に花初開
かつさける花をしおもふこゝろよりきのふはしらぬ山風そふく
心ある人にまたれて咲花の我をはよそにみんもはつかし
　見花思友
あひにあふ友しもかなやひとりみる花の心もうしろめたさに
ひとりわかむかふにつけて心あらん友しもかなと花もみるかな
　月次會に心靜見花
もろともにちられはちらぬ心そといひなしへても花をみるかな
　殿下わたらせ給ひて和歌の會興行の時に多年愛花
あかなくに花みぬとしはなけれともけふは老をも忘れぬるかな
　吉田左兵衛佐會に終日對花
朝日かけいつのほとにかうつりけんあからめもせす花に暮して
　月前花
なにをよにおもひをかまし春のよの月と花との露のあけほの
　飛鳥井羽林亭にて三十首題をさくりてをの〳〵歌よみ侍
　ける中に花下送日
日數をも花にへにけり谷ふかき岩根の枕あとみゆるまて
散まてはかへらしものと日數をもしらすかすへん花の下かけ
　岡花
しなてるや片岡山のさくら花くまなき色に春かせそふく
山松にならひのをかのさくら花いひあはせてや風にちるらん

　瀧花
枝なから岩本さくら波こえて花のかなかす瀧のしらなみ
老て後あはれそまさる瀧つ涙はやくのとしの花はみしかと
　花の比大原野にまかりて
いとゝなを老木の花そなしほ山いまも小松の色とみるにも
　三月十四日鞍馬にまかりて花みる人の往來たえぬをみて
山櫻咲散るほとは來る人の花にそたえぬおなつゝらおり
　二月十五日聖門主御庭のさくらさかりに見にまいり
　侍りて歌よみ侍けるに
さく比を君やをしへし庭の面に一木はかりの花のさかりは
　返し
とはれては色そふまゝに昨日みし花ならぬかとうたかはれぬる
　はやくのことなりしに奈良にまかりて三條亞相實滑めしく
　せられ手向山ちかき藤樹庵にて當座有しに春旅といふ題
　をさくりて
いさ櫻花のぬさをや手向山紅葉にあける神のこゝろに
　慶長八年はるの比鞍馬の花をみ侍りて
おりたつゝとこなたかなたの花にきて猶心ひくくらま山かな
　丹後國田邊大内庄大谷の花見にまかりて
色もかもまさきのかつらくる人をまつはかりなる山櫻哉
　おなし時大閤西國御陣の供奉なりしか秋は歸陣たるへき
　なといへは
ふるさとの花の錦をたちかさね紅葉のにしき着てやかへらん
　護念寺にて

色もかもへたてなけれは盧垣のまちかき花たいかてうらみん

慶長十年三月二日豐前國上野村興國寺墨染の櫻を見に
へりて

すみ染のなしへなうけて咲花の心はおなしふか草の露

おなし時息孝之にかはりて

夕くれの色をそのまゝ咲花の名殘とみてやたちかへるらん

聖護院門主御庭の八重櫻一木はかりさかりなる比岩巴法
印なとかたらひまいり侍しに

心ときなしへのほとはしられけりなくれてさける花の一木は

清水寺にまいりけるに瀧のもとの花のさかりなるを見て

あらしふくなとはの山の花さかりちらぬなかすぞ瀧のしら波

花のいはひ

よし野山こゝろにかゝる雲もなし風ふかぬよの花のさかりは

けふにしるし袖ふる山のみつかきの久しきよゝの花は有とも

君かよのこかね花咲みちのくの同し名におふみよしのゝ山

愛染寶塔の花たゝひとりみにまかりて

なかめつゝひとりそ分るよし野山はなより外にこゝろちらさて

よし野のやとのまへのたにかくれの竹にはなのちりけるを
るをみて

した折の音こそきかね竹のはのたはむはかりの花の白ゆき

吉野にて人々にかはりて

人ことの家つとならはよし野山さくらの枝も折やつくさん

いとはしよよしやよしのゝ山風も吹やは及ふ花の木ことに

たか宿とへたてゝみえん盧垣のよしの野の山の花の木のもと

ちれは咲花に分入よし野山人のこゝろのおくもなきまて

木の木に分けきてみれはよしのの山花の外なる峯のしら雲

かせも今枝をならさぬ君か代をはなの心もあふかさらめや

よしの山花の心もおくみえてちる櫻あれは又そさきそふ

吉野山すゝ吹あきのかりねより花そ身にしむ木々の下風

高野にて深山の花を

ふかくなるほとそしらるゝ花にさへ鳥のねきかぬ山路分きて

み山木の色こそなけれ花櫻咲かたはらに立ならひては

天正九年長谷寺にまいりけるに四方のあらしに雪のこと
く河つらに花のちるをみ侍りて

はつせ河こほらぬ水にふる雪やはな吹たくる山おろしの風

文祿三年二月廿九日關白殿吉野の花御覽のとき人々五首
の歌つかうまつりけるに花の祝かひ

春風におけはふかすみの袖もかなちらさは花のうきにやはあらぬ

花をちらさぬ風

ふくもなをはなと夢とをさそひえぬ風のちからやよはの手枕

瀧の上の花

たき浪のおつとは見えて音せぬや花にまされるみかさなる瀧

神のまへの花

一枝になをさかきはの香をそへて手向ことなる花の色かな

はなのいはひ

君か爲花のにしきをしき島やゝまとしまねもなひく霞に

おなしときに人々にかはりてよめる歌の中に花の祝かひ

したひきて願ひもみちぬむさしあふみさすかに遠き花の山路を

山風にはな吹なかせよしの川すゑの末まてみん人の爲

花ならさぬ風

木の本のすゝ吹かせはそよさらに花に及はぬみよしのゝ山

たきのうへの花

みなかみにあらし吹らし瀧波の白さをみれは花そおちくる

みるからに瀧津河内はさえくれてみそれになりぬ花の白波

行水のはやくのことをおもひいてゝ袖をそひたす花の瀧波

神のまへの花

さくら咲中にとりゐの二柱たちならひつゝ花をこそみれ

咲散るもたゝそのまゝに手向山はなをは神にまかせてやみん

やまかせも入やはたゝむ神かきやしめの中なる花のさかりは

はなのいはひ

もろこしのよし野なりとも花さかは尋ねもくへき春の山路を

彼山にねてのあした

なをさりの花さへめてゝこしものをまして吉野の春のあけほの

天正十七年吉野にて花のうた五首

よし野河たかねの櫻ちらぬまも花になかるゝ水のしらなみ

白雲もいかにまかへんよし野山はなのかおろすよもの嵐に

よしの山まことの花はそれなからしはしはまかふ峯のしらくも

山の名も春やたかけんみよし野や花よりうへににほふしら雲

わけのほるかたもしられす咲つゝく花にあまきるみよしのゝ山

朝瀬にて花を

常盤木にふくはなへての春風も花にはけしき山おろしかな

花面影

月のうちのかつらも花や咲ぬらんおもかけにほふあまつ春かせ

なれ／＼しおもかけとめて我か身こそ咲散る花の形見なりけれ

落花

色もかもありてよの中はてはうきならひなしれは花や散らん

はるの比清水寺にまかりて

散をのみおもふ心の行へまてはなにをとはのやまかせそふく

落花隨風

ちりぬへき時にいたれはさそへともいふはかりなる花の下かせ

よし野にて御當座ありし時落花埋草といふことを

みよし野や花はみゆきと降にけりとおひもなつまぬ木々の下草

殘花薫風

散らしつることをやけふはいとふらん花の香をくる春風そ吹

雨後苗代

ひきうへん五月の雨をなはしろにまつ待えたる朝みとりかな

藤のうたのうちに

藤浪のこえつゝ春もくれぬめり花のちきりも末の松山

龍野侍従亭當座に松上藤

これも又一本ゆへかむらさきの藤咲かゝる松のむらたち

春きてはみとり立そふ梢より又一しほのまつのふちなみ

聖門主御庭の白藤をみせられ侍し夕へ當座に

これもまたなにを花そとことゝはむ藤咲庭のたそかれの比

三月十七日宇治にまかり旅ねして侍ける曉月に郭公の鳴

を聞て

里の名を月にそかこつほとゝきすはるのよふかき雲になくなり

暮春鶯

はなちれは人來となしに鶯の春の名殘をうらみてそなく

滿口大炊助會當座におなしこゝろを

うくひすの鳴れによらは今しはと別れてゆかん春もあらしな

三月盡に雨降ける日藤を折て人につかはすとて

雨にけふ手折はかりやいにしへの人の心にかへるふちなみ

三月盡

かきりあれはくれ行春を先におもふさためなきよの命なれとも

夏部

子規

聞しにもありてなき音は時鳥ゆめかうつゝか夜半のたまくら

慶長五年正月廿一日夢想の會興行せし百首の中におなし心を

あけにけり山ほとゝきすやまかつらかけて鳴音を待とせし間に

夕郭公

村雨に翅しほれて夕つゝのほしあへぬ空になくほとゝきす

夕月夜おほつかなしやほとゝきす忍ひねなからもらす一聲

杜子規

ほとゝきす歸るさいかにさそはれてきにしこゝろの神なひの杜

六月十九日丹後國にて、遊齋興行月次會に瞿麥を

くれなゐの末摘花のなこりとや咲出にけん庭のなてしこ

瞿麥落

みな人の心をはちよくれなゐの色にうつろふなてしこの露

月次會當座に雨後鵜河

雨すくる河瀨の浪に月さしてかゝりもしろきうかひ舟かな

天正十七年卯月廿六日當座に河邊螢

みたれ行螢のかけや川の瀨になひく玉ものひかりなるらん

五月二日長門國豐田にとまり侍ける時たらひといふ所に出て先年下向し侍ける時狂歌をよみ侍りけることをおもひ出て

星のかけとつるとみせてくるゝよのたらひの水にとふほたる哉

六月十九日月次會に空山暮蟬

紫の色もむなしき山の入日影けふもくれぬと蟬そ鳴なる

田邊にて愚息越中守忠興和歌會興行せしに杜蟬を

蟬の羽のうすき衣もほしわひて杜のこすゑの露になくなり

夕されはせみの羽衣なれきてもゝりの雫にぬれてなくなり

池上蓮

つゆの玉これなんそれとうつゝをみむ花に立おほふ池の蓮は

みたれてや池の玉ものかゝるらん濁にしまぬはちすなれとも

六月朔日法橋松雲もとより炭をおくり侍しによみてつか
はしける

峯の雪にやきしものこる炭かまや今日の氷室のたくひなるらん

泉聲秋近

秋ちかくこえくる浪もさゝれ石の岩にせかるゝ音そ涼しき

六月十九日月次會に玉階夜涼

橋の上はいかにすゝしき月待てなをおはしまによるのたもとの

田邊にて愚息越中守忠興興行和歌會に納涼を

あつさ弓いそへの山の下すゝみかくるたもとに夕かせそふく

涼しさを人まつやとのかことにてふせきもやらす風のあしかき

納涼忘夏

岩浪のいつくを夏はへたつらんたゝ涼しさはあきのはつかせ

六月十九日丹後國にて一遊齋興行月次の會に夏祓

うきことは身をもはなれす御秡河かへらぬ水にはらひ捨ても

閏五月十九日月次會に夏地儀

いかはかり空にてる日そ夕立の跡よりかはくにはの眞砂路

日にあつき石はふむともいさゝらは出てかはらの水むすびてん

夏山

みしかよの有明の月のうすくもりくらはし山の名やおもふらむ

夏動物

秋かせもしらぬ鹿の子の露にさへあはれをき行小野の草ふし

夏獸

夏かりのみしかき蘆の淺澤にあさりてたてるつるふちの駒

夏人事

なつのよのみしかきほとの名殘とてあされの枕せぬ人そなき

秋部

愛宕山より月輪にまかりて秋立て二日といふに下山しけ
る道に瀧のありけるを人にたつねけれは日くらしの瀧と
こたへけるに折ふし日くらしの名にもたかはす鳴けるを
きゝて

きのふけふ秋くるからに日くらしの聲打そふるたきのしら浪

七夕七首會興行しけるに待七夕

灯もなを九重の雲のうへに秋の七日のほしまつるなり

七夕の歌の中に

織女のつまゝつよひの塵はらふ閨の扇や秋のはつかせ

ほし合の空もにたりとみたれ碁の石川の水にかけをならへて

七夕にて遊し侍し時の當座に

今日待てとわたる舟のかひもなく逢せをたとる天の川浪

七夕別

いきうしといひてわかるゝ七夕のひとやりならぬしのゝめの空

七夕枕

天河せんかたもなし枕よりあとより明るまはのなこりに

まれにきてなつともつきし岩枕星のあふよのあまの羽衣

あまの河かたしきかねて磯枕水かけくさにそてやぬれなむ

七夕衣

かさぬへき雲の衣を織女のきをなくくる間に明るよはかな

重ぬへきよるの衣をたちぬひてたなはたつめや秋を待らむ

七夕扇

彦ほしの扇やたよるれやの塵をはらはゝやかてをかんとすらん

七夕絲

たえせしな五百機たてゝなり姫のけふの手向の絲は引とも

七夕の手にをとらしとよの人のねかひの絲や今日はかくらん

七夕舟

玉はしなめくらはとをしくたりせに竿さしわたせ天の川舟

七月七日田邊にて興行の會に二星適逢

あまの川とをきあふ瀬を契りとや二のほしの中におつらん

荻聲驚夢

たか夢をきそひのこしてうたゝねの枕に過る荻のうはかせ

七月廿一日月次會に荻を

さゝの葉のみ山のさともそよさにさこしきそふる荻のうは風

荻の葉に宛をとつれてそよくなり秋風吹とかりはつけれと

萩露

いく度か袖ぬらしけん萩か花おらは落ぬへき露とみなから

しくれつる雲井のかりの翅よりこほれてむすふ萩のうは露

庭萩

宮城野のこのした道もとをけれは哀とそみる庭のむら萩

庭の面にうつしてそみる紫の色こきのへの秋はきのはな

うへ置し庭の草木は色もなしもとあらの小萩咲そめしより

聖門主道澄庭の白萩ことしより色に咲かはりけるをみて

更に繪もいかに及はん秋萩の白きを後の色になしても

御かへし

一度は色かはるとも萩か枝の白きの後と又やたのまむ

八月下旬休庵の庭の萩散はてゝ後民部卿法印紹巴なと申すゝめられてみせられし時當座有ける其後短尺をゝくられて愚老にも一首よむへきよし申をくらせられしに
中々に花散はてゝみる人のこゝろもをかぬ萩のしたつゆ
秋はさの庭もまかきも露霜にうつろひかはる花のいろかな
月次會に薄出穗
はな散て分入ひとの心さへときにうつろふはきのした露
閑庭薄
はる〳〵と分こゝ入野の袖のうへにぬれぬ涙こす花すゝき哉
まねくへきならひもしらしたのつから人なき庭におふる薄は
槿露
朝露もきえこそやられ咲出て夕かけまたぬ花の名たてに
戸外槿
うつろふはいつの人まそ槇の戸をさしてぬるよのあさかほの花
袖上露
おほかたの草葉をしなみ吹はらふ風のほかなる袖の露哉
大かたの秋にもたえぬ夕露を戀する人の袖にくらへん
むらさめのまやの軒端の夕日影袖まにほさむ槇の下露
七月廿一日月次會に虫を
水くきのをかへにすたく蛬たかゝきすてし筆にか有らん
蓬の葉のうらみやをそと廬垣のまちかきむしの聲そ聞ゆる
草蟲聲
むしのこゑ大宮人の袖はへてさかのゝ露にしほれてそゆく
夜蟲
鈴虫のふり捨かたき秋のよのねさめをゆするきり〳〵す哉
離蟲吟
秋かせのならすまかきの梢よりひゝきをうくる松むしの聲
後九月五日三條羽林興行會當座に杣山鹿
杣人のをのゝ音してをのつから山ふかくなるさをしかのこゑ
故郷秋夕
ふるさとを心かろくもいてやせんよのありさまの秋の夕暮
秋夕傷心
あはれたゝ心のあたとなりにけりあまりめてこし秋の夕くれ
對山待月
つく〳〵と月まつくれはかれてより心にかゝる山のはのくも
八月十五夜關白殿大佛殿のうしろの山の亭にて月を翫そ
れより聚樂亭にかへらせ給りて和歌會侍しに
月こよひ音羽の山のをとに聞をはすて山のかけもをよはし
おなし時人にかはりて
みる人のこゝろのくまもなかりけりこよひの月の影にひかれて
八月十五夜に
名をおもふ心を人にいさめてや空にくもらぬ秋のよの月
八月十五夜くもりてやゝ更行まて月のみえすはへりける
に
よしさらはむなしき名のみ立雲に月のうらみをかへつゝやみん
おなし夜寢覺て月をみるにやう〳〵村雲のはれわたりて
侍けるをみて
いとはしよ老のねさめのなかりせはこのあかつきの月はみましや

八月十五夜くもりて月のみえす有けれは

よの中のさはりをなかくなけきけん月にもこよひかゝるうき雲

昌叱ゝ國の比名月なれはとて一如院にて月をみて

たまさかの友待つけて今日のこよひにたるときなき月をみる哉

八月十五夜かれこれともなひ橋立にまかりて更行そらま
て月をみ侍りて

月みれは秋もこよひもなかはにてふけゐの浦の名殘をそおもふ

名月月蝕にあたる夜昌叱庵にて

雲霧の外にもさはる月影やこよひの秋の恨なるらむ

八月十五夜月のくもりけれは

名をおもふこゝろもしらすしら雲の浮世を月の影にみる哉

八月十五日月次會當座に十五夜後朝

うつり行秋の半の月の色にあかてわかれしよこ雲のそら

明月離雲

ひかりこそ月のかつらの秋かせにこえてもはらへ夜半の村雲

九月十九日一遊齊興行月次會筑紫より歸陣にて出座し侍
けるに月を

おもひやれ宿のこのまの影さへも心つくしのあきのよの月

月の比永種のもとよりいひをこせける

はしたてやすみわたるともなれ／＼し都の月の秋をわするな

返し

なれ／＼し月の都の名殘をもかけてそおもふ天のはしたて

月の比越後國主上杉のなにかしにつかはしける

しろたへの月は秋のよかく計こしちの山の雪もありきや

播州御陣の時所々見物の次に明石の浦にて夜の更るまて
月を見て

あかしかたかたふく月も行舟もあかぬなかめにしまかくれつゝ

春部二百八
うらみしな花の心も待とたにしらは日數のうつり行とも

同
あは雪のきえにし跡は七種のかけのゝ露にそてやぬれなむ

廿日月

ふし待のきのふの名殘そのまゝに月をかたしく庭のさむしろ

九月十三夜

名にめてゝたれかみさらん月影のありしにまさるけふの今宵を

みちもせぬこよひの月の影よなともなかの月にかはらさるらん

なかめこし秋の半もむかしにて今宵や月のなこりなるらむ

月次當座に水上月

山河や水上とをき岩波のくたきもはてぬ月の影かな

關白殿聚樂にての御會當座に湖上月を

いくそたひやすらひぬらん詠つゝ月もわたるせたのなかはし

名所月

みるからに西になかれて淀川のよとむともなき月のかけかな

後九月四日宮川禪尼にて菊をみ侍りて當座に月前松

山松の軒におほひて夕月夜はるかにのほるかけをみるかな

夕霧はゝれてあとなき山風に松よりくもる月のかけかな

月前鶴

さよもはや更行月に秋の霜かさねてしろき鶴の衣毛

八月十五日月次會當座に寄月哀傷

なき人のおもかけそへて月のかほそゝろに寒き秋のかせかな

峰わたるかりのは山のしくれより聲の色そふむら紅葉かな

八月十五日月次會に薄暮鴈

入日さす雲のはたてに聞ゆなりあまつ空なる初鴈のこゑ

九月廿六日月次會に曉擣衣

よなさむみ衣かりかね打そへてあかつきゝほふつちのをとかな

曉鴫

あかつきの鴫のはねかきかきたえて夕つけ鳥の聲そかすそふ

九月九日薩摩守義久のもとより菊を送るとて

九重にほふつむ菊の色も香も山路の秋はさもあらはあれ

返し

こゝのへに今日摘袖の色もかもふかき山路の露の下露

月照菊花

めかれせぬまかきの菊に夕霜の色をかさぬる秋のよの月

紅葉

おしとおもふ紅葉にきけは木枯の音より外の秋風もなし

秋かせに紅葉やちらんつれもなき岩木の山の名をたのみても

慶長五年正月廿一日夜夢想の會兼行百首の中におなしこころを

下紅葉しくれ〳〵て鳥の音もきこえぬ山の色やそむらむ

九月五日三條羽林興行ゝ會紅葉添色

山姫のたちきるからにくれなひのこそめのにしき色やそふらむ

まさきていり日かゝやかされて露霜のふるたひ紅葉色そこかるゝ

同廿六日月次會におなし心を

くらへみんもみちの色に思ひ出るときはの山のつゝしなりとも

岡紅葉

夕露のをかへの山の紅葉はやしくれぬさきの色をみすらん

霜後紅葉

朝日さすかたより霜のかつ消てむらこにみゆる庭の紅葉は

月次會當座に暮秋

鹿の音も峯の葛葉もさそはれてかへるをいそく秋のくれかな

なかむるも心ほそしや行秋のかたみかほなる有明の月

秋田

かすみにもたちまさる霧にかけみえて春日わするゝ秋のくれ哉

秋野

あしかきのまちかく庭をへたてゝも野へこそ秋の色はふかけれ

冬之部

若州侍從興行會當座に時雨告冬

降雪はまたとを山の村雲に冬をみせたる初しくれ哉

遠村時雨

山もとの松にいさよふ夕しくれ雲のかへしの風や吹らむ

落葉

色やたゝこきもうすきもはて〳〵はおなし落葉に木枯のかせ

十月十三日若州侍從興行會に冬菊薫袖

かへてたになをしら菊の衣手にうらめつらしくにほふ色かな

十月十日三條少將亭會に殘菊帶霜

散うせぬ松をためしと霜の後みさほにたてる庭の白菊

なくしもの秋冬かけて家の風ふたゝひにほへ庭のしら菊

十一月十三日飛鳥井羽林亭にて夕竹霜

窓ちかき竹のさ枝になくしものしろきをみれは夕風そ吹

鞆の懸の有所にて寒樹夾松といふことを

よつの時や四本の松にことゝはむ花も紅葉も枝になき比

うへそふる柳櫻も冬かれて庭に葉かへぬ松の一しほ

寒草

うつろひし秋の花野の露よりも哀はふかき霜の下くさ

河原風吹にけらしな霜かれの洲崎のよもきおれふしにけり

寒草處々

霜かれをたれかあはれと思ひ草おはなかもとの秋をこひつゝ

氷始結

けさの朝けこけ[本ノ]かとみえてくむ人のしはしやすらふ山の井の水

十月十九日月次會に氷閉瀧水

吹おつる山風さむみ瀧つせのなかるゝまとやまつこほるらん

月次會に冬月

天津風雲の浪路に音そへて月の氷をよする影かな

浦冬月

雲はらふよさのうらかせさえくれて月そよわたる天のはし立

霜月十九日月次會に水鳥

川よとによとこしめつゝ水鳥の落瀧津せやはやく過らん

十一月十八日初雪ふりける曉

ふりそめてまかへはまかふ影なから在明の月にのこる雪かな

十一月十九日曉初雪降侍しに大閤より山崎長松を御つかひにてよをこめて一首をゝくり被下侍し

月に散るみきりの庭の初雪をなかめしまゝに更るよはかな

御かへし

つきにちる花とやみまし吹風もおさまる庭の初雪の空

初雪のあしたある人のもとより

やまの端もへたてぬ雪の色なから分てそみつる庭の松か枝

かへし

わきてみる心そふかき山のはの雪の色やは庭のまつかえ

若州少將遠山の山庄にて和歌會興行あるとて題をさくられ侍しに橋上初雪

吹をくる雪のしからみかけそめて夕風しろき谷の柴橋

愛宕に侍ける比雪降けるに

つみかへるしきみか峯の夕風や袂の雪を吹はらふらん

深雪

庭のおもはひとつ野風のをとさえて籬をしなみつもる雪哉

山雪

山の端は星のひかりもうす雪にたえたえのこる雪の色かな

十月廿三日飛鳥井羽林亭月次會に夜思山雪

あけはみんとおもふ心に峯の雪まつ分かくる夢のかよひち

さゝの葉の太山の雪のよそさむみ見るはかりなき峯の松風

林間雪

色かへてよの間の雪はちりそゝく林にしけき木の葉なれ共

關路雪

かせそよく竹の下道分過て雪に宿かるあしからのせき

○崎雪

ふる雪のすさきにたてるかさゝきのひとりはらはぬ浦風そ吹

冬かれの野島かさきに雪ふれはおはな吹こす浦の夕風

刈田雪

臥なれし小田の原とやふる雪もかのこまたらにあとをみすらん

濱屋雪

冬されはおと絶ゝ煙立消て雪にそくもるなたの鹽かせ

松雪

うつすともえやはをよはん雪の松白きを後のおもかけにせは

今ははや心のえゝにつもるらしあらしのゝちの松のしらゆき

松上雪

ちりうせぬ松にならひて吹しほる嵐のうへにつもるしら雪

當月十九日會當座に雪埋松

夕日影をちの山もと降はれてあたゝかけなる雪の松はら

あらし吹音もよの間にうつもれて嶺も尾上も雪のあけほの

疎籬看雪

やふれ行あみめの絲のをのつから雪をみせたる玉すたれ哉

雪中述懷

さすか又はらひは捨し終に我あつめぬ窓の雪とみるにも

鷹狩

はしたかの妻こゝろみし羽ならしもさなからみゆるとりの落草

爐火著冬

春の日のひかりにあたる心地してねふりにむかふ埋火の本

十二月十九日閑邊にて月次會に爐邊閑談

おもふこともえやは心にうつみ火のかきあらはして又そかたらふ

夜神樂

うたふよの聲のうちにもその駒やひのくま川をためしにそ引

榊葉の香をかくはしき袂かなゆふとりしてゝうたふあかつき

神の心いさみやすらんその駒に猶くさかへとうたふよのこゑ

紀歳暮

よにすむはおはにみしかき年のをのくるゝをいとふ昨日今日哉

雪中歳暮

春秋を夢にすくさん雪ふりてくれ行としのうつゝならすは

戀部

烏丸亞相阿野羽林なと丹州下向の時の當座に忍戀を

とはゝとへしのふのなかのしの薄ほにいてぬまの露はいかにと

慶長五年正月廿一日夜夢想に會興行百首の題の中におなし心を

しのふくさみたれそめてそ色かはる心なるへき袖の露かな

忍涙戀

さらはまたそのまゝなかせ泪川せくに涙こす袖のしからみ

互忍戀

いかにせむ色にいてなは君と我ともに忍ふの草はつむとも

みせはやなともにしのふのすり衣下にみたるゝ露のたもとを

忍久戀

とこへてもこいふの山の嶺の松色にはいてすかせにさはけと

閨戀

すへなくもまたせてつらし鈎簾のとに聲聞はかり立はよれとも

見戀

大かたはかたるか中に我かおもふ人のうへのみまつとはれつゝ

淺始戀

みすもあらす人をたとるにしられけり夢にまさらぬ現有とは

稀逢戀

中々にもらしてやみむ思川せきとゝむへき心ならねは

忍尋緣戀

秋をまつ星のあふせもしられけり稀なる中の袖のしら涙

おもひ草尾花の露にぬれ〳〵すほのめく風のつてにとはゝや

豐前國香春にて忍傳書戀

こゑをたにこすの間遠く聞なからつたへてうれし文のことの葉

依戀祈身

いのるとも神やはうけん戀せしとわか心さへしたかはぬよに

祈不逢戀

神たにもうけぬ祈のみしめ繩ひきかへすとも君にしらせし

つれもなき人にはいはしゆふたすきかけつゝ神に又いのるとも

十月十日三條羽林家當座に祈神戀

いかにせんうきを糺の神ならはいのらすとてもあはれまん身を

丹後國宮津に住居の時一女院にて會有し人々にかはりて

契戀を

神かけてちきりしことを思ひ出よ我こそよには數ならすとも

契待戀

人をわか思ふ心のまことよりいつはりしらてまつゆふへかな

不逢戀

うつゝにはいつかゝさねん逢ことは夢はかりなるよはの衣を

閏五月十九日月次會當座に待便戀

はゝかりの關ともいはすこえてきぬ人傳ならぬ便もとめて

逢戀

こよひこそしのふることもわすれけれ逢うれしさの心まとひに

忍逢戀

あふ人にまつうちとくる心かなさりとてよにはしのふものから

正月廿五日關白殿御會御當座に後朝戀

わかれつるうきふしにのみまきれてや中々今朝は物思ひもなし

逢不會戀

あひみつる程もうつゝとまたしらて夢になせとも契らさりしを

はかなしや一よふせやの中絶て又はゝきゝのよそめはかりは

もかみ川逢瀬はたえていな船のいなとはかりに月日をそふる

逢後増戀

あひみしは夢はかりなる俤をあはれうつゝにこふる比かな

稀戀

稀にあくる山櫻戸をとはてのみちらさは君かうきにやはあらぬ

依忍稀戀

いかにせん忍ふよかれのそのまゝに逢ことかたき中となりせは

追戀

忍つゝ立よるほやにわかうへをかたると聞そかつはうれしき

あひおもはぬ

かた戀のくるしさつけん難面のこゝろかへする人もありやと

おもふをはおもはぬをよのならひそとしりてもまとふわか心哉

思ひ

いかにせむたれは心のおもひ草はらふにたへぬ根さしならねは

被忘戀

さりともとつらき人をもたのむ哉我わすられぬ心ならひに

わすれ草人の心のたねとりてたえぬ戀路にうへましものを

人心いつのむかしにわするらむちきりしことはきのふと思ふに

恨戀

つれなさにこりぬと人や思ふらんうらみぬほとに成てこし身を

さらに又うらみことはいはん文は猶とりて其まゝかへすつかひに

のこりなく人につたへよつらしとて恨をかくす中ならなくに

きくに今人につたへんたえこしに又なほさりの恨なりとも

披書恨戀

いかなれはかくまてなけの一筆にうらむることの數をそへけむ

恥身戀

いかにして人にむかはん老はてゝ鏡にさへもつゝましき身を

夢中戀

さよ衣かへすたもとに夢人を待とや床のちりはらふらん

夏戀

行螢さらにつたへよ多くれはおなし心にもゆるおもひを

寄月戀

とへかしなしのふとするも月夜よしよゝしと告て下に待身を

寄風戀

人めのみ忍の浦のかせをあらみ身のうきふれやよはもかぬらん

かせならて人には誰かつたへまし思ひの烟空にみゆとも

寄雲戀

あふことはならはぬ身さへ横雲のわかるゝ空に名殘有物を

寄名所戀

立かへりむれのうちにやさはくらんせくにそ袖は音なしの瀧

もらすへき人に心を岡のへの末せきとむる水莖のあと

慶長十四年六月飛鳥井相公・・豐前國小倉に下向の時一

讀興行し侍けるに寄野戀を

むさし野もはては有なんゆく／＼もわか戀草の種をたつねて

寄海戀

みるめなるかたならませは大海のかへらぬ涙に身は沈むとも

寄苔戀

いける身のほとをはなきてしらぬよの苔の下とはなに契りけん

寄木戀

なそもかくよになかるらん名取川身は埋木のしつみはてつゝ

寄鳥戀

わかれちはまたよふかしといひなすもはゝ鳥の鳴て過なり

いかてかくつれなき人そいふことに答ふる鳥もあれはあるよに

まてしはしそらねと人にいひなすもわかれの鳥の八聲にそなる

寄衣戀

くれなゐの八しほの衣それとみよ忍ふにかなふなみたならねは

寄筆戀

その人のこゝろもさそとたのむかなたゝしき筆の跡をみるにも

寄玉戀

にくからぬ人にみせはや涙にもなをぬれきぬの袖のしらたま

似ることもよもきの嶋の玉の枝手にたにとらて逢よしもなし

雜部　上

古渡雲

たか袖のなこりとゝめて枕かのこかの渡にたてるしら雲

深夜雨

更にけりゆきゝたえたるよるの雨しらこゝ川の海も音して

ぬま

水まさる岩かき沼のうき草や苔のみとりの色をそふらむ

うきくさに岩のはさまもかくれぬの下にやかよふ水の末ま

也足軒一會興行の當座に更遊浦

うきみるを道の行てにひろひてやあそひの浦の日をくらすらん

浦島

涙の昔もひゝきをそへて住の江や浦島となき松風そふく

とし涙のいくかへりとか浦島に老木の松のまつそ久しき

慶長五年三月廿五日式部卿智仁親王亭にて古今講釋の後

の當座に故郷庭草を

今ははやゆつりやはてんむかしみしいもの垣根をとつる葎に

閑居

やまを我かたのしむ身にはあらねともたゝしつけさを便にそ住

十月十三日當座に野篠

冬かれの萩の下葉にかへりてや霜うちさやく野邊の篠原

窓竹

鶯のきなくみきりの夕日影むら〳〵なひく窓のくれたけ

一遊齋興行月次會につくしより歸陣にて出座し侍るに松

た
名所松
わかみとり立かへるとしのかひありて老の命もいきの松はら
浦松
ひろひ置し例もさらに高砂の松のおもはんことの葉にして
庭上松
心あるあまのしわさに釣舟をよせてはつなく松かうら島
松經年
庭に先つゝつしそうゝる大かたは松のおもはん老をはちても
松添榮色
とし〳〵に老ぬるかけそ哀なるまつのおもはん身をはわすれて
飛鳥井相公豐前國小倉に下り給し時會催し侍しにおなし
心を
立かへる春にひかれて松の葉のみとりもふかき朝かすみ哉
人にかはりておなしこゝろを
君かよの松にひかれてのほりゆかん千年の坂もめのまへにして
曉鷄
うれしさをなにゝたとへん我宿にうへし四本の松のことの葉
關路鷄
あかつきの鴫のはねかきかきたえてゆふつけ鳥の聲そ數そふ
こはた山こはたか爲にね覺よとゆふつけ鳥のあかつきの聲
あはた山夜ふかくこえて相坂のこなたにそきく關の鳥か音
木幡山ゆふつけ鳥のこゑ待て越こそやられ馬はあれとも
慶長五年正月廿一日夜夢想に
心たにしたにかよはゝ石淸水むすふ契りも絕しとそおも
ふとよみ侍しかは百首の題を飛鳥井三品へ申請てなの
をのに歌をすゝめ侍し中に旅を
みやこおもふ淚も露もあらそひて草の枕に幾夜ねぬらん
山旅
たひ衣日もかさなりて宿とへは同し山路の峯のしら雲
峯をこえ谷をくたりてやとゝへはおなしこゝろへと山かせそ吹
旅行を
したひきぬ都にしてはみすもあらすみもせぬ人も旅の友とて
旅夢旅
ことつくるものにもかなやたひ枕みやこの夢のかへるたよりに
羇中眺望
ゆく〳〵も心をうつす海山のなかめをたひのおもひ出にして
旅宿
をのつから一夜の宿となりにけりしはしといひし夕くれの雨
旅泊
いつ舟のかくきにけんとおとろきてなをさへたとる唐泊かな
旅泊淚
由良のとの行衞はるかにこくふねもとまりさたむる和歌の浦浪
六月十九日月次會三首に遠方書信
みやこにとことえりしつゝかく文にとゝこほりぬる筆の跡かな
山家
をのつからあやしの賤のことの葉をうつして友となるゝ山里
山家送年

年月をふるにつけてもおもふそようき山住にまさるうきよを

山館燈

仙人の住家とやいはんみたれ碁の音して更るともし火の影

よもすから静にすむもうらやましたか山窓のともし火のかけ

山おろしのたえす音する窓のうちにあやしく殘るよはの燈火

田家

作るともそゝろに過し小山田のかたしきかゝるやとの一むら

さとゝをき田中の井とのあせつたひ汲人あれや道そたえせぬ

古寺鐘

たれもみな命はけふよあすか寺入逢の鐘におとろくはなし

遊女

くれにけり野上のさとの草枕たれと契りをまつむすふらむ

はちらひてなれはそなれん一夜妻たか名殘をか身にしのふらん

思往事

西にうつり東の國にさすらふもひま行駒のあしからのやま

四月廿日定家卿の自筆新勅撰集求えたる草案に和歌會興行し侍けるに披古翻昔

雲の上の月にましりてたえゝ置ことの葉みかする筆の跡哉

もしほ草かく跡したふ心のみむかしにかへる和歌のうら浪

社頭榊

ゆふしてゝ宮ちかよはゝかけそへよ神の心もなひくさかきは

みつかきの久しきよゝり榊葉を神の御まへにうへやそめけん

社頭祈君

敷島の道すなほにといのるこそまつ君か代にすみよしの神

新勅撰竟宴三首の中に社頭祝

あふひ草かけておもへはそのかみにこれも二葉の松の尾の山

祝

わかはくに家につたへん梓弓もとたつはかり道なたゝして

ちりうせぬ人の心のたねよりやうへ置宿のよゝのことの葉

禁裏大飲助會行會におなし心を

おさまれるよはうらむへきふしもなし植そふ田子のうたふ聲迄

寄星祝

としをへてほしをいたゝき起きなれし光を見する雲の上人

寄山祝

民の戸のにきはひまてもしられけり岩倉山の治れるよは

寄道祝

いにしへの風をつたへて志きしまの道によりくる和歌の浦浪

君か代のたゝしき道はゝるかなるゐなかの民もゆたかにそ住

敷島の道のひかりもあふきみんことはの玉の數をひろひて

寄國祝

あし原やみつほの國もやす國となひくにみゆる春風そ吹

たて置し神のちかひの今までもなをうこきなき國の御柱

治しる國の司もしられけり高木の村のおきにまかせて

聚樂行幸の御會に人々にかはりて寄松祝といふことを

年に猶まさ木のかつらなかきよをかけてそ契る宿の松か枝

かけて今日みゆきをまつの藤浪のゆかりうれしき花の色哉

おさまれる御代そとよはふ松かせに民の草葉も先なひく也

今日よりは君にひかれて萊草二葉の松の千代に八千代に

あふくよの人のこゝろの種とてや千代を契れる松のことの葉

夢想の會に寄神祇

例に今うつしてそすむ八雲たつその八重垣の神のむかしを

關白殿渡御のときおなし心を

ひゝみこそふるしなからも昔なきこゝろの神とあふきゝぬれは

飛鳥井中將公雅朝臣下向の時興行の會當座におなし心を

いにしへはこゝにきたのゝ神とてや殘すちかひを猶あふくらん

雜部　下

慶長五年七月廿七日丹後國籠城せし時古今集證明の狀式部卿智仁親王へ奉るとて

いにしへも今もかはらぬよの中に心のたねをのこすことの葉

おなし時烏丸亞相へさうしの箱をおくらせし時

もしほくさかきあつめたる跡とめて昔にかへれわかのうら波

かゝりし後ことゆへなかりしかはかの箱をかへしたくらるゝとて辨のもとより

あけてみぬかひもありけり玉手箱二度かへるわかのうら波

返し

うらしまや光をそへて玉手箱あけてたにみすかへす涙歟

慶長六年閏霜月十九日照高院宮道澄より申しおくらせられし

おもひやるも心つくしの道なから行はなくさむかたやあらまし

御かへし

みやこ出る名殘を何にくらへまし行かはなくさむかたは有とも

也足軒素然新調をもうふけて數年丹後在國ありしを今度めしかへさるへき勅定有よし勸修寺大納言より申をくられけるにほとなく歸洛なりしかは

わするなよつはさならへし友鶴のひとり雲ゐに立歸るとも

返し

かへるへき雲ゐにたとるをつるのもとの澤邊を立にゝなれし

八月廿七日豐山左膳方よりとて歌數をよみて書付よしあ

しな分へきよし有けるに此一首をいくりつかはしける

いつれともこと葉の露の玉さかにわかれもやらぬ光をそみる

八月十九日奥山佐州へ茶湯とてまかりけるに床に千五百番の歌合に定家卿筆にて杉の庵の時雨のことなとかゝれたる一軸をかけられたるに折ふししくれて興をそへけるほとに

くやしくもとはて月日をすきの庵身にしむ袖のはつしくれ哉、

聖門主へ日比齒をいたみて藥を申侍りにこの比又申ゝくへきよし申てまゐらせ侍し時に

ことはりの老木のくちはそれもなを落るもおしむ秋風そ吹

御かへし

なそくとき木々の落葉をみてもしれ麓はふせく嶺の秋かせ

あるものゝかたより一首をいくり侍ける

音に聞うたの名所なかなかにすむほとゝきす初音きかはや

返し

初音をもいかてもらさんをのか住山ほとゝきす名のりきかすは

宮川の禪尼櫻のはしに住ける時まゐるへきよしいひて度打過けれはかの御かたより

君こむといひし日ことに過ぬれはたのまぬ風のわひつゝそ吹

返し

はかなしやまつに度々すきぬともたのまぬ風といひし便は

江雪齋返しにつかはしける

わひて住みやこをよそにさそふ身やうかへる雲のしくれ成らん

慶長四年九月八日三井寺講堂御再興ありて柱なと立られし比照高院宮へまいりてかくそ申侍し

絶にける三井の流をあらためて更に汲しる法の水かな

御かへし

かすかなる三井のなかれをとふ人に心の水をすましつるかな

住吉の社にまいりて古今相傳の子細あれは讀て奉納し侍ける

敷島の道のつたへも絶やらぬ行末まもれすみよしの神

慶長四年六月廿二日烏丸黄門日野羽林なと下國の折ふし橋立見物のために宮津へ供なしてまかり侍りける次日寺にてみせまゐらせかの寺にて一讀の當座に

たよりありてまたれし雲の上人もけふゝみそむる天の橋立

對馬宗義州入道閑齋よりをくられ侍ける

天下なひきしたかふ大きみにはこふ御調をすゝむ高麗人

返し

君か代にこまもろこしもへたてなくはこふ心やみつき成らむ

群在のもとより比えの山にありける東大寺の香をいくられける時このうたをそへて一つゝみの紙に書付られける

おほけなき袖の匂ひのくはゝるも我か立杣のみやうかとそ思ふ

返し

咲花に似たりと香をそもとめぬるわか立杣の峯のしら雲

正月十日夜わか道を心にかけぬれは老たるものもわかくなる術なりといふ夢想ありてのあしたに思ひより侍る

あしわかの道に心そいさみぬるこやこまかへるはしめなるらむ

泉州堺津宗佐たひ／＼歌の點のこと申をくりけるこゝた

ひも百首の歌をのほせ批判のことこひける一巻のおくに
秘歌のうらにまた涙なれぬ磯のあまのよする心を哀とも見よ
　返し
あま衣なれにしわかの浦の涙かへりて淺きみくつをやしろ
　禁中へ富士の山繪に書たる御屛風奉りし時
久かたのそらにつもれる白雲や明行ふしの高根なるらむ
　中院黄門通勝卿入道おりて此一首をゝくり給ありし
むらさきにそめし心もたちはてぬ袖の行衞を苔にまかせて
　返し
むらさきにそめし心のはてもなしおもはぬ袖をこけにやつして
　これを物かたりし侍けれは紹巴
苔になす袖そかしこきゆつり置心はふかきむらさきの庭
　天正十五年十月廿七日愛宕月輪寺にて幸賀庭義灌頂せし
　前日白雲寺福壽院またまかりて通夜し侍りしに
けふのこよひ心のやみもはるはかり光をそへよ法のともし火
　おなし年九月上旬島津薩摩守義久此比在洛のことあり息
女を人しちの心にてとゝめられ侍り同道有たきよし御こ
とはりたひ〳〵なりしかとゝのひかたきよしを申つかは
せしにかやうに申をくられはへりし
ふたよとは契らぬものを親と子のわかれむ袖の哀となしれ
　返し
なれ〳〵し身をはゝなたし玉手箱二世とかけぬ中に有とは
　琉球國使僧にくして恩日德といふわらはへのほりはへり
けるにいさゝかのことにつきてさつまにとゝめらるへき
よし有けれとさま〳〵になためて歸國し侍る時建善寺のも
とへよみてつかはしける
しはしともいかてとゝめん親と子のつらき別を思ひとくには
　鹿兒島の東よし野山ちかきわたりなつみの瀧といふ所お
り見にまかりて
これも又よしのにちかきなつみ川流て瀧の名にやおつらん
　肥後國八代にとゝまりける日池を見侍りて
かけもみし日數をうつす旅衣身をやつしろの池の鏡に
　同國の白川をわたりて
なかれてのなを行末をたのむかな身は白川の淡と見なから
　ひれふる山みんとて舟にてまかりて
松浦潟ゆく舟となき追風にひれふる山のむかしをそおもふ
　丹後へ下國のとき橋立見にまかりて
そのかみにちきり初つる神代まてかけてそおもふ天の橋立
いにしへに契りし神の二柱今も朽せぬあまのはしたて
　與謝のうらにて
よさの浦松の中なる磯淸水都なりせは君もくみゝむ
　慶長二年昌山御不例のよし聞て八月十五夜よふけにて大
坂へくたりけるに三嶋江に舟をとゝめ蘆間の月をなかめ
て
たれか又こよひの月をみしま江の蘆のしのひに物おもふらん
　廿四日きもつきよりめくりといふ所まてつきて大安寺に
　泊りけるに夕月夜おかしくさしうつるを見て
はる〳〵と山をめくりの夕月夜にしに入江の影をみる哉

廿五日笹田へ舟をよせてたかつの人丸御影堂尋てまかり
拜奉りて旅宿に歸曉かたにおもひよりける
あふきみんたかつの松の木の間よりむかしをのこす在明の月
赤石の岡たつねてみ侍しに松の木立ふりたるをむかしの
あとゝ里人のをしへ侍れは
夕日影あかしのたかの跡とへは昔おほゆる松かせそふく
ゑしまをみやりて
みつしほにくもりはてゝもよする浪の白きを後の繪嶋とそみる
高砂の松見にまかりて
高砂の松のおもはんこゝろにも猶はちやらぬことの葉にして
備後國鞆のうらに舟とまりして翌日出たつとて
今日はまた吹こそをくれこきよせて泊し舟のとものうらかせ
吉野山み侍るついてに三輪の山なとふらひ行侍に宇治橋
の橋木とて杉の木立こと／＼く杣人のきりける神木とて
五六本のこしけるを見て
三輪の山杉一本を杣人のゝこすや神のしるしと成らん
吉田に久しく逗留し侍ける比雪の降ける日近衛前相國の
御もとより御頭痛再發のよしのたまひて御歌あり
みな人のみるてふ雪を山守は風のさむさにたれこめてけり
御かへし
吹風をいとふにはあらて木々の雪散をみしとやたれこめにけむ
出羽より上洛の人有比西國御出陣供奉にいてたつとて申
をくりける
いな舟のうきよなりけりもかみ川のほれはくたる旅のこゝろは

大庭の御神いさなきいさなみなりと聞及しまゝ白方より
まいりてみ侍しついてに
そのかみやひたりみきりにめくりあへる契絶せぬ天のうき橋
かへるさに八重かきの明神み侍しに在所をに佐草の聞と
いひける社のおくに八重垣神にてめくりをかこひて杉二
本ありけむかしに大木なりけるかころびてのちうへつきた
るとなむ
更に今みるそあやしきいにしへのその八重垣も杉のしるしも
高野へまかるとてよをこめてまつち山こえ侍るとて
おきいてゝ猶あくるよをまつち山こえてきのちの末いそくとて
高野おくの院にて
あなたうときよの夢や覺ぬらむそのあかつきをまつの嵐に
きふねにまゐりて
きふね川岩こす浪やゆふたゝみ手向の袖にたえすかくらむ
日野といふ所にまかりける次に長明といひし人うき世を
はなれて住居せしよし申つたへにへる外山の庵室のあと
をたつねてみ侍るに大きなる石のうへに松のとしふりて
水のなかれいさきよき心の底さこそとをしはかられ侍る
昔のことなと思ひ出て
岩か根になかるゝ水も琴の音のむかしおほゆるしらへにはして
七月廿四日湯光院三回御忌の御佛事とて清涼殿にて法華
懺法ありけるに雲客僧衆ともに禮拜せられけるをみて菊
亭右府へ申をくりける
今日といへは花も散しく法の會に立居かさなる雲の上人

御かへし

あしたゆく今日法の會につかふるや老をもはちぬ雲の上人

十一月二日禪名院殿廿五回之追善の一會に寄夢懷舊とい
ふ題をたくり給はりけるに丹後下國の折ふしなれは沈思
に及はす引て下りしに十二月九日強柏はからさるに遠行
のよし聞えあれはやかて書付てのほせ侍る

遠さかるよゝの跡まてしのふ哉いやはかなゝる夢のなこりに

蓮池淨知うせて後かの後家のもとに申つかはし侍りし

法の花更にひらくる蓮こそ心の池の根さし成けれ

はちすか阿州の息女いまたいはけなく侍しを羽柴左近を
むこかねとしてちかきとしより丹波のかめ山にすみわた
られけるに風の心ち例ならすしてさま〳〵にいれうをつ
くすにかひなくむなしきからを五月六日東山岡崎のあた
りにさうそうのことあり見物にまかりし折ふし郭公の鳴
わたるも折しりかほにあはれとおほえて

よなさるもとしへぬる身も時鳥人につたへて鳴聲をきけ

めしつかひける森のなにかしか子に萬といひしわつらひ
て六月廿七日身まかりけるを親のなけきを聞て

ときは木のしける下葉の散行や秋まちあへぬ森の木からし

九月十六日雄長老遷化ありしに

長月のいさよひの月の影きえてむなしき空やかたみ成らん

昨渡軒賀茂河にてむなしくなり給ふを聞て

たちかへるならひもきかす渡川きのふの涙のあはれよの中

正月十六日大閤過しよの御夢に若君を御らんしてこたつ
のうへに御なみた落たまりけれはよみ給へる

なき人のかたみの涙のこし置て行衛もしらす消はつる哉

これ返しせよとおほせことありけるに

うこかぬ身をまほろしとなさすならは涙の玉の行衛尋ん

ある人の三周忌に

あらはよに嬉しかるへき三年をも空しきあとにかそふるそうき

春釋教

春風の吹ときてこそしられけれ氷もおなし水の水かみ

定なきよのならひはめつらしからねと扨も藤陰老師高野
の山にのほり給しは今既に廿年はかりにも成けるにやそ
の間予かのほるへきたより度々おほけれと今年の紅葉の
比くる春の時なといひてうきよのきつなにかゝつらひて
夏引のいとまなくいくとせを送り侍しか時しもこそある
に去年の初秋老師身まかり給けるに今しも奈良の京に知
人を訪ふとておもはさる外に此上によちのほり先師の造
像にむかひ侍る事にはそもいかなることゝやらん歎てもな
をあまりあり當院主いまはのことゝも物語せらるゝ又年来
建立の伽藍とも多かりける中にも明神の鐘を鑄させ樓ま
てたてられけるは誠によりつねならぬ人にや予舊友にも
こと更したはしかりし故愁涙をさへかたし彼老人のすけ
る道なれは三首の瓦礫を綴て碑前にこれをそなふるもの
なり

おもひきや青葉の藤のかけに來て散にし花の跡とはんとは

わかことくなき人をしもしたふらん山時鳥聲そへて啼く

法の師のつくりし鐘の樓よりも高野の山に名はひゝきけり

慶長九年五月初六日細川大藏卿法印爲ニ自性院先師藤陰宗波追善ー也

長岡幽齋玄旨公來訪見筆左贈　　　　松　　堂

故國迢々隔海西、秋風客意轉凄々、夜長旅館愁無寐、新月多情照獨栖、

又

玉帛新修兩國歡、使臣隨處好開顏、唯愁歸路三千海、逆客風帆阻歲寒、

次朝鮮國正使松堂老人來詩一、篇韻旨髣ニ國風一和合

幽　齋　玄　旨

月やとふかたしく袖の秋風にねぬよかさなるたひのすみかな

にしの海やその舟よそひとゝせなん秋くれ行は涙のさむさに

丹後國にくたりける比一安軒よりいひをくられけるから

うた

海國天無三日晴、連宵有月到深更、憶逢共對洛陽雪、鼎叶閑開茶鼎聲、

この韻を和してつかはしける

あはれしれみやこの空の雨雪をなれていくよの山かせい幸

三月十六日近衛中納言殿鞍馬へ人々誘引ありて花見給ふに雨ふり出て逗留のよしきゝて壽命院旅床下まて申たてまつり

ける

成群鞍馬競春風、黑客騷人吟興濃、歸計催來山雨灑、櫻花知是慇留公、

慶長八年三月鞍山の花見侍りて

れうせんのしかのやくそくたかへしと眞如くちせぬ花盛かな

くらまのかへるさに洪側の櫻を一枝折て

一枝の花ぬす人となりにけり袖にくらふの山のかへるさ

烏丸殿臺より鮒といふ魚にさくらの枝を折添られてたく

り給ふとて

いへはえに岩もと櫻折そへて心ひとつを山ふきのはな

返し

山ふきの色そふ花のことの葉に口ふりとてもいかてこたへん

蜂屋出羽侍從より鳥の子二百枚轉三たてまつられて

とりのこを十かさねとなを十とかき杤上たる文のおとつに

かへし

鳥の子を十つゝ十はかさぬとも思はぬ人にくれぬ文かも

男女會圖を掛繪にしてある人歌を所望せしに書付侍ける

繪衛賀毛流姿奈可頁裳徒仁心有古加壽多與利那羅須也

慶長のはしめの年仲の冬大坂の亭にうつりおはしまし

し比奇瑞の靈夢を感せらるゝことありその和歌にいはく

よなしれとひきそあはする初春の松のみとりも住吉の神

凡靈夢あり吉夢あり昔し黄帝夢に華胥氏の國にあそふさめて後天下大におさまれること彼境のことしといへり又殷高宗の良佐を得て國家盛なりしなり中につきて松に十八公の名ありこれ又丁固か夢に感せし嘉兆ならすや抑住吉の御神は西のうみのとをきしほちよりあらはれ出てちかきさかひにあとをたれ給へりたゝこの我朝を鎮護し給

ふのみにあらすはろかに異國征伐の御ちかひ專なるかゆへに神功皇后の三韓をたひらけ給ひし時も御神ことに威猛を施し給へりとそされはこのあきつ洲四の海涯のこゑせすしてこまもろこしもなひきしたかひ奉ること只此時にありその久しき行さきを思ふに住吉の松に小松のかけをならへつゝ一木／＼に千世をかそへても勁節枝さかへ貞姿色みさほにしてなをかきりなき御齢なるへし今このことを聞にをろかなるこゝろにもよろこひにたえすいささか筆をそめて祝詞を奉るといふ事しかなり

法印玄旨

すみよしの神のめくみもあらはれて君か八千代をまつの言の葉

此集者法印玄旨之詠歌也、曾孫細川丹後守行孝纂其詠草、寄藤亞相資慶卿、請編爲家集、蓋法印依爲亞相之外曾祖也、去々年彼卿被捐館舍、易簀之前囑予曰、法印之詠歌編集之事有志不果、今有何面目見法印於地下、君代我遂其事死無遺恨、予不得辭、即許諾、行孝聞亞相之遺言、亦請予不已、傳聞法印生武門、長亂世、帷幕爲宅、金革爲衽、西伐東征不遑寧處、然深嗜和歌、耳目之所觸、心忠之所感、吐辭爲歌、横槊賦詩之子建再生我國者歟、況稱此道之先達、貽其傳於後學、誠可嘉尙、可景慕乎、倩以法印一生之所計、遺稿之所在所謂存十一於千百者也、何足稱法印之全集、雖然片玉寸金不可謂非寶今集爲一冊、後學博雅之士以其漏脱更有增益之不亦幸乎於是在翁分類編次爲集歌數八百餘首偶以清書之本備　法皇之御覽辱賜其名號衆妙集是玄旨之集而玄之又玄之意歟又被染御筆被下外題法印身後之榮道之冥加何事可過之乎誰人不仰之哉件清書之本任其懇望贈行孝之間以事之始終記紙尾者也

寛文第十一暦季冬　　雅章

草山和歌集

春たつこゝろを

こほりゐしのなかのしみつうちとけてもとの心にかへるはる哉

としのうちにはるたちける日

あふさかの關路をこえてあらたまの年のこなたに春はきにけり

梅薫風といふことを

いつかたにあくかれいてんむめかゝのそこともしらぬ春の夕風

春月

春のよのならひになしてみる人もうらみぬものと月やかすめる

花のうたあまたよみし中に

つゐに身のけふりとならんはてやなを花にたちそふ霞ならまし

やよひのつごもりに

ゆくはるをゝしとなかん鳥たにもかへる別はいふかひもなし

ふちのはなはひまつはれよ今はとて歸らん春のつらきわかれに

むさしのくにゝありけるともたちのもとへ

むさしのは思ふ夢路もはてやなきあはてそ歸るうたゝねのとこ

世をのかれてこゝかしこありきけるころ

のかれては山里ならぬ宿もなしたゝわれからのうき世なりけり

はやくのともたちのもとにつかはしける

物毎に猶そわすれぬいてしよをおもひいてしとおもひすつれと

ひとのうたすゝめける返事に

木のはしにたくふ身なれはいまはなを言葉の花も色やなからん

題をさくりてうたよみしに寄道祝

のかれても長閑き御世の恵をはつまきのみちのやすきにそしる

ともたちのふみをこせたる返事に

なれしよの友をそ思ふやま深くおもひいる身もいは木ならねは

やまさとにてほとゝきすをきゝて

あのひねもやすくやもらす時鳥われひとりすむまつのとほそに

ほとゝきすなれもみ山をいてゝいなはいとゝ語ふ友やなからん

秋たちける日

草葉にもまたをきあへぬ露みえてそてにまつしるあきのはつ風

野蟲

さそひくるあきの野かせやみたるらんをちこちになる鈴蟲の聲

旅行

旅の空なにかわひしき世を捨ていてにし身にはふるさともなし

浦月

よこ[illegible]ふる難波の蘆のふしのまも身にはたえぬあきのうらかせ

月を見てよめる

ことしけき都の人はいかゝみるみつくさきよみすめるつきかけ

契空戀といふことを

そのまゝにわれこそたのめ人はよのかはる習ことに契りをきけん

秋のころなくなりける人をいたみて

わか袖はいかてかはかんことはりのゆふへのほかのあきの心に

披書知昔といふことを

くりかへしとなき昔を靜かなるまとのうちとのふみにみるかな

述懐涙
法の道おしむためにはよのうさをなけきしほともぬるゝ袖かは
雪埋松
まつにのみをふりつみて冬枯のこすゑにかろき庭のしらゆき
恨絶戀
まくすはらかへす衣のゆめちまていまはうらみのあきかせそ吹
獨述懐
山さとも都もおなしかくれかやよにわすられしわか身なるらむ
寄夢無常
このよをは現になしてたれもなを枕のゆめをゆめとみるらん
月前擣衣
たれもこの月にはねしとよもすからうつや砧のこゑもおしまぬ
わらはともたちなりし人いなかよりたつねきてかへりしとき
迷ふそよあふはわかれのことはりは人にもさこそ教へける身の
山家橋
くちはてねをおり〳〵はとふ人の心にかゝるたにのしはゝし
景軌父公軌七周忌に法華經ならひに開結二經をみつから
かきて供養に三十首歌すゝめける此經難持
いかにして志はしたもたんうき身さへ受難き世にあへる御法を
經文のうたよみける中に唯我一人の爲救護
たのめ猶たゝわれひとりすくふへきをしへたへなるのりの心を
山家冬朝
さひしさもけさこそまされ嵐たに松にをとせぬゆきのやまさと
氷
池の面は夜半のあらしにとちはてゝに松に殘れる浪のをとかな
竹爲友
松のみさをむめの匂もなき身もてともなふたけの心をそ思ふ
人の子をうしなひたるをいたみて
たかまことたゝいつはりの人の世に定めなきよといひし一こと
京よりまてきて「世をいとふ人のこゝろもふかくさの里
をはかれすとはんとそおもふと」いひし人に
かれすとへ人の心はあさくともた・ふかくさのさとのあはれを
無有魔事雖有魔及魔民皆護佛法
一むらの雲さへあきのひかりにてくまなきそらにすめるつき影
春雪
さかぬまにきゆるもつらし花とみてあるへきものをみねの白雪
龍華院より花のえたにつけてうたたまはりけるに
わしのやま昔のはるは遠けれとおなしいろかのはなそたへなる
春のくれに
ちるはなはかせに恨てなくさめきくれゆく春をたれにかこたむ
人の名をよみし中に李夫人
はかなさや夢にまさらむおもかけの烟にきゆるやみのうつゝは
夜述懐
うしや又いかにまきれん志つかなるよはの心にあすもくれなて
停午月
傾ふかて志はしやすらへ動きなき星のくらゐにむかふつきかけ
草菴にてこれかれうたよみしに曉述懐
いつまてかねさめむなしきとこの上に枕もしらぬゆめをのこさむ

庭月
月もやゝかけやかたふく置霜のなかはきえゆくにはのまさこち
初雪のあした
ほの〳〵とあけゆく庭のおもしろく神代おほゆるけさのはつ雪
月前落葉
やまかせによその紅葉をさそひきて松のこのまに曇るつきかな
歸鴈
まよひいてし人の心をふるさとにいさゝはさそへ歸るかりかれ
深草のさとにすみなれてのち
すまてやはかすみもきりもおり〳〵のあはれこめたる深草の里
くるゝまて花を見て
月雪のひかりにほふはなの色にくるゝもしらぬ春の木のもと
草菴の會に山家郭公
人のよのことかたらはぬほとゝきす又もとはなむ松の戸ほそに
題をさくりて不逢戀を
いかにせん身はさきたたむおもひにて烟の末もあはてきえなは
いかなるときにか
鐘のをとのうちおとろかす曉もなをさめやらぬゆめそつれなき
人のよを思ひねにのみまとろめはいやはかなゝる夢もみえけり
花を見て
花や猶あたなりとみむいろにたにうつれはかはる人のこゝろを
初鴈
月はまたほのめく峯のしらくもに數こそみえねはつかりのこゑ
ゆきふりつもりたるあした

里の犬のあとのみ見えてふる雪もいとゝふかくさ冬そさひしき
年のくれに
けふくれてあすは又こん年なれともとの月日のかへりやはする
海邊夕花
すまの浦のあまのたくなは永き日もくるゝほとなき花のした影
旅宿三月盡
くさ枕われにてしりぬゆく春もこよひかりねのとこやつゆけき
草野秋近といふことを
なつふかきをのゝしのはら露ちりてしのふにあまるかせの色哉
秋夕
めのまへの世をこそなけゝ大方はうしともしらし秋のゆふくれ
山家時雨
ちりのこるもみちを庭にさそひきていろにしくるゝのきの山風
里雪
橋ひめのまつ夜むなしくふるゆきにけさあとつくる宇治の里人
あつまへゆく人に
別れゆく道はとをはたみそよそとかへりこん日を先かそへぬる
このすまゐもなを人めしけくて
世をいとふ山をもひとのとひくれは市にやさらに身を隱さまし
やまふき
芳野川はるの日かすもゆくみつにうたかたよとむやまふきの花
寄玉戀
人しれぬそての涙のしらたまもみ世まてあはぬためしとやみん
旅

なけかしな迷ひきにける身をしれはわか故郷もかりのやとりを

祝のこゝろを

四方の海みつのひしりのみちなからむかしの波にかへる御代哉

月のうたに

なかき夜も岸におふてふ草の名にあくるほとなきすみのえの月

寄山述懐

あふきみるいそちあまりの位山ふもとのちりの身をいかにせん

ほとゝきす

あしひきの山ほとゝきす心とやうき世にいてゝねをはなくらむ

吉水和尚のあとをたつねて人々歌よみしにかの詠歌の句をとりて題をさくりてつきを

今宵なをあかすむかひておほけなくうき身のともとたのむ月哉

としふるこひといふことを

みしかけのかはるもかなしねやの月身さへふりぬるそての涙に

待月

山かけやわかまつのとはつきなくてよそのたかねをてらす月影

月をみておもひつゝけゝる

なをふかくみてこそやまぬ山さとのさひしさあかぬ秋のよの月

月前忍戀

なれぬとて月をもいかゝやとすへき今はいろなる袖のなみたに

山家水

すむとたにしらるなふかき山水のうき世の塵に名をもけかさし

月前鐘

なかめやるとをちのさとのかねの音も聞ゆ計りに澄るつきかな

山紅葉

名にしおはゝしのふのやまの下紅葉いかてかつゆの色に出らん

若離我独忽然歸大我といふこゝろを

おもへ人たゝぬしもなきおほそらのなかにはもろゝ海山もなし

松濤閣のかせのをとたかくいとさひしきゆふへ

軒近きまつのあらしもこゑ高しすみこしやまにとしやへぬらん

はるのうたの中に

うちなひく梢に見えてあをやきのいとよりほそきはるの三日月

顯壽七周忌に

なき人をなをこひくさの七くるまめくれる年のかすはつめとも

曙郭公

たくひやはありあけの山のほとゝきす月もくもまのそらの一聲

六波羅蜜の歌よみし中に壇波羅蜜

惜からぬ身を思ふにもひとのためすつるかひなきわれそ悲しき

毘梨耶波羅蜜

おもへ人かたきためしのいはほにもなかるゝ水の跡に見えけり

十界の歌の中に緣覺

さとりあれは月日てらさぬ中そらの闇にもひとの道やまよはぬ

四弘誓願の中に煩惱無盡誓願斷

はらひみよこゝろに積るちりひちの山端なくはつきもへたてし

山家夢

跡絶て入ぬるやまのかひやなきみし世へたてぬゆめのかよひち

荻風

おとろかせうき世のゆめもさむへくはうらみもはてし荻の上風

折句の歌にふゆのはな
ふみわけしゆきのみ山のゝりのみちはるけきあとになを迷ふ哉
深山鹿
おもひいる人はたえたるおくやまになきてもしかの獨すむらん
秋雲
ふきそめてうき秋風のこゑよりもたつしらくもの色そ身にしむ
八月廿日はかり平等院にふけゆくまてつきを見て
たちかへるそらもわすれてふくるよの月にいさよふうちの川波
はしのうへにやすらひて
うらやましうちのはしもりいく秋の月をなかめて年のへぬらん
太子傳をよみしついてに
よしあしとわかれしすゑのゝりはみなゝにはの水の流なりけり
末のよにたれくみてしる法の水とみのをかはゝなをたえねとも
世短意常多といふ句を韵にて詩つくりけるときおなしく
よみしうたの中に
いつまてと猶たのむらん百年のゆめてふものもさためなき世を
うつりゆく夕の雲をなかめてもこのよのなかはなにかつねなる
花のうたの中に
いこまやまかくろふ雲をなしなへてはなのはやしにかほる春風
さきてちるものもおもはし山櫻いろかのほかにはなをなかめは
なにゆへに花にこゝろをつくすそと春はふれともとふ人もなし
志ほちのあつまへゆくをはなむけすとて人のうたよみけ
るをみて
むさしのゝ雪も氷もふみわけてはてなきのりのみちをきはめよ

便あらは清見かせきもふしのねもかくなかめきと人につけこせ
おほかたの世にゝこそとも住なれしわかやまみつゝの心わするな
山房夜話といふことを詩につくりしとき
ともにきく枕の山のさるのこゑなれもうき世のことやかたらぬ
竹爲友といふことを
植置てむなしきこゝろすなほなるすかたをともとなるゝくれ竹
春のくれに
はるををしたふ心そのこりける花にやいまたつくさゝりけむ
いなりのやしろにて
なをてらせひかりをこゝにやはらけてひとの願ひをみつの燈火
ちゝのひさしくすみける家にて月前梅といふことを
そてのうへは月やあらぬと霞夜にはるゝむかしの梅かゝそする
おなしところにて
面影もたゝさなからのふるさとをうつみなはてそ庭のあさちふ
ふみわくるあとは昔の庭のおもにたゝ名もしらぬ草そしけれる
殘雪を
谷かけやゆきゝまれなるあとみえて久しく殘るこそのしらゆき
百首の歌の中に駒迎
あふさかのこのしたくらき秋きりに獨みちしるもちつきのこま
春盡雨聲中といふ句を韵にて詩つくりけるに雨といふ文
字をえて
白妙に匂ひしみねのくもきえてみとりをそむるよもの春雨
山夏月
たかねにはなつもさはらてみる月の影たにもらぬはやましけ山

山家のうたとて
峯のくもたにのかすみにくちぬへしうき世にそめぬおきさい小衣
題をさくりて歌よみしにあしろあはぬこひ
心から身をうちかはのあしろもりはかなきわさに日を送らん
いまはたゝ心ひとつにこひしなむおもひたえぬと人にしらせて
空山無人水流花開といへることをおもひて
人はこてむなしきたにゝみつなかれはな咲やまの春そしつけき
ほたる
よるはなこゝろなのみそてらす月まとの螢もなにかあつめん
東寺の蓮さかりなるころつとめてみにいきてくれにかへ
りにける鴨川わたるとて
なつの日のあつさもしらすあさかはや夕河わたる道のゆきゝは
遠村の蚊遣火
かやりひの煙たてすはゆふまくれありともみえしやまもとの里
淀川の舟にて
よるひると流れもゆくか淀川のよとむとひとはよそにみれとも
宇治川の水上にのほりて人もかよはすしつかなるところ
にひさしくなかめて柴舟のゆきかふをみるにかはる大將
のたれもおもへはなといひしもおもかけにうかひて
人のよはたれもおもへは水の上に浮てはかなき宇治のしはふね
雨ふりける日平等院にまうてゝ堂のもとにものうちしき
ていとひさしくおりけりかねのこゑかすかにきこゆるた
いつことゝへはみむろなりといふおもひつゝけて
はかなくてけふもくれけりあすもしらぬみむろの山の入相のかね

あきのころうちにせうえうしてあめさへふりけるにおは
なかりふきかいひしもけうありてやとりぬふけゆく夜の
いとしつかにて
尾花ふくかりほの庵のよるの雨に里のなしらぬかたしきのとこ
月のころ醍醐にのほらんといひやりたるにかみにはさに
ることありしもへとありしを雨いたうふりてにはかには
れたるゆふへふもとのさとにきて月のすみのほるによめ
る
きてみよといはすはつらしあめはれてかさとりやまに出る月影
中谷といふところにてひたのをとをきゝて
なにこともいまはやまたのひたふるにすてゝやすまん谷深き庵
野夏草
わけゆかはのへはしけれる夏草の中にもゝとのみちやのこらん
草花告秋といふことをひとのよませしに
ほにいつるそてとはなしに花薄いかにしるきゝあきのきぬらむ
山家冬月
まれにみしひともめもかれて冬枯のくさのとさしは月そくまなき
稲荷社にて百首歌の中に五月雨
とふ人もとはてほとふる五月雨に雲はゆきゝのたゆるまもなき
山家
身をさらぬこゝろをともと定めすは猶もすむへき山のおくかは
山家曉
猶深きやまのおくともいそかれす寢覺のとこにこゝろすむよは
夕立

むしのねも催すはかりゆふたちのなこりすゝしき庭のくさむら

妙の一字をかきてうたよみてとひとのいひしに

こゝろにもをよはぬものは何かある心にとへはこゝろなりけり

題しらす

そなたそとなかむる空もかきくらしいとゝ隔つる雲のふるさと

母のなくなりぬるころひとのもとより五首のうたよみて

とふらひけるの返事に

ささたゝは猶いかはかり悲しさのたくへるゝ袖はたくひなけれと

いまはたゝふかくさ山に立雲をよはのけふりのはてとこそみめ

何事も昨日のゆめとしりなからおもひさまさぬわれそかなしき

いかにしていかにむくひん恨りなき空を仰きてねにはなくとも

たのもしなあまねきのりのひかりには人の心のやみものこらし

はゝのなくなりてのち

惜からぬ身そおしまるゝ垂乳根の親の残せるかたみとおもへは

おなことゝもあくれに

ふゆふかき宿にこりつむ山かつのなけきのなかに年もくれけり

辭世

鷲の山つねにすむてふみねの月かりにあらはれかりにかくれて

梶の葉

おとこのすけるやまとうたは女すらよめりしかあればおとこ女のなかをもやはらげたけきものゝふのこころをもなぐさむるとこそつらゆきのぬしもかきためれかけまくもあまのうきはしのもとにして二ばしらのおほん神のあなうましとみやびをかはし給ひしはながきいもせのはじめとかや久かたのあめにして下てるひめのことばにはもろ神の心をさだめ人の世にはうねめが口ずさみにておほきみがこゝろをなどめしとなんかのならの葉のふるきあとをおもふにあべのひめみやよりはしめてひなぶりにいたりては賤のめあまの子のこと葉をももらさず又古今集の序には小野小町をなんその名きこゆる數にえらめりそれよりおちつかた伊勢、さがみ、いづみ式部、こしきぶの内侍、清紫の二女、俊成卿女、宮内卿、丹後、さのみかきつゞけんもくだ〳〵しければもらしつこのほかまさきのかつらながくつたはれる代々の勅撰にいれるおうなの歌ははまのまさごのかずをしらぬたぐひなるべしすゑの世といへども大うちのことばの花にほひいとふかゝらめどこすのひまもれいづることなければ人しらぬことなんめりそのやむごとなきゝははいふもさらなりひがきの女しろめ江口の君のこと葉まで集にも入れられ世のくちずさみにもすなるいまよつのうみ浪しづかに關のひがし戸ざゝぬ御世なればもゝのみち〳〵いやさかりにしてみやこもひなも和歌のうら波にこゝろをよせずといふことなんなかりけるましてル重にすめる人はをのづからさす竹の大みや人のみやびやかなる風情をあふぎてその名きこゆる人もおほかりこゝにちはやぶる祇の園のほとりに茶店のいとなみをなせる梶といへる女ありそのこころばへやはらかにしていやしからずいとけなきより父母によく孝をなしていとなみのいとまなきすさびにさうし歌物語などにすきて立やすらへる人の心ありげなるにそふるき歌のこゝろばへをひそかにとひきゝていつしかみそぢ一もじのなさけをしりて花に月に口ずさめることになりぬるとぞかゝれば心のたくみにしたがひてやさしきすがたもすくなからぬにやゆきかふ人の耳とゞむることゝなりにしか

ば世のすき人はさらなりさるはたうときかたにもやさしきためしにきこえけるとぞこれなんいやしき身といへども和歌の德にて侍るならしあるはあだ〳〵しきすきものはたはれたる歌よみてそのかへしをものせよといひさはぐもおほくあるは心あるいなかうどはその言の葉ひとつふたつうつしもて都のつどへいひひろめけるほどにむべなるかなあづまのはて西の海のほとりまでかうばしき名は流れずといふことなしやつがれことしいぬのきさらぎのはじめ武藏野の霞をたちいでゝ都の春をたづねさまよふついでにひがし山の花のもとにあそびてかの茶店にやすらひよめる言のはをきかまほしくせちにいざなひければいな舟のいなひはてずひとつふたつちかきほどの歌なりとて書てみせつまことやつたへきゝしよりは心の泉ふかく言葉の花匂ひまさりていとめづらかなるふしもまじれりこれよりおり〳〵かの林のかげをわけて旅ころもなれゆくまゝに草葉の露心をかぬさまになん歌物語などせし事たび〳〵なりしが文月のすゑやがてあづまにくだるとに成しかばれいの都のつどにみぬ人にもみせまほしう和歌のうらの玉藻かきあつめたるふみやあるみせてよとしかまのあなかちにせめければまめやかにもものせぬよしとかくいひまぎらはしけるほどに酒などたうべけるえひのまぎれに玉手箱ひめをけるものを見出せしにまろがれたる反古やうの物なりしかばひそかに袖にしてかへりて見侍しにかのかきをける玉藻なりしかばふかきほいとげぬとうれしくてとみにうつしてかのがりにかへしぬさりとて我ひとりもていなんもおこがましければ世のすき人にもみせまほしくちかきうきねの加茂の川水にみじかき筆をそめて梓にいのちながうするものならし寶永三の秋文月それの日

武陵遊士　蛙鳴子

梶の葉巻上

山家郭公

世にとなくすめはこそあれ忍ひねも我にやゆるす山ほとゝきす

のこりの菊といふ事を

なにゝかはくらへてもみむ枯はてゝ花なきころのしら菊のはな

十四になりけるとし歳暮戀といふことを人のよませ侍けれは

こひ〳〵てまた一とせもくれにけりなみたの氷あすやとけなん

立春の心をよめる

のとけしなとよあし原のけさの春風のすかたも水のこゝろも

浦雪といふ事を

ふくかせもはらひにゝてしさゝふかみつもりのうらの松の白雪

雪の明かた人のゆきかひもほとちかく聞えけれは

ゆく人のあかつき雪をふむをともまくらにさゆる道のへの宿

ある人の許より心さしふかゝりけにいひかはし侍る女のあふことはいとかたかりけらしある日まかりて侍るにちいさやかなる人形の夫婦ゐますを手づから送りて侍しかば袖に手に志ばしもはなたず人めだになき折ごとにはとり出て見侍るに中〳〵むつまじきいもせのなからひもねたくさへおぼえあはぬことのいとゝつれなくなりはべりぬされども手をもはなたずうちまもり侍るとて

逢ことは猶ひとかたにつれなきをなとむつましき形見なるらん

といひたこせ侍し返しに

ひと方に恨みな果そあふことにこ世なかくるかたみとなしれ

あふことかたき事のみいふめるをなを志たふ心はつよく侍れば

あふことのはてまもあらぬ戀路にはちるき命や限りなるらん

と有し返し

あふことにかふる命をいさやまた志らぬ戀路になとかきるらん

言葉はおり〳〵情ありけなれば

はかなくも身のなる果を志らてなと言葉の花の色にめつらん

と有し返し

あたにしも色になる身よかりそめのこと葉の花にうつる心は

物くるほしうさへなりて

今はたゝあらぬ心となりにけり戀せさりにしもとの身なから

と有し返し

もとの身と思ふはあらぬこゝろかは人はまことに戀せさるらん

春戀といふ事を人のよめといひければ

志のはれぬ心のいろをそれとみよ雪まにもゆる野邊のわか草

依戀祈身といふことを

つれなさもおもひかへして更に又いのちあらはと身を祈る哉

寄山戀を

波は袖にこゆともたのむ玉の緒のあらはあふせの末の松山

月前忍昔戀といふ心を

もろともにみし世もあるを袖の上にあはれとひくる閨の月影

七夕によみて手向侍し

惜し人のあたし心にうつさはや一夜の星のたえぬ契りを

水郷の花といふ題にて

みる人のなきさの花は思ひいつやたえてさくらといひし言の葉

黄葉を

ちしほとそまたしら露のうすもみちしくれなさそへ秋の山風

寄關戀

おさまれる御代も戀路はうかりけり人めの關のゆるしなけれは

風のすかた水の心もいさしら波のよるべさだめぬうたかたのこぎゆく舟のかぢ枕かはさむことはおもひよられどもたゝ敷島の道しるべときけば其心のたけもはかりしられず花になく鶯水にすむ蛙までうたよまざらんはなしといへども心をよする人まれなるにかゝる女の心さしこそありがたう侍れ詠じをかれし歌聞え侍れかしとたづね行ければ人めのさはりありてむなしくかへりしによみてつかはしける

音にのみ聞しよりなを袖のうらのみるめにまさるわかなみた哉

といひをこせ侍し返し

みるめうきはかなきあまの袖の浦にいさしら涙の立しにかりな

みやこ人のうたなりとて吾妻にて見はべりし人に道のゆく手にふとまみえしよみなける歌など見侍しほどにかく

聞しより見し言の葉のいろふかくにほひをそふる花の一もと

といひをこせたるかへしに

われこそはこのことのはの花の香をあかす袂にふかくうつさめ

海ゆたとりの春の曙といふことを

うつすともいかになよはむ水くきのふしまか磯のはるのあけほの

寄螢戀

もえわたる澤のほたるをうき人にみせはや身にもあまる思ひと

出雲國大社奉納の歌に月前待戀

なけきつゝいつ迄かくは月にのみ涙とはれむ夜はのさむしろ

人のもとへつたふべき文をうしなひて侍りければ文の主のもとへよみてつかはしける

ふみまよふ身こそつらけれ日をへてもそこと志られぬ水莖の岡

夜時雨といふことを

いろそはむあすのもみちのいくしほをしらせて過る小夜時雨哉

かぢの葉巻中

夜霰といふことをよみ侍りけるに
霰ふるに槇にとめておとやみむゝるいあられの音にのみして
戀の歌を人のよませ侍しに
おもかけよいつのなさけにたちぬらむ人はおとなき風のうき雲
音たつこゝろを
あけわたるそらものとかにはるたつと思へは霞む四方の山のは
夕落葉
くまとなる秋の木かけのうらみをもおちははにはるゝ夕くれの月
ある人の許より恨・夜戀いふことを
あらさりきあすの契りを頼きてけふをかきりの命なりとに
と讀ておこせし返しに
けふのみになとかきるらん玉の緒にあすの契りをかけて頼まは
久しくあはさる人の許よりまことに無限心中不平等、一宵清話又成空、とは誰かいひけん
あはぬまはいかに恨のおほかりきこよひはなにを語りあかさん
と有し返しに
よしさらはくらへかこたんあはぬまの恨のかすは何れまさると
ある人のもとより忍にあまる戀の心を
君こふる袖しのうらのあた涙はなみたそ汐のみちひなりける
とあるかへしに
涙にはみちひあらしをあたなみの袖しの浦にさはくはかりそ
ある人の許より
よるへなきゆらのみなとの捨小舟ゆくゑも涙の梶をたえつゝ
と言おこせし返し
かひなしやゆらのみなとのあまをふねよるへさためぬ人の心は
としのくれに
とゝめえぬ月日に關はなかりけり年そこえゆくあふ坂の山
限一夜戀
おもはすよあはぬ月日もくれ竹の一夜のふしにかきるへしとは
山家の雪といふ心を
世にかよふみちこそなけれ谷かけや雪にそふかき山のかくれ家
人のもとへ梅の花を折てつかはすとて
わか袖のにほひもゆかし君かため折つるむめのなこりと思へは
寄露戀を
おほかたのうき夕くれの露と見ん秋のほかなる袖のなみたを
友とする人にいさなはれて夕くれ過るほどにみちたどたどしけれど女のあるしの歌よむ人となんいへるやとりた入てその事かのことなどかたらひもてゆくにふるくよみたまふ歌とてかず／＼をしるしてみせ給へるに遠く聞遙におもへるは數にもたらすとなふれば其吟玉に聲あり思へばそのこゝろ錦にひかりありきくをたうとびみるないやしくなすとは古人のそらごとにや其歌のなかに寄露戀
といへるに
たれにかはかくとゆふへの袖のつゆぬるゝもほさも心ひとつを

とあるにいさゝかならひて
袖の露ぬるゝもほすもしらぬ身にかゝる心のみちしるへせよ
さらによみたまへる言の葉なと思ふ物から
夜なへてもきかて過ぬやほとゝきすいかに惜める初音なりとも
返し
春のはなのにほひをそへて時鳥ゝ月もまたてもらすはつねそ（此ノ處ニコノ二字アリ（正信））
三月三日
ある人のよめる夢逢戀
しはしたにせめてさめすははろの夜の夢はみしかき花の面影
おなし心を
あふことはゝかなき春の夢路哉やかてうつろふはなのおもかけ
さめて後の心を
あふことを夢なりけりと思ふにも覺しうつゝそくるしかりける
おなしこゝろを
ちきりあれは夢にもあふと思ふにそ覺しうつゝの頼みなりける
名月に
くまもなき秋のこよひの月かけに萩のしたはもさやけかりけり
待郭公
まつもうしきかぬもつらしほとゝきすいかなる里に初音鳴らん
寄月戀
なにゆへにかゝるなみたと袖の上にやとれる月を人やとかめん
もみちを見侍りて
こゝにたにしくれの染るから錦たつたの山はもみちしぬらん
夕立
ゆふたちのはれてすゝしき草むらは秋とやいはむ露の月かけ
はしめの冬の心を
けさみれは秋のかたみの露きえて霜をきかふる冬に来にけり
惜花
おしめ人春はいくかもあらし山名にさそはれて花もこそちれ
ある人のもとより逢かたき心の歌よみてつかはしける
梶の葉にかきもつたへよほと遠き又こん秋の一夜なりとも
その返し
契りあらは星のたむけのかちの葉にかゝれる露は秋やほさまし
ある人世の中のよしあしともにあしからの關のあなたの
世すて人都の花をこととはんもいとはづかしけれど敷し
まのみちいづれなさけをへだてはに
しき島の道に鳴なる都鳥音をのみとなくたつねきにけり
と有しかへし
いさしらぬ道にまよひてわれそなくしるへとなれ和歌の浦鶴
あるひとのもとよりをのか世々になりてなをあかぬ別れ
をなげく身のうへを聞て
あたに吹風としらすもおみなへしなびきて今やつゆこほるらん
といひをこせたる返し
秋とふく風ゆへうきをおみなへしとはれていとゝ露そこほるゝ
卯月はかり雨のふりける日ある人の許より寄雨戀といふ
歌をよみておこせける
戀せしな身を卯花の雨もいまこほれて袖にものそかなしき
返し

こひせすは哀もあらしとはかりの身なうの花の雨にかこちて
ある人のもとより
梶の葉にかきつくしてもたのむかなあはれ一夜を星にたくへて
と有し返し
世々たえぬ星のちきりにたくへてよ一夜はかりの中はたのまし
冬月といふ事を
さよあらし荻のかれ葉のをとふけて霜にいろある月そ寒けき
立春
のとけしなけさあまの戸をいつる日の霞の衣はるをかされて
夕かほ
これなくはたれとひてみんしつかやのけふりいふせき軒の夕貌
よるの鹿といふ事をよめる
身にしれはよそにはきかぬさよ衣つまこふ鹿のなきあかすこゑ
月前擣衣
たかさとも秋の夜さむはしら露の月のひかりにころもうつらし
歳暮
くれにけり一夜はかりを隔てにて去年とや人のあすはいはまし
春歸らんといひて故郷へ行ける人のもとへ
春こんといひし言のはたかへすはさかてや花も人をまつらん
花の歌あまたよみけるに
けふの日もよしさは暮れよし野山花をあるしにまくらからなん
菊
つゆになをにほひもふかくさきそふや秋のいろなる庭の白菊
木葉ちる比山のはの月を見侍りて
もみち葉のちるかしくれか一むらの雲やはかくす山のはの月
河原の夕すゝみを見侍りて
こゝに來てみたらし河の水の上をおもへはすゝし波の夕風

梶の葉巻下

寄露戀

たれにかはかくとゆふへの袖の露ぬるゝもほすも心ひとつた

ある人の許より

哀我さたかにいつか夢ならてゆめかとたとる あふこと もかな

とありし返し

おひ思ふ心にそれとみるならはゆめのたゝちもうつゝならすや

いのる戀

祈るてふこゝろをせめてあはれともおもはゝ神も人にことはれ

ある人のもとより廿日あまり三日の月を待たてまつると てにしるし待人のことのみおもひつゝけいたすなみたこ ぼしてほどなく月をたもとに見て

露もかく思ひかけきやわか袖にやとる月さへまたる へしとは

といひおこせたる返し

たか袖も秋のならひにおくつゆのおもひかけすは月もやとらし

あつまよりのぼりたる人のくだるとて

わすれしな神のみそのゝ秋の月我は 吾妻の はて にすむ とも

と有しかへし

よひ〳〵はおもかけなからまちいてむあつまのはての山の 端の月

ある人の許より人の心の花にめでて

春ふかくかすむ梢のはなゝらてひとのこゝろの色香をそおもふ

返し

ことのはの花のひかりをなをそへようたて 心の 色香な き身に

待郭公心を

よしの我まつ身としらはにつこ聲なふいかにちらせ山ほとゝきす

立秋

秋きぬとけさより袖にふく風のをとはかはらて身にやしむらん

扇のちやうにやなきのもとに女の琴を弾してゐるを見侍りて

いはてかくおもひ亂るゝ青柳のいとあひかたきしらへなるらん

寄蟲戀

木かくれて身を空蟬の露にのみぬれつゝつゝむ袖そ はか なき

見不逢戀

君よいかにおはぬ歎によそなから見るかひもなきわか戀の山

歳の暮におやをいはひてよめる

老のなみかすそふまゝにまたはなの春にもちかき年のくれかな

ある女のもとより

八重霞立へたてゝもかちのをとそことしらるゝ和 歌の うら舟

とよみておこせしかへし

志るへせよ和歌の浦曲はそこともしも霞にまかふあまのをふねを

雨中戀

一かたはなやみたにせよ手枕にな みたも 雨もいかに ふるらん

かものみたらしにまうて侍りけるにあひしれる人の夕すすみに來れるよしを聞てよみてつかはしける

あかすみん人はよそにもみたらしのおなしなかれの月と思へは

むかしを思ひ出る事の侍りて

つらくのみすきこしかたをしのへとやうきひとりねにたてる俤

述懐

さのみ身を思ひなわひそつらしとてうしとて世をは過ぬ物かは

夕時鳥

ゆふくれのあはれそまさる時鳥なみたほしあへぬ袖のさみたれ

八月十五夜くもりけれは

よしこよひくもらはくもれ世にたかき月の都の名には隠れし

なにはのかたをなかめやりて

こゝろなき身にさへおもふ春はたゝなにはわたりの明ほのゝ空

寄露戀

大かたのうきゆふくれの露と見ん秋の外なる袖のなみたを

みちのくよりのぼりたる人なりとて

君故にまよひ来にけりあつまちのしのふこゝろを哀ともみよ

返し

われにのみなにかはまよふあつまちやまた異方に人忍ふらん

野寒草

みしやゆめのころ草葉に霜むすふ手枕の野の秋のおも影

かへる雁

ゆく雁よはるな見すてそ山の名にかへる都の秋をおもはゝ

海邊秋夕

浦つたふかせそみにしむあまころもたつしらなみの秋の夕暮

待雪

遠山につもると見れと里はまたふらぬ雪けの空そつれなき

月照叢露

あくるかとみしは草葉のしらつゆか庭もまかきも月そやとれる

しるべある庵にしばし身を隠せしにおり〳〵友どちつれ

つれとふらふたにもちきりし人をわすれがたくて

おもひあるみ山の奥の苔の露かくても人をわすれやはする

とある人のいひをこせたる返し

うき中をいとひはてゝや山ふかみ忘れんとてそ身をかくすらん

む月ばかりに雪のいたうふりたる日かきねの梅をながめ

て

春もなほむもろゝ雪のむめかえはにほひはかりに花そしらるゝ

隣梅といふことを

ひとえたも折はやつさしさくはなのあるしよそなる庭の梅かえ

待郭公

まちわひて夢も結はぬほとゝきすいく夜あかして初音聞かなん

扇の繪に芦に舟のかくれたる所をかきたるに歌よめと人

のいひけれは

かくて身も朽やはてなんなにはえの葦間隠れのあまのすてふね

絶後戀

ちきりしはむかしなりけり思ひねの夢にはたえぬ人のおもかけ

恨戀

はふ葛のしたのうらみをしられはやこゝろとさはく人のあき風

ある人のもとより

獨ねになれてそ拂ふちりひちやつもりて床の山となりけり

返し

せきあへぬ床はなみたの淵なれやちりのみつもる思ひのみかは

初戀

玉章をかりのつはさにかけてこそおほつかなさや秋はなからん

久戀

もらすなよいく年ふたにわきかへる岩根の水のみくさかくれを

月のうたよみける

みる人のあはれと思ひつらしともこゝろのまゝに月やすむらん

木の葉の道をうつみたるに

雪ならはとひこし人のあともみん木のはにうつむ庭のかよひち

梅の花さかりなるころ

はる風にふられんもうしあつまやのあまりに匂ふ軒の梅かえ

ある人の許よりいまはたゝ思ひたえなんとよみけりし人の

いにしへもかくばかりこそとふるあは雪よりもまづきえ

ぬべくて

物おもふ心よさきにきえはてゝつれなくのこるはるのあは雪

返し

ものおもふ心もともにあは雪の身さへきゆるときかはたのまん

難面戀の心を

きえはたゝ人のつらさにかくしほるつゆの命にむかふうき身は

尋梅

風さそふ匂ひをみちのしるへにてことゝふさとの梅をあるしに

雪のあした木このこすゑを見侍りて

花かとよ見しは中々ふらゆきのかゝれるえたはむめもこと木も

明やすき月にはしゐし侍りて

まち出しまたよひなからねやの戸をさゝぬにあくる短夜の月

寄雞戀

きぬ／＼のその夜の儘に鳥の名のかけはなるへきとは思ひきや

寄霞戀

たくへやる音もあられの玉ならは碎くこゝろをそれとしられん

やよひのつごもりに

けふは又さらにもかすめ夕日かけいる山のはの春のわかれに

ほとゝきすを聞て

一こゑはおもひなしかとなかめやる雲のいつこそ山ほとゝきす

牡丹を見侍りて

われのみかあはれこてふも花の色にうつすこゝろの深見草かな

水鳥

水とりのうきねにさはく涙まくらむすひさためぬうすこほり哉

早苗

ふつのめかおりたつを田の水かゝみみなひまもなくとる早苗哉

藤の花を見にまうでゝ

たれとなく松のこすゑもとひこすはうらむらさきの藤の夕はへ

逢不會戀

はかなくもたえぬうつゝにしたふかなみし夜のゆめの昔語りを

寄月祝

秋津すやもとすゑをひく君か代はてる月弓の空にしるしも

梶の葉巻下終

佐遊李葉

水無月の比ほひやるかたなき暑をしのがまほしく洛陽のほとり東山なる祇園（かみのその）とかいふめる御社に詣て森の木陰に立やすらひ南の風の薫るを袖に待とる程ここら行かふ人の此所に物し侍る茶店のあるじの女いときなき時より八雲たつの神詠三十一字の言葉に心をそめ春の朝花の下に日をくらしてすける我懐を吟じ出し月の前に夜を明しては獨我詠る志をのべ侍るよしそこはかとなうをのがどちいひもてさはぐまことにや我古郷にてをゐ／＼聞得しその人なるをやとつくばねのこのもかのもに聞尋讀置しもしほ草しかまのあながちに乞求て難波のよしあしもいさしらぬ火のつくしがた我歸るさの土産（つと）にもせまほしと一卷の書にしるしもて書林の何某によき筆して寫してよとあつらへ侍るにかの人のいへるむべなるかな此書にあへることをしかし獨これを懐にして古郷に著てかへる錦となさしめんも本意なきわざならずや願くは梓にいのちながふして折にふれつゝ遠津國の同志の人にもしらしめば此道のたつきにもならむかしとせちにいはれていなみのゝいなともいはず旅のやどりともし火のもとにしていさゝか此情をのばへてさゆり葉となむ名付侍る

隱士風雲子

佐由理葉卷上

春部

年内立春

くれはてぬ年の内にもをのつからたつ春しるくけさはかすみて

いとはやも春たちぬらし年の内の冬の日かけもかすむはかりに

元日

あまの戸のあくれは春と世につけてきくものとけし百とりの聲

春來ぬとけさはあらしの音羽山みねのかすみはふきもはらはて

花鳥のいろ音もいそけいつしかとまちしみやこの春は來にけり

今日といへはふくものとけし惠みある神の園生のまつの春かせ

初春見鶴

あしたつのくも井によはふ萬代のこゑものとけき春そにきはふ

霞添春色

遠近の山もひとつにたちこむるかすみやはるのいろをそふらむ

山路霞

たちこめしかすみにそはのかけみちもなれてやかよふ春の山人

若菜

誰もみなつむてふ野邊のはつわかなおひせぬ千代のはるを契て

露暖梅開

日かけさすかたえは露もとけそめてはなにほころふ軒の梅か枝

窓梅

まとちかくさし入月の影なからにほふもあかぬ夜半のうめか香

古宅梅

さそへなをみる人もなきむめの花ゆきとふるやの軒のはるかせ

梅遠薫

たか里としらぬ木末をさそひ來てにほふもゆかしや風のうめか香

柳靡風

見れとあかぬすかたや風の吹かたにまかせてなひく青柳のいと

柳露

をくつゆの玉のをなかくうちはへてむすふちきりもふかき青柳

谷殘雪

ふるとしのかたみとや見む春來てもまた消のこる谷のしらゆき

野殘雪

野邊ことにつむとはなくて消のこるゆきまの草の色そ添ひゆく

梅近聞鶯

をのかためうへしをしるやうくひすの軒はの梅に宿しめてなく

春雨

さひしさもいかていとはむ春雨にひもとく花のさかりまたれて

夕春雨

此ゆふへ音こそまされふるとしもしられぬほとの軒のはるさめ

歸雁

誰にかもあけてみすらん小夜深くかけてそかへる雁のたまつさ

山家待花

山かつらあけぬくれぬとさくはなをこゝろにかけてまつの下庵

山家花

身をかくすかひもあらしの山さくら花ゆへにこそ人もとひきて

處々尋花

さきぬやといてやま越て尋ねこしこゝろにあかぬ花のおもかけ

見花忘恥

見れとあかぬ花の色香にたくひなき身のうき程も思ひわすれて

花下送日

あけくるゝ日かすもよそに春はたゝ深山の花に身をやまかせむ

松間花

ちりあへぬためしをならへまつかえにましりてさける庭の初花

花風

見るひとのおしむ心をさそともしらすや花をさそふはるかせ

瀧邊花

山ひめのをりかさぬらんたきつせのしらきぬかゝる花の木末は

花袂

そこはかとゆきかふ人もさく花のたもとをかさす春ののとけさ

八重櫻

名においてちらすもあれな八重さくらけふ九重の花のさかりは

社花

さく花もありとしられて春風のさそふにほひやもりのしたかけ

くれぬともえやは歸らんさく花にこゝろひかるゝ森のしめなは

對花日暮

めかれせすむかふもあかぬ花の枝にうつる日影の暮ゆくはおし

關花

ちきりなきて又こん春もあふさかの關路の花のさかりをや見む

山花留人

しはしとて花もやしたふしゐてわか歸さもよほす春の山路に

夕花

このゆふへ見すてゝかへる山さくら花もつらくや我をおもはん

雨中花

ほすひまもなか／＼し日をふる雨に立よる花のかけのたもとは

依花日短

永しとは誰かいひけんみれとあかぬはなにくれゆく春の日影を

三月三日

めくりあふけふ三千とせの齢をもちきりし桃のはなのさかつき

夕雲雀

なく雲雀いつこにとこをしめしのゝそことも見えすかすむ夕に

河款冬

山吹のはなのしからみゆくはるをかけてとゝめよ井手のたま川

藤

ときはなるいろをならひて松か枝に千とせもかゝれにほふ藤波

名所藤

いく春もかけてやちきる住の江のはま松か枝のはなのふちなみ

暮春蛙

夕されのあはれもいまはあらを田になきてかはつのはる慕ふ聲

夏部

更衣惜春

なれ／＼てかへまくおしき袂かな花のいろかもなつのころもに

新樹

うすくこくしけろ梢のわかみとりみしはつ花のいろにたくへて

夏月

なく露とまさこの月も白たへにひかりあらそふ夜半のすゝしさ

江夏月

なつ草をわけて入江の水の面にやとろまもなきみしか夜のつき

未聞郭公

たか里に鳴てすくらんほとゝきすわれにはつらくおしむ初音を

郭公を聞侍りて

待かひもあり明の月のさやかなる聲しおしますなくほとゝきす

啼すてゝゆく方もしらぬほとゝきすやみのうつゝの夜半の一聲

磯時鳥

なく聲はあら磯なみにまきれてもかけはかくれぬ山ほとゝきす

五月雨

いつはれてあさき瀬はみむよし野河みかさそひゆく五月雨の比

螢

消やらぬをのかおもひのくるしさもそれと螢の身をこかすらし

窓螢

窓ちかく光をみせてゆくほたるなすわさもなくはちらへる身に

里蚊遣

かやり火のけふりのうちに夏のよの月もかたふくをちの山さと

蓮

にこりにそしまぬ心をおもふかな池のはちすのはならぬ身も

樗

紫のいろをかことにとひよらんはなにあふちのぬし知らすとも

水邊納涼

夕なみのたちもかへらて涼しさのこゝをせにせん河つらのさと

沙由梨葉巻中

秋部

初秋

くれ竹のひとよあくれはすゝしさも袖におほゆる秋のはつかせ

萩

かひなしや野邊にまつさく秋萩のはなに千種のいろもけたれて

初雁連雲

雁のなくなみたの露のたまつさやかきつらねたるくもの一むら

野外蟲

夕されは野もせのつゆのいのちなはなにゝかけてか蟲の鳴らん

野蟲

鳴むしのなみたの露のやとりかはあはれもふかき野邊の草むら

七夕

吹風もこゝろへかはして今宵あふ星やまけひくいとたけの聲

七夕七首

このゆふへ露のちきりの玉かつらくるゝなそしと星やまつらん

七夕月

またわたるほとや久しきあまの川こゝひあふせの月のみふねを

七夕河

たえせしの名こそなかるれ天のかはあふせまれなる契なからも

七夕草

たまさかにあふ夜の星の手向とやはなもひもとく秋のなゝ種

七夕鳥

なれもこよひ契たかはぬかさゝきのよりはの橋をかけて待らん

七夕衣

かさぬとも一夜はかりは七夕のくものころものうらみつきしな

七夕別

たなはたの絶ぬおもひや葛かつらくる夜稀なるけさのわかれに

七夕祝

たのもしな幾代を經ても牛女のねかひのいとのたえぬちきりは

橋霧

河なみはしらみてもなを秋霧にまつ夜をのこすうちのはしひめ

海邊月　八月十五夜

あかしかたこよひの月を見るめかる蜑のとま屋もさそな待えて

八月十五夜

たれもみなあかでなかめん又たくひなかはの秋の月にむかひて

野徑月

かけやとす月のひかりにさきそふる花野の露をわけゆくもおし

九月十三夜

雲きりもはれてさやかに十日餘りみよや名におふなかつきの影

名にしおふ今宵はかりとおもふにそなを見るほとも長月のかけ

月下淺茅

月影もあくるまてとや宿るらんはらふ人なきつゆのあさちふ

擣衣

よもすから起ゐてともに賤の女かうつやころものあさちふの宿

浦擣衣
あまころも波とゝもにやうつをともたかしの浦の秋のよすから

重陽
かさしおる菊もはへあれしら露の玉のをなかき千代のためしに

伴菊延齢
色も香もあかすかさゝんしら菊の花に千とせのよはひちきりて

林頭月
出やらぬかけを遅しとまつひはらみねの木末に月そいさよふ

霧間雁
聲あまたきこゆる雁も幾つらと見えこそわかねあき霧のそら

紅葉
山ひめのひとつ心にそめなすも木々にいろわく四方のもみち葉

暮秋野
名残おもふ野邊のおはなやまねくらんつれなく暮るゝ秋の夕を

秋祝言
いろかへぬときはかきはに秋をへてよむにつきせぬ松の言の葉

冬部

初冬
冬のくろけふよりいとゝ山かせもしくれをさそふ音そはけしき

初時雨
うき雲にさそはれきぬる初しくれふりにし日より袖をぬらして

初雪
ふりそめてまた一重なる庭の面にやかてきえんもおしきしら雪

朝雪
めつらしな雪の花さくかたをかのあしたのはらの草のかれふも

海邊雪
清見かた磯やま風もさえ〳〵てゆきもてはこふみほのまつはら

冬山
散はてゝいろなき風のをとは山のこゝろと見えし木々のこのはも

雪
さえ〳〵しよはのあらしの程みえてあさけの庭につもる白ゆき

社頭雪
けさはなをふるのやしろの神垣にたかゝけそへし雪のしらゆふ

氷留水聲
なかれゆくみつも氷にとちられてけさはさひしき音なしのかは

屋上霰
手まくらの夢も見つかす風さえてまきの板屋にあられふるなと

寒草纔殘
これもまたつゐにはかれんあさちふや殘る葉末に霜むすふころ

歳暮
暮てゆくとしの小手卷くりかへしなとかおしまん我身ひとつに
したへともさらにとまらぬ小車のうしやことしもくれて行らん

小百合葉巻下

戀部

待戀

ねやの戸をさゝていく夜かあかつきの空たのめなる人を待とて

忍涙戀

よな／＼のまくらそ浮きぬなみた川ひろは人めを恥らへる身に

被忘戀

いやまさるおもひよいかに今はかく忘られ果しうき身ひとつに

後朝戀

けさはなを袖こそしほれ逢みてもあかぬわかれのみちしはの露

逢不遇戀

あふ夜半のこゝろにもにす何故にたえよと人はとをさかるらん

絶戀

むすひしも今はくやしきわすれ水かく深からぬなかのちきりを

忍通書戀

おもふこともいひやらす何くれと人めをしのふ中のたまつさ

戀不依人

さのみなとつれなかるらん身におはぬ戀も有世の習ひと思はゝ

寄鏡戀

見るもうし涙にくもれますかゝみもの思ふ身のあらぬすかたを

寄忘草戀

あたなれやおなし軒端に生出てしのふにましるこひわすれくさ

戀學問妨

見もはてゝまなへる書におこたりてあらぬおもひの人の玉つさ

夏別戀

手まくらをかはす程さへなつの夜の明るにつらききぬ／＼の空

後朝戀

消れたゝまたあふこともしら露のをき別れにしけさのつらさに

寄花戀

たくひそと見るさへもうしさくら花あたに移ろふ人のこゝろは

寄夢戀

うつゝにはなをもゆるさぬ逢坂のせきちをこゆと見る夢もかな

いつか又思ひあはせんうつゝにもおひみし夜半の夢のちきりを

寄河戀

うきしつむ身こそつらけれ戀わふるなみたの河のふかき淵瀬に

寄橋戀

うつゝにもわたらまほしくおもひねにみし夜のまゝの夢の浮橋

寄硯戀

たへかねてかきやる文をみてもしれすゝりの海のふかき思ひを

寄舟戀

いつのまにこと浦風にゆく舟のわかゝたにしもよるへたえぬる

寄埋火戀

消やらていとゝこかるゝ埋火のありとはかりの身こそつらけれ

寄弓戀

かひなしやわか方にしもあつさゆみひけとなひかぬ心つよさは

寄竹戀

うきふしもまかきの竹の一夜たにあひみぬさきに變るこゝろは

寄鶯戀

うくひすのこほる涙もはろくれはとくるを人のこゝろともかな

寄山戀

たのまれぬ名にこそおちかゝる我中はいかゝわたるさかの山路へたてゝ

寄木戀

うき身世に誰かはしらん太山木のいたつらにのみ朽はつるとも

寄瀧戀

こひわふる涙のたまのかす〳〵におもひみたれておつる瀧津せ

祈神戀

いのるにも同しつらさをみしめ繩かけてかひなき神のめくみか

契久戀

うきなから月日經にけり契てしそのことの葉のすゑをたのみに

恨戀

消やらて人のこゝろのあき風にうらむかひなきくすの葉のつゆ

春夜戀

春のよは軒もる月のかけたにもなみたにかすむひとりねのとこ

雜部

山家

とふ人もなき奥山のさひしさはこゝろにかなふすみかなりけり

おもひ入ひとのこゝろもあさからぬみやまのおくのまつの下庵

山家水

山水のかけひにつたふをとつれもこゝろすむへきなとこそなれ

隱士出山

山ふかくすむ人あらしいまはとて出てつかふるみちひろき世は

山家橋

のかれすむたにの柴橋しはしたにこゝろにかけてとふ人もかな

山家煙

よそにてもおはくしはこれ柴の戸のなにはけふり絶ぬはなりな

草庵雨

すみわふるくさの庵にとふ人もたえてさひしきあめのをとつれ

朝旅

おき出るあしたのはらの草まくらななふるさとの夢もむすはて

朝市

やすからぬ世のいとなみや朝な〳〵うることをのみいそく市人

餞別

なからへてまたあふ坂の山路にやちきりもなかん旅のわかれな

八十八賀

八十あまり八年の後も松竹のよはひかされんよろつ代まてに

柿本の明神に奉納し侍る

ことの葉の道そさかへんまもりますこの神かきの松のときはに

窓前竹

ともなひし人のよはひも幾とせかはらぬやといまもいくれ竹

尾張の國の何かし部にまうて來てかへり給に別おしみて

沖津なみたちかへる人に逢ことはいるかなるみの恨みとを知れかへし

今さらに名殘をしくもなるみかたよせくるなみの立かへりても

ある聖のおはせし庵をとひ侍りて

うらやましうきことしけき世の中をしらてすむ身の心やすさは

引むすふしはの庵のしはしたによのうさしらてすむ身ともかな

年のくれつかたある庵をとひ侍るにあるしの尼君歌讀て又の日をくられしかへしすとて

うら山し世の外なれやくれてゆくとしのいそきもしらて住身は

世をうしとおもふ比

うきなからいつまてかくはこの中にすみの衣の身をもかへなて

社頭松久

さかへゆくこの神かきにたちならふ松も久しきためし知られて

瀧

松にふく風のしらへのなをそへてこすゑにかゝるたきの白いと

池水久澄

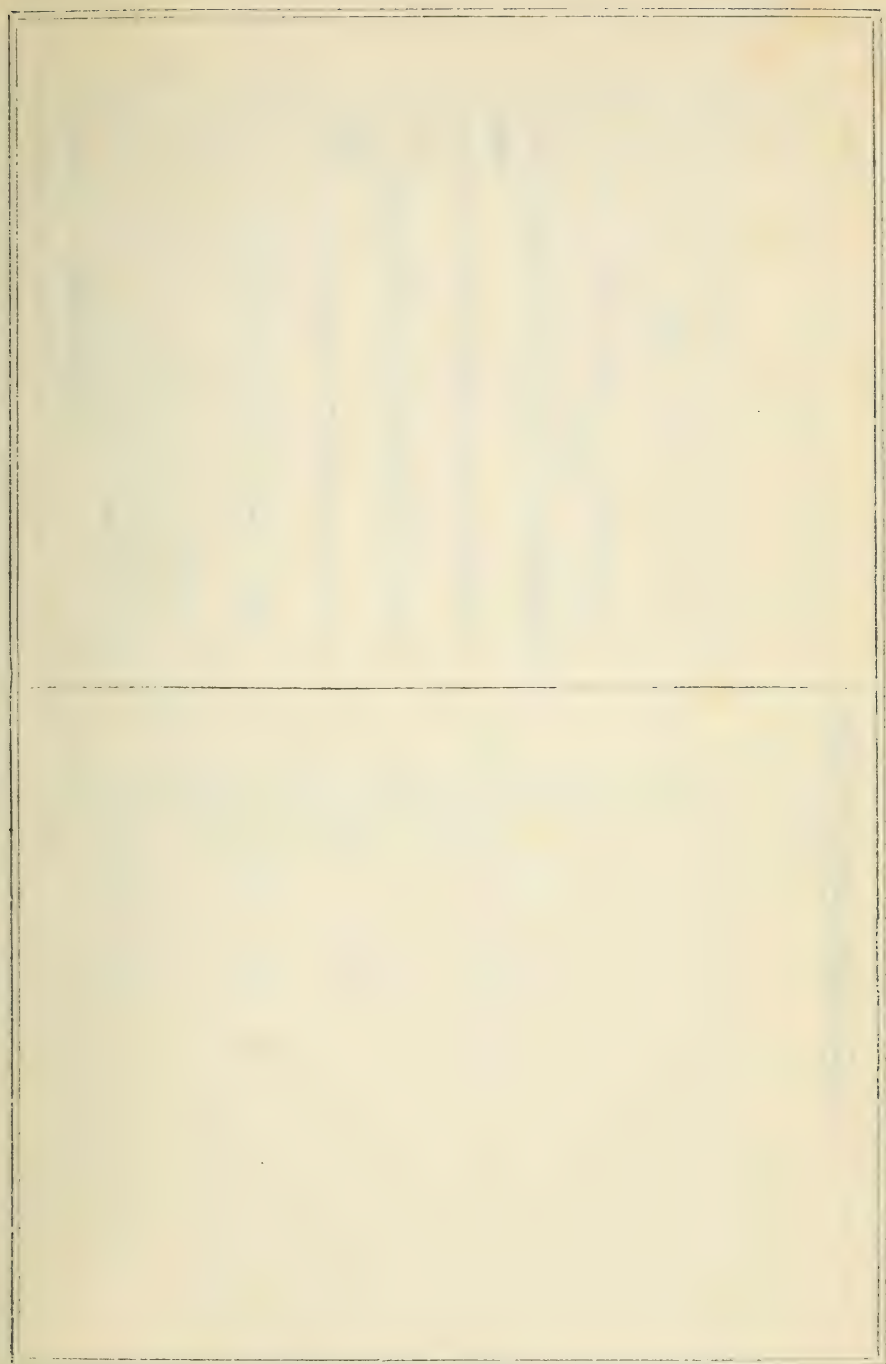
にこりなきそこの玉ものかけ見えてひさしくすめる宿のいけ水

ある人のにしかいとやらんいふ貝に松をゑかきてさかつきになんし侍るその心はへを歌によめとのたまはせしに

さゝへこそ野への小松を庭の面に移しうへにしかひもあらなん

きのえたといへることを人々よみ侍しに

夕からすふりつむ雪に太山木のえたねくらをさためかぬらん

續々群書類從第十四　終

明治四十年五月二十日印刷
明治四十年五月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
編輯兼發行者　國書刊行會代表者　市島謙吉

東京市本所區番場町四番地
印刷者　本間季男

東京市本所區番場町四番地
印刷所　內外印刷株式會社